

平成 30 年度学位請求(博士)論文

主 査 蔣 垂 東 教 授

論 題

『唐話纂要』の音注に関する研究

A study of the Chinese pronunciation transcribed into Japanese

in “*Tou Wa San You*”

文教大学大学院言語文化研究科
博士後期課程 言語文化専攻

学籍番号 B5G23501

氏 名 柯 愛 霞

『唐話纂要』の音注に関する研究

A study of the Chinese pronunciation transcribed into Japanese
in “*Tou Wa San You*”

文教大学大学院
言語文化研究科 言語文化専攻
博士後期課程
B5G23501 柯 愛霞

2019年03月08日

氏 名 柯 愛 霞

『唐話纂要』の音注に関する研究

A study of the Chinese pronunciation transcribed into Japanese in “*Tou Wa San You*”

主査教授 蔣 垂東

江戸時代、鎖国政策のゆえ、長崎で海外との貿易、交流はほとんど中国とオランダに限られ、中国との貿易業務に携わる、唐通事と呼ばれる通訳及び貿易に伴う中国語の学習が必要とされ、様々な中国語の学習書が作られた。当時最も広まっていたのは、本研究の研究対象である当時の代表的な中国語研究者岡島冠山が編集した『唐話纂要』であった。語句対訳方式のこの学習書はどの巻も中国語を見出しに挙げ、その下にこれに対応する日本語の意味を示し、見出しの右側に中国語の発音を仮名および数種類の補助記号で示しているため、当時の中国語音を知る上で高い価値を有する。

本研究では、五巻本(初刊本)を採用し、同書の補助記号の使用実態と使用目的を解明した上で、音注から見た中国語原音の特徴について考察した。考察では全 4,529 項目、15,289 字の漢字が使用されていることを明らかにし、字種別に中古音、南京官話、蘇州音、杭州音の音声データを調査した。その上で、これらのデータをもとに仮名音注との対比を通して中国語音の特徴について考察した。さらに、それが基づいた中国語音の変遷について考察した。

第一章では、中国語の音韻史料である『唐話纂要』の編纂された歴史背景を概述し、その上、重要な唐話資料としての価値を論述する。また、同書の音韻特徴を分析する前提として、清代初期の中国語音の特徴を概観し、また、歴史記録及び他の文献を通して、当時、『唐話纂要』を学習書として中国語を学ぶ唐通事に使用された中国語がどの方言に属するものかを検討し、それに、本研究と最も関わる杭州音の歴史帰属の問題を論述した。

第二章では、『唐話纂要』に関する先行研究の整理を通して、これまで先行研究で明らかにされていない問題の所在を明確にする。第一節では同書の基礎音系に関して、先行研究では主に単一音系説・混合音系説に分けられていることを整理した。第二節では同書の表記方式に関して、右肩点「°」、中間点「○」、延音点「ハ」、入声字の表記法、声調点、四声点の先行研究を整理し、問題点を明確にした。第三節では同書の具体的な音韻特徴に関して、声母面と韻母面との二つの視点から、それぞれの問題の所在を整理した。

第三章では、『唐話纂要』において、中国語の発音を忠実に示すために、仮名表記以外に、多種類の記号を用い、工夫されていることを明らかにした。こうした表記方式について、詳細な考察を通して、分析した。

(一)右肩点「°」について、使用例は延べ1,256例で、字種にして210字である。ハ行に対するもの、「サ」に対するもの、母音[-ə-]に対応するもの、の三種類の存在が先行研究において明らかにされている。ハ行の場合は[p]と[p, p′]、「サ」の場合は[ts]と[ts′]それぞれ二種類の見方が存在している。また、[-ə]に対応するとされるものに関しても、「没」「根」「客」の他にどんなものがあるかが明らかにされていない。本研究では、①ハ行の場合、一部の例外を除き、両唇破裂子音の[p-][p′-]に対応する。②「サ」の場合、無声破擦子音[ts-][ts′-]にも対応する。③[-ə]を示す場合、「没」「根」「客」以外の19字種の字にも用いられることを確認した。「黒-へ°」はハ行でなく、[-ə]に対する類に入る。先行研究による上記の3種類以外、「悦」「地」「面」「虫」に対する右肩点の使用例も存在し、しかも、それぞれに右肩点の使用理由が考えられ、無視すべきではない。このように、右肩点は、唯一の特定の音を提示しているのではなく、付けられた仮名によって意図される発音が異なることになる。

(二)中間点「○」について、使用例は延べ1,437例で、字種は235字である。「好-ハ○ウ」のように「ア段+ウ」だけでなく、「ロ-ケ○ウ」のように「エ段+ウ」の場合もある。当時の日本語では「ア段+ウ」が「オ段+ウ」と、「エ段+ウ」が「オ段拗音+ウ」(オ段拗長音)と合流したことで生じた仮名遣いと発音のずれを注意するのがその使用意図であることは先行研究で明らかにされている。本研究では奥村(1992)に挙げられた「イウ連母音の割ル注記」の表記例は同書で見ら

れないことを明らかにした。

(三)延音点「ㄷ」について、使用例は延べ 1,287 例で、字種は 171 字である。これまで繰り返し符号として使われていた延音点について、本研究では、先行研究に言及のない使用環境を明らかにした。「ルㄷ」以外、「沙-サアㄷ」「依-イㄷ」「乎-ウㄷ」「也-エㄷ」「厝-ツヲㄷ」等のように、「ㄷ」は主に母音仮名「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」の後に用いられている。「ルㄷ」は「ルウ」と同じもので、延音点は「ル」の繰り返しでなく、先行母音を延ばすことを表すのである。使われている漢字は、僅かの蟹摂の例以外、全て無韻尾の陰声韻の字である。用法上では、「ㄷ」は主に母音仮名「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」の延ばし、即ち、直前母音の延音点で、中国語発音の長呼を示す工夫と考えられる。また、分布上では、顕著な特徴をもっているのも長呼形表記と関わっている。

(四)声調点と四声点について、声調点の使用はこれまでの先行研究で言及されていない内容である。特定の漢字の四隅に用いられ、計 33 字種、延べ 98 例である。声調点が付けられているのは主に多音字であり、「天」「面」「一」を除き、異なる意味による複数の読みを読み間違えないように注意するのがその意図である。声調点の使用は呉方言の特徴を反映していることも明らかにした。また、四声点は初版の五巻本と六巻本に見られないが、本研究で参照した『唐話辞書類集』所収の再版影印六巻本の「二字話」の最初の一部の字に対する四声点の使用が確認できた。しかし、冠山によるものであるかどうかについては判断できない。

(五)入声韻の字の音注について、入声字の使用例は延べ 2,603 例で、字種は 422 字である。先行研究で明らかにされたように、音注が殆ど短音節形となっている。沼本(1997)の指摘したように、全ての無韻尾の陰声韻の字に対する長呼形音注は、当時韻尾が[-ʔ]になった、短促性が入声韻の字と区別するために用いられた。本研究では、先行研究に言及のない短音節形音注以外のもも確認した。「ツ」で終わる「イツ-鷓」「ワツ-襪」の他、北部官話音から説明できる「六-リウ」「玉-イユイ」等の長呼形表記となる例の存在も確認できた。

第四章と第五章では、声母仮名音注を南京音、蘇州音、杭州音との対照を通して、それぞれ『唐話纂要』の「小曲」以外の仮名音注に反映された中

国語の声類面・韻母面の音韻上の特徴を検討した。

先行研究において、同書の基礎音系について、杭州音説、南京音説、混合音説に分かれているが、本研究の考察の結果として、声類面でも韻類面でも、杭州音の特徴を反映していることを明確にした。また、一部の南京音の特徴と対応するものもあることが確認できた。

①清音音注となり、南京音からしか説明できない例：

並母：ハ°行の「排鉞帛勃佩婆棚」

從母：「サ°」の「皂槽」

②知・莊組の分化と一致できず、南京音と対応する例：

初母效攝所属の「鈔炒-チャ○ウ」

初母假攝所属の「差-チャア」

書母止攝所属の「試-シイ」

③その他

非母臻攝所属の「不-プ」

なお、なぜ官話特徴の要素が混入されたのかについて、本研究では当時の唐通事に使われていた唐話の種類が変更されたことと密接な関係があると考えられる。

第六章では、他の部分との違いが見られる「小曲」の音注に反映された音韻特徴を検討した。その結果として、顕著な官話系方言の特徴を有することを明確にした。また、先行研究の森(1991)と違って、「小曲」の基礎方言は「不立入声」の「中州音」ではなく、文雄によるもう一種の官話読書音であることを明らかにした。一方、「小曲」の中、杭州音の特徴を反映する混入例の存在も確認でき、森(1991)に挙げられた杭州音の混入例「愁-ツエ○ウ」以外、濁音音注の「罷-バアゝ」、匣母の「渾-ウワン」、次濁疑母の「偶-ゲ○ウ」、奉母の「負-ウゝ」と初母の「差-ツアゝ」もあることを究明し、また、北方官話音の特徴を反映する「玉-イユイ」「六-リウ」の存在も明らかにした。

第七章では、第三章、第四章、第五章で考察した表記面と音韻面の特徴をまとめ、『唐話纂要』の基礎音系を明らかにした。つまり、「小曲」は官話の特徴、「小曲」以外の部分は杭州音の特徴を反映していること。また、第二章の先行研究に見られる問題点の解決を整理し、最後に今後の課題を提示した。

『唐話纂要』の音注に関する研究

*A study of the Chinese pronunciation transcribed into Japanese
in “Tou Wa San You”*

目次

『唐話纂要』の音注に関する研究

はじめに	1
0.1 研究の目的	1
0.2 課題の整理と研究方法	2
0.3 論文の構成	9
第一章 中国語音韻史料としての唐話資料——『唐話纂要』	11
第一節 『唐話纂要』の背景概述	12
1.1 鎖国政策下の長崎と唐船貿易	12
1.2 唐通事	16
第二節 主な唐話資料とその価値	21
2.1 唐話と唐話資料	21
2.2 唐話資料の価値	25
第三節 『唐話纂要』の基礎研究	29
3.1 岡島冠山について	29
3.1.1 岡島冠山の唐話学習の背景	31
3.1.2 岡島冠山の唐話語学の能力	33
3.1.3 岡島冠山による唐話資料	37
3.2 『唐話纂要』の概要	41
3.2.1 『唐話纂要』の構成	41
3.2.2 『唐話纂要』の項目数と漢字数等の集計	42
3.2.3 『唐話纂要』仮名音注の特徴	45
第四節 清代初期の中国語音	47
4.1 清代初期の中国語音の概観	47
4.2 唐通事が使用する中国語の種類	53
4.2.1 歴史記録に見られる唐話の種類	53
4.2.2 他の文献に見られる唐話の種類	55

4.3 杭州音の問題について	59
第二章 『唐話纂要』に関する先行研究と問題の所在	63
第一節 『唐話纂要』基礎音系に関する先行研究と問題の所在	64
1.1 単一音系説	64
1.1.1 吳方言・杭州音説	64
1.1.2 南京音説	70
1.2 混合音系説	72
1.3 その他の説	74
第二節 『唐話纂要』の表記方式に関する先行研究と問題の所在	77
2.1 右肩点「°」について	77
2.2 中間点「○」について	80
2.3 延音点「\」について	83
2.4 声調の表記について	85
2.4.1 声調点と四声点の場合	85
2.4.2 入声字の韻尾表記について	88
第三節 音注の音韻面の特徴に関する先行研究と問題の所在	91
3.1 先行研究の整理	91
3.1.1 声母面	91
3.1.2 韻母面	93
3.2 先行研究に見られる問題点	94
3.2.1 声母面	94
3.2.2 韻母面	103
3.2.3 その他	104
第四節 南京官話と吳方言について	109
4.1 中古音について	111
4.2 南京音と蘇州・杭州音について	114
4.2.1 南京音の場合	114
4.2.2 蘇州音と杭州音の場合	115

4.3 『唐話纂要』成立当時における日本語の発音	118
第三章 『唐話纂要』の音注の表記方式	121
第一節 右肩点「°」について	124
1.1 右肩点の使用実態	124
1.2 使用意図の分析	126
1.2.1 ハ行に用いられる場合	126
1.2.2 サに用いられる場合	132
1.2.3 「没-モ°」など[-ə-]の母音をもつ字に対する仮名に用いられる場合	136
1.2.4 その他の場合	138
第二節 中間点「○」について	142
2.1 中間点「○」の使用実態	142
2.1.1 「ア段+ウ」の場合	145
2.1.2 「エ段+ウ」の場合	150
2.2 中間点「○」の使用意図の分析	153
第三節 『唐話纂要』における延音点「ゝ」について	155
3.1 『唐話纂要』における延音点「ゝ」の使用実態	155
3.2 延音点「ゝ」の使用実態の分析	158
3.2.1 ア段の場合	158
3.2.2 イ段の場合	159
3.2.3 ウ段の場合	160
3.2.4 エ段の場合	161
3.2.5 オ段の場合	163
3.2.6 その他の場合	164
3.3 延音点「ゝ」の使用意図の分析	166
第四節 声調の表記について	172
4.1 声調点「○」について	172
4.1.1 声調点「○」の使用実態	172

4.1.1.1 音注に書き分けのある漢字	173
4.1.1.2 音注に書き分けのない漢字	191
4.1.1.3 その他	211
4.1.2 声調点の表記に見られる音韻的特徴	217
4.2 入声韻の字に対する音注の特徴	222
第四章 仮名音注に反映された中国語の声類	227
第一節 声母ごとの対応関係の分析	228
1.1 重唇音幫組と軽唇音非組	228
1.1.1 重唇音幫母	228
1.1.2 軽唇音非組	245
1.2 舌頭音端組	254
1.3 半舌音來母	267
1.4 舌上音知組	270
1.4.1 止摂の場合	270
1.4.2 止摂以外の場合	275
1.4.3 娘母の場合	284
1.5 齒頭音精組	287
1.5.1 止摂の場合	287
1.5.2 止摂以外の場合	291
1.6 正齒音照組	310
1.6.1 齒上音莊組	310
1.6.1.1 止摂の場合	310
1.6.1.2 止摂以外の場合	313
1.6.2 正齒音章組	324
1.6.2.1 止摂の場合	324
1.6.2.2 止摂以外の場合	329
1.7 半齒音日母	342
1.7.1 止摂の場合	343
1.7.2 止摂以外の場合	344
1.8 知・精・莊・章組の仮名音注に反映された声類の特徴	348

1.8.1 知・莊組の分化について	350
1.8.2 止摂の場合	352
1.8.3 濁音声母の音注に見られる摩擦・破擦音の特徴	356
1.9 牙音見組	362
1.10 喉音影組	383
第二節 本章のまとめ	397
2.1 声母面の対応関係のまとめ	397
2.2 未解決の問題点との関連	401
第五章 仮名音注に反映された中国語の韻類	404
第一節 韻摂ごとの対応関係の分析	405
1.1 通摂	405
1.2 江摂	412
1.3 宕摂	418
1.4 臻摂	427
1.5 深摂	439
1.6 山摂	443
1.7 咸摂	460
1.8 梗摂	468
1.9 曾摂	476
1.10 止摂	480
1.11 遇摂	487
1.12 蟹摂	492
1.13 果摂	502
1.14 仮摂	505
1.15 効摂	510
1.16 流摂	515
第二節 本章のまとめ	520
2.1 韻類面の対応関係のまとめ	520

2.2 未解決の問題点との関連	526
第六章 「小曲」音注の音韻的特徴	528
第一節 「小曲」について	529
1.1 「小曲」の内容	529
1.2 先行研究と問題の所在	535
第二節 「小曲」の仮名音注の実態と音韻的特徴	537
2.1 声母面の違い	538
2.1.1 清濁の区別	538
2.1.1.1 匣・奉母以外の全濁声母の場合	538
2.1.1.2 匣・奉母に対する音注の場合	540
2.1.1.3 次濁声母に対する音注の場合	541
2.1.2 その他の場合	545
2.1.2.1 反り舌音と関わる場合	545
2.1.2.2 全清と次清声母の場合	546
2.2 韻母面の違い	551
第三節 本研究と先行研究との違い	554
第七章 総まとめ	557
第一節 表記面の特徴	558
1.1 右肩点「°」	558
1.2 中間点「○」	558
1.3 延音点「\」	559
1.4 声調面の特徴	560
第二節 音韻面の特徴	561
2.1 『唐話纂要』の基礎音系	561
2.1.1 「小曲」以外の場合	561
2.1.2 「小曲」の場合	561
2.2 声類面と韻類面の問題点の解決	563

2.2.1 声類面	563
2.2.2 韻類面	566
2.3 今後の課題	567
資料	569
参考文献	571
添付資料 1:『唐話纂要』「常言」「長短話」「小曲」項目数の集計表	583
添付資料 2:『唐話纂要』の字体整理	590

はじめに

0.1 研究の目的

本研究では、『唐話纂要』の五巻本を対象とし、同書に付されている中国語音の表記法及び使われている中国語音の音韻特徴を検討する。従来の研究で最も欠けていた両面、中国語方言と江戸時代日本語表記から浮き彫りになる当時の音韻実態、これを明らかにすることが目的である。

『唐話纂要』は江戸時代に長崎で、有名な中国語学者である岡島冠山によって編纂された唐話学習書である。中国語の音韻体系は日本語のより複雑なので、仮名だけで中国語の発音の全てを表記するのは不可能である。同書では、中国語の発音を忠実に示すため、「作-ツヲ」等のような二つの仮名を組み合わせるものや「下-ヒヤア」等三つの仮名を組み合わせる独特の「仮名遣い」の他、日本語の表記体系にない補助記号等を用いて示す工夫がなされている。こうした工夫は当時の中国語音を知る上で、貴重な手がかりであると広く考えられる。『唐話纂要』は、当時最も流行っていた教科書であるがゆえに、これを通して当時中国語がどのように受け入れられていたかを知ることができる。

収録されている延べ 4,529 項目という膨大な数の中国語の語句は当時の中国語を知る資料となることはいうまでもない。特に、全項目の中国語の発音を、仮名表記だけでなく、補助記号なども使って注しているという点は、当時の中国語音を知る資料として高い価値を有すると言えよう。

以下に詳述するように、歴史、文学、語学等の視点からの研究が多くされているが、同書が編纂された江戸時代に、使われていた唐話が多種類あり、複雑であり、また、唐話資料の間にも差異が存在していることもあるため、『唐話纂要』の全体的な発音についての研究は十分にされていない。まず、基礎音系の見方はこれまでの研究では分岐が明らかに存在している。また、同書の音注に見られる声類面と韻類面の音韻的特徴に対する分析が不十分である。それに、音注法では、補助記号の使用に対する把握は十分とは言えず、しかも、各記号の使用環境と使用意図に対して、これまでの研究の指摘に差

異があり、詳細な検討も足りない。それから、同書では四声が記されていないが、声調に対する論考も必要と考えられる。

本研究では、こうした課題を解明するため、まず、『唐話纂要』に用いられている各種記号の使用実態を体系的に把握し、その使用目的を探りたい。各記号の使用を明確にすることは『唐話纂要』の音韻特徴を知るための基礎的研究でもある。次に、音注と当時の中国語原音である南京官話・呉方言の音韻的特徴との対応を明らかにすること。これらのことを通して、『唐話纂要』に反映されている中国語音の性格を分析する。

0.2 課題の整理と研究方法

『唐話纂要』については、長崎での唐船貿易や日中文化交流、また江戸時代における中国語(唐話)学習及びそこから発展した中国近世白話文学の摂取等の研究と関連して、以下に示すように、相当の研究業績と蓄積がある。

唐話をめぐる歴史背景に関しては、山脇悌二郎と中村質は日本側を出発点として近世長崎貿易史、松浦章は中国側に着目して、清代海外貿易史について研究している。

この中で、山脇(1960)は長崎の唐人貿易にしぼり、主に唐船の系譜、唐人貿易の推移、貿易品、貿易商、唐人貿易の機関、唐船の入・出港及び長崎開港と唐人貿易との関係などの視点から検討している。中村(1988)は長崎の鎖国政策の形成、鎖国の背景での貿易状況、長崎会所と長崎貿易との関係などをめぐって近世長崎貿易史を論じている。

松浦(2002)は清代に日本、南海、欧州に対する貿易、清代海外貿易と海関、との関係、清代の海洋圏と海外移民の状況などを紹介し、特に清代対日貿易に関して、経営構造、貿易商、唐船の船主層、長崎来航の鳥船の運営形態、貿易品等に詳細に論述している。松浦(2007)は、江戸初期の日中交流、清朝と日本との政治関係、中国商人と日本の関係、中国から見る長崎貿易の状況及び江戸幕府末期から明治初期までの日中交流的変遷などの視点から江戸時代唐船による日中文化交流の面からも考察している。

また、山本紀綱(1983)による長崎の唐人屋敷、林陸朗(1986)による長崎唐通事の職制と役株を対象とする歴史的な論考もある。それに、六角恒廣に

よる唐通事と唐話教育の関係(六角 1981)、中国語教育者などの視点からの中国教育史の研究(六角 1984)もある。

文学研究に関しては、唐話資料を手掛かりとして、石崎又造(1940)は近世日本における俗語の文学史に論考し、中国の俗文学から大きな影響を受けたと指摘し、また、中国の俗文学の受容を概観している。瀧沼誠二(1984)は儒学と俗文学との関係、青木正兒(1927)は『唐話纂要』の作者の岡島冠山と中国の白話文学との関係に関する研究をしている。

語学研究において、奥村佳代子は、岡島冠山によって編纂されたものを中心に一連の論考があり、『唐話纂要』の語彙の特徴(奥村 1997,2017)、岡島冠山による「唐話」の語彙面の基礎研究(奥村 2007)、唐通事資料に見られる唐話の変化(奥村 2003a)など多くの視点から近代唐話学習書の語彙面を重要視している。また、岡島冠山によって編纂された唐話資料を手掛かりとする他の論考について、『日本漢語教育史研究—江戸時代唐話五種』(魯宝元・呉麗君[編])では、張苗(2009)による『唐話纂要』の「二字話」の語彙の特徴、劉継紅(2009)による『唐話纂要』の文法特徴などもある。

以上のような先行研究の成果に対し、音韻面の研究については、具体的に、第二章で検討していくが、ここで主な研究を概観すれば、下記のようになる。

まず、『唐話纂要』の中国語音はどこ地方のものなのか岡島冠山が書いていないため、基礎音系について、これまでの研究の見方が分かれている。

現在も定説となっている有坂秀世(1938)は、同書の発音が呉方言の杭州音であることを明確に指摘し、創始的である。有坂氏と同じ呉方言の杭州音説を有するのは、中田喜勝(1978)、森博達(1991)、岡島昭浩(1992)、張昇余(1998,2007)、中村雅之(2012,2015a,2015b)、林慶勳(2012,2013)、謝育新(2011,2016)である。地点を明記せず呉方言としているものには林武實(1988)がある。

これらの研究の中で、林武實(1988)は『唐話纂要』の再版で増補された巻六のみを検討している。前五巻と巻六の音韻的特徴に関して、張昇余(1998)は前五巻が浙江方言に近似するのに対して、巻六が全五巻と異なり、

当時の南京官話であると指摘しているが、林慶勳(2012)は前五巻と巻六とは同じ「杭州音」であると指摘している。

また、『唐話纂要』における巻五の文体の異なる歌謡「小曲」の音注に関して、森博達(1991)は「小曲」の音が文雄のいう二種類ある官話讀書音の内の一つである「中州音」の特徴とほぼ符合し、「小曲」以外の部分の音が「杭州音」(浙江音)であるとしている。「小曲」の音を「中州音」とする森博達(1991)以外の研究は、「小曲」とそれ以外の部分との注音面の違いについて言及していない。但し、「小曲」の音が「中州音」である根拠が何かについて森博達(1991)には述べられていない。

同書の声類面と韻類面との具体的な音韻的特徴に注目している研究は、下記の通りである。

有坂秀世は主に声類面についての検討があり、全濁声母に対する音注に見られる清濁の対立の音韻的特徴以外、奉母字に対する二種類の音注は発音の揺れによるもので、匣母の字に対する二種類の音注は聴覚上の原因で生じたものとしている。

謝育新は、最も詳しく検討を進めており、声類・韻類に対する音注の特徴を整理し、声類面では主に清濁の対立、知組・精組・照組の書き分け、見組・精組が口蓋化せず、疑母字に対する三種類の音注、日母に対する二種類の音注等の特徴をそれぞれ検討し、韻類面では各撰の音注現象を整理している。その上で当時の杭州音に見られた特徴及び現在に至るまでの変遷について考察を行っている。

中村雅之は、声類面では尖・団音の区別がある音注の特徴、韻類面では蟹摂四等の齒音字に対する音注に杭州音の要素が反映されていると指摘している。

上記以外、声類面では、岡島昭浩は清濁の対立の有無という視点から有坂の「杭州音説」を更に詳細に分析している。中田喜勝は『唐話纂要』の音注を通して、齒音と「ツ」、牙音と「キ」との対応関係、つまり尖・団の区別も考察している。林慶勳も匣母の字の音注に着目して、アヤワ行音注を呉方言の特徴とし、一つの漢字にハ行とア・ヤ・ワ行との二種類の音注が存在すること

について、冠山が異なる時期の唐音を吸収していた理由で人為的な誤記と推測し、また、微母の字はゼロ声母と発音するという指摘もしている。

一方、南京音説をもつのは、長澤規矩也(1972)、趙苗(2009)である。長澤氏は巻五の「小曲」の内容に注意を払い、「小曲」を含む前五巻の内容を「江南音」と指摘し、「江南」の具体的な地方について言及しておらず、推定の根拠も示されていない。但し、付音が南京官話とされる「官音」と明記している『唐音雅俗語類』など岡島冠山の他の語学教科書についても「江南音」と紹介していることから、長澤氏のいう「江南音」は「南京官話音」のことと推測される。趙苗には「南京官話」との指摘があるが、根拠が明確に示されていない。

杭州音と南京官話音との単音系説以外、高松政雄は「南京・浙江」両音の雑揉せるものという混合音系説である。高松氏の一連の研究結果、高松(1984,1985a,1985b,1986a)で触れられるとおり、声類面では匣母、疑母、日母、奉母、微母の字に対する音注の特徴、清濁の対立の問題点、韻類面では止摂の開口字、遇摂の字に対する音注の特徴、入声の覺藥韻の音注の特徴等がほぼ全て呉方言(浙江音)のもので、明らかに南京音と認められるものも一部混入しているということが指摘されている。混入の理由については述べられていない。

その他にも、楊春宇(2007)では同資料の原音が南京官話でなく、杭州、福州の讀書音に基づいた南方官話音である主張するが、黄檗宗唐音など幅広い範囲のものを含んでおり、同資料に限定したものではないので、確定できない。

このように十分な根拠が示されていない「南京官話音説」を除けば、『唐話纂要』の基礎音系が呉方言であることは大方の一致した見方となっていると言える。しかしながら、なぜ南京官話音が混入しているか、「小曲」の音注が他の部分と具体的にどう違うかなど未解決の問題が残っている。

次に、『唐話纂要』の音注法について見ていきたい。音注法の最大の課題は補助記号の使用意図と使用実態の解明である。先行研究で扱われているのは主に右肩点の「°」、中間点の「○」二種類である。

仮名の右肩に用いられている「°」に注目しているのは、沼本克明(1990,1997,2017)、奥村三雄(1989,1992)、高松政雄(1984)、謝育新

(2016)、松村恒(2011)である。中でも、最も詳細に検討しているのは沼本克明であり、「°」が通常の仮名の読み方と違うことを示すための注意点であることを明らかにした上、「サ」に使用されている「°」を[ts]、ハ行に用いられる「°」を[p]、「モ°」「ケ°」等の場合は[ə]を示す記号と指摘している。

奥村氏と高松氏は「サ」の場合のみに指摘があり、破擦音[ts]を示す記号としている。謝氏は「サ°」の場合の「°」について、有気音の記号と類似し、高松氏と同じ「サ°」が「ツア」、つまり[tsa]に相当するとも指摘している。また、松村氏はハ行と「モ」「ス」「サ」との右肩点に注意を払っているが、ハ行の場合を半濁点、「モ」等の場合を機能不明としている。このように、「サ°」に対する見方がまだ一致していない。

仮名と仮名の中に用いられている「○」の場合について、主に六角恒廣(1988)、奥村三雄(1989)、松村恒(2011)、中村雅之(2015a)の論考がある。奥村氏は「ア段+○+ウ」「エ段+○+ウ」「イウ連母音の割ル注記」の三種類の使用環境を指摘し、その使用意図を「割り点」としている。また、中村氏と高松氏は同じ使用意図との指摘があり、使用環境について、中村氏は『唐話纂要』に実際に存在している「ア段+○+ウ」「エ段+○+ウ」の場合を挙げ、高松氏は「ア段+○+ウ」のみの場合を提示している。松村氏は他の研究の指摘を引用し、介音とは関係のない記号であるとし、批判的な記述の段階に止まっている。このように、「ア段+○+ウ」「エ段+○+ウ」の「○」は「割って発音する」ことを注意するための記号であり、その意図がすでに明らかにされている。しかしながら、『唐話纂要』には「イウ連母音の割ル注記」が見られないなど、使用実態の面で確認しなければならない点がある。

同書の音注で「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」「ル」の後に用いられている「ゝ」の場合について、従来踊り点として特段注目を浴びることはなかった。中世唐音資料に対する研究では、湯沢質幸(1972)は、仮名の後での踊り点の役割について、母音仮名(ウ)の後で踊り点が延音点として用いられていることを明らかにし、同様な環境で使用されている『唐話纂要』のこうした例についても当然検討する必要がある。さらに、母音仮名でない「ル」にも「ゝ」が用いられており、こうした特殊なケースについての検討も必要である。言い換えれば、『唐話纂

要』の音注における「ゝ」の使用環境と具体的な使用意図についての研究はまだされていないのが実情である。

『唐話纂要』とそれ以後岡島冠山が編纂した教科書と表記面の大きな違いの一つは声調にある。岡島冠山の教科書について、『唐話纂要』は声調記号なし、それ以外の教科書は声調記号有りという認識が定着している。実は『唐話纂要』は初版本から複数の読みをもつ特定の字を中心に声調記号が付けられているが、この点についてはこれまでの先行研究では全く触れられていない。再版影印本では上記初版からの声調記号に加え、冒頭から数ページにわたって声調が付されている。これについても先行研究に言及がない。即ち、声調記号については全くの手付かずの状態である。

以上で分かるように、『唐話纂要』の中国語音表記において、記号に関しては、声調記号の実態解明、まだ定説を見ない「サ°」、中間点の実態、「ゝ」の延音点と見なす可能性など考察を要する点が多い。

一方、入声字に対する韻尾の音注に注目する研究は多く、有坂秀世(1938)、沼本克明(1997)、六角恒廣(1977,1988)、森博達(1991)、林慶勳(2012,2013)、中村雅之(2015a,2015b)、謝育新(2016)がある。中でも、有坂氏、沼本氏、六角氏、森氏、中村氏と謝氏は同書の入声字の韻尾が無表記であると指摘し、また、無表記の音注特徴に注目しているだけでなく、他の冠山唐話学習書と異なっていることも示しているのは有坂氏、林氏と中村氏である。さらに、非入声韻の字に対する音注との区別に対して指摘があるのは沼本氏、中村氏である。なお、沼本克明は、譯官系資料¹が入声字に対する韻尾無表記という音注法であると指摘している。

さて、『唐話纂要』を中国語音の資料として使う場合、二つの問題を解決しなければならない。

一つは、中国語音をどのように記録しているかという問題である。特に、中国語音を意識して用いられている「°」、日本語の世界で誕生した「○」と日本語の書記体系に存在している「ゝ」との三種類の補助記号は、特に後の二つ

¹ 譯官系資料には『唐話纂要』のみならず岡島冠山が編纂した他の唐話教科書も含まれ、『唐話纂要』以外のものの入声韻尾が全て表記されているから、この指摘は『唐話纂要』についてはあたっているが、それ以外のものには合致できない。

は中国語音を表記する場合と日本語を表記する場合においてどのような違いがあるか、これらの記号の用法と使用意図の解明は中国語音を明らかにする上で一番大きな問題である。なぜなら、著者は補助記号についての説明を一切していないからである。後述するとおり、岡島冠山『唐話纂要』以前には「唐話」教育のための教本は、公に出版される(従来は写本)ことがほとんどなく、あったとしてもそれをどう読むべきかの音注はなかった。なぜなら、「唐音」は「口伝」されるものであり、音注を表記する必要がなかったからである。それが、不特定多数に対して教本として提供する以上、仮名及び当時の日本語で考え得る手立てを尽くして正確な「唐音」を伝える努力を尽くしたのが岡島冠山であり『唐話纂要』だった。その仮名音注が、いかに正確に「唐音」を伝え得ているかを解明しておく必要がある。なお、中国語音を語る際、声調に関する検討も不可欠であり、これまで注目されなかった初版本からの特定の字に対する声調記号と再版本で新たに加えられた声調記号の実態を解明しなければならない。

もう一つは、同書の中国語音の基礎音系の問題である。記録されている中国語音についての説明も付されていないため、それを明らかにする必要がある。後述するように、当時学習されていた中国の言葉について、南京官話、杭州話、福州話、漳州話との四種類があるが、岡島冠山が唐話を学習した背景とこれまでの先行研究の指摘によって、同書に記録した中国語音は南京官話と杭州話との二種類と関わっていることが明らかにされている。従って、同書の中国語の音は南京官話なのか、それとも日中貿易とともに使われていた杭州話なのか、さらには南京官話と杭州話が交ざっているものなのか、いわゆる基礎方言を確定しなければならない。なぜなら、当時長崎での日中貿易においては南京官話の他、呉方言なども盛んに用いられるなど、唐通事が複数の南方系方言も学習していたため、この資料の記録した中国語音がどのような性格のものだったかを明らかにしなければならないからである。これまでの先行研究では基礎音系が呉方言の杭州音であることがほぼ明らかにされ、定説となっている。一方、南京官話音の混入も指摘されているが、実態が解明されておらず、その実態を明らかにすることは重要な課題である。

本研究の研究方法としては、先ず、全 4,529 項目に使用されている漢字の字数と字種別の用例を集計する。集計の結果、全 2,538 字種、延べ 15,289 字が使用されていることが明らかになった。次に、字種別の音韻情報を得るため、中古音(声類・韻類)、南京官話音、吳方言音などの情報を記入した。その上でこれらのデータをもとに仮名音注との対応関係について考察する。

上記の二つの問題を解決するため、まず、『唐話纂要』の音注について、用いられているそれぞれの表記法の使用例を集計し、音注と対応する二種類の発音の音価と対照した上で、音注との対応関係を整理し、詳細な使用実態を明らかにし、その使用意図を分析する。表記例と対応する発音の表記法を解明した後、次に、声類と韻類との二つの部分に分けて、それぞれの、二種類の発音との音韻面の対応関係を分析する。この二つの問題を解決した後、同書の特別な部分「小曲」の音注の特徴を分析し、他の部分の音注との違いを明らかにする。さらに、整理した音韻の対応関係によって、『唐話纂要』に記されている原音の語音的特徴、即ち基礎音系を明らかにする。

最後に、基礎方言と対比して、『唐話纂要』を通して見られるその方言の音韻の史的な特徴を探ってみたい。

0.3 論文の構成

本研究の構成は以下のとおりである。第一章では、貴重な唐話資料である『唐話纂要』が編纂された歴史背景及び同書の基礎研究を概述する。第二章では、『唐話纂要』に関する基礎音系、表記方式、声類面と韻類面での音韻の特徴などの先行研究を整理し、問題の所在について明らかにする。第三章では、基礎音系を解明する前提として、同書の中国語音に対する音注方式、特に仮名以外の補助記号、即ち右肩点「°」、中間点「○」、延音点「ゝ」、及び中国語の発音を語る際、欠くことのできない声調記号の使用実態と使用意図について分析する。基礎音系の特徴を明らかにするために、第四章と第五章では、具体的に音注を南京官話、吳方言と比較を行う。声類面と韻類面に反映された音韻の差異を考察して、同書の基礎音系の特徴について検証する。その上で、検証された方言に見られる音韻の変遷などを総合的に検討する。第六章では、『唐話纂要』で顕著な官話の特徴を有する「小曲」の

部分に対する音注の実態について検討する。最後に、第七章では、以上の論をまとめる。そして、表記例と対応する音注に反映された同書の基礎音系について明らかにする。

本研究では、主な研究結果として、詳細な分析を通じて、『唐話纂要』の巻五の「小曲」の内容以外、呉方言の音韻的特徴を反映する音注現象を詳細に挙げ、主に呉方言の音韻特徴をもつことを検証した上で、中に混ざっている官話的特徴の音注現象、特にこれまでの研究に言及のないものも整理している。「小曲」について、文雄のいう官話読書音であることを確認した上、二つある官話読書音の内、先行研究による「不立入声」の「中州音」の説は採らず、「立四声」の方により符合することを明らかにした。また、同書の音注法について、先行研究で見方が分かっているハ行の仮名とサに対する右肩点、言及がない「ゝ」など各記号の使用環境を補足するとともに、「ハ°」行、「サ°」が中国語の無気音にも有気音にも対応すること、「ゝ」を「延音点」と見なすことが可能であることなど、それぞれの使用意図を明らかにした。特にこれまで研究されていない初版本から存在する特定の字に対する「声調点」と再版影印本で新たに加えられた一般の字に対する「声調点」について、その存在を明らかにするとともに、使用環境と意図も詳細な分析を通して解明した。

なお、本研究と既発表の雑誌論文および口頭発表との関係は以下通りである。

雑誌論文：

- ①『唐話纂要』における圈点の使用実態について（第三章第一・二節）
『文教大学言語文化研究科紀要』第2号(25-50頁)2016.3
- ②『唐話纂要』における「ゝ」について（第三章第三節）
『中国語研究』第59号(47-66頁)2017.10

口頭発表：

- ①『唐話纂要』における「ゝ」について（第三章第三節）
日本中国語学会第66回全国大会 2016.11
- ②『唐話纂要』における巻五の「小曲」の音注の音韻特徴（第六章）
日中韓三国日本言語文化に関する国際学術シンポジウム 2017.10

第一章

中国語音韻史料としての唐話資料

——『唐話纂要』

江戸時代、鎖国政策のゆえ、長崎での海外との貿易、交流は殆ど中国とオランダに限られていた。中国との貿易業務が行われ、中国語の学習が重要視される中、様々な中国語の学習書が作られた。18世紀20～30年代最も流行っていたのは、本研究の対象である当時の代表的な中国語研究者岡島冠山が編纂した『唐話纂要』であった。

本章では、主に『唐話纂要』の作成の歴史的背景を概説した上で、中国語教科書になる経緯を探求し、著者の生涯から同書の内容を紹介し、具体的な用例及びその音注の性質を確認する。

第一節 『唐話纂要』の背景概述

「唐話資料」とは江戸時代(1603-1867)に日本で作られた中国語の学習書のことである。本研究の対象である『唐話纂要』はそうした「唐話資料」の一つである。ここでは、先ず唐話資料の歴史的背景を検討したい。

1.1 鎖国政策下の長崎と唐船貿易

長崎は元亀二年(1571)にポルトガル船の寄港により対外開港した。開港以降、長崎はポルトガル貿易の中心地として発展していた。ポルトガルとの商船貿易とともに、ポルトガルやスペインからの宣教師による布教が九州を中心として広がっていた。幕府はキリスト教の広がりが幕府と敵対することを恐れたため、鎖国政策を採る一方、キリスト教の布教と関係の薄いオランダ、中国だけの貿易は長崎で従来通りに続けることになった。

鎖国のもと、長崎以外での外国船の入港は全面的に禁止され、日本人の海外渡航も禁止された。寛永十二年(1635)、全ての中国の貿易船は長崎にしか出入りすることができなくなり、また、寛永十六年(1639)以降、入港する外国船も中国船とオランダ船に制限され、日本の海外貿易と海外交流はほとんど唐船とよばれる中国の貿易船によって担われるようになった。1641年にオランダ商館を長崎の出島に移転させて鎖国政策の完成となった。以来ほぼ200年間、江戸幕府の直轄地である長崎は貿易業務だけでなく、対外交渉の唯一の窓口としての役割も果たした。

江戸時代の中国人は「唐人」、中国船は「唐船」、中国との貿易は「唐人貿易」や「唐船貿易」という呼称が通称として用いられた。

松浦(2002)は、当時の日本と中国側の海外貿易状況について、関連史料の詳細な検討から、海禁の緩和にともない中国人の積極的な日本への来航が知られるとしつつ、日本側の状況を次のように述べている。

日本の対外政策は寛永“鎖国令”をもって外国船の来航を制限し、開港地を長崎のみに限定した。その後、長崎に来航する中国船に対して積極的な政策を取らない時期がしばらく続いた。それは一つには、明朝に替った清朝が反清勢力に対抗するため、順治十八年²にいわゆる

² 1661年。

“遷界令”を發布したことにより、長崎に来航した船は主に台湾を拠点とした鄭氏の船、あるいは、東京やカラパ等の南海方面に居住する中国商人によるものが多く、中国大陸からの船は少なかったため、貿易が平常に行われていたからである。

しかし、康熙二十二年³、台湾の鄭氏が清に降ると、翌二十三年、清朝は“展海令”を發布して民衆の海外貿易を許可したため、長崎への来航船の様子が一変する。同年九月甲子朔の上諭は、福建や広東省の民衆に海外貿易の機会を与えようとするものであったが、その余波を受けたのが長崎であった。(pp.10-11)

この指摘によれば、長崎は「遷界令」の發布の余波を受け、一時期、来航した船は主に台湾のままであったことが分かった。天和三年(1683)には、清朝は台湾を回復し、中国統一を完成した翌年から、海禁が解除され、長崎入港の唐船の数が逐年激増してきた。「展海令」が發布されてからの入港の船数について、松浦(2002)は、こう述べている。

“遷界令”發布後の長崎入港船数は、二三年間に年間四十隻を越えたのが三度、三十隻代が八度、そして延宝元年⁴以後は二〇隻代が続く、“展海令”の前年には二七隻、發布年も二四隻であった。ところが、翌年の康熙二十四年⁵には、積戻し一二隻を含め八五隻の来航船をみることになり、それ以前の三倍半にも達したのである。そして、貞享四年⁶には一三七隻(内、積戻し二二隻)、元禄元年⁷には一年分の最高船数である一九四隻(内、積戻し七七隻)が来航したのであった。(p.11)

この指摘から、「展海令」前後の入港船数の変化をはっきり分かる。また、江戸時代唐船による日中の唐船貿易について、松浦(2007)は、次のように述べている。

明末・清初の一七世紀前半より一八世紀に至る時期に長崎へ来航した中国船は中国大陸沿海地区のほぼ全域と東南アジア地域からと広域に及んでいた。

康熙二二年(1683)台湾の鄭氏が清朝に降ると、翌年清朝は「展海令」を發布した。この結果、長崎には大陸沿海地区とりわけ長江河口の江南地域からの貿易船の長崎来航が急増したのである。……貞享二年(1685)一〇月に長崎に来航した八四番・八五番寧波船の場合を見てみ

³ 1683年。

⁴ 1673年。

⁵ 1685年。

⁶ 1687年。

⁷ 1688年。

ると、「私共船之儀、本国漳洲に客荷物拂底に御座候により、客荷物招乗せ申候ため、当春漳洲より浙江之内、寧波府へ参、只今迄に少々客荷物を招乗せ候而、今度罷り渡り申候」とある。この二艘の寧波船は本来福建の漳州に所属する船であったが、漳州では、貿易を行う商人も日本への積荷も不足していたので、恐らく厦門より北上し寧波に行き、日本向け貨物を調達して長崎に来航したのである。(p.11)

本研究が対象とする岡島冠山が唐話を学びまたそれを普及させ、『唐話纂要』を編纂するに到る時期は、「展海令」が發布されて以降の唐船が急増した時期に当たる。一律に「唐船」と呼んでも、その出港地は沿海地域の浙江、江蘇、福建等幅広い地域に跨がる。この指摘によれば、貞享二年(1685)から、「江南地域からの貿易船」、即ち浙江、蘇州からの長崎来航が急増したことも分かる。

来航唐船の出港地に関する史料として、『華夷変態』⁸(1732年)が挙げられる。『華夷変態』に収録した「風説書」を資料として、唐船貿易における唐船の出航地及び唐船乗組員の出身地について、詳細に検討したのは張(2014)である。ここで、張(2014)が整理した『華夷変態』に記載された貞享四年(1687)から享保八年(1723)にかけて長崎に来航した唐船数⁹及びその出航地を示す表 1-1 を挙げておくが、ここからは上述した貞享四年(1687)以降の唐船の推移が分かる。

表 1-1 により、当時日本の長崎での日中貿易交流では、初期には中国南方の上海、寧波が中心となる浙江省、江蘇省、及び福州が中心となる福建省が中心的役割をはたしていたが、出港地の中心は 17 世紀 80 年代中頃以降は江蘇・浙江両省となっていたということが見てとれる。上の松浦(2007)の指摘から分かるように、漳州に所属する船は最終寄港地が寧波だったため、寧波船に算入されているケースもあるが、全体として、『唐話纂要』の当時、呉方言区からの唐船が最も多いことを示している。

⁸ 『華夷変態』は、長崎奉行から幕閣へ進達された正保元年(1644)から享保二年(1717)までの唐船風説書約二千二百通を、幕儒の林家で逐次編綴した鎖国下の海外情報集。日本の江戸時代の儒学者である林春勝(林鷺峰)と林信篤(林鳳岡)の父子が、1732年に編纂した。鎖国後の江戸時代初期における中国と日本との間の貿易に関する口述資料で、長崎に来航する中国船がもたらした、中国における見聞についての記述を日本人が書き留めた、「唐船風説書」と総称される幕府への上書を整理して、年代順にまとめた書物のひとつである。(中村質(1983)による「華夷変態」を参考。)

⁹ 張(2014)の論考では、唐船の数について、唐船名によらず、「風説書」の記載にある実際の出航地によって分類している。

1.2 唐通事

明朝(1368-1644)の滅亡と前後して、多くの明朝の人は日本に亡命したが、日中貿易の交流とともに、多数の明・清の人が長崎に渡来し、日本に永住することになった。当時の日本では、これらの明・清の人がともに「唐人」と呼ばれていた。明末清初の「唐人」について、山本(1983)は以下のように述べている。

異邦人のなかで、最も多数長崎に渡来したのは唐人(明・清の中国人一以下俗称に従って唐人と呼ぶ)であった。彼らのうち、明末清初にかけて本国の禍乱を避けてこの地に流寓した者の多くは、いわゆる「住宅唐人」として永住帰化(投化)し、その子孫らもまたほとんどが日本社会に融けこんでいった。また別に貿易商人や船員として多数来船した人々は、早くは「差宿^{サシヤド}」のように自由に市中の町屋に宿泊し、また後には「町宿」というような割当宿泊によって各町市民の世話をうけており、そこには共存共栄の国際的社会生活が営まれていた。(p.18)

唐船貿易と唐人の増加とともに、唐船貿易の業務と唐人管理にかかわる職業が必要となった。業務に携わる中国語のできる人材が求められ、中国語の通訳を主とする、日中通商上の重要な役目を果たしていたこうした通訳のことが「唐通事」と呼ばれていた。

潁川君平(1897)『訳司統譜』は当時の唐通事の役制と具体的な唐通事の人名を挙げている。「唐通事始之由緒」第一行によれば、次のとおりである。

慶長八卯年小笠原一菴様御在勤之節馮六ト申唐人ニ始テ唐通事役被 仰附其後馬田昌入清河太兵衛此二人ニ右馮六同役被 仰附三人ニテ相勤申候……(『訳司統譜』「唐通事始之由緒」p.1)

この記載によれば、長崎においては、最初の唐通事が置かれたのは慶長八年(1603)であり、長崎在住の唐人、馮六という人物が初代の唐通事に任じたことが分かる。それ以後、唐通事に従事する人が多くなり、唐通事の組織も整備されていった。主に本通事と内通事に分かれ、各階にも役職が設けられた。

『訳司統譜』には、唐通事の段階相互の関係や職制についての記載がある。松本(1958)は『訳司統譜』と『唐通事会所目録』を中心に、次のように整理する。

職務席順に列記すると次の二十四段階にわたる。

○唐通事頭取(十人扶持銀二十五貫目)

天明二年六月二十四日 被仰付候 林 梅郷

久年の功に報ゆる為新規に設けられた。唐方一体の取締は勿論御国益筋その他商売方の点で気付いた事を報告する。

○唐通事諸立合(五人扶持十二貫目)

元文元年十月二十三日 被仰付候 官梅三十郎

諸御用向方、唐銀掛りを主としたが、安永八年九月二十九日より諸御用向方、唐銀掛りは勿論通事会会所に日勤して唐方諸用向の始末をなし、通事共の向上を計り、又唐人が国法を守るよう唐人屋敷¹⁰の諸出役所を時々視察し、或は唐人共の願書並びに和解諸書附等を調べ連名で提出する。大通事兼役の者が多い。

○御用通事

享保十年八月二十三日 被仰付候 彭城藤治右衛門

将軍家諸用の支那物件を注文調進する。

○風説定役

元禄十二年八月二十七日 被仰付候 官梅道栄

唐船輻湊の節、異聞あるを報告する。

○直組立合通事(五人扶持十二貫目)

享保十二年六月十三日 被仰付候 神代四郎八

唐船の持ち来れる品の値段を定める時に立ち合う。

始め目付が兼ねていたが、しばらくの間大通事が兼任した。併し再び目付が兼ねるようになった。

○唐通事目付(五人扶持十二貫目)

元禄八年十二月八日 被仰付候 石崎友少

唐通事に対する見張役である。

○大通事(五人扶持十二貫目乃至三人扶持七貫目)

慶長八年 被仰付候 馮 六

通弁能く学才ある上級通訳官である。大通事助、大通事過人の制がある。

目付役、風説定役、年番立合、直組立合、御用通事、年番等の加役を兼任した者も少なくなかった。

○小通事(三人扶持七貫目乃至一人扶持四貫目)

寛永十七年十月 被仰付候 林 仁兵衛

職掌は大通事と同じであるが、格が下であり、年若い者も少ない。

¹⁰ 唐人屋敷は、江戸幕府が密貿易やキリスト教の伝播防止の目的で、長崎来航する中国人を収容した施設。元禄元年(1688)に密貿易を取り締まるため、長崎村十善寺郷に「唐人屋敷」が造成され、同2年(1689)4月に完成した。1784年の大火では唐人屋敷全体が関帝堂を残して全焼、大火以後唐人が自前で住居などを建築することが認められた。1859年の開国によって唐人屋敷は廃屋化し、1870年に焼失した。その後、在住中国人は隣接の長崎市新地町に中華街を形成し、長崎新地中華街となる。唐人屋敷の遺構としては、明治期に修復改装された土神堂、観音堂、天后堂、1868年に福建省泉州出身者によって建てられた旧八門会所、1897年に改装、改称された福建会館前門が残る。(山脇(1993)と中村質(1989)による「唐人屋敷」を参照。)

大通事に昇格する者が多かった。

○小通事並(三貫五百目乃至二貫五百目)

元文四年九月二十三日 被仰付候 河間 幸太郎

○小通事末席(三貫目乃至二貫五百目)

享保三年十二月十八日 被仰付候 穎川 弥藤太

○稽古通事(三貫目乃至一貫八百七十目)

承応二年 被仰付候 穎川 久次郎

通訳官見習である。通事家の子弟が有給、無給にて仰付けられ養成されている。何れも大小通事各方面に昇格している。祖父、父、大通事等の請に依り任命されている者も少なくない。又養父、兄、乙名、遠類等の関係者が多い。従って年令層は低い。

○稽古通事見習

元禄十二年十月十四日 被仰付候 穎川 藤四郎

○稽古通事格

享保十九年九月朔日 被仰付候 岩永惣次右衛門

職掌は内通事小頭同様唐人屋敷内の詰番。

○唐年行司(一貫九百目乃至一貫八百四十目)

寛永十二年 被仰付候

(欧)陽雲石、何三官、七銀官、趙三官、何八官、(陳)奕山三官
在津の唐人の国禁違犯、或は諍論等に対し是非を決定する。

○唐年行司見習

延宝二年六月十三日 被仰付候 薛 市左衛門

○唐年行司格

嘉永四年九月八日 被仰付候 芦塚 五郎助

○(唐)内通事小頭(一貫五十目乃至二百五匁)

寛文六年 被仰付候 下田弥三右衛門

唐人屋敷の詰番をなす。

○内通事小頭見習

宝永五年四月二十三日 被仰付候 穎川 四兵衛

○内通事小頭事格

寛政八年十二月二十八日 被仰付候 太田 延右衛門

○唐船請人(後に内通事小頭見習末席と改める。)

寛永 年ヨリ相勤 蔡 三官

唐船の国禁を犯せし時、その御赦免方を在留唐人に依頼し、請けてもらった事に始まる。

○暹羅通事(一貫五百目)

政保元年 被仰付候 森田 長助

暹羅関係の通訳官である。

○暹羅通事見習

不詳 泉屋 徳兵衛

○東京通事(一貫五百目、幕末には三目六十目三人扶持)

明 曆年中 東京 久蔵

東京関係の通訳官である。

○モフル通事(一貫五百目)

寛文十二年 重松 十右衛門

南方関係の通訳官である。

(松本 1958:111-113)

ここから分かるように、慶長 8(1603)年頃に創設された長崎唐通事は寛永 17(1640)年に大・小通事に区分されて、その後、稽古通事が承応二年(1653)に置かれた。これによって、本通事の三段階職制が成立した。その後、「宝暦期(1751~1763)の新役創設や文政・天保期(1818~1843)の員数膨張に伴い、唐通事の機構が次第に拡大され、職制が分化していく。こうした体制上の変化は、江戸時代前期においては唐船貿易の増加や貿易方式の変革によるものと考えられるが、中期以降は来航唐船の艘数が漸減するにもかかわらず貿易の形勢と逆傾向に拡張したのが「唐通事機構内部における体制内運動」によるものと解釈される。江戸後期に入って、唐通事は唐船貿易の減退を背景に、組織を維持しながら機能していた」(許 2012a:267-268)という。

許(2012a)は『元治元年 慶応三年改 諸役人分限帳』と『慶応元年 明細分限帳』との二種類の分限帳から、元治元年(1864)、慶応元年(1865)、慶応三年(1867)の唐通事記録を通して、通事の役職表と通事の名前を表に整理した。ここで、許(2012a)が整理した通事の役職表を挙げる。

- 唐方諸立合大通事 ○唐通事目附定直組立合兼
- 唐通事目附助定直組立合兼 ○唐大通事
- 唐大通事過人 ○唐小通事 ○唐小通事過人
- 唐小通事助 ○唐小通事並 ○唐小通事末席
- 唐稽古通事同見習 ○唐年行司 ○唐年行司格見習
- 内通事小頭筆頭 ○内通事小頭 (pp.269-272 表一による)

これによると、長崎唐通事は一つの職能集団として、唐船貿易という業務が中止となった後も、その職制、規模が大きな変化が見られずに江戸時代の最後まで存続した。

上記のように、通事の中、唐人だけでなく、来航する唐人たちの世話をする日本人も採用されて、稽古通事よりかなり下級の通訳となっていた「内通事」も設置されていた。「内通事」について、林(1986)は以下のように述べている。

内通事 本来、私的に中国商人や船頭の通訳や雑用として口錢をうけていた者をいい、慶長頃には存在していたと見られるが、その当時の人数や実体は明らかでない。寛文六年、長崎奉行は彼らのうち一六八¹¹人を公認し、南京方・福州方・泉州方にわけ、一船に三人宛の勤務とし、同時に内通事小頭七人を任命した。その後、元禄二年、唐人屋敷が設置されると、ひらの内通事のうち三〇人を唐人屋敷詰番内通事とした。

こうした内通事は実務的には唐通事の下僚のような観を呈し、役料は極めて低く、宝永五年には詰番内通事は一人一貫五〇〇目程度であったが、一般の内通事は一人四三五目宛であった。そのため元禄・宝永期にはしきりに生活の困窮を訴え、「渴命に及ぶ」として拝借銀を願いでて拒否され、直訴をかまえたり、逼迫のため他国へ商売に出るとして辞任する者もいた。(p.17)

こうした通訳などに従事した内通事と呼ばれる職種につく日本人には、日本における唐話語学、唐話文学の発展にも大きく貢献した人物がいたが、その一人が、以下の第三節に取り上げる岡島冠山であった。

¹¹ 田辺茂啓[他]編(1928)『長崎志 正編』(『長崎實録大成』第十卷「唐通事始之事(pp.361-364)」長崎文庫刊行会(国立国会図書館オンラインへのリンク)には「唐内通事役 一同六年唐内通事役百六十七人仰付ラル。此内七人小頭ニ仰付ラル。(pp.362)」という記述があり、また、林復斎 編『通航一覽』(第四)にある「寛文六丙午年、唐内通事役百六十七人仰付らる、此内七人小頭に被仰付、…(巻百四十七 p.168)」との記述がある。これらによれば、林(1986)が指摘する「一六八人」でなく、内通事役の人数は「一六七人」であったということになる。

第二節 主な唐話資料とその価値

2.1 唐話と唐話資料

これらの通事を養成するために、当時の唐通事が使っていた「唐話」の教科書は何だったのだろうか。まず、唐話入門の学習順序及び学習されていた教科書について、武藤(1917)は、以下のように記している¹²。

長崎に於ける唐通事の支那語稽古の順序を畧説するが、唐通事は最初發音を學ぶ爲に『三字經』『大學』『論語』『孟子』『詩經』等を唐音で讀み、次に語學の初歩即ち恭喜、多謝、請坐などの短き二字を習ひ、好得緊、不曉得、吃茶去などの三字話を諳んじて更に四字以上の長短話を學ぶ、その教科書が『譯詞長短話』五冊である、それから『譯家必備』四冊『養兒子』一冊『三折肱』一冊『醫家摘要』一冊『二才子』二冊『瓊浦佳話』四冊など唐通事編輯にかゝる寫本を卒業すると此に唐本『今古奇觀』『三國志』『水滸傳』『西廂記』などを師に就きて學び進んで『福惠全書』『資治新書』『紅樓夢』『金瓶梅』などを自習し難解の處を師に質すといふのが普通の順序である。(「鎮西の支那語學研究」pp.51-52)¹³

さらに、武藤(1915)は次のように記している。

それで唐通事の支那語學稽古に最も重寶がられた教科書は『譯司長短話』と『譯家必備』とであつて『長短話』の方は尋常の應對よりも貿易交渉の問答會話に要する長短話集で『必備』の方は長崎の風光、唐船入津の光景、船主役人應對の模様…

されば此の二部の寫本は各通事の家には必ず備へられて居たに相違ない、然るに今日では二書共に散逸してその現存するもの少なく歴々の唐通事家にも無いといふことだ¹⁴。(「東京通事魏龍山遺寫本『譯詞長短話』に就きて」p.429)

『大學』も『論語』も『孟子』も、また『詩經』も、いわゆる「四書五經」といわれる儒学の經典であり、中国では初学者が學問の手ほどきを受ける際に繙く書物であるが、決して中国語(唐話)學習用に専門に編まれた教科書ではない。これに対して、『訳司長短話』と『訳家必備』という二書は、もっと実用的な「問答會話集」であつたようだが、これも語學學習を系統的に進める教科書とはい

¹² 唐通事出身の何禮之の談による。『西南文運史論』pp.430注(4)。

¹³ 六角(1988)は上記の教科書を學習順序に發音段階、初級段階、中級段階、上級段階という四つの段階に分けている。この指摘によると、岡島冠山が『唐話纂要』を刊行する以前の「唐話」教育のやり方と教材が分かる。

¹⁴ 穎川君平の談による。『西南文運史論』p.430注(5)。

えなさそうである。

つまり、唐通事が学習した唐話は、唐船貿易における実務に必要とされる口語的な実用の外国語であったが、そこに行く前に、まずは儒学の経典によって発音の基礎を学び、次に「問答会話集」で実用的な語彙や語句を習得するのが、江戸時代初期の唐話学習の進め方であったようだ。

こうした教本しかない状態の中、より高い職階に進めるように、唐通事たちはより高度で実用に適した語学力を身につけなければならない。従って、実務における実践を通して、レベルが異なる学習段階では、通訳実務に合わせるよい教科書が必要となった。発音だけでなく、唐話の意味と言い回しを学ぶため、多くの唐話教科書が出版される潜在的需要があったはずだ。

ただし、従来の唐通事の養成、昇進コースは、林陸朗(2000:62)で述べるとおり、「世襲」が原則であり、その後継者養成・教育システムは公的に整備されたものではなく、「唐通事編輯にかかる写本(武藤 1926a:51)」に基づいて行われてきたことである。武藤(1915)が述べるとおり、「此の二部の寫本は各通事の家には必ず備へられて居た(p.429)」のであり、これを用いて「一子相伝」式に一族一家の内部で伝承されていた。表 1-2 は、長澤規矩也の編集による『唐話辞書類集』20 集に収められている江戸時代唐話の教本・辞書類の一覧だが、ここからも明らかなように、元禄期までは 2 件しか公刊が確認できない上、後述するとおり、この 2 件はいずれも、見出し語に発音が表記されていない等外国語学習教本として見るとはなはだ不備なものだった。それは、以上のとおり唐通事は家内で伝承されることが基本で、公の教育制度やシステムが整備されるまでもなかったからだ。

これ以外にも、無視すべきではないのは、奥村佳代子(2011)が掲げる『唐話課本五編』であり、この中に『小孩児』、『長短話』、『請客人』、『小学生』、『鬧裏鬧』が収録されているが、これも当時の教科書として役割をはたしていたことを認める必要がある。前者には岡島冠山が編集した一連の一般向けの中国語教科書も含まれているのに対し、後者は唐通事向けの初級教科書である。

表 1-2 『唐話辞書類集』所収唐話資料¹⁵

日本年号	西暦	書名	編著者	収録先
元禄 7	1694	語録字義	不詳	第 8 集
元禄以後	1688~	宗門方語	不詳	第 8 集
江戸前期か	1603~1651	公武官職称名考	穂積以貫(1692~1769)	第 13 集
享保 1	1716	唐話纂要	岡島冠山(1674~1728)	第 6 集
享保 1	1716	唐音和解	岡島冠山	第 8 集
享保 3	1718	漢字和訓	井澤長秀(1668~1731)	第 16 集
享保 3 以前	~1718	譯通類略	岡井孝祖(不詳)	第 18 集
享保 4 以前	~1719	譯通類略(刪補本)	岡井孝祖	第 19 集
享保 10	1725	字海便覧	岡島冠山	第 14 集
享保 10	1725	唐話類纂	岡島冠山	第 1 集
享保 10(序)	1725	唐語使用①	岡島冠山	第 7 集
享保 10 以後	1725~	唐話為文箋	渡辺約郎(益軒)(不詳)	第 2 集
享保 11	1726	唐音雅俗語類	岡島冠山	第 6 集
享保 11	1726	唐譯便覧	岡島冠山	第 7 集
享保 12	1727	水滸全傳譯解	岡田白駒(1692~1767)	第 13 集
享保 12	1727	授幼難字訓	井澤長秀	第 16 集
享保期か	1718~1736	明律考	荻生徂徠(1666~1728)	第 12 集
享保期頃	1718~1736	唐人問書	不詳	第 4 集
享保期頃	1718~1736	兩國譯通	稲生若水?(1655~1715)	第 8 集
元文 1 以前	~1736	應氏六帖	伊藤東涯(1670~1736)	第 12 集
江戸中期か	1651~1745	崎港聞見録	不詳	第 4 集
江戸中期か	1651~1745	劇語審譯	不詳	第 4 集
江戸中期か	1651~1745	俗語解	不詳	第 10 集
江戸中期か	1651~1745	忠義水滸傳(語解)	長崎半唐師(口授)	第 13 集
江戸中期か	1651~1745	忠義水滸傳考	不詳	第 13 集
江戸中期か	1651~1745	水滸傳字彙外集	不詳	第 13 集
江戸中期か	1651~1745	訓義抄録	田宮橘菴?(不詳)	第 15 集
江戸中期か	1651~1745	崎陽熙々子先生華学圏套	不詳	第 18 集
江戸中期か	1651~1745	雑字類譯	不詳	第 19 集
江戸中期か	1651~1745	中華十五省	不詳	第 19 集
江戸中期か	1651~1745	滿漢瑣語	不詳	第 19 集
江戸中期か	1651~1745	水滸傳記聞	不詳	第 20 集
江戸中期か	1651~1745	水滸傳抄解	不詳	第 20 集
延享 5	1748	語録譯義	留守友信(1705~1765)	第 2 集
延享 5 か	1748	官府文字譯義	留守友信	第 17 集
延享 5 か	1748	俗語譯義	留守友信	第 17 集
宝暦 4	1754	唐音世語	洛北禿山子?(不詳)	第 8 集
宝暦 7	1757	忠義水滸傳解	陶山冕(不詳)	第 3 集
宝暦期	1751~1764	忠義水滸傳鈔譯	陶山冕	第 3 集
宝暦 11	1761	八僊卓燕式記	山西金右衛門?(不詳)	第 8 集
宝暦 12	1762	雑纂(譯解)	不詳	第 14 集
明和以前	~1764	麤幼略記	不詳	第 16 集
明和 4	1767	南山考講記	島津重豪(1745~1833)	第 5 集
明和 7	1770	詞略	龍公美草盧(1714~1792)	第 14 集
明和 8	1771	碧巖録方語解	服部天游(1724~1769)	第 8 集
明和 9	1772	学語編	釋顯常(1719~1801)	第 16 集
安永 6 以前	~1777	常話方語	浅見安正(1652~1712)	第 5 集
安永 7 以前	~1778	遊焉社常談	石川貞(1737~1779)	第 17 集
天明 3	1783	中夏俗語藪	岡崎元軌(1766~1832)	第 16 集
天明 4	1784	水滸傳抄譯	鳥山輔昌(不詳)	第 3 集
天明 4	1784	小説字彙	秋水園主人?(不詳)	第 15 集
天明 5 以前	~1785	水滸傳批評解	清田儋叟(1719~1785)	第 3 集
寛政 7 以前	~1795	譯家必備	不詳	第 20 集

¹⁵ 以上に挙げられている様々な「唐話資料」と呼ばれる中国語の学習書が大量に作られていた。表 1-2 は、長澤規矩也の編集による『唐話辞書類集』20 集に収められている。これは長澤規矩也氏が収集できた教本にすぎず、これをもって、江戸中期に刊行された「唐話」教本のすべてであると考えすることはできない、唐話教本刊行の概略を知ることができる。

江戸末期か	1793~1868	怯里馬赤	不詳	第 1 集
江戸末期か	1793~1868	[校注]西廂記	[譯]遠山圓陀(不詳)	別巻
江戸末期か	1793~1868	[譯]琵琶記	不詳	別巻
寛政 12 以前	~1800	譯官雜字簿	不詳	第 19 集
文化 7	1810	俗語解	森島中良(1756~1810)	第 11 集
文政期	1820	胡言漢語	遠山圓陀(不詳)	第 1 集
天保 4 以降	1833~	奇字抄録	田宮橘菴?(不詳)	第 14 集
安政 7	1860	徒杠字彙(刊本)	不詳	第 9 集
安政 7	1860	徒杠字彙(写本)	不詳	第 9 集
明治前期	1868~1889	華語詳譯	不詳	第 17 集
明治 15 以前	~1873	爾言解	不詳	第 4 集
明治 16 以前	~1874	色香歌	不詳	第 4 集
明治 16 以後	1884~	支那小説字解	不詳	第 15 集

注：①『唐語使用』について、他の多くの研究では『唐話使用』という書名を使っている。その原因は、毎巻の前に「唐話使用巻之一」のように、「唐話使用」と書かれたが、本名と内容の両枠に書かれたのは「唐語使用」で、統一されていないからである。本研究では、引用の先行研究の内容以外、全て『唐語使用』という書名を使用する。その初版は享保 10 年に刊行され、『唐話辞書類集』所収本は享保 20 年の再版である。

表 1-2 から見ると、元禄期は 2 件である。これに対し、享保期に入ると岡島冠山が先鞭をつけて以降、陸続と刊行が行われ、享保期では 16 件が収録される。つまり、唐話の学習が隆盛していた江戸中期、特に享保以降、多くの唐話資料が出版されていたことが分かる。

その内、初期の頃の『語録字義』、『宗門方語』は、編著者と具体的な刊行年が不詳であり、見出し語に対応する訳文はあるが、挙げられた見出し語には発音が表記されていない。また、『公武官職称名考』には、官職の称呼などは見出し語として挙げられ、訳文が加えられている他、片仮名による原語の発音注記も見られるが、一部に止まっている。このように、この三冊の資料は外国語を学習する教科書として多くの不備を有することは明らかである。収録する中国語を意味による分類、音節数による分類、単語か会話文かによる分類を行い、全項目に原音の発音を注記するという当時の本格的な中国語学習書のスタイルを確立させたのは、唐話学習書として知られた岡島冠山の『唐話纂要』である。享保を中心とする江戸中期は、『唐話纂要』をはじめ、沢山の中国語の教科書が編纂、出版されていた時代となった。

2.2 唐話資料の価値

もちろん、唐話の学習は、初めは主に唐通事を中心として行われていた。だが、享保年間(1716-1736)頃から、唐話学習の流行に従い、学習者は唐通事に限らず広がっていた。

当時の唐話の普及状況について、江村北海が『授業編』で次のように述べている。

抑唐音ノ吾邦ニ行ナハルハ事、元和¹⁶ヨリ以前ハ姑ク置、正保ノコロ朱之瑜・陳元賛ナド歸化ノ後其人ニシタシカリシ人ハヤ、唐音ニ通ジタル人アリケレドモ、イマダ汎ク世間ヘ流布セズ、余幼穉ノ比マデハ長崎ノ譯官、黄檗ノ僧徒ナラデハ知ラヌ事ノ様ニ人々オボヘテ、京師ナドニ是ヲ主張スル人マレナリシガ岡島援之長崎ヨリ京大阪ヘノボリ來リ江戸ヘモ赴キテ其業次第ニヒロマリ、唐話纂要、雅俗語言ナドイフ類ヒノ書ドモ多く梓ニチリバメ世ニ行ハル。スベテ何事モ天地ノ氣運ニアズツカルコトニテ少々ノ前後ハアレドモ、マヅイヘバ其時ニアタリテ水戸ニハ今井小四郎ナドイヘル人舜水ニ親炙シテ、モツトモヨク唐韻ニ通ス。對島ニハ雨森芳洲¹⁷アリ、東都ニテハ徂徠¹⁸コレヲ以テ後進ヲ鼓舞ス。コハニ於テ世ニ唐音ヲイフモノ多く輩出シ其人々ナクナリテ近年ハコレヲイフモノ亦少シ。但徂徠ナドハ唐音ニヨク通ジタルト云ニハアラデ畢竟指ヲ染タルト云計リナレドモ學博才豪ナルユヘコレヲ以テ其論說ヲ張ル所謂英雄欺人ナリ。(pp.237-238)

このように、記載にある唐話資料は日本における中国語学習史、中国語

¹⁶ 元和とは1615年-1624年の時期であり、正保は1644年-1648年のことなので、また江村北海は、正徳3年10月8日(1713年11月25日)の生まれで、天明8年2月2日(1788年3月9日)没なので、彼が「余幼穉ノ比」というのは、ほぼ享保年間(1716-1736)に当たるものと理解できる。

¹⁷ 「雨森芳洲」について、「先哲叢談」に下記のように記載している。

雨森芳洲、雨森東、字は伯陽、小字は東五郎、芳洲と號す。平安の人なり、或は伊勢の人と曰ふ、對馬侯に仕ふ。…芳洲は象胥の言に通じ、…年八十一、始めて將に倭歌を學ばんとし、…徂徠を師として、其塾に居らしむ、未だ幾許ならずして、塾を出でて、歸らしめて曰く…(「先哲叢談 前編 卷之六」『近世文芸者伝記叢書』第一卷 pp.550-553)

¹⁸ 「荻生徂徠」について、

徂徠荻生氏、名は雙松、字は茂卿といふ。通称惣右衛門、徂徠と號すまた護園、赤城翁とも號す。…父を方庵といひ、憲廟の侍醫なりし。徂徠寛文六年に生れ、五歳にして能く字を識り、十四五歳の時、父方庵事に坐して、南総に竄せらる。徂徠從ひて移る。然れども僻地にありて、苦学し、十五歳の頃より文を屬し、二十五歳の時、赦に値ひて、江戸に歸るを得たり。遂に大儒となり、甲斐侯に聘せられ、祿五百石を賜はり、編修総裁となり、後大城にも屢々めされしなり。我が邦慶元以来の儒風ここに於て一變し、復古の学を唱へて、一時を風靡す。…徂徠才学共に富みて、尤經濟に長じ、また雅樂、象胥、軍旅、法律、すべて百家のこと精覈せざるなし。…實に東邦の一偉人、享保十三年正月十九日卒す。年六十三。…(「先哲像傳 卷之三」『近世文芸者伝記叢書』第七卷 pp.340-346)

どのように記載されている。荻生徂徠が著した作品は、『辨道』『満文考』『唐後詩』『徂徠集』など多くある。

教育史の研究に対して、重要な根拠として提供している。また、唐話及び広く使われていた唐話資料は江戸時代の儒学者に大きな影響を与えていたことも分かる。

当時、儒学者の一部では、中国語学習を重視する者が出ていた。特に、上述した有名な儒学者である荻生徂徠、雨森芳洲はともに中国語が堪能だったのだけでなく、唐音とも密接に関わり、儒書唐音直読を提唱している。これについて、湯沢(2014)には以下のような指摘がある。

近世一七世紀中期以降、長崎経由で継続的に渡来するようになった。その背景には徳川幕府による明及び清との交易の推進、加えて一六四四年の明滅亡に伴う中国の僧や儒学者などの渡来、亡命などがあつた。古来、中国文化摂取の二大窓口となっていた仏教界と儒学者は、当然のことながらこの唐音と結びついた。すなわち、唐音は前者にあつては渡来僧が開いた黄檗宗や曹洞宗心越派などの一部仏典読誦音として定着した。一方、後者にあつては一部儒学者における直読用読書音となった。しかしそれは定着と言うにはほど遠いものであつた。その中にあつて、一八世紀初期、古文辞学派の荻生徂徠(一六六六-一七二八)は、刊行書を通じて初めて儒書唐音直読を提唱した。これは当時既に儒学界に唐音直読がそれなりに浸透していたこと、逆に言えば既に儒学界は唐音直読をそれなりに消化していたことを物語っている。のみならず、徂徠は当時日本儒学界の指導者の一人であつたことから、彼の発言が儒学界に対して相当大きな衝撃を与えたことを示唆している。(p.18)

朱子学者雨森芳洲(一六六八-一七五五)は、対馬藩藩儒として人生の大半を送つた。中国語に堪能だつた彼は二〇代から時に中国語通訳の任にも就いたと見られる。複数回にわたる長崎への語学留学や通訳の仕事などにうかがわれるように、元通訳の岡島冠山(一六七四-一七二八)などとともに近世儒学界にあつてその中国語力、唐音力は抜きんでていたと考えられる。(p.95)……芳洲は唐音直読を主張した。しかし、一方では訓読も認めた。(p.106)

こうして、当時では唐話の大流行の有様を窺うことができるとともに、これも当時の唐通事及び唐話資料の存在が日本の儒者に大きな影響をもたらしてきたことを示している。

また、文学の方面では、『唐話纂要』の作者である岡島冠山の業績の一つとして、『水滸伝』の訓訳、翻訳が挙げられる。青木(1927)は、「岡島冠山は本邦に於ける支那白話文学研究の先覚第一人者である(p.450)」と評価して、

次のように述べている。

冠山以前及び当時^に在つて支那語を能する者は五山の僧侶、長崎の通事を始め、学者にも水戸の安積澹泊、紀州の高瀬学山、對馬の雨森芳洲など著明な人々も有つたが、支那語をして普遍的ならしめた功は我が冠山を推さねばならぬ。譯士にして彼に先ち小説を讀んだ人のうち知れてゐるものでは寛文頃に林道榮があつた。又白話小説の翻譯としては彼より一步先んじて僧義轍及び其弟の共譯した「通俗三國志」元禄二年-五年刊があつた。併し支那白話小説に訓點を附して公にしたのは「忠義水滸傳」二卷を以て始めとする。又彼が譯した「通俗忠義水滸傳」が後代我が小説文学に及ぼした影響の大きかつた事は「通俗三國志」と比較にならぬ程であつた。是れ冠山が我邦に於ける支那白話文学先覺者として重を爲す所以である。(p.283)

この指摘から、唐話の学習が白話文学への影響の大きさがよく分かつた。また、言うまでもなく、多くの唐話資料を編纂したことから、唐話の学習、唐話の教育などの方面において、岡島冠山は重要な役割を果たしていることも分かる。

一方、2.1 で挙げたこれらの大量の唐話学習書は、言語研究の資料として、非常に貴重なものである。唐話そのものを中国語研究の対象として、文法、語彙などの各方面からとらえられるため、当時の中国語の状況を知ることが出来る。一方、当時の唐話学習書に唐話と対応する日本語の意味が書かれていたため、これらの日本語の意味を通して、当時の日本語の特徴も分かる。従つて、中国語だけでなく、日本語の研究資料としても貴重である。

さらに、これまで研究が少ない語音面を見過ごしてはならない。奥村(2007)は、多くの唐話資料の検討を通して、唐話を「唐通事の唐話」、「岡島冠山の唐話(中間の唐話)」、「日本人の唐話」との三種類に分ける必要があると指摘している。そして、『唐話纂要』の語彙に見られる二つの特徴を紹介した。一つは、「人称代詞や語気助詞といった基本的な語彙に、口語、文語、用いられた時代や地域が異なると考えられる語が混在している。(p.231)」ことであり、「このため、『唐話纂要』の語彙は均質性を欠く(p.231)」と指摘している。もう一つは、「長崎での唐人貿易に関連する語彙や語句が多く含まれている」ということである。奥村(2007)は『唐話纂要』『唐語便用』等複数の教本に検証の範囲を広げているが、残念ながら語彙レベルのみでの対照分析であるため、方言または南京官話としての特性を正確に捕捉しかねている。約 300 年前に

使われていたこれらの資料は、中国語方言史においても大きな研究価値がある。何故なら、中国語の面から見ると、当時の中国では現在のような全国に通用する共通語が制定されていなかったため、唐通事が使っていた「唐話」には数種類のものがあったからである。

また、上記に述べた長崎での唐船の主な出港地は福建省、江蘇省、浙江省となっていたため、唐通事が話す言葉は主として唐船の出港地の方言であった。従って、長崎に入港した唐船の中国人商人などと接触した際に、共通語的性格を有した南京官話の他に、閩方言である福州話、漳州話及び呉方言である杭州話などの諸方言を使用しなければならなかった。唐通事たちに広く使われていた多くの中国語学習書を通じて、その方言及び方言の特徴を知ることができる。

第三節 『唐話纂要』の基礎研究

本研究の研究対象は、学者岡島冠山によって編纂された『唐話纂要』である。本節では、『唐話纂要』とその編纂者岡島冠山の基本情報をまとめる。

3.1 岡島冠山について

唐話資料が多く作られていく過程で、岡島冠山は江戸時代における唐話の流行に大きな影響を及ぼした存在であったことは、すでに第二節で述べたとおりだ。

岡島冠山について、『唐話纂要』を研究した先行研究等では、冠山を紹介したものも多く、詳細に論じているのは青木(1927)、石崎(1940)と湯沼(1984)等である。ここでは、まず、『日本諸家人物誌』と『近世文芸者伝記叢書』の記載を引用する。

岡島冠山 姓ハ岡島名ハ明敬後ニ璞ト更ム字ハ援之後ニ玉成ト更ム稱ハ弥太夫冠山ハ号ナリ長崎ノ人初メ舌官ヲ以テ崎陽ノ府尹ニ仕フ後辞シテ京攝ノ間ニ游ヒ後ニ東都ニ住ス華音小説ノ學行ルハ専ラ此人ヨリハシマル卒年五十五。

著述

唐話纂要 唐譯便覽 雅俗語類
唐話使用 太平記演義 通俗水滸伝
康熙帝遺詔 尺牘辨解 字海便覽

(『日本諸家人物誌』青柳文蔵著、寛政 12(1800)p.62)

名璞字玉成號冠山、通稱援之後改彌太夫。長崎人。冠山始以譯士仕于萩侯、受其月俸。自慙爲賤役、辭而家居。專修性理學。獨以此鳴於西海。嘗應足利侯忠圀(戸田大隅守)之聘、來于江戸。無幾致仕至浪華講說爲業。又至江戸至平安。前後皆以其精于華音、從遊頗衆矣。首唱稗官學於世、先是雖有從事之者、未甚精之。及冠山起、始能詳明於其說云。……冠山以享保十三年戊申正月二日歿于平安。享年五十五歲、葬于慧日山。所著有唐話纂要、唐譯便覽、雅俗類語、唐話使用、字海便覽、華音唐詩選、尺牘便覽、通俗水滸傳、通俗元明軍記、通俗明清軍談、小説讀法等。

(『先哲叢談 後編』卷之三『近世文芸者伝記叢書』第二卷 pp.281-286)

この二種類の資料を基に、また、青木(1927)や石崎(1940)を参考した上で、岡島冠山の生涯の概略を以下のようにまとめることができる。

岡島冠山は姓が岡島、初名が明敬、のち璞、字が玉成、号が冠山で、通称が援之、長左衛門、弥太夫である。

延宝 2 年(1674)に長崎で生まれた。

貞享 4 年(1687)、十五歳。この頃南京稽古通事見習だった。中国語は当時の唐人や上野玄貞に師事していた。

元禄 5 年(1692)、二十歳。毛利吉就(萩侯)(江戸時代長州藩の第 3 代藩主)に通訳官として召された。

元禄 7 年(1694)、二十二歳。2 月 7 日、毛利吉就が急死となったきっかけで、冠山は訳士を退いて、長崎に帰った。

元禄 8 年(1695)、二十三歳。南京内通事として唐通事会所に属し働いていた。

元禄 14 年(1701)、二十九歳。内通事の貧困の生活で、通事辞職願を出して、内通事を辞めた。唐通事会所を通じて立山奉行所へ申し出る。その後、小説等の翻訳に従事しはじめた。

宝永元年(1704)、三十二歳。上京(京都)して、その次年に訳本の『通俗皇明英烈伝』が出版された。

宝永 3 年(1706)、三十四歳。戸田大隅守(戸田忠圀、下野足利藩第二代藩主)に召され、江戸(今東京)にきた。

宝永 5 年(1708)、三十六歳。荻生徂徠の知遇を得て、京都槇山に行った。

宝永 6 年(1709)、三十七歳。戸田氏の元を離れ、難波に帰り、大阪あたりで唐話学者との交流があり、国使接待業務を行っていた。また、唐音の講説を生業とする。

宝永 7 年(1710)、三十八歳。江戸に戻った。

正徳元年(1711)、三十九歳。護園訳社の教師として唐音を教えていた。唐話学の大家として活躍した。

享保元年(1716)、四十四歳。九月に初版の『唐話纂要』が刊行された。

享保 3 年(1718)、四十六歳。『和漢奇談』を追加した再版の『唐話纂要』が出版された。

享保 4 年(1719)、四十七歳。『太平記演義』刊行。

享保 6 年(1721)、四十九歳。『辛丑元旦詩集』刊行。

享保 10 年(1725)、五十三歳。この一年間に、『唐話類纂』『唐語使用』『経学字海便覧』陸続と刊行。

享保 11 年(1726)、五十四歳。『唐音雅俗語類』『唐譯便覧』刊行。その後、多くの小説の翻訳書と唐話学習書も刊行した。

享保 13 年(1728)、五十六歳¹⁹。1 月 2 日に、京都で没した。慧日山東福寺に葬られた。

本研究では、以下の三つの視点から岡島冠山について検討する。

¹⁹ 『日本諸家人物誌』と『近世文芸者伝記叢書』の記載によると、岡島冠山の卒年は五十五歳となっているが、本研究では、冠山の伝記を考証した湯沼(1984)による「五十六歳」説を採る。

3.1.1 岡島冠山の唐話学習の背景

上述のとおり、延宝二年(1674)に長崎で生まれた岡島冠山は、唐通事出身で、元禄十四年(1701)に内通事の職を辞めてから、白話小説の翻訳、唐話学習書の編集などをしながら、江戸や京阪などの各地で第一級の唐話学者として活躍していたということが分かる。

岡島冠山について、『唐通事会所日録』の元禄十四年三月七日付の日録に、以下の記載がある。

同<元禄十四年=1701>三月七日、南京内通事之内岡島長左衛門と申者、近年逼迫仕候而渡世成兼申候ニ付、他國江罷出商賣之經營をも仕申度奉存候間、内通事役御暇之願仕申候ニ付、則組頭方々差出候願書ニ目付・年寄方書付相添候而、今朝道壽(二木、唐通事目付)・年番兩人(彭城繼右衛門・陽市郎兵衛)同道仕、先立山(立山役所)江差上候處ニ、石田小右衛門殿御取次ニ而御聞届被成候ニ付、追而可被仰付渡候、夫々西(西役所)江差上申候所ニ、立山同前ニ被仰渡候。(『大日本近世史料 唐通事会所日録三』p.98)

この記載から 1.2 で見た「逼迫のため他国へ商売に出るとして辞任する者もいた」というのが、どうやら岡島冠山のことであるらしいことが分かるが、ここから確認できるのは、岡島冠山は待遇が悪い、しかし実際の通訳業務を扱う南京内通事に従事していたことである²⁰。では、冠山は南京内通事であるが、彼が使っていた中国語はどのようなものだったのかについて、より詳しく知る必要がある。そこで、彼の唐話学習の背景を確認しなければならない。

石崎(1940)には、次のような指摘がある。

冠山が唐話の師は白樫仲凱(垣内氏、紀州産)の『唐話纂要序』及び守山祐弘の『太平記演義序』に見えるやうに、清人王庶常と上野先生とである。王庶常は傳未詳。上野先生、名は熙、字は玄貞、塵隱と號す。長崎の人、其の先は出雲國造であると言ふ。私に諡して思靖と言うたので、國思靖とも呼ぶ。…(p.63)

²⁰ 奥村(1997:111)は、注2)には「延宝二年(1674)―享保十三年(1728)柳里恭著『独寝』百二十四の記述や『唐通事会所日録』元禄十四年(1701)の記録から、1701年以前に長崎内通事をしていたと考えられる。」と「岡島冠山」を紹介しているが、奥村(2018:69)では、その見方を変え、「岡島冠山(1674-1728)は、同姓同名の人物が『唐通事会所日録』に記録されているため、内通事だった可能性も考えられるが、決めに欠けるため、今のところは江戸や京都では中国人並みの中国語を操る人物としてその中国語能力を高く評価された人物であったと言うに止めておく。」と述べている。

依拠する『唐話纂要』の白樿仲凱(垣内東臯)の跋には次のように記されている。

玉成岡崑君世家長崎、少交華客、習熟其語、凡自四書六經以及諸子百家稗官小説之類、其聲音之正與詞言之繁頗、究其闡奧。且質之於大清秀士王庶常。而後華和之人、無不伸舌以稱嘆之。

また、岡島冠山著の『太平記演義』序(通家門人長崎醫士守山祐弘謹書)をみると、次の記載がある。

不解而有譚『水滸傳』者、吾將不信之矣、獨吾師玉成先生、同郷長崎之人也、少交華客、且從先師祖上野先生、而習學華語、已自悟入其妙境。…(『日本漢文小説叢刊』第一輯第四冊 p.217)

以上の記述から、岡島冠山が長崎で最初に学習した中国語を探ってみると、上野玄貞と当時の清人の王庶常が冠山の先生であることが分かった。そこで習得した唐話は、清人の王庶常や上野玄貞に指導を受けたものであり、多くの唐人と接触する中で経験的に習得したり自学だけの自己流のブロークンなものではなかった。

王庶常について、これまでの資料にその伝は未詳であり、『唐話纂要』の白樿仲凱の跋文に「且質之於大清秀士王庶常者」という記載があるだけである。上野玄貞について、『先哲叢談 続編』に次のような記載がある。

國造塵隱 名熙。字玄貞。號塵隱。長崎人。私諡思靖。

……

塵隱幼而聰慧過目成誦從明人蔣詹山名遊峨字士洋勾越人。留淹于崎。受業門下。講習經藝。又從明僧道亮字澄一杭州人肄鑿術精方技。教授之暇。又以濟世之說。徧施於世。回春聲價。振于崎嶇。

塵隱平生敦實。教人不倦。人推尊之。以爲郷師。從學者殆七百人。長崎之地。自有郷師。未嘗有如此徒弟之盛者。

……

塵隱留志音韻。於崎律呂調聲。無不該通。最達華音。旁暨杭閩之方言土語。悉咸記得。與舶來清客對語。不用通詞。當時以譯聞於崎者。多皆係于授受者。

……

塵隱以寛文元年辛丑五月某日生。以正徳三年癸巳正月七日夜。歳五十三。病間有句。貪看風月青山影。不若遡流歸去來。其灑落可以想見。門人相議。葬於茶臼山中。私諡思靖先生。(「先哲叢談 続

編」(卷之三)『近世文芸者伝記叢書』(第四卷)pp.209-213)

この記載によれば、上野玄貞は杭州の僧侶と儒者に教えを受けていたことが分かった。つまり、「上野先生」の中国語が杭州話の色合いを帯びたものであった可能性が高いことが窺える。また、記載にある「旁暨杭閩之方言土語。悉咸記得。」から分かるように、上野玄貞は「方言土語」にも精通している。ここからは、岡島冠山が最初接触した唐話について、杭州話の影響をかなり受けていたということが強く示唆される。

また、雨森芳洲(1668-1755)の『縞紵風雅集』の「附録玉成呈東郭書畧」の後に付された「漢学譯官鄭昌周口談」に岡島冠山と第八次朝鮮通信史の漢学訳官鄭昌周との「口談」が記録されている。

玉成：曾聞老兄說北京話 果然如此麼
昌周：畧畧曉得 長兄會講南京話 難得難得
玉成：我本長崎人 我長崎南京人來得多 所以曉得南京話 今日
和你講唐話 格外有趣…
(「漢学譯官鄭昌周口談」『縞紵風雅集』『雨森芳洲全書 一』p.101)

この記録にある「玉成」は岡島冠山を指している。つまり、岡島冠山が南京話にも精通していることを示している。

3.1.2 岡島冠山の唐話語学の能力

また、岡島冠山について論じてきたこれまでの先行研究以外にも、冠山によって編纂された唐話学習書の序文や跋文が残されており、冠山及び彼の唐話に関する紹介がある。ここで、本研究の対象である『唐話纂要』の序文と跋を取り上げ、当時からどのように評されていたのかを見ていく。

『唐話纂要序』1

茲有岡島玉成子者。精通華之音与語也。一開口則錚錚然。成於金玉之聲。一下筆。則綿綿乎。聯於錦綉之句。乃以是而鳴於当世。赫赫驚人耳目。郁郁流芳遠近者。

享保元年酉申秋九月吉旦 醫官法眼林崇節男林将鑒藤原安治叙

林(藤原)安治については、どういう人物なのかについて、不詳であるが、彼の父親が「醫官」であることを顕示している点から、後述する跋 1 の垣内東皐

同様、医者筋への浸透を図る目的で序文を依頼したと考えてもよいのではないだろうか。

序 1 によれば、冠山の唐話はただ単に発音が美しかっただけでなく、中国語の美文の文章力にも長けていたことが称讃されている。

『唐話纂要序』2

夫崎陽者。其地瀕海。跨唐一葦。賈舶商船。舳艫相接。職譯官此。歲致千金。故其土人士。戶學人習。然超然出類者。僅僅晨星耳。獨我友玉成子。能拔萃者也。歟玉成崎陽人也。少發大志。長來東都。其開口譚唐。揮筆譯和。恰如仙人之尸解。將凡骨庸胎。一時脱換。獨餘其衣冠。而不化也。一起一坐。一咲一嗽。無不肖唐。嘗在崎陽。與諸唐人。相聚譚論。其調戲謾罵。與彼絲髮不差旁觀者。惟辨衣服。知其玉成。其技之妙。大率如此。故海內解音者。聞名讐服。望風下拜。宜乎所著南木大閣等書。與水滸伝西游相頡頏。使見者愛翫不已也。頃採唐話便于初學者。集為纂要。其書五卷。平生成語。無不該載。

(享保元年歲次丙申秋九月紀府侍醫高希樸中敦甫書于青山學舎)

高瀬學山については、『先哲叢談後編 卷四』に以下のように、記載されている。

名は忠敦、又の名は敦、字は希朴、学山と号す、通称は松庵、後、作右衛門と改む、紀州の人にして、国侯に仕ぶ、学山の父は松意といふ、医を以て始めて紀侯に仕ふ、学山其職を襲継す、後、江戸に來り、中村蘭林・桂山彩岩・川熊峰等と、程朱の学を研究し、尤も其説に精し、有徳大君、紀州に在りし時擢んでて儒官と為す、学山素より医を好まず、大に拔萃を感謝し、逾、経史を講習す、博く群書を究むれども、浮華虚驕を好まず、務めて沈黙・密行を事とす、故に當時に在りて、二三交友の外、其人と爲りを知る者、絶だ稀なりといふ。……学山は、當時に在りて、榊原篁洲・物徂徠と、頗る其爲す所を同じうす、均しく皆律学講習す、唐六典・文献通考・明律等の諸書は、其奉崇する所なり、嘗て明律の疑義を以て、徂徠称して曰く、他人と談れば、欠伸の生じ易きに苦む、希朴と座するに至りては、沈酔の後と雖も、覺えず洒然として醒む、殆ど企て及ぶへからざるの意ありと、……学山は寛延二年己巳歳、年八十二にして没す、著す所、論語鈔説十卷・孟子鈔説七卷・考工記諺解四卷・唐律解九卷・唐律諺解十六卷・明律例私考十七卷・同拾遺十七卷・明律譯義十三卷・明律訣義十四卷・明律詳解三十一卷・明令考一卷・唐話入門二卷・千字鈔一卷・萬事鈔三卷・非聖学問答二卷・非斥非一卷・医学正伝標注四卷・学山文集十卷あり、(『近世文芸者伝記叢書』第二卷 pp.543-546)

上記 2.2 に引用した青木(1927)にも、雨森芳洲と並んで唐話の達人と評価していたが、高瀬學山も『唐話纂要』の当時では、トップクラスの高名な学者であり唐話の達人であったことが分かった。

序 2 によれば、序 1 と同じことを述べた以外、冠山が長崎で多くの唐人と接触し、唐話で冗談を言い、悪口まで自由に唐人と言ひ合え、中国語の達人として称讃されていることが分かる。

『跋唐話纂要』1

玉成岡寫君世家長崎。少交華客習熟其語。凡自四書六經以及諸子百家稗官小説之類。其聲音之正。與詞言之繁頗究其^關奧。且質之於大清秀士王庶常者。而后華和之人。無不伸舌以稱嘆之。嗚呼岡寫君之於唐話。可謂勤矣。

(時享保元年秋九月穀旦紀陽後學白樿仲凱希八甫跋于武府全菴)

垣内東臯について、『南紀先賢列傳 第 1 編』に以下のように紹介している。

名は仲凱^{蓋し字を以て行ふもの}、小字は希八、全庵と稱す。有田郡栖原の人、了閑の二子である。夙に家學を受け、後出で伊藤仁齋東涯父子に就いて、切磋十年、それより東都に出で、醫術を修め、名聲漸く著はるやうになつた。享保中、嘗て一たび藩公の禮見する所となつた。尋いで豊前中津侯^{奥平昌春}に聘せられ、侍醫となり、世子侍讀をも兼ね、二百石十人扶持を賜り、寵遇殊に渥かつた。職に在ること九年、病を以て國に歸らんとしたが、偶世子奇疾に罹り、急に召還され、殿上几杖を許され、世子を診せしめた。東臯一診して藥を進め、世子の疾便ち癒えたが、反つて東臯の病革り、享保十七年八月十四日を以て逆旅に歿した。年五十三。中津の安全寺に葬つた。……(pp.73-75)

ここからは、垣内東臯は、名医であることが分かる。また、伊藤仁齋は儒学者であり、伊藤東涯²¹は伊藤仁齋²²の長子で、徂徠と同レベルの儒学者でもあ

²¹ 「伊藤東涯」について、以下の記載による。

…名は長胤、字は源藏、また通稱に用ゐる。槌々齋と號す。仁齋の長子なり。…東涯の學識比敵のものなし。江戸には徂徠あり、東西藝園の主盟たり。此の二人の右に出づる者さらになかりし。(「先哲像傳 卷之二」『近世文芸者伝記叢書』第七卷 pp.310-311)

²² 「伊藤仁齋」について、

伊藤仁齋氏名は維貞、字は源祐、初の名は源吉と云ふ。仁齋と號す。また古義堂と稱す。…京師の人、その先は泉州の住なり、家もと商賈なり。仁齋は寛永四年七月廿日に生れ、幼時句讀を習ふ時、すでに儒をもて一世に鳴らんと志す。親戚醫を勧むる者あれども隨はず、自ら刻苦して性理學を修む。…故をもて年五十八の頃まで家道甚薄かりしとぞ。然れども遂に一代の儒宗となり、國として門人あらざるはなく、ただ飛驒、佐渡、壹岐この三國の人來學せざるのみとぞ。其の盛んなる比類なし。宝永二年三月十二日卒す。享年七十九。(「先哲像傳 卷之二」『近世文芸者伝記叢書』第七卷 pp.304-308)

るところから、垣内東臯はこの二人に従い、十年間医術を修めただけでなく、儒学も学んだと考えられる。当時の儒学者は唐話の大きな影響を受けたことから、垣内東臯も唐話ができるのではないかと推測できる²³。一方、医者筋への売り込みを考慮して、跋を依頼したのではないかとの推測も可能となる。

また、跋 1 から分かるように、冠山は若い頃、唐人に唐話を教わり、四書五(六)経と多くの小説まで熟知し、発音が非常に正しいと称讃されている。また、この跋でも唐人の師匠は清人の王庶常と記している。

『唐話纂要跋』2

其語言流宣。四聲精暢。人云無能出其右者。盖長崎与唐国。壤地相接。往来甚多。玉成生長其間。日与唐人交臂禮喚。不特其口之唐。遂使一身變而爲唐。其行也唐也。其止也唐也。其立也唐也。其坐也唐也。無處而不唐也。性不拘細行。無所事事。常杜門著書。手不擇筆。其搦管處。指爲之睡矣。頃嘗采唐音便学者。纂列爲編其未及成集。爲多誦一二。予曰。是前輩所未編。某所未見也。夫某所未見。非学者所無今見之集。吾子之年長矣。今不爲書。何以示来学。玉成聞之。悚然成之。因名曰唐話纂要或謂。

(享保元年歲次酉申秋九月紀府侍講霞洲原武卿子臂氏 書於東都求真精舍)

榊原霞洲について、親の榊原篁洲が『先哲叢談後編 卷之二』に記載があり、最後に榊原霞洲に関して、「男名は延壽、字は萬年、霞洲と號す」しか記されていないので、『日本人名大辞典』を参照する。

榊原霞洲(1691-1748)江戸時代中期の儒者。元禄 4 年生まれ。榊原篁洲の²⁴子。父の職をつぎ、紀伊和歌山藩儒官となり、藩主徳川宗直の侍講としてつかえた。詩文をよくした。寛延元年 9 月 1 日死去。58 歳。名は延寿。字は万年。著作に「退食録」。(『日本人名大辞典』p.830)

跋 2 にある「其行也唐也。其止也唐也。其立也唐也。其坐也唐也。無處而不唐也。」から分かるように、冠山は多くの唐人と交流し、彼の振る舞いと生

とのように、同じ「先哲像傳」に紹介されている。伊藤仁斎の著書は、『論語古義』『孟子古義』『仁斎日札』『心學原論』等、多く挙げられる。

²³ 奥村(2010:124)に「唐通事以外の日本人知識人、たとえば荻生徂徠や伊藤仁斎や雨森芳洲などの儒学者によってそれぞれの目的のために学ばれ、長崎を遠く離れた江戸や京都や大坂で学ばれ話された中国語でもあった。」のような指摘もある。こうした唐話の広がりの一つとして、垣内東臯も唐話に接していたと推測することは可能だろう。

²⁴ 榊原篁洲(1656-1706)江戸時代前期の儒者。本姓は下山。名は玄輔。字は希翊。通称は小太郎。著作に「大明律例諺解」など。(『日本人名大辞典』を参考。)

活様式は既に唐人に同化されていたといわれるほどであった。そして、唐話の学習書、特に発音まで注記したものがなくて、教育に滞りが生ずる点が大きな課題と聞いて、『唐話纂要』を作成したという本書公刊の経緯が明らかにされている。

以上 4 篇は、いずれも『唐話纂要』そのものに附された序と跋のため、褒めことばに終始する可能性もあるが、それでも当代随一と目される高瀬學山などの錚々たるたる人士が口を極めて称讚していることは、岡島冠山の中国語力が相当高く、また『唐話纂要』が唐話(中国語)教育に果たす大きな役割が期待されていた証左とも言えるだろう。

3.1.3 岡島冠山による唐話資料

岡島冠山によって翻訳され、編纂されていたものは実この他にも多くある。体系的に整理したのは、湯沼(1984)である。湯沼(1984:541-542)は以下のように、現存している冠山による著作をこの七種類に分類している。

(一)語学教科書

(1)中国語学習を主とするもの:『唐話纂要』(初版本)『唐話使用』『唐譯便覧』『続俗文音譯』『唐音雅俗語類』

(2)中国語学習を意図しながらも、白話小説の文学性をわが国に影響しようとしたもの:『唐話纂要』(再版本 『和漢奇談』を収録)『唐音雅俗語類』『唐話類纂』

(二)経書類の翻訳:『経学字海便覧』『唐音学庸』

(三)漢詩に唐音を附したもの:『辛丑元旦詩集』

(四)水滸伝翻訳ノート類:『続水滸伝序訳 李卓吾贊』『李卓吾先生批点忠義水滸伝 引首 施耐菴集撰羅貫中纂修』『李卓吾先生批点忠義水滸伝 第一回至百回』

(五)中国小説の翻訳:『通俗皇明英烈伝』『忠義水滸伝』『通俗忠義水滸伝』

(六)わが国の作品の演義化:『太平記演義』

(七)その他:『康熙帝遺詔』

冠山は、初め唐通事に従事することを通じて、多くの中国人と接し、実際の唐話に触れ熟達の度合いを深めた。その後、儒学者や侍講に比べてその地位が低いことを嫌い、講学に転じたが、荻生徂徠の護園派に唐話を講ずる機会を得たことから、儒学者達との交流を深めていった。こうして、年来の主

張であった白話小説等の通翻訳及び唐話学習書の編纂等多くの経験をしてきた。そして、冠山は中国語の通訳能力と中国文学の学識のみならず、彼が編纂した数多くの唐話学習書から、冠山がもつ音韻知識の一斑も分かる。

しかし、瀧沼(1984)が整理した岡島冠山の七種類の著作には漏れが見られる。石崎(1940:88)などによると、冠山には『唐音三体詩訳読』という唐音と注解を附したものもあり、第三類の「漢詩に唐音を附したもの」にも入れるべきだろう。

上記七種の他に、瀧沼(1984:540-541)には各種著述目録や伝記に見えるが、所在不明なものとして、以下のものが掲げられている。

著述目録や伝記に見えるもの:『華音唐詩選』『尺牘弁解』『唐音和解』
所在不明なもの:『小説読法』『通俗元明軍記』『通俗明清軍談』『唐音俗語問答』『唐音論語』『唐音千字文』『南木』『太閣』『太閣記』

以上の整理から、冠山の著作の全貌を知ることが出来る。

ここでは、下記のように、享保時期によく知られている冠山による主な唐話学習書のみ挙げたい。

『唐話纂要』	五卷五冊	享保元年(1716)刊(初版五卷)
	六卷六冊	同三年(1718)増補本(六卷)
『唐話類纂』	二卷	享保十年(1725)刊
『唐語使用』	六卷六冊	享保十年(1725)刊
『唐音雅俗語類』	五卷五冊	享保十一年(1726)刊
『唐譯便覧』	五卷五冊	享保十一年(1726)刊

①『唐話類纂』

同資料には序跋がなく、巻一の巻頭に編者の名前を列しているが、校訂の別がされていない。本文を二巻に分け、具体的には、巻一の「二字話并附一字話」と「二字話」から「十字已上話」までの内容で構成している巻二である。文末は「一卷跋」と「二巻跋」との二奥書がある。本書の構成形態を見れば、一部の漢字しか音注が付されず、見出し語の多くでは対応する日本語の意味も記されていない。声調の表記も全くない。また、内容の分量からみて、二巻しかなく、『唐話纂要』よりかなり少ない。つまり、唐話のテキストとして「不完全本」とされている。

②『唐語使用』

『唐語使用』は、序があり、跋がなく、本文が六巻に分けられている。巻一は「二字并四字等話」で、上三段各二字、四段目が四字話である。巻二は上二段各三字、下一段五字という「三字并五字等話」の内容となっている。巻三は「六字與七字相連之話」となり、上六字、下七字の語句でもある。巻四は「初相見説話」、「平日相會説話」、「諸般謝人説話」、「望人看顧説話」、「諸般借貸説話」の五つの内容で構成されている。巻五は「諸般賀人説話」、「諸般讚嘆人説話」、「書生相會説話」の三部の内容となっている。巻六は「與僧家相會説話」と「長短雜話」との内容及び最後の語句(一字、二字、三字ともある)で構成されている。

『唐話辞書類集』第七集の長澤規矩也の解題などは、同書の書名を『唐語使用』としている。しかし、同資料の巻一、巻二、巻四～巻六の巻頭と巻末及び巻三の巻末に「唐話使用」という書名となっているのに対して、題簽、版心、序文と巻三巻頭に「唐語使用」という書名を使用している。

同資料のどの巻の巻頭にも「每字點四聲」と注している。見出し語の右にカタカナや符号で漢字の発音、下に対応する日本語の意味が表記されている。入声字の場合、入声韻尾の「ツ」の表記がある。

③『唐音雅俗語類』

同資料は『唐語使用』と同じで、序があり、跋がない。本文は五巻に分けられている。巻一は「雅語類」という内容で、一段目の二字話と下二段の四字話とで構成されている。巻二は長短話型の「長短雅語類」であり、巻三は上一段の四字話と下一段の八字話、巻四は長短話型、巻五は長文型の「俗語類」となっている。

『唐語使用』と同じく、音注と日本語訳が付されている。入声字の場合、入声韻尾の「ツ」の表記がある。声調について、各巻の巻頭に「每字註官音并點四聲」との説明が記されている。

④『唐譯便覽』

同資料も序があり、跋がない。本文は五巻に分けられ、前四巻の内容が主

に対応する日本語の訳文の首の発音によって「イロハ」別にして、「イ字部」から「ス字部」までを分類している。巻一は「イ字部」～「ヌ字部」、巻二は「ル字部」～「ラ字部」、巻三は「ム字部」～「キ字部」、巻四は「ユ字部」～「ス字部」の内容に「長短雑語」も加えている。巻五の内容は「長短雑語」のみとなっている。

同資料の各巻の巻頭に「每字註官音并點四聲」とも注している。見出し語の右にカタカナや符号で漢字の発音、下に対応する日本語の意味が表記されている。なお、『唐話辞書類集』第七集の解題では、長澤規矩也(1973)は、「前後の編集方法が違ふので、必ずしも完全な定本とはいひ難い。」と指摘している。

冠山によるこれらの唐話学習書の中、『唐話類纂』に声調に関する記載がなく、『唐語使用』『唐音雅俗語類』『唐譯便覧』の各巻の巻頭に「每字點四聲」、『唐音雅俗語類』と『唐譯便覧』の各巻頭に「每字註官音并點四聲」と記している。一方、本研究の対象である『唐話纂要』には声調に関する説明も見られない。

このように、『唐語使用』『唐音雅俗語類』『唐譯便覧』は『唐話類纂』より、内容が豊富で、四声と訳文が記されていることが共通点である。そして、『唐音雅俗語類』と『唐譯便覧』は明らかに「官話音」のものであるが、これは唐通事を使用する唐話が、時代とともに変遷したことによる表れと考えられる²⁵。

上述のように冠山は唐話の教科書を編纂し、江戸中期以降の唐話学習を基底で支えていた。これらの唐話の学習書が当時の言語の研究資料として広く使われ、日本でも、中国でも、貴重な方言資料であるとされている。

²⁵ 岡島冠山によって編纂したこれらの唐話学習書には、後期に官話系類に変わったという変化が存在している。これも当時の唐話の学習が方言から南京官話への変容を反映している。これについて、木津(2000a)は、「彼らは、当時の日本社会で生きるため、「通事」という職業を宿命的に受け入れ、移民華人としての自己認識との折り合いの中で、「祖先のことば」としての「唐話」を守ろうとしていたのである。ところが、移住から時間が経つにつれ、彼らが守る対象に変化が起きていく。つまり、多くの移民華人社会では自己同定の據り所となった「祖先のことば」ではなく、「通事」職そのものが、世襲化される中で守る対象に姿を変えていく。その時、彼らにとっての「唐話」は「職業のことば」としての意味が強まり、加えて、各方言間に交易言語としての強弱が生じるに伴い、「唐話」習得への動機も、より高度に任務を遂行することが可能な言語、つまり通用範囲のより広い「官話」習得に重点が移っていくようになったのである。(p.669)」と唐通事の立場からその理由を述べている。

3.2『唐話纂要』の概要

3.2.1『唐話纂要』の構成

上に挙げた唐話学習書の内、『唐話纂要』は最も代表的な唐話学習書として知られている。『唐話纂要』が編纂されたことが画期的なことであり、これがあって初めてその後の唐話教本が生み出されることになった。その意味では、『唐話纂要』は江戸時代享保期以降の唐話資料輩出の礎であり、起点であると言える。

『唐話纂要』は江戸出府後、日本で最も早く刊行された冠山による唐話の学習書物である。初版は享保元年(1716)秋に刊行され、出版元が江府須原根久右衛門であり、再版は享保三年(1718)正月に、京都三條通升根町、江府日本橋南一丁目出雲寺和泉掾が印行したものである。再版に二種類あり、初版と同じものの五巻五冊本と巻六の『和漢奇談』を収録した増補の六巻六冊本である。『和漢奇談』の内容は前五巻と異なり、「平上去入」四声点が付され、また、前五巻の一部の漢字に対する音注の変更²⁶が見られる。それに、巻六の増補以外、再版本の前五巻の内容について、僅かの漢字であるが、各版本に音注或いは漢字の訂正現象が見られ、例えば、「常」、「允」²⁷である。それから、初版の『唐話纂要』に「每字點四聲」が全くないのに対して、再版本には二字話の最初の一部ではあるが、増補の巻六と同じく、四声点が付されている。

国立国会図書館所蔵の初版の五巻本以外は、現在のところでも最も広く公開し、使用されているのが再版本である。本研究で扱う愛媛大学鈴鹿文庫所収の五巻本と国立国語研究所と早稲田大学図書館所収の六巻本の他、よく見られるのは「解説」が付されている、『中国語教本類集成』(補集)が所収した再版の五巻影印本²⁸と『唐話辞書類集(第六集)』が所収した補本の六巻本影印本²⁹である。本研究では、対象の均一性の視点から、五巻本を考察の対象とし、テキストは国立国会図書館所収の初版本を使用する。また、

²⁶ 例えば、「姐-ツユイ(3)」の「ツユイ」は巻六では「ツイ」に変わった。

²⁷ 詳細は pp.337-338 の禪母の部分「允」「常」に対する説明を参照。

²⁸ 六角恒廣の解説に前五巻の内容について「以上ここで採用した五巻五冊本は、同一刊年の再版本の内、跋文を残して、巻之六「和漢奇談」を削除し改装したものかも知れない。」との説明がある。

²⁹ 長澤規矩也の解説に採用した版本について、「影印の底本は初架蔵の増補本を以てする豫定の處、蛀損がある為、倉石武四郎博士から借用した。」と説明している。

上述の再版本の原本と影印本等も参照した。

3.1.2 で既に取り上げたように、同書の巻頭は「序」二篇があり、巻末に「跋」二篇がある。各巻は次のように構成されている。

- 第一冊 巻一 二字話(13葉 765項目) 三字話(10葉 476項目)
第二冊 巻二 四字話(20葉 714項目)
第三冊 巻三 五字話六字話(10葉 236項目)
常言(11葉 142組 318項目)
第四冊 巻四 長短話(20葉 57組 542項目)
第五冊 巻五 14項目に分類された単語〈親族、器用、畜獣、虫介、禽鳥、龍魚、米穀、菜蔬、果瓜、樹竹、花草、船具、数目、疋頭〉と俗曲である10曲の小曲〈青山、崔鶯、張君、桃花、一愛、一更、二更、三更、四更、五更〉
(増補の巻六) 「孫八救人得福」「(和訳)孫八救人得福事」
「徳容行善有報」「(和訳)徳容行善有報事」

その内、巻一と巻三は語句の文字数による分類で、巻一と巻二は二字話、三字話、四字話となり、巻三は前半が直接会話文として使える短文であり、後半が常言と呼ばれる常用慣用句である。また、巻四は異なる長さの対話文で組み合わせた長短話と呼ばれる会話文である。巻五には意味によって分類された語句の他、小曲³⁰と呼ばれる中国の歌曲に属する俗曲である大衆的な歌謡が10曲収められている。

3.2.2『唐話纂要』の項目数と漢字数等の集計

具体的な項目数は表 1-3 の通りである。『唐話纂要』の中国語の「項目数」については、以下の方針に従って集計する。二字話～六字話および第五巻の語彙の部については、原文の項目をそのまま一項目として集計する。「常言」「長短話」「小曲」については原文の句点に従って、一句点を一項目として集計する。

『唐話纂要』の「項目数」は、表 1-4 のように先行研究によって出入りが見られる。表 1-4 の内、本研究での集計との違いを太字³¹で示している。

³⁰ 長澤はこれを「時調(流行歌)」と呼ぶ。

³¹ 網掛けの部分である。

表 1-3 『唐話纂要』各巻の構成

巻	形態	類別	項目数	漢字使用数	
巻一	語句	二字話	765	1,530	
	語句	三字話	476	1,428	
巻二	語句	四字話	714	2,856	
巻三	短句	五字話	118	590	
	短句	六字話	118	708	
	慣用句	常言	【142組】318	1,569	
巻四	会話文	長短話	【57組】542	3,208	
巻五	単語	親族	114	246	
		器用	432	876	
		畜獸	48	98	
		虫介	110	222	
		禽鳥	82	164	
		龍魚	85	172	
		米穀	40	81	
		菜蔬	70	141	
		果瓜	47	97	
		樹竹	67	134	
		花草	100	205	
		船具	87	186	
		数目	24	69	
		疋頭①	36	84	
		小曲 (10曲)	青山	13	52
			崔鶯	12	70
	張君		14	74	
	桃花		16	59	
	一愛		11	62	
	一更		12	52	
	二更		11	52	
	三更		14	60	
	四更		11	50	
	五更		22	94	
	合計			4,529	15,289

※①巻五では、「疋頭」は内容が布地の語彙である。小曲「五更」の後に置かれているが、分類上「単語」にあるべきものなので、「単語」の末尾に移した。

二字話～六字話、第五巻の語彙の項目数については、各研究にあまり違いは見られず、食い違いは主に「常言」「長短話」に現れ、会話の区切りを本文の句点に従うか、それとも文意によって切るかで認定の考え方が異なるためである。本研究では、先行研究を確認した上、集計結果は、語句数で計算し、二字話 765 項目、三字話 476 項目、四字話 714 項目、五字話 118 項目、六字話 118 項目とする。また、第一部の後に、常言 142 組、長短話 57 組、小曲 10 曲の項目の集計結果を加え、その全数を添付資料 1 にまとめた。

本研究では扱わない巻六について、まず、岡田(1991)と岡田(2006)は巻六の字数に言及があり、「孫八救人得福」を 2071 字、「徳容行善有報」を 1995 字としている。即ち、岡田による巻六の漢字数は、4066 字となっている。しかし、林(1988)は「巻六の「和漢奇談」で使われている延べ字数 4,263 字で、1,037 字種に就いてである(p.173)」としている。また、林(2012)に、「巻六

〈孫八救人得福〉與〈徳容行善有報〉兩篇文章,共計 4,321 字。(p.170)」と「全書六卷根據筆者統計共収 19,552 字。(p.171)」との指摘がある。このように、林(1988)による卷六の漢字延べ数 4,263 字と林(2012)による全書六卷の漢字延べ数 19,552 字に基づいて計算してみると、前五卷の漢字延べ数は、15,289 字となり、本研究による表 1-3 の集計結果と一致している。つまり、岡田の集計と本研究による計算では差違が生じている。なお、本研究の対象は五卷本であるため、卷六の内容について、詳細に集計しないものとする。

表 1-4 先行研究³²に見られる『唐話纂要』の集計状況

卷	形態	類別	六角		岡田				奥村		魯 (2009 : 39-42)	趙 苗 (2009 : 104)	林 (2012 : 170-171)	大 島 (2017 : 51)
			(1991 : 3-6)	(1991 : 16)	(2003 : 45)	(2006 : 229-230)	(2007 : 24-25, 236-237)							
卷一	語句	二字話	765 句	750 語	750 語	765 語	765 個	756 句	765 句	765 句	765 句	765 個		
	語句	三字話	765 句	500 句	500 句	500 句	476 個	756 句	476 句	476 句	476 句	476 個		
卷二	語句	四字話	714 句	714 句	714 句	714	714 個	714 句	714 句	714 句	714 句	714 個		
卷三	短句	五字話	118 句	118 例	118 例	118 例	116 個	118 句	118 句	118 句	118 句	116 個		
	短句	六字話	118 句	118 例	118 例	118 例	116 個	118 句	118 句	118 句	118 句	116 個		
	慣用句	常言	140 句	140 例	140 例	140 例	138 個	140 句	140 句	144 句	144 句	142 条		
卷四	會話文	長短話	67 語	57 例	57 例	57 例	57 個 (1 個を除いて、28 組の対話形式)	67 段	67 句	58 句	57 個 28 組			
卷五	単語	親族	100 語				114 個	14 類	14 類	14 類	114 個			
		器用	437 語				432 個				432 個			
		畜獸	48 語				48 個				48 個			
		虫介	110 語				110 個				110 個			
		禽鳥	82 語				82 個				82 個			
		龍魚	85 語				105 個				105 個			
		米穀	40 語	/	/	/	40 個				40 個			
		菜蔬	70 語				90 個				90 個			
		果瓜	47 語				47 個				47 個			
		樹竹	67 語				67 個				67 個			
		花草	100 語				100 個				100 個			
		船具	90 語				87 個				87 個			
		数目	33 語				/				33 個			
		疋頭	36 語	37 語			37 個				37 個			
小曲 (10 曲)	青山	10 曲	/	/	/	/	10 曲	10 曲	10 則	10 曲				
	崔薦													
	張君													
	桃花													
	一愛													
	一更													
	二更													
三更														
四更														
五更														
卷六	文章	/	4,066 字	/	4,066 字	/	/	/	4,321 字	/				
合計	/	/	/	/	/	/	/	/	19,552 字	/				

³² これらの研究の中、六角(1991)、趙(2009)は享保元年(1716)に出版された五卷本であり、また、趙(2009)、魯(2009)は六角(1991)による解題の『唐話纂要』五卷本を参照したため、魯(2009)は卷六の内容に言及したが、増補版の前五卷の内容を初版と同じと扱っているため、この集計は初版のものと考えられる。岡田(1991)「一七一九(ま)増補版(p.13)」、岡田(2003)(2006)、奥村(2010)、林(2012)、大島(2017)は享保三年(1718)に出版された六卷六冊本である。「常言」について、松村(2011:97)に「岡島の初期の著作である『唐話纂要』にも常言の名の許に、142の成句が列挙されている」との指摘がある。

3.2.3『唐話纂要』仮名音注の特徴

対訳方式のこの教科書には延べ 4,529 項目の中国語、計 2,538 字種を収録し、「小曲」以外、図 1 のように、各巻で中国語を見出しに挙げ、その下にこれに対応する日本語の意味を、見出しの右側に中国語の発音を片仮名³³で示している。「小曲」と「数目」の多くは音注が付されているが、日本語の意味が記されていない。

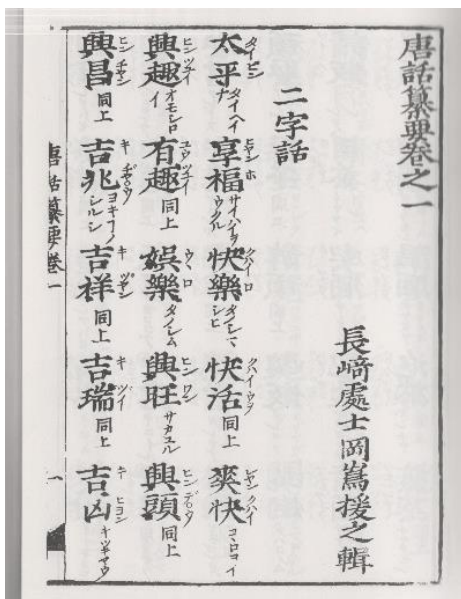


図 1『唐話纂要』

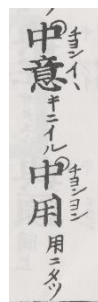


図 2

興	ヒン	興	ヒン
趣	ツユイ	頭	デ〇ウ
オモシロイ		サカユル	
		ペ	アンアン
		黒	暗暗
			クラスミ
		ウ、	
		楽	

中国語の発音を正確に示すためには、仮名を様々な方法で組み合わせる他、当時の日本語の書記体系になかった圏点という補助記号も用いられている。例えば、以下に例示した「趣-ツユイ」のように、三つの仮名を組み合わせる中国語の一つの音節を示している例が多く見られる一方、「好-ハ〇ウ」「頭-デ〇ウ」のように日本語の世界で誕生した「〇」を一つの音節を示す二つの仮名の中に挿し込んだり、「再-サ°イ」「黒-ペ°」等のように、当時の日本語の書記体系にないもの、最初から中国語音を意識して用いられた「°」を仮名の右肩に挿しこんだりしている。

また、「〇」「°」という二種類の「圏点」以外、日本語の書記体系に存在して

³³ 無音注の例も存在している。「四字話」の「歹人出沒」の「歹人出」3 字、「常言」の「不登山」の「山」、
「貧居鬧市無人識」の「居」、「長短話」の「那寒酸秀才們」の「們」、「也掙得衣飯」の「也」、「数目」の「一
兩」2 字である。

いるものではあるが、具体的な中国語の発音そのものを示すものではなく、注意する役割を果たしている符号の「ゝ」も大量に見られている。例えば、「沙-サアゝ」「依-イゝ」「乎-ウゝ」「也-エゝ」「厝-ツヲゝ」等のように、符号の「ゝ」はほとんど母音仮名の後に用いられている。また、入声の字は韻尾を注しない方法で記されている。

そして、中国語を語る上で、欠くことのできないのが四声の注記である。四声表記について、前五巻と異なり、巻六の巻頭に「有點四聲」との記載がある。巻六の『和漢奇談』には他の部分と同様、訳文と仮名による中国原音表記の他、全ての字に四声を示す点も加えてあり、同書において異質な存在となっている。巻五までは、巻六にある四声記号の「◦」に関する記載はないが、「◦」と異なる大きな白丸「○」は一部分の漢字の四隅に用いられている。例えば、図 2 の「二字話」の例にある「中」の右上に用いられている「○」は、声調を示すものと考えられる。巻六に「○」も見られる。

このように、日本語と異なる中国語の発音を示すため、様々な表記方法を試して、なるべく中国語の発音を忠実に示そうとする編著者冠山の姿勢がよく現れている。

第四節 明末清初の中国語音

本節では、『唐話纂要』が成立した清朝初期の中国語音と当時の唐通事に使用されている中国語の状況を概観したい。『唐話纂要』が刊行された1716年といえば、中国では清朝康熙五十五年にあたり、清代初期である。すでに見たとおり江戸時代、長崎での唐話学習状況について、唐通事から儒学者まで広まり始めた唐話学習の状況はある程度分かるが、では、唐話学習の教本が基づいた中国語の語音背景として、つまり清代初期において、中国語は一体どんな状況なのか、これについて、見ていきたい。

4.1 清代初期の中国語音の概観

明清の官話音系を詳細に検討したのは葉(2001)であり、次のように述べている。

在近代汉语基础方言中,南北差异由来已久,不过江淮方言(南音)是后起的,是北音南移的产物,其主要趋势是逐渐向北音靠近但一直与北音保持一定区别(南音的变化慢于北音);在南北音并存的同时还伴随着北音内部中州音与北京音的交汇并存、北京音逐渐取代中州音成为北音代表的过程。(p.14)

明清官話にあつては南音・北音が共存することを明確に指摘している。また、北音の代表としては北京音であり、南音の代表としては南京音であるとしている。そして、官話と方言口語音(白話音)の関係についても、次のように続けている。

明清两代汉民族共同语标准音(官话音)与方言口语音长期并存,二者既有联系又有区别,特别是官话音与基础方言代表点口语音的关系更为密切。(p.9)

共通語である官話音と方言口語音が長期にわたって共存していたこと指摘している。官話音には南北の違いが見られ、その違いは多くの明清時代の韻書、韻図などの資料に明らかに見られる。近世中国語の中核的な語音資料として、葉(2001)は、明代前期の官話音系の代表として『洪武正韻』³⁴『韻略易

³⁴ 『洪武正韻』は、明代洪武8年(1375年)に、樂韶鳳や宋濂や王など11人に学者によって勅撰された官方韻書の一つで、入声韻と全濁声母を有し、22部の韻部が設けられている。

通』、明代後期の官話音系の代表として『西儒耳目資』『韻略匯通』、清代前期の官話音系の代表として『五方元音』『音韻闡微』³⁵を挙げている。本研究では、明・清時代の中国語音の概観を見る上で、これらの音韻資料の代表³⁶として参考にする。以下に、これらの資料の概要を一種類ずつ挙げて説明する。

明代北方音系統の代表としての資料：

(1)明代前期・『韻略易通』

明正統七年(1442)完成。著作は蘭茂、雲南省出身、字廷秀、号止庵、和光道人とも呼ばれる。

声母は二十個(冰、破、梅、風、無、東、天、暖、来、早、従、雪、見、開、向、枝、春、上、入、一)。全濁声母が消失。知莊章三組が合流、疑母が声母を失いゼロ声母に合流などの特徴が見られる。

韻部は二十個。前十韻(東洪、江陽、真文、山寒、端桓、先全、庚晴、侵尋、緘咸、廉纖)は平上去入四声が揃い、後十韻(支辞、西微、居魚、呼模、皆来、蕭豪、戈何、家麻、遮蛇、幽樓)は入声なし。東洪韻の牙喉音に一三等の区別有り、江陽韻の牙喉音合口音に一三等の区別有り、元の魚模韻から分かれた居魚韻が呼模韻と同じ韻になく、蕭豪韻の一二等が合流、肴韻二等牙喉音が三四等と合流などの特徴が見られる。

声調は平声、上声、去声、入声の四調類であるが、全濁声母が消失したため、平声は実際に陰平、陽平との二種類に分かれている。つまり、表面上四調類となっているが、実際に五調類である。

(2)明代後期・『韻略匯通』

畢拱辰が明崇禎 15 年(1642)に「童蒙入門」の目的から、『韻略易通』を「分合刪除」して、編纂した官話の韻書である。畢拱辰は山東省出身、字は星伯。

声母は二十個(東、風、破、早、梅、向、暖、一、枝、開、冰、雪、無、人、

³⁵ 『音韻闡微』は、康熙 54 年(1715 年)に、李光地は勅を奉じて編纂しはじめ、雍正 4 年(1726 年)に完成した官修韻書の一つである。21 声母で、48 韻の中、入声韻が 13 個である。

³⁶ 葉(2001)による。

見、春、従、天、上、来)で、『韻略易通』と殆ど同じ、顕著な変化がない。知莊章三組が合流、「枝春上」三声母の後には洪音の韻母も細音の韻母も来ることができる、などの特徴が見られる。

韻部は『韻略易通』の二十個から十六個に変わった。真文と侵尋、先全と廉纖、山寒と緘咸は合流してそれぞれ一つになった。前六韻(東洪、江陽、真尋、庚晴、先全、山寒)が上巻となり、入声を有するが、後十韻(支辭、灰微、居魚、呼模、皆来、蕭豪、戈何、家麻、遮蛇、幽樓)が下巻となり、入声を持たない。

声調は陰平、陽平、上声、去声、入声の五つがあり、平声に陰、陽の区別がある。

『韻略易通』と比較して、声母はほぼ同じだが、韻母面の変化が大きい。-m 韻尾が-n 韻尾に合流、端桓韻が山寒韻に合流、西韻が居魚に合流、庚韻合口が東洪韻に合流、晴韻入声が真尋韻に合流、文韻入声が東洪韻に合流、端桓韻入声が江陽韻に合流などの特徴が見られる。また、『韻略易通』の入声韻には韻尾の対立がまだあったが、『韻略匯通』の入声韻尾は全て声門閉鎖音に合流した。声調面では、『韻略易通』は四声を維持し、平声はまだ明確に陰・陽二つの声調に分かれていなかったのに対し、『韻略匯通』は陰平、陽平、上声、去声、入声と五声調となっており、平声は陰平と陽平に分かれた。

(3)清代前期・『五方元音』

清代初期 1654-1664 年の成立。著者は樊騰鳳(1601-1664)。『五方元音』も『韻略易通』に基づき、これを刪、補足した官話の特徴を反映する韻書である。

声母は二十個(柳、匏、木、風、斗、土、鳥、雷、竹、虫、石、日、剪、鵲、絲、云、金、橋、火、蛙)。その内の云母は齊・撮両呼、蛙母は開・合両呼に対応、相補分布の関係をなし、実質一つのものであるため、実際は十九個である。全濁声母が消失、微母も消失して、影・喻・疑母の開口呼、合口呼の字と合流、知莊章三組が合流、疑母が消失、見組と精組の字に口蓋化の前兆あり、などの特徴が見られる。

韻部は十二個。著者は『韻略易通』の山寒、端桓、先全韻を天韻として統合、真文韻を人韻に改称、侵尋韻を人韻に統合、緘咸・廉纖韻を天韻に統合、江陽韻を羊韻に改称、東洪・庚晴韻を龍韻として統合、幽樓韻を牛韻に改称、蕭豪韻を癸韻に改称、呼模韻を虎韻に改称、戈何韻を駱韻に改称、遮蛇韻を蛇韻に改称、家麻韻を馬韻に改称、皆来韻を豺韻に改称、支辞・西微・居魚韻を地韻として統合している。前半の六韻(天人龍羊牛癸)に入声を配当せず、後半の六韻(虎駱蛇馬豺地)に入声を配当している。知照系三等の介音[i]まだ脱落していない。

声調は、上平(陰平)、下平(陽平)、上声、去声、入声の五調類。全濁声母大部分の上声字が去声に変化、入声が存続、などの特徴が見られる。

『韻略易通』の 20 韻部、『韻略匯通』の 16 韻部は、『五方元音』では 12 韻部に統合されたが、『五方元音』と『韻略匯通』の韻母体系の実際の差は大きくない。-m 韻尾の-n 韻尾への合流、端桓韻の山寒韻への合流などは、『五方元音』と『韻略匯通』が同じである。

大きく変化した点は二つあり、一つは、『韻略易通』と『韻略匯通』は洪・細、開・合の体系を維持しているのに対し、『五方元音』は撮口呼が揃い、韻母の開斉合撮の体制がほぼ整っている点で、もう一つは、入声韻は『韻略易通』と『韻略匯通』では陽声韻に配当されているのに対し、『五方元音』では陰声韻に配当されている点である。

このように、明代前期、明代後期、清代前期ではこの三種類の資料から見れば、声母面では、大きな変化が見られない。その共通点として、声母の面では、全濁声母が消失したことである。韻母の面では、知照組三等の声母の後に[i]がまだ来ることができたこと、-m 韻尾が-n 韻尾に合流したこと、入声韻尾の対立がなくなって声門閉鎖音に合流した変化が見られたことである。

葉(2001)がとり上げているこれらの資料から、明・清時代の北方音の概略が大体分かる。また、南京音(南音)を反映するものについて、理想的な資料が見つからないと言われている。なお、葉(2001)は明代後期の官話語音を反映する資料として『西儒耳目資』も挙げている。しかし、『西儒耳目資』の語音性格については、これまでの研究では見解に分岐がある。その音韻面の基本

的な特徴を挙げると以下のようになる。

(4)明代後期・『西儒耳目資』

明末完成。イエズス会宣教師・金尼閣(ニコラス・トリゴー)の著。序文は明天啓丙寅(1626)年に書かれた。ローマ字音注による中国語の音韻書である。

声母は二十一個。全濁声母が消失、知・莊・章三組に合流の現象があるが未完成、尖・团音の区別有り、少数の莊組の字が精組に合流、疑母が消失、微母が存在、音価が[w]であるなどの特徴が見られる。

韻攝が五十個。一部の韻攝に「甚、次、中」または「甚、次」の区別がある。入声韻が十七個。閉口韻が消失、韻尾[-m]が[-n]に合流、知・照系の三等介音[i]に脱落現象あり、などの特徴が見られる。

声調は、陰平、陽平、上声、去声、入声の五調類。入声は陰声韻に配置し、閉鎖韻尾で終わる。

『西儒耳目資』が反映する音韻体系について、詳細に分析しているのは王松木(2011)『「西儒耳目資」所反映的明末官話音系』である。王(2011)はこれまでの先行研究を検討し、声母、韻母、声調の特徴の分析を通して、同書と江淮官話との異同の特徴を以下のように挙げている。

声母面：

a 莊組三等の字は止撮合口、宕撮以外、[tʂ]組と発音する。その他、知・莊・章組の字は梗撮二等が[ts]組と発音する以外、全て[tʂ]組である。

b 邪母が無声有気の破擦音となる。

c 船・禪母平声の字の多くの場合は無声の摩擦音となる。北方方言ではこの両声母が無声破擦音となるので、同書の基礎方言は南方官話に近い。

韻母面：

a 韻母の数量が膨大で、江淮官話に近い。

b 山撮合口の一等字と二等字との対応が維持されている。

c 山撮重唇音の合口の字は合口のままで発音する。

d 深・臻両撮の字、開口洪音の場合、山・咸両撮の知・照組と合流した。

e 遇撮の知・莊組の字に対立がある。

声調面：

a 調類は五つあり、陰平、陽平、上声、去声、入声。

b 各声調の調値は早期の江淮官話と一致している。

その上で、明確に「《西儒耳目資》所展現的音韻特徵與南方官話(江淮官

話)的音韻特點相近似,而異於北方官話。(p.185)」と指摘している。本研究では、『西儒耳目資』を南音の資料として使用するのがほぼ問題ないと考えたい³⁷。

なお、葉(2001:175-176)は明代南音の特徴として四点を挙げている。(1)明代或いは明代前期、全濁声母はまだ消失していなかった可能性がある。(2)寒・桓両韻を区別している。これは元・明時期の官話音、北音、南音の共通現象の一つである。(3)一部分の-ŋ 韻尾は-n と混同している。例えば、an が aŋ と、en が eŋ と混同する現象がある。(4)入声調と入声韻尾が保存されている。これは南音の主な特徴であり、北音と異なっている。

この中、(2)は南・北音の共通的な特徴であり、また、(3)(4)は南・北音の違いで、『西儒耳目資』に見られない現象でもある。

南京音について、『江蘇省志・方言志』の概述に以下のように述べている。

明代初期建都南京,南京又成为帝王都邑,全国的政治经济文化中心,是当时全世界最大的城市,南京话也就因之取得官话的地位,也就是全国性的通语。…虽然明清以来,北京是政治经济文化中心,官话的语音以北京话为标准,成为普通话的前身。但是就汉语的传统和历史地理的地位而言,南京话始终有其重要的地位。(pp.4-5)

明朝は、洪武元年(1368)南京に建都して、永楽 19 年(1421)南京から北京へ遷都した。明朝が首都を南京に定めたことで成立し、明代から清代にかけて共通語として使われたのが南京官話である。その後、清代には北京音を基とする北京官話が主となっていった。しかし、明末清初の中国語の共通語が、南京官話から北京官話に変わったのがいつなのか、その時期は明確でない。こうした中国自体における共通語の変遷が背景として考えられるが、江戸時代の唐通事に使われている中国語はこれとどう関わるのか、これについて確認する必要がある。

³⁷ 同書の入声韻は陰声韻に併入されていることから、曾(2014:423-429)に同書が反映する音系に入声調しかない点は、入声調だけでなく入声韻尾も有する江淮官話との相違点の一つであるとの指摘がある。

4.2 唐通事が使用する中国語の種類

明末清初の当時、日本の窓口であった長崎では、貿易実務の通訳は来航した唐人が使っていた言葉を学習しなければならなかった。唐通事はその業務を果たすために、どのような唐話を学習し、また使用していたのであろうか。

4.2.1 歴史記録に見られる唐話の種類

当時の唐通事に使われている言葉について、林復齋³⁸によって編集された日本の歴史書『通航一覽』³⁹(第四)に以下のような記載がある。

一通事には多くの唐土の人の後胤あり、それをきくに、その元祖明末の乱をさけて、我日本に來りし者の孫、此通事となりたる有、さる故に今苗字河間、河副、彭城等もろこしの地名を稱するあり、また吳、陽、周、薛、鄭、蔡、楊、江、陳、魏など一字姓を号するあり、いつれの通事の家にかありし、その先明の宰相を勤めし者の子孫あり、今その家に、かの宰相の服を持傳へたるものありと、その外様々の唐品を所持せる者有といふ、崎陽隨筆、

唐大通事四人 穎川藤左衛門^{漳州口}、彭城仁左衛門^{福州口}、柳屋次左衛門^{南京口}、陽惣右衛門^{南京口} ○同小通事四人 林甚吉^{福州口} 林道榮^{福州口}、東海徳左衛門^{南京口}、穎川藤右衛門^{漳州口} 通事共口錢銀取候所は、唐船賣高百貫目充、唐人方より出之、小通事は大通事一人前を三人にて配分之、長崎覚書、……(『通航一覽 第四』「卷之百四十七 長崎港異國通商總括部十 ○通事役 唐方 p.170)

ここからは、本通事である大小通事に使われていたのは漳州・福州・南京との三種類の言葉であることが分かる。『唐通事会所日録』に本通事の記載について、「大通事」「小通事」で注しているため、直接言葉による通事の分類を知るのは難しいが、以下では、唐通事に関する歴史的な記録から、当時の内通事の言葉の種類が垣間見えてくる。

寛文三年(1663)から正徳五年(1715)までの長崎における唐通事仲間の執務日記である『唐通事会所日録』(巻四)の宝永二年十月廿七日の条に内通事の候補として、以下のとおり挙げている。

³⁸ 林復齋(1800年2月10日-1859年10月12日)は、江戸時代末期の儒学者、外交官。幕府朱子学者林家当主。復齋は号。岩瀬忠震、堀利熙は甥にあたる。(山本(1990)による「林復齋」を参考。)

³⁹ 『通航一覽』は、1853年に林復齋により編集された日本の対外関係の事例集。江戸幕府の命により大学頭林復齋らが編纂した1566年(永禄9年)から1825年(文政8年)頃までの対外関係史料集(350巻)。1853年(嘉永6年)の復齋による序文があり、この頃に完成されたと考えられている。(荒野(1993)による「通航一覽」を参考。)

南京方 緒方宇左衛門 加賀屋善次兵衛
柴田久右衛門 佐々木市平次
漳州方 蔡 權三郎 鄭 長左衛門
富永四郎左衛門 鄭 茂左衛門 (p.88)

この内容の直後に、置かれた内通事の数に関する記載もある。

…代役等立候儀不仕様▲可申付候旨被仰渡候、南京内通事五拾壹人、泉州内通事七十七人、都合百貳拾八人、此人数▲相究申候、…(p.89)

ここから、置かれた内通事は南京通事、漳州通事、泉州通事の三種類があったことが分かる。また、寛永三年八月十三日の条に、候補の内通事についての記載もある。

南京・福州内通事明跡五人御座候、此代り内通事組頭方△跡役願書差出申候、何長左衛門・山口善次郎・中山三郎右衛門・西川市松・太原甚右衛門、泉州内通事之内四人明跡御座候、此代り組頭方▲願書差出申候、鄭孫平次・葉吉十郎・平山吉郎平衛・王徳次郎・曾平七、…(p.157)

この記載によって、候補の内通事として、南京・福州・泉州(漳州)の三種類が置かれていたことが分かる。さらに、これらの内通事に必要とされた唐話の種類も南京話、福州話、泉州話(漳州話)であることが分かる。

また、『譯司統譜』(穎川君平編、1897年)の記載によれば、寛文六年に置かれた内通事小頭の内訳は、南京方2人、福州方2人、泉州方3人となっている。また、正徳三年正月廿三日の条に、置かれた内通事小頭の重任者と新任者の内訳は、重任者 泉州方2人、新任者 南京方2人となっている。こうして、置かれた内通事の種類から分かるように、必要とされている唐話は南京話、福州話、泉州話(漳州話)との三種類である。

さらに、篠崎東海(1687-1741)の『朝野雜記』⁴⁰の巻四に享保元年(1716)11月22日の長崎通事唐話会における会話の練習風景が記録されている。福州話、漳州話、南京話の三方言の問答が行われ、当時実際に練

⁴⁰ 『朝野雜記』は江戸時代中期の儒者の篠崎東海によって編纂された雑記録。また、篠崎東海について、江戸出身、名は維章、字は子文。通称は金吾。著作に「東海談」「故実拾要」など。

習されていた唐話が福州話、漳州話、南京話の三種類であったことを示している。

なお、各記録において、南京通事、福州通事以外、泉州通事か漳州通事かのいずれとなり、つまり、呼び方が不安定だが、泉州通事と漳州通事とは同じことである。これは、後述する森(1991)の「唐通事の間では、漳泉両音は別箇の方音とはみなされておらず(p.13)」との指摘と一致している。森(1991)は泉州話、漳州話について、「閩語の中でも閩南語に属し、両者の差異は小さく、相互に十分通じ合う方音である。また、江戸時代の長崎唐通事の間でも、両者は同一の方音と見なされていたようである(pp.14-15)」と述べている。即ち、泉州話、漳州話は一種類の唐話として分類されていたのである。

当時多種類の唐話が学習されている背景に、上述したように、内通事を含め、通事は唐話の種類に従って配置されていたことが挙げられる。こうして、通事は主に「漳州口、福州口、南京口」「～口」或いは「～方」との三種類の呼び方となっていたことから、要求された唐話も三種類存在していたことが明らかになった。

4.2.2 他の文献に見られる唐話種類

上記の史料以外、他の語音資料に、唐話の種類に関する記述も見られる。上記の歴史記録から置かれた唐通事の種類が分かった。が、通事に使われていた具体的な唐話の種類について、下記で無相文雄と新井白石による内容を取りあげて確認する。

まず、無相文雄は『三音正譌』⁴¹(宝暦二年(1752)刊)で、以下のように述べている。

華音者俗所謂唐音也。其音多品。今長崎舌人家所學有官話杭州福州漳州不同。彼邦輿地廣大。四方中國音不齊。中原爲正音亦謂之雅音。四邊爲俗音亦謂之鄉音。其中原所用之音有二類。官話之與俗話也。俗話者平常言語音也。官話者讀書音此之用。其官話亦有二。一立四聲唯更全濁爲清音者是。一不立入聲不立濁聲唯平上去唯清音者。謂之中州韻用爲歌曲音。二種通中原雅音支那人以爲正音。其俗話者杭州音也。亦曰浙江音。(〇十～〇十一)

⁴¹ 『三音正譌』は、江戸中期の浄土宗の学僧無相文雄(1700～1763)による漢字音の研究書で、呉音・漢音・華音の由來を説いたもの、二巻。文雄は『磨光韻鏡』『三音正譌』『和字大観抄』等を著する。

この文雄の記述によれば、長崎で学習されていた唐話には、官話・杭州話・福州話・漳州話との四種類のものがあるというのだ。

これに関して、有坂(1938)に次のような見方が示されている。

江戸時代に唐通事によって学習された支那方言の種類としては、白石の東音譜には杭・泉・漳・福を挙げ、文雄の三音正譌には官話・杭州・福州・漳州といつてゐる。然るに Kaempfer の「長崎の記事」(異國叢書本二〇四頁)や「日本人種起源論」(同六〇二頁)及び西川如見の増補華夷通商考(寶永五年刊)作例などに據れば、元禄寶永の頃、唐話を南京・福州・漳州の三つに大別する説が、現に支那人と接触しつつある長崎方面に行はれてゐたやうである。これは、思ふに、その相類似する所に従つて、杭州語を南京語の一種と見做し、泉州語を漳州語の一種と見做し、かくて當時我が國に知らされてゐた支那方言を南京・福州・漳州の三つに総括したものでなからうか。(p.238 注二七)

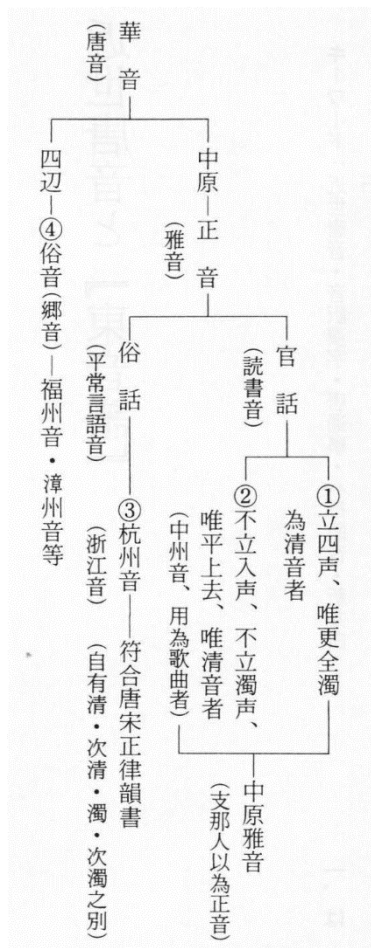


図 3

また、森(1991)もこの記述に着目して、その内容を図 3 に整理した上、さらに文雄の『磨光韻鏡・餘論』⁴²の記述を踏まえて、官話と杭州音の関係について、次のように述べている。

つまり、南京の語音は、文雄が正音と見なす杭州音であるというのである。南京では、俗話(平常言語音)としては杭州音が用いられ、公的な場では官話が用いられていたのであろう。現代の北京語と普通話との関係のようなものではなかったかと推測されるのである。(p.15)

官話と杭州話の関係については、唐通事子弟向けの唐話課本『小孩児』に次のような記述がある。

…打起唐话来、憑你對什麼人講、也通得了、蘇州、寧波、杭州、揚州、紹興、雲南、浙江、湖州、這等的外江人、是不消説、對那福建人、漳州人、講也是相通的了。他們都曉得外江說話、況且我教導你的是官話了、官話是通天下、中

⁴² 『磨光韻鏡・餘論』: 明治年間、文雄によるもの。『磨光韻鏡』も文雄によるもので、延享元年(1744)刊行された中国の音韻図「韻鏡」の研究書である。

華十三省、都通的、若是打起郷談来、這個我也聽不出、那个怪我不得、我不是生在唐山、又不是生成的、那个土語、各處々々不同、杭州是杭州的郷談、蘇州是蘇州的土語、這個是你們不曉的也、…(『小孩兒』六角恒廣 編・解題(1991)『中国語教本類集成』「復刻版」第 1 卷 p.33)

この記述は、唐通事の間で、官話が共通語、杭州が郷談(方言)で、両者が違うものとして認識されているということを示している。

次に、新井白石(1657-1725)による『東音譜』⁴³(1719 年)の「五十母字音釋」に記録されている発音の一部の例をここで取り上げたい。これらの発音について、新井氏は「東音即此間方言、今所用字、皆取旧事本紀古事記、日本書紀等所用而與本音相近者、杭泉漳福各州音並係長崎港市舶務都通事所填者。(『難船紀聞 東音譜』p.8)」と説明している。

ア 東音阿 杭漳並同 泉音鴉 福音亜 鴉亜音同
イ 東音伊 杭州同 泉福並音以 漳音移
ウ 東音于 泉音宇 杭漳並音烏 福音無
エ 東音曳 泉音同 杭漳並音爺 福音移
ヲ 東音鳴 杭漳福並音倭 泉音奥

(『難船紀聞 東音譜』pp.7-8)

新井白石が挙げている例によれば、当時の唐通事の中国語に「杭州音・漳州音・泉州音・福州音」の四種類があったことが分かる。しかし、森(1991)は記された音訳の特徴を通して、『東音譜』の「漳州音」について、以下のように述べている。

閩南語の特徴を備えておらず、同じ十八世紀初頭の岡嶋冠山(長崎出身)の官音とよく符合する。唐通事の間では、漳泉両音は別箇の方音とはみなされておらず、長崎では官話・杭州・福州・漳州の音が学ばれていたといわれる『東音譜』の「漳音」は漢音の誤りである。(p.13)

ここから分かるように、新井白石による「杭州音・漳州音・泉州音・福州音」四種類の唐音を「官話・杭州音・福州音・漳州音」に訂正している。

上記の文献に記載されている唐話の種類を整理すると、表 1-5 のようにな

⁴³ 新井白石著『東音譜』の「五十母字音釋」は、「長崎の唐通事が日本語の五十音を四種の漢語方音によって音訳したものである(森 1991:13)」。

る。

表 1-5 文献に見られる唐話の種類

趣旨	歴史記録	方言の種類
三種類	『唐通事会所日録』	南京話、福州話、(漳州話・泉州話)
	『譯司統譜』	南京話、福州話、泉州話
	『朝野雜記』	南京話、福州話、漳州話
四種類	『東音譜』【森(1991)による訂正】	官話・杭州話・福州話・泉州話
	『三音正譌』【無相文雄】	官話・杭州話・福州話・漳州話

ここから分かるように、唐通事に学習されていた唐話は、三種類と四種類に分けられている。このように種類が一致していないのは、なぜだろうか。その原因として、ここに存在している最も大きな分岐点は、「杭州音」にあることを認めなければならない。

4.3 杭州音の問題について

なぜ、分岐点が「杭州音」にあるのだろうか。これを解明するには、杭州音について検討しなければならない。では、当時の杭州音について、まず、先行研究の見方を見てみよう。

上記から分かるように、文雄は杭州音を浙江音とも言い、読書音である官話に対する俗話として認識している。また、謝(2016)は、下記の結論を述べている。

我们以《唐话纂要》《唐音雅俗语类》《四书唐音辨》《磨光韵镜》《三音正讹》为对象,分析了材料各自的音系性质和音系特点。通过研究,我们认为《唐话纂要》和《四书唐音辨》之“浙江音”的音系性质是一样的,是“浙江音”;《磨光韵镜》的唐音以“杭州音”为基础方言,但有认为理想化的成分。《三音正讹》之“俗音”反应了时音,用“俗音”替代《磨光韵镜》中相应读音后,我们就得到了文雄注“杭州音”,与《磨光韵镜》的“杭州音”相比,认为理想化的成分就大大减少了,更加接近当时的“杭州音”。

“浙江音”和文雄注“杭州音”有不一致的地方,但总体而言,文雄的“杭州音亦曰浙江音”是成立的。我们认为,文雄注的“杭州音”与朝冈春睡和冈岛冠山的“浙江音”一致的地方,反映了杭州话的实际发音。二者不一致的地方,可能是反映了语音现象处于变化当中,也可能说明文雄注的“杭州音”还是有拘泥于韵图语音的成分。(p.180)

ここでは、朝岡春睡による『四書唐音弁』の浙江音、無相文雄の「杭州音」を『唐話纂要』との対照を通じて、結果として、『唐話纂要』の発音は『四書唐音辨』の「浙江音」の性質と同じであるとしている。そして、有坂(1938)は、「杭州語」を浙江清商にとっての「吳方言の標準語(p.224)」とし、「官話に類似してゐるが、古の濁音をよく保存してゐる點を顯著な特色とする(p.225)」と指摘している。

また、『唐話纂要』に関する先行研究には、同書の本音を「杭州音」としている中田(1978)、中村(2012)、林(2012)等があり、これらは「杭州音」を浙江音即ち吳方言という見方をもっている。

当時の「杭州音」に対して、どのように扱うか、つまり、典型的な吳方言か、それとも官話の特徴を有する吳方言か、さらに官話かということが問題点である。即ち、『唐話纂要』の基礎方言に係わる重要なことなので、当時の杭州音

に対する理解は、重要なポイントとなる。

杭州音の特徴を検討している研究には遠藤(1989)、銭(1992)、王(2014)、謝(2016)等がある。遠藤(1989)、銭(1992)の共通点は現代杭州音の音系を列し、声母、韻母、声調などの詳細な音韻情報を整理し、同音字表を作成している点である。また、銭(1992)は25類別に分けた延べ4,239項目の語彙、普通話と異なる文法形式なども詳しく紹介している。謝(2016)は十八世紀文雄による杭州音と趙元任が1928年に記した杭州話との比較を通して、約200年の杭州音の語音変遷を検討し、結論として、次のようにまとめている。

…杭州话受周边吴语的影响,导致杭州话的官话特点消弱,吴语特点增强。至18世纪上半叶,杭州话还是分尖团的,还是知庄章尚未完全合并、保留鼻音韵尾、复合元音未简约化的官话色彩比较浓厚的方言。可能是在19世纪末20世纪初,随着周边吴语的语音发生变化,杭州话也加入了变化的行列,转变成吴语色彩更加浓厚的方言。
…(p.179)

つまり、杭州話は「(18世紀半ばまでは)官話の色彩が強い方言」から「(19世紀末～20世紀初は)呉方言の色彩がより強い方言へ」変化したのだ。王(2014)は杭州方言の音韻特徴と歴史的帰属を検討して、こう述べている。

…杭州宋时称临安,南宋时成为国都。南宋初,原北宋国都汴梁(今开封)一带的王室成员、文武官吏以及大量市民南下避难迁入临安,不仅带来了汴梁城市生活的各个方面,也带来了具有较高政治地位的汴梁官话—“汴音”甚至连街上小贩的叫卖声都是用的“汴音”。清时,八旗兵驻防杭州,“旗下营”分布在湖滨一带,又带来了北京官话的影响。有这样的历史,杭州方言带有官话的特点就是可以理解的了。(p.106)

歴史的な原因で、呉方言であった杭州音に変化がもたらされ、官話的音韻特徴を持つように変遷していったことが分かる。王(2014)は、杭州音の帰属を検討した結果として、次のとおり「呉方言」と結論づけている。

杭州方言具有吴方言典型的声母三分特点。旧文读中虽有一些能反映官话的语音特点,但重要部分却体现了吴方言的性质。从历史上看,南宋初年定都临安后,汴洛方言在城区成为官话方言岛,对周围吴方言有过影响。但杭州城区方言和周围的吴方言显然具有系统上的差别:浊声母已经清化,入声至明代并已派入舒声。由于吴方言

汪洋大海の長期包圍,社会政治経済情况的迅速变化,目前杭州一带已经无法见到这种浊音清化、入声分派的方言,“沐音”这一方言岛显然已归消灭。而城区和江干一带的方言没有差别,说明杭州方言早已从江干一带恢复分布到了城区。因此,目前的杭州方言不是“北方移民所操语言的后裔”,不是“沐音”演变的结果,而是“行人之旧音”的继承者。杭州方言虽然在历史上受到过“沐音”的重要影响,但无疑仍然是吴方言,不是官话方言。(p.113)

つまり、杭州音は吳方言の中の特殊な方言として、歴史的帰属の視点から、旧文語音に音韻的特徴上官話音系の特徴をもっているが、吳方言であると判定しているのだ。

以上の各研究から、唐話の種類としてどう位置付けるか議論がある杭州音は、当時では顕著な吳方言の特徴をもち、吳方言に所属していると考えられる。では、問題点となるのは、上述したように文献の仮名に「南京通事」、「漳州通事」、「泉州通事」などが見られているが、なぜ、四種類の唐話を学習していたのに、通事の中には、「杭州通事」が設置されていなかったかということである。これについて、上記の図 3 から明らかなおとおり、杭州音は官話の俗音で、つまり、「平常言語音」であると見なされていたことが理由となる。歴史的な帰属は吳方言であるが、官話の特徴をもち、通事の言葉として、南京通事の範囲に入ると考えられたということだ。なお、4.2.2 で挙げた有坂(1938)は「その相類似する所に従つて、杭州語を南京語の一種と見做し(p.238 注二七)」とも指摘している。

一方、「南京」という語について、古屋(2006)は明代来華宣教師の言う「南京」には、以下のような幅があったことを指摘している。

…宣教師の「南京」は、広義には明の南直隸⁴⁴全体つまり現在江蘇・安徽両省に当たる地域を意味し、狭義には応天府(ほぼ今の南京市)を指す。…同じナンキン(ナンキーン)が時に江蘇・安徽両省、時に南京市を指すとすれば、議論に際してどちらの意味に使っているのかを明確にする必要がある。(p.121)

つまり、「南京市」と「南京省(南直隸)」との二つの意味として使われたのであって、これに注意しなければならないということだ。『唐話纂要』などの唐話音と

⁴⁴ 古屋(2006:121)に「清代になり、南直隸は江南省と改名され、更に康熙四年に江蘇省・安徽省となる」とある。

関わる「官話音」、所謂「南京官話音」について、この「南京」の意味を十分考慮する必要もある。西川如見による『増補華夷通商考』(1708)の巻一の「中華十五省」には、明末清初の中国の行政地域について、「二京」と「十三道⁴⁵」を有し、「中華十五省」と総称されていたとあり、「二京」とは、「南京_{省又ハ直隸トモ}」「北京_{省又ハ直隸トモ}」と記載されている。「南京」は明末清初にあっては、「省又ハ直隸トモ」として考えておかねばならないのである。

さて、唐通事が使用する中国語の種類では、なぜ南京話と杭州話とが同じ南京通事として設置されたか、その理由として、当時の「南京」と「杭州」の関係、つまり、「南京」は現在の行政区域としての南京ではなく、江蘇、浙江、上海を含む「南直隸」(江浙地域)を指していた歴史的状況が関わっていたと考える必要がある。

⁴⁵「中華十五省」によると、「十三道」は「山東」「山西」「河南」「陝西」「湖廣」「江西」「浙江」「福建」「廣東」「廣西」「貴州」「四川」「雲南」の十三省を指す。その中、「浙江省」について、「城下杭州府ト云春秋時越國也南京同シキ上國ナリ……人物風俗南京に同、詞南京ニ替リナシ……此國海邊ニ津湊多所也故日本舩仕立来事最多シ今時舩仕立出シ来ル所ト左記之 寧波府…台州府…温州府…杭州府…」との記載がある。「福建省」について、「城下福州府ト号古南越也閩越ト云トモ此國也閩州ト云トモ皆福州府事也福建ハ海邊廣キ國ナリ……人物風俗南京ヨリハ少鈍ク賤ク見ユ衣服ハ替無シ詞此國ノロハ音律諸國ト差ヒテ通シ難シ南京口ト半分通シ半分ハ不通其語音皆鼻ニ入テナマレル調子也……舩仕出ス所ト如左福州府…泉州府…厦門…漳州府…安海…」と記載されている。

第二章

『唐話纂要』に関する先行研究と問題の所在

第一章で唐通事(岡島冠山)が使っていた唐話の種類を確認したが、本研究の対象である『唐話纂要』が記録している中国語音はその中のどれなのか明らかにする必要がある。本章では同書の仮名音注に反映された音韻的特徴について先行研究を整理することによって問題点の所在を明らかにする。

第一節 『唐話纂要』基礎音系に関する先行研究と問題の所在

上述したように、長崎唐通事が学習していた唐話は官話、杭州話、漳州話(泉州話)、福州話の四種類であったが、南京内通事であった岡島冠山の唐話学習の背景から分かるように、冠山が最初に習った唐話は杭州話であった。また、南京話も堪能であったことが推測される。これらのことから、岡島冠山が『唐話纂要』で使った唐話の可能性は、「南京官話音」と「杭州音」に絞られる。

『唐話纂要』の基礎音系については、これまで多くの研究がなされている。本研究の調査では、下記で整理するように、主要な先行研究の見方は大きく分けて、単一音系説と混合音系説との二種類になる。また、単一音系説の中では、呉方言杭州音説(呉方言説を含む)、南京官話説との二通りに分類できる。その他、基礎音系について断定的に言及していない幾つかの研究もある。

以下に、単一音系説、混合音系説の主張につき、それぞれ概観した上で、その問題点を整理する。

1.1 単一音系説

1.1.1 呉方言・杭州音説

まず、単一音形説に属する呉方言の杭州音説の先行研究を見てみよう。

第一章第四節の 4.3 ですで見たと通り、江戸時代に学習された唐話について、無相文雄による『三音正譌』では、「杭州話」を中原正音の俗話としている。『唐話纂要』の唐話に関して、唐話資料に反映した江戸時代中頃のハ行頭音の音価を検討した有坂(1938)は『三音正譌』を引用した上、以下のよう述べている。

…中川忠英が清俗紀聞(寛政十一年刊)に言へる如く、當時長崎へ来る清商は多くは江南浙江の人であったから、彼等の間に行はれた支那語は、當然呉方言であり、就中広く通用したものは呉方言中の標準語たる杭州語であつたことと思はれる。これ即ち彼等の平常言語の音たる「俗話」であつた。而も、杭州語の重要性は、ただに商用語としてのその使用範囲の廣いことのみ存したのではない。……その他、唐音和解・唐話纂要・唐音孝經・唐詩選唐音・南山俗語考等の音は、いづれも之

に屬する。その言語は官話に類似してゐるが、古の濁音をよく保存してゐる點を顯著な特色とする。(pp.224-225)

唐通事たちによつて學習された官話が、「四聲を立て唯全濁を更めて清音と爲る」南京官話であつたことは言ふまでもない。「唯平上去唯清音」なる北京官話の研究は、江戸時代には未だ盛でなかつた。)儒者の間の華音尊重思想が、正音を尚ぶ立場から、俗話よりも官話を重んじたことは當然である。その影響を受けてか、唐話纂要に於て俗話を採用した冠山も、唐譯便覽・唐音雅俗語類・唐話使用等になると、いつしか官話に轉向してしまつた。(p.225)

このように、有坂(1938)は、『唐話纂要』に記録した中国語音について「杭州音」で、濁音が保存されている點が特徴であると指摘している。さらに、杭州音は当時長崎に来ていた江南浙江の商人の中で広く通用したものは吳方言中の標準語でであると説明している。これまで「杭州音説」を支持している先行研究として中田(1978)、森(1991)、岡島(1992)、張(1998,2007)、岡田(2011)、林(2012,2013)、中村(2012,2015a,2015b)、謝(2016)がある。

その中で、『唐話纂要』と明樂指南書の『魏氏樂譜』を資料とし、特に『唐話纂要』二字話に出ている齒音と牙音の字に着目して、江戸時代における音注「ツ」と「キ」と中国の現代舌面音の変遷史との対応關係を検討したのが中田(1978)である。

「唐話纂要」の仮名で示された華音は、俗に南京音と称されている。しかし、實際は今の南京地方の音ではない。ただ、所謂「南京船」という昔の貿易船との關係で、当時、南京音と呼ばれていたに過ぎない。……

南京音の話された場所が挙げられているが、いずれも当時の浙江省の都市名であつて、現今の南京は含まれていない。要するに所謂南京音とは杭州を中心とした当時の浙江省地方の音を指しているのであり、むしろ今にして之を呼べば「江南音」とでも称する方が妥当である。(p.218)

その中で、『唐話纂要』の仮名で示された音は「杭州を中心とした当時の浙江省地方の音」と指摘している。

森(1991)は『東音譜』に掲載されている長崎の唐通事が日本語の五十音を四種の漢語方音によつて音訳したものについての研究の中で、前述した文雄による唐音の分類と岡島冠山の唐音との關係に触れ、『唐話纂要』の音注に対して、次のように述べている。

『唐話纂要』(享保三年、1718年重刊)の付音は、有坂秀世氏「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」によれば、杭州音であるとされている。しかし実際には、この『唐話纂要』の巻五所収の「小曲」の付音は、②の中州音(歌曲の音に用いられるもの)の特徴とほぼ符合するのである(ただし、この「小曲」の付音には「愁」を「ヅエ〇ウ」とするなど、杭州音が一部混入しており、純粋な中州音とはいえない)。つまり、この「小曲」を除いた箇所が③の杭州音(浙江音)の特徴と符合するものと言わねばならない。(p.14)

表 1 の「杭音」の唐音は岡嶋冠山『唐話纂要』(「小曲」を除く)の唐音であり、前述のように杭州音とされている。(p.18)

その中で、巻五の「小曲」の付音は文雄の言う官話讀書音の中の「中州音」の特徴にほぼ符合するが、それ以外の部分は杭州音(浙江音)の特徴に符合すると指摘し、有坂(1938)の「杭州音説」に修正の必要性があることを示した。これまでの研究で、「小曲」の付音がそれ以外の部分の付音と異なるということに着目したのは森(1991)のみである。但し、森(1991)では「小曲」の付音に対する具体的な分析が示されていない。

その後、**岡嶋(1992)**は、清濁の区別の有無という視点から、有坂(1938)の「杭州音説」を更なる詳細に分析している。岡嶋(1992)は、近世唐音資料を分類し、濁音を持つ『唐話纂要』を「俗音～浙江音系(p.95)」資料として分類されている。

岡嶋(1992)は、清濁の有無は杭州音か官話かを分けるポイントであるとの有坂(1938)の見方を支持する一方、清濁の区別のない官話系資料の中で、疑母、日母以外濁点の付されているものもあれば、『唐話纂要』など清濁の区別のある杭州音系の中には清音なのに濁音が付されているケースもあることを文献ごとに実例を挙げて、清濁の有り方が一様でないことを指摘し、原因について中国語の方言による変化の違い、他方言からの混入、音声面の聞こえなど複数の可能性を提示している⁴⁶。さらに杭州音では奉母[v-]と匣母[h-]がアヤワ行で表されていることに着目して「匣母奉母がアヤワ行音で表れていれば杭州音系の資料と見なすことができる」と述べて杭州音か官話かを分け

⁴⁶ 岡嶋(1992)は、濁声母なのに付音に濁点の打たれていない字もあることも指摘しており、「機会を改めて考察したい(p.95)」としている。

る基準になると述べている。その上で濁音を持つ『唐話纂要』を「俗音～浙江音系(P95)」資料として分類している。

中村(2012)⁴⁷は岡島冠山資料の発音について、『唐話纂要』の音を「浙江音(おそらく杭州音)とし、同書の濁声母の表記例を取りあげ、『唐語使用』にある例と比べて、『唐話纂要』に「濁音声母」の音注を持つ浙江音の特徴を有すると指摘している。中村(2012:16)は「杭州音」と断定していないが、中村(2015a:28)⁴⁸と中村(2015b:31)⁴⁹は明確に「杭州音」であると示している。中村(2015a)は同書にある「休要打郷談(イナカコトバヲ云フベカラズ)」「須要講官話(ミヤコトバヲ云フベシ)」の二つの項目を取りあげ、表記例と対応する音注について述べている。中村(2015b)にも同じ趣旨の指摘がある。つまり、中村(2012,2015a,2015b)も有坂(1938)と杭州音説を採っている。また、杭州音と官話音がよく似ていることについて、中村(2012:16)は二つの原因⁵⁰が考えられると説明している。

林(2012)は、『唐話纂要』(1718年)と『唐譯便覽』『唐語使用』(1726年)にある匣母字に着目して、三書の匣母の字に対する音注の違いを比較して、その音注は杭州話から南京話に変化したことを明らかにした。それに、『唐話纂要』の前五巻と巻六との音系に異なりがなく、同じ「杭州音」であり、『唐譯便覽』『唐語使用』が「南京音」である⁵¹としている。また、林(2013)には、『唐詩

⁴⁷ 中村(2012)には具体的に「江戸時代の唐話資料は当時の中国語を知る貴重な材料である。特に18世紀の岡島冠山は『唐話纂要』においては浙江音(おそらく杭州音)を記し、それ以降の著作では南京音を記しており、比較的に恰好の資料を提供している。…岡島資料をみて気づくことは、浙江音と官話音が非常に似ているということである。濁音声母の有無を除けば、瓜二つと言ってよい。(p.16)」と「具体的には『唐話纂要』の浙江音では「上ジャン」「別べ」と濁音になり、『唐語使用』の南京音では「上シヤン」「別ベツ」と清音になる。(p.16)」との指摘がある。

⁴⁸ 中村(2015a)は具体的に「…仮名で示された発音は濁音声母と入声を有しており、杭州音であるというのが通説である。実際には岡島冠山が長崎で耳にした杭州音などの南方音を体系的に整理したものということになる。これ以降に岡島によって作られた唐話書(『唐語使用』など)では全て南京音を用いることになる。おそらく若い頃に覚えて慣れていたのが杭州音、より広く通じるのが南京音ということなのであろう。(p.28)」と指摘している。

⁴⁹ 中村(2015b)は「岡島冠山(1674-1728)は『唐話纂要』など中国語会話テキストを数種刊行したが、最初の『唐話纂要』では片仮名で杭州音を記し、それ以降のテキストでは南京官話音を記した。(p.31)」と指摘している。

⁵⁰ 中村(2012:16)に「第一には、そもそも南京官話が南方雅音を母体として生まれたことである。南京や杭州を含む一帯に、知識人たちの話すゆるやかな共通語(ここでは南方雅語と称する)が存在していて、元代に南京の言語が北方音の影響で変容し、明代に官話となったと考えられる。第二に、官話の成立以降、南方牙音も少しずつ官話の影響を受け、その音形も官話に近づいてきたのではないかということである。」とある。

⁵¹ 林(2012)は具体的に「…1718年(享保三年,康熙五十七年)岡嶋出版了六卷本的《唐話纂要》,這是他編輯的第一本唐話學習教材,書中各種體例都是前無所承的獨創,每字右側標示的則是他學習華語首先習得的杭州話讀音。可是不滿10年工夫,1726年(享保十一年,雍正四年)岡嶋陸續出版《唐譯便覽》與《唐語使用》兩本與《唐話纂要》類型極相近的教材,可是每字字旁的標音,已經改用南京話作標音。…(p.191)」と指摘している。

選唐音』の軽唇音声母に対する音注に着目して検討した結果と関連つけて、『唐話纂要』の音系を「杭州音」であると別の角度からの指摘⁵²もある。

謝(2016)は同時代の南京官話音を記録した『唐音雅俗語類』、南京官話音と浙江音を併記した『四書唐音弁』、杭州音を記録した文雄の『磨光韻鏡』『三音正譌』との比較を通して『唐話纂要』の基礎方言が浙江音であることを特定した上、『方言調査字表』を用いて抽出法という手法で三十六字母、十六韻攝ごとに音注状況を調査して、18世紀の杭州音の特徴を明らかにし、現在までの変遷を考察している。

我们以《唐话纂要》《唐音雅俗语类》《四书唐音辨》《磨光韵镜》《三音正讹》为对象,分析了材料各自的音系性质和音系特点。通过研究,我们认为《唐话纂要》和《四书唐音辨》之“浙江音”的音系性质是一样的,是“浙江音”;《磨光韵镜》的唐音以“杭州音”为基础方言,但有人为理想化的成分。《三音正讹》之“俗音⁵³”反映了时音,用“俗音”替代《磨光韵镜》中相应读音后,我们就得到了文雄注“杭州音”,与《磨光韵镜》的“杭州音”相比,人为理想化的成分就大大减少了,更加接近当时的“杭州音”。(p.180)

このように、謝(2016)は、『唐話纂要』の語音は「浙江音」即ち「杭州音」であるとしている。

なお、上記以外、林(1988)は享保三年に再版された六巻六冊の増補本『唐話纂要』に収録した巻六『和漢奇談』のみの音注を中古音と対照し、その音系を中古音の声母と韻母の十六攝による「分韻表」にして整理している。同書の音系について、林(1988)は、

冠山の唐音表記には、『唐話纂要』に代表される前期と、『唐話使用』以降の後期とでは,中古全濁聲母の有無等,その表記法に違いが見られる。今回取り上げる「前期」表記法は呉語的な色彩の濃い興味深いものである。(p.173)

のように、全濁声母に対する表記の有無を取りあげ、巻六の唐音の表記法を通して、同書は「呉語」即ち呉方言の特徴を有することを示しているが、どの

⁵² 林(2013)は具体的に、「…由於岡嶋氏《唐話纂要》一書雖然依據的是杭州方言但全書入聲字都不標ツ尾…(p.58)」と指摘している。

⁵³ 文雄による『三音正譌』において、「俗音」は「福州音・漳州音」等、「俗話」は「杭州音」を指すため、上記の指摘にある「俗音」は明らかに間違っている。

地点の呉方言かについては言及していない。『唐話纂要』の基礎音系を解明するには貴重な基礎資料を提供している。

林(2012)は「還完患皇黄-ワン 回會-ワイ」との 7 例を挙げて、次のように指摘している。

…由此可以証明前五卷與第六卷標音相同,匣母字仍然標示沒有聲母的讀音。張昇余根據《唐話纂要》只有第六卷前有「有點四聲平上去入」的記載,判斷「第六卷與第五卷不是同一時間寫的、而且第六卷與前五卷的中國音源不同,是南京官話。」僅是想當然爾的推論,前述七個例證明張氏的說法不能成立。(p.178)

林(2012)のこの指摘は、前五卷と卷六の同じ音注で記されている 7 つの例を通して、張(1998)⁵⁴の説を批判し、林(1988)と同じ、前五卷と卷六との注音が同じ音系に属しているとしている。このように、『唐話纂要』増補本第六卷の音注も杭州音であることが明らかにされている。

岡田(2006)は、『唐話纂要』における唐音についても指摘し、岡田の指摘⁵⁵からは呉方言説を採っていると判断するのが妥当である。

また、『唐話纂要』の基礎音系について言及があるが、具体的にどこの発音なのかについて論じていない研究もある。その中、半濁音符の成立など多くの漢字音表記史の研究から岡島冠山の一連の書など唐話資料に多く言及しているのが沼本克明である。『唐話纂要』の見出し語を取りあげて唐話の性格を分析しているのが奥村三雄である。いずれも、有坂説の範囲を超えるものではない。

⁵⁴ 張(1998)は『唐話纂要』の前五卷の音注は清濁音の示し方から浙江音に近似すると指摘している。その上で、卷六が南京官話であると指摘している。また、張(2007)にもほぼ同じ指摘がある。

⁵⁵ 具体的に「これまでの研究では語彙に付された唐音表記が〈江南音〉であるものとされている。ただ、一口に江南音といっても広いし、呉語研究の視野で充分妥当性をもったものとしての精査が必要である。(p.550)」となっている。

1.1.2 南京音説

次に、南京音説の先行研究を確認する。前述した音注に対して分析をした先行研究と異なり、下記は、主に当時の歴史的時代背景を通して推定してきた説である。従って、これらの説は『唐話纂要』だけでなく、唐話資料全体を対象としたのである。

ほぼ唐話資料の全体像を示す『唐話辞書類集』に対して解題を与えている長澤(1972)がある。長澤(1972)は『唐話辞書類集(第六集)』に収録された『唐話纂要』に対して、以下のように解説している。

当時最も流行した唐話の教科書で、巻一から巻三までは、二字至六字の語句に、江南音を傍注し、和譯を下に加へ、巻三後半には常言(通行の格言)を録し、巻四は会話の発音及び譯文で、その本文の體裁は明治の急就篇の先駆ともいふべきものである。巻五は類書の如き内容分類の語彙を列し、末に時調(流行歌)に江南音を傍注して收め、最後に又、織物に關する語彙に發音譯語を加へてゐる。

その中で、語句、会話、語彙だけでなく、時調(流行歌)に傍注している音についても「江南音」であるとしているが、江南のどこかは明示していない。長澤氏の「江南音」について、松村(2011)は、次のように、江南には「蘇州、無錫、嘉興」を指す狭い意味と「南方」を指す広い意味があると指摘している

江南は字義的には長江の南岸地域を意味するが、実際には蘇州・無錫・嘉興などを指すことが多く、そうであれば、江南音は吳音を指すことになる。ただ長澤氏がそこまで考えていたかどうかは不明で、大雑把に北方ではなく、南方といった程度の意味で使っていた可能性もある。(p.101)

また、有坂(1938)と高松(1985)には「江南浙江」の記述があり、中田(1978)も「杭州を中心とした当時の浙江省地方の音を」「むしろ今にして之を呼べば「江南音」とでも称する方が妥当である」、浙江を「江南」としている。このように「江南」には様々なとらえ方がある。長澤氏の「江南音」に対する考え方を知る手がかりは岡島冠山の他の語学学習書に対する解説の中にある。岡島冠山の『唐音雅俗語類』と『唐譯便覽』の冒頭に「每字註官音并点四声(每字に官音を注し、併せて四声を示している)」の注記があり、当時の「官音」は六角(1988:393)が指摘したように南京官話音であると考えられる。これらの書の音

について長澤氏は「江南音」と解説していることから、その「江南音」は南京官話音を指すものと推測される。但し長澤氏の「江南音」は時代背景など一般論としての立場からのもので、注音を検討した結果によるものではない。

また、六角恒廣の『中国語教本類集成 補集 江戸時代唐話篇 全五巻』に収録している『唐話纂要』『唐譯便覧』『唐語使用』『唐音雅俗語類』『經学字海便覧』の五種類の唐話教科書の紹介等を通して、日本の中国語教育歴史を論じたものに、魯・呉(2009)による『日本漢語教育史研究 江戸時代唐話五種』である。同書に『唐話纂要』の音系を言及したのは趙(2009c)である。趙(2009c)は、以下のように述べている。

所谓“唐话”，又称俗话，是指当时相对文言的汉语口语，《唐话纂要》所采用的是清朝康熙年间通用的南京官话。(p.108)

その中で『唐話纂要』に記録している音について、「南京官話」であるとの見解を示しているが、何を踏まえての指摘なのか根拠を示していない。

1.2 混合音系説

次に、混合音系説の先行研究を概観する。

高松(1985a)は、近世唐音の中心的な音が南京音・浙江音系であることを確認し、「杭州音(浙江音)」を「呉語」(つまり、呉方言)、「南京音」を「南京官話」としている。その上で、右に南京音、左に浙江音が注されている『四書唐音弁』を対象に、声母の「匣母の場合」「全濁声母に対する清・濁対立関係」、韻母の「止摂開口の場合」「入声韻覚葉の場合」という両面におけるそれぞれ二項目を取り上げてこの両音形の異同を論じている。下記のように、引き合いとして出された『唐話纂要』について、次のとおり、南京音と浙江音が交ざっているものであることを指摘している。

…唐話関係書でも、その音系の明示なきものは、大抵、この立場に則り、江南浙北音で終始するかに思える。

その一証には、当代の大家と目される岡嶋冠山の場合を引き合いに出し得る。即ち、彼の著作には、その音系を顕示するものと、せぬものとの二類が存するのであるが、その後者では、全く南京・浙江両音の雑揉せるものとなっているのである(「唐話纂要」等)。その事は、前者の「注官音」とせるもの(「唐訳便覧」等)と対比してみれば、明確に認められるところである。(p.94)

上記 4 項目に対する検討の結果、『唐話纂要』の音注はほぼ全て浙江音の特徴を有することが判明した。官話音と浙江音がまざっている証拠として、匣母の音注は浙江音のアヤワ行の他に、官話音の書と同じハ行音になる例⁵⁶があることと、止摂開口字の音注は浙江音の「ツウ」になるのが通例だが、「致」のように官話音の書と同じ「チイ」になる例が存在することが指摘されている。

高松(1985a)は多くの単音説の先行研究より、比較的によくの新しい視点から『唐話纂要』の基礎音系の特徴を示している。その指摘には傾聴すべき点が多いが、『唐話纂要』には他にも呉方言の特徴がないか、更に考察する余地が残されている。「南京・浙江両音の雑揉せるもの」と説く高松(1985a)には、多くの呉方言の音韻特徴を有する例が挙げられているが、「南京音」の官話系音韻特徴をもつ例が少ないことから、「南京・浙江両音の雑揉せるもの」という混合音を唱えながら、官話音の音韻的特徴についての考察は十分とは

⁵⁶ 『四書唐音弁』の浙江音でも匣母がハ行音になる例があるという。

言えない。つまり、なぜ「両音の雑糅せるもの」になったかの原因が、顧みられていないのである。

なお、高松氏の『唐話纂要』に対する論及について、松村(2011)は、次のように述べている。

高松 1985,1985.7,1986 は漢字音の専門家の論考であるだけに微細な点まで議論を及んでいるが、仮名書きの原語に呉語を想定しているようなニュアンスが濃厚である。(p.101)

このように、高松氏の一連の論考から『唐話纂要』の基礎音系に対する見方は呉方言であると読み解かれている。

1.3 その他の説

上記の単一音系説と混合音形説以外は、以下の通りである。

楊(2007)は、清代漢語と日本の近世唐音との対照研究を行う中で、「南京音≠唐話≠南京官話(p.23)」という考えを示し、唐通事唐音の資料の一つとして『唐話纂要』を官話資料類に入れている(p.136)。

その中で、「黄檗宗唐音」と「唐通事唐音」が南方官話に括られる原音は「南京音」ではなく杭州と福州の読書音を基礎とする南方官話音⁵⁷であるとしているが、「南方官話音」の定義が不明である。さらに、「杭州の読書音」と「福州の読書音」は果たしてどんなものだろう。声母について、杭州音には全濁声母が現在まで残っているのに対して、福州音には全濁声母が存在しない。「n、l」の場合は、現在「福州音」では区別がないが、杭州音では区別している。このように、挙げられている音韻面の特徴も何を想定しているか不明である。

また、『唐話纂要』の基礎音系について、一部の先行研究をまとめているのは松村(2011)である。松村(2011)は、前に取り上げた林(1988)、高松(1985a,1985b,1986)、長澤(1972)、中田(1978)が言及した音系を全て「呉語」と理解している上、唐音を呉語とするこれらの先行研究に対して、同書のカ行の音注が多くなる牙音字に着目して、「中古の牙音(舌根音)が保たれているのは、客語・粵語・閩語であり、官話・呉語・湘語・贛語では舌面音化している。…カ行主としてキで写された唐話の原語を呉語と想定することはできない。(p.103)」と、現代諸方言との比較を通して、「呉方言説」に疑問を提示している。

⁵⁷ 楊(2007)は、日本の近世唐音の性質と特徴を以下のようにまとめている。

…たとえば、西川如見『増補華夷通商考』などの文献に「中華十五省で通行する官話があるらしい」と記載されている。西川の官話とは、当時言われていた「南京官話」をさしているが、実際、当時のいわゆる南京官話は、共通語としてのレベルに達しておらず、南方官話として存在していたにすぎないと私は考えている。黄檗宗唐音は鎌倉宋音との間に歴史的な伝承があり、それに唐通事唐音も介入し、南京音の影響は強かったとも考えられるものの、相対的には、その音系の声母は全濁音が殆どないこと、部分字は m 韻尾が残存していること、また、n、l は殆ど区別しているなどの要素を加えて考察すると、結局その原音は南京官話ではなく、杭州、福州の読書音に基づいた南方官話音であるということが分かった。そこで、本稿においては南方官話で概括されている。唐通事唐音の場合も、全濁声母などの特徴が存在しているため、南京官話とズレがある。したがって、本稿では唐通事唐音の原音についても南方官話で概括されている。(P253)

楊(2007)の「南方官話音」説は幅広いものを想定し、『唐話纂要』に限定したものではないので、「混合音系説」と見なすことはできない。

さらに、同書の二字話を整理し、音注を現代中国語の普通話のピンインと対照したのは岡田(1999)である。しかし、ピンインとの対照からでは音注に反映された当時の中国語原音の性格を明らかにすることができていない。

表 2-1 は先行研究を取りまとめたものである。以上の検討で明らかになったように、『唐話纂要』の基礎音系について、音注に対する検討を踏まえていないものを除けば、呉方言の杭州音であるということは明らかにされている。有坂(1938)以後「杭州音」が定説となっているが、その後の研究で「小曲」の部分は付音が杭州音ではないこと、清音なのに濁点が打たれている例もあれば、濁音なのに期待される濁点が打たれていない例が存在すること、明らかに官話音による混入が見られるが混入の理由が明らかにされていないことなど問題点の存在が明らかにされている。

表 2-1 基礎音系に関する主な先行研究

音系		先行研究	指摘
単一音説	方言説 吳方言・杭州音	有坂 (1938)	…吳方言中の標準語たる杭州語であった…その他、唐音和解・唐話纂要・唐音孝經・唐詩選唐音・南山俗語考等の音は、いずれも之に属する。その言語は官話に類似してゐるが、古の濁音をよく保存してゐる点を顕著な特色とする。…唐話纂要に於いて俗話を採用した冠山…
		森 (1991)	…この「小曲」を除いた箇所が③の杭州音(浙江音)の特徴と符合するものと言わねばならない。…
		岡島 (1992)	…俗音系の『唐話纂要』…
		張 (1998)	…前五卷的唐音,据音韵组成和清浊音的转写来看,近似浙江音,而不是南京官话。…
		張 (2007)	…卷六は語り文の書面語で、前五卷の唐音と異なつて、当時の官話音であるらしい。この本は作者の初期の作品で、同一書に俗語音(杭州音)と官話音が両方使われているので、注目されるべき書である。(p.10)…
		中村 (2012)	…特に 18 世紀の岡島冠山は『唐話纂要』においては浙江音(おそらく杭州音)を記し、…
		中村 (2015a)	…仮名で示された発音は濁音声母と入声を有しており、杭州音であるというのが通説である。…
		中村 (2015b)	…最初の『唐話纂要』では片仮名で杭州音を記し、…
		林 (2012)	…毎字右側標示的則是他學習華語首先習得的杭州話讀音。…
		林 (2013)	…由於岡嶋氏《唐話纂要》一書雖然依據的是杭州方言但全書入聲字都不標ツ尾…
		中田 (1978)	…杭州を中心とした当時の浙江省地方の音を指している…
		林 (1988)	…表記法は吳語的な色彩の濃い…
		岡田 (2006)	…一口に江南音といっても広いし、吳語研究の視野で充分妥当性をもったものとしての精査が必要である。(p.550)
		謝 (2016)	…我们认为《唐話纂要》和《四書唐音辨》之“浙江音”的音系性质是一样的,是“浙江音”;…
		沼本克明	有坂説をとっている
	奥村三雄	有坂説をとっている	
官話説	南京音	長澤 (1972)	…卷一から卷三までは、二字至六字の語句に、江南音を傍注し、和譯を下に加へ、…
		趙 (2009)	…所谓“唐话”,又称俗话,是指当时相对文言的汉语口语,《唐話纂要》所采用的是清朝康熙年間通用的南京官话。…
混合音説		高松 (1985a)	…全く南京・浙江両音の雑糅せるものとなっているのである(「唐話纂要」等)。…
その他	楊 (2007)	…その原音は南京官話ではなく、杭州、福州の読書音に基づいた南方官話音である…	
	松村 (2011)	…力行主としてキで写された唐話の原語を吳語と想定することはできない。(p.103)	
	岡田 (1999)	二字話の音注を現代中国語の普通話のピンインと対照した。	

第二節 『唐話纂要』の表記方式に関する先行研究と問題の所在

2.1 右肩点「°」について

先ず、近世唐音資料の仮名に右肩に付されている圈点(本研究では、右肩点と呼ぶ)に関する先行研究について概観する。

近世唐音資料における右肩点の使用について最初に具体的に言及したのは有坂(1938)である。有坂(1938)は黄檗唐音資料の『黄檗清規』に見られる「°」が付されている「如(イ°)」「遺(ミ)」「幽(ヒ-ウ)」などの例に着目して次のように述べている。

現代福州音は如 ü、遺 mi、次 ɕöü、幽 hiu である。イ°は ü の音を表す。又、ヒ-ウに於てヒとウとの間に挿入された短線は、それをヒュウと讀まず、ヒ、ウと分けて讀むべきことを示すものである。この種の記號については、寛文版慈悲水懺法の終に解説がある(p.235)

ここでは、イ°は福州音の ü、ヒ-ウは福州音の hiu を表わし、「°」及びヒとウの間の短線などの記號の意味は寛文版慈悲水懺法の終に解説があると指摘している。その後、奥村(1972)に黄檗版『観音経』の右肩点の使用状況に関する報告がある。

沼本(1990)は唐音資料の右肩点と半濁音符の関係についての論考の中で黄檗唐音資料におけるこうした右肩点を「特異な記号」として、上記『慈悲水懺法』の終わりにある唐音の仮名表記法「国字傍音の例」から「°」の用法について説明を引用している。

○凡旁音有用小圈於上者矣如イ°キ°字須撮唇舌居中而呼之 如サ°字音自齒頭而出猶合ツア二字而呼之也 如ソ°字音又自齒頭而出猶合ツヲ二字而呼之也 如せ°字音又自齒頭而出猶合チェ二字而呼之也 如テ°ト°字須合上下齒而呼之猶不正呼其體而唯呼其用也 如ハ°ヒ°等字先閉唇激而發音餘倣此……

この説明に対して、沼本氏は右肩点を「仮名通りではない別の発音を表す」のための記号であると解説し、その用法を、a イ°キ°の類、b サ°ソ°セ°の類、c テ°ト°の類、d ハ°ヒ°の類、e その他の5種類に整理している。その上で、黄檗唐音資料の実例を挙げて、aは曖昧母音[-ü],[-iü]、bは破擦子音[ɬ-],[ɣ-]、cは舌尖破裂音[ti],[tu]、dは両唇破裂音[p-]、eは曖昧母音[-ə]に対応す

ることを明らかにし⁵⁸、a~e の対応するこれらの中国音は当時日本語の音韻に存在しなかったものであると指摘している。その中で、特に「ハ°」「ヒ°」「フ°」「へ°」「ホ°」の「°」について半濁音符ではなく、あくまで全体としての注意記号の一部であると強調している⁵⁹。沼本氏はさらに心越系唐音資料と訳官系唐音資料にも右肩点の使用が見られるとして、資料ごとの使用例について確認している。その中で、訳官系の『唐話纂要』における使用状況について次のように述べている。

岡島冠山唐話纂要(享保三年〈1718〉刊)		
把ハ°ア、柄ヒ°ン、不フ°等	p 音	} 主
再サ°イ、讚サ°ン、早サ°ウ等	ts 音	
没モ°、根ケ°ン、客ケ°等	ə 音	
		稀 (p.6-7)

沼本氏⁶⁰のこの指摘に従えば、『唐話纂要』では、注意点としての右肩点は、ハ行に対するものは中国語の破裂子音 [p-]、「サ」に対するものは破擦子音 [ts-]を示すのが主要なもので、それ以外は用例が稀だが、中国語の母音 [-ə]を示すものがあるということになる。周知のように、中国語の破裂子音と破擦子音には無気と有気の対立があり、沼本氏の使用している記号は見る限り [p-]と [ts-]はいずれも無気音となっているため、ハ行と「サ」に対する右肩点は果たして無気音だけに対応しているのか、それとも有気音にも対応しているのかが明らかでない点がある。また、[-ə]に対するとされる例について「没」「根」「客」の他にもあると示唆されているが、どんなものがあるかも明らかにされていない。

沼本(1990)以外、『唐話纂要』における右肩点の使用例の存在について言及した先行研究として高松(1984)⁶¹、奥村(1989,1992)⁶²、肥爪(2005)、

⁵⁸ 奥村(1992)には黄檗唐音資料における注意点「°」の用法は『慈悲水懺法』巻末の説明や沼本(1990)より遥かに多いとの指摘がある。

⁵⁹ 沼本(1990)によると、「°」が半濁音符として定着した時期は1830~1840年頃である。

⁶⁰ 沼本(1997:1021)と沼本(2013:243-244)にほぼ同様な例が挙げられている。

⁶¹ 同じ「ツア」「サ°」について、高松(1984)は「破擦音の一つの清音 tsa は、原則として「ツア」と表記されることなくして、代わりに、「サ°」とされることである。…Tsa に限って、「サ」に注意点「°」を付すのである。…冠山は、後の書(唐訳便覧等)でも、その書法は継承する如くである。この「サ°」と「ツア」とは同音たることに疑いは挟みようがない。として、これはこの彼の一種の癖と今は見るのである。(p.12)」と指摘している。

⁶² 奥村(1989)は、取り上げた中国語「菠菜ハウレンソウ (p.499)」という項目に対する音注の右肩点について、注の12で、「サ°」の○は、ts(破擦音)を示すための符号。(p.503)」と説明している。奥村(1992)は「(6.1)資料毎の性格は詳述しないが、例えば同じ観音経でも㊦は㊦と異なり、左記の如く㊦に近い点もめだつ。…(iv)破擦音のサ°行表記が多い等々。」と指摘している。㊦は『唐話纂要』略称で、「サ行」につけられた「°」は「破擦音」と対応することが分かった。

張(2007)⁶³、村松(2011)⁶⁴、謝(2016)などがあるが、沼本氏の範囲を出るものはない。「ハ°」「ヒ°」「フ°」「ヘ°」「ホ°」および「サ°」と中国語の無気音・有気音との対応関係については、肥爪(2005)は「ハ°」「ヒ°」「フ°」「ヘ°」「ホ°」に着目して中世唐音との相違に関する紹介の中で、岡島冠山らによってもたらされた近世唐音の主な特徴の一つとして、「(中国語の)重唇音([p-], [p'-])字がハ°行で現れる(p.209)」と指摘し、「ハ°」「ヒ°」「フ°」「ヘ°」「ホ°」が中国語の無気音[p-]にも有気音[p'-]にも対応するとの見方を示している。「サ°」については、奥村(1992)は沼本(1990)と同じ「ts(破擦音)」の立場に立っているのに対し、謝(2016)は次のように述べている。

サ° 右上角的小圈“°”为类似于汉语表达送气的符号。(p.39)

ここでは、「サ°」の「°」は中国語の有気音を表す記号に類似するものとし、即ち有気音に対応するものとの見方が示されている。[-ə]に対応するとされる例については、沼本(1990)以降これについて言及した研究はない。

以上のように、『唐話纂要』の右肩点については、ハ行に対するもの、「サ」に対するもの、中国語の[-ə]に対応するとされるもの、の三種類の存在が明らかにされている。しかし、ハ行に対するものと「サ」に対するものの中国語音との対応関係については、前者には、[p-]と[p-],[p'-]、後者にも[ts-]と[ts'-]それぞれ二種類の見方が存在している。また、[-ə]に対応するとされるものについても前述した通り、「没」「根」「客」の他にどんなものがあるかが明らかになされていない。課題が残されていることは明白である。

⁶³ 張(2007:99)は、近世唐音に「純中国語音の記号」が散在しているとして、右肩点の使用例 8 つを挙げているが、その中には『唐話纂要』のものが含まれていない。

⁶⁴ 村松(2011:100)には、ハヒフヘホに付される「°」は「半濁点」、モ・ス・サに付されている「°」は「機能が不明」との記述があるが、奥村(2007)、岡田(1999)、林(1988)、高松(1985a,1985b,1986)を整理しているが、右肩点に言及した沼本(1990)などの先行研究を踏まえていない。

2.2 中間点「○」について

近世唐音資料の仮名と仮名の上に用いられる記号(本研究では、中間点と呼ぶ)は短線と圏点の二種類が知られている。黄檗唐音資料は短線、訳官系資料は圏点を使用するのが一般的である。以下ではこうした中間点に関する先行研究について概観する。

近世唐音資料の仮名と仮名の上に用いられるこうした記号に言及した先行研究に、主に有坂(1938)、沼本(1990)、張(1998,2007)、楊(2007)⁶⁵がある。最初に言及したのも有坂(1938)である。前述した有坂(1938)は、黄檗唐音資料における使用例について下記のように述べている。

…又、ヒ - ウに於いてヒとウとの間に挿入された単線は、それをヒユウと讀まず、ヒ、ウと分けて讀むべきことを示すものである。この種の記號については、寛文版慈悲水懺法の終に解説がある。(p.235 注二)

その中で「幽(ヒーウ)」についてヒとウとの間の記号「一」について、「ヒ、ウと分けて讀むべきことを示すもの」とし、記号「一」の意味も「°」と同様「寛文版慈悲水懺法」の終わりに説明があると指摘している。

沼本(1990:5)も寛文版『慈悲水懺法』巻末の唐音の仮名表記法「国字傍音の例」の記号「一」に関する説明「凡旁音兩字中間豎用一此一畫者開張上一字而呼之蹙聚下一字而呼之如ハ一ウ へ一ウ之類是也。」も引用し、この説明について、「仮名の中に「一」を加え、割る発音を表す」のように上記の有坂(1938)と同じ趣旨の解説をしている。

なお、このような「割る発音を表す」記号は近世唐音資料のみならず、蘭語資料⁶⁶でも用いられている。

⁶⁵ 楊(2007:43-44)も有坂(1938)と同じ主旨をもち、「○」について、記号「一」と同様、割り点として近世唐音に広く使われているとしている。しかし、楊(2007)には效撰の例のみを挙げている。

⁶⁶ 岡田(1991)は蘭語資料の『備忘雑抄』のオランダ語の仮名表記形式について、下記のように、森島中良による「題言」の記述を引用している。

…中良は「題言」の第二項をこのように書いた。

二、二字一音假名ハ「クワ」「チヤ」ノ如ク合書シ。引呼ハ「ハー」「マー」ノ如ク^{ヒキガナ}タテボツ^{ツメガナ}ノ如ク^{ツメガナ}ツツ^{ツメガナ}ノ如ク。ツツ小書ス。一言二語ノ物ハ。分ツに大圈ヲ用テシ。拾ヒ假名ニ読^{ヨミ}ベキ物ハ。「ハ○ウ」「カ○ウ」ノ如ク。字間ニ小圈ヲ施シテ。ホヲコヲノ音ト混ゼラシメ。一語ノ中ニ読^{ヨミ}アノモノハ。梅核ヲ黙ス。(p.90)

岡田(1991)は、「○」の使用意図についての森島中良のこの解釈に基づき、具体的な例を挙げて、「○」が「母音連続の語で長音化しない場合」の使い方であると説明している。

『唐話纂要』における中間点「○」の使用例について、これまで言及のある先行研究は、六角(1981,1988)、奥村(1989,1992)、松村(2011)などがある。

六角(1981:467,1988:392)は「好ハ○ウ」など、奥村(1989:498)も「交キヤ○ウ」とどちらも部分的ではあるが、「ア段+○+ウ」の例に触れ、「○」印の用法について、上記有坂(1938)及び寛文版「慈悲水懺法」の同じ立場に立っている。全体の使用状況については、奥村(1992)は次のように述べている。

…「好ハ○ウ、ロケ○ウ」の如き割ル注記がかなりあるが、黄檗資料と違ってイウ連母音の割ル注記が稀である。…(p.68)

ここでは、『唐話纂要』における中間点は「ア段+○+ウ」と「エ段+○+ウ」の注記が主で、「イ段+○+ウ」の音注が「稀」であることを具体的に指摘している。但し、「イ段+○+ウ」はどのようなものを指すか具体的な例を示していない。先行研究の中で、「イ段+○+ウ」の存在について触れたのは奥村(1992)のみである。張(1998:61-63)は、近世唐音で中間点が使用されているのは中国語中古音で複合母音を有する効摂と流摂に属する字であることを指摘し、張(2007)は近世唐音資料全般についての指摘の中で次のようにその具体例を示している。

効摂字：

毛マーウ/マ○ウ 道ターウ/タ○ウ 好ハーウ/ハ○ウ 高カーウ/カ○ウ
包ハ°ーウ/ハ°○ウ 騒サーウ/サ○ウ 小シャーウ/シャ○ウ
漂ピ°ャーウ/ピ°ャ○ウ

流摂字：

頭テーウ/テ○ウ ロケーウ/ケ○ウ 侯へーウ/へ○ウ 牧メーウ/メ○ウ
牛ニーウ/ニ○ウ 休ヒーウ/ヒウ⁶⁷ (pp.98-99)

この中に、「毛マ○ウ」「高カ○ウ」のような「ア段+○+ウ」「エ段+○+ウ」の例は『唐話纂要』にも存在するものだが、「牛」の表記は『唐話纂要』は「ニウ」で、「ニ○ウ」ではない。しかも後述するように『唐話纂要』では「牛」のみならず、それ以外の「イ段+ウ」の字にも中間点の使用が見られない。即ち「イ段+○+

⁶⁷ 『唐話纂要』は「ヒウ」である。

ウ」の例は『唐話纂要』に存在しないということである。同じ字は文献によって表記が違う現象およびその理由については張(1998,2007)に言及がない⁶⁸。

『唐話纂要』の中間点の使用例に言及した先行研究は他にもあり、高島(1991)⁶⁹は「ア段＋○＋ウ」の例に触れ、村松(2011)と中村(2015a)は「ア段＋○＋ウ」の他に「エ段＋○＋ウ」の例にも触れているが、全体として上に紹介した先行研究の範囲を出ていない。中間点の使用意図についても、表現の違いはあるものの、中国語の複合母音を割って発音することを注意するための記号であるとの認識で一致している。

このように、『唐話纂要』の中間点については、中国語の複合母音を割って発音することを指示することがその意図であることは明らかにされている。使用例も「ア段＋○＋ウ」と「エ段＋○＋ウ」2種類の存在が明らかにされているが、奥村(1992)の言う「イウ連母音の割ル注記」の例の確認が課題となっている。

⁶⁸ これについて、奥村(1992)には「これは≪長崎方言におけるイウ連母音の融合長音化が中央語より後れた≫ 為かとも考えられる」(p.68)との指摘がある。

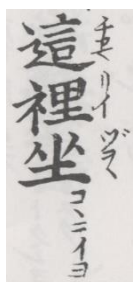
⁶⁹ 高島(1991:84)には「『ニヤ○ウ』『テヤ○ウ』の『○』は、介音(語頭子音と母音とをつなぐ音)をあらわす印ではないかと思う(あるいは日本語の「ウ」よりもせまい母音であることを示すか?)」と、文学研究の立場から介音との関連性についての指摘があるが、村松(2011)が「介音とは関係の無い符号(pp.104-105)」と否定した。大多数の用例からのこの指摘は成立しないことが明らかである

2.3 延音点「ゝ」について

『国語学大辞典』によると、「ゝ」については、

同じ文字が反復することを示す記号という。漢字・仮名に共に用いられるもので、「・」「>」「と」「ゝ」「く」などの称。起源は、中国における漢字の反復符号「と」に求められる。……片仮名の場合、古く、一字・二字以上の反復を問わず、「と」「ゝ」が共に使用された。但し、後には「ゝ」が普通に用いられるようになる。(p.484「重点」)

のように、繰り返し符号として現在まで使われている。



「ゝ」は日本語の書記体系では前の音節を繰り返す符号として用いられている。図4は『唐話纂要』の実例で、「這裡坐」という項目から分かるように、日本語の部分の「コゝニイヨ」でも、中国語音の表記「チェゝリイヅマゝ」でも「ゝ」の使用例が確認されている。但し、日本語については、「コゝ」「マゝ」などさまざまな音節を繰り返しているの

図4 に対し、中国語音の表記においてはこの「エゝ」「マゝ」などのように、使用はほぼ「ア」「イ」「ウ」「エ」「マ」の母音仮名の後ろに限定し、両者の使い方に違いが見られる。その理由は、日本語は多音節言語で、「ココ」のような同音反復のケースが多いのに対して、一字一音節の中国語では、日本語のように子音を伴った音節を繰り返す状況は存在し得ず、「ゝ」の使用が想定され得るのは母音のみの音節しかないからだ。中国語音の表記で「ア」「イ」「ウ」「エ」「マ」の後ろにしか「ゝ」が見られないのはその表れである。よって、「ア」「イ」「ウ」「エ」「マ」につく「ゝ」は通常の繰り返す符号として見られている。

『唐話纂要』では「ゝ」が付されているのは全て母音韻尾のないいわゆる無韻尾の陰声韻の字であることから、なぜ母音を繰り返す必要があるかという新たな問題が起きる。沼本(1992)が指摘したように、『唐話纂要』など訳官系唐音資料では無韻尾の陰声韻の字が全て母音を延ばした「長呼型」という形で表記されている。よって無韻尾の陰声韻に属するこれらの字は母音を繰り返すことによって、「長呼型」になったということが分かる。但し、母音を繰り返すのと延ばすのと、発音方法に違いがあるので、両者の不一致をどのように説明すべきかの問題が残る。

唐話資料における「ゝ」の使用に言及している先行研究として、湯沢(1972,1987)がある。中世唐話資料の代表としての『略韻』に対する考察の中で、湯沢氏は繰り返す符号「ゝ」と「ゑ」について次のように述べている。

『略韻』(室町末期か江戸初期以前) 紅 ウゝン 雄 ウゝン
『聚分韻略』(室町末期『静嘉堂本』) 紅 ウゝム 雄 ウゝウ
(湯沢 1972:62/湯沢 1987:442)

『略韻』の符号「ゑ」、これは、延音点であり、先行母音 u を延ばす旨を指示する。(湯沢 1987:117)

『静嘉堂本』で用いられている符号ゝは、右掲字音注から十分知られるように、その上字が必ずウであることと、『静嘉堂本』唐音注の大部分いなほとんどが中にウを含んでいることから、ウを繰り返す符号、すなわち踊り字と認められる。ただし、それが加点者においてウ専用のものであるのかどうかは不明。

『略韻』と『聚分韻略』において、声母部分転写に用いられたかなはほぼ同じである。すなわちこれは(1)と同様なことがらが、『聚分韻略』にも認められるということである。(湯沢 1987:443)

湯沢氏は、『韻略』と『聚分韻略』の「ウ」の後に用いられる「ゝ」と「ゑ」はウを繰り返す踊り字で、「先行母音 u を延ばす」延音点(仮称)であると説明している。

『唐話纂要』における「ゝ」の使用状況は湯沢氏によって明らかにされた『略韻』の「ゝ」の使用状況と同じで、即ち、どちらもいわゆる母音仮名の後に用いられているという点で共通している。よって、『唐話纂要』の「ゝ」も「先行母音を延ばす延音点」と見ることが可能ではないか。延音点と見なした場合、どちらも「母音を延ばす」ということで沼本氏のいう「長呼型」との間の齟齬が解消される。このように、『唐話纂要』の「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」の後ろの「ゝ」については延音点の立場から再確認する必要がある。なお、『唐話纂要』では僅か数例だが、「ルゝ」のように母音仮名でない仮名に「ゝ」が使用されている例が存在する。これらの例については先行研究に言及が見られず、別個の観点から検討する必要がある。

2.4 声調の表記について

2.4.1 声調点と四声点の場合

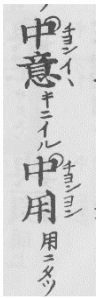


図 5

図 5 のように、『唐話纂要』を含む冠山の他の学習書の中、漢字の四角に大き目の「○」の記号の使用が見られる。但しそれが一部分の漢字に限られている。本研究ではこの記号を「声調点」と呼ぶ。

『唐話纂要』では、初版、再版を問わず第 1 巻から第 5 巻まで全て巻にわたって、こうした特定の漢字の四隅に声調を表す圏点が存在し、その数は延べで 100 例近くある。

このように、先行研究に言及のない初版本から存在する特定の字に対する声調表記の実態とその意図、再版本の冒頭からの声調表記のテキスト別存在状況およびその実態の解明は大きな課題であると言わざるを得ない。

「声調点」の他、同書では「四声点」も用いられる。以下の図は岡島冠山による主な唐話学習書にある声調についての記述を示している。

図 6、図 13-15 の通り、『唐話類纂』『唐話纂要』(前五巻)に声調に関する説明がないのに対して、図 8、図 9、図 11 の通り、『唐語使用』の各巻頭に「每字點四声」、『唐音雅俗語類』『唐譯便覽』の各巻頭に「每字註官音并點四声」と声調についての説明があり、「點四聲」の宣言通りに漢字の四隅に「平上去入」と四種類の声調を示す「四声点」が施されている。

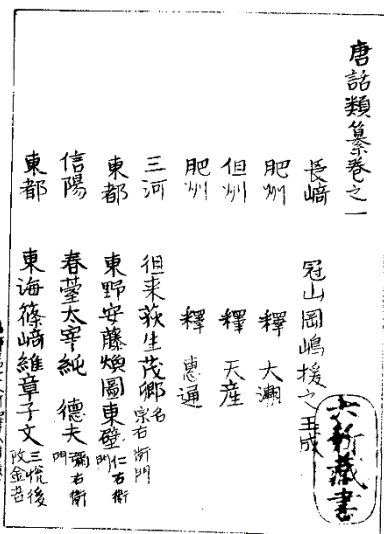


図 6『唐話類纂』(1)

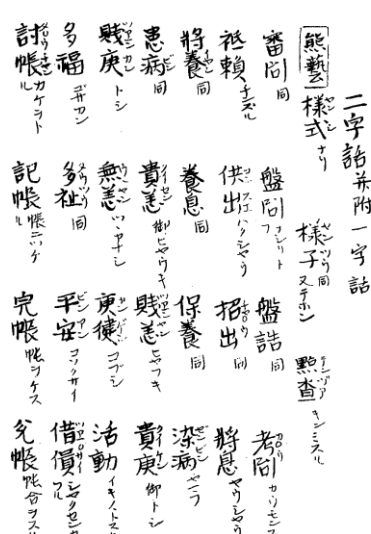


図 7『唐話類纂』(2)

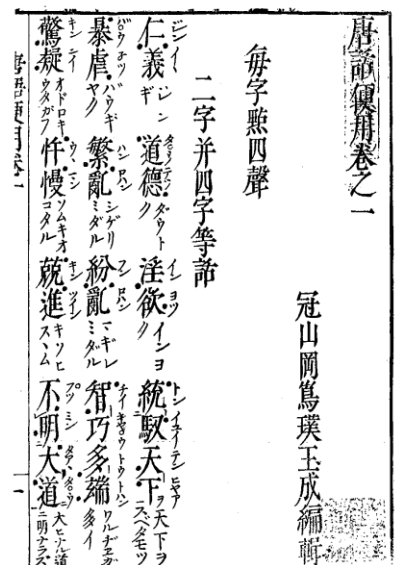


図 8『唐語使用』

唐音雅俗語類卷之一

每字註官音并點四聲

上平

公入

冠山 岡鳥援之 編輯

東海 篠崎維章

觀山 松宮俊仍 全校

圖 9『唐音雅俗語類』(1)

雅語類

隆世 自守天常 願安承教

信奉 如何而可 心無滯礙

祭信 其有彼願 與世疎濶

遊豫 肆方文章 爲入温醇

語識 爲入温系 爲入簡切

生際 特力而行 羞成見之

圖 10『唐音雅俗語類』(2)

唐譯便覽卷之一

每字註官音并點四聲

題用本形イロハ四十餘字以分其部而使看官便於覽之

上平

公入

冠山岡鳥瑛玉成編輯

圖 11『唐譯便覽』(1)

イ字部

○越更壯健飲羨飲羨イヨクオツレヤ ○幾時動身

打點停安了慶イシシクホツクナナル ○每失欲待

有懷有懷イモモカニナリ ○快些回來不可路

上在腹イノイデカエレ ○至今未有信耗好生憂念

今ニタヨリガナクニ ○詳細查察後一此差池

イカラシム ○聽了情出怨是有趣

イナクイ ○聲可罷

圖 12『唐譯便覽』(2)

唐話纂要卷之一

長崎處士岡鳥援之輯

二字話

太平イノ 享福イノ 快樂イノ 快活同上 爽快イノ

興趣イノ 有趣同上 娛樂イノ 興旺イノ 興頭同上

興昌同上 吉兆イノ 吉祥同上 吉瑞同上 吉凶イノ

圖 13『唐話纂要』初版五卷本「二字話」

唐話纂要卷之一

長崎處士岡鳥援之輯

二字話

太平イノ 享福イノ 快樂イノ 快活同上 爽快イノ

興趣イノ 有趣同上 娛樂イノ 興旺イノ 興頭同上

興昌同上 吉兆イノ 吉祥同上 吉瑞同上 吉凶イノ

圖 14『唐話纂要』再版六卷本「二字話」

唐話纂要卷之一

長崎處士岡鳥援之輯

二字話

太平イノ 享福イノ 快樂イノ 快活同上 爽快イノ

興趣イノ 有趣同上 娛樂イノ 興旺イノ 興頭同上

興昌同上 吉兆イノ 吉祥同上 吉瑞同上 吉凶イノ

圖 15『唐話纂要』再版影印六卷本「二字話」

唐話纂要卷之六

有點四聲 上平 去入

孫八救入得福

谷在具隨有孫八者努力邁入遊俠自得後有事

故而彼官逐放遂爲干隔滲漢而流落京師旅宿

於五條橋邊賣烟爲生每有少許錢鈔則沽酒邀

衆定欲盡醉未嘗有顧後窺前而拘于小籠也時

值七月十二夜孟蘭盆家家張燈處處作戲若男

圖 16『唐話纂要』再版影印六卷本「卷六」

図 16 のように、卷六の卷頭に「有點四聲」との説明があり、声調の「平上去入」の表記位置も漢字の四角となっている。この「有點四聲」について、松村(2011)は以下のように述べている。

…卷五までは声調に関わる記載は一切ないが、卷六の漢語原文の漢字には各漢字の四隅に点を打って示してある。しかし唐音の声調を観察して記述した結果ではなく、広韻のそれをしめしたものである。…(p.100)

『唐話纂要』では常言の項のみならず、大半の音読仮名書きには声調は顧慮されていない。唯一の例外は再版の第六卷に含まれる読本であるが、ここでは漢字の四隅に四声点を打って声調の指示を与えている。しかしこれは中古音の声調を示したものであり、現実を反映したものではない。…(p.102)

この記述には、中古音の声調との関連はともかく、『唐話纂要』の前五巻と第六巻における声調記載状況の違いについての先行研究のとらえ方がよく示されている。謝(2016)⁷⁰も卷六の声調音注にも言及し、卷六の音注が中古音の四声調と殆ど一致していると指摘している。

本研究では前五巻の内容が研究対象となっているので、卷六にあるこうした四声点を検討しない。

また、『唐話辞書類集』所収の『唐話纂要』再版六巻影印本の「二字話」の冒頭から一部の漢字に対しても四声点が付されていることが確認された。図 16 のように「四声」を示す記号は卷六の小さな白丸「○」で記されているが、図 13-15 のように同書の前五巻に見られない。また、図 15 のように、再版の六巻本の「二字話」の最初の一部では「○」でなく、読点のような「、」である。こうした黒い「、」の存在について、先行研究には言及が見られない。なお、本研究では、この「、」を「●」と表記する。

このように、一部の再刊本六巻本の第一巻では冒頭からの数ページにわたって、四声点が施されているということが判明されたため、声調の音注に対する先行研究の把握は十分とは言えない。

⁷⁰ 謝(2016)は巻一から巻五までの内容に声調が付されていないとも指摘している。

2.4.2 入声字の韻尾表記について

『唐話纂要』は特定の字を除き、声調を注記していない。従って、入声であるかどうかは入声韻尾の表記から判別するしかない。同書の入声韻尾の音注の有り方に一早く注目した有坂(1938)は、『唐話纂要』を含む近世唐音の入声韻尾の表記方法について以下のように指摘している。

(注 32 黄檗唐音の場合)入聲の音尾(支那原音では聲門閉鎖)を表すのに、黄檗清規はツを用ゐ、慈悲水懺法・慈悲道場懺は假名の右下に小圈を附し、千佛名經は假名の直下に小圈を附し、禪林課誦は音尾を全然表記してゐない。(p.239)

(注 34 心越系唐音の場合)入聲の音尾(支那原音では聲門閉鎖)を表すのに、壽昌清規は假名の直下に小圈を附し、琴學入門は音尾を全然表記してゐない。兒島祺校訂の琴譜では、或は之をツで表し、或は全然之を表記してゐない。…(pp.239-240)

(注 35 訳官系唐音の場合)入聲の音尾(支那原音では南京・杭州共に聲門閉鎖)は、唐話纂要では全く之を表記せず、唐譯便覽・唐音雅俗語類・唐語使用ではツを以て表記してゐる。唐音和解では、多くは之を表記せず、稀にツを用ゐてゐる。四書唐音辨ではすべてツで表してゐる。唐詩選唐音では、或はホツ(復)ハツ(發)の如き表記法を用ゐ、或はホ(復)ハ(發)の如く全然之を表記してゐない。(p.240)

その中で、岡島冠山の語学学習書において、『唐話纂要』の入声韻尾は表記せず、他の異なっていることを明らかにしている。

有坂(1938)の後に、『唐話纂要』の入声について言及した研究として六角(1977⁷¹, 1988⁷²)、高松(1985a⁷³, 1986a⁷⁴)、森(1991)、沼本(1997)、林

⁷¹ 唐通事の唐話教育を検討した六角(1977:467)は、『唐話纂要』の表記例として、「納-ナ」「日-ジ」「黙-モ」を挙げ、「入声音のつまる部分(韻尾)を表示できなかつた。」と指摘している。六角(1977)の取りあげている例は『唐話纂要』にあるが、「黙」字は3例あり、対応する音注は「モ」でなく、「モ°」であり、同書の巻六に2例あり、ともに「モ°」となっている。

⁷² 六角(1988:392)は、『唐話纂要』をはじめとする冠山の唐話学習書について、「納-ナツ」「日-ジツ」「幅-ホツ」を挙げているが、『唐話纂要』に見られないものである。

⁷³ 高松(1985a:106)は、『四書唐音弁』における入声の覚葉兩韻の関係に着目して、南京音では葉韻が覚韻と同じ「-ヨツ」になり、浙江音では葉韻が「-ヤツ」で覚韻と合流しないのは南京音と浙江音の音韻面の違いを反映するものであると指摘する上、『唐話纂要』の葉韻には「-ヤツ」の方の用例が混在して覚韻と合流していないことを述べ、冠山の唐話学習書の違いによって覚葉二韻の入声字に対する音注に区別が存在していることを示している。冠山唐話学習書について、「-ヨツ」と「-ヤツ」の表記は資料によって異なり、どのように区別しているのかに問題があり、例えば、『唐語使用』に「-ヤツ」表記も見られる。また、『唐話纂要』では、入声韻の字に対して、「ツ」で終わる音注の例は「ワツ-襪」「イツ-鷓」2例しかなく、これ以外はわずかの一部の漢字は長呼型音注も存在している。その他の殆どは短音節型音注、つまり「ツ」が付かないものとなっている。即ち、「ヤツ」という音注は『唐話纂要』では存在していない。もし「ツ」を無視してみると、『唐話纂要』では覚葉兩韻に対して、前者が「ヨ」、後者が「ヤ」で区別され、「ヤ」が吳方言の特徴として混入されていると考えられる。

⁷⁴ 高松(1986a)は『四書唐音弁』『唐話使用』などを踏まえ近世的唐音の音形について考察する中で入声に触れて、「我が方では、『ツ』で以て表記することもあるし、無表記のこともある…(p.18)」と様々な形があ

(2012,2013⁷⁵)と中村(2015a⁷⁶,2015b⁷⁷)、謝(2016⁷⁸)等あり、いずれも有坂(1938)の範囲から外れていない。

沼本(1997)は、唐話資料におけるの入声字の表記法と無韻尾の陰声韻の字の表記法との違いに着目して、入声字は短音節型音注、陰声韻の表記字は長呼型音注であるとして、正確に書き分けていることを論じて、このことは当時の日本語は音節の長短を厳密に区別するモーラ言語であったことを表していると主張し、次のように述べている。

尚、言うまでも無い事乍ら、現代北京語では入聲音は消滅しているが、ほぼ三百年前の唐音では入聲音がまだ痕跡的に残っており、それを、我が唐話資料では「作ツ。」「惑ホ○」の様に假名の右下又は眞下に「○」を加えて示すもの(慈悲水懺法等)、假名「ツ」で示すもの(觀音經天和三年版等)、全く表記しないもの(琴譜、譯官系資料の全て)の様に方法は區々であるが、書き分けている。即ち唐音の中國原音の入聲が短促音節であったことが日本側の資料によって確定出来るし、また逆に當時の日本語が音節の長短を確かに厳密に音韻論的に區別するものであったことが知られるのである。(p.19)

その中で、『唐話纂要』を含む訳官系唐音の入声韻尾が無表記であることに触れている。但し、前述の有坂(1938)が明らかにしたように、訳官系唐音の中では、『唐話纂要』とそれ以外が違い、完全に表記しないのは『唐話纂要』だけである。従って、訳官系唐音の全てが表記せずとするその指摘は事実誤認と言わざるを得ない。

森(1991:19)には『唐話纂要』の入声韻尾が區別されていないことは杭州音の入声韻尾が微弱だったことの表れとする趣旨の指摘がある。

林(2012:190-192)は、「匣母入声字標音対照表」に『唐譯便覽』『唐語使用』と『唐話纂要』の入声字を集計し、前兩者⁷⁹では「ツ」となるが、『唐話纂

ることを述べている。書名が挙げられていないが、「無表記」は『唐話纂要』を意識したものと考えられる。また、各種唐音資料における入声韻尾の表記状況を明らかにしている有坂氏の研究を挙げて紹介している。

⁷⁵ 林(2013:48,58)にも、『唐話纂要』の入声字について、無表記であるとも指摘している。

⁷⁶ 中村(2015a:28)は同書の入声字「喫(キ)」「只(チ)」と非入声字「氣(キイ)」「你(ニイ)」の例を挙げて、入声の字が「無標」という表記状況を指摘している。

⁷⁷ 中村(2015b)も入声字の表記例を挙げ、「入声の表記法は、『唐話纂要』では無標(非入声で母音を重ねる)、『唐語使用』では「ツ」を付す。(p.31注1)」とのように、入声字に対する表記法について説明し、他の資料との違いについても言及している。

⁷⁸ 謝(2016)は、「在入声的注音方式上,《唐話纂要》的入声字没有 ts 的标记;(p.94)」と指摘し、同書の入声字に対する音注に「ツ」が記されていないとしている。

⁷⁹ 林(2012)は入声韻尾の対立を失った状況を踏まえているもので、対立を失ったからこそ、彼のいう可能性が生まれる。無論彼の言っていることは一般論としては問題がない。

要』の計 3,180 個の入声韻の字の中に、匣母の字が 86 個で、入声韻尾の表記が全くないと指摘している。そして、下記のように、『唐話纂要』に無表記の現象の原因について、匣母の字の音注は杭州音を参照しつつも当時長崎で次第に重視されはじめた北方官話の入声韻尾のない発音を無意識に記載したと推測している。

由此可見南京官話與福州話、漳州話,在唐通事三種語言中,有其特殊的獨立地位。或許如同今日部分地區的南京方言,已有向北方官話靠攏的意味。如果當時狀況也相似的話,那麼岡嶋記載《唐話纂要》の入聲字沒有塞聲韻尾の標示,是否在全書匣母字以杭州話為標音參照的同時,也無意中記載了當時可能剛在長崎逐漸被重視的北方官話沒有入聲韻尾的讀音。(p.192)

同書では、官話音に基づく「小曲」には、「六-リウ」「玉-イユイ」のような北方方言の反映と思われるような例が存在する。入声字は北方官話では開音節の発音に変化したため、「六」「玉」のように長呼型音注になることが予想されるが、現に同書の入声韻字は全て短音節型音注になっている。よって、入声字に対する「無表記」は北方方言の混入要素とは考えられない。

上述したように、同書の入声の字に対する音注について、有坂(1938)をはじめ、先行研究では同じ「無表記」であることが明らかにされている。本研究の第三章第四節 4.2 の集計結果によれば、「ツ」の表記は極めて稀であるが、その存在が確実である。こうした「無表記」の現象について、森(1991)、林(2012)は理由を与えているが、本研究では同書の入声の字に対する短音節型の「無表記」の音注と「-ツ」の音注は元の入声韻尾が声門閉鎖音に合流していたことを反映すると考える。

第三節 音注の音韻面の特徴に関する先行研究と問題の所在

この節では、『唐話纂要』の仮名音注が反映する音韻面の特徴に関する先行研究を概観し、問題点の所在を明らかにする。

『唐話纂要』の仮名音注が反映する音韻面の特徴を知るには、基礎作業としては、まず音注と中古音との声類・韻類別の対応関係を整理しなければならない。林(1988)は増補版の第6巻に含まれている全ての字の声類・韻類対照表を作成している。謝(2016)は対照表ではないが、全6巻の声母・韻摂ごとに整理した対照の結果を論述の形で示している。

音注が反映する音韻面の特徴に関する研究は、有坂(1938)に始まり、これに続くものとして、奥村(1972,1992)、中田(1978)、岡島(1987,1992)、六角(1988)、高松(1985a,1985b,1986a)、肥爪(2005)、村松(2011)、林(2012,2013)、謝(2011,2016)、中村(2015a,2015b)などがある。これらの先行研究が着目して考察したポイントおよびその結果は表2-2と表2-3にまとめた。

その中で、先行研究が着目し、議論の対象となったものは以下のように整理する。

3.1 先行研究の整理

3.1.1 声母面

(1) 全濁声母

全濁声母を維持するのは呉方言の最も代表的な特徴であり、これを維持するか否か、即ち音注に清濁の違いの有無は呉方言か否かを判断する決定的な手掛かりとなる。こうした清濁の有無に着目した先行研究は有坂(1938)、岡島(1992)、高松(1985a)、謝(2011,2016)などがあり、清濁の違いは有りということで一致している。

(2) 奉・微・非三母の相関

奉母[v-]の字の音注がワ行とハ行に分かれ、前者は微母[mj-]のワ行、後者は非母[f-]のハ行の音注と混同している。こうした現象の説明が問題となっている。これに関連する先行研究として、有坂(1938)、高松(1985b)、林(2013)、謝(2016)などがあり、見方が分かれている。

(3)舌上音・正歯音

舌上音と正歯音は二等韻とも三等韻とも結合するが、二等韻に対応する破擦音にはチ・ツ二種類の音注、正歯二等の摩擦音にもシ・スの音注が見られる。これに関する先行研究はとして、前者に謝(2011,2016)、後者には高松(1985a)などがある。

(4)日母

止摂開口の日母(二、耳)の音注ルウ(ルㄨ)が反映する原音の音価について複数の見方が存在する。これに関する先行研究に松村(2011)、謝(2016)などがある。

(5)口蓋化

牙・喉音[k-][k'-][x-]と精組[ts-][ts'-][s-]が前舌狭母音[i][y]の前で口蓋化して[te-][te'-][e-]に合流するのは近代漢語の声母面における最大の音韻変化である。こうした現象があるかどうかに着目した先行研究に中田(1978)、中村(2015a)、謝(2011,2016)があり、口蓋化の現象が存在しないことで一致している。

(6)匣母

匣母[h]の音注はハ行、アヤワ行と大きく二種類に分かれている。その理由について論考した先行研究には、有坂(1938)、高松(1985a)、岡島(1992)、謝(2011,2016)、林(2012)などがあるが、見方が分かれている。

(7)疑母

疑母[ŋ]の音注はガ行、ナ行、アヤワ行と複数に分かれている。これに関連する先行研究は高松(1985b)、岡島(1992)、肥爪(2005)、謝(2011,2016)などがある。呉方言の特徴の反映で一致している。

(8)禪母など歯音系全濁声母

禪母など歯音系の全濁声母の音注はザ行とダ行二種類の音注が見られる。これに着目した先行研究は高松(1985a)である。

3.1.2 韻母面

(1) 止摂三等舌歯音

止摂開口三等の舌歯音の音注は主として「-ウ」だが、「-イ」の例も一部に見られる。これについての研究として高松(1985a)、謝(2016)がある。

(2) 蟹摂四等韻

蟹摂開口の四等韻の母音に対して「-イ」「-エ」二種類の音注があり、これに関連する先行研究として中村(2015b)、謝(2016)がある。

(3) 覚・薬両韻について

官話系資料で違いが見られない覚・薬両韻は『唐話纂要』では音注のがある。これに着目した先行研究として高松(1985a)、謝(2016)などがある。

(4) 鼻音韻尾

音注に鼻音韻尾[-n]と[-ŋ]の違いが見られない。これを指摘した先行研究には六角(1988)、謝(2016)があり、見方が一致している。

(5) 入声韻尾

音注では入声韻尾が無表記になっている。先述した通り、これを指摘した先行研究は、有坂(1938)、六角(1977,1988)、高松(1986a)、森(1991)、林(2012,2013)、沼本(1997)、謝(2016)などがあり、見方が一致している。

3.2 先行研究に見られる問題点

以上のように『唐話纂要』の音注が反映する音韻的特徴はすでに多くの先行研究によって取り上げられ、検討を重ねられてきた。中には一致した結論に至ったものもあるが、結論に至ったが課題が残されているものや複数の見方に分かれたまま、結論に至っていないもの、或いは明らかな誤認と思われるものもある。以下では、声類面と韻類面の問題のある点について、先行研究の議論を整理した上、明らかにしていく。

3.2.1 声母面

(1) 全濁声母について

1.1.1 で挙げたように、有坂(1938)は『唐話纂要』の基礎方言が杭州音であると上、その特徴について次のように述べている。

…その言語は官話に類似してゐるが、古の濁音をよく保存してゐる點を顯著な特色とする。(p.225)

その中で、『唐話纂要』の音注において清濁の区別があるということを示している。その後の岡島(1992)、高松(1985a)と謝(2011,2016)、中村(2012)も同じ立場を有する。

岡島(1992)は、『唐話纂要』を含む「清濁の区別ある資料(俗語～浙江音系)」には、清音なのに濁点が付されている字もあれば、濁音声母に濁点が打たれていない字もあると指摘し、前者の例として、「《清声母》【曉母】忽ボ」(p99)を挙げているが、後者については「機会を改めて考察したい」と述べるに止まっている。岡島氏によって、『唐話纂要』には濁音声母は必ずしも全て濁音表記になっていないという現象の存在が明らかにされた。なお、岡島氏による清音声母に対する濁音の音注の例の確認も必要である。

濁音なのに濁点が打たれていないという現象について謝(2011)は次のように述べている。

…《唐話纂要》的注音则不那么整齐，虽然清浊音与中古音一致，但是每个浊声母都有例外，或是浊声母的字注作清音，或是某个字出现多次时，有时注清音，有时注浊音。例如，在唇音中，並母的“耙稗佩琵琶”、奉母的“芙腐附负复帆”等字都注作了清音；舌音中，“苔豆

簞 磔 坛 檀 团 屯 突 荡 疼 蜓 敌 独 同”为清音，“杜 肚 提 地 投”有清浊两种注音；“箸 厨 柱 池 槌”为清音，“迟”有三种注音。牙音中，群母的“棋 岩 禽 强 共”为清音，“旗 极”有清浊两种注音，…(p.538)

この中で唇音、舌音、牙音の例が具体的に挙げられている。謝氏は濁音声母の音注現象に対する把握に問題がある。本研究で確認した結果として、奉母以外の場合、「琵-ビイ(1)」、「豆-デ〇ウ(13)テ〇ウ(1)」、「檀-ダン(1)タン(1)」、「蕩-ダン(2)タン(1)」、「疼-デン(3)テン(1)」、「蜓-デイン(1)テイイン(1)」、「獨-ド(6)ト(2)」、「同-ドウ(18)トウ(2<「小曲」1例)」、「厨-ヂユイ(1)チュイ(1)」、「池-ヅウ(1)ツウ(1)チイ(1)」、「碁-ギイ(3)キイ(1)」（「碁」は「棋」の繁体字）、「强-ギヤン(6)キヤン(7)」のように、これらの字の音注は清音音注のみでなく、濁音と清音との二種類の音注を有する。なお、「磔坛」は前五巻にない例で、「箸-チュイ(5)」は澄母と知母との両読み、「共-コン(6)」は群母と見母との両読みがある。謝(2016)⁸⁰にも、下記のように同じ趣旨の指摘がある。

这套音系中，保留了並定澄群從邪船禪匣全濁声母的特点。如：大ダア[da:]、婆ボウ[bo:]、坐ヅア[dzo:]、茶ヅア[dza:]、斜ヅエ[dze:]、匙ズウ[dzu]、下ヒヤア[hia:]、许ヒユイ[hiui]、限ヒエン[hien]、会ワイ[oi]。

但是也有少数不稳定现象，尤其是匣母字，…(p.63)

同書での濁音の声母に対して清音音注で表記する現象について、謝(2011)は次のように述べている。

…关于《唐话纂要》的现象，我们作如下推测：唇音、舌音的清浊音的分辨难度较大，由于听辨的困难，造成了分辨不清的情况。…(p.539)

この中で、唇音と舌音の場合は聞き分けが難しいという聴覚面の原因によるものとの見方を示しているが、それ以外の牙音、齒音、喉音の原因についての見方は示されていない。唇音と舌音の場合だけ聞き分けが難しいとの理由も述べられていない。清濁の区別を有する日本語を使う日本人にとって濁音の

⁸⁰ 謝(2016)のこの指摘に挙げられた匣母以外の表記例について、本研究の確認によって、「大」は計 115 例、13 例(「小曲」2 例)の清音音注「タア」以外、濁音の「ダア」となり、「茶」は計 16 例、「チヤア」1 例が清音音注で、「ヂヤア」(8 例)、「ヅア」(6 例)、「ヅア」(1 例)とのように、多種類の音注をもつが、いずれの場合も濁音音注である。このように、「大」「茶」に対して、清音音注が存在していることが確認できた。

聞き分けが難しいとはどういうことか合理的な説明が必要である。一方、全濁声母を清音で写す、即ち清濁の区別のないのは官話系資料の特徴である。よって官話との関係、即ち少数派であるこれらの清音表記は官話の混入という視点からの検討も必要である。このように、唇音、舌音、歯音、牙音、喉音の全てにおいて、濁音なのに清音表記になるという現象の存在は明らかにされたが、先行研究の見方は全てのケースを合理的に説明できず、官話と同じでありながら官話との関連についての検討はなされていない。

(2) 匣母のハ行とアヤワ行の二種類の音注について

『唐話纂要』では、匣母の字にはハ行とアヤワ行大きく二種類の音注が見られる。有坂(1938)は近世唐話資料の音注方法の分析を通して江戸時代中頃長崎方言のハの頭音について考察する中で、『唐話纂要』の匣母に触れて、以下のように述べている。

…同書では、説話・^{セハア、}眞話・^{チンハア、}回話・^{ライワア、}のやうに同じ話(匣母)の音がハア、ともワア、とも書かれてゐるが、その頭音は、支那原音に於いては、恐らく有聲 **h** だったのであらう。現代呉方言では、匣母の頭音は、或場合には脱落してゐるが、保存されてゐる場合には、有聲 **h** になってゐる方言が多い。これは我々の耳には、**h** と無頭音との中間のやうに聞える。江戸時代の日本人は、之を、或はハ行の假名で寫し、或はアヤワ行の假名で寫してゐる。(pp.237-238)

その中で、匣母の字の音注がハ行とアヤワ行になっている現象に触れ、同じ字にこの二種類の音注が見られることに着目して呉方言の有声の声門摩擦音 [ɦ] が日本人の耳には [h] とゼロ声母の中間の音に聞こえたと説明し、聴覚面に原因があるとしている。

高松(1985a)は、南京音と浙江音二種類の音注が併記されている『四書唐音弁』の匣母について「南京音では、大抵ハ行音となるが、それを浙江音では、その頭子音を脱落させるのが一般である。(p.96)」と指摘し⁸¹、これに関連して次のように述べている。

⁸¹ 高松(1985a)に、『四書唐音弁』の「浙江音」にはハ行の音注もあるとの指摘もあるが、理由については述べていない。

…冠山の「注官音」書では、匣母は悉皆ハ行音で齊一的である。故に、翻って、「唐話纂要」に時折出るところの、例えば、

胡 乎 糊 豪

等は、その浙江音を混ぜるものとして指摘し得るものとなるであろう。(p.97)

その中で、ハ行になるのは南京音であると指摘し、謝(2016)⁸²もハ行が無声化の結果であると指摘し、有坂(1938)と異なる見方を示している。岡島(1992)、林(2012)、謝(2011,2016)も匣母の音注がアヤワ行になるのは呉方言(杭州音)の反映であるとの見方で一致している。但し、林(2012)以外、同じ字に対するハ行とアヤワ行二種類の音注が存在する理由については言及していない。

その中で、岡島(1992)は有坂(1938)を踏まえ、「つまり濁点の付されていない資料でも、匣母奉母がアヤワ行音で表されていれば杭州音系の資料とみなすことが出来るわけである。(p.95)」と指摘し、匣母に対するアヤワ行表記の有無は杭州音系の資料と南京音系の資料を区別する基準になるとの見方を示している。但し、アヤワ行になる理由については述べていない。

林(2012)は『唐話纂要』の匣母の音注状況について次のように詳細に分析し、ハ行とアヤワ行の音注の比率を明らかにしている。

表二 《唐話纂要》的曉、匣母對應音

	ア行	カ行	ハ行	ヤ行	ワ行	其他
曉(卷 1-5)		1	492		1	3
曉(卷 6)			92			
匣(卷 1-5)	87	9	403	9	141	4
匣(卷 6)	31	4	83	1	15	

曉母總數有 589 字,與匣母 787 字差異不至於太懸殊,但是兩組聲母標音的分布就相當分歧。匣母屬於零聲母「ア、ヤ、ワ」三行的對應音高達 284 個,相對的曉母卻只有 1 個,這個現象有點不可思議。此外,何以匣母字對應有聲母「ハ」行的字高達 486,相對的對應零聲母「ア、ヤ、ワ」行只有 284,可能與前者絕大數主要對應 381 個開口字,而後者主要對應合口字 257 個的差異有關。…(p.172)

その中で、1～5 卷では、匣母に対する音注全 653 字の中、ハ行は 403 例、アヤワ行は 237 例になっているとの集計結果を明らかにしている。字体の認定、

⁸² 但是也有少数不稳定现象,尤其是匣母字,声母分为 h 和 ø 两类,声母读作 h 的可看作清化,声母读作零声母说明还保留浊声母的读音。(p.63)

音注の認定の違いなどにより第四章で述べるように本研究の集計結果とは一致しないところがある。

ハ行とアヤワ行との二種類の音注の分布について、謝(2011:538)はハ行の音注になるのは果・假・蟹摂の開口一等字、止・效・流・山摂の開口字、山摂の合口四等字、臻摂の開口一等字で、それ以外は、アヤワ行の音注になると指摘している。アヤワ行となる理由について、林(2012)は次のように述べている。

…因爲濁喉擦音 [ɦ] 與零聲母 [ø], 對非母語的人來說聽起來很相似。或許如此正好可以解釋三百年前的日本人岡嶋冠山, 也有可能將濁的喉擦音聽成零聲母, 因此使用零聲母「ア、ヤ、ワ」三行的音來記錄濁的匣母讀音。(p.176)

その中で、300年前の日本人には有声の声門摩擦音 [ɦ] がゼロ声母に聞こえた可能性があることを指摘している。但し、ハ行の音注については理由を述べていない。また、同じ字に対してハ行とアヤワ行との二種類の音注が見られることについて、林(2012)は次のように述べている。

從以上七組所舉的詞語例證, 可以看出各組兩個或三個讀音, 它們其實沒有兩讀的必要, 既非詞義差異, 又無破讀需要, 因此不明白何以岡嶋記載幾個不同的讀音。有可能是岡嶋編書時吸收了不同時期學習的讀音, 所以下筆撰寫時沒有留意它們的前後差異讀法。(p.177)

その中で、匣母など複数の声母に見られる二種類ないし三種類の音注が見られるのは岡嶋冠山が異なる時期に習得した発音を採用したため、発音の違いに留意しなかった可能性があるかと推測している。

このように、匣母にハ行とアヤワ行二種類の音注について、アヤワ行が [ɦ] に対応するものである点で結論の一致が見られたのに対し、ハ行は [ɦ] に対応するものか、それとも無声化した南京音の反映か先行研究の見方が分かれている。また、同じ字に対しハ行とアヤワ行二種類の音注が存在することについての見方も分かれている。

(3) 奉母の音注について

『唐話纂要』では奉母[v-]の字の音注がワ行とハ行に分かれ、前者は微母[mj-]のワ行の音注、後者は非母[f-]のハ行の音注と混同している。奉母字の音注について、有坂(1938)は、以下のように指摘している。

唐話纂要に於て、喫飯・請飯・衣飯のやうに、同じ飯(v)の音がハンともワンとも記されていゝるのを見れば、今とその條件はよし完全には一致せずとも、發音上恐らく現今と類似の動搖が有つたものかと思はれる。…(pp.237-238)

有坂(1938)は、同じ漢字に異なる音注を有する現象に注目している。この指摘において、「飯」を例として、同書の奉母字に対する二種類の音注について、奉母[v]の發音に現在と同じ動搖があったとしている。

高松(1985b)は王力によるその演變を上げ、二つの声母について、「奉母におけるfv二重註音」と「奉母、微母に通ずるvの音価」との二つの問題点を検討している。前者に関して、下記のような指摘がある。

…例えば、冠山の「註官音」資料では、流石にその跡を見せぬけれども、春睡の「四書唐音弁」では、間間、その南京音に、fならぬvの混入が認められることがある。…その実例を示せば、「四書唐音弁」では、

フエン ハン
焚 繁 …
ウエン ワン

の如き、右南京音、左浙江音の書き分けが原則であるに、その間に、

ウイ ウエン ウ、
肥 墳 負
等の一重註音が介在する。「唐話纂要」では、その後者の形が、
ウ、 ウ、 ワン ウ、 ウ、 ワン ワ
扶 父 房 婦 負 犯 凡

と出て来る。…(p.36)

この指摘において、奉母に対する「ウ・ワ」の音注はvと対応する浙江音の特徴、ハ行音注は南京音の特徴を反映するとの見方を示している。即ち、ハ行中に対する見方は有坂(1938)と異なっている。なお、後者について、奉母・微母に対する[v]は、その本当の音価が判断できず、日本語では音韻的に「ウ」「ワ」となるしかないと指摘している。

前述した岡島(1992:95)は、ア行の音注は杭州音の特徴を反映するものと

しているが、ハ行の音注については言及していない。

このように、奉母の音注について、先行研究では二種類の音注を有することについて言及しているが、詳細な音注実態に対する確認は必要である。また、ハ行音注について、[v]に対するものか、それとも、無声化した南京音の特徴を反映するものか、音注実態を確認した上で、検討する必要もある。それに、匣母の場合と同じ、同じ字にハ行とアヤワ行との二種類音注が見られる現象についての説明も不可欠である。

(4)疑母について

高松(1985b)は、『唐話纂要』を含む近世的唐音についての検討の中で、疑母の音注がガ行、ナ行、ゼロ声母の三種類になっていると指摘している。方法としては、『中原音韻』と比較している。その中で、『四書唐音弁』の以下のガ行とナ行の音注の例を挙げている。

艾-ガイ 敖-ガウ 我-ゴウ 義-ニイ 牛-ニウ 逆-ネツ

この内、ガ行の音注は疑母[ŋ-]を維持するもの、ナ行の音注は[ŋ-]は韻母[i][y]の前で舌面音化したもので、呉方言の特徴を反映していると指摘している。謝(2016)も同じ立場である。

肥爪(2005)は、中世唐音の特徴として疑母について次のように述べている。

疑母(ŋ)字はガ行のほかに、ア行・ヤ行・ワ行・ナ行でも現れる。
眼アン 午ウ 外ウイ 岸ナン 魚ニ 牛ニウ (p.207)

その中で、岡島冠山らによってもたらされた近世唐音のこうした特徴は、中世唐音ではすでに確認されていることを明らかにしている。

上述のように、疑母の音注について、ガ行、ナ行、アヤワ行の三種類あることは先行研究の一致した見方である。しかしながら、疑母を保存していない『中原音韻』を疑母を保存している『唐話纂要』と比較する研究の手法は明らかに問題である。また、先行研究の焦点はガ行の音注とナ行の音注に集まっているが、呉方言にも一部ゼロ声母になるものがあることと疑母をアヤワ行で写すのは官話系資料の特徴でもあり、官話との関連の視点が落ちている。

(5) 止摂開口日母の「ルウ」「ルゝ」について

半齒音日母の止摂開口字(児二而耳)に対する「ルウ(「ルゝ」)」が確認された。

「ルウ(「ルゝ」)」の音注について、高松(1985b)は、王力による日母の「nzi → zɿ → ɿz → əɿ」という変遷過程の第二段階に擬されるものとしている。中村(2015b)は、冠山の官話書『唐話使用』の南京官話音について検討している。その中、『唐話纂要』と関わる指摘は、下記の通りである。

なお、北京語で「er 音」になる「児」「二」「而」などは『唐話纂要』『唐話使用』ともに「ルウ」であり、ピンインの「ri」のような音を表すと思われる。これは杭州音訛りであると同時に南京官話音にとっても正音であり、エドキンズ(Joseph Edkins)の『官話文法』(1857)における「rī」や初期のラテン化新文字における「re」と比較すべきものであろう。(p.32)

のように、日母の「児二而」に言及している。中村(2015b)は、日母の「ルウ」音注が「ピンインの「ri」のような音を表す」としている。謝(2016)は日母に対する音注の現象を挙げている段階に止まっている。

このように、日母・止摂開口字の「ルウ」「ルゝ」について、先行研究の言及には扱われる時期も地域も違い、同書の場合と一致しないため、再検討すべきである。また、本研究で対照する南京音でも、蘇州・杭州音でも同じゼロ声母と発音し、音注と一致できず、その理由も考えなければならない。

(6) 齒音系の濁音について

『唐話纂要』正齒音の崇、船、禪三つの全濁声母は、下記のようにそれぞれ破擦音と摩擦音二種類の音注が存在する。

崇母 [dz-] 愁ヅエ○ウ/寨シヤイ・サイ(異例)
船母 [dz-] 乗ヂン/神ジン(異例)、食ジ/剩ヂン(異例)
禪母 [z-] 慎ジン/鱣ヂエン(異例)

高松(1984)はこうした例がこれらの声母の摩擦音化と破擦音化を反映したものであるとして、この三つ声母が[z-]に統合した現代蘇州音からは適切な説明が得られないと指摘している。高松(1985a)にはこうした例を考えるにはこれらの全濁声母が[dz-]となっている南部呉方言にも視野を広げる必要があるとの指摘

がある。また、これらに関連して、現在蘇州音で[z-]に合流した舌上音の澄母 [d-]にザ行の音注が見られないことに触れて、澄母がまだ摩擦音化の段階に入っていないと指摘している。このよう正歯音系の全濁声母のそれぞれに破擦音と摩擦音二種類の音注が存在し、複雑に入り組んでいる現象はすでに明らかにされているが、その理由についてはまだ解明されていない。

(7) 莊組二等の二種類音注について

『唐話纂要』の莊組の生母の字にはサ・シャ二種類の音注がある。高松(1985b)は『四書唐音弁』に対する検討の中で、以下のように述べている。

なお、右三声母[心・審・山]は、現蘇州音にて殆んど総て s である。これは其処には捲舌音がないが故に当然のことである。が、然るものを我が唐音にありては、山母に少々の二重註音とすることがある。そして、その浙江音の方はどうやら古形を留めていそうなのである。即ち、それは、拗介音[i]の弱化せざるものとしての、ʃ 音そのものでの出現である。その例は(右南京音、左浙江音)、

サイ サイ サイ サン サン サ^ン [右]

衰 榘 灑 刪 山 産

シャイ シャイ シャイ シヤン シヤン チヤン [左]

の如くである。そして、斯かる現象は、官音には限定しないところの唐話纂要には、ふと認められるものとなっている(灑^{シャイ} 山^{シヤン})。

(p.34)([]括弧内は本研究筆者による)

その中で、『唐話纂要』の山母には「サ」[s-]・「シャ」[ʃ-]二種類の音注があり、[s-]は浙江音、[ʃ-]は南京音を反映するものとしている。莊組には4つの声母があり、こうした「二重註音」は山母(生母)のみ現象なのかそれともこの組全体の問題なのかについての言及がない。

3.2.2 韻母面

(1) 止撮開口の齒音について

止撮開口舌齒音の音注は「-ウ」が主だが、「-イ」も散発的に見られる。これについて、高松(1985a)は、以下のように述べている。

…それも、舌・齒音に限られる。それは即ち、南京音では、韻尾が精系にて「-ウ」、知照系にて「-イ」と二途を採るに対して、浙江音ではその別がなく、通じて全て「-ウ」となる点である。これは正しく、現官話と現呉語とに於ける実情に合致せる現象となる。(p.104)

序でに、右に基づくなれば、ここからでも、「唐話纂要」に於ける浙江音混入の姿がまた歴然と指摘し得る事となるのである。現に、右に例示した知照系の五字[支、齒、知、恥、池]は全て「ツウ」音形の方で以て註音されている。そして、別には、例えば、「致」字(致母)では、「チイ」「ツウ」なるゆれの形をも共存させているという事もあるのである。

(p.105) ([]括弧内は本研究筆者による)

その中で、止撮開口舌齒音に対する「-ウ」は精組で母音が舌尖母音の前部音[ɿ]、「-イ」は知照組で舌尖母音の後部音[ʅ]に対応するものとして、南京音の音注に「-ウ」「-イ」の両方が見られるのは南京音に[ɿ]と[ʅ]の区別があり、浙江音の音注に「-ウ」しかないのは浙江音には[ɿ]と[ʅ]の区別がないからだと説明している。『唐話纂要』については「致」など「チイ」と「ツウ」の両方が見られる例が存在することを指摘し、「ツウ」の方が浙江音の混入としている。謝(2016:73)には「-ウ」が多いとの指摘があるが、「-イ」との関連について言及がみられない。

このように、止撮開口の舌齒音の音注は「-ウ」が主で、「-イ」が散発的である現象は明らかにされているが、「-ウ」の方が圧倒的なのに「混入」としてのとらえ方に問題であることは明白である。まだ、「-イ」の音注について表記上の「ゆれ」なのか南京音の反映なのか検討する必要がある。

(2) 覚・薬両韻について

『唐話纂要』の入声の覚韻の音注は「-ヨ」、薬韻の音注は「-ヤ」となっている。この両韻は、南京音を反映する資料ではともに「-ヨツ」となっている。高松(1985a:106)はこれについて、官話における両韻の合流を反映するものであると説明している。その上で、『唐話纂要』に浙江音の「-ヤツ」(実際の表記は-

ヤ)が混在すると指摘している。しかし、覚韻が「-ヨ」、薬韻が「-ヤ」で音注が1,2例の例外を除きはっきりと区別されており、決して「混在」の状況ではない。両韻の音注について、再確認の上、検討する必要がある。

(3)蟹摂四等韻の二種類表記について

中村(2015b)は、冠山の官話書『唐話使用』の南京官話音について検討している。その中、『唐話纂要』と関わる指摘は、下記の通りである。

『唐話使用』の南京官話音にも、他の官話音にはあまり見られない音形が見える。それは蟹摂四等(齒音)が「細:スエイ」「西:スエイ」のようになることで、期待される「スイイ」や「スイ、」ではない。[sie]ないし[siei]のような音を意図しているように見える。この音形は『唐話纂要』の「細:スエ、」「西:スエ、」とほぼ同じであり、長崎に住む唐人の官話音に杭州音の訛りがあった例と見なすことができる。(p.32)

蟹摂四等の齒音に対する「-エ」の音注が官話音にある「杭州音」即ち吳方言の要素であるとしている。謝(2016:71-72)もこうした現象も挙げている。しかし、これは四等全体に言えることなのかそれとも齒音のみに限るかは明らかにされていない。

3.2.3 その他

『唐話纂要』では第5巻の中の歌謡「小曲」は、文体が異なるので、他の部分とは音注に顕著な違いが見られる。先行研究の中でこれを明確に指摘したのは長澤(1972)と森(1991)である。長澤氏は「小曲」を含む前五巻の内容が「江南音」と説明している。森氏は「小曲」の音注は文雄の言う入声のない官話の「中州音」とであると指摘しているが、実際には入声の音注が存在しており、再検討する必要がある。

以上、『唐話纂要』の仮名音注が反映する音韻面の特徴に関する先行研究について整理し、問題点の所在を明らかにした。これらの先行研究に見られる問題点を検討するのが重要な課題である。

(一)声母面:

表 2-2

分類	先行研究	主要の観点・指摘
清濁区別	有坂(1938)	濁音声母に反映された清・濁の区別
	岡島 (1992)	濁音声母に反映された清・濁の区別
	高松(1985a)	無論、その浙江音での註音は、やはり統一性を欠くとは雖も、その全濁音は、恐らく殆んどとも云い得る程に、濁音となっている。対極的に、南京音は全て清音で終止する。(pp.97-98)
	謝(2011)	清濁の音注が中古音と一致しているが、濁音声母ごとに例外の清音音注が存在している。
	謝(2016)	並定澄群從邪船禪匣全濁声母の特徴が保留されている。
軽唇音・非母	謝(2016)	非母と敷母との音注が一致している。
軽唇音・敷母	謝(2016)	非母と敷母との音注が一致している。
軽唇音・奉母	有坂(1938)	唐話纂要に於て、喫飯・請飯・衣飯のやうに、同じ飯(v)の音がハンともワンとも記されていゝるのを見れば、今とその条件はよし完全には一致せずとも、發音上恐らく現今と類似の動搖が有つたものかと思はれる。(pp.237-238)
	高松(1985b)	奉母に対する「ウ・フ」音注は v と対応する浙江音の特徴を反映、『唐話纂要』にある「ウ・フ」音注が南京音の要素が混入している
	謝(2016)	奉母の音注は、非敷母と微母と、それぞれ同じの音注をもつ場合がある。
軽唇音・微母	林(2013)	同書と他の冠山学習書と同じ、微母字はゼロ声母と發音されている傾向が見られている
娘母と来母	謝(2016)	n と l を区別することができる。
舌音・知母	謝(2011)	止撰の声母はツ[ts]、仮撰と山撰の声母はテ[t]、それ以外の場合はチ[tʃ]となっている。
舌音・徹母	謝(2011)	止撰の声母は[ts]、梗撰はツ[ts]であり、それ以外の場合はチ[tʃ]で、例が少ない。
舌音・澄母	高松(1985a)	(清濁の区別)澄母がまだ摩擦化していない段階にある
齒音・精組	謝(2011)	注音がツ[ts]となる。從・邪母の音注に、「ツ」仮名が多用で、「ズ」音注もある。照二組の場合、宕江兩撰の場合がチ[tʃ]となっている以外、殆どの場合はツ[ts]である。また、照三組の場合、止撰がツ[ts]となり、それ以外、多くの場合はチ[tʃ]である。中の濁音声母に対して、清音音注が見られる。
舌音・齒音	謝(2011)	非濁音の部分では、舌音の二、三等の字と齒音以外、声母の音注が一致している。その中、舌音の二等字に対して、舌尖前音に近い仮名音注を用い、三等字に対して、舌葉音に近い仮名音注を使用している。
齒音・生母	高松(1985b)	「シ」音注が浙江音の「拗介音[i]の弱化せざるもの(p.34)」
反り舌音の書き分け現象	謝(2011)	『唐話纂要』には、二等の知徹澄、照二組、精清從心邪に対する舌尖音に近い音注と三等知徹澄、照三組に対する舌葉音に近い音注との書き分け現象が存在している 從・邪・牀・禪・澄母の所属字は接近し、ひいては一致していると言える
	謝(2016)	止撰以外、多くの場合、精組、知組と照組が区別されている。宕撰開口三等と江撰開口二等の場合、照組二等と精組に区別も見られ、それ以外の場合、照組二等の字は精組の字に併入している。
半齒音・日母	高松(1985b)	ザ行音(ジゼ)以外、止撰開口字(児二而耳)に対する「ルウ(「ルハ」)」音注も存在 「ルウ(「ルハ」)」音注は、王力による日母の「nzi → z ₁ → r ₁ z → a ₁ 」という変遷過程の第二段階に擬されるもの
	松村(2011)	日・ジ・シ ①シは恐らくジの誤記であろう
	謝(2011)	「二耳餌儿」等の字に対する注音は「ルー」[ru:]である。 日母に対する音注は二種類に分けられている。
	謝(2016)	音注は二種類ある。「児而耳」は「ルウ」[ru]、それ以外は「ジ」[dʒ]が「ぜ」[z]。

j、q、x の出現 (見・精組) (尖・団の区別)	謝(2011)	見系、精組の字は口蓋化がされていない。
	謝(2016)	声母は細音の前に口蓋化せず、舌面音に分化していなかった。 精組精清心三母未分化出舌面前音, 依然是舌尖前音見組見溪曉三母在細音前没有变成舌尖前音, 保留了舌根音, 浊上未归入去声。(p.90)
	中田(1978)	唐話纂要の「ツ」は精・清・従の各母と対応しているから、当然、「ツ」も「j」「q」への音韻変化があることがわかる。また「ツ」は所謂「尖音」を表わし、「キ」が「団音」を表していることもわかる。従って、王力の所説と本論の⑤に見られる歯頭音の結論とは全く合致するのである。 そこで、両者の関係をわかりやすく示すと次の通りになる。 「ツ」→[j]・[q] = [ts]・[tsʰ]・[dz]→[tɕ]・[tɕʰ]
	中村 (2015a)	『唐話纂要』においては[ki-]と[tsi-]の区別など、いわゆる尖団の区別が明瞭であり、団音は「記(キイ)」「氣(キイ)」「喜(ヒイ)」など、尖音は「借(ツエハ)」「請(ツイン)」「心(スイン)」などのように記される。
牙音	松村(2011)	カ行主としてキで写された唐話の原語を呉語と想定することはできない。(p.103) <i>我々の資料の仮名書きの言語が呉語である可能性はほぼ否定された</i>
疑母	高松(1985b)	唐音では疑母に ŋ ガ行音、 n ナ行音とゼロ声母との三種類がある 止摂合口の「危 巍 魏・クイ・グイ」と「槐・クイ・ライ」
	謝(2011)	ゼロ声母とg声母以外、 n 声母も存在している。
	謝(2016)	三種類に分けられ、洪音の前に g 、細音の前に n 、一部はゼロ声母と発音する。
影母	謝(2016)	ゼロ声母と発音する。
匣母	有坂(1938)	説話(セハアハ)・眞話(チンハアハ)・回話(ライワアハ)のやうに同じ話(匣母)の音がハアハ、ともワアハ、とも書かれてゐるが、その頭音は、支那原音に於いては、恐らく有聲 h だったのであらう。現代呉方言では、匣母の頭音は、或場合んは脱落してゐるが、保存されてゐる場合には、有聲 h になつてゐる方言が多い。これは我々の耳には、 h と無頭音との中間のやうに聞える。江戸時代の日本人は、之を、或はハ行の假名で寫し、或はアワヤ行の假名で寫してゐる。(pp.237-238)
	高松(1985a)	冠山の「注官音」書では、匣母は悉皆ハ行音で齊一的である。故に、翻つて、「唐話纂要」に時折出るところの、例えば、胡(ウ、) 乎(ウ、) 糊(ウ、) 豪(アウ) 等は、その浙江音を混ぜるものとして指摘し得るものとなるであらう(p.97)
	謝(2011)	果、假、蟹摂開口の一等字や、止、效、山摂開口及び山摂合口の四等字や臻摂開口の一等字は、音注がハ行[h]となっている。それ以外の場合はゼロ声母である。
	林(2012)	匣母字に対する音注が反映されている方言:「杭州音説」という趣旨をしている 匣母字に対するゼロ声母「ア、ヤ、ワ」音注:…因爲濁喉擦音[ɦ]與零聲母[ø], 對非母語の人來說聽起來很相似。或許如此正好可以解釋三百年前的日本人岡嶋冠山, 也有可能將濁的喉擦音聽成零聲母, 因此使用零聲母「ア、ヤ、ワ」三行的音來記錄濁的匣母讀音。(p.176) <i>同字異読現象: 冠山が異なる時期の唐音を吸収していたことによる人為的な誤記</i>

(二)韻母面:

表 2-3

分類	先行研究	主要の観点・指摘
通摂	謝(2016)	開口一等の韻母が[on]である。 合口三等の音注が「ウ段+ワン」で、[uon]と発音する。入声字の場合、主母音が陽声韻と一致している。
	奥村(1992)	通摂母音のオ段表記が多い。唇内韻尾のム表記がない。
江摂	謝(2016)	開口二等の字は、並母の場合、音注が「バン」で、[ban]と発音する。それ以外の場合、音注が「イ段+ヤン」で、発音が[ian]となっている。匣母に二種類の発音の例がある。 入声字の主母音が[o]であり、陽声韻の主母音と異なる。
宕摂	高松(1985a)	(入声)覚菓韻:二韻合流の演変を検討し、官話では[-io]と合流した段階で、呉方言では官話より一歩遅れ、覚韻が[-o]、菓韻が[-io/v]との段階であり、「-ヨツ」「-ヤツ」はこの二つの段階を反映その証拠に、「首音」に依る「唐話使用」「唐音字庸」では、この二韻は、「-ヨツ」で以て統制されている。他方、「唐話彙要」には「-ヤツ」が混在する。(p.106)
	謝(2016)	開口一等の音注が「ア段+ン」で、[an]と発音する。三等の音注が「イ段+ヤン」で、[ian]と発音する。 合口一等の字は全て見系所屬であり、その中、見母の場合「クハン」[kuan]、曉母の場合「ハン」[han]、影母の場合「ワン」[uan]となっている。 合口三等の非敷曉母の音注が「ハン」で、発音が[han]である。溪母の場合は「クハン」[kuan]であり、奉微母の場合は「ワン」[uan]である。 宕摂開口一等の入声字は陽声韻と違い、三等の入声字は陽声韻と同様である。合口入声字の例が少ない。
臻摂	謝(2016)	開口一等痕韻の音注は、「エ段+ン」で、[en]と発音する。影母に例外がある。 開口三等、四等の音注は「イ段+ン」で、[in]と発音する。 合口一等の幫・滂・並母字の音注が「エ段+エン」で、発音が[en]となっている。明母の音注と発音が「モン」[mon]である。端系と曉組、影組の音注が「ウ段+ワン」で、[uon]と発音する。また、見溪母の音注が「クン」で、[kun]と発音する。 合口三等の諄韻の照三組と見系の音注と発音が「イ段+エン」[iun]で、文物韻の非敷母の音注と発音が「フン」[hun]で、奉母の音注と発音が「ウエン」[uen]で、見系の多くの場合が「イ段+エン」[iun]である。 臻摂の入声字に、陽声韻の主母音と異なる場合が多くみられている。
深摂	謝(2016)	三等の音注は基本的に「イ段+ン」で、発音が[in]である。生母に例外がある。 入声字の母音が陽声韻の主母音とほぼ同様である。
山摂	謝(2016)	開口一等の音注と対応する発音は、「ア段+ン」[an]、「ハアン」[han]、「ツ+アン」[dzan]である。二等の音注について、多くの場合が「ア段+ン」で、[an]と発音するが、見系の場合、「エ段+ン」音注で、発音が[en]となっている。三等、四等の音注は主に四種類ある。①「エ段+ン」[en]、②「チ・ヂ+禪エン」[en]、③「ツ・ツ+ス+エン」[en]、「ヒ+エン」[hien]。入声字の母音が陽声韻の主母音とほぼ同じであるが、見系の入声字の主母音が陽声韻と異なる場合が多い。 合口一等、二等の唇音の次は、音注が「ア段+ン」、発音が[an]となるのが一般的である。それ以外の音注に介音 u がある。例外も存在している。三等、四等の仙薛韻と元月韻の非組の音注が「ア段+ン」、発音が[an]となる。疑母と影組の音注が「エユン」で、[eiun]と発音する。日母の字にザ(サ)行の音注がある。その他、「イ段+ン」音注、[en]読みが多く見られている。入声字の母音が陽声韻の主母音と殆ど一致している。
咸摂	謝(2016)	開口一等の音注が「ア段+ン」で、[an]と発音する。或いは「ハアン」音注で、[han]発音となっている。精母に例外がある。二等の知系音注が「ア段+ン」で、[an]と発音する。見系音注が「カン・ケン・エン」で、発音が[kan]・[ken]・[en]となっている。三等、四等の音注が「エ段+ン」、「ツ+エン」、「ヒ+エン」で、発音がそれぞれ[en]、[tsen]、[hien]となっている。 合口字の音注が「ワン」で、発音が[uan]となっている。 入声字の母音が陽声韻の主母音と殆ど一致している。
梗摂	謝(2016)	開口二等字について、知系、来母、見組の場合、韻母が[en]で、幫組の場合、韻母が[on]で、曉影組の場合、韻母が[in]となっている。また、例外も存在している。 開口三等と四等の場合、韻母が[in]である。入声字の主母音について、二種類の例があり、端系及び疑母の主母音が[e]であり、それ以外の場合の主母音が[i]である。
曾摂	謝(2016)	開口一等の字は、音注が「エ段+ン」で、発音が[en]となっている。精組の場合、「ツ・ヅ+ス+ン」[en]であり、入声字の主母音は陽声韻と同じである。しかし、幫組並母の場合、主母音が[o]であり、入声字の場合も同様である。 開口三等の字は、音注が「イ段+ン」で、[in]と発音する。精組、照二組の入声字は母音が[e]であり、それ以外の場合、主母音が[i]である。 合口一等に3例しか見られない。
止摂	高松(1985a)	開口(舌・歯音):南京音では、韻尾が精系にて「-ウ」、知照系にて「-イ」と二途を採るに対して、浙江音ではその別がなく、通じて全て「-ウ」となる点である。これは正しく、現官話と現呉語とに於ける実情に合致せる現象となる。(p.104)

		「唐話纂要」に於ける浙江音混入の姿がまた歴然と指摘し得る事となるのである。(p.105)
	中村(2015b)	北京語で「er音」になる「児」「二」「而」などは『唐話纂要』『唐話使用』ともに「ルウ」であり、ピンインの「ri」のような音を表すと思われる。
	謝(2016)	開口三等の支之微韻の幫組、見系の場合、「イ段+イ」音注となり、韻母が[i:]である。精組、知系の場合、「ウ段+u」が多くて、[u:]と発音する。また、脂韻幫組に[oi][ui]と発音する例外がある。合口三等の支之微韻の音注は、主に「ウ段+イ」で、韻母が[ui]である。少数の一部の場合、「オ段+イ」音注で、韻母が[oi]である。
遇撮	謝(2016)	合口一等の模韻幫系と見系の主母音が[u:]で、端系の主母音が[o:]である。 合口三等の魚韻の主母音の多くの場合が[iui]であるが、照組二等の主母音が[o:]である。 合口三等虞韻の多くの場合、母音が[iui]で、非組の母音が[u:]である。
蟹撮	謝(2016)	開口：一等咍韻の韻母が[ai]であるが、唇音幫母の「貝」が「ホ ^o イ」-[poi]と発音する。二等皆韻の韻母が[ai]であるが、見系の韻母が[ia]で、介音 i がある。二等佳韻の韻母が[a:] [ia] [ai] [iai]との四種類の読みがある。三等祭韻廢韻と四等齊韻の音注は主に「イ段+イ」で、韻母が[i:]である。四等端組の音注が「テ+イ/デ+イ」である。四等精清從母の音注について、卷一から卷五まででは「ツユイ/ヅユイ」であるが、卷六では「ツイ/ヅイ」となっている。心母の音注は「スエー」[se:]である。 合口：一等灰韻の音注が主に「オ段+イ」で、母音が[oi]である。しかし、精組明母と泥母來母の音注が「ウ段+イ」で、母音が[ui]である。疑母の「塊」も同じである。泰韻の音注について、定母、匣母の場合が「オ段+イ」で、韻母が[oi]となる。精組の音注が「ウ段+イ」で、韻母が[ui]である。見疑母の音注韻母が[-uai]である。二等皆韻の音注が主に[uai]、二等佳韻の音注が[ua]である。また、二等夬韻に2例のみ存在している。三等の例が少なく、音注が主に[ui]か[oi]である。例外も存在している。
	中村(2015b)	蟹撮四等(齒音)が「細:スエイ」「西:スエイ」のようになることで、期待される「スイイ」や「スイ」ではない。[sie]ないし[siei]のような音を意図しているように見える。この音形は『唐話纂要』の「細:スエ、」 「西:スエ、」とほぼ同じであり、長崎に住む唐人の官話音に杭州音の訛りがあった例と見なすことができる。
果撮	謝(2016)	音注に「オ段+ウ」が多く見られている。しかし、一部の韻母は[o:]でなく、[a:]か[a]を発音し、つまり、合口の字を開口と読む。
仮撮	謝(2016)	開口二等の場合、見系以外、母音が[a:]である。見系は介音 i がある。開口三等の場合、主母音が[e]である。合口二等の場合、介音 u がある。
効撮	謝(2016)	開口一等の豪韻の音注が「ア段+ウ」で、韻母が[au]である。二等の肴韻では、幫組、泥母の音注が「ア段+ウ」、[au]と発音する。庄組、見系の音注が「イ段+ヤ ^o ウ」で、[iau]と発音する。三等の宵韻の音注が「イ段+ヤ ^o ウ」で、韻母が[iau]である。四等の蕭韻の音注は、多くの場合が「イ段+ヤ ^o ウ」で、[iau]と発音する。
流撮	謝(2016)	開口一等の音注が「エ段+ ^o ウ」で、[eu]と発音する。明母に例外がある。 開口三等尤韻幽韻の音注は、多くの場合が「イ段+ウ」である。照組二等の場合が「エ段+ ^o ウ」で、[eu]と発音する。例外もある。

第四節 南京官話と吳方言について

前述したように、岡島冠山の唐話学習・使用背景から『唐話纂要』の基礎音系の可能性は南京官話と吳方言の杭州音の二種類に絞られている。

杭州音については、紹興の宣教師協会が 1902 年に出版した“*Sound-table of the Hangchow dialect*(杭州方言発音表)”などの宣教師資料や中国で初めて近代言語学の手法を用いた方言研究である趙元任(1928)の『現代吳語的研究』など 20 世紀に入ってから資料はあるが、『唐話纂要』成立当時の具体的な状況を知る確実な資料が少ない。杭州音は吳方言の所属である以上、同方言を知るには吳方言という全体的視点から出発する必要がある。周知のように、吳方言地域の北部に位置する蘇州は古くから吳方言地域の経済と文化の中心であり、蘇州音に基づく文学作品や演劇も盛んだったことなどから、蘇州音が吳方言の代表であることは万人が認めるところである。何より重要なことは蘇州音についてはその現代の状況だけでなく、『同文備攷』(明昆山王応電撰、1540 年刊)や『度曲須知』(明吳江沈龐綏撰、1639 年刊)など吳方言の歴史的変遷を反映する資料にも恵まれ、膨大な研究の蓄積があり、『唐話纂要』の成立に近い時期の状況をかなり具体的に知ることができる。このような理由から、本研究では吳方言を知る手がかりとして蘇州音を採用する。

周知のように、吳方言の内部には、南北の差異が非常に大きい。本研究では、蘇州音を通して吳方言の特徴を知りつつも、南部吳方言にも目を配り、中でも吳方言の中で官話的色彩の強い杭州音との相違には常に注意を払うこととする。南部吳方言については上述の『現代吳語的研究』を参考とし、「杭州音」については現代杭州方言の音韻、語彙、文法等を詳しく述べている錢乃榮(1992)『杭州方言志』に依拠するが、杭州方言の歴史的変遷については鄭張尚芳(2007)、游汝傑(2009)、謝(2016)を参照し、必要に応じて杭州音と密接な関係を有すると考えられている文雄の『磨光韻鏡』と『三音正譌』などにまで考察の範囲を広げることとする。

また、『唐話纂要』時代の南京官話は江淮官話に相当すると考えられている。江淮官話の代表となるのは他ならぬ明初の首都だった南京である。よって、本研究では江淮官話を知る手がかりとしてその代表である南京音(旧派)を採

用する。但し、『唐話纂要』当時の南京官話について触れる際、常に当時の江淮官話を反映するとされる『西儒耳目資』に注意を払うこととする。

本研究では『唐話纂要』の仮名音注に対する分析を行うにあたって、まずは音注が付されている字の中古音における声母、韻母に関する基本情報を明らかにした上、現代の南京音、蘇州音に加え、南京音については『西儒耳目資』、蘇州音については杭州音および『同文備攷』などの情報をもとに仮名音註と対照比較を行う。具体的な検討に入る前に、まず平山(1967)にそって中古音の音韻組織を確認した上、南京音と吳方言の代表としての蘇州音について、両音の音韻的特徴を整理し、南京音については『西儒耳目資』、蘇州音については杭州音との違いなどについて述べることとする。

4.1 中古音について

中古音は、『切韻』(601年)によって示されている音韻体系を指す。『広韻』は四声に分けられた206韻を収録している。声母の数についての説明はないが、反切に対する分析を通して、37があると考えられている。韻図はこれらの声母と韻母について、以下のように分析している。

表2-5、表2-6それぞれ示しているのは中古音の声母と韻母の音価である。

表2-5のように、声母は、唇・舌・牙・齒・喉の「五音」という調音点によって大分する。各々の内部を「清・濁」に分け、清は清(また全清とも呼ぶ)と次清、濁は濁(全濁とも呼ぶ)と清濁(次濁とも呼ぶ)などのように細分する。「清・濁」は調音法の特徴による分類で、「清(全清)」は無声無気音、「次清」は無声有気音、「濁(全濁)」は有声音、「清濁(次濁)」は鼻音・流音・弱摩擦音である。「清(全清)」「次清」の対立のない無声摩擦音も「清(全清)」に分類されている。

表 2-5 中古音の声母の音価表

分類		全清	次清	全濁	次濁	全清	全濁
唇音	幫組 重唇音	幫 p	滂 p'	並 b	明 m		
	(輕唇音)	非 f	敷 f'	奉 v	微 m)		
舌音	端組 舌頭音	端 t	透 t'	定 d	泥 n		
	半舌音				來 l		
齒音	知組 舌上音	知 t	徹 t'	澄 d	娘 n		
	精組 齒頭音	精 ts	清 ts'	從 dz		心 s	邪 z
	莊組 齒上音・照組 2等	莊 tʂ	初 tʂ'	崇 dʂ		生 ʂ	
	章組 正齒音・照組 3等	章 tʃ	昌 tʃ'	船 dʃ		書 ʃ	禪 z
	半齒音				日 nʒ		
牙音	見組 牙音	見 k	溪 k'	群 g	疑 ŋ		
喉音	影組 喉音				于 y	曉 h	匣 fi
					羊 j	影 ?	

「五音」の内、唇音の声母は本来、幫組と呼ばれる重唇音の幫・滂・並・明1系列のみだったが、中古期の終わりに分裂して輕唇音非・敷・奉・微が発生し、2系列となった。多くの漢語方言に見られる変化で、本研究では唇音を重唇音と輕唇音の2系列に分けて扱うこととする。舌音の声母は、舌頭音の端組と呼ばれる端・透・定・泥と舌上音の知組と呼ばれる知・徹・澄・娘の2系がある。牙音の声母は見組と呼ばれる見・溪・群・疑の1系列のみである。齒音の声母は、齒頭音の精組と呼ばれる精・清・從・心・邪、齒上音(照組二等と

も呼ぶ)の莊組と呼ばれる莊・初・崇・生、正齒音(照組三等とも呼ぶ)の章組の章・昌・船・書・禪の 3 系列がある。喉音の声母は影・曉・匣・于・羊の内、次濁音のみ于・羊の 2 種類があるが、それ以外は 1 系列である。半舌音と半齒音の声母はそれぞれ来母と日母の 1 種類だけである。

表 2-6 では、『広韻』の 206 韻は主母音と韻尾の共通性によって 16 韻撰に分類され、韻撰はさらに主母音の特性によって内転と外転に二分される。韻母は主母音の開口度の違いによって、広→狭の順に I ~ IV 等に配置されている。I ~ IV 等の内、III 等にのみ介音があり、それ以外は直音である。韻母はさらに合口的介音 [-u-] があるかないかによって開合に分けられ、ないのは「開」で、あるのは「合」である。

表 2-6 中古音の韻母の音価表

等 攝	1 等	2 等	3 等	4 等	轉 開 次 合
通	東 öŋŋ		東 ^v iəuŋ		1 開
	冬 oŋ		鐘 iəŋ		2 開合
江		江 auŋ			3 開合
止			支 iě	支 iě	4 開合
			支 yě	支 yě	5 合
			脂 i	脂 i	6 開
			脂 yi	脂 yi	7 合
			之 ^v iəi		8 開
			微 ^v iəi		9 開
遇			微 yəi		10 合
	模 o		魚 iə		11 開
蟹			虞 yu		12 開合
	哈 ʌi	皆 vi 夬 ai	祭 iei	齊 ei	13 開
	灰 uʌi	皆 uvi 夬 uai	祭 yei	齊 uei	14 合
	泰 ai	佳 ai		祭 iei	15 開合
	泰 uai	佳 uai		祭 yei	16 合
			廢 iʌi		9 開
臻			廢 yʌi		10 合
	痕 ən		臻真 iěŋ	真 iěŋ	17 開
	魂 uən		真 yěŋ	諄 yěŋ	18 合
			欣 ^v iəŋ		19 開
山			文 yəŋ		20 合
		山 ɛŋ	元 iʌŋ	仙 iɛŋ	21 開
		山 uɛŋ	元 yʌŋ	仙 yɛŋ	22 合
	寒 aŋ	刪 aŋ	仙 iɛŋ	先 ɛŋ	23 開
桓 uan	刪 uan	仙 yɛŋ	先 uɛŋ	24 合	
効	豪 au	肴 au	宵 iɛu	蕭 eu	25 開
				宵 iɛu	26 合
果	歌 a				27 合
	戈 ua		戈 ya		28 合
假		麻 a	麻 ia		29 開
		麻 ua			30 合
宕	唐 aŋ		陽 iəŋ		31 開
	唐 uəŋ		陽 yəŋ		32 合
梗		庚 aŋ	庚 iəŋ	清 iɛŋ	33 開
		庚 uəŋ	庚 yəŋ	清 yɛŋ	34 合
		耕 ɛŋ		青 ɛŋ	35 開
		耕 uɛŋ		青 uɛŋ	36 合
流	侯 əu		尤 ^v iəu	幽 iěu 幽 iěu	37 開
深			侵 iěm	侵 iěm	38 合
咸	覃 ʌm	咸 ɛm	鹽 iɛm	添 ɛm	39 開
	談 am	銜 am	嚴 iam	鹽 iɛm	40 合
			凡 iʌm		41 合
曾	登 əŋ		蒸 iəŋ		42 開
	登 uəŋ		職 yək		43 合

注：韻目名は、原則として平声のそれを挙げて、相配する上・去・入声をも兼攝させる。したがって入声韻の場合は、韻尾を m→p, n→t, ŋ→k にそれぞれ換えなくてはならない。(平山 1967:146))

4.2 南京音と蘇州・杭州音について

ここでは、表 2-7 に掲げた南京音、蘇州音、杭州音三者の音韻体系を見比べ、南京音と蘇州音については中古音から見た特徴、杭州音については蘇州音との違いを確認する。

表 2-7 現代南京音、蘇州音、杭州音の音韻体系

	南京音	蘇州音	杭州音
声母	p p' m f t t' l k k' x tɕ tɕ' ɕ z tʂ tʂ' ʂ ts ts' s ∅	p p' b m f v t t' d n l ts ts' s z tɕ tɕ' dz ŋ ɕ k k' g ŋ h ɦ ∅	p p' b m f v t t' d n l ts ts' dz s z ɿ tɕ tɕ' dz ŋ ɕ k k' g ŋ h ɦ ʔ(=∅)
韻母	ɿ, ʅ i u (y) ɛ ie ue o ə (yə) e ie aæ iaæ uaæ əi uəi au iau əu iəu uən a~ ia~ ua~ e~ ie~ (ye~) (yin) əŋ iŋ oŋ ioŋ əʳ ɤʔ ieʔ uʔ yʔ ɿʔ iʔ ɔʔ ioʔ əʔ ieʔ ɛʔ ueʔ yeʔ	ɿ i u y ɥ a ia ua æ iæ ɛ ue o io i u ∅ i∅ u∅ ɣ iɣ əu ã iã uã ā iā uā ən in uən yən oŋ ioŋ əl m n ŋ aʔ iaʔ uaʔ yaʔ əʔ ieʔ uəʔ yəʔ oʔ ioʔ	ɿ ɥ ou i u y a ia ua eɿ ueɿ ɛ ie ue uo yo ɔ io ɣ ʌŋ iʌŋ uʌŋ ən in uən yin oŋ ioŋ ər m n ɔʔ ioʔ uɔʔ ɤʔ ieʔ ueʔ iɿʔ yɿʔ
声調	陰平 陽平 上声 去声 入声	陰平 55 陽平 33 陰上 51 陰去 513 陽去 31 陰入 5 陽入 3	陰平 323 陽平 212 陰上 51 陰去 334 陽去 113 陰入 5 陽入 12

注：・南京音は趙(1929:274-275)、蘇州音は葉(1988:154-155)、杭州音は錢(1992:3)による。
・錢(1992)によれば、[ɿ-]は[z/dz]と読むのが一般的できる。

4.2.1 南京音の場合

現代南京音は、21 個の声母と 41 個の韻母、それに陰平・陽平・上声・去声・入声の五つの声調を有する。表 2-7 に示してある同方言の音韻体系は趙(1929)より転載したもので、現代南京音の中で旧派に属している。

表 2-5、表 2-6 と比較して南京音の音韻体系に見られる特徴は以下の通

りである。

- (1)全濁声母が全て消失し、全清、次清との対立を失っている。
- (2)微母[m-]、疑母[ŋ-]の鼻音は消失し、ゼロ声母となっている。
- (3)知組は概ね章組へ合流している。
- (4)章組と精組の対立を維持し、莊組は精組にも章組にも合流するが、精組に合流するものは北方官話より多い。
- (5)泥母[n-]と来母[l-]は対立を失い、混同している。
- (6)牙・喉音[k-][k'-][x-]は前舌狭母の前で口蓋化が起き、[tɕ-][tɕ'-][ç-]となる。
- (7)精組[tɕ-][tɕ'-][ç-]は[-i]類、[-y]類の韻母の前では口蓋化せず、尖団の対立を維持している。
- (8)章組[tɕ-][tɕ'-][ç-]には[-i]類、[-y]類の韻母が後接することができない。
- (9)止摂開口歯頭音由来の舌尖前母音[-ɿ]、止摂舌開口歯音と蟹摂祭韻開口(一部)由来の舌尖後母音[-ʅ]がある。
- (10)鼻音韻尾は、[-m]が[-n]に合流、[-n]と[-ŋ]は多くの場合混同している。
- (11)入声韻尾は対立を失い、声門閉鎖音[-ʔ]に統合している。
- (12)声調は平声にのみ陰と陽の違いがある。

南京音にも字によって文読音と白話音の違いが見られるが、限定的でしか存在していない。

『西儒耳目資』と上記現代南京音との声母、韻母面の主な違いは次の通りである。

- (1)微母と疑母はまだ完全に消失していない。
- (2)泥母[n-]と来母[l-]は混同せず対立している。
- (3)牙・喉音[k-][k'-][x-]は口蓋化していない。
- (4)章組[tɕ-][tɕ'-][ç-]には[-i]類、[-y]類の韻母が後接することができる。
- (5)鼻音韻尾は、[-m]が[-n]に合流、[-n]と[-ŋ]は混同せず、対立している。
- (6)入声韻尾はないが、入声の声調がある。

4.2.2 蘇州音と杭州音の場合

蘇州音の音韻体系は、27個の声母、49個の韻母、それに陰平、陽平、陰上、陽上去、陰去、陰入、陽入七つの声調から成り立っている。表 2-7 に示している同方言の音韻体系は葉(1988)より転載したもので、現代蘇州方言の中で旧派と言われる蘇州城内の音である。声母面と韻母面の主な特徴は以下の通りである。

声母面では、

- (1)全濁声母を完全な形で保存している。
- (2)疑母[ŋ-]は、開口呼と合口呼の前では変化せず、齊齒呼と撮口呼の

前では、娘母 [ŋ-] に合流する。脱落してゼロ声母になるもの、[h] となるものも少ないが一部ある。

(3) 泥母 [n-] は齶歯呼と撮口呼の前では、娘母 [ŋ-] に合流する。よって、疑・泥・娘三母は齶歯呼と撮口呼の前では同音となる。

(4) 章組 [tʂ-][tʂ'-][ʂ-] が精組 [ts-][ts'-][s-] へ合流しているが、郊外呉県では両者の対立が維持されている。

(5) 牙・喉音 [k-][k'-][x-] は前舌狭母音の前で口蓋化が起き、[tɕ-][tɕ'-][ç-] となるが、新しい変化である。

(6) 精組 [ts-][ts'-][s-] は [-i] 類、[-y] 類の韻母の前では口蓋化せず、尖団の対立を維持している。

(7) 日母 [ɲz] と微母 [m] の字には文白異読の現象があり、日母の [z-] と [ŋ-] (前が文読音、後ろは白話音、以下同じ)、微母の [m-] と [v-] がそれである。

また、韻母面では、

(1) 舌尖母音は [-ɹ][-ɻ] で、[-ɺ] がない。

(2) 蟹摂、効摂、流摂の複合母音の韻尾 [-i][-u] は単母音化で消失している。

(3) 鼻音韻尾の内、咸摂の [-m]、山摂の [-n] が消失して開音節化している。

(4) 入声韻尾は対立を失い、声門閉鎖音 [-ʔ] に統合している。

声調は平、去、入の三声に陰・陽の区別がある。文白異読の現象として、上記の微母、日母の他、奉母に [b-] と [v-]、見母に [tɕ-] と [k-]、匣母には [h-] と [∅]、[∅] と [ŋ-]、止撮合口の [-uɛ] と [-y]、梗摂二等開口の [-əŋ] と [-aŋ]、曾摂開口一等登韻の [-aŋ] と [-əŋ] などの一部に止まっている。

現代杭州音の音韻体系は、29 個の声母、38 個の韻母で、それに陰平、陽平、陰上、陰去、陽去、陰入、陽入七つの声調から成り立っている。表 2-7 に掲載している音韻体系は銭(1992)より転載したもので、杭州音の中で若者が使用する新派の音に属する。蘇州音と類似しているが、蘇州音との主な違いは以下の通りである。

(1) 杭州音の日母、微母、奉母には文白異読の現象がなく、日母は [z-]、微母は [v-]、奉母も [v-]、それぞれ蘇州音の文読音に相当する一つの読みしかない。

(2) 疑母は開口呼の前でのみ [ŋ-] を維持、合口呼の前では消失している。

(3) 蘇州音では有声の破擦音 [dz-] が有声の摩擦音 [z-] に合流しているのに対し、杭州音では両者が合流せず対立を維持している。

(4) [ts-][ts'-][s-] には [-in] などが後接できない。但し、これが 18 世紀以降の変化である。

(5) 章組 [tʂ-][tʂ'-][ʂ-] が精組 [ts-][ts'-][s-] に合流したが、18 世紀以降の

変化である。

(6)蟹摂、効摂、流摂の複合母音の韻尾の一部のみ単母音化せず、複合母音として存在している。18世紀以前はより完全な形で複合母音が存在していた。

(7)鼻音韻尾の内、咸摂の[-m]、山摂の[-n]が消失したが、18世紀の以降の変化である。

(8)声調の種類は蘇州音と同じだが、陰上、陰入以外の調値が異なる。

4.3 『唐話纂要』成立当時における日本語の発音

『唐話纂要』の中国語は、日本語の仮名で表記されているため、表記されている中国語音を知るには、表記に用いられた仮名の当時の読み方を明らかにしなければならない。江戸時代、中央政府が決めた共通語・標準語というものがなかったため、表記者が使用する方言に注意を払うことが特に必要である。日本語の音韻史では中世室町時代末期はキリシタンによるローマ字資料をはじめとする外国資料が存在するため、音声状況が具体的に分かる数少ない時期の一つである。この時期の日本語の音韻組織は、橋本(1932)のキリシタン資料のローマ字表記に対する分析結果をまとめると、次のようになる。

ア行音	a, i, u, ie, uo	
カ/ガ行音	ka, ki, ku, ke, ko	/ ga, gi, gu, ge, go
サ/ザ行音	sa, si, su, se, so	/ za, zi, zu, ze, zo
タ/ダ行音	ta, ti, tu, te, to	/ da, di, du, de, do
ナ行音	na, ni, nu, ne, no	
ハ/バ行音	Φa, Φi, Φu, Φe, Φo	/ ba, bi, bu, be, bo
マ行音	ma, mi, mu, me, mo	
ヤ行音	ja, ju, jo	
ラ行音	ra, ri, ru, re, ro	
ワ行音	wa	wo
開拗音	kja, kju, kjo	/ gja, gju, gjo
	fa, fu, fo	/ za, zu, zo
	fa, fu, fo	/ dza, zu, do
	nja, nju, njo	
	Φja, Φju, Φjo	/ bja, bju, bjo
	mja, mju, mjo	
	rja, rju, rjo	
合拗音	kwa	/ gwa
促音	q	
撥音	N	

上記の他、後世の才段長音に合流した「ア段+ウ」と「オ段+ウ」の対立、いわゆる才段長音に開合の対立が存在していた。

近世期の江戸時代にはさまざまな音韻に変化が起き、森田(1977)をまとめると、この時期の共通語的な性格を有する上方語に起きた主要な変化は次の通りである。母音では[ie]→[e],[uo]→[o]などの変化が18世紀の半ば頃に起き、子音では、セとゼの子音は18世紀の後半に[s]と[z]になった。ハ行の子音は「フ」を除き、17世紀の終わり頃から両唇摩擦音の[Φ]から声門摩擦音

の[h]へ変化した。「ジ・ヂ」「ズ・ヅ」いわゆる四つ仮名は対立を失い、「ジ」・「ヂ」と「ズ」・「ヅ」のが対立も17世紀の終わりに失い、[dʒi]、[dzu]へ合流した。また、「ア段+ウ」と「オ段+ウ」の対立、「エ段+ウ」と「-ヨウ」拗音の対立は17世紀前半に失われ、オ段長音に合流した。合拗音「クウ」、「グウ」は18世紀半ば頃に直音化して「カ」、「ガ」となった。また、17世紀の終わりには「パ行」音という新しい音韻が誕生した。

岡島冠山の使用言語である長崎方言については愛宕(1983)は、「エ」、「オ」、「セ・ゼ」は今でも[je],[wo],[ʃe],[ʒe]であり、合拗音「クウ」・「グウ」も残っており、「ジ・ヂ」、「ズ・ヅ」の区別は長崎本土の方言には残っていないが、五島列島の福江など長崎県の一部の他、佐賀、大分、薩摩など九州方言の多くの地点では現在も残っていると指摘している。

ハ行の子音については現在[h-]となっているが、一部の語は今でも[Φ]を維持している。『唐話纂要』成立の当時の長崎方言ハ行の子音については、有坂(1938)は『唐話纂要』を含む冠山学習書を主とする近世唐音資料における中国語音に対する仮名音注の違いの分析を通して、ハの子音が「長崎あたりの方では、それより遙か後まで[f-]を保存してあるたやうである。(p.234)」と明らかにしている。森(1991)は有坂(1938)が課題としている同時期の長崎の唐通事が日本語の五十音を四種の漢語方音によって音訳した資料(『東音譜』)に着目して、その中の「官音」では、ハ行音に対し使用可能な曉母[h-]の字があるにも拘わらず、これを一切用いず、実際に全て非母[f-]の字で音訳していることから、「十八世紀初頭の長崎のハ行頭音は全て[h-]よりも[f-]に近い子音であったことが判明する(p.21)」としている⁸³。

以上のことを踏まえ、『唐話纂要』の中国語音の音注に用いられた仮名の読みは次のようになると考えられる。

ア	イ	ウ	エ	オ					
[a]	[i]	[u]	[je]	[wo]					
カ	キ	ク	ケ	コ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
[ka]	[ki]	[ku]	[ke]	[ko]	[ga]	[gi]	[gu]	[ge]	[go]

⁸³ 杭州音、福州音、漳州音の音訳についても、有坂(1938:233)には「全体として唇音性を帯びたものが多い」との指摘がある。

サ	シ	ス	セ	ソ	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
[sa]	[ʃi]	[su]	[ʃe]	[so]	[dza]	[ʒi]	[zu]	[ʒe]	[dzo]
タ	チ	ツ	テ	ト	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
[ta]	[tʃi]	[tsu]	[te]	[to]	[da]	[dʒi]	[dzu]	[de]	[do]
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ					
[na]	[ni]	[nu]	[ne]	[no]					
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	バ	ビ	ブ	ベ	ボ
[Φa]	[Φi]	[Φu]	[Φe]	[Φo]	[ba]	[bi]	[bu]	[be]	[bo]
ハ°	ヒ°	フ°	ヘ°	ホ°					
[pa]	[pi]	[pu]	[pe]	[po]					
マ	ミ	ム	メ	モ					
[ma]	[mi]	[mu]	[me]	[mo]					
ヤ		ユ		ヨ					
[ja]		[ju]		[jo]					
ラ	リ	ル	レ	ロ					
[ra]	[ri]	[ru]	[re]	[ro]					
ワ									
[wa]									
キャ		キュ		キョ	ギャ		ギユ		ギョ
[kja]		[kju]		[kjo]	[gja]		[gju]		[gjo]
クワ					グワ				
[kwa]					[gwa]				
シャ		シュ		ショ	ジャ		ジュ		ジョ
[ʃa]		[ʃu]		[ʃo]	[ʒa]		[ʒu]		[ʒo]
チャ		チュ		チョ	ヂャ		ヂュ		ヂョ
[tʃa]		[tʃu]		[tʃo]	[dʒa]		[dʒu]		[dʒo]
ニャ		ニュ		ニョ					
[nja]		[nju]		[njo]					
ヒャ		ヒユ		ヒョ	ビャ		ビユ		ビョ
[Φja]		[Φju]		[Φjo]	[bjɑ]		[bjy]		[bjɔ]
ヒ°ャ		ヒ°ユ		ヒ°ョ					
[pjɑ]		[pjy]		[pjɔ]					
ミャ		ミュ		ミョ					
[mja]		[mju]		[mjo]					
リャ		リュ		リョ					
[rja]		[rju]		[rjo]					
ッ									
[q]									
ン									
[N]									

第三章

『唐話纂要』の音注の表記方式

『唐話纂要』に関する基礎研究で論じたように、同書では、対訳方式で中国語の見出し語を挙げている。中国語の見出し語と対応する中国語の発音の表記には、仮名の他に、

ヒンデ[○]ウ ベ アンアン ウ、ロ サ[°]ウジン ツヲ^ハツエ ケ[○]ウツエ、

興頭 黒暗暗 娯楽 早晨 左側 苟且

等の表記例のように、「°」「○」「ハ」等の多種類の記号も用いられている。同書の音韻的特徴を解明する前提として、こうした補助記号の解明は不可欠である。

本章では、こうした記号を中心に、それらの使用実態を確認した上、使用の意図を明確にする。

まず、仮名の用法面に見られる特徴を簡単に説明する。

同書では、中国語の発音を示すために、仮名を様々な方法で活用している。「福-ホ」「吉-キ」「失-シ」などのように、ひとつの仮名で表す他、「太-タイ」「切-ツエ」「黒-ヘエ・ペ」「趣-ツユイ」「茶-ヂヤア・ヅア、」などのように、二つ或いは三つの仮名で中国語の一つの音節を示している例が多く見られる。「タイ」などのような日本語の表記に用いられるものが存在している一方、「切-ツエ」などのように、複数の仮名を組み合わせた反切⁸⁴法という日本語の表記に用いられないものもある。「頭-デ〇ウ」などのように、複数の仮名に補助記号を加えて組み合わせるものは日本語の表記に見られないものである。また、「婚-ホフン・ホン」などのように、同じ音に対して、反切法と既存の表記法を併用する表記例も少なくない。但し、[y]に対する「エ(エ°)」「-ユイ」などのように、日本語に存在しない中国語の発音について、音注法が統一されていない例が多い。

次に、濁音に対する表記法である。

同書では、匣母、奉母、微母以外の全濁声母及び次濁の日母・疑母の一部に対して、濁音で示すのが一般的であり、非初出の場合、濁点が省略され、清音音注となっている場合が少数存在している。

それに、補助記号の使用である。

同書では、圈点「〇」はつける場所の違いによって、例のように右肩点と中間点の二種類に分けることができる。以下では、特定の仮名の右肩につく、当時に日本語の書記体系にないものは「右肩点」、中国語の一音節に対応する二つの仮名の間につくものは「中間点」と呼ぶ。

右肩点：半-ハ°ン 再-サ°イ 没-モ° 面-メ° 悦-エ° 地-テ°イ
中間点：好-ハ〇ウ 刀-タ〇ウ 口-ケ〇ウ 投-テ〇ウ

「右肩点」と「中間点」以外、もう一種類の日本語の書記体系に存在していたもの、次節で述べるように「延音点」と呼ぶべきものがある。例えば、

⁸⁴ 反切(はんせつ)は漢字の音を示すために用いられる表音法の一つ。「〈反切〉とは、「A BC 反(または切)」という形式を用い、被注音字 A と声母が共通な文字 B、韻母が共通な文字 C を組み合わせ、B の声母と C の韻母を加えた和として、A の発音を示すものである。A を〈反切母字〉、B を〈反切上字〉、C を〈反切下字〉と呼ぶ(平山 1967: 121)。」

「沙-サア、」「依-イ、」「乎-ウ、」「也-エ、」「厝-ツヲ、」

等のように、符号の「、」は延音点として母音仮名の後に用いられて、先行母音を延ばす旨を指示する。

さらに、声調に対する音注法である。

先行研究に言及のない特定の字に対する場合について、圏点「○」は「声調点」として使われている。例えば、

中[○]用[○]-チヨンヨン 作[○]東-ツヲトシ 大在[○]行[○]-ダア、ヅアイハアン

のように、漢字の四隅に「○」を付けて、声調を示している。

初版に「四声点」が付されていないのに対して、再版の五巻、六巻の刊本に殆ど見られなく、六巻影印本のわずかの一部にしか見られない。例のように、

・^{シヤン}爽^{クハイ}快[・] ・^{ヒン}興^{デウ}頭[・] ^{サン}讚^{タン}・嘆

本研究で扱う六巻影印本には、「四声点」は最初の「二字話」所属の第 133 語の「讚嘆」までの単語にある一部の漢字に付けられている。

「声調点」と「四声点」以外、『唐話纂要』では、沼本(1997)が指摘したように、入声韻の字に対して、韻尾無表記という短音節型音注が採られている。

^ホ福 ^キ吉 ^シ失

『唐話纂要』の中国語音を正しく理解するためには、上述した補助記号の使用実態と使用意図を解明することが必要となる。

第一節 右肩点「°」について

1.1 右肩点の使用実態

『唐話纂要』で右肩点「°」の使用例は、以下の表 3-1 のようになっている。

表 3-1 右肩点が用いられる漢字の表記

「°」の表記例	「°」が付かない表記
ケ°-客 20(11)格 1 克 1	客-ケ 20(9)
ケン-根 4(1)更 18(4)庚 4(2)肯 24(11)坑 1	根-ケン 4(3)
ス°エン-生 91(62)	生-スエン 91(29)
テ°-得 88(1)	得-テ 88(87)
ハ°-八 10 撥 5 潑 5(4)叭 1 鉞 1	潑-ハ 5(1)
ハ°ア-巴 2 把 9 芭 1 笆 1 杷 1 杷 1 怕 11 葩 1 杷 2(1)杷 ¹	杷-ハア\2(1)
ハ°イ-拜 6 派 3 排 3	
ハ°ウ-報 12 爆 1 豹 1 保 4 包 13 寶 5 苞 1 褌 1 泡 1 砲 3 抛 1 鮑 1	
ハン-半 31 板 9 版 2 班 1 般 22 搬 3 扮 2 榜 1 幫 6 扳 2 絆 4 謗 5 棒 4(1)販 1 ¹	棒-ハン 4(1)バン 4(2)
ヒ°-必 54(52)壁 7 碧 1 畢 1 筆 3 魴 1 鼈 1 鶻 1 僻 1 劈 2 疋 3 蔑 1 蟻 1	必-ヒ 24(2)
ヒ°イ-庇 1 比 8(7)蔽 1 鴨 1 秘 1 閉 1 轡 1 批 1 披 2 譬 3 撤 2 被 4(1)稗 1	比-ヒイ 8(1) 被-ヒイ 4(1)ポイ 4(2)
ヒ°ヤウ-表 6(4)漂 3 票 7(6)嫖 4(2)標 2	表-ヒヤウ 6(2)票-ヒヤウ 7(1) 嫖-ヒヤウ 4(2)
ヒ°ン-兵 8 柄 2 氷 2(1)秉 1 賓 2 餅 5(4)併 2 拼 1 品 2 普 1 舗 1 牝 1	氷-ヒン 2(1) 餅-ヒン 5(1)
フ°-不 400(394)	不-ダア\400(1)
フ°ウ-補 4 布 6(5)蒲 3(1)	布-フウ 6(1) 蒲-ブウ 3(2)
ヘ°-栢 4(2)伯 1 百 12(11)珀 1 魄 1 別 16(4)白 23(2)帛 1 苜 1 菝 1 黒 7(6)	百-ヘ 12(1) 別-ヘ 16(14) 黒-ヘエ 7(1)
ヘ°エ-栢 4(2)槩 1	
ヘ°エン-奔 5 本 13(12)噴 1	本-ヘエン 13(1)
ヘ°ン-遍 2 鞭 2 扁 1 蝙 1 匾 1 變 5 菹 1 邊 3 片 1 偏 ³ 偏 5 瓣 1	
ホ°-博 1 卜 1 鉢 1 撲 2 扑 2 拍 2 朴 1 泊 1 勃 3	
ホ°イ-盃 11 背 2 悲 5 貝 1 輩 1 配 2 佩 3 鷓 1	
ホ°ウ-波 5 菠 1 頗 1 破 12(10)	破-ホウ 12(2)
ホ°ン-棚 2	
サ°-札 1 扎 3 紮 1 察 1 擦 1 刹 1 挿 4 柵 1	
サ°イ-哉 6(5)載 1 再 9 災 2 采 2(1)猜 5(4)彩 1 菜 21 綵 1 債 7 齋 1 差 1 才 7(1)在 46(9)	哉-サイ 6(1) 采-サイ 2(1) 猜-サイ 5(1) オ-ツアイ 7(1)ヅアイ 7(4)未注 7(1) 在-サイ 46(1)ツアイ 46(3)ヅアイ 46(33) 差-ツウ 1 チヤア 1 ツア\6
サン-讚 4 慘 1 滄 1 滄 2 倉 3 蒼 2 鶻 1 斬 2(1)盞 3 瘡 1 綻 3(1)踰 ¹	斬-ツアン 2(1)
サ°ウ-竈 2(1)早 14(11)遭 6(5)槽 3 藻 1 枣 1 蚤 2 艸 29(27)爪 2 皂 2 造 8(2)搔 1	
モ°-没 76(72)墨 3(2)默 3 陌 1 脉 2 麦 6(5)	
モン-門 20(19)們 11(10)悶 8 夢 4(1)	
エ°-悅 2(1)	悅-エ 2(1)
テ°イ-地 21(1)	地-デイ 21(15)テイ 21(5)
メ°-面(面)36(1)	面(面)-メン 36(35)
チ°ヨン-虫(蟲)14(1)	虫(蟲)-ヂヨン(13)

注:「潑」字について、「二字話」の「撒潑(ハ°)」の対訳「イタツラスル」であり、「六字話」に「你等休要撒撥(ハ°)」があり、対訳は「汝等イタツラスルナ」である。例のように、同じ「いたづら」意味である六字話の「撥」は「潑」の誤字と考えられる。なお、同書の「撥」は、「撩撥 リヨグハイ」「点撥端的 ゴクイヲシナンスル」などの 5 例となっている。

表 3-1 のように、「°」は多くの仮名に付けられている。表の中に、漢字の後の数字について、括弧のない場合、漢字の延べ数は「°」の用例数と同じであり、括弧がある場合、括弧の中が「°」の用例数となっている。このように、「°」が大量に使われていることが分かった。

『唐話纂要』の右肩点については、ハ行に対するもの、「サ」に対するもの、沼本(1990)のいう中国語の[-ə]に対応するとされるもの、の三種類の存在が先行研究で明らかにされている。しかし、ハ行に対するものと「サ」に対するものの中国語音との対応関係については、前者には、[p-]と[p-],[p'-]、後者にも[ts-]と[ts'-]それぞれ二種類の見方が存在している。また、[-ə]に対応するとされるものに関しても、「没」「根」「客」の他にどんなものがあるかが明らかになされていない。右肩点に関するこれらの問題点の解明およびその他極稀に見る例について検討することが本節の目的である。

1.2 使用意図の分析

表 3-1 の使用例を字種別に集計した結果は表 3-2 のように、右肩点「°」の使用例は延べ 1,256 例あり、字種にして 210 字であり、使用状況は四種類に分けることができる。

本研究の表では、「字種数」は当該使用例が確認された漢字の異なり数、「延べ数」は各字種の延べ数、「用例数」は「使用例」の数を示す。中国語音については、第二章第四節で述べたように、中古音、南方官話の代表である南京音、呉方言の代表である蘇州音の他、杭州音も比較の対象として検討する。

表 3-2 右肩点の使用状況

分類	使用例	字種数	延べ数	用例数
ハ行の仮名に用いられる場合	ハ°	45	203	198
	ヒ°	41	152	139
	フ°	6	415	405
	ヘ°	26	107	72
	ホ°	22	60	58
	小計	140	937	873
「サ」に用いられる場合	サ°	45	217	155
「没-モ°」など[ɔ]をもつ字に対する仮名に用いられる場合	モ°	10	134	123
	ケ°	8	73	32
	テ°	1	88	1
	ス°	1	91	62
	ベ°	1	7	6
	小計	21	393	224
その他の場合	チ°	1	14	1
	メ°	1	36	1
	エ°	1	2	1
	テ°	1	21	1
	小計	4	73	4
合計		210	1,620	1,256

1.2.1 ハ行に用いられる場合

ハ行の右肩点の使用状況について、表 3-3 により、右肩点がついているのは主に中古音の幫母 [p-]、滂母 [p'-] に所属する字であるということが分かる。なお、並母 [b-] に所属する字も少数ではあるが、存在している。また曉母と明母などの例も確認された。右肩点が付されていない重唇音声母の例について、各声母の部分で検討するように、記入漏れによる可能性が高い。

右肩点が幫母の字に用いられるのは延べ 79 字種 356 例で、滂母の字に用いられるのは延べ 35 字種 88 例である。[p-] と [p'-] は共に無声の両唇破裂子音で、両者の違いは無気か有気であり、この対立は南京音、蘇州音、杭州音のいずれにおいても保持されている。

表 3-3 ハ行の右肩点の使用状況

字母	字種数	延べ数	用例数	使用例	南京音	蘇州・杭州音
幫 [p-]	79	366	356	ハ°-八撥 ハ°ア°-巴把芭芭耙耙 ハ°イ-拜 ハ°○ウ-報爆豹保包寶苞襪 ハ°ン-半板版班般搬扮榜幫扳絆誘 ヒ°-必壁碧畢筆秘鸚鵡 ヒ°イ-庇比蔽鶻秘閉響 ヒ°ヤ○ウ-表 ヒ°ン-兵柄冰秉賓餅併併 フ°ウ-補布 へ°-栢伯百 へ°エ-栢檠 へ°エン-奔本 へ°ン-遍鞭扁編匾變蘊邊 ホ°-博ト鉢 ホ°イ-盃背悲貝輩 ホ°ウ-波菠	[p-]	[p-]
滂 [p'-]	35	94	88	ハ°-潑叭 ハ°ア°-怕葩 ハ°イ-派 ハ°○ウ-泡砲拋 ヒ°-僻劈疋ヒ°イ-批披譬撇 ヒ°ヤ○ウ-漂票嫖標 ヒ°ン-品 フ°ウ-普舖 へ°-珀魄 へ°ン-片偏偏 へ°エン-噴 ホ°-撲扑拍朴 ホ°イ-配 ホ°ウ-頗破	[p'-]	[p'-]
並 [b-]	11	73	31	ハ°-鉞 ハ°ア°-杷 ハ°イ-排 ハ°○ウ-鮑 ハ°ン-棒 ヒ°イ-被裊 ヒ°ン-牝 フ°ウ-蒲 へ°-別白帛苜苜 へ°ン-癩 ホ°-泊勃 ホ°イ-佩 ホ°ン-棚 ホ°ウ-婆	[p-]/ [p'-]	[b-]
曉 [h-]	1	7	6	へ°-黒	[x-]	[h-]
明 [m-]	2	2	2	ヒ°- 蔑蟻	[m-]	[m-]
見 [k-]	1	1	1	ホ°イ-鴟	[k-]	[k-]
非 [f-]	2	401	395	ハ°ン-販 フ°-不	販 [f-] 不 [p-]	販 [f-] 不 [p-]
その他	2	2	2	ハ°ア°- <u>祀</u> ハ°ン- <u>樸</u>		
合計	142	946	881			

注：・「耙」：『広韻』未収、『大漢和辞典』に「[篇海⁸⁵]必駕切」とあり、幫母に所属。
 ・「杷」：『漢語大字典』にあり、発音は「巴」などと同じ[pɑ]で、「巴」は「伯加切」で、声母は無声無気の両唇破裂音と推測される。
 ・「撥」：『広韻』未収、『字彙』に「今俗音作般」とある。
 ・「鸚」：原例が「禽鳥」の「鸚鵡 カイツブリ」であり、『広韻』に未収、「鸞」が「扶歴切 鸚鵡鳥名」となり、『康熙字典⁸⁶』に「[篇海]必益切 音辟鳥名鳩也又與鸞同」とある。『集韻⁸⁷』に「鸚」が「必益切 鸚鳥鳥名鳩也」との幫母の読みもある。この音注は幫母の読みと対応している。
 ・「響、併」の南京音は[p'-]。
 ・「偏」：『広韻』などに未収。原例は「喫偏(キヘン) ダマサル」「喫他偏(キタア、ヘン) カレニダマサル」「須要防偏子(スエ、ヤ○ウバンヘンツウ) ゴマノハイノ用心ヲセヨ」であり、訳が「ダマサル」という意味であるため、「騙」と見なす。
 ・「苜」：「へ°-苜(1)」は、原例が「菜蔬」の「海苜 メイハ」で、『広韻』未収、『集韻』に並母の「薄陌切 姓也」とある。
 ・「苜」：「へ°-苜(1)」は、原例が「菜蔬」の「苜菜 トウナ」であり、『広韻』『集韻』に未収、『漢語大字典』に「音同箔」とあり、「箔」は『広韻』では並母の「傍各切 簾箔」であり、意味も一致しない。

⁸⁵ 『篇海』：原名は『改併五音類聚四声篇』で、「篇」とは『玉篇』の意味。金の韓孝彦・韓道昭父子によって1208年に編纂された字書。全十五巻であり、444部を部首の字の発音によって類別し、五音三十六字母、すなわち頭子音の順に並べる。見母金部に始まり、日母日部に終わる。頭子音の同じ部首は平・上・去・入の四声によって並べている。同じ部首の字を筆画順に並べており、部首画数引き字書である。(『四声篇海』小川(1981)『中国の字書』pp.268-272)

⁸⁶ 『康熙字典』：中国清代の漢字の字書。42巻。康熙帝の勅命により、張玉書、陳廷敬ら30人が5年をかけて康熙五十五年(1716)成立。十二支の順に12集(おのおの上、中、下あり)に分け、4万7035の字数を収める。『説文解字』(漢、許慎撰)、『玉篇』(梁、顧野王撰)、『唐韻』(唐、孫愬撰)、『広韻』(宋、陳彭年ら奉勅撰)、『集韻』(宋、丁度ら奉勅撰)、『古今韻会举要』(元、熊忠撰)、『洪武正韻』(明、宋濂ら奉勅撰)など、歴代の代表的な字書を参照し、とくに『字彙』(明、梅膺祚撰)、『正字通』(明、張自烈撰)に基づく部分が多い。214の部首を各部首に配属させて画数順に配列、各字について反切による発音、訓詁、字解をつけ、俗字、通用字を示してあり、今日の漢字字典の体裁がここに定まったといえる。ただし、熟語は収録していない。道光7(1827)年、王引之が命を受け『字典考証』をつくり、2588条を訂正しており、日本でも渡辺温の『訂正康熙字典』がある。(『康熙字典』小川(1981)『中国の字書』pp.280-284)

⁸⁷ 『集韻』：北宋景祐六年(1039)に宋の丁度によって作られた韻書。平声4巻・上声2巻・去声2巻・入声2巻の全10巻。『広韻』を増補改訂したもので、韻目数は206で変わらないが、順序や韻字の一部違いがみられる。収録字数はほぼ2倍で、異体字や異読を多く収める。当時の発音に近づけるようにしたため、『広韻』とは小韻の所属、および反切用字法のうえで差異が生じている。

また、先行研究には言及がない全濁声母並母 [b-] に所属する字の一部にも右肩点がついていることが確認され、延べ 11 字種 31 例である。中古音の全濁声母は官話系方言では無声化し、失われたのに対して、呉方言では失われず、清濁の対立が維持されている。第四章で検討するように、『唐話纂要』にある並母の字は、全 69 字種、延べ 299 字で、「小曲」の 10 例を除き、非濁音音注の例は計 48 例である。中に濁点の記入漏れ及び省略となるのが 16 例で、このように、これらの例以外、濁音仮名による音注の比率は全体の 85% に達している。後述するように、並母以外の全濁声母も原則濁音仮名で音注され、清濁の対立を維持する呉方言の特徴を色濃く反映している。ところで、表 3-4 の並母の字はいずれも用例数が少ないが、字種が少ないとは言えない。これには、いくつかの理由が考えられる。

表 3-4 並母字における右肩点の使用状況

字種	使用例	延べ数	用例数	字種	使用例	延べ数	用例数	字種	使用例	延べ数	用例数
鮑	ハ°○ウ	1	1	杷	ハ°アハ(バアハ)	2	1	牝	ヒ°ン	1	1
瓣	へ°ン	1	1	稗	ヒ°イ	1	1	排	ハ°イ	3	3
被	ヒ°イ(ビイ ボイ)	4	1	泊	ホ°	1	1	勃	ホ°	2	2
蒲	フ°ウ(ブウ)	3	1	昔	ペ	1	1	佩	ホ°イ	3	3
棒	ハ°ン(パン ハン)	4	1	箔	ペ	1	1	棚	ホ°ン	2	2
別	へ°(ベ)	16	4	帛	へ°	1	1	婆	ホ°ウ	2	2
白	へ°(ベ へ)	23	2	鉞	ハ°	1	1				

注：括弧はそれ以外の音注を示す。

先ず、「鮑、瓣」2 字は『広韻』に全濁声母の読みしかないが、『集韻』などでは全濁音声母の他、全清または次清の読みもある。「ハ°○ウ-鮑⁸⁸(1)」は、原例が「虫介」の「鮑魚^{ハ°○ウイユイ} アハビ」で、『広韻』には並母の「薄巧切 鮑魚」であり、「へ°ン-瓣⁸⁹(1)」は、原例が「菜蔬」の「瓣兒^{へ°ンルウ} 瓜ノヘタ」で、『広韻』には「蒲莧切 瓜瓠瓣也」と同じ並母の読みしかない。「鮑」「瓣」2 字は蘇州・杭州音では濁音が保存され、[b-]と発音するが、南京音では[p-]となっている。このように、清音音注となるのは南京音から説明できる。なお、山攝の部分で検討するように、「瓣」は韻母の面では「ペン」が説明できないため、字体の近い「辨」などの類推による可能性がある。

⁸⁸ 「鮑」は、『集韻』には「披交切 魚名」との滂母の読みもあるが、意味は並母の読みに近い。

⁸⁹ 「瓣」は、『集韻』には「匹見切 瓠中實」との滂母の読みもある、意味は並母の読みに近い。

また、「ホ°-泊」は『広韻』に並母宕攝「傍各切」の読みしかないのに対して、『集韻』には滂母梗攝の「匹陌切 竹密貌」との次清音の読みもあり、音は合うが、意味「竹密貌」は『唐話纂要』の「東漂西泊」と合わない。一方、蘇州・杭州音には濁音の他、清音 [p' -] の読みもあるので、南京、杭州、蘇州音のいずれから説明できる。

次に、「被蒲棒別白」5字に対する右肩点は全て第六章で取り扱う官話音による音注がなされている巻五の「小曲」に集中して使われている。それぞれの原例は、「被襖兒」「往蒲東」「棒槌兒槌」「別下了奴(2回)」「你在別人家坐」「你在別人家睡」「白馬將軍」「李花白」となっている。これらの濁音声母の字は「小曲」以外の部分ではほとんど濁音と音注されていることから、付されている右肩点は「小曲」の官話の特徴を示すものと考えられる。

更に、第四章の声母部分で検討するように、「杷」は幫母の「把-ハ°ア\」による類推の可能性が高い。「稗」は蟹攝二等(主母音は半広音)の字で、「ヒ°イ」とは韻母が一致しないため、「卑」(幫母三等)による類推の可能性が高い。

「排鉞帛苜蒔勃佩棚婆」9字についても、第四章で述べるように、原例はそれぞれ、下記の通りである。

「ハ°イ-排(3)」「歩皆切」^{アンハ°イヂヤヤ○ウニズウ}安排着要議事 ^{アンハ°イキエンタ○ウエンジン}按排圈套陷人 ^{トウズウミンアンハ°イ}都是命安排
「ハ°-鉞(1)」「蒲撥切」^{ナ○ウハ°}鑄鉞
「へ°-帛(1)」「傍陌切」^{ツウクウイ\、コへ°ライクイエ\}自古以穀帛爲貴也
「へ°-苜(1)」「薄陌切」^{ハアイへ°}90海苜
「へ°-蒔(1)」「『広韻』未収」「漢語大字典」音同箔 傍各切 ^{へ°サ°イ}蒔菜
「ホ°-勃(2)」「蒲沒切」^{ホ°ゼンダア\ノウ}勃然大怒 ^{マア\ホ°}馬勃
「ホ°イ-佩(3)」「蒲昧切」^{ホ°イヒヤン}佩香 ^{カンホ°イウ\イヤア}感佩無涯 ^{カンホ°イ}感佩
「ホ°ン-棚(2)」「薄庚/薄萌/步崩切」^{ロウホ°ン}檐棚 ^{ハ°イホンテイ}拜棚頂
「ホ°ウ-婆(2)」「薄波切」^{ワイボウ}外婆 ^{ラ○ウボウ}老婆

それ以外の「**祀**子(ハ°ア\)」**舵** ^擲(ハ°ン)の「**祀擲**」2字は『広韻』『康熙字典』『大漢和辞典』『漢語大字典』などの字書には収録されておらず、「**祀**」

90 「へ°-苜(1)」は、原例が「菜蔬」の「^{ハアイベ}海苜 メイハ」であり、『広韻』未収、『集韻』に並母の「薄陌切 姓也」と滂母の「披巴切 説文華也」があるが、滂母の方は韻尾が音注と一致できず、意味上では二種類の読みとも対応しない。

は日本語の意味が「トロメン」となっていることから、「絹、木棉」意味の和製漢字である「紵」と同様な発想によるもので、「ハ°ア、」は「巴」を類推したものと考えられる。「攀」は「ハ°ン」が声符の「攀」(次清 [p'-])と同じ音である。

曉母と明母の3字種については、先ず、注目すべき例は曉母の「黒-ペ」である。岡島冠山が編集した『唐話類纂』に同じ例が見られ、下記のように、沼本(1990)によって母音[-ə-]に対する注意であると指摘されている。

岡島冠山唐話類纂(享保十年<1726>刊)

黒ペ等 hə 音
諱ホ°イ等 hai 音 } 稀

しかし、『唐話類纂』より約10年前に編纂された『唐話纂要』に存在していることは管見の限り、言及されていない。

表 3-5「黒」の表記例

表記	内容所在	漢字	音注
へ°	二字話	黒暗	へ°アン
		黒夜	へ°エ、
		漆黒	ツエへ°
		烏黒	ウ、へ°
	四字話	黒洞洞地	へ°ドントンデイ
		黒暗暗地	へ°アンアンデイ
へエ	果瓜	黒糖	へエダン

表 3-5 の「黒」の表記例から分かるように、『唐話纂要』で7例の中、右肩点付き「ペ」の用例数が6例占め、1例のみが「へエ」との長呼型音注となっている。ハ行につく右肩点は全て中国語の両唇音に対応しているが、「黒」だけは違う。「黒」は喉音の曉母[h-]字で、現代漢語で唇音に転じたという報告は一切ない。そして、南京音[xəʔ]と蘇州音[həʔ]とも[-ə-]をもつことから、この右肩点は両唇音という子音ではなく、沼本(1990)の指摘している[-ə-]という主母音の場合に対応するものである。なお、「ペ」と「へエ」は同じ音を示す表記法である。

次に、「蔑兒」「蟻蠓」2例あるが、明母の「蔑蟻-ヒ°」2字とも鼻音の山攝四等の字である。山攝四等の字はエ段になるのが一般的だが、イ段となるのは問題である。反切「莫結切」で、蘇州音で[mieʔ]、南京音で[mieʔ]、杭州音で[mirʔ]となっている。声母の面でも、中国語の発音の変遷においては、鼻音

から無声の両唇音への変化がなく、同書でもこの 2 例だけである。従って、この二つの字に対する右肩点については、別の字の発音を注したものと考えられる。

「鵙」について、『康熙字典』に「[韻會⁹¹]肩闐切」とあり、見母錫韻の字である。声母と韻母との何れも「ホ°イ」と合わないため、声符「貝-ホ°イ」による類推の結果と考えられる。

非母の「販」については、南部吳方言、特に衢州地区の多くの地点において「反」などの軽唇音は白話音では重唇音と区別がないという現象が知られている。このことから、「販」の音注「ハ°ン」はそのような重唇音の読みをもつ声符「反」による類推の結果である可能性は否定できない。

非母の「不」の場合、『広韻』に流撰の「甫鳩切(平声)/分物切(上声)/甫救切(去声)」と臻撰入声の「分勿切」とあり、「フ」は臻撰入声の「分勿切」と対応するものである。「フ-不 400(5)」は 5 例が「不^{フ°ゼン}然 不^{フツエ}則」「不^{フ°バアヒウ}罷休」「^{ツェンサ°フ°テ}掙扎不得 ^{ドンタンフ°テ}動担不得」「不^フ敢抵頼 不^フ好意思」「不^フ要護短 不^フ省人事」で、「フ」は右肩点の記入漏れである。「ダアゝ-不 400(1)」は、同頁に「波^{ホ°ウランダアハツフ}浪不^{ホ°ウランダアハツフ}作」の例があり、「ダアゝ」は明らかに直後の語彙の影響を受け、「大」による誤記である。また、南京音は[pʊʔ]、蘇州音は[pəʔ]、杭州音は[pɐʔ]となり、『同文備攷』に[fu][vu][fəu][vəu][pət][fət]とあり、「フ」は声母面では両方言から説明できるが、韻母面も併せて南京音から一致する。

上記の検討により、並母[b-]所属字への右肩点の用例が例外的なものであり、右肩点は主に中古音の幫母[p-]、滂母[pʰ-]と対応していることが明らかになった。[p-]と[pʰ-]は共に無声の両唇破裂子音であることから、ハ行に対する右肩点は、「黒」を除き、中国語の無声の両唇破裂音に対応するのがその使用意図であるということを知ることができる。右肩点に対応する無声の両唇破裂音には無気の[p-]のみならず、有気音の[pʰ-]も含まれているため、右肩点は中国語の[p-]音と対応しているだけでなく、[pʰ-]音とも対応しているということが言える。

⁹¹ 『韻會』は『古今韻会举要』を指す。元代に編纂された韻書の一つ。元の黄公紹の撰した《古今韻会》が大部すぎるとして、熊忠が簡略化した韻書。30 卷。大徳一年(1297)成立。通用韻を併せ 107 韻とし、各韻に収める字は三十六字母により配列されている。

1.2.2 サに用いられる場合

「サ」に右肩点が用いられる用例は延べ 155 例で、45 字種である。表 3-6 の通りである。

これらの字の中国語中古音の声母は主に歯頭音の精母 [ts-]、清母 [ts' -]、正歯音の莊母 [tʂ]、初母 [tʂ'] に属している。南京音、旧派蘇州音、旧杭州音では、[ts-] と [tʂ-]、[ts' -] と [tʂ' -] が対立をおおむね維持しているのに対して、現代蘇州音と現代杭州音では、その区別はなく、[ts-] と [ts' -] に合流している。この四つの声母の共通点は全て破擦音の無声声母で、有気か無気かがその違いである。よって、「サ」に対する右肩点は破擦音を示すのがその意図であることが分かる。

「サ°」「サ」両音注を有するのは「哉遭早采艸猜」6 字で、それぞれは下記のようにになっている。

精母：サ°イ-哉 6(5) サイ-哉 6(1)
 サ°○ウ-遭 6(5) 早 14(11) サ○ウ-遭 6(1) 早 14(3)
 清母：サ°イ-采 2(1) 猜 5(4) サイ-采 2(1) 猜 5(1)
 サ°○ウ-艸 29(27) サ○ウ-艸 29(1)

「哉-サ°イ 6(5) サイ 6(1)」の場合、「哉」は「祖才切」で、原例が全て「長短話」のもので、下記の通りである。

「サイ」：アンネンジュイツイウサイ 安能如此哉
 「サ°イ」：ニンフ°メンサ°イ 寧不勉哉 ホウギイライフ°ゼンサ°イ 何其爲不然哉 キイシユイツヲヒヤアツウエンサ°イ 豈如足下之言哉
エンネンジュイツイウサ°イ 焉能如此哉 チエ、コウデンデイサ°イ 這個田地哉

「遭-サ°○ウ 6(5) サ○ウ 6(1)」の場合、「遭」は「作曹切」で、原例が下記のようにになっている。

「サ○ウ」：チウサ○ウキヤハ°ア 「四字話」周遭挾筈
 「サ°○ウ」：サ°○ウナン 「二字話」遭難 ヒヤアサ°○ウ 下遭 チエハサ°○ウ 這遭 サ°●ウツユイ 遭際
 「長短話」亦必得其遭際 イヒ°テキイサ°○ウツユイ

「早-サ°○ウ 14(11) サ○ウ 14(3)」の場合、「早」は「子皓切」で、原例が以下のようにになっている。

「サ○ウ」:^{サ○ウスエ}「二字話」早些 ^{コンハアハサ○ウ}「三字話」恐怕早 ^{ヒ°スエ、カンサ○ウ}「長短話」必須趕早
 「サ°○ウ」:^{サ°○ウジン}「二字話」早晨 ^{サ°○ウジャン}早上 ^{ツインサ°○ウ}清早
 「三字話」^{ジャンサ°○ウリヤ○ウ}尚早了 ^{ラ○サ°○ウキユイ}老早去 ^{コンギイサ°○ウ}恐其早
 「四字話」^{サ°○ウワンヒ°ライ}早晚必來
 「長短話」^{ヒイサ°○ウイユイ}幸希早愈 ^{インカイサ°○ウサ°○ウミンベ}因該早早明白 ^{ヒ°スエ、カンサ°○ウケンキヤ○ウ}必須趕早見教

「采-サ°イ 2(1)サイ 2(1)」の場合、「采」は「倉宰切」で、原例が下記の通りである。

「サイ」:^{フ°サイタアハ}「三字話」不采他 「サ°イ」:^{ダアハカサ°イ}「三字話」大喝采

「艸-サ°○ウ 29(27)サ○ウ 29(1)」の場合、「艸」は「采老切」で、「花草」の^{ツエツア○ウ}「席艸」1例「ツア○ウ」であり、それ以外の場合は「サ°○ウ」である。原例は以下のようになっている。

「サ○ウ」:^{サ○ウソ}「器用」艸索
 「サ°○ウ」:^{サ°○ウケンフ°リウ}「四字話」艸根不留 ^{サンサ°○ウチユイケン}斬艸除根 ^{センシユイサ°○ウツウ}善書艸字 ^{チエンヂヤサ°○ウヒヤイ}穿着艸鞋
 「五字話」^{ユウツエンケンサ°○ウケ○ウ}有剪徑艸寇 「六字話」^{スウエハフ°ケンロサ°○ウ}死也不肯落艸
 「常言」^{ジュイチユンユンツウサ°○ウ}如春園之艸 ^{デイフ°ス°エンウハケンツウサ°○ウ}地不生無根之艸
 「器用」^{サ°○ウヒヤイ}艸鞋 ^{サ°○ウツエン}艸荐 ^{テンサ°○ウ}燈艸 ^{サ°○ウハ°ウ}艸包
 「米谷」^{ダ○ウサ°○ウ}稻艸
 「花草」^{ガイサ°○ウ}艾艸 ^{ヒエンサ°○ウ}萱艸 ^{クウサ°○ウ}菰艸 ^{スエサ°○ウ}薛艸 ^{ピンサ°○ウ}萍艸 ^{ケンサ°○ウ}芡艸 ^{ツウサ°○ウ}紫艸
^{インサ°○ウ}櫻艸 ^{ツユウサ°○ウ}萩艸 ^{ツエンサ°○ウ}茜艸 ^{イモウサ°○ウ}益母艸
 「虫介」^{サ°○ウモン}艸蟻
 「小曲」^{サ°○ウキヤ○ウキンモンホウツエンユウ}艸橋驚夢何曾有 ^{ヒエンサ°○ウルクワンキンツイ}萱艸兒含金嘴

「猜-サ°イ 5(4)サイ-5(1)」の場合、「猜」は「倉才切」で、原例が下記の通りである。

「サイ」:^{ヒウヤ○ウヲサイ}「四字話」休要惡猜
 「サ°イ」:^{サ°イニイ}「二字話」猜疑 「三字話」^{サ°イフ°ライ}猜不來 ^{サ°イテヂヤ}猜得着
 「六字話」^{ニイライホウゴウサ°イサン}你來和我猜三

「哉遭早采艸猜」6字に対する音注の共通点は、「サ」の表記例が全て初出ではないことである。日本語の書記習慣になかったものであるため、この6字に対する「サ」音注は右肩点「°」が記入漏れによるものと考えられる。

ここでも、いくつか全濁声母に右肩点が付される例が見受けられる。

表 3-6 「サ」に対する右肩点の使用状況

字母	字種数	延べ数	用例数	使用例	南京音	蘇州音
精 [ts-]	12	51	45	サ°イ-哉載再災 サ°ン-讚 サ°○ウ-竈早遭槽藻枣蚤	[ts-]	[ts-]
清 [ts'-]	12	69	65	サ°イ-采猜彩菜綵 サ°ン-慘滄滄蒼鶻 サ°○ウ-草	[ts'-]	[ts'-]
莊 [tʂ]	8	20	19	サ°-札扎紮 サ°イ-債齋 サ°○ウ-瓜 サ°ン-斬盞	[tʂ]	[ts-]
初 [tʂ']	7	10	10	サ°-察擦刹挿 サ°イ-差 サ°ン-瘡 サ°-柵	[tʂ']	[ts'-]
從 [dz-]	4	63	14	サ°イ-才在 サ°○ウ-皂造	[ts-][ts'-]	[z]
心 [s-]	1	1	1	サ°○ウ-搔	[s-]	[s-]
澄 [d-]	1	3	1	サ°ン-綻	[tʂ]	[d-]
その他	1	1	1	サ°ン-醱	—	—
合計	45	217	155			

注：・「醱」：『広韻』未収、『大漢和辞典』に「船倉の俗字」とあり、「倉」は清母。
・「柵」：南京音は[tʂ'-]。

從母の3字「才」「在」「造」と澄母の「綻」に対する右肩点の使用例の「大胆喬才」の「才-サ°イ」1例、「跳在我花園裏」「你在花街上闖」「只在牙床上坐」「你在别人家坐」「你在别人家睡」「青山在」「緑水在」「月下佳期在那裡」「我那情人的不在」の「在-サ°イ」9例、「造下了」「武則天娘娘的建造」の「造-サ°○ウ」2例、「綻薔薇」の「綻-サ°ン」1例は全て「小曲」のものであり、1.2.1で挙げた並母の例と同じく、官話の特徴を有する「小曲」の用例である。また、「皂」は『康熙字典』に「[正字通⁹²]俗阜字」で、「阜」が「俗読若竈、義同」とあり、「竈」は精母の字であり、「サ°○ウ」はこのような読みの反映と考えられる。心母の「搔」について、用例数1例のみで、「蚤-サ°○ウ」からの類推である可能性も考えられる。

上記の他に、「醱 醱 キタナヒ」の「醱-サ°ン」も確認され、『広韻』や『康熙字典』などが未収で、『漢語大字典』に収録され、「qiāng 用青稞酿成的酒,少

⁹² 『正字通』: 中国の字書。明の張自烈の撰。清の廖文英が序文(康熙19年=1680)を付し自著として刊行した。漢字の配列はまったく『字彙』の方式(214部首、筆画数による配列)に従い、各字に対する注解は権威ある古典、古字書の訓詁を広く集めて『字彙』の不備を補ったが、かえって冗漫なきらいも生じた。中国字書史では『字彙』と『康熙字典』をつなぐ存在である。(『正字通』小川(1981)『中国の字書』pp.279-280)

数名族的一種日常飲料」とあるが、音と意味のいずれも合わず、「滄艫-サ°ン」などから声符の類推によるものと考えられる。

以上の考察によって、南京官話と蘇州・杭州音の[ts-]と[ts' -]はともに無声の破擦音子音で、「サ」に対する右肩点は、そうした中国語の無声の破擦音を示すのがその使用意図であり、『唐話纂要』の「サ」に付される右肩点は無気の[ts-]のみならず、有気の[ts' -]にも対応しているということが明らかになった。『磨光韻鏡』では杭州音が「ツ」の音注で記されている。各声母の部分で論述するように「サ°」の音注を注する例は杭州音にも対応する。

なお、『唐話纂要』ではこれらの声母は、後接する母音が[i][e][o]の場合、「°」を用いずに、[a]という母音が後接する場合のみ右肩点が付されている。一方、わずかながら、以下のように、一部の「ツア」⁹³の表記も存在している。

差-ツア、6例 詐-ツア、2例 参-ツアン 1例 潛-ツアン 1例
簪-ツアン 1例 擲-ツアン 1例 窳-ツアン 1例 鑽-ツアン 1例
斬-ツアン 1例 草-ツア○ウ 1例

計 10 字種 16 例である。「サ°」と「ツア」の関係について、沼本(1990)でとりあげられた黄檗唐音資料の代表的なものであるの『慈悲水懺法』(寛文十年(1670)刊)の巻末に付されている中国語音の表記法についての説明に、

サ°字音自齒頭而出猶合ツア二字而呼之也……凡旁音有二音合為一音者ツア字之類是也……

とあり、中国語の[tsa]と[ts'a]は「サ°」と「ツア」二種類の表記法があることを示している。『唐話纂要』においても、「サ°」と「ツア」の両方が使われているが、「サ°」の方が主流であることが分かる。

⁹³ 「ツア」で表記された「茶-ツア」1例「査-ツア、」1例「才-ツアイ」1例「纒-ツアイ」1例「在-ツアイ」3例「財-ツアイ」2例「植-ツア、」1例「暫-ツアン」1例の濁声母の8字も存在する。

1.2.3「没-モ°」など[-ə-]の母音をもつ字に対する仮名に用いられる場合

沼本(1990)は[-ə-]の母音をもつ字に対応するものとして、「没」「客」「根」3例をとりあげ、これ等の例が稀であると指摘しているが、表 3-7 のように、ほとんど[-ə-]という主母音をもっているこれらの例は南京音と蘇州音と対照した結果では、「没」「客」「根」以外、19 字種の字に右肩点が付され、即ち、[-ə-]をもつ字に右肩点が付される字は、計 21 字種に上ることが分かった。また、全ては中古音の一等と二等の陽声韻(10 字)と入声韻(11 字)の字で、その中で、「夢」を除き、主母音がいずれも[-ə-]である。

表 3-7 「没」類の右肩点の字種と使用頻度

字	延べ数	用例数	使用例		南京音	蘇州音	杭州音
没	76	72	モ°	モ 4	[məʔ]	[məʔ]	[məʔ]
根	4	1	ケ°ン	ケン 3	[kən]	[kən]	[kən]
客	20	11	ケ°	ケ 9	[k'əʔ]	[k'əʔ][k'aʔ]	[k'ɐʔ]
格	1	1	ケ°	/	[kəʔ]	[kəʔ][kaʔ]	[kɐʔ]
克	1	1	ケ°	/	[k'əʔ]	[k'əʔ]	[k'ɐʔ]
更	18	4	ケ°ン	ケン 14	[kəŋ]	[kən][kã]	[kən]
庚	4	2	ケ°ン	ケン 2	[kəŋ]	[kən][kã]	[kən]
肯	24	11	ケ°ン	ケン 12 ヴン 1	[k'əŋ]	[k'ən]	[k'ən]
坑	1	1	ケ°ン	/	[k'əŋ]	[k'ən][k'ã]	[k'ən]
生	91	62	ス°エン	スエン 29	[səŋ]	[sən][sã]	[sən]
得	88	1	テ°	テ 87	[təʔ]	[təʔ]	[tɐʔ]
墨	3	2	モ°	モ 1	[məʔ]	[məʔ]	[məʔ]
黙	3	3	モ°	/	[məʔ]	[məʔ]	[məʔ]
陌	1	1	モ°	/	[məʔ]	[məʔ][maʔ]	[məʔ]
脉	2	2	モ°	/	[məʔ]	[məʔ][maʔ]	[məʔ]
麦	6	5	モ°	モ 1	[məʔ]	[məʔ][maʔ]	[məʔ]
門	20	19	モ°ン	モン 1	[məŋ]	[mən]	[mən]
們	11	10	モ°ン	無表記 1	[məŋ]	[mən]	[mən]
悶	8	8	モ°ン	/	[mən]	[mən]	[mən]
夢	4	1	モ°ン	モン 3	[məŋ]	[moŋ]	[moŋ]
黑	7	6	ヘ°	ヘエ 1	[xəʔ]	[həʔ]	[hɐʔ]
計	393	224	—	—	—	—	—

注：・蘇州音で二つの発音を有する漢字は、葉(1988)によると、前が文語音で、後が口語音。
 ・現代杭州音の場合、錢(1992)により、旧派杭州音では[-ɐʔ]は[-əʔ]と[-aʔ]との二種類の読みがある。
 ・「肯-ヴン」は誤記。

「夢-モ°ン」の場合、蘇州音と杭州音では[ən]となるのは主として臻摂、梗摂の字で、[əŋ]となるのは通摂の字である。音注が「モン」となるのは、通摂の「夢」と臻摂合口「門、們、悶」で、『磨光韻鏡』でも、「夢」は「モン」で、「門、

們、悶」も「モン」である。これに対し、臻攝の開口と梗攝開口一等はともにエ段となっている。入声韻の字の内、杭州音の主母音は[a]となっているのが多く、現代の変化のようである。『磨光韻鏡』で概ねエ段の音注となっていることは元々[ə]のような発音だったことを示唆している。「モ」となっているものの中には、「没」は元々臻攝合口一等の所属で、現代杭州音でも[o]の読みがあり、「墨」と「黙」も現代音に[moʔ]の読みがあり、問題がない。「麦、脉、陌」は両唇音の子音による影響だったと考えられる。

また、これらの字の用例数は、21字種を併せて224例に達し、字種別の出現頻度でも、「没」への右肩点の使用率が95%近くに達するなど、高い使用率を有するものも多く、字種の面においても字種別の使用数においても決して稀ではないという事実が分かる。

なお、1.2.1 でとり上げた「黒」、右肩点も子音に対する注意ではなく、母音に対する注意であるということはこの表から見て明白な事実である。

1.2.4 その他の場合

『唐話纂要』では、1.2.1 から 1.2.3 までの場合以外にも、右肩点の用例が確認されている。表 3-8 のように、「悦-エ°」「地-テ°イ」「面-メ°」「虫-チ°ヨン」の 4 字種における右肩点がその例である。これらはいずれも先行研究に指摘のない例で、いずれも 1 例のみであり、右肩点の意図は次のようにも考えられる。

表 3-8 その他の場合における右肩点の使用状況

字種	延べ数	用例数	使用例	南京音	蘇州音	杭州音
悦	2	1	エ° (エ 1 例)	[yəʔ]	[yəʔ]	[ɦyɪʔ]
地	21	1	テ°イ (デイ 15 例 テイ 5 例)	[ti]	[di]	[di]
面	36	1	メ° (メン 35 例)	[mien]	[mi]	[mie]
虫	14	1	チ°ヨン (ヂヨン 13 例)	[tʂ'əŋ]	[zəŋ]	[dzəŋ]

①「悦-エ°」の場合

原例は「軍民皆歡悦(エ)」「曷堪怡悦(エ°)」である。「悦」は于母の合口字で、円唇の前舌介母[-y-]を有する。延べ 2 例で、音注は「エ°」と「エ」各 1 例である。ここの右肩点は日本語にない円唇の前舌母音[-y-]に対する注意点であると考えられる。曖昧母音の[-ə-][-y-]の表記法として、前述した沼本(1990:5-6)は下記のような用例を数多く取りあげ、『慈悲水懺法』のこの「°」と対応する「母音のうち曖昧母音(「ü」「ə」)を含む場合」として解説している。

雨イ° 魚イ° 預イ° 汝イ° 云イ° ン 雲イ° ン	}	ü~jü
于ウ° 運ウ° ン		
渝ユ° 愈ユ°		
去キ° 拘キ° 倨キ° 居キ° 君キ° ン	}	kü~kjü
具キ° ヽ 俱キ° ヽ 懼キ° ヽ 鋸キ° ヽ		
...		
語ニ° ヽ ɲü		
驢リ° ヽ lü		
而ル° 二ル° 尔ル° 律ル° 耳ル°	}	ər
悶モ° ン 門モ° ン	}	-ən
懇コ° エン 墾コ° エン		

『唐話纂要』では[-y-]母音を有する「雨-イユイ」「須-スエ、」「月-エ」との試みが見られ、一定しておらず、右肩点の「°」もそうした試みの一つの可能性がある。一方、上述したように、[-ə-]をもつ発音を記する可能性も考えられる。

②「地-テ°イ」の場合

「地」は定母止撮三等の字である。延べ 21 例あり、「テ°イ」は 1 例のみで、「陷城略地」である。他は、「デイ」15 例と「テイ」5 例ある。前述の『慈悲水懺法』の表記法にある「如テ°ト°字須合上下齒而呼之猶不正呼其體而唯呼其用也」という説明に従えば、「テ°」の右肩点は[ti]に対する注意であるということになる。「デイ/テイ」は、仮名表記だと、[dei]/ [tei]になってしまうため、そうならないように、注意する必要もあった可能性があり、「-イ」は陰性韻の字に対する長呼型音注となる。一方、右肩点「°」の例は 1 例しかなく、定母の字に対して、ダ行の音注が一般的であるので、この「テ°」は濁点の誤記による可能性が極めて大きいと考えられる。

③「面⁹⁴-メ°」の場合

「面」に対する音注は、「メン」が 35 例で、「メ°」が 1 例しかない。「メ°」は「メン」の「ン」が脱落したものと考えられる。「面」は明母山撮三等の字で、介音[i]があり、「メン」は、仮名表記だと、[men]になってしまうため、介音[i]があり、[mien](メイン)であることに注意をする必要があった可能性がある。

しかし、原例は 1 例のみで、「面^{メ°スエンテジン}生的人」となっている。後述する 4.1 で検討するように、入声音注の「メ」と入声点「○」は「面生」という語のみに用いられる。右肩点の「°」も同じであるため、「メ」に用いられる「°」は特定の語の発音に対する注意とも考えられる。また、誤記の可能性も排除できない。

④「虫⁹⁵-チ°ヨン」の場合

⁹⁴ 「面」字について、同書では「面」「面」二種類の字体があり、『広韻』に「彌箭切 向也前也俗作面」とある。本研究では用例数の多い「面」を採用する。

⁹⁵ 「虫」の同書における字体について、原例は、

「畜獸」大虫 「蟲介」蚕虫 螢虫 蝸虫 蠹虫 蝸虫 蛆虫 蟻虫 蠶虫 蠶虫 滑虫 鼓蟲 𧈧虫 𧈧虫
のように、「虫」「蟲」「𧈧」3種類が使われている。本研究では「虫」に統一する。

「虫」は澄母通攝の三等の字である。14 例の内、「ヂヨン」が 13 例で、「チ°ヨン」が 1 例の「滑虫」のみである。『慈悲水懺法』では、「チ°」に関する説明がされていないが、沼本(1990)によって、

助ツ° 阻ツ° 僂ツ°	}	tsü ~ tʃü
猪チ°ユ 軸チ°ユ 厨チ°ユ 暑チ°ユ 柱チ°ユ		

のように、「チ°」は「母音の内曖昧母音(「ü」)」、「子音の内、破擦子音 [ts-][tʃ-]」を写すものと解釈されている。「虫」の母音は[ü]ではないことから、「チ°」の右肩点は破擦子音に対する注意点として説明できる。沼本(1990)によって取りあげられた唐音資料にある実際の使用例を通して、黄檗唐音資料以降、「チ°」の使用がほとんど消滅したと考えられるが、破擦子音に対する注意記号として使われた可能性がある。一方、「地」と同じ、同書では澄母の字に対して、「ヂ」の音注が圧倒的に多く、「チ°ヨン」が 1 例しかなく、誤記の可能性も極めて高いと考えられる。

このように、「悦」「地」「面」は母音、「虫」は子音に対する注意であると説明することも可能である。字種別の使用比率は低いが、中国語音との日本語音の違いを何とか示そうとする著者の試行錯誤を窺わせるものとして無視すべきものではない一方、同書の全体的な音注状況によって、誤記の可能性は大きく存在している。

以上、本節の冒頭で挙げた問題点について右肩点の使用状況を考察してきた。その結果を以下のようにまとめることができる。

- (1)ハ行に対する右肩点は、一部の例外を除き、中国語の無声の両唇破裂子音の無気音 [p-] のみならず、有気音 [p'-] にも対応することが確認でき、先行研究の内、[p-] にも [p'-] にも対応する説に一致する。但し「黒-ペ」には該当しない。また、幫・滂母の字に対して、右肩点の使用が一般的であるが、僅かに一部の字に対してハ行とバ行の音注も存在している。それに、並母の少数の一部の字にも右肩点の使用も見られる。これについては次の第四章で検討する。
- (2)「サ」に対する右肩点は、[ts-] のみならず、無声破擦子音 [ts'-] にも対応することが明らかになった。破擦音 [tsa] に対して、右肩点を使用した

「サ°」の他に、「ツア」も存在するが、「サ°」の使用例が圧倒的に多く、同書において「サ°」が主流であることが確認された。

- (3)母音[-ə-]をもつ字に対する右肩点は、多くの字種と高い使用頻度を有する。一方、表 3-7 から分かるように、字によってばらつきが激しく、76 例中 72 例使用という圧倒的多数を占めるものもあれば、88 例中 1 例しかないという極く少数のケースもある。「黒」に対する右肩点もこの分類に入る。
- (4)上記以外に、「悦」などに対する右肩点の使用例も誤記の可能性は大きいものの、それぞれに右肩点の使用理由が考えられなくもないことから、無視すべきではない。

第二節 中間点「○」について

2.1 中間点「○」の使用実態

本節で『唐話纂要』の中間点「○」の使用について検討する。まず、同書の使用例を表 3-9 にまとめている。

表 3-9 中間点が用いられる漢字の表記

中間点「○」の使用例	非中間点の表記
ア○ウ-懐 2 豪 5(2)	
ツア○ウ-艸 29(1)1	
ツア○ウ-造 8(6)掉 1	
ウエ○ウ-浮 1 袍 1	
スエ○ウ-嫂 2 搜 7(6)	搜 -スエン 7(1)
ツエ○ウ-走 40(38)湊 3 鯁 1 愁 6(4)縹 1 雛 1 去 59(1)	走 -ツエ○ 40(1) 去 -キユイ 59(58)
ヅエ○ウ-驟 1 愁 6(2)	
ソエ○ウ-走 40(1)	
へ○ウ-否 4 覆 2(1)	覆 -ホ 2(1)
エへ○ウ-鷗 1 謳 2 嘔	
カ○ウ-考 2 膏 2 高 13 告 11 羔 1 靠 5 篙 2 熬 4(2)	
ガ○ウ-傲 3 熬 4(2)黨 2	
ケ○ウ-勾 5 口 25 叩 1 寇 2 枸 1 苟 4 鈎 6 頭 64(1)狗 7(6)拘 1	狗 -キユイ 7(1)
ゲ○ウ-偶 3	
サ○ウ-燥 1 噪 1 掃 6 臊 4 嘈 1 早 14(3)艸 29(1)竈 1 遭 6(1)梢 2(1)	
サ°○ウ-槽 3 藻 1 蚤 2 皂 2 搔 1 枣 1 遭 6(5)早 14(11)艸 29(27)竈 1 造 8(2)爪 2	
シ○ウ-蝮 1	
タ○ウ-倒 11 刀 30 套 5 到 13 搗 1 討 8 逃 3 桃 4(2)道 22(5)	道 -ダウ 22(1)
ダ○ウ-盜 3 陶 1 萄 1 稻 2 導 2 鈎 2 桃 4(2)道 22(16)逃 3	
テ○ウ-兜 斗 透 偷 抖 閏 豆 14(1)投 13(2)蚪 頭 64(13)丟 4	
デ○ウ-痘 豆 14(13)投 13(11)頭 64(49)	頭 -デ○ 64(1)
ナ○ウ- 悩 悩 5 腦 3 饒 1 鬧 4	
ハ○ウ-好 99 號 9 耗 2 毫 1 蒿 1 麤 1 襖 1 豪 5(3)抱 5(1)暴 6(1)有 1 拗 2 飽 1	
ハ°○ウ-報 12 保 4 宝 5 裸 1 爆 1 豹 1 泡 1 砲 3 抛 1 苞 1 鮑 1 包 13(12)	包 -ハ°ウ 13(1)
バ○ウ-暴 6(5)袍 2 抱 5(4)胞 1 飽 1 跑 1	
へ○ウ-候 7 厚 6 後 32 猴 2	
マ○ウ-帽 2 毛 4 貌 3 猫 3 貓 1	
メ○ウ-牡 3 某 1	
ラ○ウ-牢 5 老 28 勞 5 撈 1 滂 1	
レ○ウ-樓 3 漏 3 喽 1 婁 1 樓 2	
ヤ○ウ-咬 1 腰 2 要 119 邀 2 鷄 2 搖 2 謠 2 鱸 1 堯 1	
キヤ○ウ-交 11 教 20 佼 2 巧 4 敲 3 狡 2 蛟 1 鳩 1 撓 1 絞 3 膠 1 較 3 鉸 1 鮫 1 攪 2 覺 5(1)喬 1 嬌 1 驕 1 橋 3(1)蕎 2 叫 10 僥 1 澆 2 驍 1	覺 -キヤ 5(4)
ギヤ○ウ-橋 3(2)蕎 2	
シヤ○ウ-少 24 燒 1	
ジヤ○ウ-擾 4 饒 2	
スヤ○ウ-稍 2 梢 2(1)稟 1 宵 2 小 35 消 11 硝 1 咲 17 鞞 1 蛸 1 簫 1	
チャ○ウ-財 13(1)炒 2 鈔 4 嘲 2(1)招 5 照 8(7)朝 6(5)苕 1	財 -ツアイ 13(2)ツアイ 13(10)照 -チャウ 8(1)
ヂヤ○ウ-嘲 2(1)兆 1 朝 6(1)	
ツヤ○ウ-焦 1 蕉 1 椒 3 鷄 1	
テヤ○ウ-弔 1 挑 3 跳 3 雕 1 彫 1	
デヤ○ウ-調 4 篠 1 條 3 掉 2	
ニヤ○ウ-鳥 31	
ヒヤ○ウ-孝 4 囂 2 票 7(1)表 6 曉 11 梟 3	
ヒ°ヤ○ウ-嫖 5(3)票 7(6)	
ビヤ○ウ-鰲 1 鰲 1 瓢 2 嫖 5(2)	
ミヤ○ウ-苗 1 妙 4	
リヤ○ウ-了 165 料 3 寥 1 撩 2 聊 1 蓼 4 繚 3 鷄 1	

このように、中間点が数多くの漢字に使用されていることが分かった。最初から中国語音を意識して用いられている右肩点と違って、中間点は本来日本語の表記に用いられるためのものだが、中国語の音注に用いられている時、その意図の解明が必要である。

既に整理したように、同書の中間点について言及があるのは六角氏、奥村氏、松村氏などであり、これらは近世唐音の全般について言及した張氏の範囲を出るものがなく、中間点を使用されているのは効撮(「ア段+○+ウ」と流撮(「エ段+○+ウ」)の字であることが明らかにされている。中間点の使用意図について、母音が連続発音しないように「割り点」として「ア段+ウ」と「エ段+ウ」に用いられる。問題となるのは、奥村(1992)が指摘している「イウ連母音の割ル注記」の表記例が同書で見られないことである。従って、同書の中間点「○」の使用状況をより詳細に調査するべきであり、また、その使用意図を再確認する必要もある。

使用状況と意図を確認する前、『唐話纂要』の中間点の書き方について、明確にしていきたい。「○」の書き方に関して言及したのは、松村(2011)である。具体的に、下記のように述べている。

先ずは表記法の問題であるが、教キヤ●ウ、教キヤ○ウの二通りの書き方が見られる。しかし前者の黒丸はここ一カ所にしか見られないので、単に白丸が潰れて黒くなったものである。片仮名内の丸符号としては白丸だけを認めればよい。(p.103)

しかし、松村(2011)が言及した「常言」の内容に、下記の表 2-10 から分かるように、黒丸「●」は一か所のみならず、「教-キヤ●ウ」以外、「走-ツエ●ウ」「要-ヤ●ウ」2例も見られる。なお、表 3-10 は『唐話纂要』の前五巻にある「●」付きの例を示すものである。「●」付きのこれらの例以外、全て「○」となっているが、意味に相違が見られない。つまり、「●」と「○」の同様な性格のもので、松村(2011)が指摘した通り、黒丸「●」は単に白丸「○」がつぶれて黒くなったものに過ぎないということである。

表 3-11 で明らかなおとおり、中間点の使用例は延べ 1,437 例で、字種にして 235 字であり、全て「～+ウ」の条件下で用いられている。段別に見た場合、「イ段+ウ」「ウ段+ウ」「オ段+ウ」の用例がなく、「ア段+ウ」と「エ段+ウ」だけに集中し

ている。つまり、『唐話纂要』では、「ア段+ウ」「エ段+ウ」が中間点の使用環境であるということが分かる。この235字種の内訳は、「ア段+ウ」が183字種、「エ段+ウ」が52字種である。以下、それぞれの使用状況について考察する。

表 3-10 「●」の表記例

漢字	仮名表記	内容目次	唐話	仮名注音
討	タ●ウ	長短話	因要討一個好媳婦	インヤ○ウタ●ウイコウハ○ウスエウ、
投	デ●ウ	三字話	投降你	デ●ウヤンニイ
教	キヤ●ウ	二字話	教導	キヤ●ウダ○ウ
		常言	不教而善	フ°キヤ●ウルウゼン
交	キヤ●ウ	二字話	交還	キヤ●ウワン
		二字話	交割	キヤ●ウカ
		四字話	交還子母	キヤ●ウワンツウモウ
		四字話	開交不來	カイキヤ●ウフ°ライ
驍	キヤ●ウ	四字話	驍將勇兵	キヤ●ウツヤンヨンピ°ン
考	カ●ウ	四字話	考問犯由	カ●ウウエンワンユウ
口	ケ●ウ	二字話	封口	フランケ●ウ
遭	サ°●ウ	二字話	遭際	サ°●ウツユイ
走	ツエ●ウ	常言	走三家	ツエ●ウサンキヤア
		長短話	走船的人	ツエ●ウチエンテジン
走	ツエ●ウ	四字話	落荒而走	ロハンルゝツエ●ウ
掃	サ●ウ	二字話	掃興	サ●ウヒン
咲	スヤ●ウ	二字話	咲談	スヤ●ウダン
		四字話	莞然大咲	ワンゼンダアゝスヤ●ウ
招	チヤ●ウ	四字話	招出實情	チヤ●ウチユシツイン
梢	スヤ●ウ	三字話	没下梢	モ°ヒヤアスヤ●ウ
要	ヤ●ウ	四字話	我要出恭	ゴウヤ●ウチユコン
		五字話	須要講講話	スエゝヤ●ウキヤンクハンワアゝ
		五字話	寵臣要弄權	チヨンヂンヤ●ウロンギエン
		五字話	且不要著气	ツエゝフ°ヤ●ウチヤキイ
		常言	若要有前程	ジヤヤ●ウユウツエンチン
好	ハ●ウ	三字話	不當好	フ°タンハ●ウ
		長短話	而好名遍聞	ルウハ●ウミンへ°ンウエン
孝	ヒヤ●ウ	二字話	孝順	ヒヤ●ウジュン
讒	ヒヤ●ウ	長短話	讒讒對人非喙	ヒヤ●ウヒヤ○ウトイシンフイホイ
號	ハ●ウ	四字話	放砲為號	ハンハ°○ウライハ●ウ
後	ヘ●ウ	四字話	忠臣之後	チヨンチンツウヘ●ウ
了	リヤ●ウ	三字話	斬了首	ツアンリヤ●ウシウ
		三字話	做了親	ツヲゝリヤ●ウツイン
		三字話	娶了妻	ツユイリヤ●ウツユイ
		三字話	買了妾	マイリヤ●ウツエ
		三字話	嫁了人	キヤアリヤ●ウジン
		三字話	贖了身	ジヨリヤ●ウシン
		三字話	曾去了	ヅエンキユイリヤ●ウ
		四字話	加了官位	キヤアリヤ●ウクハンライ

表 3-11 中間点の使用環境

環境	該当の有無	使用例	字種数	延べ数	用例数
ア段	○	高-カ○ウ	183	1,145	1,125
イ段	×	九-キウ	0	0	0
ウ段	×	布-フウ	0	0	0
エ段	○	口-ケ○ウ	52	378	315
オ段	×	可-コウ	0	0	0

2.1.1 「ア段+ウ」の場合

「ア段+ウ」の場合は表 3-11 のように、延べ 1,145 字に、中間点の使用例は 1,125 例あり、計 183 字種である。「財」「鬻」を除き、181 字種は全て中古音の効撰⁹⁶に属する字である。

表 3-12 「ア段+ウ」における中間点の使用状況

分類	一等 [au]	二等 [au]	三等 [ɛu]	四等 [eu]
重唇音	ハ ^o ウ-報 (12)保 (4)寶 (5)褌 (1) バ ^o ウ-暴 6(5)袍 (1)抱 5(4) ハ ^o ウ-抱 5(1)暴 6(1)右 (1) マ ^o ウ-帽 (2)毛 (4)	ハ ^o ウ-飽 (1) ハ ^o ウ-爆 (1)豹 (1)泡 (1) (1)砲 (3)抛 (1)苞 (1)鮑 (1) (1)包 13(12) バ ^o ウ-胞 (1)匏 (1)跑 (1) マ ^o ウ-貌 (3)猫 (3)貓 (1)	ヒヤ ^o ウ-票 7(1)表 6(2) ビ ^o ヤ ^o ウ-漂 (3)標 (2)票 7(6) 表 6(4)嫖 4(2) ビヤ ^o ウ-鰓 (1)鰓 (1)瓢 (2) 嫖 4(2) ミヤ ^o ウ-苗 (1)妙 (4)	
舌頭音	タ ^o ウ-倒 (11)刀 (30)套 (5)到 (13) 搗 (1)討 (8)逃 3(2)桃 4(2)道 22(5) ダ ^o ウ-盜 (3)陶 (1)萄 (1)稻 (2)導 (2) 鉤 (2)桃 4(2)道 22(16)逃 3(1) ナ ^o ウ-駟 (1)惱 (5)腦 (3)			テヤ ^o ウ-弔 (2)挑 (3)跳 (3)雕 (1)彫 (1) デヤ ^o ウ-調 (4)條 (3)掉 (3) ニヤ ^o ウ-鳥 (31) チヤ ^o ウ-苕 (1)
舌上音		キヤ ^o ウ-撓 (1) ヅア ^o ウ-棹 (1) チヤ ^o ウ-嘲 2(1) ヂヤ ^o ウ-嘲 2(1) ナ ^o ウ-鏡 (1)鬧 (4)	チヤ ^o ウ-朝 6(5) ヂヤ ^o ウ-兆 (1)朝 6(1)	
歯頭音	サ ^o ウ-燥 (1)噪 (1)掃 (6)臊 (4)螯 (1) 早 14(3)艸 29(1)窳 2(1)遭 6(1) サ ^o ウ-槽 (3)藻 (1)蚤 (2)皂 (2)搔 (1) (1)枣 (1)遭 6(5)早 14(11)艸 29(27) 窳 2(1)造 8(2) ツア ^o ウ-艸 29(1) ヅア ^o ウ-造 8(6) チヤ ^o ウ-財 13(1)(蟹撰)		スヤ ^o ウ-宵 (2)小 (35)消 (11) 硝 (1)咲 (17)鞘 (1)蛸 (1) ツヤ ^o ウ-焦 (1)蕉 (1)椒 3(2) 鱗 (1)	スヤ ^o ウ-筵 (1)簾 (1) デヤ ^o ウ-篠 (1)
歯上音		サ ^o ウ-梢 2(1) サ ^o ウ-爪 (2) スヤ ^o ウ-稍 (2)梢 2(1)(掣) (掣)(1) チヤ ^o ウ-炒 (2)鈔 (4)		
正歯音			シヤ ^o ウ-少 (24)燒 (1) チヤ ^o ウ-招 (5)照 8(7)	
牙音	カ ^o ウ-考 (2)膏 (2)高 (13)告 (11)羔 (1) (1)靠 (5)篙 (2)熬 4(2) ガ ^o ウ-傲 (3)熬 4(2)	キヤ ^o ウ-交 (11)教 (21)佼 (2)巧 (4)敲 (3)狡 (2) 較 (1)媯 (1)絞 (3)膠 (1) 較 (3)鉸 (1)絞 (1)攪 (2) 覺 5(1)	キヤ ^o ウ-喬 (1)嬌 (1)驕 (4) 橋 3(1)蕎 2(1) ギヤ ^o ウ-橋 3(2)蕎 2(1) 覺 5(1)	ヤ ^o ウ-堯 (1) キヤ ^o ウ-叫 (9)僥 (1) 澆 (2)驍 (1) ヒヤ ^o ウ-梟 (3)
喉音	ア ^o ウ-懊 (2)豪 5(2) ハ ^o ウ-好 (99)號 (9)耗 (2)毫 (1)蒿 (1) (1)麤 (1)懊 (1)豪 5(3) ガ ^o ウ-鬻 (1)(流撰)	ハ ^o ウ-拗 (2) ヤ ^o ウ-咬 (1) ヒヤ ^o ウ-孝 (4)	ヤ ^o ウ-腰 (2)要 (119)邀 (2) 鷓 (2)搖 (2)謠 (2)鮪 (1)	ヒヤ ^o ウ-噐 (2)曉 (11)
半舌音	ラ ^o ウ-牢 (5)老 (28)勞 (5)撈 (1)滂 (1)		リヤ ^o ウ-練 (3)鶻 (1)	リヤ ^o ウ-了 (165)料 (3) 寥 (1)撩 (2)聊 (1)蓼 (4)
半歯音			ジヤ ^o ウ-擾 (4)饒 (2)	
字種数	69	44	43	27
延べ数	458	124	303	260
用例数	445	119	301	260

⁹⁶ 効撰の字の中、中間点の記入漏れの例以外、一等の「サン-鯁(1)」と「スエ^oウ-嫂(2)」が「ア段+^oウ」・「-ヤ+^oウ」ではない。「サン-鯁(1)」は、声符の「參」の類推、「スエ^oウ-嫂(2)」は 2.1.2「エ段+ウ」の場合で検討するように、同じ声符による類推のものである。

- 注：・「ダ ウ-道 22(1)」「パ ウ-包 13(1)」「ツヤ ウ-椒 3(1)」「チャ ウ-照 8(1)」は中間点の記入漏れ。
- ・「**璫**」は『広韻』未収、『唐話纂要』で意味「メノウ」となっているため、「瑪瑙」の「瑙」と見なす。「瑙」音「乃老切」。
 - ・「ハ〇ウ-有(1)」は、原例が「有糖」である。『広韻』などに収められていない。『漢語大字典』に「方言。沒有。」とあり、発音が mǎo[mǎu]であるが、南京音と蘇州音での読みが確認できい。第四章で検討するように、明母效摂の読みとなる。
 - ・「**掣**」は『広韻』未収、『集韻』に音「所教切」とある。「スヤ〇ウ-**掣**(1)」は、原例が「器用」所属の「**掣**釘(スヤ〇ウテイン)カナメ」である。『広韻』に同「掣」字、「木上小或作**掣**」との説明があり、「所教切」で、生母に所属する。同書では「**掣**」を「掣」に統一する。
 - ・「**覺**-キヤ 5(4)」は江撰入声の読みと対応する。
 - ・「**毳**」は『広韻』未収、『康熙字典』によると、「**毳毛**」と同じ、音「蘇彫切」である。
 - ・「キヤ〇ウ-撓(1)」は「キヤ〇ウ-僂澆驍」等の声符類推による可能性が高い。
 - ・「チャ〇ウ-苕(1)」は定母の字で、「チャ〇ウ-招照」のように、声符の類推による可能性が大きい。
 - ・「デヤ〇ウ-篠(1)」は「條-デヤ〇ウ(3)」の類推によるものである。
 - ・「ヒヤ〇ウ-鼻(3)」は南京音と蘇州音の声母は同じ[e-]である。『広韻』に見母の「古堯切」は音注と対応できず、『洪武正韻』に「呼驕切」との曉母の読みもあり、音注と一致する。

「財」の場合について、中間点の表記の他、「財-ヅアイ(10)ツアイ(2)」の 12 例がある。「財」は蟹摂の字で、韻尾が[i]であるため期待される音注は「イ」であり、「ヅ(ツ)アイ」がそれを反映している。「チャ〇ウ」の原例が「**枉費了錢財 錢財ヲムダヅカヒシタ**」で、直前の表記例は同じ意味の「**花費若干錢鈔ソゴバクオ錢ヲムダヅカヒシタ**」となっているため、「チャ〇ウ」は「鈔」の発音(「チャ〇ウ」)を記したものと考えられる。

「ガ〇ウ-鰲(1)」は、『広韻』に匣母流摂の「胡遘切 郭璞注山海經云形如車文青黑色十二足長五六尺似蟹雌常負雄漁者取之必得其雙子如麻子南人爲醬」と影母通摂(入声)の「烏酷切 魚名又候」である。原例は「虫介」の「**鰲兒 カブトガニ**」であり、「へ〇ウ」の表記が期待されるが、「ガ〇ウ」の表記となり、「胡遘切」と一致しない。また、蘇州音と南京音とも濁音の読みがないため、両方言から説明できず、同書では疑母の「熬-ガ〇ウ 4(2)」があり、「ガ〇ウ-鰲」は字形が相似する、声符の「熬」をもつ「鰲」による誤記の可能性が推測できる。

表 3-12 にある効摂の字を等位別にした結果：一等の字は全て直音表記「ア段+〇+ウ」[-au]、三等と四等の字は全て拗音表記「-ヤ+〇+ウ」[-iau]となっているのに対して、二等の字だけは、直音「ア段+〇+ウ」([-au])と拗音「-ヤ+〇+ウ」[-iau]の二つに分かれている。効摂の字は南京音が[-au]と[-iau]となっているのに対し、蘇州音と杭州音が現在ともに単母音化している。『三音正譌』によると、当時の杭州音も[-au]と[-iau]であった。

まず、一等の字について、南京音の[-au]に対して、蘇州音は[-æ]、杭州音は[-ɔ̃]となっている。『同文備攷』の北部呉語は[-ao]、『三音正譌』の杭州音

は「ア○ウ」となっていたため、「ア段+○+ウ」の音注は南京音、杭州音のいずれに対応する。

次に、三等と四等の字について、三等の舌上音、正歯音、半歯音の字が南京音で[-au]、蘇州音で[-æ]、杭州音で[-ɔ]で、拗音表記の「-ヤ+○+ウ」[-iau]と対応しないが、『西儒耳目資』の官話音は[-ao](=[-au])、『同文備攷』の北部呉語は[-iao]、『三音正譌』の杭州音は「-ヤ○ウ」である。音注「-ヤ+○+ウ」は呉方言と一致している。

三等重唇音、四等舌頭音、三・四等の歯頭音、牙音、喉音、半舌音の字は南京音は[-iau]で、上述したように当時の蘇州音と杭州音も[-iau]で、三者とも音注と一致している。三等と四等の字が拗音[-iau]となるのは四等の字が口蓋化で三等の字と合流した変化を反映している。

最後に、二等の字は、状況がやや複雑である。重唇音の字、喉音影母の「拗」、舌上音の「棹鑊鬧」、歯上音の「爪」は直音音注の「ア段+○+ウ」([-au])となっている。これらの字は、南京音で[-au]、『同文備攷』は[-ao]である。「ア段+○+ウ」は複母音を有する南京音と北部呉方言から説明できる。

「拗-ハ○ウ(2)」は、反切が「於絞切」で、原例が「二字話」の「拗^{ハ○ウレ}振」「執^{チハ○ウ}拗」である。南京音は[ɤau]、『同文備攷』は[ɤiao]である。「ハ○ウ」は南京音とは韻母が合うが、声母は合わない。蘇州・杭州音とは声母も韻母も合わない。このように、「ハ○ウ」は説明できない。

「棹-ヅア○ウ」は、澄母の「直教切」で、原例が「器用」の「棹^{ヅア○ウルウ}兒」である。濁音となる「ヅア○ウ」は声母上では呉方言からしか説明できない。『同文備攷』では[dzao]とあり、音注は呉方言の特徴を反映している。

「爪-サ°○ウ」は反切が「側絞切」で、前節で述べたように、「ツア○ウ」に等しい。莊母の部分で検討するように、南京音は[tʂ-]、蘇州・杭州音は[ts-]、『同文備攷』は[tsao]となり、「サ°○ウ」は南京音と対応できず、呉方言から説明できる。

このように、「拗-ハ○ウ」以外の直音音注「ア段+○+ウ」の例は呉方言から説明できる。

舌上音の知組の「嘲」、歯上音莊組の「稍稍掣,炒鈔」は拗音音注となっている。現代方言の読みのいずれも介音[i]をもたない。

「梢-サ○ウ 2(1)スヤ○ウ 2(1)」は、二種類の音注をもち、生母の「所交切船舵尾也又枝梢也」で、原例が下記の通りである。

「サ○ウ」:「樹竹」^{ジュイサ○ウ}樹梢 コズヘ

「スヤ○ウ」:「三字話」^{モヒヤアスヤ●ウ}没下梢 シチグガナヒ

第四章の生母の部分で検討するように、生母に対して、音注が「サ」でも「ス」でも[s-]と対応し、呉方言の特徴を反映している。南京音は[tɕau][ɕau]、『西儒耳目資』では[-iao](=[iau])、『同文備攷』では[-ao](=[-au])となっている。「スヤ○ウ」は説明できないが、後述する生母の「稍掣」にも「スヤ○ウ」と記されているため、「サ○ウ」は誤記と見える。一方、「サ○ウ」は北部呉方言から説明できる。

『同文備攷』では知母二、三等は全て[-iao]で、莊組は精組一等に合流している。『西儒耳目資』では知母の「嘲」などは[-ao](=[-au])⁹⁷、莊組の「稍稍掣」などは[-iao](=[-iau])となっている。「嘲-チャ○ウ 2(1)ヂヤ○ウ 2(1)」は知母の部分で検討するように、「ヂヤ○ウ」は「潮」を注した可能性があり、「チャ○ウ」は南京音と『同文備攷』のいずれから説明できる。「稍掣-スヤ○ウ」2字、反切がともに「所教切」である。「梢」を含む生母所属の「稍稍掣」3字に対する拗音の「スヤ○ウ」は介音[i]を有する特徴を反映し、反切と対応する。生母の「梢」と同じ、「稍掣」に対する「ス」の音注は呉方言の特徴の現れである。しかし、韻母面では、拗音の「-ヤ○ウ」は『同文備攷』から説明できず、南京音と一致する。このように、「スヤ○ウ」は方言の発音から説明できない。

初母の「鈔炒-チャ○ウ」は、南京音が[tɕau]で、『西儒耳目資』では[‘chao](=[tɕ‘au])、蘇州音と杭州音がともに[ts‘-]となり、『同文備攷』でも[tsao]である。このように、「チャ○ウ」は、声母面では「チ」が南京音と対応でき、「-ヤ○ウ」となるのが「チ」の影響を受け、当時[tɕ]後に介音[i]がくることができることを反映している。「チャ○ウ」は南京音から説明できる。

⁹⁷ 括弧()の読みは王(2011)による。下記も同じ。

「拗」以外の牙・喉音の字も拗音の「-ヤ+○+ウ」の音注である。南京音は[-iau]、当時の蘇州・杭州音では「拗」を含め[-iau]であり、声母面の対応も併せて、「-ヤ+○+ウ」は南京音と吳方言との双方に対応する。

このように、「稍稍掣」は説明できず、「炒鈔-チヤ○ウ」は南京音と一致する。それ以外の拗音音注となる例は吳方言から説明できる。

また、上述したように、三等に属する「朝兆」のような舌上音知組、「少燒,招照」のような正齒音章組の字は、拗音表記の「チ(ヂ)ヤ○ウ」「シヤ○ウ」「スヤ○ウ」となっている。三、四等に属する「宵小消硝咲鞘蛸,焦蕉椒鷓; **鴛**簫」のような齒頭音精組の字も拗音表記の「ツヤ○ウ」「スヤ○ウ」である。このことは、効撰において、知組二等と知組三等の声母は変化せず、莊組の声母は二等において多くが精組に合流し、少数の一部は章組に合流する吳方言の特徴を反映している。

2.1.2「エ段+ウ」の場合

「エ段+ウ」の場合の中間点の使用状況を表 3-13 に示す。延べ 378 字の中に、中間点の使用例は 315 例あり、計 52 字種である。「嫂」「雛」「去」「拘」を除き、49 字種は全て中古音の流摂に属する字である。

表 3-13「エ段+ウ」における中間点の使用状況

分類	一等 [əu]	三等 [iəu]
重唇音	メ○ウ-牡 (3) 某 (1)	メ○ウ-謀 (9)
軽唇音		ヘ○ウ-否 (4) 覆 2 (1) ウエ○ウ-浮 (1) 枹 (1)
舌頭音	テ○ウ-兜 (2) 斗 (10) 透 (2) 倫 (3) 抖 (1) 聞 (3) 豆 14 (1) 投 13 (2) 蚪 (1) 頭 64 (13) デ○ウ-痘 (1) 豆 14 (13) 投 13 (11) 頭 64 (49)	テ○ウ-丟 (4)
歯頭音	スエ○ウ-嫂 (効摂) ツエ○ウ-走 40 (1) ツエ○ウ-走 40 (38) 湊 (3)	
歯上音		スエ○ウ-搜 7 (6) ツエ○ウ-皺 (1) 愁 6 (1) 縐 (1) 雛去 (遇摂) ヅエ○ウ-驟 (1) 愁 6 (5)
牙音	ケ○ウ-勾 (5) 口 (25) 叩 (1) 寇 (2) 拘 (1) 苟 (4) 鈎 (6) 頭 64 (1) 狗 7 (6) ゲ○ウ-偶 (3)	ケ○ウ-拘 (1) (遇摂)
喉音	ヘ○ウ-候 (7) 厚 (6) 後 (32) 猴 (2) エヘ○ウ-鷗 (1) 樞 (2) 嘔 (1)	
半舌音	シ○ウ-蝮 (1) レ○ウ-樓 (3) 漏 (4) 喽 (1) 婁 (1) 樓 (2)	
字種数	38	14
延べ数	280	98
用例数	277	38

注：・「頭」は定母字で、延べ 64 例で、「デ○ウ」49 例、「テ○ウ」13 例、「デ○」1 例と「ケ○ウ」1 例である。「テ○ウ」は濁点漏れ、「デ○」は「ウ」の記入漏れ、「ケ○ウ」は誤記であると思われる。
・「狗」は、延べ 7 例で、「ゲ○ウ」6 例、「キユイ」1 例である。流摂字のため、韻尾「イ」と対応しない。「拘-キユイ」による類推の誤記と考えられる。
・「蝮」の表記「シ○ウ」は「レ○ウ」の誤記と考えられる。
・「走」は延べ 40 例で、「ツエ○ウ」38 例、「ツエ○」1 例、「ソエ○ウ」1 例である。「ツエ○」は「ウ」の記入漏れ、「ソ」は「ツ」による誤記と考えられる。
・「覆-ホ 2 (1)」は通摂入声の読みと対応する。
・「スエ ウ-搜 7 (1)」は中間点の記入漏れである。

「嫂」は効摂一等の字で、「サ○ウ」の表記が期待されるが、例の「^{スエ○ウ}嫂^{スエ○ウ}」には 2 字とも「スエ○ウ」となっている。この表記は「搜」と同じく「スエ○ウ」で表記されていることから、声符による類推の結果と考えられる。

「雛」は遇摂三等の字で、「仕于切 鵠鷓爾雅曰生嚼雛謂鳥子能自食」で、原例が「禽鳥」所属の「^{ツエ○ウルウ}雛兒 ヒヨコ」である。「ヅヲ」の表記が期待されるが、「ツエ○ウ」となっており、「皺縐」の声符による類推と考えられる。

「去」は遇摂の字で、延べ 59 例の中、58 例の表記は「キユイ」で、「ユ」と「イ」の合音で、原音の [-y] に対応している。下記で「ツエ○ウ」と「キユイ」1 例ずつを挙げている。

「ツエ○ウ」:ビスエハクハイクハイツエ○ウヂヤ「六字話」 必須快快去着 必ス早ク行ケ
「キユイ」:ハンツアイツエ○ウキユイリヤ○ウ「五字話」 方纔 走 去 了 今ガタ行レタ

「キユイ」の例に「走」もあり、音注が「ツエ○ウ」である。この 2 例と対応する意味から、「去-ツエ○ウ」は音注が「走」を注するものと思われる。

「ケ○ウ-拘(1)」は、原例がケ○ウタジャンシウ「拘搭上手」である。『広韻』に未収で、『康熙字典』に「[正字通]俗拘字」とある。「拘」は「舉朱切」との見母の読みとなり、音注が「ケ○ウ-勾鈎」の声符による類推と考えられる。

表 3-13 にある流撰の字を等位別にした結果：一等と三等の字は例外なく、韻母が[-eu]となっている。ここには、流撰の一部分の三等字は非唇音(例外あり)の一等の字と合流していた音韻的変化が反映されている。

流撰の字は效撰の字と同じ、南京音と旧杭州音では複合母音、蘇州音では単母音である。一等および三等の唇音、莊組二等の字は南京音は[-əu]、蘇州音は[-y]、杭州音は[eɪ]で、『同文備攷』は[-əu]、『磨光韻鏡』は「エ段+○+ウ」で、音注はいずれとも符合する。

一等の三等の重唇音の字に対して、同じ音注を有する。三等の「謀」のような明母の字は中古以降、重唇音の声母の後に介音[i]がくることができないので、一等の「牡某」などと合流したため、同じ[-eu]となっている。「否覆,浮枹」のような軽唇音声母の字に対する表記は唇音以外の一等と同じ、[-eu]となっている。これらの字も一等の字と合流したからである。「搜,皺愁縐,驟」などは莊組二等なので、莊組二等字の多くが一等の精組に合流するのは呉方言の特徴である。「エ段+○+ウ」の音注はこうした呉方言の特徴を反映している。

一方、『唐話纂要』において、例えば、「救-キウ」「球-ギウ」「就-ツユウ」「修-シユウ」などのように、音注が[-iu][-iuu]となっているのは、もう一部分の流撰三等の字〔牙喉と上記の齒頭音〕が前舌介音を維持しているからである。

なお、表 3-13 で見たように、一等字の全て、三等字の唇音、舌頭音、齒上音と軽唇音の一部に対して、「エ段+○+ウ」となっている。それ以外、中間点のない音注も多く存在している。具体的に、「モウ-母(17)」のような一等重唇音の字、「ウハ-婦(8)負(6)」のような軽唇音が「ウ段+ウ」、齒頭音、喉音の影・

于・羊母の字が「-ユウ」、舌上音、正歯音、牙音、半舌音、半歯音、喉音曉母の字が「イ段+ウ」となっている。つまり、中間点が用いられる「エ段+ウ」の表記例は流撰の一部のみである。

上記の2.2.1と2.1.2で考察したように、『唐話纂要』では中間点の使用環境について、「ア段+ウ」と「エ段+ウ」との二つのケースに用いられていることが確認できた。このように、先行研究の奥村(1992)による「イウ連母音の割ル注記」の例は同書では見られないことも明らかにした。

2.2 中間点「○」の使用意図の分析

中間点の使用意図については、先行研究の見方と同じ、当時の日本語における仮名遣いと実際の発音とのずれに原因があると考えられる。

日本語では、上記の「高-カウ」などの「ア段+ウ」と「口-コウ」などの「オ段+ウ」は元々別音であった。『唐話纂要』が編纂された当時の日本語では、開音「ア段+ウ」と合音「オ段+ウ」、「エ段+ウ」と「(拗音)ヨ+ウ」は表記上では違う形態を示しているが、実際の発音では区別を失い、それぞれオ段長音とオ段拗長音に合流していた。そこで、表記と実際の発音にずれが生じていたことに対応して、中間点を入れて注しているのである。

『唐話纂要』では、例えば、表 3-14 に示した例のように、

表 3-14 仮名表記における日本語音と中国語音の不一致

例	音注	対応する中国語音	当時の仮名表記の読み
高	カウ	kau	コー
口	ケウ	kəu	キョー

「高」の場合、[kau]を仮名で写すと「カウ」となるが、「カウ」という綴りの発音は当時の日本語では既に「コー」となってしまったため、「カ」と「ウ」の間に「○」を入れて、「コー」ではなく、「カ・ウ」と割って発音するように注意している。「口」の場合、[kəu]を「ケ○ウ」に写している。「ケウ」の発音は当時の日本語では「キョー」になってしまったため、「ケ」と「ウ」の間に「○」をいれて、「キョー」ではなく、「ケ・ウ」と発音するように注意している。

中間点は、「ア段+ウ」だけでなく、「エ段+ウ」の場合にも用いられ、当時の日本語では「ア段+ウ」が「オ段+ウ」、「エ段+ウ」は「(拗音)ヨ+ウ」へ合流したため、仮名表記と実際の発音にずれが生じていたことを反映しているのである。

以上、本節では、中間点の使用環境について、中間点の使用環境について、効撰の殆どと流撰の一部のみに付けられていることが確認でき、先行研究の見方と異なっている。一方、先行研究の奥村(1992)が挙げた「イウ連母音の割ル注記」の表記例は『唐話纂要』では存在しないことが分かった。

その使用意図について、当時の日本語仮名の発音通りでなく、中国語の複合母音を割って発音すること注意するためのものであり、先行研究との見方と一致している。

効撮と流撮、この二つの撮の共通点は韻母が複合母音で、同じ母音韻尾 [-u] を有するという点である。現代の蘇州音と杭州音では、単母音化で韻尾 [-u] を失ってしまったが、『同文備攷』や『三音正譌』などを通して、当時は複合母音を維持していたことを知ることができる。また、効撮二等の齒音の別れ方から、音注は吳方言により符合することが言える。

第三節 『唐話纂要』における延音点「ゝ」について

3.1 『唐話纂要』における延音点「ゝ」の使用実態

右肩点と中間点以外、日本語の書記体系に存在していたもの、例えば、「沙-サアゝ」「依-イゝ」「乎-ウゝ」「也-エゝ」「坐-ツヲゝ」等のように、符号の「ゝ」は殆ど母音仮名の後に用いられている。符号の「ゝ」の使用例を表3-15にまとめている。

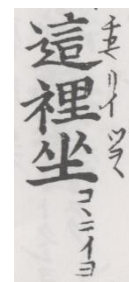


図 17

表3-15 「ゝ」が用いられる漢字の表記

使用例	非ゝ表記例
クハアゝ-瓜 12(1)	瓜-クハア12(11)
サアゝ-叉 1沙 1紗 5(3)	
スアゝ-砂 2紗 5(2)	
タアゝ-大 115(13)他 61(60)打 42(41)	他-タフ60(1)打-タア40(1)
ダアゝ-大 115(102)不 400(1)	不-フ400(399)
ツアゝ-差 9(6)査 6(1)植 1詐 3(2)	差-チャア9(1)詐-ケン3(1)
ヅアゝ-茶 16(6)搯 1査 6(5)	茶-ヅア16(1)ヂヤア16(8)チャア16(1)
ナアゝ-那 27拿 4 1	
ハアゝ-化 9花 41画(畫 1)11(4)華 7樺 1話 25(20)擘 1霸 1	
ハゝアゝ-巴 2把 9芭 1怕 11筈 2把 1葩 1把 2(1) 1把 1	
バアゝ-把 2(1)琶 1爬 1罷 10把 1	
ヒアゝ-下 79(1)	下-ヒヤア79(78)
マアゝ-麻 6(5)蟆 21馬 1馬 38(37)罵 6麼 31(12)	麻-マア6(1)馬-マア38(1)
ワアゝ-画 11(7)蛙 1瓦 2窞 1話 25(5)	
ヤアゝ-牙 3(2)芽 2雅 3(1)丫 1鴉 1	牙-イヤア3(1)雅-キヤア3(1)イヤア(1)
イゝ-依 5意 33(32)椅 4(3)衣 14倚 1蚶 1奚 1以 22夷 1易 7姨 2 已 7怡 1苾 1異 5(4)莢 1鯁 1矣 3宜 8(4)議 4(2)	意-イ33(1)椅-ギイ4(1)異-イ5(1) 宜-ニイ8(4)議-ニイ4(2)
ウゝ-乎 3湖 3狐 2糊 3胡 13互 1瑚 1葫 1蝴 1壺 2戸 4護 4五 11吾 3 悟 2梧 1忤 1晤 1蜈 1娛 1誤 5婦 1婦 8負 6扶 1父 14(10) 侮 1武 10舞 4無 72務 2鷓 1鳥 8惡 18(5)汚 2撫 1	父-ウウ14(1)フウ14(3)
モウゝ-麼 31(1)	
エゝ-也 40(39)夜 10野 3	也-未注 40(1)
シエゝ-射 4(1)奢 3(2)捨 3(1)除 3	
ジエゝ-惹 2(1)	
スエゝ-些 50(47)犀 2寫 10西 18洗 3婿 2樺 1細 13須 28(27)	些-スエ50(1)スエ○50(1)スエン50(1) 須-スエ28(1)
チエゝ-者 27遮 2蔗 1扯 4車 15(14)這 31鷓 1	車-チエ15(1)
ツエゝ-且 16借 10(9)嗟 1	借-ツエ10(1)
ヅエゝ-斜 2謝 11	
セエゝ-奢 3(1)舍 3捨 3(2)	
ゼエゝ-射 4(3)蛇 10惹 2(1)	
ツヲゝ-厝 1作 24(3)初 6酢 1措 2楚 3祖 7租 1租 2做 43(42)左 3 揣 1磋 2鏗 1錯 2齟 1	作-ツヲ24(21)做-ツヲ43(1)
ヅヲゝ-坐 25助 3鋤 1	
モヲゝ-摸 4(1)麼 31(1)	摸-モウ4(3)
ロヲゝ-囉 4(1)	
キゝ-己 2(1)	己-キイ2(1)
ルゝ-而 59(30)耳 8(4)二 14(5)兒 120(5)爾 1鯛 1邏 1	而 59(29)耳 8(4)二 14(9) 兒 120(115)-ルウ
モゝ-麼 31(1)	麼-モウ31(16)

注：・「瓜-クハア 12(11)クハアゝ12(1)」は「古華切 説文 瓠也」で、「クハアゝ」の原例は「菜蔬」の「南瓜^{オウゴン}」ボウブラであり、「クハア」の「香瓜^{ヒヤクハア} マクハア 名甜瓜」「菜瓜^{キョウクハア} サイウリ」と意味の違いが見られず、「クハアゝ」は延音点の使用の影響を受けたものと考えられる。

・「他-タフ」1例、誤記。

・「打-タア」「麻-マア」「意-イ」「異-イ」「些-スエ」「車-チェ」「須-スエ」7 字の「\」のない表記例はいずれも 1 例しかなく、「\」の記入漏れの可能性が高い。

・「不-ダア\」は、同頁に「波浪不作 波浪大作」の例があり、「不」に対する表記は明らかに「大」による誤記、「大」の数に算入せず。

・「詐-ケン」1 例。同じ頁にある「詐計多 イツハリノ計が多い」「奸詐人 イツハリアル人」から、前の「詐」に対する「ケン」は明らかに「奸」の音注を誤記したものの。

・「茶-ツア\」16(6)ヂヤア 16(8)ヅア 16(1)チャア 16(1)」について、「ヅア」は明らかに「ヅア\」の延音点の「\」が省略されたものであり、「チャア」は「器用」所属の「茶壺 チャビン」「茶瓶 同上」のように、明らかに濁点を省略したものである。

・「雅-ヤア\」3(1)キヤア 3(1)イヤア 3(1)」は、「五下切 正也嫻雅也」であり、原例が下記の通りである。

「ヤア\」:「二字話」文雅 キヤシヤナ 「キヤア」:「二字話」風雅 キヤシヤナ

「イヤア」:「長短話」願承雅教

蘇州音と南京音とも、ゼロ声母で発音する。「キヤア」は読みの子音と一致できず、そして、「二字話」の 2 例の意味は全く同じで、誤記の可能性が高い。なお、「ヤア\」と「イヤア」は同じものと考えられる。

・「椅-イ\」4(3)ギイ 4(1)」は、『広韻』に止撰の「於綺切 椅柅」(上声)、「於離切 木名梓實桐皮」(平声)とあり、原例が全て「器用」のもので、下記の通りである。

「イ\」:椅子 イス 交椅 イス 小椅 シヤウギノルイ 「ギイ」:椅柅 キヤラ

「ギイ」は読みの子音と一致しない。蘇州音と南京音ともゼロ声母と発音するため、「ギイ」は誤記。

・「宜-ニイ」4 例、「議-ニイ」2 例。後述する「イ\」が対応する官話系方言の特徴と違って、「ニイ」が呉方言の語音特徴と対応すると考えられる。

・「父-ウ\」14(10)ウウ 14(1)フウ 14(3)」の場合、「父」は、『広韻』に非母読みの「方矩切」と奉母の「説文曰父矩也家長率教者扶雨切」との二種類の読みがあるが、意味上にはっきり分けられている。同書の使用例は、意味上には違いが見られず、明らかに奉母と一致している。なお、「ウ\」と「ウウ」は同じものである。

・「些」に対して、「スエ」1 例(「須要讓些 少シマケロ」)、「スエ〇」1 例(「覺得有些不耐煩 心モチアシ\」)、「スエン」1 例(「有些用錢 少シカウセンガアル」)。「スエ〇」の「〇」が繰り返し点ではなく、「スエン」が非鼻音の「些」と一致しないため、明らかに誤記である。

・「借-ツエ 10(1)」は、『広韻』に精母の仮借去声の「子夜切 假借」と梗撰入声の「資昔切 假借也」とあり、原例が「常言」の「借人典籍 人ノ書籍ヲ借ラハ」で、「ツエ\」となる「借宿 ヤドカル」(二字話)などの例と同じ意味となり、「ツエ」も「\」の記入漏れの可能性が高い。

・「麼」は、31 例の中、「マア\」と注する 12 例は全て疑問の語気を表している助詞の表記例で、読みは今日と同様 [ma] である。疑問代名詞の後にくる場合、果摂合口の読みと対応する表記が「モウ」16 例と「モウ\」「モフ\」「モ\」それぞれ 1 例で、「モウ」による誤記の可能性が高い。

『唐話纂要』における「\」の使用例を集計し、先行する仮名の違いにより、分類したのが表 3-16 である。表 3-16 では、「字種数」は当該使用例が確認された漢字の異なり数、「延べ数」は各字種の延べ数、用例数は「使用例」の数を示す。また、漢字の後にある数字は当該使用例の延べ数で、括弧にある数字は当該音注の数である。

表 3-16 から分かるように、「\」の使用例は延べ 1,287 例あり、字種にして 171 字である。「\」は主に「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」の母音仮名の後に現れ、「ア」の後の使用例が最も多い。また、「ル」の後とそれぞれ 1 例のみの「キ」「モ」の後に用いられる場合もある。

また、「\」の先行仮名を段別にして見ると、「\」の実態は下記の通りである。

(1)ア段とエ段の場合、多くの音節に用いられている。

(2)イ段とウ段の場合、極わずかな例外を除き、ほぼ全て単一仮名「イ」と「ウ」のみに用いられている。

(3)オ段では、「モヲ」、「ロヲ」以外、「ツヲ」「ヅヲ」の後に多く使われている。

(4)その他、「ル」などに用いられる場合がある。

表 3-16 「\」の使用実態

分類	使用例	延べ数	用例数	字種数
ア\	サア\、叉沙紗 スア\、砂紗 タア\、大他打 ダア\、大 ツア\、差査査詐 ツア\、茶査査 ナア\、那拿 𪛗 ハア\、化花画(畫)華樺話擲霸 ハ°ア\、巴把芭怕芭耙把 𪛗 𪛗 バア\、杷琶爬罷耙 ヒア\、下 マア\、麻蟻 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 ワア\、画蛙瓦窆話 ヤア\、牙芽雅丫鴉	613	495	54
イ\	イ\、依意椅衣倚蟬奚以夷易姨已怡苡異莢鯁矣宜議	122	113	20
ウ\	ウ\、乎湖狐糊胡互瑚葫蝴壺戸護五吾梧梧忤晤蜈娛誤語語婦負扶父 侮武舞無務鷗烏惡汚撫 モウ\、麼	214	198	37
エ\	エ\、也夜野 シエ\、射奢捨除 ジエ\、惹 スエ\、些犀寫西洗婿樺細須 セエ\、奢舍捨 ゼエ\、射蛇惹 チエ\、者遮蔗扯車這鷗 ツエ\、且借嗟 ヅエ\、斜謝	329	322	31
ヲ\	ツヲ\、厝作初酢措楚祖租粗做揣礎鏗錯齧 ヅヲ\、左坐助鋤 モヲ\、摸麼 ロヲ\、囉	137	110	21
その他	ル\、而耳二兒爾爾邏	204	47	7
	キ\、己	2	1	1
	モ\、麼	/	1	/
計		1,621	1,287	171

このように、段別にみた場合、「\」は分布上で顕著な特徴を有することが分かる。なぜこうした使用状況となっているか、これを解明するには、詳細な整理と分析が必要である。以下にこれらの分析を進める。

3.2 延音点「\」の使用実態の分析

3.2.1 ア段の場合

表 3-17 から分かるように、ア段では、これらの漢字は主に中古音の蟹摂二等、果摂一等、仮摂二等に属している。共通点は陰声韻に所属することである。

表 3-17 「ア」に用いられる状況

分類	一等	二等
蟹摂 [ai]/[uai]		バア\ - 罷(10) ハア\ - 画(畫 1)11(4)話 25(20) ワア\ - 画(畫 1)11(7)話 25(5)
果摂 [a]	ダア\ - 大 115(102) タア\ - 他(61)打 42(41)大 115(13) ナア\ - 那(27)𦉳(1) マア\ - 麼 31(12)	
假 [a]/[ua]		クハア\ - 瓜 12(1) サア\ - 又(1)沙(1)紗 5(3) スア\ - 砂(2)紗 5(2) ツア\ - 差 9(6)査 6(1)植(1)詐 3(2) ジア\ - 揞(1)茶 16(6)査 6(5) ナア\ - 拿(4) ハア\ - 花(41)華(7)樺(1)撻(1)化(9)霸(1) ハ ^o ア\ - 巴(2)芭(1)笆(2)葩(1)杷(2)杷(1)杷(1)杷(1)把(1) (9)怕(11)杷(1) バア\ - 琶(1)爬(1)耙(1)杷(2)(1) ヒア\ - 下 79(1) マア\ - 麻 6(5)蟆(2)𧈧(1)媽(1)馬 38(37)罵(6) ヤア\ - 牙 3(2)芽(2)丫(1)鴉(1)雅 3(1) ワア\ - 蛙(1)瓦(2)
山 [uat]		ワア\ - 空(1)(入声字)

注：・「打」は『広韻』には梗摂の読みで、『康熙字典』には「【正韻箋】都那切」と、果摂の読みもあり、音注と対応する。
・『広韻』には、「蛙」(「蛙兒 カハツ」)は蟹摂の「烏瓜切 蝦蟆」と仮摂の「烏瓜切 蝦蟆」との二種類の平声の読みがある。「罷」(「罷休了 ヤメタ」等)は止摂の「符羈切 倦也亦止也」(平声)、「皮彼切 遣有罪」(上声)と蟹摂の「薄蟹切 止也休也」とあり、意味上で蟹摂の読みと一致している。「杷」(「竹杷 コマサラヒ」「枇杷 ビハ」)は仮摂の「蒲巴切 枇杷木名 説文収表器也」(平声)、「白駕切 田器」(去声)と蟹摂の「傍卦切 田具又音琶」とあり、「琶」は『広韻』で「蒲巴切」で、同書の「琶」の音注が「バア\」となっている。「画(畫)」(「會得画画 ヨクエラカク」等)は蟹摂去声の「胡卦切 畫挂也以五色挂物象也」と梗摂入声の「胡麥切 計策也分也」とあり、表記例が蟹摂の読みと一致する。これらの字について、王(1980:170)に以下のような論述がある。

中古的 ai(佳韻)有一部分字,特别是合口呼的字變爲 a,例如:

a ← ai 罷 ai ← ai 佳 ua ← wai 蛙,卦掛畫

央韻有一個“話”字也由 wai 變 ua,它也是合口字,但是只有一個字不能構成規律。

現代各地方言,據我們所知,“蛙卦掛畫話”都念入 a 韻了。…

王(1980)はこれらの字を蟹摂所属としている。本研究では表記例発音を意味と対照し、「蛙」「杷」を仮摂、「画」を蟹摂とし、「罷」「話」(下快切)を蟹摂のままとする。なお、蘇州音では[-o]と発音する。

・「揞」は『広韻』に未収、『漢語大詞典』に「同“搽”。塗抹。」とあり、例は「面上濃濃揞粉」、訳は「顔ニバケバケシクケ シヤウヲヌル」で、「搽」と同じで、「塗る」の意味である。また、『中華大字典』に「搽讀若茶」とある。

・「撻」は『広韻』に未収、『漢語大詞典』に「同“划”」とあり、「划」は『広韻』に「戸花切」と、仮摂二等に所属。

・「杷」は、『漢語大字典』では、発音は仮摂に所属の「巴」などと同じ[pa]である。

・「杷」は、『唐話纂要』での用例が「杷子」で、日本語の意味が「トロメン」となっていることから、「絹、木棉」意味の和製漢字である「杷」を誤記したもので、音注は「巴-ハ^oア\」を類推したものと考えられる。

・「𧈧」は『広韻』に未収、『唐話纂要』で意味「メノウ」となっているため、「瑪瑙」の「瑪」と見なす。

・「杷」は『広韻』未収、『康熙字典』に「【篇海】必駕切」とあり、仮摂に所属するが、音注と対応できず、声符の「巴-ハ^oア\」の類推によるものと考えられる。

表 3-18 から分かるように、「イ」に「ㄨ」が使われている字例は、蟹摂四等の「奚」以外、全て止摂三等の字であり、どちらも陰声韻の字である。

まず、止摂のこれらの字について、音注が南京音と蘇州音などでは、支脂之三韻(非精知照系)の開口字が、全て[-i]になったことを反映している。喉音影母の「依衣倚倚蚹」、于母の「矣」、羊母の「夷姨萸鯪異怡意以已苡易」は声母が南京音ではゼロ声母、蘇州音では影母がゼロ声母、于・羊母がゼロ声母か[h-]になり、杭州音では「衣依倚椅已意」などがゼロ声母で、「夷姨異以易」などが[h-]となるが、音注「イㄨ」となるのはいずれからも説明できる。また、牙音疑母字「宜議」について、南京音ではゼロ声母で、蘇州音では[ŋ-]となり、杭州音では[ŋ-][h-]の両読みで、「宜-ニイ 8(4)」「議-ニイ 4(2)」は蘇州・杭州音から説明でき、「イㄨ」も杭州音の[h-]に対応することができる。無論南京音とも対応する。

表 3-18 「イ」に用いられる状況

分類	三等	四等
止摂 [iɛ]/[ii]/[iɪ]/[iɪ]	イㄨ-依(5)衣(14)蚹(1)夷(1)姨(2)萸(1)鯪(1)異 5(4)怡(1)椅 4(3)宜 8(4)倚(1)以(22)已(7)鞞(1)矣(3)意 33(32)易(7)議 4(2)	
蟹摂 [ei]		イㄨ-奚(1)

注：『唐話纂要』にある用例は「惹薇」で、「薇」が「惹苡」(植物)の「苡」の誤字。

また、「奚」の場合、『広韻』に「胡雞切」とあり、匣母蟹摂四等の字で、南京音と呉方言の大部分では、中古音蟹摂四等開口の喉音字が[-i]になっていた。声母面では、「奚」は南京音と杭州音が[ɣ-]、蘇州音が[h-]と発音する。口蓋化した[ɣ-]となるのは現代の音韻変化であり、『三音正譌』でも「奚」は「イㄨ」となっている。このように、音注が「イㄨ」となるのは、蘇州音及び杭州音と対応し、呉方言の特徴の現れと考えられる。

以上、イ段では、「ㄨ」がつく字は全て[-i]をもち、無韻尾の陰声韻の字であるということが分かる。

3.2.3 ウ段の場合

ウ段では、表 3-19 から分かるように、流摂三等の「婦負」以外、全て遇摂の一等と三等の字である。共通点はどちらも陰声韻である点だ。

まず、遇撮一等の字について、蘇州音では唇音以外[-əu]とるのに対して、南京音、杭州音は、中古音の[-o]から[-u]に変化していた。「ウゝ」は[-u]と一致する。

また、遇撮三等の字について、介音を有していた虞韻の「扶無父侮武舞鷓撫務」等の字と流撮尤韻の「婦負」2字は唇音による影響を受け、介音を失って[-u]となっているのは南京音と吳方言に多く見られる変化である。

表 3-19 「ウ」に用いられる状況

分類	一等	三等
遇撮 [o] [yu]	ウゝ- 乎(3) 湖(3) 狐(2) 糊(3) 胡(13) 瑚(1) 葫(1) 蝴(1) 壺(2) 吾(3) 梧(1) 蜈(1) 鰮(1) 齧(1) 烏(8) 惡 18(5) 汚(2) 娛(1) 戸(4) 五(11) 互(1) 護(4) 悟(2) 忤(1) 晤(1) 誤(5)	ウゝ- 扶(1) 無(72) 父 14(10) 侮(1) 武(10) 舞(4) 鷓(1) 撫(1) 務(2)
流撮 [ɪəu]		ウゝ- 婦(8) 負

注：・「撫」の音注は同書では「ワゝ」と見え、同書の遇撮のこの字の読みと一致しないため、「ワゝ」を「ウゝ」と見なす。また、敷母[f'-]の字はハ行表記であるため、「ウゝ」は「無-ウゝ」による誤記と考えられる。
・「娛」は『広韻』に字体が「娛」で、反切が「遇俱切」(三等平声)、「五故切」(一等去声)である。南京音と蘇州音は[y]で、現代杭州音の場合、母音も[y]となっている。「ウゝ」は方言から説明できないが、一等の読みを注するものと考えられる。

表 3-19 にあるこれらの字に対して、それぞれゼロ声母になる「ウ」について、匣母[h-]の合口の「乎湖狐糊胡瑚葫蝴壺戸互護」と奉母[v-]の「婦負扶父」のこれらの字は、濁音の読みが保存されている吳方言の特徴を反映している。まず、匣母[h-]の合口字の場合、発音が唇音の性質に近く、[-u]に聞こえたため、表記が「ウ」となったと思われる。また、奉母[v-]の字の場合も、[v-]は唇音で、調音法が[-u]に類似し、音声的に近いため、「ウ」で表記されたと考えられる。

一方、吳方言で非齊齒、撮口呼の字の場合、疑母[ŋ-]は存在せず、「五吾梧蜈鰮齧悟忤晤誤」等の字は蘇州音では母音が合口呼でなくなったため、「ウ」で表されているこれらの字が現代蘇州音[-əu]とは明らかに合わない。一方、杭州音では概ね[-u]となっていることから、これらの字は杭州音を反映している。

いずれにしても、ウ段では全て[-u]をもち、無韻尾の陰声韻の字であるということが分かる。

3.2.4 エ段の場合

エ段において、表 3-20 のように、「ㄨ」がつく字は仮撰三等と蟹撰四等に集中している。

まず、仮撰の齒音照組三等の字「奢捨賒蛇遮車射者扯舍蔗鷓這」と日母「惹」は本来介音があったが、南京音では、反り舌音による影響を受け、介音[-i]が脱落して、[-ə]となっている。一方、蘇州音は[-o]となっているのに対して、杭州音は概ね[ueɪ]となっているが、『三音正譌』などでは三等の精組と同じ[-ie]となっている。「-エㄨ」の音注は旧杭州音から説明でき、吳方言の特徴を反映している。

表 3-20 「エ」に用いられる状況

撰	三等	四等
假 [ia]	シエㄨ-奢 3(2)捨 3(1)賒 (3)射 4(1) ジエㄨ-惹 2(1) スエㄨ-些 50(47)寫 セエㄨ-奢 3(1)捨 3(2)舍 (3) ゼエㄨ-蛇 (10)射 4(3)惹 2(1) チエㄨ-遮 (2)車 15(14)者 (27)扯 (4)蔗 (2)鷓 (1)這 (31) ツエㄨ-嗟 (1)且 (16)借 10(9) ヅエㄨ-斜 (2)謝 (11) エㄨ-也 40(39)野 (3)夜 (10)	
蟹 [ei]		スエㄨ-犀 (2)西 (18)樨 (1)洗 (3)婿 (2) 細 (13)
遇 [yu]	スエㄨ-須 28(27)	

注：・「シエㄨ-奢捨」「ジエㄨ-惹」と「セエㄨ-奢捨」「ゼエㄨ-惹」等のように、「シエㄨ」と「セエㄨ」、「ジエㄨ」と「ゼエㄨ」は同じ発音である。
・「這」は『広韻』に疑母山撰字で、「魚變切 迎也」となり、音意とも合わない。『大漢和辞典』に「【増韻⁹⁸】止也切」と、仮撰の読みとなる。蔣(2017:147-149)によると、近代漢語の指示詞「這」は「赭」「遮」「者」などに由来するもので、これらの字はいずれも仮撰三等の字である。

また、「些嗟斜寫且借謝,也野夜」等の仮撰三等の字は、蘇州音の白話音では[-ia]と発音するのに対して、王(1980)によると吳方言の文語音では、精組と喉音羊母の開口韻の主母音[-a]が[-e]へ変化し、[-ie]となっている。杭州音は仮撰三等と蟹撰四等が合流して[-i]となっているが、『三音正譌』では、仮撰三等が[ie]で、蟹撰四等が[-i]で合流していなかった。『同文備攷』も同じ状況である。南京音も仮撰三等が[-ie]、蟹撰四等が[-i]で合流していない。「犀西樨洗婿細」6字は蟹撰四等の字である。「犀、西、洗、細」などが金華方言、処衢方言の一部など、[-ie]と発音することから、吳方言にも主母音が[e]となる読み方が存在していると考えられる。[sie]は「スエㄨ」に近い。なお、

⁹⁸ 『増韻』は南宋の毛晃・毛居正親子が『礼部韻略』を増注した『増修互注礼部韻略』の略称。もとの『礼部韻略』とは大きく異なっている。『礼部韻略』は宋の丁度らの撰した韻書の一つ。1007年(景德4)に戚倫らの撰した《韻略》を修訂し、1037年(景祐4)に刊行された。5巻。韻目は206韻。9590字を収録。

第五章の蟹摂の部分で検討するように、蟹摂の字は「-イ」の音注と記するのが一般的であり、その中に、齒頭音の開口三等字に対して、「-ユイ」(心母以外)と「スエ、」(心母)となっている。本研究ではこの二種類の音注について、適切に説明することができない。

なお、先行研究の中村(2015b)は、『唐語使用』による「細:スエイ」「西:スエイ」が『唐話纂要』の「細:スエ、」「西:スエ、」とほぼ同じであり、長崎に住む唐人の官話音に杭州音の訛りがあった例と見なすことができる。(p.32)とのように、蟹摂四等の齒音に対する「-エ、」の音注は杭州音、つまり呉方言の特徴としている。本研究による結果に一致しない。

このように、これらの仮摂三等の字と蟹摂四等の字に対する「-エ、」の音注は呉方言の音韻的特徴と対応する。

なお、遇摂の合口字「須」の場合、円唇の前舌介母[-y]を有する。[-y]は日本語にない母音で、『唐話纂要』では「雨-イユイ」「月-エ」などの表記が見られ、一定していない。

上記のように、エ段では、僅かの説明できない蟹摂の例を除き、韻尾のない陰声韻の字であるということが分かる。

3.2.5 才段の場合

才段では、表 3-21 のように、「ㄨ」に「、」がつく字は遇摂一等、三等及び果摂一等所属する。

表 3-21 「ㄨ」に用いられる状況

分類	一等	三等
遇摂 [o] [ɪə]	ツㄨ、-租(1)粗(2)酢(1)祖(7)厝(1)作 24(3)措(2)做 43(42)錯(2) モㄨ、-摸 4(1)	ツㄨ、-初(6)楚(3)齟(1) ヅㄨ、-鋤(1)助(3)
果摂 [a]/[ua]	ツㄨ、-磋(2)銜(1)揣(1)坐 25(2) ヅㄨ、-左(3)坐 25(23) ロㄨ、-囉 4(1)	

注:・「揣」は『広韻』に音「丁果切」。
・「ツㄨ、-酢」は原例が「酢漿 カタハミ一名酸艸」である。『広韻』に「在各切 酬酢」とあり、従母所属である。また、『集韻』に「倉故切」もあり、この音注は清母遇摂の読みと対応している。
・「作」は『広韻』に去声の「臧祚切 造也」「則箇切 造也本臧洛切」と入声の「則落切 爲也起也行也役也始也生也又姓」と三つの読みがあり、この「作」は遇韻去声に所属。
・「做」は、『広韻』に未収。『康熙字典』に「[正字通]做俗作字字彙租去声」とあり、作と同じ遇摂模韻に所属。
・「摸」と「囉」はそれぞれ「モㄨ、」「モウ、」「ロㄨ、」「ロウ」二種類の音注があり、音注方法の違いによるもので、音の違いを示すものではない。

まず、3.2.3 で述べたように、中古音遇摂一等の字は南京音では、一般的に[-u]になっているが、「厝作措做錯」は南京音が[-ɔ]、蘇州音は遇摂一等、

三等の歯音のこれらの字が[-əu]⁹⁹で、杭州音は[-ou]となっている。『磨光韻鏡』は「モウ」「ツヲ、」「ヅヲ、」「ソヲ、」などとなっている。音注の「-ヲ」は明らかに南京音と一致しない。

次に、果摂「磋銼左坐揣¹⁰⁰」の5字の場合、一等のこれらの舌・歯音字は南京音では狭母音化して、[-ɔ]に変化していたのに対して、蘇州音は[-əu]となっている。現代杭州音は[-ou]で、『磨光韻鏡』では「-ヲ、」となっており、当時は[-uo]か[-o]であった。音注の「-ヲ、」は南京音、蘇州音、杭州音のいずれにも対応している。

このように、オ段では、「、」がつく字も全て無韻尾の陰声韻の字であるということが明らかになった。

3.2.6 その他の場合

「ウ」以外、「、」が仮名「ル」にも使われ、使用例は全て日母止摂三等の陰声韻の字である。

表 3-22 「ル」などに用いられる状況

分類	三等
止摂 [ɿ]	ル、-而 59(30)兒 120(5)鯽(1)耳 8(4)爾(1)邇(1)二 14(5) キ、-己 2(1)
果摂 [ɑ]	モ、-麼 31(1)

中古音でそれぞれ止摂の支韻「兒爾邇」、脂韻「二」、之韻「而鯽耳」に属するこれらの日母の字は、南京音では、鼻音的要素[ŋ-]が脱落して、最後に[z]となった。止摂開口のこれらの字について、最後にr化して[ər]となったが、[ŋz-]→[ər]との具体的な変化は究明されていない(王 1980)。

南京音では[e^r]と、蘇州音では[əɿ]¹⁰¹との、文語音にのみ現れる、特殊な音節として存在している。このように、両方言ではゼロ声母となっているが、音注「ルウ」と「ル、」とのラ行表記は両方言から説明できない。一方、日本語では[r][ɿ]で終わることができないため、仮名で表記する場合、母音を添えて「ル」となる。表 3-15 に示すように、これらの字に対して、「ルウ」と「ル、」の表記

⁹⁹ 袁(1989:62)によると、蘇州音[-əu]の[ə]は一種のわたり音である。杭州音の[-ou]についても(遠藤 1989:47)にも類似する指摘がある。

¹⁰⁰ 趙(1929)による南京単字音全表にある「揣」の韻母は、後に(?)が付されている。

¹⁰¹ 袁(2001)に[ɿ]と記する。

が見られ、同じ音を記したと思われるが、「ルゝ」になる原因の解明が課題となっている。

このように、3.2.1 から 3.2.5 までの母音仮名の後に用いられている使用状況と異なり、「ゝ」がウ段仮名「ル」に用いられているのは、日本語の書記体系の中の直前仮名「ル」の繰り返しでなく、後述するように、直前母音の繰り返しを示すものと考えられる。

「キゝ-己 2(1)」「モゝ-麼 31(1)」2 例における「ゝ」の使用は上で見てきた母音仮名の後ろに用いられる用法と異なっている。通常の踊り点だと「キゝ」が対応するのは「キキ」、「モゝ」が対応するのは「モモ」になることから、それぞれ「キイ」と「モウ」の誤記と考えられる。

以上の検討によって、「ゝ」は適切な説明が得られない「ルゝ」の場合を除き、いずれも「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」の後に用いられているということが確認された。その使用状況は湯沢(1987)が指摘した母音仮名に続く延音点の使用条件と合致していることから、『唐話纂要』における「ゝ」も延音点として見る事が可能である。なお、僅かの蟹摂の例を除き、これらの無韻尾の陰声韻の字に対する音注が最もよく対応しているのが杭州音である。

3.3 延音点「ゝ」の使用意図の分析

上記のように、無韻尾の陰声韻の字に対する音注の母音仮名の後に用いられている「ゝ」は、一体どんな使用意図をもっているのだろうか。

まず、『唐話纂要』において、「ゝ」は、直前仮名の「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」に用いられていることから、この5つの仮名を繰り返す延音点として考えられる。「ル」以外、母音仮名の後にしか使われていない踊り点の「ゝ」が、表記された中国語の発音においてどんな意味を示しているか、これについても明確にしなければならない。

時代的変遷を通して、室町時代以前の日本語はシラビーム言語であって、その後モーラ言語に変わったとしている沼本(1997)は、次のように述べている。

…江戸時代に入って中国語音を轉寫した資料に於いては長音表記が一般的になっていることが明かである。この長音表記の實態は、正に現代の日本人が中国語を轉寫するものと同じである。ということは即ち江戸時代の日本語が現代語と同じモーラ言語であったことを物語ることになる。「江戸時代の唐音が中国語の陰類(無韻尾字)を長呼形で受け入れた」のはそういう日本側の音節構造が然らしめたためであったと考えられる。

この考えを、江戸時代前の轉寫に於いては長音表記が出現しないという事実の解釋に適用すれば、江戸時代前の日本語は長短を音韻論的に區別できない言語(即ちシラビーム言語)であったということになる。換言すれば、室町時代までの日本語は中国語と同じくシラビーム言語であったために、その轉寫資料に於いては原則として長短が表記上區別されず全て一字假名で出現したものであるということになる。(p.19)

この指摘に従うならば、『唐話纂要』においても、「富-フウ」「土-トウ」等のような長呼型音注となっている無韻尾の陰声韻の字があり、「ゝ」が付く表記について、同書に存在しているこうした長呼型音注と同じものであると窺われる。即ち、「ゝ」は直前仮名「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」の踊り点であり、先行母音を延ばす長呼型音注の一つと考えられる。

こうして、表 3-15 で段別にみた結果として、「ゝ」は分布上で顕著な特徴を有することも、長呼型音注と深く関わっていると思われる。

日本漢字音における長音表記では、従来存在しているのは「ウ段+ウ」「エ段+イ」「オ段+ウ」この三種類である。

同書では、表 3-23 のように、

「ウ段+ウ」: ブウ-蒲葡 クウ-古鼓估
 「エ段+イ」: テイ-低隄底抵 デイ-弟遞第
 「オ段+ウ」: トウ-土吐 ドウ-肚杜 ノウ-努怒 ソウ-素訴

など従来の長音表記法を援用した長呼型が存在している。なお、これらの長呼型となる音注について、日本語の従来の長音読みでなく、片仮名の反切法で中国語の発音に対する音注である。

表 3-23 無韻尾陰声韻字の表記

段別	無韻尾の陰声韻の字	
ア段	サア\、叉沙紗 スア\、砂紗 タア\、他打 ツア\、差 ツア\、茶 ナア\、拿 ハア\、花華 ハ ^o ア\、芭芭 バア\、琶爬 マア\、麻蟆 ワア\、蛙 ヤア\、牙芽 キヤア-家假嫁架價 クハア-寡誇 ヒヤア-遐蝦蝦暇夏	
イ段	イ\、依椅衣夷姨	キイ-機幾饑 リイ-哩李理
ウ段	ウ\、乎湖狐糊胡瑚	ブウ-蒲葡 クウ-古鼓估
エ段	エ\、也夜野 ツエ\、且借嗟 スエ\、些犀寫西洗	テイ-低隄底抵 デイ-弟遞第
オ段	ツヲ\、初酢措楚祖 ゴヲ\、左坐助鋤	トウ-土吐 ドウ-肚杜 ノウ-努怒 ソウ-素訴

これらの長呼型音注に対して、「ア段+ア」「イ段+イ」「エ段+エ」「オ段+ヲ」の表記従来の長音表記にない、すなわち援用すべき対象のない新しい長音表記と言える。

まず、長呼型のイ段の場合について、下記のように、この段では「イ\」と「イ段+イ」が用いられている。

「イ\」: イ\、依椅衣夷姨
 「イ段+イ」: キイ-機幾饑 リイ-哩李理

これらの表記例及び 3.2.2 の分析から分かるように、「\」が仮名「イ」のみに用いられるのは、条件付きの部分的な使い方と考えられる。なお、「\」の使用条件によって、表 3-16 の最後にある「己」字に対する表記の「キ\」は誤記と考えられる。

次に、長呼型のア段の場合について、

「-ア\」: サア\、叉沙紗 スア\、砂紗
 「ア段+ア」: キヤア-家假嫁架價 クハア-寡誇 ヒヤア-遐蝦蝦暇夏

のように、「ア\」と「ア段+ア」が用いられている。同じ長呼型である「サア」のような「ア段+ア」の場合でも、「スア」のような「非ア段+ア」の場合でも、「\」が「ア」

の後にしか現れないのである。これは、ア段で「ㄷ」の付く表記数が一番多く見られる原因である。

『唐話纂要』では、「キヤア-家假嫁架價」「クハア-寡誇」「ヒヤア-遐蝦蝦暇夏」等のように、牙・喉音の一部の仮撰の字に対して、「ㄷ」が付かずに、三つの仮名で表記するのが一般的である。「キヤ」「クハ」「ヒヤ」は日本語に存在していた拗音表記であり、拗音表記の仮名「ヤ」「ハ」が、ともに母音仮名でなく、「ㄷ」を付けて長呼型音注になる条件を備えないため、母音仮名「ア」を付けて拗音の長呼型音注となる。

また、これらの拗音表記以外は、全て直音の長音である。非既存の日本語漢字音表記の「スア」「ツア」「ヅア」は、「ㄷ」が付され、長呼型音注となる。このように、エ段の「ツエ」「スエ」、オ段の「ツヲ」「ヅヲ」も同様である。なお、「瓜」に対する「ㄷ」が付く「クハアㄷ」の 1 例は誤記と思われる。

しかし、ア段では、直音表記の「サア」「タア」等のように、既に長音のような形としているが、なぜ「ㄷ」が付されているのだろうか。これらについて、「スア」「ツア」「ヅア」等のように、ア段での表記に対する統一性の視点から、長音形と見える「サア」「タア」等の「ア段+ア」の場合にも「ㄷ」を付け、同じ長呼型音注となるということであると考えられる。

以上、「ㄷ」の使用環境及び分布上での特徴、特にア段表記にある疑問点を解明してきた。ここに、もう一つの問題が出てきた。中国語の無韻尾の陰声韻の字に対して、なぜ長呼型音注をとるのだろうか。上記の指摘から分かるように、沼本(1997)はその理由を、日本語の音節構造の変遷に求めている。本研究では中国語側にその原因があると考えたい。

沼本(1997:19)は、「唐音の中國原音の入聲が短促音節であったことが日本側の資料によって確定出来るし、また逆に當時の日本語が音節の長短を確かに厳密に音韻論的に區別するものであった」と述べ、入声と非入声が區別されていることを明らかに指摘している。

入声が無表記とされる、訳官系資料である『唐話纂要』における入声と非入声の関係はどうなっているかを明確にするため、同書にある 422 字種の入声字を確認した。「鷓-イツ」「襪-ワツ」の 2 例のみ、入声韻尾は仮名「ツ」で示してある。表 2-23 に挙げた例から分かるように、沼本(1997)の指摘した通り、

入声字は殆ど特別な記号などを用いないものの、韻尾無表記の短音節の形として表記されている。よって、『唐話纂要』では入声の字と非入声の字は短音節と長音節の形によって区別されているということが分かる。

こうして、同書において、入声の字に対して全く表記していない一方、「富-フウ」「土-トウ」等と同じ、「ㄅ」が付く形の長呼型音注の方法で、短促性の入声字と区別するため、無韻尾の陰声韻の字に対して、「ㄅ」で書き分けている。

では、「ㄅ」の使用に関して、なぜ入声の字であるかどうかということとを区別しなければならないのだろう。

呉方言の共通の語音特徴について、袁(2001)は、「古入声韻尾 -p -t -k 一律变为喉塞音 -ʔ。(p.58)」とのような指摘がある。これによれば、呉方言では韻尾の[-p][-t][-k]の対立がなくなり、[-ʔ]に合流し、現在まで保存してきたことが分かる。

また、呉方言の音韻を忠実に記述した十六世紀の辞書《同文備攷》(1540年)の中古入声韻について、丁(2001)は以下のように結論を付けている。

5. 塞韻尾保持三分格局

6. [-t][-p]入声尾交混。

7. 入聲韻有脱离陽聲韻獨立發展的傾向。(p.247)

このように、16世紀の呉方言における入声韻は、韻尾 -p -t -k の対立がまだ残っているが、[-t][-p]の混乱の発生などから、その変化は16世紀から始まっていることが分かる。こうして、江戸時代(18世紀)の呉方言では、その入声韻の韻尾[-p][-t][-k]の対立が既になくなっていたと推測できる。

このように、『唐話纂要』の当時、唐通事に密接に関わっていた中国語音である、南京音を代表とした官話系方言と呉方言とのいずれにも、かつての入声韻尾は内破音[-p][-t][-k]の対立が消失し、声門閉鎖音[-ʔ]へ合流していたと見られるのである。

日本語の漢字音に対する表記において、従来は、例えば、入声韻の字「十-ジフ・シフ」「割-カツ」「一-イチ・イツ」「式-シキ」「悦-エツ・エチ」「屋-オク」等、「-フ」「-ツ」「-チ」「-キ」「-ク」等で韻尾を表していた。しかし、当時の入声韻尾に[-p][-t][-k]の消失に従って、その音は[-ʔ]を伴って短音節で発音されて

いた。故に、元々韻尾表記を有するべき入声韻の字に対して、『唐話纂要』では「全く表記しないもの」という短音節型、つまり、「十-ジ」「割-カ」「一-イ」「式-シ」「悦-エ」「屋-ヲ」等となっている。このように、入声韻の字に対する音注表記に入声韻尾の変化が反映されているのである。

入声韻の字に対する短音節表記と異なり、上記するように、同書では、無韻尾の陰声韻の字に対して、長呼型音注がされている。このように、仮に無韻尾の陰声韻の字を長音でない形で表記するとしたら、例えば、「依椅衣」等の音注「イゝ」が「イ」、「機幾饑」等の音注「キイ」が「キ」となる。一方、「一益亦-イ」「吉喫桔-キ」等のような韻尾の表記がない入声韻の字は、表記が同じ「イ」か「キ」という短音形表記である。こうして、無韻尾の陰声韻の字は、発音上非入声の字と区別することができないということになる。従って、韻尾の対立を失った入声字とかつて短音節で表記していた無韻尾の陰声韻字が混同してしまうため、両者が区別できるように、短促性の入声韻の字に対して、無韻尾の字を長音表記にしたと考えられる。つまり、「ゝ」は長音形の一つとして、韻尾の対立を失った入声韻の字を区別するために記されていたのである。

このように、「ゝ」の使用意図は沼本(1992)が指摘したように、韻尾が対立を失い、無表記となった短音節型の入声韻の字と区別するために、無韻尾の陰声韻の字を長呼型にする必要があり、無韻尾の陰声韻の字に延音点が用いられていたのはその一環であるということが明らかになった。

以上、『唐話纂要』における「ゝ」の考察を通して、以下のことが明らかになった。

まず、「ゝ」の使用実態について、ア、イ、ウ、エ、ヲ、ルの後のみに付けられている。使用状況が延音点に符合していることから、延音点として見ることができる。僅かの蟹摂の例を除き、対応している字は、全て無韻尾の陰声韻の字である。

次に、これらの延音点は、無韻尾の陰声韻の字に用いられていることから、長呼型を表すための工夫であると見てとれる。「ゝ」の使用を可能にしたのは新しい長音表記が採られたためである。ア段では、「ア段+ア」のように、既に長音のような形としているのは、規範的な統一意識によって、「非ア段+ア」表記からの類推で、「ゝ」が付けられ、いずれも新しい長音形となるからである。イ段で

の「ゝ」は、限られた部分的な使い方であり、日本漢字音に従来存在していた「ウ段+ウ」「エ段+イ」「オ段+ウ」この三種類の長音表記に対して、「ア段+ア」「イ段+イ」の音注と「ゝ」が付くウ段、イ段、エ段の音注の全ては新たな長音表記形である。

更に、使用意図についていうならば、無韻尾の陰声韻を長音で写すのは中国語の音韻変化を反映していることを挙げなければならない。無韻尾の陰声韻と入声韻に発音の長・短の対立が存在していたからである。全ての無韻尾の陰声韻の字に対する長呼型音注の一つとしての「ゝ」は、無韻尾の陰声韻の字を、当時韻尾が[-ʔ]になった、短促性入声韻の字と区別するために用いられたと指摘することができる。

第四節 声調の表記について

中国語音を語る際、欠くことのできないのは声調である。

先行研究で紹介したように、同書の前五巻に「声調点」(図 18)のみ見られるが、巻六に「声調点」以外、平・上・去・入の「四声点」も記されている。第二章第四節で挙げた南京音では陰平・陽平、上声、去声、入声の 5 声調となるが、蘇州音と杭州音にはそれぞれ陰平・陽平、陰上、陰去・陽去、陰入・陽入の

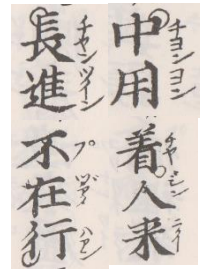


図 18

7 声調がある。従って、「四声点」と「声調点」は南京音にも蘇州・杭州音にも完全に対応することができない。しかしながら、声母、韻母などと併せて検討することによって、およその傾向を知ることができる。

ここでは、「声調点」と各方言との対応関係について検討する。

4.1 声調点「○」について

ここでは、同書の声調点の使用状況を明らかにした上、対照する方言と比較し、その使用意図を明らかにする。また、同書の巻六及び冠山の他の学習書『唐語使用』と『唐音雅俗語類』における声調点の状況と比較し、声調点との使用が基礎方言と関係があるかどうかについて明らかにする。

4.1.1 声調点「○」の使用実態

「声調点」の表記は一部分特定の漢字のみに用いられている。表 3-24 の通り、同書の前五巻において、全 33 個の漢字に延べ 98 例の使用が確認されている。

表 3-24 の中、これらの字を三種類に分けている。ⅠとⅡ類の字は考察するように中古音では多音字となり、Ⅰ類の字に対して二種類か二種類以上の音注が記されているが、Ⅱ類の字には一つの音注しかない。Ⅲ類は中古音にいずれも一つの読みのみを有する字である。なお、声調について、南京音は『江蘇省志・方言志』の「南京方言同音字匯」(pp.563-580)、蘇州音は葉(1988b)、杭州音は錢(1992)による。

表 3-24

分類	漢字	用例数	印の使用例数	声調印位置
I 音注に書き分け がある漢字	行	34	4	平声
	降	7	4	平声
	参	2	1	平声
	長	24	9	上声
	省	6	2	上声
	分	25	4	去声
	作	24	3	去声
	足	17	2	去声
	悪	18	4	去声
	覺	5	1	去声
	差	9	2	平声・去声
	着	24	1	入声
	II 音注に書き分け がない漢字	擔(担)	5	3
重		13	1	平声
從		12	1	平声
禁		6	1	平声
更		18	9	平声
教		21	1	平声
上		60	1	上声
中		22	8	去声
爲		51	4	去声
好		99	2	去声
遠		11	1	去声
錯		2	1	去声
種		5	1	去声
衣		14	1	去声
探		3	1	去声
只	23	19	入声	
III その他	麼	31	2	平声
	天	49	1	入声
	汶	1	1	平声
	面	4	1	去声
	一	111	1	去声
計	/	756	98	/

4.1.1.1 音注に書き分けのある漢字

(1)「行」

表 3-25 のように、延べ 34 例中、「ヒン」が 30 例、「ハアン」が 4 例で、「ハアン」の 4 例の全てに去声の声調点が付されている。

「行」は、下記のように、『広韻』に宕摂と梗摂との四種類の読みがある。

宕摂平声 「胡郎切」「伍也列也」

去声 「下浪切」「次第」

梗摂平声 「戸庚切」「行歩也適也往也去也又姓」

去声 「下更切」「景迹又事也言也」

声調点がない「ヒン」の例は、使用例から分かるように、梗摂平声の「戸庚切」の「行歩也適也往也去也」と意味が対応する。南京音は陽平調の[eiŋ]、蘇州音は陽平調の[fiŋ]、杭州音は陽平調の[hiŋ]との読みとなり、『西儒耳目資』では[him](=[xiŋ])、『同文備攷』では[hiŋ]と記されて、「ヒン」は南京

音に近いと見えるが、第四章の匣母の部分で検討するように、匣母の字に対するハ行とアヤワ行との二種類の音注は適切に説明できず、ここの「ヒン」は異なる意味と使い方を区別するのに記されていると考えられる。

表 3-25 「行」の表記例

○の位置	用例数	表記	見出し語
平声	4	ハアン	三字話：不在行 フカウシヤ 大在行 大ニカウシヤ 四字話：般般在行 イロイロノコト上手 行家聚貨 トイヤニ荷物カアツマル
なし	30	ヒン	二字話：起行 ホツソクスル 力行 ツトムル 行禮 レイヲオコナフ 行走 アルク 歩行 カチ 盡行 コトコトク 三字話：没信行 マコトニナヒ 四字話：学寫行書 行昼コトヲナラフ 近要起行 近口発足セント欲ス 各處游行 方々ニユウキヤウスル 盡行變賣 コトゴトクウリシロガエル 收拾行李 タヒニヲトリヲサムル 就計行計 敵ノ計ニ従テ味方ノ計ヲ行フ 五字話：打點要起行 シタクシテ発足セント思フ 行經太好了 ギヤウサガイコフヨヒ 常言：行路防跌 ヨウジンシガヨヒト云コト 爲人行善方便者 人ノ爲ニ善キ方便ヲ行フ者ハ必ス其後惠ヲ受ルコトアリ 行善之人 善ヲ行フ人ハ 行惡之人 惡ヲ行フ人ハ 一行有失 一色ヲシソコナエハ 百行俱傾 種々ノコトガワルクナルト云コト 深徑不宜獨行 深キ徑チヲハ獨リ行クヘカラズ 心行慈善 心ニ慈悲ヲ行ハ 行人惡其泥濘 路ヲ行ク人ハ地上ノ泥濘ヲ惡ム 君子行於濁地 君子ハ濁地ヲ行クト云ヘトモ 長短話：庶幾聖人之道行矣 定テ聖人ノ道行レン 專行善事 專ラ善事ヲ行フ 那時即當躬行拜謝 其節伺候仕テ御礼可申上 行有餘力 行餘力アルトキハ 若果行無餘力 既ニ行餘力カナクンハ

平声調の声調点の付く「ハアン」の用例の「玄人、上手な者」に当てはまる意味の項目は『広韻』にはない。『漢語大字典』には宕攝平声「胡郎切 伍也列也」から派生したと思われる「行业。如：三十六行；同行；内行；外行」の語義があり、「伍列」から「職種」、「職種」からさらに「玄人、上手な者」へと意味が拡張していった様子を伺わせている。このように、「ハアン」が対応しているのは宕攝の「胡郎切」であることになる。「胡郎切」に対する「行」は、南京音は陽平調の[xã]、蘇州音は陽平調の[hã]か[hã̃]、杭州音は陽平調の[hãŋ]となり、『同文備攷』は[hãŋ]で、「ハアン」は南京音に近いが、上記の「ヒン」と同じ、発音上、適切に説明できないため、異なる意味と使い方を区別するのに記さ

れていると考えられる。

このように、「行」に対する声調点は意味の異なる二つの読みを読み間違えることのないように注意するのがその意図である。

なお、「行」の声調について、「ヒン」の場合、巻六では平声点が記されている。また、冠山の他の学習書での状況は、下記の通りである。

『唐語使用』:(平声点)不在。行^{ハン}ブコウシヤ (去声点)信行^{ヒン}マコト
 (四声点・平声)不許擅^{ヒン}行^{ヒン}ワガママニイタスコトヲユルサズ
 『唐音雅俗語類』:(去声点)恃力而行^{ヒン}カヲタノミニシテ行フ
 (四声点・平声)草^{ヒン}行^{ヒン}露宿クサキヲフミワケユキテノシユクヲスル

同書と同じ平声点が付されている一方、「ヒン」音注の場合、去声点と平声の四声調との二種類の場合がある。このように、冠山による他の学習書も「行」の意味に対応して、別々の声調を付けている。

(2)「降」

表 3-26 のように、延べ 7 例、中に「キヤン」が 3 例あり、「ヤン」で表記する 4 例は、全部は漢字の左下角に「○」が付されている。

表 3-26 「降」の表記例

○の位置	用例数	表記	見出し語
平声	4	ヤン	三字話：投降你 汝ニカフサンスル 不肯降 カフサンセヌ 肯納降 カフサンヲユルス 四字話：情愿投降 ノゾンデカフサンスル
なし	3	キヤン	常言：作善降之百祥 善ヲナセハ百ノ祥ヒヲ降ス 作不善降之百殃 不善ヲナセハ百ノ殃ヒヲ降ス 長短話：先生貴降之日 先生ノ誕生日タルコトヲ知レリ

「降」は『広韻』には下記の二種類の読みがある。

匣母平声 「下江切」「降伏」
見母去声 「古巷切」「下也歸也落也」

平声点のある「ヤン」の使用例の意味から、問題なく匣母平声の読みと一致しているのに対して、声調点のない「キヤン」の例は見母去声の読み「古巷切」の意味と対応する。

「降-キヤン」について、見母去声の「下也歸也落也」と対応する『大漢和辞典』の説明に「おちる。」「おりる。」「さがる。」「おろす。」「さげる。」等とある。また、南京音は去声調の[teiã]、蘇州音は陽去調の[kā]([teiã])、杭州音は陰去調の[teiaŋ]、「キヤン」は口蓋化した現代の三方言と対応しない。一方、『西儒耳目資』は[hiam](=[xian])となり、『磨光韻鏡』では「キヤン」とも記されていることから、南京音と吳方言とのいずれからも説明できる。

「降-ヤン」に用いられる平声点「○」は、二種類の読みの一つ、明らかに匣母平声の「下江切」と対応している。『大漢和辞典』は「くだる。」「くだす」「敵をしたがへる」という意味となっている。また、南京、蘇州、杭州音とも陽平調となっているが、南京音は[ɕiã]、蘇州音は[ɦā]、杭州音は[ɦiaŋ]となり、『磨光韻鏡』でも「ヤン」であり、「ヤン」は介音[i]をもつ杭州音と一致している。

このように、「降」には意味の異なる二つの読みがあり、意味を読み間違えないように注意するのが声調点の意図であることが分かる。両方言は声調面では大きな違いがないが、匣母がアヤワ行となっていることから声調点付きの「ヤン」は吳方言の特徴を反映していることが明らかである。また、「ヤン」は介音のない蘇州音とは一致できず、一致するのは介音のある杭州音である。

なお、卷六の「以○^{ヤン}降其妖」にも平声点が付いている。冠山による他の学習書でも、

『唐語便用』:(平声点)不肯○^{ヤン}降コウサンセヌ

『唐音雅俗語類』:(平声点)歸○^{ヤン}降投伏コフサンシテキブクスル

と「ヤン」の読みの方に平声点が付いている。「ヤン」は明らかに匣母をアヤワ行で写す杭州音の特徴であり、官話音の学習書に吳方言の特徴が表れるのは、著者が同じ人であること以外に原因が見当たらない。即ち、先に出来た『唐話纂要』の内容が十分な点検を経ないまま後続の学習書に転載されたということである。

(3)「参」

表 3-27 のように、「参」が延べ 2 例で、声調点が付いているのは「ツアン」の方で、声調点が付いていないのは「スエン」である。

「参」は「參」の俗体字で、『広韻』の「參」の読みと意味は、下記の五種類となっている。

平声	生母深摂「所今切」	「參星亦姓卅本云祝融之後」
	<u>初母深摂「楚簪切」</u>	<u>「參差不齊兒」</u>
	清母咸摂「倉含切」	「參承參觀也」
	心母咸摂「蘇甘切」	(俗作參)「數名」
去声	清母咸摂「七紺切」	「參鼓俗作參」

表 3-27 「参」の表記例

○の位置	用例数	表記	見出し語
平声	1	ツアン	長短話：細細腰支參差疑勒斷 細々腰支ハ參差ニシテ勒斷ヲ疑コト
なし	1	スエン	龍魚：海參 イリコ

平声点が付いている「参-ツアン」は明らかに初母平声の「楚簪切」読みで、「參差不齊兒」の意味と一致している。『大漢和辞典』に「齊しくないさま」との意味である。この意味では南京、蘇州、杭州音とも陰平調の[ts'ən]と発音し、いずれの場合も、主母音[a]をもつ「ツアン」と対応しない。「ツアン」は「倉含切」を注しているだろう。

声調点が付いていない「参-スエン」は原例が「^{ハイスイエン}海參 イリコ」で、『大漢和辞典』による「[正字通]參、人參、藥草名」との意味に対応している。『広韻』には、「所今切」である「參 人參葉也」とあり、『大漢和辞典』に「人參。藥草の名」であるため、意味上から判断すると、「^{ハイスイエン}海參 イリコ」は生母深摂の「所今切」である。南京音が陰平調の[ɣən]、蘇州・杭州音が陰平調の[sən]で、「スエン」は蘇州・杭州音から説明できる。

この二種類の読みについて、両方言では同じ陰平調となり、違いがないが、「ツアン」の主母音という点から、方言の読みから説明できず、「倉含切」と注するものである。「参」に対する声調点は意味の異なる二つの読みを読み間違えることのないように注意するのがその意図である。

なお、巻六と冠山の他の学習書には、「参」の使用例が見あたらない。

(4)「長」

表 3-28 のように、「長」は延べ 24 例あり、上声点が付いている 9 例は、全て「チャン」という清音表記となっている。声調点が付いていないのは 15 例で、

内、二字話の「漫長」、三字話の「使長刀」、四字話の「他的所長」と長短話の「長兄你何其太疑」「我的長子既已大了」5例も清音表記だが、それ以外は、全て「ヂヤン」の濁音表記となっている。声調点が付いていない5例の「ヂヤン」の場合、「^{ツウ}刺^{ツヤン}長^{ツヤン}鎗」「^{スウ}使^{ツヤン}長^{ツヤン}刀」は同じ頁にある例で、前の項目に「ヂヤン」の形が既に出ていたため、後に続く「チヤン」は濁点が省略されたと考えられる。

表 3-28 「長」の表記例

○の位置	用例数	表記	見出し語
上声	9	チヤン	二字話：長進 タタシヒ 三字話：不長進 イタツラモノ 四字話：尊敬長上 目上ノ人ヲウヤマフ 常言：不見其長 其長スルコト見エザレトモ 長短話：長兄你這幾日 キサマコノコロハ 兄長肯帶我去時 御ヘン肯テ我ヲツレ候ハ 安如長兄所言 何ソゴヘンノ云フ如クナランヤ 長兄是和我竹馬之友 貴様ハ某ト竹馬ノ友ナレハ 去歲長兄因有貴恙而不來 貴様御ワツラヒナサレテ…
なし	15	ヂヤン 10 チヤン 5	二字話： <u>漫^{チヤン}長</u> イコフナガヒ 長揖 オフィナルモクレイ 三字話： <u>使^{チヤン}長^{チヤン}刀</u> ナギナタヲ使フ 刺長槍 長ヤリヲツカフ 四字話： <u>他的^{チヤン}所長</u> 彼カ長セル所 説長説短 何ノカノト云フ 做長做短 何ヤラカヤラ致ス 常言：長短家家有 誰カ家ニモナガヒノ… 長思貧難危困 長ク貧キ時ノ事ヲ思ヘハ 豪家未必長富貴 大家タリトモ必ス長ク 長短話： <u>我的^{チヤン}長^{チヤン}子既已大了</u> 我長男已ニ成長致シ候フコヘ <u>長^{チヤン}兄你何其太疑</u> 如何故太タウタガヒ玉フヤ 器用：長刀 ナギナタ 長鎗 ナガヤリ 米谷：長豆 ナガササゲ

「長」は『広韻』に下記の平、上、去の三つの読みがある。

知母：上声「知丈切」「大也又漢複姓」

澄母：平声「直良切」「久也遠也常也永也」

去声「直亮切」「多也」

上声点が付いている「長-チヤン」は、全て「大也」と対応する知母上声の字で、意味は『大漢和辞典』の「としかさ。としうへ。」である。また、上記声調点が付いていない「長短話」にある2例の「長」(「長兄你何其太疑」「我的長子既已大了」)も同じ意味である。上声点が付いていないのは初出ではないため、濁点が省略されたと考えられる。

なお、現代音では、南京音は上声調の[tʂã˥]、蘇州音は陰上調の[tʂã˥]、杭州音は陰上調の[tsã˥]で、いずれも介音iがなく、拗音形の「チヤン」とは一

致しない。これらの音は比較的新しい変化で、『西儒耳目資』では[-am](=[-aŋ])となり、北部吳方言の『同文備攷』は[ʃiaŋ]で、杭州音を反映する『三音正譌』では知母は全てチで、音注と一致する。このように、「チヤン」は介音[i]をもつ吳方言から説明できる。

一方、声調点の付いていない「長-ヂヤン」の意味は澄母平声の「直良切」と対応している。その意味は「久也遠也常也永也」で『大漢和辞典』に「ながく。ひさしく。とこしへに。常に。」とある。上述の「漫長」^{マンチヤン}「他的所長」^{タア、テソウチヤン}との2例は、意味が「ヂヤン」の音注の10例と同じである。濁点の記入漏れと考えられる。これに対応する南京音は[tʂã]、蘇州音は[zã]、杭州音は[dzʌŋ]でともに陽平調だが、音注と対応しない。上述するように、『同文備攷』と『三音正譌』ではともに[i]をもち、「ヂヤン」は濁音声母が保留されている吳方言からしか説明できない。

このように、「長」に対する声調点も意味の異なる二つの読みを読み間違えることのないように注意するのがその意図である。

なお、巻六では「兄^{チヤン}長」のように、「としかさ。としうへ」の意味の「長」にも上声点が付いている冠山の官話学習書も下例のように同じである。

『唐語便用』:(上声点)久聞^{チヤン}○長兄弟大名

『唐音雅俗語類』:(上声点)○長^{チヤン}老

(5)「省」

表 3-29 のように、「省」は延べ 6 例あり、「スエン」と「スイン」が各 3 例となっている。「スイン」3 例中 2 例に上声の声調点が付されている。

表 3-29 「省」の表記例

○の位置	用例数	表記	見出し語
上声	2	スイン	三字話:省什麼 何ヲカシラン 四字話:不省人事 ムシヤウニナル
なし	4	スエン 3 スイン 1	二字話:省力 テマヲトラヌ 三字話:省用些 シマツヲシテ使エ 四字話:省 ^{スイン} 得什麼 何ヲカシラン 長短話:教我省得虚思空想就是了 我ヲシテウカウカトアンジザラシメンコソ尤

「スイン」の残り 1 例(「^{スイン}省得什麼」)に声調点が付いていないのは、「四字話」の同じ頁では、「不省人事」と「^{スイン}省得什麼」が続きで、前の「不省人事」の「省」に声調点が付いているため、後に続く「省得什麼」の「省」の声調点が省略されたと考えられる。無論二つの「省」の意味は同じである。

「省」は『広韻』に梗撰上声の読みが二種類ある。

生母 「所景切」「省署漢書所曰舊名禁中避元后諱改爲省中又姓」
心母 「息井切」「察也審也」

声調点付きの「省-スイン」は、『漢語大字典』では心母の「息井切」読みに属する「明白；醒悟」(會得する。さとる。)という意味で、「察也審也」と一致している。なお、南京音は上声調の[eiŋ]、蘇州音は陰上調の[sin]、杭州音は陽上調の[eiŋ]となるが、『西儒耳目資』と『同文備攷』ではともに[sin]である。このように、「スイン」はいずれの場合にも対応する。

「○」のない「省-スエン」は、「四字話」の「^{スイン}省得什麼 何ヲカシラン」以外、生母「所景切」の読みと対応し、『漢語大字典』に「簡；節約」との説明があり、つまり、「節約」という意味である。また、南京音は上声調の[ɕəŋ]、蘇州音は陰上調の[ɕən](文)[ɕã](白)、杭州音は陰上調の[sən]となるが、『西儒耳目資』では[səm](=[səŋ])で、『同文備攷』では[səŋ]と記されている。従って、「スエン」は南京音、蘇州音、杭州音のいずれからも説明できる。

このように、「省」に対する声調点も意味の異なる二つの読みを読み間違えることのないように注意するのはその意図である。

なお、冠山による他の学習書では、下記のように、「會得する。さとる」にあたる「省」にも上声点が付いている。

『唐語便用』:(上声点)不^{スイン}省得^{シラヌ} (上声四声点)儉^{スエン}・省^{シマツスル}

『唐音雅俗語類』:(上声点)能自^{スイン}省也^{自ラサトルコト能ハス}

(6)「分」

表 3-30 のように、「分」は延べ 29 例あり、その中に「フン」が 25 例で、「ウエン」が 4 例となっている。4 例の「ウエン」の全てに去声点が付されている。

「分」は『広韻』に、下記の臻撰所属の二種類の読みがある。

非母平声 「府文切」 「賦也施也與也説文別也」
 奉母去声 「扶問切」 「分劑」

去声点「○」付きの「分-ウエン」は、『漢語大字典』に「職分」とあり、『広韻』の「分劑」の現代の派生義であり、奉母去声の「扶問切」と対応している。南京音は去声調の[fəŋ]、蘇州音は陽去調の[vən]と声調面の違いが表れていないが、『磨光韻鏡』の去声の「分」が「ウエン」となっていることから、「ウエン」は奉母の濁音を維持した形となっているので、蘇州音と杭州音からしか適切な説明が得られない。

表 3-30 「分」の表記例

○の位置	用例数	音注	見出し語
去声	4	ウエン	二字話:本分 マタイモノ 常言:見讐人分外眼明 カタキヲ見ル眼ハ別ソ明ト云フ 長短話:守本分處世 本分ヲ守テ世ニ處シ 幾乎守不牢本分 本分守ルコトモ牢カラス候フ
なし	25	フン	二字話:分袂 ワカル、分手 ワカル、分説 云ワケ 分派 ワケル 分割 ワカツ 平分 ヒヤウダウニワクル 均分 ヒヤウダウニワクル 分付 云ツケ 四字話:分心他事 心ヲヨノコトニモクハル 未分雌雄 マタシヤウフカナヒ 十分嫵致 イカフウツクシヒ 抽分忒多 ウンチンガアマリ多イ 平分利錢 利ヲビヤウドウニ分ル 知尹分付 奉行ノ云付 十分大弄 大ニオゴル 五字話:十二分顔色 イカフ佳キ色 常言:財上分明大丈夫 金銀財宝イフヲ分明ニイタスハ大丈夫ナリ 長短話:你們面添五分春色 汝たちハ面ニ春色ヲ添テ 分些我受用也好 我ニモ分テシヤウクハンイタセンヤ 我十分用心 我十分セイヲ出シタルユヘ 十分大冷 十分大ニサブシ 便十分用心 十分セイヲ出シテ 何妨也分明告訴 分明ニ告知ラセテ 十分撒潑 十分ニイタヅラヲイタシヌ 数目:一分

声調点のない「分-フン」の例は、「わかつ、わける」という意味であり、非母平声の「府文切 賦也施也與也説文別也」と一致している。「別也」と対応する『大漢和辞典』に「わかれる。」とあり、また、「なかば。」「わり。」「尺度の一単位」「重量の一単位」「小数の一単位」などの意味もある。南京、蘇州、杭州音とも陰平調となり、南京音が[fəŋ]、蘇州、杭州音が[fən]と発音し、「フン」は両方言と対応する。

このように、「分」に対する声調点も意味の異なる二つの読みを読み間違えることのないように注意するのがその意図である。

なお、冠山の他の学習書でも下記のように、「職分」の意の「分」に去声点が付されている。

『唐語使用』:(去声点)情分^{フエン}○^{ナサケ}
 (去声点)有^{ウエン}個分^{フエン}○未可知^{シナノツタコトアヲノモシレマイ}
 『唐音雅俗語類』:(去声点)縁分^{フエン}○^{ウスキ}浅薄^{フン}
 (平声四声点)共謀不^{フン}・分^{フン}共ニハカルヲ分タス

(7)「作」

表 3-31 のように、「作」は延べ 24 例で、その内、「ツヲ」が 21 例、「ツヲ、」が 3 例である。延音点が付く 3 例は、去声の声調点が付されている。

表 3-31 「作」の表記例

○の位置	用例数	表記	見出し語
去声	3	ツヲ、	二字話:作東 テイシユトナル 三字話:愛作善 センヲナスコトヲスク 悪作悪 アクヲナスコトヲキラフ
なし	21	ツヲ	二字話:作禮 レイヲオコナフ 作揖 モクレイヲスル 作別 イトマゴヒヲスル 作謝 レイヲ云フ 作色 ニンソウスル 發作 タギル 四字話:没作道理 シカタガナヒ 波浪不作 波カヲコラス 波浪大作 波カ大ニオコル 風波大作 フウハガ大ニオコル 五字話:便回噴作喜 即チ噴ヲ変シテ悦ヒトナス 常言:作善降之百祥 善ヲナセハ百ノ祥ヒヲ降ス 作不善降之百殃 不善ヲナセハ百ノ殃ヒヲ降ス 作富貴計者 富貴ノ計ヲ計ス者ハ 莫作舊時看 前コドノヤウニハ思フナト云フ 莫作没前程 行末ニヨキコトナカラシヤウノコトヲ作コトナカシ 嘆作爲之齟齬 作事ノ齟齬スルコトヲ嘆シ 平常不作虧心事 平日ウシロクラキコトヲセネハ 長短話:平生不作皺眉事 平生眉ヲ皺ルヤウノニガニガシキコトヲセンズンハ 学問大作 学問大ニハヤル 自然要來作半東 半テイシユトナリ

「作¹⁰²」は、『広韻』には、下記の去声と入声との二種類の読みがある。

¹⁰² 『康熙字典』に「做」について、「【正字通】俗作字彙租去聲又音佐从不知本有去入二音分作做爲二非互見作字註」とあり、つまり、「作」は「做」の俗字である。「作」は、『漢語大字典』に「《説文》：“作，起也。从人，从乍。”按：甲、金文均作乍，不從人。以後加人旁，分化爲二字。」とあり、つまり、本来の意味は「おきる」である。

遇 撮 去 声 「臧祚切」「造也」

果 撮 去 声 「則箇切」「造也本臧洛切」

宕 撮 入 声 「則落切」「爲也起也行也役也始也生也又姓」

「作」について、3 例に延音点「ㄷ」の付きの表記と、それ以外が入声字に対する短音節表記と分かれた。

入声の字の検討を通して確認したように、「作-ツヲ」が入声である。つまり、声調点が付かない「作-ツヲ」は反切の「則落切」、『大漢和辞典』にある「おこる。おこす。あらはれる。」の意味と対応する。なお、声調点のない「ツヲ」の表記例の中に、「長短話」の「自然要來作半東 半テイシユトナリ」は例外で、去声点付きの例の意味と同様である。

去声点のある例は延音点「ㄷ」があり、非入声の「臧祚切」(遇撮)或いは「則箇切」(果撮)の読みと対応し、「造也」の意味、即ち『大漢和辞典』にある「なす。おこなふ。」と一致している。

「作」は、南京音が入声調の[tsoʔ]、蘇州、杭州音が陰入調の[tsoʔ]となっている。また、『三音正譌』は「ツヲ」との短音節の音注となっている。一方、北部呉方言の『同文備攷』には[tsak]、[tso]二種類の読みがあり、杭州音の『磨光韻鏡』の遇撮が「ツヲㄷ」、果撮入声が「ツヲ」である。このように、「作」に対する二種類の音注は入声と去声と両読みをもつ呉方言の特徴からも説明できる。

このように、「作」に対する去声点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であることが言える。

なお、巻六には「作-ツヲ」に対して、入声を示す四声点の例が存在する。他の学習書の場合、下記のように「作」に対する去声点は同書と同じである。

『唐語便用』:(去声点)回嗔作^{ツヲ、}喜^{イカリヲ引カヘテヨロコヒトス}
(入声四声点)没作^{ツヲツ}・道理^{シカタカナイ}

『唐音雅俗語類』:(入声四声点)大丈夫作^{ツヲツ}・事^{大丈夫ノ作事}

(8)「足」

表 3-32 のように、「足」は延べ 17 例あり、その内、「ツヲ」が 14 例で、「ツユイ」が 2 例である。「ツユイ」の 2 例はともに去声の声調点が付されている。

「足」は『広韻』に去声と入声との二つの読みがあり、以下の通りである。

遇撰去声 「子句切」「足添物也本音入声」

通撰入声 「即玉切」「爾雅云趾足也又滿也止也從口止」

表 3-32 「足」の表記例

○の位置	用例数	表記	見出し語
去声	2	ツユイ	三字話：足奉人 人ニツイシヤウスル 長短話：又不肯足奉人 人ニモヘツラハス
なし	15	ツヲ 14 ツエ 1	二字話：不足 タラヌ 四字話：何足挂齒 ロニカケテ云ニタラヌ 不足爲奇 フシギトスルニ足ス 文武足備 文モ武モ足り備ル 常言：知足可樂 足ルコトヲ知レハ樂ミアリ 豈足深信 何ゾ深ク信スルニ足ンヤ 手足斷時難再續 手足斷ル時ハ再ヒ續キガタシ 比上不足 上ヲ見ハ限リハナケレトモ 兄弟爲手足 兄弟ヲ手足トシ 長短話：足下名聞四方 足下ノ名ハ四方ニキコエ 恐不足爲對耳 アヒテナルニ足サラシ 豈如足下之言哉 --- 亦不足爲憂 憂ルニ足ズ 器用：足械 足ジャフ 虫介：百足 ヲサムシ

注：・「ツエ」の 1 例は「ツヲ」の誤記と考えられる。

「○」が付けられている「足-ツユイ」は、去声の字であり、「足奉人 人ニツイシヤウスル」のように、「追従する」という意味で、『大漢和辞典』にある「そへる」に一致する。

「○」がない「足-ツヲ」は入声の「即玉切」、『漢語大字典』には「動物用以行走或奔跑的器官；支撐器物的脚；充实，完备，足够；満足；」等とあり、『大漢和辞典』による「あし。とまる。とどまる。たる。たす。」等の意味と対応する。

「足」は南京音では入声調の[tsuʔ]、蘇州・杭州音では陰入声調の[tsoʔ]、ともに入声であり、韻母面では「ツヲ」は蘇州・杭州音により近い。また、「ツユイ」は両方言には対応の読みが見られないが、『同文備攷』には[tsy](足恭)と[tsok]とがあるため、「ツユイ」は[tsy]と対応でき、吳方言から説明できる。

このように、「足」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

一方、『唐語便用』に「那會足^{ツユイ}○奉的人 彼ヨクオヒゲノチリヲト人ハ」とあり、同書の 2 例と同じ、意味に対応して声調点をつけている。

(9)「惡」

表 3-33 のように、「惡」は延べ 18 例あり、その内、「ㄩ」が 13 例で、「ㄨ」が 5 例である。5 例の「ㄨ」の中、4 例は去声の声調点が付されている。

表 3-33 「惡」の表記例

○の位置	用例数	表記	見出し語
去声	4	ㄨ	三字話：惡作惡 アクヲナスコトヲキラフ 常言：行人惡其泥濘 路ヲ行ク人ハ地上の泥濘ヲ惡ム 是猶惡醉而強酒 是乃チ酔フコトヲ惡テ酒を強ヒルガ如シ 方今之人惡死亡 今ノ人ハ死亡ヲ惡テ
なし	14	ㄩ 13 ㄨ 1	二字話：惡心 ムネノワルイ 三字話：惡作惡 アクヲナスコトヲキラフ 无惡報 アシキムクヒハナヒ 四字話：那厮可惡 アイツハニクヒヤツ 休要惡猜 ジヤスイヲスルナ 六字話：流配遠惡軍州 遠国ノ惡所ニ流ス 常言：惡事傳千里 アシキコトハ千里ノ外エ聞ユ 惡事莫樂 惡事ヲハ樂ムベカラズ 惡以自損 惡ハ自分ノ損ナリ 聞惡如聾 惡ヲ聞トキハ聾ノ如クニセヨ 行惡之人 惡ヲ行フ人ハ 原無惡意 本惡意ニアラス 於我惡者 ワニアシクスル者ニハ 我亦惡之 我モ亦コレニアシクス

「惡」は『広韻』にはいずれも影母に属する読みで、以下の三種類がある。

遇撮平声 「哀都切」 「安也」

遇撮去声 「烏路切」 「憎惡也」

宕摄入声 「烏各切」 「不善也 説文曰過也」

去声の声調点が付けられている「惡-ㄨ」は、去声の「憎惡也」、つまり「憎む」という意味と対応している。また、南京音は去声調の[əu]読みで、蘇州音は陰去調の[əũ]、杭州音は陰去調の[əũ]となる。それに、『同文備攷』でも[əũ]となっていることから、「ㄨ」は南京音と吳方言の双方から説明できる。

声調点がない「惡-ㄩ」の例の中、「那厮可惡^ㄨ アイツハニクヒヤツ」は明らかに「憎惡也」という意味で、「烏路切」となり、初出でないため、去声点「○」が省略された可能性があると考えられる。「那厮可惡」以外、『大漢和辞典』による「わるい。」という意味と対応し、入声の「烏各切 不善也」となる。また、南京音が入声調の[əʔ]、蘇州音が陰入調の[əʔ̃]、杭州音が陰入調の[əʔ̃]となり、「ㄩ」はいずれからも説明できる。

このように、「悪」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、他の学習書にある下記の例のように、同書と同じ、「悪-ウゝ」に去声点が付されている。

『唐語使用』:(去声点)憎^{ウゝ}悪^{〇ニクム}
 『唐音雅俗語類』:(去声点)悪^{ウゝ}殘骨^{ナシ}骸^ツ
 (入声四声点)懲^ツ勸善^ツ惡^ツ。

(10)「覺」

表 3-34 のように、「覺」が延べ 5 例で、「キヤ」が 4 例、「キヤ〇ウ」が 1 例となっている。「キヤ〇ウ」に去声点が付されている。

表 3-34 「覺」の表記例

〇の位置	用例数	表記	見出し語
去声	1	キヤ〇ウ	四字話：待要睡覺 睡トイダシタ
なし	4	キヤ	四字話：漸覺好些 次第ニ此ヨク覺ル 没人知覺 人ノキノツクコトナシ 長短話：覺得有些不耐煩 心モチアシゝ 是更覺耐煩些 ヨホド快ク覺へ候フ

「覺」は『広韻』に二種類の読みがあり、下記の通りである。

効掇去声 「古孝切」「睡覺」

江掇入声 「古岳切」「曉也大也明也寤也知也」

声調点が付けられている「キヤ〇ウ」は、明らかに去声の「古孝切 睡覺」、
 「寝る」という意味と対応している。南京音が去声調の[teiau]、蘇州音が陰去
 声調の[kæ][teiã]、杭州音が陰去調の[kɔ][teiõ]となり、声調はともに去声で
 ある。現代音ではいずれも口蓋化して、声母が大きく変わり、蘇州音と杭州音
 は韻母も単母音化して、音注と一致しないが、第二章第四節で述べたように、
 これらはいずれも新しい変化で、三者とも声母は[k-]、蘇州音と杭州音の韻
 母はどちらも[-iau]であった。『同文備攷』では[kiao]、『磨光韻鏡』では「キヤ
 〇ウ」となり、これを反映している。よって、音注は三者とも対応していることが
 分かる。

声調点のない「キヤ」の例は、短促性の音注で、入声の「古岳切 曉也大也明也寤也知也」と一致している。『大漢和辞典』に「さとる。」「さとす。」「感じる」との意味となっている。南京音は入声調の[teioʔ]、蘇州音は陰入声調の[koʔ][teioʔ]、杭州音は陰入調の[teioʔ]となり、ともに同じ入声の読みとなっているが、現代の発音の上では「キヤ」は両方言から説明できない。前述したように当時声母は口蓋化しておらず、三者とも[k-]で問題がなかった。韻母は『同文備攷』は[-ɒk]、『磨光韻鏡』は「キヤ」で、「キヤ」は南京音と杭州音から説明できる。

このように、「覚」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、他の学習書には、下記のような例があり、同じように異なる意味に対応した声調点が使用されている。

『唐語便用』:(去声点)寧可睡覺^{キヤ〇ウ}罷^〇イツツフネタガマシ
 (入声四声点)不覺^{キヨツ}・苦^{キヤ}ニモナイ
 『唐音雅俗語類』:(去声点)睡了一覺^{キヤ〇ウ}ヒトイキネイリタ

(11)「差」

表 3-35 のように、「差」は延べ 9 例あり、声調点がつているのはその内の 2 例である。「サ°イ」の「差人去」1 例と「ツウ」の「細細腰支参差疑勒断」1 例となり、それ以外、「チャア」の「差不多好了些」1 例を除き、全て「ツアゝ」である。

表 3-35 「差」の表記例

○の位置	用例数	表記	見出し語
平声	1	ツウ	長短話:細細腰支参差疑勒断 参差ニシテ勒ハ断イヲ疑コト
去声	1	サ°イ	三字話:差人去 人ヲツカハス
なし	7	ツアゝ ⁶ チャア ¹	三字話:差不多 ヲフカタ 四字話:并無差池 チガヒガナヒ 五字話:差不多些好 大方ナラハヨヒ 六字話:差 ^{チャア} 不多好了些 ヲフカタニヨヒ 長短話:差不多妥貼了大カタラチアキヌ 与舊日大差懸絶 眼タリ旧日トハ大ニ差ヘリ 小曲:你有差池

「差」は『広韻』に、いずれも初母の五種類の読みがある。

止撮 平声の「楚宜切」「次也不齊等也」
 蟹撮 平声の「楚佳切」「差殊又不齊」
 「楚皆切」「簡也」
 去声の「楚懈切」「病除也」
 仮撮 平声の「初牙切」「擇也又差舛也」

表記例の意味から分かるように、「ツウ」は止撮平声の「楚宜切 次也不齊等也」、つまり、『大漢和辞典』による「ひとしくない。そろはない。」という意味と対応する。なお、南京音、蘇州音ともに陰平調の[ts‘ɿ]となり、「ツウ」は両方言と対応する。

「サ°イ」は蟹撮平声の「楚佳切 差殊又不齊」、『大漢和辞典』による「つかはす。派遣。」という意味と対応している。なお、南京音では陰平調の[tɕ‘aæ]、蘇州音では陰平調の[ts‘a]、杭州音では陰平調の[ts‘ɛ]となり、『同文備攷』は[tɕai]、『磨光韻鏡』では「ツアイ」であり、「サ°イ」と対応しているが、去声点は南京音、蘇州・杭州音とも一致しない。

声調点のない「ツアヽ」「チャア」の例は仮撮平声の「初牙切 擇也又差舛也」読み、つまり、『大漢和辞典』にある「あやまる。とりうしなふ。」と対応する。『漢語大字典』には「是当, 差错; 差別, 区别; 原数的一半; 两数相減的余数; 副词」などの意味がある。南京音は陰平調の[tɕ‘ɐ]、蘇州音は陰平調の[ts‘o]、杭州音は陰平調の[ts‘a]となり、『同文備攷』は[tɕa]、『磨光韻鏡』では「ツアヽ」となっていることから、例数の多い「ツアヽ」は呉方言から説明でき、「チャア」は南京音と対応している。

このように、「差」に対する二種類の声調点も意味の異なる三つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、巻六には「差-サ°イ」に用いられる去声点の「差°恩人來救我」という例がある。また、他の学習書の例は次のようになっている。

『唐語便用』:(平声点)○差^{サ°イ}使_{ツカイヲツカハス} ○差^{サ°イ}使去_{ツカイヲツカハサン}
 (四声点・平声)●差^{ツアヽ}不多好了

『唐音雅俗語類』:(平声点)○差^{サ°イ}個了事的人去好_{コトナレタル人ヲツカハシタガヨイ}

「つかはす」という意味に対応する「差」に対する声調点は官話の学習書では平声点となっている。平声点の方は各方言音に合う。同じ著者による文献間

の違いを適切に説明することは困難だが、異なる意味に対応して声調点が使用されているという点において共通している。

(12)「着」

表 3-36 のように、「着」は延べ 24 例あり、「ヂヤ」(17 例)、「チヤ」(6 例・小曲 2 例)、「チヨ」(小曲 1 例のみ)で、全て入声となっている。内、「チヤ」の 1 例は入声の声調点が付されている。『広韻』には、「著」字の場合は「俗作着」であり、即ち、「着」は「著」の俗字である。

表 3-36 「着」の表記例

○の位置	見出し語
入声	三字話：着人來 人ヲヨコス
なし	三字話：用不着 ヨウニタハヌ 没着落 フテツキガナイ 猜得着 スイサツシタ 向着火 火ニアタル 烘着手 手ヲアブル 買着了 カヒアテタ 賣不着 ウリアテヌ 估不着 子クミガシアテラレス 四字話：穿着襪子 タビヲハク 穿着艸鞋 ザウリヲハク 搵不着了 トバカヌ 搵得着了 トバク 五字話：帮着大老官 大ジンニタイコヲモチアテタ 六字話：必須快快去着 必ス早く行ケ 安排着要議事 事ヲ議セント欲ス 後叉着手待人 ウシロ手シテ人ヲアシロフ 他愛着象棋哩 彼ハシヤウギヲサスコトガスキ也 我要和你着棋 我汝トゴガ打チタヒ 長短話：尚幸希没有火着 尚幸ニ火事アラヌ 不意撞着你的阿兄 フト汝舎兄ニ行逢ヒ 小曲：睡不着 睡也睡不着 十兒愛着你

『唐話纂要』に「着」「著」二種類の字体があるが、『広韻』には、「著」字の場合は「俗作着」であり、即ち、「着」は「著」の俗字であるとある。「著」は『広韻』に、下記の通り五つの読みがある。

- (澄母遇攝)平声の「直魚切」 「爾雅云太歳在戊曰著雍」
- (知母遇攝)上声の「丁呂切」 「著任」
- (知母遇攝)去声の「陟慮切」 「明也處也立也補也成也定也」
- (知母宕攝)入声の「張略切」 「服衣於身」
- (澄母宕攝) 「直略切」 「附也」

その中で短促的な音節の音注と対応するのは、

入声の「張略切」(全清)「服衣於身」 「直略切」(全濁)「附也」

である。入声点付きの「チャ」は原例が「三字話」の「^{チャジンライ}着人来」であり、意味の上では「服衣於身」、つまり、『大漢和辞典』による「きる。著物を衣る。」と一致せず、『漢語大字典』に「命令；打发」、つまり、「しめる。させる。」という動詞の意味を表している。入声点のない例について、第四章の澄母の部分で検討するように、濁音音注の「ヂヤ」の殆どは現代では助詞として使われている入声の「直略切 附也」、『大漢和辞典』による「つく。つける。」という意味と一致している。清音音注の「チャ」は入声点付きの例と同じ、動詞の使い方が多い。

南京音では入声調の[tʂoʔ]であり、蘇州音では「衣着」という語彙が陰入声調の[tʂaʔ]、「着手」等の語彙が陽入声調の[ʒaʔ]となっている。また、『同文備攷』では「著」について、[dʒiak](著地)、[tʃy](著明)、[dʒy](詩俟我乎著)との三つの読みがあり、「ヂヤ」音注は呉方言から説明できる。

「小曲」以外の「チャ」の「^{モク、チヤ、ロ}没着落」「^{コウヤ○ウホウニイチャキイ}我要和你着棋」「^{ダア、アイチャツヤンギイリイ}他愛着象棋哩」はいずれも初出でなく、濁点省略された可能性も考えられる。

このように、「着」に対する入声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、下記のように、

『唐語便用』:(入声四声点)老^{チャツ}着・臉皮了^{ツラノ皮ヲアツクソイル}

『唐音雅俗語類』:(入声四声点)竟不着^{チャツ}・意^{ツント心ニトメヌ}

他の学習書には「派遣、命令」という意味を表す表記がなく、四声点があるのは助詞の用法の「直略切」に対応する例である。

4.1.1.2 音注に書き分けのない漢字

(13)「擔」

表 3-37 のように、原例に「擔」「担」2 字の字体が違うが、意味の違いが見られないので、「擔」に統一する。延べ 5 例で、音注が全て「タン」となっている。その中の 3 例に平声の声調点が付されている。

「擔」は『広韻』に、以下の端母の二つの読みがある。

平声 「都甘切」 「擔負釋名曰擔任也任力所勝也」
去声 「都濫切」 「負也」

表 3-37 「擔(担)」の表記例

○の位置	見出し語
平声	二字話：擔来 持テ来レ 担去 持テユケ 三字話：担火来 火モテコヒ
なし	四字話：動担不得 得ウゴカヌ 器 用：扁担 ニナヒボウ

声調点が付けられているのは、動詞として用いられ、平声読み「都甘切 擔負」、つまり、『大漢和辞典』による「おふ。せおふ。」と一致している。南京、蘇州、杭州音では同じ陰平調である。

声調点のない 2 例は動詞ではない使い方、去声の「都濫切 負也」と対応する。南京音は去声調、蘇州・杭州音は陰去声調で、声調面の違いがない。

南京音は[tã]、蘇州・杭州音は[tɛ]となっているが、『西儒耳目資』は[tan]、『同文備攷』に上声の[tan]、『磨光韻鏡』に平声、去声の両読みがあり、いずれも「タム」となることから、「タン」はいずれの場合からも説明できる。

このように、「担」に対する平声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、官話系の『唐音雅俗語類』にある「打拴・擔脚 ニツクリヲスル」のように、上声を示す四声点が付されて、『唐話纂要』の声調点と異なる声調を示している。

(14)「重」

表 3-38 のように、「重」は延べ 13 例あり、音注は「ヂヨン」と「チヨン」となり、

「チヨン」の例はいずれも初出でないため、濁点の省略の可能性はある。「ヂヨン」は「^{ヂヨンスインツフ}重新做」の1例だけで、平声の声調点が付されている。

表 3-38 「重」の表記例

○の位置	見出し語
平声	三字話：重新做 アラタメテツクル
なし	二字話：看重 オモンズル 敬重 ウヤマフ 借重 タノム 鼎重 カナエノコトクオモヒ
	四字話： ^{チン} 重富欺貧 富人ヲオツモンソ貧者ヲアザムク 必当 ^{チン} 重謝 必スオモクヲレイヲ申スヘシ
	五字話：罪重的下牢 罪ノ重キ者ハ牢ニ入ル 牽來多少重 マハシニシテハ何ホドノ重ミアルゾ
	常言： ^{チン} 重名節於泰山 名節ヲ重ンジ 小舩不堪重載 小舩ハ重荷ヲ積ニタエス
	長短話：而重值堯舜之時也 再ヒ堯舜ノ御代ニアエリ 原來重利輕命之徒 利ヲオモンジ命ヲカロンスル徒ナコトハ

「重」は『広韻』に下記の三種類の読みがある。

- 平声 「直容切」「複也疊也」
 上声 「直隴切」「多也厚也善也慎也」
 去声 「柱用切」「更爲也」

声調点が付けられている「ヂヨン」は、副詞として使われ、平声の「直容切複也疊也」で、『大漢和辞典』に「かさねる。再びする」と一致している。南京、蘇州、杭州音はともに陽平調である。

声調点が付かない例は意味の上では上声「直隴切」の「多也厚也善也慎也」、つまり、『大漢和辞典』による「おもい。」「おもくする。おもんずる。」「おもさ。おもみ。」「にもつ。」に対応している。南京音では去声調、蘇州、杭州音では陽去調となっている。

「重」の南京音は[tʂ'oŋ]、蘇州音は[zɔŋ]、杭州音は[dzoŋ]であり、音注は南京音とは合わない。破擦音であることから、杭州音により一致することが分かる。『同文備攷』では介音[i]をもつ[dʒioŋ]となっていることから、「ヂヨン」は明らかに呉方言の特徴を反映している。

このように、「重」に対する平声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、冠山の他の学習書の場合、下記の例のように、意味の違いによって平声点と去声点を使い分けている。

『唐語使用』:(平声点)層^{チヨン}○重^{カサナル}

『唐音雅俗語類』:(平声点)食不^{チヨン}○重肉^{チヨン} 食スルニサイガズ多クセヌコト

(去声点)重^{チヨン}○整杯盤再備酒肴 又々サカツキサケサカナト、ヘソナフ

(15)「從」

表 3-39 のように、「從」は延べ 12 例あり、音注は「ヅワン」と「ツワン」となり、「ツワン」音注の 1 例は初出でないため、濁点が省略された可能性がある。「ヅワン」の 1 例「從新寫」に声調点が付されている。

表 3-39 「從」の表記例

○の位置	見出し語
平声	三字話:①從新寫 アラタメテカク
なし	三字話:②難信從 ^{ツワン} シンジガタヒ 四字話:敢不從命 何ゾ仰セニ從ハサランヤ 不敢從命 仰セニシタカハズ 安敢不從 何ゾシタカハザランヤ 五字話:從來未曾見 ツイニ見ヌ 常言:從來沒有口角 曾テロ舌カナヒ 長短話:從今以後 今ヨリ後ハ 且從此以後 且今ヨリ後ハ 不敢從命了 仰セニシタカヒカシ 前日從街上走過 前日町ヲ通り候フテ 畢來相從 畢ク來テ相從フ

「從」は『広韻』に、下記の通り三種類の読みがある。

平声 從母「疾容切」「就也又姓」

清母「七恭切」「從容」

去声 從母「疾用切」「隨行也」

声調点のない例は明らかに去声從母の「疾用切 隨行也」、つまり、『漢語大字典』の「隨行，跟随；追逐；随着，接着；随从者；率，带领；牵；听从，依顺；为，从事；副词，从来，向来。」、『大漢和辞典』による「したがふ。」「したがって。」と対応している。

平声点付きの例について、『漢語大字典』に、從母の「疾容切」読みの派生義の一つとして、下記のような説明がある。

多；重叠。《爾雅·釋詁上》：“從，重也。”《詩·大雅·既醉》：“釐爾女士，從以孫子。”唐杜甫《題桃樹》：“小徑升堂舊不斜，五株桃樹又從遮。”仇兆鰲注：“從，一作重。”

ここから「又從遮」とあるように、「重」と同じ「再び」の意味があるということが分かる。「從新写」の意味はこれと完全に符合する。

平声の読みについて、南京音が陽平調の[tɕ'ɔŋ]、蘇州音が陰平調の[zɔŋ]、杭州音が陽平調の[dzɔŋ]であり、濁音音注の「ヅワン」は上述したように杭州音により一致している。なお、『同文備攷』では平声の[ts'ɔŋ](従容)、[dzɔŋ](道上随行)、上声の[sɔŋ](縦臬)、去声の[tɕɔŋ]、[dzɔŋ](相待)との五つの読みが確認できた。中古音の「疾容切 就也」から派生した「ツワン」の例は[dzɔŋ](道上随行)と一致する。つまり、声調点の有無を問わず、濁音の読みとなる。

このように、「從」に対する平声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、卷六には「與一從^{ツワン}僕」などのように、「從」に付されているのは平声点でなく、去声点である。冠山の他の学習書には下記のような例がある。ここでも異なる意味に併せて去声点が平声の四声点と使い分けられている。

『唐語使用』:(平声四声点)●從此以後今ヨリ以後ハ
 『唐音雅俗語類』:(去声点)車馬僕從^{ツワン}一車馬供人一
 (平声四声点)●從善如登從惡善ニ從ヘハ登ルカ如ク

(16)「禁」

表 3-40 のように、「禁」は延べ 6 例で、音注が全て「キン」である。その内の 1 例に平声点が付されている。

表 3-40 「禁」の表記例

○の位置	見出し語
平声	四字話:頭痛難禁 ツツウシテタエカタシ
なし	二字話:難禁 タエガタヒ 四字話:大禁賭博 大ニバクチヲキンスル 六字話:官府也禁不得 公儀カラサエ亦禁スルコトガナラヌ 常言:官無三日禁 公儀ノ三日法度ト云フ 小曲:去叫奴難禁受

「禁」は『広韻』に、声母・韻母が同じだが、声調が違う二種類の読みがある。

平声 「居吟切」「力所加也勝也」
去声 「居蔭切」「制也謹也止也避王莽家諱改曰省又姓」

声調点付きの例は、平声の「居吟切」、つまり『大漢和辞典』の「おさへる」と一致している。また、南京と蘇州両方言では同じ陰平調である。

声調点のない例では、「二字話」の「難禁」と「小曲」の「去叫奴難禁受」の「禁」も声調点付の「禁」と同じ意味だが、なぜか声調点が付されていない。それ以外の例は、「制也謹也止也」、つまり『大漢和辞典』の「とめる」という意味と一致している。このように、声調点の記入漏れと思われる例を除けば、声調点付の例と声調点のない例とは意味が異なることが分かる。声調点のない例は、南京音が去声調、蘇州、杭州音が陰去調となり、大きな違いがない。

発音の上、南京音は[tein]、蘇州音は陰去[tein]、杭州音は陰去[tein]となっているが、当時は口蓋化せず、声母が[k-]だった。また、『同文備攷』には平声と去声との両方が収録されている。

上述したように、現代音ではいずれも口蓋化して音注と対応しないが、当時は[k-]で、音注と問題なく対応していた。このように、「禁」に対する平声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、冠山の他の学習書に、下記の例があり、「おさへる」意味の「禁」に平声点も付されている。

『唐語便用』:(平声点)今朝却頭痛難^{キン}○禁^{キン}今朝ハ頭ツウタエカタシ
『唐音雅俗語類』:(平声点)烟火○禁^{キン}燎^{火ニヤカル}

(17)「更」

表 3-41 のように、「更」は延べ 18 例で、音注が「ケン」(14 例)、「ケ^ン」(4 例)である。平声の声調点が付されている 8 例の中に、「小曲」の例が「ケン」で、「衣服破時更得新」のみが「ケ^ン」である。右肩点の部分で検討したように、「[°]」は主母音[a]を示すもので、「ケ^ン」と「ケン」とは区別がない。

「小曲」の声調点のない 3 例はいずれも連続した句の中にあるもので、前に出ている例に声調点がついているため、それに続くこれらの例の声調点が省

略されたと考えられる。

表 3-41 「更」の表記例

○の位置	見出し語
平声	常言：衣服破時 ^{ケン} 更得新 衣服破ル時ハ新ラシキニ更ムヘシ 小曲：一更裡天 二更裡多 三更裡憂 四更裡催(2) 五更裡罷(2)
なし	四字話：更換衣服 キリモノヲキカエル 六字話：小嘍囉更多了 小ヌス人ハイヨイヨ多シ 長短話：更不似方今後生 只今ノワカキ者ノヤウニ 今冬與往年更冷 今冬ハ例年ヨリサムク ^{ケン} 更兼打拳使脚等事 其上ヤハラ等ノコトマテ ^{ケン} 更兼門當戸對 更門戸相ヒ當対ソ 是 ^{ケン} 更覺耐煩些 ヨホド快ク覺へ候フ 小曲：一更裡天 二更裡多 三更裡憂

「更」は『広韻』に下記の二種類の声調の異なる読みがある。

平声 「古行切」「代也償也改也」
 去声 「古孟切」「易也改也」

声調点付きの例「衣服破時^{ケン}更得新」は、平声の「古行切 代也償也改也」で、『大漢和辞典』の「かへる。あらためる」との動詞の意味一致している。また、「更換衣服」の1例は、平声の例と同じ意味だが、平声点が付されていない。また、「小曲」所属の「一更」などは動詞の意味でなく、時間を計算する単位という意味である。平声の読みについて、南京、蘇州、杭州音は同じ陰平調である。

一方、「更換衣服」以外の声調点のない例は去声の「古孟切」に対応し、『大漢和辞典』の「さらに。また。ふたたび。あらためて。その上に。一層。一段と。」等副詞の意味と一致している。なお、去声の読みについて、南京音は去声調、蘇州音は陰去調となっている。

この二種類の読み、声調点の有無を問わず、南京音が[kən]、蘇州音が文語音[kən]と白話音[kā]、杭州音が[kən]となり、「ケン」はいずれにも対応する。

このように、「更」に対する平声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、巻六に「三〇^{ケン}更」という例は前五巻と同じである。また、冠山の他の学習書には、下記のような例がある。ここでも「かへる。あらためる」の意味に対す

る「更」に平声点が付されている。

『唐語便用』:(平声点)時時初ケン○更ケン時ケン凡ケン初ケン夜ケンナリ
 『唐音雅俗語類』:(平声点)半個ケン○更次ケンハントキト云コト

(18)「教」

表 3-42 のように、「教」は計 21 例で、音注が「キヤ○ウ」となっている。その内の 1 例に平声点が付されている。

表 3-42 「教」の表記例

○の位置	見出し語
平声	長短話：教我省得 我 <small>キヤ●ウ</small> フシテウカウカトアンジザラシソソコソ尤ナラン
なし	二字話：誨教 オシエ 教導 オシエ 教化 オシエ 教訓 オシエ 玄教 ヨキオシエ 像教 フトノオシエ
	四字話：承清教 タタクオシエヲ蒙ル 仔細教誨 ネシワイレテオシユル 不肯教導 オシエス
	常言：常不教而善 教エスシテ善ナル 教而後善 教エテ後善ナル 教而不善 教エテモ不善ナル 至要莫如教子 子ニ教ルニ如クハナシ
	長短話：去請教的哩 師匠ノ方ニ往テ 在家裡見教 宿ニ師匠ヲムカエニノ 願承雅教 教ヲ受候ハン 必要請教老先生 必ス老先生ノ教ヲコハン 必須趕早見教 早く御シメシ候ヘ
小曲：教奴靠著誰 鴈南兒教奴雙垂泪	

「教」は下記のように、『広韻』に見母效摂の二つの読みがあり、声調が違う。

平声 「古肴切」「效也」
 去声 「古孝切」「教訓也又法也語也」

声調点のある例は平声の読みに対応し、その意味と用法は、『漢語大字典』の「使，令」、『大漢和辞典』の「しむ。せしむ。」使役の用法と対応している。南京音は陰平調の[teiau]、杭州音は陰平の[teio]となり、現代音は口蓋化と単母音化で音注と対応しないが、前述したような理由で当時は問題なく対応していた。

これに対して、声調点のない例は去声の読みと対応し、『漢語大字典』の「教育，教诲；」、即ち「教育(する)、教導(する)」の意味。南京音は去声調の[teiau]、蘇州音は陰去調の[kæ]([teiã])となり、一見して音注と合わないが、上述した理由で当時は問題なく音注と対応していた。『同文備攷』には平声と去声の両方があり、『磨光韻鏡』にも去声の「キヤ○ウ」が見られ、全体として

南京音と吳方言とのいずれからも説明できる。なお、清音音注の「シヤン」は濁点の記入漏れの可能性が高い。

このように、「教」に対する平声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、卷六に「^{キヤ〇ウ}教人」のように、同じ平声点が用いられている。また、冠山の他の学習書には、つぎのような例があり、ここでも使役の用法に対応する例平声点^{キヤ〇ウ}が記されている。

『唐語使用』:(平声点)。^{キヤ〇ウ}教 我們不病的 我輩無病ノ者…ラセ

『唐音雅俗語類』:(平声点)。^{キヤ〇ウ}教 我吐氣了 我ヲソイキドヲリヲハラサシメジト存候フ

(19)「上」

表 3-43 のように、「上」は延べ 60 例あり、音注は「ジヤン」51 例、「シヤン」9 例(中に「小曲」7 例)となっている。「ジヤン」の 1 例に上声の声調点が付されている。

「上」は『広韻』に下記の禅母宕摂の二種類の読みがある。

上声 「時掌切」「登也升也」

去声 「時亮切」「君也猶天子也」

声調点が付られている「上」は動詞として使われ、上声の「時掌切 登也升也」、『漢語大字典』の「从低处到高处;登;升。」、『大漢和辞典』の「あがる。のぼる。」と一致する。南京音は去声調の[ɕã]、蘇州音は陽上調の[zã][zã̃]、杭州音は[zɿŋ]となっている。

声調点のない例は、助詞、名詞、「あがる・のぼる」という意味以外の動詞などとしての使い方、『漢語大字典』の「高位;指在上面的一方;物体的上端或表面;表示范围或方面;等级或质量高的;时间次序在前的;往,去;向前;加,添;染,涂;」、『大漢和辞典』の「うへ。」「たかい。」「いただき。」「尊い位。」「めうへ。」「現位置・場所、又は或目的地を示す時に用ひる語」等の意味で去声の「時亮切 君也猶天子也」の派生意である。南京音が去声調の[ɕã]、蘇州音が陽上調の[zã][zã̃]、杭州音が[zɿŋ]で、上声調の場合と同じ、濁音の「ジヤン」は蘇州・杭州音と一致する。『同文備攷』では上声に

[ʒian]、去声に[ʒian]があり、音注とよく対応している。

表 3-43 「上」の表記例

○の位置	見出し語
上声	六字話：請 ^{ジャン} 上 後樓乘涼 ウラノニカイニ上テスバミ玉へ
なし	<p>二時話：拜^{ジャン}上 コトツテ 上來 アガレ 上坐 上ニスハリ玉へ 上頭 ウエ 上路 ミチヲウソ 上著 ヨキハカリコト 上好 イコフヨイ 上等 上ヒン 上號 上ノシルシ 請上 上リ玉へ 早上 アサ 街上 マチ 選上 エラミアテタ 趕上 フヒツヒタ</p> <p>三字話：未上手 マダ手ニイラス</p> <p>四字話：走上走下 上リタリ下リタリスル 不相上下 ヨシアシガナイ 請上來坐 上ニアガリテオスハリナサシ 穿上衣服 キリモノヲキル 看不上眼 眼ニツカヌ 不能上手 手ニイラス 拘搭上手 ヒツカケテ手ニイレタ 選不上了 エラビアテヌ 趕他不上 彼ニ追ツカヌ 頭上按頭 クトヒフ 趕上宿頭 タヒノヤトニカケツイタ 船上頭目 船中の役人 船上稍工 船中ノ水手 多多拜上 コトツテイタス</p> <p>尊敬長^{ジャン}上 目上ノ人ヲウヤマフ</p> <p>五字話：船上人淹死 船中ノ人オボレ死ス 趕不上宿頭 宿ニ馳セ付ヌ</p> <p>六字話：上無兄下無弟 上ニ兄ナク下ニ弟ナシ 面上濃濃搯粉 顔ニハケバケシクケシヤウヲヌル 一路上平安了 路スガラブシナリ 把船點上點下 舟ヲユリ上ケユリ下ス 貼在壁子上好 カベノ上ニハツタガヨヒ</p> <p>常言：猫頭上子魚 ネコニナマイハシト云フ 只有錦上添花 フウキノ者ニハヒタスヲ物ヲ送レトモ 比上不足 上ヲ見ハ限リハナケントモ 走爲上計 逃タガヨヒ計ト云フ 財上分明大丈夫 金銀財宝ノフヲ分明ニイタスハ大丈夫ナリ 休管他人屋上霜 他人ノコトヲカマフナト云フ 趕人不要趕上 人ヲ趕上ヘカラス</p> <p>長短話：上憫下勞 上ハ下ノ勞ヲアハレミ玉ヒ 下沐上恩 下ハ上ノ恩ヲ沐リ 因在街上 町中ニテ 聽說海面上的船隻 海中ニテ 說道海面上 海中ニテ 前日從街上走過 前日町ヲ通り候フテ 流落在江湖上 他コクニオチブレテ 連日大雨路上稀爛 数日ノ大雨ニテ路シルクソアルキカタク</p> <p>小曲：街坊上 我有問上一個詳細 你在花街上闖 只在牙床上坐 我的心肝上肉 我的心肝上肉 寒凍得渾身上腫</p>

この二つの読みと対応する両方言の声調について、区別がなく、南京音は去声調、蘇州音は陽去声となっている。このように、ここの「○」は動詞として使用されている上声の「時掌切」に付して、よく使われる去声の読みではないと注意している。

このように、「上」に対する上声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、巻六に同じ上声調の「市^{ジャン}上」の例がある。他の学習書の例は次の通りで、同じように「あがる・上る」にあたる上声の読みには声調点が付されている。

『唐語便用』:(上声点)^{シヤン}上樓遠瞭 マクラン上リテ遠クノソミ見シ

(去声四声点)上^{シヤン}・天震怒 天イカリ玉フ

『唐音雅俗語類』:(上声点)^{シヤン}上天無路入地無門 天ニ上ントスレバ路ナク...

(去声四声点)承上^{シヤン}・接下 上ニモ下ニモアイサツヲスルコト

(19)「中」

表 3-44 のように、「中」は延べ 22 例で、音注は全て「チヨン」である。その内の 8 例は去声の声調点が付されている。

表 3-44 「中」の表記例

○の位置	見出し語
去声	二字話:中意 キニイル 中用 用ニタツ 中計 ハカリコトニアタリタ 三字話:不中意 キニイラス 五字話:不中我的意 我氣ニ入ラス 六字話:有什麼中用處 何ノ用ニタツ処ガアルカ 這都是不中用 是ハスベテ用ニタハヌ 中了你的意麼 汝ノ氣ニ入リタルカ
なし	二字話:中間 ナカ 中央 ナカ 中等 中ヒン 日中 ヒル 當中 マンナカ 四字話:綠林中人 山野ニスムヌス人ノコト 命中注定 命中ニ定ル 客中寂寞 リコシユクハサビシヒ 水中撈月 上ヲ見ハ限リハナケンカナハヌコトヲ思フコト 常言:酒中不語真君子 如何ヤウノコトタリトモ酒ノ座ニテ云ハサルハ真君子ナリ 那得雪中送炭 ヒンセンノ者ニハ何モ送ラスト云フ 長短話:像個中老的人一般 中老ノ人ノ如シ 中心只是不快 心の内ニ快ラス思フ 求興醉中 與ヲ醉中ニ求テ

「中」は『広韻』に知母通撰に所属する二種類の読みがある。

平声 「陟仲切」「平也成也宜也堪也任也和也半也又姓」

去声 「陟冲切」「當也」

声調点が付けられているのは去声の「陟冲切 當也」で、『大漢和辞典』の「あたる」という意味と一致している。南京音は去声調、蘇州、杭州音は陰去調となっている。

声調点が付かない例は平声の「陟仲切」、『大漢和辞典』の「なか。うち。」「なかほど。」「なかごろ。」等の意味と一致している。南京、蘇州、杭州音ともは陰平調である。

南京音は[tʂoŋ]、蘇州と杭州音はともに[tsoŋ]で現代音だと音注と対応し

ないが、『西儒耳目資』は[chum](=[tɕʰuŋ]),『同文備攷』で [tɕion],『磨光韻鏡』は「チオン」となり、「チオン」は介音 [i]をもつ呉方言から説明できる。

このように、「中」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、卷六には「不中^{チオン}其意」のように、同書と同様である。冠山の他の学習書にも次のような例があり、同じように「あたる」意味の読みに去声点が付されている。

『唐語使用』:(去声点)中^{チオン}了計ハカリコトニアタツタ
 (平声四声点)隱跡山^{チオン}・中山中ニカゲヲカクス
 『唐音雅俗語類』:(去声点)中^{チオン}度度ニ中ラバ
 (平声四声点)隱于榛薄之^{チオン}・中クサムラノ内ニカクル

(21)「爲」

表 3-45 のように、「為」は延べ 51 例あり、音注は全て「ヲイ」となっている。その内の 4 例に去声の声調点が付されている。

「爲」は『広韻』に于母止摂に属する平声と去声の二種類の読みがある。

平声 「葎支切」 「爾雅曰作造爲也説文曰母猴也又姓」
 去声 「于偽切」 「助也」

声調点が付られている「為」の例は、去声の「于偽切 助也」と一致し、『大漢和辞典』の「ため。ために。よって。」にあたる。南京音は去声調、蘇州、杭州音は陽去調となっている。

声調点の付いていない例は、平声の「葎支切」に対応し、意味は『大漢和辞典』の「なす。つくる。こしらへる。」「なる。」などに一致し、意味は去声のと違う。南京、蘇州、杭州音は同じ陽平調となっている。

南京音は[ɔuəi]、蘇州音は[hue]、杭州音は[huei]となり、また、『同文備攷』は平声と去声読みが[huei]となっている。「ヲイ」はいずれの場合からも説明できる。

このように、「為」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

表 3-45 「爲」の表記例

○の位置	見出し語
去声	三字話:為甚去 ナゼユクゾ 為什麼 ナゼナ 不為你 汝ヲヒカヌ 長短話:為沒要緊事奔走 用ニモタハサルコトニ奔走シテ
なし	二字話:為様 テホンニスル 三字話:為人好 人ガラカヨヒ 肯為你 汝ヲヒカル 難為人 人ニナンギヲカクル 四字話:領為女兒 ヤシナフテムスメトスル 反為不美 反テワルイ 肯為慈悲 シヒヲナス 反為不美 反テヨクナヒ 為人不好 人トナリアシハ 販貨為生 ニモツフ他 国ニハコヒテアキナヒヲナスフ 放砲為號 石ヒヤラ打テ相圖トスル 大為敗績 大ニ敗北ス 折箭為誓 箭ヲ折テチカヒヲナス 不足為奇 フシギトスルニ足ス 立票為照 手ガタオ以テシヤウコトスル 伴為不知 伴テシラヌフリヲスル 認假為真 ウソヲ真ニスル 點紙為錦 紙ヲ點ソ錦トス 開言為文 コトバラフ云ヘハ文トナル 五字話:開賭坊為生 バクチヤドヲソ身ズキトスル 六字話:自為当世佳談 自ラ當世ノ美談トナル 常言:終身為父 一生父トスル 走為上計 逃タガヨヒ計ト云フ 為子孫 子孫ノ為ニ 為人行善方便者 人ノ為ニ善キ方便ヲ行フ者ハ必ス其後惠ヲ受ルコトアリ 良農不為水旱不耕 ヨキ農人ハ水損日損アリト云ヘトモ不耕ト云フナシ 良賈不為折閱不市 ヨキ商人ハ損失損亡アリト云ヘトモ不商ト云フナシ 黄金千兩未為貴 黄金千兩ハ未タ貴キトスルニ足ラス 兄弟為手足 兄弟ヲ手足トシ 自古以穀帛為貴也 是故ニ古ヘヨリ米穀錦帛ヲ貴シトスル也 長短話:恐不足為對耳 恐クハアヒテトナルニ足サラシ 今我僥幸為識荆 今我幸ニチカツキトナリ 這一向為俗事所絆 コノアイダ俗事ニホダサレテ 同為一般快活則個 処ニタノシミ候ヘカシ 認為我雖為學 我学ヲナスト云ヘトモ 為歎了 ゴブサタ申シヌ 大為惋惜 殘多ク存シ候フ 嘆作為之齟齬 齟齬スルフヲ嘆シ 因為今朝 今朝(心モチアシハ) 尚自碌碌而無為 尚自ラ碌々タリ 因為這兩日 此故ニ頃日ハ 後生時節為人 我等共ガワカキ時ノ人ガラノゴトク 大半為人狡滑 為人オフチヤク也 認為老成 マタキ人抔トシテ 亦不足為憂 憂ルニ足ズ 委實于心大為不然 實於心然ルベウ 何其為不然哉 何ゾ然ルベウ存シ候ハズヤ

なお、卷六にも「而爲^{フイ}衆所敬」との去声点の例がある。また、冠山の他の学習書に次のような例があり、ここでも「ために」という意味の方に去声点が付されている。

『唐語便用』:(去声点)他爲^{フイ}衆所敬 彼ハナセニ我ヲウラムヤ

『唐音雅俗語類』:(去声点)悉爲^{フイ}白之 コトコトクタタニ申シヒラケト云コト

(平声四声点)・爲^{フイ}人温醇 人ガラガラントウナ

(22)「好」

表 3-46 のように、「好」は延べ 99 例あり、音注は全て「ハ○ウ」となっている。その内、2 例に去声の声調点が付されている。

「好」は『広韻』に上声と去声二種類の読みがある。

上声 「呼皓切」「善也美也」
 去声 「呼到切」「愛好亦壁孔見周禮又姓」

表 3-46 「好」の表記例

○の位置	見出し語
去声	<p>常言:好食色貨利者 美食好色貨財利息ヲ好ム者ハ 好功名事業者 功勳佳名大事洪業ヲ好ム者ハ</p>
なし	<p>二字話:相好 中ガヨイ 大好 大ニヨビ 不好 ヨクナイ 好笑 オカシヒ 不好 ワルヒ 上好 イコフヨイ</p> <p>三字話:好体面 ヨキグハイズン 好光景 ヨキヤウス 爲人好 人ガラカヨヒ 意思好 シユビガヨヒ 好造化 ヨイ仕合 果然好 アンノコトクヨヒ 風俗好 フウゾクガヨイ 不大好 アマリヨクナヒ 好生意 ヨキアキナヒ 包管好 ウケヤツテヨヒ 仍旧好 モトノ如クヨイ 仍然好 モトノ如クヨヒ 依然好 モトノ如クヨヒ 名声好 キコエガヨヒ 倒是好 ケクヨヒ 不好説 云ハレス 只推好 只ヨヒニシテヲク 病症好 ビヤウシヤウガヨヒ 脉色好 ミヤクガヨヒ 委實好 ジツニヨヒ 好胡説 ヨクメツタナコトヲ云フ 陳好事 ヨキフヲノブル 當真好 マコトニヨヒ 有好音 ヨキ左右ガアラン 夢寐好 ユメミガヨヒ 說是好 ヨヒト云フ 好生熟 イカフアツヒ 好生涼 イカフスハシヒ 老大好 イカフヨヒ 不當好 ヨクハナヒ</p> <p>四字話:不論好歹 ヨシアシヲロンゼヌ 好生躊躇 甚タタチモトロフ 餘外好看 コトノ外ミゴト 名声頗好 名ノキコエガヨヒ 平生所好 ヘイゼイコノムトコロ 不好意思 シユヒカワルヒ 怎生是好 何トシタラハヨカラフソ 爲人不好 人トナリアシハ 做人最好 人トナリカイカフヨヒ 好个去處 ヨキ処 漸覺好些 次第ニ些ヨク覺ル 好似他多 彼ヨリヨキフガ多ヒ 穿了好衣 ヨキ衣フクヲキタ 粧扮好了 シヤウゾクカヨヒ 打扮得好 ヨクシヤウゾクシタ 了不得好 ヨクテドフモナラス 越看越好 ミレハミルボトヨヒ 結束得好 ヨクシヤウゾクヲシタ 前程必好 行末ハ必スヨカラン 後來必好 後必スヨカラン</p> <p>五字話:今日天色好 今日ハテンキヨシ 真正大好了 イカフヨヒ 差不多些好 大方ナラハヨヒ 好生托大了 イカフタカブル 行經大好了 ギヤウサガイコフヨヒ 他好生高傲 彼ハイカフタカブル 淡粧倒好看 ボツトリト粧フタガケツク見事 新買好丫鬟 新タニヨキ下女ヲカハエタ</p> <p>六字話:今朝天气不好 今朝ハテンキガワルヒ 差不多好了些 オフカタニヨヒ 還可以算得好 マダヨヒ内ニ入レタレル 他们都是好漢 彼ラハスベテ英雄也 弔死了好些人 ヨホドノ人ガクビヲクリテ死シヌ 好些日子吃素 日久シクシヤウジンヲスル 貼在壁子上好 カベノ上ニハツタガヨヒ</p> <p>常言:好事不如無 ヨキコトモナキニハ如ス 好事不出門 ヨキコトハ門ヨリ外ニ聞エスシテ 好漢惜好漢 豪傑ハ豪傑ヲオシミ 好事大家知 ヨキコトハ各々知ル 人無千日好 人ハ日久シク中ヨキコトハナシ</p> <p>長短話:一向都好麼 此間ブジニ候フヤ 分些我受用也好 我ニモ分テシヤウクハンイタサセンヤ 甚是好看 甚タ見事ナリ 豈敢好説 コレハヨキゴアイサツナリ 而詩也做得好 詩ヲモヨク作り 必然有好音 必スヨキヘンジアラン 不知光景好不好 ヤウハヨキカアシキカ 因此光景也好 シユビモヨク候フ 恰好無事 幸ヨウジナシ 因要討一個好媳婦 媳ヲ救メテ 真個好一頭親事了 好キ親事ナリ 而好名遍聞 好名遍聞ヘ 不求好名 好名ヲ求メザレトモ 見家父也好 父ニモ御アヒナサルヘシ 我想好似在家抱膝而坐哩 膝ヲ抱テ坐センヨリヨカルヘシ 好不利害 イコフキヒシク候フ 必有好音奉告 必ス吉左右ヲ告奉ン 想必兩三日内便好了 二三ノ内ニ全ク本腹仕ルベシ</p> <p>器用:好貨 ヨキシロモノ</p>

声調点が付けられている「好」の意味は、去声の「愛好」、つまり『大漢和辞

典』の「このみ。」と対応している。南京音は去声、蘇州、杭州音ともは陰去調となっている。

声調点のない「好」の意味はいずれも上声の「善也美也」、『大漢和辞典』の形容詞としての「うつくしい。みめよい。」「よい。好ましい。」と一致している。南京音は上声調、蘇州、杭州音は陰上調となっている。

このように、「好」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

「好」の南京音は[xau]で、現代の蘇州音は[hɛ]、杭州音は[hɔ]はともに単母音化となっているが、『同文備攷』には上声[hao](美好)、去声[hao](愛好)、『磨光韻鏡』も「ハ〇ウ」で、音注に一致している。

なお、巻六は「好^{ハ〇ウ}事」のように、前五巻と同じである。また、冠山の他の学習書の場合も下記の例のように、去声の読みに去声点が付されている。

『唐音雅俗語類』:(去声点)投合所好^{ハ〇ウ} ○_{コノムトコロニアカナウ}

(23)「遠」

表 3-47 のように、「遠」は延べ 11 例で、音注が全て「エユン」となっている。その内の 1 例は去声の声調点が付されている。

「遠」は『広韻』に下記の通り、二種類の読みがある。

上声 「雲阮切」「遙遠也」
去声 「于願切」「離也」

表 3-47 「遠」の表記例

○の位置	見出し語
去声	常言:遠非道之財 非道ノ財ヲ遠ザケ
なし	二字話:大遠 イカフトヲヒ 四字話:名聞遠近 名エンキンニキコユ 六字話:流配遠惡軍州 遠国ノ惡所ニ流ス 遠面不如近面 遠クヨリ見ル顔ハ近クヨリ見ル顔ニオトレリ 近面勝似遠面 近クヨリ見ル顔ハ遠クヨリ見ル顔ニマサレリ 常言:遠親親不如近隣 遠キ親ルイハ近キ他人ニ如ス 遠水難救近火 遠キ水ハ近キ火ヲ救ヒカタシ 遠親不如近隣 遠キ親類ハ近キ隣ニ如ス 富在深山有遠親 富ル人ハ深山の内ニ在レトモ 長短話:遠近少正 遠近ニ正ヒ少シ

去声点付きの「遠」の例は、去声「離也」で、『大漢和辞典』の「とほざける。

はなす。へだてる。」と一致し、動詞として使われている。

声調点のない例は上声の「雲阮切 遙遠也」と対応し、『大漢和辞典』の「とほい」に一致し、形容詞の使い方となっている。

「遠」の南京音は上声調の[ye~]、蘇州音は陽上調の[hiø]、杭州音は陰上調の[yo]であり、『同文備攷』に上声の[hiyen]、『磨光韻鏡』では上声にも去声にも「ユエン」とあり、「エユン」は吳方言に一致している。

このように、「遠」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、官話学習書の『唐音雅俗語類』でも「必棄^{エユン}遠^〇矣 必スステツヲザケラル」という例において、動詞の用法の方に去声点が付されている。

(24)「錯」

表 3-48 のように、「錯」は延べ 2 例で、音注が全て「ツヲ、」である。その内の 1 例は去声の声調点が付されている。

「錯」は『広韻』に、下記のように入声と非入声二種類の読みがある。

遇撰 去声「倉故切」「金塗又姓」

宕撰 入声「倉各切」「鑢別名又雜也摩也詩傳云東西爲交邪行爲錯説文云金塗」

表 3-48 「錯」の表記例

○の位置	見出し語
去声	三字話：錯過了 アヤマツタ
なし	四字話：休要錯聽 聞ソコナフコトナカン

延音点付きの「ツヲ、」の例は明らかに入声の読みと対応しない。去声点は遇撰去声の「倉故切」と一致でき、『集韻』に「乖也」という意味もあり、つまり、「そむく。『大漢和辞典』」という意味と一致している。『漢語大字典』に「錯誤，乖謬。」とあるように現代語の「あやまり」などの意味へとつながっている。

南京音は去声調の[ts'ɔ]、蘇州音は同じ「錯過」(そむく)という語を読む時、入声調[ts'ɔ?]となり、「錯誤」(あやまり)という語が去声調の[ts'əu]であり、杭州音は陰去調の[ts'ou]である。『同文備攷』は入声の[ts'ak]となる。このように、音注は南京音と杭州音と対応している。

このように、「錯」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、冠山の他の学習書には下記のような例があり、ここでも「誤る」という読みに対する「錯」に去声点が付されている。

『唐語使用』:(去声点)錯^{ツフハ}○誤_{チガフタ}

『唐音雅俗語類』:

(去声点)不要自迷當面錯^{ツフハ}○過_{自ラマヨテマノアタリニシリンスルコトナガシ}

(25)「種」

表 3-48 のように、「種」は延べ 5 例で、音注が全て「チヨン」となっている。その内の 1 例に去声の声調点が付されている。

表 3-49 「種」の表記例

○の位置	見出し語
去声	五字話:專要種善根 專ラゼンゴンフナサント欲ス
なし	三字話:種些火 火ヲイケロ 常言:種瓜得瓜 善事ヲスレハ善事ガアリ 種豆得豆 悪事ヲスレハ悪事ガアルト云フ 長短話:還有一種 此外ニ又

「種」は『広韻』に章母通攝の二種類の読みがある。

上声 「之隴切」 「種類也」

去声 「之用切」 「種埴也」

声調点が付られている例は、動詞として使われている「種埴也」、『大漢和辞典』の「うゑる。まく。」の意味と対応し、去声の読みである。南京音は去声調で、蘇州音と杭州音はともに陰去声である。

声調点のない例は、長短話の「還有一種」1 例以外、いずれも去声点の例と同じ「種埴也」という意味で、動詞として使われている。「還有一種」は上声の「之隴切 種類也」、つまり、『大漢和辞典』の「しな。くさ。いろ。品類。」という意味に一致する。南京音は上声調で、蘇州、杭州音は陰上調である。

南京音でも蘇州音でも[tɕoŋ]と発音し、杭州音は[tsoŋ]となり、「チヨン」は三方言と合わない。一方、『西儒耳目資』は[chum](=[tɕuŋ])であるが、『同文

備攷』は[tʃion]、『磨光韻鏡』も「知用切、チヨン」とあり、「チヨン」は呉方言から説明できる。

このように、「種」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、上記のように冠山には「種」の異なる読みを区別しようとする意図があるが、「種埴也」の複数の例に声調点を付けなかったのはのはなぜか。おそらく「種」の二つの読みはどちらも常用の方法であり、わざわざ区別する必要はなかったからだろう。他の例における「種埴」の対象は具体的な名詞であるのに対し、声調点付の例の対象は抽象名詞の「善根」で、「しな」「品類」などに間違えられる心配があったからと考えられる。

(26)「衣」

表 3-50 のように、「衣」は計 14 例で、音注は全て「イ、」となっている。その内の、1 例だけ去声点が付されている。

表 3-50 「衣」の表記例

○の位置	見出し語
去声	常言：寒不可衣 寒エタル時衣ルコト能ハス
なし	三字話：赶衣飯 衣シヨクヲカセグ
	四字話：穿上衣服 キリモノヲキル 脱下衣服 キリモノヲヌグ 更換衣服 キリモノヲキカエル 穿了好衣 ヨキ衣フクラキタ
	常言：夫婦如衣服 夫婦ハ衣服ノ如シ 衣服破時更得新 衣服破ル時新ラシキニ更ムヘシ
	長短話：也掙得衣飯 衣飯をカセギ 無錢而衣食 錢ナ多病アリ
	器用：衣砧 キヌタ 禮衣 レイフク 衣架 イカノ 涎衣 ヨダレカケ

「衣」は、下記のように、『広韻』には影母止摂の二種類の読みがある。

平声 「於希切」「上曰衣下曰裳」

去声 「於既切」「衣著音依」

声調点付きの例は「着る」という意味で、動詞として使われている。意味と用法は『漢語大字典』の去声の「穿戴；覆盖；依靠。」、『大漢和辞典』の「きる。きせる。おほふ。行ふ。」に一致し、去声の読みに対応している。

去声点のない例は平声の読みと対応して、名詞の「衣服」の意味となっている。このように、二つの読みは意味によって区別されている。

南京、蘇州、杭州音はいずれにも陰平の[0i]しかないが、『同文備攷』には

「衣服之」と「着る」に対応する去声の読みもあり、音注は呉方言と対応している。

このように、「衣」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、卷六と他の冠山による学習書には「衣」に対する声調点の使用が見られない。

(27)「探」

表 3-51 のように、「探」は延べ 3 例で、「四字話」の例に 2 回使われ、音注が全て「タン」である。その内の 1 例に去声の声調点が付されている。

表 3-51 「探」の表記例

○の位置	見出し語
去声	二字話：探望 ミマフ
なし	四字話：探頭探腦 サシノゾク

「探」は『広韻』に咸攝透母の平声の「他含切 取也説文作揆遠取之也」との読みしかなく、音注の去声と一致しない。南京音は去声調の[t'ã]、蘇州音は陰去調の[t'ø]、杭州音は陰去調の[t'e]であり、杭州音などの鼻音韻尾が消失しているが、第二章第四節で述べたようにこれは新しい変化で、当時は音注とは問題なく対応していた。

このように、「探」に対する去声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、冠山の他の学習書には次のような例があり、ここでも去声点が使われ、平声の四声点と区別している。

『唐語使用』:(平声四声点)●探^{タン}聽消息^{ヲトツレヲサグリキク}

『唐音雅俗語類』:(去声点)節次遣人打探^{タン}○動靜^{ダンダン}人ヲツカハメヤウスヲサグリ

(28)「只」

表 3-52 のように、「只」は延べ 23 例あり、音注は全て入声の「チ」となっている。その内の 19 例に入声の声調点が付されている。

「チ-只(23)」は、『広韻』に止攝の二種類がある。

平声「章移切」「專辭」
上声「諸氏切」「語辭」

音注とは意味は合うが、入声点「○」は平声と上声との双方と一致しない。止撰の字に対して、「-イ」「-ウ」の音注が期待されているが、短音節型音注の「チ」となっている。

表 3-52 「只」の表記例

○の位置	見出し語
入声	三字話:只推好 只ヨヒニシテヲク 只怕遲 タブンオソカラフ 四字話:只顧讀書 ヒタスラ書ヲヨム 只管要看 ヒタスラ見タカル 五字話:只顧妬忌人 ヒタスラ人ヲソネム 只管乱磕頭 ヒタスラメツタニ頭ヲサグル 六字話:只情要謗平人 ヒタスラ平人ヲソシル 只管要纏擾我 ヒタスラ我ガヤツカイニナル 常言:只怕無心學 只恐クハ学ブ心ナカラン 只怨他家古井深 人ノ家ノ井ノ深ヲチヲ怨ム 長短話:中心只是不快 心ノ内ニ快ラス思フ 只要先到貴厨 早速御勝手ニ黍上仕テ 只可聽命 テンニマカセテ 只守天命不違時勢 只天命ヲ守テ時勢ニソムカスソ 只因力不能及 我カオヨハザルユヘ 你休要只管計較便了 ヒタスラニコトハリ玉フベカラス 你只管喫得大醉 汝ヒタスラ飲テ 也只是無可奈何了 亦シヤウコトナキ事ニコソ候ヘ 小曲:只在牙床上坐
なし	六字話:休要只管囉嗦 ヒタスラヤカマシク云ナ 常言:只有錦上添花 フウキノ者ニハヒタスラ物ヲ送レトモ 不怕官只怕管 公儀ハコハクナクシテ支配スル人ガコハイト云フ 長短話:只是一介寒士 只コレ一介ノ寒士也

「只」は数量詞として使う時、「隻」と同じ、『漢語大字典』に「“隻”的簡化字」とあり、つまり「只」が俗字である。「隻」は『広韻』に「之石切 一也説文曰鳥一枚也」とあり、章母梗撰入声の所属字である。しかし、表 3-52 のように、同書の用例には副詞のみとして使われ、量詞の用法が見られないため、「チ」は梗撰入声の読みを注するものではないと考えられる。

南京音では、数量詞として使う場合が陰平調で、「ただ。」という意味で副詞として使う場合が上声調であり、同じ[tsɿ]と発音する。一方、11 世紀初めの『増修互注禮部韻略』（『増韻』と略称される）には、入声の「職日切」読みも収録されている。『同文備攷』では同じ[ɣit]¹⁰³（專詞）として収録し、蘇州音では「只」は[tsaʔ]（数量詞）と[tsəʔ]（副詞）とを発音し、同じ陰入調となっている。

¹⁰³ 『同文備攷』では入声の韻尾の -p、-t、-k の区別はまだ残っている。丁(2001)により、-t と -p との混合などの現象がある。

杭州音の場合、陰入調の[tɕaʔ]である。このように、「チ」は吳方言の入声の特徴と対応している。なお、蘇州音の量詞の意味の[tɕaʔ]は「隻」に由来するものである。

上記で、「只」に対する声調点は副詞と対応する読みの方に付いていることが分かる。つまり、「只」に対する入声の声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、冠山による他の学習書の中、下記の例があり、入声点が付されている方法は同書と同じである。

『唐語便用』:(入声点)^{チツ}只○好家常些 只 カケアイニナサルベシ

『唐音雅俗語類』:(入声点)^{チツ}只○除如此 ドウデモコツデナケンハナラヌ

(上声四声点)•^{チイ}只問不應 只 不 屈 ナルコト…

4.1.1.3 その他

(29)「麼」

表 3-53 のように、「麼」は延べ 31 例で、中に、主となる音注は「マア、」(12 例)と「モウ」(16 例)であり、2 例の「モウ」に平声点が付されている。「モウ、」「モを、」「モ、」3 例は「モウ」による誤記と考えられる。

表 3-53 「麼」の表記例

○の位置	見出し語
平声	長短話:你今日有什 ^{モウ} 麼 ^{マア、} 事故麼 ^{モウ} 不知有什 ^{モウ} 麼 ^{マア、} 事故麼 ^{モウ}
なし	二字話:怎 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 三字話:怎 ^{モウ} 麼 ^{モウ、} 处 ^{モウ} 没 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 做 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 省 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 爲 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ}
	四字話:省 ^{モウ} 得 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ、} 没 ^{モウ、} 什 ^{モウ、} 麼 ^{モウ} 忙 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 名 ^{モウ} 字 ^{モウ} 没 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ、} 事 ^{モウ}
	六字話:什 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 人 ^{モウ} 併 ^{モウ} 命 ^{モウ} 了 ^{モウ} 有 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 中 ^{モウ} 用 ^{モウ} 处 ^{モウ} 但 ^{モウ} 凭 ^{モウ} 你 ^{モウ} 怎 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 样 ^{モウ}
	長短話:說 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ、} 話 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 東 ^{モウ} 西 ^{モウ} 價 ^{モウ} 錢 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 事 ^{モウ} 体 ^{モウ} 有 ^{モウ} 什 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 緊 ^{モウ} 要 ^{モウ} 事 ^{モウ} 未 ^{モウ} 知 ^{モウ} 還 ^{モウ} 是 ^{モウ} 怎 ^{モウ} 麼 ^{モウ} 样 ^{モウ}
	四字話:喫 ^{マア、} 些 ^{マア、} 酒 ^{マア、} 麼 ^{マア、} 五字話:你 ^{マア、} 認 ^{マア、} 得 ^{マア、} 他 ^{マア、} 麼 ^{マア、} 可 ^{マア、} 有 ^{マア、} 新 ^{マア、} 聞 ^{マア、} 麼 ^{マア、}
	六字話:中 ^{マア、} 了 ^{マア、} 你 ^{マア、} 的 ^{マア、} 意 ^{マア、} 麼 ^{マア、} 誰 ^{マア、} 是 ^{マア、} 被 ^{マア、} 告 ^{マア、} 人 ^{マア、} 麼 ^{マア、}
	長短話:一 ^{マア、} 向 ^{マア、} 都 ^{マア、} 好 ^{マア、} 麼 ^{マア、} 有 ^{マア、} 什 ^{マア、} 麼 ^{マア、} 事 ^{マア、} 故 ^{マア、} 麼 ^{マア、} 不 ^{マア、} 知 ^{マア、} 興 ^{マア、} 居 ^{マア、} 平 ^{マア、} 安 ^{マア、} 麼 ^{マア、} 肯 ^{マア、} 來 ^{マア、} 舍 ^{マア、} 下 ^{マア、} 頑 ^{マア、} 要 ^{マア、} 麼 ^{マア、} 莫 ^{マア、} 非 ^{マア、} 竟 ^{マア、} 不 ^{マア、} 妥 ^{マア、} 貼 ^{マア、} 麼 ^{マア、}

「麼」は『広韻』に明母果摂の上声の「亡果切 么麼細小」とあるが、例は全て語気助詞や疑問詞の用法で、『広韻』の「麼」とは読みも意味も一致しない。蔣(2017:319-326)によると、「麼」のこうした用法は近代漢語の新しいもので、『広韻』の「麼」とは別の字の読みを伝えるものである。

近代漢語の「麼」については、『漢語大字典』に「语气词。1、同用“吗”。a、用在句末表疑问(旧读 me)。b、用在句中停顿处，突出话题。2、同用“嘛”。表示道理显而易见。」(即ち疑問の語気)や「“这么”、“那么”的省文。」(疑問代名詞)などがある。なお、蔣(2017)によると、疑問の文末に用いられた使い方として、「無」「磨」「摩」に由来し、宋代の変遷を経て誕生したと考えられている。

ここでは、「麼」に対する「マア、」12 例は全て疑問の語気の用法で、「モウ」は疑問詞の用法であることが明らかである。

声調点のある 2 例はいずれも同じ語句に「マア、」の「麼」と「モウ」の「麼」が同時に現れるケースに使われている。即ち、同じ文に「麼」が 2 回現れているため、混同と誤読を防ぐために読み間違いを注意する必要があったと考えられ

る。

このように、「麼」に対する声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると言える。

なお、冠山の他の学習書の中には次ような例がある。声調点の使用が見られないが、疑問詞の用法の例に同じ平声の四声点が付されている。

『唐語便用』: 你果然要起身・麼 没有什・麼訣竅

『唐音雅俗語類』: 生什・麼意

(30)「天」

表 3-54 のように、「天」は延べ 49 例で、入声点付きの例が「小曲」所属で、「テ」となり、それ以外、音注は全て「テン」である。

表 3-54 「天」の表記例

○の位置	見出し語
入声	小曲: 善救寺武則天 ^テ
なし	二字話: 天晴 天陰 天亮 天明 天晚 三字話: 没天理 撩天話 四字話: 天賜其便 天大事体 天理照彰 旌旗蔽天 五字話: 今日天色好 看看天晚了 六字話: 耽擱了三五天 今朝天气不好 常言: 天開若雷 天下應無切齒人 天不生無祿之人 天有不測之風 想天鵝肉喫 不知天之高也 蝦蟆在天井裡 成事在天 大富在天 人可欺天不可欺 人可瞞天不可瞞 長短話: 天假良緣 天下人比如今 今天下太平 則天下人 方今天下 再過兩天 如今天下武夫 果然天下人的福了 果然天有不測之風 只守天命不違時勢 以終天年 而披雲見天 今年縱有天大事体 正是富貴在天 器用: 天平 菜蔬: 天蓼 疋頭: 天鵝絨 畜兽: 通天犀 小曲: 月照天邊 一更裡天 一更裡天 不來家你就喇天話

「天」は『広韻』には透母山攝の平声の「他前切」しかなく、音注に付けられているのは入声の声調点で、入声の表記と一致しているが、『広韻』の平声の読みとは一致しない。他の 48 例は全て平声の「他前切」に対応しているのに、「テ」1 例のみ入声調となるのは明らかな異例と言わざるを得ない。また、「天」について、現代南京、蘇州、杭州音はともにも陰平調で、入声の読みがない。南京音は[t'ẽ]、蘇州音は[t'iŋ]、杭州音は[t'ie]となり、杭州などでは鼻音韻音がなくなっているが、第二章第四節で述べたようにこれは現代の変化で、当時鼻音韻尾を有していた。南部呉方言などでも入声読みの方言の存在が

報告されていない。「テ」は中国原音からも適切な説明が得られない。

考えられる理由は、この例が文体の異なる「小曲」という歌謡において、「武則天^テ」という帝王の名に使われているということとの関連である。

中国では古来、親や主君などの目上に当たる者の諱、つまり本名を忌避する習慣があり、所謂「避諱」というものである。これについて、陳(1997)は『史諱举例』の序では、以下のように述べている。

民國以前、凡文字上不得直書當代君主或所尊之名、必須要其他方法以避之，是之謂避諱。避諱爲中國特有之風俗，其俗起於周，成於秦，盛於唐宋，其歷史垂二千年。(p.1)

「避諱」の方法は「改字」「空字」「欠画」など多くあり、清代の実例を挙げると、『康熙字典』において、康熙皇帝の「玄燁」という諱に触れる「玄」及び「玄」という構成要素を含む漢字は、「玄」字の最終画、つまり末の点を欠いた正しくない形に、「欠画」という避諱法で作られている。日本でも同じ習慣もあり、中国の伝統を取り入れた名前の習慣が定着し、実名のことを漢文表記するときは中国と同様、諱と呼んだ。『唐話纂要』にある「武則天」は、諱が照(墨)であり、中国史上唯一の女帝で、唐の後に武周朝を建てた。「則天」は諱ではないが、諡号で、尊称でもある。このように、中国でも日本でも、「避諱」で、字体面で「欠画」が行われているが、この例の場合、「欠画」が見られず、発音が変えられており、上に述べたのと全く違う状況である。元は平声で、声調点は仄声であることを考えると、歌詞の韻律面との関連も考えられるが、「小曲」の押韻の状況が定かではないので、確定的に言えない。

なお、巻六と官話学習書には入声点の使用が見られず、全て「テン」で、平声を示す四声点が付されている。

(31)「汶」

表 3-55 のように、「汶」は『唐話纂要』には 1 例のみである。

表 3-55 「汶」の表記例

○の位置	見出し語
平声	四字話：会得汶水 フヨクヲエク

『広韻』には、下記の臻撰の三種類の読みがある。

明母平声 「武巾切」 「汶山郡又音問」
微母平声 「無分切」 「黏唾又音旻問」
微母去声 「亡運切」 「水名」

平声点付きの例は「會得汶水」で、対訳が「ヲヨクヲエク」で、「泳げる」という意味である。『広韻』の「亡運切」だけでなく、『集韻』に「文運切」「無分切」等とあり、意味的に「水名」として多用されている。このように、いずれも鼻音韻尾の字で、平声の声調点が付されている「汶」は、音注「ユウ」と意味「およぶ」とは大きくかけ離れている。

発音と意味との両面から対応するのは、「ㄨ汶

』と考えられる。この字は『広韻』に収録されていないが、『集韻』に羊母流撰(平声)の「夷周切 説文行水也 徐錯白支入水所杖也又姓」とあり、読みは流撰三等で、『唐話纂要』の「イ段+ウ」の音注に一致し、意味「行水」も「およぐ」で音注と一致する。「汶」「ㄨ汶

」は別の字だが、字体の類似から冠山が複数の読みをもつ同じ字と認識し、「唾」などの意の読みとの誤読を防ぐために、声調点を付けたと考えられる。

このように、この例に対する声調点も意味の異なる二つの読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であることが言える。なお、同書の第六巻と冠山の他の学習書には「汶」も「ㄨ汶」も見当たらない。

(32)「面(面)」

表 3-56 のように、「面」は延べ 36 例あり、その内、音注が「メ°」となっている例は 1 例だけで入声の声調点が付されている。他の 35 例の音注は「メン」となっている。

「^{メ°}スエンテジン 面生的人」では本章第一節で検討したように、「面」の右肩点は誤記の可能性が大きい。「面」は明母山撰三等の字で、『広韻』に「彌箭切 向也前也」となり、入声の読みが存在しない。また、南京音は去声調の[mě̃]、蘇州音は陽去調の[miŋ]、杭州音は陽去調の[mie]となり、蘇州音と杭州音は鼻音韻尾がなくなっているが、前述したように杭州音などのこうした状況は新しい変化、当時は鼻音韻尾を有していた。よって、いずれにも入声の読みがなく、音注と対応することができない。「面生」という語を見ても、「面」を特別に入声に

する理由が見つからず、他の音注の例から分かるように、入声の音注は異例と言わざるを得ない。

表 3-56 「面」の表記例

○の位置	見出し語
入声	四字話: ^メ 面生的人
なし	二字話: 對面 三字話: 厚面皮 當面說 好体面 装体面 没体面 壞体面 劈面打 四字話: 面面相覷 面試一試 四面八方 面面相覷 轉面不看 當面商議 一面之識 五字話: 面和意不和 六字話: 面上濃濃搗粉 近面胜似遠面 遠面不如近面 近面胜似遠面 遠面不如近面 常言: 面無殘色 面譽者背必非 無對面難相見 知人知面不知心 長短話: 你們面添五分春色 輝輝面子荏苒 聽說海面上的舢隻 說道海面上 我家斜對面 近聞你家斜對面 器用: 面盤假面 船具: 撼面 馬面

このように、この字の発音は特別なところがないため、入声点を付けた意図は、具体的に明確にすることが困難である。『唐語使用』にも「面^{メツ}。生 チカツキニアラズ」、「都是面^メ。生 皆見ス知ラズノ者」のように、同書と同じ「面生」の「面」が入声の「メ」で、入声点も用いられている。つまり、全く同じ語に入声点を付している。一見して特定な語に対する注意であるかのように見えるが、『唐話使用』の著者も岡島冠山であり、『唐話纂要』の後に成立していることから、上の「降-ヤン」などの例と同じように、『唐話纂要』の表記がそのまま転載された可能性が高い。

なお、「面生」以外の卷六と冠山の他の学習書の場合は同じ「メン」で、去声を示す四声点を付している。

(33)「一」

表 3-57 のように、「一」の延べ 111 例の表記例は全て入声の「イ」となっている。1 例のみに去声点が付されて、「数目」の「一^{イホ}弗」である。

「一」は『広韻』の影母臻摂の入声に「於悉切 數之始也物之極也同也少也初也」とあり、数の始めがその基本義である。南京音は入声調の[iʔ]、蘇州音は陰入調の[iəʔ]、杭州音は陰入調の[iɪʔ]であり、去声の読みがないので、音注と対応しない。去声点は誤記の可能性と考えられるが、「一弗」の意

味が不明なので、不明とせざるを得ない。

なお、卷六と冠山の官話学習書には、去声点の使用が見られず、全てに入声を示す四声点が付されている。

表 3-57 「一」の表記例

○の位置	見出し語
去声	数目： ^イ 一 ^ホ 弗 二字話：一般 一樣 一半 三字話：一起走 一齊去 一捆一捆 一絆一絆 一開一開 一塊生 一味裡 一霎間 四字話：通家一般 敬你一盃 通家一般 骨肉一般 謝他一声 請倒一倒 一貧如洗 滿酒一盃 空了一日 一味讀書 借宿一宵 一齊吶喊 一表人物 三估一估 万無一失 面試一試 試做一做 一塊生住 一樣無二 教一教二 一面之識 五字話：有一夥歹人 一刀破肚死 名一藝者少 請你一席酒 仔細查一查 六字話：一路上平安了 一刀砍下了頭 下一盤棋耍耍 都是一般痴漢 常言：不如坐一家 一不做二不休 終須一別 一日拜師 必傷其一 用將一朝 一日不見 大丈夫一言 一行有失 得人一語勝千金 空讀如來一藏 身披一縷 長短話：還有一種 豈可一例相論 一手摸活人 一向都好麼 這一向爲俗事所絆無 一次在家相見 同爲一般快活則個 那能有一些臊皮 却不是一場 我要留你一日 請等一等 我也一向有病 用一盃寡酒去歲 這一向各處求覓 因要討一個好媳婦 真個好一頭親事了 只是一介寒士 一席喜酒便了 我要托你一件 骨肉一般 一發同走 明日萬一有雨 那一日這場風 也是一個夢 未曾有一些子煩惱 一事未成 大丈夫一言 一連下了大雨 且喜你我一般無事 像個中老的人一般 而老人家一般 做一般頑皮 一個去處去 講了一會話 這一向 龍魚：一字鯨 船具：一條龍 数目：一二三四五 一毫 一厘 一分 一錢 一兩 一百兩 一千兩 一萬兩 一斤 一百斤 一千斤 一萬斤 小曲 崔鶯：我有問上一個詳細 張君：有有一位 一愛：一愛你 六愛你一團的和氣 一更：一更裡天 一更裡天
なし	

上述したように、声調点の使用について、「天」「面」「一」を除き、全て複数の読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図であると統一的に説明することができる。

4.1.2 声調点の表記に見られる音韻的特徴

上記の声調点の使用状況に対する検討結果をまとめたのが表 3-58 である。南京音、吳方言と比較した結果について表から分かったことは以下の通りである。

(1) 吳方言の特徴を反映するもの

吳方言の特徴を反映するものについて、「降」「長」「分」「作」「足」「重」「從」「上」「中」「遠」「只」「着」「種」「衣」14 字と「参-スエン」である。

平声点付きの「降-ヤン」は、匣母に対する「ヤン」が吳方言の特徴からしか説明できない。去声点付きの「分-ウエン」も同じ、声調上は問題がなく、奉母に対する「ウエン」も吳方言の特徴を反映している。「長」は上声点付きの「チヤン」が介音 [i] を有するのも、声調点のない「ヂヤン」は濁音の音注となるのも吳方言の特徴を反映する。「作」「足」は両音注をもつのが吳方言から説明できる。

「重-ヂヨン」「從-ヅラン」「上-ジヤン」の場合も声調上の問題でなく、それぞれの音注は濁音が保存されている吳方言の特徴の現れでもあり、「重」「上」に対する拗音音注も吳方言しかと対応しない。「中-チヨン」「種-チヨン」も介音 [i] をもつ吳方言から説明できる。「着」は入声点付きの「チャ」と濁音の「ヂヤ」は両読みをもち、主母音 [ɑ] を有する吳方言と一致する。

「遠-エユン」は音価が『同文備攷』『磨光韻鏡』との対応が見られ、吳方言から説明できる。入声点付きの「只-チ」は『同文備攷』での [tʃit]、去声点付きの「衣-イ」は『同文備攷』での去声の読みと対応し、吳方言の特徴も反映される。

「参-スエン」は声調と韻母の面では両方言と対応するが、声母面では吳方言のみから説明できる。

(2) 南京音と吳方言との双方と対応するもの

「省」「惡」「擔」「爲」「禁」「更」「覺」「教」「好」「錯」「探」11 字と「差-ツウ」である。

「覺-キヤ○ウ」「教-キヤ○ウ」「好-ハ○ウ」の場合、3 字とも效摂所属であり、

南京音と呉方言との双方には、複合母音を有する読みが一致する。「覺-キヤ」「錯-ツヲ」も両方言から説明できる。

「省-スイン」「擔-タン」「禁-キン」「更-ケン」「探-タン」の場合、5字とも南京音と呉方言では鼻音性質をもつ発音が音注と対応する。

「惡」は両音注をもつのが両方言から説明できる。「差-ツウ」も両方言に対応している。

(3)南京音の特徴を反映するもの

「差-チャア」1例は声母面では呉方言から説明できず、南京音に対応する。

(4)その他

方言と対応しないものは「参-ツアン」「差-サ°イ」「天-テ」「汝-ユウ」「面-メ」「一-イ」5例である。「参-ツアン」の場合、意味、方言の声調とは一致しているが、発音の上では、「ツアン」は主母音[e]をもつ発音と対応できず、「倉含切」を注するものである。「差-サ°イ」は発音面では呉方言と対応するが、声調が一致しない。「天-テ」に用いられる入声点の意図は不明である。平声点付きの「汝-ユウ」は別の字を注するものである。「面-メ」の入声点は「面生」という語のみ見現れ、特定の語の発音を注すると見えるが、誤記の可能性が高い考えられる。「一-イ」の去声点は中古音と方言の入声の読みと対応できず、それに官話の学習書にも見られないため、去声点の使用は不明である。

「行-ハアン・ヒン」の場合、異なる意味と使い方を区別するのに用いられると考えられ、発音の上、適切な説明ができない。

「麼-モウ」について、声調点の使用を問わず、「麼」は中古音の上声の読みと一致できず、近代漢語で新たにできたものである。

このように、「行-ハアン・ヒン」「参-ツアン」「差-サ°イ」「天-テ」「汝-ユウ」「面-メ」「一-イ」「麼-モウ」以外、声調点の使用は呉方言の特徴とより多く対応していることが分かった。その使用意図は、検討してきたように、複数の読みの意味を読み間違えないように注意することである。

冠山による唐話学習書に用いられる声調点の使用について、同書と官話学習書との違いが少なく、つまり、依拠する方言が違っても拘わらず、多くの一

致が見られるのは声調点が四種類しかなく、南京音の5つの声調、蘇州音と杭州音の7つの声調を細かく示すことができないことについて、最も考えられる原因である。と同時に冠山による『唐話纂要』をはじめとする一連の教科書の伝承関係とも関係があると考えられる。また、「麼」のような『広韻』にない近代漢語の読み方などが出ていることは、声調点の使用は中古音などの韻書に依拠しておらず、当時の発音に基づいていることを物語っている。

なお、前述したように、『唐話纂要』の巻六は増補された内容であり、前五巻¹⁰⁴と異なり、巻六に「有點四聲」との声調を注記すると明確に説明している。こうした「四声点」は『唐話辞書類集』所収の再版影印本の六巻本の「二字話」に見られた。しかし、国立国語研究所と早稲田大学図書館所収の六巻原本にこうした四声点が振られていないことから、『唐話辞書類集』所収の六巻影印本の「二字話」に付されているこれらの四声点は刊行当初からではなく、刊行後に付される可能性があることを示している。冠山によるものかどうか定かではない。

再版影印本に見られる「四声点」の表記例の羅列はするが、詳細な検討はしない。なお、中に「四声点」が付されていない漢字の多くは初出でないものである。

タイ ピン	ヒヤン ホ	クハイ ロ	クハイ ウヲ	シヤンクハイ
太..平	・享福	快・樂	快・活	・爽快
ヒンツウエイ	ユウツウエイ	ウハ ロ	ヒンワン	ヒン デ〇ウ
・興趣	・有趣	・娛樂	・興旺	・興頭
ヒン チヤン	キ チヤ〇ウ	キ ツヤン	キ ツイ	キ ヒョン
・興昌	吉・兆	吉..祥	吉瑞	吉..凶
リイ ズウ	ハ ツアイ	ツア〇ウハア	カ〇ウ ヒン	シヤンリイ
利・市	發..財	・造化	・高興	・爽利
ジュイツウ	ジュイイハ	ハン ヒイ	チヨン イハ	チヨン ヨン
・如志	・如意	・歡喜	中〇意 ¹⁰⁵	中〇用
アン タン	アン ウワン	アンタイ	ウワン タン	アン ロ
・安當	・安穩	・安泰	・穩當	・安樂
ワン シヤア	シヤウ ツウ	ユウ ワン	キ ハン	キ エン
・頑要	・要子	・游頑	喫飯	喫..烟
ツインハン	ヨン ツアハ	キ ツユウ	パア、サン	ツイン ツユウ
・請飯	用・茶	喫酒	把盞	・請茶

¹⁰⁴ 愛媛大学鈴鹿文庫の再版五巻本では、「二字話」の「教導」に「四声点」の使用も見られる。この例は『唐話辞書類集(第六集)』所収の六巻再版本と異なり、「二字話」の最初の部分に集中しているのではない。それに、第四章で検討するように、愛媛大学の鈴鹿文庫版による再版の五巻本では、「二字話」にある「常」に対する「チヤン」「ツヤン」のような誤記と考えられるものを「チヤン」に訂正した。しかし、国立国語研究所所収の六巻再版本と『中国語教本類集成』所収の五巻再版影印本ではこうした訂正の現象が見られない。このように、「導」に用いられる「●」は著者岡島冠山によるものかどうかは不明である。

¹⁰⁵ □付きの漢字には四声点が見られない。

シヤイ ツユウ 灑・酒	タン ツユウ 盪・酒	ウラン ツユウ 温・酒	ハ〇ウ ツアハ 泡・茶	ツエン ツアハ 煎・茶
フウ エン 赴・筵	ホン エン 豊・筵	ツイン ケ 請客	チヤ〇ウ ケ 招客	ヤ〇ウ ケ 邀客
ツイン ツアハ 請坐	ツイン ジヤン 請上	ジヤン ライ 上・來	ジヤン ツアハ 上・坐	ピン ツアハ 平・坐
クワン ツアハ 寬坐	トハン ツアハ 端坐	ツインクワン 請寬	グイ ツアハ 跪坐	ヒエン ツアハ 閑坐
ツアハ ヒヤア 坐下	スヤウ ダン 咲談	ヒエンツアハ 閑話	ウハ イエイ 晤語	スヤンイエイ 相語
セ ハア 說話	キヤンハア 講話	ツインダン 清談	ヒエンダン 玄談	カ〇ウ ベ 告別
カ〇ウ ツウ 告辭	キイ ヒン 起行	キイ チン 起程	ドン シン 動身 ¹⁰⁶	キイシン 起身
ホンヘ〇ウ 奉候	バイ ワン 拜望	ウエン 〇ウ 問候	タン ワン 探望	シヘ〇ウ 失候
ケン ツイン 欠情	キエツイン 缺情	シ ボイ 失陪	シ リイ 失禮	シ ニン 失迎
ヒンリイ 行禮	ツラリイ 作禮	ツライ 作揖	チヤン イ 長揖	ライ リイ 回禮
タリイ 答禮	ツラベ 作別	リウ レン 留連	フンムイ 分袂	ファン シウ 分手
ヲベ 握別	リイベ 離別	スヤンケン 相見	スヤン ホン 相逢	ウイ ケン 未見
トウチエハ 寸謝	カン ツエハ 感謝	カン キ 感激	カンホイ 感佩	チン ツエハ 稱謝
ツラツエハ 作謝	キヤ〇ウ ジャ〇ウ 攪擾	トウジャ〇ウ 寸擾	ダア ジャ〇ウ 打攪	ジン クハン 盛歎
トウ ピン 寸品	ヘ〇ウクハン 厚歎	クハン ダイ 歎待	スエン ジウ 生受	ダイマン 怠慢
トウマン 寸慢	ザイ ツアハ 再坐	キン ボイ 敬盃	リン ボイ 領盃	ラン ツイ 爛醉
ツアハ トン 作東	パン トン 半東	トンダ〇ウ 東道	ツユイ スヤ〇ウ 取咲	ヒイ ロン 戲弄
デヤ〇ウ ヒ 調戲	ルウ ヒイ 兒戲	イ、ロ 奚落	ウ、マン 侮慢	キイ ウハ 欺負
チヤ〇ウ スヤ〇ウ 嘲笑	ファイハン 誹謗	サン 讚	タン 嘆	

¹⁰⁶ 「動〇」について、初版本と国立国語研究所所収の六巻本に去声点が付されていないのに対して、愛媛大学鈴鹿文庫所収の五巻再版本にある。

表 3-58 声調点の使用状況と対照

漢字	音注	声調点	中古音	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応	古い資料との対応	他の冠山の学習書	
行	ハアン	平声点	(梗)平声 ○	陽平[xā]	△	陰去[hā]か[hā]	陽平[hāŋ]	△	平声点
	ヒン	/	(宕)平声	陽平[ciŋ]	△	陰去[hin]	陽平[hin]	△	『同文備攷』△
降	ヤン	平声点	(匣)平声 ○	陽平[ciā]	×	陽平[hā]	陽平[hīaŋ]	○	『同文備攷』○
	キヤン	/	(見)去声	去声[ciā]	○	陽去[kā]([tciā])	陰去[tciāŋ]	○	
參	ツアン	平声点	(初)平声 ○	陰平[ts'an]	×	陰平[ts'an]	陰平[ts'an]	×	例が見られず
	スエン	/	(生)平声	陰平[sən]	×	陰平[sən]	陰平[sən]	○	『同文備攷』○
長	チヤン	上声点	(知)上声 ○	[tʂa˥]上声	×	陰上[tʂā]	陰上[tsaŋ]	×	『同文備攷』[-iaŋ] ○
	ヂヤン	/	(澄)平声	[tʂa˥]陽平	×	陽平[tʂā]	陽平[dzəŋ]	×	『三音正譌』○
省	スイ	上声点	(心)上声 ○	上声[sin]	○	陰上[sin]	陽平[ciŋ]	○	『西儒耳目資』○
	スエン	/	(生)上声	上声[səŋ]	○	陰上[sən](文)[sā](白)	陰上[sən]	○	
分	ウエン	去声点	(奉)去声 ○	去声[fəŋ]	×	陽去[vən]	-	○	『磨光韻鏡』○
	フン	/	(非)平声	陰平[fəŋ]	○	陰平[fən]	陰平[fən]	○	
作	ツラハ	去声点	(遇)去声 ○	陰去[tsə]	×	陰去[tsəu]	陰去[tsou]	×	『同文備攷』両読み ○
	ツラ	/	(宕)入声	入声[tsəʔ]	○	陰入[tsəʔ]	陰入[tsəʔ]	○	『磨光韻鏡』両読み ○
足	ツユイ	去声点	(遇)去声 ○		×				
	ツラ	/	(通)入声	入声[tsuʔ]	×	陰入[tsəʔ]	陰入[tsəʔ]	○	『同文備攷』両読み ○
悪	ウハ	去声点	(遇)去声 ○	去声[u]	○	陰去[əu]のと陰入[oʔ]	陰去[u]	○	『同文備攷』○
	ヲ	/	(宕)入声	入声[əʔ]	○	陰入[oʔ]	陰入[əʔ]	○	
覺	キヤ〇ウ	去声点	(效)去声 ○	陰去[tciəu]	口蓋化せず ○	陰去[kæ]([tciə])	陰去[tciə]	口蓋化せず 複合母音 ○	去声点
	キヤ	/	(江)入声	入声[tciəʔ]	口蓋化せず ○	入声[kəʔ]([tciəʔ])	陰入[tciəʔ]	×	『同文備攷』『磨光韻鏡』○
差	ツウ	平声点	(止)平声 ○	陰平[ts'ɿ]	○	陰平[ts'ɿ]			
	サ°イ	去声点	(蟹)平声 ×	陰平[ts'æ]	×	陰平[ts'a]	陰平[ts'ɛ]	×	『同文備攷』『磨光韻鏡』音○声調×
	ツアハ	/	(仮)平声	陰平[ts'ɛ]	×(チャア○)	陰平[ts'o]	陰平[ts'a]	○(チャア×)	『同文備攷』『磨光韻鏡』○
着	ヂヤ	入声点	入声 ○	入声[tsəʔ]	×	陰入[tsəʔ]陽入[zaʔ]		○	『同文備攷』○
擔	タン	平声点	平声 ○	陰平[ta˥]	○	陰平[tɛ]	陰平[tɛ]	×	例が見られず
	/	去声	去声	去声[ta˥]	○	韻去[tɛ]	韻去[tɛ]	×	『磨光韻鏡』○
重	チヨン	平声点	平声 ○	陽平[ts'əŋ]	×	陽平[zoŋ]	陽平[dzoŋ]	×	『同文備攷』[dʒioŋ] ○
	/	上声	上声	去声[ts'əŋ]	×	陽去[zoŋ]	陽去[dzoŋ]	×	
從	ゾラン	平声点	平声 ○	陽平[ts'əŋ]	×	陰平[zoŋ]	陽平[dzoŋ]	○	平声四声点
禁	キン	平声点	平声 ○	陰平[tein]	口蓋化せず ○	陰平[tein]	陽平[tein]	口蓋化せず ○	『同文備攷』○
	/	去声	去声	去声[tein]	口蓋化せず ○	陰去[tein]	陰去[tein]	口蓋化せず ○	
更	ケン	平声点	平声 ○	陰平[kəŋ]	○	陰平(文)[kən](白)[kā]	陰平[kən]	○	平声点
	(ケ°ン)	/	去声	去声[kəŋ]	○	陰去(文)[kən](白)[kā]	陰去[kən]	○	
教	キヤ〇ウ	平声点	平声 ○	陰平[tciəu]	口蓋化せず ○	陰去[kæ]([tciə])	陰平[tciə]	口蓋化せず 複合母音 ○	『同文備攷』『磨光韻鏡』両読み ○
	/	去声	去声	去声[tciəu]	口蓋化せず ○	陰去[kæ]([tciə])			
上	ジヤン	上声点	上声 ○	陰去[ʂā]	×	陽上[zã][zā]		×	『同文備攷』[ʒiaŋ] ○
	/	去声	去声	去声[ʂā]	×	陽上[zã][zā]	[zaŋ]	×	
中	チヨン	去声点	去声 ○	去声[tʂəŋ]	×	陰去[tʂəŋ]	陰去[tʂəŋ]	×	『同文備攷』[tʂioŋ] ○
	/	平声	平声	陰平[tʂəŋ]	×	陰平[tʂəŋ]	陰平[tʂəŋ]	×	
爲	ヲイ	去声点	去声 ○	陽去[uai]	○	陽去[hue]	陽去[huei]	○	『同文備攷』○
	/	平声	平声	陽平[uai]	○	陽平[hue]	陽平[huei]	○	
好	ハ〇ウ	去声点	去声 ○	去声[xau]	○	陰去[hɛ]	陰去[hə]	複合母音 ○	『同文備攷』『磨光韻鏡』○
	/	上声	上声	上声[xau]	○	隱上[hɛ]	隱上[hə]	複合母音 ○	
遠	エユン	去声点	去声 ○	上声[ye˥]	×	陽上[hio]	陰上[vo]	×	『磨光韻鏡』両音注 ○
	/	上声	上声	上声[ye˥]	×	陽上[hio]	陰上[vo]	×	
錯	ツラハ	去声点	去声 ○	去声[ts'o]	○	入声[ts'oʔ]去声[ts'əu]	陰去[ts'ou]	×	-
種	チヨン	去声点	去声 ○	去声[tʂəŋ]	×	陰去[tʂəŋ]	陰去[tʂəŋ]	×	例が見られず
	/	上声	上声	上声[tʂəŋ]	×	陰上[tʂəŋ]	陰上[tʂəŋ]	×	『同文備攷』『磨光韻鏡』[i]あり○
衣	イハ	去声点	去声 ○	陰平[i]	×	陰平[i]	陰平[i]	×	『同文備攷』去声あり ○
	/	平声	平声	陰平[i]	○	陰平[i]	陰平[i]	○	例が見られず
探	タン	去声点	平声 ×	陰平[t'ā]	○	陰去[t'ə]	陰去[t'ɛ]	×	平声四声点
只	チ	入声点	平声・上声 ×	陰平[tʂɿ]	×	陰入[tsəʔ][tsəʔ]	陰入[tsəʔ]	×	『同文備攷』[tʂit] ○
麼	モウ	平声点	上声 ×	/	/	/	/	/	平声四声点
	マアハ	/	/	/	/	/	/	/	
天	テ	入声点	平声 ×	陰平[t'e˥]	×	陰平[t'iŋ]	陰平[t'ie]	×	例が見られず
	テン	/	平声	陰平[t'e˥]	○	陰平[t'iŋ]	陰平[t'ie]	×	
汝	ユウ	平声点	平声 ×						例が見られず
面	メ	入声点			×				入声点
	メン	/	去声	去声[mɛ]	○	陽去[miŋ]	陽去[mie]	×	
一	イ	去声点	入声 ×	入声[iʔ]	○	陰入[iaʔ]	陰入[iiʔ]	×	入声四声点

4.2 入声韻の字に対する音注の特徴

入声韻字の韻尾に対して、冠山による官話学習書の『唐譯便覽』『唐音雅俗語類』『唐語使用』などでは「ツ」で表記されるのに対し、同書では「無表記」の形となっていることは第二章で述べたように先行研究によって明らかにされている。また、無表記の入声表記と無韻尾陰声韻の表記との区別の有り方についても先行研究によって明らかにされている。

表記の形態についてはすでに明らかにされているが、ここではまず実態についての確認を行うこととしたい。表 3-59 は同書における入声韻字の集計結果で、422 字種で、延べ 2,603 例である。

表 3-59 入声字の用例

表記	漢字	字種数	用例数
イ	イ- 111(110)益 4 亦 8 掛 2 翌 1 翼 2 噎 1 熨 1 惹 1 禱 ¹	10	131
カ	割 3 喝 1 葛 1 戛 1 揭 2 渴 3 磕 4 鴿 1 合 6(2)	8(+1)	18
キ	吉 6 喫 29 桔 1 急 4 激 2 劫 1 子 2 屐 2(1)棘 1 齧 1 極 12(5)潔 1 結 4 詰 1 蛄 1	13(+2)	60
ギ	及 4 履 2(1)極 12(7)	3	12
ケ	客 20(9)隔 3 刻 1	2(+1)	13
ケ°	客 20(11)格 1 克 1	3	13
コ	各 18 閣 2 穀 3 貉 1 殼 2 鶴 1	6	26
サ	撒 5 霰 2(1)殺 14 煞 2	4	22
サ°	察 1 擦 1 札 1 刹 1 紮 1 扎 3 挿 4 柵 1	8	13
シ	式 1 失 14 室 4(3)濕 3 什 16 十 24(23) 石 13(8) 柘 1 日 98(7)實 14(1) 識 9 適 1 釋 1	10(+3)	88
ジ	室 4(1)拾 3 十 24(1)食 7 石 13(5)日 98(91)跣 1 實 14(13)入 (3)	6(+2)	122
セ	設 2 説 44	2	46
ゼ	舌 1 熱 6 拆 3 鴿 2(1)	4	11
ソ	粟 3 索 11 宿 8	3	22
タ	搭 6 答 7 塌 1 獺 2	4	16
ダ	踏 3 達 1	2	4
チ	七 11 尺 2 赤 1 蛭 1 徹 1 執 3 織 1 職 4 躑 1 隻 3	10	28
ヂ	直 5 姪 2	2	7
テ	的 91 帖 1 貼 7 滴 2 得 88(87)突 2 蛭 1 跌 2 德 3 忒 3 蝻 1 敵 4 踢 3 鐵 10 磔 1	15	218
テ°	得 88(1)	1	1
デ	蝶 3 笛 1 迭 1 特 5 逖 1 鱗 1	6	12
ト	托 13 託 1 脱 11 毒 3(1)獨 8(2)奪 1 掇 1 讀 11(1)鐸 1 口毒(1)	6(+2)	33
ド	毒 3(2)獨 8(6)讀 11(10)	3	18
ナ	呐 2 納 5	2	7
ネ	逆 2 業 2 鱗 1	3	5
ノ	諾 1	1	1
ハ	法 5 發 14 髮 2 潑 5(1)	3(+1)	22
ハ°	八 10 叭 (1)撥 5 潑 5(4)鉞 1	5	21
バ	拔 2	1	2
ヒ	必 54(2)	0(+1)	2
ヒ°	鷓 1 疋 3 必 54(52)僻 1 壁 7 碧 1 蔑 1 劈 2 畢 1 筆 3 蟻 1 魴 1 鼈 1	13	75
フ	不 400(5)	0(+1)	5
フ°	不 400(494)	1	494
ヘ	白 23(1)	0(+1)	1
ヘ°	伯 1 白 23(2)百 12(11)帛 1 珀 1 魄 1 黑 7(6)別 16(4)苜 1 箔 1 栢 4(2)	9(+2)	31
ベ	白 23(20)百 12(1)別 16(12)	2(+1)	33

ホ	嚇 1 忽 1 蛤 2 福 11(6)覆 2(1)弗 1 勿 6 盒 3 蝠 1 復 3(2)鶴 1 合 6(2)	12	27
ホ°	博 1 拍 2 泊 1 卜 1 朴 1 勃 2 扑 2 撲 2 鉢 1	9	13
ボ	薄 2	1	2
ミ	密 1 蜜 1	2	2
メ	滅 1 覓 1	2	2
モ	睦 1 莫 16 麥 (6)墨 3(1)沒 76(4)木 15 目 11 寔 4 沐 1 獮 1	8(+2)	55
モ°	墨 3(2)沒 76(72)黠 3 脉 2 陌 1	5	80
ラ	喇 2(1)蠟 3	2	4
リ	笠 3 栗 1 立 6 力 21 鷓 1	5	32
レ	捩 1 勒 2 歷 2	3	5
ロ	六 6(4)禄 1 鹿 2 落 22 樂 13 碌 2 絡 1 綠 2 萊 1 輓 2 陸 2	11	52
ヤ	狹 1 壓 1 筐 3 約 9 藥 13(12)躍 2 鑰 1 鴨 3	8	32
エ	悅 2(1)越 2 褐 1 葉 2 穴 2 月 9 日 1 閔 1	8	19
エ°	悅 2(1)	0(+1)	1
ヨ	藥 13(1)玉 8(7)欲 (3)慾 (3)浴 1 鶴 1 屋 7(2)	6	18
ワ	滑 3 猾 1 乏 1 襪 3(2)	4	7
ヲ	喇 2(1)握 1 屋 7(5)榭 1 斛 1 惡 18(13)酉屋 1	6(+1)	23
イエ	鬱 1	1	1
イツ	鷓 1	1	1
ウヲ	或 11 核 1 活 15 伏 3(2)服 7(6)惑 1 蠮 1 袂 1 縛 1 獲 2	10	41
ウエ	物 10 佛 4	2	14
キヤ	角 4(3)恰 1 却 5 脚 9 挾 1 甲 7 夾 2 覺 5(4)莢 2 頰 1	10	35
キエ	概 1 屈 1 蕨 1 決 9(7)獾 1 缺 1 訣 1 鰈 1 橘 1	9	15
キユ	決 9(2)	0(+1)	2
キヨ	角 4(1)曲 5 掬 2 菊 3	3(+1)	11
ギヨ	軸 1 逐 3(1)	1(+1)	2
クヲ	國 1 骨 8	2	9
クハ	鴣 2(1)聒 (1)	2	2
チヤ	勺 2 酌 3 着 24(6)著 10(8)綽 1	5	20
ヂヤ	着 24(17)著 10(2)	0(+2)	19
チエ	摺 1	1	1
チュ	出 50(49)拙 2	2	51
チヨ	着 24(1)嘱 2 捉 3 啄 1 竹 16 築 1 蓄 1 逐 3(2)躅 1 擲 1 桌 2 燭 4 酉足 1	12(+1)	36
ヂヨ	濁 3	1	3
ヅア	雜 1	1	1
ツヤ	雀 4 鵲 2	2	6
ツエ	側 7 窄 1 策 1 漆 5 木漆 1 借 10(1)疾 4(1)妾 3 戚 2 籍 1 脊 2 切 4 接 3 折 2 即 2 冊 1 稷 1 蜥 1 跡 2 習 2(1)則 24 測 4 積 3 擲 1 絕 4(1)績 2 節 6 賊 11(3)鯽 1 足 17(1)	25(+5)	88
ヅエ	嫉 1 疾 4(3)集 1 寂 5 席 6 夕 1 習 2(1)擇 5 絕 4(3)賊 11(8)	10	34
ツヲ	足 17(14)作 24(21)做 41(1)	3	36
ヅヲ	昨 2 績 1 俗 4 族 1 鏃 1 鑿 1	6	10
シヤ	芍 2(1)	1	1
ジヤ	若 20(19)弱 2 鶻 1 籟 1	4	23
シヨ	叔 3 束 2 芍 2(1)	2(+1)	6
ジヨ	若 20(1)辱 1 熟 3 肉 12 褥 1 蜀 3 蠮 1 贖 2	7(+1)	24
スヤ	楔 1 屨 (1)	2	2
スエ	毛息 1 塞 2 色 15 惜 6 昔 2 雪 5 息 8 膝 2 率 1 恤 2 泄 2 薛 1 虱 1 蟋 1 蟀 1 媳 2 緯 1 鱈 1 鵲 1 錫 1	20	56
ワア	挖 1	1	1
ワツ	襪 3(1)	0(+1)	1
ハア	曷 1	1	1
ヒヨ	學 13 畜 1	2	14
ヒエ	吸 1 血 6 歇 3 協 1	4	11
ヒ°イ	撇 2	1	2
フヲ	伏 3(1)服 7(1)拂 1 福 11(5)復 1	4(+1)	9
へエ	黑 7(1)	0(+1)	1
へ°エ	槩 1 栢 4(2)	1(+1)	3
ニヤ	捏 2	1	2
リヤ	略 3	1	3
計		422	2,603

注：・「一」、「出」、「歹」それぞれ 1 例未注の例がある。

- ・「ダアゝ-不」1 例は、直後の語彙による影響を受けた結果で誤記。原例は同頁に「波浪不作 波浪大作」の例があり、「不-ダアゝ」は、「不」に対する表記は明らかに「大」による誤記だろう。
- ・「盒」に対して、1 例漢字誤字[盆]である。原例は全て「器用」同頁の所属例で、「盒兒」「香盒」「烟盆(盒)」となっている。音注が全て「ホ」となっているが、「烟盒」の漢字は「盒」の誤字である盆となっている。
- ・「覆-へ〇ウ 2(1)/ホ 2(1)」は、原例が「果瓜」の「覆盆 イチゴ」と「花草」の「旋覆 ヲグルマ」である。「覆」は『広韻』には、去声読みの敷母「敷救切」(蓋也)、奉母「扶富切」(伏兵)と入声読みの敷母「芳福切」(反覆又敗也倒也審也)、滂母「匹北切」とある。「ホ」は「芳福切」、「へ〇ウ」は「敷救切」と対応している。
- ・「覺」字は音注が「キヤ〇ウ」と「キヤ」となる。それぞれ効撰の「寝る」「睡眠」、江撰の「感覺」「覚える」に対応する。
- ・「復-フウ 3(1)ホ 3(2)」は、原例が「而無復雄飛 再比世ニ出ルコトナク」「回復 ヘンジ」「未曾回復 マダヘンジヲセヌ」で、1 例が「フウ」で、2 例が「ホ」である。流撰去声の「扶富切 又也返也往來也安也白也告也」と通撰入声の「房六切 返也重也」との二種類あり、「フウ」音注が流撰去声、「ホ」は通撰入声と対応する。
- ・「悪」字の用例は、計 18 例あり、遇撰平(去)声「哀都切」(鳥路切)と宕撰入声「鳥各切」との発音があり、それぞれ音注の「ウゝ」と「ヲ」が対応している。
- ・「足」は計 17 例で、遇撰去声の「子句切」と通撰入声の「即玉切」との二種類の発音がある。「ツユイ」と「ツヲ」は両読みをもつ吳方言の特徴から説明できる。「ツエ」1 例は「ツヲ」による誤記であろう。
- ・「作」は「ツヲゝ」が遇撰去声、「ツヲ」は宕撰入声と対応する。
- ・「借」字は 10 例あり、「ツエゝ」9 例と「ツエ」1 例の表記で、「ツエ」は初出でなく、「ツエゝ」による「ゝ」の記入漏れの可能性もあるだろう。
- ・「へエ-黒 7(1)」について、右肩点の部分で検討したように、「へエ」は「へ°」と同じで、「エ」は[-ə-]と対応するものである。「栢」に対する「へ°エ 4(2)」「ぺ 4(2)」、「檠」に対する「へ°エ(1)」も短音節音注と考えられる。

表 3-59 から分かったことは以下の通りである。

(1)入声韻尾が全体として表記されていない。

先行研究が指摘した通り、入声字の入声韻尾は無表記である。但し、極く稀だが、例外が存在する。

(2)例外がある。

(i)短音節型音注以外、「ツ」で終わる表記は「イツ-鷓」「ワツ-襪」の 2 例ある。「イツ-鷓(1)」は羊母臻撰の合口三等の字、「餘律切 鳥名」で、原例が「禽鳥」の「鷓鳥 シギ」である。ここの「イツ」は合口の字を注するものでなく、「イエ」の誤記の可能性が推測できる。他の文献から、入声韻尾を表記したものと見なすことは可能であり、誤りではないことが分かるが、同書の方針からは適切な説明が得られず、例外である。特に「襪」の場合、3 例中、2 例が「ワ」、1 例が「ワツ」で、特定の語に対する音注方法でもないことが分かる。

(ii)「六玉撇空挖曷」の 6 例が例外で、長呼型音注となっている。

「六玉」2 字の「小曲」部分の「六-リウ 6(2)」「玉-イユイ 8(1)」は短音節型音注ではない。「ピイ-撇」は 2 例が「小曲」の「撇下了我」に出ている。「小曲」のこれらの字については、第六章で論じるように、「六」「玉」が北方官話の特徴を反映し、「撇」は蟹撰の読みを注するもので、「敵」という声符による類推の

可能性も排除できない。

「ワア-空」1 例。山撰入声字の「空」は前述してきたように、同書の「器用」に、「空子(ワアハツウ)」と「耳挖(ルウワア)」がそれぞれ 1 例あり、どちらも「ミ、カキ」の意味である。同音の二つの字の音注は、いずれも入声の表記になっていない¹⁰⁷。南京、蘇州、杭州音などと合わず、北方官話の特徴を反映するが、「小曲」以外の部分のものでその可能性が極めて低い。また、蘇州音では「挖」が[uaʔ]となるが、南部処衢方言の龍游では[ua]となっている。このように、音注は非入声の読みがある南部呉方言から説明でき、誤記でない可能性が高い。

「ハア-曷」1 例。匣母山撰「胡葛切 何也」で、原例が「四字話」の「曷堪^{ハアカン} 怡悦^{イハエ} 何ソ悦ヒニタエンヤ」である。蘇州音は[aʔ]、南京音は[xəʔ]と発音する。「曷」の音注は「ハ」と期待されるが、「ハア」は長呼型音注で、入声韻の読みと一致しない。つまり、「ハア」は誤記の可能性がある。

(iii)その他

表には明らかに非入声の別の字の音を注したのものも存在する。

「サン-霎」表記 1 例。「霎-サ 2(1)サン 2(1)」は原字が「**霎**」で、辞書に未収で、本研究では「霎」とする。『広韻』に入声読み「山洽切」(二等)と「山輒切」(三等)とあり、原例が「三字話」の「霎時間^{サズウケン}」「一霎間^{イサンケン}」となり、意味が同じ「タチマチノアイダ」である。「サン」は明らかに入声の読みと一致できず、誤記と考えられる。

「キュイ-夔」1 例。宕撰入声の「王縛切 説文曰収絲者也」である。原例は「器用」の「夔兒^{キュイルウ} ワク」で、音注が読みと一致しない。音注「キュイ」は「ギユイ-衢懼」の声符の類推による可能性があると考えたいが、この字は濁音声母の字なので、説明できない。

「ホ°イ-鴟」1 例。「鴟」について、梗撰入声の字である「鴟鳥」は原例である。『康熙字典』に「肩闋切」とあり、見母錫韻の字である。声母と韻母との何れも「ホ°イ」と合わないため、声符「貝-ホ°イ」による類推の結果と考えられる。

上記の如き、この 3 例はいずれも入声と無関係であることが明らかである。

¹⁰⁷ 『唐音雅俗類語』では「ワツ」と、入声となっている。

上述したように、同書の入声韻の字は、誤記によるものを除き、2例が「-ツ」の音注となり、「-ツ」については理由は不明である。それ以外、全て韻尾無表記の形になっていることが確認できた。また、長呼型音注となる「六」「玉」「撇」などの存在が明らかになった。第六章で詳述するように、「六-リウ」「玉-イユイ」の長呼形表記は全て「小曲」にある例で北方官話音の反映である。「撇-ピイ」は蟹摂の読みを注するが、同書の「蔽-ヒ°イ」のように「蔽」という声符による類推の可能性もある。

また、延音点「ˊ」の部分では取り上げた沼本(1997)が指摘したように、入声韻の字に対する短音形表記は無韻尾の陰声韻の字に対する長呼型音注と区別している。表 3-60 のように、中古音的な入声韻尾は、中国語の現代普通話では、例えば「八 [-at]→[-aʔ]→[-a]」等のように、全て消失し、韻尾に内破音の [-p][t][k] をもつ閉音節は韻母が母音のみ、或いは母音韻尾で終わるものの開音節に変化してしまった。入声と非入声を書き分けるのは当時の官話系方言でも呉方言でも入声韻尾がまだ残っていたからである。

表 3-60 無韻尾陰声韻字と入声韻字の表記の比較

段別	無韻尾の陰声韻の字	入声韻の字
ア段	サアˊ-叉沙紗 スアˊ-砂紗 タアˊ-他打 ツアˊ-差 ツアˊ-茶 ナアˊ-拿 ハアˊ-花華 ハ°アˊ-巴芭 バアˊ-琶爬 マアˊ-麻蟆 ワアˊ-蛙 ヤアˊ-牙芽 キヤア-家假嫁架價 クハア-寡誇 ヒヤア-遐蝦蝦暇夏	カ-割喝葛戛渴 サ-撒霎殺煞 タ-搭答塌獺 ナ-呐納 ハ-法發髮潑 ヤ-狹壓筐約藥 キヤ-角恰却脚挾 ワ-滑猾乏襪
イ段	イˊ-依椅衣夷姨 キイ-機幾饑 リイ-哩李理	イ-一益亦揖翌 キ-吉喫桔急桔 シ-式失室濕什 チ-七尺赤蛭徹
ウ段	ウˊ-乎湖狐糊胡瑚 ブウ-蒲葡 クウ-古鼓估	
エ段	エˊ-也夜野 ツエˊ-且借嗟 スエˊ-些犀寫西洗 テイ-低隄底抵 デイ-弟遞第	エ-悅越褐葉穴 ツエ-側窄策漆借 スエ-毛息塞色惜 ヒエ-吸血歇協 テ-的帖貼滴得 レ-鷓振勒歷 ペ-伯白百帛珀
オ段	ツワˊ-初酢措楚祖 ツワˊ-左坐助鋤 トウ-土吐 ドウ-肚杜 ノウ-努怒 ソウ-素訴	ワ-屋喇握榭斛 ウワ-或核活伏服 フワ-伏服拂 クワ-國骨 ヨ-藥玉欲浴屋 チョ-着囑捉啄竹 ジヨ-若辱熟肉褥 ト-托脫毒獨奪 ホ-忽蛤福覆弗 ロ-六祿鹿落樂

なお、既に第二章第四節で挙げたように、南京音でも呉方言でも、入声韻の韻尾は全て韻尾 [-ʔ] となっている。入声韻の字の韻尾を示すには、『唐話使用』等の冠山の他の唐話学習書では「ツ」で終わる音注となるのに対して、『唐話纂要』では無表記の形を採るが、音的な面においては違いがない。

第四章

仮名音注に反映された中国語の声類

第四章と第五章では、『唐話纂要』にある全ての漢字を中古音の体系に基づいて整理した上、音注を官話の南京音と呉方言の蘇州音、杭州音と比較する。比較を通じて、音注に反映された中国語について声類と韻類との二つの面から、その基礎音系に見られる特徴を解明する。

本章では、仮名音注について、唇音(重唇音と軽唇音)、舌音、歯音、牙音、喉音、半舌音、半歯音に分けて、南京音、蘇州・杭州音との対応関係を整理し、それに反映された中国語の特徴を声類面から考察する。

第一節 声母ごとの対応関係の分析

1.1 重唇音幫組と軽唇音非組

第二章で述べたように、中古音の唇音は重唇音しかないが、その後早い段階から重唇音と軽唇音に分裂したため、ここでは重唇音と軽唇音に分けて検討する。

1.1.1 重唇音幫組

(1) 幫母 [p-] と滂母 [p'-]

『唐話纂要』では、中国語の全清(無気)と次清(有気)とが区別されていないため、本章では全清と次清の声母をまとめて検討することとする。なお、全清と次清の声母の違いが音注に反映されないのは、謝(2016:62)が指摘したように日本語の子音に無気と有気の違いがないのが原因で、これにより両者の違いが捨象されたと考えられる。

表 4-1-1 から分かるように、幫母 [p-] の所属字は計 82 字種で、延べ 365 字であり、滂母 [p'-] の所属字は計 38 字種で、延べ 96 字である。幫・滂母の所属字に対して、ハ行の仮名に右肩点が付されている用例が幫母の 95.9%、滂母の 93.7% となり、圧倒的多数を占めている。

「ハ°」「ヒ°」「フ°」「ペ」「ホ°」音注の右肩点「°」は、第三章第一節で述べたように、半濁音符ではなく、仮名の通りに発音をしてならないことを注意するための注意点であり、中国語の無声両唇破裂子音の無気音 [p-] と有気音 [p'-] の双方と対応している。

なお、ハ°行の他に下記のように、(i)バ行、(ii)同じ字に対するハ°行とバ行、(iii)同じ字に対するハ°行とハ行の音注も例外的に存在し、その数は 24 例ある。

(i) バ行

濁音音注バ行の使用例は、下記の 2 字でそれぞれ 1 例のみである。

幫母：バ○ウ-胞(1) バアゝ-鋈(1)

「胞」字は、原例が「親族」所属の「同胞 ^{ドンバウ}ドウフク」である。この字の読みについて、南京、蘇州、杭州音はともに両唇破裂子音の無気音 [p-] となってい

る。このように、「バ〇ウ」音注はいずれの発音からも説明できない。

「鈿¹⁰⁸」字は、原例が「鉄鈿^{テ バア} クマテ」であり、『広韻』に幫母の「伯加切 兵庫又音葩」と滂母の「普巴切 方言云江東呼鏹箭」との二種類の読みがあるが、意味の上、対応がはっきり見られない。『大漢和辞典』に「鈿」を「まぐは」という意味で、「[正字通] 鉏属、五齒、平土除穢用之, 俗呼爲耙。」とのような説明がある。また、「耙」について、『広韻』に未収だが、『大漢和辞典』に「[篇海] 必駕切」とあり、幫母である。しかし、「耙」は蘇州音では[b-]と発音するため、濁音音注となるのは蘇州音から説明できる。

(ii) ハ°行とバ行

清音と濁音との二種類の音注を有する表記例について、「百」である。

幫母： へ°-百 12(11) べ-百 12(1)

下記のように、

「べ」: 「数目」^{ベワンキン}百萬斤

「へ°」: 「六字話」^{ゴウケンヘ°イハヘ°ジュン}我肯百依百順

「常言」^{ハアハウハヘ°ジホン}花無百日紅 ^{ヘ°ヒンキュイキン}百行俱傾 ^{ツヲゼンキヤンツウヘ°ツヤン}作善降之百祥 ^{ツヲフ°センキヤンツウヘ°ヤン}作不善降之百殃

「虫介」^{ヘ°ツヲ}百足 「花艸」^{ヘ°ホ}百合

「数目」^{ヘ°ワンリヤン}百萬兩 ^{イヘ°リアン}一百兩 ^{イヘ°キン}一百斤

「べ-百」は1例のみで、右肩点付きの「へ°」音注は11例となっている。また、同じ[数目]所属の使用例が全て「へ°」音注であるため、「べ」は「べ-白」による誤記の可能性が大きいと考えられる。

(iii) ハ°行とハ行

ハ°行とハ行との二種類の音注をもつ例は、以下となっている。

幫母：

比-ヒ°イ 8(7) ヒイ 8(1) 布-フ°ウ 6(5) フウ 6(1)

本-へ°エン 13(12) へエン 13(1) 必-ヒ° 54(52) ヒ 54(2)

表-ピ°ヤ〇ウ 6(4) ヒヤ〇ウ 6(2) 餅-ヒ°ン 5(4) ヒン 5(1)

¹⁰⁸ 『同文備考』では[pia]との清音がある。

氷-ヒ[°]ン 2(1)ヒン氷 2(1)
 滂母：
 潑-ハ[°] 5(4)ハ 5(1) 票-ピヤ[°]ウ 7(6)ヒヤ[°]ウ 7(1)
 破-ポウ 12(10)ホウ 12(2)

これらの字は、「氷」以外、いずれの場合も右肩点付き音注の数が多い。

「比」「布」「表」4字の場合は同頁に同じ漢字の表記例が存在している。
 「ヒイ-比 8(1)」は「比上不足 ^{ヒ[°]イジヤンフ[°]ツフ} 比下有餘 ^{ヒイヒヤアユウイユイ}」、「フウ-布 6(1)」は「白羅布 ^{ベロウフ[°]ウ}
^{ヨンチュンベフウ} 永春白布 ^{ヒヤアフウ} 夏布 ^{メンフ[°]ウ} 綿布」、「ヒヤ[°]ウ-表 6(2)」の1例は「表姊 ^{ピヤ[°]ウツユイ} 表妹 ^{ヒヤ[°]ウムイ}」のように、
 いずれも直前の同じ字に右肩点付きの音注がついているため、後続の字の右
 肩点が省略されたと考えたいが、本研究の考察結果によって、ハ行の音注は
 幫母と対応しないものであるため、濁点の記入漏れの可能性が高い。

「本」「必」「餅」3字は、以下のように、

「ヘエン-本 13(1)」^{ヘ[°]エン}「二字話」本分 ^{シウヘエンウエンチュエイシイ}「長短話」守本分處世
 「ヒ-必 54(2)」^{ヒ[°]}「二字話」不必
^{ヒヤ[°]ウキイハ[°]ウ}「四字話」必要記號 ^{イジヒユウハ[°]ツエ}「長短話」異日必有發跡
 「ヒン-餅 5(1)」^{ヒ[°]ン}「常言」画餅不充饑 ^{ズウヒン}「瓜果」柿餅

「[°]」が付かない例は右肩点が記入漏れによる可能性も高い。

また、「表」「氷」2字について、下記のように、ハ行の音注は初出の例である
 が、上述したように、ハ[°]行の音注が圧倒的に多いことから、「ヒヤ[°]ウ」「ヒン」
 は右肩点の記入漏れによる可能性が高いと思われる。なお、「表」の「表妹」
 の「ヒヤ[°]ウ」も濁点の記入漏れによる可能性が高い。

「表」-「ヒヤ[°]ウ」:^{イヒヤ[°]ウジンウエ}「四字話」一表人物 ^{ヒヤ[°]ウムイ}「親族」表妹
^{ピヤ[°]ウヒヨン}「ヒ[°]ヤ[°]ウ」:^{ピヤ[°]ウデイ}「親族」表兄 ^{ピヤ[°]ウツユイ}表弟 ^{シユイピヤ[°]ウ}表姊 ^{シユイピヤ[°]ウ}「器用」書表
 「氷」-「ヒン」:^{ツフ[°]ヒンジン}「三字話」做氷人
^{ピンダン}「ヒ[°]ン」:^{ピンダン}「果瓜」冰糖

(iv)ハ行

ハ行音注となるのは下記の3字である。

幫母：ヘン-篇(1) ハ[°]ウ-飽(1) ハア[°]-霸(1)

「蕭飽霸」3字はそれぞれ1例のみで、ハ行音注は右肩点「°」が付されず、両唇破裂子音の無気音 [p-] と有気音 [p'-] と対応しないため、「°」の記入漏れの可能性が大きい。

上記の分析を通して、幫・滂両声母の字に対するバ行やハ行などの例外的な音注例は誤記や記入漏れなどによるものであることが明らかになった。よって、幫・滂両声母に対応する音注はともに無声の両唇破裂のハ°行音であるということが明らかになった。

(2)並母[b-]

並母[b-]の字は計 69 字種で、延べ 299 字である。表 4-1-3 から分かるように、バ行音注が計 241 例で、濁音が保持されていることを示している。また、バ行以外、(i)同じ字に対するバ行とハ°行、(ii)同じ字に対するバ行とハ行、(iii)ハ°行、(iv)ハ行、四種類の表記も存在し、バ行以外の例は 48 例である。

バ・パ行清・濁両音注を有する字には「小曲」の字が全て清音となっている。これは第六章で述べるように、「小曲」の基礎方言が清濁の区別をもたない官話方言であることによるものである。本研究では、清濁について論ずる時、「小曲」を対象から外すことにしている。なお、「小曲」の部分で非濁音の音注となっている並母は「ハ°ン-棒 4(1)」「ヒ°イ-被 4(1)」「フ°ウ-蒲 3(1)」「へ°-別 16(4)白 23(2)」「ヒ°ヤ○ウ-嫖 4(1)」の 6 字、計 10 例である。これらについての検討は第六章で行うこととする。

表 4-1-3 並母字の非濁音音注の状況

項目	濁音音注	非濁音音注
清濁両音注を有する例	非小曲用例 バア\ - 把 2(1) バアン-盤 12(5)バワン-盤 12(5)ボワン-盤 12(1) バイ-敗 5(1) バン-棒 4(2) バ○ウ-抱 5(4)暴 ①6(5) ビイ-避 4(3) ピン-平 24(22)病 10(9)憑 8(7) ピヤ○ウ-嫖 4(2) べ-白 23(20) ベン-辨 3(2)便 37(35) ボイ-備 6(3)	ハ°ア\ - 把 2(1) ハアン-盤 12(1) ハイ-敗 5(4) ハン-棒 4(1) ハ○ウ-抱 5(1)暴 6(1) ヒイ-避 4(1) ヒン-平 24(2)病 10(1)憑 8(1) ヒ°ヤ○ウ-嫖 4(1) へ-白 23(1) ヘン-辨 3(1)便 37(2) ホイ-備 6(3)
	小曲用例 バン-棒 4(2) ブウ-蒲 3(2) べ-別 16(12)白 23(20) ボイ-被 4(2)ビイ-被 4(1) ピヤ○ウ-嫖 4(2)	ハ°ン-棒 4(1)(<u>小曲</u>) フ°ウ-蒲 3(1)(<u>小曲</u>) へ°-別 16(4)(<u>小曲</u>)白 23(2)(<u>小曲</u>) ヒ°イ-被 4(1)(<u>小曲</u>) ヒ°ヤ○ウ-嫖 4(1)(<u>小曲</u>)
非濁音音注しない例		ハ°イ-排(3) ハ°-鉞(1) ハ°○ウ-鮑(1) ハン-伴(1) ヒ°-鵬(1) ヒ°イ-稗(1) ピン-牝(1) ヒン-評(1) へ°-帛(1) 苜(1) 箔(1) へ°ン-瓣(1) ホ°-泊(1) 勃(2) ホ°イ-佩(3) ホ°ウ-婆(2) ホ°ン-棚(2) ホン-蚌(2)

(i)バ行とハ°行

「小曲」の用例を除いて、バ行とパ行両音注を有する例は次の 2 字となる。

その内、「把-ハ°ア\」の原例は「器用」所属の「竹把 ^{チヨハ°ア\} コマサラヒ」と「瓜果」所属の「枇杷 ^{ビイバ°ア\} ビハ」とそれぞれ 1 例となる。『広韻』に「蒲巴切」(仮撰)「枇杷木名説文収麥器也」、「傍卦切」(蟹撰)「田具又音琶」、「白駕切」(仮撰)「田器」との 3 種類の並母の読みがある。また、蘇州・杭州音では[b-]、南京

音では[p'-]と発音する。このように、清・濁の音注は 1 例ずつで、「バアハ」が「バアハ」の誤記の可能性もあれば、逆の可能性もある。「バアハ」が「バアハ」の誤記とした場合、音注は南京音の特徴に符合することになる。

「嫖」は、「ビヤ〇ウ」音注の表記例が「不要嫖賭 ケイセイグルヒヤバクチヲスルナ」「休要嫖賭兩様 バクチ傾城グルヒ此二色ヲスルナ」で、「ヒ°ヤ〇ウ」音注の表記例が「十分嫖致 イカフウツクシヒ」「四愛你人物的嫖致(「小曲」)である。『広韻』の滂母效摂に平声の「撫招切」と去声の「匹妙切」との二つの読みがあり、意味はいずれも「身輕便也」で、「嫖致」に対応しているが、「嫖賭」と合わない。『集韻』に「毗召切 輕也」(去声)もあり、同音字が「驃」となり、並母であるが、「嫖賭」の「嫖」とは意味が一致しない。また、『康熙字典』に「又俗謂邪淫曰嫖,讀若瓢」とある。「ビヤ〇ウ」音注の使用例は明らかに「邪淫曰嫖」という意味と対応している。同音の「瓢」は「符霄切」で、並母に属し、蘇州・杭州音ともに[b-]である。このように、「瓢」は滂母と並母の読みをもつ多音字であり、「嫖致」の音注が滂母、「嫖賭」の音注が並母に正しく対応していることが明らかになった。

(ii) バ行とハ行

「盤」は「薄官切 籀文」で、ハ行音注が 1 例のみで、下記で示しているように、原例の「没盤纏」^{モ°ハアンチエン}は初出ではないので、同じ使用環境による省略の可能性が高いと考えられる。

「ハアン」:^{モ°ハアンチエン}「三字話」没盤纏 ロギンカナヒ
「バアン」:^{バアンウエン}「二字話」盤問 ^{バアンキ}ナジリトフ 盤詰 ^{ナジリトフ}ナジリトフ
「三字話」^{バアンフイダア、}盤費大 ツイエガ多ヒ ^{チエノバアン}「船具」車盤 マキイタ
「六字話」^{ヒヤアイバアンギイシヤアシヤア}下一盤棋 耍耍 コヲバン打テアソバン
「バワン」:^{メンバワン}「器用」面盤 ^{キヤバワン}チヤウヅタライ 脚盤 アシタライ
^{ソワンバワン}算盤 ^{ルイバワン}ソロバン ^{ギイバワン}榑盤 スリバチ 碁盤 ゴバン
「ボワン」:^{タ〇ウボワン}「器用」刀盤 ツバ

「バイ-敗 5(4)ハイ-敗 5(1)」は『広韻』に並母の「薄邁切 自破曰敗説文曰る毀也」と幫母の「補邁切 破他曰敗」とあり、原例が以下の通りである。

「ハイ」:^{タアヽライハイツイエ}「四字話①¹⁰⁹」大爲敗績 大ニ敗北ス
 「バイ」:^{ツユイツユイハイケン}「四字話②」取聚敗軍 敗軍ヲ取アツムル
 「常言」^{シバイキイキウ}十敗其九 十が九ハ敗レヲ取ル
^{ドリイツエハイ}獨利則敗 利ヲ獨ニテ得ルトキハ必ス敗ル
^{ハイキヤアツツウ}敗家之子 家ヲ敗ル子ハ

中古音の二種類の音注の中、「バイ」は並母の読みと一致しているが、「ハイ」はハ行音注であるため、[p-]と対応しない。南京音では[p-]と発音し、蘇州・杭州音では[b-]で並母の音が継承されている。このように、濁音の「バイ」音注は蘇州音と杭州音から説明できる。「ハイ」音注は初出でないので、濁点が省略された可能性が高い。

「暴-バ〇ウ 6(5)ハ〇ウ 6(1)」は、『広韻』に効撰の「薄報切」と通撰の「蒲木切」とあり、音注が効撰に対応し、入声の通撰とは明らかに一致しない。原例は、以下の通りである。

「ハ〇ウ」:^{キン シ ハ〇ウスウサンケン}「六字話」今日暴始相見
 「バ〇ウ」:^{バ〇ウフウ}「二字話」暴富^{バ〇ウフウジンキヤア}「四字話」暴富人家^{ヒヨンバ〇ウチエハワン}「常言」凶暴者亡
 「長短話」^{チュイヤ〇ウバ〇ウフワン}遇了暴風^{チンズウツエンジナアヽチヤンバ〇ウフワン}正是前日那场暴風

初出でない「六字話」の「ハ〇ウ」は濁点が省略されたものと考えられる。

「平-ビン 24(22)ヒン 24(2)」は、『広韻』に山撰の「房連切 書傳云平平辨治也」と梗撰の「符兵切 正也和也易也」とあり、梗撰の読みが音注と一致している。原例は以下の通りである。

「ヒン」:^{ヒンズエンソウハ〇ウ}「四字話」平生所好^{ヒンズエンキイワン}平生覬望
 「ビン」:^{タイビン}「二字話」太平^{ピンツツハ}平坐^{ピンフン}平分^{ピンスエン}平生^{ピンチヤン}平常^{ピンヤン}平安^{キユンビン}均平
 「三字話」^{ピンベデイ}平白地^{ピンフンライゾエン}「四字話」平分利錢^{ヅアンハアイピンジン}讒害平人^{スインヒヤアフ°ピン}心下不平
 「六字話」^{イロウジヤンピンアンリヤ〇ウ}一路上平安了^{ロウフ°ケンフ°ピンリヤ〇ウ}路不見不平了
 「常言」^{ピンチヤンフ°ツツクイスインズウ}平常不作虧心事^{ピンス°エンフ°ツツツエ〇ウミズウ}平生不作皺眉事
 「長短話」^{バ°ア°ピンスエンハ°エンズウ}把平生本事^{タア°ピンス°エンフ°ウロウスユウギヤ〇ウ}他平生補路修橋^{ダア°ライピンスエンスヤンカ}大慰平生想渴
^{コウライツインピンシイキヤイエヽ}可謂清平世界也^{キンテンヒヤアタイビン}今天下太平^{フ°チイヒンキユイビンアンマアヽ}不知興居平安麼

¹⁰⁹ 番号は出現の順番を示している。以下同様。

「器用」^{テンビン}天平

初出でない「四字話」の「ヒン」は濁点が省略されたものと考えられる。

「病-ビン 10(9)ヒン 10(1)」は「皮命切」で、原例が以下のようにになっている。

「ヒン」:「長短話」^{ユウヒンイハツエンサ}有病以掙扎
「ビン」:「二字話」^{ゼンビン ワンビン}染病 患病 「三字話」^{ビンヒョウリヤ〇ウ}病凶了 ^{ビンチンハ〇ウ}病症好
「四字話」^{ビンイユイクウウ、 ヤサ ビン ジン}病愈故吾 ^{ムイスウツエビンガ〇ウツエン}藥殺病人 「常言」^{ゴウエイヒヤン ユウビン}每思疾病熬煎
「長短話」^{ニイヅエンワンリヤ〇ウズウビン}我也一向有病 你會患了時病

「長短話」の「ヒン」は濁点が省略されたものと考えられる。

「憑-ビン 8(7)ピ^ン 8(1)」は、『広韻』に曾撰の「扶冰切 憑託」とあり、原例が以下の通りである。

「ヒン」:「四字話」^{ヒンタア^ハキユイツユイ}憑他去取
「ビン」:「二字話」^{ビンキユイ}憑据 ^{ビンタア^ハ}憑他 「三字話」^{ビンタア^ハツヲ、 ダンビンニイ}憑他做 但憑你
「六字話」^{ダンビンニイツエンモウヤン ケ^ンライエ、モ^ンビンキユイ}但憑你怎麼樣 肯來也沒憑据 「器用」^{ビンキイ}憑几

初出でない「ヒン」は濁点が省略されたものと考えられる。

「白-ベ 23(20)へ 23(1)」は梗撰の「傍陌切 西方色又告也語也」で、原例か下記の通りである。

「へ」:「四字話」^{コンケ〇ウヘハア^ハ}空口白話
「べ」:「二字話」^{ミン ベ スエ^ハ}明白 雪白 「三字話」^{ビンベデイ}平白地 ^{ベ ベ ソン}白白送 ^{ツヤンベタア、 フ^ン ベンベ}搶白他 不辨白
「四字話」^{ヒ^ン キンミンベ ヘ^ンヘ^フライ}畢竟明白 辨白不來 「常言」^{ベヨデ〇ウイユイユイニイ}白玉投於淤泥
「長短話」^{インカイサ^ン〇ウサ^ン〇ウミンベ}因該早早明白 「器用」^{ベイン}白銀 ^{ベドン}白銅 「禽鳥」^{ベエン}白鷗
「龍魚」^{ベイエイ}白魚 「果瓜」^{ベダン}白糖
「疋頭」^{ベキエン}白絹 ^{ベロウフウ}白羅布 ^{ヨンチュンベフウ}永春白布 ^{サア、ベスウ}紗白絲

初出でない「へ」は濁点が省略されたものと考えられる。

「便-ベン 37(35)へ^ン 37(2)」は、『広韻』に山撰の「房連切 辯也僻也安也」(平声)と「婢面切 利也」(去声)とあり、原例が下記のようにになっている。

「へ^ン」:「四字話」^{ヅイヘンクワンゾヲ^ハ}隨便寬坐 「長短話」^{ヘンツインチュイクハン}便請處官

「ベン」:^{ベンタン フ°ベン ハンベン ベンイハ ツエイベンイハ}「二字話」便當 不便 方便 便宜 「三字話」取便宜
 「四字話」^{リヤンテギイベン テンスウギイベン リヤンヒキアベンイハ ツインヨンベンハン}兩得其便 天賜其便 兩下便宜 請用便飯
^{ツインツインベンジ ベンツウトハンテ フ°タンウランベン}請進便室 便知端的 不當穩便
 「五字話」^{ベンヲイデンツヲヒイ ケンチエハベンイハリヤ○ウ}便回嗔作喜 牽扯便宜了
 「常言」^{イユイジンハンベン ツユウズウツウキヤアハンベン ライジンヒンゼンハンベンチエハ}與人方便 就是自家方便 爲人行善方便者
 「長短話」^{ベンヅアイコソデイリイテヤ○ウチュライ ベンズウルハニユイホ°イ}便在空地裡ネ里跳出來 便是兒女輩
^{ベンズウカイスエンヤフ°ウテ ベンシフンヨンスイン ベンネンウエンタクハンフウ}便是開生藥舖的 便十分用心 便能問答官府
^{ベンハ○ウリヤ○ウ ツイベンスヤ○ウケン ゴウベンセチュライ ツエジュンベンタ○ウハアンセエハ}便好了 隨便消遣 我便說出來 則順便到寒舍
^{シヤ○ウツヅエヒエンハアハベンリヤ○ウ イヅエヒイツユウベンリヤ○ウ フ°コウメンキヤンベンリヤ○ウ}少叙閑話便了 一席喜酒便了 不可勉強便了
^{チクハンキキヤ○ウベンリヤ○ウ チヤ○ウクハンスエハチユイズウベンリヤ○ウ キリヤンホ°イシヤアシヤアベンリヤ○ウ}只管計較便了 照管些厨事便了 喫兩盃要要便了
^{キエンタ○ウナアハスエハ°ジンベンリヤ○ウ シヤ○ウテイソウジンソソライベンリヤ○ウ}勸倒那些客人便了 少停使人送來便了
 「器用」^{ベンフヲ}便服

「ヘン」音注の「隨便寛坐」の訳は「ゴカツテニユルリトスハレ」で、「ベン」音注の「隨便消遣」の訳は「トリアエズキバラシ仕ルノミ」であり、同じ語の「隨便」があり、意味も音もでは去声の「婢面切」と一致している。初出でない「ヘン」は濁点が省略されたものと考えられる。

「備-ホイ 6(3)ボイ 6(3)」は、「平祕切 成也」となり、例が下記の通りであり、意味に違いがなく、初出でないため、これも濁点が省略された可能性がある。

「ホイ」:^{ホイスエハセツウ イユイスエンチエンホイ ウエンウハツヲホイ}「四字話」備細説知 預先準備 文武足備
 「ボイ」:^{チユンボイ ワンボイ ボイスエハセツウゴウ}「二字話」準備 完備 「五字話」備細説知我

このように、「盤敗暴平病憑白便備」9字は、いずれの場合も初出ではないことから、濁点は省略されたと統一的に説明することが可能である。

「棒-バン 4(2)ハン 4(1)」は「歩項切」で、原例が以下のようにになっている。

「ハン」:^{ウヲツウツヤンスウハン}「長短話」或刺鎗使棒 「バン」:^{バンツウ トハンバン}「器用」棒子 短棒

「抱-バ○ウ 5(4)ハ○ウ 5(1)」は、「薄浩切」で、原例が下記の通りである。

「ハ○ウ」:^{ハ○ウチユイタアハ}「三字話」抱住他
 「バ○ウ」:^{バ○ウデ○ウチユイツアンテトウビイリヤ○ウ ツアイキヤアバ○ウスエルハツヲハリイ}「長短話」抱頭鼠竄的躲避了 在家抱膝而坐哩

「器用」^{パ○ウチユイ}抱柱 「船具」^{パ○ウキヨ}抱掬

「避-ビイ 4(3)ヒイ 4(1)」は、「毗義切」で、原例が下記のようにになっている。

「ヒイ」:^{ライヒイニイ}「三字話」違避你
「ビイ」:^{トウビイリヤ○ウ}「三字話」躲避了 ^{ロウフランヒエンチユイナンライビイ}「常言」路逢險處難廻避
^{パ○ウデ○ウチユイツアンテトウビイリヤ○ウ}「長短話」抱頭鼠竄的躲避了

「辨-ベン 3(2)へん 3(1)」は『広韻』に山攝の「符蹇切 別也説文判也」(平声)と「蒲莧切 具也周禮曰以辨民器」(去声)とあり、原例が以下の通りである。

「へん」:^{ゼヘン}「二字話」舌辨 ベンゼツカヨイ
「ベン」:^{フ°ベンベ}「三字話」不辨白 得ベンゼヌ
^{ヘンヘ°フ°ライ}「四字話」辨白不來 ベンシキラヌ

『漢語大字典』に平声の「符蹇切」の派生意「通“辯”」とあり、つまり、「争論、弁論」などの意味であり、表記例の意味と一致する。しかし、「辨」は平声でなく、現代の南京音が去声、蘇州音が陰去声、杭州音が陽去調となり、各方言で継承されているのは去声の読みである。去声の読みの字に「具也」とあり、「書く、述べる」の意味があるため、「辯」の意味に近い。

「棒抱避辨」4字に対する音注の共通点も二つの音注には意味の違いが認められず、清音音注の例が少ないということである。但し、清音音注の方が初出となっている。並母の字の濁音音注の方が多いが、上に見てきた省略の条件にないことから、これらの清音音注は濁点の省略ではなく濁点の記入漏れの可能性を考えなければならない。

(iii)ハ°行

2例あり、「ヒ°ン-牝(1)」は「毗忍切」、例が「畜獸」の「牝牛」であり、蘇州音は[p‘-]と発音し、杭州音は確認できない。「ホ°-泊(1)」は「傍各切」、例が「四字話」の「東漂西泊」で、蘇州音、杭州音ともに[p‘-]となっている。2例に対するハ°行音注は蘇州音と南京音とともに対応する。

「ヒ°イ-稗(1)」は、原例が「稗子」^{ヒ°イツウ}である。「傍卦切」で、並母蟹摂の所属字で、蘇州音では[pE]と[ba]との読みがあるが、韻母は音注と一致しないため、「ヒ°イ」は同書の「ヒ°イ-鶻」のように、声符「卑」の類推によるものと考えられる。

上記以外の「排鉞鮑鷓帛苜瓣勃佩婆棚」11字の中、「鮑、鷓、瓣」は『広韻』に全濁声母の読みしかないが、『集韻』などでは全濁音声母の他、全清または次清の読みもある。「へ°ン-瓣(1)」は、原例が「菜蔬」の「瓣兒 瓜ノヘタ」^{へ°ンルウ}で、『広韻』に並母の「蒲莧切 瓜瓠瓣也」、『集韻』は滂母の「匹見切 瓠中實」とある。右肩点の部分で触れたように、「ペン」は韻母面から説明できず、字体の近い「辯」の類推による可能性が高い。「ハ°○ウ-鮑(1)」は、原例が「虫介」の「鮑魚 アハビ」^{ハ°○ウイユイ}であり、『広韻』には「薄巧切 鮑魚」と並母だが、『集韻』には「披交切 魚名」との滂母の読みもある。「ヒ°-鷓(1)」は、原例が「禽鳥」の「鷓鷃 カイツブリ」^{ヒ°。テイ}であり、『広韻』の「扶歴切 鷓鷃鳥名」以外、『集韻』に「必益切 鷓鷃鳥名鳩也」との幫母の読みもある。しかし、「鮑鷓」2字とも蘇州・杭州音では[b-]の読みしかない。このように、「鮑鷓」2字の音注は蘇州・杭州音から説明できなく、清音読みを写した可能性が排除できない。

それ以外の字の具体的な例は以下のようにになっている。

「ハ°イ-排(3)」歩皆切 推排釋名曰彭排軍器也彭旁也在旁排敵御攻也

「六字話」アンハ°イヂキヤ○ウニズウ安排着要議事 事ヲ議セント欲ス

アンハ°イキエンタ○ウエンジン安排圈套陷人 オトシアナヲコシラエテ人ヲオトシ入ル

「常言」トウズウミンアンハ°イ都是命安排 都テ天命ノコシラエル所ナリ

「ハ°-鉞(1)」蒲撥切 鈴鉞

「器用」ナ○ウハ°鑿鉞 ニヤウハチ

「へ°-帛(1)」傍陌切 幣帛

「常言」ツウクウイ、コへ°ヲイクイユ、自古以穀帛爲貴也 古へヨリ米穀錦帛ヲ貴シトスル也

「ホ°-勃(2)」蒲沒切 卒也

「四字話」ホ°ゼンダア、ノウ マア、ホ°勃然大怒 大ニイカル 「花艸」馬勃 ヲニフスベ

「ホ°イ-佩(3)」蒲昧切 玉之帶也説文曰大帶佩也

「二字話」カンホ°イ カンホ°イウ、イヤ感佩 アリカタヒ 「四字話」感佩無涯 イカフアリガタイ

「器用」ホ°イヒヤン佩香 ニオヒノタマ

「ホ°ウ-婆(2)」薄波切 老母稱也

「親族」ワイボウ ラ○ウボウ外婆 母方ノバ、老婆 ニヤウボウ

「ホ°ン-棚(2)」薄庚切 棧也閣也/薄萌切 棧也/歩崩切 棚門

「船具」櫓棚^{ロウホ^ン} ワキヤマ^{ハイ^ンテイ^ン} 拜棚頂 トモノニカイ
 「へ°-苜(1)」 「菜蔬」海苜^{ハイ^ヘ} メノハ
 「へ°-苜(1)」 「菜蔬」苜菜^{ヘ^サイ} トウナ

「へ°-苜(1)」は、原例が「菜蔬」の「海苜^{ハイ^ヘ} メノハ」であり、『広韻』未収、『集韻』に並母の「薄陌切 姓也」と滂母の「披巴切 説文華也」があるが、滂母の方は韻尾が音注と一致できず、意味上では二種類の読みとも対応しない。「へ°-苜(1)」は、原例が「菜蔬」の「苜菜^{ヘ^サイ} トウナ」であり、『広韻』『集韻』に未収、『漢語大字典』に「音同箔」とあり、「箔」は『広韻』では並母の「傍各切 簾箔」であり、意味も一致しない。それ以外の例は南京音に対応するが、呉方言からは適切な説明を得ることが困難である。

(iv)ハ行

「ホン-蚌(2)」は、原例が「蛤蚌^{ホ^ン} ハマグリ」「蚌(原字: 蚌^コ)壳^{ホ^ン} カイノカラ」である。「ホン」は『広韻』にある並母江撰の「歩項切」と一致せず、蘇州音と杭州音の[b-]とも一致しない。『集韻』に「敷容切」と敷母通撰の読みもあり、「ホン」と一致しているが、意味「説文飛蟲螫人者古作蠶蚌通作蜂」で、「蛤蚌^{ホ^ン}」の意味と異なる。「ホン」は声符「丰」¹¹⁰の類推によるものと考えられる。

「ハン-伴(1)」は、「蒲旱切」(上声)・「薄半切」(去声)であり、原例が「没個^{モ^{コウ}} 同伴^{ドン^{ハン}} ツレカナヒ」である。「ヒン-評(1)」は、「符兵切」(平声)・「皮命切」(去声)であり、原例が「批評不來^{ヒ^イヒンフ^{ライ}} ヒハンカナラヌ」である。「伴評」2字とも並母の読みしかなく、ハ行音注は清音[p-][p'-]と濁音[b]とのいずれにも一致しないため、濁点の記入漏れの可能性が大きいと考えられる。

上述したように、並母の字は、全体として濁音表記となっており、呉方言の特徴を反映している。「盤敗暴平病憑白便備」は濁点が省略されたと考えられるのに対し、「棒抱避辨伴評」4字が濁点の記入漏れと考えられる。「杷^ハ-ハ°ア^ハ」は誤記による可能性が大きく、「ホン-蚌」「ヒ°イ-稗」「ペン-瓣」が類推によるもので、「鮑鵬排鉞帛苜勃佩婆棚」は蘇州・杭州音から説明できず、濁点の記入漏れ或は南京音の特徴を反映するものと考えられる。

¹¹⁰ 「丰」は『広韻』に見母蟹撰の「古拜切」だが、『集韻』に「伏風切音馮」との敷母通撰の読みもある。

(3) 明母 [m-]

明母 [m-] の所属字は計 101 字種、延べ 571 字である。音注はほぼ全てがマ行で、南京音、蘇州音、杭州音のいずれとも対応する。「ヒ[°]-蔑(1)蟻(1)」「ワン-鮓(1)」「シ-蟒(1)」「バン-尪(1)」「ハ〇ウ-冇(1)」の 5 例が例外である。

「ヒ[°]-蔑(1)蟻(1)」について、原例は「蔑兒」「蟻蟻」で、2 字とも鼻音の山攝四等の字である。『広韻』での反切はどちらも「莫結切」で、蘇州音が [miəʔ]、杭州音が [miʔ]、南京音が [mieʔ] で、いずれとも声母が一致しない。よって、この二つの字に対する「ヒ[°]」の音注は、別の字の発音を注したものと考えられる。

「ワン-鮓(1)」は原例が「鮓魚 クチ」で、明母の「亡辨切」である。音注と一致できず、「晩-ワン」などの声符の類推によるものと考えられる。

「シ-蟒(1)」は原例が「蟒(原字: 𧈧)蛇(シゼエハ) ウワバミ」で、『広韻』に「模朗切」、同音字の「マン-莽」と同じ音注になるのが期待されているが、「シ」音注は発音と対応しないため、「マン」の書き間違いの可能性が大きい。

「バン-尪(1)」は、原例が「尪魚 チヌタイ」である。明母の「莫江切」で、音注と一致しない。また、『漢語大字典』に「通“龐”。高大。」「姓。也作“龐”。」とあり、「龐」字は並母の「薄江切」で、音注と一致している。よって、「バン」は「尪」の並母の読みを注したということになる。

「ハ〇ウ-冇(1)」は、原例が「冇糖」である。『広韻』などに収められていない。『漢語大字典』に「方言。没有。」とあり、発音が mǎo[mau] となっている。王(2001:509)は、中古音の音韻位置によって「冇」を流攝として扱っている。王氏の指摘によれば、「冇」は中原官話では三種類の読みがあり、洛陽の [miəu]、開封の [mou]、鄭州の [mau] である。[miəu] は「没」「冇」の発音が合併した結果で、[miəu] が介音 [i] を失い、主母音 [ə] が [u] の影響を受け、[o] に同化して、[mou] となり、また、第二段階として、主母音 [o] が変化して、[mau] となり、最後の第三段階で、效攝に合流した。なお、本研究では音注の特徴によって、「冇」を效攝の字として集計する。南京、蘇州、杭州音での読みが確認できないため、「ハ〇ウ」音注は何の音を注したかは定かではない。

このように、重唇音幫組の字について、幫 [p-]・滂 [p'-] 両声母、並母 [b-]、

明母 [m-] に対するハ°行、バ行、マ行音注は幫組の清音・濁音・鼻音という声母の三種類特徴を反映している。音注は南京音と蘇州・杭州音との具体的な対応関係は表 1-1-4 の通りである。

表 1-1-4 幫組字に対する音注の比較

声母	音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州・杭州音との対応	
幫 [p]	ハ°行	清音	清音 ([p][p′])	○	清音 ([p][p′])	○
滂 [p′]						
並 [b]	バ行	濁音	清音 ([p][p′])	×	濁音 ([b])	○
	ハ°行(少)	清音		○		×
明 [m]	マ行	[m]	[m]	○	[m]	○

幫 [p-]・滂 [p′-] 両声母と対応する音注はどちらもハ°行 [p-] で、日本語には、無気・有気に違いがないため、無気・有気の区別がされていない。

並母 [b-] に対する音注は、一部のハ°行を除き、バ行となっている。幫 [p-]・滂 [p′-] 両声母のハ°行と異なり、清濁の対立を明らかに反映している。清濁の対立を維持しているのは呉方言の特徴であることから、音注は明らかに蘇州・杭州音と一致している。但し、「鮑鵬瓣排鉞帛勃佩婆棚」など南京音からしか適切な説明が得られない例も存在する。

明母 [m-] の字は、音注は全てがマ行で、南京音、蘇州・杭州音のいずれも [m-] で、一致している。

上述したように、幫組の音注は全体的に呉方言の特徴を反映している。

		上	銃	en	開	へん-扁①(1)匾(1)菡(1)へん-菡②(1)	3	3														
		去	霰	en	開				へん-片(1)	1	1											
		入	屑	et	開				ひイ-撇(2)	1	2							ひ-蔑(1)蟻(1)	2	2		
效 摂	一 等	平	豪	au	開													マ○ウ-毛①(4)	1	4		
		上	皓	au	開	ハ°○ウ-保(4)寶(5)褱(1)	3	10											ハ○ウ-有(1)	1	1	
		去	號	au	開	ハ°○ウ-報(12)	1	12											マ○ウ-帽(2)毛②(4)	1	2	
	二 等	平	肴	au	開	ハ°○ウ-包 13(12)苞(1)ハ°ウ-包 13(1)パ○ウ-胞①(1)	3	15	ハ°○ウ-泡①(1)抛①(1)パ○ウ-胞②(1)	2	2								マ○ウ-猫①(3)貓(1)	2	4	
		上	巧	au	開	ハ○ウ-飽(1)	1	1											ハ○ウ-有(1)	1	1	
		去	效	au	開	ハ°○ウ-爆①(1)豹(1)	2	2	ハ°○ウ-砲①(3)抛②(1)	1	3								マ○ウ-貌(3)	1	3	
	三 等	平	宵	ieu	開				ヒヤ○ウ-票 7(1)ヒ°ヤ○ウ-漂①(3)標①(2)票 7(6)標① 4(2)ヒヤ○ウ-嫖 4(2)	4	14								マ○ウ-猫②(3)ミヤ○ウ-苗(1)	1	1	
		上	小	ieu	開	ヒヤ○ウ-表 6(2)ヒ°ヤ○ウ-表 6(4)	1	6														
		去	笑	ieu	開				ヒ°ヤ○ウ-漂②(3)標②(2)嫖② 4(2)ヒヤ○ウ-嫖 4(2)										ミヤ○ウ-妙(4)	1	4	
果 摂	一 等	平	戈	ua	合	ホ°ウ-波(5)波①(1)	2	6	ホ°ウ-頗①(1)	1	1								モウ-磨①(2)	1	2	
		上	果	ua	合				ホ°ウ-頗②(1)										マア-磨 31(12)モウ-磨 31(16)モウ-磨 31(1)モ-磨 31(1)モヲ-磨 31(1)	1	31	
		去	過	ua	合				ホ°ウ-頗③(1)破 12(10)ホウ-破 12(2)	1	12								モウ-磨②(2)			
仮 摂	二 等	平	麻	a	開	ハ°ア-、巴(2)芭(1)芭①(2)杷(1)バア-、杷①(1)	5	6	ハ°ア-、葩(1)杷(1)バア-、杷②(1)	2	2								マア-、麻 6(1)マア-、麻 6(5)蟻(2)	2	8	
		上	馬	a	開	ハ°ア-、把(9)	1	9											マア-、馬馬 1(1)蟻(1)罵①(6)馬 38(37)マア-馬 38(1)	4	46	
		去	禡	a	開	ハ°ア-、霸(1)ハ°ア-、把(1)	2	2	ハ°ア-、怕①(11)	1	11								マア-、把② 2(1)ハ°ア-、把 2(1)			
宕 摂	一 等	平	唐	aŋ	開	ハ°ン-幫(6)	1	6											バン-傍(1)傍①(1)	2	2	
		上	蕩	aŋ	開	ハ°ン-榜①(1)	1	1														
		去	宕	aŋ	開	ハ°ン-謗(5)	1	5											バン-傍②(1)			
		入	鐺	ak	開	ホ°-搏(1)	1	1											ホ°-泊(1)ボ-薄(2)へ°-箔(1)	3	4	
梗 摂	二 等	平	庚	aŋ	開																	
		上	梗	aŋ	開																	
		上	耿	eŋ	開																	
		去	映 敬	aŋ	開	ハ°ン-榜②(1)																
		入	陌	ak	開	へ°-栢 4(2)伯(1)百 12(11)べ-百 12(1)へ°エ-栢 4(2)	3	17	へ°-拍(1)魄①(1)ホ°-拍(2)	3	4									べ-白 23(20)へ°-帛(1)苜(1)白 23(2)へ-白 23(1)	3	25
		入	麥	ek	開	へ°エ-穰(1)	1	1												モ-麥(麥 3)(6)モ°-脉(2)	2	8
	三 等	平	清	iaŋ	開															ミン-名(18)	1	18
		平	庚	iaŋ	開	ヒ°ン-兵(8)	1	8												ピン-①平 24(22)ヒン-平 24(2)評①(1)	2	25
		上	梗	iaŋ	開	ヒ°ン-秉(1)	1	1														
		上	靜	iaŋ	開	ヒ°ン-併①(2)餅 5(4)ヒン-餅 5(1)	2	7														
		去	勁	iaŋ	開	ヒ°ン-併②(2)																
		去	映	iaŋ	開	ヒ°ン-柄(2)	1	2												ピン-病 10(9)ヒン-病 10(1)評②(1)	1	10
		入	昔	iak	開	ヒ°-碧①(1)	1	1	ヒ°-僻①(1)	1	1											
入	陌	iak	開	ヒ°-碧②(1)																		
四 等	平	青	eŋ	開															ピン-瓶(2)屏①(2)萍(2)	3	6	
	上	迥	eŋ	開															ピン-並(2)	1	2	
	入	錫	eŋ	開	ヒ°-壁(7)	1	7	ヒ°-劈(2)ヒ°-僻②(1)	1	2									ヒ°-鷗(1)	1	1	
流 摂	一 等	上	厚	əu	開																	
	三 等	平	尤	iəu	開														メ○ウ-牡(3)某(1)モウ-母(17)	3	21	
深 摂	三 等	上	寢	iẽm	開				ヒ°ン-品(2)	1	2								メ○ウ-謀(9)	1	9	
曾 摂	一 等	平	登	əŋ	開																	
		去	嶝	əŋ	開																	
		入	德	ək	開															モン-憎②(1)		
	三 等	平	蒸	iẽŋ	開	ヒン-氷 2(1)ヒ°ン-氷 2(1)	1	2											ピン-憑① 8(7)ヒ°ン-憑 8(1)	1	8	
去	證	iẽŋ	開															ピン-憑② 8(7)ヒ°ン-憑 8(1)				
計							82	365		38	96		69	299				101	571			

注：・「ハ°ウ-包 13(1)」は中間点「○」の記入漏れ。

・「ハ°ア-、杷(1)」:『広韻』未収、『大漢和辞典』に「篇海」必駕切」とあり、幫母に所属。音注は南京音から説明できるが、韻母上では両方言とも対応できず、声符「巴」の類推によるものと考えられる。

・「ハ°ア-、杷」:『漢語大字典』にあり、発音は「巴」などと同じ[pa]で、「巴」は「伯加切」で、声母は無声無氣の両唇破裂音と推測される。

・「ハ°ン-搬(3)」:『広韻』未収、『字彙』に「今俗音作般」とある。「般」は「薄官切」である。

・「騙」:『広韻』などに未収。原例は「喫騙(キヘン) ダマサル」「喫他騙(キタアヘン) カレニダマサル」「須要防騙子(スエハヤ○ウバンヘンツウ) ゴマノハイノ用心ヲセヨ」であり、訳が「ダマサル」という意味であるため、「騙」と見なす。

・「杷」は『広韻』未収。原例は「杷子(ハ°アハツウ) トロメン」で、日本語の意味により、「絹、木綿」意味の和製漢字である「杷」を誤記したもので、音注「ハ°ア、」は「巴」を類推したものと考えられる。

・「攀」は原例が「舵攀(ドウハン) カチノリエキ」で、音注がその声符である「攀」(次清[p'-])と同じ音と推測される。

・「モン-們 11(10)」:1字未注。

・「蟻-ミイ」は「蟻」で、「綿婢切」である。

表 4-1-2 軽唇音非組所属字一覧

撰	等位	声調	韻目		開合	非 [f-]		字種数	延べ数	敷 [f'-]		字種数	延べ数	奉 [v-]		字種数	延べ数	微 [w-]		字種数	延べ数		
			清	濁		次清	濁			次濁													
通撰	一等	平	東	ōnŋ	東	開				ホン-豊①(2)		1	2										
	三等	平	鍾	ioŋ	鍾	開合	フヲン-封①(1)楓(1)風①(26)	3	28	ホン-豊②(2)蜂①(2)		1	2	フヲン-逢 5(3)ホン-逢 5(1)ケン-逢 5(1)	1	5							
		上	腫	ioŋ	腫	開合								フヲン-奉 11(7)ホン-奉 11(3)ウヲン-奉 11(1)	1	11							
		去	用	ioŋ	用	開合	フヲン-風②(26)封②(1)							ウヲン-鳳 4(2)ホン-鳳 4(2)	1	4							
		入	屋	io˘uk	屋	開	フヲ-福 11(5)覆(1)ホ-福 11(6)蝠(1)腹(1)	4	14	[へ○ウ(1)]ホ(1)-覆①(2)		1	1	ウヲ-伏① 3(2)服 7(6)フヲ-伏 3(1)服 7(1)ホ-復 3(2)	3	12							
入	獨	io˘k	獨	開合									ウヲ-袱①(1)	1	1								
止撰	三等	平	微	yo˘i	微	合	フイ-非(17)誹①(2)飛(8)	3	27	フイ-妃①(1)		1	1					ウイ-微(1)薇①(3)	2	4			
		上	尾	yo˘i	尾	合	フイ-櫃(2)	1	2									ウイ-尾(6)	1	6			
		去	未	yo˘i	未	合	フイ-誹②(2)			フイ-費(10)		1	10	ホ-拂(2)	1	2		ウイ-味(3)未(36)	2	39			
遇撰	三等	平	虞	yu	虞	開合	フウ-夫(27)	1	27	フウ-孛(1)		1	1	フウ-芙(1)鬼(1)扶(1)ウゝ-扶(1)	4	4		ウゝ-無①(72)	1	72			
		上	麌	yu	麌	開合	フウ-府(10)斧(1)	2	11	ワゝ-撫(1)		1	1	フウ-腐(1)父 14(3)ウゝ-父 14(10)ウウ-父 14(1)	2	15		ウゝ-侮(1)武(10)舞(4)鷄(1)	4	16			
		去	御	io	御	開	フウ-付(3)	1	3	フウ-赴(2)		1	2	フウ-駙(1)	1	1		ウゝ-務(2)	1	2			
蟹撰	三等	去	廢	yei	廢	合	フイ-廢(廢)(3)	1	3														
臻撰	三等	平	文	yo˘n	文	合	フン-紛①(1)分① 29(25)ウエン-分 29(4)	2	26	フン-紛②(1)								ウエン-蚊(1)文(14)聞①(12)	3	27			
		上	吻	yo˘n	吻	合	フン-粉①(3)	1	3					ウエン-鱗(1)	1	1							
		去	問	yo˘n	問	合	フン-糞(2)	1	2					フン-分② 29(25)ウエン-分 29(4)	1	4		ウエン-問(23)聞②(12)	1	23			
		入	物	yo˘t	物	合	ホ-弗(1)フ 400(394)フ 400(5)ダアゝ、400(1)-不	2	401	フヲ-拂(1)		1	1	ウエ-佛(4)	1	4		ウエ-物(10)ホ-勿(6)	2	16			
山撰	三等	平	元	yan	元	合				ハン-番①(1)幡(1)翻(1)反②(4)		3	3	ワン-繁(1)煩(8)繫(1)	3	10							
		上	阮	yan	阮	合	ハン-反①(4)	1	4					ハン-飯① 12(7)ワン-飯 12(5)	1	12		ワン-晚(10)	1	10			
		去	願	yan	願	合	ハン-販(1)	1	1					ハン-飯② 12(7)ワン-飯 12(5)				ワン-万①(6)萬(13)	2	19			
		入	月	yAt	月	合	ハ-發(14)髮(2)	2	16									ワ-襪 3(2)ワツ-襪 3(1)	1	3			
宕撰	三等	平	陽	iaŋ	陽	開	ハン-方(20)坊(4)	2	24	ハン-妨①(3)		1	3	ハン-防① 9(3)バン-防 9(6)ワン-房(7)	2	16		ワン-亡(2)望①(11)	2	13			
		上	養	iaŋ	養	開	ハン-放①(9)	1	9	ハン-紡(3)		1	3					ワン-網(2)	1	2			
		去	漾	iaŋ	漾	開	ハン-放②(9)			ハン-妨②(3)訪(3)		1	3	ハン-防② 9(3)バン-防 9(6)				ワン-望②(11)妄(1)	1	1			
		去	漾	yaŋ	漾	合												ワン-忘(4)	1	4			
		入	藥	iak	藥	開									ウヲ-縛①(1)	1	1						
流撰	三等	平	尤	io˘u	尤	開								ウエ○ウ-浮(1)袍①(1)	2	2							
		上	有	io˘u	有	開	へ○ウ-否①(4)	1	4					ウゝ-婦(8)負(6)	2	14							
		去	宥	io˘u	宥	開	フウ-富(19)	1	19	フウ-副①(2)復 3(1)へ○ウ-覆② 2(1)		2	4										
咸撰	三等	平	凡	iam	凡	合								ハン-帆①(5)ワン-凡(6)	2	11							
		上	范	iam	范	合								ワン-犯(2)	1	2							
		去	梵	iam	梵	合								ハン-帆②(5)									
		入	乏	iAp	乏	合	ハ-法(5)	1	5					ワ-乏(1)	1	1							
計							32	629			17	37		33	133			26	257				

注：・「ダアゝ、400(1)-不」は、同頁に「波浪不作 波浪大作」の例があり、「不-ダアゝ」は、「不」に対する表記は明らかに後の語彙の影響を受け、「大」による誤記。「不-フ」は右肩点の記入漏れである。

- ・「フヲ-覆(1)」は『広韻』に「方六切」とあり、非母の所属字である。
- ・「分」字は、二種類の音注をもち、『広韻』に非母平声の「府文切」と奉母去声の「扶間切」とある。使用例は延べ 29 例、中に「フン」音注が 25 例あり、「ウエン」音注が 4 例で、漢字に去声点 が記されている。従って、「分-ウエン」は奉母の読みを示し、非母の読みと一致していない。ここで、「フン」音注のみ検討する。「分-フン」は、「分袂」「分手」「分説」などのように、『広韻』の「府文切 賦也施也與也説文別也」との「わかつ、わかる」という意味であり、非母平声の「府文切」と一致している。
- ・「ハン-方(20)坊(4)」2 字は、同音である。奉母の「符方切」と非母の「府良切」とあり、奉母読みの場合、『広韻』に「縣名」となり、意味上には、同書の使用例と一致しないため、音注の「ハン」は非母の読みと対応している。
- ・「へ○ウ(1)/ホ(1)-覆(2)」について、原例が「果瓜」の「覆盆 イチゴ」と「花草」の「旋覆 ヲグルマ」である。「覆」は『広韻』には、去声読みの敷母「敷救切」(蓋也)、奉母「扶富切」(伏兵)と入声読みの敷母「芳福切」(反覆又敗也倒也審也)、滂母「匹北切」とある。「ホ」は「芳福切」、「へ○ウ」は「敷救切」と対応している。
- ・「フイ-費(10)」は幫母「兵媚切」、敷母「芳未切」(『広韻』耗也惠也)と奉母「扶拂切」(『広韻』姓也)との読みがあり、音注が明らかに幫母と一致できず、使用例の「費心 心をツカフ」「費力 チカラヲツイヤス」などの意味上で、敷母と対応している。
- ・「フウ-復 3(1)ホ-復 3(2)」は、原例が「而無復雄飛 再ヒ世ニ出ルコトナク」「回復 ヘンジ」「未曾回復 マダヘンジヲセヌ」で、1 例が「フウ」で、2 例が「ホ」である。流撰去声の「扶富切 又也返也往來也安也白也告也」と通撰入声の「房六切 返也重也」との二種類あり、「フウ」音注が流撰去声、「ホ」は通撰入声と対応する。
- ・「ケン逢 5(1)」は、原例「有縁千里易相逢 無縁對面難相見」であり、「逢」の「ケン」音注は後に続く文[見-ケン]による誤記である。
- ・「ウゝ-扶(1)」は、原例が「扶籬摸壁」である。「扶」は奉母の「防無切」と非母の「甫無切」とあり、音注が 奉母の読みと一致する。
- ・「ワン-繁(1)」は、奉母の「附衰切」と並母の「薄官/薄波切」とあり、音注は奉母の読みと一致する。
- ・「ユウ-汝(1)」について、平声点が付されている。既に第三章第四節で述べたように、「ユウ」音注は「ㄩ 女」の「夷周切 説文行水也徐錯白支入水所杖也又姓」と一致している。

1.1.2 軽唇音非組

軽唇音非組の字と音注の対応関係は表 4-1-2 に示している通りである。

(1) 非母 [f-] と敷母 [f'-]

非母 [f-] の所属字は計 32 字種、延べ 629 字で、敷母 [f'-] の所属字は計 17 字種、延べ 37 字である。表から分かるように、非・敷両声母の字に対する音注はほぼ全てハ行となっている。[f-] と発音する南京音、蘇州音、杭州音のいずれとも対応する。例外は僅かに、非母の「不-プ 400(399)フ 400(5)ダア、400(1)」「ハ^ン-販(1)」と敷母の「ワ^ハ-撫(1)」の 3 例のみである。

「不」は、既に右肩点の部分で検討したように、「プ」の音注は臻摂入声の「分勿切」と対応するものであり、「フ」は右肩点の記入漏れで、「ダア、」は誤記である。また、南京音は [puʔ]、蘇州音は [pəʔ]、杭州音は [pɐʔ] となり、「プ」は南京音から説明できる。

「ハ^ン-販(1)」は、非母の「方願切」で、原例が「販^{ハ^ンホウライズ^ンエ^ン}貨爲生」である。蘇州音も杭州音 [f-] であるが、南部吳方言、特に衢州地区(開化、常山、玉山、遂昌、云和など)の多くの地点では非母の「反」の白話音が [p-] で、重唇音と区別がないという現象が知られ、つまり、[p-] と [f-] 文白二種類の発音を有する。このことから、「販」字の音注「ハ^ン」はそのような重唇音の読みをもつ声符「反」による類推の結果である可能性は否定できない。但し、1 例しかないので、誤記の可能性も排除できない。

「ワ^ハ-撫(1)」について、「芳武切」で、原例が「撫^{ワ^ハライジン}慰人」で、音注は「ワ^ハ」と見える。同書の非母遇摂の字の「フウ」の音注とは一致しない。第三章で述べたように音注における延音点は原則母音仮名の後に用いられることから「ワ^ハ」は「ウ^ハ」の書き間違いと推測される。なお、「撫」は敷母で、音注が「ウ^ハ」となった場合声符「無-ウ^ハ」による類推の結果だと考えられる。

このように、非母の「販」と敷母の「撫」はともに類推か誤記によるもので、「不-プ」は南京音から説明できる。それ以外の非・敷両声母の字の音注は全てハ行で、両方言に対応する。

(2) 奉母 [v-]

奉母 [v-] の所属字は計 33 字、延べ 133 字であり、表 4-1-5 のように、音注は主にハ行とワ行の二種類になっている。中には同じ字にハ行・ワ行二種類の音注が同時に存在するケースも見られる。さらに、僅かに 1 例だが、「防-ハン・バン」のようにハ行とバ行二種類の音注を有する例も存在している。以下では、(i)ハ行、(ii)ワ行、(iii)ハ行・ワ行、(iv)ハ行・バ行の四つに分けて実態についてみることにする。

表 4-1-5 奉母字の音注状況

分類	ハ行	ワ行	バ行
両音注をもつ表記例	ホン-奉 11(3) 鳳 4(2) フワン-奉 11(7) フヲ-伏 3(1) 服 7(1) フウ-父 14(3) ハン-飯 12(7) 防 9(3)	ウワン-奉 11(1) 鳳 4(2) ウヲ-伏 3(2) 服 7(6) ウゝ-父 14(10) ウウ-父 14(1) ワン-飯 12(5)	バン-防 9(6)
一種類の音注の表記例	ホン-逢 5(1) フワン-逢 5(3) ホ-復 3(2) 狒 2 フウ-復 3(1) 芙 1 鳧 1 扶 1 腐 1 駙 1 ハン-帆 5	ウヲ-袱 1 縛 1 ウゝ-扶 1 婦 8 負 6 ウエン-鱸 1 分 29(4) ウエ-佛 4 ウエ○ウ-浮 1 枹 1 ワン-繁 1 煩 8 繫 1 凡 6 犯 2 ワ-乏 1	

注:「逢-ケン」は 1 例があり、誤記である。

(i) ハ行

ハ行の音注となっているのは、「逢」「復」「狒」「芙」「鳧」「扶」「腐」「駙」「帆」で、計 9 字種、22 例である。

(ii) ワ行

ワ行の音注となっているのは、「袱」「縛」「扶」「婦」「負」「鱸」「分」「佛」「浮」「枹」「繁」「煩」「繫」「凡」「犯」「乏」で、計 16 字種、47 例である。

「分」字の両音注の「分-フン 29(25)ウエン 29(4)」について、「ウエン」の方に去声の声調点があり、第三章で述べたように、奉母去声の「分劑扶問切」と対応している。原例は「本^ヘ分^{エンウエン}」「守本^{シウヘ}分^{エンウエン}處^{チュ}世^{ユイシ}」「見^{ケン}讐^{チウ}人^{ジン}分^{ウエン}外^{ワイ}眼^{エン}明^{ミン}」「幾^キ乎^{イウ}守^{シウ}不^フ牢^{ラウ}本^ヘ分^{エンウエン}」であり、『漢語大字典』に「職分」とあり、全て「つとめ」にあたる意味である。

(i)(ii)は音注が一種のみの例である。その中では、ワ行音注は字種数も用例数も最も多い。奉母 [v-] は南京音で無声化して [f-] となったのに対し、蘇

州・杭州音では濁音[v-]を維持している。上述したように非・敷母の音注がハ行となっていることから、奉母のハ行の音注は南京音の状況と符合する。一方、日本語には[v-]の子音がなく、[v-]を写すのに適する仮名は「ウ」となり、奉母のワ行の音注は蘇州音と杭州音の特徴に一致するものである。従って、奉母に対する音注では全体としてワ行が優勢であることが分かる。一方でハ行の音注も決して少なくないことから呉方言の特徴だけで説明することはできない。第二章で述べたように、多くの先行研究ではワ行の音注が呉方言を反映するとしてとらえられている。

(iii)ハ行・ワ行

同じ字にハ行とワ行二種類の音注が存在する例は計 6 字種であり、その中、ハ行音注となるのは 24 例で、ワ行音注となるのは 27 例である。表 4-1-5 のように、「伏服父」3 字はワ音注が多く、「奉飯」2 字はハ行音注の方が多く、「鳳」はハ行・ワ行両音注が同数である。つまり、二種類の音注の場合でも、ワ行音注の用例数は優位に立っている。

「伏-フヲ 3(1)ウヲ 3(2)」は、『広韻』に流撮去声の「扶富切 鳥^サ抱子又音服」と通撮入声の「房六切 匿藏也伺也隠也歴也」とあり、両音注とも入声の読みと対応する。原例は以下の通りである。

「ウヲ」:^{フウフ ジウヲ ジョ}「常言」虎不食伏肉 肉ヲ顔ニ矢タハズト云コト
^{ジャウヲズウチユイコンユウイユイリ}「長短話」若伏事主公有餘力 若主君ニ事ヘテ餘力アルトキハ
^{フヲピンツユイチュ}「フヲ」:^{フヲ}「四字話」伏兵齊出 フセゼイ同ニ出ル

南京音は[f-]、蘇州・杭州音は[v-]で、『同文備攷』では[vok](降伏)・[bu](鳥抱卵)の二種類の音注がある。「フヲ」は南京音から説明できるが、「ウヲ」は呉方言に対応する。

「服-フヲ 7(1)ウヲ 7(6)」は通撮の「房六切 服事亦衣服又行也習也用也整也」となり、原例が以下のようにになっている。

「ウヲ」:^{クイウヲニイ}「三字話」飯服你 汝ニ服ス

「四字話」^{チエンジャンイハウヲ}穿上衣服 キリモノヲキル ^{トヒヤアイハウヲ}脱下衣服 キリモノヲヌグ
^{ケンワンイハウヲ}更換衣服 キリモノヲキカエル

「常言」^{フウウ、ジュイイハウヲ}夫婦如衣服 夫婦ハ衣服ノ如シ
^{イハウヲホウズウケ^ンテスイ}衣服破時更得新 衣服破ル時ハ新ラシキニ更ムヘシ

「フヲ」:「器用」^{ゲンフヲ}便服 フダング

南京音は[f-]、蘇州・杭州音は[v-]となり、『同文備攷』では[vok]であり、「伏」と同じ、「フヲ」は南京音から説明できるが、「ウヲ」は呉方言に対応する。

「父-ウ、14(10)ウウ 14(1)フウ 14(3)」は、『広韻』に非母読みの「方矩切」と奉母の「説文曰父矩也家長率教者扶雨切」との二種類の読みがある。表記例は下記のようにになっている。

「ウ、」:「四字話」^{フワンヤンウ、モウ}奉養父母 父母ヲヤシナフ

「常言」^{チヨンシンライウ、}終身爲父 一生父トスル

^{ヤンツウハンツウウ、モウエヘン}養子方知父母恩 子ヲ持テ後父母ノ恩ヲ知り

「親族」^{ツヲウ、}祖父 ^{ウ、ツイン}父親 ^{ウ、モウ}チ、父母 ^{ウ、モウ}チ、ハ、

^{ヤンウ、}養父 ^{スエンウ、}ヤシナヒチ、 ^{ドンウ、イ、モウ}先父 亡父 ^{キヤアウ、}同父異母 ハラガワリ 家父 ^{ウ、モウ}チ、

「ウウ」:「親族」^{ツインウウ}親父 実父

「フウ」:「長短話」^{キヤアフウムイジュウズウ}家父毎日用事 父ハ毎日用事アリテ

^{ケンキヤアフウエ、ハ〇ウ}見家父也好 父ニモ御アヒナサルヘシ

「親族」^{クウフウ}姑父 ヲハムコ

発音と意味には違いが見られず、明らかに奉母と一致している。なお、延音点の使い方によって、「ウ、」と「ウウ」は同じものである。南京音は[f-]、蘇州・杭州音は[v-]となり、『同文備攷』では[fu](甫字從其聲)・[vu](家長)の二種類の音注がある。「ウ、」「ウウ」は呉方言に対応するが、「フウ」は『同文備攷』で一致する読みがあるが、意味が対応できず、南京音からしか説明できない。

「奉-ホン 11(3)フワン 11(7)ウワン 11(1)」は通撰の「扶隴切 與也獻也祿也」となり、原例が以下のようにになっている。

「ウワン」:「長短話」^{ユウブケンツユイウワンシン}又不肯足奉人 人ニモヘツラハス

「フワン」:「四字話」^{フワンミンル、キユイ}奉命而去 命ヲ受テ去ル ^{フワンヤンウ、モウ}奉養父母 父母ヲヤシナフ

「長短話」^{ゴウエ、ツインエユンフランボイ}我也情愿奉陪 ナルホト御供イタスヘシ
^{クウツウブライフランワン}故此不來奉望 ゴブサタ申シヌ
^{コンブネンフランボイ}恐不能奉陪 恐ラクハオトモ仕ルマシ
^{ル、クハンジツエピタンフランボイ}而寛日則必當奉陪 必スオトモ仕ルヘシ
^{ビユウハ、ウインフランカ、ウ}必有好音奉告 必ス吉左右ヲ告奉ン

「ホン」:「二字話」^{ホンヘ、ウ}奉候 オミマヒ申上ル

「三字話」^{ツユイホンジン}足奉人 人ニツイシヤウスル

「長短話」^{カンデセツランツユウホンバン}敢特設村酒奉振 ワザト酒ヲモクケテ迎へ奉リ

両音注南京音は[f-]、蘇州・杭州音は[v-]となり、『同文備攷』では[foŋ](俸禄作俸)(合掬)・[voŋ](進奉)である。「フラン」「ホン」は同じ発音を示すもので、呉方言から説明できず、「ウラン」は呉方言に対応する。

「飯-ハン 12(7)ワン 12(5)」は山撰の「扶晚切 餐飯」(上声)と「符万切 周書云黄帝始炊穀爲飯」(去声)となり、原例が以下の通りである。

「ハン」:「二字話」^{キ、ハン}喫飯 ^{ツインハン}メシクフ 請飯 オメシヲナイシ

「四字話」^{モ、シンヒキアハン}没甚下飯 何モサイガナヒ ^{ユウトウコウハン}有多過飯 多クサイガアル
^{ツインヨンベンハン}請用便飯 ^{カン、セツラン}カケ合ノメシヲマイレ ^{ツインヨンエ、ハン}請用夜飯 ヤシヨクヲマヒシ

「常言」^{キ、ハン}喫飯 ^{バン、イ}防噎 用心シタガヨヒト言フコト

「ワン」:「器用」^{ワン、トン}飯桶 ^{ワン、ワン}メシツギ 飯碗 ^{ワン、チヨ}メシワン 飯桌 ハンダイ

「三字話」^{カン、イ、ワン}趕衣飯 衣シヨクヲカセグ

「長短話」^{ツエンテイ、ワン}也掙得衣飯 衣飯ヲカセギ

南京音は[f-]、蘇州・杭州音は[v-]となり、『同文備攷』で[fuan](食飯之節)・[vuan](飯食)である。このように、「ハン」は南京音から説明できる一方、「ワン」は呉方言に対応する。

「鳳-ホン 4(2)ウラン 4(2)」は通撰の「馮貢切 爾雅曰 鷩鳳其雌」となり、原例が以下のようにになっている。

「ウラン」:「虫介」^{ウラン、デ}鳳蝶 アゲハ 「花草」^{ウラン、スエン}鳳仙 ツマネ

「ホン」:「禽鳥」^{ホン、ワン}鳳凰 ハウワウ ^{ウ、ホン}鳥鳳 ヲナガトリ

「鳳」は花の名前として使う時、蘇州音では[b-]読みとなり、音注と一致できず、

それ以外の字は、南京音で[f-]、蘇州・杭州音で[v-]と、それぞれ一つの発音しかない。『同文備攷』では[voŋ]である。このように、意味と音注との対応から見ると、「ウヲン」は呉方言と対応するが、「ホン」は南京音しかから説明できない。

(iv)ハ行・バ行

「防-ハン 9(3)バン 9(6)」について、「符方切 防禦也隄防也」(平声)と「符況切 守禦也」(去声)とあり、原例が下記のように示している。

「ハン」:^{ツイリハンホウ}「四字話」盡力防火 カヲ尽シテ火ヲフセク
^{テイハンネンミ}堤防嚴密 用心キヒシ
^{ヒンロウハンテ}「常言」行路防跌 用心シタガヨヒト言フコト

「バン」:^{デイバン}「二字話」隄防 ヨウジンスル
^{スエハヤウバンヘンツウ}「五字話」須要防騙子 ゴマノハイノ用心ヲセヨ
^{ヒスエハヤウバンモンヒヤン}「六字話」必須要防悶香 必スコシヤウツキンオ用心ヲセヨ
^{トウヒンスヤウスイバンシウ}士兵小心防守 中ゲンドモ念ヲ入レテ番ヲスル
^{キハンバンイ}「常言」喫飯防噎 用心シタガヨヒト言フコト
^{フコウフイユイデイバン}「長短話」不可不預隄防 預メ用心セスンハアルベカラス

南京音で[f-]、蘇州・杭州音は[v-](文)・[b-](白)の二種類の読みがあり、『同文備攷』では[buaŋ][vuaŋ]両読みである。濁音の「バン」は、南京音と対応できず、明らかに[b-](白話音)と一致している。軽唇音なのに、音注が重唇音の「バン」となるのは、前述した「反」と同じ、軽唇音が曾て重唇音だった時の名残として考えることができる。一方、「バン」が「防」の音注として問題がないと確認された以上、初出でない「ハン」は濁点が省略されたものとして見ることも可能である。

奉母の字に対する音注にハ行もワ行も存在する現象について、高松(1985b)はハ行は南京音、ワ行は浙江音の特徴を反映するとの見方を示しているが、理由については説明していない。

また、有坂(1938:237-238)は「飯」の音が「ハン」「ワン」とも記されているのは発音上の動揺があったと推測している。有坂の説に関して、奉母[v-]の個別の漢字を読む時、発音上の動揺による音注の書き分けの発生の可能性が

あるが、上述したように、同書では全ての用例が二種類の音注をもつのではなく、一種のみの音注を有する表記例が多く、そしてワ行音注に傾向があり、発音の動揺による可能性が低いと考えられる。つまり、同書では同じ漢字に対して二種類の音注が付されている例が存在しているが、ワ行に傾いているため、単なる発音上の動揺という推測は説得力が十分ではない。また、ワ行音注は[f-]と発音する南京音から説明できず、対応する[v-]音をもつ蘇州・杭州音では、発音上では動揺の現象も存在しない。

上記の分析を通して、奉母の字に対するハ行、ワ行の二種類の音注について、呉方言の特徴を反映し、数がわずかに多いワ行音注に南京音の要素を反映するハ行音注が混入していると見える。これより後も同じだが、匣母に大量に南京音の音韻要素が混入している。しかしながら、同書では濁音声母の字に対して、最も呉方言の特徴を反映する濁音音注が記されているため、こうした南京音を反映する現象は、矛盾を抱えていると言わざるを得ない。本研究では奉母に対するハ行音注について、必ず南京音の特徴を反映するという結論を下すことができないと考える。

(3) 微母 [m-]

微母 [m-] の所属字は計 26 字種、延べ 257 字である。「ホ-勿(6)」1 例以外、音注は全てワ行となっている。このことは原音において微母の鼻音的性質が消失したことを示している。微母は南京音ではゼロ声母、蘇州音では、[m-] と [v-] に分かれ、[m-] は白話音、[v-] は文読音、杭州音は [v-] で、音注は南京音、蘇州音(文読音)、杭州音からは説明が得られる。

「勿-ホ」は原例が「請勿生疑」^{ツインホス°エンニイ}「慎勿有誤」^{ジンホユウハ}「慎勿怠慢」^{ジンホダイマン}「請勿有棄」^{ツインホユウキイ}「請勿有遲疑」^{ツインホユウヂイニイ}「過則勿憚改」^{コウツエホダンカイ}である。『広韻』では反切が「文弗切」で、南京音はゼロ声母、蘇州音は [fəʔ]、杭州音は [fəʔ] で、いずれも非母となっている。「ホ」は子音が呉方言と対応する。また、非母所属の「弗」字は蘇州音でも同じ [fəʔ] となる。このように、同書では「勿」に対する音注は微母のものではなく、「弗」と同じ非母のものである。「勿」「弗」2 字とも「ホ」音注となるのは蘇州音で同音の現象と同じであるが、韻母の発音が対応しない。

軽唇音非組の字について、音注と南京音と蘇州・杭州音との関係は表 4-1-6 の通りである。

表 4-1-6 非組の音注と方言との対応関係

声母	音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
非 [f]	ハ行	[Φ]	[f]	○	[f]	○	[f]	○
敷 [fʰ]								
奉 [v]	ワ行	[w]・[∅]	[f]	×	[v]	○	[v]	○
	ハ行(少)	[Φ]		○		×		×
微 [m]	ワ行	[w]	[∅]	○	[v](文)	(文) ○	[v]	○
					[m](白)	(白) ×		

非 [f-]・敷 [fʰ-] 両声母の所属字に対して、音注は 1 例以外全てハ行であり、日本語の発音 [Φ] で、南京音、蘇州・杭州音のいずれとも対応する。

奉母 [v] の字について、ワ行とハ行二種類の音注が存在し、ワ行音注のほうが優勢である。内、ハ行の音注は無声化した南京音の [f] に対応し、ワ行の音注は濁音 [v-] を維持する蘇州・杭州音に対応すると考えられるが、かなりの比率で両者が混ざっている理由は不明である。また、同じ字に対するハ行とワ行二重注音が存在する理由も不明である。

微母 [m] の所属字の音注は、「勿」以外、ワ行である。このことは微母が脱

落してゼロ声母(合口呼)となった南京からも説明でき、鼻音的要素が消え、濁音となった蘇州音(文語音)と杭州音からも説明できる。

上記のように、非組奉母に対するㄨ行の音注は全濁声母を維持する呉方言からしか説明が得られないものである。蘇州音の観点から見た場合、微母の白話音の例が全く見られないのは異常現象で、このことは文白の違いのない杭州音の方からより適切な説明が得られることを物語っている。注目すべきなのは、呉方言の杭州音の特徴が色濃く見られる中、奉母の音注に合理的な説明が得られないハ行音注の例が複数存在していることである。

1.2 舌頭音端組

表 4-2 は舌頭音端組の字をまとめたものである。

(1) 端母 [t-] と透母 [t'-]

端母 [t-] 所属字は計 75 字種、延べ 660 字で、透母 [t'-] 所属字は計 53 字種、延べ 321 字である。両声母の字と対応する仮名音注は殆どタ行で、南京音、蘇州音、杭州音と矛盾なく対応している。これ以外、濁音表記のものも存在している。これらの例について具体的に検討する。

端母：「デイン-椀(4)」

透母：「デイ-鷗(1)」「ドウ-唾(2)」「デ-逖(1)」「ダ-踏(3)」「デ-鰈(1)」

「デイン-椀(4)」の 4 例は全て「船具」の所属例であり、下記のようになっている。

デインツウ ツメ デインチュイ ヨロキ デインシン スドウ デインタン ヨロキ
椀 齒 ツメ 椀 箸 ヨロキ 椀 身 スドウ 椀 檐 ヨロキ

「椀」は『広韻』に未収で、『漢語大字典』に「同“碇”」とある。「碇」は『広韻』にも未収で、『集韻』に「丁定切 錘舟石也」との端母字となり、意味が一致している。「デイン」は声符「定」の類推による可能性がある。

「デイ-鷗(1)」は、原例が「鷗鷗 ^{ヒ・デイ}カイツブリ」である。『広韻』に「鷗」がなく「鷗」があり、「土雞切 鷗鷗似鳧」である。本研究では「鷗」「鷗」を同じ字と見なす。同書には「逖-デイ 3(2)テイ 3(1)」とあり、「逖」は『康熙字典』に「[正字通]俗遞字」である。「遞」は「徒禮切」で、定母所属である。こうして、「デイ-鷗(1)」は「逖(遞)」と同じ、声符の類推によるものだろう。

「ドウ-唾(2)」は「湯臥切」で、原例が「唾罵人」^{ドウマア、ジン}「愚人終受毀唾」^{イユイジンチヨンジウボイドウ}である。濁音の「ドウ」は南京、蘇州、杭州音の [t'-] から説明できない。

「デ-逖(1)」は「他歴切」で、原例が「疏逖 ^{ソウ、デ}トウトウシヒ」であり、「狄」が「徒歴切」で、定母所属のため、音注「デ」は「狄」の音の類推による可能性がある。

「ダ-踏(3)」は、『広韻』に透母の「他合切」とあり、意味「著地」である。『集韻』に「達合切 踐也」との定母の読みもあり、意味と発音が同書の使用例「踏破了 ^{ダホウリヤ〇ウ}フミヤブツタ」「踏鐙 ^{ダ、テン}アブミ」「踏索 ^{ダ、ソ}トフツナ」と一致している。また、蘇州音は [daʔ] で、『磨光韻鏡』は「踏-ダ」、『同文備攷』は [d-] となっているこ

とから、「ダ」は濁音の方の読みを伝える呉方言と対応している。

「デ-鰈(1)」は、『広韻』に「吐盍切」とあり、一等韻所属で、原例が「^{デイユイ}鰈魚カレイ 一名比目魚」である。外転一等韻がア段の音注となっていることから、「デ」は「吐盍切」と一致しない。『集韻』に「達協切」と定母で四等韻の読みもあり、意味も「東方比目魚名」と同じである。このように、「デ」は定母「達協切」に対応するものであることが分かる。また、「蝶-デ(3)」のように、同じ声符「葉」をもつの類推による可能性も排除できない。

上記の他に、適切な説明が得られないものが2例あり、「ツフゝ-揣」「ツエ-籜」である。

「ツフゝ-揣(1)」は、原例が「^{ツフハシユイツアイワリイ}揣書在懷裡 書物ヲ懷中ニ揣入レテ」である。『広韻』に端母果摂の「丁果切 揺也」と初母止摂の「初委切 度也 試也 量也 除也」との読みがあり、音注「ツフゝ」は韻母上では「丁果切」と最も近いが、意味上ではいずれの場合にも対応しない。また、下記のように、『集韻』に多種類の読みがあるが、いずれの場合も一致しない。

「朱惟切」治撃也	「徒官切」聚兒	「楚委切」説文量也
「主樂切」治也	「尺亮切」博雅度也	「都果切」揺也
「之瑞切」治撃也	「樞絹切」度也	「船釧切」方言度高曰揣

「ツエ-籜(1)」は、原例が「^{ツエルウ}籜兒 タケノハカ」である。透母の「他各切」となり、破擦の「ツ」の音注は破裂音の透母と一致しないため、違う発音を記している可能性がある。

上記の検討によって、濁音表記の各例では、透母の「踏」「鰈」は他の資料から元々、濁音の所属であり、「踏」が呉方言の読みから説明でき、「鰈」は濁音の読みと対応する可能性もあるし、声符の類推による可能性もある。端母の「椀」、透母の「鷗」「逖」のいずれの場合も声符による類推と考えられるのに対し、透母の「唾」は南京、蘇州、杭州音のいずれにも対応できず、適切な説明が得られないという結果となった。

このように、端[t-]・透[t'-]両声母に対しては極僅か例外を除き、全体としてタ行[t]でとらえられる。

(2)定母[d-]

定母[d-]の所属字は、表 4-2 のように、計 98 字種、延べ 563 字であり、濁音のダ行音注が計 460 例で、延べ数の 81.7%を占めている。これは濁音が維持されている呉方言の特徴を反映している。一方、タ行の音注も存在し、表 4-2-1 の通り、「小曲」以外、清・濁両音注と清音のみの音注の二種類の場合がある。具体的に、(i)ダ行・タ行、(ii)タ行、(iii)その他に分けて検討する。

表 4-2-1 定母の字の非濁音音注の状況

項目		濁音音注	非濁音音注
清濁両音注を有する例	非小曲用例	ダン-檀 2(1)糖 6(5)蕩 3(2)淡 3(2)談 8(7) ダイ-檀 6(5)待 4(3) ダ○ウ-逃 3(1)道 22(16)桃 4(2) ダア-大 115(102) デ○ウ-投 13(11)頭 64(49)豆 14(13) デン-疼 4(3) Dein-艇 2(1)定 10(8) デイ-地 21(15)提 3(2)隄 5(4)弟 19(16)遞 3(2)第 2(1) ド-獨 8(6)讀 11(10)毒 3(2) ドン-銅 8(7)動 13(8)同 20(18) ドウ-肚 4(3)杜 5(3) ドハン-緞 5(4)斷 2(1)	タン-檀 2(1)糖 6(1)蕩 3(1)淡 3(1)談 8(1) タイ-檀 6(1)待 4(1) タ○ウ-逃 3(2)道 22(5)桃 4(1) タア-大 115(11) テ○ウ-投 13(2)頭 64(13)豆 14(1) テン-疼 4(1) テイン-艇 2(1)定 10(2) テイ-地 21(5)提 3(1)隄 5(1)弟 19(3)遞 3(1)第 2(1) ト-獨 8(2)讀 11(1)毒 3(1) トン-銅 8(1)動 13(5)同 20(1) トウ-肚 4(1)杜 5(1) トハン-緞 5(1)斷 2(1)
	小曲用例	ダイ-臺 6(4) ダ○ウ-桃 4(2) ダア-大 115(102) ドン-同 20(18) ドウ-杜 5(3) ドハン-團 3(2)	タイ-臺 6(2)(小曲) タ○ウ-桃 4(1)(小曲) タア-大 115(2)(小曲) トン-同 20(1)(小曲) トウ-杜 5(1)(小曲) トハン-團 3(1)(小曲)
非濁音音注しかない例	非小曲用例		タイ-苔(4) タン-胆(4)袒(1)搪(1) テイ-籬(1)蓼(6) テ-突(2)跌(2)敵(4) テャ○ウ-跳(3) テン-簞(1) ト- ^ト 泰(1)鐸(1) トイ-兌(1) トロン-屯(1) トウ-塚(1) テ°イ-地 21(1) チャ○ウ-苕(1)
	小曲用例		ト-莓(1)(小曲)

(i)ダ行・タ行

清・濁両音注を有する場合について、表 4-2-2 に示しているように、これら 13 字はいずれも同じページに繰り返しで出ている例である。特に「蕩」「頭」(③)、「疼」以外の場合、「杜」のように、「禽鳥」と「樹竹」に同じ語があり、前者は「ドウ」と濁音表記で、後者は「トウ」と清音表記となっているが、後者は初出ではないため、濁点が省略された。即ち、表記は清音となっているが、実際は濁音を表している。

「疼-デン 4(3)テン 4(1)」は、音が定母の「徒冬切 痛也」である。「デン」は蘇州音では[dən]、南京音では[t'ən]となり、韻母面では両方言に対応するが、初出の「テン」は、濁点の記入漏れと考えられる。

その中で、「蕩」は、『広韻』に定母と透母の読みがある。定母の「徒朗切大也又水名」は、『大漢和辞典』に「ほしいもまま。みだら。だらしな。しまらぬ。ゆるやか。放蕩。」等の派生の意味がある。透母の「他浪切 蕩蕩渠」は、『大漢和辞典』に「蕩蕩は、渠の名。」との説明がある。原例の「東走西蕩 方々ニアルク」^{トシヤンスエ、タン}「東闌西蕩 方々ニアルク」^{チンコウハンダンフ、コウ}「真個放蕩不過 ワルサヲシテ」などは、定母の読みと一致している。また、「東走西蕩」^{トシヤンスエ、タン}「東闌西蕩」^{トシヤンスエ、タン}は同じ意味の使用例で、「タン」が初出であり、濁点の記入漏れによるものと考えられる。

「蜓」は「特丁切」で、原例がともに「虫介」の例で、「テイイン」は「蜻蜓」、「デイン」が「蝮蜓」となり、「テイイン」の例は初出のため、濁点の記入漏れと考えられる。

「提」は「杜奚切」で、原例が下記のようになり、「テイ」の例は初出であるため、濁点の記入漏れとも考えられる。

「テイ」:「四字話」提師救援 「デイ」:「器用」提琴 提燈

表 4-2-2 定母の初出と非初出の例(同一頁の場合)

表記例	同頁の表記例
タン-糖 6(1)	ピンダン ベダン ニウビイタン 氷糖 白糖 牛皮糖
タン-蕩 3(1)	トシヤンスエ、タン トシヤンスエ、タン 東走西蕩 東闌西蕩
タイ-擡 6(1)	ヤウダイキエイニイ タイキイデウライ 要擡暴你擡起頭來
タウ-逃 3(2)	ダウツエウ タウナン 逃走逃難
タア、大 115(11)	フヤウダア、モウダア、ヤン ナンダア、スエ、ホン ニユイダア、スエ、キヤア ①不要大模大様 ②男大須婚 女大須嫁
テウ-頭 64(13)	デウナンキン テウジャンアンデウ チクハンロハンカデウ ダイキイテウライカン ①頭痛難禁頭上按頭 ②只管乱磕頭擡起頭來看 ワンテウ、ジュンテウ、ヘウテウ、ワイデウ、リイデウ、ジャンデウ、ヒキアデウ ③晚頭前頭後頭 外頭裏頭上頭下頭
テウ-豆 14(1)	ハア、ア、デウ、テウヤア、ハ、イ 巴豆 豆芽菜
テン-疼 4(1)	スインテン デン、ン 心疼 疼痛
トン-銅 8(1)	ウ、ドン、キン、ン 烏銅 金銅
トン-動 13(5)	ドン、ン 動不動
トン-同 20(1)	ドンキユイユウチエン イハ、ン、ツエ、ウ 同去游船 一發同走
トウ-杜 5(1)	ドウキエン トウキエン [禽鳥]杜鵑 [樹竹]杜鵑
トハン-緞 5(1)	キン、ン、ハン トハン、ツウ 金緞 緞子

上記以外のタ・ダ行二重音注の例は下記の通りである。

タン-檀 2(1)淡 3(1)談 8(1) タイ-待 4(1) タウ-道 22(5)桃 4(1)
 テウ-投 13(2) テイン-定 10(2)
 テイ-隄 5(1)弟 19(3)迤 3(1)第 2(1)地 21(5)

ト-獨 8(2)讀 11(1)毒 3(1) トウ-肚 4(1) トハン-斷 2(1)

中に、初出でない字の表記例を表 4-2-3 にまとめている。これらの字はいずれの場合も、清音音注の方の数がそれぞれの延べ数に占める割合が少なく、そして、同じページのものではないが、同書において初出ではないことから、濁点が省略されたものと考えられる。

表 4-2-3 タ行音注が初出でない例(非同一頁の場合)

漢字	ダ行音注の例	タ行音注の例
檀	ダン-「樹竹」梅檀	タン-「船具」脚檀
淡	ダン-「二字話」冷淡 「五字話」淡粧倒好看	タン-「樹竹」淡竹
談	ダン-「二字話」咲談 清談 玄談 「四字話」再坐笑談 「五字話」休要打郷談 「六字話」自爲當世佳談 「長短話」因此或唱或談	タン-「四字話」談今論古
待	ダイ-「二字話」款待 「四字話」待要睡覺 「六字話」後又着手待人	タイ-「六字話」置酒款待來客
道	ダ〇ウ-「二字話」東道 公道 道路 「三字話」不知道 沒道理 「四字話」自有道理 沒作道理 公道生意 「五字話」尊信儒釋道 我要賭東道 「六字話」道士也有許多 「常言」遠非道之財 夷虜之道也 「長短話」庶幾聖人之道行矣 家道豪富 說道海面上 我難道怪你不成	タ〇ウ-「四字話」家道窮困 家道豪富 暗付說道 難道罵你 「長短話」難道竟不妥貼不成
桃	ダ〇ウ-「果瓜」胡桃 「樹竹」櫻桃	タ〇ウ-「果瓜」桃子 (「小曲」1例)
投	デ〇ウ-「二字話」相投 投宿 「三字話」投降你 「四字話」無所投奔 何處投靠 說話投机 情投意合 「五字話」投水死的多 我要打投子 「常言」白玉投於淤泥 「器用」投子	テ〇ウ-「四字話」投奔親眷 情愿投降
弟	デイ-「四字話」①如兄如弟 「常言」兄弟爲手足 「長短話」那豪富人人家子弟們 小弟近來 小弟也會曉得 賢弟休要過譽 而徒弟日加 不招徒弟 小弟的論頭 賢弟你既有事匆忙	テイ-「四字話」②愛恤弟妹 「六字話」上無兄下無弟 「常言」小弟這兩日
地	デイ-「三字話」平白地 「四字話」死心塌地 黑洞洞地 黑暗暗地 「五字話」特地到這裡 怎恁地來遲 「常言」不知地之厚也 地不生無根之艸 君子行於濁地 「長短話」便在空中地裡跳出來 怎恁地大奇 而恁地不耐煩 誠惶愧無地耳 慚愧無地了 這個田地哉	テイ-「四字話」笑嘻嘻地 笑吟吟地 恁地发财 繁华地方 膏腴之地
通	デイ-「四字話」①通相討論 「長短話」今後必當通相切磋	テイ-「四字話」②通相救応
第	デイ-「六字話」第要謹慎火燭	テイ-「長短話」所以第二日
獨	ド-「四字話」①拯孤救獨 「常言」深徑不宜獨行 利可共而不可獨 獨利則敗 謀可獨而不可衆 「長短話」唯獨我命蹇時拙	ト-「四字話」②孤身獨立 「菜蔬」獨活
讀	ド-「二字話」讀完 「三字話」讀不出 愛讀書 輪流讀 「四字話」只顧讀書 一味讀書 「五字話」坐窗下讀書 「常言」至樂莫如讀書 空讀如來一藏 「長短話」皆要讀書	ト-「四字話」尚可以讀
毒	ド-「三字話」毒口罵 「虫介」毒蛇	ト-「四字話」毒殺冤仇

注:「地」は後述するように、「テイ」の音注もある。

また、表 4-2-4 のように、「定隄肚斷」4 字は、定母の読み以外、清音の端

母の読みもあり、「定」の例の意味が定母の読みと一致するが、「隄肚斷」3字が定・端母の読みに大きな違いがない。また、その中、「隄」「肚」の場合は、表記例が端母読みの意味と一致するが、「隄防・隄防嚴密・不可不預隄防」、^{トウリイデントン}「肚里疼痛・^{コンスインドウリイキツユウ}空心肚里喫酒」のように、同じ語の表記例が存在しているため、清音音注は明らかに濁点が省略されたものである。全体的にこの4字に対して、濁音音注が圧倒的に多く、蘇州・杭州音では、4字とも濁音の[d]¹¹¹で、音注が吳方言と対応する。

表 4-2-4 定母の二種類読みをもつ字

表記例	読み		
	定母	端母	
定 - デイン 10(8) テイン 10(2)	^{デインギイ} 定期 トキヲサダムル ^{デインジ} 定日 日ヲサダムル ^{ヤデイン} 約定 ヤクソクスル ^{デインタアツマ} 定他倣 カレニアツラエテイタサシム ^{テイヤ○ウライ} 定要來 ドフデコネハナラヌ ^{ミンチオンチュイテイ} 命中注定 命中ニ定ル ^{ピデインキヤアテ} 必定假定的 必スニセナラン ^{テイヤ○ウホウビンリイ} 定要火併哩 必スサンチガエントス ^{ピデインヤ○ウジンチヤンミン} 必定要人償命 必定ゲシンニヲ求メン ^{ホウスクヤ○ウデインヤ○ウヒョウエン} 何消定要學文 何ゾ必定文ヲ学フニ及ハンヤ	音：徒徑切 意：安也	音：丁定切 意：題額詩云 定之方中定榮 室也
隄 - デイ 5(4) テイ 5(1)	^{デイバン} 隄防 ヨウジンズル ^{デイデヤ○ウ} 隄調 サシジズル ^{テイハンネンミ} 隄防嚴密 用心キヒシ ^{ツインツウキユイデイデヤ○ウ} 親自去隄調 自ら往テサシジズル ^{ブコウフイユイデイバン} 不可不預隄防 預メ用心セスンハアルベカラス	音：杜奚切 意：隄封漢 書作提	音：都奚切 意：防也
肚 - ドウ 4(3) トウ 4(1)	^{トウリイデントン} 肚里疼痛 ハラガイタム ^{イタ○ウホウドウスク} 一刀破肚死 一刀ニテ腹ヲ切テ死ス ^{コンスインドウリイキツユウ} 空心肚里喫酒 スキハラニ酒ヲノム ^{テ○ウドウ} 兜肚 ムネアテ	音：徒古切 意：腹肚	音：當古切 意：腹肚
斷 - ドハン 2(1) トハン 2(1)	^{シツツトハンスウナンサイゾフ} 手足斷時難再續 手足斷ル時ハ再ヒキガタシ ^{ツアンツウニレドハン} 參差疑勒斷 參差ニタ勒ハ斷コトヲ疑フ	音：徒管切 意：絶也	音：都管切 / 丁貫切 意：斷絶 / 決斷

(ii) 夕行

「苔袒^鱗塘突簞^嚙跳胆爹跌兌敵鐸屯」は、一見して無声化で定母が清音となった南京音と対応しているように見えるが、実際には、以下で分析するように、類推によるもの、誤記によるもの、日本語の読みの影響によるもの、或いは吳方言の清音の読みに対応するもの、と様々な可能性も含まれている。

¹¹¹ 「斷」は杭州音では「決斷」の場合は[t-]、「斷絶」の場合は[d-]と発音する。

(a)類推による可能性

「タイ-苔(4)」は、「徒哀切」であり、原例が「苔菜^{タイサ^イ}」「苔兒^{タイルウ}」「苔兒^{タイルウ}」「澹苔^{フウタイ}」で、4例とも清音音注となっているが、蘇州・杭州音の場合は濁音の[d-]であり、音注と対応しない。「タイ」は声符「台」(透母の「土來切」)の類推による可能性がある。

「タン-袒(1)」は、『広韻』に未収、『集韻』に定母の「蕩旱切 木器」とあり、原例が「船具」の「佼^{キヤウ}輓袒^{ウロ} 上ハサミノセン」である。蘇州・杭州音の発音が確認できず、「タン」は声符「旦」(端母「得按切」)の類推による可能性がある。

「テイ-鯀(1)」は、「杜奚切 魚」で、原例が「鯀魚^{サンシャウ}ノ魚 一名鯢」であり、『集韻』に「帝」字と同音で、「丁計切 魚名」との端母の読みもある。蘇州音は[d-]読み、南京音は[t'-]という有気音と発音するため、「テイ」は南京音と対応している一方、声符「帝」(端母「都計切」)の類推による可能性も排除できない。

「ト-毒(1)」は、原例が「毒魚^{アイノ}魚」で、『広韻』『集韻』『康熙字典』に未収録。中国の漢字でなく、和製漢字でもない。声符「毒」の類推による誤記の可能性もある。その場合、「毒」字は「徒沃切」で、定母の所属字であるため、音注は「ド」となるのが期待されているが、「ト」と記されている。このように、「毒」の南京音の類推以外に説明のしようがない。

(b)濁点の記入漏れ・省略による可能性

「タン-搪(1)」は、「徒郎切 搪揅」で、原例が「搪^{タンリヤウ}了^{ウヒ}壁子^{ツウ} カベヲヌル」であり、『集韻』に音が「湯」字と同じ、「他郎切」との透母の読みもあり、音注と一致しているが、意味が「揅也」で、用例と一致しないため、「タン」は濁点の記入漏れの可能性もある。

「テ-突(2)」は、「陀骨切 觸也欺也」で、原例が「二字話」の「唐突^{ダンテ} リヨグハイ」、「四字話」の「左衝^{ツフ}右突^{チヨンユウテ} 左右ヲ衝キメクル」であり、「テ」は読みと一致しない。蘇州音が[daʔ]、南京音が[t'uʔ]と発音するため、「テ」は主母音[a]を有する蘇州音に近く、濁点の記入漏れの可能性もある。

「テン-簞(1)」は、原例が「器用」の「簞^{テンツエ}席 竹ムシロ」であり、『広韻』に定母の「徒玷切 竹席」とあり、意味が一致する。方言の読みが確認できず、「テン」

は南京音と対応する他、濁点の記入漏れによる可能性がある。

(c)両方言から説明できるもの

「テヤ○ウ-跳(3)」は、「徒聊切」で、原例が「^{テヤ○ウサ[○]ウ}跳蚤」「^{テヤ○ウサ[○]イヨウハア^ハエエンリイ}跳在我花園裏」
「^{ベンツアイヨンデイリイテヤ○ウチュライ}便在空地裡跳出來」であり、南京音と杭州音が[t'-]、蘇州音が[d-]となり、「テヤ○ウ」は南京音と杭州音から説明できる。

「タン-胆(4)」は、『広韻』に音「徒旦切 胆口脂澤出證俗文」とあり、『大漢和辞典』に「口のおぶら」となり、そして、「膽の俗字。[正字通]胆、俗以胆爲膽」との説明もある。また、同書で、具体的な使用例は、

^{ユウタンリヤ}有胆略 ^{モ[○]タンリヤン}沒胆量 ^{チエ^ハスウダア^ハタン}這廝大胆 ^{タア^ハタンキヤ○ウサ[○]イ}大胆喬才(「小曲」)

となり、使用例の意味が『広韻』にある意味とは一致しない。また、『広韻』に「膽」は端母の「都敢切 肝膽」で、『大漢和辞典』にある「こころ。衷心。」との意味と一致している。このように、同書では、俗字の「胆」を使っているが、音注は繁体字の「膽」の発音と対応していることが分かる。なお、南京音、蘇州音、杭州音は、いずれも[t-]となり、音注と対応する。

「テ-跌(2)」は、原例が「^{シキヤテ[○]ウ}失脚踏倒 ケマヅイテタヲレタ」、「^{ヒンロウハンテ}行路防跌 用心シタガヨヒト云フコト」で、『広韻』に「徒結切 跌踢又差跌」とある。南京音のみならず、蘇州・杭州音でも[t-]と発音し、いずれも「テ」と対応する。

「トイ-兌(1)」は、「杜外切 突也又卦名」で、原例が「^{トイ[○]チヤン}兌帳 チヤウアヒヲスル」であり、「トイ」は読みと一致しない。南京音は[tuəi]、蘇州音は[de]、杭州音は[dei][duei][tuei]となり、『西儒耳目資』では[tui]、『同文備攷』では[tuei][duei]の両読みである。このように、「トイ」はいずれの場合にも対応する。

(d)濁点の記入漏れによる可能性

「テ-敵(4)」は、「徒歴切」で、原例が「^{テイテフ[○]チュイ}抵敵不住」「^{ネンツヤンニンテ}捻槍迎敵」「^{スウチエントイテ}死戦退敵」
「^{クハアフ[○]コウテチヨン}寡不可敵衆」であり、南京音が[t-]、蘇州・杭州音が[d-]となり、「テ」は南京音と対応し、濁点の記入漏れの可能性もある。

「ト-鐸(1)」は、「徒落切 大鈴也」で、原例が「^{トルウ}鐸兒 スハ[○]」である。「トラン-屯(1)」は、原例が「^{トランヒ[○]ンソウシワン}屯兵数十万 兵数十万ヲ屯ス」である。『広韻』には定母の「徒渾切 聚也又姓」と知母の「陟綸切 難也厚也」との二種類の読みが

あり、音注はいずれとも一致しない。このように、「鐸」「屯」2字に対して、それぞれ1例のみであるが、音注は南京音から説明でき、濁点の記入漏れの可能性も排除できない。

(iii)その他

「テイ-爹(6)」は、『広韻』に定母果摂の「徒可切 北方人呼父」と知母仮摂の「陟邪切 羌人呼父也」があり、「テイ」が果摂と知母と一致しない。しかし、この字は『韻鏡』には端母仮摂の四等¹¹²の列に置かれ、音注と一致する。『磨光韻鏡』も四等で「爹-テエ、」となっている。また、南京音が[tie]、蘇州・杭州音が[tia]と発音するため、声母は両方言から説明できるが、韻母は両方言から説明するのが難しい。

「テ°イ-地 21(1)」は、原例が「四字話」所属の「^{エンチンリヤテ°イ}陷城略地」である。「四字話」に他の使用例もあるが、「テ°イ」音注となるのはこの1例のみである。右肩点「°」の使用状況と意図について、既に検討したように、「テ°イ」の右肩点は[ti]に対する注意或いは「デイ」による誤記の可能性がある。

「チャ○ウ-苕(1)」は、「徒聊切 苕菜」で、原例が「花草」の「^{リンチャ○ウ}陵苕 ノウゼンカヅラ」である。「チャ○ウ」は読みと一致できず、「チャ○ウ-招照」のように、声符の類推による可能性が高い。

このように、ダ行・タ行二重音注をもつ場合、タ行音注となるのは濁点の省略或いは記入漏れ(「疼蕩蜓提」4字)と考えられる。ダ行でない音注の字について、類推によるものは「苔柎^歸苕」、濁点の記入漏れ或いは省略となるのは「塘突簞」、南京・呉方言双方から説明できるのは「跳胆跌兌」で、両方言のいずれにも対応しないのは「爹」、南京音と対応するか濁点の記入漏れとなるのは「敵鐸屯」、誤記によるものは「地」である。

上記で分析した結果、定母の字に対して、ダ行音注が一般的で、清濁の違いを有する呉方言の特徴を反映していることが明らかになった。

¹¹² 『韻鏡』の校注に「爹」は「広韻以前韻鏡麻韻並無此字黎本此字恐係後人所増」と説明している。

(3) 泥母 [n-]

泥母 [n-] の所属字は計 35 字種、延べ 198 字である。音注は例外なく、ナ行となっている。音注が反映する基礎方言の泥母は前鼻音であることを示している。次に述べる来母 [l-] の音注は全てラ行となっていることから、基礎方言において [n-] と [l-] が混同せず、両者が厳密に区別されていることが分かり、吳方言蘇州音と杭州音の特徴を反映している。

第二章第四節で述べたように、蘇州音と杭州音の泥母は通常の場合 [n] だが、前舌狭母音 [i][y] の前では口蓋化して [ŋ] になっている。両者は日本語で表記する時、同じナ行で示すことになる。一方、現代南京音の場合について、泥母の字は来母 [l-] の字と混同し、鼻音性を失っている。泥(娘)母と来母の混同は近代江淮官話の特徴であり、馮(2017)にはその混同の歴史は文献の上では清代に現れるが、実際の発音では明代末期に遡ることができるという。この説に従うならば、音注は南京音とは完全に一致しない。明末の『西儒耳目資』では混同が見られず、また、岡島冠山が「官音」(南京官話)によって編纂された『唐譯便覧』などの官話系語学教科書にも混同が見られず、日本語側の資料と先行研究の説には一致しない点がある。当時の南京官話音における [n] と [l] との関係に不明な点があると言わざるを得ない。よって、音注が反映する泥母について確定的に言えるのは蘇州音、杭州音の特徴に一致するということである。

以上検討してきた、舌頭音端組の音注と南京音、蘇州音、杭州音との対応関係を示したのが表 4-2-4 である。

表 4-2-4 端組字に対する音注の比較

声母	音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州・杭州音との対応	
端 [t]	タ行	[t]	清音 ([t][t'])	○	清音 ([t][t'])	○
透 [t']	(チ・ツ以外)					
定 [d]	ダ行 タ行(少)	[d] [t]	清音 ([t][t'])	ダ行 × タ行(少) ○	濁音 ([d])	ダ行 ○ タ行(少) × 「敵鐸屯」○
泥 [n]	ナ行	[n]	[n] [l] 混同 状況不明	×	[n] [ŋ](後続 [i][y])	○

上述した結果として、端 [t]・透 [t'] 両声母の字に対する音注はどちらも、タ

行となっている。定母[d]に対して、ダ行音注は一般的で、濁音が維持されている蘇州・杭州音と一致している。泥[n]母の字に対する音注は全てナ行であり、蘇州・杭州音と一致する。

撰		上	廻	eŋ	開	テイ-鼎(1)酊(2)頂(2)	3	5			デイン-挺(2)	1	2	ニン-滓①(1)	1	1	
		去	徑	eŋ	開	デイン-定②10(8)錠(4)テイ-定10(2)釘②(3)	1	4	テイ-聽(聽)②(11)		デイン-定①10(8)テイ-定10(2)	1	10	ニン-倭(1)滓②(1)	1	1	
		入	錫	ek	開	テ-的(91)滴(2)	2	93	テ-踢(3)テ-逃(1)	2	4	テ-笛(1)テ-敵①(4)	2	5			
流撰	一等	平	侯	əu	開	テ○ウ-兜(2)	1	2	テ○ウ-倫(3)	1	3	テ○ウ-投13(11)頭64(49)テ○ウ-投13(2)頭64(13)ケ○ウ-頭64(1)テ○-頭64(1)	2	77			
		上	厚	əu	開	テ○ウ-斗(10)抖(1)蚪(1)聞(3)	4	15									
	三等	去	候	əu	開				テ○ウ-透①(2)	1	2	テ○ウ-痘(1)豆14(13)テ○ウ-豆14(1)	2	15			
咸撰	一等	平	覃	Am	開	タン-航(3)	1	3	タン-探(3)貪(6)	2	9	タン-鐔①(1)	1	1	ナン-男(1)南(4)楠(1)	3	6
		平	談	am	開							タン-淡①3(2)談8(7)タン-淡3(1)談8(1)	2	11			
		上	敢	am	開				タン-毯(1)	1	1	タン-淡②3(2)啖①(1)タン-淡3(1)	1	1			
		去	闞	am	開							タン-淡③3(2)啖②(1)タン-淡3(1)					
		入	合	Ap	開	タ-答(7)	1	7	ダ-踏(3)	1	3				ナ-納(5)	1	5
	四等	入	盍	ap	開				タ-搭(6)塌(1)テ-蝶(1)	3	8						
		平	添	en	開	テン-佔(1)	1	1	テン-添(3)	1	3						
		上	忝	en	開	テン-點(12)	1	12				テン-簾(1)	1	1			
		去	椽	en	開										ネン-念(3)	1	3
		入	帖 帖	ep	開				テ-帖(1)貼(7)	2	8	テ-蝶①(3)	1	3			
曾撰	一等	平	登	əŋ	開	テン-登(1)燈(11)	2	12			デン-藤(2)	1	2	ネン-能①(20)	1	20	
		上	等	əŋ	開	テン-等①(18)	1	18						ネン-能②(20)			
		去	嶝	əŋ	開	テン-凭(1)鏡(1)	2	2									
		入	德	ak	開	テ-得88(1)徳(3)テ-得88(87)	2	91	テ-忒(3)	1	3	テ-特(5)	1	5			
計							75	660		53	321	98	563		35	198	

- 注：・「タイ-歹4(3)」は1字未注。「五割切」で、『康熙字典』に「今誤讀等在切」とあり、端母の読みとなる。
- ・「テ-螻(1)」は原例が「蟲介」所属の「螻蟴 ツチクモ」である。『広韻』に「陟栗切」とあり、知母所属。また、『康熙字典』に「[類篇]丁結切音 糸窰」ともある。音注が「丁結切」の発音と対応している。
 - ・「トウ-塚(1)」は、原例が「射 塚(ゼエ\トウ) アツチ」である。「塚」は『広韻』に未収で、『康熙字典』に「射塚亦作 塚」とある。『集韻』に収録あり、「都戈切」との端母の読みとある。
 - ・「テイ-体(14)」は、『広韻』に「蒲本切」とあり、並母所属字である。『康熙字典』に「俗書四體之體省作体誤」。同書では、「體」「体」は音注が同じ「テイ」で、使用例が「好体面」「装体面」などと「嫩體透迤」のように、字体が一定していない。
 - ・「タフ-他(1)」は「タア\」の誤記である。
 - ・「ドウ-迤(1)」は、原例が「嫩體透迤」で、『集韻』に「迤」と同音の「唐何切」で、語釈は「透迤行兒或作迤」である。
 - ・「ダウ-道22(1)」は中間点「○」の記入漏れである。
 - ・「チャ○ウ-茗(1)」は、原例が「花草」の「陵茗 ノウゼンカヅラ」である。「徒聊切 茗菜」で、定母效撰に所属する。「チャ○ウ」は読みと一致できず、誤記の可能性が大きい。
 - ・「デ○-頭64(1)」は「デ○ウ」による「ウ」の記入漏れ。「ケ○ウ-頭64(1)」は明らかに誤記。
 - ・「ナア- 1)」は、『広韻』に未収となるが、「娜」字があり、「婀娜美兒」とあり、音「奴可切」。『唐話纂要』の「婀娜」と同じであることから、「娜」と同じ字と考えられる。
 - ・「ノウ-孺(1)」は、原例が「你休要孺弱 汝ダジャクニアルナ」である。『広韻』に「人朱切 弱也」「奴亂切 孺弱也」「乃臥切 弱也」とあり、意味がいずれでも対応でき、音注は「乃臥切」と一致している。
 - ・「ノウ-糲(1)」は『広韻』に未収で、『集韻』に山撰の「奴亂切 説文曰沛國謂稻曰糲」と果撰の「奴臥切 稻名」とある。原例は「米谷」の「糲米モチノ米」で、「ノウ」は果撰の読みと対応している。

1.3 半舌音來母

来母[l-]の所属字は計 164 字種、延べ 919 字である。音注はほぼラ行となっている。前述した通り、音注がナ行となる泥母との混同が見られず、基礎方言において[l]と[n]が厳密に区別されている特徴を反映している。

下記のように、音注がラ行以外の者となる例は「スエ-繹(1)」「ケン-蕘(1)」「涼-サヤン 7(1)」「シ〇ウ-虻(1)」の 3 例が存在している。「涼-サヤン 7(1)」は「リヤン」の誤記で、「シ〇ウ-虻(1)」は中間点の部分で検討したように、「レ〇ウ」の誤記である。

「スエ-繹(1)」は原例が「船具」の「^{スエツイン}繹井 ホスリイタ」であり、「スエ」は「繹」の反切「呂卹切(繩船上用)」と一致できず、音注が「スエ-率蟀」の声符の類推によるものと考えられる。

「ケン-蕘(1)」は、原例が「花艸」所属の「^{ヒイケン}蕘(ヒイケン) メナモミ」である。『広韻』に來母「力鹽切 白蕘藥」(平声)、「良冉切 白蕘藥名」(上声)とあり、「ケン」は読みと一致しない。また、『集韻』に曉母の「虚嚴切 杻豨蕘藥草」とあり、意味上では対応するが、発音上では音注と一致しない。「ケン」は「ケン-劍」などの声符の類推による可能性がある。

表 4-3-1 来母字に対する音注の比較

声母	音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
来母[l-]	ラ行	[l]	[l] [n]の混同状況不明	×	[l]	○	[l]	○

このように、誤記による「涼虻」と類推による「繹蕘」を除き、来母の字に対する音注は全てラ行である。上述したように当時の南京官話の来母と泥(娘)母の混同の状況に不明な点があることから、音注が反映した来母の特徴について確実に言えるのは蘇州音、杭州音と対応するということである。

表 4-3 半舌音來母所属字一覽

攝	等第	声調	韻目	開合	來 [1-]	字種数	延べ数		
通攝	一等	平	東	ōnŋ	開	ロン-籠①(4)聾(1)朧(1)匪龍(1)	4	7	
		上	董	ōnŋ	開	ロン-攏(2)籠②(4)	1	2	
		去	送	ōnŋ	開	ロン-弄(5)	1	5	
	三等	入	屋	ōuk	開	ロ-鹿(2)祿(1)碌①(2)輻(2)	4	7	
		平	鍾	ioŋ	開合	ロン-籠③(4)龍(7)	1	7	
		入	屋	io`uk	開	ロ-陸(2)六 6(4)リウ-六 6(2)	2	8	
止攝	三等	入	燭	iok	開合	ロ-碌②(2)綠(2)菽(1)	2	3	
		平	支	iě	開合	リイ-璃(1)蠡①(1)籬(2)鷗(1)麗①(1)	5	6	
		平	支	yə	合	ルイ-羸(1)	1	1	
		平	脂	ii	開	リイ-梨(1)蜊(1)	2	2	
		平	之	io`i	開	リイ-狸(2)鼈(1)	2	3	
		上	紙	yə	合	ルイ-累①(5)	1	5	
		上	旨	vi	合	ルイ-壘(1)	1	1	
		上	止	io`i	開	リイ-哩①(7)李(6)理(10)𠵼重(裡 18)(40)裏(3)里(4)鯉(1)	7	74	
		去	寘	iě	開合	リイ-離①(1)荔①(1)	2	2	
		去	寘	yə	合	ルイ-累②(5)			
		去	至	ii	開	リイ-利(13)俐(3)	2	16	
		去	至	vi	合	ルイ-淚(6)類(1)	2	7	
		去	志	io`i	開	リイ-哩②(7)			
		遇攝	一等	平	模	o	開合	ロウ-蘆(2)爐(1)櫨(1)鱸(1)鷓(1)	5
上	姥			o	開合	ロウ-鹵①(3)櫓(4)虜(1)	3	8	
去	暮			o	開合	ロウ-路(25)露(2)賂(2)鷺(1)	4	30	
三等	平		魚	io	開	ロウ-鱸(1)	1	1	
	上		麌	yu	開合	リュイ-縷(1)	1	1	
	去		遇	yu	合	リュイ-屨(3)	1	3	
蟹攝	一等	平	咍	ai	開	ライ-來(131)	1	131	
		平	灰	ai	合	ルイ-雷(2)檣(2)	2	4	
		去	泰	ai	開	ライ-頼(4)	1	4	
	三等	去	祭	iεi	開	リュイ-蠣(1)リイ-例(1)厲(1)	3	3	
		平	齊	ei	開	リイ-藜(1)	1	1	
		上	齊	ei	開	リイ-禮(9)蠡②(1)	1	9	
臻攝	一等	平	魂	uan	合	ロラン-論①7(6)ロン-論 7(1)	1	7	
		去	恩	uan	合	ロラン-論②7(6)ロン-論 7(1)			
		平	真 臻	iěŋ	開	リン-麟(1)鄰(隣)(4)鱗(1)	3	6	
	三等	平	諄	yəŋ	合	ロラン-輪(4)	1	4	
		去	震	iěŋ	開	リン-吝(1)𠵼𠵼(1)	2	2	
		入	質 櫛	iět	開	リ-栗(1)	1	1	
山攝	一等	入	術	yət	合	スエ-絳(1)	1	1	
		平	寒	an	開	ラン-蘭(7)攔(1)欄(1)	3	9	
		平	桓	uan	合	ロハン-鑾(1)鸞(1)	2	2	
		上	旱	an	開	ラン-懶(𠵼懶)(4)	1	4	
		上	緩	uan	合	ロハン-卵①(1)	1	1	
		去	翰	an	開	ラン-爛(4)	1	4	
	三等	去	換	uan	合	ロハン-亂 9(8)ラハン-亂 9(1)	1	9	
		入	曷	at	開	ラ-喇 2(1)ヲ-喇 2(1)	1	2	
		平	仙	iεŋ	開	レン-連(6)	1	6	
		上	獮	iεŋ	開	レン-連①(2)	1	2	
		四等	平	先	en	開	レン-憐(4)蓮(2)	2	6
			去	霰	en	開	レン-練(1)	1	1
効攝	一等	入	屑	et	開	レ-捩①(1)	1	1	
		平	豪	au	開	ラ〇ウ-牢(5)勞①(5)撈(1)滂①(1)	4	12	
		上	皓	au	開	ラ〇ウ-老(28)滂②(1)	1	28	
	三等	去	號	au	開	ラ〇ウ-勞(5)滂③(1)	1	5	
		上	小 笑	iεu	開	リヤ〇ウ-繚①(3)	1	3	
		去	笑	iεu	開	リヤ〇ウ-鷓①(1)	1	1	
	四等	平	蕭	eu	開	リヤ〇ウ-料①(3)寥①(1)撩①(2)聊(1)繚②(3)鷓②(1)	4	7	
		上	篠	eu	開	リヤ〇ウ-了(165)寥①(4)撩②(2)繚③(3)	2	169	
		去	嘯	eu	開	リヤ〇ウ-料②(3)			
果攝	一等	平	歌	a	開	ロウ-囉 4(3)羅(6)蘿(1)羅(2)ロヲ-囉 4(1)	4	13	
		平	戈	ua	合	ロウ-螺(5)	1	5	
宕攝	一等	平	唐	aŋ	開	ラン-浪①(4)狼(3)郎(5)娘(1)	4	13	
		去	宕	aŋ	開	ラン-浪②(4)			
		入	鐸	ak	開	ロ-落(22)樂①(13)絡(1)	3	36	

三等	平	陽	iaŋ	開	リヤン-棕(1)良(7)量①(7)樑(1)涼①7(6)糧(2)糧(1)サヤン-涼7(1)	7	26	
	上	養	iaŋ	開	リヤン-兩①31(30)	1	31	
	去	漾	iaŋ	開	リヤン-亮(5)量②(7)涼②7(6)兩②31(30)サヤン-涼7(1)	1	5	
	入	藥	iak	開	リヤ-略(3)	1	3	
梗 撮	二等	上	梗	aŋ	開	レン-冷(9)	1	9
	三等	平	清	iaŋ	開	リン-令①(16)	1	16
		上	靜	yaŋ	合	リン-領(6)	1	6
		去	勁	iaŋ	開	リン-令②(16)		
	四等	平	青	eŋ	開	リン-令③(16)伶(1)零①(1)蛤(4)靈(2)鈴(1)鶉(1)	6	10
		去	徑	eŋ	開	リン-令④(16)零②(1)		
		入	錫	ek	開	レ-歴(2)	1	2
	流 撮	一等	平	侯	əu	開	レ○ウ-樓(楼)(3)喽①(1)樓①(2)筊①(1)シ○ウ-蠅(1)	5
上			厚	əu	開	レ○ウ-喽②(1)筊②(1)		
去			候	əu	開	レ○ウ-漏(4)	1	4
三等		平	尤	iəu	開	リウ-流(10)留①(12)榴(1)	3	23
		上	有	iəu	開	リウ-柳(2)琉(1)	2	3
		去	宥	iəu	開	リウ-留②(12)		
深 撮	三等	平	侵	iɛm	開	リン-林(1)臨①(5)	2	6
		上	寢	iɛm	開	リン-凜①(2)	1	2
		去	沁	iɛm	開	リン-臨②(5)		
		入	緝	iɛp	開	リ-笠(3)立(6)鳩(1)	3	10
咸 撮	一等	平	談	am	開	ラン-藍(1)	1	1
		上	敢	am	開	ラン-攬(1)	1	1
		入	盍	ap	開	ラ-蟻(3)	1	3
	二等	上	賺	ɛm	開	レン-臉①(2)	1	2
		平	鹽	iɛm	開	レン-簾(2)鎌(1)	2	3
		上	鹽	iɛm	開	ケン-莖(1)	1	1
曾 撮	一等	入	德	ək	開	レ-勒(2)	1	2
		平	蒸	iəŋ	開	リン-菱(1)陵(1)綾(3)	3	4
		入	職	iəŋk	開	リ-力(21)	1	21
計						164	919	

- 注：・「リイ-麗(1)」は、原例が「麗春 ビジンサウ」で、「麗」の異体字である。
- ・「リイ-哩(7)」は、『広韻』『集韻』に未収で、『康熙字典』に「[玉篇]力忌切音吏」とある。
- ・「リン-瀾(1)」は、『広韻』などに未収、原例が「慳瀾的」の意味は「手緊的 シワキモノ」と同じである。『広韻』に「慳」が「慳也苦閑切」となり、また、「慳」は「鄙慳本又作吝」とある。同書では「瀾」「吝」が同じ音注「リン」となることから、本研究では「瀾」を「慳」と見なす。
- ・「ヲ-喇 2(1)」は、原例が「ヲ」(小曲・五更)「不來家你就喇天話」と「ヲ」(器用)「喇叭」である。「ヲ」は「ラ」の誤記。
- ・「樑」は原例が「樑頭 セキイタ」であり、「樑」の誤記、「樑」は『康熙字典』に「[字彙]呂張切」とある。
- ・「リヤン-兩」は 1 例未注。
- ・「涼-リヤン 7(6)サヤン 7(1)」は「呂張切 薄也亦寒涼也」で、原例が下記の通りである。
- 「サヤン」:「器用」涼傘
- 「リヤン」:「三字話」好生涼 涼得很 涼得緊
- 「六字話」請上後樓乘涼「常言」炎涼處處同「菜蔬」涼笋
- 「涼」に対する音注の 1 例「涼傘 ヒカラカサ」で、「サヤン」となっているのは明らかに「リヤン」の誤記である。

1.4 舌上音知組

多くの漢語方言では、舌上音・正歯音と結合する止摂の韻母が[i]から舌前母音[ɿ][ʮ]へと大きく変化したため、舌上音と正歯音については、止摂と非止摂に分けて検討する必要がある。全体的に知組の音注現象について、後述するように、同書では、舌上音知組、歯頭音精組、正歯音照組(二等莊組・三等章組)の字について、止摂に対する音注は他の摂の字と異なっている。日母も含め、1.4~1.7において、止摂と非止摂に分けて検討する。

1.4.1 止摂の場合

(1) 知母[t-]・徹母[tʰ-]

知母[t-]の所属字は、計 28 字種、延べ 171 例で、止摂の字は、計 6 字種、延べ 57 例である。音注は圧倒的に「ツ」が多く、開口字が「ツウ」、合口字が「ツイ」となるのは一般的である。徹母[tʰ-]の所属字は、計 16 字種、延べ 24 例である。止摂の場合は、計 4 字種、延べ 6 例であり、声符の「离」の類推による「リイ-螭(1)」以外、使用例は開口字で、「ツウ」音注となっている。

音注に反映される知・徹母は[ts-]である。現代南京音では[tɕ-][tɕʰ-]、『西儒耳目資』では[chi](=[tɕi])、[ʰchi](=[tɕʰi])である。杭州音は精組と同じ[ts-][tsʰ-]と発音し、開合の区別もないが、旧派蘇州音では開口字が[tɕ-][tɕʰ-]、合口字が精組と同じ[ts-][tsʰ-]となり、区別がある。『同文備考』では開口字が[tʃ-][tʃʰ-]、合口字が精組と同じ[ts-][tsʰ-]である。『同文備考』の止摂開口の知組は母音の舌尖母音化がまだ起きていなかったため、[tʃ-][tʃʰ-]を維持していた。しかし、正歯音などの部分の舌尖母音化がかなり進んでいる。この後、知組にも及んだ結果、[tʃ-][tʃʰ-]が精組[ts-][tsʰ-]へ合流し、今日のような状態となった。なお、蘇州の郊外ではまだ合流していない地点もある。『磨光韻鏡』では開口では全て「ツウ」「ヅウ」、合口は「チュイ」「ヂュイ」となり、一見して開口と合口が違うように見えるが、歯頭音の四等なども同じ「チュイ」「ヂュイ」となっていることなら、有坂(1938)や謝(2016)が批判したように、これはまさに文雄が韻図という枠組みの中で区別の失った開合の違いを示すためにとった人工的な措置であり、正しくは「ツイ」でなければならない。このように、止摂知組が開口ともに「ツ」となるのは杭州音の特徴の反映である。

但し、音注には、「ツ」の他、「ツ」「チ」二種類の音注をもつ知母の「知-ツウ 40(38)チイ 40(2)」「致-ツウ 6(4)チ 6(2)」が存在する。

「知-ツウ 40(38)チイ 40(2)」では、「知」は「陟離切 覺也欲也」である。「チイ」の例は、「長短話」の「^フ不知興居平安麼 ^フゴブジニテ御クラシ候フヤ」「^{チイ}知令郎令愛 ^{チイ}ゴシソクオムスメイゴ此間ブジニ候フヤ」である。「ツウ」音注の「^{トイフ}推不知 ^{ツウ}シラヌフリヲマル」(「三字話」)、「^フ不知天之高也 ^フ事ニハアタツテ見ネハ知ラヌト云フ」等が「チイ」音注の例とは、意味の違いが見られない。

「致-ツウ 6(4)チイ 6(2)」では、「致」は「陟利切 至也説文曰送詣」である。「チイ」の例は「四字話」の「^シ十分 ^シ嫖 ^シ致 ^シイカフウツクシヒ」と「小曲」の「^{ビヤ}四愛你 ^{ビヤ}人物的 ^{ビヤ}嫖 ^{ビヤ}致」となっている。「ツウ」音注の原例は「二字話」の「^{ツウ}致意 ^{ツウ}コトヅテ」、「四字話」の「^{ツウ}景致 ^{ツウ}多様 ^{ツウ}ケイシヨク多シ」「^{ツウ}多多 ^{ツウ}致意 ^{ツウ}コトツテイタス」、「長短話」「^{ツウ}你替我 ^{ツウ}多多 ^{ツウ}致意 ^{ツウ}他 ^{ツウ}デンゴンイタシタル由御申シ候へ」である。こちらも両音注に意味の違いが見られない。

散発的ではあるが、「チイ」の音注についてどう見るべきか。冠山の官話音によって編纂した語学学習書および『四書唐音弁』の南京音では知組は「チイ」と音注され、精組と対立していることが知られている。高松(1985)は『四書唐音弁』における南京音の「チイ」と浙江音の「ツウ」の違いについて、「チイ」が精組と知組、章組の対立を維持する南京音の特徴を反映するものであると指摘している。「チイ」は確かに南京音の特徴に符合はするが、一方、上述したように、北部呉方言を反映する『同文備攷』では知組は[ts-][ts'-]へ合流せず、[tʃ-][tʃ'-]を維持していた。「チイ」は[tʃ-][tʃ'-]とも一致するので、蘇州に近い北部呉方言の混入の可能性も否定できない。但し、南京音の反映だろうと、蘇州音の反映だろうと、なぜこうした例が混入しているか、合理的に説明することは難しい。

「知」「致」2字について、『三音正譌』では「ツ」音注となるが、「ツウ」音注と一致する。「チイ」音注は、高松(1985a)が指摘したように僅かながら南京音を反映する例の存在が確認された。

(2) 澄母 [d-]

澄母 [d-] の所属字について、計 56 字種、延べ 212 字である。止摂の字は、計 9 字種、延べ 21 例であり、濁音音注が圧倒的で、「ヅ」の音注となるのは一般的であり、開口字が「ヅウ」、合口字が「ヅイ」である。

精組と同じ、開合を問わず「ヅ」となるのは、濁音を失った南京音と完全に一致しないことは明白で、現代蘇州音の [z-] は摩擦音で、「ヅ」の破擦音とは完全に一致できず、『同文備攷』の [dʒ-] は前述したように、知組と精組の対立を示すもので、音注とは一致しない。「ヅ」と対応するのは、知組と精組の合流を反映する『磨光韻鏡』の「ヅ」で、無論現代杭州音の [dz-] から見ても矛盾はない。このように、澄母の音注も全体として杭州音の特徴を反映している。

「ヅ」の音注以外、「池-ヅウ 3(1) ツウ 3(1)」「遲-ヅウ 4(2) ギイ 4(1) チイ 4(1)」のように、濁音「ヅ」と清音「ツ」との両音注をもつ例と「ヂ-値 (5)」も存在している。また、清音「ツ」のみの例も見られる。

「池-ヅウ 3(1) ツウ 3(1)」は、澄母の「直離切 停水日池」と定母の「徒河切 庫池水名」である。原例は下記の通りである。

「ツウ」:ケンシウチンツウ「四字話」①堅守城池 堅ク城ヲ守ル
「ヅウ」:ピンウハツアハツウ「四字話」②並無差池 チガヒガナヒ

「ツウ」の例は初出であり、濁点の記入漏れの可能性が高い。

「遲-ヅウ 4(2) ギイ 4(1) チイ 4(1)」は「直尼切 徐也久也緩也」と「直利也 待也」である。原例は下記の通りである。

「ヅウ」:チハ^アハツウ「三字話」只怕遲 タブンオソカラフ
「五字話」ツエンニンダイライツウ怎恁地來遲 如何ンゾカヤウオソク來ルヤ
「チイ」:ヒウヤ^ウチイエン「四字話」休要遲延 延引イタス
「ヂイ」:ツインホユウヂイニイ「長短話」請勿有遲疑 必ス疑ヒ玉フヘカラズ

意味上に違いがなく、同じ「直尼切」と対応している。「チイ」となる例は南京音と対応する、または濁点の記入漏れだと考えられる。

ここでも僅かだが、知組と精組の対立を示す「ヂイ」の例が出ている。知組と精組の対立を有するのは南京音の特徴だが、南京音に清濁の区別がないの

で、「ヂイ」は南京音からの説明が得られない。上述したように知組と精組を維持しているのは蘇州に近い北部吳方言の特徴でもあり、清濁の対立を維持する吳方言なら、「ヂイ」は容易に説明することができる。事実、『同文備攷』の澄母は[ɟʑ-]となっている。このように、総合的に見て「チイ」「ヂイ」のような音注は南京音の反映というよりも蘇州音(北部吳方言)の反映と見た方がより音注の事実に近いと考えられる。

「ヂ-値(5)」は原例が下記のようにになっている。

「二字話」^{ヂ ジ}値日 トウバンノ日 「四字話」^{フ°ケ°ン°ヂ°ツ°ヱ°ン}不肯値錢 錢ニナラヌ
 「五字話」^{フ°ヂ°ハ°ン°ウ°エン°ツ°ヱ°ン}不值半文錢 半文ニモナラヌ
 「長短話」^{ル°ハ°ヂ°ヨ°ン°ヂ°ヤ°ウ°シ°ユ°ン°ツ°ウ°ズ°ウ°エ°ハ°}而重値堯舜之時也 再ヒ堯舜ノ御代ニアエリメデタシ
^{ヒ°ン°ヂ°ツ°ウ°ズ°ウ°}幸値此時 幸ニ此時ニアヒ

『広韻』に澄母去声の「直吏切 持也措也捨也當也」とあり、音注と一致しない。また、『集韻』に船母曾撰の「丞職切 措置也」と澄母曾撰の「逐力切 措置也」との入声の読みもあり、音注と一致する。南京音は清音の[tʂʅ]、蘇州音は[zəʔ]との濁音の入声音となり、『同文備攷』は[ɟʑi]となっていることから、「ヂ」は吳方言の声母の発音と一致するが、主母音が合わない。

なお、上記以外、「ツイ-槌(3) 鎚(1)」「ツウ-緻(1)」と、以下がその実例である。

「槌-ツイ(3)」:「器用」^{ルイツイ}樗槌 スリコギ (内に「小曲」2例)
 「鎚-ツイ(1)」:「器用」^{テツイ}鉄鎚 カナヅチ
 「緻-ツウ(1)」:「二字話」^{ツイツウ}清緻 ウツクシヒ

「槌」は「直追切 椎鈍不曲橈亦棒椎」(平声)と「馳偽切 蠶槌」(去声)である。「鎚」は「直追切 金鎚又權也文字音義從垂」である。2字とも上述の理由により、南京音は[tʂʅ'-]で、「ツ」とは明らかに対応しない。蘇州音も杭州音も濁音となるので、説明できない。濁点の記入漏れの可能性もあるが、声符「追-ツイ(5)」の類推による可能性が高い。また、「緻」は「直利切 密也」も同様で、濁点の記入漏れ以外、声符の「ツウ-致 6(4)」による類推の可能性もある。いずれにしても、この3字は澄母の読みを注したものではない。

上記の澄母止摂の字は、「池」に対する「ツ」音注は濁点の記入漏れ、「遲」に対する「チイ」は南京音と対応する一方、濁点の記入漏れの可能性も高い。「値」は説明できず、「槌鎚織」は類推によるものである。それ以外、開口字が「ヅウ」、合口字が「ヅイ」で、ともに「ヅ」の音注である。

「ヅ」の音注に反映される澄母は[dz-]である。現代南京音は[tʂ-][tʂ'-]で、蘇州音が[z-]と杭州音は[dz-]で、『三音正譌』でも「ヅ」となっていることから、音注は杭州音から説明できる。

このように、娘母以外の止摂の「知」「徹」「澄」三母の音注は、開口は「ツウ」「ヅウ」が主流で、「チイ」「ヂイ」となる例も散発的存在し、合口は「ツイ」「ヅイ」がであり、開合ともに「ツ」となるのは知組と精組が合流した杭州音の特徴を反映しているもので、開口で「チイ」「ヂイ」となるのは知組と精組の対立を維持する蘇州など北部呉方言の特徴から説明が得られることが明らかになった。

知組止摂の字に対する音注の対照状況は下記の表 4-4-1 に示している。音注は全体的に呉方言の特徴を反映している。

表 4-4-1 知組止摂の字の対照状況

声母	開口	南京音	呉方言		
			杭州	蘇州	
知 [t]	ツウ[tʂ-] チイ[tʂ'-] _(少)	[tʂʅ][tʂ'ʅ] ツ× チ○	[tʂʅ][tʂ'ʅ] ツ○ チ×	[tʂʅ][tʂ'ʅ] ツ× チ○	『同』[tʂi][tʂ'i] ツ× チ○
徹 [tʰ]	ツウ[tʂ-]				
澄 [d]	ヅウ[dz-] ヂイ[dʒ'-] _(少)	[tʂʅ][tʂ'ʅ]×	[dzʅ] ○	[zʅ] ×	『同』[dʒi] ○
声母	合口	南京音	呉方言		
			杭州	蘇州	
知 [t]	ツイ[tʂ-]	[tʂuəi][tʂ'uəi]×	[tsuei][ts'uei]○	[tsɛ][ts'ɛ]○	『同』 [tsuei][ts'uei]○
徹 [tʰ]	/				
澄 [d]	ヅイ[dz-]	[tʂuəi][tʂ'uəi]×	[dzuei] ○	[zɛ] ×	『同』 [dʒuei][dz-] ○

注：表の中、『同』は『同文備攷』の略称となる。下記同様。

4.1.2 止摂以外の場合

(1) 知母[t-]・徹母[t'-]

知母止摂以外の摂の場合、計 22 字種、延べ 114 例で、「チ」音注が一般的である。徹母非止摂の場合は、計 12 字種、延べ 18 例であり、近い字形の類推による「ゼ-拆(3)」¹¹³以外、梗摂二等の「ツエン-撐(1)」は「ツ」音注であり、それ以外の場合は三等字で、「チ」音注となっている。

「チ」・「ヂ」二種類の音注を有する「嘲-チヤ○ウ 2(1)ヂヤ○ウ 2(1)」について、「陟交切 言相調也」で、原例が下記のようにになっている。

「チヤ○ウ」:^{チヤ○ウスヤ○ウ}「二字話」嘲 咲 アザケリワラフ
「ヂヤ○ウ」:^{チヤ○ウフアン}「器用」嘲 風 シヤチホコ

清音声母の字で、現代南京音は[tʂ'au]、蘇州音は[zau]である。「嘲」は現代の蘇州音では濁音となっているが、『同文備考』は[tʂiao]、『磨光韻鏡』は「チヤ○ウ」となっていることから呉方言の元の読みは清音だったことが分かり、「チヤ○ウ」はこうした呉方言からも適切な説明が得られる。一方、「嘲風」は「嘲咲」とは違って、特殊な語でしばしば「潮」に間違えられ、「ヂヤ○ウ」はそうした字形が類似する「潮」(澄母)の音を注した可能性がある。

このように、「嘲-チヤ○ウ」が呉方言と対応でき、「嘲-ヂヤ○ウ」が「潮」を注する可能性がある。「嘲」と類推による「拆」以外、知・徹母に対して、梗摂二等の「撐」が「ツ」、それ以外の場合は全て「チ」の音注である。

「チ」の音注に反映される知・徹母は[tʂ-]である。止摂以外の知・徹母の場合は、南京音は[tʂ-][tʂ']、旧派蘇州音は[tʂ-][tʂ']、現代杭州音は

¹¹³ 「ゼ-拆(3)」は『広韻』に未収、『集韻』に徹母の「恥格切 説文裂也」と昌母の「昌石切 擊也」との次清の読みがある。「ゼ」音注はいずれの場合にも対応しないため、疑問点となる。また、原例は「拆本 モノデヲソシタ」「消拆 ソシタ」「拆本銭 モトデヲソシタ」となり、日本語の意味も合わない。同書には、「折-ツエ」もあり、定母の「杜奚切 禮記云吉事欲其折折爾謂安舒貌」、章母の「旨熱切 拗折」と禪母の「常列切 斷而猶連也 説文斷也又作嶺」とある。その原例は「折箭爲誓 箭ヲ折テ。チカヒヲナス」と「良賈不爲折 閱不市 ヨキ商人ハ。損失損亡アリト云ヘトモ不商ト云コトナシ」であり、『大漢和辞典』ではそれぞれ、「たつ」と「さしひく。へる。へらす。割引。」との意味と対応している。二つ目の例は同辞書でも例として挙げられ、「[注]折、損也」との説明があり、「拆」の用例の意味と一致している。このように、「ゼ」は「折」の同じ意味の禪母の「常列切」の音を注している可能性が極めて高い。また、「折-ツエ」も禪母の読みと対応できず、このように、「折」「拆」2字に対する音注はお互いに近い字形による誤記の可能性が高い。

[ts-][ts'-]である。『同文備攷』では[tʃ-][tʃ'-]で、『磨光韻鏡』でも「チ」と記されている。このように、音注「チ」は南京音と吳方言との双方に対応している。

「ツ」の音注となる梗攝二等の「擲-ツエン(1)」について、南京音は[tʂ'-]、『西儒耳目資』でも[tʂ'-]となり、旧派蘇州音は梗攝の字が[tʂ-]組読みとなるのも一般的である。一方、『同文備攷』は[ts'-]、『磨光韻鏡』は「ツエン」で記録されていることから、「ツ」の音注は吳方言と一致する。

(2) 澄母 [d-]

非止攝の所属字は、計 47 字種、延べ 191 字で、濁音音注の「ヂ」「ヅ」が多用であり、「ドン-幢(1)」も存在している。

表 4-4-2 澄母字(非止攝)の清・濁音注状況

項目		濁音音注	非濁音音注
清濁両音注を有する例	非小曲用例	チヨン-重 13(10)虫 14(13) ギヨ-逐 3(1) チユイ-住 10(8)除 5(3)厨 2(1) チャア-茶 16(8)ツア-茶 16(6) ヂン-程 6(5) チウ-綱 5(4) ヂヤ-着 24(17)著 10(2)	チヨン-重 13(3)チ°ヨン-虫 14(1) チヨ-逐 3(2) チユイ-住 10(2)除 5(2)厨 2(1) チャア-茶 16(1)ツア-茶 16(1) チン-程 6(1) チウ-綱 5(1) チヤ-着 24(4)著 10(4)
	小曲用例	ヂヤン-撞 3(2)丈 10(9) ヅァン-綻 3(2) ヂヤ-着 24(17)著 10(2)	チヤン-撞 3(1)(小曲)丈 10(1)(小曲) サ°ン-綻 3(1)(小曲) チヤ-着 24(2)(小曲)著 10(4)(小曲) チヨ-着 24(1)(小曲)
非濁音音注しない例		/	チ-躑(1) チヨ-躑(1) チウ-胃(1) チユイ-柱(2) チン-藪(1)陳(1)呈(1)繖(1)

注：・「逐-ギヨ 3(1)チヨ 3(2)」は、「直六切」(『集韻』「佇六切」)で、原例が下記の通りである。

「ギヨ」:^{カンギョウタア}「趕逐他 カンヲカンドウスル」

「チヨ」:^{チヨハ°ウミンチン}「逐包明釋 俵ゴトニフ°ウチヲアケ引ニスル」^{チヨウウコクスイウク}「逐個個搜 ヒトリクサガス」

『集韻』に定母の「亭歴切」(意味:「速也」)もあるが、明らかに音注と一致しない。また、『大漢和辞典』にある解釈を確認した上、表記例は「佇六切」読みの意味に所属するため、意味の違いが見られず、「ギヨ」音注は誤記であり、「チヨ」は濁音読み([z-])の蘇州・杭州音から説明できない。

・「ギヨ-軸(1)」は、通攝入声の「直六切 車軸」であり、原例が「器用」の「画軸^{ハフ°ギョ} カケモノ」となり、音注と対応しない。また、蘇州音は[dzioʔ]、杭州音は[dzoʔ][dzyɪʔ]との濁音入声の読みとなり、南京音は[tʂ-]と発音する。音注の濁音入声の特徴は蘇州・杭州音と対応するが、声母の対応が見られないので、誤記の可能性が大きい。

また、非濁音音注も見られ、具体的な使用例は表 4-4-2 に示している通りである。その中、「小曲」の所属例は 5 字種、延べ 10 字で、「チャ-着 24(2)著 10(4)」「チヨ-着 24(1)」、「チヤン-撞 3(1)丈 10(1)」、「サ°ン-綻 3(1)」となっている。非濁音音注を含む表記例は、以下の(i)「ヂ」・「チ」、(ii)「チ」、(iii)その他 の三種類に分けた。

(i)「ヂ」・「チ」

「重-ヂヨン 13(10)チヨン 13(3)」 「長-ヂヤン 24(10)チヤン 24(14)」の場合は声調点の部分で検討したように、それぞれの両音注は呉方言の特徴と一致する。「重」「長」以外、「ヂ」・「チ」をもつのは「住除厨程綱朝着著」である。

「住-ヂユイ 10(8)チユイ 10(2)」は、表記例が下記の通りである。

「チユイ」:シエハチユイチンキヤ「四字話」射住陣脚 テイテフ°チユイ 抵敵不住
「ヂユイ」:ジンフ°チユイ「三字話」忍不住 ツユウチユイタア、揪住他 レウチユイタア、摟住他 ハウチユイタア、抱住他
「四字話」ジンスヤウフ°チユイ忍咲不住 イクイス°エンチユイ一塊生住 サンサンチユイカイ 散散住開 リウケチユイ「器用」留客住

「住」は『広韻』に知母の「中句切 停手」と澄母の「持遇切 止也」との清・濁の両読みがあり、両読みの意味がほぼ同じである。「チユイ」の例は初出でなく、濁音音注が圧倒的に多いため、濁点省略された可能性が高い。また、知母の読みを示す可能性も排除できない。

「除-ヂユイ 5(3)チユイ 5(2)」の場合、「除」は澄母の「直魚切 階也又去也」(平声)と「遲倨切 去也」(去声)であり、原例が下記の通りで、「チユイ」の2例は初出でない。

「チユイ」:サンサ°ウチユイケンケン「四字話」③斬草除根 根ヲ切テ葉ニカラスト云フ
チユイハ°ウウイワン④除包未完 マダフウタイ引ヲシマハタ
「ヂユイ」:チユイヤウシユイツウ「四字話」①除要如此 ドフテモコフセネバナラヌ
チユイフイジユイツウ②除非如此 ドフテモコフセネバナラヌ
チユイヤウウコウライ「長短話」除要過來 是非是非御出ナサレテ

南京音は[tʂʰu]、杭州音は[dzu][dzɿ]、蘇州音は[zɿ]となり、いずれも陽平調である。『同文備攷』は[dʒy]で、『磨光韻鏡』は「ヂユイ」でもある。このように、音注は中古音去声の読みと対応せず、反映された音価は呉方言の特徴を反映し、「チユイ」は濁点省略されたと考えられる。

「厨-ヂユイ 2(1)チユイ 2(1)」では、「厨」は「直誅切」であり、原例が同頁のチヤウスエンタウクイチユイ「只要先到貴厨」チヤウクハンスエハチユイズウベンリヤウ「照管些厨事便了」で、「チユイ」は初出でないため、濁点省略されたと考えられる。

「程-ヂン 6(5)チン 6(1)」では、「程」は「直貞切」で、原例が以下のようになっている。

「チン」:^{ジヤヤ●ウエウツエンチン}「常言」若要^{キイチン}有^{ツエンチンヒ°ハ〇ウ}前程^{モツヲモ°ツエンチン}
「ゼン」:^{キイチン}「二字話」起程^{ツエンチンヒ°ハ〇ウ}「四字話」前程必好^{モツヲモ°ツエンチン}「常言」莫作没前程
「長短話」^{ツエンチンヒ°ユウダアハフヲ}前程必有大福^{ルウヲイツエンチンユウダアハフヲ}而謂前程有大福

「チン」の例は初出でないため、濁点が省略されたと考えられる。

「綯-ヂウ 5(4)チウ 5(1)」では、「綯」は澄母の「直由切 綯繆猶纏綿也」と透母の「土刀切 爾雅曰素錦綯」であり、原例が下記の通りである。

「チウ」:^{ソウクハンチウ}素光綯 「ヂウ」:^{ハア、ヂウ}花綯^{ソウヂウ}素綯^{メンヂウ}綿綯^{キエンヂウ}絹綯

全て「疋頭」所属の表記例で、「チウ」の例が初出ではないため、「チウ」は濁点が省略されたと考えられる。

「朝-チャ〇ウ 6(5)ヂヤ〇ウ 6(1)」は、『広韻』に知母の「陟遙切 朝廷也」、澄母の「直遙切 早也」とある。原文の用例は以下のようになっている。

「チャ〇ウ」:^{チャ〇ウサンモウスウ}「四字話」朝三暮四^{ラチモナヒフ}
「六字話」^{キンチャ〇ウテンキイフ°ハ〇ウ}今朝天气不好^{今朝はテンキガワルヒ}
^{ミンチャ〇ウコンライフ°ギイ}明朝恐來不企^{明朝は來合サレマヒ}
^{ヨンツヤンイチヤ〇ウ}「常言」用將一朝^{用ルハ一朝ニアリ}
^{インライキンチャ〇ウ}「長短話」因爲今朝^{…今朝…}
「ヂヤ〇ウ」:^{ヂヤ●ウエ、キユイロ}「長短話」朝野俱樂^{…貴賤共ニタノシミテ…}

「チャ〇ウ」は澄母の意味と合うが、読みと一致しない。『同文備考』では [dʒiao](臣近君)・[tʃiao](朝暮)両読みとなり、同書の場合と同じである。このように、「朝」に対する両音注は呉方言の特徴を反映している。

「着-ヂヤ 24(17)チャ 24(6)」「小曲」2例」と「著-ヂヤ 10(2)チャ 10(8)」の例は、表 4-4-3 に示している。「着」について、声調点の部分で検討したように、入声点付きの^{チャジンライ}「着人來」は入声全清の「張略切」、「ヂヤ」は全濁の「直略切附也」と対応し、「ヂヤ」は呉方言と一致している。「チャ」は南京音から説明できる一方、濁点の記入漏れの可能性もある。

「著」は延べ 10 例、音注は「チャ(8)ヂヤ(2)」である。その中、4 例は「小曲」所属で、「チャ」でもある。「火著起來」と「搭著云梯」は同頁の使用例である。

意味には「着」の表記例の使い方とは違いが見られない。こうして、「著」は清音音注の数が多いが、「着」と同じ、全濁の「直略切 附也」と対応している。このように、「^{ジャンチャ}上著」の「チャ」は初出であるが、「小曲」以外、2字に対する音注が意味による書き分けが見られず、そして、濁音音注が圧倒的が多いため、「^{ジャンチャ}上著」の「チャ」が濁点の記入漏れ、それ以外の場合の清音音注は濁点の省略による可能性がある。

表 4-4-3 「著」「着」2 字の例¹¹⁴

項目	「著」表記例	「着」表記例
「チャ」	二字話: ^{ジャンチャ} 上著 ヨキハカリコト 四字話: ^{カキキライ} 火著起來 ^{カキカケタ} 火車カケタ ^{カキコト} 搭著云梯 ^{カキカケル} ハシコヲカケル 五字話: ^{カキキライ} 且不要著气 ^{カキキライ} 先ツセキメンヲスルナ 小曲: <u>靠著誰 教奴靠著誰</u> <u>打著問他 問著打他</u>	三字話: ^{カキ} 着○人來 ^{カキ} 人ヲヨコス ^{カキ} 没著落 ^{カキ} ヲテツキガナイ 六字話: ^{カキ} 他愛著象棋哩 ^{カキ} 彼ハシヤウギヲサスコトガスキ也 ^{カキ} 我要和你著棋 ^{カキ} 我汝トケンガシタヒ 小曲: <u>睡不着 睡也睡不着</u>
「ヂヤ」	三字話: 央摸著 五字話: 摸不著性格	三字話: ^{カキ} 用不着 ヨウニタハヌ ^{カキ} 猜得着 ^{カキ} スイサツシタ ^{カキ} 向着火 ^{カキ} 火ニアタル ^{カキ} 烘着手 ^{カキ} 手ヲアブル ^{カキ} 買着了 ^{カキ} カヒアテタ ^{カキ} 賣不着 ^{カキ} ウリアテス ^{カキ} 估不着 ^{カキ} 子クミガシアテラレス 四字話: ^{カキ} 穿着襪子 ^{カキ} タビヲハク ^{カキ} 穿着草鞋 ^{カキ} ザウリヲハク ^{カキ} 搵不着了 ^{カキ} ト、カヌ ^{カキ} 搵得着了 ^{カキ} ト、ク 五字話: ^{カキ} 帮着大老官 ^{カキ} 大ジンニタイコヲモチアテタ 六字話: ^{カキ} 必須快快去着 ^{カキ} 必ス早く行ケ ^{カキ} 安排着要議事 ^{カキ} 事ヲ議セント欲ス ^{カキ} 後又着手待人 ^{カキ} ウシロ手シテ人ヲアシロフ 長短話: ^{カキ} 尚幸希没有火着 ^{カキ} 尚幸ニ火事アラス ^{カキ} 不意撞着你的阿兄 ^{カキ} フト汝舎兄ニ行逢ヒ
「チヨ」		小曲: <u>土兒愛着你</u>

¹¹⁴ 意味によって分類される「著」「着」2字の使用例の状況は下記の補充表 4-4-3-1 である。この表から分かるように、混乱が存在しているが、「チャ」は動詞として使う場合が多く、「ヂヤ」は助詞として用いる場合が多い。なお、下線を引いているのは「小曲」の例である。

表 4-4-3-1 意味別の「著」「着」2 字の例

『漢語大字典』	『廣漢和辞典』	意味	「著」表記例	「着」表記例
			『漢語大字典』	『廣漢和辞典』
附着	つく。くつつく。付着する。			チャ: 没着落
围棋下子	碁石をおく。ばくちを打つ。			チャ: 我要和你着棋 他愛着象棋哩
燃烧	/	チャ: 火著起來		ヂヤ: 尚幸希没有火着
发出; 发生	/	チャ: 且不要著气		
命令; 打发	しめる。させる。使役の意を表す。			チャ: 着人來
词綴		ヂヤ: 摸不著性格		チャ: <u>睡不着 睡也睡不着</u> ヂヤ: 買着了 用不着 猜得着 賣不着 估不着 搵不着了 搵得着了 不意撞着 必須快快去着
助詞	助辞。動作を表すことばにつく。	チャ: 搭著云梯 ヂヤ: 央摸著 <u>靠著誰 教奴靠著誰</u> <u>打著問他 問著打他</u>		チヨ: <u>土兒愛着你</u> ヂヤ: 向着火 烘着手 穿着袜子 穿着草鞋 帮着大老官 安排着要議事 後又着手待人
	その他	チャ: 上著		

(ii)「チ」

「チュイ-柱(2)」は原例が「器用」所属の「^{ツエンチュイ}箏柱 コトヂ」「^{バウチュイ}抱柱 ブンマハシ」である。『広韻』に知母の「知庾切 柱夫草一名搖車也」と澄母の「直主切 爾雅曰楹謂之柱」とある。南京音は[tʂʰu]、杭州音は[dzu][dzɿ]、蘇州音は[zɿ]となり、『同文備攷』は[dʒy]で、『磨光韻鏡』は「ヂユイ」でもある。このように、音注「-ユイ」は南京音でなく、吳方言の特徴を反映し、「チュイ」は濁点の記入漏れだと考えられる。

「チ-躑(1)」は「直炙切」、「チヨ-躑(1)」は「直録切」で、2字の原例が「^{チ チヨ}躑躑」である。「チウ-胃(1)」は「直祐切」、原例が「^{キヤチウ}甲胃」である。「チン-蔞(1)」は原例が「^{インチン}茵蔞」であり、『広韻』に未収で、『集韻』に「池鄰切 葶蘆菜」¹¹⁵となる。「チン-陣(1)」は「直刃切」、原例が「^{シエ、チュイチンキヤ}射住陣脚」である。「チン-呈(1)」は「直正切」「直貞切」、原例が「^{シユイチン}書呈」である。これらの字は、いずれの場合も1例のみで、清音音注は南京音と対応する一方、濁点の記入漏れの可能性も排除できない。

「チン-^{チン}鱸」は、原例が魚名の「^{チン}鱸魚(チンイユイ) ヲコジ」であり、辞書に未収録。常用漢字ではないため、その読みは「鱸」(直稔切)などの同じ声符による類推の可能性がある。

(iii)その他

「虫-ヂヨン 14(13)チ°ヨン 14(1)」の場合、同書では「虫」が「^ム虫」「^ム𧈧」「^ム𧈩」との3種類の字体があり、意味の違いが見られないため、本研究では同じ「虫」と扱う。原例は「^{ワチ°ヨン}滑虫」で、「直弓切」「直眾切」である。右肩点「°」の部分で検討したように、「チ°ヨン」は「ヂヨン」による誤記の可能性が大きい。

「茶-チャア 16(1)ヂヤア 16(8)ヅア、16(6)ヅア 16(1)」は『広韻』に「木茶」の俗字で、「宅加切 春藏葉可以爲飲」で、原例が下記の通りである。

「ヅア」:^{シヤンツア}「樹竹」山茶

「ヅア、」:^{ヨンヅア、}「二字話」^{パ°ウヅア、}用茶 ^{ツエンヅア、}泡茶 ^{ナア、ヅア、ライ}煎茶 「三字話」^{シヤイシヤイツア、}拿茶來 ^{シヤイシヤイツア、}灑灑茶

「四字話」^{キヤ°ウリヤ°ウヅア、エン}攪了茶烟

¹¹⁵ 『集韻』に「地鄰切」とあるが、『康熙字典』に『集韻』池鄰切音陳 茵蔞也」との説明があり、「池鄰切」が正しい発音となる。

「チャア」:「器用」^{チャアビン}茶瓶
「ヂヤア」:「器用」^{チャアウハ}茶壺 ^{チャアクハン}茶罐 ^{チャアト}茶托 ^{チャアベエン}茶盆 ^{チャアチヨン}茶鍾 ^{チャアワン}茶碗 ^{チャアスエン}茶筴
「果瓜」^{チャアルウ}茶兒

「チャア」は、「器用」所属の原例の「^{チャアウハ}茶壺 ^{チャアビン}チャビン」「^{チャアビン}茶瓶 同上」のように、明らかに濁点を省略したものである。「ツア」は原例が「^{シヤンツア}樹竹」の「^{シヤンツア}山茶 ツバキ」で、「^{ヨンツアハ}用茶 ^{パウツアハ}チャヲマイレ」「^{パウツアハ}泡茶 ダシチャヲセヨ」等と意味の違いがなく、「ハ」の記入漏れによるものと考えられる。よって、「茶」に対する音注は「ヅアハ」「ヂヤア」に集約される。「ヅアハ」については、前述したように知組二等の多くが精組と合流するのは杭州音の特徴であり、「茶」が所属する仮掇も合流した掇の一つであることから見て、杭州音の特徴を反映するものであることが分かる。一方、「ヂヤア」の場合、『同文備攷』の遐韻に[dza]とあるが、「^ト転為字遐([dza])」という注記が付いている。恐らく元は丞母[dʒ]に入れるべきだったが、何らかの理由で字母[dz]の方に入れられたと考えられる。丞母[dʒ]だと「ヂヤア」と問題なく対応する。

「ドン-幢(1)」は、原例が「^{ドンハン}幢幡 ハタ」であり、澄母の「^ト宅江切 旛幢釋名曰幢幢也其兒兒幢幢然也」(平声)と「^ト直絳切 后妃車幢」(去声)で、音注と対応しないが、『集韻』に音「^ト徒東切」で、「^ト湏容車幢帷也」とあり、発音が音注と合うが、意味が合わない。また、蘇州音は濁音の[z-]、杭州音は濁音の[dz-]、南京音は清音の[tʂ'-]と発音するので、いずれの場合も説明できない。声符の「童-ドン(1)」の類推による可能性が高い。

上記のように、澄母非止掇の字について、「住除厨程綱柱」に対する清音音注は、いずれも初出ではないため、濁点が省略された可能性が大きい。「住」は知母読みと対応する可能性もある。「チ」の音注となる「^ト躑躅胃蔭陣呈」は南京音と対応する一方、濁点の記入漏れの可能性も排除できない。「^ト幢^ト儻」は類推による可能性があり、「^ト虫-チ°ヨン」は誤記によるものである。「茶」に対する両音注は呉方言から説明できる。これらの清音音注の例以外、全ての字は濁音音注となり、「ヂ」「ヅ」音注である。

上述した仮摂の「茶」を除き、山摂の「綻-ヅアン」、効摂の「棹-ヅア〇ウ」、梗摂の「擇-ヅエ」、咸摂の「賺-ヅアン」の二等韻の音注も「ヅ」で、それ以外の江摂等の二等韻の字および全ての三等韻の音注は「ヂ」となっている。

二等の知組の内、呉方言では精組と合流するのは仮摂、梗摂、山摂、効摂、咸摂などであり、仮摂の「茶」以外、「綻-ヅアン」は山摂、「棹-ヅア〇ウ」は効摂、「擇-ヅエ」は梗摂、「賺-ヅアン」は咸摂で、いずれも精組に合流する摂に所属している。事実、「綻-ヅアン」は『同文備攷』が[dzan]、『磨光韻鏡』が「ヅアン」、「棹-ヅア〇ウ」は『同文備攷』が[dzao]、『磨光韻鏡』が「ヅ」の音注で、「擇-ヅエ」は『同文備攷』が[dzək]、『磨光韻鏡』が「ヅエ」、「賺-ヅアン」は『同文備攷』での読みが確認できないが、『磨光韻鏡』が「ヅアム(=ン)」となっている。よって、これらの字に対する「ヅ」は呉方言の特徴を反映しているということが分かる。

一方、二等韻の字であっても江摂の「撞」「濁」の音注は「ヅ」ではなく、「ヂ」となっている。「撞」は『同文備攷』が[dʒaŋ]、『磨光韻鏡』が「ヂユアン」、「濁」は『同文備攷』が[dʒak]、『磨光韻鏡』が「ヂユア」となり、ともに「ヂ」の音注と対応する。また、各摂の三等の字は『同文備攷』が[dʒ-]、『磨光韻鏡』が「ヂ」ともなっていることから、江摂二等と各摂三等の字に対する「ヂ」の音注も呉方言の特徴と一致している。これは江摂の場合、知組が精組と合流せず、正歯音三等と合流していることを反映している。

このように、澄母非止摂の字に対する「ヅ」「ヂ」音注はともに呉方言の特徴を反映している。

表 4-4-4 非止摂の表記例の音注の書き分け状況

分類	「チ」[tʃ-]・「ヂ」[dʒ-]		「ツ」[ts-]・「ヅ」[dz-]
	二等	三等	二等
知母	「チ」江効	「チ」通遇臻山効宕梗深	
徹母	「チ」効	「チ」通遇宕流深咸	「ツ」梗
澄母	「ヂ」江	「ヂ」通遇臻山宕梗流深曾 効三「ヂヤ〇ウ-朝兆」	「ヅ」山梗咸假(「茶」) 効二「ヅア〇ウ-棹」
南京音 との対応	[tʃ-][tʃʰ-]		
	知・徹母「チ」〇 澄母「ヂ」×		×
呉方言 との対応	蘇州	知・徹母 『同』[tʃ-][tʃʰ-] 〇 澄母 『同』[dʒ-] 〇 (旧派蘇州音 [tʃ-][tʃʰ-][z])	知・徹母 『同』[ts-] 〇 澄母 『同』[dz-] 〇 (旧派蘇州音 [ts-][tsʰ-][z])
	杭州	知・徹母 『磨』「チ」 〇 澄母 『磨』「ヂ」 〇	知・徹母 『磨』「ツ」 〇 澄母 『磨』「ヅ」 〇

注：表の中、『磨』は『磨光韻鏡』の略称となる。下記同様。

表 4-4-4 のように、娘母以外、知組の非止摂の二・三等の字に対して、音注に「ツ・ヅ」と「チ・ヂ」との書き分けが見られている。仮摂二等の「茶」を除き、江・效摂以外の二等字は、「ツ・ヅ」と記されている。これに対して、他の三等の字と江・效摂二等の字の場合は、「チ・ヂ」で注されている。表から分かるように、知組の非止摂の字の音注は全体的に呉方言の特徴を反映している。

4.1.3 娘母の場合

娘母 [ŋ] の所属字は計 18 字種、延べ 164 字であり、「撓-キヤ○ウ(1)」「賃-ジン(1)」2 例以外、泥母と同じ、ナ行の音注となっている。

「撓-キヤ○ウ(1)」は、「呼毛切」の曉母と「奴巧切」の娘母との読みがあり、同書曉母字はハ行音注となっているため、「キヤ○ウ」は「キヤ○ウ-僥澆驍」等の声符類推による可能性がある。

「賃-ジン(1)」は、原例が「賃隻船 舟ヲカル」である。『広韻』に「乃禁切」で、音注と対応しないが、『集韻』に「如鳩切 以財雇物」とあり、音注と一致している。このように、「ジン」は日母の読みを注していると考えられる。

このように、「撓-キヤ○ウ」は類推によるもの、「賃-ジン(1)」は日母の読みを注するもので、どちらも娘母の音とは無関係である。娘母の字に対して、音注はナ行である。

娘母は、南京音では泥母に合流して [n-] となったが、前節で述べたように [n-] が来母 [l] と混同している。蘇州音と杭州音はともに [ŋ-] で、[n-] とやや違うが、前節で述べたように、ナ行で示すのに問題がない。ナ行の音注は、蘇州音、杭州音と矛盾なく対応している。このように、娘母 [ŋ] に対するナ行音注も蘇州・杭州音に一致している。

以上から、娘母を含め、知組の音注と全体的に呉方言の特徴を反映していることが分かる。

止撰以外	22	114	12	18	47	191	/	/
------	----	-----	----	----	----	-----	---	---

注：・「置」は「陟吏切 安置也驛也設也説文赦也」である。原例は「未知怎生措置 ウイツウツァンズエンツウツウ イカゝサバキ候フヤ」「置酒歛待來客 ツエツウツウツァンタイライキ 酒ヲ設ケテ客ヲモテナス」となり、意味上では 2 例に違いが見られないため、「ツユウ」音注となるのは直後の「酒」に対する「ツユウ」音注の影響を受けたのではないかと考えられる。

・「チ-蛭(1)」は、原例が「蛭子 チツウ ヒル」である。『広韻』に章母臻撰の「之日切 水蛭」、知母臻撰の「丁悉切 蛭蝮」と端母山撰の「丁結切 水蛭」と三種類の読みがあり、前述したように、端母の字に対して、夕行音注が一般的であるため、「チ」は端母読みと一致できず、知母の読みと一致している。

・「遭」は原例が「長短話」所属の「常自嗟命運之迢遭 チヤンツウツァエハミンイユンツウチユンチエン」である。『広韻』に知母の「張連切」と澄母の「除善切」「持碾切」があり、意味上では、知母の方は「迢遭也又移也」となり、一致している。

・「リイ-螭(1)」は、原例が「龍魚」所属の「螭兒 リイルウ エ、リヤウ」である。「丑知切」であるため、明らかに「リイ-璃離籬」の同じ声符の「离」の類推によるものと考えられる。

・「ツエン-磔(1)」は原例が「二字話」所属の「硬 **磔** コハヒ」である。『康熙字典』に未収。しかし、近い字形の「擗」字に「俗擗字」との解釈があり、「擗」は『集韻』に「中庚切 柱也」である。例の意味上から、本研究で「**磔**」を「擗」とする。

・「ヂェン-傳(3)」について、「傳」は『広韻』に澄母の「直攀切 轉也」(平声)「直戀切 訓也」(去声)と知母の「知戀切 郵馬釋名曰傳傳也」(去声)との読みがある。原例は「未嘗傳授 ウイヂヤンヂェンジュ マダデンジュセヌ」「悪事傳千里 ワズウヂェンツァンリイ アシキコトハ千里の外エ聞ユ」「不可過信傳言 フ'ユウコウスインヂェンエン アマリ傳ヘ云フコトヲ信ンズルナ」であり、意味上では澄母読みの「轉也」という意味と一致し、つまり、「ヂェン」音注は澄母平声の読みと対応している。

・「ヂ-姪(2)」は原例が「親族」所属の「姪兒」「姪女」である。『広韻』に澄母の「直一切」(意味:「兄弟之子」と)定母の「徒結切」(意味:「姪娣公羊傳曰兄之子」と)あり、意味上違いがない。同書の定母を含む端組の字は「ヂ」以外のダ行で注されているため、「ヂ」音注は澄母の読みを注していると考えられる。

・「ゼン-沈(1)」は原例が「沈吟 ヂンニン シアンスル」である。『広韻』に澄母の「直深切」「直禁切」と書母の「式任切」とあり、書母読みの意味「国名古作邳」が明らかに使用例と一致しないため、「ゼン」音注が澄母の読みを注している。

・「ゼン-沉(3)」は原例が「沉香 ヂンヒヤン」「各各沉醉 ココヂンツイ」「沉吟半晌 ヂンニンハ'ンシヤン」である。『広韻』に「沈」にの後に「沉俗」と、「沉」が「沈」の俗字であることを示している。

1.5 齒頭音精組

1.5.1 止摂の場合

(1) 精母 [ts-] と清母 [ts'-]

精母 [ts-] の所属字は計 85 字種、延べ 623 例であり、清母 [ts'-] の所属字は計 69 字種、延べ 337 例である。具体的な使用例は表 4-5 に纏めている。

両声母の止摂所属字は、精母は計 7 字種、延べ 191 例であり、清母は計 5 字種、延べ 42 例である。音注は知組と同じ、開口字が「ツウ」、合口字が「ツイ」となり、ともに「ツ」音注であり、南京音、蘇州音、杭州音の [ts-][ts'-] と対応する。

(2) 從母 [dz-]

從母 [dz-] の所属字は計 65 字種、延べ 414 例である。

止摂の字は、計 7 字種、延べ 60 例である。「瘁-ツエ(1)」以外、開口字で、対応する音注が「ヅウ」となるのは一般的である。精・清母と清濁ではっきりと区別されている。清濁の対立を維持するのは呉方言である。また、清音音注となる例も存在している。

「自-ヅウ 43(38) ツウ 43(5)」「字-ヅウ 6(5) ツウ 6(1)」と清・濁両音注をもっている例がある。「自」は從母の「疾二切」で、「ツウ」と「ヅウ」(一部)の表記例は下記の通りである。

「ツウ」:^{フ°}「四字話」^{ギウツウ}不^テ求自得
「常言」^{センイ、ツウイ}善以自益 ^{ライ、ツウソラン}惡以自損 ^{ツウズウチエ、フ°}自是者不彰^{チヤン}
「長短話」^{チヤンツウツエ、ミンイエンツウ}常自嗟命運之^{ウチエン}迍^{チエン}遭
「ヅウ」:^{ヅウサ°}「三字話」自贊自 ^{ヅウユウダ○ウライ}「四字話」自有道理 ^{ヅウユウライライ}自有理會 ^{ヅウユウチユイチヤン}自有主張

「字」は「疾置切」で、原例が下記のようにになっている。

「ツウ」:^{イツウキエン}「龍魚」一字鯨 ^{ホンカマス}ホンカマス
「ヅウ」:^{ライスエ、チンヅウ}「四字話」会寫真字 ^{センシユイサ°}善書艸字 ^{シモウミン}什麼名字 ^{マイロンシツウ}賣弄識字
「器用」^{ヅウツウ}字紙

このように、「自字」2字とも、「ツウ」は初出ではないことから、濁点が省略されたものと考えられる。

なお、「瘁-ツエ(1)」は原例が「四字話」の「^{ス^スエンリヤ^ウツエツウ}生了瘁子 ネフトガデケタ」であり、『広韻』に「秦醉切 病也」とあり、従母止摂に属する。短音節型の「ツエ」は入声字の音注特徴であり、声母と韻母とのいずれも音注と一致しない。同書の「器用」に所属する「焯-ツエ(1)」のように、同じ声符「卒」の類推による可能性がある。

上記、従母止摂の字について、「字自」2字は濁点が省略されたもので、「瘁-ツエ」は声符の類推によるものである。これ以外の場合、開口字となり、全て「ヅウ」音注である。

「ヅ」が反映された従母は[dz-]である。南京音は[ts-][ts'-]となり、『西儒耳目資』も同じであるが、蘇州・杭州音では[z-]と発音する。一方、『同文備攷』は[dz-]となり、同書の「ヅ」音注と一致する。『磨光韻鏡』と『三音正譌』も「ヅ」で記されている。このように、「ヅ」の音注は明らかに呉方言の特徴を反映している。

(3)心母[s-]

心母の所属字は計 119 字種、延べ 717 例である。

止摂の字は、計 13 字種、延べ 85 例である。「スイ-雖 10(9)ツイ-雖 10(1)」が合口字であり、それ以外は開口字で、音注が全て「スウ」となっている。

「雖-スイ 10(9)ツイ 10(1)」は、心母の「息遺切」しかなく、原例が下記の通りである。

「ツイ」:^{ツイツエズウコウフ^イ}「長短話」雖則是個不意

「スイ」:^{センズウスイタン}「常言」善事雖貪

「長短話」^{スイゼンジュイツイウ}雖然如此 ^{ゴウスイライヒヨ}我雖爲學 ^{スイツエヤンフイスエ^{スウ}}雖則楊妃西施 ^{スイゼンジュイツイウ}雖然如此
^{ゴウスイユイロウ}我雖愚鹵 ^{スイツエジュイツイウ}雖則如此 ^{ワンズ^スエンズイユウスヤ^{ウツエ}}晚生雖有小疾 ^{ニイスイツエンジフ^{ライ}チヨンライ}你雖千日不來充會

心母止摂の字は開口・合口を問わず、南京・蘇州・杭州音のいずれも[s-]と発音し、『西儒耳目資』も『同文備攷』も[s-]となり、『三音正譌』では開口も

「ス」となっている。このように、音注は[s-]を示すものであるため、破擦音を示す「ツイ」がそれと一致できず、誤記の可能性が高い。

このように、心母止摂の字は、開口字が「スウ」、合口字が「スイ」で、南京・蘇州・杭州音のいずれにも対応している。

(4) 邪母 [z-]

邪母 [z-] の所属字は計 26 字種、延べ 85 例である。

止摂の場合、計 6 字種、延べ 28 例であり、開口字の場合は「ヅウ」「ズウ」、合口字の場合は「ツイ」音注である。「スウ-寺(1)」は「小曲」の例である。それ以外の異例は、清・濁両音注をもつ「辭-ヅウ 9(8) ツウ 9(1)」「遂-ツイ 4(3) ツイ 4(1)」と清音音注の「穂-ヲイ(1)」である。

「辭-ヅウ 9(8) ツウ 9(1)」は「似茲切」であり、原例が下記の通りで、「辭」「辞」の二種類の字体が使われ、本研究で「辭」に統一する。

「ツウ」:^{ツウリヤ○ウ チ スウ}「四字話」辭了職事
 「ヅウ」:^{カ○ウヅウ ヅウキヤ トイツウ クウヅウ}「二字話」告辭 辭却 推辭 苦辭
 「四字話」^{ヒウヤ○ウヅウキヤ クウ ヅウ フト}休要辭却 苦辭不脱
 「長短話」^{キエブコウトイズウヅウキヤ トズウヅウキヤ}決不可推事辭却 託事辭却

「ツウ」は初出でないため、濁点が省略された可能性が高い。「遂-ツイ 4(3) ツイ 4(1)」は「徐醉切」であり、原例が以下のようにになっている。

「ツイ」:^{コンチンミンツイ}「四字話」①功成名遂
 「ツイ」:^{コンチンミンツイ}「四字話」②功成名遂 ^{イ、ツイソウツウチエ、ギ トウ}「長短話」以遂素志者極^{ツイヤ○ウタア、タ○ウ}遂邀他到

「ツイ」は初出であるが、「四字話」に同じ語「功成名遂」に「ツイ」音注もあるため、「ツイ」は濁点の記入漏れの可能性が高い。

「穂-ヲイ(1)」は、原例が「米谷」所属の「穂子」^{ライツウ}である。反切の「徐醉切」は、音注と一致しない。「ヲイ」は声符「惠-ヲイ」の類推によるものと考えられる。

上記の邪母止摂の字について、「辭-ツウ」は濁点の省略、「遂-ツイ」は濁点の記入漏れ、「穂-ヲイ」は類推によるものである。この 3 例を除き、開口字が

「ヅウ」「ズウ」、合口字が「ツイ」で、ともに濁音であり、清濁の区別を示している。

邪母は音注が「ヅ」「ズ」の二種類ある。呉方言の歯音系の全濁声母は古く分裂と統合の変化が起きており、現代蘇州音が[z]の一種類しかないが、『同文備攷』が[dz-][z-]の二種類がある。杭州音に関しては、『磨光韻鏡』は韻図の制約上、一つの読みしか表示できず、「ズ」となっているが、現代音では[dz-][z-]の二種類が残っている。このように、邪母に対する二種類の音注は蘇州音と杭州音と対応する。

このように、精組止摂の場合、精・清母は開口字が「ツウ」、合口字が「ツイ」で、心母は開口字が「スウ」、合口字が「スイ」である。これに対して、従母は、全て開口字で、「ヅウ」であり、邪母は開口字が「ヅウ」「ズウ」、合口字が「ツイ」となり、ともに濁音音注である。表 4-5-1 は精組止摂の字の対照状況を示している。清濁の区別がある精組止摂に対する音注は呉方言の特徴を反映している。

表 4-5-1 精組止摂の字の対照状況

声母	開口	南京音	呉方言		
			杭州	蘇州	
精 [ts]	ツウ[ts-]	清音○	清音○	清音 ○	『同』 清音○
清 [tsʰ]	ツウ[ts-]	([tsɿ][tsʰɿ])	([tsɿ][tsʰɿ])	([tsɿ][tsʰɿ])	([tsɿ][tsʰɿ])
従 [ɗ]	ヅウ[dz-]	清音× ([tsɿ][tsʰɿ])	濁音 [zɿ]×	濁音 [zɿ]×	『同』 濁音 [dzɿ]○
心 [s]	スウ[s-]	[sɿ] ○	[sɿ] ○	[sɿ] ○	[sɿ] ○
邪 [z]	ヅウ[dz-] ズウ[z-]	清音× ([sɿ])	濁音 [dzɿ][zɿ] ○	濁音 [zɿ] ○	『同』 濁音 [dzɿ][zɿ]○
声母	合口	南京音	呉方言		
			杭州	蘇州	
精 [ts]	ツイ[ts-]	清音○	清音○	清音○	『同』 清音○
清 [tsʰ]	ツイ[ts-]	([tsuəi][tsʰuəi])	([tsuei][tsʰuei])	([tsɿ][tsʰɿ])	([tsuei][tsʰuei])
従 [ɗ]	/	/	/	/	/
心 [s]	/	/	/	/	/
邪 [z]	ツイ[dz-]	清音× ([suəi])	濁音 [dzuei] ○ [zuei]	濁音 [zɿ] ×	『同』 濁音 [dzuei]○

1.5.2 止摂以外の場合

(1) 精母 [ts-] と清母 [ts'-]

非止摂の字の場合、精母は計 78 字種、延べ 432 例であり、清母は計 64 字種、延べ 295 例である。精 [ts-]・清 [ts'-] 両声母の字に対して、主に「ツ」の音注となり、「ツ」以外、「サ°」「サ」(≠[ts])もあるが、「サ°」について、既に第三章第四節で述べたように、「ツア」(=[tsa])にあたるものであり、「サ°」「サ」両音注を有するのは「哉遭早采艸猜」6 字は、「サ」が右肩点の記入漏れと考えられる。また、濁音音注「ヅ」か「ジ」の表記例と清母の「チ-七(11)」も存在している。

精母の「ヅヲ-鏃(1)」は原例が「^{スウツヲ}矢鏃 ヤノ子」であり、『広韻』に精母の「作木切」で、音注と一致しない。『集韻』に莊母の「側角切」もあり、意味も「矢鏃」で、対応しているが、音注の濁音とは合わない。声符「族-ヅヲ(1)」による類推と考えられる。よって、「ヅヲ」が精母に対する音注ではないことが分かる。

清母の「ジョン-匆(4)」の場合、「匆」は原例が「^{ジョンマンテキン}匆忙得緊」「^{チ ジンジョンマン}直恁匆忙」「^{ゴウ}我有事体匆忙」「^{ユウズウテイジョンマン}賢弟你既有事^{ヒエンデイニイキイユウズウジョンマン}匆忙」である。『広韻』に未収。『漢和大辞典』に「『説文通訓定聲』匆、説文匆所以趣民、故遽僞勿勿按後人作匆匆則用恩字下云、多遽恩恩也、則正字當作恩、疑未能定。」とあり、「恩」は、『広韻』も未収で、『康熙字典』に「[亦作忛俗作匆非]とあり、『広韻』に「忛」は「忽」の俗字で、「忽」は清母通摂の「倉紅切 速也」一等の字である。この字の声母は、南京音、蘇州・杭州音のいずれも [ts'-] であるため、音注は濁音で、母音も三等の字に対応する拗音となり、声母・韻母ともに合わない。つまり、南京音、蘇州音、杭州音のどれからも説明できない。

清母の「チ-七(11)」は臻摂三等の入声の「親吉切」であり、11 例が例外なく「チ」となっている。南京音は [ts' iʔ]、蘇州音は [ts' iəʔ]、杭州音は [tɕ' iɪʔ] となり、『同文備攷』は [ts' it]、『磨光韻鏡』は「ツイツ」と記されている。同書の精組の字は殆ど「ツ・ヅ」で統一されているが、「チ」が唯一の例外となっている。

上記、非止摂の字に対する濁音音注について、「鏃」は類推によるもの、「匆」は方言から説明できず、「七-チ」は同書の注音方法から説明が得られな

く、理由が不明であり、3 例とも精・清母の音を注していない。このように、非止撮の精・清両声母に対して、音注は全て「ツ」「サ°」になる。

このように、精・清両声母の字に対する音注は全体として、止撮、非止撮を問わず、有気と無気との区別がなく、南京音、蘇州音、杭州音の[ts-][ts'-]と対応する。

(2) 従母 [dz-]

従母非止摂の字は、計 58 字種、延べ 354 例である。表 4-5-2 のように、音注は止摂の場合と同じ、濁音「ヅ」が圧倒的に多く、清濁の対立を維持するのが呉方言の特徴を反映している。「ヅ」以外、清音音注「ツ」も存在している。なお、清音の音注には「小曲」のものは計 13 字 26 例である。

「ヅ」「ツ」以外、下記のように、「サ°」「サ」の音注も見られる。

「サ°」「サ」:(蟹撮一等) サ°イ-才 7(1)在 46(9) サイ-在 46(1)
(效撮一等) サ°○ウ-造 8(2)皂(2) サ○ウ-漕(1)

「才」「在」「造」に対する「サ°」音注は全て「小曲」の表記例である。

表 4-5-2 従母の非止摂の字の清音音注の状況

従母		濁音音注	清音音注
清濁両音注を有する例	非小曲用例	ツラン-従 12(11) ツユイ-聚 4(2) ツエイ-齊 5(1) ツイ-罪 2(1) ツイン-盡 12(8)情 21(16)晴 2(1) ツエ-疾 4(3)絶 4(3)賊 11(8) ツエン-錢 35(29)全 6(2)前 25(20)曾 24(21) ツユウ-就 16(10)前 25(1)ツエウ-就 16(1) ツアイ-才 7(4)在 46(33) ツアイ-財 13(10)	ツラン-従 12(1) ツユイ-聚 4(2)齊 5(4) ツイ-罪 2(1) ツイン-盡 12(3)情 21(4)晴 2(1) ツエ-疾 4(1)絶 4(1)賊 11(1) ツエン-錢 35(6)全 6(4)前 25(3)曾 24(2) ツユウ-就 16(2) ツアイ-才 7(1)在 46(3)サイ-在 46(1) ツアイ-財 13(2)チャ○ウ-財 13(1)
	小曲用例	ツイン-盡 12(8)情 21(16) ツエ-賊 11(8) ツエン-前 25(20)曾 24(21) ツユウ-就 16(10)前 25(1)ツエウ-就 16(1) ツラン-存 2(1) ツラ-坐 25(23) ツヤン-蓄 2(1) ツア○ウ-造 8(6) ツアイ-才 7(4)在 46(33)	ツイン-盡 12(1)(小曲)情 21(1)(小曲) ツエ-賊 11(2)(小曲) ツエン-前 25(1)(小曲)曾 24(1)(小曲) ツユウ-就 16(3)(小曲) ツラン-存 2(1)(小曲) ツラ-坐 25(2)(小曲) ツヤン-蓄 2(1)(小曲) サ°○ウ-造 8(2)(小曲) サ°イ-才 7(1)(小曲)在 46(9)(小曲)
非濁音注し かない例	非小曲用例		ツユイ-鱗(1)齋(1) ツエン-荐(1)層(1)睜(3) ツエ-籍(1) ツアン-暫(1) ツヤン-牆(1) サ○ウ-漕(1) サ°○ウ-皂(2) ツイン-淨(2)
	小曲用例		ツイン-淨(1)(小曲)

「小曲」を除き、「ヅ」音注以外の場合は、以下のように、(i)「ヅ」・「ツ」、(ii)「ツ」、(iii)その他 に分類できる。

(i) 「ヅ」・「ツ」

まず、清・濁二通りの音注を有するのは「従聚罪盡情晴疾絶賊錢全才前就在財」である。その中、三種類の音注をもつのは、「前就在財」4 字で、ともに従母の読みのみである。

「前-ツエン 25(20)ツエン 25(3)¹¹⁶」は「昨先切」で、原例は下記のようになっている。

「ツエン」:^{ツエンヘウキヤコン}「四字話」前後夾攻
 「常言」^{ジャヤウウツエンチン}若要^{ツエンジゴウトニイ}有前程「長短話」前日我托你
 「ツエン」(一部):^{スエンツエン}「二字話」先^{ツエンジ}前^{ツエンネン}日 前年

「ツエン」の例は初出でないため、「ツエン」が濁点の省略の結果と考えられる。

「就-ツユウ 16(10)ツユウ 16(2)¹¹⁷」は「疾儼切」で、下記のように、「ツユウ」の例も初出でなく、濁点が省略された可能性が高い。

「ツユウ」:^{ワアングハンツユウスウ}「四字話」緩寛^{ツユウキイヒンキイ}就事 就計行計
 「ツユウ」(一部):^{ツヤンツエウ}「二字話」将^{ツヤンツユウスエ}就 「三字話」将就些

「在-ヅアイ 46(33)ツアイ 46(3)サイ-46(1)」は「昨宰切/昨代切」で、以下の表記例のように、「ツアイ」の例も初出でないため、濁点が省略されたものと考えられる。

「ツアイ」:^{ヘンヒソウツアイ}「四字話」偏僻所在
 「常言」^{ヒヤアマアツアイテンツインリイ}蝦蟆在天井裡 「長短話」^{チンズウフウクイツアイテン}正是富貴在天
 「サイ」:^{スエサイ}「二字話」昔在
 「ヅアイ」(一部):^{フヅアイハアン}「三字話」不在行 ^{ダアヅアイハアン}大在行 ^{ツアイピンロウ}在貧路
 「四字話」^{ヅアイスインリウイ}在心留意

「サイ」の^{スエサイ}「昔在」は初出である。「サ°イ」の右肩点が記入漏れの可能性があるが、「サ°イ」と同じもの「ツアイ」は濁音読みと一致しないので、初出の「サイ」は、46例の中に1例しかなく、誤記の可能性が極めて大きい。

「財-ヅアイ 13(11)ツアイ 13(1)¹¹⁸」は「昨哉切」、下記のように、「ツアイ」も初出でなく、「ヅアイ」の濁点の省略によるものと考えられる。

¹¹⁶ 「前-ツユン 25(1)」の原例が^{ツエンテウ}「前頭」で、意味上では他の使用例との違いが見られず、「ツエン」の誤記。

¹¹⁷ 「就-ツエウ」は原例が^{ツヤンツエウ}「将就」で、「ツユン」による誤記。

¹¹⁸ 「財-チャウ 13(1)」は、原例が^{ワンフイキオウツエンチヤウ}「枉費了钱财 钱财ヲムダツカヒシタ」で、「チャウ」は直前の^{ヘアフイジヤ}「花費若干錢鈔 ソゴバクオ錢ヲムダツカヒシタ」の「鈔」を記したものと考えられる。

「ツアイ」:^{スインハツアイチユイ}「四字話」新發財主
 「ヅアイ」(一部):^{ハツアイ ツアイチユイ}「二字話」發財 財主 ^{シンテイハツアイ}「四字話」恁地發財

また、二種類の音注をもつ例の場合、全体的に清音音注の数が少ない。これらの字の中、「從盡錢絶才」は清・濁の二通りの読みがあり、それ以外の場合、濁音の読みのみである。

「從-ヅワン 12(11)ツワン 12(1)」は、声調点の部分で検討したように、「ツワン」となる^{ナンスインツワン}「難信從 シンジガタヒ」が初出ではないため、「ツワン」は濁点省略された可能性が高い。

「盡-ヅイン 12(8)ツイン 12(3)」は、原例が下記のようにになっている。

「ツイン」:^{ツインヒンヘンマイ}「四字話」盡行變賣 コトコトクウリシロガエル
^{ツインリハンホウ}盡力防火 カヲ尽シテ火ヲフセク
^{フコウツインエン}不可盡言 コトコトクハ云ハレンヌ
 「ヅイン」:^{ヅインソウ}「二字話」盡数 アリカギク ^{ヅインヒン}盡行 コトコトク
 「四字話」^{カンキフヅイン}感激不盡 イカフアリガタイ ^{フイヅインスインヒエ}費盡心血 心ヲ使フ
 「常言」^{ユウホモヒヤンヅイン}有福莫享盡 福アラハコレヲ享ケ尽スヘカラス
^{ホヅインシンビンギヨン}福盡身貧窮 福尽クレハ身貧クナルナリ
^{ユウシイモスウヅインシイ}有勢莫使盡 勢ヒアラハコレヲ使ヒ尽スヘカラス
^{シイヅインエユンサンフワン}勢盡冤相逢 勢ヒ尽クレハ冤ニ逢フナリ

「盡」は『広韻』に従母の「慈忍切 竭也終也」と精母の「即忍切 曲禮曰虚坐盡前」とあり、表記例と一致するのは従母の意味である。「ツイン」も初出でないため、濁点省略されたものと考えられる。

「錢-ヅエン 35(29)ツエン 35(6)」は、従母の「昨仙切 周禮注云錢泉也其藏曰布取名流行無不偏也」(『康熙字典』【正字通】冶銅爲錢易貨也)と精母の「即淺切 錢銚田器」であり、原例が下記の通りである。

「ツエン」:^{テンシンツエン}「三字話」⑥典身錢 ^{ニイジントウシヤウツエン}「五字話」你認多少錢 ^{フチハンウエンツエン}不值半文錢
^{ニインリヤウツウシヤウツエン}「六字話」你贏了多少錢 ^{ユウツエンコウイ、トンジン}「常言」有錢可以通神
^{ウツエンルウイ、シ}「長短話」無錢而衣食

「ツエン」:^{ボウツエンチャウ}「三字話」①破錢鈔^{ライスエ、ツエン}②回些錢^{モ、ツアンツエン}③没賺錢^{ゼベエンツエン}④拆本錢^{ツエ○ウスエ、ツエン}⑤湊些錢
 「四字話」^{ヒウヤ○ウトウツエン}休要賭錢

意味はいずれも従母と一致し、「ツエン」の例も初出でないため、濁点が省略されたと考えられる。

「絶-ヅエ 4(3)ツエ 4(1)」は、原例が下記のようにになっている。

「ツエ」:^{イユイギウジダア、ツア、ヒエンツエ}「長短話」与舊日大差懸絶 旧日トハ大ニ差ヘリ
 「ツエ」:^{ワンライフ、ツエ}「四字話」往來不絶 ワウライガタエヌ
 「長短話」^{ヒエンライツエ、ツエスエ}賢惠且絶色 賢惠メ其上絶色タル
^{ナア、ツエスエテ}那絶色的 彼絶色ナルハ

「ツエ」の例も初出ではない。「絶」は『広韻』に従母の「情雪切 断也作絶非」である。また、『同文備攷』では[dzyet]となる。このように、「ツエ」は呉方言と対応するが、濁点の省略による可能性がある。

「才-ヅアイ 7(4)ツアイ 7(1)」は、原例が以下のようにになっている。

「ツアイ」:^{ユウツアイハア、}「三字話」有才華 サイガアル
 「ツアイ」:^{ユウコウツアイフ}「四字話」有个才副 筆者アリ
 「長短話」^{フィツアイテケンツエン}非才德兼全 才德兼ネ全キニアラスンハ
^{スエンズ、エンツアイカ○ウキツイ}先生才高气清 先生ハ才高ク氣清ク
^{スヤ○ウコウエユンライウ、テ ウ、ツアイ}小可原来無德無才 小可原来才モナク德モナク

「才」は『広韻』に「用也質也力也文才也説文作才艸木之初也」とあり、「昨哉切」との従母の読みである。また、『集韻』に「将来切 説文言之間也一日始也古作才文」、「作代切 始也」との精母の読みもある。このように、「有才華」は他の例と同じ、意味上では従母と一致し、初出の表記例であるため、濁点の記入漏れの可能性がある。また、蘇州音は[z-]、杭州音は[dz-]、南京音は[ts'-]で、濁音となるのは呉方言で、「ヅアイ」は杭州音により近い。

「聚罪情疾晴賊全」7字はいずれの場合も従母の読みのみで、清音音注の数が多し「全」と清・濁音注同数の「聚」「罪」以外、濁音音注の方が圧倒的に多い。

「聚-ヅユイ 4(2)ツユイ 4(2)」では、「聚」は「慈庾切 衆也共也斂也」(上声)と「才句切」(去声)であり、原例が下記の通りである。

「ツユイ」:^{ツユイツユイハイ○クン ハアンキヤアツユイホウ}「四字話」取聚敗軍 行家聚貨
 「ヅユイ」:^{ヅユイツユエチヨンジン イユイタアハワンヅユイ}「四字話」聚集衆人 「長短話」與他完聚

「罪-ヅイ 2(1)ツイ 2(1)」では、「罪」は「徂賄切 文字音義云鼻從自辛也言鼻人蹙鼻辛苦之憂始皇以鼻字似皇乃改爲罪也」とあり、原例が以下のようにになっている。

「ツイ」:^{ツイキンテキイヘ°エンキヤイ}「六字話」罪輕的寄本街 「ヅイ」:^{ヅイチヨンテヒヤアラ○ウ}「五字話」罪重的下牢

「情-ヅイン 21(16)ツイン 21(5)」(「小曲」1例)では、「情」は「疾盈切 靜也説文曰人之陰气有所欲也」であり、原例が下記の通りである。

「ツイン」:^{シンウエンツインユウ コンチュツインユウ チャ●ウチユシツイン ツインエユンテ○ウヤン}「四字話」深問情由 供出情由 招出實情 情愿投降
 「ヅイン」:^{ケンツイン キエツイン アンツイン ユウズウツイン ソンジンツイン}「二字話」欠情 缺情 含情 「三字話」有事情 送人情
 「四字話」^{モ°ユウズウツイン ツインデ○ウイ、ホ}没有事情 情投意合
 「六字話」^{チツインヤ○ウハ°ンピンジン ウ、チユイコンカ○ウアイツイン}只情要謗平人 無處控告哀情
 「常言」^{ハ°ア、クハンロウタンシツイン}把官路當人情
 「長短話」^{トウトウケンツインリヤ○ウ ゴウエハヅインエユンフランボイ ケンツインケンツイン}彡彡欠情了 我也情愿奉陪 欠情欠情
^{ニイチエンモ°ンテズウツイン ヘ°ンズ°エンユウチヤンケンヤ○ウズウツイン}你專門的事情 偏生有椿緊要事情

「疾-ヅエ 4(3)ツエ 4(1)」では、「疾」は「秦悉切 病也急也」であり、原例が以下のようにになっている。

「ツエ」:^{ツエゼンフ°ケン}「四字話」疾然不見
 「ヅエ」:^{ツエゼンケン ムイスウツエビンガ○ウツエン ワンス°エンスイユウサ○ウツエ}「三字話」疾然間 每思疾病熬煎 「長短話」晚生雖有小疾

「聚罪情疾」4字の共通点は、清音音注の例が初出でないことである。つまり、清音音注は濁点の省略によるものと考えられる。

「晴-ヅイン 2(1)ツイン 2(1)」では、「晴」は「疾盈切 天晴」であり、原例が下記の通りで、^{テンツイン}「天晴」が初出の例である。

「ツイン」:「二字話」^{テンツイン}天晴
 「ヅイン」:「四字話」^{ハンツインハンイン}半晴半陰

「賊-ツエ 11(8)ツエ 11(3)」「小曲」2 例)では、「賊」は「昨則切 盜也」である。
 原例は以下のようになり、「賊寇猖獗」が初出の例である。

「ツエ」:「四字話」^{ツエケウチヤンキエ}賊寇猖獗
 「ヅエ」:「四字話」^{エケンヅエハ}夜間賊發 「五字話」^{シヤンシヤイリイユウツエ}山寨裡有賊
 「六字話」^{コチユイチヨヒユイトウヅエ}各處捉許多賊 「常言」^{ツエツエウビイモン}賊走閉門 ^{チヨツエフ ジュイカンツエ}捉賊不如趕賊
 「龍魚」^{ウハヅエ}烏賊 「花草」^{モヅエ}木賊

「全-ヅエン 6(2)ツエン 6(4)」では、「全」は「疾縁切」で、原例が下記の通りで、
 「大獲全勝」が初出である。

「ツエン」:「四字話」^{タアウヲツエンシン}大獲全勝 ^{ツウヨンケンツエン}志勇兼全 ^{ヅラメツエンキヤエ}族滅全家 ^{ツエンキヤアラウシヤウ}全家老少
 「ヅエン」:「長短話」^{フイツアイテケンツエン}非才德兼全 ^{ツウキンウイチヤンヅエンイユイ}至今未嘗全愈

このように、「晴賊全」3 字の場合は、初出の例は全て清音音注となり、全体的に清音音注と記されていることから、濁点の記入漏れによる可能性が高い。
 また、「齊-ヅエイ 5(1)ツユイ 5(4)」は、原例が下記の通りである。

「ヅエイ」:「三字話」^{イツエイキユイ}一齊去 イチドキニユク
 「ツユイ」:「三字話」^{フスヤンツユイ}不相齊 ヒトシカラヌ
 「四字話」^{ツユイカンコズウ}齊幹各事 色々ノコトヲートキニタス
^{フラヒンツユイチュ}伏兵齊出 フセゼイ一同ニ出ル
^{イツユイナハアン}一齊呐喊 一同ニトキノコエヲアケル

「齊」は從母の「徂奚切 整也中也 莊也好也 疾也等也」(平声)、「在詣切 火齊似雲母重沓而開色黄赤似金出日南又齊和」(去声)で、ともに濁音読みである。表記例の意味は「徂奚切」と一致し、声母面では「ヅ」は呉方言から説明でき、「ツ」は南京音と対応している。韻母面では「ヅエイ」のような音注の形は存在しないので、「ツユイ」の誤記と考えられるが、「-エイ」も「-ユイ」も合わない。

(ii)「ツ」

「ツ」の音注の表記例について、「ツユイ-鱗(1)」は、原例が「虫介」所属の「鱗^{ツユイサ〇ウ}鱗」で、「徂奚切」である。「ツユイ-鱗(1)」は、原例が「龍魚」所属の「鱗^{ツユイ}魚」で、「徂禮切」である。「薺-ツユイ(1)」は、原例が「菜蔬」所属の「薺^{ツユイサ^イイ}菜」で、「徂禮切」「疾資切」である。「鱗鱗薺」3字ともは上述した「薺」と同じ、蟹摂四等の齊韻の所属字である。同書では蟹摂の開口四等所属の齒頭音精・清・從母の字について、「ツユイ」となるのが一般的である。『西儒耳目資』は[‘çi](=[ts‘i])、『同文備攷』は[dzi]、『磨光韻鏡』は「ヅイ」となっている。このように、「ツ」は南京音と一致する。

「ツエン-層(1)」は、原例が「圍城^{ライチンサンツエン}三層 城ヲ取マクコト三重也」で、反切は『広韻』に「昨梭切 重屋也」との從母だが、『集韻』に精母の「咨騰切 重屋也」もあり、意味が同じである。吳方言では濁音の読みとなっているため、「ツエン」は精母読みと一致し、南京音から説明できるが、濁点の記入漏れの可能性も排除できない。

「ツエ-籍(1)」は「秦昔切 薄籍」、原例が「借人典籍^{ツエジンテンツエツエ} 人の書籍ヲ借ラ」である。「ツアン-暫¹¹⁹(1)」は、原例が「暫^{ツアンツエハシエ}且賒 トウフンカケニトル」で、『広韻』に「藏濫切 左傳曰婦人暫而免諸國暫猶卒也」とある。「ツヤン-牆(1)」は、原例が「周圍筑牆^{チウライチヨツヤン} グルリニヘイヲツック」で、「在良切 垣牆」である。これらの字は『同文備攷』ではともに[dz-]となっている。このように、「籍暫牆」3字とも、音注が南京音から説明できる以外、濁点の記入漏れの可能性も排除できない。

「ツエン-漸(1)」は、反切が精母の「子廉切 入也漬也」と從母の「慈染切 漸次也進也稍也事之先端」とあり、原例の「漸^{ツエンキヤハ〇ウスエ}覚好些 次第二些ヨク覚ル」であり、從母の読みと対応している。この字は蘇州音が[z-]、杭州音が[dz-]となり、『同文備攷』が[dz-]と記されている。「ツエン」は濁点の記入漏れ、或いは南京音と対応する。

「ツイン-淨(2)」は、『広韻』に從母梗摂の「疾政切」とあり、「小曲」以外の2例が以下のように、どちらも清音「ツイン」である。

「二字話」干淨^{カンツイン} 「四字話」打掃干淨^{タアハサ〇ウカンツイン}

¹¹⁹ 「暫」は『集韻』に「蘇甘切 溷與也」との心母読みがあり、心母読みの意味は表記例と一致しない。

『西儒耳目資』は[çim](=[ts‘iŋ])、『同文備攷』は[dziŋ]となり、「ツイン」は南京音から説明できるが、濁点の記入漏れの可能性も排除できない。

「ツエン-睜(3)」は、反切が「疾郢切 眇睜不悅視也」で、原例が「睜眼」^{ツエンエン}「睜開大眼」^{ツエンカイダアハエン}「目睜口呆」^{モツエンケウガイ}である。南京音が[tʂ-]、蘇州・杭州音が[ts-]となり、「ツエン」は蘇州、杭州音からも説明できる。

「ツエン-荐(1)」は、反切が「在甸切 重也仍也再也」で、原例が「器用」の「艸荐 コモ」^{サウウツエン}であり、発音と意味と合わない。「荐」は『同文備攷』では[dz-]と記されているが、『西儒耳目資』では[‘çien](=[ts‘ien])で、現代蘇州音¹²⁰では[ts-]ともなっている。つまり、「ツエン」音注は南京音と蘇州音とのいずれにも対応する。また、その繁体字「薦」は、『広韻』には「作甸切 薦席又薦進也」となり、清音の精母読みとなり、両方言とも一致するため、「ツエン」は「薦」の発音を注していると考えられる。

「ツヲ、-銚(1)」は、原例が「器用」所属の「銚子 ヤスリ」^{ツヲ、ツウ}である。『広韻』に従母の去声「昨禾切 銚金羸小釜」、入声「昨木切 銚金羸釜屬」と清母の「麤臥切 蜀呼銚金莽」とあり、入声読みは明らかに音注と対応しない。また、南京音でも蘇州音でも[ts‘-]となり、『同文備攷』にも[ts‘o]で記されている。このように、音注「ツヲ、」は両方言から説明できる。

「サ°○ウ-皂(2)」は「昨早切」で、原例が「皂雕」^{サ°○ウテヤ○ウ}「皂莢」^{サ°○ウキヤ}である。「サ°○ウ-槽(3)」は精母の「作曹切 果華實相半也」と従母の「昨勞切 馬槽」との読みがあり、原例の「槽抽 アカトフシ」^{サ°○ウチウ}「馬槽 馬コヤ」^{マア、サ°○ウ}「血槽的刀 ヒノカイトルカタナ」^{ヒエサ°○ウテタ○ウ}は従母の読みと一致している。2字ともは、「ゾア○ウ」の音注が期待されているが、清音音注となり、それぞれの反切と対応しない。また、蘇州音が[z-]、杭州音が[dz-]となり、『同文備攷』に[dz-]ともなっていることから、「サ°」は蘇州・杭州音から説明できず、南京音と対応する。

(iii)その他

¹²⁰ 「荐」は現代杭州音では[ɬie]と発音する。

「サ○ウ-槽(1)」は原例が「虫介」所属の「^{ツエイサ○ウ}蟻槽」で、『広韻』に「昨勞切」とある。『同文備攷』では「槽」字と同じ[dzao]と記されている。このように、「サ○ウ」は、「サ°○ウ-槽(3)」等のように、類推によるものではないかと考えられる。

上記の非止摂の場合、非濁音音注をもつ漢字について、以下のようにまとめることができる。

①「前就在財盡錢從聚罪情疾」の「ツ」の音注は全て濁点が省略されたものである。

②「才晴賊全」の「ツ」の音注は初出であり、濁点の記入漏れと考えられる。

③「絶層籍暫墻漸淨」の「ツ」の音注は南京音から説明できるが、濁点の記入漏れの可能性も排除できない。

④「荐銚」の「ツ」音注が南京音と蘇州音との双方に対応でき、「荐」は「ツエン」が「薦」を注している。

⑤「皂槽」の「サ°」音注は南京音からしか説明できない。

⑥「齊」(「ヅエイ」が誤記)と「蟻鱗齋」は蟹摂四等の所属字で、「ツユイ」音注で統一されたのであり、「ツ」は南京音の特徴を反映しているが、「-ユイ」は[i]と合わない。

⑦「睜-ツエン」は吳方言の発音と一致している。

⑧「槽-サ○ウ」は類推によるものである。

これらの以外の場合を除き、全て「ヅ」の音注となっている。

このように、従母非止摂の字に対して、止摂の場合と同じ、濁音の「ヅ」音注となるのは一般的であり、「ヅ」が反映された従母は[dz-]である。

現代の南京音では[ts][ts´]、[tɕ][tɕ´]と発音するが、『西儒耳目資』では[ts][ts´]となっている。現代蘇州音では多くの場合[z-]となり、杭州音では[dz-][z-]となり、吳方言で濁音が保存されている。また、『同文備攷』では[dz-]、『磨光韻鏡』では「ヅ」となる。このように、従母に対する「ヅ」は明らかに吳方言の特徴を反映している。

(3)心母[s-]

心母非止摂の字について、計 106 字種、延べ 632 例である。

非止摂の心母[s-]の所属字に対して、サ行(「ス」「ソ」「サ」「シ」)音注は一般的であり、「ス」「ソ」「サ」に反映されるのが[s-]、「シ」に反映されるのが[j-]である。「シ」の音注は心母と一致できず、「鯉修」2 字である。また、サ行以外の例も存在している。

「シヤイ-鯉(1)」は蟹摂の「蘇來切 魚類」で、原例が「龍魚」の「鯉兒 ^{シヤイルウ}ヲサ」である。南京音と呉方言ではともに[s-]と発音するため、音注が合わない。また、この字は一等韻の字だが、一等韻は直音の字、拗音になることはあり得ない。なのに音注は拗音形となっている。よって、音注は一等韻の音を示していない。

「シュウ-修 3(1)」は流摂の「息流切」で、原例は下記の通りである。

「シュウ」:^{シユウツア○ウワンツウ}「四字話」修造房子

「スユウ」:^{チエンヤ○ウスユウギヤ○ウブウロウ タア・ピンス・エンブウロスユウギヤ○ウ}「六字話」專要修橋補路 他平生補路修橋

「シュウ」の例は初出であるが、「スユウ」の例が多くて、南京音と呉方言の[s-]読みと一致するので、「シュウ」は「スユウ」の誤記と考えられる。なぜなら、心母は[s-]で音注が「シ」(j-)となるのはこれ以外存在しないからである。

「チュン-鶻(1)」は、『広韻』に未収。『集韻』に「聳尹切」で「鳥名説文祝鳩也或作隼」とあり、心母臻摂の字である。原例は「鶻鳥 ^{チュンニヤ○ウ}ハヤフサ」であり、同書の「准-チュン(9)」の類推による可能性がある。

「デヤ○ウ-篠(1)」は、『広韻』に「細竹也先鳥切」とあり、心母效摂所属字である。原例は「篠兒 ^{デヤ○ウルウ}サ、」で、音注が同書の「篠-デヤ○ウ(3)」の類推によると考えられる。

「キエン-鯨(1)」は、原例が「龍魚」所属の「一字鯨 ^{イ ツウキエン}ホンカマス」である。『広韻』に未収で、『正字通』に「俗鯨字」とあり、「鯨」は『広韻』に「息兩切乾魚腊也」で、心母宕摂所属である。音注は発音と対応できず、声符「卷拳圈-キエン」の類推による誤記の可能性はある。

「ツエ-蜥(1)」は、原例は「虫介」所属の「蜥蜴(ツエテ) 一カケ」であるため、漢字「蜥」を「蜥」とする。『広韻』に「蜥蜴」という意味で、「先擊切」とある。徹

母の「折-ツエ」は前述した字形に近い「拆-ぜ」の誤記である。ここの「ツエ」音注は「折-ツエ」の類推によるものと考えられる。

「サ°○ウ-搔(1)」は「蘇遭切」で、原例が「器用」の「搔杖^{サ°○ウヂヤン} マゴノテ」である。南京音[s-]となり、『同文備攷』も[s-]と記されているが、現代蘇州音では[ts-]と発音する。「サ°」は蘇州音から説明できる。

このように、「搔」は呉方言から説明できるが、「鯰修」の音注は誤記で、「鶴篠^𪗇𪗇」は類推によるものである。これらの誤記と類推のものを除き、音注はサ行(シ・セを除く)である。よって、心母非止摂の字は止摂と同じ、音注は[s-]を反映している。

『西儒耳目資』が[s-]となり、蘇州・杭州音も[s-]の読みである。また、『同文備攷』も[s-]で、『磨光韻鏡』でもサ行音注となり、[s-]の読みを反映している。つまり、同書の心母のサ行音注(シ・セを除く)は南京音と呉方言とのいずれにも対応している。

(4)邪母[z-]

邪母非止摂の場合、20字種、延べ57例である。表4-5-3のように、「ソ-松(6)」以外、清濁の区別を反映して濁音音注「ヅ」が多数を占めている。また、清・濁両音注を有する例と清音音注のみの例も存在する。その中の「ツヤン-詳2(1)」は「小曲」の例である。

表 4-5-3 非止摂の邪母の字の清音音注の状況

邪母		濁音音注	非濁音音注
清濁両音注を有する例	非小曲用例	ツエン-羨 8(6) ツイン-尋 2(1) ツエ-習 2(1)	ツエン-羨 8(2) ツイン-尋 2(1) ツエ-習 2(1)
	小曲用例	ツヤン-詳 2(1)	ツヤン-詳 2(1)(小曲)
非濁音音注しかない例	/	/	ソ-松(6) ツイン-燼(1)蓋(1) ツエン-涎(1)旋(1)

「小曲」以外、清・濁両音注を有するのは「羨尋習」3字で、清音音注のみとなるは「燼蓋涎旋」4字である。

「羨-ツエン 8(6)ツエン 8(2)」は、「似面切」で、表記例は下記の通りである。

「ツエン」:「長短話」欽羨^{ツエン} 羨^{ツエン} 可羨^{ツエン} 可羨

「ツエン」:「二字話」欽羨^{ツエン} 可羨^{ツエン} 「長短話」欽羨^{ツエン} 羨^{ツエン} 可羨^{ツエン} 可羨

『同文備考』では[z-]となり、「ツエン」は呉方言の読みと合わず、初出でないため、濁点が省略されたと考えられる。

「尋-ツイン 2(1)ツイン 2(1)」は「徐林切」で、原例が「二字話」の「尋常」^{ツインツヤン}と「三字話」の「尋門路」^{ツインモンロウ}となり、濁音音注と清音音注はそれぞれ1例で、「ツイン」は濁音の読みと一致できず、清音音注の「尋常」^{ツインツヤン}は初出であるため、濁点が省略された可能性が小さく、記入漏れの可能性が大きい。

「習-ツエ 2(1)ツエ 2(1)」は「似入切」で、原例が「四字話」の「演習武藝」^{エンツエウ、ニイ}と「長短話」の「直恁演習武藝」^{チジンエンツエウ、ニイ}である。「ツエ」は濁音の読みと一致できず、「ツエ」の例は初出であるため、「ツエ」は濁点の記入漏れだと思われる。

「ツイン-燼(1)」は「徐刃切」で、原例が「燒燼民屋」^{シャウツインミン ヲ}である。『同文備考』では南京音と同じ[ts-]となり、「ツイン」は両方言から説明できる。

「ツイン-蓋(1)」も「徐刃切」で、原例が「大有忠蓋 大ニ忠ガアル」^{ダア、ユウチヨウツイン}である。また、『集韻』に「艸名」という意味で、従母の「在忍切」もあるが、表記例とは

一致しない。『同文備攷』では濁音の[dz-]と発音する。「ツイン」は南京音からしか説明できないが、濁点の記入漏れも排除できない。

「ツエン-涎(1)」は、「夕連切」で、原例が「涎衣^{ツエンイ} ヨダレカケ」である。この字について、南京音は[s-]と発音するのに対して、蘇州音は[h-]となっている。『同文備攷』では[z-]と記されている。このように、「ツエン」は蘇州音としか一致していないため、濁点の記入漏れの可能性が高い。

「ツエン-旋(1)」は、邪母の「似宣切」「辭戀切」で、原例が「旋覆^{ツエンホ} ヲグルマ」である。蘇州音が[z-]、杭州音が[dz-]となり、『同文備攷』では[dz-]であり、「ツエン」は呉方言と説明できず、南京音と一致する一方、濁点の記入漏れも排除できない。

「ソン-松(6)」は、邪母通摂の「祥容切」である。6例とも、同じ邪母通摂の「ヅラン-誦(1)」のように、「ヅラン」音注が期待されているが、心母通摂の字「ソン-送(12)銓(1)宋(1)悚(1)」などと同じ、6例全て「ソン」となっている。「誦」は蘇州音で[z]と発音するのに対して、南京音、蘇州・杭州音では「松」は「送銓宋悚」と同じ[s]との読みであり、これらは『集韻』の心母「思恭切」の読みを伝えている。このように、「ソン」はいずれにも対応している。

上記の邪母非止摂の場合、清音の音注について、以下のようにまとめることができる。

- ①濁点の省略によるもの:「羨」
- ②濁点の記入漏れによるもの:「尋習涎」
- ③南京音、呉方言の双方と対応するもの:「燼」
- ④南京音と対応するか濁点の記入漏れ可能性があるもの:「蠹旋」
- ⑤「ソン-松」は心母の読みを注する。

これらの字以外、邪母の字に対して、「ヅ」の濁音音注となっていることが分かる。「ヅ」が反映された邪母は[dz-]となり、無声化した南京音から説明できず、濁音読みが維持された呉方言と一致している。邪母の字は『同文備攷』では[dz-]、『磨光韻鏡』ではザ行音注となるのもこれを反映している。

上述したように、精組の非止摂の字についての対照状況は表 4-5-4 に示している。精・清・心母が清音音注、従・邪母が濁音音注となり、清濁の違いを維持していることから、全体として呉方言の特徴を反映している。また、従母には南京音でしか適切に説明されない例があり、南京音の混在を示している。

表 4-5-4 精組非止摂の対照状況

声母	非止摂音注	南京音との対応	呉方言との対応
精 [ts]	ツ [ts-]	清音 ○ ([ts-][ts'-])	清音 ○ ([ts-][ts'-])
清 [ts']			
従 [dz]	ヅ [dz-]	[ts][ts'] ×	『同』 [dz-] ○
心 [s]	ス [s-] ソ [s-] サ [s-]	[s-] ○	[s-] ○
邪 [z]	ヅ [dz-]	[s-] ×	『同』 [dz-] ○

表 4-5 齒頭音精組所属字一覧

撰	等位	声調	韻目	開合	精 [ts-]		清 [ts'-]		從 [dz-]		心 [s-]		邪 [z]		字種数	延べ数					
					清	字種数	延べ数	濁	字種数	延べ数	清	濁									
通撰	一等	平	東	ōnŋ	合	ツラン-棕 (1) 櫻 (1) 鯪 (1)	3	3	ツラン-葱 (1) 聰 (3) ジョン-匆 (4)	3	8	ツラン-叢 (1)	1	1							
		平	冬	oŋ	開合	ツラン-宗 (3)	1	3													
		上	董	ōnŋ	合	ツラン-總 (4)	1	4													
		去	送	ōnŋ	合	ツラン-鯪 (1) 櫻 (1)	1	1					ソン-送 (12) 鯪 (1)	2	13						
		去	宋	oŋ	開合								ソン-宋 (1)	1	1						
	入	屋	ōuk	合	ツラ-鯪 (1)	1	1			ツラ-族 (1) 鯪 (1)	2	2									
	三等	平	鍾	ioŋ	開合	ツラン-縱 (1) 4(3) ツラン-縱 4(1)	1	4			ツラン-從 (1) 12(11) ツラン-從 12(1)	1	12			ソン-松 (6)	1	6			
		上	腫	ioŋ	開合								ソン-悚 (1)	1	1						
		去	用	ioŋ	開合	ツラン-縱 (2) 4(3) ツラン-縱 4(1)					ツラン-從 (2) 12(11) ツラン-從 12(1)					ツラン-誦 (1)	1	1			
		入	屋	io'uk	合								ソ-宿 (1) (8)	1	8						
入		燭	io'ok	開合	ツラ-足 (1) 17(14) ツエ-足 17(1)	1	15					ソ-粟 (3)	1	3	ツラ-俗 (4) 續 (1)	2	5				
止撰	平	支	iē	開				ツウ-雌 (1)	1	1					スウ-斯 (1) 斯 (2) 斯 (鯪 1)(2)	3	5				
		支	ye	合	ツイ-嘴 (1) (7)	1	7								ツイ-隨 (4)	1	4				
		脂	ii	開							ツウ-糍 (1)	1	1	スウ-私 (5)	1	5					
		脂	yi	合										スイ-雖 10(9) ツイ-雖 10(1)	1	10					
		之	io'i	開	ツウ-仔 (1) (4)	1	4				ツウ-慈 (5) 磁 (2) 鷓 (1) (2)	3	9	スウ-司 (2) 思 (1) (13) 絲 (11)	3	26	ツウ-辭 9(8) ツウ-辭 9(1)	1	9		
		紙	iē	開	ツウ-紫 9(8) ソウ-紫 9(1)	1	9	ツウ-此 (28)	1	28											
	上	紙	ye	合	ツイ-嘴 (2) (7)																
		旨	ii	開	ツユイ-姊 (7)	1	7														
		止	io'i	開	ツウ-子 (1) 仔 (2) (4) 子 152(151) ツ-子 152(1)	2	153									ズウ-似 (9)	1	9			
		寘	iē	開				ツウ-刺 (1) (4)	1	4						スウ-賜 (2)	1	2			
	去	至	ii	開				ツウ-次 (8)	1	8	ツウ-自 43(38) ツウ-自 43(5)	1	43	スウ-四 17(16) 肆 (1) 駟 (2) ス-四 17(1)	3	20					
		至	yi	合	ツイ-醉 (11)	1	11	ツイ-翠 (1)	1	1	ツエ-瘁 (1)	1	1			ツイ-遂 4(3) ツイ-遂 4(1) ツイ-穗 (1)	2	5			
		志	io'i	開							ツウ-字 6(5) ツウ-字 6(1)	1	6	スウ-思 (1) (13)			スウ-寺 (1)	1	1		
		模	o	開合	ツラ-祖 (1)	1	1	ツラ-祖 (2)	1	2					ソウ-蘇 (1)	1	1				
遇撰	一等	上	姥	o	開合	ツラ-祖 (7)	1	7													
		去	暮	o	開合	ツラ-作 (1) 24(3) 做 (1) 43(42) ツラ-做 43(1)	1	46	ツラ-厝 (1) (1) 措 (2) 錯 (1) (2) 酢 (1)	4	6					ソウ-素 (7) 訴 (1)	2	8			
		平	魚	io	開						ツユイ-蛆 (2)	1	2								
	三等	平	虞	yu	開合						ツユイ-趨 (1) (5)	1	5								
		上	語	io	開																
		上	麌	yu	開合						ツユイ-取 (1) (9)	1	9	ツユイ-聚 (1) 4(2) ツユイ-聚 4(2)	1	4			ツユイ-叙 (1)	1	1
		去	御	io	開	ツユイ-足 (2) 17(2)		2	ツユイ-趨 (2) (5) 娶 (1) 3(2) ツ-イ-娶 3(1)	1	3										
	去	遇	yu	開合				ツユイ-覲 2(1) ツユイ-覲 2(1)	1	2	ツユイ-聚 (2) 4(2) ツユイ-聚 4(2)										
	蟹撰	一等	平	咍	ai	開	サイ-哉 6(1) サイ-哉 6(5) 災 (2)	2	8	サイ-猜 5(4) サイ-猜 5(1)	1	5	ツアイ-材 (4) 財 13(10) 才 7(4) 纒 (1) (5) チャウ-財 13(1) ツアイ-財 13(2) 才 7(1) サイ-才 7(1)	4	29	シヤイ-鯉 (1)	1	1			
			平	灰	ai	合				ツイ-催 (2) 崔 (1)	2	3									
上			海	ai	開	サイ-載 (1) (1)	1	1	サイ-采 2(1) 彩 (1) 綵 (1) サイ-采 2(1)	3	4	ツアイ-在 (1) 46(33) ツアイ-在 46(3) サイ-在 46(1) サイ-在 46(9)	1	46							
去			賄	ai	合																
去			泰	ai	開				サイ-菜 (2) (1)	1	2										
去			泰	ai	合	ツイ-最 (4)	1	4													
去			隊	ai	合				ツエ-燂 (1)	1	1										
三等		去	代	ai	開	サイ-再 (9) 載 (2) (1)	1	9													
		去	祭	iei	開	ツユイ-際 (3) 鯨 (1)	2	4													
		去	祭	yei	合											ツイ-歲 (5)	1	5			
四等		平	齊	ei	開	ツユイ-齊 (1) (1)	1	1	ツユイ-妻 (1) (8) 棲 (1)	2	9	ツエイ-齊 5(1) ツユイ-蟻 (1) 齊 5(4)	2	6	スエ-屨 (2) 西 (18) 樨 (1) ツユイ-棲 (1)	4	22				
		上	霽	ei	開	ツユイ-濟 (1) (7)	1	7								スエ-洗 (1) (3)	1	3			
		去	霽	ei	開	ツユイ-濟 (2) (7)			ツユイ-妻 (2) (8)							スエ-蟻 (2) 細 (13)	2	15			
臻撰		一等	平	魂	uən	合	ツラン-尊 13(12) 樽 (1) ツラン-尊 13(1)	2	14	ツラン-村 (3)	1	3	ツラン-存 2(1) ツラン-存 2(1)	1	2	ツラン-孫 (7) 孫 (1)	2	8			
	上		混	uən	合				ツラン-村 (1)	1	1	ツラン-鱗 (1) (1)	1	1	ツラン-損 (6)	1	6				
	去		慁	uən	合				ツラン-寸 (1)	1	1	ツラン-鱗 (2) (1)	1	1	ツラン-遜 (1)	1	1				
	三等	平	真	iēn	開				ツイン-親 (1) (23)	1	23					スイン-新 (9) 薪 (2) 辛 (3)	3	14			
		上	軫	iēn	開																
		上	準	ye'n	合											ツラン-笋 (1) チユン-輜 (1)	2	2			
		去	震	iēn	開	ツイン-進 (10)	1	10	ツイン-親 (2) (23)							スイン-信 (20)	1	20	ツイン-燼 (1) 蓋 (1)	2	2
		入	質	iēt	開				チ-七 (11) ツエ-漆 (5) 漆 (1)	3	17	ツエ-疾 4(3) 疾 (1) (1) ツエ-疾 4(1)	2	5	スエ-膝 (2) 膝 (1) (1)	2	3				

山	一	入	術	yēt	合															スエ-恤(2)	1	2						
		平	寒	an	開					サ ^ン -冷(1)	1	1									サン-珊(1)	1	1					
		平	桓	uan	合	ツアン-鑽①(1)	1	1													ソハン-酸(1)	1	1					
		上	旱	an	開																サン-散①(5)傘(4)	2	9					
		上	緩	uan	合																ソハン-第①(8)スエン-選③(2)	1	8					
		去	翰	an	開	サ ^ン -讚(4)	1	4													サン-散②(5)							
	去	換	uan	合	ツアン-鑽②(1)					ツアン-擲(1)竄(1)	2	2								ソハン-蒜(2)第②(8)	1	2						
	入	曷	at	開																サ-撒(5)	1	5						
	平	仙	ien	開	ツエン-煎①(2)澁(1)	2	3			ツエン-遷(1)	1	1			ツエン-錢 35(29)ツエン-錢 35(6)	1	35			スエン-仙(5)鮮①(1)	2	6	ツエン-涎①(1)	1	1			
	平	仙	yen	合											ツエン-全 6(2)ツエン-全 6(4)	1	6			スエン-鯨(1)	1	1	ツエン-涎①(1)	1	1			
	上	獮	ien	開	ツエン-剪(4)	1	4			ツエン-淺(1)	1	1								スエン-鮮②(1)								
	上	獮	yen	合																スエン-選①(2)	1	2						
	去	線	ien	開	ツエン-煎②(2)箭(2)	1	2								ツエン-賤(9)	1	9			スエン-線(5)鮮③(1)	1	5	ツエン-羨① 8(6)ツエン-羨 8(2)	1	8			
	去	線	yen	合																スエン-選②(2)			ツエン-旋②(1)					
入	薛	iet	開																スエ-泄①(2)薛(1)	2	3							
入	薛	yēt	合											ツエ-絶 4(3)ツエ-絶 4(1)	1	4			スエ-雪(5)鱈(1)	1	6							
平	先	en	開						ツエン-千(18)軒(1)	2	19			ツエン-前 25(20)ツエン-前 25(1)ツエン-前 25(4)	1	25			スエン-先①(28)	1	28							
上	銑	en	開																スエン-寘(1)	1	1							
去	霰	en	開						ツエン-茜(1)	1	1			ツエン-苜(1)	1	1			スエン-先②(28)									
入	屑	et	開	ツエ-節(6)	1	6			ツエ-切①(4)	1	4								スヤ-楔①(1)	1	1							
效	一	平	豪	au	開	サ ^〇 ウ-遭 6(5)サ〇ウ-遭 6(1)	1	6						サ ^〇 ウ-槽①(3)サ〇ウ-槽(1)	2	4			サ ^〇 ウ-搔(1)サ〇ウ-臊(4)サン-鯨(1)	3	6							
		上	皓	au	開	サ ^〇 ウ-早 14(11)藻(1)蚤(2)枣(1)サ〇ウ-早 14(3)	4	18	サ ^〇 ウ-艸 29(27)サ〇ウ-艸 29(1)ツア〇ウ-艸 29(1)	1	29			ゾア〇ウ-造① 8(6)サ ^〇 ウ-造 8(2)皂(2)	2	10			サ〇ウ-燥(1)掃①(6)スエ〇ウ-嫂(2)	3	9							
		去	號	au	開	サ ^〇 ウ-遙 2(1)サ〇ウ-遙 2(1)	1	2												サ〇ウ-噪(1)掃②(6)	1	1						
	三	平	宵	ieu	開	ツヤ〇ウ-焦(1)蕉(1)椒 3(2)鷓(1)ツヤウ-椒 3(1)	4	6												スヤ〇ウ-宵(2)消(11)硝(1)蛸(1)	4	15						
		上	小	ieu	開															スヤ〇ウ-小(35)	1	35						
	四	去	笑	ieu	開															スヤ〇ウ-咲(17)鞘①(1)	2	18						
		平	蕭	eu	開															スヤ〇ウ-簫(1)箏(1)	2	2						
		上	篠	eu	開															デヤ〇ウ-篠(1)	1	1						
	果	一	平	歌	a	開				ツヲゝ-磔①(2)	1	2									ソウ-唆(2)「啤(1)嘍(2)」梭(1)鑊①(1)	5	7					
			上	哿	a	開	ツヲゝ-左①(3)	1	3							ツヲゝ-坐① 25(23)ツヲゝ-坐 25(2)	1	25			ソウ-噴(2)鎖(1)	2	3					
			去	箇	a	開	ツヲゝ-左②(3)									ツヲゝ-坐② 25(23)ツヲゝ-坐 25(2)												
			去	過	ua	合						ツヲゝ-磔②(2)																
			三	平	麻	ia	開	ツエゝ-嗟(1)	1	1												スエゝ-些 50(47)スエ-些 50(1)スエ〇-些 50(1)スエン-些 50(1)	1	50	ツエゝ-斜①(2)	1	2	
	宕	一	上	馬	ia	開	ツユイ-姐(3)	1	3	ツエゝ-且①(16)	1	16									スエゝ-寫(10)	1	10					
去			禡	ia	開	ツエ-借① 10(1)ツエゝ-借 10(9)	1	10																		ツエゝ-謝(11)	1	11
平			唐	aŋ	開					サ ^ン -滄①(2)艸(3)蒼①(2)鷓(1)鷓(1)	5	9			ツアン-藏①(3)	1	3			サン-桑(1)喪①(1)	2	2						
上			蕩	aŋ	開																							
三		去	宕	aŋ	開										ツアン-藏②(3)					サン-喪②(1)								
		入	鐸	ak	開	ツヲ-作② 24(21)	1	21							ツヲ-昨(2)	1	2			ソ-索①(11)	1	11						
		平	陽	iaŋ	開	ツヤン-將①(19)漿(2)鱗(1)	3	22	ツヤン-搶①(3)鎗①(5)	2	8			ツヤン-樞(1)蓄 2(1)ツヤン-樞(1)蓄① 2(1)	3	4			スヤン-相①(46)箱(2)廂(6)	3	54	ツヤン-祥(2)詳① 2(1)ツヤン-詳 2(1)	2	4				
		上	養	iaŋ	開	ツヤン-漿(1)漿(1)	2	2	ツヤン-搶②(3)											スヤン-想(14)キエン-養(1)	2	15	ツヤン-象(2)像(2)	2	4			
梗		三	去	漾	iaŋ	開	ツヤン-將②(19)醬(2)	1	2												スヤン-相②(46)							
			入	藥	iak	開	ツヤ-雀(4)	1	4	ツヤ-鵲(2)	1	2																
			平	清	iaŋ	開	ツイン-精①(2)菁(1)鶉(1)旌 2(1)ツイン-旌 2(1)	4	6	ツイン-清(12)	1	12			ツイン-情 21(16)晴 2(1)ツイン-情 21(5)晴 2(1)	2	23											
	四	上	靜	iaŋ	開	ツイン-井(3)	1	3	ツイン-請①(34)	1	34			ツイン-靜(3)ツエン-淨(3)	2	6			スイン-省① 6(3)	1	3							
		去	勁	iaŋ	開	ツイン-精②(2)									ツイン-淨(3)	1	3			スイン-姓(4)性(6)	2	10						
		入	昔	iak	開	ツエ-脊(2)跡(2)積①(3)鯽①(1)借② 10(1)ツエゝ-借 10(9)スエ-鶉①(1)	5	9					ツエ-籍(1)	1	1					スエ-惜(6)昔(2)媳(2)	3	10	ツエ-席(6)夕(1)	2	7			
		平	青	eŋ	開					ツイン-青(9)蜻(2)鯖①(1)	3	12									スイン-星(3)醒①(4)猩①(6)スエン-腥(1)	4	14					
		上	迎	eŋ	開																スイン-醒②(4)							
		去	徑	eŋ	開																スイン-醒③(4)							
流	一	入	錫	ek	開	ツエ-績(2)	1	2	ツエ-戚(2)	1	2			ツエ-寂(5)	1	5			ツエ-蜥(1)蜥(1)	1	1							
		上	厚	əu	開	ツエ〇ウ-走① 40(38)ツエ〇-走 40(1)ツエ〇ウ-走 40(1)	1	40	ツユイ-取②(9)趣③(5)																			
	三	去	候	əu	開	ツエ〇ウ-走② 40(38)ツエ〇-走 40(1)ツエ〇ウ-走 40(2)			ツエ〇ウ-湊(3)	1	3																	
		平	尤	iəu	開	ツユイ-鈞①(1)	1	1	ツユウ-秋(4)萩(1)楸(1)鞞(1)鞞(1)	5	8	ツユイ-楸①(1)	1	1							スユウ-修 3(2)羞 7(6)シユウ-修 3(1)スヤウ-羞 7(1)	2	10					
去	宥	iəu	開	ツユウ-酒(47)	1	47								ツユウ-就 16(10)驚(1)ツエウ-就 16(1)ツユウ-就 16(5)	2	17			スユウ-秀(2)綉(1)	2	3							

深撰	三等	平	侵	iəm	開										スイン-心 (57)	1	57	ヅイン-尋 2(1)ツイン-尋 2(1)	1	2		
		入	緝	iəp	開							ツエ-集 (1)	1	1					ヅエ-習 2(1)ツエ-習 2(1)	1	2	
威撰	一等	平	覃	am	開	ツアン-簪 2(1)ツハン-簪 2(1)	1	2				ツアン-蠶 (2)	1	2								
		平	談	am	開							ツアン-慚 (4)慚 (1)	2	5	サン-三 ① (26)	1	26					
		上	感	am	開				サ ^ン -慘 (1)	1	1											
		去	闕	am	開							ツアン-暫 (1)	1	1	サン-三 ② (26)							
		入	合	ap	開							ツア-雜 (1)	1	1								
	三等	平	鹽	iem	開	ツエン-尖 (1)	1	1														
		上	琰	iem	開							ツエン-漸 (1)	1	1								
		入	葉	iəp	開	ツエ-接 (3)楫 (1)	2	4	ツエ-妾 (3)	1	3											
	四等	入	帖	en	開										スヤ-屨 (1)	1	1					
	會撰	一等	平	登	əŋ	開	ツエン-憎 (1)怎 (20)增 ① (1)曾 ② 24(3)	4	25				ツエン-曾 ① 24(21)ツエン-層 (1)	2	22	スエン-憎 (3)	1	3				
去			嶝	əŋ	開	ツエン-増 ② (1)																
入		徳	ək	開	ツエ-則 (24)	1	24				ツエ-賊 ① 11(8)ツエ-賊 11(3)	1	11	スエ-塞 ① (2)	1	2						
三等		入	職	iəˊk	開	ツエ-即 (2)穉 (1)鯽 ② (1)	2	3							スエ-息 (8)尾息 (1)	2	9					
計						85	623		69	337		65	414		119	717			26	85		
止撰						7	191		5	42		7	60		13	85			6	28		
止撰以外						78	432		64	295		58	354		106	632			20	57		

注：・「ソウ-紫 9(1)」は、原例が「花草」の「紫^{ソウソウ}蘇」であり、「蘇」の音注の影響を受け、「ツウ」による誤記である。また、「樹竹」の「柴^{ツウキン}荆 シケイ」の意味から分かるように、「ツウ」音注は字形の近い「柴」でなく、「紫」の発音を注している。

・「ツ-子 152(1)」は、原例が「虫介」の「蚊^ウ子」で、「ツウ」の「ウ」が記入漏れ。
・「ゾウ-糍 (1)」は『広韻』に未収、『大漢和辞典』に「[糍]俗字」とあり、「糍」が「疾資切」である。

・「四-スウ 17(16)ス 17(1)」は、「ス」音注の原例が「歡^シ声^シ四^ス起^キ」で、意味上では、他の「スウ」音注の表記例との違いが見られていない。「スウ」の「ウ」が記入漏れ。

・「鶻」は精母の「子盈切 鶻鶻鳥也」と清母の「倉經切 鶻鶻鳥也」であり、原例の「鶻鶻」は精母の意味と一致している。

・「ツエン-^澤 (1)」は、原例が「^澤些水 水ラムベロ」で、字体字音不明。「串」の類推によるものと推測するが、「串」は見母山撰の「古患切」で、音注と対応しない。その音注について、適切な説明を与えるのは難しい。なお、「ツエン」という音注の形から、精・精母の山撰三等・四等と同じであるため、本研究では、精母三等の字として記数する。

・「簪」は、同「簪」、精母威撰の「作含切」と莊母深撰の「側吟切 首笄也」とあり、蘇州音でも南京音でも[ts-]と発音するので、精母の読みと対応している。

・「イ-^楫 (1)」は『広韻』と『康熙字典』に収録されず、原例は「船具」所属の「頭^楫 ヤリダシ」で、『大辞林』船の舳から前へ斜めに突き出した帆柱」のことをさす。音注は「楫」による類推の可能性が大きい。

・「サ^イ-載 (1)」は精母の「作亥切」「作代切 年也事也則也^乗也」と従母の「昨代切 運也」との読みがあり、原例の「小船不堪重載 小船ハ重荷ヲ積ニタエス」は清母読みの意味と一致し、また、蘇州音と南京音ではともに[ts-]となっているため、音注が精母の読みと対応していると考えられる。

・「ツフン-尊 13(1)」は「ツワン」の誤記。

・「ツヤ ウ-椒 3(1)」は中間点「○」の記入漏れ。

・「怎」について、『広韻』等に未収。同書で「怎生」「怎麼」「怎樣」多用。蔣 (2017)により、「怎麼」は「始見于宋代」と述べている。つまり、「怎」は後に出てきた字で、『中州音韻』に「茲荏切」とある。

・「ツツァ-粗 (2)」は原例が「粗^{ツツ}貨^{ツツ}極^{ツツ}歹 アラムノ多^シ」粗^{ツツ}貨 アラムノ」である。清母の「千胡切 米不精也」と従母の「徂古切 麤也略也」とあり、また、蘇州音と南京音とも[tsˊ-]と発音し、音注が清母の読みと対応していると考えられる。

・「ツツァ-酢 (1)」は原例が「酢^{ツツ}漿 カタハミー名酸艸」である。『広韻』に「在各切」とあり、従母所属である。また、『集韻』に「倉故切」もあり、ここの音注は清母遇撰の読みと対応している。

・「ツユイ-蛆 (2)」は、清母の「七余切 蟲在肉中」と精母の「子魚切 螂蛆食蛇蟲蜈蚣是也」とあり、表記例の「蛆虫 ウジ」「屎蛆クソムシ」は清母の読みと一致し、また、蘇州音では[tsˊ-]となる。

・「ツイ-娶 3(1)」は「ツユイ」の誤記。
・「ツイ-覲 2(1)」は「ツユイ」の誤記。

・「ツイ-崔 (1)」は清母の「倉回切」と従母の「昨回切」とあり、原例が「小曲」所属の「崔^{ツイ}鶯鶯」であり、清母読みの「姓也」という意味と対応している。

・「浅」は清母の「士演切 不深也」と精母の「則前切 浅浅流疾兒」とあり、原例の「我是浅量 我ハゲコ」は清母の意味と対応でき、また、蘇州音では有気音の[tsˊ-]である。

・「ツエン-^肝 (1)」は『広韻』と『康熙字典』などに未収、原例が「蝦^{ツエン}千 (18)」で声符の類推と考えられる。

・「サ^ン-^醴 (1)」は『広韻』と『康熙字典』などに未収。『漢語大字典』に「qiāng、用青稞酿成的酒,少数民族的一种日常饮料」とあるが、合わない。原例は「二字話」所属の「醴^醴キタナヒ」で、発音が「サ^ン-滄^サ艸蒼鶻」等による類推だろう

・「ツイン-請 (34)」は清母の「七靜切 乞也求也問也謁也」と従母の「疾盈切 受也」「疾政切 延請亦朝請漢官名張禹首爲之」との読みがあり、原例の「請飯」「請酒」は清母読みの意味と一致し、また、蘇州音では[tsˊ-]との清音読みと発音するので、「ツイン」は清母と対応する。

・「蜻」は精母の「子盈切 蜻蛉蟋蟀也」と清母の「倉經切 蜻蜓蟲」であり、原例の「蜻蜓」「蜻蛉」は清母の意味と一致している。
・「縦-ソラン 4(1)」は「ツワン」の誤記。

・「ツラ-鑿 (1)」は精母の「則落切 詩曰白石鑿鑿」と従母の「昨木切 鑿鏤花葉又音昨」「在各切 鑿也古史考曰孟莊子作」とあり、原例が「器用」所属の「鑿^{ツラ}ノミ」で、従母の「昨木切」と対応している。なお、蘇州音では[z-]となる。

・「財」は 1 例が「財主」で、点あり、濁点と見做す。

・「才」は 1 字未注。
・「ヅアン-蠶 (2)」は、『康熙字典』に「海篇」同蠶」とあり、「蠶」は『広韻』に「昨含切」、従母所属字である。

・「曾-ツエン 24(21)ツエン 24(2)」は、「ツエン」音注の原例が「親族」所属の「曾^{ツエン}祖」「曾^{ツエン}孫」である。『広韻』に従母の「昨稜切」(意味「經也」)と精母の「作滕切」(意味「則也亦姓」)とあり、「曾祖」「曾孫」2 例は精母の読みと意味と一致する。

一方、「ツエン」音注の使用例、例えば、「未曾來」「未曾見」「不曾講書」「小弟也曾晓得」などのように、従母の読みと対応している。このように、「ツエン」は「ツエン」と異なる意味に対応している。

・「ソン-銓 (1)」は和製漢字、『大漢和辞典』によると、音同[銓]である。「ソン」は声符「送」の類推によるもの。

・「スエ-須 28(1)」の「スエ」は延音点の記入漏れ。
・「蟋」は心母の「息七切 蟋蟀蜚也」と生母の「所櫛切 蟋蟀又音悉」とあり、方言とも[s-]となり、いずれにも対応でき、本研究では心母の字として記数する。

・「サ-撒 (5)」は『広韻』に未収。『集韻』に「桑葛切」とあり、心母所属。

・「スエン-鱧 (1)」は『大漢和辞典』により、和製漢字である。「スエン」は声符「宣」の類推によるもの。

・「スエ-鱧 (1)」は『大漢和辞典』により、魚の名前で、和製漢字と考えられる。「スエ」も声符の類推によるもの。

・「サン-鯪 (1)」は『漢語大字典』に「同“鯪”」とあり、「鯪」は「蘇遭切」との效撰の字で、音注と一致しない。「サン」音注は「参」の日本語の発音の影響を受けたものだろう。

・「スヤ○ウ-鞞 (1)」は、原例が「器用」所属の「刀^{タウ}鞞 サヤ」で、『広韻』に生母の「所交切 鞞鞞」と心母の「私妙切 刀鞞」とあり、意味上では心母の読みと明らかに一致している。

・「スヤ○ウ-蛸 (1)」は、原例が「虫介」所属の「蝶^{ヒヤ}蛸 ヲオヂカフグリ」で、『広韻』に心母の「相邀切 蝶蛸蟲也」と生母の「所交切 蟪蛸喜子」とあり、意味上から、音注が心母読みと一致している。

・「ソウ-^噉 (1)噉 (2)」について、同書では原例がそれぞれ「二字話」の「囉^噉 ヤカマシヒ」「四字話」の「休要囉^噉 ヤカマシク云フナ」、「六字話」の「休要只管囉^噉 ヒタスラ。ヤカマシク云ナ」となり、例の意味から分かるように、二字の意味と発音は同じである。また、『康熙字典』に「噉」字は、音「蘇禾切」、心母果撰平声所属字で、「[正字通]俗云使噉」とあり、意味と同書の意味と一致する。そして、現代でも「囉噉」としても使われているため、本研究では二字を同じ「噉」として扱う。

・「ソ-索 (11)」は心母の「蘇各切 盡也散也又繩索亦姓出嫩煌」と生母の「山戟切 求也」「山責切 求也取也好也」とあり、原例の「索^ソ心 イツソノコトニ」「没索價 カケネハナヒ」「草索 ナハ」等のように、音注が心母の読みと対応している

・「スユウ-差 7(6)スヤウ-差 7(1)」は、「息流切 恥也進也又致滋味爲差」であり、「スヤウ」音注の原例が「羞^{スヤウ}漸 ハヅカシヒ」で、初出でない。他の「スユウ」音注の例、例えば「羞^{スユウ}辱 ハヅカシメ」等とは、意味上では違いがない。「スヤウ」音注は「スユウ」による誤記。

1.6 正齒音照組

第二章第四節で述べたように、中古音の齒上音莊組と正齒音章組は『韻鏡』では正齒音照組に統合されている。韻図では莊組は主として二等、章組は三等に配当されていることから、莊組のことは照組二等(照二)、章組のことは照組三等(照三)とも呼ばれるが、本研究では莊組、章組の言い方を採用する。莊組の所属字は表 4-6-1、章組の所属字は表 4-6-2 にまとめている。以下では、莊、章組別に、具体的な表記例について分析を行う。

1.6.1 齒上音莊組

1.6.1.1 止摂の場合

(1) 莊母 [tʂ] と初母 [tʂʰ]

莊母 [tʂ] の所属字は計 24 字種、延べ 58 例であり、初母 [tʂʰ] の所属字は計 19 字種、延べ 46 例である。両声母の止摂の場合、莊母は開口字の「ツウ-鯰(1)」、初母は開口字の「ツウ-差 9(1)」があるのみで、音注はどちらも「ツウ」となっている。

「ツ」の音注に反映される莊・初母は [ts-] である。「差-ツウ」について、声調点の部分で検討したように、音注が南京音、蘇州音の [tsʰ-] に対応している。『西儒耳目資』では「鯰」が [ʧ] (= [tsʂ])、「差」が [ʧʰ] (= [tsʂʰ])、『同文備攷』では「差」が [tsʰʂ]、「鯰」が [tsʂʰ] となり、『三音正譌』、『磨光韻鏡』では 2 字とも「ツウイ」と記されている。このように、「ツウ-鯰(1)」も南京音、吳方言の双方に一致している。

上記、莊・初母の止摂の字に対して、「ツ」の音注は南京音と吳方言のいずれにも一致している。

(2) 崇母 [dʒ]

崇母 [dʒ] の所属字は計 20 字種、計 148 例である。

止摂の字は、計 4 字種、延べ 112 例で、全て開口の字である。音注は主に「ズウ」となっている。また、「事-スウ 105(10)シウ 105(1)」も存在している。

「事-ズウ 105(94)スウ 105(10)シウ 105(1)」は、「スウ」と「シウ」の表記例が下記のようになっている。

「シウ」:^{フウリヤ○ウチシウ}補了職事

「スウ」:^{フヒヤ○ウスウ}(一部)不曉事 ^{キンヤ○ウスウ}緊要事 ^{スウチユリヤンナン}事出兩難 ^{ツウリヤ○ウチスウ}辞了職事 ^{ワアンクハンツユウスウ}緩寬就事
^{ツウウ、ツウスウ}自誤自事 ^{チンチンフツユイスウ}真正不濟事 ^{フ、ス、ウ、モ、ロ}惡事莫樂 ^{ル、ハンゴウチエンモンズウテイ}而況我專門事体 ^{テ、ス、ウ、テイ}的事体

『広韻』に崇母の「鉏吏切 使也立也由也」と莊母の「側吏切 事刃又作割傳」とあり、『漢語大字典』に「鉏吏切」と対応するのは「官職，职务；职业事情」等の意味があり、表記例と一致しているが、「側吏切」の意味は『大漢和辞典』によれば、「事」は「さす。たてる」という意味で、表記例と一致しない。つまり、音注は崇母の読みを示すものである。また、同書では、「補了職事 ヤクニ入タ」「辞了職事 ヤクヲ辞シタ」「退了職事 ヤクヲトリアケタ」「做職事人 ヤクニントナル」4 例は連続の表記例である。このように、同書で圧倒的にされる「ズウ」の例は、「スウ」「シウ」の表記例とは意味に違いがなく、清音で発音と合わない。「スウ」「シウ」の表記例はいずれの場合も初出でなく、「スウ」は「ズウ」による濁点の省略によるものと考えられる。「シウ」は「イ段+ウ」となり、同書の流摂の音注法の一つで、誤記の可能性が高い。南京音が[ɕ-]、蘇州・杭州音が[z-]であり、『西儒耳目資』が[ɕ-]、『同文備攷』が[zɥ]、『三音正譌』、『磨光韻鏡』が「ヅウイ」となり、「ズウ」は吳方言から説明できる。

このように、崇母止摂の字は、濁点の省略、誤記による「事」以外、全て開口字で、「ズウ」となっている。

「ズ」の音注に反映される崇母は[z-]である。南京音では崇母が清音化して[ɕ-]となったのに対して、蘇州・杭州音ともは[z-]となり、音注と一致している。『同文備攷』でも[z-]となり、対応する。従って、崇母止摂の字に対する音注は吳方言の特徴を反映している。

(3)生母[ɕ-]

生母の所属字は計 43 字種、延べ 274 例である。

止摂の字は計 3 字種、延べ 23 例であり、全て開口字で、音注が例外なく「スウ」となっている。

「ス」の音注に反映される生母は[s-]である。南京音が[ɕ-]、蘇州・杭州音が[s-]となり、『同文備攷』が[s-]、『三音正譌』が「スウ」、『磨光韻鏡』が「スウイ」で、いずれも「ス」の音注と一致し、吳方言の特徴を反映している。

上述したように、莊組止摂の字について、表 4-6-3 で示したように、開口字となり、莊・初母が「ツウ」、南京音と呉方言との双方と一致するが、崇母が「ズウ」、生母が「スウ」音注となり、呉方言から説明できる。このように、莊組止摂の字に対する音注は全体的に呉方言の特徴を反映している。

表 4-6-3 莊組止摂の字の対照状況

声母	開口	南京音	呉方言		
			杭州	蘇州	
莊 [tʂ]	ツウ [ts-]	清音 ○	清音 ○	清音 ○	『同』 清音 ○
初 [tʂʰ]	ツウ [ts-]	([tsʰ] [tsʰ])	([tsʰ] [tsʰ])	([tsʰ] [tsʰ])	([tsʰ] [tsʰ])
崇 [dʒ]	ズウ [z-]	清音 × ([ʒ])	濁音 [z] ○	濁音 [z] ○	『同』 濁音 [z] ○
生 [ʂ]	スウ [s-]	[ʂ] ×	[s] ○	[s] ○	『同』 [s] ○

1.6.1.2 止摂以外の場合

(1) 莊母 [tʂ] と初母 [tʂʰ]

非止摂の字に対する音注状況について、表 4-6-4 にまとめている。莊母の場合は計 24 字種、延べ 58 例であり、初母の場合は計 18 字種、延べ 45 例である。

表 4-6-4 非止摂の莊・初両声母の音注状況

音注	莊母	初母
「チ」	江摂二等開チヨ-捉(3) 宕摂三等開チヤン-莊(2)装(3)粧(3)壯(1)	江摂二等開チヤン-窗(窓)(3)チヨ- 齶 (1) 效摂二等開チヤ〇ウ-鈔(4)炒(2)
「ツ」	仮摂二等開ツア-詐 3(2) 梗摂二等開ツエン-爭(4)筭(2)擘(4)諍(1)ツエ-窄(1) 咸摂二等開ツアン-斬 2(1)[サ°ン-斬 2(1)] 遇摂三等開ツヲ-齶(1) 臻摂三等開ツイン-榛(1) 流摂三等開ツエ〇ウ-皺(1)纒(1) 曾摂三等開ツエ-側(7)	仮摂二等開ツア-差 9(6)チャア-差 9(1) 梗摂二等開ツエ-策(1)冊(1) 遇摂三等開合ツヲ-初(6)楚(3) 臻摂三等開ツワン-襪(1) 曾摂三等開ツエ-測(4) 深摂三等開ツアン-參 2(1)
「サ°」 「サ」	蟹摂二等開サ°イ-齶(1)債(7) 山摂二等開サ°ン-盞(3)サ°-札(1)札(3)紮(1) 效摂二等開サ°〇ウ-瓜(2) 咸摂二等開サ°ン-斬 2(1)[ツアン-斬 2(1)]	蟹摂二等開サ°イ-差 9(1) 仮摂二等開サア-又(1) 山摂二等開サ°-刹(1)察(1)擦(1) 梗摂二等開サ°-柵(1) 咸摂二等開サ°-插(4) 宕摂三等開サ°ン-瘡(1)

注：・「詐-ツア-3(2)ケン 3(1)」は、「側駕切」で、原例が「^{ツア-ハ〇ウ}詐謀 イツハリノハカリコト」「^{ケンキイトウ}詐計多 イツハリノ計ガ多ヒ」「^{ケンツア-ハジン}奸詐人 イツハリアル人」で、表記例の意味によって、「ケン」音注は明らかに同頁に繋がっている「三字話」の表記例の「奸」の発音を注している。

・「差-ツア-9(6)チャア 9(1)サ°イ 9(1)」について、既に第三章第四節で検討したように、「ツア-」「チャア」は「初牙切」と対応する。南京音が[tʂʰe]、蘇州音が[tʂʰo]、杭州音が[tʂʰa]であり、『同文備攷』は[tʂa]、『磨光韻鏡』では「ツア-」となっていることから、例数の多い「ツア-」音注が呉方言から説明でき、「チャア」は南京音と対応する。「サ°イ」音注の例に去声点が付され、「楚佳切」と対応し、発音が呉方言の[tʂʰ-]から説明できるが、去声点が合わない。

・「參-ツアン」は声調点の部分で検討したように、「楚簪切」の意味と一致するが、発音が「倉含切」と対応する。

・初母宕摂の「瘡-サ°ン」は南京音では[tʂʰ-]で、『同文備攷』でも[tʂʰ-]となっていることから、「サ°ン」は「倉」の音を記している可能性がある。

莊母 [tʂ] の字は、江摂、宕摂の「チ」の音注以外、殆ど「ツ」(サ°)となっている。初母 [tʂʰ] の字は、江摂、效摂の「チ」の音注以外も「ツ」(サ°)が主である。また、「サ」の音注の例もある。

初母效摂の「鈔炒-チャ〇ウ」について、中間点の部分で検討したように、「チャ〇ウ」は南京音から説明できる。

「**齶**」は、原例が「二字話」の「**酉屋** **酉足**(ヲチヨ) ヒタナヒ」で、『広韻』未収で、意味が現代の「齶齶」と同じである。「齶」は初母江摂の「測角切」とあり、南京音と蘇州音の読みが確認できない。

「サア-又(1)」は原例が「^{ヘ〇ウサア-チャシウダイジン}後又着手待人 ウシロ手シテ人ヲアシロフ」である。仮摂の「初牙切 交手」と蟹摂の「楚佳切 兩枝也説文曰手指相錯也」

とあり、音注は蟹撰の読みと対応しない。「サア、」の形から見て「サ°」の右肩点が落ちたものと考えられる。現代の蘇州・杭州音が[ts'ɑ]、南京音が[tɕ'a]であり、音注は「サ°」であれば、いずれの場合にも一致する。

なお、三等宕撰の「サ°ン-瘡(1)」は、「サ°ン」が「ツアン」に相当する。『広韻』に「創」と同じ、「初良切 説文傷也」で、原例が「二字話」の「生瘡 ^{スエンサ°ン}カサガテケタ」である。蘇州音は[ts'ɑ̃]、杭州音は[ts'uɑŋ]となり、現代南京音の読みは確認できないが、『西儒耳目資』では[ʼchoam](=[tɕ'uaŋ])、『同文備攷』では[tʃ'ɒŋ]となり、「サ°ン」は杭州音と一致している。

このように、非止撰の字(検討済みの「参」「差」を除き)に対して、「**𪛗**」の読みが確認できず、「又」2字に対する「サ」の音注が誤記、初母效撰の「鈔炒-チヤ〇ウ」が南京音と対応する。

これらの字を除き、莊母の江・宕撰、初母の江・效撰の場合は「チ」、それ以外の場合は「ツ」(「サ°」)となっている。

「チ」の音注に反映される発音は[tʃ-]である。莊母の江撰の「捉」と宕撰の「莊装粧壯」は南京音と旧派蘇州音が[tɕ-]、現代杭州音が[ts-]となり、『同文備攷』では[tʃ-]、『磨光韻鏡』では「チュ」と記されている。初母の江撰の「窻」は南京音と旧派蘇州音が[tɕ'-]、『同文備攷』では[tʃ'-]、『磨光韻鏡』では「チュアン」と記されている。このように、江撰の字に対する「チ」の音注は南京音と当時の呉方言¹²¹のいずれにも対応する。

「ツ」に反映される発音は[ts-]である。蘇州・杭州音は[ts-][ts'-]となり、『同文備攷』では[ts-][ts'-]ともなり、『磨光韻鏡』でも「ツ」音注である。このように、「ツ」音注は明らかに呉方言と一致している。

一方、南京音の場合について、熊(1990:5-6)は莊組では三等の果・遇・止・流・深・臻・曾通と二等の梗撰の字が[ts-][ts'-]組、二等の假蟹效咸山江撰と三等の宕撰[tɕ-][tɕ'-]組と読み分けていると指摘している。表 4-6-4 から分かるように、二等の假・咸・蟹・山撰の字が「ツ」(サ°)となり、南京音の場合と一致しない。なお、『唐話纂要』に止撰の字が存在しない。

¹²¹ 現代の新派蘇州音は[ts-]である。

上述したように、莊・初母の非止摂の字に対する音注は全体的に吳方言の特徴を反映している。

(2) 崇母 [dʒ]

崇母 [dʒ] の非止摂の字は計 15 字種、延べ 35 例である。その中、「床-ヂアン 4(3) チャン 4(1)」の清音音注の表記例は「小曲」に所属している。

「小曲」以外、表 4-6-5 のように、「ヅ」の音注が多く見られるが、宕摂と蟹摂の「柴」の「ヂ」の音注以外、蟹摂二等の「ザイ-豺(1)」「寨-シヤイ 2(1)サイ 2(1)」のように、「ザ」「サ」「シ」も存在している。また、「ヅ」の濁音音注以外、清音の「ツ」も存在している。

表 4-6-5 非止摂の崇母の字の音注の状況

分類	濁音音注	清音音注
「ヅ」「ツ」	遇 摂 三 等 開 合 ツアゝ-鋤 (1) 助 (3) 仮 摂 二 等 開 ツアゝ-査 6(5) 植 (1) 流 摂 三 等 開 ツエ〇ウ-驟 (1) 愁 6(5) (1 例 小 曲) 山 摂 二 等 合 ツアン-撰 (3) 咸 摂 二 等 開 ツアン-讖 (1)	遇 摂 三 等 開 合 ツエ〇ウ-雛 (1) 仮 摂 二 等 開 ツアゝ-査 6(1) 植 (1) 流 摂 三 等 開 ツエ〇ウ-愁 6(1)
「ヂ」「チ」	宕 摂 三 等 開 チャン-床 4(3) 状 (1) 蟹 摂 二 等 開 チヤイ-柴 (3)	宕 摂 三 等 開 チャン-床 4(1) (小 曲)
「ザ」「サ」	蟹 摂 二 等 開 ザイ-豺 (1)	蟹 摂 二 等 開 サイ-寨 2(1) [シヤイ-寨 2(1)]
「シ」		蟹 摂 二 等 開 シヤイ-寨 2(1) [サイ-寨 2(1)]

「豺-ザイ(1)」は「土皆切 狼屬」で、原例が「畜獸」の「豺狼 ^{ザイラン} ヲフカメ」である。南京音は [tʂʰ-]、蘇州音は [z-]、杭州音は [dz-] となる。『同文備攷』も [dz-] で、『磨光韻鏡』では「ヅアイ」となっている。このように、「ザイ」は明らかに吳方言と一致している。

「寨-シヤイ 2(1) サイ 2(1)」は、『広韻』に崇母蟹摂の「豺夫切 羊栖宿處」と心母曾摂の「蘇則切 安也」とあり、曾摂の読みは入声であるため、音注と一致しない。原例は「下 ^{ヒヤアリヤ〇ウサイサ} 了 寨 柵 陣ヲ取タ」と「山 ^{シヤンシヤイリュウ ツエ} 寨 裡 有 賊 山 陣ノ内ニ盗人アリ」で、意味に違いが見られない。また、南京音は [tʂʰ-]、蘇州音は [z-]、杭州音は [dz-] と発音する。『同文備攷』は [dz-]、『磨光韻鏡』は「ヅアイ」である。このように、「シヤイ」¹²² はは反り舌音の性質をもつ南京音と対応しているが、「サイ」は南京音と吳方言との双方からも説明できない。「サイ」は「ザイ-豺」のように、「ザイ」の濁点の記入漏れであれば、吳方言と対応する。

¹²² 「シヤイ」の原例が、「山 ^{シヤンシヤイリュウ ツエ} 寨 裡 有 賊 山 陣ノ内ニ盗人アリ」で、「シヤイ」となるのは直前にある「山-シヤン」の影響を受けた結果ではないかとも推測できる。

「ヅ」「ツ」両音注をもつのは「査」「愁」2字で、「ツ」の音注のみを有するのは「楂」「雛」2字である。「ツエ○ウ-雛(1)」は遇摂三等の字で、中間点の部分で検討したように、流摂の「皺縐」などの諧声符の類推によるものである。

「査-ツアヽ6(5)ツアヽ6(1)」は、『広韻』に蟹摂の「士佳切 査郎」と仮摂の「鈕加切 水中浮木又姓出何氏姓苑」とある。『大漢和辞典』には「士佳切 査郎」について「官吏の俗稱」と説明している。原例は以下のようにになっている。

「ツアヽ」:^{ツウスエ、ツアヽ、イヅアヽ}「五字話」仔細査一査 念ヲ入レテ吟味セヨ
 「ツアヽ」:^{テンヅアヽ}「二字話」點査 ギンミスル
 「三字話」^{ツアヽツアヽカン}査査看 ^{ツアヽフ、チュ}ギンミシテミヨ 査不出 ギンミガナラヌ
 「五字話」^{ツウスエ、ツアヽ、イヅアヽ}仔細査一査 念ヲ入レテ吟味セヨ

『大漢和辞典』の「しらべる」に一致している。「ツアヽ」となる^{ツウスエ、ツアヽ、イヅアヽ}「仔細査一査」は、初出でなく、濁点の省略によるものと考えられる。南京音は[tɕ' -]、蘇州音は[z-]と[ts-](姓氏に用いる場合)、杭州音は[dz-]と[ts-](山査)となり、『同文備攷』にも[dz-]と[ts-]との両読みがある。「ツアヽ」は明らかに呉方言と一致している。

「愁-ヅエ○ウ 6(5)ツエ○ウ 6(1)」は、「士尤切」である。「小曲」部分の^{ツエ○ウ}「愁不去」1例は濁音音注となっている。「小曲」以外の例は、下記の通りである。

「ツエ○ウ」:^{ユウツエ○ウ}「二字話」憂愁
 「ヅエ○ウ」:^{ツエ○ウサジン}「三字話」愁殺人 ^{ラ○ウタアヽユウツエ○ウ}「四字話」老大憂愁
 「常言」^{ピンウヽツエ○ウモン}並無愁悶 ^{ロウピンヅエ○ウサジン}路貧愁殺人

「二字話」の^{ユウツエ○ウ}「憂愁」は初出の例であるが、「四字話」の^{ラ○ウタアヽユウツエ○ウ}「老大憂愁」と同じ語を有するため、意味に違いが見られない。このように、「ツエ○ウ」は濁点の記入漏れの可能性が高い。なお、南京音は[ts-]、蘇州音は[z-]、杭州音は[dz-]となり、『同文備攷』も[dz-]で、『磨光韻鏡』では同じ「ヅエ○ウ」である。このように、「ヅエ○ウ」は明らかに呉方言と一致している。

「ツアヽ-楂(1)」は『広韻』に「査」字と同じ、「鈕加切 水中浮木又姓出何氏姓苑」とあり、原例が「器用」所属の^{ウエ○ウツアヽ}「浮楂 イカダ」である。「ツアヽ」は南京音の[tɕ' -]と説明できず、濁点の記入漏れと考えられる。

このように、崇母非止摂の字は、「豺」は「ザイ」は呉方言と対応でき、「寨」は「シャイ」が南京音と対応する一方、誤記の可能性も排除できず、「サイ」は濁点の記入漏れと考えられる。「ツ」の清音音注を有するのは、「齟」は呉方言と対応でき、「査」は濁点の省略、「愁楂」は濁点の記入漏れ、「雛」は誤記によるものである。

また、蟹摂二等の「柴」と宕摂三等の字は「ヂ」、それ以外の場合は「ヅ」となる。「ヂ」に反映される発音は[ɟʒ-]、「ヅ」に反映される発音は[dz-]である。

蟹摂の「柴-ヂヤイ」は、南京音では[tʂʰ-]、蘇州音は[z-]、杭州音は[dz-]となり、『同文備攷』も[dz-]である。蘇州音は[za]で明らかに音注と合わない。濁音音注の点から、「ヂヤイ」は呉方言に近い。

宕摂三等の「床」「状」は南京音が[tʂʰ-]、[tʂ-]、旧派蘇州音が[z-]、杭州音が[dz-]となり、『同文備攷』が[ɟʒ-]で、『磨光韻鏡』が「ヂユアン」となっている。「ヂ」の音注は明らかに呉方言と対応する。

上記以外、「ヅ」の音注の場合、南京音は[tʂ-][tʂʰ-]、蘇州音は[z-]、杭州音は[dz-]となり、『同文備攷』は[dz-]である。「ヅ」は呉方言と一致している。

上述したように、崇母に対する音注も呉方言の特徴を反映している。

(3)生母[ʃ-]

生母の非止摂の字は計 39 字種、延べ 250 例である。表 4-6-6 のように、江摂二等が「チ」、それ以外の場合は主にサ行音注となっている。また、「漣、栓」2 字に対して、「ツ」の音注となっている。

「ツアン-漣(1)」は、原例が「漣而洒泪^{ツアンルハシヤイルイ} ナミダラナガス」である。『広韻』に「所姦切 出涕兒(平声)」と「數板切 涙下兒(上声)」との二つの生母の読みがある。南京音は[ʃ-]、蘇州・杭州音が[s-]となり、「ツアン」はいずれの場合からも説明できず、誤記の可能性が高い。

「ツエン-栓(1)」は、原例が「器用」の「栓子^{ツエンツウ} クサビ」である。『広韻』に「山員切 木丁也」とあり、声母と対応しない。南京音が[ʃ-]、蘇州・杭州音が[s-]となり、「ツエン」はいずれにも対応できず、「ツエン-全(4)」の類推による可能性が高い。

表 4-6-6 生母の字の音注状況

音注	表記例
「ソ」	遇 撰 三等 開 合 ソウ-疎(4)梳(1)所(28)數(7)
「ス」 (「ス°」)	梗 撰 二等 開 スエン-生 92(30)甥(2)省 6(3) ス°エン-生 92(62) 效 撰 二等 開 スヤ○ウ-稍(2)梢 2(1)掣(1)[サ○ウ-稍 2(1)] 仮 撰 二等 開 スアゝ-砂(2)紗 5(2)(小曲) [サアゝ-紗 5(3)] 臻 撰 三等 開 合 スエ-虱(1)率(1)蟀(1)蟋(1) 流 撰 三等 開 スエ○ウ-搜 7(6)スエ ウ-搜 7(1) 曾 撰 三等 開 スエ-色(15)
「サ」	咸 撰 二等 開 サン-杉(1)衫(1)雲 2(1) サ-雲 2(1) 山 撰 二等 開 サ-殺(14)煞(2) 效 撰 二等 開 サ○ウ-梢 2(1) [スヤ○ウ-梢 2(1)] 仮 撰 二等 開 サアゝ-沙(1)紗 5(3) [サアゝ-紗 5(2)]
「チ」	江 撰 二等 開 合 チョ-擲(1)
「シ」	江 撰 二等 開 合 シヤン-雙(6) 蟹 撰 二等 開 シヤイ-灑(4)篩(4)晒(1)洒(1) 山 撰 二等 開 シヤン-山 12(11) 仮 撰 二等 開 シヤア-耍 15(13)シヤウ-耍 15(2) 宕 撰 三等 開 シヤン-霜(1)穰(1)爽(3)
「セ」	山 撰 二等 合 セン-門(2)
「ツ」	山 撰 二等 開 ツアン-潛(1) 山 撰 三等 合 ツエン-栓(1)

注：「生-スエン 92(30)ス°エン 92(62)」について、既に右肩点の部分で検討した。「°」は主母音[a]を示す符号で、「ス」と「ス°」は声母に違いがない。

このように、「ツ」の音注の場合、「潛」が誤記、「栓」が類推によるものである。この 3 例以外、江撰二等が「チ」「シ」、それ以外の場合がサ行となっている。音注に反映された発音について、「チ」は[tʃ-]、サ行の中、「サ」「ス」「ソ」は[s-]、「シ」「セ」は[ʃ-]である。

江撰二等の「雙-シヤン」「擲-チヨ(1)」について、「雙」は「所江切」、「擲」は『広韻』に未収、『集韻』に「色角切」である。2 字とも南京音は[ʃ'-]、蘇州・杭州音は[s-]となり、『同文備攷』では[ʃ-]で、『磨光韻鏡』では「シユア」を記している。このように、「チ」「シ」は現代の蘇州・杭州音から説明できないが、南京音と当時の呉方言の特徴と一致する。

「サ・ス・ソ」の音注の場合、南京音は[ʃ-]_(多)[s-]_(少)、蘇州・杭州音は[s-]で、『同文備攷』でも[s-]となり、『磨光韻鏡』では「ス」の音注となっている。これらの字に対する「サ・ス・ソ」音注は呉方言に近い。

「シ」の音注の場合、南京音は[ʃ-]、蘇州・杭州音は[s-]となり、『同文備攷』では[ʃ-]で、『磨光韻鏡』では「シ」の音注となっている。このように、「シ」「セ」音注も南京音と当時の呉方言から説明できる。

「セ」の音注となる「セン-門(2)」は、原例が「船具」の「^{ライセン}桅門 ハシラノセン」「^{ドウセン}舵門 カチノワキイタ」である。『広韻』に未収で、『康熙字典』に「[字彙補] 數還切音櫂門横關也」とあり、『広韻』に「櫂」は「數還切 關門機出通俗文」

である。韻母上では音注と読みとは一致しない。南京音は[ɣuan]、『同文備攷』は[suan]で、『磨光韻鏡』は「スアン」となっている。このように、声母は蘇州音に近いが、韻母はいずれの場合にも一致しない。「セン」は誤記の可能性が排除できない。

このように、「セン-門」を除き、サ行音注と江撰の「チ」「シ」の音注の字は全て吳方言と一致する。

上述したように、莊組非止撰の字の対照状況について、表 4-6-7 のようにまとめることができる。

表 4-6-7 莊組非止撰の表記例の音注の書き分け状況

分類	「チ」[tʃ-]「シ」[ʃ-]・「ヂ」[dʒ-]「ザ」[dz-]		「ツ」[ts-]「サ」[ts'-]「ヅ」[dz-] ス・ツ・サ[s-]	
	二等	三等	二等	非二等
莊母	「チ」江	「チ」宕	「ツ」假梗咸 「サ」蟹山效咸	「ツ」臻流會
初母	「チ」江		「ツ」假梗 「サ」蟹假山梗咸	「ツ」遇臻會深
崇母	「ヂ」「ザ」蟹	「ヂ」宕	「ヅ」假咸山	「ヅ」遇流
生母	「シ」江蟹假山 「チ」江	「シ」宕	「ス」梗效假 「サ」咸山效假	「ス」臻流會 「ソ」遇
南京音との対応	[tʃ-][ʃ-][dʒ-][dz-]			
	莊・初母:[tʃ-] 崇母:[tʃ-][tʃ'-] 生母:[ʃ-] _(多) [s-] _(少)		× 「側測-ツ」2字○/[s-] _(少) ○	
吳方言との対応	蘇州	○	莊・初母:[ts-][ts'-]『同』 [ts-][ts'-] 崇母:[ts-][dz-] 生母:[ts-][s-]	○
	杭州		莊・初母:[tʃ-][ʃ-]『磨』「チ」 崇母:[tʃ-][ʃ-]『磨』「ヂ」 生母:[tʃ-][ʃ-]『磨』「シ」	

莊母の江撰二・宕撰三等、初母の江撰二等の字に対する「チ」、生母の江撰の字に対する「シ」、崇母の宕撰三等の字に対する「ヂ」は全て吳方言と一致している。それ以外の場合は莊・初は「ツ」、崇母は「ヅ」の音注となり、生母は主にサ行音注(「セ」を除く)となり、いずれの場合も吳方言の特徴を反映している。一方、初母效撰の「鈔炒」2字に対する「チ」は南京音と対応する。

なお、先行研究において、高松(1985b)は『四書唐音弁』に「サ-」(南京音)・「シヤ-」(浙江音)と記された字を挙げ、「サ-」([s-])は南京音、「シヤ-」[ʃ-]は浙江音の特徴を反映すると指摘している。『唐話纂要』の浙江音を反映するものとして、山母(生母)の「灑-シヤイ」「山-シヤン」を挙げている。こうした現象の例について、生母の例なのかそれとも莊組全体的な現象なのかについて

言及していない。

上記のように、生母の字の内、以下のように、「シヤ-」となる例が確認できた。

江撮二等開合：シヤン-雙(6)
蟹撮二等開：シヤイ-灑(4)篩(4)晒(1)洒(1)
山撮二等開：シヤン-山 12(11)
仮撮二等開：シヤア-耍 15(13)
宕撮三等開：シヤン-霜(1)孀(1)爽(3)

また、莊組の他の声母に対する音注の中に、下記のように、崇母に清音の「シヤイ」以外、殆ど「サ°」(「ツア」)・ザイ音注となっている。

莊母：蟹撮二等開：サ°イ-齋(1)債(7)
山撮二等開：サ°ン-盞(3)サ°-札(1)扎(3)紮(1)
效撮二等開：サ°○ウ-爪(2)
咸撮二等開：サ°ン-斬 2(1)ツアン-斬 2(1)
初母：蟹撮二等開：サ°イ-差 9(1)
仮撮二等開：サアゝ-叉(1)(右肩点「°」の記入漏れ)
山撮二等開：サ°-刹(1)察(1)擦(1)
梗撮二等開：サ°-柵(1)
咸撮二等開：サ°-插(4)
崇母：蟹撮二等開 ザイ-豺(1) サイ-寨 2(1)(濁点の記入漏れ)
シヤイ-寨 2(1)

「シヤイ-寨」は既に検討したように、南京音の発音から説明できる以外、誤記の可能性も排除できない。

このように、「シヤ-」の音注となるのは生母のみの現象となることが分かった。上述したように、「灑山」2字を含む生母のこれらの字に対する音注は、南京音と当時の呉方言から説明できる。一方、冠山の官話学習書の『唐譯便覽』に「山-サン」「サアゝ-耍」のように、「シヤ-」でなく、「サ」の音注となっていることから、『唐話纂要』の「シヤ-」の音注は呉方言の特徴を反映していることが分かった。

表 4-6-1(照組二等)齒上音莊組所属字一覧

攝	等位	声調	韻目		開合	照(莊)[ts]	字種数	延べ数	穿(初)[tsʰ]	字種数	延べ数	牀(崇)[dʒ]	字種数	延べ数	審(生)[ʃ]	字種数	延べ数		
						清			次清			濁		清					
江 攝	二等	平	江	aug	開合				チヤン-窗(窓)(3)	1	3				シヤン-雙(6)	1	6		
		入	覺	auk	開合	チヨ-捉(3)	1	3	チヨ- ^韻 臥(1)	1	1				チヨ-擲(1)	1	1		
止 攝	三等	平	支	iě	開				ツウ-差 9(1)	1	1								
			脂	ii	開										スウ-獅(1)師(5)	2	6		
		之	iə̃ˊi	開	ツウ-鱸(1)	1	1												
		去	iə̃ˊi	開									ズウ-柿(2)仕(1)士(4)	3	7	ズウ-使①(17)	1	17	
		去	志	iə̃ˊi	開								ズウ-事① 105(94)スウ-事 105(10)シウ-事 105(1)	1	105	ズウ-使②(17)			
遇 攝	三等	平	魚	iə	開				ツヲ-初(6)	1	6								
			虞	yu	開合														
		上	語	iə	開	ツヲ-齧(1)	1	1	ツヲ-楚①(3)	1	3								
			麌	yu	開合														
		去	御	iə	開														
			遇	yu	開合														
蟹 攝	二等	平	皆	ei	開	サ°イ-齋(1)	1	1											
		平	佳	ai	開				サ°イ-差 9(1)	1	1								
		上	蟹	ai	開														
		去	卦	ai	開	サ°イ-債①(7)	1	7											
		去	夬	ai	開														
臻 攝	三等	平	真 臻	iěn	開	ツイ-榛(1)	1	1											
		去	震	iěn	開														
		入	質 櫛	iět	開				ツワン-襪(1)	1	1								
		入	術	yět	合														
山 攝	二等	平	刪	an	開														
			刪	uan	合														
			山	en	開														
		上	清	an	開														
			清	uan	合														
			産	en	開	サ°ン-盞(3)	1	3											
	入	鎋	ət	開					サ°-刹(1)	1	1								
		黠	at	開	サ°-札(1)扎(3)冪(1)	3	5	サ°-察(1)擦(1)	2	2									
	三等	平	仙	yen	合														
	效 攝	二等	平	肴	au	開				チヤ○ウ-鈔①(4)	1	4							
上			巧	au	開	サ°○ウ-瓜(2)	1	2	チヤ○ウ-炒(2)	1	2								
去			效	au	開				チヤ○ウ-鈔②(4)										
仮 攝	二等	平	麻	a	開				サア-又①(1)ツア-差① 9(6)チヤア-差 9(1)	1	8	ツア-査① 6(5)搯①(1)ツア-査 6(1)植(1)	3	8	スヤ○ウ-稍(2)梢 2(1)掣(1)サ○ウ-梢 2(1)	3	5		
		上	馬	a	開														
		去	禡	a	開	ツア-詐 3(2)ケン-詐 3(1)	1	3											
宕 攝	三等	平	陽	iag	開	チヤン-莊(2)装①(3)粧(3)	3	8	サ°ン-瘡(1)	1	1	ヂヤン-床 4(3)チヤン-床 4(1)	1	4	シヤン-霜(1)孀(1)	2	2		
		上	養	iag	開														
		去	漾	iag	開	チヤン-壯(1)装②(3)	1	1											
梗 攝	二等	平	庚	aŋ	開														
			耕	eŋ	開	ツエン-爭(4)筭(2)	2	6											
		上	梗	aŋ	開														
			映 敬	aŋ	開														
		去	諍	eŋ	開	ツエン-諍(4)諍(1)	2	5											
			陌	aŋk	開	ツエ-窄(1)	1	1	サ°-柵①(1)	1	1								
入	麥	ək	開				ツエ-策(1)冊(1)サ°-柵②(1)	2	2										
流 攝	三等	平	尤	iəu	開														
		去	有	iəu	開	ツエ○ウ-鞞(1)繡①(1)	2	2											
深 攝	三等	平	侵	iēm	開				ツアン-參① 2(1)	1	1								
		威	em	開															
		銜	am	開															
咸 攝	二等	上	臻	em	開	サ°ン-斬 2(1)ツアン-斬 2(1)	1	2											
		入	洽	ep	開				サ°-插(4)	1	4								
		入	葉	iɛp	開														
曾 攝	三等	入	職	iək	開	ツエ-側(7)	1	7	ツエ-測(4)	1	4								
計							24	58				20	148			1	15		
止 攝							1	1				4	112			3	23		
止 攝 以外							24	58				15	35			39	250		

注：・「ツヲ-齧(1)」は原例が「長短話」「嘆作爲之齧齧 作事ノ齧齧スルコトヲ嘆シ」である。『広韻』に「牀呂切 齧齧」とあり、意味が対応するが、音注が一致しない。また、『集韻』に莊母仮撰の「莊加切 説文齧齧也」、崇母仮撰の「鋤加切 齧不正也」、從母遇撰の「在呂切 嚼也」、莊母遇撰の「壯所切 齧齧齒不正」、崇母遇撰の「狀所切 齧齧齒不相值」もあり、表記例の意味は崇母遇撰と莊母遇撰の読みと一致する。南京音は[tsu]で、『同文備考』は[tsəu]となり、両方言では同じ[ts-]であるため、「ツヲ」は莊母遇撰の「壯所切」を注するもので、呉方言から説明できる。

・「サ°-柵(1)」は、原例が「下了藥柵 陣ヲ取タ」で、『広韻』にその異体字「柵」は初母の「測澗切 村柵説文曰堅編木」「楚革切 堅木立柵又村柵」と生母の「所晏切 籬柵」とあり、意味上に違いがないが、生母の読みは去声で、入声の「サ°」音注と一致しない。

・「シヤン-山 12(11)」は1字未注。

- ・「スエ-蟋(1)」は、原例が「虫介」所属の「蟋蟀^{スエスエ} キリクス」で、『広韻』に生母の「所櫛切 蟋蟀又音悉」と心母の「息七切 蟋蟀蚕也」とあり、二つの読みは意味では違いがない。蘇州音では[s-]と発音する。
- ・「スヤ○ウ-掣(1)」は、原例が「器用」所属の「掣釘(スヤ○ウテイン) カナメ」である。『広韻』に同「掣」字、「木上小或作掣」との説明があり、「所教切」で、生母に所属する。
- ・「霧-サ 2(1)サン 2(1)」は、原例が「霧時間 タチマチノアイダ」「一霧間 タチマチノアイダ」である。『広韻』に「山洽切 小雨」と「山輒切 小雨」との生母の二等と三等との二種類の読みがあり、韻鏡に二等に置かれている。入声字なので、「サン」は「サ」による誤記と考えられる。
- ・「シヤイ-灑(4)」は、原例が「灑酒 サケツゲ」「灑灑茶 チャヲツゲ」「満灑一盃 マンマント一盃」である。『広韻』に生母止摂の「所綺切 灑埽(上声)」「所寄切 灑埽説文汎也(去声)」、生母蟹摂の「所蟹切 灑水」、生母仮摂の「砂下切 灑水也」とある。意味と発音から、「シヤイ」は生母の蟹摂と対応している。
- ・「シヤイ-晒(1)」は、原例が「晒乾 ホシカラバシタ」である。「晒」は『広韻』に未収、「曬」の俗字で、『広韻』に「曬」は生母止摂の「所綺切 暴也」、生母蟹摂の「所賣切 暴也」とあり、音注が蟹摂の読みと対応している。

表 4-6-2 (照組三等)正齒音章組所属字一覧

摂	等位	声調	韻目		開合	照(章)[tʃ-]		穿(昌)[tʃ'-]		牀(船)[dʒ-]		審(書)[ʃ-]		禪[ʒ-]								
						清	濁	次清	濁	清	濁											
通摂	三等	平	鍾	ioŋ	開合	チヨ-衆①(12)終(6)鍾(7)ツラン-蠡(1)	4	26	チヨ-充(3)衝(2)	2	5			チヤン-磬(1)	1	1						
		上	腫	ioŋ	開合	チヨ-種①(5)腫(3)	2	8														
		去	用	ioŋ	開合	チヨ-衆②(12)種②(5)			チヨ-銃(1)	1	1											
		入	屋	io˥uk	合									シヨ-叔(3)	1	3						
		燭	ioŋ	開合	チヨ-嘖(2)燭(4)ジヨ-燭(1)	3	7			ジヨ-贖(2)	1	2	シヨ-東(2)	1	2							
止摂	三等	平	支	iɛ	開合	ツウ-支(4)枝①(1)梔(1)チ-只①(23)	4	29						スウ-施①(4)	1	4						
			支	yɛ	合				チユイ-吹①6(2)ツイ-吹6(4)	1	6						ズウ-匙(2)スウ-鴉①(1)	2	3			
			脂	li	開	ツウ-脂(1)	1	1										ツイ-垂(1)	1	1		
			脂	yi	合	ツイ-錐(1)	1	1											ジユイ-誰9(6)シユイ-誰9(1)スイ-誰9(2)	1	9	
		上	之	io˥i	開	ツウ-芝(2)之(70)	2	72							スウ-詩(6)鴉(1)	2	7					
			紙	iɛ	開合	ツウ-枳①(1)紙(13)チ-只②(23)	2	14	ツウ-侈(1)	1	1							ズウ-時19(18)鱗(1)スウ-時19(1)	2	20		
			旨	li	開	ツウ-指(1)旨(1)	2	2							スウ-矢(1)屎①(1)	2	2					
			旨	yi	合										スイ-水(35)	1	35					
		去	止	io˥i	開				ツウ-齒(5)	1	5				スウ-始(2)	1	2					
			寘	iɛ	開合										スウ-施②(4)			ズウ-市(3)	1	3		
			寘	yɛ	合				チユイ-吹②6(2)ツイ-吹6(4)									ズウ-鼓(1)	1	1		
			至	li	開	ツウ-至(9)	1	9				スウ-示①(1)	1	1				ジユイ-睡7(2)シユイ-睡7(1)スイ-睡7(4)	2	9		
		志	io˥i	開	ツウ-志(6)	1	6	ツウ-熾(1)	1	1						シイ-試(3)	1	3				
遇摂	三等	平	魚	io	開	チユイ-諸①(1)	1	1								シユイ-書(21)	1	21				
			虞	yu	開合	チユイ-珠(2)	1	2									シユイ-輪①(1)	1	1			
		上	語	io	開				チユイ-杵(1)處①(26)	2	27						スエ-黍(1)黍(1)チユイ-鼠(8)	3	10			
			麌	yu	開合	チユイ-主(21)	1	21										ジユイ-樹①17(14)シユイ-樹17(3)	1	17		
去	御	io	開	チユイ-注(1)	1	1										シユイ-輪②(1)						
	遇	yu	開合				チユイ-處②(26)									シユイ-度①(1)	1	1				
蟹摂	三等	去	祭	iei	開											シイ-世(13)勢(4)	2	17				
			祭	yei	合	ツイ-贅(1)	1	1										スウ-誓(1)	1	1		
臻摂	三等	平	真	iɛn	開	チン-真①(22)	1	22					ジン-神(3)晨(1)	2	4							
			諄	yɛn	合				チユン-春(12)鶻(1)	2	13						シン-身(30)	1	30			
		上	軫	iɛn	開	チン-診(1)	1	1														
			準	yɛn	合	チユン-准(9)	1	9	チユン-蠢(1)	1	1	ジユン-楯(2)	1	2					ジン-慎(5)	1	5	
		去	震	iɛn	開																	
			稕	yɛn	合										ジユン-順7(6)シユン-順7(1)	1	7	シユン-舜(1)	1	1		
入	質	iɛt	開																			
	術	yɛt	合				チユ-出①50(49)	1	50								シ-失(14)室4(3)ジ-室(1)	2	18			
山摂	三等	平	仙	ien	開	チエン-攬(氈)(1)梅(1)	2	2									セン-扇①(2)	1	2			
			仙	yen	合	チエン-專(8)磚(1)	2	9	チエン-穿①(7)串①(1)	2	8	チエン-船17(16)チエン-船17(1)	1	17					ゼン-蟬(2)			
		上	獮	ien	開																	
			線	yen	合	チエン-戰(3)	1	3												ゼン-善24(20)セン-善24(4)チエン-蟬(1)	2	25
		去	線	ien	開																	
			線	yen	合				チエン-穿②(7)串②(1)													
入	薛	iet	開									ゼ-舌(1)	1	1								
	薛	yɛt	合	チユ-拙(2)	1	2												ツエ-折①(2)	1	2		
效摂	三等	平	宵	ieu	開	チヤ○ウ-招(5)	1	5														
			小	ieu	開																	
		去	笑	ieu	開	チヤ○ウ-照8(7)チヤウ-照8(1)	1	8												シヤ○ウ-撓①(1)	1	1
仮摂	三等	平	麻	ia	開	チエゝ-遮(2)	1	2	チエゝ-車①15(14)チエゝ-車15(1)	1	15	ゼエゝ-蛇(10)	1	10						シエゝ-奢3(2)除(3)セエゝ-奢3(1)	2	6
			上	馬	ia	開	チエゝ-者(27)這(31)	2	58	チエゝ-扯(4)	1	4									セエゝ-捨3(2)舎①(3)シエゝ-捨3(1)	2
		去	禡	ia	開	チエゝ-蔗(1)鷓(1)	2	2				ゼエゝ-射4(3)シエゝ-射4(1)	1	4							セエゝ-舎②(3)	

宕 攝	三等	平	陽	iaŋ	開	チヤン-彰(3)樟(1)章(4)障①(2)	4	10	チヤン-昌(1)菴(1)猖(1)	3	3			シヤン-商(7)傷①(4)	2	11	チヤン-常 16(10)償(1)嘗 2(1)チヤン-常 16(5)嘗 2(1)ヅヤン-常 16(1)	3	19			
		上	養	iaŋ	開	チヤン-掌(3)	1	3						シヤン-賞(2)晌(1)	2	3	ジヤン-上① 60(1)	1	1			
		去	漾	iaŋ	開	チヤン-障②(2)			チヤン-唱(4)	1	4			シヤン-傷②(4)			ジヤン-尚(8)上② 60(50)シヤン-上 60(9)	1	67			
		入	藥	iak	開	チヤ-酌(3)勺(2)	2	5	チヤ-綽(1)	1	1							シヤ-灼 2(1)シヨ-灼 2(1)	1	2		
梗 攝	三等	平	清	iaŋ	開	チン-正①(20)鉦(1)	2	21						シン-声(14)	1	14	ヂン-城 4(2)成 18(17)誠(1)チン-城 4(2)成 18(1)	3	23			
		上	靜	iaŋ	開	チン-整(4)	1	4														
		去	勁	iaŋ	開	チン-正②(20)								シン-聖(3)	1	3	ジン-盛(2)	1	2			
		入	昔	iak	開	チ-隻(3)	1	3	チ-尺(2)赤(1)帛(1)	3	4			シ-釋(1)適①(1)	2	2	ジ-石 13(5)跣(1)シ-石 13(8)柘(1)	3	15			
流 攝	三等	平	尤	iau	開	チウ-周(4)州(1)	2	5						シウ-收①(5)	1	5	ヂウ-響 3(2)チウ-響 3(1)	1	3			
		上	有	iau	開	チウ-帚(3)	1	3						ジウ-手 25(1)シウ-守①(7)手 25(24)首①(11)	3	43	ジウ-受① 13(12)壽①(1)シウ-受 13(1)	2	14			
		去	宥	iau	開	チウ-咒(2)	1	2	チウ-臭(1)	1	1			シウ-守②(7)首②(11)收②(5)			ジウ-壽②(1)授(1)	1	1			
		平	侵	iɛm	開	チン-斟(2)針①(2)鍼(1)	3	5						シン-深①(5)	1	5						
深 攝	三等	上	寢	iɛm	開	チン-枕①(1)	1	1						シン-審①(2)嬖①(2)	2	4	ジン-甚① 7(1)シン-甚 7(6)	1	7			
		去	沁	iɛm	開	チン-針②(2)枕②(1)								シン-深②(5)審②(2)嬖②(2)			ジン-甚② 7(1)シン-甚 7(7)					
		入	緝	iɛp	開	チ-執(3)	1	3						シ-濕①(3)	1	3	ジ-十 24(1)拾(3)シ-十 24(23)什(16)	3	43			
		平	鹽	iɛm	開	チエン-占(1)	1	1														
咸 攝	三等	入	葉	iɛp	開	チエ-摺①(1)	1	1						テ-牒(1)								
		平	蒸	iaŋ	開				チン-稱①(5)	1	5	ヂン-乘①(2)繩(3)	2	5	シン-升(2)勝①(8)	2	10	ヂン-承 4(3)チン-承 4(1)	1	4		
曾 攝	三等	上	拯	iaŋ	開	チン-拯(2)	1	2														
		去	證	iaŋ	開	チン-症(1)證(1)	2	2	チン-稱②(5)秤(4)	1	4	ヂン-乘②(2)剩 4(2)チン-剩 4(2)	1	4	シン-勝②(8)							
		入	職	iaŋk	開	チ-織①(1)職(4)	2	5				ジ-食(7)	1	7	シ-式(1)識①(9)	2	10					
計						71	400			28	159	14	64			53	357		45	387		
止 攝						14	134			4	13			1	1			7	50		11	108
止 攝 以 外						57	266			24	146			13	63			46	307		34	279

注：・「チ-只(23)」は、第三章第四節の声調点の部分で検討したように、「チ」は呉方言の入声の読みと一致している。

・「チン-診(1)」は原例が「診了脉」である。『広韻』に章母の「章忍切」と澄母の「直刃切」とあるが、音注は章母の意「候脉」と一致しているため、章母の読みと認定する。

・「チン-枕(1)」は原例が「枕頭」である。『広韻』に章母の「章荏切」「之任切」と澄母の「直深切」とある。音注は章母の「之任切」の意「枕頭」と対応しているため、章母と認定する。

・「チヤ-勺(2)」は、原例が「器用」の「勺瓢 ヒシヤク」「水勺 ヒシヤク」である。『広韻』に章母の「之若切 挹取也」と禪母の「市若切 周禮梓人爲飲器」とあり、意味から章母の読みと一致している。『漢語大字典』に「之若切」の読みについて、「昏取。也作“酌”。」との説明があり、同書でも「チヤ-酌(3)」と同じ音注となっている。南京音が[ʃoʔ]、蘇州音が[zoʔ]、杭州音が[zvʔ]となり、『同文備考』では[tʃiak]であり、「チヤ」は両方言から説明できる。

・「ジ-跣(1)」は原例が「花舛」所属の「鴨跣 ツイグサ」であり、「之石切」で、「チ-隻(3)」と一致できず、同じ「石-ジ/シ」の声符類推による誤記だろう。

・「チユ-出 50(49)」は 1 例未注。

・「ジン-晨(1)」は禪母の「植鄰切 早也明也」と船母の「食鄰切」とあり、原例が「早晨 アサ」である。読みから声母の所属を判断するのは難しく、本研究では音注の特徴によって、船母と認定する。

・「ジュン-楯(2)」は、原例が「楯牌 タテ」「鉄楯 タテ」である。『広韻』に徹母の「丑倫切 木名」、邪母の「詳遵切 楯闌檻也」、船母の「食尹切 欄檻」とあり、意味上では、最も対応するのは邪母と船母の読みである。同書の邪母の字に対して、「ヅ」音注となるのは特徴で、本研究では船母と認定する。

・「スエ-黍(1)𪎭(1)」について、原例はそれぞれ「米穀」所属の「蜀黍 ナンバンキビ」、「蟲介」所属の「𪎭𪎭 ハタハタ」である。両字の音は同じ「舒呂切」で、書母遇摂所属である。しかし、音注が短音節型で、読みと一致しない。また、同書では、「チユイ-鼠(8)」も音「舒呂切」であり、音注がことなっている。遇摂の部分で検討するように、『同文備考』では主母音が[y]となり、「-エ」と「-ユイ」は同じ[y]示すもので、呉方言の特徴を反映する。

・「チエン-串(1)」は「古患切」であるが、『康熙字典』に「[増韻]樞絹切…讀去聲通穿」とあり、また、『中原音韻』には章(穿)母の読みもあり、[tʂʰiuen]と発音する。この音注が昌母の読みと対応する。

・「チエ-這(31)」は、『広韻』に疑母山撰字で、音「魚變切」意「迎也」となっているが、音意とも合わない。蔣(2005:122-124)によると、「這」が唐代から指示代名詞として使われている。『大漢和辞典』に「[増韻]止也切」と、仮撰の読みもある。従って、「這」の音注は中古音の疑母の読みでなく、近代以降の発音と対応している。

・「ツエ-折(2)」は、既に徹母の部分で「ゼ-拆(3)」を分析する時、言及した。原例は「折箭爲誓 箭ヲ折テチカヒロナス」と「良賈不爲折閱不市 ヨキ商人ハ損失損亡アリト云ヘトモ不商ト云コトナシ」である。『広韻』に定母蟹撰「杜奚切 禮記云吉事欲其折折爾謂安舒貌」、章母山撰「旨熱切 拗折又虜複姓」と禪母山撰「常列切 斷而猶連也説文斷也又作𪎭」とある。蟹撰の読みは音注と対応しない。意味上では表記例が禪母の読みと対応している。「折」「拆」2 字に対する音注はお互いに近い字形による誤記の可能性が極めて高い。

1.6.2 正齒音章組

1.6.2.1 止摂の場合

(1) 章母 [tʃ] と昌母 [tʃʰ]

表 4-6-2 のように、章母 [tʃ] の所属字は計 71 字種、延べ 400 例であり、昌母 [tʃʰ] の所属字は計 28 字種、延べ 159 例である。

両声母の止摂字について、章母は 14 字種、延べ 134 例であり、昌母は計 4 字種、延べ 13 例である。その中、章母の場合、開口字は「ツウ」となり、合口字の「ツイ-錐(1)」のように、「ツイ」となっている。昌母の場合、開口字も「ツウ」であり、合口字が「吹-チュイ 6(2) ツイ 6(4)」で、「ツイ」以外、「チュイ」もある。

「吹-チュイ 6(2) ツイ 6(4)」は、『広韻』に「昌垂切 吹嘘」(平声)と「尺偽切 鼓吹也 月令曰 命樂正習吹」(去声)とあり、原例が下記の通りである。

「チュイ」: 「二字話」^{チュイヒユイ}吹嘘 フイチャウスル

「四字話」^{チュイダンコウウハ}吹彈歌舞 吹タリ弾シタリシテ歌ヒ舞フ

「ツイ」: 「器用」^{ツイドン}吹筒 フキヅハ

「長短話」^{ヘンアイツイダンコウウハテン}偏愛吹彈歌舞等 偏ニフエシャミセンウタヒマナドノヤウナル

ボイフアンツイタウリヤウ 被風吹倒了 トウ ツイサンリヤウ 風ニ吹タヲサレヌ トウ ツイサンリヤウ 都吹散了 トウ ツイサンリヤウ 吹チラシヌ

意味に違いは見られない。南京音は [tʃʰ-]、現代杭州音は [tsʰueɪ] となり、『同文備攷』では [tʃʰ-]、『磨光韻鏡』では「チュイ」である。「チュイ」は当時の両方言から説明できるが、「ツイ」は現代杭州音から説明できる。このように、両音注は呉方言から説明できる。

このように、「吹」以外、章・昌両声母の止摂の字に対して、開口が「ツウ」、合口が「ツイ」となり、全て「ツ」の音注である。「ツ」に反映される発音は [ts] である。

両声母は南京音が [tʃʰ][tʃʰ-]、現代杭州音が [ts-][tsʰ-] と発音する。旧派蘇州音¹²³では、開口字が [tʃʰ-][tʃʰ-]、合口字が [ts-][tsʰ-] となっている。また、『同文備攷』では開口字が [ts-][tsʰ-]、合口字が [tʃ-][tʃʰ-] となり、『三音正譌』の開口字も「ツウイ」である。「ツ」の音注は現代杭州音から説明できる。

¹²³ 新派蘇州音が [ts-][tsʰ-] である。

上述したように、章・昌両声母に対する音注は呉方言の特徴を反映している。

(2) 船母 [dʒ]

船母 [dʒ] の所属字は計 14 字種、延べ 64 例である。止摂の字は、開口字の「スウ-示(1)」1 例のみである。

「スウ-示(1)」は原例が「四字話」の「梟首示衆 ヒヤウシウスウチヨシ コクモンニカケテミセシメニスル」である。『広韻』に群母の「巨支切 地祇神也」と船母の「神至切 垂示」とあり、意味の上では音注は船母の読みと一致している。南京音は [tʂʰʊ]、蘇州音は [zʊ]、杭州音は [zɿ] と発音する。『同文備攷』は [zʊ] で、『三音正譌』と『磨光韻鏡』は同じ「ヅウイ」となっている。このように、「スウ」はいずれにも対応しない。船母は濁音なので、清濁の区別は同書の最大な特徴であり、止摂のこの 1 例は清音の音注であるが、濁点の記入漏れによるものと考えられ、濁点付きの「ズウ」は呉方言から説明できる。

このように、船母の字に対して、止摂の「スウ-示」1 例が濁点の記入漏れと考えられる。

(3) 書母 [ʃ]

書母 [ʃ] の所属字は計 53 字種、延べ 357 例である。

止摂の字は計 7 字種、延べ 50 例である。合口字は「スイ-水(35)」1 例のみで、「スイ」となり、それ以外、全て開口字で、「シイ-試(3)」を除き、「スウ」となっている。

「シイ-試(3)」は、「式吏切 用也」で、原例が「四字話」の「試做一做 シイツヲ、イツヲ、 試ニシテミル」「面試一試 メンシイイシイ 自己ニタイメンシテ試ルコト」である。南京音は [ʂʊ]、蘇州音は [sʊ] となり、『同文備攷』では [sʊ] で、『磨光韻鏡』では「スウイ」となっている。「シイ」は呉方言より南京音に近い。これは高松(1985a)が言及した南京音を反映するものである。

合口の「水」は南京音が[ɕuəi]、現代杭州音¹²⁴が[suəi]・[suei]となり、『同文備攷』で[ɕuei]、『磨光韻鏡』では「シユイ」となっている。このように、「スイ」は現代杭州音から説明できる。

開口の字について、南京音は[ɕ-]、現代杭州音¹²⁵で[s-]となり、『同文備攷』は[s-]、『磨光韻鏡』は「スウ」である。「ス」は現代杭州音から説明できる。

このように、書母の字に対して、南京音の特徴に近い「シイ-試」以外、開口字の「スウ」、合口字の「スイ」はともに現代杭州音の特徴を反映している。

(4) 禪母 [z]

禪母 [z] の所属字は計 465 字種、延べ 387 例である。

止摂の字は計 11 字種、延べ 108 例である。全体として開口は「スウ」、合口は「ジユイ」「ツイ」であり、それ以外、開口の場合、「時是 **鴉**-スウ」など、合口の場合、「垂瑞」の「ツイ」など、清音の音注も見られる。なお、「小曲」に属するのは「スイ-誰 9(2)」「スイ-睡 7(4)」「スウ-是(2)」「ツイ-瑞 2(1)」「ツイ-垂(1)」で、例外なく清音の音注となっている。

開口の場合、清音音注となるのは「時是 **鴉**-スウ」である。

「時-ズウ 19(18)スウ 19(1)」は反切が「市之切」、原例が下記の通りである。

「ズウ」:キイズウライ サズウケン「三字話」几時來 霎時間 「四字話」ズウヂヤンライワン時常來往
 「スウ」:ズウヂヤンツエウトン「四字話」時常 走動

「スウ」の例は初出でない。「是-ズウ 62(56)スウ 62(4)」は反切が「承紙切」で、表記例は以下のように、「是」に対する「スウ」の例も初出ではない。

「スウ」:ズウフ°スウ「三字話」②是 不是 「四字話」スウコウソウワン ツェンズ°エンズウハ°ウ是我素望 怎生是好
チエハトウ スウスエンズ°エン ヨ リイ
 「長短話」這都是先生屋裡
 「ズウ」(一部):ダ°ウズウハ°ウ「三字話」①倒是好 ③セ スウハ°ウ說是好 「四字話」ズウゴウネンキヤア是我年家

「是 不是」の中、「是」が二回現れ、「スウ」は明らかに濁点が省略されたものである。このように、「時」「是」に対する「スウ」は濁点が省略されたと考えられる。

¹²⁴ 新派蘇州が[suəi]・[suei]で、旧派蘇州音が[ɕu] [sɛ]となる。

¹²⁵ 旧派蘇州音は[ɕ-]、新派蘇州音は[s-]である。

「スウ-鴫(1)」は、原例が「花艸」所属の「鴫尾(スウイ) イチハス」である。『広韻』に未収。『集韻』「常支切 鴫鷓也亦从氏」とある。清音音注のため、字形に近い「鷓」を注するものではないかと推測したいが、『広韻』に「鷓」が収録され、昌母の「處脂切 一名鷓也」とあり、同書の昌母止摂の字は「ツウ」音注となるのが一般的であることから、この可能性が大きい。「鴫」は禪母止摂所属の「氏」(章移切)の類推によるものと推測するが、同書では章母止摂の字も「ツウ」となっている。このように、清音音注の「スウ」は濁点の記入漏れの可能性が高い。

合口の場合、清音の音注となるは、「誰睡-シユイ」である。

「誰-ジユイ 9(6)シユイ 9(1)」は反切が「視佳切」で、原例が下記の通りである。

「シユイ」:「五字話」誰能親眼見

「ジユイ」:「二字話」阿誰 「四字話」誰人出首 「五字話」誰是主告人
「六字話」誰是被告人麼 「長短話」誰不老成 誰無大福

「シユイ」の例が^{シユイネンツインエンケン}「誰能親眼見 誰カ親眼ニシテ見ルコトヲ得ンヤ」で、他の「ジユイ」の例、例えば、^{ジユイズウチュイカウジン}「誰是主告人 誰ガカケクジノ者ゾ」とは、意味に違いが見られない。そして、初出でないので、濁点が省略されたものと考えられる。

「睡-ジユイ 7(2)シユイ 7(1)」は反切が「是偽切」で、原例が以下のようになっている。

「シユイ」:「四字話」待要睡覺

「ジユイ」:「三字話」打瞌睡 「六字話」自家屋里去睡

「シユイ」の例が^{ダイヤウシユイキヤウ}「待要睡覺 睡トイタシタ」で、意味の上では、「ジユイ」の^{タア、カジユイ}「打瞌睡 ネムル」等とは違いがなく、そして初出でないため、「シユイ」も濁点の省略によるものと考えられる。

このように、禪母の止摂の字に対して、開口字が「ズウ」、合口字が「ズイ」「ジユイ」となっている。「ズ」に反映される発音は[z-]、「ジ」に反映される発音は[ʒ-]である。

開口の字は南京音が[ɬ-]、蘇州・杭州音が[zɿ]、『同文備攷』では[zɿ]、『磨光韻鏡』では「ズウイ」となっている。「ズウ」は吳方言から説明できる。

合口の字は、「ズイ」音注の場合、南京音が[z-](例えば:「瑞」)と[tɕ'-](例えば:「垂」)、杭州音が[z-](「瑞」)と[dz-](「垂」)、蘇州音が[z-]となり、『同文備攷』では[z-](「瑞」)と[dʒ-](「垂」)で、『磨光韻鏡』では「垂-ジユイ」のようになっている。「ズイ」は当時の杭州音と一致する。

「ジユイ」音注の場合、南京音が[ɬ-]、蘇州音が[z-]、杭州音が[dz-]となり、『同文備攷』では「誰」が[z-][dz-]、「睡」が[ʒ-][z-]、『磨光韻鏡』では「ジユイ」となっている。「ジユイ」も杭州音から説明できる。

このように、禪母に対する音注は吳方言の特徴を反映している。

表 4-6-8 章組止摂の字の対照状況

声母	開口	南京音	吳方言		
			杭州	蘇州	
章 [tʃ]	ツウ [ts-]	[tɕɿ]	[tsɿ][ts'ɿ] ○	[tɕɿ][tɕ'ɿ] _(多) ×	『同』
昌 [tʃ']	ツウ [ts-]	[tɕ'ɿ] ×		[tsɿ] _(少) ○	[tsɿ][ts'ɿ] ○
船 [dʒ]	ズウ [z-]	[tɕ'ɿ] ×	[zɿ] ○	[zɿ] ×	『同』 [zɿ] ○
書 [ʃ]	スウ [s-]	[ɬɿ] ×	[sɿ] ○	[ɬɿ] ×	『同』 [sɿ] ○
禪 [ʒ]	ズウ [z-]	[ɬɿ] ×	[zɿ] ○	[zɿ] ○	『同』 [zɿ] ○
声母	合口	南京音	吳方言		
			杭州	蘇州	
章 [tʃ]	ツイ [ts-]	[tɕuəi]	[tsuei][ts'uei]	[tsɛ][ts'ɛ]	『同』
昌 [tʃ']	ツイ [ts-] チユイ [tɕ'-] _(少)	[tɕ'uəi] ツ × チ ○	ツ ○ チ『磨』「チユイ」○	ツ ○ チ ×	[tɕuei][tɕ'uei] ツ × チ ○
船 [dʒ]	/	/	/	/	/
書 [ʃ]	スイ [s-]	[ɬuəi] ×	[suei] ○	[sɛ] ○	『同』 [ɬuei] ×
禪 [ʒ]	ズイ [z-] ジユイ [ʒ-] _(少)	[ɬuəi] [zuəi] ×	[zuei] ○ [dzuei] ○	[zɛ] ○	『同』 [zuei][ʒuei] ○ [dzuei] ○

上述したように、章組止摂の字について、表 4-6-8 に示しているように、音注は、全体的に吳方言の特徴と対応している。

1.6.2.2 止摂以外の場合

(1) 章母 [tʃ] と昌母 [tʃʰ]

非止摂の字について、章母が 57 字種、266 字で、昌母が 24 字種、146 字である。両声母に対して、「チ」の音注が一般的となっている。また、章母 [tʃ] 字の中、「ツヲン-蝨(1)」「ツイ-贅(1)」ような清音の音注例もあり、また、「ジヨ-蠟(1)」は濁音の音注である。

「ツヲン-蝨(1)」は、原例が「虫介」所属の「^{ツワンチヨン}蝨虫 イナゴ」で、通摂三等所属で、「職戎切 蝨斯蟲也」である。この字に対する音注は他の章母所属字と同じ、「チ」の音注が期待されているが、「ツ」となるのは例外である。両方言の現代の発音を確認することができないが、『同文備攷』では [tʃioŋ] であるため、「ツ」の音注は呉方言から説明できない。

「ツイ-贅(1)」は、「親族」所属の「^{ジ ツイニユイスエ}入贅女婿」で、蟹摂三等所属で、「之芮切 贅肉也又最也聚也又贅衣官名也」である。「贅」に対する「ツイ」は、止摂合口の字の音注と同じで、蟹摂の合口三等の字が止摂の字と合流したことを反映している。南京音は [tʃuəi]、蘇州音は [tʃɛ]、杭州音は [tʃuei] となり、「ツイ」は杭州音から説明できる。

「ジヨ-蠟(1)」は、原例が「虫介」所属の「^{イユイジヨ}芋蠟 イモムシ」である。『広韻』に章母「之欲切 蝮蠟」と澄母「直録切 躑蠟蟲名」とある。二種類の読みは意味に違いが見られない。現代の方言音が確認できず、声符「蜀」(市玉切)の類推によるものと考えられ、「ジヨ」は呉方言から説明できる。

このように、「蝨」は呉方言から説明できないのに対して、「贅」は呉方言と対応する。「蠟」は声符の類似によるものである。この 3 字以外、章・昌両声母の非止摂の字は、音注がともに「チ」である。「チ」に反映される発音は [tʃ-] である。

南京音は [tʃ-][tʃʰ-]、現代杭州音¹²⁶は [ts-][tsʰ-] となり、『同文備攷』では [tʃ-]、『磨光韻鏡』でも「チ」である。「チ」の音注は南京音と杭州音との両方から説明できる。なお、上述したように、非止摂の字は止摂の字に対する音注とは異なっている。

¹²⁶ 新派蘇州・現代杭州音は [ts-][tsʰ-]、旧派蘇州音 [tʃ-][tʃʰ-]・[ts-][tsʰ-] となっている。

(2) 船母 [dʒ]

船母非止摂の字は 13 字種、延べ 63 例である。表 4-6-9 のように、音注が主に「ジ」「ヂ」「ゼ」との濁音の音注であり、また、清音の「シ」「チ」の例も存在している。

表 4-6-9 非止摂の船母の字の音注の状況

禅母	濁音音注	清音音注
「ジ」「シ」	通撰三等開合ジヨ-曠(2) 臻撰三等開合ジン-神(3)晨(1) ジュン-楯(2)順 7(6) 曾撰三等開ジ-食(7)	臻撰三等開合シユン-順 7(1) 仮撰三等開シエ、-射 4(1)
「ヂ」「チ」	山撰三等合ヂエン-船 17(16) 曾撰三等開ヂン-乘(2)繩(3)剩 4(2)	山撰三等合チエン-船 17(1) 曾撰三等開チン-剩 4(2)
「ゼ」	山撰三等開ゼ-舌(1) 仮撰三等開ゼエ、-蛇(10)射 4(3)	

清音の音注を有する字の中、「ジ」と「シ」をもつのは「順」で、「ヂ」と「チ」をもつのは「船」「剩」で、「ゼ」と「シ」をもつのは「射」である。

「順-ジュン 7(6)シユン 7(1)」は、反切が「食閏切」で、原例が下記の通りである。

「シユン」音注：^{ヒヤ○ウシユンテイニヤン}孝順爹娘
 「ジュン」和順 ^{ホウジュン}孝順 ^{ヒヤ●ウジュン}順風相送 ^{ジュンフアンズヤンソソ}我肯百依百順 ^{ゴウケンヘ°イハ°ジュン}
^{ル、ヂョンヂャ○ウシユンツウズウエ、}而重值堯舜之時也 ^{ツエジュンベンタ○ウハアンセエ、}則順便到寒舍 ^{ジュンフアンギイ}順風旗

「シユン」は初出でないため、濁点が省略されたと考えられる。

「船-ヂエン 17(16)チエン 17(1)」は、反切が「食川切」である。「チエン」の例は「長短話」の「走船的人」であり、直前に「打翻了十來隻商船」とある。このように、「チエン」は明らかに「ヂエン」の濁点が省略されたものである。

「剩-ヂン 4(2)チン 4(2)」は、反切が「實證切」で、原例が以下のようになり、清音の音注と濁音の音注の数が同じである。

「チン」:^{チンヒヤア}「二字話」①剩^{チンスエ、}下 ②剩些
 「ヂン」:^{フ*ヂン}「二字話」③不剩 「器用」剩^{ヂンツユウ}酒

南京音は[ʂ'en]、杭州音は[zən]となり、『西儒耳目資』では[xim](=[ʂ'iq])、『同文備攷』では[dʒiq]、『磨光韻鏡』では「ヂン」となっている。このように、「チン」は吳方言から説明できる。また、船母の止摂の部分で述べたように、船母

は濁音で、清濁の区別は同書の最大な特徴で、「チン」は初出であるため、濁点の記入漏れの可能性が高い。

「射-ゼエ\4(3)シエ\4(1)」は、原例が下記の通りである。

「シエ\」:^{シエ\チユイチンキヤ}「四字話」射住陣脚 陣脚ヲ射スクムル
 「ゼエ\」:^{ゼエ\トウ}「器用」射塚 アツチ ^{ゼエ\カン}「花艸」射干 カラスアフギ一名鳥扇
 「長短話」^{ウラツエ〇ウマア\ゼエ\コン}或走馬射弓 或ハ馬ヲセメ弓ヲ射

意味の上から、『広韻』にある仮撰の「神夜切 射弓也」と一致している。南京音は[ɕ'-]、蘇州・杭州音は[z-]となり、『同文備攷』では[ziɛ]、『磨光韻鏡』では「ヂエ\」である。「ゼエ\」は呉方言から説明できる。「シエ\」は初出のため、濁点の記入漏れの可能性が高い。

このように、船母の非止撰の字は、「順-シユン」「船-チエ」が濁点の省略、「剩-チン」「射-シエ\」は濁点の記入漏れの可能性がある。この4字を除き、主に「ジ」、「ヂ」、「ゼ」の三種類の音注となっている。

「ジ」「ゼ」に反映される発音は[ʒ-]で、「ヂ」に反映される発音は[ɕʒ-]である。船母の字は蘇州、杭州音との対照状況は表 4-6-10 のようになっている。なお、南京音の場合は無声化したため、濁音の音注と対照する対象とはならない。

表 4-6-10 船母の字の対照状況

音注	船母 [dz]	杭州音	蘇州音					
			旧派		『同』			
ジ・ゼ [ʒ]	ジン-神	[z-]	○	[z-](新派)	○	[ʒ-]	○	
	ジン-晨			[z-]		[ʒ-]		
	ジヨ-贖			[z-]		[z-]		[ʒ-]
	ジユン-順			[z-]		[z-]		[ʒ-]
	ジ-食	[z-]		[z-]	[ʒ-]			
	ゼエ\・ジエ\・射	-	-	[z-]-	[ʒ-]			
	ゼ-舌	[z-]	○	[z-]	[ʒ-]			
	ゼエ\・蛇	[dz-]	×	[z-]	[ʒ-]			
ヂ [ɕʒ]	ヂエン-船	[dz-]	○	[z-]	×	[ɕʒ-]		
	ヂン-乗	[dz-][ts'-]	○	[z-]		[ɕʒ-]		
	ヂン-繩	[z-]	×	[z-]		[ʒ-]	×	
	ヂン-剩	[dz-][z-]	○	[z-]		[ɕʒ-]	○	

注：・「ジン-神」の旧派蘇州音の読みが確認できない。
 ・「ジユン-楯(2)」について、各方言の読みは確認できず、表に省略。
 ・「乗」は杭州音の場合「乗車」という意味が[ts'-]、「乗法」という意味が[ɕz-]と発音する。

表 4-6-9 の対照関係から分かるように、船母の字は杭州音、『同文備攷』との対応が多く見られる。

(3)書母 [ʃ]

書母非止摂の字は計 46 字種、延べ 306 例である。表 4-6-11 のように、音注が主に「シ」「セ」となり、「チ」の音注も 2 例ある。清音の音注以外、「ジウ-手 25(24)」「ジ-室 4(1)」のような濁音の「ジ」の音注も見られる。「テ-磔(1)」「スエ-黍(1) **𧈧**(1)」は例外である。

表 4-6-11 書母の字の音注状況

音注	用例の所属摂
「チ」	通撰三等開合チヤン-蟠(1) 遇撰三等開合チュイ-鼠(8)
「シ」 («ジ」)	通撰三等開合シヨ-叔(3)東(2) 遇撰三等開合シユイ-書(21)輸(1) 蟹撰三等開合シユイ-庾①(1)シイ-世(13)勢(4) 臻撰三等開合シン-身(30)シユン-舜(1)シ-失(14)室 4(3) ジ-室 4(1) 效撰三等開シヤ〇ウ-燒(1)少(24) 仮撰三等開シエハ-奢 3(2)捨 3(1)除(3) [セエハ-奢 3(1)捨 3(2)] 宕撰三等開シヤン-商(7)傷(4)賞(2)响(1) 梗撰三等開シン-声(14)聖(3)シ-釋(1)適①(1) 流撰三等開シウ-收(5)シウ-守(7)手 25(24)首(11) ジウ-手 25(1) 深撰三等開シン-深(5)審(2)嫌(2) シ-濕①(3) 曾撰三等開シン-升(2)勝(8)シ-式(1)識①(9)
「セ」	山撰三等開合セン-扇(2)セ-設(2)説①(44) 仮撰三等開セエハ-奢 3(1)捨 3(2)舍(3) [シエハ-奢 3(2)捨 3(1)]
その他	咸撰三等開テ-磔(1) スエ-黍(1) 𧈧 (1)

「チュイ-鼠(8)」は、「舒呂切」で、南京音が[tɕʰu]、蘇州音が[tɕʰɿ]、杭州音が[tsʰɿ][tsʰu]となり、『磨光韻鏡』は「チュイ」となっていることから、「チ」の音注は南京音と吳方言との双方に対応する。

「チヤン-蟠(1)」は、「書容切 蝮蟠俗呼蟠 **𧈧**」である。原例は「虫介」の「**𧈧**(チヤンスエ) ハタハタ」であり、音注が読みと一致しない。字形の類似する「椿-チヤン」による誤記と考えられる。

「手-シウ 25(24)ジウ 25(1)」は、反切が「書九切」で、「ジウ」の音注の原例が「長短話」の「^{イ ジウモフハウラジン}一手摸活人 一手ニシテ人ヲ摸活ス」であり、他の「シウ」音注の表記例、例えば、「三字話」の「^{フ・トシウ}不脱手 ハカタ」、「四字話」の「^{フ・ネンジャン}不能上^{シウ}手 手ニイラタ」等とは、意味に違いがなく、「ジウ」も初出でないため、誤記の可能性が高い。

「室-シ 4(3)ジ 4(1)」は、反切が「式質切」で、原例が下記の通りである。

「ジ」:^{ツインツインベンジ}「四字話」請進便室 「シ」:^{アンシクイスイ}「常言」暗室虧心 「親族」^{チンシ}正室 ^{ツエシ}側室

「室」は南京音が[ɕ-]、杭州音が[s-]となり、濁音の「ジ」はいずれの場合にも一致できず、誤記の可能性が高い。

「テ-磔(1)」は原例が「器用」所属の「磔^{テギ}極 ユカケ」である。「磔」は書母の「書涉切」と曉母の「呼牒切」二つの読みがあり、いずれも音注と対応しない。「テ」は「蝶蝶-デ」の声符の類推によるものと考えられる。

「スエ-黍(1)𪗇(1)」について、原例はそれぞれ「米穀」所属の「蜀黍 ナンバンキビ」、「蟲介」所属の「𪗇𪗇 ハタクタ」である。両字の音は同じ「舒呂切」で、書母遇摂所属である。しかし、音注は短音節型で、読みと一致しない。2字とも、字形の類似する「スエ-率蟀」の類推による可能性がある。

このように、書母非止摂の字は、誤記による「手-ジウ」「室-ジ」と声符の類推による「テ-磔」「スエ-黍(1)𪗇(1)」以外、音注が主に「シ」「セ」で、「チ」も1例ある。

「シ」「セ」に反映された発音はともに[ʃ-]である。南京音は[ʃ-]、杭州音¹²⁷は[s-]で、『同文備攷』は[ʃ-]、『磨光韻鏡』は「シ」となっている。このように、「シ」「セ」は南京音と杭州音との双方から説明できる。「チ」の1例は両方言から説明できる。

¹²⁷ 旧派蘇州音は[ʃ-]、新派蘇州音は[s-]である。

(4) 禅母 [z]

禅母非止摂の字は計 35 字種、延べ 281 例である。

表 4-6-12 非止摂の禅母字の音注の状況

禅母	音注	濁音	清音
「ジ」 「シ」	濁音か 清音の 単音注	通摂三等開合ジヨ-熟(3)蜀(3) 臻摂三等開ジン-慎(5) 會摂三等開ジ-食(7) 宕摂三等開ジヤン-尚(8) 梗摂三等開ジン-盛(2) 流摂三等開ジウ-壽(1)授(1) 深摂三等開ジ-拾(3)	臻摂三等開シン-辰(1) 宕摂三等開シヤ-芍 2(1)シヨ-芍 2(1)(<u>小曲</u>) 梗摂三等開シ-柘(1) 深摂三等開シ-什(16)
	清・濁 両音注	遇摂三等開合ジユイ-樹 17(14) 臻摂三等開ジ-實 14(13) 宕摂三等開ジヤン-上 60(51) ジ-石 13(5) 流摂三等開ジウ-受 13(12) 深摂三等開ジン-甚 7(1)ジ-十 24(1) 會摂三等開ヂン-承 4(3)	遇摂三等開合シユイ-樹 17(3) 臻摂三等開シ-實 14(1) 宕摂三等開シヤン-上 60(9)(<u>7例小曲</u>) シ-石 13(8) 流摂三等開シウ-受 13(1)(<u>小曲</u>) 深摂三等開シン-甚 7(6)シ-十 24(23)(<u>2例小曲</u>) 會摂三等開チン承 4(1)
「ヂ」 「チ」	濁音	山摂三等開ヂエン-蟬(2)蟬(1) 宕摂三等開ヂヤン-償(1)	
	清・濁	臻摂三等開ヂン-臣 5(4) 宕摂三等開ヂヤン-常 16(12)嘗 2(1) 梗摂三等開ヂン-城 4(2)成 18(17) 流摂三等開ヂウ-讐 3(2)	臻摂三等開チン-臣 5(1) 宕摂三等開チヤン-常 16(3)(<u>2例小曲</u>)嘗 2(1) 梗摂三等開チン城 4(2)成 18(1) 流摂三等開チウ-讐 3(1)
「ヅ」	濁音	宕摂三等開ヅヤン-常 16(1)	山摂三等開ヅエ-折(2)
「ス」	清音		蟹摂三等開スウ-誓(1)
「ゼ」 「セ」	清・濁 両音注	山摂三等開ゼン-善 24(19)	山摂三等開セン-善 24(5)

表 4-6-12 のように、「小曲」以外、「ジ」「ヂ」の音注が多く見られる。

また、「ゼ(セ)」「ヅ」「ス」「ツ」の音注の例も存在する。なお、「シヤン-上 60(7)」「シウ-受 13(1)」「シ-十 24(2)」「チヤン-常 16(2)」「シヨ-芍 2(1)」は計 5 字種、13 例で、「小曲」に所属する。「小曲」以外、(i)「ジ」と「シ」、(ii)「ヂ」と「チ」、(iii)「シ」、(iv)その他 の四種類の場合がある。

(i) 「ジ」と「シ」

「ジ」と「シ」をもつのは「樹」「實」「上」「石」「甚」「十」6 字である。中に、「上-ジヤン 60(51)シヤン 60(2)」は、声調点の部分で検討したように、「ジヤン」は呉方言と対応し、清音の「シヤン」は濁点の記入漏れの可能性が高い。

「樹-ジユイ 17(14)シユイ 17(3)」は、禅母遇摂の「臣庾切」「常句切」とあり、原例の一部は下記の通りである。

「シユイ」: 「樹竹」③ ^{チュインシユイ} 楮樹 ④ ^{フアンシユイ} 楓樹 ⑤ ^{リヤンシユイ} 棕樹
「ジユイ」(一部): 「樹竹」① ^{サンジユイ} 杉樹 ② ^{ソンジユイ} 松樹

「シユイ」の例は初出でなく、濁点が省略されたと考えられる。

「實-ジ 14(13)シ 14(1)」は、反切が「神質切」で、表記例は以下のようになっている。

「シ」:^{チヤ●ウチユ シ ツイン}「四字話」招出實情
「ジ」(一部):^{ラ○ウジ}「二字話」老實 ^{ボ ジ}扑實 「三字話」^{ライジハ○ウ}委實好 ^{ジロハア、}實落話

「シ」は初出でなく、濁点の省略による可能性が高い。

「石-ジ 13(5)シ 13(8)」は、「常隻切 釋名曰山體爲石」で、原例が下記の通りである。

「シ」:^{シ ロン}「器用」石籠 ^{ホ ウシ}ジャカゴ 火石 ^{シ ホウ}ヒウチイシ
「花草」^{シ チヨ}石竹 ^{シソハン}ナデシコ 石蒜 ^{シ ビトハナ}シビトハナ ^{シ ホウ}石荷 ^{ユキノ下}ユキノ下
^{シ ライ}石韋 ^{シ ハン}ヒトツバ 石帆 ^{シ ライ}ウミマツ 石斛 ^{イハクスリ}イハクスリ
「ジ」:^{ジュイモウタ○ウツウジ}「常言」如磨刀之石 ^{ジ ツウ}刀ヲ磨ノ石ノ如シ 「器用」石子 ^{イシ}イシ
「菜蔬」^{ジハア、}石花 ^{ジルウ}トコロテン 石耳 ^{ジナン}イハタケ 「樹竹」石南 ^{シヤクナンケ}シヤクナンケ

「シ」の音注の例は初出でなく、特にこれらの例が「花草」所属の同頁の例が多いので、濁点が省略された可能性が高いと考えられる。

「甚-ジン 7(1)シン 7(6)」は、禪母の「常枕切 劇過也 説文曰尤安樂也」
「時鳩切 太過時」とあり、原例が以下のようになっている。

「シン」:^{シンジン}「二字話」甚人 ^{何モノカ}何モノカ
「三字話」^{シントンスエ、}甚東西 ^{ライシンキユイ}ナニモノゾ 爲甚去 ^{ナゼユクゾ}ナゼユクゾ
「四字話」^{モ シンヒンツユイ}没甚興趣 ^{何ノヲモシロヒコトモナイ}何ノヲモシロヒコトモナイ
^{モ シンヒヤアハン}没甚下飯 ^{何モサイガナヒ}何モサイガナヒ
「六字話」^{ガイデ○ウガイナ○ウツヲハシン}呆頭呆腦做甚 ^{バカバカトシテ何ヲスルゾ}バカバカトシテ何ヲスルゾ
「ジン」:^{ジンズウハ○ウカン}「長短話」甚是好看 ^{甚タ見事ナリ}甚タ見事ナリ

『大漢和辞典』に主に二種類の意味があり、一つは本来の意味、「はなはだ。はなはだしい。」で、「ジン」音注の例と一致している。もう一つは近代のもの、「なに。いずれ。疑問の語。」で、「シン」音注の例と対応している。このように、

「シン」は、近代漢語では元の字と違う意味、違う発音に使われ、「ジン」と書き分けている。なお、「ジン」は吳方言から説明できる。

「十-ジ 24(1)シ 24(21)」は反切が「是執切」で、濁音の「ジ」となるのは 1 例のみで、「常言」所属の「三十六計」で、初出でない。これ以外、全て清音の「シ」で、濁音音注の数が少ない。蘇州音では[z-]、南京音では[ʂ-]と発音するので、「シ」は南京音から説明できる。『磨光韻鏡』では「ジ」であり、『同文備攷』では入声韻尾まだ保存し、[ʒip][ʒip]との二種類の読みがあり、『唐話纂要』の入声韻尾の対立がなくなっていたが、主母音の面では、「ジ」「シ」二種類の音注は吳方言から説明できる。

(ii)「ヂ」と「チ」

「ヂ」と「チ」の両音注を有するのは「臣」「嘗」「城」「讐」「成」「承」6 字で、「ヂ」「チ」「ヅ」の三種類を有するのは「常」である。

「臣-ヂン 5(4)チン 5(1)」は「植鄰切」で、原例が下記の通りである。

「チン」:^{チヨンチンツウヘ●ウ}「四字話」①忠臣之後
「ヂン」:^{コンヂンツウソツラン}「四字話」②功臣子孫^{チヨンヂンヤ●ウロンギエン}「五字話」寵臣要弄權
「常言」^{ジツアイケンヂン}實在諫臣^{シイロハンシチヨンヂン}世亂識忠臣

^{チヨンチンツウヘ●ウ}「忠臣之後」は^{コンヂンツウソツラン}「功臣子孫」の前にあり、「チン」の例は初出であるため、南京音[tʂʰ-]と対応する一方、濁点の省略でなく、記入漏れの可能性があると考えられる。

「嘗-ヂヤン 2(1)チヤン 2(1)」は反切が「市羊切 試也曾也説文本作嘗口味之也」で、原例が下記の通りであり、意味に違いがない。「チヤン」は初出でないため、濁点省略された可能性が高い。

「チヤン」:^{ツウキンウイチヤンツエンイユイ}「長短話」至今未嘗全愈 「ヂヤン」:^{ウイヂヤンチエンジウ}「四字話」未嘗傳授

「城-ヂン 4(2)チン 4(2)」は反切が「是征切」で、原例が下記のようにになっている。

「チン」:^{ケンシウチンツウ}「四字話」堅守城池^{ライチンサンツエン}圍城三層

「ヂン」:「四字話」^{エンヂンリヤテ^イ}陷城略地 「六字話」^{ヨシヒ^ンシウヂンスウモ^ン}勇兵守城四門

「四字話」の 3 例が同じ頁にあるもので、「堅守城池」が初出となっている。表記例の数が同じで、「チン」は南京音と対応するもの、或いは濁点の記入漏れの可能性がある。

「讐-ヂウ 3(2)チウ 3(1)」は、原例が下記の通りである。

「チウ」:「常言」^{ケンチウジンウエンワイエンミン}見讐人分外眼明
「ヂウ」:「四字話」^{イ^ハエヘンバ^〇ウヂウ}以恩報讐 「常言」^{ヂウエユンモキ}讐冤莫結

『広韻』に「讐」は未収、正体字の「讎」が収録され、「市流切 匹也仇也」である。「チウ」の例は初出でないため、濁点の省略によるものと考えられる。

「成-ヂン 18(17)チン 18(1)」は反切が「是征切」、「チン」音注の原例が「四字話」の「^{コンチンミンツイ}功成名遂」である。同書で同じ「四字話」に所属、後に出現する「^{コンチンミンツイ}成名遂」が「ヂン」となっている。「チン」は初出でないので、濁点の省略によるものとも考えられる。

「承¹²⁸-ヂン 4(3)チン 4(1)」は反切が「署陵切」で、原例が下記の通りであり、「チン」は初出でないため、「ヂン」の濁点が省略された可能性が高い。

「チン」:「四字話」^{マアンケ^〇ウインチン}滿口應承
「ヂン」:「四字話」^{ヂンミンツラ、ズウ}承命做事 ^{トウヂンツインキヤ^〇ウ}彖承清教 「長短話」^{エユンヂンイヤアキヤ^〇ウ}願承雅教

「常-ヂヤン 16(10)チャン 16(3)ヅヤン 16(1)」は、反切が「市羊切」であり、「小曲」の 2 例を除き、原例が下記のようになっている。

「チャン」:「二字話」^{ワンチャン}往常(ヂヤン) ^{イ^ハチャン}異常(ヂヤン)
「長短話」^{チャンツウツエ、ミンイユンツウチユンチエン}常自嗟命運之迍邐
「ヅヤン」:「二字話」^{ツインツヤン}尋常(ヂヤン)
「ヂヤン」:「二字話」^{ピンヂヤン}平常 ^{ファイヂヤン}非常
「四字話」^{キヤアヂヤンスエ^ハバ^ア、ズウヂヤンライワン}家常些罷 ^{スウヂヤンツエ^〇ウ^ン}時常來往 時常走動
「五字話」^{キヤアヂヤンスエ^ハバ^ア、リヤ^〇ウ}家常些罷了

¹²⁸初版に「二字話」の「^{インイユン}應允」は再版では「^{インイユン}應承」と訂正されているが、音注は「イユン」のままである。本研究では初版本に従う。

「常言」^{ピンヂヤンフ}平常^{ツヲクイスインズウ}不作^{ヂヤンスウチニユイツウラ}虧心事^{〇ウ} 常思^{ワンヂヤン}織女^{ピンヂヤン}之^{ツインツヤン}勞^{イヂヤン}
 清貧^{ワンヂヤン}常樂^{ツインピンヂヤンロ} 貧家^{ピンキヤアウイヒ}未必^{ヂヤンツエモ}常寂^{ツインツヤン}寞

「二字話」所属の「^{ワンヂヤン}往常」「^{ピンヂヤン}平常」「^{ツインツヤン}尋常」「^{イヂヤン}異常」「^{ファイヂヤン}非常」5 例が同じ頁にある例で、「^{ワンヂヤン}往常」以外の 4 例がは連続して排列している。しかし、5 例の中に、三種類の音注がある。「^{ツインツヤン}ツヤン」は「^{ツインツヤン}尋常」の例で、「尋」の音注が「ツイン」となっているため、それに引きずられて、「ツ」に書き間違えられた可能性が高い。上記で挙げた括弧の音注について、「二字話」の「^{ワンヂヤン}往常」「^{イヂヤン}異常」「^{ツインツヤン}尋常」は愛媛大学の鈴鹿文庫版では「ヂヤン」と訂正されているが、冠山によるものかどうか判断できないため、ここで初版本に従っているが、「ツ」が「ヂ」による誤記の証拠となる。「^{ワンヂヤン}チヤン」の「^{ワンヂヤン}往常」が初出で、「二字話」以降の常は全て「^{ワンヂヤン}ヂヤン」となっていることから、「^{ワンヂヤン}往常」の「^{ワンヂヤン}チヤン」が濁点の記入漏れによるものである。また、それ以外の「^{イヂヤン}異常」「常自嗟命運之迍邐」2 例の「^{ワンヂヤン}チヤン」は濁点が省略された可能性が高い。

(iii)「シ」

「シ」の音注となるのは「辰」「柘」「什」「芍」4 字である。

「シン-辰(1)」は「植鄰切 辰象也又辰時也」で、原例が「二字話」の「^{リヤンシン}良辰ヨキトキ」である。南京音は[tʂʰ]、蘇州・杭州音は[z-]、『同文備攷』は[ʒ-]となる。「シン」は南京音から説明できず、濁点の記入漏れの可能性が高い。

「シ-柘(1)」は「之夜切 木名亦姓」で、章母仮撰の所属字であり、原例が「果瓜」の「^{シリウ}柘榴 ザクロ」となり、音注と対応しない。見出し語「柘榴」は「ザクロ」の意味ではない。中国語で「ザクロ」のことは「石榴」と書くが、日本では「石榴」の他に、「柘榴」とも書くことから、日本語では「柘榴」は「ザクロ」と対応する。「シリウ」は同じ意味の「石榴」の音を記したものと考えられる。つまり、「シ」は「石」を注するものである。

「シ-什(16)」は「是執切 篇什又什物也」で、原例が下記のように、全て「^シ什麼」という語に用い、近代漢語で疑問詞としての用法である。例外なく清音の「シ」となっている。

「三字話」没什麼 做什麼 省什麼 爲什麼

「四字話」沒什麼事 沒什麼忙 什麼名字 省得什麼
 「六字話」什麼人拼命了 有什麼中用處
 「長短話」有什麼緊要事 說什麼話 有什麼事故麼
 不知有什麼事故麼 什麼東西價錢 什麼事体

南京音は[ɕʌ]、蘇州音は[zaʔ]、杭州音は[dzeʔ]となり、『同文備攷』は[ʒip]となっている。「シ」は元の意味を区別する現代の意味と区別するために使われていると考えられる。

「芍-シヤ 2(1)シヨ 2(1)」は、「シヨ」の例が「小曲」に属する。「芍」は、『広韻』に匣母效摂の「胡了切 蔦凡 苳草」、端母梗摂の「都歴切 蓮中子也亦作敵的爾雅」、清母宕摂の「七雀切 坡名在壽春」、禪母宕摂の「市若切 芍薬」、知母宕摂の「張略切 芍薬香草」とあり、原例が以下の通りである。

「シヤ」:「花草」^{シヤヤ}芍薬 「シヨ」:「小曲」^{シヨヨハア、}芍薬花

匣・端母は明らかに音注と一致できず、意味の上では清母とも対応していない。また、既に検討したように、同書知母の字に対して、「チ」の音注は一般的であるので、この音注は禪母の読みを示す可能性が大きい。南京音は[ɕoʔ]、蘇州音は[zaʔ]、杭州音は[zeʔ]であり、『同文備攷』では[ʒiak]、『磨光韻鏡』(薬韻)では[-ヤ]となっている。このように、「シヤ」は、主母音が南京音と対応できず、呉方言の特徴を反映している。濁点の記入漏れと考えられ、当時の杭州音に一致する。

(iv)その他

「ゼ」「セ」となるのは「善」、「ス」となるのは「誓」、「ツ」となるのは「折」である。なお、「ツエ-折(2)」は、徹母の部分で述べたように、「ゼ-拆(3)」と互いに近い字形による誤記の可能性が極めて高い。

「善-ゼン 24(20)セン 24(4)」は、反切が「常演切」で、原例が下記のようになっている。

「セン」:「四字話」^{センユイサ°○ウヅウ}善書草字
 「常言」^{ツヲフ°センキヤンツウヘ°ヤン}作不善降之百殃 ^{センズウスイタン}善事雖貪 ^{センイ、ツウイ}善以自益

「ゼン」:^{スキャンゼン}「二字話」相善^{ゼンスウウエン}「三字話」善詩文^{ユウゼンハ〇ウ} 有善報^{アイツヲ、ゼン} 愛作善
「四字話」善詩能文^{ゼンスウネンウエン} 應有善報^{インユウゼンハ〇ウ} 「五字話」專要種善根^{チエンヤ〇ウチヨンゼンゲン}
「常言」作善降之百祥^{ツヲゼンキヤンツウヘ、ツヤン} 積善之家^{ツエゼンツウキヤア} 積不善之家^{ツエフ、ゼンツウキヤア} 見善如渴^{ケンゼンシユイカ}
於我善者^{イユイゴウゼンチエ、} 我亦善之^{ゴウイゼンツウ} 行善之人^{ヒンゼンツウジン} 不教而善^{フ、キヤ●ウルウゼン}
教而後善^{キヤ〇ウルウヘ〇ウゼン} 爲人行善方便者^{ライジンヒンゼンハンベンチエ、} 教而不善^{キヤ〇ウルウフ、ゼン} 心行慈善^{スインヒンツウゼン}
「長短話」專行善事^{チエンヒンゼンズウ}

「セン」の例はいずれも初出でなく、「常言」の中、「作善降之百祥 作不善降之百殃」は同じ頁で連続して排列されている語で、「セン」は明らかに濁点の省略によるものである。「善事雖貧」「善以自益」も「見善如渴」「於我善者我亦善之」の例にある「セン」も濁点が省略されたものと考えられる。

「スウ-誓(1)」は「時制切 誓約」で、原例が「折箭爲誓 箭ヲ折テチカヒヲナス」である。「-ウ」音注となるのは蟹摂祭韻の開口三等の字が止摂と合流した影響で、止摂開口の「-ウ」と統一されているからである。南京音は[ɕ-]、蘇州音は[z-]となり、『同文備攷』は[ʒ-]である。「スウ」は南京音と対応できず、濁点の記入漏れの可能性が高い。

このように、上記の禅母非止摂の字は、以下のようにまとめることができる。

- ①濁点が省略されたもの:「樹-シユイ」「實石-シ」「上-シヤン」
「嘗-チヤン」「讐-チウ」「成承-チン」「善-セン」「誓-スウ」「常-チヤン」
- ②濁点の記入漏れ:「辰-シン」「柘-シ」「芍-シヤ 2(1)」
- ③濁点の記入漏れ或いは南京音と対応するもの:「臣城-チン」「石-シ」
- ④誤記によるもの:「折-ツエ」
- ⑤「十-シ」は「シ」のみが南京音と対応するが、「ジ」「シ」両音注を有するのは呉方言から説明できる。
- ⑥「什-シ」「甚-シン」は疑問詞としての近代の使い方、「シ」の音注は元の発音と意味を区別するに使われている。

上記の場合を除き、音注が「ジ」「ヂ」となるのは一般的である。「ジ」「ヂ」それぞれに反映された発音は[ʒ-][dʒ-]である。これらの字は蘇州音、杭州音との対照関係は表 4-6-13 に示している。

表から分かるように、現代音の中、声母の面では、音注「ジ」「ヂ」は杭州音、『同文備攷』と対応している。

表 4-6-13 禪母の字の対照状況

音注	禪母 [z]	杭州音		蘇州音			
				旧派		『同』	
ヂ [dʒ]	ヂン-臣 城成誠承	[dz-]	○	[z-]	×	[dʒ-]	○
	ヂヤン-常償	[z-]	×	[z-]		[dʒ-]	
	ヂヤン-嘗	[dz-]	○	[z-]		[dʒ-][ʒ-]	
	ヂエン-蟬	確認できない	確認できない				
	ヂウ-讐	[dz-]	○	[z-]	×	[dʒ-]	
ジ・ゼ [ʒ]	ジン-辰 慎盛甚	[z-]	○	[z-]	○	[ʒ-]	○
	ジヨ-熟 蜀			[ʒ-]		[ʒ-]	
	ジユイ-樹			[z-]		[ʒ-]	
	ジ-十 拾			[z-]		[ʒ-]	
	ジ-實			[z-]		[ʒ-]	
	ジヤン-尚上			[z-]		[z-]	
	ジウ-受 壽授			[z-]		[z-]	
	ゼン-善			[z-]		[z-]	
	ジ-石			[z-]		[z-]	
	ジヤ-芍			[z-]		[z-]	
ゼ-折	[z-]	[z-][tʂ-]	[ʒ-]				
ズ [z]	ズウ-誓	[z-]	○	[z-]	○	[ʒ-]	○

上述したように、章組の音注の対照状況について、下記の表 4-6-14 にまとめることができる。

章組の音注は全体的に呉方言の特徴を反映している。なお、各声母と対応する音注の中、問題となるのは、破擦音の船母に対して、「ヂ」の音注以外、摩擦音を示す「ジ」「ゼ」が見られ、摩擦音の禪母の字に対して「ジ」の音注以外、破擦音を示す「ヂ」も存在している。これについて、本章の 1.8 節で両声母をまとめて検討する。

表 4-6-14 章組非止摂の字の対照状況

声母	非止摂音注	南京音との対応	呉方言との対応	
			蘇州	杭州
章 [tʃ]	チ [tʃ-]	[tʃ-][tʃ'-]○	[tʃ-][tʃ'-]○	[ts-][ts'-]×
昌 [tʃ']			[ts-][ts'-]×	『磨』「チ」○
船 [dʒ]	ジ ゼ [ʒ-] _(少) チ [dʒ-]	[ʃ][tʃ'-]×	[z-] 「ジ」「ゼ」○「ヂ」×	[z-] 「ジ」「ゼ」○「ヂ」×
			『同』[ʒ-][dʒ-]○	『磨』「ジ」「ズ」○
書 [ʃ]	シ セ [ʃ-] _(少) チ [tʃ-] _(少)	[ʃ-]○	[ʃ-] ○	[s-] ×
			『同』[ʃ-]○	『磨』「シ」「セ」○
禪 [z]	ジ [ʒ-] チ [dʒ-]	[tʃ'-][ʃ-]×	[z-][z-] 「ジ」○「ヂ」×	[z-][dz-]○
			『同』[ʒ-][dʒ-]○	『磨』「ジ」○

注：書母の「チ」となる「鼠-チユイ」は述べたように、両方言から説明できる。

1.7 半齒音日母

半齒音日母 [ɲz-] の字は表 4-7 のように、計 47 字種、延べ 682 例である。

表 4-7 日母所属字一覧

撮	声調	韻目		開合	日 [ɲz-]		字種数	延べ数
					次濁			
通撮	平	鍾	ioŋ	開合	ジョン-絨(3)鞞(1)		2	4
	上	腫	ioŋ	開合	ジョン-冗(1)		1	1
	入	屋	io [~] uk	開	ジヨ-肉(12)		1	12
	入	燭	io [~] ok	開合	ジヨ-辱(1)襦①(1)		2	2
止撮	平	支	iɛ	開合	ルヽ-兒① 120(5)ルウ-兒 120(115)		1	120
	平	之	io [~] i	開	ルヽ-而 59(30)ルウ-而 59(29)鱗(1)		2	60
	上	紙	iɛ	開合	ルヽ-邏(1)		1	1
	上	紙	ye	合	ジュイ-蕤(1)		1	1
	上	止	io [~] i	開	ルヽ-爾(1)耳 8(4)ルウ-耳 8(4)		2	9
	去	至	ii	開	ルヽ-二 14(5)ルウ-二 14(9)		1	14
遇撮	平	魚	io	開	ジュイ-如① 60(55)シュイ-如 60(4)ヅユイ-如 60(1)		1	60
	平	虞	yu	開合	ジュイ-孺(1)儒(1)		2	2
	上	麌	yu	開合	ジュイ-乳(1)		1	1
	去	遇	yu	開合	ジュイ-如② 60(55)シュイ-如 60(4)ヅユイ-如 60(1)			
蟹撮	去	祭	yei	合	ズイ-蝸①(1)		1	1
臻撮	平	真 臻	iɛn	開	ジン-人 180(171)仁(3)シン-人 180(7)シ-人 180(1)		2	183
	上	軫	iɛn	開	ジン-忍(5)		1	5
	去	震	iɛn	開	ジン-認(6)		1	6
	入	質 櫛	iɛt	開	ジ-日 98(93)シ-日 98(5)		1	98
山撮	平	仙	iɛn	開	ゼン-然 30(27)セン-然 30(2)ジェン-然 30(1)		1	30
	上	獮	yen	合	ゼン-軟 4(3)セン-軟 4(1)		1	4
	入	薛	iɛn	開	ゼ-熱(6)		1	6
效撮	平	宵	ieu	開	ジャ○ウ-饒①(2)		1	2
	上	小	ieu	開	ジャ○ウ-擾(4)		1	4
	去	笑	ieu	開	ジャ○ウ-饒②(2)			
仮撮	上	馬	ia	開	ジェヽ-惹 2(1)ゼエヽ-惹 2(1)		1	2
宕撮	平	陽	iaŋ	開	ジャン-韮①(1)		1	1
	上	養	iaŋ	開	ジャン-嘍(3)		1	3
	去	漾	iaŋ	開	ジャン-讓 5(1)シヤン-讓 5(1)		1	5
	入	藥	iak	開	ジャ-若 20(19)弱(2)鶻(1)鶻(1)ジヨ-若 20(1)		4	24
流撮	平	尤	iau	開	ジウ-柔(2)		1	2
深撮	平	侵	iɛm	開	ジン-憇① 7(4)任①(1)シン-憇 7(1)ニン-憇 7(2)		2	8
	上	寢	iɛm	開	ジン-莅(1)憇② 7(4)シン-憇 7(1)ニン-憇 7(2)		1	1
	去	沁	iɛm	開	ジン-任②(1)			
	入	緝	iɛp	開	ジ-入(3)		1	3
咸撮	平	鹽	iɛm	開	チェン-帖(1)		1	1
	上	琰	iɛm	開	ゼン-染①(2)苒(1)		2	3
	去	豔	iɛm	開	ゼン-染②(2)			
曾撮	平	蒸	io [~] ŋ	開	ヂン-仍(2)ナイ-苒(1)		2	3
計							47	682
止撮							8	205
非止撮							39	477

注：「ジュイ-蕤(1)」は、原例が「花艸」の「^{ジュイフク}蕤頭 ジベ」である。『広韻』に未収、「蕊」の異体字である。「蕊」は「如果切 草木叢生兒」「如壘切 草木實節生」で、意味が一致しない。『広韻』に「如果切」の「藜」は「花外曰萼花内曰藜」との意味で、例と対応でき、「ジュイ」も「如果切」と対応している。

・「ゼ-熱(6)」は、「二字話」所属の 1 例「^{ゼナク}闇熱 ニギヤカナ」で、音注と対応する漢字は逆になっている。

・「ジャ○ウ-擾(4)」は、「二字話」所属の「^{キヤウジヤウ}攪擾」で、音注と漢字が逆になっている。

・「ジャン-嘍(3)」は『広韻』『集韻』『康熙字典』に未収、『大漢和辞典』に「中華大字典」讀如壤」とあり、音は日母の「如兩切」。

・「ジン-認(6)」は、臻撮の「而振切 識也」と曾撮の「而證切 認物而證」とある。原例は「^{ジンキヤアライチン}認假爲真 ウソフ 真ニスル」「^{ヒキヤウジンミン}休要認真 真ニスルナ」「^{ニイジンラタア、マア、}汝彼ヲミシリタルヤ」「^{ニイジントウシヤ○ウツエン}汝何ホドノ錢ヲワキマエルゾ」「^{ゴウキンフ、ジンテタア、}我竟不認得他 我曾テ彼ヲミシラズ」「^{ジンライラ○ウチン}認爲老成 マタキ人杯トシテ」である。意味でも音注でも、臻撮の反対読みと一致している。

1.7.1 止摂の場合

止摂の所属字は、計 8 字種、延べ 205 例である。音注が「ルㄣ」「ルウ」となっているのは開口の「兒而鮪邇爾耳二」7 字で、合口の「ジユイ-葢(1)」1 例である。1.4-1.6 での考察結果から分かるように、開口の場合は知・精・莊・章組の止摂字と同じ「-ウ」音注、合口の場合は禪母と同じ「ジユイ」となっている。

止摂開口の支韻「兒爾邇」、脂韻「二」、之韻「而鮪耳」に属するこれらの日母の字に対する「ルㄣ」「ルウ」音注について、ここの「ㄣ」は母音仮名の後ろに用いられる延音点「ㄣ」の場合と違う理由で、「ル」に付けられ、「ルㄣ」は「ルウ」とは同じものである。

対応する方言の声母について、南京音が [θeʰ]、蘇州音が [ŋi](白)・[θeɪ](文)、杭州音が [fiər]・[θər](耳爾)となっているが、『同文備攷』が [zi]、『磨光韻鏡』が「ズウイ」となっている。声母面では、セロ声母に対する音注は「ルウ(「ルㄣ」)」となっている。これについて両方言から説明するのは難しい。韻母面では、母音 [u] となる「ル」音注はいずれの場合にも対応しない。蘇州音の文語音 [əɪ]、杭州音の [fiə]、南京音 [eʰ] を写す場合、日本語では子音のような [r][l] で終わることができないため、仮名で表記する場合、母音を添えて「ル」となる。

止摂合口の「葢」は南京音が [zuəi]、旧派蘇州音が [zɛ](文)[ŋiɪ](白)、杭州音が [zueɪ][dzueɪ] となり、『同文備攷』が [zuei] である。「ジユイ」は声母面ではいずれの場合にも対応するが、韻母面ではいずれの場合からも説明できない。また、『磨光韻鏡』が「ジユイ」とも記されていることから、呉方言に近いと考えられる。

このように、止摂の字について、開口の字に対する「ルㄣ」「ルウ」、合口の「葢」に対する「ジユイ」は呉方言と対応している。

1.7.2 止撰以外の場合

非止撰の所属字は計 39 字種、延べ 477 例で、ザ行音注となっているのは一般的である。そして、深撰の「ニン-恁 7(2)」、咸撰の「チエン-帖(1)」、曾撰の「ヂン-仍(2)」と「ナイ-芳(1)」も存在し、具体的に以下の通りである。

(i) 「ジ」と「シ」

清・濁両音注を有する例について、「ジ」「シ」の音注をもつのは「人」「日」「讓」である。

「人-ジン 180(171)シン 180(7)¹²⁹」は、読みが臻撰の「如鄰切」である。初出の例は「二字話」の「^{シンジン}甚人」で、「ジン」である。「シン」の例は「四字話」の「^{ヲイシンフ°ハ○ウ}爲人不好」「^{クワンフウツウシン}官府之人」「^{タンシンケ°シン}單身客人」「^{ファイハ°ンベシン}誹謗別人」、^{ユウコウシンハ°ア}「五字話」の「有个人把門」、^{モン}「長短話」の「^{ヒヤ●ウヒヤ○ウトイシンファイホイ}囁囁對人非喙」「^{ユウフ°ケンツユイウランシン}又不肯足奉人」7 例は初出でないため、「シン」は濁点が省略されたものと考えられる。

「日-ジ 98(93)シ 98(5)¹³⁰」は、読みが臻撰の「人質切」で、表記例が下記のようにになっている。

「ジ」(一部):「二字話」^{ツエンジ}前日 ^{キンジ}今日
 「シ」:「四字話」^{タンウ、シキイ}耽誤日期 ^{チャ○ウリヤ○ウバンシ}炒了半日 「六字話」^{チエンツヲハ°ンヒエンコウシ}專做幫閑過日
 「長短話」^{スエンスエンクイキヤンツウシ}先生貴降之日 ^{ミンシヤリヤンサンボンユウ}明日約兩三朋友

「シ」の例のいずれも初出でなく、「ジ」は濁点が省略されたと考えられる。

「讓-ジヤン 5(1)シヤン 5(1)」は読みが宕撰の「人様切」で、原例が下記の通りで、「シヤン」の例は初出でなく、濁点が省略されたと考えられる。

「シヤン」:「三字話」^{シヤンリヤ○ウスエハ}讓了些
 「ジヤン」:「二字話」^{ソランジヤン}遜讓 「三字話」^{フ°ケンジヤン}不肯讓
 「四字話」^{スエイヤ○ウジヤンスエ}須要讓些 「長短話」^{ジヤンコウライギンシイムイジンエハ}讓可謂近世美人也

(ii) 三種類の音注をもつもの

「ジ」「シ」の音注以外、他のもう一種類の音注(例えば、「ヅユン」「ニン」)も

¹²⁹ 「人」は 1 例が「四字話」の「^{バアワハノウタシ}歹人出沒 惡黨者カ俳徊徊ス」で、無注音である。「シ」音注は、原例が「把官路當人情」で、読みと対応できず、明らかに「ン」の記入漏れである。

¹³⁰ 「六字話」の「^{モン}今日暴始相見」の「日」字の音注は印刷の不鮮明で、「ジ」に見える。

有するのは「如」「恁」である。

「如-ジユイ 60(55)シユイ 60(4)¹³¹」は、反切が「人諸切 而也均也似也謀也往也若也」「人恕切」である。「ジユイ」の例は「二字話」の「譬如ヒイジユイ タトエハ」「如何ジユイホウ ナントシタカ」などがある。「シユイ」は「四字話」の「除要如此ヂユイヤウシユイツウ ドフテモコフセネバナラヌ」「刀劍如麻 刀劍麻ヲウエタルカ如シ」、タウケンシユイマア「長短話」の「如今シユイキン 天下武夫 只今ハ天下ノ武士」「豈如足下之言哉¹³²」で、「ヅユイ」は「長短話」の「焉能如此哉 何ソヨクカクノ如クナランヤ」であり、意味の違いが見られない。「シユイ」は初出でないため、濁点の省略によるものと考えられる。

「恁-ジン 7(4)シン 7(1)ニン 7(2)」は、『広韻』に「如林切 信也又音荏」(平声)と「如甚切 念也」(上声)とあり、同じ深摂の読みで、意味の違いもない。また、『集韻』に「尼心切 思也弱也信也」と「忍甚切 説文下齋也」ともある。各音注の表記例は、下記の通りである。

「シン」:シントイハツアイ「四字話」恁地發財 如此仕合ヨシ
「ジン」:ヂジンエンツエウ、ニイ「長短話」直恁演習武藝 如此武藝ヲ演習シテ
ヂジンジョンマン直恁匆忙 直ニカクノコトクイソガシキヤ
ル、ジンデイフ、ナイワン而恁地不耐煩 次ノ日心モチアン
インツウヂジンテ因此直恁的 因此直ニ如此
ツエンニンデイライツウ「ニン」:ツエンニンデイダア、ギイ「五字話」怎恁地來遲 如何ンゾカヤウオソク來ルヤ
「長短話」怎恁地大奇 如何ンゾ如此大奇ナルヤ

となっている。「ジン」は日母臻摂の二種類の読みのいずれにも対応でき、例の意味が「信也」「念也」でなく、近代の使い方で、『漢語大字典』による「此、这」という代名詞の意味と一致する。また、「シン」の例は初出であるが、意味が「ジン」の例と同じ、濁点の記入漏れの可能性が高い。「ニン」は疑問詞「怎」の後に用いるのは特徴であり、音注が「尼心切」と一致しているが、意味が「思也弱也信也」でなく、『漢語大字典』による「方言。那么；那样。」という意味を示している。なお、『同文備攷』では[zim][nim]両読みとなり、「ジン」は明らかに呉方言と一致する。

¹³¹ 「如-ヅユイ 60(1)」は「ジユイ」の誤記の可能性が大きい。

¹³² 原文に対応する意味が書かれていない。

(iii)「ゼ」と「セ」

「ゼ」「セ」の音注をもつ例は「然」「軟」である。

「然-ゼン 30(27)セン 30(2)ジエン 30(1)」は反切が「如延切」で、「ゼン」音注が圧倒的に多い。「ゼン」以外の表記例は、下記の通りである。

「ゼン」:^{ツランゼン}「二字話」^{コウゼンハ〇ウ}縦然「三字話」^{コウゼンハ〇ウ}果然好
「ジエン」:^{モ⁺ジエンウ⁺ハイユイ}「四字話」^{モ⁺ジエンウ⁺ハイユイ}默然無語
「セン」:^{コウゼンキンヨフウツユイ}「長短話」^{コウゼンキンヨフウツユイ}果然金玉夫妻 ^{コウゼンテンユウフ⁺ツエツウフワン}果然天有不測之風

「ジ」「ゼ」は同じ子音である。「セン」は初出でなく、濁点のが省略されたと考えられる。

「軟-ゼン 4(3)セン 4(1)」は反切が「而亮切」で、原例が以下の通りである。

「セン」:^{メンセン}「二字話」^{メンセン}②綿軟
「ゼン」:^{タイゼン}「二字話」^{タイゼン}①太軟 ^{ゼンキイライ}「三字話」^{ゼンキイライ}軟起來 ^{スエ、ゼンキヤアホウ}「四字話」^{スエ、ゼンキヤアホウ}細軟家夥

「セン」の^{メンセン}「綿軟」の直前に「ゼン」となる^{タイゼン}「太軟」であり、「セン」は明らかに濁点
が省略されたものである。

(iv)その他

「ズイ-蝻(1)」は、原例が「虫介」の^{ズイチヨン}「蝻虫 布ト」である。『広韻』に未収。『集韻』に蟹摂去声の「儒稅切 蟲名」と山摂入声の「如劣切 蟲名」とある。音注と対応するのは蟹摂の読みである。日母が濁音ザ行となるのは、吳方言と南京音との双方から説明できる。

「チエン-蛄(1)」は、原例が「虫介」の^{チエンズウ}「蛄蜃 ケムシー名 ^{ゼンツウ}髯哉¹³³」となり、「汝鹽切 爾雅曰 虫黒蛄蜃」で、意味が表記例と一致するが、読みが音注と一致しない。音注は声符「チエン-占」の類推によるものと考えられる。

「ヂン-仍(2)」は「如乗切 因也就也重也頻也」で、原例が^{ヂンギウハ〇ウ}「仍旧好」^{ヂンゼンハ〇ウ}「仍然好」である。『同文備攷』では[3-]となり、『磨光韻鏡』では「ジン」と記されている。他の非止摂の日母の字がザ行音注となっているため、「ヂン」が誤記の可能性が考えられ、反り舌音の性質を示している。

¹³³ 『唐話纂要』の「哉」の字体について、下に「口」でなく「虫」である

「ナイ-苧(1)」は「如乗切 草名」で、原例が「芋苧^{イユイナイ}」で、「ナイ」は「ナイ-乃奶」の声符の類推によるものと考えられる。

上記の字の中、「人」「日」「讓」「如」「恁」に対する「シ」、「然」「軟」に対する「セ」の音注は濁点が省略されたものである。「恁」の「ジン」「ニン」両音注は異なる発音と対応する違う意味を区別している。「如-ヅユイ」は誤記、「蛄苧」2字は類推によるものである。これらの字を除き、日母非止摂の字に対して、「ジ」・「ゼ」_(少)の音注となっている。

「ジ」「ゼ」の子音は齒茎硬口蓋の摩擦音 [ʒ-] であり、南京音の [z-] とともに蘇州・杭州音の [z-] とともに完全には一致しないが、[ʒ-] は [z-] とは口蓋と摩擦、[z-] とは齒茎と摩擦で共通性がある。よって非止摂に対するザ行表記は現代の南京音、蘇州音、杭州音のいずれからも説明が得られる。但し、『同文備攷』の日母が [ʒ-] だったことから見て、吳方言の特徴とより一致しているように見えるが、冠山の官話系の学習書において非止摂の日母が全てザ行で写されているところから見ると、やはり南京音とも対応していると考えなければならない。

このように、日母の止摂の字について、合口の「ジユイ-蕘(1)」1例以外、開口字の場合は「ルハ」「ルウ」、非止摂の場合はザ行の「ジ」「ゼ」音注は一般的である。音注が南京音と蘇州・杭州音との具体的な対応関係は表 4-7-1 の通りである。

表 4-7-1 日母の字の音注と両方言との対応関係

日母 [ɲz-]	対応する音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
止摂 開口	「ルハ」「ルウ」	[ru]	[ʌʔ]	×	[əɭ](文) [ɲi](白)	×	[həʔ] [θəʔ]	×
止摂 合口	合口 「ジユイ-蕘(1)」	[ʒ]	[z]	○	[z](文) [ɲ](白)	(文)○	[z](文) [ɲ](白)	(文)○
非止摂	ザ行:「ジ」「ゼ」	[ʒ]	[z]	○	[z](文) [ɲ](白)	(文)○	[z](文) [ɲ](白)	(文)○

なお、蘇州の白話音に対応するナ行の音注が存在しないことから見て、全体的に杭州音に近い。

1.8 知・精・莊・章組の仮名音注に反映された声類の特徴

1.4～1.6 での娘母以外の齒上音知組、齒頭音精組と正齒音照組(二等莊組・三等章組)及び 1.7 での日母の音注状況の検討を通して、各組の音注は呉方言の特徴を反映していることが分かった。既に明らかにした各組の音注状況は表 4-8-1 にまとめることができる。また、非止摂の各声母の音注状況を表 4-8-2 で示している。

表 4-8-1 各組の止摂と止摂以外の音注状況

声母	非止摂の音注	止摂の音注
知 [t]	チ[ʧ-]	開 ツウ[ts-] チイ[ʧ-] (少) 合 ツイ[ts-]
徹 [tʰ]	ツ[ts-] (少) チ[ʧ-]	開 ツウ[ts-]
澄 [d]	ヅ[dz-] (少) チ[ʧ-]	開 ズウ[dz-] チイ[ʧ-] (少) 合 ツイ[dz-]
精 [ts]	ツ[ts-]	開 ツウ[ts-] 合 ツイ[ts-]
清 [tsʰ]	ツ[ts-]	開 ツウ[ts-] 合 ツイ[ts-]
從 [dʒ]	ヅ[dz-]	開 ズウ[dz-]
心 [s]	サスソ[s-]	開 スウ[s-]
邪 [z]	ヅ[dz-]	開 ズウ[dz-] ズウ[z-] 合 ツイ[dz-]
莊 [tʂ]	ツ[ts-] チ[ʧ-] (少)	開 ツウ[ts-]
初 [tʂʰ]	ツ[ts-] チ[ʧ-] (少)	開 ツウ[ts-]
崇 [dʒ]	ヅ[dz-] チ[ʧ-] (少)	開 ズウ[z-]
生 [ʂ]	サスソ[s-] シ[ʃ-]チ[ʧ-] (1例)	開 スウ[s-]
章 [tʃ]	チ[ʧ-]	開 ツウ[ts-] 合 ツイ[ts-]
昌 [tʃʰ]	チ[ʧ-]	開 ツウ[ts-] 合 ツイ[ts-] チユイ[ʧ-] (少)
船 [dʒ]	ジ ゼ[ʒ-] (少) チ[ʧ-]	開 ズウ[z-]
書 [ʃ]	シ セ[ʃ-] (少) チ[ʧ-] (1例)	開 スウ[s-] 合 スイ[s-]
禪 [ʒ]	ジ[ʒ-] チ[ʧ-]	開 ズウ[z-] 合 ズイ[z-] ジユイ[ʒ-] (少)
日 [ɳz-]	「ジ」「ゼ」[ʒ]	開 「ルハ」「ルウ」[ru] 合 ジユイ[ʒ]

表 4-8-1 と表 4-8-2 に示している音注に、いくつかの問題点が見られる。

(1)非止摂の場合、表 4-8-2 のように、知・莊両組に「チ・ヂ」「シ・ジ」「セ(少)・ゼ」「ザ」と「ツ・ヅ」「サ行(シ・セを除く)」との書き分けが存在しているのに対して、精組が「ツ・ヅ」「サ行(シ・セを除く)」、章組が「チ・ヂ」「シ・ジ」「セ・ゼ」となり、それぞれ一通りの音注で、書き分けが見られない。その理由について、検討すべきである。

(2)非止摂に音注の書き分けがあるのに対して、表 4-8-1 のように、止摂の字にこうした現象が見られず、わずかな「チイ」(開口)、「チユイ」「ジユイ」(合口)の例を除き、開口字が「ツウ・ズウ」「スウ・ズウ」、合口字が「ツイ・ヅイ」「スイ・ズイ」となり、「ツ・ヅ」「ス・ズ」の音注に統一されている。また、開口字は声母の違いを問わず、全て[-ウ]となっている。なぜ止摂の字に対する音注は非止摂の字と異なるのか、その理由を明らかにする必要がある。

(3)章組の中、既に述べたように、濁音の船・禪両母の場合、音注にも問題が見られる。表 4-8-1 ように、破擦音の船母はヂ[dʒ-]以外、摩擦音を示すジ[ʒ-]、ゼ[ʒ-]_(少)も用いられ、摩擦音の禪母はジ[ʒ-]以外、破擦音を示すヂ[dʒ-]も使われている。このように、破擦音に対する摩擦音の音注、摩擦音に対する破擦音の音注という音注法の理由について、明らかにする必要もある。

表 4-8-2 各組の非止撰の各声母の音注状況

分類	「チ」「ヂ」「シ」「ジ」「ゼ」「セ」 _(少) 「ザ」		「ツ」「サ°」「ヅ」「サスソ」	
	二等	三等	二等	非二等
知	「チ」江 效	「チ」通 遇 臻 山 效 宕 梗 深		
徹	「チ」 效	「チ」通 遇 宕 流 深 咸	「ツ」 梗	
澄	「ヂ」江	「ヂ」通 遇 臻 山 宕 梗 流 深 會 效 三「ヂヤ○ウ-朝 兆」	「ヅ」山 梗 咸 假 效 二「ヅア○ウ-棹」	
精				「ツ」
清				「ツ」
從				「ヅ」
心				「サスソ」
邪				「ヅ」
莊	「チ」江	「チ」宕	「ツ」「サ°」 「ツ」假 梗 咸 「サ°」蟹 山 效 咸	「ツ」臻 流 會
初	「チ」江 效		「ツ」「サ°」 「ツ」假 梗 「サ°」蟹 假 山 梗 咸	「ツ」遇 臻 會 深
崇	「ヂ」「ザ」蟹	「ヂ」宕	「ヅ」假 咸 山	「ヅ」遇 流
生	「シ」江 蟹 假 山 「チ」江	「シ」宕	「スサ」 「ス」梗 效 假 「サ」咸 山 效 假	「スソ」 「ス」臻 流 會 「ソ」遇
章		「チ」		
昌		「チ」		
船		「ジ」「ヂ」「ゼ」		
書		「シ」「セ」「チ」 _(1例のみ)		
禪		「ジ」「ヂ」		
日		「ジ」「ゼ」		

このように、この四組の字に対する音注現象について、知・莊組の分化、止撰の音注現象、濁音声母に対する摩擦・破擦音音注現象との三つの問題点を解決しなければならない。この三つの問題について、1.8.1～1.8.3 で検討する。

1.8.1 知・莊組の分化について

周知のように、[ts][tsʰ][s]と[tʂ][tʂʰ][ʂ]は知・莊組の二等韻と三等韻との分化及び精組と章組との合流によって出てきたのである。方言によってその分かれ方は異なる。

南京音の分化状況について、熊(1990)は以下のように指摘している。

…(三)南京型,以南京话为代表,南京型莊組三等的字除了止撮合口和宕撮读 tʂ 组,其他全读 ts 组;其他知莊章組字除了梗撮二等读 ts 组,其他全读 tʂ 组。(p.5)

この指摘に従い、知・莊組の発音の分化を以下のようにまとめることができる。

表 4-8-1 南京音の知・莊組と『唐話纂要』との対応状況

分類	二等		三等	
	[ts-][tsʰ-]組	[tʂ-][tʂʰ-]組	[ts-][tsʰ-]組	[tʂ-][tʂʰ-]組
知組	梗	江效假蟹咸山		假遇蟹止效流咸 深山臻宕曾梗通
莊組	梗	江效假蟹咸山	果遇止流 深臻曾通	宕 (止撮合口の字)
『唐話纂要』と対応しない部分		澄母:效「ヅア○ウ-棹」 崇母:「ヂ」「ザ」蟹「ヅ」假咸山 莊母:「ツ」假咸「サ°」蟹山效咸 初母:「ツ」假「サ°」蟹假山咸 生母:「ス」效假「サ」咸山效假		澄母:「ヂ」通遇臻山宕梗 流深曾 效「ヂャ○ウ-朝兆」 生母:「ス」臻流曾「ソ」遇 (止撮合口字がない)

官話系方言では濁音声母が無声化したのに対して、吳方言は濁音をまだ保持しているため、澄、崇母の「ヂ」「ヅ」の音注は南京音から説明できない。また、清音声母の場合、莊・初母の假・咸・蟹・山撮の「ツ」「サ°」と生母の二等の效・假・咸・山撮、三等の臻・流・曾・遇撮のサ行(「サ・ス・ソ」)の音注は南京音の[tʂ-][tʂʰ-]組の読みと一致しない。

これに対して、既に検討したように、知・莊組の音注は吳方言から説明できる。ここで、南京音の状況と全体的に対照するには、明代の吳語字書とされている『同文備攷』にある莊母の分化状況を見てみる。

『同文備攷』の音系を明らかにした丁(2001:153)による同書の莊母の特徴は以下のように整理することができる。

- [ts] 莊組二等 梗撮 效撮 山蟹咸假撮(多) 江撮(入聲字)
- 莊組三等 曾撮 流撮 止深臻撮(多)
- [tʂ] 莊組二等 江撮(舒聲字) 山蟹咸假撮(少)

莊組三等 宕摂 遇摂(多) 止深臻摂(少)

二等の場合について、效摂の所属字「チヤ○ウ-鈔(4)炒(2)」([tɕ]組)は『同文備攷』と一致しない。江摂の所属字は同書では入声字と舒聲字との区別がなく、「チ・ヂ」「シ」([tɕ]組)で統一されている。咸摂に「チ・ヂ」「シ」([tɕ]組)となる字は同書では見られない。

三等の場合について、止摂の字は同書では「ツ・ヅ」「ス・ズ」で統一され、声母上の分化を反映しない。遇摂の字は同書では「チ・ヂ」「シ」([tɕ]組)となる場合がなく、全て「ツ・ヅ」「ス・ソ・サ」([ts]組)で記されている。これに対して、深・臻両摂の字は同書では全て[tɕ]組の読みとなっている。

このように、旧派蘇州音と『同文備攷』を同書の場合と比較した結果として、異なる部分が存在しているが、1.4～1.6で検討したように、「チヤ○ウ-鈔(4)炒(2)」のような僅かの例以外、ほぼ問題なく呉方言から説明できる。つまり、知・莊組に対する音注の書き分けは呉方言の特徴を反映している。なお、『磨光韻鏡』は「チヤ○ウ-鈔(4)炒」の例外もあるが、概ね一致する。

1.8.2 止摂の場合

止摂の字に対する音注の特徴について、表 4-8-3 は開口字、表 4-8-4 は合口字の音注の対照状況を示している。

表 4-8-3 止摂開口の音注の対照状況

声母	開口	南京音	吳方言		
			杭州音	蘇州音	
				旧派	『同』
知 [t]	ツウ[ts-] チイ[tʃ-] (少)	清音ツ× チ○ ([tʃʌ][tʃ'ʌ])	清音ツ○ チ× ([tsʰ][ts'ʰ])	清音ツ× チ○ ([tʃʌ][tʃ'ʌ])	清音ツ× チ○ ([tʃi][tʃ'i])
徹 [tʃ]	ツウ[ts-]				
澄 [d]	ヅウ[dz-] ヂイ[dʒ-] (少)	清 ([tʃʌ][tʃ'ʌ]) ×	[dzʰ]○	[zʌ]×	[dʒi]○
精 [ts]	ツウ[ts-]	清音○ ([tsʰ][ts'ʰ])	清音○ ([tsʰ][ts'ʰ])	清音○ ([tsʰ][ts'ʰ])	清音○ ([tsʰ][ts'ʰ])
清 [tsʰ]					
從 [dʒ]	ヅウ[dz-]	清音× ([tsʰ][ts'ʰ])	[zʃʰ] × 『三』「ヅウ」○	[zʌ] ×	[dʒʌ] ○
心 [s]	スウ[s-]	[sʰ] ○	[sʰ] ○	[sʰ] ○	[sʰ] ○
邪 [z]	ヅウ[dz-] ズウ[z-]	清音× ([sʰ])	[dzʰ][zʰ]○	[zʰ] ○	[dzʌ][zʌ]○
莊 [tʃʰ]	ツウ[ts-]	清音○ ([tsʰʰ][ts'ʰʰ])	清音○ ([tsʰʰ][ts'ʰʰ])	清音○ ([tsʰʰ][ts'ʰʰ])	清音○ ([tsʰʰ][ts'ʰʰ])
初 [tʃʰ]					
崇 [dʒʰ]	ズウ[z-]	清音([ʃʰ])×	[zʰ] ○	[zʰ] ○	[zʰ] ○
生 [ʃ]	スウ[s-]	[ʃʰ] ×	[sʰ] ○	[sʰ] ○	[sʰ] ○
章 [tʃʰ]	ツウ[ts-]	清音 ([tʃʰʰ][tʃ'ʰʰ])×	清音 ([tsʰʰ][ts'ʰʰ])○	清音 ([tʃʰʰ][tʃ'ʰʰ])×	清音 ([tʃʰʰ][tʃ'ʰʰ])○
昌 [tʃʰ]					
船 [dʒʰ]	ズウ[z-]	[tʃʰʰ] ×	[zʰ] ○	[zʌ] ×	[zʌ] ○
書 [ʃ]	スウ[s-]	[ʃʰ] ×	[sʰ] ○	[ʃʌ] ×	[sʰ] ○
禪 [z]	ズウ[z-]	[ʃʰ] ×	[zʰ] ○	[zʰ] ○	[zʌ] ○
日 [ɲz-]	「ル、」 「ルウ」 [ru]	[ɲʰ] ×	[hər] [θər]×	[ə] (文)[ɲi] (白)×	[ʒi] ×

注：表の中、『三』は『三音正譌』の略称となる。下記同様。

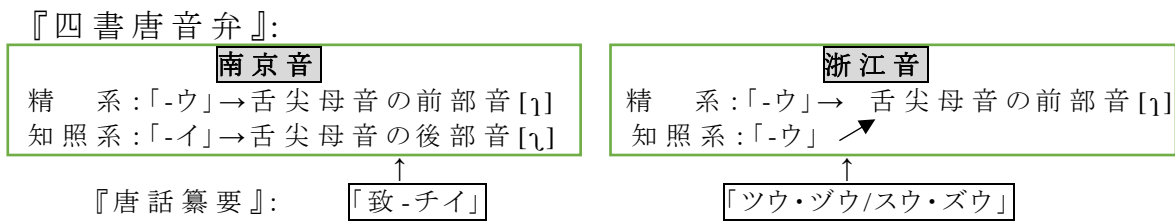
表 4-8-3 のように、開口字の場合について、声母の違いを問わず、全て「-ウ」となっている。日母以外、音注は旧派蘇州音と『同文備攷』と対応できず、杭州音と一致している。知母の「チイ-知 40(2)」「チイ-致 6(2)」、澄母の「ヂイ-遲 4(1)チイ-遲 4(1)」の「チイ・ヂイ」が例外である。

音注に「-ウ」で統一された現象について、先行研究の中、韻母の視点から考えているのは高松(1985a)である。「南京・浙江両音の雑糅せるもの」としてしている高松(1985a)は、韻母の一つの着目点として、止摂開口の場合について、具体的に、まず、右に南京音、左に浙江音が注されている『四書唐音弁』(1722)所注の舌歯音の音注について、以下のように指摘している。

南京音では、韻尾が精系にて「-ウ」、知照系にて「-イ」と二途を採るに

対して、浙江音ではその別がなく、通じて全て「-ウ」となる点である。これは正しく、現官話と現呉語とに於ける実情に合致せる現象となる。(p.104)

また、精系と知照系における「-ウ」と「-イ」との書き分け現象の原因について、高松(1985a)は、官話には精組韻尾が舌尖母音の前部音 [ɿ]、知照組韻尾が舌尖母音の後部音 [ʮ] となり、[ɿ]・[ʮ] の別があるのに対して、呉方言にはその区別がなく、舌尖母音の前部音 [ɿ] しかないからであると指摘している。



開口字の音注に対して、なぜ韻尾が「ウ」となるのか、またなぜ声母に他の舌歯音の書き分けと異なり、全部同じ「ツ・ヅ」音注となるのか、高松(1985a)は呉方言では精組と知・照組に違いがないからで、[ɿ]・[ʮ] の対立の有無によって「ツウ・ヅウ」「スウ・ズウ」と「チイ・ヂイ」との区別が現れるとしている。

現代呉方言に [ʮ] がいないということで、これ自体に問題がないが、旧派呉方言だろうと『同文備攷』だろうと、[ʮ] がいないのは事実である。このように、止摂の字に音注が統一された現象は根本的に [ʮ] の有無の問題のではなく、反映された原音に [tʂ] 組の有無である。高松(1985a)の指摘にいう呉方言は現代的な発音のため、声母が止摂と非止摂を問わず、[ts] 組に合併したが、当時の呉方言、蘇州音でも杭州音でも [ts] 組と [tʂ] 組の区別が存在している。

このように、非止摂と止摂との音注の違いについて、同書の止摂の開口字に対する「ツウ・ヅウ」「スウ・ズウ」は止摂の声母が既に舌尖母音化して、[ts] 組に変化していたことを反映している。音注と対応する杭州音はまさにこの状況で、舌尖前母音 [ɿ] となっている。

南京音の舌尖後母音 [ʮ] について、反り舌の特徴をもち、舌尖後音の声母 [tʂ-] 組と綴り合わせるの是一般的である。同書では、既に論じてきたように、非止摂の字の声母の [tʂ-] 組に対して、「チ・ヂ」「シ・ジ」音注が多用されている。このように、語音の特徴に反映された音注法の統一性において、止摂の字の場合、舌尖後母音 [ʮ] と舌尖前母音 [ɿ] とを区別するには、舌尖後母音 [ʮ] を

示すことができるのは「チ・ヂ」「シ・ジ」となる。これに対して、舌尖前母音 [ɿ] を写すには、前に綴り合せられるのは「ツ・ヅ」「ス・ズ」となってしまうのである。なお、既に第三章第三節で述べたように、入声字を区別するには、同書の陰声韻の字が長呼型音注となっている。このように、舌尖前母音 [ɿ] に対する音注は「ツウ・ヅウ」「スウ・ズウ」となる。

日本語側では、舌尖前母音 [ɿ] に関して検討した有坂(1936)は、日本語(東京)の「ス・ツ・ズ(ヅ)」の母音と中国語の「四」「子」「此」の母音、つまり、舌尖前母音 [ɿ] との違いについて、次のように述べている。

第一、支那語の *ssü* 等の母音は、國語のス等の母音に比すれば、舌面の高まる部分がいくらか前の方に出てゐる。假に國語の母音を *u* で表すならば、支那語の母音はいくらか *i* の方に近いのである。(p.82)

勿論、支那語の *ssü* 等の母音も、重念(強音)の無い位置で軽く短く發音される場合には、同様な条件の下で、發せられる日本語のス等の母音と殆ど同じやうに聞えることも多い。…(p.84)

中国語の「四」「子」「此」の字は母音が、日本語の母音 [u] とは違いがあるが、聴覚的には同じように聞こえると指摘している。ここから、舌尖前母音 [ɿ] をもつ字が「-ウ」と注された理由がよく分かる。

なお、高松(1985a)は、『唐話纂要』にある表記例を取り上げ、「混合説」として、以下のように、補充的に、『唐話纂要』の止撮の開口字について、主に浙江音の特徴を反映する「ツウ」音注とり、「致-チイ」音注は区別をもつ南京官話の特徴の例として指摘している。

序でに、右に基づくならば、ここからでも、「唐話纂要」に於ける浙江音混入の姿がまた歴然と指摘し得る事となるのである。現に、右に例示した知照系の五字¹³⁴は全て「ツウ」音形の方で以て註音されている。そして、別には、例えば、「致」字(致母)では、「チイ」「ツウ」なるゆれの形をも共存させているという事もあるのである。(p.105)

本研究では、既に知組止撮の部分で検討したように、「致」を含め、「知致-チイ」「遲-ヂイ」は北部吳方言から説明でき、つまり、北部吳方言の要素であることが確認された。

¹³⁴ この五字はそれぞれ「支・齒・知・恥・池」となり、南京音と対応する読みは「チイ」、浙江音と対応する読みは「ツウ」である。

合口字の場合について、昌母の「吹-チュイ 6(2)ツイ 6(4)」、禪母の「誰-ジユイ 9(6)シユイ 9(1)」「睡-ジユイ 7(2)シユイ 7(1)」に「チュイ」「ジユイ」の存在以外、「ツイ・ヅイ」か「スイ・ズイ」音注となっている。

表 4-8-4 止撮合口の音注の対照状況

声母	合口	南京音	吳方言		
			杭州	蘇州	
				旧派	『同』
知 [t]	ツイ[ts-]	[tʂuəi]×	[tsuei]○	[tʂE]○	[tsuei]○
澄 [d]	ヅイ[dz-]	[tʂuəi][tʂ'uəi]×	[dzuei]○	[zE]×	[dʒuei]○
精 [ts]	ツイ[ts-]	清音 ○ ([tsuəi][ts'uəi])	清音 ○ ([tsuei][ts'uei])	清音 ○ ([tʂɿ][tʂ'ɿ])	清音 ([tsuei][ts'uei])
清 [ts']					
邪 [z]	ヅイ[dz-]	清音 ([suəi])×	[dzuei]○ [zuei]	[zE]×	[dzuei]○
章 [tʃ]	ツイ[ts-]	清音 ツ×チ○ ([tʂuəi][tʂ'uəi])	清音 [tsuei][ts'uei] ツ○ チ『磨』「チュイ」○	清音 ツ○チ× [tʂE][tʂ'E]	清音 ツ×チ○ [tʃuei][tʃ'uei]
昌 [tʃ']	ツイ[ts-] チュイ[tʃ-](少)				
書 [ʃ]	スイ[s-]	[ʂuəi]×	[suei]○	[sE]○	[ʃuei]×
禪 [ʒ]	ズイ[z-] ジユイ[ʒ-](少)	[ʂuəi]× [zuei]○	[zuei]○ [dzuei]○	[zE]○	[zuei][ʒuei]○ [dzuei]○
日 [ɳz-]	ジユイ[ʒ]	[ʒ]	[z](文)[dz](白)	[z](文)[ɳ](白)	[ʒ-]○

既に検討したように、「吹」に対する「チュイ」「ツイ」は蘇州音では両読みがあり、蘇州音から説明できるが、「チュイ」が南京音と当時の吳方言との双方から説明できる。「誰睡」に対する「ジユイ」は検討したように、吳方言と対応するもので、禪母に対するもう一種類の音注である。

止撮合口の字が「-ウイ」で統一されているのは、南京音と吳方言の双方において、蟹撮合口の一等韻、三等韻の一部の字が止撮合口へ合流したという音韻変化が起きたが、止撮合口は変化していなかったことを反映している。「ツイ・ヅイ」「スイ・ズイ」はその表れである。また、合口字のため、当てられる仮名音注は「ツ・ヅ」しかない。このように、合口の字は韻母の影響で声母が「ツイ」「ヅイ」の音注に統一されていることが明らかになった。表 4-8-4 のように、合口字は杭州音に最も対応する。

1.8.3 濁音声母の音注に見られる摩擦・破擦音の特徴

前述したように、破擦の船母は破擦のチ[ɬʃ-]以外、摩擦のジ・ゼ[ʒ-]も用いられ、摩擦の禪母は摩擦音のジ[ʒ-]以外、破擦音のチ[ɬʃ-]も使われている。こうした統一されていない音注現象となった理由を説明しなければならない。

船母、禪母に対する音注に反映された音韻的特徴を明確するには、それぞれの変化を遡る必要がある。王(1980)¹³⁵は、崇・船・禪の三つの声母の変化について、以下のように述べている。

崇船禪三母的狀況比較複雜。以發音部位而論,它們也像章昌書莊初山一樣地發展;但是,以發音方法而論,它們就和原來的發音方法不完全一致。崇船原是破裂摩擦音(ɬʃ', ɬʒ'),在現代漢語裏,崇船合而爲一了,有一部分維持着破裂摩擦的發音方法、只是發音部位變了(平聲 tʃ', 如“柴”, 仄聲 tʃ, 如“寨”);另有一部連發音方法也變了,變爲單純的摩擦音(ʒ, 如“蛇”)。禪母和船母相反;禪母本是單純的摩擦音,現在有一部分字變了破裂摩擦音。

分化的條件不是很清楚。現在看得很清楚的是:崇母爲一類、平聲不分化(一律是 tʃ'),只有仄聲分化(“助”tʃ-, “事”ʒ-);船禪爲一類,仄聲不分化(一律是 ʒ)只有平聲分化(船母:“乘”tʃ', “繩”ʒ-;禪母:“成”tʃ', “時”ʒ-),這種分化遠在十四世紀就完成了,中原音韻裏和洪武正韻裏都有很明顯的證據。(p.137)

王(1980)は主に現代普通話を対象したが、摩擦・破擦の変化状況が異なっているが、こうした分化は各方言でも存在していると指摘している。

前述したように、『唐話纂要』に船・禪母に対する音注に摩擦音と破擦音を示す両音注も存在している。呉方言にはこうした濁音声母が清音化していないが、同書に反映された声調と関わっているのではないかと考えられる。これを確認するには、王(1980)の指摘に従い、崇母も考察の対象に入れて、

- (1) 崇母の場合
- (2) 船母の場合
- (3) 禪母の場合

に分けて、上述した変化と音注の状況との対応を確認する。

¹³⁵ 王(1980)によって、澄母の変化過程について、平声が[tʃ']、仄声が[tʃ]となり、いずれの場合も破擦音であるため、ここで澄母の字を検討しない。

崇母、船母、禪母のそれぞれの所属字の音注状況を表 4-8-5 のように示している。

表 4-8-5 崇・船・禪母字の音注状況

分類	崇母 [dz]	船母 [dz]	禪母 [z]
平声	ヅラゝ-鋤 ツエ〇ウ-雛愁 ツアゝ-査査 ヅアン-讒 ヂヤン-床 ヂヤイ-柴 ザイ-豺	ジン-神晨 ゼエゝ-蛇 ヂエン-船 ヂン-乘繩	ヂン-臣城成誠承 ヂエン-蟬 ヂヤン-常償嘗 ヂウ-讐 ジン-辰 (1)
仄声	ヅラゝ-助 ヅアン-撰 ヂヤン-状 サイ-寨 2(1) シヤイ-寨 2(1)	ジヨ-贖 ジュン-楯順 ジ-食 ジェゝ・ゼエゝ-射 ゼ-舌 (1) ヂン-剩	ジヨ-熟蜀 ジュイ-樹 ジン-慎盛甚 ジ-實石拓十拾 ヂヤン-尚上 ヂヤ-芍 ジウ-受壽授 ゼン-善 ゼ-折 ズウ-誓 ヂエン-鱗 (1)

注：・表の中に「雛査査」に対する「ツ」、「床船剩臣城成承常嘗」に対する「チ」、「順射樹實石拓十上芍受辰」に対する「シ」、「誓」に対する「ス」、「善」に対する「セ」音注は濁点の省略或いは記入漏れによるものを訂正して記入した。

- ・「十-ジ・シ」は検討したように、両音注が呉方言から説明できる。
- ・「什-シ」「甚-ジ・シ」は「シ」が古い読みと意味を区別する近代の疑問詞の使い方として記され、未記入。
- ・「ヂヤン-常 16(1)」は「ヂヤン」による誤記で、未記入。
- ・「ツエ-折 (2)」は分析したように、「ゼ」の誤記と考えられ、訂正して記入した。

(1) 崇母の場合

表 4-8-6 から分かるように、崇母の所属字について、平声の場合は、破擦音となる「ザ」「ヅ」([dz])、「ヂ」([dʒ])音注であり、仄声調の場合は、「ヅ」「ヂ」の音注以外、「寨」に対する「シヤイ」([ʃ])、「サイ」([s])が摩擦音となっている。

表 4-8-6 崇母字の場合

分類	音注	崇母 [dz]	蘇州音	杭州音					
平声	ヅ・ザ [dz]	ヅラゝ-鋤	[z]	×	[dz]	○			
		ツエ〇ウ-雛							
		ツアゝ-査査							
		ツエ〇ウ-愁							
		ヅアン-讒							
ザイ-豺									
仄声 (分化)	ヂ [dʒ]	ヂヤン-床	[z]	×	[dz]	○			
		ヂヤイ-柴	[z]						
	ヅ [dz]	ヅラゝ-助	[z]				×	[dz]	○
	ヅアン-撰								
ヂ [dʒ]	ヂヤン-状	[z]							
ザ [dz] (ジ [ʒ])	ザイ-寨 (ジヤイ-寨)	[z]	ザ× ジ○		ザ○ ジ×				

注：「査」は蘇州音では[z][ts]、杭州音では[dz][ts]のように、それぞれ二種類の発音となっている。

杭州音では平・仄声とも[ɬ]と発音するが、旧派蘇州音では、「床状」2字の[z]読み以外、[z]と発音する。「寨」以外の字は杭州音から説明できる。

「寨-サイ 2(1)」は既に検討したように、「サイ」は濁点の記入漏れの可能性が高い。このように、濁点付きの「ザイ」([ɬ])は破擦音となる杭州音の[ɬ]から説明できる。一方、「寨-シヤイ 2(1)」は南京音と対応する一方、誤記の可能性もある。表 4-8-6 で示しているように、仮に「シヤイ」は濁点が記入漏れによる誤記であれば、「ジヤイ」は摩擦音の読みとなる。このように、「ザイ」「ジヤイ」は崇母の仄声の場合では分化の発生と符合する。しかし、「寨」1字のみで、断言できない。

(2) 船・禪母の場合

船母の所属字は、仄声調の場合が「ジ」「ゼ」([ʒ])のような摩擦音の音注となり、破擦音の「ヂン-剩」もある。平声調の場合は、「ジ」「ゼ」だけでなく、「船-ヂエン」「ヂン-乗繩」が破擦の「ヂ」([ɬ])音注となっている。

表 4-8-7 船母字の場合

分類	音注	船母 [qz]	蘇州音	杭州音		
平声 (分化)	ジ・ゼ [ʒ]	ジン-神	[z](新)	○	[z]	○
		ジン-晨	[z]	○	[z]	○
		ゼエㄥ-蛇	[z]	○	[ɬ]	×
	ヂ [ɬ]	ヂエン-船	[z]	×	[ɬ]	○
		ヂン-乗	[z]	×	[ɬ]	○
		ヂン-繩	[z]	×	[z]	×
仄声	ジ・ゼ [ʒ]	ジヨ-贖	[z]	○	[z]	○
		ジユン-順				
		ジ-食				
		ゼエㄥ・ジエㄥ-射				
		ゼ-舌				
	ヂ [ɬ]	ヂン-剩	×	[ɬ][z]	○	

注：・「ジン-神」の旧派蘇州音の読みが確認できない。
・「ジユン-楯(2)」について、各方言の読みは確認できず、表に省略。

表 4-8-7 のように、船母の字について、仄声の場合、蘇州音では[z]、杭州音では、[z]と発音するのが一般的である。「剩」以外蘇州・杭州音とも対応する。

「剩-ヂン 4(2)」の場合、「剩」は去声調の字であるため、音注は摩擦音を示すべきである。破擦の「ヂ」となる「剩-ヂン」は、同書にある「ヂン-乗(2)」という声符の類推による可能性が高いと思われるが、「ヂン」は杭州音の読みからも説明できる。

また、平声の場合、南京音では摩擦の[ʃ]と破擦の[tʃʰ]で、蘇州音で同じ摩擦音の[z][ʒ]となり、杭州音では摩擦の[z]と破擦の[ɬ]読みである。音注は杭州音との対応が多い。

禅母の所属字は、仄声調の場合、「ヂェン-蟬」が破擦音の音注で、それ以外は「ジ」「ゼ」([ʒ])のような摩擦の音注となっている。平声調の場合、「ジン-辰」以外、破擦音の「ヂ」([ɬ])音注が一般的である。

表 4-8-8 禅母字の場合

分類	音注	禅母[z]	蘇州音	杭州音			
平声 (分化)	ヂ[ɬ]	チン-臣城成誠承	[z]	×	[ɬ] ○		
		ヂェン-蟬	[z]				
		ヂヤン-常償	[z]			[z]	×
		ヂヤン-嘗				[ɬ]	○
		ヂウ-饜	[z]			[ɬ]	○
	ジ[ʒ]	ジン-辰	[z]	○	[z]	○	
仄声	ジ・ゼ[ʒ]	ジヨ-熟蜀	[z]	○	[z]	○	
		ジユイ-樹					
		ジン-慎盛甚					
		ジ-實十拾					
		ジ-石	[z]				
		ジヤン-尚	[z]				
		ジヤン-上	[z]				
		ジヤ-芍	[z]				
		ジウ-受壽授	[z]				
		ゼン-善	[z]				
	ゼ-折	[tʃʰ]	×				
	ズ[z]	ズウ-饜	[z]	○	[z]	○	
	ヂ[ɬ]	ヂェン-蟬	[z]	×	-	-	

注：・「ジ-跖」について、各方言の読みが確認できず、表記に省略。
 ・「ジン-盛」は杭州音では[z][ɬ]の両読みがある。

表 4-8-8 のように、禅母の字について、仄声の場合、蘇州音では「折」以外、摩擦音の[z][ʒ]となり、杭州音では「蟬」の発音を確認できない以外、[z]と発音するのが一般的である。

「ヂェン-蟬(1)」について、「常演切 魚名」原例が「龍魚」の「^{ヂェンイユイ}蟬魚 ヤツメウナキ」である。王(1980)の記述に従えば、上声調のこの字は摩擦音の表記になるべきである。しかし、音注は破擦の「ヂ」の音注となっている。「ヂェン-蟬」は「ヂェン-蟬(2)」の類推によるものではないかと考えられる。杭州音では「蟬」は[ɬz]読みとなるので、「ヂェン-蟬(1)」は杭州音と対応する可能性は排除できない。なお、前述したように、『同文備攷』の発音と対応する。

また、平声の場合、蘇州音では摩擦の[z][ʒ]、杭州音では「嘗」以外、[ɬ]

となり、音注は杭州音との対応が最も多い。

このように、本研究では崇母、特に船母、禪母に対して、多種類音注となる現象について、摩擦と破擦が一個に統合した蘇州から説明できず、摩擦と破擦両方の濁音を維持している杭州音から多くを説明することができる。なお、『同文備攷』にも同じ対応がある。

このように、先行研究で明らかにされていない三つの問題を解明した。

(1)知・莊両組の字に対する音注の書き分けは杭州音及び『同文備攷』と一致でき、呉方言の特徴を反映している。

(2)止摂の場合、字の開合を問わず、声母が同じ「ツ・ヅ」「ス・ズ」の音注に統一されているのは、杭州音の特徴を反映している。開口の字に対して、「-ウ」となることは、非止摂に[ts]組と[tʂ]組との対立があるのに対して、止摂の場合、[tʂ]組が存在せず、[ts]組と合流したことを反映している。また、対応する杭州音に舌尖前母音[ɿ]という韻母であるため、「-ウ」と記されていた。

(3)崇・船・禪母の字に対する音注には、摩擦・破擦音の特徴と最も対応するのは杭州音の特徴でもある。

なお、先行研究の中、知・精・莊・章四組の字に対して、謝氏は以下のような指摘がある。

謝(2011):

《唐话纂要》中,知母止摂的声母为ツ[ts],假摂的“爹”、山摂的“彻”声母为テ[t],其余为[tʃ]。彻母止摂的声母为[ts],梗摂的“撑”也为ツ[ts],其余为チ[tʃ],而且例字很少。(p.538)

《唐话纂要》精清从心邪的声母注音为ツ[ts]。从母的例字中,“在齐脐”有清浊两种注音,“芥”为清音。日语多用假名ヅ。有时也用假名ズ标注从母例字的声母,如“慈ヅウ[dzu:]、字ズウ”[dzu:]。邪母中,“寻遂”有清浊音两种注音,“涎旋”的注音为清音,邪母《唐话纂要》多用假名ヅ、有时也用假名ズ标注,如“寺ズウ[dzu:]”、“市ヅウ[dzu:]・ズウ[dzu:]”。照二除了宕江两摂是チ[tʃ]以外,其余均为ツ[ts]。照三除了止摂为ツ[ts]以外,其余多为チ[tʃ]。照三的船母禪母均出现了清声母例字,或清浊注音都有的例字,如“示スウ[su:]”、“常ヂヤン[dʒiən]・チヤン[tʃian]”。(p.538)

謝(2016):

(2) 見組精組在細音前没有腭化, 没有分化出舌面音。如: 家キヤア [kia:]、紀キー [ki:]、精ツイン [tsin]、清ツイン [tsin]、情ヅイン [dziN]、省スイン [sin]、席ヅエ [dze:]。(p.63)

(4) 除了止撮外, 绝大多数情况下能明确区分精組、知組和照組三組; 在宕开三和江开二的情况下, 照二組也与精組有別, 除此以外, 照二組归入精組。如: 将ツヤン [tsian]、张チヤン [tʃian]。(p.63)

(5) 止撮

止撮開口三等支之微韻……精組知系多为ウ段+u[u:], 如: 紫雌知智ツウ [tsu:], 匙是ズウ [dzu:], 儿尔ルー [ru:]。……(p.73)

止撮合口三等支之微韻多为ウ段+イ, 韻母是 [ui], 少数为才段+イ, 韻母为 [oi]。(p.74)

謝氏は止撮以外の精組、知組と照組に対する音注の書き分け現象を明確に指摘し、また、止撮の字と非止撮の字に対する音注の違いにも注意を払っている。しかし、なぜ止撮のみでは音注に区別が見られないか、つまり、その原因について、説明していない。止撮開口字の場合、「チイ・ヂイ」音注の「知致遅」について、謝氏も言及していない。止撮合口字の場合、謝氏は「ウ段+イ」を注目したが、「チュイ」「ジユイ」の「吹誰睡」の存在には言及がない。

また、謝(2011)で取り上げた表記例の中に、問題のあるものが存在している。「徹」は「二字話」の「徹夜 ヨモスカラ」1例のみで、「チ」の音注である。「字」は「ヅウ6(5)ツウ6(1)」となっている。「寺」は前五巻では「小曲」の1例のみで、「スウ」となり、謝氏による「ズウ」は巻六のものである。「市」は「ズウ(3)」となっている。

1.9 牙音見組

牙・喉音の字について、第二章第四節で述べたように、『唐話纂要』の18世紀には、南京音、蘇州音、杭州音では口蓋化という変化がまだ起きていなかった。牙音見組の字は表4-9にまとめている。

(1)見母[k-]と溪母[k'-]

見母[k-]の所属字は計251字種、延べ1,272字であり、溪母[k'-]の所属字は計78字種、延べ565字である。表4-9分かるように、見・溪両声母の字に対して、カ行となるのが一般的である。カ行以外、(i)ガ行、(ii)カ行・ガ行、(iii)カ行・ハ行、(iv)その他 の4種類の場合も存在している。

(i)「ガ行」

見母：グイ-愧(7) ガン-甘(1)

「愧-グイ(7)」は見母の「俱位切」で、7例の音注がすべて濁音の「グイ」となっている。南京音は[k'uəi]と発音するが、蘇州音が[guɛ]、杭州音が[guei]との濁音声母となる。このように、「グイ」音注は杭州音から説明できる。

「甘-ガン(1)」は「古三切 説文作甘美也」で、原例が「甘蔗^{ガンチエ} サダウキビ」である。『集韻』に「胡干切 説文酒楽也」との匣母の読みがあるが、発音と意味は原例とも一致しない。南京、蘇州、杭州音とも[k-]と発音するため、「ガン」はいずれからも説明できない。

(ii)「カ行」・「ガ行」

溪母：「企-ギイ3(2)キイ3(1)」

「企-ギイ3(2)キイ3(1)」は溪母の「丘弭切 企望也」(上声)、「去智切 望也」(去声)とあり、原例が下記の通りである。

「キイ」：^{キヤ}灑水不^{ウスイフ}企^{キイ} 水ヲカケルニ及ハス

「ギイ」：^{ライフ}来不^{ギイ}企^{キア}ハセヌ ^{ミンチヤ}明朝恐^{ウコン}来不^{ライフ}企^{ギイ} 明朝ハ来合サレマヒ

「ギイ」の例は意味でも発音でも溪母と合わず、見出し語から見て「来不企」は「来不及」でないと意味が成立しない。「キイ」は初出でないため、濁点が省略されたものと考えられる。

(iii)「カ行」・「ハ行」

見母:「合-カ 6(2)ホ 6(4)」

「合-カ 6(2)ホ 6(4)」は匣母の「侯閤切 合同亦器名」と見母の「古沓切 合集又音途」とあり、原例が下記のようにになっている。

「カ」:^{カスエ、ヤ}「三字話」合些薬 クスリヲアハスル 「器用」^{カレ〇ウ}合漏 トイ

「ホ」:^{ホロンライ}「三字話」合攏來 一ツニアツムル

「四字話」^{ツインデ〇ウイ、ホ}情投意合 心カ合フタ

「樹竹」^{ホハン}合歛 ネムリノキ 「花草」^{へ、ホ}百合 ユリ

意味上では、「カ」音注の2例と三字話の「合攏來」^{ホロンライ}が見母、残りの「四字話」^{ホロンライ}「樹竹」「花草」の例は匣母と一致している。このように、「合攏來」の「ホ」は誤記で、「カ」と記すべきだと考えられる。なお、蘇州音、杭州音ともに二種類の読みがあり、見母の読みは[k-]、匣母の読みは[h-]となる。このように、「合」に対して、二種類の音注となるのは蘇州音から説明できる。

(iv)その他

見母:「ヲ-鱸(1)」「ソウ-薊(1)」「ホ°イ-鴉(1)」「鴝-ぜ 2(1)」

溪母:「エへ〇ウ-摳(2)」「ヒヤ〇ウ-梟(3)」

「ヲ-鱸(1)」は、原例が「龍魚」所属の^{ヲツアン}「鱸残 スキ」であり、「古外切 魚膾 説文曰細切肉也」という見母の蟹摂去声の読みで、音注と一致しない。「會-ヲイ」による類推で、「-イ」の脱落による誤記と考えられる。

「ソウ-薊(1)」は原例が「菜蔬」の^{ソウサ°イ}「薊菜 アザミ」で、蟹摂の「古詣切 草名」となる。「ソウ」は読みと一致できず、字形の近い「ソウ-蘇」の発音を注する可能性がある。

「鴝-クハ 2(1)ぜ 2(1)」は原例が^{サンクハ}「鴝鴝 マナツル 一名鴝鷄」^{ゼ ニヤ〇ウ}「鴝鳥 ヒガラ」である。「古活切 鴝鴝」「古頰切 鴝鴝鳥」で、「クハ」と対応でき、そして、南京音でも蘇州音でも[k-]と発音する。このように、「ぜ」は声符「ぜ-舌」の類推によるものと考えられる。

「鴉-ホ°イ(1)」は、『康熙字典』に「[韻會]肩闋切」とあり、見母錫韻の字で

ある。声母と韻母とのいずれも「ホ°イ」と合わないため、声符「貝-ホ°イ」の類推によるものと考えられる。なお、資料の限り、各方言の読みが確認できない。

「エへ○ウ-摳(2)」は、原例は「摳不着了 トドカタ」^{エへ○ウフ チヤリヤ○ウ}「摳得着了 トドク」^{エへ○ウテチヤリヤ○ウ}となり、遇撰の「豈俱切 褰裳」と流撰の「恪侯切 摳衣挈衣也」とあり、遇撰の読みは音注と一致しない。南京音と蘇州・杭州音では同じ[k'-]と発音するので、声母がともに一致せず、いずれからも説明できない。字形の近い「エへ○ウ-嘔」を注する可能性が高い。

「ヒヤ○ウ-梟(3)」は『広韻』に「古堯切」となり、原例が下記の通りである。

「三字話」^{ヤ○ウヒヤ○ウシウ}要梟首 ゴクモンニカケタヒ
「四字話」^{ヒヤ○ウシウスウチヨシ}梟首示众 コクモンニカケテミセシメニスル
「禽鳥」^{ヒヤ○ウニヤ○ウ}梟鳥 フクロ

現代の南京音でも蘇州音でも同じ[ɕ-]となり、『西儒耳目資』は[h-](=[x-])、『同文備攷』は[h-]となっていることから、現在に伝わっているのは見母ではなく、曉母の読みであると言える。「ヒヤ○ウ」は声母面で両方言から説明できる。

上記の字は以下のようにまとめることができる。

- ① 吳方言から説明できるもの:「グイ-愧」「合-カ 6(2)ホ 6(4)」
- ② 南京音と吳方言との双方から説明できるもの:「ヒヤ○ウ-梟」
- ③ 両方言から説明できないもの:「ガン-甘」
- ④ 誤記によるもの:「ヲ-鱸」
- ⑤ 他の字を注する可能性のあるもの:「企-ギイ」「ソウ-薊」「エへ○ウ-摳」
- ⑥ 類推によるもの:「ゼ-鵠」「ホ°イ-鴟」

「合-カ」以外、見母の読みを示していない。これらの字を除き、見・溪両声母の字に対して、カ行音注となるのは一般的である。

「カ行」の音注に反映される発音は[k-]である。見・溪両母の字について、『西儒耳目資』と『同文備攷』では同じ[k-][k'-]となり、つまり、既に第二章第四節で述べたように、牙・喉音の字は当時まだ口蓋化していなかったことを反映している。日本語には有気と無気が区別されず、カ行音注は両方言から説明できる。

(2)群母[g-]

群母[g-]の所属字は計 52 字種、延べ 192 字である。音注が圧倒的に濁音のガ行となっている。また、下記のように、非濁音音注の表記例も存在している。主に(i)ガ行・カ行、(ii)カ行、(iii)その他 の三種類に分けられる。なお、表 4-9-1 のように、「小曲」の非濁音音注の使用例は、「キイ-期 4(1)」「キヤ〇ウ-橋 3(1)」で、計 2 字種、2 例である。

表 4-9-1 群母の字に対する清音音注の状況

項目		濁音音注	清音音注
清・濁両音注	非小曲	ギヨン-窮 5(3) ギイ-其 23(20)旗 6(5)期 4(2)碁 4(3) ギン-勤 3(2)近 16(14) ギエン-拳 6(4) ギヤ〇ウ-蕎 2(1) ギヤン-強 13(6) ギ-履 2(1)極 12(7)	キヨン-窮 5(2) キイ-其 23(3)旗 6(1)期 4(1)碁 4(1) キン-勤 3(1)近 16(1) キエン-拳 6(2) キヤ〇ウ-蕎 2(1) キヤン-強 13(6) キ-履 2(1)極 12(5)
	小曲	ギイ-期 4(2) ギヤ〇ウ-橋 3(2)	キイ-期 4(1)(<u>1例小曲</u>) キヤ〇ウ-橋 3(1)(<u>小曲</u>)
清音のみ			カン-赶(趕)(15) キイ-騎(1)渠(1) キュイ-詎(1)鸚(1) キエン-圈(3) キン-禽(1) クイ-櫃(1) ケン-苙(1)

(i)ガ行・カ行

「窮-ギヨン 5(3)キヨン 5(2)」は、「渠弓切」で、原例が下記の通りである。

「キヨン」:^{ダア、ビンキヨン}「三字話」大貧窮 「四字話」^{キヤアタ〇ウキヨクン}家道窮困
「ギヨン」:^{ギヨクイ}「二字話」窮鬼 「常言」^{ビンギヨクワンナン}貧窮患難 ^{ホヅインシンビンギヨン}福盡身貧窮

「キヨン」の例は初出でなく、「キヨン」は濁点の省略によるものと考えられる。

「期-ギイ 4(2)キイ 4(2)」「小曲」1 例)は「渠之切」で、原例が下記の通りである。

「キイ」:^{タンウ、シキイ}「四字話」耽誤日期
「ギイ」:^{ダインギイ}「二字話」定期 「四字話」^{チンコウハア、ギイ}真个花期

「キイ」は初出でないため、「キイ」も濁点の省略による可能性が高い。

「其-ギイ 23(20)キイ 23(3)」は、群母の「渠之切 辞也」と見母の「居之切 不其邑名」とあり、「キイ」の原例が以下のようになっている。

「キイ」:^{ウエ○ホイキイルイ}「常言」物悲其類 物ハ己カ類ヲ悲ム
^{シバイキイキウ}十敗其九 十ガ九ハ敗レヲ取ル
「長短話」^{イビ°テキイサ°○ウツユイ}亦必得其遭際 必ス落付ヲ得テ
「ギイ」(一部):^{コンギイサ°○ウ}「三字話」恐其早 タブンハヤカラフ
「四字話」^{リヤンテギイベン}兩得其便 兩方共ニカツテヨキコトヲ得タ
^{トンウエンギイクウ}動問其故 其故ヲ聞ヒ出ス

「キイ」は初出でないので、濁点の省略によるものとも考えられる。

「勤-ギン 3(2)キン 3(1)」は、反切が「巨斤切」で、例が下記の通りである。

「キン」:^{キヤイネンギンキン}「長短話」皆能勤謹
「ギン」:^{ギンキン}「二字話」勤謹 「常言」^{スヤ○ウフウツアイギン}小富在勤

「キン」は初出でなく、「ギン」は濁点が省略されたものでもある。

「近-ギン 16(14)キン 16(1)¹³⁶」は、臻撰の「其謹切 迫也幾也」(上声)と「巨斬切 附也」(去声)であり、原例が以下のようにになっている。

「キン」:^{キンライユウキイシウソウヨンスウ}「長短話」近來有幾首所詠詩 近來詠セル所ノ詩
「ギン」:^{タイギン}「二字話」太近 アマリチカヒ
「四字話」^{ギンヤ○ウキイヒン}近要起行 近口発足セント欲ス
^{ミンウエンエユンギン}名聞遠近 名エンキンニキコユ
「六字話」^{ギンメンシンズウエユンメン}近面勝似遠面 近クヨリ見ル顔ハ
^{エユンメンフ°ジユイギンメン}遠面不如近面 遠クヨリ見ル顔ニマサレリ
「常言」^{エユンツインフ°ジユイギンリン}遠親親不如近隣 遠キ親ルイハ近キ他人ニ如ス
^{エユンスイナンキウギンホウ}遠水難救近火 遠キ水ハ近キ火ヲ救ヒカタ
^{エユンツインフ°ジユイギンリン}遠親不如近隣 親類ハ近キ隣ニ如ス
「長短話」^{ソウイ、ギンジライ}所以近日來 近ロハ
^{ギンライユウトウシヤ○ウウ、フウ}近來有少武夫 近來アマタノ武夫
^{ニイギンライヒヨネダア、ツイン}爾近來學業大進 近來學業大ニ進ミ
^{スヤ○ウデイギンライ}小弟近來 某近ロハ ^{ギンウエンニイキヤアツエ、トイメン}近聞你家斜對面 近ロ承ルニ
^{ジャンコウライギンシイムイジンエ、}讓可謂近世美人也 近世ノ美人ト謂ツベキ

¹³⁶ 「近-ピン」は、原例が「長短話」の「^{モユンピンシヤ○ウダ}遠近少疋 遠近ニ疋ヒ少シ」である。バ行音注となるのは同書の並母字に対する音注の特徴で、群母の読みと一致できず、明らかに誤記である。

表記例の中、「遠近」、「近來」とも複数用いられ、「キン」音注の例は初出ではないので、濁点が省略されたものと考えられる。

「拳-ギエン 6(4)キエン 6(2)」は「巨員切」で、原例が、以下の通りである。

「キエン」:タア、キエンズウキヤ「四字話」クイキエン打拳使脚「虫介」鬼拳
「ギエン」:ライタア、キエン「三字話」会打拳 ゴウヤ○ウホウニイハア、ギエン「六字話」我要和你化拳
「長短話」ルウネンハ、ギエンタア、スウジン而能半拳打死人 ケ、ンケンタア、ギエンズウキヤテンズウ更兼打拳使脚等事

「キエン」は初出ではなく、それに、「四字話」のタア、キエンズウキヤ「打拳使脚」と「三字話」「長短話」の中、同じ「打拳」という語があり、「キエン」は明らかに濁点の省略によるものである。

「蕎-ギヤ○ウ 2(1)キヤ○ウ 2(1)」は見母の「舉喬切 藁名」と群母の「巨嬌切 蕎麥又驕」との二種類の読みをもち、原例が「四字話」のツインヨンギヤ○ウモ「請用蕎麥」と「米谷」のキヤ○ウモ「蕎麥」となり、「キヤ○ウ」は初出でなく、濁点の省略によるものとも考えられる。

「屐-ギ 2(1)キ 2(1)」は反切が「奇逆切 履屐」で、原例が「長短話」のチエン「穿木屐則自然難走」と「器用」のモ キ「木屐」である。「キ」も初出であく、濁点の省略によるものでもある。

「旗-ギイ 6(5)キイ 6(1)」は、「渠之切」で、原例が以下のようにになっている。

「キイ」:ツイキイヒ、イテン「四字話」旌旗蔽天
「ギイ」:ツインギイ「器用」旌旗 ジュンフランギイ「船具」順風旗 マア、ツツハギイ馬祖旗 サンスエ、ギイ三色旗 チスインギイ七星旗

「四字話」と「器用」の例に同じ語があり、「四字話」の例が初出のため、「キイ」は濁点の記入漏れの可能性がある。

「碁-ギイ 4(3)キイ 4(1)」は「渠之切」で、原例が下記のようにになっている。

「キイ」:コウヤ○ウホウニイチャキイ「六字話」①我要和你着碁
「ギイ」:ギイパワン「器用」碁盤 タア、アイチャツヤンギイリイ「六字話」②他愛着象碁哩 ③ヒヤアイバアンギイシヤアシヤア下一盤碁要要

「キイ」は初出のため、濁点の記入漏れの可能性がある。

「極-ギ 12(7)キ 12(5)」は曾撰の「渠力切 中也至也終也窮也高也遠也」

である。原例は下記の通りである。

「キ」:^{キナンリヤ〇ウ}「三字話」極難了^{ツランロキトウ}「四字話」村落極多^{キヤアスヤ〇ウキトウ} 家小極多
^{チユイシンキズウラ〇ウクウ}「長短話」處身極是^{ツランユウギケンキナン} 勞苦 縱有極艱極難
 「ギ」:^{ツインキユンギトウ}「四字話」親眷極多^{シウニイギトウ} 手藝極多^{ツラ、ホウギトウ} 粗貨極多
^{ツランユウギケンキナン}「長短話」縱有極艱極難^{イ、ツイソウツウチエ、ギトウ} 以遂素志者極彗^{ギナンヘ、エンツエ〇ウ} 極難奔走
 「器用」^{テギ}磔極

両音注の中、同じ語が多くあり、意味に違いが見られない。「縦有極艱極難」^{ツランユウギケンキナン}の中、「極」が二回使われ、「キ」は明らかに濁点が省略されたものである。また、「ギ」の数が多く、「キ」の「極難了」^{キナンリヤ〇ウ}は初出であるため、「キ」は濁点の記入漏れの可能性がある。

「強-ギヤン 13(6)キヤン 13(6)」は、『広韻』に「巨良切 健也暴也」(平声)とある。また、『集韻』に群母の「巨兩切 勉也」(上声)と見母の「舉兩切 説文負兒衣或省亦作 𠂔 𠂔」^{ネ 𠂔}ともある。原例は以下のようになり、見母の読みと一致しない。

「ギヤン」:^{チギヤン}「二字話」執強^{ギヤンマイリヤ〇ウ} ジヤンシキスル^{ギヤンマイリヤ〇ウ}
 「三字話」強買了^{ヒウヤ〇ウチギヤン} オシガイニシタ^{キヤンマイリヤ〇ウ} 強賣了^{オシウリニシタ}
 「四字話」^{ヒウヤ〇ウチギヤン}休要執強^{ギヤンコハニアルナ} ジヤンコハニアルナ
^{ギヤンジュイタアトウ}強如他多^{ユウヒユイトウギヤンダ〇ウ} 彼マサレルコト多シ
 「五字話」^{ユウヒユイトウギヤンダ〇ウ}有許多強盜^{ソコバクノ山ダチアリ} ソコバクノ山ダチアリ
 「キヤン」:^{フ、メンキヤン}「三字話」不勉強^{シイヌ} シイヌ
^{ヒウヤ〇ウタイメンキヤン}「五字話」休要太勉強^{アマリシイルナ} アマリシイルナ
^{チエ、ズフ、ニイメンキヤン}「六字話」這事不宜勉強^{此事ハシイラレヌ} 此事ハシイラレヌ
^{カンキヤンゼエ、ヲウツウユウ}「常言」剛強惹禍之由^{剛強ハ禍ヲ惹キ出スノ本也} 剛強ハ禍ヲ惹キ出スノ本也
^{ズウユウウハツイルウキヤンツユウ}是猶惡醉而強酒^{醉フヲ惡テ酒ヲ強ヒルガ如シ} 醉フヲ惡テ酒ヲ強ヒルガ如シ
^{フ、コウメンキヤンベンリヤ〇ウ}「長短話」不可勉強便了^{シユベカラス} シユベカラス
 「器用」^{キヤンコン}強弓^{ツヨユミ} ツヨユミ

「強」は多音字で、平声・濁音は形容詞、上声・清音は動詞である。用例の中では、「剛強」と「強弓」は形容詞で、本来「ギヤン」となるべきところが「キヤン」になっているのを除けば、読みと正しく対応している。南京音が [tɕ-][tɕ'-]、

蘇州音が[ɕ-](倔強)[te'-](勉強)、現代杭州音が[dz-][te'-]、『西儒耳目資』が[kiam](=[kian])・[k'iam](=[k'ian])、『同文備攷』が[k'ian][gian]となっているのは全てのこの二種類の読みの違いを反映している。清濁を区別している点から音注は吳方言の特徴により符合することが分かる。

(ii)カ行

「キイ-騎(1)」は、原例が「三字話」の「^{ライキイマア}会騎馬 ヨク馬ニノル」の1例のみである。「渠羈切 説文曰跨馬也」(平声)と「奇寄切 騎乗」(去声)の濁音読みしかない。蘇州音は[ɕ-]、『同文備攷』は[gi](平声・跨馬,去声・騎率)となり、音注と対応しない。このように、「キイ」は南京音[k'-]から説明できる。それに、濁点の記入漏れの可能性もある。

「クイ-櫃(1)」は、原例が「器用」の「^{クイツウ}櫃子 ヒ」で、「求位切 櫃篋」の濁音読みのみである。蘇州音は[g-][ɕ-]との二種類の濁音読み、杭州音は[g-]となるので、蘇州・杭州音から説明できない。「クイ」は南京音の[k-]と対応でき、濁点の記入漏れの可能性も排除できない。

「キン-慙(1)」は、原例が「二字話」の「^{インキン}殷慙 ヘリクダル ネンゴロ」で、「巨斤切 慙慙」である。同書では同音字の「勤」(巨斤切)は「ギン 3(2)キン 3(1)」となるので、「慙」に対する「キン」は濁点の記入漏れの可能性がある。また、南京音の清音読みと対応するので、南京音からも説明できる。

「キン-禽(1)」は、原例が「果瓜」の「^{ライキン}來禽 リンゴ」で、『大漢和辞典』に「林檎。[通雅]來禽、即林檎也。[本草、林檎]釋名、來禽。」とあり、『漢語大字典』にも「林檎」が「果木名,即花紅。叫沙果。…又有“林檎”、“來禽”之名。」との説明があり、意味は「リンゴ」と一致する。「禽」は『広韻』に「巨金切 二足而羽者曰禽又姓」である。また、蘇州・杭州音では「禽」が濁音の[ɕ-]であるため、「キン」は蘇州・杭州音から説明できず、南京音の[k'-]と対応する一方、濁点の記入漏れの可能性もある。

「キイ-渠(1)」は、原例が「虫介」の「^{チエキイ}車渠 ホタテカイ」である。『広韻』に群母遇摂の「強魚切 溝渠也」で、蘇州・杭州音では濁音の[ɕ-]で、声母も韻母も合わない。「キイ」は声母面では南京音の[k'-]と対応するが、韻母は一致できず、明らかに誤記である。

「キユイ-詎(1)」は、原例が「四字話」の「^{キユイツウジュイツウ}詎知如此 何ソ如此ナルヲ知ンヤ」であり、『広韻』に「其呂切 豈也又音遽」(上声)と「其據切」(去声)とある。『同文備攷』では「渠」「詎」2字とも[gy]読みとなっている。清音の「キユイ」は呉方言からも説明できない。

「キユイ-鸚(1)」は、原例が「禽鳥」の「^{キユイヨ}鸚鴒(谷鳥) ハ、テウ一名口別々鳥」で、『広韻』に群母の「其俱切」とあり、「キユイ-鸚」は南京音からも説明できる。また、声符の「瞿」(其俱切/九遇切)の類推、或は濁点の記入漏れの可能性も排除できない。

「キエン-圈(3)」は、原例が下記の通りである。

「二字話」^{キエンタ〇ウ}圈套 オトシアナ
 「六字話」^{アンハ°イキエンタ〇ウエンジン}按排圈套陥人 オトシアナヲコシラエテ人ヲオトシ入ル
 「船具」^{チエハキエン}車圈 マルキ

3例とも清音の「キエン」となっている。『広韻』に「求晚切 獸闌」「渠篆切 說文曰養畜閑也」「臼万切 邑名」との群母の読みとあり、表記例の意味により、いずれにも対応している。『集韻』に「去爰切 屈木也」との溪母の読みがあり、『大漢和辞典』に「榼」と同じ、「まげもの」「まる」など意味があり、表記例と対応する。このように「キエン」は溪母の読みと一致している。また、蘇州音は[k'io̯](群母:猪圈)[dziø](溪母)、杭州音は[k'yo̯]となり、『西儒耳目資』は[‘kiuen](=[k'iuɛn])、『同文備攷』は[k'yɛn](平声)[gyɛn](上声)である。「キエン」は南京音、杭州音から説明でき、『同文備攷』の平声の読みにも一致する。

「カン-赶(趕)(15)」は、原例に俗字「赶」と繁体字「趕」とも使用され、下記の例のようになっている。

「二字話」^{カンジャン}赶上 ^{ツイカン}ヲヒツヒタ 追赶 オツカクル
 「三字話」^{カンギョタア、}赶逐他 ^{カンコウウヲ}カレヲカンドウスル 赶過活 スギワヒヲカセグ
^{カンイハワン}赶衣飯 衣シヨクヲカセグ
 「四字話」^{カンジャンソデ〇ウ}赶上宿頭 タヒノヤトニカケツイタ
 「五字話」^{カンフ°ジャンソデ〇ウ}赶上不上宿頭 宿ニ馳セ付ヌ「^{ヒ°スエ、カンサ〇ウ}長短話」必須赶早 赶早

「四字話」^{カンタアハフ^フジヤン}趕他不上 彼ニ追ツカヌ ^{キユイマアハツイカン}驅馬追趕 馬ヲ馳テ追カクル
 「常言」^{カンジンフ^フヤウカンジヤン}趕人不要趕上 人ヲ趕上ヘカラス
^{チヨヅエフ^フジユイカンゾエ}捉賊不如趕賊 賊ヲ捉フハ賊ヲ趕フニ
 「長短話」^{ピ^フスエ^フカンサ^フウケンキヤウ}必須趕早見教 早ク御シメシ候ヘ「器用」^{カンワン}趕网 サデ

『広韻』に「趕」は未収で、「趕」は「巨言切 獸舉尾走」(平声)、「其月切 舉尾走」(入声)との群母の読みとあり、平声の読みの声母は音注と一致できず、入声の読みは声母、韻尾とも音注とは対応しない。南京音でも蘇州・杭州音でも[k-]と発音するので、「カン」は両方言から説明できる。

「ケン-芡(1)」は、原例が「花草」の「^{ケンサ^フウ}芡草 ミヅブキ」で、「巨險切 説文云 鷄頭也方言曰南楚謂之鷄頭北燕謂之^艸青徐淮泗之聞謂之芡」である。南京音でも蘇州音でも[k'-]となり、ともに非濁音の読みであり、「ケン」は両方言から説明できる。一方、「ケン-欠(5)」による類推の可能性もある。

(iii)その他

「ズウ-鱮(1)」は、原例が「龍魚」の「^{ズウルウ}鱮兒 ヒレ」で、「渠脂切 魚脊上骨」であり、音注と一致しない。また、蘇州音は濁音の[~~dz~~-]と発音するが、読みと対応しないため、「ズウ」は字形の近い「鮪」の発音を注する可能性がある。

このように、上記の字は以下のようにまとめることができる。

- ①清音音注となり、濁点が省略されたもの:「窮-キヨン」「期キイ」「其キイ」「勤-キン」「近-キン」「拳-キエン」「蓄-キヤウ」「屐-キ」「極-キ」(一部)
- ②濁点の記入漏れによるもの:「旗碁-キイ」「極-キ」
- ③南京音と対応するか濁点の記入漏れの可能性もあるもの:「騎渠-キイ」「櫃-クイ」「懃禽-キン」「詎鸚-キユイ」
- ④南京音と呉方言との双方から説明できるもの:「圈-キエン」「趕(趕)-カン」「芡-ケン」
- ⑤多音字であるもの:「強-ギヤン・キヤン」
- ⑥他の字の発音を注する可能性のあるもの:「鱮-ズウ」
- ⑦誤記によるもの:「渠-キイ」
- ⑧上述に類推による可能性もあるもの:「鸚-キユイ」「芡-ケン」

これらの字を除き、群母の字に対して、全てガ行となっている。

「ガ行」に反映される発音は[g-]である。群母の字について、南京音は無声

化して[k-][k'-]となるが、蘇州音は[ɬ-][g-]_(少)、杭州音は[ɬ-]の濁音の読みが保存されている。『同文備考』では[g-]となっている。このように、濁音の「ガ行」の音注は南京音から説明できず、吳方言と一致している。

(3) 疑母 [ŋ-]

疑母 [ŋ-]の所属字は計 67 字種、延べ 437 字である。表 4-9-3 のように、音注は主に三つのケースとなり、ガ行、ナ行、アヤワであり、また、「キ」「チ」等の例外も存在している。「玉」に対して、二種類の音注があり、「イユイ-玉 8(1)」は「小曲」に属する。具体的に、(i)「ガ行」・「カ行」、(ii)ナ行、(iii)その他の三種類に分けて検討する。

表 4-9-3 疑母の字の音注状況

音注	使用例
ガ行	止撰三等合：グイ-危(1) 蟹撰一等開：ガイ-礙(4)呆 6(5)艾(1) <u>カイ-呆 6(1)</u> 效撰一等開：ガ〇ウ-傲(3)熬 4(2) <u>カ〇ウ-熬 4(2)</u> 果撰一等合：ゴウ-蛾①(1)鵝(3)臥(1)我 118(102)ヨウ-我 118(16) 梗撰二等開：ゲエン-硬 3(1)ゲン-硬 3(1) <u>へエン-硬 3(1)</u> 流撰一等開：ゲ〇ウ-偶(3) 咸撰二等開：ガン-巖 2(1) <u>カン-巖 2(1)</u>
ナ行	止撰三等開合：ニイ-疑(10)蟻(1)義(6)議 4(2)宜 8(4) <u>イ-宜 8(4)</u> 蟹撰三等開：ニイ-藝(5) 山撰四等開：ネン-研(1)硯(4) 宕撰一等開：ネ-鱗(1) 三等開：ニヤン-仰(2) 梗撰三等開：ニン-迎(5) ネ-逆(2) 流撰三等開：ニウ-牛(11) 臻撰三等開：ニン-吟①(4) 咸撰三等開：ネン-嚴(3)駢(1) ネ-業(2)
アヤワ	通撰三等開合：ヨ-玉 8(7)イユイ-玉 8(1)(<u>小曲</u>) 遇撰一等開合：ウ-吾(3)梧(1)蜈(1)鯨(1)鯨(1)五(11)悟(2)忤(1)晤(1)誤(5) 遇撰三等開合：ウ-娛(1) イユイ-魚(60)愚(8)語(8)遇(1) 蟹撰一等合：ワイ-桅(6) ワイ-外(13) 二等開：イヤア-涯(1) 臻撰三等開：イン-銀 9(8)キン-銀 9(1) 山撰二等合：ワン-頑(9) 開：エン-眼(13)鷹(3) 三等開：エン-言(14) 合：エユン-原(5)蠟(1)願(4)愿(2) エ-月(9) 仮撰二等開：イヤア-牙 3(1)雅 3(1) ヤア-牙 3(2)芽(2)雅 3(1) <u>キヤア-雅 3(1)</u> 二等合：ワア-瓦(2) 效撰四等開：ヤ〇ウ-堯(1)
その他	山撰四等：キ-齧(1)

(i)「ガ行」・「カ行」

「呆-ガイ 6(5)カイ 6(1)」は、『広韻』未収、『集韻』に效撰の「補抱切 説文養也一日任也守也亦姓」とあり、音注と対応しない。『康熙字典』に「今俗以爲癡獸字,誤也」との説明があり、また、『漢語大字典』によれば、「痴;傻」という意味として使うのは「獸」からきたのである。「獸」は疑母蟹撰の「五來切 獸癡象犬小時未有分別」であり、「ガイ」と一致する。つまり、この音注は「呆」でなく、「獸」の発音を記している。また、原例が下記の通りで、「カイ」は初出でないため、濁点が省略されたと考えられる。

「カイ」:^{カイウエズウ}「三字話」呆物事
 「ガイ」:^{ガイツウ ツウガイ}「二字話」呆子 痴呆 ^{モツエンケ○ウガイ}「四字話」目睜口呆
 「六字話」^{ガイデ○ウガイナ○ウツヲハシン}呆頭呆腦做甚

「熬-ガ○ウ 4(2)カ○ウ 4(2)」は、原例が下記の通りである。

「カ○ウ」:^{タア、カ○ウキイリ}「四字話」打熬氣力 氣力ヲネル
 「長短話」^{ル、タア、カ○ウキイリ}而打熬氣力 氣力をネリ
 「ガ○ウ」:^{ナンガ○ウ}「二字話」難熬 タエガタヒ
 「常言」^{ムイスウヅエピンガ○ウツエン}每思疾病熬煎 常ニ病フ時ノ事ヲ思ヘハ

『広韻』に「五勞切 煎也」とあり、蘇州・杭州音では[ŋ-]、南京音ではゼロ声母と発音するため、「ガ○ウ」は蘇州・杭州音と一致し、「カ○ウ」は初出でないため、濁点の省略によるものと考えられる。

「我-ゴウ 118(102)コウ 118(16)（「小曲」3例）」は、「五可切 己称」である。「ゴウ」音注の数が圧倒的に多い。下記のように、「コウ」はいずれの場合も初出でないので、「コウ」は「ゴウ」の濁点の省略によるものと考えられる。

「コウ」(一部):^{テイコウメ○ウ}「三字話」替我謀 ^{スウコウソウワン}「四字話」是我素望
 「五字話」^{ヒウヤ○ウライジエ、コウ}休要來惹我 ^{コウヤ○ウホウニイチャキイ}「六字話」我要和你着棋
 「常言」^{イユイコウヲチエ、}於我惡者 ^{コウキヤアテヲハン}「長短話」我家的屋板
 「ゴウ」(一部):^{ゴウモン}「二字話」我們 ^{カンクウゴウ}「三字話」看顧我

「巖-ガン 2(1)カン 2(1)」は、「五銜切 峯也險也峻廊也」である。2例はそれぞれ下記のようになっている。

「カン」:^{カンエツウズウ}「四字話」巖穴之士 「ガン」:^{ガンエツウズウ}「長短話」巖穴之士

蘇州音が[ŋ-]、杭州音が[ŋ-]、南京音がゼロ声母となるので、「ガン」は蘇州音と対応でき、「カン」は南京官話音と呉方言との双方から説明できない。また、初出のため、濁点の記入漏れではないかと考えられる。

(ii)ナ行

「宜-ニイ 8(4)イ\8(4)」は、止摂開口の「魚羈切 説文本作互所安也俗作宜亦姓」である。原例は下記の通りである。

「イ\」:^{ヘンイハ}「二字話」便宜 カツテニヨイ
 ^{ツユイベンイハ}「三字話」取便宜 カツテノヨヒコトヲスル
 ^{リヤンヒヤアベンイハ}「四字話」兩下便宜 双方共ニカツテガヨイ
 ^{ケンチエハベンイハリヤ〇ウ}「五字話」牽扯便宜了 マハシニシタガ勝手ガヨヒ
「ニイ」:^{ニイツヲハチユイチヤン}「四字話」宜做主張 宜クフンベツヲセヨ
 ^{フニイキヤン}「三字話」不宜講 云ハレヌ
 ^{チエハズウフニイメンキヤン}「六字話」這事不宜勉強 此事ハシイラレヌ
 ^{シンキンフニイドヒン}「常言」深徑不宜獨行 深キ徑チヲハ獨リ行クヘカラズ

「イ\」の例は二字熟語「便宜」の用法で、「ニイ」の例は助動詞で「～すべき」という意味の使い方である。蘇州音は[ɲi]、南京音はゼロ声母と発音する。一方、杭州音では[ɲi]、[hi]との二種類の読みがあり、音注との対応が存在している。このように、書き分けられている「イ\」「ニイ」両音注は両読みをもつ杭州音と一致している。

(iii)その他

「銀-イン 9(8)キン 9(1)」は「語巾切 爾雅曰白金謂之銀」であり、「キン」の例は「器用」の^{スイキン}「水銀 水カネ」である。蘇州・杭州音は[ɲ-]、南京音はゼロ声母、『同文備攷』は[hin]となっている。「イン」は南京音と吳方言との双方から説明できる。「キン」はいずれの場合にも一致せず、誤記の可能性が高い。

「キ-齧(1)」は、山摂入声の「五結切 噬也亦姓」であり、原例が「虫介」の^{キハ}「齧髮 カミキリムシー各天牛」である。「キ」は入声の短促性を示しているが、声母と一致できず、誤記の可能性が高い。

このように、上記の疑母の字の中、「呆-カイ」「熬-カ〇ウ」「我-コウ」「巖-カン」は濁点が省略されたもので、「宜-ニイ・イ\」は両読みをもつ杭州音と一致でき、「銀-キン」「キ-齧」は誤記の可能性が高い。

これらの字を除き、音注はガ行、ナ行、アヤワとの三種類となっている。そし

て、音注上の大きな傾向が見られ、開口呼の字はガ行、齊歯呼の字はナ行、合口呼と撮口呼の字はアヤワ行の音注となっている。

中古の疑母が子音を失い、ゼロ声母に合流することは官話系方言の主な特徴の一つである。僅かの一部分の齊歯字は[n-]となった。具体的に、表 4-9-3 で示しているように、流摂三等の「牛-ニウ」は南京音では[n-]と発音し、音注と対応でき、それ以外の場合、ゼロ声母となり、アヤワ行の音注と一致するが、ガ行とナ行の音注は南京音から説明できない。

表 4-9-4 を通して、これらの字と呉方言との対応関係を詳細に見てみる。

表 4-9-4 疑母字の音注と呉方言との対応

音注	使用例	杭州音	蘇州音	『同』
ガ行	蟹撮一等開：ガイ-礙(4)呆 6(5)艾(1) 效撮一等開：ガ○ウ-傲(3)熬 4(2) 果撮一等合：ゴウ-蛾①(1)鵝(3)臥(1)我 118(102) 梗撮二等開：ゲン-硬 3(1)ゲン-硬 3(1) 流撮一等開：ゲ○ウ-偶(3) 咸撮二等開：ガン-巖 2(1) 止撮三等合：グイ-危(1)	[ŋ-] (礙巖 [ɦ-] 艾偶 [θ-])	[ŋ-] (巖 [ɦ-])	[ŋ-]
	止撮三等開合：ニイ-疑(10)蟻(1)議 4(2)宜 8(4)イゝ-宜 8(4) 蟹撮三等開：ニイ-藝(5) 山撮四等開：ネン-研(1)硯(4) 宕撮三等開：ニヤン-仰(2) 梗撮三等開：ニン-迎(5)ネ-逆(2) 流撮三等開：ニウ-牛(11) 臻撮三等開：ニン-吟(4) 咸撮三等開：ネン-嚴(3)驗(1)ネ-業(2) 止撮三等開合：ニイ-義(6) 宕撮一等開：ネ-鱈(1)	[ŋ-] (硯仰 [θ-])	[ŋ-]	[ŋ-]
アヤワ行	遇撮一等開合：ウゝ-蜈(1) 蟹撮一等合：ワイ-桅(6)二等開：イヤア-涯(1) 山撮二等合：ワン-頑(9)三等開：エン-言(14) 效撮四等開：ヤ○ウ-堯(1)	[ɦ-]	[ɦ-]	涯言堯 [ɦ-] 蜈桅頑 堯 [ŋ-]
	遇撮三等開：イユイ-魚(60) 蟹撮一等合：ワイ-外(13) 山撮二等開：エン-眼(13)三等合：エ-月(9) 仮撮二等開：イヤア-牙 3(1) ヤアゝ-牙 3(2)芽(2)	[ɦ-] (眼 [θ-] [ŋ-])	[ɦ-](文) [ŋ-](白)	[ɦ-] (眼 [ŋ-])
	遇撮三等開：イユイ-語(8)	[θ-]	[ɦ-][ŋ-]	[ŋ-]
	遇撮一等開合：ウゝ-五(11)	[θ-]	[θ](文) [ŋ-](白)	[ŋ-]
	山撮二等開：エン-鴈(3) 仮撮二等開：イヤア-雅 3(1)ヤアゝ-雅 3(1)	[θ-]	[θ]	鴈 [ŋ-] 雅 [ɦ-]
	遇撮一等開合：ウゝ-吾(3)梧(1)鰭(1)梧(2)忤(1)晤(1)誤(5) 仮撮二等合：ワアゝ-瓦(2)	[ɦ-] (瓦 [θ-]) 「鰭忤晤」確認 できない	[ŋ-]	[ŋ-] (瓦 [ɦ-])
	通撮三等開合：ヨ-玉 8(7)イユイ-玉 8(1)(小曲) 遇撮一等開合：ウゝ-蝮(1) 遇撮三等開合：ウゝ-蜈(1)開：イユイ-愚(8)遇(1) 臻撮三等開：イン-銀 9(8) 山撮三等合：エユン-原(5)蠟(1)願(4)愿(2)	[ɦ-] (銀 [ŋ-]) 「蝮蜈」確認 できない	[ŋ-]	[ŋ-] (銀 [ɦ-]) 「蜈」確認 できない

表 4-9-4 で示しているように、まず、ガ行の音注の中、蘇州音と杭州音は殆ど[ŋ-]となっている。なお、蘇州音の場合、「巖危」[ɦ-]の 2 字、杭州音の場合、「礙巖」[ɦ-]、「艾偶」[∅-]、「危」[∅-][ɦ-]の 5 字がガ行音注と対応しない。

これらの字は主に蟹・效・流摂開口の一等、梗・咸摂開口の二等や果摂合口の一等に所属する。ガ行で表記するのは、呉方言では疑母の一部分の字に鼻音[ŋ-]がそのまま保存されていることを反映している。

また、ナ行の音注の中、蘇州音の場合「義」[ɦ-]、「鱒」[ŋ-]がナ行と対応できず、杭州音の場合、「鱒」の発音が確認できなく、「硯仰」[∅-]がナ行と対応しない以外、全て[ŋ-]となり、ナ行と一致している。

これらの字は主に止・蟹・宕・梗・流・臻・咸摂三等と山摂四等の開口に集中している。つまり、ナ行で始まる音注の字は全て[-i]の前で[ŋ-]となった例である。このように、疑母[ŋ-]の字がナ行に写される例も同書に認められる呉方言の重要な特徴であると考えられる。

アヤワ行の音注の字について、一部の疑母[ŋ-]の字は鼻音弱化して[ɦ-]となる以外、「魚外眼月牙芽」のように、蘇州音では文白異読があり、文語音が[ɦ-]、白話音が[ŋ-]となっている。これらの字は杭州音では全て[ɦ-]と発音する。また、「語」「五」2 字は蘇州音では[ŋ]、[ɦ-]の二種類の読みがあるが、杭州音ではゼロ声母と発音する。そして、「鴈」「雅」はゼロ声母となり、蘇州・杭州音では同じである。このように、これらの字に対して、日本語で表記する時、[ɦ-]でもゼロ声母でもアヤワ行の音注となる。また、これらの字は表 4-9-4 で示しているように、杭州音では[ɦ-]・[∅-]との二通りの読みとなり、いずれの場合もアヤワ行の音注と対応する。

しかし、「吾梧鯪悟忤晤誤瓦」「玉齧娛愚遇銀原蝮願愿」これらの字は蘇州音ではそれぞれ[ŋ-]・[ŋ-]と発音し、アヤワ行の音注と一致しない。一方、発音の確認できない字を除き、これらの字について、杭州音では[ŋ-]と発音する「銀」以外、[ɦ-]の読みが一般的で、「瓦」がゼロ声母となり、アヤワ行の音注は蘇州音と対応しないが、杭州音から説明できる。なお、『同文備攷』では疑母の字は主に[ŋ-]となり、わずかの一部の字のみが[ɦ-]であり、疑母[ŋ-]が概ね保存されていたことを反映している。

このように、疑母に対する三種類の音注は杭州音に最も近い。

上述したように、牙音見組の字について、見[k-]・溪[k'-]両声母に対するカ行、群母[g-]に対するガ行の音注は清音・濁音との対立特徴を反映している。音注は南京音と蘇州音との対応関係は表 4-9-5 の通りである。

表 4-9-5 見組の音注と方言との対応関係

声母	音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応		
見[k-] 溪[k'-]	カ行	清音 ([k-])	清音 ([k-][k'-])	○	清音 ([k-][k'-])	○	
群[g-]	ガ行	濁音 ([g-])	清音 ([k-][k'-])	×	濁音 [g-]([dz-])	○	
疑[ŋ-]	①ガ行(開口呼)	①[g-]	[θ-] [n-](1例)	×	[ŋ-]	○	
	②ナ行(齊齒呼)	②[n-]		×	[ŋ-]	○	
	③アヤワ(合・撮口呼)	③[θ-]		○	[h-][θ]	○	
				[ŋ-][ŋ-]	×	[h-][θ]	○

見[k-]・溪[k'-]両声母に対応する音注は南京音と吳方言との双方と一致する。群母[g-]に対する音注は、見[k-]・溪[k'-]両声母と違って、ガ行の音注が一般的であり、清濁の対立を反映している。清濁の対立を維持しているのは吳方言の特徴であるため、ガ行の音注は明らかに吳方言と一致している。疑母[ŋ-]に対して、ガ行、ナ行、アヤワ行との三種類となり、これは吳方言の特徴でないと説明できず、音注は杭州音に最も近い。

表 4-9 牙音見組所属字一覧

撰	等位	声調	韻目	開合	見[k-]		溪[k'-]		群[g-]		疑[ŋ-]		字種数	延べ数			
					清	濁	次清	濁	次濁								
通撰	一等	平	東	õŋŋ	開	コン-公(11)功(4)工(2)攻①(1)蚣①(1)	5	19	コン-空①(17)	1	17						
		平	冬	oŋ	開合	コン-攻②(1)											
		上	董	õŋŋ	開				コン-孔(1)	1	1						
		去	送	õŋŋ	開				コン-空②(17)控(2)	1	2						
	入	屋	õuk	開	コ-穀(3)	1	3										
	入	沃	ok	合	コ-鵠(1)	1	1										
	平	鍾	ioŋ	開合	コン-弓(4)供①(4)共①(6)恭(7)躬(1)	5	22			ギヨン-窮 5(3)キヨン-窮 5(2)	1	5					
	上	腫	ioŋ	開合	コン-恭①(1)	1	1	コン-恐①(8)	1	8							
去	用	ioŋ	開合	コン-供②(4)			コン-恐②(8)										
入	屋	io`uk	開	キヨ-掬(2)菊(3)	2	5											
入	燭	iok	開合				キヨ-曲(5)	1	5			ヨ-玉 8(7)イユイ-玉 8(1)	1	8			
江撰	二等	平	江	auŋ	開合	カン-虹(1)キヤン-江(5)	2	6	キヤン-腔(1)	1	1						
		上	講	auŋ	開合	キヤン-講(10)	1	10									
		去	降	auŋ	開合	キヤン-降 7(3)	1	3									
		入	覺	auk	開合	キヤ-角① 4(3)覚① 5(4)キヨ-角 4(1)	2	8	コ-穀(2)	1	2						
止撰	三等	平	支	ië	開合	キイ-奇②(2)					ギイ-奇①(2)キイ-騎①(1)	2	3	ニイ-宜 8(4)イゝ-宜 8(4)	1	8	
		平	支	yë	合	クイ-規(1)	1	1	クイ-虧(6)	1	6			グイ-危(1)	1	1	
		平	脂	ii	開	キイ-飢(1)	1	1			ズウ-鱸(1)	1	1				
		平	脂	yi	合	クイ-龜①(4)	1	4			グイ-葵(5)	1	5				
		平	之	io`i	開	キイ-箕(1)	1	1	キイ-欺(4)	1	4	ギイ-其① 23(20)其①(1)旗 6(5)期 4(2)麒(1)碁 4(3)キイ-旗 6(1)期 4(2)其 23(3)碁 4(1)	6	39	ニイ-疑(10)	1	10
		平	微	io`i	開	キイ-機(3)幾①(13)饑(2)	3	18									
		平	微	yo`i	合	クイ-飯(1)	1	1									
		上	紙	ië	開合				キイ-企① 3(1)ギイ-企 3(2)	1	3	ギイ-技(1)	1	1	ニイ-蟻(1)	1	1
		上	紙	yë	合						グイ-跪①(1)	1	1				
		上	旨	ii	開	キイ-几(1)	1	1									
		上	止	io`i	開	キイ-紀(3)己 2(1)キゝ-己 2(1)	2	5	キイ-起 32(30)紀(1)キ-起 32(2)	2	33						
		上	尾	io`i	開	キイ-幾②(13)			キイ-豈(10)	1	10						
		上	尾	yo`i	合	クイ-鬼(2)	1	2									
		去	寘	ië	開合	キイ-寄(4)	1	4	キイ-企② 3(1)ギイ-企 3(2)					ニイ-義(6)議 4(2)イゝ-議 4(2)	2	10	
去	至	ii	開	キイ-覲(2)	1	2	キイ-器(7)棄(1)	2	8								
去	至	yi	合	グイ-愧(7)	1	7			クイ-櫃(1)	1	1						
去	志	io`i	開	キイ-記(10)	1	10			ギイ-忌(5)	1	5						
去	未	io`i	開	キイ-既(4)	1	4	キイ-氣①(19)	1	19								
去	未	yo`i	合	クイ-貴(25)	1	25											
遇撰	一等	平	模	o	開合	クウ-姑(5)孤(4)菰(3)箍(2)蛄(2)辜(1)鵠(1)	7	18	クウ-枯(1)	1	1			ウゝ-吾①(3)梧(1)蜈(1)鰭(1)鯧(1)	5	7	
		上	姥	o	開合	クウ-古(8)皀(9)估(6)詈(1)蠱(1)買①(1)	6	26	クウ-苦①(16)	1	16			ウゝ-五(11)	1	11	
		去	暮	o	開合	クウ-固(2)故(15)雇①(1)顧(7)	4	25	クウ-苦②(16)					ウゝ-梧(2)忤(1)晤(1)誤(5)蜈(1)	5	10	
	三等	平	魚	io	開	キユイ-據(3)居 7(6)	2	10			キイ-渠(1)	1	1	イユイ-魚(60)	1	60	
		平	虞	yu	開合	キユイ-拘(3)俱(2)ケ○ウ-拘(1)	3	6	キユイ-區①(2)驅①(1)	2	3	ギユイ-衢(1)キユイ-鵠(1)	2	2	イユイ-愚(8)	1	8
		上	語	io	開	キユイ-擧(挙)(4)	1	4			ギユイ-苜(1)キユイ-詎①(1)	2	2	イユイ-語①(8)	1	8	
		上	麌	yu	開合	キユイ-矩(1)苟①(1)椬(1)	3	3									
		去	御	io	開	キユイ-苟②(1)			キユイ-驅②(1)			ギユイ-具(1)懼(2)	2	3	イユイ-遇(1)	1	1
去	遇	yu	開合	キユイ-鋸(1)	1	1	キユイ-去 59(58)ツエ○ウ-去 59(1)	1	59			イユイ-語②(9)					
蟹撰	一等	平	咍	ai	開	カイ-該(1)	1	1	カイ-開(28)	1	28			ガイ-呆 6(5)カイ-呆 6(1)	1	6	
		平	灰	ai	合									ライ-槐①(6)	1	6	
		上	海	ai	開	カイ-改(4)	1	4	クイ-鑑①(2)	1	2						
		去	泰	ai	開	カイ-蓋①(2)	1	2	カ-碭③(4)					ガイ-艾(1)	1	1	
		去	泰	ai	合	クハイ-檜①(1)ヲ-鱠(1)	2	2					ワイ-外(13)	1	13		
		去	隊	ai	合				クイ-塊(2)	1	2						
	去	代	ai	開	カイ-概(1)	1	1	カイ-概(1)クイ-鑑②(2)	1	1			ガイ-礙(4)	1	4		
	二等	平	皆	ei	開	キヤイ-皆(6)薺(1)	2	7									
		平	皆	uei	合	クハイ-乖(1)	1	1									
		平	佳	ai	開	キヤア-佳(2)キヤイ-街(8)	2	10					イヤア-涯(1)捩 2(1)ヤイ-捩 2(1)	2	3		
上		蟹	ai	開	キヤイ-解(4)	1	4										
去	卦	ai	開														
去	卦	uai	合	クハア-掛(6)	1	6											

臻	三等	去	怪	ui	開	キヤイ-介(2)戒(1)界(1)芥(2)	4	6												
		去	怪	uei	合	クハイ-怪(3)	1	3												
		去	夬	uai	合					クハイ-快(14)	1	14								
		去	祭	iεi	開					キイ-懇(1)	1	1				ニイ-藝(5)	1	5		
	四等	去	廢	iεi	開															
		平	齊	ei	開	キイ-雞(14)	1	14	キイ-契①(1)鎔(1)	2	2									
	一等	去	霽	ei	開	キイ-計(18)繼(1)係(3)ソウ-薊(1)	4	23												
		平	痕	ən	開	ケン-根 4(3)ケン-根 4(1)	1	4												
		平	魂	uən	開	クン-昆(1)	1	1												
		上	混	uən	合					クン-捆①(5)	1	5								
		去	恩	uən	合					クン-捆②(5)困(3)	1	3								
		入	沒	uən	合	クワ-骨(8)	1	8												
		三等	平	真 臻	iĕn	開	キン-巾(5)	1	5							イン-銀 9(8)キン-銀 9(1)	1	9		
			平	諄	ɥĕn	合	キユン-鈞(1)均(2)	2	3											
平			欣	iəˊn	開	キン-斤①(10)筋(2)斬①(1)	3	13					ギン-勤 3(2)芹(1)キン-勤 3(1)勲(1)	3	5					
平			文	ɥəˊn	合	キユン-君(6)軍 7(5)クン-軍 7(2)	2	13					ギユン-裙(1)	1	1					
上			軫	iĕn	開	キン-緊(17)	1	17												
上			隱	iəˊn	開	キン-謹(1)謹(7)董①(1)	3	9					ギン-近 16(14)キン-近 16(1)ピン-近 16(1)	1	16					
去			焮	iəˊn	開	キン-斤②(10)														
入			質 櫛	iĕt	開	キ-吉(1)	1	1	キ-結(1)詰(1)	2	2									
入	術		ɥĕt	合	キエ-橘(1)	1	1													
入	物		ɥəˊt	合				キエ-屈(1)	1	1										
二等	一等	平	寒	an	開	カン-乾①(3)干(10[干(1)])竿(1)肝(8)ハアン-汗③ 3(2)ハン-汗 3(1)	4	22	カン-看①(35)	1	35									
		平	桓	uan	合	クハン-冠①(3)官(18)	1	21	クハン-寬(10)	1	10									
		上	緩	uan	合	クハン-管(17)	1	17	クハン-歛(6)	1	6									
		去	翰	an	開	カン-幹(4)	1	4	カン-看②(35)											
		去	換	uan	合	クハン-冠②(3)灌(1)罐(2)鶻(1)	3	4												
		入	葛	at	開	カ-割(3)葛(1)	2	4	カ-渴①(3)磔①(4)	2	7									
	二等	入	末	uat	合	クハ-聒(1)鶻① 2(1)ゼ-鶻 2(1)	2	3												
		平	刪	an	開	ケン-奸(2)	1	2							エン-顔(1)	1	1			
		平	刪	uan	合	クハン-関(4)關(2)	2	6							ワン-頑(9)	1	9			
		平	山	en	開	ケン-艱(2)間①(12)	2	14	ケン-堅(1)	1	1									
		上	産	en	開	ケン-揀①(1)	1	1							エン-眼(13)	1	13			
		去	諫	an	開	ケン-諫(1)間②(12)	1	1							エン-鴈(3)	1	3			
		去	諫	uan	合	クハン-慣(2)	1	2												
		去	禰	en	開	ケン-間③(12)														
三等	入	鎋	uət	合	クハ-鶻② 2(1)ゼ-鶻 2(1)															
	入	黠	at	開	カ-戛(1)	1	1													
	三等	平	仙	ɥen	合							ギエン-拳 6(4)權(2)キエン-拳 6(2)	2	8						
		平	元	iAn	開							カン-趕(趕)(15)	1	15	エン-言(14)	1	14			
		平	元	ɥAn	合										エユン-原(5)鰥(1)	2	6			
		上	獮	iEn	開					ケン-遣①(3)	1	3	ゲン-件(6)	1	6					
		上	獮	ɥEn	合	キエン-卷①(2)	1	2				キエン-圈①(3)	1	3						
		上	阮	iAn	開	ケン-蹇(1)	1	1												
		上	阮	ɥAn	合								キエン-圈②(3)							
		去	線	iEn	開					ケン-遣②(3)										
		去	線	ɥen	合	キエン-卷②(2)眷 2(1)絹 5(4)キユン-眷 2(1)絹 5(1)	2	7				ギエン-倦(2)	1	2						
		去	願	iAn	開	ケン-建(2)	1	1	キエン-勸(勸)(4)	1	4	ゲン-健(2)	1	2						
	去	願	ɥAn	合											エユン-願(4)愿(2)	2	6			
	四等	入	薛	iEt	開	キ-子(2)カ-揭①(2)	2	4	カ-掲③(2)											
入		薛	ɥEt	合				キエ-缺②(1)												
入		月	iAt	開	カ-揭②(2)															
入		月	ɥAt	合	キエ-蔽(1)𦓐(1)𦓐①(1)𦓐①(1)	4	4							エ-月(9)	1	9				
四等		平	先	en	開	ケン-堅(3)	1	3	ケン-牽①(4)	1	4				ネン-研①(1)	1	1			
		平	先	uen	合	キエン-鵠(2)	1	2												
		上	銑	uen	合				キエン-犬(3)	1	3									
		去	霰	en	開	ケン-見①(46)	1	46	ケン-牽②(4)						ネン-研②(1)硯(4)	1	4			
		入	屑	et	開	キ-桔(1)結(4)潔(1)	3	6							キ-齧(1)	1	1			
		入	屑	uet	合	キエ-決① 9(7)訣(1)キエ-決 9(2)	2	10	キエ-缺①(1)											
		一等	平	豪	au	開	カ〇ウ-膏①(2)高(13)羔(1)膏(2)	4	18							カ〇ウ-熬 4(2)ガ〇ウ-熬 4(2)	1	4		
			上	皓	au	開				カ〇ウ-考(2)	1	2								
去			號	au	開	カ〇ウ-膏②(2)告①(11)	1	11	カ〇ウ-靠(5)	1	5				ガ〇ウ-傲(3)	1	3			
二等			平	肴	au	開	キヤ〇ウ-嬌(1)教①(21)交(11)佼①(2)蛟(1)膠(1)鉸①(1)鮫(1)	8	39	キヤ〇ウ-敵①(3)	1	3								
	上		巧	au	開	キヤ〇ウ-狡(2)攪(2)較(3)佼②(2)較②(1)	3	7	キヤ〇ウ-巧①(4)	1	4									

	三等	去	效	au	開	キヤ○ウ-教②(21)覺(覺)②5(1)較①(3)絞③(1)キヤ-覺(覺)5(4)	1	4	キヤ○ウ-敵②(3)巧②(4)										
		平	宵	iεu	開	キヤ○ウ-嬌④(4)矯①(1)喬①(1)	3	6				ギヤ○ウ-蕭2(1)橋3(2)キヤ○ウ-橋3(1)蕭2(1)	2	5					
		上	小	iεu	開	キヤ○ウ-嬌②(1)													
	四等	平	蕭	eu	開	キヤ○ウ-澆(2)驍(1)ヒヤ○ウ-鼻(3)	3	6								ヤ○ウ-堯(1)	1	1	
		上	篠	eu	開	キヤ○ウ-僥(1)	1	1											
		去	嘯	eu	開	キヤ○ウ-叫(叫)(9)	1	9											
果摂	一等	平	歌	a	開	コウ-歌(2)哥(3)	2	5							ゴウ-蛾①(1)鵝(3)	2	4		
		平	戈	ua	合	コウ-過①(36)鍋(2)	2	38	コウ-科①(1)蝌(1)	2	2								
		上	哿	a	開				コウ-可(69)	1	69					コウ-我118(16) ゴウ-我118(102)	1	118	
		上	果	ua	合	コウ-果(6)	1	6											
		去	箇	a	開	コウ-個(43)	1	43											
	去	過	ua	合	コウ-過②(36)			コウ-科②(1)							ゴウ-臥(1)	1	1		
三等	平	戈	ya	開							ゲウ-茄①(1)	1	1						
仮摂	二等	平	麻	a	開	キヤア-加(4)家80(79)キヤエ-家80(1)	2	84							イヤア-牙3(1)ヤア-牙3(2)芽(2)	2	5		
		平	麻	ua	合	クハア-瓜12(11)クハア-瓜12(1)	1	12	クハア-誇(2)	1	2								
		上	馬	a	開	キヤア-假①(12)	1	12							イヤア-雅3(1)キヤア-雅3(1)ヤア-雅3(1)	1	3		
		上	馬	ua	合	クハア-寡(9)	1	9							ワア-瓦①(2)	1	2		
		去	禡	a	開	キヤア-嫁(2)架(8)價①(11)假②(12)駕(1)	4	22											
		去	禡	ua	合										ワア-瓦②(2)				
宕摂	一等	平	唐	aŋ	開	カン-剛(2)鋼①(1)	2	3	カン-康(1)	1	1								
		平	唐	uaŋ	合	クハン-光①(9)	1	9											
		上	蕩	aŋ	開				カン-慷(1)	1	1								
		上	蕩	uaŋ	合	クハン-廣(2)	1	2											
		去	宕	aŋ	開	カン-鋼②(1)													
		去	宕	uaŋ	合	クハン-光②(9)													
		入	鐸	ak	開	コ-各(18)閣(2)	2	20								ネ-鰐(1)	1	1	
		平	陽	iaŋ	開	キヤン-疆(1)薑(1)	2	2	キヤン-蜚(1)	1	1	ギヤン-強13(6)キヤン-強13(6)	1	13					
	三等	平	陽	yaŋ	合			クハン-筐(1)	1	1									
		上	養	iaŋ	開	キヤン-穰(1)	1	1								ニヤン-仰①(2)	1	2	
		去	漾	iaŋ	開										ニヤン-仰②(2)				
		入	藥	iak	開	キヤ-脚(9)	1	9	キヤ-却(5)	1	5								
		平	庚	aŋ	開	ケ ^ん -庚4(2)更①18(4)ケン-庚4(2)更18(14)梗(1)	3	23	ケ ^ん -坑(1)	1	1								
梗摂	二等	平	耕	eŋ	開	ケン-耕(1)	1	1											
		上	梗	aŋ	開	ケン-梗(1)	1	1											
		上	耿	eŋ	開	ケン-耿(2)	1	2											
		去	映	aŋ	開	ケ ^ん -更②18(4)ケン-更18(14)													
		去	諍	eŋ	開										ゲエン-硬3(1)ゲン-硬3(1)へエン-硬3(1)	1	3		
		入	陌	ak	開	ケ ^ん -格①(1)	1	1	ケ-客20(9)ケ ^ん -客20(11)	1	20								
	三等	入	麥	ek	開	ケ-隔(3)	1	3											
		平	清	iaŋ	開			キン-輕①(10)	1	10									
		平	清	yaŋ	合			キン-傾(1)	1	1									
		平	庚	iaŋ	開	キン-京(2)驚(5)荆(5)	3	12								ニン-迎①(5)	1	5	
		上	梗	iaŋ	開	キン-景(5)	1	5											
		去	勁	iaŋ	開			キン-輕②(10)											
		去	映	iaŋ	開	キン-敬(11)竟(15)鏡(2)	3	28	キン-慶(2)	1	2					ニン-迎②(5)			
四等	入	陌	iak	開							キ-屐2(1)ギ-屐2(1)	1	2	ネ-逆(2)	1	2			
	平	青	eŋ	開	キン-經①(8)	1	8												
	去	徑	eŋ	開	キン-徑(2)經②(8)	1	2												
	入	錫	ek	開	キ-激①(2)ホ ^イ -賜(1)	2	3	キ-喫(29)	1	29									
流摂	一等	平	侯	au	開	ケ○ウ-勾①(5)拘①(1)鉤(鉤)(6)	3	12	ケ○ウ-勾②(5)エヘ○ウ-摺①(2)	1	2								
		上	厚	ou	開	ケ○ウ-苟(4)枸②(1)狗7(6)キユイ-狗7(1)	2	11	ケ○ウ-口(25)叩(1)	2	26					ゲ○ウ-偶①(3)	1	3	
		去	候	ou	開			ケ○ウ-寇(2)	1	2					ゲ○ウ-偶②(3)				
	三等	平	尤	iəu	開	キウ-鳩(2)	1	2	キウ-蚯(1)	1	1	ギウ-仇(2)求(2)逌(4)鯨(1)チウ-讐3(1)ヂウ-讐3(2)	5	12	ニウ-牛(11)	1	11		
		上	有	iəu	開	キウ-久10(9)九(3)董(1)クウ-久10(1)	3	14				ギウ-臼(1)舅(2)	2	3					
		去	宥	iəu	開	キウ-救11(10)クウ-救11(1)	1	11				ギウ-舊(8)	1	8					
深摂	三等	平	侵	iēm	開	キン-禁①(6)襟(1)金(26)今49(48)キ-今49(1)	4	82	キン-飲(5)	1	5	ギン-琴(3)キン-禽(1)	2	4	ニン-吟①(4)	1	4		
		上	寢	iēm	開	キン-錦(6)	1	6											
		去	沁	iēm	開	キン-禁②(6)								ニン-吟②(4)					

威 撰	一 等	入	緝	i ĕ p	開	キ-急 (4)	1	4			ギ-及 (4)	1	4				
		平	覃	ʌ m	開					カン-堪 (2)	1	2					
		平	談	a m	開	カン-柑 (3)ガ ^ン -甘 (1)	2	4									
		上	感	ʌ m	開	カン-感 (6)	1	6		カン-砍 (2)	1	2					
		上	敢	a m	開	カン-敢 (20)橄 (1)	2	21									
	入	合	ʌ p	開	カ-合 ① 6(2)鴿 (1)ホ-合 6(1)蛤 (2)	3	6										
	入	盍	a p	開					カ-磕 ② (4)								
	平	咸	e m	開					ケン-歎 ① (1)	1	1						
	二 等	平	銜	a m	開	ケン-鑑 (1)	1	1							ガ ^ン -巖 2(1)カ ^ン -巖 2(1)	1	2
		上	賺	e m	開					ケン-歎 ② (1)							
		去	陷	e m	開					ケン-歎 ③ (1)							
		入	洽	e p	開	キヤ-夾 (2)	1	2		キヤ-恰 (1)	1	1					
		入	狎	a p	開	キヤ-甲 (7)	1	7									
	三 等	平	嚴	i a m	開										ネ ^ン -嚴 (3)	1	3
		上	琰	i e m	開								ケン-莢 (1)	1	1		
		去	豔	i e m	開										ネ ^ン -駝 (1)	1	1
		去	梵	i ʌ m	合	ケン-劔 (劍)(2)	1	2		ケン-欠 (5)	1	5					
		入	葉	i e p	開												
		入	業	i a p	開	キ-劫 (1)	1	1							ネ-業 (2)	1	2
		入	乏	i ʌ p	合												
四 等	平	添	e n	開	ケン-兼 ① (4)	1	4		ケン-謙 (1)	1	1						
	上	忝	e n	開					ケン-歎 ④ (1)								
	去	栝	e n	開	ケン-兼 ② (4)												
	入	帖 枯	e p	開	キヤ-莢 (2)頰 (1)	2	3										
會 撰	一 等	上 等	a ŋ	開					ヴ ^ン -肯 24(1)ケン-肯 24(12)ケ ^ン -肯 24(11)	1	24						
	一 等	入 德	a k	開	クフ-國 (1)	1	1		ケ ^ン -克 (1)ケ-刻 (1)	2	2						
	三 等	入 職	i a`k	開	キ-棘 (1)	1	1					ギ-極 12(7)キ-極 12(5)	1	12			
計						251	1,272		78	565		52	192		67	437	

注：・「クイ-^規規(1)」は「規」の異体字で、本研究では「規」とする。

・「コ-鵠(1)」は匣母の「胡沃切 鳥名」であるが、『集韻』に「姑沃切 鳥名」との見母の読みもある。音注が見母と一致する。

・「キヤ〇ウ-僂(1)」は、原例が「^{今我僂幸爲識荆 今我幸ニチカツキトナリ}」であり、『広韻』に疑母の「五聊切 國名」となり、また、『集韻』に「堅堯切 僞也或从心从斂(平声)」と「吉了切 僂倖求利不止兒(上声)」との見母の読みもある。疑母の読みと意味は音注と一致できず、意味上では「吉了切」と対応する。

・「キユイ-居 7(6)」は1字未注。

・「キヽ己 2(1)」は「キイ」の誤記である。

・「ケ〇ウ-拘(1)」は、原例が「拘搭上手」で、『広韻』に未収。『康熙字典』に「[正字通]俗拘字。「拘」は「舉朱切」との遇撰の読みで、音注と対応できず、「ケ〇ウ」が「ケ〇ウ-勾鈎」などの声符による類推だろう。

・「カン-忤(1)」の漢字は、大島(2017)によると、「干」の誤字である。

・「キエ-獾(1)」は『広韻』『集韻』に未収、『康熙字典』に「[字彙]居月切」とある。

・「キイ-起 32(30)キ-起 32(2)」、「キ」は「イ」が脱落したもの。

・「去-キユイ 59(58)ツエ〇ウ 59(1)」は、遇撰の「羌舉切 除也(上声)」、「丘據切 離也(去声)」である。^{担去イ}「担去 持テユケ」^{イイキユイ}「カイエユケ」のように、意味上では去声の「丘據切」と一致している。「キユイ」音注が、「ユ」と「イ」の合音で、原音の[-y]に対応している。「ツエ〇ウ」音注は1例のみ、「必須快去着 ^{ツエウ} 必ス早く行ケ」となり、意味と音注から、「ツエ〇ウ-走」と同じであるため、「ツエ〇ウ」は「走」の発音を注するものと思われる。

・「肯」は「苦等切」の清音の読みしかないため、濁音音注となることは説明できない。特に「肯」の「ヴン」音注は声母と全く一致できず、明らかに誤記である。

・「ヲイ-掩(6)」は疑母蟹撰の「五灰切 小船上櫓竿」と見母止撰の「過委切 短矛」との二種類の読みがある。同書の例は全て「船具」に所属で、例えば、「^{ヲイハ`ン} 梘板 大スリイタ」「^{ヲイツエン} 梘尖 上ハサミ」とのように、音注は疑母の「五灰切 小船上櫓竿」と一致している。

・「ウヽ齧(1)」は『広韻』に疑母遇撰の三つの読みがあり、合ロー等平声の「五乎切 齧齧」と開口三等の平声の「語居切 齒不相値」と上声の「魚巨切 齧齧不相當也」となる。原例が「^{タンツヲヲイツウツヲ、ウヽ} 嘆作爲之齧齧 作事ノ齧齧スルコトヲ嘆シ」であり、意味上では「五乎切」「魚巨切」と対応する。一方、遇撰三等の字は「イユイ」音注が多用で、この「ウヽ」は一等の読みと一致すると考えられる。

・「ネン-駝(1)」は、『漢語大字典』に同“駝”とあり、「魚窠切」である。

・「キヤ〇ウ-澆(2)」は、『広韻』に見母の「古堯切 沃也薄也」と疑母の「五弔切 韓泥子名」である。原例は「^{ウイヴエンスエキヤ〇ウ} 未曾洗澆 マダギヤウズイハセヌ」「^{キヤ〇ウスイフ`キイ} 澆水不企 水ヲカケルニ及ハス」で、見母の読みと一致している。

・「捭」は『広韻』に未収。『集韻』に疑母蟹撰二等平声の「宜佳切」とある。

・「艾-ガイ」は『広韻』に「五蓋切 草名(一等)」と「魚肺切 治也(三等)」とあり、原例が「花艸」の「艾艸」で、一等の読みと対応する。

・「硬-ゲエン 3(1)ゲン 3(1)」は、梗撰の「五諍切 堅牢也」であり、3例の原例は、下記の通りで、表記例の意味に違いが見られない。

「ゲエン」:^{グエンキイライ}「三字話」硬起來 コハクナリタ 「ゲン」:^{スエンゲンテ}「三字話」生硬的 イカフコハヒ 「ヘエン」:^{ヘエンゲン}「二字話」硬磳 コハヒ

蘇州音では[ŋ-]、南京音ではゼロ声母と発音する。「ゲエン」と「ゲン」について、梗撰の見組の字は「エ段+ン」で終わる音注となるのは一般的で、両音注に区別がなく、同じものと考えられ、蘇州音と対応する。「ヘエン」は読みと一致できず、誤記と考えられる。

・「雅-ヤアヽ3(1)キヤア 3(1)イヤア 3(1)」は、「五下切 正也嫺雅也」であり、原例が以下のようになっている。

「ヤアヽ」音注:^{ウエンヤアヽ}「二字話」文雅 キヤシヤナ 「キヤア」音注:^{フワンキヤア}「二字話」風雅 キヤシヤナ 「イヤア」音注:^{エエンシヤアキヤ〇ウ}「長短話」願承雅教

蘇州・杭州音と南京音とも、ゼロ声母で発音する。「キヤア」は読みの子音と一致できず、そして、「二字話」の2例の意味は全く同じで、誤記の可能性が大きい。なお、「ヤアヽ」と「イヤア」は同じものと考えられる。

1.10 喉音影組

喉音影組の字について、表 4-10 にまとめている。

(1) 影母[ʔ-]

影母[ʔ-]の所属字は計 108 字種、延べ 637 字であり、アヤワ行の仮名で注されている。また、アヤワ行以外、「椅-ギイ 4(1)」「ハ〇ウ-麤(1)襖(1)拗(2)」の例外も存在している。

「椅-イ、4(3)ギイ 4(1)」は、『広韻』に止撰の「於綺切 椅梃」(上声)、「於離切 木名梓實桐皮」(平声)とあり、原例が下記の通りである。

「イ」:「器用」①^{イハツウ}椅子 イス ②^{キヤ〇ウイ}交椅 イス ③^{スヤ〇ウイ}小椅 シヤウギノルイ
「ギイ」:「器用」④^{ギイナン}椅楠 キヤラ

「ギイ」は読みの子音と一致しない。「椅楠」も香料の名称だが、「キヤラ」とは種類が違い、「キヤラ」にあたるのが「奇楠」で、「奇」(群母)なら「ギイ」と問題なく対応する。よって、「ギイ」は「奇」の読みを写したものと考えられる。

「ハ〇ウ-麤(1)」は效撰「於刀切 銅盆説文云温器也」で、『集韻』に同じ反切に「盡死殺人曰麤糟」であり、意味上では「四字話」の原例「捨死麤戰死ヲステハケミ戦フ」と一致している。しかし、「ハ〇ウ」は声母面では一致できず、そして、蘇州音でも南京音でもゼロ声母なっているので、適切な解釈を与えられない。

「ハ〇ウ-襖(1)」は原例が「小曲」の「^{ヒイハ〇ウルウ}被襖兒」で、反切はゼロ声母の「烏皓切」であり、音注が声母と対応しない。また、南京音でも蘇州音でもゼロ声母であるので、両方言からも説明できない。

「拗-ハ〇ウ(2)」は中間点の部分で検討したように、反切が「於絞切」で、原例が「二字話」の「^{ハ〇ウレ}拗捩」「^{チハ〇ウ}執拗」である。南京音は[0au]、『同文備攷』は[0iao]である。「ハ〇ウ」は南京音とは韻母面で一致するが、蘇州・杭州音とは声母・韻母の両面のいずれにも合わず、説明できない。

このように、上記の 4 例以外、影母の字に対して、アヤワ行の音注である。「アヤワ」に反映される発音はゼロ声母であり、南京音、蘇州音、杭州音のいずれもゼロ声母となり、音注と対応している。つまり、影母の音注は南京音と呉方言との双方から説明できる。

(2) 曉母 [h-]

曉母 [h-] の所属字は計 73 字種、延べ 498 字である。ハ行音注が一般的である。また、ハ行以外、濁音のバ行音注、右肩点付きの「へ°」、カ行、ワ音注などの例外も存在している。

なお、カ行の「喝-カ(1)」とバ行の「毀-ボイ(1)」を除き、ハ行は延べ 496 字である。これは林(2012:172)によるハ行 492 字との集計結果と一致しない。

「カ-喝(1)」は、『広韻』に曉母山攝の入声読み「許葛切 訶也」と影母蟹攝の去声読み「於牻切 嘶聲」とあり、「訶」は「しかる」という意味である。原例は「三字話」の「大喝采 ^{デアハカサ^イ} 大ニホメル」で、「喝」が『漢語大字典』による「大声喊叫」という意味、つまり「叫ぶ」の動詞として使われ、発音は曉母の入声読みと対応するが、意味が去声の意味と一致している。上述したように、同書の曉母の字に対して、「ハ行」が一般的であるため、「喝」の音注は「ハ」が期待されているが、「カ」で記されて対応しない。蘇州・杭州音は[h-]、南京音は[x-]となり、音注とも一致しない。従って、「カ」は明らかに誤記であり、同書では「カ-渴(3)」とあり、字形が近いため、それによる誤記の可能性はある。

「ボイ-毀(1)」は原例が「常言」の「愚人終受毀唾 ^{イユイジンチヨンジウボイドウ} 愚ル人ハ終ニ毀ヲ受ク」である。『広韻』に「許委切 壞也破也缺也虧也」「況偽切 男八歳女七歳而毀齒」とあり、意味の上では「許委切」と対応するが、濁音音注の「ボイ」は読みと対応しない。また、南京音は[x-]、蘇州・杭州音は[h-]との清音であるため、「ボイ」は両方言からも説明できない。

このように、「カ-喝」「ボイ-毀」2 例を除き、曉母の音注は「ハ行」となっている。

当時長崎のハ行の子音は両唇摩擦の[Φ-]で、中国語の[h-]([x-])に対応する喉音(軟口蓋摩擦音)が存在しなかった。日本語の[Φ-]が後に[h-]に変化したことから分かるように、日本語においては[h-]に最も近い音は[Φ-]であった。それゆえ、中国語の[h-]を示すにもハ行が用いられたと考えられる。

(3) 匣母 [h-]

匣母 [h-] の所属字は計 127 字種、延べ 646 字である¹³⁷。匣母 [h-] は全濁声母の一つだが、『唐話纂要』では、匣母に対する音注は主にハ行とアヤワ行である。この二種類以外、カ行、ガ行の数例もある。

匣母の字の音注状況について、具体的に、表 4-10-1 にまとめている。

表 4-10-1 匣母の字の音注状況

項目	表記例
アヤワ行	通撰一等開入声:フ-斛(1)榭(1) 遇撰一等開合:ウゝ-乎(3)湖(3)狐(2)糊(3)胡(13)瑚(1)葫(1)蠅(1)壺(2)戸(4)互(1)護(4)ヲ-獮(1) 江撰二等開合非入声:ヤン-降 7(4) 蟹撰一二等合:ワイ-回(廻)24(22)蝸(1)槐(1)會(18)オイ-回 24(2) ワイ-懷(3) 四等開:イゝ-奚(1) 四等合:ワイ-慧(1)惠(2) 臻撰一等合:ウワン-渾(4)混(2) 山撰一等合:ワン-完(9)丸(2)緩 2(1)換(1) ワアン-緩 2(1) ウヲ-活(15) 一等開入声:エ-褐(1) 二等開:エン-鵬(1) 二等合:ワン-皖(1)患(4)穗(1)莢(1) ワ-滑(3)猾(1) 四等合入声:エ-穴(2) 宕撰一等合:ワン-黄(12)皇(1)風(1)惶(4)蝗(1) 梗撰二等開合入声:ウヲ-核(1) ウヲ-獲(2) 四等合:ヨン-螢(1) 咸撰二等開:エン-啣(1) エン-陷(2) ヤ-狹(1)篋(3) 曾撰一等開入声:ウヲ-或(11)惑(1)
	山撰二等合:ワン-還 19(18)ハン-還 19(1)(小曲) 梗撰二等開:イン-杏 3(2)ヒン-杏 3(1)(小曲) 咸撰一等開:アン-含 5(4)ハン-含 5(1)(小曲)
アヤワ行 ハ行	蟹撰二等合:ハアゝ-画(畫)11(4)ワアゝ-画(畫)11(7) ハアゝ-話 25(20)ワアゝ-話 25(5) 效撰一等開:ハ〇ウ-豪 5(3)ア〇ウ-豪 5(2) 果撰一等合:ホウ-禍 7(2)ヲウ-禍 7(5)
ハ行	通撰一等開非入声:ホン-洪(2)鴻(2)烘(1)紅(12) 江撰二等開合入声:ヒョ-學(学)(1) 蟹撰一等開:ハイ-孩(1)害 8(6)ハアイ-害 8(2) 二等開:ヒヤイ-鞋(4)蟹(2)駭(1) 四等開:ヒイ-繫(2) 四等合:ホイ-蕙(1) 臻撰一等開:ヘエン-恨(1)恨(6) 山撰一等開:ハアン-汗 3(2)寒 6(5)翰(1)旱(2)捍(1) ハン-汗 3(1)(小曲)寒 6(1)(小曲) ハア-曷(1) 二等開:ヒエン-閑(13)限(1)莧(2) 四等開合非入声ヒエン-絃(4)賢(9)玄(4)懸(1)法(1)現(1) 效撰一等開:ハ〇ウ-號(9)毫(1) 果撰一等開合:ホウ-何(41)河(2)荷(1)和(14)夥(伙)(3) 仮撰二等開合:ヒヤア-遐(1)蝦(2)蝦(6)下 79(78)夏(2)暇(2) ハアゝ-擗(1)樺(1)華(7)ヒアゝ-下 79(1) 宕撰一等開:ハアン-行 34(4)ヒン-行 34(30) コ-貉(1) ホ-鶴(1) 梗撰二等開合:ホン-横(1) ヘエン-莖(1) ヒン-幸 6(5) 流撰一等開:ヘ〇ウ-猴(2)厚(6)後(32)候(7) 咸撰一等開:ハアン-函(2)カン-撼(1)ホ-盒(3)合 6(3) 四等開入声:ヒエ-協(1)
カ行	カン-缸(1)撼(1) キヤ-挟(1) キヤイ-械(2)薤(1) クン-棍(1) コ-貉(1)
その他	流撰一等開:ガ〇ウ-鶯(1)

注:・「エ-褐(1)」は「胡葛切 衣褐説分云編臬鞞也 一曰短衣」で、原例が「疋頭」の「褐子 トロメン」で、蘇州音が[aʔ]、南京音が[xəʔ]である。『同文備攷』では「曷」が[kiet]である。「エ」はいずれの場合にも対応できず、誤記の可能性が高い。

・「ハア-曷(1)」も入声字の部分で検討したように誤記の可能性が高い。

・蘇州音では「ウゝ-乎」「ワアン-緩」「エ-褐」はゼロ声母となり、「ウヲ-核」「エン-銜」は[ŋ-]と発音する。それ以外の場合には全て[h-]読みのままである。

¹³⁷ 中に、ア・ヤ・ワ音注の例は、計 55 字種、189 例で、ハ行音注の例は計 61 字種、368 例で、カ行が 7 字種、8 字である。なお、これは林(2012:172)の表二によるア・ヤ・ワ行(ア行 87 字、ヤ行 9 字、ワ行 141 字)計 237 字、カ行 9 字、ハ行 403 字との集計結果と一致しない。

- ・蘇州音では「ヒヤイ-蟹」「ヘエン-很」は[h-]と発音し、音注と対応する。「ヒヤア-暇」はゼロ声母で、「ホ-鶴」は[h-]読みで、いずれの場合も音注と一致しない。
- ・杭州音では「ウゝ-乎」「ヘエン-很」は[h-]、「ヒヤイ-蟹」「寛-ヒエン」は[e-]、「烘-ホン」は[k-]と発音する。それ以外の場合は[h-]読みとなるのが一般的で、わずかの一部が[h-]である。
- ・「蟹-ヒヤイ」は『同文備攷』に[hiai][hi ai]となり、音注と一致する。なお、杭州音が[hai][ɛie]である。
- ・「很-ヘエン」は『同文備攷』では[hən]となり、杭州も[h-]で、音注と一致している。

両音注の例は計 7 字種、その中、「還-ワン 19(18)ハン 19(1)(小曲)」「杏-イン 3(2)ヒン 3(1)(小曲)」「含-アン 5(4)ハン 5(1)(小曲)」のように、二種類の有する場合、「小曲」でハ行の音注となるのは 3 例で、非「小曲」部分、つまりアヤワ行の音注となるのは 24 例である。残りの 4 字は計 48 例、ハ行の音注は 29 例、アヤワ行の音注は 19 例である。

表 4-10-1 から分かるように、アヤワ行とハ行の二種類の音注をもつのは「画話豪禍」4 字である。4 字とも南京音が[x-]、蘇州・杭州音が[h-]と発音する。アヤワ行が呉方言、ハ行が南京音から説明できる。なぜ一つの字に対して、二種類の音注を有するのか問題となる。

この 4 字以外、カ行となる例は「缸棍挟械撼貉」6 字で、ガ行音注の例は「鰲」1 例のみである。なお、「ガ〇ウ-鰲(1)」は、第三章の中間点の部分で検討したように、疑母の「鰲」による誤記の可能性があると推測できる。

「カン-缸(1)」は、江撰の「下江切 豊缸」で、原例が「器用」の「酒缸 酒カメ」である。『集韻』の古双切の読みを継承し、南京音は[kā]、蘇州音は[kā]、杭州音は[kʌŋ]と発音し、「カン」は両方言から説明できる。

「クン-棍(1)」は、臻撰の「胡本切 木名」で、原例が「器用」の「棍子 ボウ」である。蘇州、杭州、南京音では同じ[k-]と発音するので、「クン」はいずれからも説明できる。

「キヤ-挟(1)」は、「胡頰切 懷也持也藏也」で、原例が「四字話」の「周遭 挟筥 グルリニカキヲイフ」である。また、『集韻』に見母入声の「吉協切 持也」(四等)と「訖洽切 説文持也」(二等)もあり、音注と対応する。一方、蘇州・杭州音では[h-]と発音するため、「キヤ」は呉方言から説明できない。また、声符「キヤ-夾」(見母)の類推による可能性もある。

「キヤイ-械(2)」は「胡介切」で、原例が「器用」の「手械」「足械」である。「キヤイ-薤(1)」は「胡介切」で、原例が「菜蔬」の「薤子」である。2 字は同音字で、「械」は蘇州音が[h-]で音注と対応しない。なお、杭州音では[h-][dz-]両読

みとなる。『西儒耳目資』では[hiai](=[xiai])となり、「キヤイ」は南京音と吳方言とのいずれにも対応できず、「キヤイ-戒(1)」(見母)という声符の類推による可能性が高い。

「カン-撼(1)」は、「胡感切 撼動也」で、原例が「船具」の「撼面 カメノカフ」である。蘇州・杭州音では[h-]、南京音では[x-]となり、音注と対応しない。このように、「カン」は「カン-感(6)」という声符の類推による可能性が高い。

「コ-貉(1)」は、『広韻』に宕攝入声の「下各切 説文曰似狐善睡獸也」と明母梗攝の入声音「陌白切 北方獸」とあり、原例が「畜兽」の「貉子 ムシナ」である。音注はどちらの読みとも一致しない。各方言ではその発音を確認できないので、声符「コ-各(18)」の類推によるものと考えられる。

このように、「缸棍」に対するカ行の音注は南京音と吳方言との双方から説明でき、「挟械撼貉」4字は、音注が声符の類推による可能性が高い。これらの以外の匣母の字に対して、ハ行とアヤワ行となるのは一般的であり、「画話豪禍」はハ行とアヤワ行との二種類の音注を有する。

以上によって、匣母の音注にハとアヤワ行という先行研究のいう音注が確認された。匣母の音注にハとアヤワ行との二種類の音注の状況は以下の通りである。

ハ行音注：

通攝一等開

江攝二等開合¹³⁸

蟹攝一、二等開 四等開(「ヒイ-繫(2)」1字)四等合(「ホイ-蕙(1)」1例)

臻攝一等開

山攝一、二、四等開 四等合(「ヒエン-玄(4)懸(1)滋(1)」3字)

效攝一等開

果攝一等開 一等合

仮攝二等開 二等合

宕攝一等開

梗攝二等開 二等合(「ホン-横(1)」1例)

流攝一等開

咸攝一、四等開

アヤワ行音注：

通攝一等開(「ヲ-斛(1)榭(1)」2例)

遇攝一等開合

¹³⁸ 江攝の字の中、「ヤン-降 7(4)」は既に検討したように、吳方言からしか説明ができない。

蟹撮一、二、四等合 四等開(「イ、-奚(1)」1例)
 臻撮一等合
 山撮一、二等合 四等合(「エ、穴(2)」1字) 二等開(「エン、鵬(1)」1例)
 宕撮一等合
 梗撮二、四等合 一等開(「ウ、核(1)」)「イン、杏 3(2)」2字)
 咸撮二等開 一等開(「アン、含 5(4)」1字)
 曾撮一等開

『唐話纂要』における匣母の字のこうした音注現象に関して、謝(2011)は以下のようにまとめている。

《唐話纂要》的匣母中,果、假、蟹开一、止、效、流、山撮开口、山合四、臻开一的例字声母注音为ハ行[h],其余为零声母。如“下ヒヤア[hia]”“匣ヤ[ia]”。(p.538)

つまり、果撮、仮撮、蟹撮開口の一等、止撮、效撮、流撮、山撮開口、山撮合口の四等、臻撮開口の一等の所属字は、音注がハ行[h]となり、それ以外の場合はゼロ声母であるとしている。上記から分かるように、謝(2011)の現象に対する把握は不十分である。具体的には下記の通りである。

(i)本研究の考察で謝氏と一致する部分：

- ①果撮開口一等 ハ行
- ②蟹撮開口一等 ハ行
- ③效撮、流撮一等開 ハ行
- ④山撮一、二、四等開 四等合(「ヒエン、玄(4)懸(1)泫(1)」3字) ハ行
- ⑤臻撮一等開 ハ行

(ii)謝氏と一致しない、或いは言及していない部分：

- ①仮撮一等字が存在しない。仮撮二等の開口、合口ともハ行。
- ②蟹撮開口二等
四等開(「ヒイ、繫(2)」1字) 四等合(「ホイ、蕙(1)」1字) ハ行
- ③止撮の字が存在しない
- ④謝氏によるハ行の音注となる撮の中に、アヤワ行の例も存在する。
山撮：四等合(「エ、穴(2)」1字) 二等開(「エン、鵬(1)」1字)
- ⑤上記以外、謝氏に言及のないハ行の音注の場合：
通撮一等開 江撮二等開合 果撮一等合 宕撮一等開
梗撮二等開、二等合(「ホン、横(1)」1例) 咸撮一、四等開

上記で分かるように、匣母の字に対して、ハ行とアヤワ行となるが、アヤワ行の例は計 55 字種で、ハ行の例は計 61 字種であり、ハ行となるのは全体の半

分以上を占めている。

蘇州音と杭州音では殆ど[h-]で保存され、アヤワ行の音注と対応する。『同文備攷』でも殆どの場合[h-]が保存されている。これに対して、ハ行の音注は全濁声母[h-]が無声化して[x-]か[h-]に合流する変化を反映し、南京音の[x-]と対応するが、アヤワ行の音注は南京音から説明できない。

これまで見た全濁声母は全て圧倒的に呉方言の特徴を反映しているのに対し、ここだけ南京音に符合するハ行の音注が大半を占めている。合理的な説明が得られないこの現象は大きな課題であると言わざるを得ない。

先行研究において、この二種類の音注について、高松(1985a:97)は『唐話纂要』が南京音(ハ行)に浙江音(アヤワ行)が交ざっているものとしている。つまり、ハ行が示す発音が[h-]([x-])となる。一方、林(2012:176)はアヤワ行の音注となる理由として、濁音の匣母[h-]をゼロ声母に聞こえたとしている。林(2012)はハ行の音注の理由について述べていない。

ハ行とアヤワ行との二種類音注を有する「画話豪禍」4字について、下記のように、合口の字に対して、アヤワ行の音注の数が多く見られる。

蟹摂合口二等：画(畫)-ハア 11(4)ワア 11(7)話-ハア 25(20)ワア 25(5)
效摂開口一等：豪-ハ○ウ 5(3)ア○ウ 5(2)
果摂合口一等：禍-ホウ 7(2)ヲウ 7(5)

同じ漢字に対してハ行とアヤワ行との二種類の音注をもつ場合について、林(2012:177)は冠山が異なる時期に学習した発音を採用したことで、その違いに留意しなかった可能性があるかと推測している。つまり、ハ行の音注が官話の特徴の要素、[h-]([x-])音として捉えられているということになる。このように、アヤワ行は呉方言の特徴を反映するものとなる。これは、上述の林氏によるハ行の音注に対する説明に矛盾がある。

また、有坂(1938:237-238)は同じ字にこうした二重音注が見られるのが日本人の耳に[h-]を[h]([x-])とゼロ声母の中間の音に聞こえたと説明している。つまり、匣母の字は聴覚面で[h]([x-])と[∅]との中間音に聞こえたという原因でハ行とアヤワ行の揺れが生じた。有坂氏は林氏の説明と統一できない。

ハ行とアヤワ行の音注は同じ呉方言の特徴を反映し、ともに[h-]を示すもの

と考えたい。上記のように、アヤワ行の例は主に合口の字に集中し、開口字の特徴は介音 [i] をもつものが多く、つまり齊齒呼の字¹³⁹である。匣母 [ɦ-] の合口字の場合、発音が唇音の性質に近い、合口の母音 [-u] の発音が強調されているため、音注の「ウ」「ワ」などとなったと説明として成立するが、齊齒呼の場合は説明できず、不明とせざるを得ない。

仮に、高松氏の指摘に従い、ハ行を南京音の反映とした場合、他の全濁声母は圧倒的多く呉方言を反映している中、ここだけ、南京音が半数以上の用例を占めるといのが不可解な現象となってしまう。つまり、数の差が殆どないハ行とアヤワ行の音注を別々に異なる方言の特徴としてみるのは説得力が十分とは言えない。

¹³⁹ 「ヤン-降 7(4)」は呉方言を反映するもので、杭州音では [ɦiAŋ] である。「イゝ-奚(1)」は南京音でも蘇州杭州音でも [-i] である。「ヨン-蜚(1)」は『同文備攷』に [ɦyɔŋ]、杭州音が [ɦin] である。「エン-啣(1)銜(1)」は蘇州音が [-iŋ]、杭州音が [-ie~]、『同文備攷』に [-em] となる。「ヤ-狹(1)簠(3)」は南京音では [-ieʔ]、杭州音では [-eʔ] で、『同文備攷』に [-iap] である。これらの字は [i] をもつ字である。また、「エ-穴(2)」は南京音でも蘇州音でも [-yɔʔ] と発音する。「エン-鵬(1)」は『同文備攷』に [ɦan] となる。

(4) 于母 [y-] と 羊母 [j-]

于母 [y-] の所属字は計 38 字種、延べ 313 字であり、羊母 [j-] の所属字は計 85 字種、延べ 350 字である。両声母の字に対する音注は影母の所属字と同じ、アヤワ行となり、中には、「ヒヨン-雄」1 例は「小曲」に所属する。

(i) 于母 [y-]:

「キュイ-夔(1)」は宕摂入声の「王縛切 説文曰収絲者也」である。原例は「器用」の「夔兒キュイルウ ワク」で、音注が読みと一致しない。音注「キュイ」は「ギユイ-衢懼」の声符の類推による可能性があるかと推測したいが、この字は濁音声母の字なので、説明できない。

(ii) 羊母 [j-]:

「テ-蜴(1)」は梗摂の「羊益切 蜥蜴」であり、原例が「虫介」の「蜥蜴ツエテ 一カケ」である。音注「テ」は「羊益切」と一致できず、字形の近い「テ-踢」の類推による可能性がある。

「スエ-鰯(1)」は原例が「鰯魚 スルメ」である。字体は「鰯」で、『広韻』『集韻』に未収、『康熙字典』に「[海篇]夷益切 音易鱸鰯」とあり、「鱸鰯」は「ウナギ」の意味である。原例の「龍魚」の「鰯魚スエイユイ スルメ」とあるのように、「鰯」は日本では「スルメ」という意味で、『大漢和辞典』は「烏賊を劈いて乾した食品」と説明している。よって、ここで書かれたのは「鰯」の日本語の意味である。「スエ」は中古音との対応関係は不明だが、「夷益切」と一致できず、「スエ-鰯」等からの類推であると推測される。

「タン-檐(1)」は「余廉切 屋檐」で、原例が「船具」の「椗檐テイタン ヨコキ」である。音注と読みは明らかに一致できず、各方言から証言が得られず、「タン」は字形の近い「檐」(端母の「都甘切」/「都濫切」)による類推の可能性が高い。

このように、上記の音注に、「夔」が説明できず、「蜴ツエテ 檐」3 字が類推によるものである。これらの字を除き、于 [y-]・羊 [j-] 両声母の音注はアヤワ行となるのは一般的である。

于 [y-]・羊 [j-] 両声母について、于母の源流が匣母 [h-] である。両声母はともに三等韻としか結合することができず、音声的にも近い。蘇州音では多

くの場合は[h-]、少数の一部の字はゼロ声母となっているのに対して、南京音では全てゼロ声母である。このように、音注がアヤワ行となっているのは、両方言と一致している。

上述したように、影組の字に対する音注の対照状況は表 4-10-2 にまとめることができる。

表 4-10-2 影組の音注と方言との対応関係

声母	影 [ʔ-]	曉 [h-]	匣 [ɦ-]		于 [y-]	羊 [j-]
対応する音注	アヤワ	ハ行	①アヤワ	②ハ行	アヤワ	アヤワ
音注の読み	[0-]	[Φ-]	[0-]	[Φ-]	[0-]	[0-]
南京音との対応	[0-]	[x-]	[x-]		[0-]	[0-]
	○	○	×	○	○	○
蘇州・杭州音との対応	[0-]	[h-]	[ɦ-]	[0-] _(少)	[ɦ-][0-] _(少)	[ɦ-][0-] _(少)
	○	○	○	×	○	○

このように、喉音影組の字に対する音注について、影母と曉母の場合、両方言とも対応している。

匣母の場合は、両音注について、アヤワ行になるのは呉方言を反映するもので、ハ行は清音である点、南京音の特徴を反映するもののように見えるが、『唐話纂要』全体の音注から見て適切な説明が得られない。これまでの検討で明らかになったように同書の全濁声母はご少数の例外を除き、完全に近い状態で保存されており、清濁の対立を維持する呉方言の特徴を反映している。匣母だけ大部分の音注が清音になっているからといって直ちに南京音の反映と決めるには全体からの支持が得られない。このような状況になったことについて現段階では適切な理由が分からず、今後の課題とせざるを得ない。

于母と羊母については蘇州音はどちらも[h-][0-]二種類の読み方に分かれているが、仮名音注は[h-]と[0-]を区別できず、どちらもアヤワ行となっているので、[ɦ-]に対応しているのかそれとも[0-]に対応しているのか判断することはできない。

表 4-10 喉音影組所属字一覧

撰	等位	声調	韻目		開合	影 [ʔ-]		曉 [h-]		匣 [ɦ-]		于 [y-]		羊 [j-]					
						清	次清	濁	次濁	字種数	延べ数	字種数	延べ数	字種数	延べ数				
通撰	一等	平	東	ōnŋ	開	ウヲン-翁 (1)	1	1	ホン-烘③ (1)		ホン-洪 (2)鴻① (2)烘① (1)紅 (12)	4	17						
		上	董	ōnŋ	開					ホン-鴻② (2)									
		去	送	ōnŋ	開	ヨン-甕 (1)	1	1	ホン-烘④ (1)		ホン-烘② (1)								
		入	屋	ōuk	開	ヲ-屋 7(5)ヨ-屋 7(2)	1	7			ヲ-斛 (1)榭 (1)	2	2						
	入	沃	ok	開合															
	三等	平	鍾	ioŋ	開合			ヒヨン-兕 (4)凶 (2)	2	6			ヨン-熊 (1)雄 5(4) ヒヨン-雄 5(1)	2	6	ヨン-容 (7)蓉 (1)	2	8	
		上	腫	ioŋ	開合										ヨン-勇 (3)	1	3		
去		用	ioŋ	開合										ヨン-用 (30)	1	30			
入		屋	io'uk	開			ヒヨ-畜① (1)	1	1										
入	燭	io:k	開合											ヨ-欲 (3)慾 (3)浴 (1)鶴 (1)	4	8			
江撰	二等	平	江	auŋ	開合					ヤン-降 7(4)カン-缸 (1)	2	5							
		入	覺	auŋ	開合	ヲ-握 (1)颯 (1)	2	2			ヒヨ-學 (学)(13)	1	13						
止撰	三等	平	支	iè	開合	イ-椅① 4(3)ギイ-椅 4(1)	1	4	ヒイ-戲① (8)	1	8					イ-移 (1)	1	1	
		平	支	yə	合	ライ-委① (6)萎① (1)逶 (1)	3	8					ライ-為① (51)	1	51				
		平	脂	ii	開	イ-蚶 (1)	1	1									イ-夷 (1)姨 (2)蕸① (1) 缺① (1)	4	5
		平	脂	yi	合											ウイ-惟 (1)唯① (1)	2	2	
		平	之	io'i	開			ヒイ-嘻 (2)	1	2						イ-怡 (1)異① 5(4)イ-異 5(1)	2	6	
		平	微	io'i	開	イ-依 (5)衣① (14)	2	19	ヒイ-髡① (1)希 (2)稀 (4)緡 (1)	4	8								
		平	微	yo'i	合	ライ-威 (1)威 (1)	2	2	ホイ-輝 (3)	1	3			ライ-圍① (3)違 (5) 韋 (1)	3	9			
		上	紙	iè	開合	イ-倚① (1)椅② 4(3)ギイ-椅 4(1)	1	1											
		上	紙	yə	合	ライ-委② (6)			ホイ-毀 (1)	1	1								
		上	旨	yi	合												ウイ-唯② (1)		
		上	止	io'i	開			ヒイ-喜① (12)	1	12			イ-矣 (3)	1	3	イ-以 (22)苴 (1)巳① (7)	3	30	
		上	尾	io'i	開			ヒイ-髡② (1)											
		上	尾	yo'i	合								ライ-葦 (1)	1	1				
		去	寘	iè	開	イ-倚② (1)			ヒイ-戲② (8)								イ-易① (7)	1	7
		去	寘	yə	合	ライ-萎② (1)													
		去	至	ii	開														
		去	至	yi	合														
去	志	io'i	開	イ-意 33(32)イ-意 33(1)	1	33	ヒイ-喜② (12)								イ-異② 5(4)巳② (7)イ-異 5(1)				
去	未	io'i	開	イ-衣② (14)															
去	未	yo'i	合	ライ-慰 (3)畏 (2)イ-熨② (1)	2	5	ホイ-諱 (2)	1	2			ライ-謂 (3)圍② (3)	1	3					
遇撰	一等	平	模	o	開合	ウ-烏 (8)汚 (2)イユイ-於② (9)	2	10			ウ-乎 (3)湖 (3)狐 (2)糊 (3)胡 (13)瑚 (1)葫① (1)蠲 (1)壺 (2)ヲ-糊 (1)	10	30						
		上	姥	o	開合			フウ-虎 (10)虬① (1)潯 (1)	3	12			ウ-戸 (4)	1	4				
		去	暮	o	開合	ウ-惡 18(5)	1	5	フウ-虬② (1)			ウ-互 (1)護 (4)	2	5					
	三等	平	魚	io	開	イユイ-淤① (1)於① (9)	2	10	ヒユイ-虚① (3)嘘① (1)	2	4					イユイ-餘 (7)與① (8)譽① (3)譽① (1)	4	19	
		平	虞	yu	開合							イユイ-芋① (2)于 (2)孟 (1)	3	5	イユイ-腴 (1)與① (1)覬① (1)	3	3		
		上	語	io	開			ヒユイ-許 (11)	1	11					イユイ-与 (5)與② (8)	1	5		
		上	麌	yu	開合							イユイ-羽① (1)雨① (8)	2	9	イユイ-愈 (5)	1	5		
		去	御	io	開							イユイ-芋② (2)羽② (1)雨② (8)			イユイ-喻 (1)論 (1)覬② (1)	2	2		
去	遇	yu	開合	イユイ-淤② (1)			ヒユイ-嘘② (1)						イユイ-預 (3)譽② (3)與③ (8)譽② (1)	1	3				
蟹撰	一等	平	咍	ai	開	アイ-哀 (1)	1	1			ハイ-孩 (1)	1	1						
		平	灰	ai	合			ホイ-灰 (1)	1	1			ライ-回 (廻)24(22)廻 (1)槐① (1)刈-回 24(2)	3	26				
		上	海	ai	開			ハアイ-海 20(12)ハイ-海 20(8)	1	20									
		上	賄	ai	合			ホイ-梅① 6(5)賄 (2)ホ-梅 6(1)	2	8									
		去	泰	ai	開	アイ-曖 (1)	1	1					ハアイ-害 8(2)ハイ-害 8(6)	1	8				
		去	泰	ai	合							ライ-會① (18)	1	18					
		去	隊	ai	合			ホイ-梅② 6(5)誨 (2)ホ-梅 6(1)	1	2									
	去	代	ai	開	アイ-愛 (愛)23	1	23												
二	平	皆	vi	開							ヒヤイ-鞋② (4)								

效撰	四等	入	月	iAt	開			ヒエ-歌(3)	1	3											
		入	月	yAt	合										エ-越(2)日(1)	2	3				
		平	先	en	開	エン-燕①(4)咽①(11)	3	16				ヒエン-絃(4)賢(9)	2	13							
		平	先	uen	合							ヒエン-玄(4)懸(1)	2	5							
		上	銑	en	開	エン-蟬②(1)			ヒエン-顯(2)	1	2										
		上	銑	uen	合							ヒエン-法(1)	1	1							
		去	霰	en	開	エン-宴(1)燕②(4)	1	1				ヒエン-現(1)	1	1							
果撰	一等	入	屑	et	開	イ-噫(1)	1	1													
		入	屑	uet	合			ヒエ-血(6)	1	6		エ-穴(2)	1	2							
		平	豪	au	開	ハ○ウ-麤(1)	1	1	ハ○ウ-蒿(1)	1	1	ハ○ウ-號①(9)毫(1)豪5(3) ア○ウ-豪5(2)	3	15							
		上	皓	au	開	ア○ウ-懊①(2)ハ○ウ-懊(1)	2	3	ハ○ウ-好①(99)	1	99										
		去	號	au	開	ア○ウ-懊②(2)			ハ○ウ-好②(99)耗①(2)	1	2	ハ○ウ-號②(9)									
		平	肴	au	開	ヤ○ウ-咬①(1)	1	1													
		上	巧	au	開	ハ○ウ-拗(2)	1	2													
	二等	三等	平	宵	ieu	開	ヤ○ウ-腰(2)要①(119)邀①(2)	3	123	ヒヤ○ウ-孝(4)	1	4							ヤ○ウ-鷓①(2)搖①(2) 話(2)鮪(1)	4	7
			上	小	ieu	開															
		去	笑	ieu	開	ヤ○ウ-要②(119)													ヤ○ウ-鷓②(2)搖(2)	1	2
		四等	上	篠	eu	開			ヒヤ○ウ-曉(11)	1	11										
	假撰	一等	平	歌	a	開	ア-阿(8)ヲウ-婀(1)	2	9			ホウ-何①(41)河(2)荷①(1)	3	44							
			平	戈	ua	合	ヲウ-窩①(1)窩2(1)ヲウ-窩2(1)	2	3			ホウ-和①(14)	1	14							
			上	哿	a	開						ホウ-何②(41)荷②(1)									
上			果	ua	合	ヲウ-窩②(1)			ホウ-火25(24)ホ-火25(1)	1	25	ホウ-夥(伙)①(3)禍7(2)ヲウ-禍7(5)	2	10							
去			過	ua	合				ホウ-貨(18)	1	18	ホウ-和②(14)									
宕撰	二等	平	麻	a	開	ヤア-ゝ(1)鴉(1)	2	2			ヒヤア-遐(1)蝦(2)蝦(6)	3	9								
		平	麻	ua	合	ワア-ゝ-蛙①(1)	1	1	ハア-ゝ-花(41)華①(7)	2	48	ハア-ゝ-攄①(1)樛①(1)華②(7)	2	2							
		上	馬	a	開							ヒヤア-下79(78)夏①(2)ヒア-ゝ-下79(1)	2	81							
	三等	去	禡	a	開						ヒヤア-暇(2)夏②(2)	1	2								
		去	禡	ua	合			ハア-ゝ-化(9)	1	9	ハア-ゝ-樛②(1)										
	上	馬	ia	開														エ-ゝ-野①(3)也40(39)	2	43	
	去	禡	ia	開														エ-ゝ-夜(10)	1	10	
	梗撰	一等	平	唐	aŋ	開	ヤン-鶯②(1)					ハアン-行①34(4)	1	4							
			平	唐	uaŋ	合	ワン-汪①(1)	1	1	ハン-荒①(1)謊(3)	2	4	ワン-黄(12)皇(1)凰(1)惶(4) 蝗①(1)	5	19						
			上	蕩	uaŋ	合				ハン-慌(2)	1	2									
去			宕	aŋ	開																
去			宕	uaŋ	合	ワン-汪②(1)			ハン-荒②(1)												
入			鐸	ak	開	ヲ-惡18(13)		13				コ-貉①(1)ホ-鶴(1)	2	2							
二等		入	鐸	uak	合	ウヲ-獲(1)	1	1													
		平	陽	iaŋ	開	ヤン-央(5)殃(2)殃(1)鴛①(1)	4	9	ヒヤン-香(13)郷(8)	2	21							ヤン-洋①(3)羊(5)佯①(1) 揚(4)楊(6)樣(20)陽(2)	7	41	
		上	養	iaŋ	開				ヒヤン-享(2)響(3)釐①(1)	3	6							ヤン-痒①(2)養(養3)①(8)	2	10	
		上	養	uaŋ	合	ワン-枉(2)汪③(1)	1	2						ワン-往(14)	1	14					
		去	漾	iaŋ	開				ヒヤン-向①(8)響②(1)	1	8							ヤン-恙(7)養(養3)②(8)	1	7	
		去	漾	uaŋ	合				ハン-況(4)	1	4				ワン-旺(1)	1	1				
		入	藥	iak	開	ヤ-約①(9)	1	9										ヤ-藥13(12)躍(2)鑰(1) ヨ-藥13(1)	3	16	
三等	入	藥	yak	合									キユイ-聾(1)	1	1						
	平	庚	aŋ	開						ヒン-行②34(30)		30									
	平	庚	uaŋ	合						ホン-横①(1)	1	1									
	平	耕	eŋ	開	イン-櫻(2)鶯(3)鸚(2)	3	7			ヘエン-茎①(1)	1	1									
	平	耕	ueŋ	合				ホン-轟①(1)	1	1											
	上	梗	aŋ	開						イン-杏3(2)ヒン-杏3(1)	1	3									
	上	耿	eŋ	開						ヒン-幸6(5)	1	6									
	去	映敬	uaŋ	合						ホン-横②(1)											
	去	諍	eŋ	開				ホン-轟②(1)													
	入	陌	ak	開				ホ-嚇①(1)	1	1											
	入	麥	ek	開						ウラ-核(1)	1	1									
	入	麥	uek	合						ウヲ-獲(2)	1	2									
	平	清	iaŋ	開	イン-嬰(1)	1	1											イン-贏(1)	1	1	
平	庚	iaŋ	開	イン-英(3)	1	3															
四等	平	庚	yaŋ	合						ヒヨン-兄(16)	1	16					ヨン-榮(1)蠟(1)	2	2		
	上	梗	yaŋ	合													ヨン-永(1)	1	1		
	上	靜	yaŋ	合														イン-穎(2)	1	2	

		去	映	vaŋ	合												ヨシ-詠(1)	1	1														
		入	昔	ɪak	開	イ-益(4)	1	4														イ-亦(8)テ-蠭(1)スエ-蠭(1)	3	10									
	四等	平	青	ueŋ	合									ヨシ-蜚(1)	1	1																	
	流	一等	平	侯	aɯ	開	エヘ○ウ-嘔①(1)鷗(1)	2	2					ヘ○ウ-猴(2)	1	2																	
上			厚	aɯ	開	エヘ○ウ-嘔②(1)								ヘ○ウ-厚①(6)後①(32)	2	38																	
去		候	aɯ	開										ヘ○ウ-候(7)厚②(6)後②(32)ガ○ウ-鶯(1)	2	8																	
三等		平	尤	ɪəu	開	ユウ-憂(7)	1	7	ヒウ-休(38)	1	38														ユウ-油①(3)由(11)游(2)遊(4)猶①(2)蚰(1)洩(1)	7	24						
	上	有	ɪəu	開										ユウ-右①(3)友(7)有(155)鮪(1)	4	166																	
	去	宥	ɪəu	開										ユウ-右②(3)又(5)	1	5									ユウ-油②(3)柚①(1)猶②(2)	1	1						
深	三等	平	侵	ɪɛm	開	イン-音(10)陰(2)	2	12																	イン-淫(1)	1	1						
		上	寢	ɪɛm	開	イン-飲①(5)	1	5																									
		去	沁	ɪɛm	開	イン-飲②(5)																											
		入	緝	ɪɛp	開	イ-揖(2)	1	2	ヒエ-吸(1)	1	1																						
咸	一等	平	覃	ɻm	開	アン-詰(1)	1	1						アン-含 5(4)ハン-含 5(1)ハアン-函①(2)	2	7																	
		上	感	ɻm	開									カン-撼(1)	1	1																	
		上	敢	aɪm	開									ハアン-喊 3(2)木感(1)ハン-喊 3(1)	2	4																	
		去	勘	ɻm	開	アン-暗(10)醜(1)	2	11																									
	二等	入	合	ɻp	開										ホ-合 盒(3)合②6(3)	2	6																
		平	銜	aɪm	開										エン-啣(1)銜(1)	2	2																
		上	賺	ɛɪm	開																												
		去	陷	ɛɪm	開										エン-陷(2)	1	2																
		入	洽	ɛɪp	開										ヤ-狹(1)	1	1																
	三等	入	狎	aɪp	開	ヤ-鴨(3)壓(1)	2	4							ヤ-篋①(3)	1	3																
		平	鹽	ɪɛm	開																						エン-炎(1)	1	1	タン-擔(1)	1	1	
		平	嚴	ɪaɪm	開																												
		上	琰	ɪɛm	開	エン-掩(1)焮(1)駮(1)	3	3	ヒエン-險(4)	1	4																						
		去	豔	ɪɛm	開	エン-厭①(2)	1	2																									
		去	禱	ɪɛp	開	エン-厭②(2)																											
		入	葉	ɪɛp	開	エン-厭②(2)																											
	會	一等	入	德	aɪk	開									ヘ°-黒 7(6)ヘエ-黒 7(1)	1	7	ウヲ-或(11)惑(1)	2	12													
		三等	平	蒸	ɪə̃ŋ	開	イン-應①(12)鷹(1)	2	13	ヒシ-興①(16)	1	16															イン-蠅(蠅)(3)	1	3				
			去	證	ɪə̃ŋ	開	イン-應②(12)			ヒシ-興②(16)																							
	入	職	ɪə̃k	開	イ-莖(1)	1	1																										
	計						108	637		73	498		127	646		38	313		85	350													

注：・「ヲ-𦉎(1)」は、原例が「𦉎𦉎」キタナヒとなり、辞書に未収で、意味上からみれば、現代の「𦉎𦉎」と同じである。「𦉎」は影母江摂の「於角切」である。

・「ウヲシ-鰮(1)」は、『漢語大字典』に簡化字が「鰮」とある。和製字。「ウヲシ」は「ウヲシ-温(4)」の声符の類推によるものと考えられる。

・「イ-一 111(110)」は 1 字未注。 ・「安-アシ 22(21)ヤシ 22(1)」は、「ヤシ」の原例が「平安」となり、誤記と考えられる。

・「イエ-鬱(1)」は『広韻』に「鬱」の俗字であり、「鬱」は臻摄入声の「紆物切 香草又氣也長也幽也滯也腐臭也悠思也」、原例が「四字話」^{ケンコウイユモシ}遣個鬱悶 キバラシヲスル」である。

・「ワア、-空(1)ワア-挖(1)」について、山摂の「空」は、『広韻』に「鳥八切」「鳥黠切」とあり、入声字である。同書の「器用」に、「ワアハツク」^{ワアハツク}と「ルツワア」^{ルツワア}がそれぞれ 1 例あり、どちらも「ミ、カキ」の意味である。「空」と「挖」は同音字で、表記に「へ」の有無がその違いである。同音の二つの音注は、いずれも短促性を有する入声音の特徴を表していない。また、蘇州音では「挖」が[uaʔ]と発音するのに対して、南部呉方言では[ua]の読みがある。このように、音注は非入声の読みがある南部呉方言の発音を反映しているのではないだろうか。

・「ヲウ-窩(1)」は、『広韻』に未収で、『集韻』に「於何切」とある。 ・「ヲウ-窩 2(1)ラウ-窩 2(1)」は、「ラウ」が誤記。

・「ヒイ-縉(1)」は原例が「花艸」所属の「縉」メナモミである。『集韻』に「虚嚴切 音杵 縉 葎 葉 草」とあるため、「縉」と同様である。しかし、音注は読みと対応しない。「縉」は『広韻』に「香衣切」とあり、音注と一致する。

・「ヒイ-縉(1)」は原例が「鯨鯢」となり、和製字。「ヒイ-希(2)」という声符の類推によるものであろう。

・「ホイ-悔① 6(5)ホ-悔 6(1)」は、「ホ」音注が韻尾の記入漏れ。

・「喊-ハシ 3(2)ハン 3(1)」は曉母「呼覽切 聲也」(一等)、「呼賺切 聲也」(二等)と匣母の「下斬切 喊聲」である。原例は以下のようになっている。

「ハシ」音注：「二字話」^{ハシキヤウ}喊叫 ワメク 「四字話」^{イツニイナハシ}一齊呐喊 一同ニトキノコエヲアケル 「ハン」音注：「四字話」^{ハンツツシキイライ}喊将起來 オメク

意味上から読みを判断することが難しく、『韻鏡』では曉母一等と二等に置かれているので、本研究では韻母に対する「ア段+ン」という音注の特徴によって、曉母一等の「呼覽切 聲也」と認定する。

・「ハシ-喊(1)」は、原例が「喊」カフリンシタシキとなる。辞書に未収で、「喊-ハシ」の類推による可能性がある。

・「エン-鶻(1)」は、原例が「白鶻 ハクカン」となり、『康熙字典』に「説分長箋」俗鶻字」とあり。「鶻」は『広韻』に「戸開切」とある。

・「ホ-盒(3)」は原例が「香盆」^{ヒヤンボ}コウバコとなり、漢字[盆]は誤字である。 ・「ヨシ-𦉎(1)」は『漢語大字典』に“𦉎”の俗字との説明がある。

・「エ、-也 40(39)」は、1 字未注。

第二節 本章のまとめ

2.1 声母面の対応関係のまとめ

まず、声類各組の声母について、第一節で分析してきた音注と方言との対応関係を以下のようにまとめる。

(一)唇音

(1)重唇音幫組

幫・滂両声母の字に対する音注は無気と有気の違いを区別せずに同じハ°行であるのに対し、並母の字に対する音注は原則バ行となり、清濁が厳密に区別されている。濁音 [b] を維持し、清濁の区別を有するのは呉方言の特徴である。但し、並母所属字の中に、「排鉞帛勃佩婆棚」など数が少ないが清音表記のものは南京音を反映するものが数例存在する。

明母の字に対して、マ行の音注となっている。南京音と呉方言では全て両唇の鼻音 [m] で、音注と一致する。

(2)軽唇音非組

非・敷両声母の字に対する音注はハ行であるのに対し、奉母に対する音注がワ行とハ行で、ワ行が半数以上を占め、清濁の違いを示している。上に述べたように清濁の区別を有するのは呉方言の特徴である。奉母に対するハ行の音注は全体の半分に迫る高い比率を有し、非・敷両声母に対するのと同じハ行の音注が見られることは全濁の奉母が無声化して清音に合流したことを示し、南京音の特徴に一致するものである。清音を示すハ行の音注が大量に存在していることだけでなく、同じ字にワ行とハ行との二種類の音注が付されている現象が多く見られている。現段階ではまだ合理的に説明することができない。

微母の音注は全てワ行となっている。「物」を「ウ」ではなく、「ウエ」となっているなど全体的に見て呉方言の特徴に一致している。呉方言の中では、「晩ワン」「万ワン」などは鼻音韻尾を失った蘇州音と対応せず、鼻音韻尾を有していた杭州音に一致する。

(二)舌音と歯音

(1)舌頭音端組(泥母以外)

端・透両声母の字に対する音注は無気と有気の違いを区別せずに同じタ行であるのに対し、定母の字に対する音注はダ行となり、清濁が厳密に区別されている。濁音を維持し、清濁の区別を有するのは呉方言の特徴である。

(2)舌頭音泥母、舌上音娘母、半舌音来母

泥母と娘母に対する音注はナ行であるのに対し、来母に対する音注は全てラ行で、混同する例は存在しない。呉方言は[n]と[l]の区別を維持しているのに対し、南京音は一部不明な点があるものの、[n]と[l]が混同することは特徴として知られている。ナ行の音注は呉方言の特徴に一致している。

(3)半齒音日母

日母の字について、止摂開口の字は「ルㄠ」「ルウ」となり、ゼロ声母となる南京音と呉方言との双方から説明できない。止摂合口と非止摂の字はザ行となるのが一般的であり、南京音([z-])と蘇州音、杭州音の文語音([z-])との双方から説明できる。薬韻の所属字(「ジャ-若、弱、鷓、蕩」)の母音が南京音の[o]となっていないことから、呉方言の特徴を反映していることが分かる。呉方言の中では、山摂や効摂の字に対する音注が鼻音韻音や母音韻尾を有する形となっていることなどが蘇州音ではなく、杭州音の特徴に一致することを物語っている。

(4)舌上音知組(娘母以外)、齒頭音精組、齒上音莊組、正齒音章組

(i)止摂の場合

知・精・莊・章四組の止摂の字に対する音注は、開口字の場合は「ツウ・ツウ」「スウ・ズウ」、合口字の場合は「ツイ・ツイ」「スイ・ズイ」で、声母面の違いが見られず、杭州音の特徴に一致している。また、開口の字に、知母の「知致-チイ」、澄母の「遲-チイ」は北部呉方言と対応する例と考えられる。合口の字に、章母の「吹-チュイ」は南京音と当時の呉方言との双方から説明でき、禪母の「誰睡-ジュイ」は杭州音と対応する。

(ii)止摂以外の場合

精組は「ツ・ヅ・ス・ス」、章組・知組三等、莊組三等は「チ・ヂ・シ・ジ」と厳密に区別し、混同することはない。知組二等、莊組二等は精組と同じ音注もあり、例の例外を除き精組と同じ「ツ・ヅ・ス・ス」である。知組二等と莊組二等の字に対する音注は精組と同じ場合もあれば、章組と同じ場合もある。具体的には、知組二等の字は江撮と効撮では章組と同じ音注で、それ以外は精組と同じ音注になる。莊組二等の場合、江・効・蟹・假・山では章組と同じで、それ以外精組と同じである。数例の例外を除き、呉方言の特徴と一致している。呉方言の中では、山撮や効撮の字に対する音注が鼻音韻音や母音韻尾を有する形となっていることなどから蘇州音よりも杭州音に一致している。

この四組の声母に対する音注も清濁の区別を維持し、呉方言の特徴を反映している。全濁の崇母、船母、禪母に対する音注は、それぞれに「ジ・ザ」と「ヂ・ヅ」が混在している現象はこれらの全濁声母が一つに合流した蘇州音とは合わず、摩擦音と破擦音二種類の濁音を有する杭州音からは説明できる。

(三) 牙音見組

見・溪両声母の字に対する音注は無気と有気の違いを区別せずに同じカ行であるのに対し、群母の字に対する音注はガ行となり、清濁が厳密に区別されている。濁音を維持し、清濁の区別を有するのは呉方言の特徴である。

疑母の字に対して、概ね開口呼と合口呼ガ行、齊齒呼と撮口呼がナ行、その他一部がアヤワ行で、三種類の音注となっている。これは、開口呼と合口呼の前では疑母が存立し、齊齒呼と撮口呼の前では娘母へ合流、その他条件不明だが、呉方言の特徴を反映している。南京音は、疑母が消失してゼロ声母となっているため、アヤワ行の音注において杭州音との区別がつかないが、全体的にて杭州音の特徴に一致している。

なお、呉方言でも南京音でもその後牙喉音の一部が口蓋化で舌面音になっていくが、音注にはそのような現象が見られない。

(四) 喉音影組

影・于・羊三母の字に対する音注は全てアヤワ行となり、区別がない。呉方言は于・羊両母が[h-]で、ゼロ声母の影母との間に違いが存在する。音注で

は[h-]がアヤワ行に写されるため、区別が認められない。

曉母の字に対する音注はハ行で、匣母の字に対する音注はアヤワ行とハ行の二種類となっている。アヤワ行の存在は喉音において清濁の区別が維持されていることを意味し、呉方言の特徴に一致するものである。一方、匣母に対する音注において清音のハ行が半数以上の用例を占め、上を見てきた非組以外の幫組、知組、見組、精組、莊組、章組の状況と大きく異なっている。ハ行になるのは全濁声母が無声化した南京音の特徴に一致するものだが、同じ字にワ行とハ行二種類の音注が付される例が少なからず存在し、ハ行だから即南京音の反映であると断定できない側面もある。この異常な現象については現段階においてまだ合理的に説明することができない。適切な説明が得られない点があるが、清濁の区別の存在などから見て、喉音も呉方言の特徴を反映していると言える。

以上のように、声類面に対する分析の結果、『唐話纂要』の基礎方言が呉方言の中の杭州音であることが明らかになった。南京音を反映する一部の例も明らかになったが、その原因の解明は課題である。また、匣母と奉母の音注において清音の例が大量に存在し、なおかつ同じ字に呉方言に一致する音注と南京音に一致する現象が同時に存在する原因の究明も課題である。

2.2 未解決の問題点との関連

声母面では、先行研究に見られる問題点について、本研究の考察を通して、以下のようにまとめることができる。

(1) 全濁声母について

全濁声母の音注において、音注は濁音と期待されながら実際は清音になっている理由について、先行研究の挙げた理由以外に、本研究によって以下の理由を考える必要もあることが明らかになった。

(i) 南京音の反映

並母：ハ°行の「排鉞帛勃佩婆棚」 従母：「サ°」の「皂槽」

(ii) 南京音と呉方言との双方或は呉方言から説明できるもの

- ① 南京音・呉方言：並母：ハ°行の「牝泊」 定母：タ行の「跳胆跌兌」
従母：「ツ」の「荐銼」 日母：「ズ」の「蝻」
群母：カ行の「圜赶(趕)芡」 匣母：カ行の「缸棍」
- ② 呉方言：従母：「ツ」の「睜」 禅母：「シ」の「十」

(iii) 濁点の省略

並母所属の「暴-バ○ウ 6(5)ハ○ウ 6(1)」を例として、以下の例のように、

「ハ○ウ」：「六字話」^{キン シ ハ○ウスウスケンケン}今日暴始相見
「バ○ウ」：「二字話」^{バ○ウフウ}暴富「四字話」^{バ○ウフウジンキヤア}暴富人家「常言」^{ヒヨンバ○ウチエハワン}凶暴者亡
「長短話」^{チュイリヤ○ウバ○ウフワン}遇了暴風 ^{チンズウツエンジナア、チヤンバ○ウフワン}正是前日那场暴風

初出ではない六字話の「ハ○ウ」は濁点が省略されたものと考えられる。こうした清音音注が初出でない例は下記のようになり、濁点が省略されたと処理する。

並母：ハ行の「盤敗暴平病憑白便備」
定母：タ行の「糖擡逃大頭豆銅動同杜緞定隄肚斷」
澄母：「チ」の「住除厨程綢著茶」
従母：「ツ」の「自字前就在財盡錢從聚罪情疾」
邪母：「ツ」の「辭羨」
崇母：「ス」の「事」「ツ」の「查」
船母：「シ」の「順」「チ」の「船」
禅母：「シ」の「誰睡樹實石上」「チ」の「嘗讐成承常」
「セ」の「善」「ス」の「時是誓」

日母:「シ」の「人日讓如恁」「セ」の「然軟」
群母:カ行の「窮期其勤近拳蕎屐極」

(iv)類推によるもの

難字、僻字の字について、両方言から説明できず、声符の類推による可能性が高い。こうした例は以下の通りである。

並母:ハ°行の「稗瓣」 ハ行の「蚌」 定母:タ行の「苔袒^鯨苕」
澄母:「チ」の「^鯨鯨」 從母:「ツ」の「瘁」「サ」の「嘈」
邪母:「ヲイ」の「穗」 崇母:「ツ」の「雛」
日母:「チ」の「蛄」「ナイ」の「苻」 群母:カ行の「芡」
匣母:カ行の「挾械撼貉」

(v)誤記と思われるもの

濁点の省略と異なり、清音音注となる例は数が少なく、それに初出である場合、或いは明らかに発音と対応しない場合は誤記と処理する。

①濁点の記入漏れによる誤記

並母:ハ行の「棒抱避辨伴評鮑鵬排鉞帛苜勃佩婆棚」
定母:タ行の「疼蕩蜓提塘突簞敵鐸屯」
澄母:「ツ」の「池槌鎚¹⁴⁰緞」「チ」の「着著柱躑」
從母:「ツ」の「才晴賊全絶層籍暫墻漸淨」
邪母:「ツ」の「遂尋習涎蓋旋」
崇母:「ツ」の「愁楂」「サ」の「寨」
船母:「ス」の「示」「シ」の「射」「チ」の「剩」
禪母:「ス」の「^鯨鯨」「シ」の「辰柘芍石」「チ」の「臣城」
群母:カ行の「旗碁極騎渠櫃懃禽詎鸚」

②その他

並母:ハ°行の「杷」 定母:タ行の「^鯨嗒」 タ°行の「地」
澄母:「チ°」の「虫」 從母:「ツ」の「齊鯢鱗齋」
崇母:「シ」の「事寨」 禪母:「ツ」の「折」
群母:カ行の「渠」

(2)清音の声母に対する濁音の音注

先行研究では、岡島(1992:99)は曉母の「忽-ボ」と清母の「竊-ヅエ」「簇-ヅヲ」を例として挙げ、同書の全清・次清の声母が濁音音注となる現象について言及している。なお、前五巻では岡島氏による清母の2例は確認できず、

¹⁴⁰ 「槌鎚緞」は声符の類推による可能性もある。

曉母の「忽」は「小曲」の1例のみで、音注が「ボ」でなく、「ホ」となっている。

こうした明らかにされていない清音の声母に対する濁音音注の例について、以下のようなケースが確認できた。

①両方言から説明できないもの：

幫母の「バ〇ウ-胞(1)」 透母の「ドウ-唾(2)」 清母の「ジョン-匆(4)」
書母の「ジ-室 4(1)」 見母の「ガン-甘(1)」

②呉方言から説明できるもの：透母の「デ-鰈(1)」 見母の「グイ-愧(7)」

③類推によるもの：

透母の「デイ-鷗(1)」「デ-逖(1)」 精母の「ヅヲ-鏃(1)」
心母の「デヤ〇ウ-篠(1)」 章母の「ジヨ-蠟(1)」 見母の「ゼ-鵠 2(1)」

④その他：

幫母の「バアゝ-鈿(1)」 端母の「デイン-椀(4)」 透母の「デ-鰈(1)」
溪母の「ギイ-企 3(2)」 影母の「ギイ-椅 4(1)」

(3) 歯音系の濁音について

崇母、船母、禪母の音注に摩擦音(「ジ」「ザ」と破擦音(「ヂ」「ヅ」)を示す二種類の音注が記されていることについて、高松(1985a)は現代蘇州音ではこれらの声母が[z]の一つに統合されるため、説明できないとしている。本研究の分析によって、杭州音などでは当時も現在も摩擦と破擦二種類の濁音を維持しており、杭州音から説明できることが明らかになった。

(4) 莊組二等の二種類音注について

本章の第一節の1.6で検討したように、莊組二等生母の一部の字に対して、[s]と[j]二種類の音注が付されていることが問題視されている。

前述したように、莊組二等の字の合流の仕方は呉方言と南京音で違い、南京音では章組に合流するものが多いのに対し、呉方言では莊組二等の場合、江・效・蟹・假・山のみ章組へ合流し、それ以外は精組へ合流している。莊組二等生母の一部の字に対する[s]と[j]二種類の音注はこうした呉方言の特徴から説明できる。

第五章

仮名音注に反映された中国語の韻類

本章では、仮名音注について、中古音の十六韻攝に分けて、南京音、蘇州・杭州音との対応関係を整理し、それに反映された中国語の特徴を韻類面から考察する。

第一節 韻攝ごとの対応関係の分析

1.1 通摂

通摂に所属する字は一等と三等に分かれ、全 177 字種、延べ 740 字である。内、陽声韻の字は 110 字種、延べ 507 字で、入声の所属字は計 67 字種、延べ 233 字である。表記例の状況を表 5-1 の(1)～(3)にまとめている。その中に、「雄-ヒョン 5(1)」「六-リウ 6(2)」「玉-イユイ 8(1)」は「小曲」の例である。

(1)陽声韻の場合

表 5-1 から分かるように、通摂の陽声韻の字について、一等の場合、全体として「-オン」音注となり、この他に、「疼-デン 4(3)テン 4(1)」、「ニョン-膿(1)」「ジョン-匆(4)」「ヨン-甕(1)」のように、「デン」と「-ヨン」もある。

「疼-デン 4(3)テン 4(1)」は、定母の部分で検討したように、「テン」が濁点の記入漏れ、或は清音化した南京音から説明できる。蘇州音が[dən]、南京音が[tʰən]となり、「デン」は蘇州音に対応する。

「ニョン-膿(1)」は泥母の「奴冬切」で、原例が「二字話」の「包膿^{パウニョン} ウミモツタ」である。音注は読みと対応できず、三等の娘母の「濃-ニョン」の類推によるものと考えられる。

「ジョン-匆(4)」は清母の部分で検討したように、反切が「倉紅切」で、南京音、蘇州・杭州音のいずれも[tsʰən]と発音するため、「ジョン」は対照方言のいずれにも対応しない。

「ヨン-甕(1)」は原例が「器用」の「酒甕^{ツユウヨン} モタイ」となっている。『広韻』に影母一等の「烏貢切 罌也」となり、拗音の「ヨン」と一致しないが、『集韻』に三等の「於容切 陶器」とあり、対応する。『西儒耳目資』では[θum](-[θuŋ])、『同文備攷』では[θoŋ]となり、現代と同じ、いずれも介音[i]をもたない。このように、「ヨン」は「於容切」と対応するものしか考えられない。

三等の場合、舌上音、正歯音、牙音群母、喉音、半歯音の字は「-ヨン」の音注であり、重唇音、齒頭音、牙音見・溪母の字、半舌音が一等の多くと同じ「-オン」の音注となっている。

このように、通摂の陽声韻の字に対して、「疼」は「テン」が南京音から説明できる一方、濁点の記入漏れも排除できない。「匆-ジョン」は両方言から説明

できない。「膿-ニオン」は類推によるもの、「ヨン-甕(1)」は「於容切」を注するものである。これらの字以外、一等の字は「-オン」、三等の字は唇音、齒頭音、牙音(見溪母)、半舌音来母が「-オン」、それ以外が「-ヨン」の音注である。

通撰の陽声韻の字に対する音注は南京音と蘇州音との具体的な対応関係は表 5-1-1 の通りである。

表 5-1-1 通撰陽声一・三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州・杭州音との対応		
一等	重唇音	並明	-オン	[-on]	[-əŋ]	○	[-oŋ]	○
	輕唇音	敷						
	舌頭音	端透定泥			[-oŋ]	○		
	齒頭音	精清從心						
	牙音	見溪						
	喉音	影曉匣						
	半舌音	来						
三等	重唇音	明	-オン	[-on]	[-əŋ]	○	[-oŋ]	○
	輕唇音	非敷奉	-オン	[-on]	[-əŋ]	○	[-oŋ]	○
	舌上音	知徹澄娘	-ヨン	[-jON]	[-(i)oŋ]	○	『三』[-ヨン]『同』[-ioŋ]	○
	齒頭音	精從心邪	-オン	[-on]	[-oŋ]	○	[-oŋ]	○
	正齒音	章昌書	-ヨン	[-jON]	[-(i)oŋ]	○	『三』[-ヨン]『同』[-ioŋ]	○
	牙音	見溪	-オン	[-on]	[-oŋ]	○	[-oŋ]	○
		群	-ヨン	[-jON]	[-ioŋ]	○	[-ioŋ]	○
	喉音	曉于羊	-オン	[-on]	[-oŋ]	○	[-oŋ]	○
	半舌音	来	-オン	[-on]	[-oŋ]	○	[-oŋ]	○
半齒音	日	-ヨン	[-jON]	[-(i)oŋ]	(○)	『三』[-ヨン]『同』[-ioŋ]	○	

一・三等の唇音の字について、南京音は[-əŋ]、蘇州・杭州音は[-oŋ]である。『三音正譌』では「-オン」、『同文備攷』も[-oŋ]である。唇音の後に主母音[a]がくる場合、唇音の影響で[-o]に近い場合、同書では「オ段」で注している。このように、「-オン」は両方言から説明できる。

唇音以外の三等字について、齒頭音、牙音見・溪母、半舌音来母の場合、南京音、蘇州・杭州音は同じ[-oŋ]となり、「-オン」はいずれとも一致する。牙音群母、喉音の場合、南京音、蘇州・杭州音は同じ[-ioŋ]となり、「-ヨン」はいずれからも説明できる。

舌上音、正齒音の場合、南京音、蘇州・杭州音のいずれも[-oŋ]となっている。一方、『三音正譌』が「-ヨン」、『同文備攷』が[-ioŋ]で、同書の場合と同じ介音[i]をもっている。また、第二章第四節で述べたように、当時の南京音にも[i]があったため「-ヨン」は当時の両方言に対応する。

半齒音日母の場合、南京音は[-oŋ]、蘇州・杭州音は[-ioŋ]であり、『三音正譌』でも「-ヨン」、『同文備攷』も[-ioŋ]である。上記と同じ、当時の南京音も介音[i]を保ったため、「-ヨン」は両方言から説明できる。

このように、陽声韻の字に対する音注は、南京音と吳方言との双方に対応している。

(2)入声韻の場合

入声韻の字について、一等の場合は「屋-ヨ 7(2)」以外、全て「オ段」の直音となっている。三等の場合は唇音、齒頭音、半舌音来母の場合は「オ段」の直音であり、それ以外は「-ヨ」となっている。「-ヨ」は介音が保たれていることを反映している。三等の「六-リウ 6(2)」「玉-イユイ 8(1)」は「小曲」例である。

「屋-ヲ 7(5)ヨ 7(2)」は『広韻』に影母通攝の入声「烏谷切 舍也具也」である。また、『集韻』に通攝の読み以外、江攝の「乙角切 疇也」もある。原例は下記のようになり、意味の上では通攝の「烏谷切」と一致している。

「ヨ」:ツウキヤアヨリイキユイジュイ「六字話」自家屋里去睡 自分ノ宿ニ皈リテ睡申フサン
チエトウスウスエンス^{*}エンヨリイ「長短話」這都是先生屋裡 宿ニ師匠ヲムカエテ
「ヲ」:キイゾア[○]ウワンヲ「四字話」起造房屋 イエヲタテル シヤ[○]ウツインミンヲ 燒燼民屋 民屋ヲヤキハラフ
ヒウクハンタア[、]ジンヲジヤンシヤン「常言」休管他人屋上霜 他人ノオトヲカマフナト云フ
コウキヤアテヲハン「長短話」我家的屋板 我家ノヤネイタヲ ヲワア[、]「器用」屋瓦 ヤネカハラ

一等所属の字であるため、介音 [i] を持たず、数の少ない「ヨ」は「ヲ」の誤記による可能性が大きい。

このように、通攝入声韻の字に対して、誤記による「足-ツエ」以外、音注が「オ段」と「-ヨ」となるのは一般的である。表 5-1-2 から分かるように、入声字の主母音は陽声韻の字の主母音と同様で、[-o]となっている。

入声韻尾を保つ南京音と呉方言において、「オ段」となる一等の字と三等唇音、齒頭音、半舌音の場合、南京音が[-uʔ]、蘇州音が[-oʔ]、杭州音が[-ɔʔ]となり、「-ヨ」となる牙・喉音の場合、南京音が[-yʔ]、蘇州音が[-ioʔ]、杭州音が[-iɔʔ]である。このように、短音節型の「オ段」・「-ヨ」は蘇州・杭州音に対応する。

同じ「-ヨ」となる舌上音、正齒音、半齒音の場合、蘇州・杭州音では主母音 [-o] をもつが、介音 [i] の対応が殆ど見られない¹⁴¹。一方、『三音正譌』が「-ヨ」、『同文備攷』が [-ioʔ] で、同書の場合と同じ介音 [i] をもっているが、『西儒耳目資』では一等の字と同じ無介音の [-ou] [-o] である。「-ヨ」は明らかに呉

¹⁴¹ 日母の「ジヨ-肉褥」は蘇州音では [-ioʔ] となり、介音 [i] を有する。

方言の特徴を反映している。

表 5-1-2 通撮入声一・三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州・杭州音との対応	
一等	重唇音	幫滂明	オ段	[-o]	[-u?] ×	[-o?] ○
	舌頭音	定				
	齒頭音	精從				
	牙音	見				
	喉音	影匣				
半舌音	來					
三等	重唇音	明	オ段	[-o]	[-u?] ×	[-o?] ○
	輕唇音	非敷奉	-ヨ	[-jo]	[-u?] ×	[-io?] ○
	舌上音	知徹澄	オ段	[-o]	[-u?] ×	[-o?] ○
	齒頭音	精心邪	-ヨ	[-jo]	[-u?] ×	[-io?] ○
	正齒音	章船書禪			[-y?] ×	
	牙音	見溪疑				
	喉音	曉羊				
	半舌音	來	オ段	[-o]	[-u?] ×	[-o?] ○
半齒音	日	-ヨ	[-jo]	[-əu?] ×	[-o?][-io?] ○	

上記のように、通撮の字は、陽声韻の字でも入声韻の字でも、吳方言との対応が多いことが分かった。

なお、通撮の字の音注について、謝(2016:84)は、「通撮開口一等韻母为 [oN]。如蒙モン[mON]、木モ[mo]、中チヨン[ʃion]。」と「中」を一等の字として挙げているが、「中」は一等でなく、三等所属字である。

表 5-1 通撰の所属字一覧

(1)〈陽声韻・一等〉

撰			通撰		字種数	延べ数	通撰		字種数	延べ数	通撰		字種数	延べ数	通撰		字種数	延べ数			
等位	声調	韻目	一等	平			上	去			送	一等			去	送			一等	去	送
開合			開				開				開				開						
重唇音	並 [b-]	濁	ボン-蓬 (1) 蓬 (2)		2	3															
重唇音	明 [m-]	次濁	モン-蒙 (2) 朦 ① (1) 蒙 ① (1)		3	4					モン-懵 ① (1) 朦 ② (1) 蒙 ② (1)		1	1							
輕唇音	敷 [f'-]	次清	ホン-豊 ① (2)		1	2															
舌頭音	端 [t-]	清	トン-東 (23) 凍 ① (1) 棟 (1) 鷓 (1)		4	26	トン-冬 (5)		1	5	トン-董 (2) 懂 (1)		2	3	トン-凍 ② (1)						
	透 [t'-]	次清	トン-通 (10)		1	10					トン-桶 ① (7)		1	7	トン-痛 (4)		1	4	トン-統 (1)	1	1
舌頭音	定 [d-]	濁	ドン-洞 (1) 筒 ① (5) 洞 ① (2) 童 (1) 同 20 (18) 銅 8 (7) トン-同 20 (2) 銅 8 (1)		6	37	デン-疼 4 (3) テン-疼 4 (1)		1	4	ドン-動 13 (8) トン-動 13 (5)		1	13	トン-洞 ② (2) ドン-筒 ② (5)						
	泥 [n-]	次濁					ノン-農 (3) ニオン-膿 (1)		2	4											
齒頭音	精 [ts-]	清	ツラン-棕 (1) 搜 (1) 鯨 ① (1)		3	3	ツラン-宗 (3)		1	3	ツラン-總 (4)		1	4	ツラン-鯨 ② (1) 搜 (1)		1	1			
	清 [ts'-]	次清	ツラン-葱 (1) 聰 (3) ジオン-匆 (4)		3	8															
	從 [dz-]	濁	ツラン-叢 (1)		1	1															
齒頭音	心 [s-]	清													ソン-送 (12) 鏡 (1)		2	13	ソン-宋 (1)	1	1
牙音	見 [k-]	清	コン-公 (11) 功 (4) 工 (2) 攻 ① (1) 蚣 ① (1)		5	19	コン-攻 ② (1)														
	溪 [k'-]	次清	コン-空 ① (17)		1	17					コン-孔 (1)		1	1	コン-空 ② (17) 控 (2)		1	2			
喉音	影 [ʔ-]	清	ウラン-翁 (1)		1	1									ヨン-甕 (1)		1	1			
	曉 [h-]	次清	ホン-烘 ③ (1)												ホン-烘 ④ (1)						
喉音	匣 [ɦ-]	濁	ホン-洪 (2) 鴻 ① (2) 烘 ① (1) 紅 (12)		4	17					ホン-鴻 ② (2)				ホン-烘 ② (1)						
半舌音	來 [l-]	次濁	ロン-籠 ① (4) 聾 (1) 龍 (1) 羸 龍 (1)		4	7					ロン-攏 (2) 籠 ② (4)		1	2	ロン-弄 (5)		1	5			
計					39	155			5	16			8	31			7	26	2	2	

注：「コン-控(2)」は、『広韻』に通撰の「苦貢切 引也告也」と江撰「苦江切 打也」とあり、原例が「無所控告 ツグヘキ処ガナイ」「無処控告哀情 カイジニヲ告クベキ所モナヒ」が通撰と一致している。

(2)〈陽声韻・三等〉

撰			通撰		字種数	延べ数	通撰		字種数	延べ数	通撰		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	三等	上			去	用						
開合			開				開				開			
重唇音	明 [m-]	次濁	モン-夢 ① 4 (3) モン-夢 4 (1)		1	4					モン-夢 ② 4 (3) モン-夢 4 (1)			
輕唇音	非 [f-]	清	フラン-封 ① (1) 楓 (1) 風 ① (26)		3	28					フラン-風 ② (26) 封 ② (1)			
	敷 [f'-]	次清	ホン-豊 ② (2) 蜂 ① (2)		1	2								
舌上音	奉 [v-]	濁	フラン-逢 5 (3) ホン-逢 5 (1) ケン-逢 5 (1)		1	5	フラン-奉 11 (7) ホン-奉 11 (3) ウラン-奉 11 (1)		1	11	ウラン-鳳 4 (2) ホン-鳳 4 (2)		1	4
	知 [t-]	清	チヨン-中 ① (22) 忠 (5)		2	27					チヨン-中 ② (22)			
舌上音	徹 [t'-]	次清					チヨン-寵 (1)		1	1				
	澄 [d-]	濁	ヂヨン-重 ① 13 (10) 虫 ① 14 (13) チヨン-重 13 (3) チ'ヨン-虫 14 (1)		2	27	ヂヨン-重 ② 13 (10) チヨン-重 13 (3)				ヂヨン-重 ③ 13 (10) 蟲 ② 14 (13) チヨン-重 13 (3) チ'ヨン-蟲 14 (1)			
齒頭音	娘 [ŋ]	次濁	ニオン-濃 (2)		1	2								
	精 [ts-]	清	ツラン-縱 ① 4 (3) ソラン-縱 4 (1)		1	4					ツラン-縱 ② 4 (3) ソラン-縱 4 (1)			
齒頭音	從 [dz-]	濁	ツラン-從 ① 12 (1) ツラン-從 12 (11)		1	12					ツラン-從 ② 12 (1) ツラン-從 12 (11)			
	心 [s-]	清					ソン-悚 (1)		1	1				
正齒音	邪 [z]	濁	ソン-松 (6)		1	6					ツラン-誦 (1)		1	1
	照 (章) [tʃ-]	清	チヨン-衆 ① (12) 終 (6) 鍾 (7) ツラン-蟲 (1)		4	26	チヨン-種 ① (5) 腫 (3)		2	8	チヨン-衆 ② (12) 種 ② (5)			
正齒音	穿 (昌) [tʃ'-]	次清	チヨン-充 (3) 衝 (2)		2	5					チヨン-銃 (1)		1	1
	審 (書) [ʃ-]	清	チヤン-蟾 (1)		1	1								
牙音	見 [k-]	清	コン-弓 (4) 供 ① (4) 共 ① (6) 恭 (7) 躬 (1)		5	22	コン-糞 ① (1)		1	1	コン-供 ② (4)			
	溪 [k'-]	次清					コン-恐 ① (8)		1	8	コン-恐 ② (8)			
喉音	群 [g-]	濁	キヨン-窮 5 (2) ギヨン-窮 5 (3)		1	5								
	曉 [h-]	次清	ヒヨン-兕 (4) 凶 (2)		2	6								
喉音	于 [y-]	次濁	ヨン-熊 (1) 雄 5 (4) ヒヨン-雄 5 (1)		2	6								
	羊 [j-]	次濁	ヨン-容 (7) 蓉 (1)		2	8	ヨン-勇 (3)		1	3	ヨン-用 (30)		1	30
半舌音	來 [l-]	次濁	ロン-籠 ③ (4) 龍 (7)		1	7								
半齒音	日 [ɳz-]	次濁	ジヨン-絨 (3) 絳 (1)		2	4	ジヨン-冗 (1)		1	1				
計					36	207			9	34			4	36

注：・「ケン-逢 5(1)」は声母の部分で説明したように、誤記である。
・「チヤン-蟾 (1)」は、書母の部分で述べたように、字形の類似する「椿-チヤン」による誤記。

(3)〈入声韻の字〉

撰			通撰		字種数	延べ数	通撰		字種数	延べ数	通撰		字種数	延べ数
等位			一等				三等				三等			
声調			入		字種数	延べ数	入		字種数	延べ数	入		字種数	延べ数
韻目			屋				屋				屋			
開合			開		字種数	延べ数	開合		字種数	延べ数	開合		字種数	延べ数
			開				開合				開合			
重唇音	幫 [p-]	清	ホ [°] -ト (1)		1	1								
	滂 [p'-]	次清	ホ [°] -撲 (2) 扑 (2)		2	4								
	明 [m-]	次濁	モ-木 (15) 沐 (1)		2	16								
輕唇音	非 [f-]	清												
	敷 [f'-]	次清												
	奉 [v-]	濁												
舌頭音	定 [d-]	濁	ド-獨 8(6) 讀 11(10) ト-獨 8(2) 讀 11(1)		2	19	ド-毒 3(2) ト-毒 3(1) 口毒 (1)	2	4					
	知 [t-]	清												
舌上音	徹 [t'-]	次清												
	澄 [d-]	濁												
	精 [ts-]	清	ヅヲ-鐵 (1)		1	1								
齒頭音	從 [dz-]	濁	ヅヲ-族 (1) 鑿 (1)		2	2								
	心 [s-]	清												
	邪 [z]	濁												
正齒音	照 (章) [tʃ-]	清												
	牀 (船) [dʒ-]	濁												
	審 (書) [ʃ-]	清												
	禪 [ʒ-]	濁												
牙音	見 [k-]	清	コ-穀 (3)		1	3								
	溪 [k'-]	次清												
	疑 [ŋ-]	次濁												
喉音	影 [ʔ-]	清	フ-屋 7(5) ヨ-屋 7(2)		1	7								
	曉 [h-]	次清												
	匣 [ɦ-]	濁	フ-斛 (1) 榭 (1)		2	2	コ-鶴 (1)	1	1					
	羊 [j-]	次濁												
半舌音	來 [l-]	次濁	ロ-鹿 (2) 碌 (1) 碌 (1) 輶 (2)		4	7								
半齒音	日 [ɲz-]	次濁												
計					18	62			3	5			24	101

注：・「逐-ギヨ 3(1) チヨ 3(2)」は澄母の部分で検討したように、「ギヨ」音注は誤記であり、「チヨ」音注は濁音読みの蘇州音から説明できない。

・「足-ツヲ 17(14) ツユイ 17(2) ツエ 17(1)」は、既に第三章第四節で検討したように、延べ 17 例の中、「ツユイ」の例は去声点「○」が付され、遇撰去声の「子句切」と対応している。「ツヲ」は通撰入声の「即玉切」と一致している。なお、「ツエ」は「ツヲ」による誤記の可能性が極めて高い。

1.2 江掇

江掇の字を表 5-2 にまとまっている。計 27 字種、延べ 83 字で、その内、陽声韻の字は 14 字種、延べ 46 字で、入声の字は 13 字種、延べ 37 字である。

(1) 陽声韻の場合

陽声韻所属字の場合について、重唇音の字に対して、「-アン」の音注となり、舌上音、牙・喉音の字に対して、「缸缸」2 字は「-アン」の音注で、それ以外の場合は「-ヤン」の音注となっている。

「カン-缸(1)缸(1)」について、「缸」は見母「古雙切」で、「缸」は匣母の「下江切」で、南京音は『江蘇省志・方言志』に「缸」が[teĩã](当時[kiã])、「缸」が[kã]となることが確認でき、2 字とも蘇州音は[kã]、杭州音は[kΛŋ]と発音し、「缸-カン」は蘇州・杭州言から説明でき、「缸-カン」両方言から説明できる。

このように、江掇陽声韻の字について、「缸」は吳方言と対応、「缸」は両方言から説明できる。これらの字以外、重唇音の字は「-アン」、重唇音以外「-ヤン」の音注となっている。

表 5-2-1 江掇陽声韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
重唇音	並明	-アン	[-aŋ]	[-a [~]]	○	[-ã]	○	[-Λŋ]	○
舌上音	知澄	-ヤン	[-jaŋ]	[-ua [~]]	『西』[-uaŋ] ^x	[-ã]	×	[-uΛŋ]	○
齒上音	初生								『三』 「-ユアン」
牙音	見溪	-ヤン	[-jaŋ]	[-ia [~]]	○	[-iã]	○	[-iΛŋ]	○

注：表の中、『西』は『西儒耳目資』の略称となる。下記同様。

表 5-2-1 のように、江掇の字に対する「-アン」「-ヤン」の音注は、南京音でも、蘇州・杭州音でも、主母韻が[-a]系の読みとなっている。

重唇音の字に対する「-アン」、牙音舌の字に対する「-ヤン」は南京、蘇州、杭州音のいれとも対応する。

舌上音と齒上音の字は南京音が[-ua[~]]、蘇州音が[-ã]、杭州音が[-uΛŋ]である。『同文備攷』では[-vŋ](牙音の字も)、『三音正譌』では拗音の「-ユアン」([-iaŋ])、『西儒耳目資』では[-uam](=[-uaŋ])となっている。舌上音知組と齒上音莊組の部分で検討したように、口蓋性の子音を示す「チ」「ヂ」の音注

は江撮の字が章組の字と合流したことを反映している。拗音「-ヤン」となるのは杭州音から説明できる。

このように、江撮陽声韻の字に対する音注は杭州音に対応する。

(2)入声韻の場合

入声韻所属字の場合について、重唇音の「ホ°-朴(1)」は「オ段」の音注、舌上・齒上音の字は「-ヨ」の音注となり、牙・喉音の字に「-ヤ」(見母「覺」「角」)、「-ヨ」(匣母「學」と見母「角」)、「オ段」(溪母「殼」と影母「握^{酉屋}」)の三種類の音注がある。

「^{酉屋}ヲ(1)」は、原例が「二字話」の「^{酉屋} ^{酉足}(ヲチヨ) ヒタナヒ」で、『広韻』未収で、意味が現代の「齷齪」と同じである。「齷」は影母入声の「於角切」で、「ヲ」と一致する。蘇州音は[-oʔ]で、「ヲ」と対応し、南京音の読みは確認できないが、後述するように、南京音の主母音が全て[-ɔ]となっているため、「ヲ」とも対応すると考えられる。

重唇音の「ホ°-朴(1)」¹⁴²と喉音影母の「ヲ-握(1)」は、蘇州音が[-oʔ]、南京音と杭州音が[-ɔʔ]で、「オ段」の音注はいずれの場合からも説明できる。

「覺-キヤ5(4)」は、声調点の部分で検討したように、多音字であるため、「キヤ」は江撰覺韻の「古岳切 曉也大也明也寤也知也」を注し、意味の異なる一つの読みと対応している。「角-キヤ4(3)キヨ4(1)」は、通撰屋韻の「盧谷切角里先生漢時四皓名又音覺」と江撰覺撰の「古岳切 芒也競也觸也説文曰獸角也」である。原例は下記のように、江撰の読みと一致している。


「キヨ」:^{ゾランライモ° ユウケ○ウキヨ}「六字話」從來沒有口角 曾テロ舌カナヒ

「キヤ」:^{ロキヤ}「菜蔬」鹿角 ヒヂキ 一名海鹿艸

「果瓜」^{リンキヤ}菱角 ヒシ 「樹竹」^{キヤツユウ}角楸 アツサ

葉(1988)によって、「覺」「角」2字は南京音では[-ioʔ]、蘇州音では文白異読があり、白話音が[-oʔ]、文語音が[-ioʔ]となり、杭州音では「覺」が[-ɔʔ] [-ioʔ]両読みで、「角」が[-ɔʔ]と発音する。『同文備攷』では[-pk]で、『磨光韻鏡』では「-ヤ」と記されている。このように、音注の「-ヤ」「-ヨ」は介音[i]を示すもので、「-ヤ」は『磨光韻鏡』と対応でき、つまり、当時の杭州音から説明でき、「-ヨ」は南京音と吳方言との双方から説明できる。

¹⁴² 重唇音の「ホ°-朴(1)」は、『広韻』に滂母江撰の「匹角切 木素又厚朴薬名」とあり、また、『集韻』に滂母通撰の「普木切 木皮」もある。原例は「樹竹」の「^{ホウノキ}厚朴 ホウノキ」であり、意味上では「匹角切」と一致するが、発音上では対応しない。蘇州音では[-oʔ]、杭州音では[-ɔʔ]との読みで、音注と一致しているので、「ホ°」は蘇州、杭州音から説明できる。

溪母の「コ-殻(2)」は原例が「蟲介」の「^{コサ°イ}殻菜 ミルクイ」「^{ホンシコ}蚪殻 カイノカラ」である。『広韻』に未収で、原例と同義の篆書繁体字「」があり、「苦角切 皮甲又説文曰从上擊下也一曰素也」である。また、『増韻』に「克角切」がある。南京音、蘇州音が[k' oʔ]、杭州音が[k' ɔʔ]となり、「コ」はいずれからも説明できる。

舌上音と齒上音の字は、南京音と杭州音が[-ɔʔ]、蘇州音では[-oʔ]となり、『三音正譌』では「-ヨ」ともなり、つまり、当時の杭州音と一致している。陽声韻の場合と同じ、「-ヨ」は江撮二等の知組、莊組が章組と合流したことを反映している。

このように、入声韻の場合は、「ホ°-朴(1)」「コ-殻(2)」2字は両方言と対応するものであり、また、「覺角」2字に対する「-ヤ」の音注も存在し、杭州音から説明できる。これ以外の場合は「-ヨ」が圧倒的に多く、両方言と対応している。

表 5-2-2 江撮入声韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
重唇音	滂	才段	[-o]	[-ɔʔ]	○	[-oʔ]	○	[-ɔʔ]	○
舌上音	知澄	-ヨ	[-jo]	[-ɔʔ]	×	[-oʔ]	×	[-ɔʔ]	○ 『三』「-ヨ」
齒上音	莊初生								
牙音	見溪	才段 -ヨ 「覺角-キヨ」	[-o] [-jo]	[-iɔʔ]	○	[-oʔ](白) [-ioʔ](文) 『同』[-pk]	○ ×	[-ɔʔ] (「覺」 [-ɔʔ] [-iɔʔ]) 「角」[-ɔʔ])	○ (「角」×) × 『磨』「-ヤ」 ○
		-ヤ 「覺角-キヤ」	[-ja]						
喉音	影匣	影母 才段	[-o]	[-ɔʔ]	○	[-oʔ]	○	[-ɔʔ]	○
		-ヨ 「學-ヒヨ」	[-jo]	[-iɔʔ]		[-oʔ](白) [-ioʔ](文)		[-iɪʔ] [-yɪʔ]	× 『磨』「-ヤ」 ×

入声韻の字と両方言の対応関係は表 5-2-2 の通りである。舌上音、齒上音の場合以外、牙音の字に対する音注は蘇州の白話音と対応できず、その他の場合は両方言から説明できる。

上述した江撮の陽声韻と入声韻を併せて、音注が殆ど両方言と対応しているが、入声の「-ヤ」の音注は杭州音からしか説明できない。つまり、全体的に、吳方言の杭州音に近いと言える。

なお、先行研究の謝(2016:82)は江撮入声の字について、主母音が陽声韻の主母音と異なり、一部の字が「才段」で表記されていると指摘している。しかし、上述したように、主母音[o]である「-ヨ」以外、謝(2016)に言及されていない呉方言の特徴と対応する「-ヤ」の存在が確認できた。

表 5-2 江摂の所属字一覧

(1)〈陽声韻開口・二等〉

撰			江 撰		江 撰			江 撰		
等 第			二 等		二 等			二 等		
声 調			平		上			去		
韻 目			江		講			降		
開 合			auŋ		auŋ			auŋ		
開 合			開 合		開 合			開 合		
重唇音	並 [b-]	濁			バン-棒 4(2)ハン-棒 4(1)ハ ^ン -棒 4(1)ホン-蚌 (2)			2	6	
	明 [m-]	次濁	バン-扈(1)	1	1					
舌上音	知 [t-]	清	チヤン-椿(1)	1	1					
	澄 [d-]	濁	ヂヤン-撞①3(2)チヤン-撞 3(1)ドン-幢①(1)	2	4			ヂヤン-撞②3(2)チヤン-撞 3(1)ドン-幢②(1)		
歯上音	穿(初)[tʂ'-]	次清	チヤン-窗(窓)(3)	1	3					
	審(生)[ʂ-]	清	シヤン-雙(6)	1	6					
牙音	見[k-]	清	キヤン-江(5)カン-缸(1)	2	6	キヤン-講(10)	1	10	キヤン-降②7(3)	
	溪[k'-]	次清	キヤン-腔(1)	1	1					
喉音	匣[h-]	濁	ヤン-降①7(4)カン-缸(1)	2	5					
計				11	27		3	16	0	3

注：・「バン-扈(1)」の場合について、原例が^{バンイユイ}「扈魚 チヌタイ」である。明母の「莫江切」で、音注と一致しない。また、『漢語大字典』に古文献に「通“龐”。高大。」「姓。也作“龐”。」との意味があり、「龐」字は並母の「薄江切」で、音注と一致している。

・「ドン-幢(1)」は、原例が^{ドンハン}「ハタ」であり、澄母の「宅江切 旛幢釋名曰幢幢也其兒兒幢幢然也」(平声)と「直絳切 后妃車幢」(去声)で、音注と対応しないが、『集韻』に音「徒東切」で、「漚容車幢帷也或从巾」とあり、発音と意味とも音注に一致している。つまり、「ドン」音注は定母の読みと対応している。しかし、蘇州音では濁音の[z-]、南京音では清音の[tʂ'-]と発音するので、両方言から説明できない。

・「ホン-蚌(2)」について、第四章の並母の部分で検討したように、声符「丰」の類推によるものと考えられる。

・「降-キヤン 7(3)ヤン 7(4)」は第三章第四節で検討したように、「キヤン」は見母去声の「古巷切 下也歸也落也」を注し、「キヤン」は南京、蘇州、杭州音のいずれからも説明できるが、「ヤン」は匣母平声の「下江切 降伏」を注し、杭州音と一致している。

(2)〈入声韻の字〉

撰			江 撰		字 種 数	延 べ 数
等 第			二 等			
声 調			入			
韻 目			覺			
開 合			auk			
重唇音	滂 [p'-]	次清	ホ ^ノ -朴(1)	1	1	
	知 [t-]	清	チヨ-桌(2)啄①(1)	2	3	
舌上音	澄 [d-]	濁	チヨ-濁(3)	1	3	
	照(莊)[tʂ-]	清	チヨ-捉(3)	1	3	
歯上音	穿(初)[tʂ'-]	次清	チヨ-西足(1)	1	1	
	審(生)[ʂ-]	清	チヨ-擲(1)	1	1	
牙音	見[k-]	清	キヤ-角①4(3)覺 5(4)キヨ-角 4(1)	2	8	
	溪[k'-]	次清	コ-殼(2)	1	2	
喉音	影[ʔ-]	清	ヲ-握(1)酉屋(1)	2	2	
	匣[h-]	濁	ヒヨ-學(学)(13)	1	13	
計				13	37	

1.3 宕掇

宕声の字は延べ 206 字種で、延べ 1,035 字である。その内、陽声韻の字は 161 字種、延べ 770 字で、入声韻の字は 45 字種、延べ 265 字である。用例を表 5-3 の(1)～(6)にまとめている。

(1)陽声韻の場合

陽声韻の場合、一等韻の所属字は計 47 字種、延べ 145 字である。音注は「-アン」となっている。

表 5-3-1 宕掇陽声韻の開口一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応		
重唇音	幫滂並明	-アン	[-aŋ]	[-a [~]] 『西』[-aŋ]	○	[-aŋ] 『磨』「ハ・ン・パン」		
舌頭音	端透定					[-ã] 『同』[-uaŋ]×	○	[-aŋ] 『磨』「-アン」
齒頭音	清從心							
牙音	見溪					[-ã] 『同』[-aŋ]	○	
喉音	影匣							
半舌音	來							

陽声韻の字について、対照する方言の中では、南京音と蘇州音では鼻音性質を有する発音となるが、杭州音では[-ŋ]として保存されている。共通点は同じ[a]系主母音と鼻音的韻尾を有することである。『同文備攷』が[-uaŋ]、『磨光韻鏡』が「-アン」、『西儒耳目資』は[am](=[-aŋ])である。表 5-3-1 のように、「-アン」は南京、蘇州、杭州音のいずれの場合からも説明できる。また、声母に清濁の区別があることから、音注が反映しているのは当時吳方言の特徴であるということになる。

三等の所属字は計 114 字種、延べ 625 字である。開口字の音注は、「-ヤン」となるのが一般的である。

表 5-3-2 のように、齒頭音、牙音、喉音、半舌音の字に対する「-ヤン」は、介音[i]もつ南京、蘇州、杭州音のいずれからも説明できる。

齒上音の字は南京音が[-ua[~]]、蘇州音が[-ã]、杭州音が[-uãŋ]となり、介音[i]を有する「-ヤン」音注はいずれの場合と対応しない。宕掇三等莊組のこれらの字は江掇二等の舌上音、齒上音の字と同じ、『同文備攷』では介音のない[-vŋ](牙音の字も)であるが、『西儒耳目資』は[-uam](=[-uaŋ])となり、

『三音正譌』と『磨光韻鏡』は同じ拗音音注の「-ユアン」で、介音 [i] を示している。つまり、「-ヤン」は杭州音と対応している。

表 5-3-2 宕摂陽声韻の開口三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応		
舌上音	知徹澄娘	-ヤン	[-jaŋ]	『西』[-aŋ] ×	『同』[-iã] ○	『磨』[-Λŋ]	○	
齒頭音	精清從心邪		[-jaŋ]	[-iã]	○	『磨』[-iã]	○	
齒上音	莊初崇生		[-jaŋ]	[-uã]	×	[-ã]	『三』『磨』[-ユアン]	○
正齒音	章昌書禪		[-jaŋ]	[-ã]	『西』[-aŋ] ×	『同』[-iã]	『磨』[-Λŋ]	○
牙音	見溪群疑		[-jaŋ]	[-iã]	○	[-iã]	○	[-iãŋ]
喉音	影曉羊							
半舌音	來		[-jaŋ]	[-iã]	○	[-iã]	○	[-iãŋ]
半齒音	日							

舌上音、正齒音、半齒音の字に対する「-ヤン」は、『同文備攷』は[-iaŋ]となり、『磨光韻鏡』では「-ヤン」とのように介音 [i] がある[-iaŋ]となっているが、『西儒耳目資』では[-am](=[-aŋ])である。つまり、「-ヤン」は杭州音から説明できる。

このように、三等開口の場合、音注が杭州音から説明できる。

表 5-3-3 宕摂陽声韻の合口一・三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応			
一等	牙音	見	「クハン」	[-uaŋ]	[-uã]	○	[-uã]	○	[-uãŋ]
	喉音	影匣	「ワン」						
		曉	「ハン」						
三等	軽唇音	非敷奉微	パン・バン	[-aŋ]	『西』[-aŋ] ×	『同』[-uã]	○	『磨』[-Λŋ]	○
			「ワン」	[-uaŋ]	[-uã]	○	[-uã]	○	[-uãŋ]
	牙音	溪	「クハン」	[-uaŋ]	[-uã]	○	[-uã]	○	[-uãŋ]
	喉音	影曉于	「ワン」						

合口の場合、軽唇音の字に対して、「ハ̃ン・バン」となる字は『同文備攷』が[-uaŋ]、『磨光韻鏡』が同じ「ハ̃ン・バン」となり、「ハ̃ン・バン」は杭州音と対応でき、呉方言の特徴の現れである。

「ハ̃ン・バン」以外の例を除き、一・三等を問わず、同じ「-ハン」「ワン」となっている。曉母の「況-ハン」以外の字に対する「クハン」「ワン」は南京、蘇州、杭州音に合口の介音 [u] をもつ発音と一致している。『磨光韻鏡』では「-ワン」である。

「况-ハン」は、『同文備攷』が[-uaŋ]、『西儒耳目資』が[-oam](=[-uaŋ])となり、当時の呉方言でも官話でも介音[u]を有する。つまり、「ハン」も介音[u]を反映する音注の一つである。

ここから、「ワ」「ハ」「ハ°」「バ」は合口の介音[u]を示す音注法であることが分かる。合口の字に対する「ハン」「ハ°ン」「バン」「クハン」「ワン」は南京音、蘇州・杭州音のいずれからも説明できるが、「ハ°ン・バン」などのように清濁の区別があることから、音注は呉方言の特徴を反映していることが分かる。

上記の検討を通して、宕撰の陽声韻の場合、開口一等の字は「-アン」で、開口三等の字は「-ヤン」である。合口字は「ハン」「ハ°ン」「バン」「クハン」「ワン」となっている。陽声韻の字と両方言との対応関係について、全体的から見ると、杭州音の特徴によく一致している。

(2)入声韻の場合

入声韻の場合について、一等は計 24 字種、延べ 149 字である。「ネ-鰐(1)」「へ°-菹(1)」を除き、開口・合口を問わず、音注が全て「オ段」である。

表 5-3-4 宕攝入声一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応
重唇音	幫並明	オ段	[-o]	[-oʔ] ○	[-oʔ] (「泊」[-əʔ]○)	[-oʔ] (「泊」[-vʔ]×)
舌頭音	透定泥					
齒頭音	精從心					
牙音	見疑					
喉音	影匣					
半舌音	來					

「ネ-鰐(1)」は疑母宕攝の「五各切」で、原例が「龍魚」の「鰐魚^{ネイユイ} ワニ」である。既に疑母の部分で論述したように、疑母の字に対して、主にガ行、アヤワ行、ナ行との三種類の音注となっている。既に述べたように、ナ行の音注で記する字は呉方言の特徴を反映する。しかし、南京音、蘇州音、杭州音の読みが確認できないので、いずれからも説明することができない。

「へ°-菹(1)」は、並母の部分で触れたことがあり、原例が「菜蔬」の「菹菜^{ヘ°サウイ} トウナ」であり、方言の読みが確認できず、「ペ」は清音となる南京音に近い。

表 5-3-4 のように、入声一等開・合口の字は、蘇州音が[-oʔ]、南京音と杭州音が[-əʔ]となり、「オ段」の音注はいずれにも対応する。

三等は計 21 字種、延べ 116 字である。開口の字は、軽唇音の「敷-ウヲ」が「オ段」で、それ以外、「-ヤ」となっている。また、「-ヨ」となる「ジヨ-若」も存在している。

軽唇音の「敷-ウヲ」は、南京音が[-uʔ]、蘇州音が[-oʔ]、杭州音では[-əʔ]となり、「オ段」の音注が南京音と対応できず、蘇州・杭州音から説明できる。

「若-ジャ 20(19)ジヨ 20(1)」は、『広韻』に仮撰の「人賒切 蜀地名」(平声)、「人者切 乾草」(上声)と宕攝入声の「而灼切 如也順也汝也辞也」とあり、音注が明かに宕攝入声の読みと一致している。また、原例は以下のようになっている。

「ジヨ」:^{ジヨモ°ズウテズウツエ}「長短話」若没事的時節

「ジャ」:^{ツランイ、ジャホウ}「四字話」^{尊意若何}「六字話」^{ハア、ファイジャカンゾエンチャ○ウ}「^{テウエンジャルイ}四字話」^{尊意若何}「^{ジャヤ●ウユツエンチン}六字話」^{ジャヤ○ウツツ、ハクハイウヲ}「^{ジャウヲズウチユイコンユウイユイリ}四字話」^{若伏事主公有餘力}「^{ジャユウサ○ウビイ}六字話」^{若有臊皮}
「^{ジャツアイナア、ライファイホ、イハア、ケン}四字話」^{若在那裡飛盃花間}「^{スエンス、エンジャユウコンフウ}六字話」^{先生若有空夫}「^{ニイジャモ、ズウ}四字話」^{你若沒事}
「^{リンランジャヤ○ウツユイタア、ウヲヒヤアジャルウ}四字話」^{令郎若要娶他}「^{スエンス、エンジャユウキンゴウナア、シウ}六字話」^{或遐若邇}「^{ニイジャケン、ジウト}四字話」^{先生若有經我那首}
「^{ニイジャケン、ジウト}四字話」^{你若肯受托}「^{シヤウツウジャホウ}六字話」^{要子若何}「^{ジャフ、ズウチンチンダア、ヂヤンフウ}四字話」^{若不是正真大丈夫}
「^{ゴウチエ、ライジャユウズウクウ}四字話」^{我這裡若有事故}「^{ジャパ、ア、キンツウヘ○ウズ、エン}六字話」^{若把今之後生}「^{ジャコウヒンウ、イユイリ}四字話」^{若果行無餘力}

「ジヨ」の「^{ジヨモ、ズウテズウツエ}若没事的時節 若用事ナクンハ」と「ジャ」の「^{ニイジャモ、ズウ}你若沒事 汝若ヨウジナクンハ」は同じ「長短話」のもので、同じ語もあり、意味に違いが存在しない。南京音は[-ɔʔ]、蘇州音は[-aʔ]、杭州音は[-ɔʔ][-uɔʔ]となる一方、『同文備攷』は[-iak]、『磨光韻鏡』は「-ヤ」となっている。「ジャ」は当時の杭州音と対応するが、「ジヨ」は説明できない。

なお、「勺-チャ」は蘇州音でも南京音でも[-oʔ]と発音するため、両方言から説明できない。一方、杭州音では[-eʔ]読みとなり、音注と対応している。

このように、軽唇音以外の「-ヤ」の例は『同文備攷』では全て[-iak]となり、『磨光韻鏡』では「-ヤ」である。「-ヤ」は杭州音から説明できる。「ジヨ-若」は例外である。

表 5-3-5 宕攝入声三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応	
軽唇音	奉	才段	[-o]	[-uʔ] ×	[-oʔ] ○	[-ɔʔ]	
舌上音	澄	-ヤ	[-ja]	[-ɔʔ] ×	[-aʔ] ×	[-eʔ]	
齒頭音	精清		[-ja]	[-yaʔ] ×	[-iaʔ] ○	[-yɪʔ]	
正歯音	章昌禪		[-ja]	[-ɔʔ] ×	[-aʔ] ×	[-eʔ]	
牙音	見溪疑		[-ja]	[-yaʔ] ×	[-iaʔ] ○	脚 [-iɪʔ]	却 [-iɪʔ] [-yɪʔ]
喉音	影于羊					約 [-yɪʔ]	葉 [-iɪʔ]
半舌音	来					[-iɪʔ]	[-yɪʔ]
半齒音	日		[-ja]	[-ɔʔ] ×	[-aʔ] ×	弱 [-uɔʔ]	若 [-ɔʔ] [-uɔʔ]

表 5-3-5 のように、入声韻の一等の字と三等開口の軽唇音の字は「才段」の音注であり、一等の場合、南京、蘇州、杭州音のいずれから説明できるが、三等の場合、蘇州・杭州と対応している。それ以外の「-ヤ」は、呉方言の特徴を反映し、杭州音と一致している。

こうして、宕攝の字について、陽声韻の場合は両方言から説明でき、入声

韻の場合は杭州音と一致している。声母の特徴も含め、全体的に、音注は杭州音から説明できる。

なお、先行研究には、謝(2016:82)は「心母的“藏”注音为ヅアン dzaŋ」のように、「藏」を心母の例として挙げているが、陽声韻の「藏」が音「昨郎切」「徂浪切」で、従母所属で、心母の字ではない。また、入声の字について、「宕撮開口一等入声字与阳声韵不同,三等的相同,合口入声字例字少。如:帮母的“博ホ[ho]”、影母的“约ヤ[ia]”。」と指摘しているが、「-ヨ」となる「ジヨ-若」について、謝(2016)には言及がない。

江・宕両撮の字に対して、陽声韻について、江撮と宕撮開口の字が「-アン」「-ヤン」の音注である。入声韻について、江撮の場合、重唇音、溪・影母の字は「オ段」、それ以外は「-ヨ」であり、宕撮の場合、一等の字と三等軽唇音の字が「オ段」、それ以外は「-ヤ」となるのが一般的である。

入声韻の江撮覺韻と宕撮藥韻の字について、先行研究の高松(1985a)は、官話の資料で両韻の合流を反映する「-ヨツ」に統一されるのに対して、『唐話纂要』に浙江音を反映する「-ヤツ」「-ヤ」が混在しているとしている。

しかし、本章の 1.2 と 1.3 で挙げた両韻の例が下記の通りである。

江撮覺韻

「-ヨ」:チヨ-桌啄捉 𠵽足𠵽 ヂヨ-濁 キヨ-角 ヒヨ-學

「-ヤ」:キヤ-角 5(3)覺 5(4)

宕撮藥韻

「-ヤ」:チヤ-着著酌勺綽 ヂヤ-着著 ツヤ-雀鵲 キヤ-脚却

シヤ-芍 ジャ-若弱鶻蕪 ヤ-約藥躍鑰 リヤ-略

「-ヨ」:ジヨ-若 20(1)

「-ヨ」・「-ヤ」両音注をもつのは、覺韻の「角覺」、藥韻の「若」である。この 3 字以外、覺韻が「-ヨ」、藥韻が「-ヤ」となり、はっきり区別していることが分かる。

既に検討したように、「キヤ-覺角」2 字は異なる意味によって音注が区別され、「-ヤ」は『磨光韻鏡』の「-ヤ」と一致し、つまり、より古い杭州音から説明できるが、「ジヨ-若」は例外で、説明できない。

覺韻(「-ヨ」)と藥韻(「-ヤ」)の字について、『同文備攷』では覺韻が[-ɸk]で、藥韻が[-iak]となり、『磨光韻鏡』では両韻の字がともに「-ヤ」と記されている。

つまり、両韻の字は元の主母音が同じ[a]だったことが分かる。

王(1980:174-175)によれば、入声の読みを保存する方言において、中古音の auk(覺韻)と ak(藥韻)の齊齒呼 iak が反り舌音の声母(知・莊組)の後では合口呼に転化して、主母音 [a]が韻頭の影響を受け[o]に変化して、宕攝鐸韻と合流した。同書の音注に見られるのは、知・莊組の覺韻の字(桌啄捉 酉足 擲濁)はこうした変化が起きて、主母音が既に[o]になったため、「-ヨ」となった。これに対して、藥韻の場合は主母音の変化がまだ起きていないため、主母音 [a]のまま、「-ヤ」となる。

知・莊組以外の字について、王(1980:167-168)によれば、現代北京音話では、齊齒呼が撮口呼に変化した。同書の音注は、こうした変化がまだ発生していなく、覺韻が io、藥韻が ia の齊齒呼の段階に止まっていることを反映している。

表 5-3 宕摂の所属字一覧

(1)〈陽声韻開口・一等〉

撰			宕摂	字種数	延べ数	宕摂		字種数	延べ数	宕摂	
等位			一等			一等				一等	
声調			平	字種数	延べ数	上		字種数	延べ数	去	
韻目			唐			蕩				宕	
開合			aŋ			aŋ				aŋ	
			開			開				開	
重唇音	幫 [p-]	清	ハ ^ン -幫 (6)	1	6	ハ ^ン -榜 (1)	1	1	ハ ^ン -榜 (5)	1	5
	並 [b-]	濁	バン-旁 (1)傍 ① (1)	2	2				バン-傍 ② (1)		
	明 [m-]	次濁	マン-忙 (1)	1	1	マン-莽 ① (1)シ-蟒 (1)	2	2			
舌頭音	端 [t-]	清	タン-蟻 (1)當 ① (33)	2	34				タン-當 ② (33)		
	透 [t'-]	次清	タン-盪 ① (1)	1	1	タン-佻 ① (1)	1	1	タン-佻 ② (1)蕩 ② 3(1)盪 ② (1)ダン-蕩 3(2)		
	定 [d-]	濁	タン-糖 6(1)搪 (1)盪 ③ (1)ダン-糖 6(5)唐 (3)堂 (3)棠 (2)螳 (1)	6	16	タン-蕩 ① 3(1)ダン-蕩 3(2)	1	3			
歯頭音	清 [ts'-]	次清	サ ^ン -滄 ① (2)艙 (3)蒼 ① (2)鶻 (1)西倉 (1)	5	9	サ ^ン -蒼 ② (2)					
	從 [dz-]	濁	ヅアン-藏 ① (3)	1	3				ヅアン-藏 ② (3)		
	心 [s-]	清	サン-桑 (1)喪 ① (1)	2	2				サン-喪 ② (1)		
牙音	見 [k-]	清	カン-剛 (2)鋼 ① (1)	2	3				カン-鋼 ② (1)		
	溪 [k'-]	次清	カン-康 (1)	1	1	カン-慷 (1)	1	1			
喉音	匣 [ɦ-]	濁	ハアン-行 ① 34(4)	1	4						
半舌音	来 [l-]	次濁	ラン-浪 ① (4)狼 (3)郎 (5)娘 (1)	4	13				ラン-浪 ② (4)		
計				29	95		6	8		1	5

注:「シ-蟒(1)」は、既に明母の部分で検討した。『広韻』の反切が「模朗切」で「マン」となるのが通例だが、原例の「^{シゼニ}シウバミ」が「シ」で合わず、「マン」の書き間違いの可能性が大きい。

(2)〈陽声韻開口・三等〉

撰			宕摂	字種数	延べ数	宕摂		字種数	延べ数	宕摂	
等第			三等			三等				三等	
声調			平	字種数	延べ数	上		字種数	延べ数	去	
韻目			陽			養				漾	
開合			iaŋ			iaŋ				iaŋ	
			開			開				開	
舌上音	知 [t-]	清	チヤン-張 ① (12)	1	12	チヤン-長 ① 24(13)	1	13	チヤン-張 ② (12)帳 (9)	1	9
	徹 [t'-]	次清							チヤン-暢 (1)	1	1
	澄 [d-]	濁	チヤン-場 (場)(3)腸 (腸)(1)チヤン-長 ② 24(11)	3	15	チヤン-丈 10(1)チヤン-丈 10(9)杖 (2)仗 ① (1)	3	13	チヤン-仗 ② (1)		
	娘 [ŋ]	次濁	ニヤン-娘 (14)	1	14						
歯頭音	精 [ts-]	清	ツヤン-將 ① (19)漿 (2)觴 (1)	3	22	ツヤン-漿 (1)漿 (1)	2	2	ツヤン-將 ② (19)醬 (2)	1	2
	清 [ts'-]	次清	ツヤン-搶 ① (3)鎗 ① (5)	2	8	ツヤン-搶 ② (3)					
	從 [dz-]	濁	ツヤン-牆 (1)薑 ① 2(1)ツヤン-牆 (1)薑 2(1)	3	4						
	心 [s-]	清	スヤン-相 ① (46)箱 (2)廂 (6)	3	54	スヤン-想 (14)キエン-簾 (1)	2	15	スヤン-相 ② (46)		
歯上音	邪 [z]	濁	ヅヤン-祥 (2)詳 ① 2(1)ツヤン-詳 2(1)	2	4	ヅヤン-象 (2)像 (2)	2	4			
	照 (莊) [tʂ-]	清	チヤン-莊 (2)裝 ① (3)粧 (3)	3	8				チヤン-壯 (1)装 ② (3)	1	1
	穿 (初) [tʂ'-]	次清	サ ^ン -瘡 (1)	1	1						
	牀 (崇) [dʂ-]	濁	ヂヤン-床 4(3)チヤン-床 4(1)	1	4				ヂヤン-狀 (1)	1	1
正歯音	審 (生) [ʃ-]	清	シヤン-霜 (1)孀 (1)	2	2	シヤン-爽 (3)	1	3			
	照 (章) [tʃ-]	清	チヤン-彰 (3)樟 (1)章 (4)障 ① (2)	4	10	チヤン-掌 (3)	1	3	チヤン-障 ② (2)		
	穿 (昌) [tʃ'-]	次清	チヤン-昌 (1)菖 (1)猖 (1)	3	3				チヤン-唱 (4)	1	4
	審 (書) [ʃ'-]	清	シヤン-商 (7)傷 ① (4)	2	11	シヤン-賞 (2)响 (1)	2	3	シヤン-傷 ② (4)		
牙音	禪 [ʒ-]	濁	ヂヤン-常 16(10)償 (1)嘗 2(1)チヤン-常 16(5)嘗 2(1)ツヤン-常 16(1)	3	19	ジヤン-上 ① 60(1)	1	1	ジヤン-尚 (8)上 ② 60(50)シヤン-上 60(9)	1	67
	見 [k-]	清	キヤン-韁 (1)薑 (1)	2	2	キヤン-襪 (1)	1	1			
	溪 [k'-]	次清	キヤン-蜩 (1)	1	1						
	群 [g-]	濁	ギヤン-強 13(6)キヤン-強 13(6)	1	13						
喉音	疑 [ŋ-]	次濁				ニヤン-仰 ① (2)	1	2	ニヤン-仰 ② (2)		
	影 [ʔ-]	清	ヤン-央 (5)殃 (2)殃 (1)鴛 (1)	4	9						
	曉 [h-]	次清	ヒヤン-香 (13)郷 (8)	2	21	ヒヤン-享 (2)響 (3)響 ① (1)	3	6	ヒヤン-向 ① (8)響 ② (1)	1	8
半舌音	羊 [j-]		ヤン-洋 ① (3)羊 (5)佯 ① (1)揚 (4)楊 (6)樣 (20)陽 (2)	7	41	ヤン-痒 ① (2)養 (養 3)① (8)	2	10	ヤン-恙 (7)養 (養 3)② (8)	1	7
	来 [l-]	次濁	リヤン-椽 (1)良 (7)量 ① (7)樑 (1)涼 ① 7(6)糧 (2)粮 (1)サヤン-涼 7(1)	7	26	リヤン-兩 ① 31(30)	1	31	リヤン-亮 (5)量 ② (7)涼 ② 7(6)兩 ② 31(30)サヤン-涼 7(1)	1	5
半歯音	日 [ɳz-]	次濁	ジヤン-韞 ① (1)	1	1	ジヤン-曠 (3)	1	3	ジヤン-讓 5(1)シヤン-讓 5(1)	1	5
計				62	305		24	110		11	110

注:「ワン-忘(4)」は、『広韻』に開口の「武方切」(平声)と合口の「巫放切 遺忘又音亡」(去声)とあり、「四字話」の「不要忘記 ワスルルナ」のように、合口の読みと一致している。

- ・「响」は『広韻』に未収。『康熙字典』に「[篇海]始兩切音賞响午也」とあり、書母宕摂所属。
- ・「涼-リヤン 7(6)サヤン 7(1)」は「呂張切」で、「サヤン」の例が「涼傘(サヤンサン) ヒカラカサ」で、「傘」に対する「サン」の影響による誤記と考えられる。

「キエン-簾(1)」は、心母部分で検討したように、原例が「龍魚」の「^イ一字簾 ホンカマス」で、音注が「息兩切 乾魚腊也」対応できず、「卷拳圈-キエン」の声符の類推による誤記の可能性がある。

- ・「讓-ジヤン 5(1)シヤン 5(1)」は宕摂の「人掾切」で、「シヤン」の例は初出でなく、濁点が省略されたと考えられる。

・「サ^ン-瘡(1)」は例外となり、既に初母の部分で検討したように、「サ^ン」は杭州音 [ts'uɑŋ] と対応する

(3)〈陽声韻合口・一等〉

撰			宕撰		宕撰		宕撰		宕撰		
等位			一等		一等		一等		一等		
声調			平		上		去		宕		
韻目			唐		蕩		宕		宕		
開合			uaŋ		uaŋ		uaŋ		合		
牙音	見[k-]	清	クハン-光①(9)	1	9	クハン-廣(2)	1	2	クハン-光②(9)		
喉音	影[ʔ-]	清	ワン-汪①(1)	1	1				ワン-汪②(1)		
	曉[h-]	次清	ハン-荒①(1)誑(3)	2	4	ハン-慌(2)	1	2	ハン-荒②(1)		
	匣[h-]	濁	ワン-黄(12)皇(1)風(1)惶(4)蝗①(1)	5	19						
計				9	33		2	4		0	0

(4)〈陽声韻合口・三等〉

撰			宕撰		宕撰		宕撰		宕撰		
等位			三等		三等		三等		三等		
声調			平		上		去		漾		
韻目			陽		養		漾		漾		
開合			yaŋ		yaŋ		yaŋ		合		
輕唇音	非[f-]	清	ハン-方(20)坊(4)	2	24	ハン-放①(9)	1	9	ハン-放②(9)		
	敷[f'-]	次清	ハン-妨①(3)	1	3	ハン-紡(3)	1	3	ハン-妨②(3)訪(3)	1	3
	奉[v-]	濁	ハン-防①9(3)バン-防9(6)ワン-房①(7)	2	16				ハン-防②9(3)バン-防9(6)		
	微[w-]	濁	ワン-亡(2)望①(11)	2	13	ワン-網(2)	1	2	ワン-望②(11)妄(1)忘(4)	2	5
牙音	溪[k'-]	次清	クハン-筐(1)	1	1						
喉音	影[ʔ-]	清				ワン-枉(2)汪③(1)	1	2			
	曉[h-]	次清							ハン-況(4)	1	4
	于[y-]	次濁				ワン-往(14)	1	14	ワン-旺(1)	1	1
計				8	57		5	30		5	13

(5)〈入声韻・一等〉

撰			宕撰		宕撰		宕撰	
等位			一等		一等		一等	
声調			入		入		入	
韻目			鐸		鐸		鐸	
開合			ak		uak		合	
重唇音	幫[p-]	清	ホ [°] -搏(1)	1	1			
	並[b-]	濁	ホ [°] -泊(1)ボ-薄(2)へ [°] -箔(1)	3	4			
舌頭音	明[m-]	次濁	モ-莫(16)寞(4)	2	20			
	透[t'-]	次清	ト-托(託1)(14)ツエ-攤(1)	3	15			
齒頭音	定[d-]	濁	ト-鐸(1)	1	1			
	泥[n-]	次濁	ノ-諾(1)	1	1			
牙音	精[ts-]	清	ツヲ-作24(21)	1	21			
	從[dz-]	濁	ヅヲ-昨(2)	1	2			
喉音	心[s-]	清	ソ-索(11)	1	11			
	見[k-]	清	コ-各(18)閣(2)	2	20			
半舌音	疑[ŋ-]	次濁	ネ-鰓(1)	1	1			
	影[ʔ-]	清	ヲ-惡18(13)	1	13	ウヲ-婁(1)	1	1
半齒音	匣[h-]	濁	コ-絡①(1)ホ-鶴(1)	2	2			
	來[l-]	次濁	ロ-落(22)楽①(13)絡(1)	3	36			
計				23	148		1	1

注:「ソ-索(11)」は、11例が全て「ソ」音注となっている。『広韻』に心母宕撰の「蘇各切 盡也散也又繩索亦姓出燉煌」と生母梗撰の「山戟切 求也」(陌韻)、「山責切 求也取也好也」(麥韻)とある。原例の「索心 イツソノコトニ」^{モ・ツキヤア}「沒索價 カケネハナヒ」^{キ・ウツ}「草索 ナハ」等のように、音注が心母の読みと対応している。

(6)〈入声韻・三等〉

撰			宕撰		宕撰		宕撰		宕撰	
等位			三等		三等		三等		三等	
声調			入		入		入		入	
韻目			藥		藥		藥		藥	
開合			iak		iak		iak		合	
輕唇音	奉[v-]	濁	ウヲ-縛①(1)	1	1					
舌上音	澄[d-]	濁	チヤ-着24(6)著10(8)ヂヤ-着24(17)著10(2) チヨ-着24(1)	2	34					
齒頭音	精[ts-]	清	ツヤ-雀(4)	1	4					
	清[ts'-]	次清	ツヤ-鶻(2)	1	2					
正齒音	照(章)[tɕ-]	清	チヤ-酌(3)勺(2)	2	5					
	照(昌)[tɕ'-]	次清	チヤ-綽(1)	1	1					
牙音	禪[ʃ-]	濁	シヤ-芍2(1)シヨ-芍2(1)	1	2					
	見[k-]	清	キヤ-脚(9)	1	9					
喉音	溪[k'-]	次清	キヤ-却(5)	1	5					
	影[ʔ-]	清	ヤ-約①(9)	1	9					
半舌音	于[y-]	次濁						キユイ-饜(1)	1	1
	羊[j-]	次濁	ヤ-藥13(12)躍(2)鑰(1)ヨ-藥13(1)	3	16					
半齒音	來[l-]	次濁	リヤ-略(3)	1	3					
半齒音	日[ɲz-]	次濁	ジヤ-若①20(19)弱(2)鶻(1)鶻(1)ジヨ-若20(1)	4	24					
計				20	115				1	1

注:・「チヨ-着24(1)」は「小曲」の例である。
 ・「キユイ-饜(1)」について、于母の部分で検討したように、原例は「器用」の「饜兒(キユイルウ) ワク」で、音注が「王縛切」と一致できず、音注「キユイ」は「ギユイ-衢懼」の声符による類推と推測したいが、濁音声母の字なので、説明できない。
 ・「着-チヨ24(1)」「藥-ヨ13(1)」「芍-シヨ2(1)」は「小曲」の用例である。

1.4 臻撮

臻撮所属字は計 178 字種、延べ 1,735 字である。陽声韻の字は計 130 字種、延べ 825 字であり、入声韻の字は計 48 字種、延べ 910 字である。表 5-4 は臻撮の字の一覧表である。

(1) 陽声韻の場合

陽声韻の場合について、開口一等の牙・喉音の字は、音注が「-エン」音注となっている。開口三等の字は、「ツワン-襯(1)」以外は、「-イン」である。

「ツワン-襯(1)」は「初観切 近身衣」であり、原例が「三字話」の「幫襯我我ニカセイスル」である。南京音では[-əŋ]、蘇州・杭州音では[-ən]となり、同じ主母音[ə]をもつ発音で、音注と対応する。一方、「襯」以外の開口三等の字は全て「-イン」の音注となり、後述するように、当時の方言から説明できず、例外となる。

なお、「エヘン-恩(20)」について、「烏痕切」で、同書では影母の字に対して、アヤワの音注となっているのが一般的であり、「エ」は影母を示すものとなる。また、南京音は[-əŋ]、蘇州・杭州音は[-ən]であり、「-ヘン」は主母音[ə]を有すること、「エ-」はゼロ声母の特徴が反映されている。

表 5-4-1 のように、開口一等の牙・喉音の字は、南京音が[-əŋ]、蘇州・杭州音が[-ən]となり、「-エン」の音注はいずれの場合からも説明できる。

表 5-4-1 臻撮陽声開口一・三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応		
一等	牙音	見	-エン	[-eŋ]	[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○
	喉音	影匣								
三等	重唇音	幫並明	-イン	[-iŋ]	[-iŋ]	○	[-iŋ]	○	[-iŋ]	○
	舌上音	知澄			[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○
					『西』[-iŋ]	『同』[-iŋ]	『磨』[-イン]			
	齒頭音	精清 從心邪			[-iŋ]	○	[-iŋ]	○	[-iŋ]	○
	齒上音	莊初			[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○
	正齒音	章船書禪			『西』[-iŋ]	『同』[-iŋ]	『磨』[-イン]			
	牙音	見群疑			[-iŋ]	○	[-iŋ]	○	[-iŋ]	○
	喉音	影曉羊								
	半舌音	來								
半齒音	日	[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○			
		『西』[-iŋ]	『同』[-iŋ]	『磨』[-イン]						

開口三等の場合、重唇音、齒頭音、牙音、喉音、半齒音の字は、蘇州音、南京音が[-iŋ]、杭州音が[-iŋ]となり、「-イン」はいずれの場合と対応している。

舌上音、齒上音、正齒音、半齒音の字は、南京音が[-əŋ]、蘇州・杭州音が[-ən]となっている一方、『同文備攷』と『西儒耳目資』ではともに[-in]と記され、『磨光韻鏡』でも「-イン」となっていることから、「-イン」は南京音と吳方言とのいずれから説明できる。

表 5-4-1 のように、開口三等の字は、「-イン」は両方言に対応する。「ツワン-襯」は例外である。

合口一等の字に対して、重唇音の場合は、明母の字が「モ(モ°)+ン」音注で、明母以外、「盆-バワン」3 例を除き、「-エン」となっている。舌頭音、齒頭音、喉音、半舌音の場合は、「-ワン」が一般的である。牙音の場合は、音注が「クン」である。

中に、「婚-ホワン 3(2)ホン 3(1)」「嫩-ノワン 2(1)ノン 2(1)」はそれぞれ二種類の音注をもち、「ホワン」と「ホン」、「ノワン」と「ノン」は主母音[-ə]を有する両方言から説明でき、つまり、同じ発音を示す異なる音注法でもある。明母の「モン」「モ°ン」音注について、右肩点の部分で検討したように、この「°」は声母の違いでなく、主母音[ə]を有する韻母を示している。

「盆-バワン 7(3)ベエン 7(4)」は、「蒲奔切 瓦器亦作瓮」で、原例が下記のように、意味に違いが見られない。

「バワン」:^{ヒヤンバワン}「器用」香盆 コウボン ^{ホバワン}火盆 火バチ ^{エンバワン}烟盆 エンホ
「ベエン」:^{チヤアベエン}「器用」茶盆 チヤボン ^{トベエン}托盆 カヨヒボン ^{エロンベエン}圓盆 マルボン
「果瓜」^{へウベエン}覆盆 イチゴ

「バワン」は読みの声母と韻尾とも対応でき、問題がないが、「バワン」は介音[u]の存在を反映しているもので、読みと対応しない。また、南京音は[-əŋ]、蘇州・杭州音は[-ən]で、主母音[ə]をもち、介音[u]がもたないので、いずれも「バワン」と合わない。このように、合口の字で、「バワン」は主母音がこの等に対応したものでなく、意味から並母の「盤」の音を記した可能性がある。

重唇音に対する「モ(モ°)+ン」「-エン」について、既に触れたように、唇音の後に[-ə]がくる場合、「才段」で記するが同書の音注法の一つである。それに、右肩点の部分で検討したように、これらの字に用いられる「°」は[-ə]を示す符

号である。現代発音だけでなく、『西儒耳目資』は[-uən](=[-uɛn])、『同文備攷』は[-ən]で、ともに[-ə]を有している。このように、「モ(モ°)+ン」「-エン」は[-ə]をもつ南京、蘇州、杭州音のいずれとも対応する。

舌頭音、歯頭音、喉音、半舌音の「-ヲン」の音注について、舌頭音、歯頭音の字は『西儒耳目資』が[-un]、『同文備攷』が[-ən]で、喉音、半舌音の字は『西儒耳目資』が[-oən](=[-uɛn])、『同文備攷』が[-uən]、[-yən](半舌音)、『磨光韻鏡』が「-ヲン」となり、「-ヲン」は[-uə]を有する発音と一致するため、杭州音に最も対応する。

牙音の場合、『磨光韻鏡』でも「クン」となっている。「クン」は『磨光韻鏡』と一致し、つまり、杭州音から説明できる。杭州音だけでなく、蘇州音でも南京音でも[-uə-]をもち、つまり、介音[-u]をもつ[-uən]と対応するため、「クン」は主母音[-ə]とも示す音注法の一つと考えられる。

表 5-4-2 のように、臻撮合口一等の字に対する音注は杭州音に最も近い。

表 5-4-2 臻撮陽声合口一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
重唇音	幫滂並	-エン	[-ɛn]	[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○
	明	モ(モ°)+ン	[-on]					『磨』「-エン」	
舌頭音	定泥	-ヲン	[-on]	[-uən]	○	[-ən]	×	屯 [-uən] 嫩 [-ən]	○
歯頭音	精清從心							『磨』「-ヲン」	
牙音	見溪	-ウン 「クン」	[-un]	[-uən] 『西』[-iun]	×	[-uən] 『同』[-uən]	×	[-uən] 『磨』「クン」	○
喉音	影曉匣					[-uən]	○	[-uən]	○
半舌音	来	-ヲン	[-on]	[-uən]	○	[-ən]	×	[-ən] 『磨』「-ヲン」	○

合口三等の字について、軽唇音の場合、非・敷母の字が「フン」、奉・微母の字が「ウエン」となっている。表 5-4-3 のように、軽唇音の字は南京音が[-əŋ]、蘇州、杭州音が[-ən]となり、『同文備攷』でも[-ən]である。非・敷母の字は『西儒耳目資』が[-uən](=[-uɛn])、『磨光韻鏡』が「-ウン」で、奉・微母は『西儒耳目資』が[-ən]、『磨光韻鏡』では奉母が「ウㄢ」、微母が「ウㄢ」である。このように、「フン」「ウエン」は主母音[-ə]をもつ両方言から説明でき、「フン」と「ウエン」は清濁の対立を示している。

軽唇音以外、舌上音、歯頭音、牙・喉音の字に対して、主に「-ユン」の音注であり、歯頭音心母の「ソヲン-笋(1)」、喉音曉母の「ホヲン-葷(1)」、于母の

「ウワン-鷓(1)」と半舌音来母の例は「-ワン」となっている。また、「クン-軍」「イン-尹」もある。

「鷓-ウワン(1)」は見母の「古渾切 鷓鷃」と于母の「王問切 鷓三尺曰鷓又音昆」であり、原例が「禽鳥」の「鷓鷃^{ウワンキイ} タウマル」となる。発音と意味から、音注は于母の「王問切」と対応し、喉音の所属字である。蘇州音が[-yən]、南京音が[-yin]となり、「ウワン」は介音[y]を有する両方言から説明できない。

「軍-キユン 7(5)(「小曲」1例)クン 7(2)」は、「舉云切 軍旅也」で、原例が以下のようになり、意味上での違いが見られない。

「キユン」:トンスエタア、キユン ツヤンキユンキユンミン「四字話」統率大軍 將軍鈞命
リウホ^フ イエユンヲキユンチウ キユンミンキヤイハンエ「六字話」流配遠惡軍州 「長短話」軍民皆歡悅
「クン」:リヤンクントイルイ ツユイツユイハイ〇クン「四字話」兩軍對壘 取聚敗軍

南京音は[-yin]、杭州音は[-yɪŋ]、蘇州音は[-yən]の読みとなる。『西儒耳目資』が[-iun]、『同文備攷』が[-yən]、『磨光韻鏡』では「キユン」で記され、「キユン」は両方言から説明できる。牙音臻撰三等の字に対する音注は「キユン」か「ギユン」となるのは一般的であるため、「クン」は一等の牙音字に対する同じ「クン」による影響或いは誤記の可能性があり、断言できない。

「イン-尹(1)」は『広韻』に「余準切 正也誠也進也」とある。原例は「四字話」の「知尹分付 奉行ノ云付^{ツウインフンフウ}」で、発音と意味ともは『広韻』のと一致しない。『大漢和辞典』に「〔廣雅、釋詁四〕尹、官也」との説明もあり、原例の意味と一致している。『磨光韻鏡』では「-イユン」となっているが、蘇州音でも南京音でも[-in]、杭州音では[-ɪn]となり、「イン」は古い「余準切」から説明できず、現代の方言のいずれにも対応する。

上記の「鷓」「軍」「尹」を除き、これらの字は音注が「-ワン」(心・曉・來母)と「-ユン」に分けられている。

心・曉・來母の字について、來母の「論-ロワン 7(6)ロン 7(1)」の二種類の音注は一等の「婚」「嫩」2字と同じ、この二つの音注も同じ発音を示すものである。「才段+ン」「才段+ワン」と二種類の音注で同じ発音を示し、音注法が一定されていない。このように、「論-ロワン・ロン」、「筭-ソワン」、「葦-ホワン」は一等の「輪-ロワン」などと同じ、南京音、蘇州音、杭州音のいずれも[-uən]となり、

音注と一致する。つまり、「-ヲン」は介音 [u] をもつ [-uən] と示すものである。

心・曉・來母以外、舌上音、正齒音の字は南京音が [-uən]、蘇州・杭州音が [-ən] となるが、『西儒耳目資』が [-un]、『同文備攷』が [-yən] で、『磨光韻鏡』が「-ユン」であり、「-ユン」は杭州音と一致している。

牙音と喉音の于・羊母の字は南京音が [-yin]、蘇州が [-yən]、杭州音が [-yin] であり、『西儒耳目資』が [-iun]、『同文備攷』が [-yən] となり、『磨光韻鏡』が「-ユン」でもある。「-ユン」は [y] をもつ南京音と杭州音から説明できる。

このように、「-ヲン」「-ユン」はそれぞれは介音 [u] と [y] をもつ発音を区別している。

表 5-4-3 臻攝陽声合口三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応			
軽唇音	非敷	「フン」	[-uN]	[-əŋ] 『西』[-uɛŋ]	○	○	[-ən] 『磨』「フウン」	○	
	奉	「ウエン」	[-eN]	[-əŋ] 『西』[-əŋ]	○	[-ən]	[-ən] 『磨』「ウハン」	○	
	微						[-ən] 『磨』「ウラン」		
舌上音	知	-ユン	[-juN]	[-uən] 『西』[-un]	×	[-ən]	×	[-ən] 『磨』「-ユン」	○
齒頭音	心	-ヲン	[-oN]	[-uən]	○	[-ən]	○	[-uən]	○
正齒音	章昌 船書	-ユン	[-juN]	[-uən] 『西』[-un]	×	[-ən]	×	[-ən] 『磨』「-ユン」	○
牙音	見群			[-yin] 『西』[-iun]	○	[-yən]	×	[-yin] 『磨』「-ユン」	○
喉音	曉	-ヲン	[-oN]	[-yin] 『西』[-uɛŋ]	×	[-yən]	○	[-uən]	○
	于羊	-ユン	[-juN]	[-yin] 『西』[-iun]	○	[-yən]	×	[-yin] 『磨』「-ユン」	○
半舌音	來	-ヲン	[-oN]	[-uən] 『西』[-un][-iun]	○	[-ən]	○	[-uən]	○

表 5-4-3 のように、臻攝陽声韻の字の音注は杭州音に対応している。

(2)入声韻の場合

入声韻の場合について、一等合口の字は、舌頭音の「テ-突(2)」以外、「オ段」となっている。

中に、「没」に対して、主母音[-ə]を示す右肩点が付され、オ段の「モ°(モ)」である。「没」以外、蘇州音では全て主母音[-ə]を有する。このように、陽声韻の字と同じ、ここの「オ段」は「モ°」と同じ主母音[-ə]と対応するものである。『三音正譌』でも「オ段」となっている。

「テ-突(2)」は、「陀骨切 觸也欺也」で、原例が「唐突」^{ダンテ}「左冲右突」^{ツラ、チヨンユウテ}であり、蘇州音が[dəʔ]、杭州音が[dɛʔ]、南京音が[t'uʔ]と発音する。声母の上、「テ」は濁点記入漏れによる可能性が高く、母音[u]をもつ南京音からは説明できず、蘇州音と対応する可能性がある。

表 5-4-4 臻攝入声合口一等(沒韻)の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応		
重唇音	並明	オ段	[-o]	[-oʔ]	○	[-əʔ]	○	[-eʔ] 『磨』「オ段+エ」 『三』「オ段」
舌頭音	定					[-əʔ]		[-eʔ] 『磨』「オ段」 『三』「オ段」
牙音	見			[-uʔ]	×	[-uəʔ]	○	[-ueʔ] 『磨』「オ段」 『三』「オ段」
喉音	曉					[-uəʔ]		[-oʔ] [-uoʔ] 『磨』「オ段」 『三』「オ段」

表 5-4-4 のように、重唇音の字は、南京音が[-oʔ]となり、「オ段」と一致する。また、牙・喉音の字は南京音が[-uʔ]と発音するが、蘇州音が[-uəʔ]との読みである。また、『三音正譌』では同じ「オ段」と記される。既に検討したように、オ段の仮名は[ə]と対応するものであるため、「オ段」の音注は蘇州音と杭州音から説明でき、杭州音と最も一致する。なお、『同文備攷』ではこれらの字も主母音[ə]をもち、同じ対応がある。

三等開口の字は、「チ-七(11)」以外の歯頭音、歯上音に対して、「-エ」音注であり、それ以外の場合は「イ段」が一般的となる。

「チ-七(11)」は清母の「親吉切」で、南京音が[ts'iʔ]、蘇州音が[ts'iaʔ]、杭州音が[te'iiʔ]と発音する。既に清母で検討したように、『同文備攷』では[-

it]との入声の読みがあり、「チ」と一致する。

表 5-4-5 臻撰入声開口三等(質/櫛韻)の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
重唇音	幫滂並明	イ段	[-i]	[-iʔ]	○	[-iəʔ]	×	[-iʔ]	○
舌上音	知澄			[-ɿʔ]	×	[-əʔ]	×	[-eʔ]	○
齒頭音	清從心	-エ	[-je]	[-iʔ]	×	[-iəʔ]	×	[-iʔ]	×
齒上音	生			[-ɿʔ]	×	[-əʔ]	×	[-eʔ]	×
正齒音	章書禪	イ段	[-i]	[-ɿʔ]	×	[-əʔ]	×	[-eʔ]	○
牙音	見溪			[-iʔ]	○	[-iəʔ]	×	[-iʔ]	○
喉音	影			[-ɿʔ]	×	[-əʔ]	×	[-eʔ]	○
半舌音	來								
半齒音	日								

表 5-4-5 のように、重唇音、舌上音、正齒音、牙・喉音、半舌音、半齒音の場合、「イ段」の音注は南京音([-iʔ]・[-ɿʔ])、『磨光韻鏡』(「イ段」)から説明でき、杭州音に最も一致する。

齒頭音、齒上音の字は、「イ段」の音注の場合と同じ、南京音が[-iʔ]・[-ɿʔ]となり、「-エ」と一致しない。これに対して、『磨光韻鏡』『三音正譌』では「-イツ」となり、発音が「-エ」に近い。

一方、「エ」「イ段」の字は『同文備攷』ではともに[-it]となっている。このように、三等の同じ韻の音注が二種類に分かれ、どの方言音にもこのような現象が確認できない。中国語原音からの説明はつかなく、音注の上では杭州音に近い。

三等合口の字は例が少ない。表 5-4-6 のように、術韻の場合、「チュ-出 50(49)」以外、齒頭音の「スエ-恤」、齒上音の「スエ-率蟀」、牙音の「キエ-橘(1)」は「-エ」の音注である。

「チュ-出 50(49)」は「赤律切」で、南京音が[-uʔ]、蘇州音が[-əʔ]、杭州音が[-ɔʔ]・[-eʔ]となり、いずれも音注と合わず、『磨光韻鏡』では「チュ」と記されていることから、杭州音と対応する。

これらの字は『同文備攷』では全て[-yət]、『磨光韻鏡』では「恤」以外、「-ユ」である。『同文備攷』では入声韻尾がまだ保存され、韻尾が一致しないが、

主母音が「-エ」と対応している。また、蘇州音では全て主母音 [ə] をもち、「-エ」([-je])に近い。

表 5-4-6 のように、術韻のこれらの字は呉方言の特徴に近いと考えられる。

表 5-4-6 臻攝入声合口三等(術韻)の音注対照表

声母項目		例	音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
齒頭音	心	スエ-恤(2)	-エ	[-je]	[-yəʔ]	○	[-iəʔ]	○	[-yɪʔ]	○
	齒上音	生 スエ-率(1) 蟀(1)			[-uaəʔ]	×	『同』[-yət]	○	[-yɪʔ] [-iɪʔ]	○
正齒音	昌	チュ-出 50(49)	-ユ	[-ju]	[-uʔ]	×	[-əʔ]	×	[-əʔ] [-eʔ]	○
牙音	見	キエ-橘(1)	-エ	[-je]	[-yʔ]	×	[-yəʔ]	○	[-yɪʔ]	○
							『同』[-yət]			

表 5-4-7 臻攝入声合口三等(物韻)の音注対照表

声母項目		例	音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
輕唇音	非	ホ-弗(1)	オ段 ウ段	[-o]	[-uʔ]	×	[-əʔ]	『同』[-ət]	[-eʔ]	×
		ブ-不 400(394)		「不」○					『磨』「フ」 「不-ポエ」 『三』「ウオ」	
	敷	フヲ-拂(1)	-ヲ	×		『磨』「フ」 『三』「ウエ」			×	
	奉	ウエ-佛(4)	-エ	×		『磨光韻鏡』「フ」			×	
	微	ウエ-物(10)	-エ	[-je]		×			[-eʔ]	×
ホ-勿(6)		オ段	[-o]	×	[-eʔ]	×				
牙音	溪	キエ-屈(1)	-エ	[-je]	[-yʔ]	×	[-yəʔ]	○	[-yɪʔ]	×
喉音	影	イエ-鬱(1)	-エ	[-je]	×	○	『磨』「-ユ」			

物韻では、「ブ-不」は「ウ段」、「ウエ-佛物」、「キエ-屈」と「イエ-鬱(1)」は「-エ」で、「フヲ-拂(1)」「ホ-弗勿」は「オ段」の音注である。

輕唇音の「弗」は非母の「分勿切」、「拂」は敷母の「敷勿切」である。南京音は[-uʔ]となるが、蘇州音は[-əʔ]で、『三音正譌』では「ウオ」「ウエ」となり、「オ段」の音注は韻母面では呉方言に近い。

「不-フ° 400(394)」も非母の「分勿切」となり、南京音が[-uʔ]となり、音注「ブ・フ」と一致するが、蘇州音が[-əʔ]で合わない。なお、『磨光韻鏡』は「ポエ」である。右肩点の部分で検討したように、「フ°」は南京音と一致する。

「勿」は微母の「文弗切」で、微母の部分で検討したように、蘇州音では「弗」と同じ発音であり、2字に対して同じ「ホ」となることは呉方言から説明できる。なお、『同文備攷』では「弗」が[fət]、「勿」が[vət]とで清濁の対立を区別しているが、韻母の読みも同じである。

「熨」は影母の「紆物切」で、南京音が[-yʔ]、蘇州音が[-yəʔ]となり、いずれも「イ」と合わない。合口の字で、同じ韻の字が全て合口の特徴を示しているのに対し、この字だけは合口の特徴を示しておらず、開口となっている。音韻史にもこの字が合口から開口になる変化が起きておらず、方言にもそのような現象がない。よって、誤記の可能性が高い。

『同文備攷』では軽唇音の字が[ət]、牙・喉音の字が[yət]となり、蘇州音と同じ主母音[ə]を有する。表 5-4-7 のように、術韻の場合、音注が「-ヲ」(「オ段」)と「-エ」に分かれている。前述したように、[-ə]が重唇音の後にくる場合、オ段となるのは同書の音注法の一つであり、物韻の軽唇音でも同じ、こうした二種類の音注は主母音[ə]をもつ呉方言に近い。

上述したように、陽声韻でも入声韻でも、音注に反映された特徴は呉方言に近いと言える。

なお、先行研究において、謝(2016:80-81)は陽声韻の字に対する音注の現象について、例を挙げて把握しているが、陽声韻の字について、「臻撮開口一等痕韵的注音是根ケン keN、很恨ヘエン heN;例外是影母的恩エユン eiun。」との指摘があり、「恩」字は、同書で 10 例あり、いずれの場合の「エヘン」音注となり、また、卷六の内容では、「但欲聞^{エヘンジン}恩人大號」等のように、音注は同じ「エヘン」とも確認でき、謝(2016)による「エユン」ではない。

また、臻撮合口一等韻に対して、「-ヲン」(舌頭・歯頭・喉・半舌音)・「クン」(牙音)の例を挙げているが、どうして牙音が他の異なる音注になっているか、原音からも韻書からも説明していない。

入声の字について、「臻撮入声字出现比较多与阳声韵主元音不同的情况。如：定母的“突テ[te]”、微母的“勿ホ[ho]”。」のように、陽声韻の字との主母音の違い 2 例シな挙げていなく、詳細な状況について説明していない。

表 5-4 臻撰の所属字一覧

(1)〈開口・一等〉

撰		臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数
等位	声調	一等	平			一等	上			一等	去		
韻目		痕		字種数	延べ数	痕		字種数	延べ数	痕		字種数	延べ数
開合		an				an				an			
牙音	見[k-]	清	ケン-根 4(3)ケ [°] ン-根 4(1)	1	4								
喉音	影[ʔ-]	清	エヘン-恩(20)	1	20								
	匣[h-]	濁				ヘエン-恨(1)	1	1	ヘエン-恨(6)	1	6		
計				2	24			1	1			1	6

(2)〈開口・三等〉

撰		臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数			
等位	声調	三等	平			三等	上			三等	去									
韻目		真(臻)		字種数	延べ数	真(臻)		字種数	延べ数	真(臻)		字種数	延べ数	真(臻)		字種数	延べ数			
開合		iɛ̃n				iɛ̃n				iɛ̃n										
重唇音	幫[p-]	清	ヒ [°] ン-賓(2)	1	2															
	並[b-]	濁	ビン-貧(19)	1	19			ヒ [°] ン-牝(1)	1	1										
	明[m-]	次濁	ミン-民(3)抿(1)	2	4			ミン-剛(1)憫(2)	2	3										
舌上音	知[t-]	清	チン-鎮①(1)	1	1									チン-鎮②(1)						
	澄[d-]	濁	チン-陳①(1)塵(1) チン-陳①(1)	3	3									チン-陳②(1) チン-陣(1)蔭②(1)	1	1				
歯頭音	精[ts-]	清						ツイン-盡② 12(4) ヅイン-盡 12(8)						ツイン-進(10)	1	10				
	清[ts'-]	次清	ツイン-親①(23)	1	23									ツイン-親②(23)						
	從[dz-]	濁						ツイン-盡① 12(4) ヅイン-盡 12(8)	1	12										
	心[s-]	清	スイン-新(9)薪(2)辛(3)	3	14									スイン-信(20)	1	20				
歯上音	邪[z]	濁												ツイン-燼(1)盡(1)	2	2				
	照(莊)[tʂ-]	清	チン-真②(22)ツイン-榛(1)	1	1									ツイン-襪(1)	1	1				
正歯音	照(章)[tʂ-]	清	チン-真①(22)	1	22			チン-診①(1)	1	1										
	牀(船)[dʂ-]	濁	ジン-神(3)晨①(1)	2	4															
	審[ʂ-]	清	シン-身(30)	1	30															
	禪[ʐ-]	濁	ヂン-臣 5(4)チン-臣 5(1) シン-辰(1)ジン-晨②(1)	2	6									ジン-慎(5)	1	5				
牙音	見[k-]	清	キン-巾(5)	1	5	キン-斤①(10)筋(2) 鉞①(1)	3	13	キン-緊(17)	1	17	キン-權(1)謹(7)葷①(1)	3	9			キン-斤②(10)			
	群[g-]	濁				キン-勤 3(1)勲(1) ギン-勤 3(2)芹(1)	3	5				ギン-近 16(14)キン-近 16(1)ピン-近 16(1)	1	16						
	疑[ŋ-]	次濁	イン-銀 9(8)キン-銀 9(1)	1	9															
喉音	影[ʔ-]	清	イン-因(16)姻(1)茵(1)	3	18	イン-愍①(1)	1	1				イン-隱①(8)	1	8			イン-隱②(8)			
	曉[h-]	次清				ヒン-欣(1)	1	1												
	羊[j-]	次濁							イン-蚓①(1)	1	1						イン-蚓②(1)			
半舌音	来[l-]	次濁	リン-麟(1)鄰(隣)(4)鱗(1)	3	6									リン-吝(1)禪(1)	2	2				
半歯音	日[ɳz-]	次濁	ジン-人 180(171)仁(3) シン-人 180(7)シ-人 180(1)	2	183			ジン-忍(5)	1	5				ジン-認(6)	1	6				
計				29	350			8	20			8	40	5	33		10	47	0	0

注：・「人-ジン 180(171)シン 180(7)シ 180(1)」について、1例が無注音であり、「シン」は濁点の省略によるもので、「シ」は、原例が「把官路當人情」で、読みと対応できず、「ン」の記入漏れである。
・「近-ピン」について、バ行音注となるのは同書の並母字に対する音注の特徴で、群母の読みと一致できず、明らかに誤記である。

(3)〈合口・一等〉

撰		臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数
等位	声調	一等	平			上	去			一等	去		
韻目		魂		字種数	延べ数	混		字種数	延べ数	恩		字種数	延べ数
開合		uən				uən				uən			
		合				合				合			
重唇音	幫 [p-]	清	へ°エン-奔①(5)	1	5	へ°エン-本 13(1)へ°エン-本 13(12)		1	13	へ°エン-奔②(5)			
	滂 [p'-]	次清	へ°エン-噴①(1)	1	1					へ°エン-噴②(2)			
	並 [b-]	濁	パワン-盆 7(3)ペエン-盆 7(4)	1	7	ペエン- ^フ 本(2)		1	2				
舌頭音	明 [m-]	次濁	モン-門 20(1)們 11(10)モ°ン-門 20(19)	2	31					モ°ン-悶(8)		1	8
	定 [d-]	濁	トワン-屯①(1)ドワン- ^フ 屯(1)	2	2								
齒頭音	泥 [n-]	次濁								ノワン-嫩 2(1)ノン-嫩 2(1)		1	2
	精 [ts-]	清	ツワン-尊 13(12)樽(1)ツフン-尊 13(1)	2	14								
	清 [ts'-]	次清	ツワン-村(3)	1	3	ツワン-付(1)		1	1	ツワン-寸(1)		1	1
牙音	從 [dz-]	濁	ツワン-存 2(1)ツワン-存 2(1)	1	2	ツワン-鱗①(1)		1	1	ツワン-鱗②(1)			
	心 [s-]	清	ソワン-孫(7)孫(1)	2	8	ソワン-損(6)		1	6	ソワン-遜(1)		1	1
喉音	見 [k-]	清	クン-昆(1)	1	1								
	溪 [k'-]	次清				クン-捆①(5)		1	5	クン-捆②(5)困(3)		1	3
半舌音	影 [ʔ-]	清	ウワン-温(4)鯁(1)	2	5	ウワン-穩(5)		1	5				
	曉 [h-]	次清	ホワン-婚 3(2)昏(1)ホン-婚 3(1)	2	4								
計	匣 [ɦ-]	濁	ウワン-渾①(4)	1	4	ウワン-混(2)渾②(4)クン-棍(1)		2	3				
	來 [l-]	次濁	ロワン-論① 7(6)ロン-論 7(1)	1	7					ロワン-論② 7(6)ロン-論 7(1)			
計				20	94			9	36			5	15

注：「尊-ツワン 13(12)ツフン 13(1)」は、「祖昆切 尊卑又重也高也貴也敬也」である。「ツフン」音注の原例が「四字話」の「^{ツワンキンチヤンシヤン}尊敬長上 目上の人ヲウヤマフ」で、初出となる「ツワン」音注の「^{ツワンキン}尊敬 ウヤマフ」とは、同じ語で、意味上の違いもないので、「ツフン」は明名に誤記である。

(4)〈合口・三等〉

撰		臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数	臻撰		字種数	延べ数				
等位	声調	三等	平			上	去			三等	去										
韻目		諄		字種数	延べ数	文		字種数	延べ数	稗		字種数	延べ数	問		字種数	延べ数				
開合		yən				yən				yən											
		合				合				合				合							
輕唇音	非 [f-]	清				フン-① 紛(1)分① 29(25)		2	26	フン-粉①(3)		1	3	フン-糞(2)		1	2				
	敷 [f'-]	次清				フン-紛②(1)															
	奉 [v-]	濁					ウエン-蚊(1)文(14)聞①(12)		3	27	ウエン-鱗(1)		1	1	ウエン-分 29(4)			4			
舌上音	微 [w-]	濁												ウエン-問(23)聞②(12)		1	23				
	知 [t-]	清	チュン-述(1)	1	1																
齒頭音	心 [s-]	清				ソワン-笋(1) チュン-鶻(1)		2	2												
	照(章) [tɕ-]	清				チュン-准(9)		1	9												
	照(昌) [tɕ'-]	次清	チュン-春(12) 椿(1)	2	13	チュン-蠢(1)		1	1												
正齒音	牀(船) [dʒ-]	濁				ジユン-楯①(2)		1	2	ジユン-順 7(6) シユン-順 7(1)		1	7								
	審(書) [ʃ-]	清								シユン-舜(1)		1	1								
牙音	見 [k-]	清	キユン-鈞(1)均(2)	2	3	キユン-君(6)軍 7(5) クン-軍 7(2)		2	13												
	群 [g-]	濁				ギユン-裙(1)		1	1												
喉音	曉 [h-]	次清				ホワン-葷(1)		1	1					ヒユン-訓(1)		1	1				
	于 [y-]	次濁				イユン-雲(7)		1	7					イユン-運(1) ウワン-鶻①(1)		2	2				
半舌音	羊 [j-]					イユン-允(4) イン-尹(1)		2	5												
	來 [l-]	次濁	ロワン-輪(4)	1	4																
計				6	21			10	75			7	19			2	4	2	8	5	32

注：「チュン-鶻(1)」は心母の部分で検討したように、「准-チュン」の類推によるものである。

(5)〈入声の字〉

(A)一等・合口

撰			臻撰		字種数	延べ数
等位			一等			
声調			入			
韻目			沒			
開合			uət 合			
重唇音	並 [b-]	濁	ホ [°] -勃(2)		1	2
	明 [m-]	次濁	モ-沒① 76(4)モ [°] -沒 76(72)		1	76
舌頭音	定 [d-]	濁	テ-突(2)		1	2
牙音	見 [k-]	清	クワ-骨(8)		1	8
喉音	曉 [h-]	次清	ホ-忽(1)		1	8
計					5	96

(B)三等・開口

撰			臻撰		字種数	延べ数
等位			三等			
声調			入			
韻目			質 櫛			
開合			iət 開			
重唇音	幫 [p-]	清	ヒ [°] -畢(1)筆(3)秘①(1)必 54(52)ヒ-必 54(2)		4	59
	滂 [p'-]	次清	ヒ [°] -疋(3)		1	3
	並 [b-]	濁	ヒ [°] -秘②(1)			
	明 [m-]	次濁	ミ-密(1)蜜(1)		2	3
舌上音	知 [t-]	清	チ-蛭(1)		1	1
	澄 [d-]	濁	ヂ-蛭①(2)		1	2
齒頭音	清 [ts'-]	次清	チ-七(11)ツエ-漆(5)木漆(1)		3	17
	從 [dz-]	濁	ツエ-疾 4(3)嫉①(1)ツエ-疾 4(1)		2	5
齒上音	心 [s-]	清	スエ-膝(2)蟋①(1)		2	3
	審(生)[ʃ-]	清	スエ-虱(1)蟋②(1)		2	2
正齒音	審(書)[ʃ-]	清	シ-失(14)室 4(3)ジ-室(1)		2	18
	禪 [z-]	濁	ジ-實(実 1)14(13)シ-實(実 1)14(1)		1	14
牙音	見 [k-]	清	キ-吉(1)		1	1
	溪 [k'-]	次清	キ-蛄(1)詰(1)		2	2
喉音	影 [ʔ-]	清	イ-一 111(110)		1	111
半舌音	来 [l-]	次濁	リ-栗(1)		1	1
半齒音	日 [ɲz-]	次濁	ジ-日 98(93)シ-日 98(5)		1	98
計					27	340

注:「ジ-實(実 1)14(13)シ-實(実 1)14(1)」について、同書では繁体字の「實」と俗字の「実」の例は 1 例のみで、
ゴウライジキキクハアニイ「我委实記掛你」であり、繁体字の「委實没造化」とは違いがない。
ライジモツアウクハア・「シ-日 98(5)」は濁点の省略である。

(C)三等・合口

撰			臻撰		字種数	延べ数
等位			三等			
声調			入			
韻目			術			
開合			yət 合			
齒頭音	心 [s-]	清	スエ-恤(2)		1	2
齒上音	審(生)[ʃ-]	清	スエ-率(1)蟀(1)		2	2
正齒音	照(昌)[tʃ'-]	次清	チュ-出① 50(49)		1	50
牙音	見 [k-]	清	キエ-橘(1)		1	1
喉音	羊 [j-]	次濁	イツ-鷓(1)		1	1
半舌音	来 [l-]	次濁	スエ-緯(1)		1	1
計					7	57

注:・「チュ-出 50(49)」は 1 例未注。

・「スエ-緯(1)」は來母の部分で検討したように、声符「スエ-率」の類推によるものである。

・「イツ-鷓(1)」は「餘律切 鳥名」で、原例が「禽鳥」の「鷓^{イヅモウ}鳥 シギ」である。「イツ」は短音節型の入声の音注と同じ、「ツ」が具体的な音がない。この「イツ」は合口の字を注するものでなく、「イエ」の誤記の可能性が排除できない。

(D)三等・合口

撰			臻撰		字種数	延べ数
等位			三等			
声調			入			
韻目			物			
開合			yət 合			
脛唇音	非 [f-]	清	ホ-弗(1)不-フ [°] 400(394)フ 400(5)		2	401
	敷 [f'-]	次清	フヲ-拂(1)		1	1
	奉 [v-]	濁	ウエ-佛(4)		1	4
	微 [w-]	濁	ウエ-物(10)ホ-勿(6)		2	16
牙音	溪 [k'-]	清	キエ-屈(1)		1	1
喉音	影 [ʔ-]	清	イ-熨(1)イエ-鬱(1)		2	2
計					9	425

注:・「不」は 1 例が「ダア、400(1)」で、同頁にホウランダアハツヲ「波浪不作 波浪大作」の例があり、「不-ダア、」は、「不」に対する表記は明らかに後の語彙の影響を受け、「大」による誤記である。「不-フ 400(5)」は濁点の記入漏れである。

1.5 深摂

深摂所属字は計 52 字種、延べ 309 字であり、内、入声の字は計 15 字種、延べ 76 字である。

(1) 陽声韻の場合

陽声韻の字に対して、舌上音の「チヤン-闌(2)」以外、音注は「-イン」となるのが一般的である。「参-スエン 2(1)」は「-エン」である。

「チヤン-闌(2)」は徹母の「丑禁切 馬出門兒」で、原例が「四字話」の「東闌西蕩 方々ニアルク」と「小曲」の「你在花街上闌」である。韻母上、音注は反切と一致できず、南京音が[tʂu ã]、蘇州音が[ts 'a]、杭州音が[ts 'uʌŋ]となり、『磨光韻鏡』では「チム」と記されている。声母は南京音と杭州音のいずれにも対応するが、韻母はいずれも音注と合わない。王(1980:166-167)によれば、この字は江摂と宕摂三等の知・莊組の字と同じ、現代では合口の発音となっているが、「チヤン」に反映されたは齊齒の読みの段階にあるのである。

「参-スエン 2(1)」について、既に第三章第四節で検討したように、「スエン」は「所今切」と対応し、呉方言の読みと一致している。

表 5-5-1 深摂陽声韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応			
重唇音	滂	-イン	[-in]	[-iŋ]	○	[-in]	○		
舌上音	知徹澄娘			[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○
齒頭音	心邪			『西』[in]	○	『同』[-im]	○	『三』「イン」	○
齒上音	莊初生	-エン	[-en]	[-iŋ]	○	[-in]	○	[-in]	○
正齒音	章書禪	-イン	[-in]	[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○
牙音	見溪群疑			『西』[in]	○	『同』[-im]	○	『三』「イン」	○
喉音	影羊			[-iŋ]	○	[-in]	○	[-in]	○
半舌音	來			[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○
半齒音	日			『西』[in]	○	『同』[-im]	○	『三』「イン」	○

表 5-5-1 のように、重唇音、齒頭音、牙・喉音と半舌音は南京音が[-iŋ]、蘇州音が[-in]、杭州音が[-in]と発音する。いずれの場合も音注「-イン」と一致でき、つまり、「-イン」の音注は南京音と呉方言との双方から説明できる。

舌上音、齒上音、正齒音、半齒音の字は南京音が[-əŋ]、蘇州・杭州音が[-ən]の読みである。「-イン」の音注はいずれにもと対応しない。また、『西儒耳

目資』は[in]であるが、『同文備攷』は[-im]で、『磨光韻鏡』は「-イム」となり、鼻音韻尾 [-m]をまだ維持していた。『三音正譌』では同書と同じ「-イン」となっている。このように、「イン」は主母音 [i]をもつ南京音と杭州音から説明できる。

このように、陽声韻の字に対する音注は両方言に対応する。

(2)入声韻の場合

入声韻の字について、歯頭音と「ヒエ-吸」は「-エ」となり、それ以外、「イ段」となっている。中に、同じ喉音の字「イ-揖(2)」と「ヒエ-吸(1)」は、音注は異なっている。

表 5-5-2 深摂入声韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応			
歯頭音	從邪	-エ	[-e]	[-iʔ]	×	[-iəʔ]	○		
正歯音	章書禪	イ段 (「吸-エ」)	[-i] ([-e])	[-ɿʔ]	×	[-əʔ]	×	[-eʔ] 『磨』「イ段」	○
牙音	見群			[-iʔ]	○	[-iəʔ]	× ([[-e]o)	[-iʔ] 『磨』「イ段」	○
喉音	影曉								
半舌音	来								
半歯音	日			[-uʔ]	×	[-əʔ]	×	[-eʔ] 『磨』「イ段」	○

歯頭音の字と「ヒエ-吸」は南京音が[-iʔ]から説明できず、[ə]系主母音を有する蘇州・杭州音と対応する。また、南部吳方言(開化など)は[-ieʔ]とで対応する。

それ以外の「イ段」の音注となる場合、南京音では声母によってそれぞれの韻母の発音が異なるが、『磨光韻鏡』では同じ「イ段」と記されている。つまり、「イ段」は杭州音から説明できる。

このように、同じ韻母を示す「イ段」「-エ」の音注について、声母面で検討した知・精・莊・章四組の非止摂の字に対する音注は書き分けに反映された知・莊組の分化と関わる。声母面では書き分けの影響を受け、韻母面の音注も分かれていると考えられる。対照する結果として、吳方言から説明でき、杭州音と最も一致する。

上述したように、深摂の場合、陽声韻と入声韻との全体から見ると、音注は杭州音と対応している。深摂の陽声韻に対する「-イン」、入声韻に対する「イ段」「-エ」の音注は、それぞれ臻摂の陽声韻三等、入声韻三等と殆ど同じ音注となっている。この現象は、両摂の韻尾が統合された変化を反映している。

先行研究において、謝(2016:77)は、入声の字について「入声字的元音与阳声韵的主元音基本一致。如:来母的“立リ[ri]”。」と「イ段」の例を挙げているが、「-エ」の存在について言及していない。

表 5-5 深摂の所属字一覧

(1)〈開口・三等〉

摂			深摂		深摂		深摂		深摂	
等位			三等		三等		三等		三等	
声調			平		上		去		去	
韻目			侵		侵		沁		沁	
開合			iɛm		iɛm		iɛm		iɛm	
開合			開		開		開		開	
重唇音	滂 [p'-]	次清			ヒン-品 (2)	1	2			
舌上音	知 [t-]	清	チン-砧 (4)	1	4					
	徹 [t'-]	次清						チャン-闌 (2)	1	2
	澄 [d-]	濁	チン-沉 (3) 沈 ① (1)	2	4	チン-騰 ① (1)	1	1	チン-沈 ② (1)	
齒頭音	娘 [ŋ]	次濁							ジン-賃 (1)	1
	心 [s-]	清	スイン-心 (57)	1	57					
齒上音	邪 [z]	濁	ツイン-尋 2(1) ツイン-尋 2(1)	1	2					
	照(莊) [tʂ-]	清								
	穿(初) [tʂ'-]	次清	ツアン-參 ① 2(1)	1	1					
正齒音	審(生) [ʂ-]	清	スエン-參 ② 2(1)		1					
	照(章) [tʂ-]	清	チン-斟 (2) 針 ① (2) 鍼 (1)	3	5	チン-枕 ① (1)	1	1	チン-針 ② (2) 枕 ② (1)	
	審(書) [ʂ-]	清	シン-深 ① (5)	1	5	シン-審 ① (2) 蟪 ① (2)	2	4	シン-深 ② (5) 審 ② (2) 蟪 ② (2)	
牙音	禪 [ʐ-]	濁				ジン-甚 ① 7(1) シン-甚 7(6)	1	7	ジン-甚 ② 7(1) シン-甚 7(7)	
	見 [k-]	清	キン-禁 ① (6) 襟 (1) 金 (26) 今 49(48) キ-今 49(1)	4	82	キン-錦 (6)	1	6	キン-禁 ② (6)	
	溪 [k'-]	次清	キン-欽 (5)	1	5					
	群 [g-]	濁	ギン-琴 (3) キン-禽 (1)	2	4					
喉音	疑 [ŋ]	次濁	ニン-吟 ① (4)	1	4				ニン-吟 ② (4)	
	影 [ʔ-]	清	イン-音 (10) 陰 (2)	2	12	イン-飲 ① (5)	1	5	イン-飲 ② (5)	
	羊 [j-]		イン-淫 (1)	1	1					
半舌音	来 [l-]	次濁	リン-林 (1) 臨 ① (5)	2	6	リン-凛 ① (2)	1	2	リン-臨 ② (5)	
半齒音	日 [ɲz-]	次濁	ジン-恁 ① 7(4) 任 ① (1) シン-恁 7(1) ニン-恁 7(2)	2	8	ジン-甚 ① (1) 恁 ② 7(4) シン-恁 7(1) ニン-恁 7(2)	1	1	ジン-任 ② (1)	
計				25	201		10	29		2
計										3

注：・「參-ツアン 2(1) スエン 2(1)」について、既に第三章第四節で検討したように、「ツアン」は咸摂開口一等韻「倉含切」を注するもので、「スエン」は「所今切」と対応し、呉方言の読みと一致している。

・「今-キン 49(48) キ 49(1)」は、「居今切 對古之稱」で、「キ」音注の例が「長短話」の「今日丸菓也失帶了」である。「二字話」の「今日」^{キンジ}、「長短話」の「今日須在這裡」^{キンジスエ、ツアイチエ、リイ}など多くの例と同じ「今日」という語があり、「キ」音注の例も初出でないの
で、明らかに「ン」の記入漏れによる誤記である。

・「恁-ジン 7(4) シン 7(1) ニン 7(2)」は、『広韻』に「如林切 信也又音荏」(平声)と「如甚切 念也」(上声)とあり、同じ深摂の読みで、意味上違いもない。また、『集韻』に「尼心切 思也弱也信也」と「忍甚切 説文下齋也」ともある。「恁-ニン」は音注が「尼心切」と一致している。「シン」音注の例は初出であるが、同じ使い方の多くの音注は「ジン」となっているため、「シン」は濁点の記入漏れの可能性がある。

(2)〈入声の字〉

摂			深摂		字種数	延べ数
等位			三等			
声調			入			
韻目			緝			
開合			侵 iɛp			
開合			開			
齒頭音	從 [dz-]	濁	ツエ-集 (1)	1	1	
	邪 [z]	濁	ツエ-習 2(1) ツエ-習 2(1)	1	2	
正齒音	照(章) [tʂ-]	清	チ-執 (3)	1	3	
	審(書) [ʂ-]	清	シ-濕 ① (3)	1	3	
	禪 [ʐ-]	濁	ジ-十 24(1) 拾 (3) シ-十 24(23) 什 (16)	3	43	
牙音	見 [k-]	清	キ-急 (4)	1	4	
	群 [g-]	濁	ギ-及 (4)	1	4	
喉音	影 [ʔ-]	清	イ-揖 (2)	1	2	
	曉 [h-]	次清	ヒエ-吸 (1)	1	1	
半舌音	来 [l-]	次濁	リ-笠 (3) 立 (6) 鳩 (1)	3	10	
半齒音	日 [ɲz-]	次濁	ジ-入 (3)	1	3	
計				15	76	

1.6 山掇

山掇所属字は計 340 字種、延べ 1,600 字である。中に、陽声韻は計 251 字種、延べ 1,300 字であり、入声韻は計 89 字種で、延べ 300 字である。

(1) 陽声韻の場合

陽声韻の字について、開口一等字、二等の重唇音幫母字、舌上音、齒上音の字に対して、音注が「-アン」となっている。開口二等の重唇音並母字と牙・喉音の字に対して、音注が「-エン」となっている。

表 5-6-1 山掇陽声開口一・二等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応		
一等	舌頭音	端透定泥	-アン	[-a [~]] 『西』[-an]	○	『同』[-an]	『磨』[-E] 『-アン』	○
	齒頭音	精清心						
	牙音	見溪						
	喉音	影曉匣						
半舌音	来							
二等	重唇音	幫	-アン	[-a [~]] 『西』[-an]	○	『同』[-an]	『磨』[-E] 『-アン』	○
		並	-エン	[-e [~]]	×	『同』[-uan][iɛm]	『磨』[-E] 『-アン』	×
	舌上音	澄	-アン	[-a [~]] 『西』[-an]	○	『同』[-an]	『磨』[-E] 『-アン』	○
	齒上音	莊審生	-アン	[-a [~]] 『西』[-an]	○	『同』[-an]	『磨』[-E] 『-アン』	○
	牙音	見溪疑	-エン	[-ie [~]] 『西』[-ien]	○	『同』[-an]	『磨』[-ie] 『-エン』	○
喉音	影匣	-エン	[-e [~]]	○	『同』[-an]	『磨』[-E] 『-エン』	○	

表 5-6-1 のように、南京音では[-a[~]]の読みの字は、『同文備攷』では[-an]で、『磨光韻鏡』でも「-アン」と記されている。つまり、「-アン」は主母音[a]をもつ鼻音性質の南京音及び鼻音韻尾が保存されていた 18 世紀前の呉方言から説明できる。

「ベン」となる二等の並母の「辨」(符蹇切/蒲菟切/普麵切)「瓣」(蒲菟切)について、『同文備攷』では「辨」が[-uan][iɛm]、「瓣」が[-uan]となり、『磨光韻鏡』では「辨」が「ピエン」、「瓣」が「バン」である。このように、「辨」に対する「ベン」は『同文備攷』と杭州音から説明できるが、「瓣」は主母音[a]となるいずれの場合にも対応できず、字体が近い「辨」などの字の類推による可能性が高い。

二等の牙・喉音は南京音が[-ie[~]]、『西儒耳目資』が[-ien](=[iɛn])で、同じ主母音[e]を有する。杭州音は[-ie]、『同文備攷』では一等の字と同じ[-an]

ともなっているが、『磨光韻鏡』は「-エン」となっている。このように、「-エン」音注は南京音、とも対応する。

上記のように、開口の一・二等韻は全体的に杭州音に対応している。

開口三、四等字は、「-エン」の音注が一般的である。三等「ヒン-掀(2)」は例外である。

「ヒン-掀(2)」は曉母の「虚言切」で、原例が「四字話」の「掀下馬來」と「六字話」の「掀開簾子看了」である。音注は読みと対応できず、声符の「ヒン-欣(1)」の類推によるものと考えられる。

表 5-6-2 山掇陽声開口三・四等韻の音注対照表

声母項目			音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応			
三等	重唇音	幫滂並明	-エン	[-en]	[-e~]	○	『同』[-iɛn]	○	『磨』[-ie]	○
	舌上音	知澄			[-a~]	×	『同』[-iɛn]	○	『磨』[-ou]	○
	齒頭音	精清從心邪			[-e~]	○	『同』[-iɛn]	○	『磨』[-ie]	○
	正齒音	章書禪			[-a~]	×	『同』[-iɛn]	○	『磨』[-ou]	○
	牙音	見溪群疑			[-ie~]	○	『同』[-iɛn]	○	『磨』[-ie]	○
	喉音	影曉羊			[-e~]	○	『同』[-iɛn]	○	『磨』[-ie]	○
	半舌音	來			[-a~]	×	『同』[-iɛn]	○	『磨』[-ou]	○
四等	重唇音	幫滂明	-エン	[-en]	[-e~]	○	『同』[-iɛn]	○	『磨』[-ie]	○
	舌頭音	端透定泥			[-ie~]	○	『同』[-iɛn]	○	『磨』[-ie]	○
	齒頭音	精清從心								
	牙音	見溪疑								
	喉音	影曉匣								
	半舌音	來								

表 5-6-2 のように、「-エン」の音注となる三・四等の字を対照した結果となる。

三等舌上音、正齒音、半舌音の場合南京音は[-a~]、『西儒耳目資』は[-en](=[-ən])、『同文備攷』は[-iɛn]で、『磨光韻鏡』でも「-エン」となり、「-エン」は明らかに呉方言と一致している。

三・四等牙・喉音の字は、南京音が[-ie~]、三・四等重唇音、齒頭音、半舌音、四等舌頭音の字は、南京音が[-e~]となるが、杭州音が全て[-ie]と発音する。『西儒耳目資』は[-iɛn](=[iɛn])で、『同文備攷』は[-iɛn]となり、『磨光韻鏡』も「-エン」である。「-エン」の音注は南京音と呉方言との双方から説明できる。

このように、開口の三・四等韻は全体として、『同文備攷』と杭州音に対応している。

合口の字について、「セン-門(2)」を除き、一等の重唇音、心母以外の歯頭音と二等の重唇音、歯上音の字は「バアン」「パン」「-ワン」・「-マン」(明母)となり、それ以外の場合、介音[u]を示す「-ハン」「ワン」である。「セン-門(2)」は生母の部分で検討したように、誤記の可能性が高い。

なお、「盤-バアン 12(5)ハアン 12(1)ボワン 12(1)バワン 12(5)」について、「ハアン」は、並母の部分で検討したように、濁点が省略されたものである。「薄官切」の読みしかないので、「バアン」「ボワン」「バワン」は同じ発音を示しているもので、「-ワン」の形は、合口の特徴を示している。これが孤例で、他の並母字とは示し方が違う。

表 5-6-3 山攝陽声合口一・二等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応	
一等	重唇音	幫滂並明	「-アーン」 「マン」(明母)	[-aŋ]	[-aː̃] ○	[-ø] 『同』 [-uan][-uɔŋ] ○	[-uo] 『磨』 「オ段+ワン」 ○
	舌頭音	端定泥	オ段+ 「-ハン」「-ワン」	[-uan]	[-uaː̃] ○	[-uø] 『同』[-uɔŋ] ×	[-uo] 『磨』「-ワン」 ○
	齒頭音	精清 心	ウ段+「-ハン」 オ段+「-ハン」				
	牙音	見溪	ウ段+「-ハン」				
	喉音	影匣	「-ワン」				
		曉	「ハン」				
半舌音	來	ロ・ラ+「-ハン」					
二等	重唇音	幫滂明	「パン」	[-uan]	[-aː̃] ○	[-E] 『同』 [-uan][-uɔŋ] ○	[-E] 『磨』 「オ段+ワン」 ○
	齒上音	崇生	ウ段+「-アーン」	[-uan]	[-uaː̃] ○	[-E] 『同』[-an] [-uø][-uɛ] 『同』[-uɔŋ] ×	[-uo] 『磨』「-ワン」 ○
	牙音	見疑匣	ク+「-ハン」「-ワン」				

合口一・二等の字について、表 5-6-3 のように、一・二等重唇音の字は、南京音が[-aː̃]、蘇州音が[-ø]、杭州音が[-uo]となり、『西儒耳目資』は[-uon](=[uɔŋ])で、『磨光韻鏡』は「オ段+ワン」と記されている。「ハン」「パン」「マアン」「マン」は両方言から説明できる。

一等の喉音曉母の字に対して、「ハン」となり、南京音が[-uaː̃]、蘇州音が[-uø]、杭州音が[-uo]となり、『西儒耳目資』では[-uon](=[uɔŋ])、『同文備攷』では[-uɔŋ]でいずれも合わず、『磨光韻鏡』では「フワン」となり、「ハン」は杭州

音と対応する。

これらの場合以外も、[-uan]となり、合口一・二等のこれらの字は蘇州音と杭州音から説明できず、『磨光韻鏡』の「-ワン」と対応する。

このように、合口の一・二等韻は全体として杭州音に対応している。

合口三・四等の字について、対応関係は表 5-6-4 のようになっている。

表 5-6-4 山攝陽声合口三・四等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応							
三等	重唇音	幫	-エン	[-eŋ]	[-ẽ]	○	[-iŋ]	×	[-ie]	『磨』「-エン」	○		
	軽唇音	非敷	「ハン」	[-uan]	[-ã]	○	『同』[-uan]	○	[-ɛ]	『磨』「-ワン」	○		
		奉	「ワン」										
		微	「ハン」										
	舌上音	知澄	-エン	[-eŋ]	[-uã]	×	『同』[-yɛŋ]	○	[-uo]	『磨』「-エン」	○		
	齒頭音	従心邪			[-yẽ]	○	『同』[-yɛŋ]		[-yo]	『磨』「-エン」			
	齒上音	崇生			[-uã]	×	『同』[-yɛŋ]		[-uo]	『磨』「-エン」			
	正齒音	章昌船			[-yẽ]	○	『同』[-yɛŋ]		[-yo]	『磨』「-エン」			
	牙音	見溪群			「エユン」	[-ueŋ]	[-yẽ]		○	『同』[-yɛŋ]		[-yo]	『磨』「-エン」
		疑			「ワン」	[-uan]	[-yẽ]		×	『同』[-yɛŋ]		○ (ワン×)	[-uo] [-yo] 『磨』「-エン」
喉音	影曉 于羊	「エユン」			[-ueŋ]	[-yẽ]	○		『同』[-yɛŋ]				
半齒音	日	-エン	[-eŋ]	[-uã]	×	『同』[-yɛŋ]							
四等	牙音	見溪	-エン	[-eŋ]	[-yẽ]	○	『同』[-yɛŋ]						
	喉音	匣											

三等重唇音幫母の「へ[°]ン-変(5)」は「-エン」であり、南京音が[-ẽ]、蘇州音が[-iŋ]、杭州音が[-ie]と発音する。『磨光韻鏡』は「ピエン」で、杭州音と対応する。

軽唇音の非・敷母は「ハン」、奉・微母は「ハン」「ワン」の二種類の音注である。軽唇音の字は、南京音が[-ã]、蘇州・杭州音が[-ɛ]となり、『西儒耳目資』では[-an]で、『同文備攷』では[-uan]である。『磨光韻鏡』では「-ワン」であり、「ハン」「ワン」は介音[u]をもつ『同文備攷』、杭州音と対応する。

三等の舌上音、齒頭音、齒上音、正齒音、疑母以外の牙音、半齒音と四等の牙・喉音の字は、「-エン」の音注となっている。喉音の「嬛」「宛」に対して、「ワン」で記されている。そして、三等合口の牙音疑母と喉音の字、「エユン-原 蜋 怨 鴛 冤 緣 鳶 援 猿 園 遠 願 愿」について、「エユン」と統一されている。

「嬛」は原例が「五字話」の「^{スインマイハ○ウヤアハワン}新買好丫嬛 新タニヨキ舌女ヲカハエタ」である。

『広韻』に曉母山攝の「許緣切 便嬛輕麗兒又音娟音瓊」、影母山攝の「於緣切 身輕便兒」、群母梗攝の「渠營切 好也」とあり、「ワン」はいずれにも対応しない。また、『集韻』に匣母の合口二等の「胡關切 女字」とあり、音注と意味とも一致する。「ワン」は明らかに「胡關切」を注するものである。

「宛」は原例が下記の通りである。

「二字話」宛^{ワンチエン}転 ヤリクリ
 「四字話」宛^{ワンチエン}不^{ライ}來 ヤリクリカナラヌ
 「六字話」我^{ゴウキン}宛^{ワンチエン}不^{ライ}來 我曾^{ゴウキン}テヤリクリガナラヌ

『広韻』に三等の「於袁切 屈草自覆又音苑」(平声)と「於阮切 宛然説文曰屈草自覆又姓」(上声)とあり、「ワン」は「於阮切」の意味と一致するが、発音は三等の発音を注するものではない。また、『集韻』に一等の「鄔管切 闕人名」ともあり、音注と一致でき、意味が対応しないが、「鄔管切」を注する可能性が排除できない。『同文備攷』は[-yɛn]で、『磨光韻鏡』は「-エン」となり、発音の面ではいずれからも説明できない。

「眷絹」は、「-エン」「-ユン」との二種類の音注をもっている。「眷-キエン 2(1) キユン 2(1)」は「居倦切 眷屬説文顧也」で、原例が「四字話」の「親^{ツイン}眷^{キユン}極^{ギトウ}多^{トウ}シ^シル^ルイ^イガ^ガ多^{トウ}イ」と「投^テ奔^{ウヘ}親^{エン}眷^{ツイン} シ^シル^ルイ^イニ^ニウ^ウチ^チカ^カカル」である。また、「絹-キエン 5(4) キユン 5(1)」は「吉掾切 縑也廣雅曰繁總鮮支穀絹也」で、原例が下記の通りである。

「キユン」:「器用」絹^{キユン}傘^{サン} カサボコ 絹^{キエン}篩^{シャイ} キヌフルヒ
 「キエン」:「疋頭」絹^{キエン}綱^{チウ} ケンチウ 白^ベ絹^{キエン} 白^{ハア}キヌ^{キエン} 画^{ハア}絹^{キエン} エキヌ

2 字とも、表記例の意味に違いが見られない。それに、2 字は同じ韻母を有している。なお、南京音は[-yẽ]、蘇州音は[-iø]となっている。このように、発音の上では、一つの方言では多種類の読みが見られないので、それぞれ 1 例のみの「-ユン」は「-エン」による誤記の可能性が大きい。

歯頭音の字は、南京音が[-yẽ]、蘇州音が[-iɿ]、杭州音が[-yo]と発音する。舌上音、歯上音、正歯音、半歯音の場合、南京音が[-uã]、蘇州音では[-ø]、杭州音が[-uo]（「軟」[-yo]）となっている。三・四等の牙・喉音の場合、

南京音が[-ye~]との読み、蘇州音が[-iø]、杭州音が[-yo]である。これらの字は『西儒耳目資』は[iuɛn]、『同文備攷』は[-yɛn]で、『磨光韻鏡』は「-エン」となっている。「-エン」「エユン」は南京音と呉方言との双方から説明できるが、南京音の声母に清濁の区別がないため、音注は呉方言と対応している。また、喉音の「ワン」はいずれの場合からも説明できない。

こうして、喉音の「宛-ワン」が説明できない以外、合口の三・四等韻は全体として、『同文備攷』と杭州音に対応する。

(2)入声韻の場合

入声韻の字について、開口一、二等の場合は、音注が「ア段」と統一され、主母音[a]を示している。これは主母音[a]をもつ蘇州音の発音と一致している。こうして、表 5-6-5 のように、一・二等の場合、吳方言から説明できる。

表 5-6-5 山摄入声韻開口字の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応		
一 二 等	重唇音	幫滂並	ア段	[-a]	[-əʔ]	○	[-aʔ]	○	[-eʔ]	○
	舌頭音	透定								
	齒頭音	清心								
	齒上音	莊初生			[-əʔ]	×				
	牙音	見溪								
	喉音	曉匣								
	半舌音	來								
三 四 等	重唇音	幫滂並明	エ段	[-e]	[-eʔ]	○	[-iəʔ]	○	[-iɪʔ]	○
		端透定	エ段(「テ/デ」)							
	舌頭音	泥	「ニヤ」	[-ia]	[-ieʔ]	×	[-iaʔ]	○	『磨』「-エ」	×
	舌上音	徹	イ段(「チ」)	[-i]	[-əʔ]	×	[-əʔ]	×	[-eʔ]	×
							『同』[-iet]	○	『磨』「-エ」	○
	齒頭音	精清心	「-エ」	[-je]	[-ieʔ]	○	[-iəʔ]	○	[-iɪʔ]	○
							『同』[-iet]	○	『磨』「-エ」	○
	正齒音	章船書	エ段(「ゼ」)	[-e]	[-əʔ]	×	[-əʔ]	○	[-eʔ]	○
						『同』[-iet]	○	『磨』「-エ」	○	
牙音	見溪疑	イ段(「キ」)	[-a]	[-ieʔ]	×	[-iəʔ]	×	[-iɪʔ]	×	
喉音	影曉	「-エ」	[-je]							○
半舌音	來	エ段(「レ」)	[-e]	[-eʔ]	○	[-iəʔ]	○	[-eʔ]	○	
						『同』[-iet]	○	『磨』「-エ」	○	
						『同』[-iet]	○	『磨』「-エ」	○	

三・四等の字に対して、音注が多種類存在している。

三等薛韻の場合、「ヒ[°]-鼈(1)」「ヒ[°]-蔑(1)蟻(1)」「チ-徹(1)」「キ-子(2)」は「イ段」となり、それ以外の場合は「-エ」の音注となっている。また、三等月韻の「ヒエ-歇」も「-エ」である。「カ-揭(2)」は例外である。

「ヒ[°]-鼈(1)」は、「并列切 魚鼈」で、原例が「虫介」の「鼈兒^{ヒ[°]ルウ} ドウカメ」である。蘇州音は[piəʔ]、南京音は[pieʔ]、杭州音は[piɪʔ]で、『同文備攷』では[piet]である。

「ヒ[°]-蔑(1)蟻(1)」は、明母の部分で検討したように、原例は「蔑兒^{ヒ[°]ルウ}「蟻蟻^{ヒ[°]モン}」で、ともに「莫結切」で、南京音が[mieʔ]、蘇州音が[miəʔ]、杭州音が[miɪʔ]となり、『同文備攷』では[miet]である。

「チ-徹(1)」は「丑列切」で、原例が「二字話」の「徹夜^{チエ} ヨモスカラ」である。「キ-子(2)」は「居列切」で、原例が「虫介」の「子子^{キキ} ボウクリムシー名釘倒虫」である。前述したように、反り舌音の徹母は「チ」音注、見母はカ行音注で統

一されている。また、2字とも南京音は[-ieʔ]、蘇州音は[-iəʔ]、杭州音は[-eʔ]である。『同文備攷』では[tʃ'iet]で、『磨光韻鏡』では「-エ」となっている。

「キ-子(2)」は見母の「居列切」で、原例が「虫介」の「^{キキ}子_{ボウフリムシ}」名釘倒虫である。南京音は[-ieʔ]、蘇州音は[-iəʔ]、『同文備攷』は[kiet]である。

「カ-掲(2)」は、原例が「五字話」の「^{スエ、ヤ○ウカカイライ}須要掲開來_{ハヒデノケヨ}」と「六字話」の「^{カンリヤ○ウヒユイトウカタン}看了許多掲丹_{多クノラクシヨヲ見タ}」である。『広韻』に多種類の読みがあり、下記のようにになっている。

蟹摂：溪母去声「去例切 褰衣渡水由膝已下曰掲」
山摂：見母入声「居竭切 掲起説文曰高舉」(月韻)
見母入声「居列切 掲起」(薛韻)
群母入声「其謁切 擔掲者也」(月韻)
群母入声「渠列切 高舉」(薛韻)
溪母入声「丘竭切 高舉也又擔也」(薛韻)

入声の音注「カ」は明らかに蟹摂の読みと一致しない。また、清音の「カ」は濁音の群母と対応しない。このように、意味上ではみ、表記例が見母の「掲起」と一致するので、「居竭切」「居列切」と対応する。南京音は[-ieʔ]、蘇州音は[-iəʔ]、杭州音は[-iʔ]となる。『同文備攷』では[kiet]である。「カ」はいずれにも対応できず、「カ-渴(3)喝(1)」の声符の類推による可能性がある。

四等屑韻の場合、唇音、牙・喉音の字が「イ段」、「スヤ-楔(1)」「ニヤ-捏(2)」は「-ヤ」の音注、それ以外の場合「-エ」となっている。

「スヤ-楔(1)」は、『広韻』に見母の「古黠切 櫻桃」と心母の「先結切 楔木」とあり、原例が「器用」の「^{スヤモ}楔木_{クサビ}」であり、意味は明らかに心母と一致している。南京音は[-ieʔ]で、『同文備攷』は[kiet]となり、いずれの場合も「スヤ」と一致しない。

「ニヤ-捏(2)」は、『広韻』に泥母の「奴結切」で、南京音が[-ieʔ]、蘇州音が[-iaʔ]で、「ニヤ」は蘇州音から説明できる。

上記、三・四等字の中、「掲」「楔」「捏」3字以外、音注は「イ段」と「-エ」となり、表 5-6-5 のように、南京音が[-əʔ][ieʔ]、杭州音が[-eʔ][-iʔ]との二種類の読みとなるが、蘇州音は[-əʔ][-iəʔ]で、同じ主母音[ə]を有している。『同文

備攷』は[-iet]で、『磨光韻鏡』は「-エ」となっている。「-エ」は杭州音に対応しているが、「イ段」は適切な説明が得られない。上述したように、これらの「イ段」の音注となる例は、南京音と杭州音とともに[e]系主母音をもつのが特徴である。「イ段」の音注は声母の影響を受け、[i]と[e]は元々近い発音で、全体として吳方言に近いと考えられる。

入声合口字の場合、末韻の字について、一等重唇音の字に対して、「ホ[°]-鉢(1)」以外、音注がハ行の「ハ[°]・ハ」となり、舌頭音の字が「ト」である。

重唇音の「ホ[°]-鉢(1)」は、幫母の「北末切」で、原例が「器用」の「鉢盂^{ホ[°]イユイ}ハチ」であり、南京音は[pɔʔ]、蘇州音は[pəʔ]、杭州音は[pvəʔ]、『同文備攷』は[-uot]となり、このように、「ポ」は南京音と蘇州音から説明できる。

「鉢」以外の唇音と舌頭音の場合、南京音は[-ɔʔ]、蘇州音は[-əʔ]となっている。重唇音の字は杭州音が[-vəʔ]となり、「ハ[°]・ハ」は杭州音から説明できる。舌頭音の字は杭州音が[-ɔʔ]、『同文備攷』が[-ot]で、「オ段」の音注は南京音、蘇州音、杭州音のいずれにも対応する。

匣母の「滑猓」は「ワ」で、それ以外、「聒鴟-クハ」「ウヲ-活(15)」はそれぞれ異なる音注である。

「ウヲ-活(15)」は「戸括切」で、蘇州音が[huaʔ]、南京音が[xueʔ]と発音する。「ウヲ」は発音の合口の特徴を示している。また、臻撰の部分で検討したように、「-ヲ」も主母音[a]を示す一つの音注法であり、両方言では主母音が同じ[a]系の読みであるため、音注は韻母が両方言から説明でき、声母を併せて、吳方言の特徴を反映する。

二等の場合、「聒鴟-クハ」「滑猓-ワ」について、両方言では同じ介音[u]をもち、主母音[a]となり、「クハ」は両方言、「ワ」は吳方言から説明できる。

このように、入声合口末韻の字の音注は杭州音に近い。

三等薛韻の字について、舌上音の「ナ-啞(2)」が「ア段」、「チュ-拙(2)」は「-ユ」で、それ以外の場合は「-エ」の音注となっている。

「ナ-啞(2)」は娘母の「女劣切」で、南京音が[-vəʔ]、蘇州音が[-aʔ]となり、いずれも音注と対応する。つまり、「ナ」は両方言から説明できる。

「チュ-拙(2)」は、「職悦切 不巧也」で、原例が下記の通りで、音注が読みとは一致しない。

「長短話」^{ウイドゴウミンケンズウチュ}唯獨我命蹇時拙 運命アシク時節拙フソ
「親族」^{チュツユイ}拙妻 女房

南京音は[-ɔʔ]、蘇州音は[tsəʔ]との読みとなり、「チュ」は両方言からも説明できず、「チュ-出(50)」の類推によるものと考えられる。

このように、「啞拙」2字以外、薛韻の字に対する「-エ」は主母音[ə]で統一された杭州音から説明できる。

三等月韻の字に対して、「ワツ-襪 3(1)」以外、軽唇音の「ハ-發(14)髮(2)」が「ア段」となり、それ以外の場合「-エ」である。

「襪-ワツ 3(1)ワ 3(2)」は、既に検討したように、「-ツ」は具体的な音がないので、「ワツ」と「ワ」は違いがないと見なす。南京音と杭州音が[-ueʔ]、蘇州音が[-aʔ]となり、「ワ」は南京音と杭州音から説明できる。

「ハ-發(14)髮(2)」について、同じ「方伐切」である。南京音・杭州音は[-eʔ]、蘇州音は[-aʔ]となり、いずれも音注と対応する。

「-エ」の音注の字について、両方言の読みは同じ[-yəʔ]であり、いずれの場合も対応している。

このように、月韻の字は両方言から説明できる。なお、『磨光韻鏡』では唇音は「-ワ」、それ以外「-エ」で、両方言にも対応している。

四等屑韻の字について、「決-キユ 9(2)」以外、すべて「-エ」となっている。『磨光韻鏡』も「-エ」となっている。つまり、「-エ」は杭州音から説明できる。

「決-キユ 9(7)キユ 9(2)」は『広韻』に未収で、「決」の俗字である。「決」は見母の「古穴切 流行也廬江有決水出大別山人斷也破也俗作決」と曉母の「呼決切 莊子云決起而搶榆枋決小飛兒」である。カ行の音注となるのは見母の特徴で、音注が「古穴切」と対応している。「キユ」の例は「三字話」の「決不敢」と「六字話」の「心下躊躇不決」で、いずれの場合も初出でなく、しかも、「キユ」の「決不肯」「決不似我們」などと同じ語をもつので、「キユ」は「キ

エ」の誤記によるものと考えられる。

表 5-6-6 山攝入声韻の合口の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応				
一 二 等	重唇音	幫滂並	「ハ°/バ」	[-a]	[-ɔʔ]	×	×	[-eʔ]	○	
			「ホ°-鉢」	[-o]		○	○	[-ɔʔ]		
	舌頭音	端透定	「ト」	[-o]	○	○	○	[-ɔʔ]	○	
	牙音	見	「クハ」	[-ua]	[-ueʔ]	○	[-uaʔ]	○	[-ueʔ]	○
喉音	影匣	「ワ」	[-ua]	[-ueʔ]	×	[-uəʔ]	×	○	○	
三 四 等	軽唇音	非微	非「ハ」	[-a]	[-eʔ]	○	○	[-eʔ]	○	
			微「ワ」	[-ua]	[-ueʔ]	○	[-aʔ]	×	[-ueʔ]	○
	舌上音	娘	「ナ」	[-a]	[-eʔ]	○	○	[-eʔ]	○	
	齒頭音	從心	-エ	[-e]	[-yəʔ]	○	[-iəʔ]	○	[-yɪʔ]	○
	正齒音	章書禪			[-ɔʔ]	×	[-əʔ]	×	[-yɪʔ] [-iɪʔ]	○
	牙音	見溪群疑			[-yəʔ]	○	[-yəʔ]	○	『磨』「-エ」	○
喉音	曉匣于羊									

このように、山攝入声合口字に対する音注は、全体的に見れば、杭州音から説明できる。

上述したように、山攝の字について、陽声韻でも入声韻でも、全体的に杭州音と一致している。

なお、先行研究の謝(2016:78-79)は「曉母的寒ハアン haN」と「寒」を曉母の例として挙げているが、「寒」は曉母字でなく、「胡安切」で、匣母の所属字である。「“掄”注音为ツエン tseN。」と「掄」を生母の合口二等の字として挙げているが、『広韻』に「掄」は清母の「此縁切」で、合口三等の字である。なお、「“掄”注音为ツエン tseN。」、「疑母的元原エユン eiun、喻三的圓員エユン eiun、影母的苑ワン uan 例外。」の中に挙げられた「掄」「元」「員」「苑」は同書の前五巻に未収。

表 5-6 山掇の所属字一覧

(1)〈開口・一等〉

掇			山掇		字種数	延べ数	山掇		字種数	延べ数	山掇		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	一等	平			上	去			去			
開合			開				開							
舌頭音	端 [t-]	清	タン-丹 (4) 單 ① (3) 殫 (1)	3	8	タン-担 (5)	1	5	ダン-蛋 (1)	1	1			
	透 [t'-]	次清	タン-嘆 ① (3) 癩 ① (1)	2	4				タン-嘆 ② (3) 炭 (4)	1	4			
	定 [d-]	濁	タン-檀 2(1) 胆 (4) ダン-檀 2(1) 但 ① (4) 彈 (彈) ① (5)	4	15	ダン-但 ② (4) タン-担 (1)	1	1	ダン-但 ③ (4) 彈 (彈) ② (5) 憚 (3)	1	3			
	泥 [n-]	次濁	ナン-難 ① (37)	1	37				ナン-難 ② (37)					
齒頭音	精 [ts-]	清							サン-讚 (4)	1	4			
	清 [ts'-]	次清	サ ^ン -滄 (1)	1	1									
	從 [dz-]	濁	ヅアン-殘 (1)	1	1									
牙音	心 [s-]	清	サン-珊 (1)	1	1	サン-散 ① (5) 傘 (4)	2	9	サン-散 ② (5)					
	見 [k-]	清	カン-乾 ① (3) 干 (10 [干 (1)]) 竿 (1) 肝 (8) ハアン-汗 ③ 3(2) ハン-汗 3(1)	4	22				カン-幹 (4)	1	4			
喉音	溪 [k'-]	次清	カン-看 ① (35)	1	35				カン-看 ② (35)					
	影 [ʔ-]	清	アン-安 21(20) 鞍 (1) ヤン-安 21(1)	2	23				アン-按 (4) 案 (2)	2	5			
	曉 [h-]	次清				ハアン-罕 ① (3)	1	3	ハアン-罕 ② (3) 漢 (6)	1	6			
半舌音	匣 [ɦ-]	濁	ハアン-汗 ① 3(2) 寒 6(5) 翰 ① (1) ハン-汗 3(1) 寒 6(1)	3	10	ハアン-旱 (2)	1	2	ハアン-汗 ② 3(2) 翰 ② (1) 捍 ① (1) ハン-汗 3(1)	1	1			
	來 [l-]	次濁	ラン-蘭 (7) 欄 (1) 欄 (1)	3	9	ラン-懶 (懶) (4)	1	4	ラン-欄 (4)	1	4			
計				26	166		7	24		10	32			

注：「安-アン 22(21)ヤン 22(1)」は、「ヤン」の例が「平安」で、初出でないで、「アン」による誤記と考えられる。

(2)〈開口・二等〉

掇			山掇		字種数	延べ数	山掇		字種数	延べ数	山掇		字種数	延べ数	山掇		字種数	延べ数		
等位	声調	韻目	二等	平			上	去			去									
開合			開				開													
重唇音	幫 [p-]	清	ハ ^ン -班 (1)	1	1							ハ ^ン -扮 ① (2)	1	2						
	並 [b-]	濁										ベン-① 辨 3(2) ヘン-辨 3(1) ヘ ^ン -瓣 (1)	2	4						
舌上音	澄 [d-]	濁										サ ^ン -綻 3(1) ツアン-綻 3(2)	1	3						
齒上音	照 (莊) [tʂ-]	清							サ ^ン -盞 (3)	1	3									
	審 (生) [ʃ-]	清	ツアン-漕 ② (1)			シヤン-山 12(11)	1	12	ツアン-漕 ① (1)	1	1									
牙音	見 [k-]	清	ケン-奸 (2)	1	2	ケン-艱 (2) 間 ① (12)	2	14				ケン-揀 ① (1)	1	1	ケン-諫 (1) 間 ② (12)	1	1	ケン-間 ③ (12)		
	溪 [k'-]	次清				ケン-慳 (1)						エン-眼 (13)	1	13	エン-鴈 (3)	1	3			
喉音	疑 [ŋ-]	次濁	エン-顔 (1)	1	1							エン-鵝 (1)	1	1						
	影 [ʔ-]	清				ヒエン-閑 (13) エン-鵬 (1)	2	14				ヒエン-限 (1)	1	1			ヒエン-寬 (2)			
計				3	4		5	40		1	1		4	18		3	5		5	11

注：「ケン-奸 (2)」は原例が「二字話」の「奸計 ^{ケンキョ} イツハリノハカリコト」と「三字話」の「奸詐人 ^{ケンフアジン} イツハリアル人」である。『広韻』に見母一等の「古寒切 以淫犯也」とあるが、『集韻』に見母二等の「居顔切 犯淫也」もあり、意味は同じである。音注の特徴により、二等の字として扱う。

(3)〈開口・三等〉

撰		山撰		山撰		山撰		山撰		山撰		山撰						
等位		三等		三等		三等		三等		三等		三等						
声調		平		平		上		上		去		去						
韻目		仙		元		綱		阮		線		願						
開合		ien		ian		ien		ian		ien		ian						
開		開		開		開		開		開		開						
重唇音	幫 [p-]	清	へん-鞭 (2)	1	2							へん-遍 (2)	1	2				
	滂 [p'-]	次清	へん-偏 ① (5) 扁 ② (1) へん-菹 ③ (1)	1	5							へん-偏 ② (5) 口扁 (3)	1	3				
	並 [b-]	濁	へん-便 37(2) べん-便 37(35)	1	37													
舌上音	知 [t-]	清	チエン-遣 ① (1)	1	1													
	澄 [d-]	濁	ヂエン-纏 ① (2)	1	2							ヂエン-纏 ② (2)						
	明 [m-]	次濁	メン-綿 (6)	1	6			メン-勉 (5) 免 (4) 冕 (1) ワン-鯁 (1)	4	11			メ°-面 36(1) メン-面 36(35) 麦 丐 (麴) (4) 臚 ① (1)	3	41			
齒頭音	精 [ts-]	清	ツエン-煎 ① (2) 𪛗 ① (1)	2	3			ツエン-剪 (4) 錢 ② 35(6) ツエン-錢 35(29)	1	4			ツエン-煎 ② (2) 箭 (2)	1	2			
	清 [ts'-]	次清	ツエン-遷 (1)	1	1			ツエン-淺 ② (1)										
	從 [dz-]	濁	ツエン-錢 ① 35(6) ツエン-錢 35(29)	1	35								ツエン-賤 (9)	1	9			
	心 [s-]	清	スエン-仙 (5) 鮮 ① (1)	2	6			スエン-鮮 ② (1)					スエン-線 (5) 鮮 ③ (1)	1	5			
正齒音	邪 [z]	濁	ツエン-涎 ① (1)	1	1								ツエン-羨 ① 8(2) ツエン-羨 8(6)	1	8			
	照 (章) [tʃ-]	清	チエン-𪛗 (𪛗) (1) 梅 (1)	2	2								チエン-戰 (3)	1	3			
	審 (書) [ʃ-]	清	セン-扇 ① (2)	1	2								セン-扇 ② (2)					
牙音	禪 [ʒ-]	濁	ヂエン-蟬 (2)	1	2			ゼン-善 24(20) セン-善 24(4) チエン-鯁 (1)	2	25								
	見 [k-]	清									ケン-蹇 (1)	1	1		ケン-建 (2)	1	2	
	溪 [k'-]	次清						ケン-遣 ① (3)	1	3			ケン-遣 ② (3)		キエン-勸 (勸 1)(4)	1	4	
喉音	群 [g-]	濁				カン-趕 (趕) ① (15)	1	15	ゲン-件 (6)	1	6				ゲン-健 (2)	1	2	
	疑 [ŋ-]	次濁				エン-言 (14)	1	14										
	影 [ʔ-]	清				エン-焉 ① (3)	1	3			エン-輓 ① (1)	1	1					
半舌音	曉 [h-]	次清				ヒン-掀 (2)	1	2										
	羊 [j-]	次濁	エン-延 ① (3) 筵 (3) 涎 (1)	3	7			エン-演 (2)	1	2			エン-延 ② (3)					
半齒音	來 [l-]	次濁	レン-連 (6)	1	6			レン-蓮 ① (2)	1	2								
日 [ɺz-]	次濁	ゼン-然 30(27) セン-然 30(2) ジエン-然 30(1)	1	30														
計				22	148				4	34			2	2	10	73	3	8

注:「面」は、第三章第一節で検討したように、「メン」が35例で、「メ°」が1例しかない。「メ°」は「メン」の「ン」が脱落したものと考えられる。

(4)〈開口・四等〉

撰		山撰		山撰		山撰		山撰			
等位		四等		四等		四等		四等			
声調		平		上		去		去			
韻目		先		銑		霰		霰			
開合		en		en		en		en			
開		開		開		開		開			
重唇音	幫 [p-]	清	へん-編 (1) 邊 (3) へん-菹 ① (1)	3	5	へん-扁 ① (1) 匾 (1) 菹 (1) へん-菹 ② (1)	3	3			
	滂 [p'-]	次清						へん-片 (1)	1		
	明 [m-]	次濁	メン-眠 (1)	1	1						
舌頭音	端 [t-]	清	テン-顛 (1)	1	1	テン-典 (2)	1	2	テン-殿 ① (1)		
	透 [t'-]	次清	テ-天 49(1) テン-天 49(48)	1	49	テン-腆 (1)	1	1			
	定 [d-]	濁	デン-田 (3) 𪛗 ① (1)	2	4			デン-電 (1)	1		
齒頭音	泥 [n-]	次濁	ネン-年 (27)	1	27	ネン-燃 (1)	1	1			
	精 [ts-]	清	ツエン-淺 ① (1)	1	1						
	清 [ts'-]	次清	ツエン-千 (18) 𪛗 ① (1)	2	19			ツエン-茜 (1)	1		
牙音	從 [dz-]	濁	ツエン-前 25(20) ツエン-前 25(4) ヅエン-前 25(1)	1	25			ツエン-蓍 (1)	1		
	心 [s-]	清	スエン-先 ① (28)	1	28	スエン-筵 (1)	1	1	スエン-先 ② (28)		
	見 [k-]	清	ケン-堅 (3)	1	3			ケン-見 ① (46)	1		
喉音	溪 [k'-]	次清	ケン-牽 ① (4)	1	4			ケン-牽 ② (4)	1		
	疑 [ŋ-]	次濁	ネン-研 ① (1)	1	1			ネン-研 ② (1) 硯 (4)	1		
	影 [ʔ-]	清	エン-燕 ① (4) 咽 (1) 烟 ① (11)	3	16	エン-輓 ② (1)	1	2	エン-宴 (1) 燕 ② (4)		
半舌音	曉 [h-]	次清						ヒエン-顛 (2)	1		
	匣 [ɦ-]	濁	ヒエン-絃 (4) 賢 (9)	2	13			ヒエン-現 (1)	1		
來 [l-]	次濁	レン-憐 (4) 蓮 (2)	2	6			レン-練 (1)	1			
計				24	203			8	10	10	58

注:・「前-ツエン 25(20) ツエン 25(4) ヅエン 25(1)」は「昨先切」で、「ツエン」が「ツエン」による濁点の省略、「ツエン」が「ツエン」の誤記と考えられる。
・「天-テ 49(1)」は「小曲」の例である。

(5)〈合口・一等〉

撰			山撰		撰			山撰		撰		
等位			一等		一等			一等		撰		
声調			平		上			去		撰		
韻目			桓		緩			換		撰		
開合			uan		uan			uan		撰		
開合			合		合			合		撰		
重唇音	幫 [p-]	清	ハ ^ン -般①(22)搬(3)		2	25			ハ ^ン -半(31)絆(4)		2	35
	滂 [p'-]	次清										
	並 [b-]	濁	ハアン-盤 12(1)バアン-盤 12(5)ボワン-盤 12(1)バワン-盤 12(5)		1	12	ハン-伴①(1)		1	1	ハン-伴②(1)	
舌頭音	明 [m-]	次濁	マン-蔓①(3)饅①(1)饅①(2)マアン-瞞(3)		5	10	マアン-滿(6)		1	6	マン-漫(2)饅②(1)	
	端 [t-]	清	トハン-端 7(6)トワン-端 7(1)		1	7	トハン-短(10)斷① 2(1)ドハン-斷 2(1)		2	12	トハン-斷② 2(1)ドハン-斷 2(1)	
	定 [d-]	濁	ドハン-團 3(2)トハン-團 3(1)		1	3	トハン-緞 5(1)斷③ 2(1)ドハン-緞 5(4)斷 2(1)		1	5	ドハン-段(1)	
齒頭音	泥 [n-]	次濁					ノハン-暖(1)煖①(2)		2	3		
	精 [ts-]	清	ツアン-鑽①(1)		1	2					ツアン-鑽②(1)	
	清 [ts'-]	次清									ツアン-鑽(1)竄(1)	
牙音	心 [s-]	清	ソハン-酸(1)				ソハン-筭①(8)				ソハン-蒜(2)筭②(8)	
	見 [k-]	清	クハン-冠①(3)官(18)				クハン-管(17)				クハン-冠②(3)灌(1)罐(2)鸛(1)	
	溪 [k'-]	次清	クハン-寬(10)				クハン-欸(6)					
喉音	影 [ʔ-]	清					ワン-碗(3)				ワン-惋(2)	
	曉 [h-]	次清	ハン-歡(6)								ハン-喚(3)	
	匣 [ɦ-]	濁	ワン-完(9)莞①(1)丸(2)				ワン-緩 2(1)ワアン-緩 2(1)				ワン-換(1)	
半舌音	來 [l-]	次濁	ロハン-鑾(1)鸞(1)				ロハン-卵①(1)				ロハン-乱(亂)9(8)ラハン-乱(亂)9(1)	
計					11	59			7	27	4	38

(6)〈合口・二等〉

撰			山撰		撰			山撰		撰		
等位			二等		二等			二等		撰		
声調			平		上			去		撰		
韻目			刪		潛			諫		撰		
開合			uan		uan			uan		撰		
開合			合		合			合		撰		
重唇音	幫 [p-]	清	ハ ^ン -般③(22)扳①(2)		1	2	ハ ^ン -板(9)版(2)		2	11		
	滂 [p'-]	次清	ハ ^ン -板②(2)抃①(1)		1	1						
	明 [m-]	次濁					マン-慢(9)		1	9		
齒上音	牀(崇) [dʒ-]	濁					ヅアン-撰(3)		1	3		
	審(生) [ʃ-]	清	セン-門(2)		1	2						
牙音	見 [k-]	清	クハン-関(4)關(2)		2	6					クハン-慣(2)	
	疑 [ŋ-]	次濁	ワン-頑(9)		1	9						
	匣 [ɦ-]	濁	ワン-還① 19(18)ハン-還 19(1)		1	19	ワン-腕(1)莞②(1)		1	1	ワン-患(4)摠(1)	
計					7	39			4	15	4	16

(7)〈合口・三等〉

撰		山撰		字種数	延べ数	山撰		字種数	延べ数	山撰		字種数	延べ数	山撰		字種数	延べ数		
等位	声調	三等	平			三等	上			三等	去			三等	願				
韻目		仙		字種数	延べ数	元		字種数	延べ数	YAn		字種数	延べ数	YEn		字種数	延べ数		
開合		合				合				合				合				合	
重唇音	幫 [p-]	清																	
	非 [f-]	清																	
輕唇音	敷 [f'-]	次清				ハン-番 ①(1)幡(1)翻 (1)反 ②(4)	3	3											
	奉 [v-]	濁				ワン-繁 ①(1)煩(8)纂 (1)	3	10			ハン-飯 ① 12(7) ワン-飯 12(5)	1	12			ハン-飯 ② 12(7) ワン-飯 12(5)			
	微 [w-]	濁									ワン-晩(10)	1	10			ワン-万 ①(6)萬(13)	2	19	
舌上音	知 [t-]	清							チエン-轉 ①(6)	1	6				チエン-轉 ②(6)				
	澄 [d-]	濁													チエン-傳 ②(3)				
齒頭音	從 [dz-]	濁				チエン-傳 ①(3) ツエン-全 6(4)ツエン-全 6(2)	1	6											
	心 [s-]	清				スエン-鯨(1)	1	1			スエン-選 ①(2)	1	2		スエン-選 ②(2)				
	邪 [z]	濁				ツエン-旋 ①(1)	1	1							ツエン-旋 ②(1)				
齒上音	牀(崇)[dʒ-]	濁																	
	審(生)[ʒ-]	清				ツエン-檢(1)	1	1											
正齒音	照(章)[tʃ-]	清				チエン-專(8)磚(1)	2	9											
	照(昌)[tʃ'-]	次清				チエン-穿 ①(7)串 ①(1)	2	8							チエン-穿 ②(7)串 ②(1)				
	牀(船)[dʒ-]	濁				チエン-船 17(16)チエン- 船 17(1)	1	17											
牙音	見 [k-]	清									キエン-卷 ①(2)	1	2		キエン-卷 ②(2)眷 2(1)絹 5(4)キユン-眷 2(1)絹 5(1)	2	7		
	溪 [k'-]	次清																	
	群 [g-]	濁				キエン-拳 6(2)卷 ③(2)ギ エン-拳 6(4)權(2)	2	8			キエン-圈 ①(3)	1	3	キエン-圈 ②(3)		ギエン-倦(2)	1	2	
	疑 [ŋ-]	次濁															エユン-願(4)愿(2)	2	6
喉音	影 [ʔ-]	清				ワン-嬾 ①(1)	1	1	ワン-宛 ①(3)エユン-怨 ①(3)鴛 ①(1)冤(8)	4	15			ワン-宛 ②(3)			エユン-怨 ②(3)		
	曉 [h-]	次清				ワン-嬾 ②(1)			ヒエン-萱(2)喧(2)	2	4								
	于 [ɣ-]	次濁				エユン-囿(4)	1	4	エユン-援 ①(1)猿(1)園 (2)	3	4			エユン-遠 ①(11)	1	11	エユン-援 ②(1)		エユン-遠 ②(11)
	羊 [j-]	次濁				エユン-緣 ①(8)薦(2)	2	10							エユン-緣 ②(8)				
半齒音	日 [ɲz-]	次濁								ゼン-軟 4(3)ゼ ン-軟 4(1)	1	4							
計				16	69			17	42	5	17	4	37	4	14	5	26		

(8)〈合口・四等〉

撰		山撰		字種数	延べ数	山撰		字種数	延べ数
等位	声調	四等	平			四等	上		
韻目		先		字種数	延べ数	銃		字種数	延べ数
開合		合				合			
牙音	見 [k-]	清	キエン-騰(2)	1	2				
	溪 [k'-]	次清				キエン-犬(3)	1	3	
喉音	匣 [ɦ-]	濁	ヒエン-玄(4)懸(1)	2	5	ヒエン-法(1)	1	1	
計				3	7	2	4		

(9)〈入声の字〉

①〈開口・一二等〉

撰			山撰			山撰			山撰			
等位			一等			二等			二等			
声調			入			入			入			
韻目			葛			黠			黠			
開合			at			at			at			
開合			開			開			開			
重唇音	幫 [p-]	清								ハ [°] -八 (10)	1	10
	滂 [p'-]	次清								ハ [°] -叭 (1)	1	1
	並 [b-]	濁								バ-拔 ② (2)		
舌頭音	透 [t'-]	次清	タ-獺 ① (2)	1	2							
	定 [d-]	濁	ダ-達 ① (1)	1	1							
齒頭音	清 [ts'-]	次清	サ-撒 ① (5)	1	5							
	心 [s-]	清	サ-撒 ② (5)									
齒上音	照 (莊) [tʂ-]	清								サ [°] -札 (1) 扎 (3) 紮 (1)	3	5
	穿 (初) [tʂ'-]	次清				サ [°] -刹 (1)	1	1		サ [°] -察 (1) 擦 (1)	2	2
	審 (生) [ʂ-]	清								サ-殺 ① (14) 煞 (2)	2	16
牙音	見 [k-]	清	カ-割 (3) 葛 (1)	2	4					カ [°] -戛 (1)	1	1
	溪 [k'-]	次清	カ-渴 ① (3) 磕 ① (4)	2	7							
喉音	曉 [h-]	次清	カ-喝 ① (1)	1	1							
	匣 [ɦ-]	濁	エ-褐 (1) ハア-曷 (1)	2	2							
半舌音	來 [l-]	次濁	ラ-喇 (2)	1	2							
計				11	24		1	1			10	35

注：・「エ-褐(1)」は「胡葛切 衣褐説分云編象鞮也一日短衣」で、原例が「疋頭」の「褐子 トロメン」であり、「褐」が「曷」と同じ発音で、蘇州音が[aʔ]、南京音が[xəʔ]である。『同文備考』では「曷」が[kiet][ɦot]両読みがある。「エ」はいずれの場合にも対応できず、誤記の可能性が高い。
 ・「ハア-曷(1)」は入声字の部分で検討したように、誤記の可能性が高い。

②〈開口・三四〉

撰			山撰			山撰			山撰			
等位			三等			三等			四等			
声調			入			入			入			
韻目			薛			月			屑			
開合			iet			iat			et			
開合			開			開			開			
重唇音	幫 [p-]	清	ヒ [°] -鼈 (1)	1	1							
	滂 [p'-]	次清								ヒ [°] イ-撇 (2)	1	2
	並 [b-]	濁	ベ-別 ① 16(12) へ [°] -別 16(4)	1	16							
	明 [m-]	次濁	メ-滅 (1)	1	1					ヒ [°] -蔑 (1) 蟻 (1)	2	2
舌頭音	端 [t-]	清								テ-蝻 (1)	1	1
	透 [t'-]	次清								テ-鐵 (鉄) (10)	1	10
	定 [d-]	濁								テ-跌 (2) テ-迭 (1)	2	3
舌上音	泥 [n-]	次濁								ニヤ-捏 (2)	1	2
齒頭音	精 [ts-]	清								ツエ-節 (6)	1	6
	清 [ts'-]	次清								ツエ-切 ① (4)	1	4
	心 [s-]	清	スエ-泄 ① (2) 薛 (1)	2	3					スヤ-楔 ① (1)	1	1
正齒音	照 (章) [tʂ-]	清										
	牀 (船) [dʂ-]	濁	ゼ-舌 ① (1)	1	1							
	審 (書) [ʃ-]	清	セ-設 (2)	1	2							
禪 [ʒ-]	濁	ツエ-折 (2)	1	2								
牙音	見 [k-]	清	キ-子 (2) カ-揭 ① (2)	2	4	カ-揭 ② (2)				キ-桔 (1) 結 (4) 潔 (1)	3	6
	溪 [k'-]	次清	カ-揭 ③ (2)									
	疑 [ŋ-]	次濁								キ-齧 (1)	1	1
喉音	影 [ʔ-]	清								イ-噎 (1)	1	1
	曉 [h-]	次清				ヒエ-歌 (3)	1	3				
半舌音	來 [l-]	次濁								レ-振 ① (1)	1	1
計				10	29		1	3			17	40

注：「ツエ-折(2)」は徹母部分で検討したように、同書の「ゼ-拆」とはお互いに近い字形による誤記と考えられる。つまり、音注は「ゼ」となるべきである。
 ・「ヒ[°]イ-撇(2)」は「小曲」の例である。

③〈合口・一二等〉

撰			山撰		字種数	延べ数	山撰		字種数	延べ数	山撰		字種数	延べ数
等位			一等				二等				二等			
声調			入		2	6	入		2	0	入		2	2
韻目			末				錯				點			
開合			uat				uet				uat			
			合				合				合			
重唇音	幫 [p-]	清	ハ [°] -撥 (5)ホ [°] -鉢 (1)											
	滂 [p'-]	次清	ハ-撥 5(1)ハ [°] -撥 5(4)		1	5								
	並 [b-]	濁	ハ [°] -鉢 (1)バ-拔 ① (2)		2	3								
舌頭音	端 [t-]	清	ト-撥 ① (1)		1	1								
	透 [t'-]	次清	ト-脱 (11)		1	11								
	定 [d-]	濁	ト-奪 (1)		1	1								
牙音	見 [k-]	清	クハ-聒 (1) 鶴 ① 2(1) ぜ-鶴 2(1)		2	3	クハ-鶴 ② 2(1) ぜ-鶴 2(1)							
喉音	影 [ʔ-]	清									ワア [°] -空 (1)ワア-挖 (1)		2	2
	匣 [ɦ-]	濁	ウヲ-活 ① (15)		1	15					ワ-滑 ① (3) 猾 (1)		2	4
計					11	45	0		0		4		6	

注：・「鶴-クハ 2(1)ぜ 2(1)」は「古活切 鶴鶴」「古煩切 鶴鶴鳥」で、見母の部分で検討したように、「ぜ」音注は「ぜ-舌」の声符類推と考えられる。
 ・「ワア[°]-空 (1)」「ワア-挖 (1)」について、入声の部分で検討したように、非入声の読みは南部呉方言の発音から説明できる。

④〈合口・三四等〉

撰			山撰		字種数	延べ数	山撰		字種数	延べ数	山撰		字種数	延べ数
等位			三等				三等				四等			
声調			入		2	16	入		1	3	入		2	10
韻目			薛				月				屑			
開合			yet				yat				uet			
			合				合				合			
輕唇音	非 [f-]	清					ハ-發 (14) 髮 (2)							
	微 [w-]	濁					ワ-襪 3(2)ワツ-襪 3(1)							
舌上音	娘 [ŋ]	次濁	ナ-啞 (2)		1	2								
齒頭音	從 [dz-]	濁	ツエ-絶 4(1)ツエ-絶 4(3)		1	4								
	心 [s-]	清	スエ-雪 (5) 鯨 (1)		2	6								
正齒音	照(章) [tʃ-]	清	チュ-拙 (2)		1	2								
	審(書) [ʃ-]	清	セ-説 ① (44)		1	44								
牙音	見 [k-]	清					キエ-厭 (1) 厭 ① (1) 概 ① (1) 厭 ① (1)		4	4	キエ-決 ① 9(7) 訣 (1) キユ-決 9(2)		2	10
	溪 [k'-]	次清	キエ-缺 ② (1)								キエ-缺 ① (1)		1	1
	疑 [ŋ-]	次濁					エ-月 (9)		1	9				
喉音	曉 [h-]	次清									ヒエ-血 (6)		1	6
	匣 [ɦ-]	濁									エ-穴 (2)		1	2
	于 [y-]	次濁					エ-越 (2) 曰 (1)		2	3				
羊 [j-]	次濁	エ-悦 2(1) 閱 (1) エ [°] -悦 2(1)		2	3									
計					8	61	10		35		5		19	

1.7 咸摂

咸摂の所属字は計 120 字種、延べ 323 字である。内、陽声韻の字は 81 字種、222 字で、入声韻の字は 39 字種で、101 字である。

(1) 陽声韻の場合

陽声韻の所属字について、開口一等の場合は音注が「-アン」に統一されている。

「簪¹⁴³-ツアン 2(1)ツハン 2(1)」は原例が以下のようにになっている。

「ツアン」:「器用」簪^{ツアンツウ}子 カンザシ 「ツハン」:「花草」玉簪^{ヨツハン} キボウシ

「簪」は『広韻』や『康熙字典』などに未収のため、読みと意味は不明である。その日本語訳「カンザシ」から『広韻』所収の「簪」の異体字であると考えられる。『広韻』では、「簪」は莊母の「側吟切 首笄也」と精母の「作含切」二つの読みがあり、「カンザシ」という意味が分かる「側吟切」から読めるのは「チン」で、音注の「ツアン」と合わない。「ツアン」という音注に一致するのは精母咸摂の「作含切」である。「簪」は、南京音が [tsan]、蘇州音が [tsø]、『同文備攷』が [tsəm]¹⁴⁴でいずれも「ツアン」と合わず、『磨光韻鏡』が「ツアム」となっていることから、「ツアン」は杭州音に一致する。なお、「ツハン」は合口を示音注の形で、開口の「簪」とは明らかに対応することができない。

表 5-7-1 咸摂陽声一・二等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応							
一等開	舌頭音	端透定泥	-アン	[-aŋ]	[-a [~]]	○	[-ø][⁻ E]	×	[-ɔm]	×			
	齒頭音	精清從心					[-ø]	×			[-iam]		
	牙音	見溪										[-E]	×
	喉音	影曉匣					『磨』「-アム」○						
半舌音	来												
二等開	舌上音	澄娘	-アン	[-aŋ]	[-a [~]]	○	[-E]	×	[-am]	○			
	齒上音	莊崇生					[-iɛ [~]]	○			[-iɿ]	×	[-iɛm]
	牙音	見溪疑											
	喉音	曉匣					『磨』「-アム」○						
半舌音	来												

¹⁴³ 謝 (2016:76-77)は「生母的“參”读作スエン[sɛŋ]、簪ツアン[tsaŋ]。」と「簪」を生母深摂、「精母的“簪”注音为ツハン tsuan。」と「ツハン」を咸摂の例との二種類の読みの例として挙げている。深・咸摂の両読みは同じ開口となり、「ツハン」と対応しない。

¹⁴⁴ 『同文備攷』には「簪」もあり、[tsəm]となる。

表 5-7-1 のように、一等の字の場合、対応する南京音では[-ã]、蘇州音では、齒頭音、半舌音の字の場合、[-ɛ]読みであり、齒頭音、牙・喉音の場合、[-ø]読みとなっている。また、『西儒耳目資』では[-an]、『磨光韻鏡』では一等の字が全て「-アム」と記されている。このように、「-アン」の音注は南京音と杭州音との双方に対応する。

開口二等の場合は、舌上音、齒上音が「-アン」、牙・喉音、半舌音が「-エン」の音注となっている。

舌上音、齒上音の場合、南京音では[-ã]、蘇州音では[-ɛ]の読みである。『同文備攷』は[-am]で、『磨光韻鏡』は「-アム」となる。「-アン」は南京音と杭州音との双方から説明できる。

牙・喉音字は、南京音では[-iẽ]である。半舌音の場合、南京音は[-ẽ]、蘇州音は[-iɿ]の読みである。『西儒耳目資』は[-ien](=[-iɛn])、『同文備攷』は[-iem]で、「-エン」の音注は南京音と杭州音との双方に対応する。

こうして、一・二等の字に対する音注は南京音との対応が多く見られている。なお、二等の牙・喉音、半舌音以外の場合、音注は「-アン」となっている。なぜ、同じ牙・喉音、半舌音の字に対して、一等が「-アン」、二等が「-エン」で区別されているか、これについて、表 5-7-1 から分かるように、二等の字と対応する両方言の発音に全て介音[i]をもち、「-エン」は介音[i]を示す音注法である。

上述したように、開口二等の字に対する音注は南京音と杭州音との双方から説明できる。

開口三・四等の字に対して、「-エン」の音注となっている。

舌頭音、齒頭音、半舌音の字は南京音が[-ẽ]、牙・喉音の字は南京音が[-iẽ]となり、蘇州音ではこれらの字はともに[-it]と発音する。舌上音、正齒音、半齒音の字は、南京音が[-ã]で、蘇州音が[-it]と発音する。これらの字は『西儒耳目資』は[-ien](=[-iɛn])、『同文備攷』は[-iɛn]で、『磨光韻鏡』は「-エム」である。このように、三・四等の字に対する「-エン」は南京音と杭州音との双方から説明できる。

合口三等の字は、軽唇音が「ハン」「ワン」であり、南京音は[-ã]、蘇州音

は[-E]となり、『同文備攷』は[-uan]で、『磨光韻鏡』では「フハム」と記されている。このように、「ハン」「ワン」は杭州音と対応する。

表 5-7-2 咸摂陽声三・四等韻開・合口の音注対照表

声母項目			音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応			
開口三四等	舌頭音	端透泥	-エン	[-eŋ]	[-ẽ]	○	[-ĩ]	○	○	○		
	『西』	[-iɛŋ]			×	『同』	[-iɛŋ]					
	舌上音	徹娘			[-ã]	×	[-∅]				『磨』	「-エム」
	『西』	[-iɛŋ]			『同』	[-iɛŋ]						
	齒頭音	精			[-ẽ]	○	[-ĩ]				『磨』	「-エム」
	『西』	[-iɛŋ]			『同』	[-iɛŋ]						
	正齒音	章			[-ã]	×	[-∅]				『磨』	「-エム」
	『西』	[-iɛŋ]			『同』	[-iɛŋ]						
牙音	見溪群疑	[-iẽ]	○	[-ĩ]	『磨』	「-エム」						
『西』	[-iɛŋ]	『同』	[-iɛŋ]									
喉音	影曉于羊	[-ẽ]	○	[-ĩ]	『磨』	「-エム」						
『西』	[-iɛŋ]	『同』	[-iɛŋ]									
半舌音	来	[-ã]	×	[-∅]	『磨』	「-エム」						
『西』	[-iɛŋ]	『同』	[-iɛŋ]									
半齒音	日	[-ẽ]	○	[-ĩ]	『磨』	「-エム」						
『西』	[-iɛŋ]	『同』	[-iɛŋ]									
合口三等	輕唇音	奉	「ハン」「ワン」	[-uan]	[-ã]	×	[-E]	○	『磨』	「フハム」	○	

上述したように、陽声韻の字に対する音注は全体的に杭州音に近い。

(2)入声韻の場合

咸摂の入声字について、開口一・二等の場合、一等の「ホ-蛤(2)」、二等の「サン-霎 2(1)」以外、全て「ア段」の音注となっている。

「ホ-蛤(2)」は見母の「古沓切」で、原例が下記のようにになっている。

「虫介」^{ホ ホン}蛤蚌 ハマグリ 「龍魚」^{ハア\ホ}花蛤 アサリ

南京音は[kɔʔ]、蘇州音は[kəʔ]となり、『同文備攷』は[kɔp]である。「ホ」は明らかに見母の読みと一致できず、声符「合-ホ」の類推による可能性が高い。

「霎-サ 2(1)サン 2(1)」は『広韻』に入声読みの「山洽切」(二等)と「山輒切」(三等)とあり、原例が下記のようにになっている。

「サ」:^{サズウケン}霎時間 「サン」:^{イサンケン}一霎間

ともに「三字話」の例で、意味が同じ「タチマチノアイダ」である。「サン」は明らかに入声の読みと一致できず、誤記と考えられる。

表 5-7-3 咸摂入声開口一・二等韻の音注対照表

声母項目			音注	音注 の読み	南京音 との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
一 等 開	舌頭音	端透定泥	ア段	[-a]	[-vʔ]	○	[-aʔ]	○	[-vʔ]	○
	齒頭音	從					[-aʔ]	○		
	牙音	見溪			[-ɔʔ]	×	[-əʔ]	×	[-vʔ]	○
	喉音	匣			[-vʔ]	○	[-aʔ]	○	[-vʔ]	○
	半舌音	來								
二 等 開	齒上音	初生	「-ヤ」	[-ia]	[-ivʔ]	○	[-aʔ] [-iaʔ]	○	[-iʔ]	○
	牙音	見溪					『同』[-iap]		『磨』「ア段」	
	喉音	影匣								

上記の「蛤霎」以外、表 5-7-3 のように、一等の舌頭音、齒頭音、半舌音と二等の齒上音は南京音と杭州音が[-vʔ]、蘇州音が[-aʔ]であり、「ア段」の音注はいずれにも対応する。

一等牙・喉音の字は、南京音が[-ɔʔ]、蘇州音が[-əʔ]、杭州音が[-vʔ]となり、『同文備攷』は[-ɔp]で、『磨光韻鏡』は「ハ」「ア」のような「ア段」の音注である。このように、「ア段」は杭州音に対応する。

二等牙・喉音の字は、南京音が[-ivʔ]、蘇州音が[-aʔ] [-iaʔ]、杭州音が[-iʔ]である。『同文備攷』では[-iap]である。このように、「-ヤ」は南京音と吳方言との双方から説明できる。

このように、開口一・二等の字に対する音注は両方言との対応が多いが、全体的に呉方言の特徴を反映し、杭州音に最も近い。

三等開口の字は、「キ-劫(1)」以外、「-エ」となり、合口の字は「ハ」「ワ」音注の例は1字ずつとなっている。

「キ-劫(1)」は「居怯切 強取也」で、原例が「四字話」の「^{タアハキヤアキセエハ}打家劫舎 ヲシイリヲスル」である。蘇州音は[-iəʔ]、南京音は[-ieʔ]、杭州音は[-iɪʔ]となる。『同文備攷』では[-ieɸ]である。『磨光韻鏡』では「キエ」で記されている。「キ」はいずれにも対応できず、「キエ」の誤記の可能性はある。

「劫」以外、三等開口の正歯音は南京音と蘇州音は[-əʔ]、杭州音は[-eʔ]であり、正歯音以外の場合、南京音は[-eʔ]、蘇州音は[-iəʔ]、杭州音は[-iɪʔ]となり、『同文備攷』は[-ieɸ]、『磨光韻鏡』は「-エ」である。「エ段」の音注は杭州音と最も一致する。

三等合口の非母字「ハ-法(5)」と奉母字「ワ-乏(1)」について、「ハ」「ワ」は示す韻母が同じである。南京音と杭州音は[-eʔ]、蘇州音は[-aʔ]となり、『同文備攷』では2字とも[-uat]である。「ハ」「ワ」の違いは声母による結果で、呉方言と対応する。

表 5-7-4 咸攝入声三・四等韻の音注対照表

声母項目			音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応			
三等開	舌上音	娘	エ段 「-エ」	[-e]	[-eʔ]	○	[-iəʔ] 『同』[-ieɸ]	○	[-iɪʔ] 『磨』「-エ」	○
	齒頭音	精清			[-əʔ]	○	[-eʔ] 『同』[-ieɸ]	○	[-eʔ] 『磨』「-エ」	○
	正歯音	章			[-eʔ]	○	[-iəʔ] 『同』[-ieɸ]	○	[-iɪʔ] 『磨』「-エ」	○
	牙音	見疑								
	喉音	羊								
三等合	脛唇音	非奉	「ハ」 「ワ」	[-a] [-ua]	[-eʔ]	×	[-aʔ] 『同』[-uat]	○	[-eʔ] 『磨』「ウワ」「フハ」	○
四等開	舌頭音	透定	エ段	[-e]	[-eʔ]	○	[-iəʔ] 『同』[-iap]	×	[-iɪʔ] 『磨』「-エ」	○
	齒頭音	心	「-ヤ」	[-ia]	[-ieʔ]	×	[-iəʔ] 『同』[-iap]	○	[-iɪʔ] 『磨』「-エ」	×
	牙音	見			[-iaʔ]	○				
	喉音	匣			[-ieʔ]	×				

四等開口の字は、舌頭音が「エ段」、舌頭音以外の場合、「ヒエ-協(1)」を除き、「-ヤ」の音注である。

「ヒエ-協(1)」は匣母の「胡頰切」で、原例が「長短話」の「^{エハヤウドンスインヒエリ}也要同心協力」である。南京音は[-ieʔ]、蘇州音は[-iəʔ]、杭州音は[-iɪʔ]となり、『同文備攷』

は[-ieɲ]で、『磨光韻鏡』でも「-エ」と記されている。このように、「-エ」は杭州音に最も対応している。

舌頭音の字は南京音が[-eʔ]、蘇州音が[-iəʔ]、杭州音が[-iiʔ]となり、『同文備攷』では[-iap]、『磨光韻鏡』でも「-エ」となっている。このように、「エ段」の音注は杭州音に一致している。

歯頭音、牙音、喉音の字は南京音では牙音が[-iaʔ]、歯頭音と喉音が[-ieʔ]であり、蘇州音が[-iəʔ]、杭州音が[-iiʔ]となり、『同文備攷』は[-iap]、『磨光韻鏡』は「-エ」である。『同文備攷』の発音から分かるように、当時の呉方言も[ia]をもち、「-ヤ」は呉方言からも説明できる。

このように、三・四等の字に対する音注は全体的に呉方言の特徴に近い。

上述したように、咸摂の陽性韻と入声韻に対する音注は杭州音に最も近いことが分かる。

先行研究の謝(2016:77)は「見母的謙ケン keN」と「謙」を見母の例として挙げているが、『広韻』に「謙」は「苦兼切」で、見母でなく、溪母の所属字である。

なお、山摂の場合を併せて、考察の結果のように、陽声韻の場合、両摂の開口一等の字、二等の舌上音、歯上音が「-アン」、開口二等の牙・喉の字、開口三・四等の字が「-エン」となり、合口三等の軽唇音の字が「ハン」「ワン」となっている。入声韻の場合、開口一等の字、二等歯上音の字が「ア段」、開口三等の歯頭音、正歯音、喉音の字、四等の舌頭音の字が「エ段」の音注となっている。こうした同じ音注となる現象は山・咸両摂の韻尾が統合された変化を反映している。一方、入声韻の場合、歯頭音、喉音の場合、山摂が「-エ」、咸摂が「-ヤ」となり、牙音の場合、山摂が「イ段」、咸摂が「-ヤ」であり、違いが存在している。こうした違いについて、合流がまだ完成していないことを反映するか、或は、音注法に問題があるかなどの可能性が推測できるが、断定的に言えないため、更なる検討する必要と考えられる。

表 5-7 咸摂の所属字一覧

(1)〈開口・一等〉

撰			咸摂		字 種 数	延 べ 数	咸摂		字 種 数	延 べ 数	咸摂		字 種 数	延 べ 数	咸摂		字 種 数	延 べ 数							
等位	声調	韻目	一等	平			談	感			上	去			勘	開									
開合			開	開			開	開			開	開			開	開									
舌頭音	端 [t-]	清	タン-耽 (3)	1	3																				
	透 [t'-]	次清	タン-探 (3)貪 (6)	2	9						タン-毯 (1)	1	1												
	定 [d-]	濁	ダン-鐔 ① (1)	1	1	ダン-淡 ① 3(2)談 8(7) タン-淡 3(1)談 8(1)	2	11			ダン-淡 ② 3(2)啖 ① (1) タン-淡 3(1)	1	1			ダン-淡 ③ 3(2)啖 ② (1) タン-淡 3(1)									
	泥 [n-]	次濁	ナン-男 (1)南 (4)楠 (1)	3	6																				
歯頭音	精 [ts-]	清	ツアン-簪 ① 2(1) ツハン-簪 2(1)	1	2																				
	清 [ts'-]	次清						サン-慘 (1)	1	1															
	從 [dz-]	濁	ヅアン-蠶 (2)	1	2	ヅアン-慚 (4)慙 (1)	2	5								ツアン-暫 (1)	1	1							
牙音	心 [s-]	清				サン-三 ① (26)	1	26								サン-三 ② (26)									
	見 [k-]	清				カン-柑 (3)ガン-甘 (1)	2	4	カン-感 (6)	1	6	カン-敢 (20)橄 (1)	2	21											
	溪 [k'-]	次清	カン-堪 (2)	1	2				カン-砍 (2)	1	2														
喉音	影 [ʔ-]	清	アン-諳 (1)	1	1										アン-暗 (10)醜 (1)	2	11								
	曉 [h-]	次清										ハアン-喊 3(2)木感 (1) ハン-喊 3(1)	2	4											
	匣 [ɦ-]	濁	アン-含 5(4)ハン-含 5(1) ハアン-函 ① (2)	2	7			カン-撼 (1)	1	1															
半舌音	来 [l-]	次濁			ラン-藍 (1)	1	1				ラン-攪 (1)	1	1												
計				13	33			8	47			4	10			7	28			2	11			1	1

注：・「アン-醜(1)」は「央炎切 鹽醜又菹也」(鹽韻)、「於嚴切 鹽漬魚也」(嚴韻)で、原例が「二字話」の「醜西倉(アンサン) キタナヒ」である。『広韻』に「醜」も「於嚴切」である。『漢語大字典』には、「醜」は ā(また āng)の読みで、「汚す」という意味がある。このように、原例の「醜西倉」を現代の「醜臙」として扱うことができる。また、「醜」は『集韻』に「烏紺切」との読みがあり、音注と対応する。蘇州音では[iu]と発音する。

・「含-ハン 5(1)」は「小曲」の例である。

・「喊-ハアン 3(2)ハン 3(1)」の二種類の音注は同じ発音を示す音注法である。

(2)〈開口・二等〉

撰			咸摂		字 種 数	延 べ 数	咸摂		字 種 数	延 べ 数	咸摂		字 種 数	延 べ 数			
等位	声調	韻目	二等	平			銜	上			去						
開合			開	開			開	開			開	開					
舌上音	澄 [d-]	濁															
	娘 [ŋ]	次濁	ナン-喃 (2)	1	2						ヅアン-賺 (1)	1	1				
歯上音	照(莊) [tʂ-]	清								サン-斬 2(1)ツアン-斬 2(1)	1	2					
	牀(崇) [dʂ-]	濁	ヅアン-讎 (1)	1	1												
	審(生) [ʂ-]	清	サン-衫 (1)	1	1	サン-衫 (1)	1	1									
牙音	見 [k-]	清				ケン-鑑 (1)	1	1									
	溪 [k'-]	次清	ケン-軟 ① (1)	1	1				ケン-軟 ② (1)			ケン-軟 ③ (1)					
喉音	疑 [ŋ-]	次濁				カン-巖 2(1)ガン-巖 2(1)	1	2									
	曉 [h-]	次清															
	匣 [ɦ-]	濁				エン-啣 (1)銜 (1)	2	2			エン-陷 (2)	1	2				
半舌音	来 [l-]	次濁							レン-臉 ① (2)	1	2						
計				4	5			5	6			2	4			2	3

注：・「巖-カン 2(1)ガン 2(1)」は疑母の部分で検討したように、蘇州音では[ŋe]、南京音では[ã]となるので、「ガン」「カン」は方言のいずれからも説明できない。

1.8 梗摂の場合

梗摂の所属字は計 202 字種、延べ 1,050 字である。その中、陽声韻の字は計 129 字種、724 字で、入声韻の字は計 73 字種で、延べ 326 字である。

(1) 陽声韻の場合

陽声韻の開口二等の場合、「マン-虻(1)」以外の重唇音の字は「モン」、舌上音、齒上音、牙音、半舌音の字は「-エン」、「ヘエン-莖(1)」以外の喉音字は「-イン」の音注となっている。

「マン-虻(1)」は、同書では「**𧈧**」で、『広韻』に未収、『集韻』に異体字の「虻」が明母の「眉耕切 説文蠶人飛蟲」である。原例は「虫介」の「^{マンルウ}虻兒 アブ」である。韻母面では発音が音注と一致できず、また、『西儒耳目資』は[-am](=[-aŋ])で、蘇州音は鼻音性質となる[mã]と発音するので、「マン」は両方言から説明できる。

「ヘエン-莖(1)」は、『広韻』に匣母の「戸耕切 草木榦也」と影母の「烏莖切 爾雅釋草云姚莖涂薺」とあり、原例が「花草」の「^{ヘエンルウ}莖兒 クキ」で、音注が匣母の読みと一致している。また、南京音は[-iŋ]、蘇州音は[-in]と発音し、いずれの場合も音注と一致しない。つまり、両方言にあるこの字の発音は「戸耕切」からきたものではなく、つまり、「ヘエン」は古い読みを注するもので、両方言から説明できない。

表 5-8-1 梗摂陽声開口二等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応			杭州音との対応	
重唇音	明	モン	[-oŋ]	[-əŋ]	○	[-əŋ](文)[-ā](白)	(文)○	[-əŋ]	○
舌上音	徹	-エン	[-eŋ]	[-əŋ]	○	[-əŋ](文)[-ā](白)	(文)○		
齒上音	莊生								
牙音	見溪疑								
喉音	影匣	-イン	[-iŋ]	[-iŋ]	○	[-in]	○	[-iŋ]	○
半舌音	来	-エン	[-eŋ]	[-əŋ]	○	[-əŋ](文)[-ā](白)	(文)○	[-əŋ]	○

「虻莖」2 字以外、表 5-8-1 のように、開口二等の字について、主に「モン」「-エン」「-イン」の音注となっている。喉音の字は、南京音が[-iŋ]、蘇州音が[-in]、杭州音が[-iŋ]となり、「-イン」はいずれの場合にも一致する。

それ以外の場合、南京音は[-əŋ]と発音するが、蘇州音では、文語音の場合[-əŋ]、白話音の場合[-ā]([-ã])で、杭州音は[-əŋ]である。「-エン」はいずれ

の場合からも説明できる。

このように、開口二等の字に対する音注は、南京音、蘇州音(文語音)、杭州音のいずれからも説明できる。

開口三・四等の場合について、「スエン-鮭(1)」以外、音注が「-イン」となっている。

「スエン-鮭(1)」は原例が「龍魚」の「鮭魚^{スエンイユイ}」で、音注は「桑經切」と対応できず、「生-スエン/ス°エン」という声符の類推による可能性が大きい。

表 5-8-2 梗摂陽声開口三・四等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応		
三等	重唇音	幫並明	-イン	[-in]	[-iŋ]	○	[-in]	○	[-in]	○
	舌上音	知澄			[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○
	齒頭音	精清從心			『西』[-iŋ]	○	『同』[-iŋ]	○	『磨』[-イン]	○
	正齒音	章書禪			[-iŋ]	○	[-in]	○	[-in]	○
	牙音	見溪疑			[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○
	喉音	影羊			『西』[-iŋ]	○	『同』[-iŋ]	○	『磨』[-イン]	○
四等	半舌音	來	-イン	[-in]						
	重唇音	並明								
	舌頭音	端透定泥			[-iŋ]	○	[-in]	○	[-in]	○
	齒頭音	清心								
	牙音	見								
	喉音	匣								
半舌音	來									

表 5-8-2 のように、三等の舌上音、正齒音の字は南京音が[-əŋ]、蘇州・杭州音が[-ən]であるが、『西儒耳目資』は[-im](=[-iŋ])、『同文備攷』は[-iŋ]となり、『磨光韻鏡』でも「-イン」である。「-イン」の音注は両方言から対応する。それ以外の三・四等の字は、南京音が[-iŋ]、蘇州音が[-in]、杭州音が[-in]で、「-イン」の音注はいずれにも対応する。

このように、開口三・四等の字に対する「-イン」は両方言から説明できる。

合口の字について、二等の場合、「ホン」である。「ホン-轟」は両方言では同じ[-oŋ]で、両方言と対応している。

「ホン-横(1)」は、原例が「常言」の「難塞鼻下横^{ナンスエビイヒヤアホン} 鼻下横ハ塞カレヌ」である。『広韻』に見母の「古黃切 長安門名」と匣母の「戸盲切 縦横也」(平声)、「戸孟切 非理來又音宏」(去声)とある。音注は明らかに見母の読みと対応できず、意味の上では匣母「戸盲切」と一致している。南京音は[-əŋ]、

蘇州音は[-uã]、杭州音は[-ən] [-uΛŋ]となり、『同文備攷』では[-uəŋ]である。「ホン」は両方言から説明できる。

表 5-8-3 梗摂陽声合口二・三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注 の読み	南京音 との対応	蘇州音 との対応	杭州音 との対応
合二	喉音	曉[h-]	-オン	[-oŋ]	○	[-oŋ] ○ [-ən] ○
合三	牙音	溪[k'-]	-イン	[-iŋ]	○	[-iŋ] ○ [-iŋ] ○
	喉音	曉[h-]	-ヨン	[-ioŋ]	○	[-ioŋ] ○ [-ioŋ] ○
		于[y-]	-イン	[-iŋ]	○	[-iŋ] ○ [-iŋ] ○
	半舌音	羊[j-]	-イン	[-iŋ]	○	[-iŋ] ○ [-iŋ] ○
合四	喉音	来[l-]	-ヨン	[-oŋ]	○	[-iŋ] ○ [-iŋ] ○

合口三等の場合、喉音の「兄榮永詠」に対して「-ヨン」となり、それ以外、「-イン」の音注となっている。

牙音、喉音羊母、半舌音の字は、南京音が[-iŋ]、蘇州音が[-iŋ] 杭州音が[-iŋ]となり、「-イン」の音注はいずれからも説明できる。喉音曉・于母の字は南京音、蘇州音、杭州音とのいずれでも[-ioŋ]発音し、「-ヨン」の音注と一致する。

合口四等の「蚩」は、原例が「虫介」の「蚩虫」である。反切は「戸肩切」で、南京音が[-iŋ]、蘇州音が[-iŋ]、杭州音が[-iŋ]となり、『同文備攷』では[ɦyəŋ]である。「ヨン」は両方言から説明できない。

このように、合口二・三等の字に対する音注は両方言から説明できる。四等の「蚩」は両方言から説明できない。

上述したように、陽声韻の字に対する音注は両方言と対応でき、その内、開口二等の字に対する音注は蘇州音の文語音と一致している。

(2)入声韻の場合

入声字について、二等開口の重唇音幫組の字は、明母「モ・モ[°]」、明母以外「ペ・ペ」(「ペエ」)となっている。表 5-8-4 のように、南京音は[-əʔ]、蘇州音は[-əʔ](文)[-aʔ](白)で、『同文備攷』は[-ək]であり、「オ段」「エ段」のいずれも両方言から説明できる。『磨光韻鏡』では「-エ」の音注となり、対応も多く存在している。

「サ[°]-柵(1)」以外、舌上音、齒上音、牙音の字は「-エ」の音注となっている。喉音の字は「ホ-嚇(1)」「ウヲ-核(1)」のような「オ段」の音注である。これらの字は南京音と蘇州音ともは[-əʔ]で、音注と対応する。

「サ[°]-柵(1)」は、原例が「^{ヒヤアリヤウサイサ}下了寨柵 陣ヲ取タ」で、『広韻』にその異体字「柵」は初母の「測戟切 村柵 説文曰堅編木」「楚革切 堅木立柵 又村柵」と生母の「所晏切 籬柵」とあり、意味上に違いがない。生母の読みは去声で、入声を示す短音節型の「サ[°]」と一致しない。また、両方言では同じ[-aʔ]と発音するため、「サ[°]」と対応している。

表 5-8-4 梗撰入声開口二等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応
重唇音	幫滂並	「ペ・ペ」	[-e]	[-əʔ]	○ [-əʔ](文) [-aʔ](白) 『同』[-ək]	○ [-vʔ] 『磨』「ボエ」
	明	「モ・モ [°] 」	[-o]			○ 『磨』「モエ」
舌上音	徹澄	-エ	[-e]	[-əʔ]	○ [-əʔ] 『同』[-ək]	○ [-vʔ] 『磨』「-エ」
齒上音	莊初生					
牙音	見溪					
喉音	曉	オ段	[-o]	○	○	○ [-vʔ] 『磨』「イ段」

このように、二等の字に対する音注は両方言から説明できる。

三等字の場合、「ネ-逆(2)」以外、重唇音、舌上音、正齒音、牙・喉音の字は「イ段」、齒頭音の字は「-エ」の音注である。四等字の場合、明母以外の重唇音、牙音の字は「イ段」、明母の「メ-覓(1)」、舌頭音、齒頭音、半舌音の字は「-エ」の音注である。

「ネ-逆(2)」は「宜戟切」で、原例が「二字話」の「^{ウ、ネ}忤逆」と「四字話」の「^{モネツウキヤウ}莫逆至交」である。南京音は[liʔ]、蘇州音は[niəʔ]、杭州音は[niʔ]となる。「ネ」は蘇州音と杭州音から説明できる。

表 5-8-5 のように、三・四等の重唇音(明母以外)、舌上音、正歯音、喉音の字は南京音が[-ɿʔ]、蘇州音が[-əʔ]、杭州音が[-iɿʔ]となり、『同文備攷』では[-ik]で、『磨光韻鏡』も「イ段」の音注である。このように、「イ段」は杭州音から説明できる。それ以外の場合、南京音が[-iʔ]、蘇州音が[-iəʔ]、杭州音が[-iɿʔ]となり、「-エ」の音注は蘇州音と杭州音から説明できる。

表 5-8-5 梗撰入声開口三・四等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応		
重唇音	幫滂並	イ段	[-i]	[-iʔ]	○	○	[-iɿʔ]	○
	明	-エ	[-e]		×	×	『磨』「イ段」	○
舌頭音	端透定	-エ	[-e]	○	○	×	[-iɿʔ]	○
舌上音	澄	イ段	[-i]	[-ɿʔ]	○	○	『磨』「イ段」	○
齒頭音	精清從心邪	-エ	[-e]	[-iʔ]	×	×	[-iɿʔ]	○
正歯音	章昌書禪	イ段	[-i]	[-ɿʔ]	○	○	『磨』「イ段」	○
牙音	見溪群			○	○	[-iɿʔ]	○	
	疑	ネ	[-e]	×	×	『磨』「イ段」	○	
喉音	影羊	イ段	[-i]	[-iʔ]	○	○	『磨』「イ段」	○
半舌音	来	-エ	[-e]	×	×	『磨』「-イツ」	○	

このように、入声開口三・四等の字に対する音注は杭州音に最も近い。

上記のように、梗撰の字について、陽声韻でも入声韻でも杭州音の特徴に近い。

なお、先行研究において、謝(2016:84)は「幫母的兵ビン[biN]」と指摘しているが、同書では「兵」は計 8 例で、音注は「ビン」でなく、全て「ピン」で注されている。

表 5-8 梗撰の所属字一覧

(1)〈開口・二等〉

撰			梗撰		撰		梗撰		撰		梗撰		撰		梗撰				
等位			二等		二等		二等		二等		二等		二等		二等				
声調			平		平		上		上		去		去		去				
韻目			庚		耕		梗		耿		映/敬		諍		諍				
開合			aŋ		eŋ		aŋ		eŋ		aŋ		eŋ		aŋ				
開合			開		開		開		開		開		開		開				
重唇音	明 [m-]	次濁	マン-虻 (1)	1	1			モン-猛① (1) 虻① (1)	2	2	モン-猛② (1) ② 虻 (1)								
舌頭音	端 [t-]	清					タア-打① 42(1) タア-打 42(41)	1	42										
舌上音	徹 [tʰ-]	次清	ツエン-磳 (1)	1	1														
齒上音	照(莊)[tʂ-]	清			ツエン-爭(4) 箒(2)	2	6							ツエン-掙(掙)(4) 諍(1)	2	5			
	審(生)[ʂ-]	清	スエン-生① 92(30) 甥(2) ス ^o エン-生 92(62)	2	94			スエン-省② 6(3)	1	3			スエン-生② 92(30) ス ^o エン-生 92(62)						
牙音	見 [k-]	清	ケ ^o ン-庚 4(2) 更① 18(4) ケン-庚 4(2) 更 18(14) 梗(1)	3	23	ケン-耕(1)	1	1	ケン-梗(1)	1	1	ケン-耿(2)	1	2	ケ ^o ン-更② 18(4) ケン-更 18(14)				
	溪 [kʰ-]	次清	ケ ^o ン-坑(1)	1	1														
	疑 [ŋ-]	次濁													ゲエン-硬 3(1) ゲン-硬 3(1) ヘエン-硬 3(1)	1	3		
喉音	影 [ʔ-]	清			イン-櫻(2) 鶯(3) 鸚(2)	3	7												
	匣 [ɦ-]	濁	ヒン-行② 34(30)	1	30	ヘエン-莖① (1)	1	1	イン-杏 3(2) ヒン-杏 3(1)	1	3	ヒン-幸 6(5)	1	6					
半舌音	来 [l-]	次濁						レン-冷(9)	1	9									
計				9	150		7	15		6	18		2	8		0	0	3	8

注：・「硬-ゲエン 3(1) ゲン 3(1) ヘエン 3(1)」は、梗撰の「五諍切 堅牢也」であり、3例の原例は「三字話」の「硬起來 コハクナリタ」「生硬的 イカフコハヒ」と「二字話」の「硬磳 コハヒ」となっている。表記例の意味上に違いがなく、蘇州音では [ŋ-]、南京音ではゼロ声母となり、「ヘエン」は読みと一致できず、誤記と考えられる。なお、「ゲエン」と「ゲン」について、梗撰の見組の字は「エ段+ン」で終わる音注となるのは一般的で、発音上では、両音注に区別がなく、同じものと考えられる。

(2)〈開口・三等〉

撰			梗撰		撰		梗撰		撰		梗撰		撰		梗撰				
等位			三等		三等		三等		三等		三等		三等		三等				
声調			平		平		上		上		去		去		去				
韻目			清		庚		梗		靜		勁		映		ian				
開合			ian		ian		ian		ian		ian		ian		ian				
開合			開		開		開		開		開		開		開				
重唇音	幫 [p-]	清	ピン-屏② (2)			ヒン-兵(8)	1	8	ヒン-秉(1)	1	1	ヒン-併① (2) 餅 5(4) ヒン-餅 5(1) ピン-屏③ (2)	2	7	ヒン-併② (2)		1	2	
	並 [b-]	濁			ヒン-平① 24(2) 評① (1) ピン-平 24(22)	2	25								ピン-病 10(9) ヒン-病 10(1) 評② (1)	1	10		
	明 [m-]	次濁	ミン-名(18)	1	18	ミン-明(27) 鳴(2)	2	29	ミン-皿(1)	1	1				ミン-命(22)	1	22		
舌上音	知 [t-]	清	チン-貞(1)	1	1														
	澄 [d-]	濁	チン-呈① (1) 程 6(1) チン-程 6(5)	2	7									チン-呈② (1)					
齒頭音	精 [ts-]	清	ツイン-精① (2) 菁(1) 蜻① (2) 鶻① (1) 旌 2(1) ツイ-旌 2(1)	4	6							ツイン-井(3)	1	3	ツイン-精② (2)				
	清 [tsʰ-]	次清	ツイン-清(12)	1	12							ツイン-請① (34)	1	34					
	從 [dz-]	濁	ヅイン-情 21(16) 晴 2(1) ツイン-情 21(5) 晴 2(1) 請② (34)	2	23							ヅイン-靜(靜)(3) ツエン-諍(諍)(3)	2	6	ツイン-淨① (3) 請③ (34)	1	3		
	心 [s-]	清										スイン-省① 6(3)	1	3	スイン-姓(4) 性(6)	2	10		
正齒音	照(章)[tʂ-]	清	チン-正① (20) 鉦(1)	2	21							チン-整(4)	1	4	チン-正② (20)				
	審(書)[ʂ-]	清	シン-声(14)	1	14									シン-聖(3)	1	3			
	禪 [ʐ-]	濁	ヂン-城 4(2) 成 18(17) 誠(1) チン-城 4(2) 成 18(1)	3	23									ジン-盛(2)	1	2			
牙音	見 [k-]	清			キン-京(2) 驚(5) 荆(5)	3	12	キン-景(5)	1	5					キン-敬(11) 竟(15) 鏡(2)	3	28		
	溪 [kʰ-]	次清	キン-輕① (10)	1	10									キン-輕② (10)			キン-慶(2)	1	2
	疑 [ŋ-]	次濁			ニン-迎① (5)	1	5								ニン-迎② (5)				
喉音	影 [ʔ-]	清	イン-嬰(1)	1	1	イン-英(3)	1	3											
	羊 [j-]	次濁	イン-羸(1)	1	1														
半舌音	来 [l-]	次濁	リン-令① (16)	1	16									リン-令② (16)					
計				21	153		10	82		3	7		8	57		5	18	7	64

注：・「旌-ツイン 2(1) ツイ 2(1)」は「子盈切」で、原例が「四字話」の「旌旗蔽天」と「器用」の「旌旗」である。四字話の例は初出であるが、同じ語「旌旗」のため、読みと対応しない「ツイ」音注は明らかに「ツイン」による「ン」の記入漏れである。
・「ホ^oイ-鶻(1)」は、『康熙字典』に「韻會」局闕切」とあり、見母錫韻の字である。声母と韻母との何れも「ホ^oイ」と合わないため、声符「貝-ホ^oイ」による類推の結果と考えられる。

(3)〈開口・四等〉

撰		梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数	
等位	四等	平	上			去	平							
声調		青		eŋ		eŋ		eŋ		ueŋ		合		
韻目		開		開		開		開		開		開		
重唇音	並 [b-]	濁	ピン-瓶 (2)屏 ① (2)萍 (2)		3	6	ピン-並 (2)		1	2				
	明 [m-]	次濁	ミン-螟 (3)		1	3	ミン-酩 (2)		1	2				
舌頭音	端 [t-]	清	テイン-丁 ① (1)叮 (2)釘 ① (3)		3	6	テイン-鼎 (1)酛 (2)頂 (2)		3	5	テイン-定 ② 10(8)椀 (4)テイン-定 10(2)釘 ② (3)		1	4
	透 [t'-]	次清	テイン-聽 (聽) ① (11)		1	11					テイン-聽 (聽) ② (11)			
	定 [d-]	濁	デイン-停 (5)艇 2(1)テイン-艇 2(1)		2	7	デイン-艇 (2)艇 2(1)テイン-艇 2(1)		1	2	デイン-定 ① 10(8)テイン-定 10(2)		1	10
	泥 [n-]	次濁	ニン-寧 (1)寧 ① (5)		2	6	ニン-寧 ① (1)		1	1	ニン-倭 (1)寧 ② (1)		1	1
齒頭音	清 [ts'-]	次清	ツイン-青 (9)蜻 ② (2)鯖 ① (1)鶻 ② (1)		3	12								
	心 [s-]	清	スイン-星 (3)醒 ① (4)猩 ① (6)スエン-鯢 (1)		4	14	スイン-醒 ② (4)				スイン-醒 ③ (4)			
牙音	見 [k-]	清	キン-經 ① (8)		1	8					キン-徑 (2)經 ② (8)		1	2
喉音	匣 [h-]	濁									ヨン-螢 (1)		1	1
半舌音	来 [l-]	次濁	リン-令 ③ (16)伶 (1)零 ① (1)蛉 (4)靈 (2)鈴 (1)鶯 (1)		6	10					リン-令 ④ (16)零 ② (1)			
計					26	83			7	12			4	17

注：・「艇-デイン 2(1)テイン 2(1)」について、『広韻』に定母梗撰「特丁切 蜻艇亦螳蛄別名」(平声)、「徒鼎切 蟲名」(上声)と山撰「徒典切 蝮蟻一名」とある。原例は、「虫介」の「蜻蟻 トンボウ」「蝮蟻 ヤモリ」であり、「蝮蟻」は意味上では山撰の読みと一致するが、発音上では音注と対応しない。

(4)〈合口・二等〉

撰		梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数
等位	二等	平	庚			平	耕			去	映/敬		
声調		庚		uaŋ		uaŋ		uaŋ		合		合	
韻目		合		合		合		合		合		合	
喉音	曉 [h-]	次清					ホン-轟 ① (1)		1	1			
	匣 [h-]	濁	ホン-横 ② (1)				ホン-横 ① (1)		1	1			
計				0	0			1	1			0	0

(5)〈合口・三等〉

撰		梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数	
等位	三等	平	庚			平	上			去	映							
声調		清		yaŋ		yaŋ		yaŋ		合		合		合				
韻目		合		合		合		合		合		合		合				
牙音	溪 [k'-]	次清	キン-傾 (1)		1	1												
喉音	曉 [h-]	次清					ヒヨン-兄 (16)		1	16								
	于 [y-]	次濁					ヨン-榮 (1)蝶 (1)		2	2	ヨン-永 (1)		1	1	ヨン-詠 (1)		1	1
	羊 [j-]	次濁									イン-穎 (2)		1	2				
半舌音	来 [l-]	次濁									リン-領 (6)		1	6				
計				1	1			3	18			1	1	2		8	1	1

(6)〈入声の字〉

①〈開口・二等〉

撰		梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数
等位	声調	二等	入			二等	入		
韻目		陌		字種数	延べ数	麥		字種数	延べ数
開合		ak				ek			
		開				開			
重唇音	幫 [p-]	清	へ°-栢 4(2)伯(1)百 12(11)べ-百 12(1)へ°エ-栢 4(2)	3	17	へ°エ-槩(1)		1	1
	滂 [p'-]	次清	へ°-珀(1)魄①(1)ホ°-拍(2)	3	4				
	並 [b-]	濁	べ-白 23(20) へ°-帛(1)昔(1)白 23(2)へ-白 23(1)	3	25				
	明 [m-]	次濁	モ-縹(1)モ°-陌(1)	2	2	モ-麥(麥 3)(6)モ°-脉(2)		2	8
舌上音	徹 [t'-]	次清	ゼ-拆(3)	1	3				
	澄 [d-]	濁	ツエ-擇(5)	1	5				
齒上音	照(莊)[tʂ-]	清	ツエ-窄(1)	1	1				
	穿(初)[tʂ'-]	次清	サ°-柵①(1)	1	1	ツエ-策(1)冊(1)サ°-柵②(1)		2	2
牙音	見 [k-]	清	ケ°-格①(1)	1	1	ケ-隔(3)		1	3
	溪 [k'-]	次清	ケ-客 20(9)ケ°-客 20(11)	1	20				
喉音	曉 [h-]	次清	ホ-嚇①(1)	1	1				
	匣 [ɦ-]	濁				ウヲ-核(1)		1	1
計				18	80			7	15

②〈三・四等開〉

撰		梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数	梗撰		字種数	延べ数
等位	声調	三等	入			三等	入			四等	入		
韻目		昔		字種数	延べ数	陌		字種数	延べ数	錫		字種数	延べ数
開合		iak				iak				ek			
		開				開							
重唇音	幫 [p-]	清	ヒ°-碧①(1)	1	1	ヒ°-碧②(1)				ヒ°-壁(7)		1	7
	滂 [p'-]	次清	ヒ°-僻①(1)	1	1					ヒ°-劈(2)ヒ°-僻②(1)		1	2
	並 [b-]	濁								ヒ°-謁(1)		1	1
	明 [m-]	次濁								メ-覺(1)		1	1
舌頭音	端 [t-]	清								テ-的(91)滴(2)		2	93
	透 [t'-]	次清								テ-踢(3)テ-逖(1)		2	4
	定 [d-]	濁								テ-敵①(4)テ-笛(1)		2	5
舌上音	澄 [d-]	濁	チ-躑(1)	1	1								
齒頭音	精 [ts-]	清	ツエ-脊(2)跡(2)積①(3)鯽①(1)借② 10(1)ツエ-借 10(9)スエ-鶻①(1)	5	9					ツエ-績(2)		1	2
	清 [ts'-]	次清								ツエ-戚(2)		1	2
	從 [dz-]	濁	ツエ-籍(1)	1	1					ツエ-寂(5)		1	5
	心 [s-]	清	スエ-惜(6)昔(2)媳(2)	3	10					ツエ-蜥(虫折)(1)		1	1
	邪 [z-]	濁	ツエ-席(6)夕(1)	2	7								
正齒音	照(章)[tʂ-]	清	チ-隻(3)	1	3								
	照(昌)[tʂ'-]	次清	チ-尺(2)赤(1)軼(1)	3	4								
	審(書)[ʃ-]	清	シ-釋(1)適①(1)	2	2								
	禪 [ʒ-]	濁	ジ-石 13(5)趾(1)シ-石 13(8)柘(1)	3	15								
牙音	見 [k-]	清								キ-激①(2)ホ°イ-賜(1)		2	3
	溪 [k'-]	次清								キ-喫(29)		1	29
	群 [g-]	濁				ギ-履 2(1)キ-履 2(1)		1	2				
	疑 [ŋ-]	次濁				ネ-逆(2)		1	2				
喉音	影 [ʔ-]	清	イ-益(4)	1	4								
	羊 [j-]	次濁	イ-亦(8)テ-螭(1)スエ-鯨(1)	3	10								
半舌音	來 [l-]	次濁								レ-歷(2)		1	2
計				27	68			2	4			18	157

注:「テ-螭(1)」「スエ-鯨(1)」2字は、羊母の部分で検討したように、「螭」の音注は字形の近い「テ-踢」の類推による誤記の可能性がある。「鯨」は「スエ-錫」等の類推による可能性がある。
 ・「ホイ-賜(1)」は入声字の部分で検討したように、声符「貝-ホイ」の類推によるものである。

1.9 曾撮

曾撮所属字は計 73 字種、延べ 488 字で、その内、陽声韻の字は計 38 字種で、延べ 219 字で、入声韻の字は計 35 字種、延べ 269 字である。

(1) 陽声韻の場合

陽声韻の字について、開口一等の重唇音の字が「-オン」となり、それ以外が「-エン」の音注となっている。

表 5-9-1 のように、一等の重唇音の字は南京音が[-əŋ]、蘇州音が[-ən]、杭州音が[-ʌŋ]となり、それ以外の字は南京音、杭州音が[-əŋ]、蘇州音が[-ən]となっている。『同文備攷』は全て[-əŋ]、『磨光韻鏡』は全て「-エン」である。「-オン」「-エン」二種類の音注は同じ主母音[ə]を示すもので、南京音と吳方言のいずれにも一致している。

表 5-9-1 曾撮陽声開口一・三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応				
一等	重唇音	並明	-オン	[-oŋ]	[-əŋ]	○	[-ən](文)	(文)	[-ʌŋ]	○		
	舌頭音	端定泥	-エン	[-eŋ]			[-ä](白)	○	『磨』		「ポエン」	
	齒頭音	精從心					[-ən]	○	[-ən]		○	
牙音	溪											
三等	重唇音	幫並	-イン	[-iŋ]	[-iŋ]	○	[-in]	○	[-in]	○		
	正齒音	章昌 船書禪			[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○		
	喉音	影曉羊			『西』	[-iŋ]	○	『同』	[-iŋ]	『磨』	「-イン」	○
	半舌音	来			[-iŋ]	○	[-in]	○	[-in]	○		
	半齒音	日			[-əŋ]	○	[-ən]	○	[-ən]	○		
					『西』	[-iŋ]	○	『同』	[-iŋ]	○		

三等の字は、音注が「-イン」となっている。

重唇音、喉音、半舌音来母の字は、南京音が[-iŋ]、蘇州音が[-in]の読みであり、「-イン」の音注と一致するが、正齒音と半齒音日母の字は、南京音が[-əŋ]、蘇州・杭州音が[-ən]となり、音注とは対応しない。一方、『西儒耳目資』と『同文備攷』では同じ[-iŋ]、『磨光韻鏡』は「-イン」であるため、「-イン」の音注は当時の発音から説明できる。

このように、陽声韻の字に対する音注は両方言から説明できる。

(2)入声韻の場合

入声韻の字について、一等の徳韻開口の重唇音明母の「墨黙」に「モ°・モ」音注、それ以外の場合は「-エ」(「エ段」)の音注となっている。「モ°・モ」と「-エ」(「エ段」)は同じ、主母音[ə]をもつ発音と対応する。

表 5-9-2 のように、音注は南京音と蘇州音の[-əʔ]から説明できる。また、『同文備攷』は[-ək]、『磨光韻鏡』は「-エ」となり、いずれの場合も「-エ」(「エ段」)の音注と対応している。

徳韻合口の牙音見母が「クヲ」、喉音匣母の字が「ウヲ」のように、音注は「-ヲ」音注である。「ヲ」も[ə]を示すもので、南京音が[-ueʔ]、蘇州音が[-uəʔ]、杭州音が[-uoʔ]で、「クヲ」は蘇州音と杭州音と対応している。

表 5-9-2 曾撰入声開・合口一・三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応					
一等開	重唇音	明	「モ°・モ」	[-o]	[-əʔ]	○	[-əʔ]	『磨』「モエ」	○		
	舌頭音	端透定	「テ・デ」	[-e]	[-əʔ]	×	[-əʔ]	『同』「-エ」	○		
	齒頭音	精從心	-エ								
	牙音	溪	エ段								
	喉音	曉									
半舌音	来										
一等合	牙音	見	「-ヲ」	[-o]	[-ueʔ]	×	[-uəʔ]	○	[-uoʔ]	『磨』「-ヲ」	○
	喉音	匣									
三等開	齒頭音	精心	-エ	[-e]	[-iʔ]	×	[-iaʔ]	×	[-irʔ]	『磨』「-イツ」	○
	齒上音	莊初生			[-əʔ]	×	[-əʔ]	×	[-eʔ]	『磨』「-エ」	○
	正齒音	章船書	イ段	[-i]	[-ɿʔ]	×	[-əʔ]	○	[-eʔ]	『磨光』「イ段」	○
	牙音	見群			[-iʔ]	○	[-iaʔ]	○	[-irʔ]	『磨』「イ段」	○
	喉音	影羊									
半舌音	来										

三等開口の職韻の場合、齒頭音と齒上音の字は「-エ」、それ以外「イ段」の音注となっている。

表 5-9-2 のように、齒頭音の字は、南京音が[-iʔ]、蘇州音が[-iaʔ]、杭州音が[-irʔ]となり、「-エ」の音注は蘇州音と杭州音から説明できる。

齒上音の字は、南京音と蘇州音が同じ[-əʔ]で、『同文備攷』が[-ək]、『磨光韻鏡』も「-エ」の音注となる。「-エ」はいずれの場合にも対応する。

正齒音、牙・喉音、半舌音の字は、南京音が[-ɿʔ]、蘇州音が[-iʔ]で、『磨光韻鏡』で

も「イ段」となり、「イ段」の音注は南京音と杭州音との双方から説明できる。

このように、三等職韻の場合、音注は杭州音との対応が多く見られる。

上述したように、曾摂に対する音注は吳方言の特徴を反映していると言える。

梗・曾両摂の陽声韻の字に対して、いずれの場合も、「-イン」、「-エン」、「-オン」の音注が多く見られる。発音には、両方言との対応がほぼ同じである。入声韻の字に対して、いずれの場合も、「イ段」、「-エ」、「オ段」の音注が多く見られる。こうして、両摂に対する同様な音注及び音注と発音との共通の対応関係は、両摂の合流の変化を反映していることも分かった。

なお、先行研究において、謝(2016:83)は上述した指摘にある精組、照二組が「-エ」と「イ段」との二種類の音注を有し、こうした音注の違ういに対して、その理由についての説明はしていない。

表 5-9 會撰の所属字一覧

(1)〈開口・一等〉

撰		會撰		字種数	延べ数	會撰		字種数	延べ数	會撰		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	開合			一等	上 等			去 聲	一等		
重唇音	並 [b-]	濁	ボン-朋 (4)ホ ^ン -棚 (2)	2	6								
	明 [m-]	次濁											
舌頭音	端 [t-]	清	テン-登 (1)燈 (11)	2	12	テン-等 ① (18)	1	18			モン-槽 ② (1)	2	2
	定 [d-]	濁	デン-藤 (2)	1	2						テン-凳 (1)鏡 (1)		
歯頭音	泥 [n-]	次濁	ネン-能 ① (20)	1	20	ネン-能 ② (20)							
	精 [ts-]	清	ツエン-憎 (1)怎 20 増 ① (1)會 ② 24 (3)	4	25						ツエン-増 ② (1)		
	從 [dz-]	濁	ツエン-層 (1)ツエン-曾 ① 24 (21)	1	22								
牙音	溪 [k-]	次清				ヅン-肯 24 (1)ケン-肯 24 (12)ケ ^ン -肯 24 (11)	1	24					
	計			12	90		2	42				2	2

注：・「肯」は「苦等切」の清音の読みしかないので、濁音音注となることは説明できない。特に「肯」の「ヅン」音注は声母と全く一致できず、明らかに誤記である。

(2)〈開口・三等〉

撰		會撰		字種数	延べ数	會撰		字種数	延べ数	會撰		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	開合			三等	上 拯			去 聲	三等		
重唇音	幫 [p-]	清	ヒン-氷 2 (1)ヒ ^ン -氷 2 (1)	1	2								
	並 [b-]	濁	ヒ ^ン -憑 ① 8 (1)ビン-憑 8 (7)	1	8						ヒ ^ン -憑 ② 8 (1)ビン-憑 8 (7)		
正歯音	照 (章) [tɕ-]	清				チン-拯 (2)	1	2			チン-症 (1)證 (1)	2	2
	照 (昌) [tɕʰ-]	次清	チン-稱 ① (5)	1	5						チン-稱 ② (5)秤 (4)	1	4
	牀 (船) [dʒ-]	濁	ヂン-乗 ① (2)繩 (3)	2	5						ヂン-乗 ② (2)剩 4 (2)チン-剩 4 (2)	1	4
	審 (書) [ʃ-]	清	シン-升 (2)勝 ① (8)	2	10						シン-勝 ② (8)		
喉音	影 [ʔ-]	清	イン-應 ① (12)鷹 (1)	2	13						イン-應 ② (12)		
	曉 [h-]	次清	ヒン-興 ① (16)	1	16						ヒン-興 ② (16)		
半舌音	来 [l-]	次濁	リン-菱 (1)陵 (1)綾 (3)	3	4								
半歯音	日 [ɳz-]	次濁	ヂン-仍 (2)ナイ-苻 (1)	2	3								
計				17	73		1	2				4	10

注：・「ナイ-苻 (1)」は日母の部分で検討したように、「ナイ」が「ナイ-乃 奶」の声符類推によるものである。

(3)〈入声の字〉

①〈開口・一等〉

撰		會撰		字種数	延べ数	會撰		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	開合			一等	入 德 ok 合		
重唇音	明 [m-]	次濁	モ-墨 3 (1)モ [〃] -墨 3 (2)黙 (3)	2	6				
舌頭音	端 [t-]	清	テ-得 88 (87)徳 (3)テ [〃] -得 88 (1)	2	91				
	透 [tʰ-]	次清	テ-忒 (3)	1	3				
	定 [d-]	濁	デ-特 (5)	1	5				
歯頭音	精 [ts-]	清	ツエ-則 (24)	1	24				
	從 [dz-]	濁	ツエ-賊 ① 11 (8)ツエ-賊 11 (3)	1	11				
	心 [s-]	清	スエ-塞 ① (2)	1	2				
牙音	見 [k-]	清				クワ-國 (1)	1	1	
	溪 [kʰ-]	次清	ケ [〃] -克 (1)ケ-刻 (1)	2	2				
喉音	曉 [h-]	次清	ヘ [〃] -黒 7 (6)ヘエ-黒 7 (1)	1	7				
	匣 [ɦ-]	濁				ウヲ-或 (11)惑 (1)	2	12	
半舌音	来 [l-]	次濁	レ-勒 (2)	1	2				
計				13	153		3	13	

②〈開口・三等〉

撰		會撰		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	開合		
舌上音	澄 [d-]	濁	ヂ-直 (5)	1	5
歯頭音	精 [ts-]	清	ツエ-即 (2)稷 (1)鯽 ② (1)	2	3
	心 [s-]	清	スエ-息 (8)毛息 (1)	2	9
歯上音	照 (莊) [tʃ-]	清	ツエ-側 (7)	1	7
	穿 (初) [tʃʰ-]	次清	ツエ-測 (4)	1	4
	審 (生) [ʃ-]	清	スエ-色 (15)	1	15
正歯音	照 (章) [tɕ-]	清	チ-織 ① (1)職 (4)	2	5
	牀 (船) [dʒ-]	濁	ジ-食 ① (7)	1	7
	審 (書) [ʃ-]	清	シ-式 (1)識 ① (9)	2	10
牙音	見 [k-]	清	キ-棘 (1)	1	1
	群 [g-]	濁	ギ-極 ① 12 (7)キ-極 12 (5)	1	12
喉音	影 [ʔ-]	清	イ-薏 (1)	1	1
	羊 [j-]	次濁	イ-翌 (1)翼 (羽戈) ① (2)	2	3
半舌音	来 [l-]	次濁	リ-力 (21)	1	21
計				19	103

注：・「ヂ-値」は澄母の部分で検討したように、呉方言の声母の発音と一致するが、主母音が合わない。蘇州音(北部吳方言)の反映と見た方がより音注の事実に近いと考えられる。

1.10 止撮

止撮の字は全て三等韻の所属である。計字 267 種、延べ 2,026 字である。その中、開口の字は計 199 字種で、延べ 1,664 字で、合口の字は計 68 字種で、延べ 362 字である。「スウ-寺(1)」、「被-ヒ°イ 4(1)」、「媚-メイ(1)」、「誰-スイ 9(2)」、「睡-スイ 7(4)」は「小曲」所属の例である。

開口では、重唇音、舌頭音、舌上音娘母、牙音、喉音、半舌音の字が「-イ」で終わる音注となっている。

表 5-10-1 のように、重唇音の字は「イ段+イ」の音注が多いが、「ホ°イ-悲(5)」「ボイ-被 4(2)」「ムイ-美(5)寐(1)」が「オ段+イ」「ウ段+イ」である。

「被-ボイ 4(2)ビイ 4(1)」は、「皮彼切」(上声)と「皮義切」(去声)との二種類の読みがある。原例は下記の通りである。

「ビイ」:ジュイズウビイカ○ウジンマア、誰是被告人麼 誰ガウケクジノ者ゾ
「ボイ」:ボイフアンツイタ○ウリヤ○ウ被風吹倒了風ニ吹タヲサレヌ 「器用」ボイラウ被窩 フトン

南京音は[pəi]、蘇州音は[bi][bɛ]、杭州音は[beɪ]である。「ボイ」は南京音と杭州音から説明できる。また、「ビイ」について、「被窩」という意味の語は蘇州音では「被封洞」となり、[bi]との白話の発音であり、つまり、蘇州音にない呼び方の「被窩」が文語音で注されている。によって、「ビイ」は白話音を注する可能性がある。

「悲美」等は、近代まで合口化して、蟹撮合口の一等灰韻と同じ発音となっていた。南京音は[-əi]、蘇州音は[-ɛ]、杭州音は[-eɪ]となり、『西儒耳目資』は[-ui]、『同文備攷』は[-uei]であり、音注と対応するのがの難しいが、『磨光韻鏡』では、「悲」が「ボイ」、「美寐」も「ムイ」となり、同書の場合と一致している。つまり、杭州音から説明できる。

上記以外の「イ段+イ」の音注となる重唇音の字について、南京音、蘇州音、杭州音のいずれも[-i]となり、音注と一致している。

娘母以外の舌上音、齒頭音、齒上音、正齒音、半齒音の字が「-ウ」の音注である。心母、生母、書母、船母、邪母、崇母、禪母の字が「スウ・ズウ」、これら以外の声母が「ツウ・ヅウ」の音注となっている。

これらの字に対する「ツウ・ヅウ」「スウ・ズウ」の音注に対して、既に検討していたように、同じ「-ウ」で注されているのは、基礎方言の原音の[-ɿ]を示すものである。半歯音の字の音注が「ルウ」「ルゝ」である。第三章第三節で検討していたように、「ルウ」「ルゝ」は両方言から説明できない。

また、舌上音の「知池遅致」4字について、下記のようにになっている。

「知-ツウ・チイ 40(2)」 「池-ヅウ・チイ 3(1)」

「遅-ヅウ・チイ 4(1)」 「致-ツウ・チイ 6(2)」

「チイ」は、北部呉方言の特徴を反映している。

なお、「ツユイ-姊(7)」は、精母の部分で検討したように、声母面の問題がないが、韻母面では南京音、蘇州音、杭州音のいずれも[-i]となり、音注と一致しない。「ツユイ-姊(7)」は「將几切 爾雅曰男子謂女子先生爲姊」である。原例は下記のようにになっている。

「親族」:^{ツユイフウ}姊夫 アネムコ ^{アツユイ}阿姊 アネ ^{ダンツユイ}堂姊 女イトコ
^{ピヤウツユイ}表姊 ^{リンツユイ}母方ノ女イトコ ^{リンツユイ}令姊 アネサマ ^{キヤアツユイ}家姊 アネ
「長短話」:^{ツユウズウタアハキヤアテダアツユイ}就是他家的大姊 就チ姊女ナリ

「長短話」の1例が「親族」所属の例とは、意味と音注の違いがない。同書では同じ意味で使われている「ツユイ-姐(3)」(仮撰の「茲野切」)も存在し、この二つの字について、後述する蟹撰の部分で述べたように、止・蟹撰の一部の「ツユイ」等の「-ユイ」の音注は、巻六では「ツイ」に変更された。

表 5-10-1 止撰開口三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応
重唇音	幫滂並明	イ段+イ	[-i:]	[-i] ○	[-i] ○	[-i] ○
	「悲」「美寐」	「ポイ」「ムイ」	[-oi][-ui]	[-əi] ×	[-ɛ] ×	『磨』 「ポイ」「ムイ」 ○
舌上音	知徹澄	ウ段+ウ	[-u:]	[-ɿ] ×	[-ɿ] (○)	[-ɿ] (○)
	娘	イ段+イ	[-i:]	[-i] ○	[-i] ○	[-i] ○
齒頭音	精清從心邪	ウ段+ウ	[-u:]	[-ɿ]	[-ɿ]	[-ɿ] (○)
齒上音	莊初崇生			[-ɿ] ×	[-ɿ] ○	
正齒音	章昌船書禪			[-ɿ]	[-ɿ]	
牙音	見溪群疑	イ段+イ (「イゝ」)	[-i:]	[-i] ○	[-i] ○	[-i] ○
喉音	影曉 于羊					
半舌音	来					
半齒音	日	「ルウ」「ルゝ」	[-u:]	[-ə] ×	[-ə] ×	[-ər] ×

舌上音娘母、牙音、喉音、半舌音の字は、「イ段+イ」(「イゝ」)となっている。

南京音、蘇州音、杭州音のいずれも[-i]となり、音注と対応する。

表 5-10-1 のように、半齒音日母の字以外、止摂開口の字に対する音注は最も杭州音に近い。

合口字について、音注が主に「ウ段+イ」、「オ段+イ」であり、「-ユイ」の音注も見られる。

軽唇音の場合、非・敷母が「フイ」、微母が「ウイ」であり、音注に清濁の対立を区別している。南京音では非・敷母の字が[-əi]、微母の字が[-uəi]で、蘇州・杭州音が同じ[-i]となり、音注の「-イ」は吳方言から説明できる。

舌上音、齒頭音、正齒音、半齒音の字は、「ツイ」「ツイ」「スイ」のように、「ウ段+イ」となっている。

また、「吹-チュイ 6(2)」「誰-ジユイ 9(6)シユイ 9(1)」「睡-ジユイ 7(2)シユイ 7(1)」「蓋-ジユイ」のように、「-ユイ」の音注もある。既に検討したよう、これらの音注は杭州音に最も近く、つまり、吳方言の特徴を反映している。

牙音の字が「クイ」「グイ」で、半舌音の字が「ルイ」で、「ウ段+イ」の音注である。喉音字に対して、曉母が「ホイ」「ボイ」、影母・于母が「ワイ」で、「オ段+イ」の音注である。これ以外の字は南京音が全て[-uəi]と発音するが、蘇州音では牙・喉音の字が[-uɛ]、牙・喉音以外[-ɛ]となり、また、杭州音では半舌音來母の字が[-əi]、來母以外[-uəi]である。音注は南京音と杭州音から殆ど説明できる。

表 5-10-2 止摂合口三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応
軽唇音	非敷奉微	ウ段+イ（「フイ・ウイ」）	[-i]	[-əi] [-uəi] ○	[-i] ○	[-i] ○
舌上音	知澄	ウ段+イ（「ツイ・ツイ・スイ」） 「-ユイ」	[-ui] [-iui]	[-uəi] ○	[-ɛ] ×	[-uəi] ○
齒頭音	精清從心邪					
正齒音	章昌書禪					
牙音	見溪群疑	ウ段+イ（「クイ・グイ」）	[-ui]	○		
喉音	影于	オ段+イ（「ワイ」）	[-oi]	[-uəi] ○	[-uɛ] ×	[-uəi] ○
	曉	オ段+イ（「ホイ・ボイ」）				
	羊	ウ段+イ（「ウイ」）				
半舌音	來	ウ段+イ（「ルイ」）	[-ui]	[-uəi] ○	[-ɛ] ×	[-əi] ○
半齒音	日	「-ユイ」	[-iui]	[-uəi] ○	[-ɛ] ×	[-uəi] ○

表 5-10-2 のように、合口字に対する「-イ」の音注は、南京音と杭州音と対

応している。

このように、止摂の字に対する音注は殆ど杭州音と対応している。

なお、謝(2016:73-74)は止摂の音注現象について、合口字の場合、「少数が才段+イ」と指摘しているが、具体的にどのような状況で「才段+イ」音注となるのか、説明されていない。

表 5-10 止摂の所属字一覧

(1)〈開口・三等〉-A

撰		止撰		止撰		止撰		止撰		止撰		止撰		止撰								
等位		三等		三等		三等		三等		三等		三等		三等								
声調		平		平		平		平		平		平		平								
韻目		支		脂		之		微		紙		旨		旨								
開合		iê		i		iə'i		iə'i		iê		i		i								
		開		開		開		開		開		開		開								
重唇音	字種数	延べ数	字種数	延べ数	字種数	延べ数	字種数	延べ数	字種数	延べ数	字種数	延べ数	字種数	延べ数								
幫 [p-]	清	ヒ [°] イ-鶴①(1)	1	1	ホ [°] イ-悲(5)	1	5								ヒイ-比①8(1)ヒ [°] イ-比8(7)	1	8					
滂 [p'-]	次清	ヒ [°] イ-披①(2)	1	2											ヒ [°] イ-披②(2)							
並 [b-]	濁	ビイ-疲(1)皮(12)	2	13	ビイ-枇①(1)毳(1)	2	2								ビイ-被①4(1)ヒ [°] イ-被4(1)ボイ-被4(2)	1	4					
明 [m-]	次濁	ミイ-虫芋①(1)	1	1	ミイ-眉(3)麤(1)	2	4								ミイ-虫芋②(1)							
知 [t-]	清	ツウ-知 40(38)蜘蛛(1) チイ-知 40(2)	2	41																		
徹 [t'-]	次清	リイ-螭(1)	1	1				ツウ-癡(3)	1	3												
澄 [d-]	濁	ツウ-池①3(1)ゾウ-池3(1)チイ-3池(1)	1	3	ゾウ-遲4(2)チイ-遲4(1)チイ-遲4(1)	1	4	ゾウ-治①(1)	1	1												
娘 [ŋ]	次濁																					
精 [ts-]	清							ツウ-仔①(4)	1	4					ツウ-紫9(8)ソウ-紫9(1)	1	9					
清 [ts'-]	次清	ツウ-雌(1)	1	1											ツウ-此(28)	1	28					
從 [dz-]	濁							ゾウ-糞(1)	1	1	ゾウ-慈(5)磁(2)鷓①(2)	3	9									
心 [s-]	清	スウ-斯(1)厮(2)嘶(置1)(2)	3	5	スウ-私(5)	1	5	スウ-司(2)思①(13)絲(11)	3	26							スウ-死(17)	1	17			
邪 [z]	濁							ゾウ-辭(辭)9(8)ツウ-辭(辭)9(1)	1	9												
照(莊)[tʂ-]	清							ツウ-鱸(1)	1	1												
穿(初)[tʂ'-]	次清	ツウ-差9(1)	1	1																		
審(生)[ʂ-]	清							スウ-獅(1)師(5)	2	6												
照(章)[tʂ-]	清	ツウ-支(4)枝①(1)榧(1)チ-只①(23)	4	29	ツウ-脂(1)	1	1	ツウ-芝(2)之(70)	2	72					ツウ-枳①(1)紙(13)チ-只②(23)	2	14					
照(昌)[tʂ'-]	次清														ツウ-侈(1)	1	1					
審(書)[ʂ-]	清	スウ-施①(4)	1	4				スウ-詩(6)鴟(1)	2	7							スウ-矢(1)屎①(1)	2	2			
禪 [ʐ-]	濁	ズウ-匙(2)スウ-氏鳥(1)	2	3				ズウ-時19(18)スウ-時19(1)ズウ-鱗(1)	2	20					ズウ-是62(56)スウ-是62(6)	1	62					
見 [k-]	清	キイ-奇②(2)			キイ-飢(1)	1	1	キイ-其②23(3)箕(1)ギイ-其23(20)	1	1	キイ-機(3)幾①(13)饑(2)	3	18					キイ-几(1)	1	1		
溪 [k'-]	次清							キイ-欺(4)	1	4					キイ-企①3(1)ギイ-企3(2)	1	3					
群 [g-]	濁	ギイ-奇①(2)キイ-騎①(1)	2	3	ズウ-鱗(1)	1	1	ギイ-其①23(20)箕①(1)旗6(5)期4(2)麒(1)基4(3)キイ-旗6(1)期4(2)其23(3)基4(1)	6	39					ギイ-技(1)	1	1					
疑 [ŋ-]	次濁	ニイ-宜8(4)イ [°] -宜8(4)	1	8				ニイ-疑(10)	1	10					ニイ-蟻(1)	1	1					
影 [ʔ-]	清	イ [°] -倚①4(3)ギイ-椅4(1)	1	4	イ [°] -蟬(1)	1	1				イ [°] -依(5)衣①(14)	2	19	イ [°] -倚①(1)椅②4(3)ギイ-椅4(1)	1	1						
曉 [h-]	清	ヒイ-戲①(8)	1	8				ヒイ-嘻(2)	1	2	ヒイ-豨①(1)希(2)稀(4)鮪(1)	4	8									
羊 [j-]	次濁	イ-移(1)	1	1	イ [°] -夷(1)姨(2)莢①(1)鯪①(1)	4	5	イ [°] -怡(1)異①5(4)イ-異5(1)	2	6												
半舌音	字種数	リイ-璃(1)蠡①(1)籬(2)鸛(1)麗①(1)	5	6	リイ-梨(1)蜊(1)	2	2	リイ-狸(2)釐(1)	2	3												
半齒音	字種数	ル [°] -兒①120(5)ルウ-兒120(115)	1	120				ル [°] -而59(30)ルウ-而59(29)鮪①(1)	2	60					ル [°] -運(1)	1	1					
計			33	255			22	41					9	45			12	125			9	42

〈開口・三等〉-B

撰		止撰		字種数	延べ数	止撰		字種数	延べ数	止撰		字種数	延べ数	止撰		字種数	延べ数								
等位	声調	上	上			去	去			至	至			志	志			未	未	開	開				
韻目		止		字種数	延べ数	止		字種数	延べ数	止		字種数	延べ数	止		字種数	延べ数								
開合		iə̃ˊi				iə̃ˊi				iə̃ˊi				iə̃ˊi				iə̃ˊi							
		開		開		開		開		開															
重唇音	幫 [p-]	清								ヒ°イ-庇 (1)比 ② 8(7)秘 (1) 轡 (1)ヒイ-比 8(1)	3	3													
	滂 [p'-]	次清					ヒ°イ-譬 (3)	1	3																
	並 [b-]	濁					ヒイ-避 4(1)ヒ°イ-被 ② 4(1)ヒイ-被 4(1)避 4(3)ボイ-被 4(2)	1	4	ビイ-鼻 (1)批 ② (1)ホイ-備 6(3)ボイ-備 6(3)	2	7													
	明 [m-]	次濁								メイ-媚 (1)ムイ-寐 (1)	2	2													
舌頭音	定 [d-]	濁								デイ-地 21(15)テイ-地 21(5)テ°イ-地 21(1)	1	21													
舌上音	知 [t-]	清					ツウ-智 (3)	1	3	ツウ-置 2(1)ツユウ-置 2(1)	1	6													
	徹 [t'-]	次清	ツウ-祉 (1)耻 (1)	2	2																				
	澄 [d-]	濁								ツウ-緻 (1)ツウ-治 ② (1)	1	1	ゾウ-治 ③ (1)ヂ-値 (5)	1	5										
	娘 [ŋ]	次濁	ニイ-你 (你) (106)	1	106																				
齒頭音	精 [ts-]	清	ツウ-魚子 (1)仔 ② (4)子 152(151)ツ-子 152(1)	2	153																				
	清 [ts'-]	次清					ツウ-刺 ① (4)	1	4	ツウ-次 (8)	1	8													
	從 [dz-]	濁								ツウ-自 43(38)ツウ-自 43(5)	1	43	ゾウ-字 6(5)ツウ-字 6(1)	1	6										
	心 [s-]	清					スウ-賜 (2)	1	2	スウ-四 17(16)肆 (1)駟 (2) ス-四 17(1)	3	20	スウ-思 ② (13)												
邪 [z]	濁	ズウ-似 (9)	1	9								スウ-寺 (1)	1	1											
齒上音	牀 (崇) [dz-]	濁	ズウ-柿 (2)仕 (1)士 (4)	3	7								ズウ-事 105(94)スウ-事 105(10)シウ-事 105(1)	1	105										
	審 (生) [ʃ-]	清	スウ-使 ① (17)	1	17								スウ-使 ② (17)												
正齒音	照 (章) [tə-]	清								ツウ-至 (9)	1	9	ツウ-志 (6)	1	6										
	照 (昌) [tə'-]	次清	ツウ-齒 (5)	1	5								ツウ-熾 (1)	1	1										
	牀 (船) [dz-]	濁								スウ-示 ① (1)	1	1													
	審 (書) [ʃ-]	清	スウ-始 (2)	1	2			スウ-施 ② (4)					シイ-試 (3)	1	3										
禪 [z-]	濁	ズウ-市 (3)	1	3			ズウ-鼓 (1)	1	1																
牙音	見 [k-]	清	キイ-紀 (3)己 2(1)キヽ-己 2(1)	2	5	キイ-幾 ② (13)				キイ-覲 (2)	1	2	キイ-記 (10)	1	10	キイ-既 (4)	1	4							
	溪 [k'-]	次清	キイ-起 32(30)杞 (1)キ-起 32(2)	2	33	キイ-豈 (10)	1	10	キイ-企 ② 3(1)ギイ-企 3(2)			キイ-器 (7)棄 (1)	2	8			キイ-氣 ① (19)	1	19						
	群 [g-]	濁											ギイ-忌 (5)	1	5										
	疑 [ŋ-]	次濁						ニイ-義 (6)議 4(2)イヽ-議 4(2)	2	10															
喉音	影 [ʔ-]	清						イヽ-倚 ② (1)					イヽ-意 33(32)イ-意 33(1)	1	33	イヽ-衣 ② (14)									
	曉 [h-]	清	ヒイ-喜 ① (12)	1	12	ヒイ-豨 ② (1)		ヒイ-戲 ② (8)					ヒイ-喜 ② (12)												
	于 [ɣ-]	次濁	イヽ-矣 (3)	1	3																				
	羊 [j-]	次濁	イヽ-以 (22)苴 (1)巳 ① (7)	3	30			イヽ-易 ① (7)	1	7	スエ-鰯 (1)	1	1	イヽ-異 ② 5(4)巳 ② (7)イ-異 5(1)											
半舌音	来 [l-]	次濁	リイ-哩 ① (7)李 (6)理 (10)ㄹ _リ (裡 18)(40)裏 (3)里 (4)鯉 (1)	7	71			リイ-離 ① (1)荔 ① (1)	2	2	リイ-利 (13)俐 (3)	2	16	リイ-哩 ② (7)											
半齒音	日 [ŋz-]	次濁	ルヽ-爾 (1)耳 8(4)ルウ-耳 8(4)	2	9					ルヽ-二 14(5)ルウ-二 14(9)	1	14													
計				31	467			1	10			12	40			24	162			11	177			2	23

注:「ツウ-差 9(1)」は、延べ 9 例であり、声調印付きの例は 2 例である。それぞれ「サ°イ」音注の「差人去」1 例と「ツウ」音注の「細細腰支參差疑勒断」1 例となっている。他に、「チヤア」音注の「差不多好了些」1 例以外は全て「ツアヽ」音注の例である。「ツウ」の原例が「長短話」の「細細腰支參差疑勒断 參差ニシテ勒ハ断イヲ疑コト」であり、音注が止撰平声の「楚宜切 次也不齊等也」、つまり、『大漢和辞典』による「ひとしくない。そろはない。」という意味と対応する。

- ・「地」1 字のみで、「地-デイ/テイ/テ°イ」は右肩点「°」の部分で検討したように、「テ°」の右肩点は [ti] に対する注意或いは誤記の可能性があり、「テイ」は濁点が省略された可能性が高い。
- ・「置-ツウ 2(1)ツユウ 2(1)」は「ツユウ」音注の原例が「^{ツユウツユウツユウツユウツユウ}置酒歎待來客」で、「ツユウ」音注となるのは直後の「酒」に対する「ツユウ」音注の影響を受けたと考えられる。
- ・「リイ-螭 (1)」は「丑知切」で、原例が「龍魚」所屬の「^{リイルウ}螭兒 エヽリヤウ」となり、音注は「リイ-璃離離」の同じ声符の「离」の類推によるものである。
- ・「ヂ-値 (5)」は澄母の部分で検討したように、「直吏切 持也措也捨也當也」という澄母去声の読みで、「ヂ」音注は吳方言の声母の発音と一致するが、主母音が合わない。
- ・「チ-只 (23)」は声調点の部分で述べたように、「チ」は吳方言の読みと一致する。
- ・「スウ-示 (1)」は船母の部分で検討したように、「スウ」は濁点の記入漏れの可能性が高い。
- ・「事-シウ 105(1)」は崇母の部分で検討したように、誤記の可能性が大きい。
- ・「イ-異 5(1)」などのように、延音点の記入漏れである。
- ・「ツ-子」の「ツ」は「ツウ」による誤記である。
- ・「キ-起」の「キ」は「キイ」による誤記である。
- ・「スエ-鰯 (1)」は半母部分で検討したように、「鰯」は和製漢字で、「スエ」は「スエ-鰯」等の類推によるものである。
- ・「己-キイ 2(1)キヽ2(1)」は延音点の部分で述べたように、「キヽ」は誤記である。

(2)〈合口・三等・平声〉

撰		止撰		字種数	延べ数	止撰		字種数	延べ数	止撰		字種数	延べ数	止撰		字種数	延べ数	止撰		字種数	延べ数	止撰		字種数	延べ数											
等位	声調	三等	平			三等	平			三等	平			三等	平			三等	平			三等	平			三等	平	三等	平	三等	平	三等	平	三等	平	三等
韻目		支		字種数	延べ数	脂		字種数	延べ数	旨		字種数	延べ数	寛		字種数	延べ数	未		字種数	延べ数	合		字種数	延べ数											
開合		合				合				合				合				合				合				合		合		合		合		合		合
輕唇音	非 [f-]	清																																		
	敷 [f'-]	次清																																		
	奉 [v-]	濁																																		
	微 [w-]	濁																																		
舌上音	知 [t-]	清																																		
	澄 [d-]	濁	ツイ-鍾 ① (2)	1	2	ツイ-推 ① (1)	3	5																												
齒頭音	精 [ts-]	清	ツイ-嘴 ① (7)	1	7																															
	清 [ts'-]	次清																																		
	從 [dz-]	濁																																		
	心 [s-]	清																																		
正齒音	邪 [z]	濁	ツイ-隨 (4)	1	4																															
	照(章) [tɕ-]	清																																		
	照(昌) [tɕ'-]	次清	チュイ-吹 ① 6(2) ツイ-吹 6(4)	1	6																															
	審(書) [ʃ-]	清																																		
牙音	禪 [ʒ-]	濁	ツイ-垂 (1)	1	1	ジュイ-誰 9(6) シュイ-誰 9(1) スイ-誰 9(2)	1	9																												
	見 [k-]	清	クイ-規 (1)	1	1	クイ-龜 ① (4)	1	4	クイ-販 (1)	1	1																									
	溪 [k'-]	次清	クイ-虧 (6)	1	6																															
	群 [g-]	濁																																		
喉音	疑 [ŋ-]	次濁	グイ-危 (1)	1	1																															
	影 [ʔ-]	清	ライ-委 ① (6) 萎 ① (1) 遂 (1)	3	8	ライ-威 (1) 穢 (1)	2	2	ライ-委 ② (6)																											
	曉 [h-]	次清																																		
	于 [ɣ-]	次濁	ライ-為 ① (51)	1	51	ライ-圍 ① (3) 違 (5) 韋 (1)	3	9																												
半舌音	羊 [j-]	次濁																																		
	来 [l-]	次濁	ルイ-羸 (1)	1	1																															
半齒音	日 [ɲz-]	次濁																																		
計				13	88		11	41			13	47			4	8			2	36			4	11			2	9			10	36			9	86

注：・「瘞-ツエ」は從母の部分で検討したように、「ツエ-焯(1)」のように同じ声符「卒」の類推によるもの。
 ・「穂-ライ」は「惠-ライ」という声符の類推によるもの。
 ・「ホ-弗(2)」は原例が「畜獸」の「ホ弗」である。音注は奉母止撰の去声「扶沸切」読みと一致しない。声符の「ホ-弗(1)」の類推によるものと考えられる。

1.11 遇撮

遇撮の所属字は、合口の模・魚・虞三韻の所属字であり、計 218 字種、延べ 1,127 字である。

一等は合口字で、音注は「-ウ」が圧倒的に多く、「-ヲゝ」の音注も存在している。具体的に、下記のようになっている。

明母以外の重唇音：「ウ段+ウ」

牙・喉音：「ウ段+ウ」「ウゝ」

重唇音明母、舌頭音、齒頭音、半舌音：「オ段+ウ」

齒頭音精・清母：「ツヲゝ」

表 5-11-1 遇撮一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応			
重唇音	幫滂並	ウ段+ウ	[-u:]	[-u]	○	[-u]	○	[-u] 『磨』「-プウ」	○
	明	オ段+ウ	[-o:]	[-o]	○	[-o]	○	[-u] 『磨』「モウ」	○
舌頭音	端透定泥			[-u]	×	[-əu]	○	[-u] 『磨』「オ段+ウ」	○
齒頭音	精清心	「-ヲゝ」 オ段+ウ	[-o:]	[-o] [-u]	○ ×	[-əu]	○	[-ou][-u] 『磨』「-ヲゝ」オ段+ウ	○
牙音	見溪疑	ウ段+ウ「ウゝ」	[-u:]	[-u]	○	[-əu]	×	[-u]	○
喉音	影曉匣							[-u] 『磨』「ウ段+ウ」「ウゝ」	
半舌音	来	オ段+ウ	[-o:]		×		○	[-u] 『磨』「オ段+ウ」	○

表 5-11-1 のように、明母以外の重唇音の字は、南京音、蘇州音、杭州音ともに[-u]となり、「ウ段+ウ」の音注と対応する。明母が南京音では[-o]、蘇州音では[-o]との読みで、いずれも「オ段+ウ」と対応する。

舌頭音と半舌音の字は、南京音が[-u]、蘇州音が[-əu]となり、『磨光韻鏡』では「オ段+ウ」ともなる。「オ段+ウ」の音注は蘇州音、杭州音から説明できる。

牙・喉音の字について、南京音と杭州音が[-u]、蘇州音が[-əu]で、『同文備攷』でも[-u]である。「ウ段+ウ」「ウゝ」の音注は南京音と杭州音から説明できる。

齒頭音の字は「ツヲゝ」(精・清母)・「オ段+ウ」(心母)となっている。「ツヲゝ」となる例の中、「租祖粗酢」は南京音と杭州音が[-u]、蘇州音が[-əu]である。「作做厝措錯」は南京音が[-o]、蘇州音が[-əu]、杭州音が[-ou]である。『磨光韻鏡』では同じ「ツヲゝ」である。このように、「ツヲゝ」は蘇州音、杭州音から説明できる。「オ段+ウ」の音注となる心母の字は、南京音と杭州音が[-u]、蘇

州音が[-əu]で、『磨光韻鏡』では同じ「オ段+ウ」である。このように、心母の「ソウ」は蘇州音と杭州音から説明できる。

このように、遇摂一等の字に対する音注は杭州音との対応が最も多い。つまり、杭州音の特徴を反映している。

三等の字について、音注が主に「-ウ」「-ユイ」「-ツヲ」3種類で、具体的に以下のようになっている。

軽唇音：「フウ」「ウ」

舌上音、歯頭音、正歯音、牙音、喉音、半舌音、半歯音：「-ユイ」

歯上音：「-ヲ」(初・崇母) 「ソウ」(生母)

軽唇音の字は「フウ」「ウ」となっている。南京音、蘇州音、杭州音のいずれも[-u]となり、一致している。

舌上音、歯頭音、正歯音、牙音、喉音、半舌音、半歯音の字は「-ユイ」の音注である。歯頭音の「スエ、スエ-須」、半舌音の「ロウ-驢」は例外である。

「須-スエ、スエ 28(1)」は「相俞切 意所欲也」である。まず、「スエ」の原例は「終須一別 終ニハ別ると云コト」で、「須要留心 心ニトメヨ」等の「スエ」の例とは、意味の違いがないので、「スエ」は「」の記入漏れと考えられる。南京音は[sy]、蘇州音は[səu][si]両読み、杭州音は[ɛy]となり、『同文備攷』では[sy]である。『磨光韻鏡』は「スユイ」である。同書では他の遇摂の字に対しても「-ユイ」となり、「-エ」の音注はと同じ日本語にない[y]を示しているものと推測したいが、南京音、呉方言からは説明できない。

「ロウ-驢(1)」は『広韻』に開口三等の「力居切 畜也」とあり、『集韻』に三等合口の「凌如切 獣名」もある。原例は「畜獸」の「驢馬 羅バ」で、意味の面ではいずれにも対応する。表記例からわかるように、遇摂三等の字に対して「-ユイ」の音注となるのが一般的であり、「ロウ」は一等の「ロウ-蘆(2) 蘆(1) 蘆(1) 蘆(1) 蘆(1)」等の声符の類推による可能性がある。

上記以外、娘母以外の舌上音、正歯音、半歯音の場合は、南京音は[-u]、蘇州音は[-ɥ]、杭州音は[-ɥ][-u]両読みである。『同文備攷』は[-y]となり、『磨光韻鏡』は「-ユイ」と記されている。「-ユイ」の音注は明らかに呉方言と対応している。歯頭音と半舌音の場合、南京音と杭州音は[-y]、蘇州音は[-i]

で、『同文備攷』でも[y]である。「-ユイ」は南京音、杭州音と対応する。娘母、牙・喉音の場合は、南京音、蘇州音、杭州音では同じ[-y]で、「-ユイ」音注はいずれにも対応している。

歯上音の場合、初・崇母の字が「-ヲ、」、生母の字が「ソウ」で、「オ段+ウ」となっている。

南京音は[-u]、蘇州音は[-əu]、杭州音は[-ɥ][-u]両読みである。『同文備攷』は[-u]となり、『磨光韻鏡』は「-ヲイ」である。音注「-ヲ、」「オ段+ウ」は杭州音に一致している。

表 5-11-2 のように、三等字の場合、対応する音注は杭州音と多く対応している。

表 5-11-2 遇撰三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応			
軽唇音	非敷奉微	ウ段+ウ (「ウ、」)	[-u:]	[-u]	○	[-u]	○	[-u]	○		
舌上音	知徹澄	-ユイ	[-iui]	[-u]	×	[-ɥ] 『同』[-y]	○	[-ɥ][-u] 『磨』「-ユイ」	○		
	娘			[-y]	○	[-y]	○	[-y]	○		
歯頭音	精清從心邪					[-i]	×				
歯上音	初崇	-ヲ、	[-o:]	[-u]	×	[-əu]	○	[-ɥ][-u] 『磨』「-ヲイ」	○		
	生	オ段+ウ			×						
正歯音	章昌書禪	-ユイ	[-iui]	[-u]	×	[-ɥ] 『同』[-y]	○	[-ɥ][-u] 『磨』「-ユイ」	○		
牙音	見溪群疑			[-y]	○	[-y]	○	[-y]	○	[-y] 『磨』「-ユイ」	○
喉音	影曉于羊										
半舌音	来										
半歯音	日			[-u]	×	[-ɥ] 『同』[-y]	○	[-ɥ][-u] 『磨』「-ユイ」	○		

上記のように、一・三等の字の場合と併せて、遇撰の所属字に対する音注は杭州音の特徴を反映している。

表 5-11 遇摂の所属字一覧

(1)〈一等・模韻〉

摂			遇 撮		字 種 数	延 べ 数	遇 撮		字 種 数	延 べ 数	遇 撮		字 種 数	延 べ 数
等 位	声 調	韻 目	一 等	平			一 等	上			去	一 等		
開 合			開 合				開 合				開 合			
重 唇 音	幫 [p-]	清					フ ^フ ウ-補 (4)	1	4	フ ^フ ウ-布 6(5)フウ-布 6(1)	1	6		
	滂 [p'-]	次清	フ ^フ ウ-舗 ① (1)	1	1	フ ^フ ウ-普 (1)	1	1	フ ^フ ウ-舗 ② (1)					
	並 [b-]	濁	ブウ-蒲 3(2)葡 (2)フ ^フ ウ-蒲 3(1)	2	5	ブウ-簿 ① (1)	1	1	ブウ-歩 (2)	1	2			
	明 [m-]	次濁	モウ-模 (2)摸 ① 4(3)モヲ ^フ -模 4(1)	2	6				モウ-暮 (1)	1	1			
舌 頭 音	端 [t-]	清	トウ-都 (13)	1	13	トウ-堵 ① (1)賭 (9)肚 4(1)ドウ-肚 ② 4(3)	2	10	トウ-蠶 (2)妬 (2)	2	4			
	透 [t'-]	次清				トウ-土 ① (7)吐 ① (1)	2	8	トウ-兔 (2)吐 ② (1)	1	2			
	定 [d-]	濁	ドウ-徒 (5)塗 ① (1)圖 (2)	3	8	ドウ-肚 ① 4(3)杜 5(3)トウ-肚 4(1)杜 5(2)土 ② (7)	2	9	ドウ-渡 (1)度 ① (1)	2	2			
	泥 [n-]	次濁	ノウ-奴 (9)	1	9	ノウ-努 (1)怒 ① (4)	2	5	ノウ-怒 ② (4)					
齒 頭 音	精 [ts-]	清	ツヲ ^フ -祖 (1)	1	1	ツヲ ^フ -祖 (7)	1	7	ツヲ ^フ -作 ① 24(3)做 ① 43(42)ツヲ-做 43(1)	2	46			
	清 [ts'-]	次清	ツヲ ^フ -祖 ① (2)	1	2				ツヲ ^フ -厝 ① (1)措 (2)錯 ① (2)酢 (1)	4	6			
	心 [s-]	清	ソウ-蘇 (1)	1	1				ソウ-素 (7)訴 (1)	2	8			
牙 音	見 [k-]	清	クウ-姑 (5)孤 (4)菰 (3)箍 (2)姑 (2)辜 (1)鳩 (1)	7	18	クウ-古 (8)鼓 (9)估 (6)罟 (1)蠶 (1)賈 ① (1)	6	26	クウ-固 (2)故 (15)僮 ① (1)顧 (7)	4	25			
	溪 [k'-]	次清	クウ-枯 (1)	1	1	クウ-苦 ① (16)	1	16	クウ-苦 ② (16)					
	疑 [ŋ-]	次濁	ウ ^フ -吾 ① (3)梧 (1)蜈 (1)鰐 (1)鬪 ① (1)	5	7	ウ ^フ -五 (11)	1	11	ウ ^フ -悟 (2)忤 (1)晤 (1)誤 (5)娛 (1)	5	10			
喉 音	影 [ʔ-]	清	ウ ^フ -烏 (8)汚 (2)	2	10				ウ ^フ -惡 ② 18(5)	1	5			
	曉 [h-]	清				フウ-虎 (10)屣 ① (1)濬 (1)	3	12	フウ-屣 ③ (1)					
	匣 [ɦ-]	濁	ウ ^フ -乎 (3)湖 (3)狐 (2)糊 (3)胡 (13)瑚 (1)葫 ① (1)蝴 (1)壺 (2)ヲ-翹 (1)	10	30	ウ ^フ -戸 (4)	1	4	ウ ^フ -互 (1)護 (4)	2	5			
半 舌 音	来 [l-]	次濁	ロウ-蘆 ① (2)爐 (1)樞 (1)鱸 (1)鷓 (1)	5	6	ロウ-鹵 ① (3)櫓 (4)虜 (1)	3	8	ロウ-路 (25)露 (2)賂 (2)鷺 (1)	4	30			
計				43	118		27	122		32	152			

注：・「ウ^フ-娛 (1)」は、原例が「二字話」の「娛樂」であり、『広韻』に三等平声の「遇俱切 娛樂」と一等去声の「五故切 娛樂也」とあり、音注は一等の読みと対応している。

・「ヲ-翹 (1)」は「戸吳切」で、原例が「畜獸」の「翹孫」である。南京音でも蘇州音でも「胡翹胡」と同じ発音であり、南京音が[-u]、蘇州音が[ɦəu]となり、「ヲ」は入声音注の形で、両方言から説明できない。

(2)〈三等・魚眞韻〉

撰			遇撰			遇撰			遇撰			遇撰			遇撰		
等位			三等			三等			三等			三等			三等		
声調			平			去			平			上			去		
韻目			魚			語			虞			虞			遇		
開合			開			開			開合			開合			開合		
非 [f-]			清			フウ-付 (3)			フウ-夫 (27)			フウ-府 (10)斧 (1)			フウ-府 (10)斧 (1)		
敷 [f'-]			次清			フウ-赴 (2)			フウ-孚 (1)フウ-舗 (1)			ワ、撫 (1)			ワ、撫 (1)		
奉 [v-]			濁			フウ-駙 (1)			フウ-芙 (1)兔 (1)扶 (1)ウ、扶 (1)			フウ-腐 (1)父 14(3)ウ、父 14(10)ウウ-父 14(1)			フウ-腐 (1)父 14(3)ウ、父 14(10)ウウ-父 14(1)		
微 [w-]			濁			ウ、務 (2)			ウ、無 (72)			ウ、侮 (1)武 (10)舞 (4)鶻 (1)			ウ、侮 (1)武 (10)舞 (4)鶻 (1)		
知 [t-]			清			チュイ-猪 (4)			チュイ-蛛 (1)			チュイ-著 (1) (5)			チュイ-著 (1) (5)		
徹 [t'-]			次清			チュイ-褚 (1) (1)											
澄 [d-]			濁			チュイ-除 (1) 5(3)踏 (3) チュイ-除 5(2)厨 (1)			チュイ-住 10(8)チュイ-住 10(2)			チュイ-厨 2(1)チュイ-厨 (1)			チュイ-柱 (1) (2)		
娘 [ŋ]			次濁			ニユイ-女 (1) (18)									ニユイ-女 (2) (18)		
精 [ts-]			清			ツユイ-蛆 (2) (2)			ツユイ-足 17(2)								
清 [ts'-]			次清			ツユイ-蛆 (1) (2)			ツユイ-趣 (2) (5)娶 (3) (2)ツイー-娶 3(1)			ツユイ-趣 (1) (5)			ツユイ-取 (1) (9)		
從 [dz-]			濁												ツユイ-聚 (1) (4) (2) ツユイ-聚 4(2)		
心 [s-]			清									スエ、須 28(27)スエ-須 28(1)					
邪 [z]			濁			ゾユイ-叙 (1)											
照 (莊) [tʂ]			清			ツラ、初 (6)			ツラ、齧 (1)								
穿 (初) [tʂ'-]			次清			ツラ、楚 (1) (3)									ツラ、楚 (2) (3)		
牀 (崇) [dʒ-]			濁			ツラ、鋤 (1)			ツラ、齧 (1)			ツエ○ウ、雛 (1)			ツラ、助 (3)		
審 (生) [ʂ-]			清			ゾウ、疎 (1) (4)梳 (1)			ゾウ、所 (28)			ゾウ、敷 (2) (7)			ゾウ、敷 (1) (7)		
照 (章) [tʂe-]			清			チュイ-諸 (1) (1)			チュイ-注 (1)			チュイ-珠 (2)			チュイ-主 (21)		
照 (昌) [tʂe'-]			次清			チュイ-杵 (1) (1) 處 (26)									チュイ-處 (2) (26)		
審 (書) [ʂ-]			清			シユイ-書 (21)			スエ-黍 (1) 虫 黍 (1) チュイ-鼠 (8)			シユイ-輸 (1) (1)			シユイ-輸 (1) (1)		
禪 [ʒ-]			濁						ジュイ-樹 (2) 17(14) シユイ-樹 17(3)			ジュイ-樹 (1) 17(14) シユイ-樹 17(3)			ジュイ-樹 (1) 17(14) シユイ-樹 17(3)		
見 [k-]			清			キユイ-據 (3)居 7(6)			キユイ-舉 (挙) (4)			キユイ-拘 (3)俱 (2) ケ○ウ-拘 (1)			キユイ-矩 (1) 菟 (1) (1) 根 (1)		
溪 [k'-]			次清									キユイ-區 (1) (2) 驅 (1) (1)			キユイ-去 59(58) ツエ○ウ-去 59(1)		
群 [g-]			濁			キイ-渠 (1)			ギユイ-菅 (1) キユイ-詎 (1) (1)			ギユイ-具 (1) 懼 (2)			ギユイ-衢 (1) キユイ-鷗 (1)		
疑 [ŋ-]			次濁			ウ、齧 (2) (1) イユイ-魚 (60)			イユイ-語 (1) (8) ウ、齧 (1) (1)			イユイ-遇 (1)			イユイ-愚 (8)		
影 [ʔ-]			清			イユイ-淤 (1) (1) 於 (9)									イユイ-淤 (2) (1)		
曉 [h-]			次清			ヒユイ-慮 (1) (3) 嘘 (1) (1)			ヒユイ-許 (11)						ヒユイ-嘘 (2) (1)		
于 [ɣ-]			次濁						イユイ-芋 (2) (2) 羽 (2) (1) 雨 (2) (8)			イユイ-芋 (1) (2) 于 (2) 孟 (1)			イユイ-羽 (1) (1) 雨 (1) (8)		
羊 [j-]			次濁			イユイ-餘 (7) 與 (1) (8) 譽 (1) (3) 譽 (1) (1)			イユイ-与 (5) 與 (2) (8)			イユイ-喻 (1) 論 (1) 覲 (2) (1)			イユイ-預 (3) 譽 (2) (3) 與 (3) (8) 譽 (2) (1)		
半舌音			来 [l-]			ロウ-驢 (1)									リュイ-縷 (1)		
半齒音			日 [ŋz-]			ジュイ-如 (1) 60(55) シユイ-如 60(4)						ジュイ-孺 (1) 儒 (1)			ジュイ-乳 (1)		
計			25	214	17	119	11	20	30	173	23	122	9	87			

注：・「居」は「貧居鬧市無人識」のように、1例の未注がある。

- ・「去-キユイ-59(58)ツエ○ウ 59(1)」について、見母の部分で言及した。遇撰の「羌舉切 除也」(上声)、「丘據切 離也」(去声)である。「担去 持テユケ」「擡去 カイユエケ」のように、意味上では去声の「丘據切」と一致している。「ツエ○ウ」は1例のみで、「必須快快去着 必ス早く行ケ」となり、意味上から、「ツエ○ウ-走」の類推によるものと思われる。
- ・「娶-ツユイ 3(2)ツイ 3(1)」は、『広韻』に心母の「相俞切 荀卿子曰問娶之媒」と清母の「七句切 説文曰取婦也」とある。原例は「三字話」の「娶了妻 妻ヲメトツタ」、「常言」の「婚娶而論財 婚礼ヲスルニ」、「長短話」の「令郎若要娶他 令郎若彼ヲ娶リ」は意味上では違いがなく、清母の読みと一致している。「ツイ」は明らかに「ツユイ」の誤記である。
- ・「覲-ツユイ 2(1)ツニイ 2(1)」は「七慮切 伺視也」である。原例は「二字話」の「小覲 カロシメル」、「四字話」の「面面相覲 面ト面ヲ見合セル」である。
- ・「ワ、撫 (1)」は敷母で検討したように、「ワ」は「無-ウ」の類推によるもの。
- ・「スエ-黍 (1) 黍 (1)」は書母の部分で検討したように、字形の類似する「スエ-率蟀」の類推による可能性がある。
- ・「ケ○ウ-拘 (1)」は、中間点の部分で検討したように、音注が「ケ○ウ-勾鈎」の声符による類推と考えられる。
- ・「キイ-渠 (1)」は、群母の部分で触れたことがあり、原例が「虫介」の「車渠 ホタテカイ」である。『広韻』に「強魚切 溝渠也」。遇撰の字に対する音注は「-ユイ」となるのは多く、「キイ」は「キユイ」による誤記と考えられる。
- ・「ツエ○ウ-雛 (1)」は中間点の部分で検討したように、音注が「ツエ○ウ-雛」の声符の類推によるものと考えられる。なお、この字について、謝(2016:70)は他の遇撰の字に対する音注と異なる指摘しているが、その理由に対する説明を与えていない。

1.12 蟹摂

蟹摂の所属字は計 197 字種、延べ 1,021 字である。その中、開口字は計 141 字種、延べ 765 字で、合口字は計 56 字種、延べ 256 字である。

既に第二章第四節で述べたように、蘇州音では蟹摂の複合母音は単母音化で韻尾が消失している。杭州音の場合、現代音は蘇州音と同じ単母音しているが、18 世紀以降の新しい変化であり、『唐話纂要』当時、韻尾をまだ保存していた。『同文備攷』『磨光韻鏡』はともにこれを反映している。

開口の場合、一等の字に対して、音注が殆どの場合「-イ」の音注となっている。その中、重唇音の「ホ[°]イ-貝」は「オ段+イ」で、それ以外の場合は「ア段+イ」の音注である。

「貝-ホ[°]イ」は「博蓋切」、原例が「器用」の「宝^{バウボイ}貝」である。南京音が[-əi]、杭州音が[-ei]で、「ポイ」は南京音と杭州音から説明できる。「貝」の「オ段+イ」の音注は後述するように、開口一等の字が合口の灰韻との合流を反映している。

表 5-12-1 のように、重唇音以外の字は南京音が[-aæ]、杭州音が[-ɛ]となり、『西儒耳目資』『同文備攷』『磨光韻鏡』(「ア段+イ」)はともに[-ai]である。「ア段+イ」の音注は南京音と杭州音とのいずれにも対応する。

表 5-12-1 蟹摂開口一・二等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応			
一等	重唇音 幫	オ段+イ	[-oi]	[-əi]	○	[-ɛ]	×	[-ei]	○
	舌頭音 端透定泥	ア段+イ	[-ai]	[-aæ] 『西』[-ai]	○	[-ɛ] 『同』[-ai]	○	[-ɛ] 『磨』「ア段+イ」	○
	齒頭音 精清從心								
	牙音 見溪疑								
	喉音 影曉匣								
半舌音 来									
二等	重唇音 幫並明	ア段+イ	[-ai]	[-aæ] 『西』[-ai]	○	[-a] 『同』[-ai]	○	[-ɛ] 『磨』「ア段+イ」	○
	舌上音 娘								
	齒上音 莊初崇生								
	牙音 見疑	-ヤイ	[-ai]	[-iaæ] 『西』[-ai]	○	[-ia] 『同』[-ai]	×	[-ie] 『磨』「-ヤイ」	○
	喉音 影匣								
				[-aæ] 『西』[-ai]	○	[-ɛ] 『同』[-ai]	○		

二等の字は、唇音の「バアヽ-罷(8)」、齒上音の「柴-ヂヤイ(3)」「寨-シヤイ 2(1)サイ 2(1)」、牙音の「キヤア-佳(2)」「イヤア-涯(1)」以外、重唇音、舌上音、

齒上音の字は「ア段+イ」が一般的で、牙・喉音の字が「-ヤイ」の音注である。

「バア、-罷(8)」は『広韻』に蟹摂の「薄蟹切」と止摂の「符羈切」(平声)、「皮彼切」(上声)とあり、音注は明らかに止摂の読みと対応しない。南京音が[pə]、蘇州・杭州音が[ba]、音注は蘇州・杭州音から説明できる。

「柴-ヂヤイ(3)」は崇母の部分の考察から分かるように、音注は声母面に問題がない。韻母面では「-ヤイ」が二等の「士佳切」と一致しない。「寨-シヤイ 2(1)サイ 2(1)」は崇母の部分で検討したように、「サイ」は濁点の記入漏れの可能性が高く、韻母面では一致するが、「シヤイ」は声母面では南京音と対応するが、韻母面では「豺夬切」と合わない。「柴」「寨」2字とも、『西儒耳目資』『同文備攷』では同じ[-ai]である。「-ヤイ」は両方言からも説明できない。

「キヤア-佳(2)」は「古佳切」であり、「イヤア-涯(1)」は蟹摂の「五佳切」と止摂の「魚羈切」とあり、音注が明かに止摂の読みと一致しない。2字とも、南京音が[-iaæ]、蘇州・杭州音が[-ia]となり、『西儒耳目資』では[-ia]、『同文備攷』では[-ia]である。「-ヤア」は両方言に対応している。

上記以外、表 5-12-1 のように、重唇音、舌上音、齒上音の字は『西儒耳目資』では[-ai]、『同文備攷』では重唇音が[-uai]、舌上音、齒上音が[-ai]となり、「ア段+イ」の音注はいずれの場合にも対応する。牙・喉音の字は『西儒耳目資』『同文備攷』では同じ[-iai]で、『磨光韻鏡』では「-ヤイ」ともなり、「-ヤイ」はいずれにも一致する。

このように、「罷-バア、」は呉方言に対応するが、「柴」「寨」に対する「-ヤイ」は説明できない。それ以外の開口二等の字に対する音注は南京音と杭州音の双方に対応している。

開口三・四等の場合、重唇音、泥母、正齒音、牙音、喉音、半舌音の字は「イ段+イ」、齒頭音の字は「-ユイ」・「-エ、」(心母)の音注となっている。

泥母以外の舌頭音の字は「テイ」[ti]・「デイ」[di]とのように、「エ段+イ」と見えるが、反切音注法で「エ段」の発音をしない。重唇音の「ムイ-袂(1)」、半舌音来母の「リュイ-蠣(1)」は例外である。

「ムイ-袂(1)」は明母三等開口の「彌弊切 袖也」で、原例が「二字話」の「分袂^{フンムイ} ワカル、」である。南京音は[məi]、杭州音は[mei]、『磨光韻鏡』では

「ミイ」となっている。「ムイ」は両方言から説明できない。

「リュイ-蠣(1)」は「力制切 牡蠣蚌屬」で、原例が「虫介」の「蠣兒 ^{リュイルウ} カキ」である。來母蟹摂の字は「リイ」となるのが一般的であるが、上述した精組の字のように、「リュイ」と記され、同じ「-ユイ」の音注となっている。なお、『同文備攷』では[li]となり、「-ユイ」とも対応しない。

上記の字以外、表 5-12-2 のように、重唇音、舌頭音、正歯音、牙・喉音、半舌音の字は南京音、蘇州音、杭州音は同じ[-i]となり、「イ段+イ」「テイ」「デイ」はいずれにも対応する。正歯音の字は、南京音が[-ɿ]、蘇州音が[-ʉ]、杭州音が[-ɿ]となり、「イ段+イ」はいずれからも説明できる。

表 5-12-2 蟹摂開口三・四等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応	
重唇音	幫滂明	イ段+イ	[-i:]	[-i]	○	[-i]	○	[-i]	○
舌頭音	端透定	「テイ」「デイ」	[-i:]						
	泥	イ段+イ							
歯頭音	精清從	「-ユイ」	[-iui]	[-i]	×	[-i]	×	[-i]	×
	心	「スエㄥ」	[-e:]					心母：南部吳方言○	×
正歯音	書禪	イ段+イ	[-i:]	[-ɿ]	×	[-ʉ]	×	[-ɿ]	○
牙音	見溪疑							『同』[-i]	
喉音	匣								
半舌音	來								

歯頭音の字は、心母が全て四等の字で、「ツユイ-棲(1)」以外、「スエㄥ」であり、精・清・從母の字は、「-ユイ」の音注となっている。

「ツユイ-棲(1)」は『広韻』に未収で、『康熙字典』に「[正韻]先齊切音西与栖同幽棲幽居也」とあり、原例は「良鳥擇樹而棲 ^{リヤンニヤウツエジュイルウツエ} ヨキ鳥ハ樹ヲ擇テ棲ム」である。「ツユイ」は「ツユイ-妻(8)棲(1)」の声符の類推によるものと考えられる。

「齊-ツユイ 5(4)」などの「-ユイ」の音注の字は、声母の部分で検討したように、両方言では同じ[-i]との読みで、「-ユイ」とは、韻尾の対応に問題がないが、「-ユイ」は同書では合口の[y]の音注法として用いられていることから、問題があることは明らかである。なお、既に指摘されたように、再版本の巻六ではこれらの字に対する音注は「ツユイ」から「ツイ」へと改められている。例えば、前五巻の「ツユイ-濟(7)」は巻六では「ツイ」となっている。『磨光韻鏡』でも「ツイ」である。音注は「ツイ」であれば、両方言から説明できる。

また、延音点「\」に関する部分で検討したように、心母の「犀西樺洗婿細奚」等の字は、南京音、蘇州音、杭州音では[-i]になっている。『磨光韻鏡』では「スイ」「ツイ」である。これは蟹摂三・四等の齊韻開口字と祭韻知・照組以外の開口字が止摂の字と合流して、[-i]になったという変化を反映している。「スエ\」は両方言から説明できない。

「-ユイ」「スエ\」の音注は両方言から説明できないが、南部吳方言では、例えば、金華方言、処衢方言の一部など、[-ie]と発音する。このように、主母音[ə]を示す「-ユイ」「-エ」は南部吳方言から説明できる。

表 5-12-2 のように、歯頭音の字に対して、二種類の音注が分けられ、心母の字が南部吳方言から説明できるが、両音注は南京音でも吳方言でも説明できない。歯頭音の字以外、開口三・四等の字の音注は両方言に対応している。

合口の場合、一等の字に対して、明母以外の重唇音、泥母以外の舌頭音の字が「オ段+イ」、明母、泥母、來母の字が「ウ段+イ」の音注となっている。

重唇音の字は南京音が[-əi]、杭州音が[-ei]と発音する。『同文備攷』は[-uei]、『磨光韻鏡』は同書と同じ、明母以外「ポイ・ボイ」、明母が「ムイ」となっている。つまり、重唇音の音注は杭州音と一致している。

舌頭音の字は、泥母以外が「トイ・ドイ」であり、南京音が[-uəi]、杭州音が[-uei]となり、いずれも音注に近い発音で、『磨光韻鏡』でも「トイ・ドイ」となり、一致している。

泥母の「ヌイ」と歯頭音の「ウ段+イ」の音注は両方言から説明できる。半舌音の字は『磨光韻鏡』と同じ「ルイ」となり、つまり杭州音と対応している。

牙音字の字に対する音注は、それぞれが異なっている。「クハイ-檜(1)」「ワイ-外(13)」は「クハ/ワ+イ」、「クイ-塊(2)」は「ウ段+イ」、「ワイ-桅」は「オ段+イ」の音注である

「檜」「外」「塊」3字は、『西儒耳目資』『同文備攷』では同じ[-uai]、『磨光韻鏡』では「-ワイ」である。「檜-クハイ」「外-ワイ」「塊-クイ」はともに合口の特徴を示すが、「クハイ」「ワイ」は南京音と吳方言との双方に対応するが、「塊-クイ」はいずれの場合も説明できず、例外である。

「クイ-塊(2)」は原例が「三字話」の「一塊生^{イクイスイエン} ヒトカタマリ」、「四字話」の「一塊生住^{イクイスイエンヂユイ} ヒトカタマリニ住ス」である。『広韻』に「苦對切 土塊」で、音注と対応しているが、意味上は一致しない。なお、現代ではその俗字「块」が使われ、蘇州音では[k'ue]、南京音では[k'uaæ]と発音する。意味の面では近代の使い方となり、つまり、「クイ」は異なる意味を区別するために記されていると考えられる。

「ヲイ-桅」は南京音が[-uəi]、杭州音が[-uei]となり、『磨光韻鏡』が「-ヲイ」であり、「ヲイ」は両方言から説明できる。

喉音字の場合、南京音が[-uəi]、杭州音が[-uei]となり、『磨光韻鏡』では「-ヲイ」である。音注の「ヲイ」「ホイ」はいずれの場合にも一致する。

表 5-12-3 蟹撮合口一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応				
一等	重唇音	幫滂並	オ段+イ (「ボイ・ポイ」)	[-oi]	○	[-E] 『同』[-uei]	○	[-ei] 『磨』「ボイ・ポイ」	○	
		明	ウ段+イ(「ムイ」)	[-ui]	×		○	『磨』「ムイ」	○	
	舌頭音	端透定	オ段+イ (「トイ」「ドイ」)	[-oi]	[-uəi]	○	○	○	[-uei] 『磨』「トイ」「ドイ」	○
		泥	ウ段+イ(「ヌイ」)	[-ui]		○		○	[-uei]	○
	齒頭音	精清從	ウ段+イ (「ツイ」「ヅイ」)	[-ui]	○	○	○	[-uei]	○	
	牙音	見溪疑	「クハイ」「ワイ」	[-uai]	[-uaæ] 『西』[-uai]	○	○	○	[-ue] 『磨』「-ワイ」	○
			オ段+イ(「ヲイ」)	[-oi]	[-uəi]	○	○	○	[-uei] 『磨』「-ヲイ」	○
	喉音	曉匣	オ段+イ (「ヲイ」「ホイ」)	[-oi]	[-uəi]	○	○	○	[-uei] 『磨』「-ヲイ」	○
半舌音	來	ウ段+イ(「ルイ」)	[-ui]	[-əi]	×	○	○	[-ei] 『磨』「ルイ」	○	

表 5-12-3 のように、合口一等の字に対する音注は杭州音と対応する。

二等の場合、重唇音の字は合口を示す「ハ^oイ」「マイ」である。『西儒耳目資』『同文備攷』では同じ[-uai]であり、音注は両方言に対応する。

牙・喉音の字は「-ハイ」「ワイ」及び「クハア」「ハア^h」「ワア^h」で、いずれの場合も合口の特徴を示している。

「画(畫)-ハア^h11(4)ワア^h11(7)」と「話-ハア^h25(20)ワア^h25(5)」は、匣母の部分で検討した。「クハア-掛」を含む3字とも南京音が[-ue]、蘇州・杭州音が[-ua]となり、いずれの場合も音注と一致する。

「-ハイ」「ワイ」の字は南京音が[-uaæ]、蘇州音では文語音の場合が[-ue]、

白話音の場合が[-ua]と発音する。杭州音は[-uɛ]となる。『西儒耳目資』『同文備攷』は同じ[-uai]で、『磨光韻鏡』は「-ワイ」である。音注は両方言から説明できる。

表 5-12-4 蟹撮合口二等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応		
二等	重唇音	滂明	「ハ ^ㄨ イ」 「マイ」	[-aɛ]	○	[-a]	×	[-ɛ]	○	
				『西』[-uai]		『同』[-uai]			『磨』「ハイ」「バイ」	
	牙音	見溪	「クハイ」 「ワイ」	[-uaɛ]	○	[-uɛ]			『磨』「-ワイ」	○
						『同』[-uai]				
	喉音	影匣	「ハア ^ㄨ 」 「ワア ^ㄨ 」	[-ua]		[-ua]		[-ua]		

表 5-12-4 のように、合口二等の字に対する音注は南京音と杭州音から説明できる。

三等と四等の場合、軽唇音、正歯音、半歯音の字が「ウ段+イ」、齒頭音、喉音の字が「オ段+イ」の音注となっている。

三等軽唇音の「フイ-廢(廢)(3)」は、南京音が[-ɔi]であるが、蘇州・杭州音が[-i]となる。また、『西儒耳目資』『同文備攷』では同じ[-i]となっている。「フイ」は両方言から説明できる。

それ以外の場合、南京音は[-uɔi]、杭州音は[-uɔɪ]となっている。「ウ段+イ」「オ段+イ」の音注は明らかに両方言から説明できる。

表 5-12-5 のように、合口三・四等の字に対する音注は南京音と杭州音から説明できる。

表 5-12-5 蟹撮合口三・四等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応			
三四等	軽唇音	非	ウ段+イ(「フイ」)	[-ui]	○	[-i]	○	[-i]	○		
	齒頭音	心	オ段+イ(「ソイ」)	[-oi]	○	[-ɛ]	×	[-uɔɪ]	○		
	正歯音	章	ウ段+イ(「ツイ」)	[-ui]					○		
	喉音	曉匣	オ段+イ (「ホイ」「ライ」)	[-oi]					○	[-uɛ]	○
	半歯音	日	ウ段+イ(「ズイ」)	[-ui]					○	[-ɛ]	○

上述で、音注は全体的に杭州音に対応していることが分かる。

なお、先行研究において、謝(2016:71-73)は蟹撮の音注現象を検討している。その指摘の中に、以下のような問題点が見られる。

①「幫母的排ハ[°]イ[pai]」と指摘しているが、「排」は幫母の字でなく、「歩皆切」で、並母所属である。

②「端母的低テイ[tei]、透母の梯低テイ[tei]」との指摘について、「低」は透母の字として二回目挙げられているが、誤記と考えられる。

③「此外还有疑母的塊」とのように、「塊」を疑母の例として挙げているが、「塊」は『広韻』に「苦對切」とあり、疑母字ではなく、溪母の所属字である。

④「回」について、「回ヲイ[oi]」とのように、音注は「ヲイ」しか挙げていない。「回」は同書で二種類の音注が見られ、計 24 例で、「ヲイ」音注が 22 例で、「オイ」の例は 2 例存在している。

⑤「塊クハイ[kuai]」を挙げているが、③のように、既に合口一等の部分で取り上げたことがあり、音注は「クイ」となり、ここで元の意味を区別するために用いられると考えられる。謝(2016)が挙げたい例は「快」字の可能性が高い。

⑥挙げられた「槐ヲイ[oi]」は前五巻にない例である。これは巻六の使用例の可能性が高い。本研究では巻六の内容について検討しない。また、合口三四等で挙げられた「卫ヲイ[oi]」「攜ヒイ[hi:]」も同じ、前五巻にないものである。

⑦「影母的蛙ワア^ー[ua:]」とのように、「蛙」を蟹摂の例として挙げているが、「影母的“蛙”读作ワア^ー[ua:](p.69)」とのように、仮摂の例としても挙げている。「蛙」は『広韻』に蟹摂の「烏媧切」と仮摂「烏瓜切」とあり、いずれも問題がないが、本研究では、仮摂の字として処理する。

⑧「“鰕”读作キエ^{キエイユイ}[kie]」について、原例が「龍魚」の「鰕魚」で、「鰕」は『広韻』に蟹摂去声の「居衛切 魚名」と山攝入声の「居月切 魚名」とあり、音注は明らかに入声の読みと対応する。このように、蟹摂の字でなく、山攝入声の字と処理すべきである。

また、中村(2015b:32)は、蟹摂の四等の例として、「細-スエ、」「西-スエ、」(官話資料で「スエイ」となる)を挙げ、長崎に住む唐人の官話音に杭州音の特徴の混入例としている。謝(2016)もこうした現象を挙げている。こうした例について、齒音のみの例なのか、それとも四等全体的現象なのかについて明らかにされていない。

本研究の考察では、「スエ、」は四等の齒頭音心母の場合のみに現れていることを確認できた。前述したように、心母以外の齒頭音の字に対して、「ツユイ」と統一されている。同じ齒頭音に「スエ、」「ツユイ」の二種類の音注となるのは両方言から説明できない。なお、「ツユイ」は巻六で「ツイ」となっている。

表 5-12 蟹摂の所属字一覧

(1)〈開口・一等〉

撰	蟹撮		字 種 数	延 べ 数	蟹撮		字 種 数	延 べ 数	蟹撮		字 種 数	延 べ 数	
	等位	一等			等位	一等			等位	一等			
	声調	平			上				去				
	韻目	咍			海				泰				
	韻目	ai			ai				ai				
	開合	開			開				開				
重唇音	幫 [p-]	清							ホ ^o イ-貝 (1)	1	1		
舌頭音	端 [t-]	清	タイ-歹 ① 4(3)	1	4				タイ-帶 (7)	1	7		
	透 [t'-]	次清	タイ-匪言 ① 1 臺 ② 6(2)ダイ-臺 6(4)	1	1				タイ-太 (8)泰 (2)	2	10		
	定 [d-]	濁	タイ-苔 (4)臺 ① 6(2)擻 6(1)ダイ-臺 6(4)擻 6(5)	3	16	ダイ-待 4(3)怠 (3)タイ-待 4(1)	2	7					
齒頭音	泥 [n-]	次濁							ナイ-奈 ① (8)	1	8	ナイ-耐 (8)	
	精 [ts-]	清	サイ-哉 6(1)サ ^o イ-哉 6(5)災 (2)	2	8	サ ^o イ-載 ① (1)	1	1				サ ^o イ-再 (9)載 ② (1)	
	清 [ts'-]	次清	サ ^o イ-猜 5(4)サイ-猜 5(1)	1	5	サ ^o イ-采 2(1)彩 (1)綵 (1)サイ-采 2(1)	3	4	サ ^o イ-菜 (21)	1	21		
	從 [dz-]	濁	ツアイ-材 (4)財 13(10)才 7(4)チャ ^o ウ-財 13(1)纒 ① (5) ツアイ-財 13(2)才 7(1)サ ^o イ-才 7(1)	4	29	サイ-在 ① 46(1)サ ^o イ-在 46(9) ツアイ-在 46(3)ツアイ-在 46(33)	1	46				サイ-在 ② 46(1)サ ^o イ-在 46(9)載 ③ 1(1) ツアイ-纒 ② (5)在 46(33)ツアイ-在 46(3)	
牙音	心 [s-]	清	シヤイ-鯉 (1)	1	1								
	見 [k-]	清	カイ-該 (1)	1	1	カイ-改 (4)	1	4	カイ-蓋 ① (2)			カイ-概 (1)	
	溪 [k'-]	次清	カイ-開 (28)	1	28	クイ-鑑 ① (2)	1	2				カイ-慨 (1)	
喉音	疑 [ŋ-]	次濁	ガイ-呆 6(5)カイ-呆 6(1)	1	6				ガイ-艾 (1)	1	1	ガイ-礙 (4)	
	影 [ʔ-]	清	アイ-衰 (1)	1	1				アイ-曖 (1)	1	1	アイ-愛 (愛) (23)	
	曉 [h-]	次清				ハイ-海 20(12)ハイ-海 20(8)	1	20					
半舌音	匣 [ɦ-]	濁	ハイ-孩 (1)	1	1				ハイ-害 8(2)ハイ-害 8(6)	1	8		
	來 [l-]	次濁	ライ-來 (131)	1	131				ライ-頼 (4)	1	4		
計													
			19	232						10	61	6	46

注:「チャ^oウ-財 13(1)」は中間点の部分で検討したように、「チャ^oウ」は直前の例にある「鈔-チャ^oウ」による誤記である。

(2)〈開口・二等〉

撰	蟹撮		字 種 数	延 べ 数	蟹撮		字 種 数	延 べ 数	蟹撮		字 種 数	延 べ 数	蟹撮		字 種 数	延 べ 数
	等位	二等			二等	二等			二等	二等						
	声調	平			上				去				去			
	韻目	皆			佳				卦				怪			
	韻目	ei			ai				ai				ei			
	開合	開			開				開				開			
重唇音	幫 [p-]	清											ハ ^o イ-拜 (6)	1	6	
	並 [b-]	濁	バイ-牌 ② (5)ハ ^o イ-排 (3)	1	3	バイ-牌 ① (5)	1	5	バア-罷 ① (10)	1	10					ハイ-敗 5(4)バイ-敗 5(1)
舌上音	明 [m-]	次濁	マイ-埋 (1)	1	1				マイ-買 (10)	1	10					
	娘 [ŋ]	次濁							ナイ-奶 (2)	1	2					
齒上音	照 (莊) [tʂ-]	清	サ ^o イ-齋 (1)	1	1								サ ^o イ-債 (7)	1	7	
	穿 (初) [tʂ'-]	次清				サ ^o イ-差 9(1)	1	1								
	牀 (崇) [dʒ-]	濁	ザイ-豺 (1)	1	1	ヂヤイ-柴 (3)	1	3								シヤイ-賽 2(1)サイ-賽 2(1)
牙音	審 (生) [ʂ-]	清							シヤイ-灑 (4)篩 (4)	2	8		シヤイ-晒 (1)洒 (1)	2	2	
	見 [k-]	清	キヤイ-皆 (6)藪 (1)	2	7	キヤア-佳 (2)キヤイ-街 (8)	2	10	キヤイ-解 (4)	1	4					キヤイ-介 (2)戒 (1)界 (1)芥 (2)
喉音	疑 [ŋ-]	次濁				イヤア-涯 (1)捱 2(1)ヤイ-捱 2(1)	2	3								
	影 [ʔ-]	清							ヤイ-矮 (1)	1	1					
半舌音	匣 [ɦ-]	濁	ヒヤイ-鞋 ② (4)			ヒヤイ-鞋 ① (4)	1	4	ヒヤイ-蟹 (2)	1	2	ヒヤイ-駭 (1)	1	1		キヤイ-械 (2)薙 (1)
	計			6	13	7	26	8	37	1	1	3	9	7	15	2

注:・「ナイ-奶 (2)」は、原例が「親族」の「奶奶」である。『広韻』『集韻』『康熙字典』等に未収。『広韻』その異体字の「妳孌」があり、「奴蟹切 乳也」である。
 ・「灑-シヤイ」は『広韻』に止撰の「所綺切 灑埽」(上声)「所寄切 灑埽」(去声)、蟹撮の「所蟹切 灑水」、仮撰の「砂下切 灑水也」とある。原例は「灑酒 サケツグ」「灑灑茶 チヤヲツグ」「満灑一盃 マンマント一盃ツグ」で、意味上蟹撮か仮撰の読みと対応する。また、同書では生母仮撰の字が「-ア」音注となるのが一般的であるので、ここで、「シヤイ」を蟹撮と認定する。
 ・「洒-シヤイ」は『広韻』に心母四等上声の「先禮切 洗欲」と生母二等去声の「處倍木 洒埽」とある。原例は「千何時自社涙 涙を流す」で、意味上では二種類の発音のいずれにも対応しない。心母蟹撮の字は同書では「スエ」音注が多く見られるので、ここで生母として処理する。一方、「灑」は「洒」の繁体字で、「シヤイ」は「灑」の読みを注する可能性が高い。
 ・「晒-シヤイ」は『広韻』に未収。繁体字の「曬」は生母止撰の「所綺切 暴也」と蟹撮の「所賣切 暴也」とある。原例は「晒乾 オシカラバシタ」で、蟹撮の読みと一致している。
 ・「街-キヤイ」は『広韻』に二等の「古佳切 道也」(佳韻)と「古諧切 又音佳」(皆韻)とあり、原例は「街上 マチ」「街坊 マチ」等のように、佳韻の意味と一致している。
 ・「藪-キヤイ」は『広韻』に「古諧切 藪 荈 葉名」(平声)、「佳買切 爾雅曰 藪 荈 英 莨」(上声)、「古隘切 藪 荈 葉名」(去声)とあり、原例は「菜蔬」の「黄蘗 トコロ」で、本研究では平声の読みと処理する。
 ・「解-キヤイ」は『広韻』に蟹撮二等所属の匣母の「胡買切 曉也」(上声)、「胡懈切 曲解」(去声)と見母の「佳買切 講也説也脱也散也」(上声)、「古隘切 除也」(去声)とある。声母上、音注は匣母の読みと対応しない。また、原例は「三字話」の「解不出 カテンガユカヌ」「解得來 カテンガイタ」、「四字話」の「我要解手 我ダイヨウニ行タイ」、「六字話」の「解到官府請賞 公儀ニ引渡シテハウビヲ申シ受ン」であり、上声の「佳買切」に一致している。
 ・「鞋-ヒヤイ」は『広韻』に「戸佳切 屨也」(佳韻)、「戸皆切 屨也」(皆韻)とある。原例は「皮鞋」「草鞋」等で、意味上では両読みとも対応する。

(3)〈開口・三四等〉

撰			蟹撰		字種数	延べ数	蟹撰		字種数	延べ数	蟹撰		字種数	延べ数	
等位			三等				四等				四等				
声調			去		平		上		去		去				
韻目			祭		齊		齊		齊		齊				
韻目			iei		ei		ei		ei		ei				
開合			開		開		開		開		開				
重唇音	幫 [p-]	清	ヒ ^o イ-蔽 (1)		1	1					ヒ ^o イ-閉 ① (1)		1	1	
	滂 [p'-]	次清					ヒ ^o イ-批 (1)	1	1						
	明 [m-]	次濁	ムイ-袂 (1)		1	1	ミイ-迷 (3)	1	3	ミイ-米 (5)	1	5			
舌頭音	端 [t-]	清					テイ-低 (1)隄 5(1)デイ-隄 ② 5(4)	1	1	テイ-底 (2)抵 (3)	2	5	テイ-帝 (1)噓 (1)	2	2
	透 [t'-]	次清					テイ-梯 (4)デイ-麴 (1)	2	5	テイ-体 ① (14)體 (1)	2	15	テイ-替 (5)剃 (1)	2	6
	定 [d-]	濁					デイ-提 ① 3(2)隄 ① 5(4)テイ- 魚帝 (1)提 3(1)隄 5(1)	3	9	デイ-弟 ① 19(16)遞 ① 3(2)テイ-弟 19(3)遞 3(1)	2	22	デイ-弟 ② 19(16)遞 ② 3(2)第 2(1)棟 (1)テイ-弟 19(3)遞 3(1)第 2(1)	2	3
	泥 [n-]	次濁					ニイ-泥 ① (5)	1	5						
齒頭音	精 [ts-]	清	ツユイ-際 (3)鯨 (1)		2	4	ツユイ-責 ① (1)	1	1	ツユイ-濟 ① (7)	1	7	ツユイ-濟 ② (7)		
	清 [ts'-]	次清					ツユイ-妻 ① (8)棲 (1)	2	9				ツユイ-妻 ② (8)		
	從 [dz-]	濁					ツユイ-婿 (1)齊 5(4)ヅエイ-齊 5(1)	2	6	ツユイ-鱗 (1)齊 ① (1)	2	2			
	心 [s-]	清					スエ ^h -犀 (2)西 (18)樨 (1)ツユイ-捷 (1)	4	22	スエ ^h -洗 ① (3)	1	3	スエ ^h -婿 (2)細 (13)	2	15
正齒音	審(書)[ʃ-]	清	シイ-世 (13)勢 (4)		2	17									
	禪 [ʒ-]	濁	スウ-誓 (1)		1	1									
牙音	見 [k-]	清					キイ-雞 (14)	1	14				キイ-計 (18)繼 (1)係 (3)ソウ-薊 (1)	4	23
	溪 [k'-]	次清	キイ-憩 (1)		1	1	キイ-契 ① (1)谿 (1)	2	2						
	疑 [ŋ-]	次濁	ニイ-藝 (5)		1	5									
喉音	匣 [ɦ-]	濁					イ ^h -奚 (1)	1	1				ヒイ-繫 (2)	1	2
半舌音	来 [l-]	次濁	リュイ-蠟 (1)リュイ-例 (1)厲 (1)		3	3	リュイ-藜 (1)	1	1	リュイ-禮 (9)蠶 ② (1)	1	9	リュイ-麗 ② (1)離 ② (1)荔 ② (1)		
計					12	33		23	80		12	68		14	52

注：・「スウ-誓(1)」は禪母の部分で検討した。「時制切 誓約」で、原例が「折箭爲誓 箭ヲ折テチカヒヲナス」である。清音の「スウ」は「ズウ」の濁点の記入漏れの可能性がある。「-ウ」音注となるのは蟹撰祭韻の開口三等の字が止撰と合流した変化によるものである。

- ・「ソウ-薊(1)」は見母の部分で検討したように、「ソウ」は字形の近い「ソウ-蘇」による誤記の可能性がある。
- ・「齊-ツユイ 5(4)ヅエイ 5(1)」は從母の部分で検討したように、「ヅエイ」は「ツユイ」の誤記で、「ツユイ」は「ツユイ」の濁点が省略された可能性が高い。

(4)〈合口・一等〉

撰			蟹撰		字種数	延べ数	蟹撰		字種数	延べ数	蟹撰		字種数	延べ数	
等位			一等				一等				一等				
声調			平		上		去		去		去				
韻目			灰		賄		泰		隊		隊				
韻目			ai		ai		ai		ai		ai				
開合			合		合		合		合		合				
重唇音	幫 [p-]	清	ホ ^o イ-盃 (11)		1	11					ホ ^o イ-背 ① (2)鞞 (1)		2	3	
	滂 [p'-]	次清									ホ ^o イ-配 (2)		1	2	
	並 [b-]	濁	ボイ-陪 (5)		1	5					ホ ^o イ-背 ② (2)佩 (3)		1	3	
	明 [m-]	次濁	ムイ-媒 (2)梅 (2)		2	4	ムイ-每 ① (8)	1	8		ムイ-妹 (7)每 ② (8)		1	7	
舌頭音	端 [t-]	清	トイ-堆 (1)		1	1					トイ-對 (8)		1	8	
	透 [t'-]	次清	トイ-推 ① (9)		1	9					トイ-對 (8)		1	8	
	定 [d-]	濁	トイ-頰 (1)		1	1					トイ-退 (4)		1	4	
	泥 [n-]	次濁									トイ-兌 (1)		1	1	
齒頭音	精 [ts-]	清									ツイ-最 (4)		1	4	
	清 [ts'-]	次清	ツイ-催 (2)崔 ① (1)		2	3					ツイ-燂 (1)		1	1	
	從 [dz-]	濁					ツイ-罪 2(1)ツイ-罪 2(1)	1	2						
	見 [k-]	清									クハイ-檜 ① (1)ヲ-鱸 (1)		2	2	
牙音	溪 [k'-]	次清									クイ-塊 (2)		1	2	
	疑 [ŋ-]	次濁	ヲイ-掩 ① (6)		1	6					ワイ-外 (13)		1	13	
喉音	曉 [h-]	次清	ホイ-灰 (1)		1	1	ホイ-悔 ① 6(5)賄 (2)ホ-悔 6(1)	2	8		ホイ-悔 ② 6(5)誨 (2)ホ-悔 6(1)		1	2	
	匣 [ɦ-]	濁	ヲイ-回 (廻) 24(22)廻 (1)槐 ① (1)オイ-回 24(2)		3	26					ヲイ-會 ① (18)		1	18	
半舌音	来 [l-]	次濁	ルイ-雷 (2)權 (2)		2	4									
計					16	71		4	18		6	38		11	36

注：・「ツエ-燂(1)」は蟹撰去声の「七内切 作刀鑿也」で、原例が「器用」の「發燂 ツケキ」である。「ツエ」は声符「卒」(「子聿切/則骨切/倉沒切」)の類推によるものと考えられる。

- ・「悔-ホイ 6(5)ホ 6(1)」は『広韻』に曉母の「呼罪切 悔吝」(上声)、「荒内切 改悔」(去声)とある。「ホ」の原例は「五字話」の「你不可悔恨 汝悔へ恨ムヘカラズ」で、「ホイ」音注の例、例えば、「二字話」の「悔恨 クル」と同じ語をもち、意味上違いが見られない。「ホ」は短音節型となり、明らかに「ホイ」による誤記である。
- ・「ヲ-鱸(1)」は、見母の部分で検討したように、声符の「會-ヲイ」による誤記である。

(5)〈合口・二等〉

撰			蟹撰		字種数	延べ数	蟹撰		字種数	延べ数	蟹撰		字種数	延べ数
等位			二等				二等				二等			
声調			平				去				去			
韻目			皆				卦				夫			
韻目			uei				uai				uai			
開合			合		合		合							
重唇音	滂 [p'-]	次清					ハ°イ-派 (3)	1	3					
	並 [b-]	濁					ヒ°イ-稗 (1)	1	1					
	明 [m-]	次濁					マイ-賣 (8)	1	8					
牙音	見 [k-]	清	クハイ-乖 (1)	1	1	クハア-掛 (6)	1	6	クハイ-怪 (3)	1	3			
	溪 [k'-]	次清										クハイ-快 (14)	1	14
喉音	影 [ʔ-]	清												
	匣 [ɦ-]	濁	ワイ-懷 (3)	1	3	ハアゝ-画 (畫 1)① 11(4)ワアゝ-画 (畫 1)11(7)	1	11	ワイ-壞 ① (3)	1	3	ハアゝ-話 25(20)ワアゝ-話 25(5)	1	25
計				2	4		5	29		2	6		2	39

注:「ヒ°イ-稗(1)」は並母の部分で検討したように、「ヒ°イ」は「ヒ°イ-鴨」のように、声符「卑」の類推によるものである。

(6)〈合口・三四等〉

撰			蟹撰		字種数	延べ数	蟹撰		字種数	延べ数	蟹撰		字種数	延べ数
等位			三等				三等				四等			
声調			去				去				去			
韻目			祭				廢				霽			
韻目			yei				yei				uei			
開合			合		合		合							
輕唇音	非 [f-]	清					フイ-廢 (廢)(3)	1	3					
齒頭音	心 [s-]	清	ソイ-歲 (5)	1	5									
正齒音	照 (章) [tɕ-]	清	ツイ-贅 (1)	1	1									
喉音	曉 [h-]	次清					ホイ-喙 ① (1)	1	1					
	匣 [ɦ-]	濁									ライ-慧 (1) 惠 (2) ホイ-惠 (1)	3	4	
半齒音	日 [ɲz-]	次濁	ズイ-蝸 ① (1)	1	1									
計				3	7		2	4		3	4		3	4

1.13 果摂

果摂の字は、計 67 字種、延べ 887 字である。

開口の一等字について、舌頭音の場合、主に二種類の音注が見られ、「打大他那娜」は「-アゝ」、それ以外の場合は「オ段+ウ」「-ヲゝ」の音注となっている。「ア-阿(8)」は例外である。

「打-タアゝ42(41)タア 42(1)」は『広韻』に端母の「徳冷切」(二等)、「都挺切」(四等)とあり、韻母上ではいずれも音注と対応しない。また、『康熙字典』に「[韻會][正韻]都瓦切[正韻箋]打字通音當作都那切如讀都瓦切不成聲矣○按打與撻同義楊慎曰尚書撻音入聲又轉上聲俗用打爲撻然从撻轉音亦未合今讀徳馬切答上聲爲正」との説明がある。このように、音注は明らかに上声の「都那切」「徳馬切」と対応し、近代の発音を注している。延音点の部分で検討したように、「タア」は延音点省略された可能性が高い。また、蘇州音が[tā]、南京音が[te]、杭州音が[ta]で、音注は南京音と杭州音から説明できる。

「ア-阿(8)」は果摂平声の「烏何切」で、8例の音注は全て短音節型の「ア」となり、平声の読みと一致しない。具体的に下記のようにになっている。

「二字話」^{アジュイ}阿誰 タレカ 「長短話」^{ニイテアヒヨシ}你的阿兄 汝ノ舎兄
 「親族」^{アヘ}阿伯 ヲヂ ^{アシヨ}阿叔 ヲヂ ^{アヒヨシ}阿兄 アニ ^{アデイ}阿弟 ヲトゝ
^{アツユイ}阿姊 アネ ^{アムイ}阿妹 イモト

南京音は[e]、蘇州音は[əu]（「阿膠」の場合）と[aʔ]との両読みで、杭州音は[aʔ]である。「ア」は蘇州・杭州音から説明できる。

表 5-13-1 果摂の開口一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応				
開口一等	舌頭音	端透定泥	オ段+ウ 「-アゝ」	[o:] [-a:]	[-ɔ] ○	○ [-əu] [-a]	○ ○	[-ou] 『磨』「-ヲゝ」 [-a]	○	
	齒頭音	精清	「-ヲゝ」	[-wo:]	○	○	○	[-ou] 『磨』「-ヲゝ」	○	
	牙音	見溪群疑	オ段+ウ	[-o:]	[-ɔ]	○	○	○	[-ou] 『磨』「-ヲゝ」	○
	喉音	影匣								
半舌音	来									

開口の場合について、「大他那娜」は、南京音が[-e]で、蘇州・杭州音が[-

a]となり、「-アゝ」はいずれにも対応する。

それ以外の場合、南京音は[-ɔ]、蘇州音は[-əu]、杭州音は[-ou]で、『磨光韻鏡』では「-ヲゝ」である。「オ段+ウ」「-ヲゝ」は両方言から説明できる。

表 5-13-1 のように、開口字の場合、音注は両方言から説明できる。

また、三等韻に「ゲウ-茄」1 例のみがある。「茄」は、群母果摂の「求迦切 茄子菜也可食又音加」と見母仮摂の「古牙切 荷莖」とあり、原例が「菜蔬」の「茄子」で、意味の面では群母果摂の読みと対応している。また、南京音は[-ei]、蘇州・杭州音は[-a]となっている。「ゲウ」は両方言から説明できない。「ゲウ」の音注は流摂のような複合母音となり、単母音ではなく、果摂の読みを示すものではない。また、三等の字だが、介音 i がない。このように、誤記の可能性が高い。

合口字の一等字について、心母以外の歯頭音が「-ヲゝ」で、それ以外の場合「オ段+ウ」の音注が一般的である。

重唇音明母の「麼-マアゝ」は第三章第四節で検討したように、多種類の音注をもち、『広韻』にある中古音の読みと関係なく、31 例の中、「マアゝ」と注する 12 例は全て疑問の語気を表している助詞の表記例で、読みは今日と同様 [ma] である。

表 5-13-2 果摂合口一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応	
合口一等	重唇音	幫滂並	オ段+ウ	[-o:]	○	[-u]	×
		明				[-o]	○
	舌頭音	端透定泥	「-ヲゝ」	○	○	○	[-ou] 『磨』「-ヲウ」
		齒頭音				清從	
		心	オ段+ウ	[-o:]	○	○	
	牙音	見溪疑					
喉音	影曉匣						
半舌音	来						

表 5-13-2 のように、合口の重唇音幫組の字は、南京音が[-ɔ]、杭州音が[-ou]、蘇州音では、明母の場合が[-o]、明母以外の場合が[-u]と発音する。他の場合は、南京音が[-ɔ]、蘇州音が[-əu]、杭州音が[-ou]となっている。「オ段+ウ」「-ヲゝ」は両方言から説明できる。『磨光韻鏡』では「-ヲウ」となり、

同書の音注と一致している。

上述から分かるように、果撰の字に対して、開口・合口を問わず、全て長呼型音注となっている。また、音注は両方言との対応がほぼ同じであるが、呉方言の特徴を反映する「ア-阿」の存在から、呉方言の特徴がより顕著であり。杭州音に最も近い。

表 5-13 果摂の所属字一覧

(1)〈開口・一三等〉

撰		果摂		字種数	延べ数	果摂		字種数	延べ数	果摂		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	開合			一等	平			歌	ɑ		
舌頭音	端 [t-]	清	ト-多(多)83(1)トウ-多(多)83(82)	1	83	トウ-哆①(2)打-タア\42(41)タア 42(1)	2	44	トウ-哆②(2)				
	透 [t'-]	次清	タア\他(61)	1	61								
	定 [d-]	濁	ドウ-舵(2)逦③(1)	1	2	ドウ-舵(6)テイ-爹①(6)	2	12	ダア\大① 115(102)タア\大 115(13)	1	115		
	泥 [n-]	次濁	ナア\那①(27)	1	27	ナア\那(1)	1	1	ナア\那②(27)				
歯頭音	精 [ts-]	清				ツヲ\左①(3)	1	3	ツヲ\左②(3)ツヲ\作③ 24(3)做② 43(42)ツヲ-做 43(1)				
	清 [ts'-]	次清	ツヲ\礎①(2)	1	2								
牙音	見 [k-]	清	コウ-歌(2)哥(3)	2	5				コウ-個(43)	1	43		
	溪 [k'-]	次清				コウ-可(69)	1	69					
	群 [g-]	濁											
	疑 [ŋ-]	次濁	ゴウ-蛾①(1)鵝(3)	2	4	コウ-我 118(16)ゴウ-我 118(102)	1	118					
喉音	影 [ʔ-]	清	ア-阿(8)ヲウ-啊(1)	2	9								
	匣 [ɦ-]	濁	ホウ-何①(41)河(2)荷①(1)	3	44	ホウ-何②(41)荷②(1)							
半舌音	来 [l-]	次濁	ロウ-囉 4(3)羅(6)蘿(1)籬(2)囉\囉 4(1)	4	13								
計				18	250		8	247		2	158		計

注：・「多(多)-ト 83(1)トウ-83(82)」について、同書では異体字である「𠂔」と「𠂔」とも使われ、「多」が 40 例ある。『広韻』に「多」は「得何切 衆也重也」で、「ト」の原例が「五字話」の「𠂔打些坊頭」で、短音節型の「ト」は読みと対応できず、明らかに「トウ」による誤記である。
 ・「テイ-爹(6)」定母部分で検討したように、音注が中古音の「徒可切」「陟邪切」「待果切」等の読みと対応できず、南京音が[tie]、蘇州・杭州音が[tia]となり、声母は両方言から説明できるが、韻母はいずれから、説明するのが難しい。

(2)〈合口・一等〉

撰		果摂		字種数	延べ数	果摂		字種数	延べ数	果摂		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	開合			一等	上			果	ua		
重唇音	幫 [p-]	清	ホウ-波(5)菠①(1)	2	6								
	滂 [p'-]	次清	ホウ-頗①(1)	1	1	ホウ-頗②(1)			ホウ-頗③(1)破 12(10)ホウ-破 12(2)	1	12		
	並 [b-]	濁	ホウ-婆(2)	1	2								
	明 [m-]	次濁	モウ-磨①(2)	1	2	マア\磨 31(12)モウ-磨 31(16)モウ\磨 31(1)モ\磨 31(1)モヲ\磨 31(1)	1	31	モウ-磨②(2)				
舌頭音	端 [t-]	清	トウ-塚(1)	1	1	トウ-塚(4)ツヲ\揣①(1)	2	5					
	透 [t'-]	次清				トウ-妥(7)	1	7	ドウ-唾(2)	1	2		
	定 [d-]	濁				ドウ-惰①(2)	2	3	ドウ-惰②(2)				
	泥 [n-]	次濁							ノウ-孺(1)孺(1)	2	2		
歯頭音	清 [ts'-]	次清							ツヲ\礎②(2)				
	從 [dz-]	濁	ツヲ\鍾(1)	1	1	ツヲ\坐① 25(23)ツヲ\坐 25(2)	1	25	ツヲ\坐② 25(23)ツヲ\坐 25(2)				
牙音	心 [s-]	清	ソウ-唆(2)「啤(1)嘍(2)」梭(1)簍①(1)	5	7	ソウ-噴(2)鎖(1)	2	3					
	見 [k-]	清	コウ-過①(36)鍋(2)	2	38	コウ-果(6)	1	6	コウ-過②(36)				
	溪 [k'-]	次清	コウ-科①(1)蝌(1)	2	2				コウ-科②(1)				
	疑 [ŋ-]	次濁							ゴウ-臥(1)	1	1		
喉音	影 [ʔ-]	清	ヲウ-蒿①(1)窩 2(1)ヲウ-窩 2(1)	2	3	ヲウ-蒿②(1)							
	曉 [h-]	次清				ホウ-火 25(24) 火 25(1)	1	25	ホウ-貨(18)	1	18		
半舌音	匣 [ɦ-]	濁	ホウ-和①(14)	1	14	ホウ-夥(伙)①(3)禍 7(2)ヲウ-禍 7(5)	2	10	ホウ-和②(14)				
	来 [l-]	次濁	ロウ-螺(5)	1	5								
計				20	82		12	114		6	35		

注：「窩-ヲウ(1)ヲウ 2(1)」は、原例が「器用」の「被窩 フトン」と「菜蔬」の「蕪窩 エンス」である。『広韻』『集韻』に未収で、『康熙字典』に「[正韻]鳥禾切」とある。「ヲウ」は読みと一致できず、明らかに「ヲウ」による誤記である。

1.14 仮掇

仮掇所属字は、計 86 字種、延べ 733 字である。

開口二等の場合について、重唇音、舌上音の娘母、齒上音の字は「ア段 +ア、」となっている。牙・喉音の字は「イ段 +ヤア」「-ヤア、」となり、延音点の部分で検討したように、これらは同じ発音を示す長呼型音注である。

「茶-ヂヤア 16(8)チャア 16(1)ヅア、16(6)ヅア 16(1)」は澄母の部分で検討したように、「チャア」が濁点の省略、「ヅア」は延音点の記入漏れである。「ヅア、」は知組二等と精組との合流する杭州音の特徴を反映するもので、「ヂヤア」は『同文備攷』では対応する読みがあるため、吳方言からも説明できる。つまり、両音注をもつことは吳方言の特徴の現れと言える。

表 5-14-1 仮掇開口一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応				
開二等	重唇音	幫滂並明	ア段 +ア、	[-a:]	[-v]	○	[-o]	×	[-a] 『磨』「ア段 +ア」 「ア段 +ア、」	○
	舌上音	澄娘								
	齒上音	莊初崇生								
	牙音	見溪疑	イ段 +ヤア -ヤア、	[-ia:]	[-ie]	○	[-ia](文) [-a](白)	○	[-ia] 『磨』「-ヤア」	○
喉音	影匣					[-ia]				

表 5-14-1 のように、重唇音、舌上音、齒上音の字は南京音が[-v]、蘇州音が[-o]、杭州音が[-a]である。「ア段 +ア、」の音注は南京音と杭州音と対応している。牙・喉音の字は南京音が[-ie]、蘇州音が[-ia](文)[-a](白)、杭州音が[-ia]となり、「イ段 +ヤア」「-ヤア、」の音注は南京音と杭州音との双方から説明できる。

開口三等の場合、「-エ、」の音注は一般的である。

表 5-14-2 仮掇開口三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応				
開三等	齒頭音	精清心邪	「-エ、」	[-e:]	[-e]	○	[-ia]	×	[-ie] 『磨』「-エ、」	○
	正齒音	章昌船書								
	喉音	羊								
	半齒音	日								

齒頭音の字は南京音が[-e]、蘇州音が[-ia]となっている。正齒音の字は、南京音が[-ə]で、蘇州音が[-o]となっている。喉音の字は南京音が[-ie]、蘇

州音が[-iɿ]と発音する。半歯音の字は南京音が[-ə]、蘇州音が[-a]である。これらの字は、杭州音では同じ[-iɛ]で、『磨光韻鏡』が「-エ、」である。

表 5-14-2 のように、「-エ、」の音注は杭州音と一致している。

合口二等の字について、「クハア」「ワア、」「ハア、」のように、合口の特徴を示す音注となっている。

「瓜-クハア 12(11)クハア、12(1)」は「古華切 説文蓏也」で、「クハア、」の原例は「菜蔬」の「^{ナンクハア、}南瓜 ボウブラ」であり、「クハア」の「^{ヒヤンクハア}香瓜 マクハー名甜瓜」「^{サイクハア}菜瓜 サイウリ」は意味に違いが見られず、「クハア、」は延音点の使用の影響を受けた結果と考えられる。

表 5-14-3 仮撰合口二等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応	
合二等	牙音	見溪	「クハア」	[-ua:]			
		疑	「ワア、」		[-ue]	○	[-o]
	喉音	影曉匣	「ハア、」	[-ua:]			

これらの字は南京音が[-ue]、蘇州音が[-o]、杭州音が[-ua]となり、『磨光韻鏡』では「ハア」「ワア」である。音注は南京音と杭州音から説明できる。

このように、仮撰の字に対する音注は杭州音に最も対応している。

なお、先行研究において、謝(2016:69)は「泥母的“拿”读作ナアー[na:]と指摘し、「拿」を泥母の例として挙げているが、「拿」は『広韻』に未収で、『康熙字典』に「俗拏字」とあり、『広韻』に「拏」は「女加切」で、泥母でなく、娘母所属字である。

表 5-14 仮撰の所属字一覧

(1)〈開口・二等〉

撰			仮撰			仮撰			仮撰		
等位			二等			二等			二等		
声調			平			上			去		
韻目			麻			馬			禡		
開合			A			a			a		
開			開			開			開		
重唇音	幫 [p-]	清	ハ [°] ア [°] ハ [°] -巴 (2)芭 (1)芭 (1)把 (1)バア [°] 把 (1)	5	6	ハ [°] ア [°] ハ [°] -把 (9)	1	9	ハア [°] ハ [°] -霸 (1)ハ [°] ア [°] ハ [°] -把 (1)	2	2
	滂 [p'-]	次清	ハ [°] ア [°] ハ [°] -葩 (1)葩 (1)バア [°] 把 (2)	2	2			ハ [°] ア [°] ハ [°] -怕 (1) (11)	1	11	
	並 [b-]	濁	バア [°] ハ [°] -把 (1)把 (1)把 (1)ハ [°] ア [°] 把 (2)	3	4			ハ [°] ア [°] ハ [°] -把 (2) (1)バア [°] ハ [°] -把 (2) (1)			
	明 [m-]	次濁	マア-麻 6(1)マア [°] ハ [°] -麻 6(5)蟆 (2)	2	8	マア [°] ハ [°] -馬 (1)馬 (1)罵 (1)罵 (1)馬 38(37)マア-馬 38(1)	4	46	マア [°] ハ [°] -罵 (2) (6)		
舌上音	澄 [d-]	濁	チャア-茶 16(1)チャア-茶 16(8)ツア-茶 16(1)ツア [°] ハ [°] -茶 16(6)	1	16						
	娘 [ŋ]	次濁	ナア [°] ハ [°] -拿 (4)	1	4						
齒上音	照 (莊) [tʂ-]	清						ツア [°] ハ [°] -詐 3(2)ケン-詐 3(1)	1	3	
	穿 (初) [tʂ'-]	次清	サア [°] ハ [°] -叉 (1) (1)ツア [°] ハ [°] -差 (1) (9) (6)チャア-差 9(1)	1	8						
	牀 (崇) [dʒ-]	濁	ツア [°] ハ [°] -査 (1) (6) (5)推 (1) (1)ツア [°] ハ [°] -査 6(1)植 (1)	3	8						
牙音	審 (生) [ʃ-]	清	サア [°] ハ [°] -沙 (1) (1)紗 5(3)スア [°] ハ [°] -砂 (2) (2)紗 5(2)	3	8	シヤア-耍 15(13)シヤウ-耍 15(2)	1	15	サア [°] ハ [°] -沙 (2) (1)		
	見 [k-]	清	キヤア-加 (4)家 80(79)キヤエ-家 80(1)	2	84	キヤア-假 (1) (12)	1	12	キヤア-嫁 (2)架 (8)價 (1) (11)假 (2) (12)駕 (1)	4	22
	溪 [k'-]	次清									
	疑 [ŋ-]	次濁	イヤア-牙 3(1)ヤア [°] ハ [°] -牙 3(2)芽 (2)	2	5	イヤア-雅 3(1)キヤア-雅 3(1)ヤア [°] ハ [°] -雅 3(1)	1	3			
喉音	影 [ʔ-]	清	ヤア [°] ハ [°] -丫 (1)鴉 (1)	2	2						
	匣 [ɦ-]	濁	ヒヤア-遐 (1)蝦 (2)蝦 (6)	3	9	ヒヤア-下 79(78)夏 (1) (2)ヒア [°] ハ [°] -下 79(1)	2	81	ヒヤア-暇 (2)夏 (2) (2)	1	2
計				30	164		10	166		9	40

- 注：・「マア-麻 6(1)」「マア-馬 38(1)」について、既に第四章第三節で分析したように、入声の字と区別するには、陰声韻の字に対して、長呼形表記となるのは特徴であるので、「ハ」の記入漏れによるものと考えられる。
- ・「差」は声調点の部分で検討した。声調点のない「ツア[°]ハ[°]」「チャア」は仮撰平声の「初牙切」と対応する。「ツア[°]ハ[°]」は非反り舌音を示すもので、呉方言に近いが、僅か 1 例だが、「チャア-差 9(1)」は南京音の特徴に近い。
 - ・「詐-ツア[°]ハ[°]3(2)ケン 3(1)」は「側駕切」で、原例が「詐謀 ツア[°]ハ[°]〇 イツハリノハカリコト」「詐計多 ケンキイトク イツハリノ計ガ多ヒ」「奸詐人 ケンツア[°]ハ[°]ジン イツハリアル人」である。「ケン」音注は同頁に繋がっている「三字話」の表記例の「奸」の発音を注している。
 - ・「キヤエ-家 80(1)」は「古牙切 居也」で、「キヤエ」音注の原例は「四字話」の「族滅全家 ツラメツエンキヤエ 一家ノ者ヲ滅ス」で、「キヤア」の「全家老少 ツエンキヤアヲ〇クシヤ〇ク 一家ノケンソク」等と意味上の違いがなく、「キヤエ」は「キヤア」の誤記である。
 - ・「ヤア[°]ハ[°]-牙 3(2)」は「五加切 牙齒又牙旗」で、原例が、「小曲」の「只在牙床上坐」、チサ[°]イヤアチヤンシヤンツツハ[°]「四字話」の「咬牙切齒 キ〇ウキヤハツエツク ハガミヲスル」、「船具」の「舵牙 ドウキヤ[°] カチヅカ」となり、意味の違いが見られず、「イヤア」と「ヤア[°]ハ[°]」は同じものと考えられる。
 - ・「ヤア[°]ハ[°]-芽 (2)」も「五加切」で、2 例とも「ヤア[°]ハ[°]」となり、原例が「菜蔬」の「豆芽菜」と「果瓜」の「麦芽糖」である。「牙」の場合のように、「ヤア[°]ハ[°]」は「イヤア」と同じ扱うことができる。
 - ・「雅-ヤア[°]ハ[°]3(1)イヤア 3(1)キヤア 3(1)」は「五下切 正也嫺雅也」で、原例が「二字話」の「文雅 ワエンキヤア キヤシヤナ」、「二字話」の「風雅 フワンキヤア キヤシヤナ」、「長短話」の「願承雅教 エンゼンイヤキヤ〇ク 」である。「キヤア」は誤記で、「ヤア[°]ハ[°]」と「イヤア」も同じものと考えられる。
 - ・「シヤウ-耍 15(2)」「小曲」1 例は、『広韻』『集韻』に未収、『康熙字典』に「【篇海】沙下切音灑尖耍俊利也戲也」とある。原例は下記の通りで、意味に違いがない。

「シヤウ」:「二字話」耍子 アソブ 「長短話」耍子若何 アソビ玉ハンヤ

「シヤア」:「二字話」頑耍 ワエンキヤア アソブ 「四字話」整日閑耍 ケンジツヒエンシキヤア 毎日アソブ 「五字話」在个裡頑耍 ツァイコウリワエンシキヤア コハニ井テアソベ 踢球玩耍罷 チキウワンシヤアバハ[°] マリヲケテアソンダガヨヒ

「六字話」打双六耍子否 ダフシヤクシヤアヘ〇ク スゴロクヲ打テアソバンカ 下一盘棋耍耍 ヒキアイバンキシヤアシキヤア ゴローバン打テアソバン

「長短話」背來舍下頑耍 セライシヤヘヒキアワエンシキヤア 慶私宅ニ來リテアソヒ ウエンシヤア 胡乱做詩耍子 ワランシヤア 詩ヲ作りナドシテナグサマ 喫酒頑耍 キツユウワンシキヤア 酒ヲノミテアソバン 喫兩盃耍耍便了 キツユウシヤアベンリヤ〇ク 一盃タベ候ヘ

「シヤウ」は開口の読みを示すものではなく、読みと一致できず、「シヤア」による誤記の可能性が高い。南京音は[-ue]、杭州音は[-ua]となり、莊組の字のため、「シヤア」は声母の後に[i]がくることの影響を受けた結果として、介音[u]を示すことができなくなり、拗音と見える「シヤ」となってしまった。即ち、「シヤア」は両方言と対応している。

(2)〈開口・三等〉

撰		假撰		字種数	延べ数	假撰		字種数	延べ数	假撰		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	開合			三等	上			馬	ra		
歯頭音	精 [ts-]	清	ツエゝ、嗟 (1)	1	1	ツユイ-姐 (3)	1	3	ツエ-借 ① 10(1)ツエゝ-借 10(9)	1	10		
	清 [ts'-]	次清				ツエゝ-且 ① (16)	1	16					
	心 [s-]	清	スエゝ-些 50(47)スエ-些 50(1)スエ○-些 50(1)スエㄣ-些 50(1)	1	50	スエゝ-寫 (10)	1	10					
	邪 [z]	濁	ヅエゝ-斜 ① (2)	1	2				ヅエゝ-謝 (11)	1	11		
正歯音	照(章) [tɕ-]	清	チエゝ-遮 (2)	1	2	チエゝ-者 (27)這 (31)	2	58	チエゝ-蔗 (1)鷓 (1)	1	2		
	照(昌) [tɕ'-]	次清	チエゝ-車 ① 15(14)チエ-車 15(1)	1	15	チエゝ-扯 (4)	1	4					
	牀(船) [dʒ-]	濁	ゼエゝ-蛇 ① (10)	1	10				ゼエゝ-射 ① 4(3)シエゝ-射 4(1)	1	4		
	審(書) [ʃ-]	清	シエゝ-奢 3(2)除 (3)セエゝ-奢 3(1)	2	6	セエゝ-捨 3(2)舍 ① (3)シエゝ-捨 3(1)	2	6	セエゝ-舍 ② (3)				
喉音	羊 [j-]	次濁				エゝ-野 ① (3)也 40(39)	2	43	エゝ-夜 (10)	1	10		
半歯音	日 [ɲz-]	次濁				ヅエゝ-惹 ① 2(1)ゼエゝ-惹 2(1)	1	2					
計				8	86		11	142		5	37		

注：・「些-スエゝ50(47)スエ 50(1)スエ○50(1)スエㄣ 50(1)」について、「些」は心母所属で、三つの読みがあり、假撰の「寫邪切 少也」、蟹撰の「蘇計切 可也此也辭也何也楚音」、果撰の「蘇箇切 楚語辭」である。原例の「早些 ハヤク」^{サ〇クスエゝ}「省用些 シマツヲシテ使エ」^{スエㄣヨンスエゝ}「有些緣故 チトイハレガアル」^{ユクスエゝエㄣクク}等のように、假撰の読みと一致している。「スエ」は原例が「四字話」の「須要讓些 少シマケロ」^{スエゝヤ〇ウジケンスエ}で、意味上では「スエゝ」の例との違いがなく、「ゝ」の記入漏れと考えられる。
 ・「車-チエゝ15(14)チエ 15(1)」は、『広韻』に遇撰の「九魚切 車輅」と假撰の「尺遮切 古史考曰黄帝作車引重致遠少吳時加牛禹時奚仲加馬周公作指南車」とあり、音注は明らかに假撰の読みと一致している。また、「チエ」は原例が「器用」^{フツンチエ}の「風車」で、初出でないの、「ゝ」の記入漏れの可能性が高い。
 ・「姐-ツユイ(3)」は「茲野切 羌人呼母一曰慢也」で、原例が「親族」の「姐姐」^{フユイツユイ}「小姐」^{スヤ〇クツユイ}であり、南京音、蘇州音、杭州音のいずれも[-i]となり、音注と一致しない。また、巻六では、これらの「-ユイ」音注は「-イ」音注となっている。

(3)〈合口・二等〉

撰		假撰		字種数	延べ数	假撰		字種数	延べ数	假撰		字種数	延べ数
等位	声調	韻目	開合			二等	上			馬	ua		
牙音	見 [k-]	清	クハア-瓜 12(11)クハアゝ-瓜 12(1)	1	12	クハア-寡 (9)	1	9					
	溪 [k'-]	次清	クハア-誇 (2)	1	2								
	疑 [ŋ-]	次濁				ワアゝ-瓦 ① (2)	1	2	ワアゝ-瓦 ② (2)				
喉音	影 [ʔ-]	清	ワアゝ-蛙 ① (1)	1	1								
	曉 [h-]	次清	ハアゝ-花 (41)華 ① (7)	2	48				ハアゝ-化 (9)	1	9		
	匣 [ɦ-]	濁	ハアゝ-攤 ① (1)權 ① (1)華 ② (7)	2	2				ハアゝ-權 ② (1)				
計				7	65		2	11		1	9		

1.15 效摂

效摂の字は計 185 字種、延べ 1,135 字である。

既に第二章第四節で述べたように、效摂は蘇州音で単母音化で韻尾を失った。杭州音も現代では単母音化した。18 世紀以降の新しい変化で、『唐話纂要』の時代では韻尾を有していた。以下の表では対照する方言として、杭州音のみ挙げる。なお、蘇州音は[-æ][-iæ]である。

一等の字は、「ア段+○+ウ」の音注となっている。南京音は[-au]、『同文備攷』でも[-ao]となり、『磨光韻鏡』も「ア段+○+ウ」である。表 5-15-1 のように、「ア段+○+ウ」は、当時複合母音を有する南京音と呉方言のいずれにも対応する。

表 5-15-1 效摂一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	蘇州音との対応	杭州音との対応				
一等	重唇音	幫並明	ア段+○+ウ	[-au]	[-au]	○	『同』[-ao]	○	[-ɔ] 『磨』「ア段+○+ウ」	○
	舌頭音	端透定泥								
	齒頭音	精清從心								
	牙音	見溪疑								
	喉音	影曉匣								
	半舌音	來								

二等の字は、既に中間点の部分で検討したように、直音の「ア段+○+ウ」と拗音の「-ヤ+○+ウ」との二種類の音注が見られる。

直音の「ア段+○+ウ」となる場合、重唇音の字、喉音影母の「拗」、舌上音の「棹鏡鬧」、齒上音の「爪」である。

その中、「拗-ハ○ウ」は南京音とは韻母が合うが、声母は合わなく、蘇州・杭州音とは声母も韻母も合わず、「ハ○ウ」は説明できない。それ以外の直音音注「ア段+○+ウ」の例は呉方言(『同文備攷』[-ao])から説明できる。

拗音の「-ヤ+○+ウ」となる場合、舌上音の知組の「嘲」、齒上音莊組の「梢稍掣,炒鈔」と「拗」以外の牙・喉音の字である。

その中、「嘲-チャ○ウ 2(1)ヂヤ○ウ 2(1)」は知母の部分で検討するように、「ヂヤ○ウ」は「潮」を注した可能性があり、「チャ○ウ」は南京音と『同文備攷』のいずれから説明できる。

「鈔炒-チャ○ウ」2 字は、初母の部分で検討したように、「チャ○ウ」は南京

音から説明できる。

両音注をもつ「梢」を含む生母所属の「稍稍掣」3字の場合、音注の「スヤ○ウ」について、「ス」は呉方言の特徴の現れであるが、「-ヤ○ウ」は介音[i]を有する特徴を反映し、『同文備攷』([-ao])から説明できず、南京音と一致する。つまり、「スヤ○ウ」は方言の発音から説明できない。

「稍稍掣,炒鈔」以外、二等の舌上音の知組、齒上音莊組のこれらの字に対する拗音音注は原音の読みを反映するものでなく、知・莊組の字の音韻変化の現れである。舌上音知組二等、齒上音莊組二等、知組三等の「チャ○ウ」と正齒音章組三等の「チャ○ウ」「シヤ○ウ」とは、同じ精組と章組の区別があることを反映する拗音音注となっているのは、效撰の場合、第三章で検討したように、二等と三等の字が合流した呉方言の特徴を反映している。

表 5-15-2 のように、二等字に対する音注は南京音より呉方言と多く対応している。「炒鈔-チャ○ウ」は南京音の要素の混入例である。

表 5-15-2 效撰二等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応
二等	重唇音	幫滂並明	ア段+○+ウ	[-au]	[-au]	[-ɔ]	『同』 [-ao] ○	[-ɔ]
	舌上音	知澄	「棹」ア段+○+ウ -ヤ○ウ	[-au] [-iau]	[-au]	[-ɔ]	『同』 「棹」: [-ao] ○ 「-ヤ○ウ」: [-iao] ○	[-ɔ]
		娘	ア段+○+ウ	[-au]		[-ɔ]	『同』 [-ao] ○	[-ɔ]
	齒上音	莊初生	「爪」ア段+○+ウ -ヤ○ウ		[-au]	[-ɔ]	『同』 「爪梢」: [-ao] ○ 「-ヤ○ウ」: [-iao] ○	[-ɔ]
	牙音	見溪	-ヤ○ウ	[-iau]			「炒鈔-チャ○ウ」× 「稍稍掣」×	[-iɔ]
喉音	影曉			[-iau]	[-iɔ]			

表 5-15-3 效撰三・四等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応		蘇州音との対応		杭州音との対応		
三等	重唇音	幫滂並明	-ヤ○ウ	[-iau]	[-iau]	○	○ 『同』[-iao]	[-iɔ]	『磨』「-ヤ○ウ」 ○	
	舌上音	知澄			[-au]	×		[-ɔ]		
	齒頭音	精心			[-iau]	○		[-iɔ]		
	正齒音	章書			[-au]	×		[-ɔ]		
	牙音	見群疑						[-iɔ]		
	喉音	影曉羊				[-iau]		○		[-iɔ]
	半舌音	来				[-au]		×		[-ɔ]
四等	舌頭音	端透定	-ヤ○ウ	[-iau]	[-iau]	○ 『同』[-iao]	[-iɔ]	『磨』「-ヤ○ウ」 ○		
	齒頭音	精心								
	牙音	見群疑								
	喉音	影曉羊								
半舌音	来									

三四等の字は、音注が例外なく全て拗音の「-ヤ○ウ」となっている。

『西儒耳目資』では[-ao](=[-au])、『同文備攷』では[-iao]、『三音正譌』『磨光韻鏡』ではともに「-ヤ○ウ」と記されている。「-ヤ○ウ」は明らかに介音[i]を有する呉方言から説明できる。このように、「-ヤ○ウ」で統一されたのは口蓋化で三・四等字の合流を反映している。

表 5-15-3 のように、三・四等の字に対する音注は呉方言と対応している。

上述したように、效撮に対する音注は呉方言と対応している。「炒鈔-チャ○ウ」は南京音の特徴を反映するものである。

なお、先行研究において、謝(2016:75)に「效撮開口二等肴韻帮组泥母为“ア段+ウ”读作[au]」との指摘があるが、二等の字に「泥母」は存在しない。

表 5-15 效撰の所属字一覧

(1)〈開口・一等〉

撰			效撰		字種数		延べ数		撰			字種数		延べ数	
等位			一等						一等						
声調			平						去						
韻目			豪						號						
開合			au						au						
			開						開						
重唇音	幫 [p-]	清							ハ [○] ウ-保 (4) 寶 (5) 褱 (1)	3	10	ハ [○] ウ-報 (12)	1	12	
	並 [b-]	濁	バ [○] ウ-袍 (1)	1	1	バ [○] ウ-抱 5(4)ハ [○] ウ-抱 5(1)	1	5	バ [○] ウ-暴 6(5)ハ [○] ウ-暴 ① 6(1)	1	6				
	明 [m-]	次濁	マ [○] ウ-毛 ① (4)	1	4	ハ [○] ウ-冇 (1)	1	1	マ [○] ウ-帽 (2)毛 ② (4)	1	2				
舌頭音	端 [t-]	清	タ [○] ウ-刀 (30)	1	30	タ [○] ウ-倒 ① (11)搗 (1)	2	12	タ [○] ウ-到 (13)倒 ② (11)	1	13				
	透 [t'-]	次清				タ [○] ウ-套 (5)討 (8)	2	13							
	定 [d-]	濁	ダ [○] ウ-桃 4(2)逃 3(1)陶 ① (1)萄 (1)鉤 (2)タ [○] ウ-桃 4(2)逃 3(2)	5	11	ダ [○] ウ-道 22(16)稻 (2)タ [○] ウ-道 22(5)ダ [○] ウ-道 22(1)	2	24	ダ [○] ウ-盜 (3)導 (2)	2	5				
	泥 [n-]	次濁				ナ [○] ウ-瑙 (1)惱 (惱) (5)腦 ① (3)	3	9	ナ [○] ウ-腦 ② (3)						
齒頭音	精 [ts-]	清	サ [○] ウ-遭 6(5)サ [○] ウ-遭 6(1)	1	6	サ [○] ウ-早 14(11)藻 (1)蚤 (2)枣 (1)サ [○] ウ-早 14(3)	4	18	サ [○] ウ-竈 2(1)サ [○] ウ-竈 2(1)	1	2				
	清 [ts'-]	次清				サ [○] ウ-艸 29(27)サ [○] ウ-艸 29(1)ツア [○] ウ-艸 29(1)	1	29							
	從 [dz-]	濁	サ [○] ウ-漕 (1)サ [○] ウ-槽 (3)	2	4	サ [○] ウ-造 ① 8(2)皂 (2)ゾア [○] ウ-造 8(6)	2	10							
牙音	心 [s-]	清	サ [○] ウ-搔 (1)サ [○] ウ-臊 (4)サン-鯪 (1)	3	6	サ [○] ウ-燥 (1)掃 ① (6)スエ [○] ウ-嫂 (2)	3	9	サ [○] ウ-噪 (1)掃 ② (6)	1	1				
	見 [k-]	清	カ [○] ウ-膏 ① (2)高 (13)羔 (1)篙 (2)	4	18				カ [○] ウ-膏 ② (2)告 ① (11)	1	11				
	溪 [k'-]	次清				カ [○] ウ-考 (2)	1	2	カ [○] ウ-靠 (5)	1	5				
喉音	疑 [ŋ-]	次濁	カ [○] ウ-熬 4(2)ガ [○] ウ-熬 4(2)	1	4				ガ [○] ウ-傲 (3)	1	3				
	影 [ʔ-]	清	ハ [○] ウ-麀 (1)	1	1	ア [○] ウ-懊 ① (2)ハ [○] ウ-襖 (1)	2	3	ア [○] ウ-懊 ② (2)						
	曉 [h-]	次清	ハ [○] ウ-蒿 (1)	1	1	ハ [○] ウ-好 ① (99)	1	99	ハ [○] ウ-好 ② (99)耗 ① (2)	1	2				
半舌音	匣 [ɦ-]	濁	ハ [○] ウ-號 ① (9)毫 (1)豪 5(3)ア [○] ウ-豪 5(2)	3	15				ハ [○] ウ-號 ② (9)						
	來 [l-]	次濁	ラ [○] ウ-牢 (5)勞 ① (5)撈 (1)滂 ① (1)	4	12	ラ [○] ウ-老 (28)滂 ② (1)	1	28	ラ [○] ウ-勞 (5)滂 ③ (1)	1	5				
計				28	113		29	272		13	67				

注：「ダ[○]ウ-道 22(1)」は明らかに中間点「○」の記入漏れである。
 ・「サン-鯪(1)」は、和製漢字である。『広韻』に未収で、『漢語大字典』に「同“鯪”」とあり、「鯪」は「蘇遭切」との效撰の字で、音注と一致しない。「サン」音注は声符の「参」の類推によるものと考えられる。
 ・「スエ[○]ウ-嫂(2)」は、第三章の中間点の部分で検討したように、「スエ[○]ウ」が「搜-スエ[○]ウ」による諧声符の類推の結果と考えられる。

(2)〈開口・二等〉

撰			效撰		字種数		延べ数		撰			字種数		延べ数	
等位			二等						二等						
声調			平						去						
韻目			肴						效						
開合			Au						au						
			開						開						
重唇音	幫 [p-]	清	ハ [○] ウ-包 13(12)苞 (1)ハ [○] ウ-包 13(1)バ [○] ウ-胞 ① (1)	3	15	ハ [○] ウ-飽 (1)	1	1	ハ [○] ウ-爆 ① (1)豹 (1)	2	2				
	滂 [p'-]	次清	ハ [○] ウ-泡 ① (1)拋 ① (1)バ [○] ウ-胞 ② (1)	2	2				ハ [○] ウ-砲 ① (3)拋 ② (1)	1	3				
	並 [b-]	濁	バ [○] ウ-鮑 ① (1)跑 ① (1)	2	2	ハ [○] ウ-鮑 (1)	1	1	バ [○] ウ-鮑 ② (1)						
	明 [m-]	次濁	マ [○] ウ-猫 (3)貓 (1)	2	4				マ [○] ウ-貌 (3)	1	3				
舌上音	知 [t-]	清	チヤ [○] ウ-嘲 2(1)ヂヤ [○] ウ-嘲 2(1)	1	2										
	澄 [d-]	濁							ヅア [○] ウ-棹 (1)	1	1				
齒上音	娘 [ŋ]	次濁	ナ [○] ウ-饒 (1)	1	1	キヤ [○] ウ-撓 ① (1)	1	1	ナ [○] ウ-鬧 (4)	1	4				
	照(莊) [tʂ-]	清				サ [○] ウ-瓜 (2)	1	2							
	穿(初) [tʂ'-]	次清	チヤ [○] ウ-鈔 ① (4)	1	4	チヤ [○] ウ-炒 (2)	1	2	チヤ [○] ウ-鈔 ② (4)						
牙音	審(生) [ʃ-]	清	スヤ [○] ウ-鞘 ② (1)						スヤ [○] ウ-稍 (2)稍 2(1)掣 (1)サ [○] ウ-梢 2(1)	3	5				
	見 [k-]	清	キヤ [○] ウ-鳩 (1)教 ① (21)交 (11)佼 ① (2)蛟 (1)膠 (1)鉸 ① (1)鮫 (1)	8	39	キヤ [○] ウ-狡 (2)攪 (2)絞 (3)佼 ② (2)鉸 ② (1)	3	7	キヤ [○] ウ-較 ① (3)覺 (覺) 5(1)教 ② (21)鉸 ③ (1)	2	4				
	溪 [k'-]	次清	キヤ [○] ウ-敲 ① (3)	1	3	キヤ [○] ウ-巧 ① (4)	1	4	キヤ [○] ウ-敲 ② (3)巧 ② (4)						
喉音	影 [ʔ-]	清	ヤ [○] ウ-咬 ① (1)	1	1	ハ [○] ウ-拗 (2)	1	2							
	曉 [h-]	次清							ヒヤ [○] ウ-孝 (4)	1	4				
計				22	73		10	20		12	26				

注：・「ハ[○]ウ-冇(1)」は原例が「^{ハ[○]ウダウ}冇糖」である。『広韻』などに未収。『漢語大字典』に「方言。没有。」とあり、発音が mǎo[mau]であるが、南京音と蘇州音での読みが確認できず、「ハ[○]ウ」音注は当時の原音を注している可能性が高い。
 ・「ハ[○]ウ-包 13(1)」は「○」の記入漏れである。
 ・「嘲-ヂヤ[○]ウ 2(1)チヤ[○]ウ 2(1)」は知母の部分で検討したように、「チヤ[○]ウ」は南京音と呉方言と対応するが、濁音の「ヂヤ[○]ウ」は原例の「嘲風」が「潮風」に間違えられることから見て、「ヂヤ[○]ウ」が字形の類似する「潮」(澄母)の音を注した可能性もある。
 ・「キヤ[○]ウ-撓(1)」は、娘母の部分で検討したように、音注は「キヤ[○]ウ-儵澆驍」等の声符類推による可能性が高い。
 ・「梢-サ[○]ウ 2(1)スヤ[○]ウ 2(1)」は中間点の部分で検討したように、「スヤ[○]ウ」は当時の介音を有する南京音と杭州音と対応する。二等の字齒上音の字に対する音注の特徴を見ると、「サ[○]ウ」は誤記の可能性もある。
 ・「拗-ハ[○]ウ」は声母が蘇州・杭州音、韻母が南京音と合うため、両方言から説明できない。
 ・「棹-ヅア[○]ウ」は中間点の部分で検討したように、南京音が [tʂ-]、『同文備考』が [dzao]、『磨光韻鏡』が「ツヤ[○]ウ」で、「ヅア[○]ウ」は声母上では呉方言に対応するが、直音の「-ア[○]ウ」は呉方言から杭州に対応しない。他の效撰の字が拗音の「-ヤ[○]ウ」となることから、「ヅア[○]ウ」は誤記による可能性が高い。

(3)〈開口・三四等〉

撰		效撰		字 種 数	延 べ 数	撰		字 種 数	延 べ 数	撰		字 種 数	延 べ 数	撰		字 種 数	延 べ 数			
等位	声調	三等	平			三等	去			四等	平			四等	去					
韻目		宵		字 種 数	延 べ 数	宵		字 種 数	延 べ 数	宵		字 種 数	延 べ 数	宵		字 種 数	延 べ 数			
開合		iεu				iεu				iεu				iεu				iεu		
		開		開		開		開		開										
重唇音	幫 [p-]	清				ヒヤ〇ウ-表 6(2) ヒ°ヤ〇ウ-表 6(4)	1	6												
	滂 [p'-]	次清	ヒヤ〇ウ-票 7(1)ヒ°ヤ〇ウ- 漂①(3)標①(2)票 7(6)	4	14					ヒ°ヤ〇ウ-漂②(3)標② (2)										
	並 [b-]	濁	ビヤ〇ウ-瓢(2)鏢①(1)①鏢 4(2)ヒ°ヤ〇ウ-鏢 4(2)	3	5	ビヤ〇ウ-鏢(1)ヒ° ヤ〇ウ-鏢③(2)	1	1		ビヤ〇ウ-鏢②4(2) ヒ°ヤ〇ウ-鏢②4(2)										
	明 [m-]	次濁	ミヤ〇ウ-苗(1)	1	1					ミヤ〇ウ-妙(4)	1	4								
舌頭音	端 [t-]	清								テヤ〇ウ-彫(1)彫(1)	2	2	ニヤ〇ウ-鳥(31)	1	31	テヤ〇ウ-弔①(2)	1	2		
	透 [t'-]	次清								テヤ〇ウ-挑(3)	1	3								
	定 [d-]	濁								デヤ〇ウ-調①(4)條(3)テヤ〇ウ-跳 (3)チヤ〇ウ-苕(1)	4	11	デヤ〇ウ-掉①(3)	1	3	デヤ〇ウ-調②(4) 掉②(3)				
舌上音	知 [t-]	清	チヤ〇ウ-朝①6(5)	1	5															
	澄 [d-]	濁	ヂヤ〇ウ-朝 6(1)	1	1	ヂヤ〇ウ-兆(1)	1	1												
齒頭音	精 [ts-]	清	ツヤ〇ウ-焦(1)蕉(1)椒 3(2) 鷓(1)ツヤ ウ-椒 3(1)	4	6															
	心 [s-]	清	スヤ〇ウ-宵(2)消(11)硝(1) 銷(1)	4	15	スヤ〇ウ-小(35)	1	35	スヤ〇ウ-咲(17)鞞① (1)	2	18	スヤ〇ウ-簾(1)毳肖(1)	2	2	デヤ〇ウ-篠(1)	1	1			
正齒音	照(章)[tɕ-]	清	チヤ〇ウ-招(5)	1	5					チヤ〇ウ-照 8(7) チヤ ウ-照 8(1)	1	8								
	審(書)[ʃ-]	清	シヤ〇ウ-燒①(1)	1	1	シヤ〇ウ-少①(24)	1	24	シヤ〇ウ-燒②(1)少② (24)											
牙音	見[k-]	清	キヤ〇ウ-驕(4)嬌①(1)喬① (1)	3	6	キヤ〇ウ-嬌②(1)				キヤ〇ウ-澆(2)驍(1)ヒヤ〇ウ-鼻(3)	3	6	キヤ〇ウ-僥(1)	1	1	キヤ〇ウ-叫 (叫)(9)	1	9		
	群[g-]	濁	キヤ〇ウ-橋 3(1)蕎 2(1)ギ ヤ〇ウ-蕎 2(1)橋 3(2)	2	5															
	疑[ŋ-]	次濁								ヤ〇ウ-堯(1)	1	1								
喉音	影[ʔ-]	清	ヤ〇ウ-腰(2)要①(119)邀 ①(2)	3	123				ヤ〇ウ-要②(119)											
	曉[h-]	次清	ヒヤ〇ウ-噤(2)	1	2								ヒヤ〇ウ-曉(11)	1	11					
	羊[j-]	次濁	ヤ〇ウ-鷓①(2)搖①(2)謠 (2)鮪(1)	4	7				ヤ〇ウ-鷓②(2)搖(2)	1	2									
半舌音	來[l-]	次濁			リヤ〇ウ-繚①(3)	1	3	リヤ〇ウ-鷓①(1)	1	1	リヤ〇ウ-料①(3)寥①(1)撩①(2) 聊(1)繚②(3)鷓②(1)	4	7	リヤ〇ウ-了(165) 寥①(4)撩②(2) 繚③(3)	1	169	リヤ〇ウ-料②(3)			
半齒音	日[ɲz-]	次濁	ジヤ〇ウ-饒①(2)	1	2	ジヤ〇ウ-擾(4)	1	4	ジヤ〇ウ-饒②(2)											
計				33	198		7	74		6	33		17	32		6	216		2	11

注:「ツヤ ウ-椒 3(1)」「チヤ ウ-照 8(1)」は明らかに中間点「〇」の記入漏れである。

1.16 流撮

流撮の所属字は計 125 字種、延べ 878 字である。

效撮の場合と同じ、下表では杭州音のみ挙げる。蘇州音は[-y][-iy]である。

一等の場合、「エ段+○+ウ」の音注は一般的で、「モウ-母(17)」が例外である。

「モウ-母(17)」は明母の「莫厚切」で、17 例が全て「モウ」である。南京音と杭州音が[mu]、蘇州音が[mo]となり、『磨光韻鏡』も「モウ」である。「モウ」は杭州音・蘇州音と対応する。

表 5-16-1 のように、一等の字は南京音が[-əu]、杭州音が[-eɪ]となり、『同文備攷』は[-əu]、『磨光韻鏡』は「-エ○ウ」である。このように、「エ段+○+ウ」の音注は複合母音をもつ南京音と呉方言のいずれからも説明できる。

表 5-16-1 流撮の一等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	杭州音との対応	蘇州音との対応				
一等	重唇音	明	エ段+○+ウ	[-əu]	[-əu]	○	『磨』[-eɪ] 『磨』「-エ○ウ」	○	『同』[-əu]	○
	舌頭音	端透定								
	齒頭音	精清								
	牙音	見溪疑								
	喉音	影匣								
	半舌音	来								

三等の字について、重唇音、舌頭音、齒上音の字が「エ段+○+ウ」の音注である。軽唇音の字は「フウ-富(19)副(2)復 3(1)」「ウゝ-婦(8)負(6)」の「ウ段+ウ」以外、同じ「エ段+○+ウ」の音注となっている。

三等の唇音の「謀否覆浮枹」は、一等の「メ○ウ-牡某」と同じ「エ段+○+ウ」の音注となっている。これは、中古以降の漢語方言では、唇音の声母の後に介音[i]がくることができないので、一等の唇音字と合流したことを反映している。齒上音莊組の字は音注も発音の対応も一等の字と同じ、精組への合流を反映している。これらの唇音の字と齒上音の字は、発音の対応も一等の場合と同じ、南京音が[-əu]、杭州音が[-eɪ]となり、『同文備攷』は[-əu]で、『磨光韻鏡』は「-エ○ウ」となり、「エ段+○+ウ」はいずれの場合にも対応する。

軽唇音の「フウ-富(19)副(2)復 3(1)」「ウゝ-婦(8)負(6)」について、南京音でも蘇州・杭州音でも[-u]となっているので、いずれの場合も音注と一致して

いる。

舌頭音の「丟-テ○ウ」は『広韻』に未収、『康熙字典』に「[篇海]丁羞切『揚子方言』一去不還也。俗作丟，非。」とあり、南京音が[-iəu]、杭州音が[-y]である。『同文備攷』と『磨光韻鏡』での読みが確認できないが、当時の杭州音も複合母音だったため、「テ○ウ」は両方言との対応があると考えられる。

舌上音、正歯音、牙音、半舌音、半歯音の字と喉音曉母の「ヒウ-休(38)」は「イ段+ウ」の音注であり、「久救-クウ」が例外である。

「久-キウ 10(9)」「小曲」1例)クウ 10(1)は「舉有切」であり、「救-キウ 11(10)」「小曲」1例)クウ 11(1)は、「居祐切」である。「久」「救」のそれぞれの原例は、下記の通りである。

「久」「クウ」:^{クウハスケ○ウスエ}「四字話」久無消息
「キウ」:^{ナイキウ}「二字話」耐久 ^{キウフ°ケン}「三字話」久不見
「四字話」^{ヒユイキウフ°ケン}許久不見 ^{キウフ°ウエンタア、ドンヅイン}「六字話」久不聞他動靜
「長短話」^{クウツウキウフ°ウエンキイキユイ}故此久不問起居 ^{ベライヒユイキウフ°ケン}別來許久不見
^{ニイツエンスエンキウフ°ライ}你怎生久不來 ^{ニイリンツヲンキウフ°ライゴウキヤア}你令尊久不來我家

「救」「クウ」:^{テイスウクウエユン}「四字話」提師救援
「キウ」:^{キウツユイダア、}「三字話」救濟他 ^{キウテウヲ}救得活 ^{キウフ°ウヲ}救不活
「四字話」^{ツユイビンキウクウ}濟貧救苦 ^{チンクウキウド}拯孤救獨 ^{チヨンジンキウホウ}衆人救火 ^{テイスヤンキウイン}遞相救應
「常言」^{エユンスイナンキウギンホウ}遠水難救近火 ^{ツインツエスヤンキウ}親戚相救

2 字とも、南京音が[-iəu]、杭州音が[-y]となり、『同文備攷』では[-iəu]である。「クウ」は介音 [i] を反映することできず、それに、いずれも初出でないため、誤記の可能性が高い。「キウ」は両方言から説明できる。

誤記の「久救-クウ」を除き、表 5-16-2 のように、娘母以外の舌上音、正歯音、半舌音、半歯音、喉音曉母の「ヒウ-休(38)」は、南京音が[-əu]、杭州音が[-y]である。

娘母、牙音の字は、南京音が[-iəu]、杭州音が[-iy]となっている。『同文備攷』は全て[-iəu]で、『磨光韻鏡』は「-イ○ウ」である。「イ段+ウ」の音注は両方言から説明できる。

歯頭音、喉音の字が「-ユイ」の音注である。南京音が[-iəu]、杭州音が[-y]となり、『同文備攷』も[-iəu]である。「-ユイ」は韻尾の形が流撮とは異なり、両方言から説明できない。

表 5-16-2 流撮の三等韻の音注対照表

声母項目		音注	音注の読み	南京音との対応	杭州音との対応		蘇州音との対応			
三等	唇母	明	エ段+○+ウ	[-əu]	[-əu]	○	[-ei]	『磨』「-エ○ウ」○	『同』[-əu]	○
	軽唇音	非敷奉	エ段+○+ウ				[-u]	[-u]	[-u]	○
			ウ段+ウ ('フウ」「ウ、')							
	舌頭音	端	エ段+○+ウ	[-əu]	[-iəu]	○	[-y]	×	『同』[-iəu]	○
	舌上音	徹澄	イ段+ウ	[-iu]	[-əu]	○	[-y]	『磨』「-エ○ウ」×	『同』[-iəu]	○
		娘			[-iəu]	○	[-iy]			
	歯頭音	精清從心	-ユイ	[-iu]	[-iəu]	×	[-y]	『磨』「スイ○ウ」 「ツイ○ウ」 ×	『同』[-iəu]	○
	歯上音	莊崇生	エ段+○+ウ	[-əu]	[-əu]	○	[-y]	『磨』「-エ○ウ」○		
	正歯音	章昌書禪	イ段+ウ	[-iu]	[-əu]	○	[-y]	『磨』「-エ○ウ」×	『同』[-iəu]	○
		牙音			見溪群疑	[-iəu]	○			
	喉音	影于羊	-ユイ	[-iu]	[-iəu]	×	[-y]	『磨』「スイ○ウ」 「ツイ○ウ」 ×	『同』[-iəu]	○
		曉								
	半舌音	来	イ段+ウ	[-iu]	[-əu]	○	[-y]	『磨』「-エ○ウ」×		
	半歯音	日								

表 5-16-2 のように、両方言から説明できない「-ユイ」以外、流撮の字に対する音注は南京音と杭州音の双方に対応している。

表 5-16 流摂の所属字一覧

(1)〈開口・一等〉

撰			流 撰		流 撰		流 撰		字 種 数	延 べ 数	
等 位	一 等		一 等	一 等	一 等	一 等					
声 調	平		上	上	去	去					
韻 目	侯		厚	厚	候	候					
開 合	開		əu	əu	əu	əu					
重 唇 音	明 [m-]	次 濁			メ○ウ-牡 (3)某 (1)モウ-母 (17)	3	21				
舌 頭 音	端 [t-]	清	テ○ウ-兜 (2)	1	2	テ○ウ-斗 (10)抖 (1)蚪 (1)閏 (3)	4	15			
	透 [t'-]	次 清	テ○ウ-倫 (3)	1	3				テ○ウ-透 ①(2)	1	2
	定 [d-]	濁	テ○ウ-投 13(2)頭 64(13)頭 ケ○ウ-頭 64(1)デ○-頭 64(1)	2	77				デ○ウ-痘 (1)豆 14(13)テ○ウ-豆 14(1)	2	15
歯 頭 音	精 [ts-]	清			ツエ○ウ-走 40(38)ツエ○-走 40(1)ソエ○ウ-走 40(1)	1	40	ツエ○ウ-走 40(38)ツエ○-走 40(1)ソエ○ウ-走 40(2)			
	清 [ts'-]	次 清						ツエ○ウ-湊 (3)	1	3	
牙 音	見 [k-]	清	ケ○ウ-勾 ①(5)拘 ①(1)鉤 (鉤)(6)	3	12	ケ○ウ-苟 (4)拘 ②(1)狗 7(6)キユイ-狗 7(1)	2	11			
	溪 [k'-]	次 清	ケ○ウ-勾 ②(5)エへ○ウ-摠 ①(2)	1	2	ケ○ウ-口 (25)叩 (1)	2	26	ケ○ウ-寇 (2)	1	2
	疑 [ŋ-]	次 濁			ゲ○ウ-偶 ①(3)	1	3	ゲ○ウ-偶 ②(3)			
喉 音	影 [ʔ-]	清	エへ○ウ-嘔 ①(1)鷗 (1)	2	2	エへ○ウ-嘔 ②(1)					
	匣 [ɦ-]	濁	へ○ウ-猴 (2)	1	2	へ○ウ-厚 ①(6)後 ①(32)	2	38	へ○ウ-候 (7)厚 ②(6)後 ②(32)ガ○ウ-鸞 ①(1)	2	8
半 舌 音	来 [l-]	次 濁	レ○ウ-樓 (楼)(3)喽 ①(1)樓 ①(2)婁 ①(1)シ○ウ-蝮 (1)	5	8	レ○ウ-喽 ②(1)婁 ②(1)			レ○ウ-漏 (4)	1	4
計				16	108		15	154		8	34

- 注：・「デ○-頭 64(1)」「ツエ○-走 40(1)」は声母部分で検討したように、それぞれ「デ○ウ」、「ツエ○ウ」による誤記と考えられる。
- ・「走」は延べ 40 例で、「ツエ○ウ」38 例、「ツエ○」1 例、「ソエ○ウ」1 例である。「ツエ○」は「ウ」の記入漏れ、「ソ」は「ツ」による誤記。
 - ・「狗」は、延べ 7 例で、「ケ○ウ」6 例、「キユイ」1 例である。流撰字のため、韻尾「イ」と対応しない。「拘-キユイ」による類推の誤記。
 - ・「エへ○ウ-摠(2)」は、字形の近い「エへ○ウ-嘔」を注する可能性が高い。
 - ・「狗-キユイ 7(1)ケ○ウ 7(6)」は、見母の「古厚切」で、「キユイ」音注の原例が「^{キユイツ}菜蔬」の「狗脊」である。「キユイ」は読みと一致できず、字形の近い「拘-キユイ」の誤記によるものと考えられる。
 - ・「シ○ウ-蝮(1)」は来母の部分で検討したように、「シ○ウ」が「レ○ウ」による誤記の可能性が高い。
 - ・「ガ○ウ-鸞(1)」は匣母で検討したように、蘇州音と南京音とも濁音の読みがないため、両方言から説明できない。

(2)〈開口・三等〉

撰 等位			流撰 三等		流撰 三等		流撰 三等		字 種 数	延 べ 数	字 種 数	延 べ 数
声調			平		上		去					
韻目			尤		有		宥					
開合			iəu		iəu		iəu					
開			開		開		開					
重唇音	明 [m-]	次濁	メ○ウ-謀 (9)	1	9							
輕唇音	非 [f-]	清				へ○ウ-否 ①(4)	1	4	フウ-富 (19)	1	19	
	敷 [f'-]	次清							フウ-副 ①(2)復 3(1)へ○ウ-覆 2(1)	2	4	
舌頭音	奉 [v-]	濁	ウエ○ウ-浮 (1)枹 ①(1)	2	2	ウゝ-婦 (8)負 (6)	2	14				
	端 [t-]	清	テ○ウ-丟 (4)	1	4							
舌上音	徹 [t'-]	次清	チウ-抽 (3)	1	3	チウ-醜 (1)扭 ①(2)	2	3				
	澄 [d-]	濁	ヂウ-儔 ①(1)躄 (3)ヂウ-綱 ①5(4)チウ-綱 5(1)	3	9				チウ-冑 (1)	1	1	
齒頭音	娘 [ŋ]	次濁				ニウ-扭 ①(1)鈕 (1)	2	2				
	精 [ts-]	清	ツユイ-鯛 ①(1)	1	1	ツユウ-酒 (47)	1	47				
齒上音	清 [ts'-]	次清	ツユウ-秋 (4)萩 (1)楸 (1)鞞 (1)鯀 (1)	5	8							
	從 [dz-]	濁	ツユイ-楸 ①(1)	1	1				ヅユウ-就 16(10)鶯 (1)ツユウ-就 16(5)ヅエウ-就 16(1)	2	17	
正齒音	心 [s-]	清	シユウ-羞 7(6)修 3(1)スヤウ-羞 7(1)スユウ-修 3(2)	2	10				スユウ-秀 (2)綉 (1)	2	3	
	照 (莊) [tʂ-]	清							ツエ○ウ-黻 (1)縞 ①(1)	2	2	
牙音	牀 (崇) [dʒ-]	濁	ヅエ○ウ-愁 6(5)ツエ○ウ-愁 6(1)	1	6				ヅエ○ウ-驀 (1)	1	1	
	審 (生) [ʃ-]	清	スエ○ウ-搜 7(6)スエ ウ-搜 7(1)	1	7							
牙音	照 (章) [tʂ-]	清	チウ-周 (4)州 (1)	2	5	チウ-霏 (3)	1	3	チウ-咒 (2)	1	2	
	照 (昌) [tʂ'-]	次清							チウ-臭 (1)	1	1	
牙音	審 (書) [ʃ-]	清	シウ-收 (5)	1	5	シウ-守 (7)手 25(24)首 (11)ジウ-手 25(1)	3	43				
	禪 [ʒ-]	濁	ヂウ-讐 3(2)チウ-讐 3(1)	1	3	ジウ-受 ①13(12)壽 ①(1)シウ-受 13(1)	2	14	ジウ-壽 ②(1)授 (1)	1	1	
牙音	見 [k-]	清	キウ-鳩 (2)	1	2	キウ-久 10(9)九 (3)菴 (1)クウ-久 10(1)	3	14	キウ-救 11(10)クウ-救 11(1)	1	11	
	溪 [k'-]	次清	キウ-蚯 (1)	1	1							
牙音	群 [g-]	濁	ギウ-仇 (2)求 (2)毬 (4)鯨 (1)	4	9	ギウ-臼 (1)舅 (2)	2	3	ギウ-舊 (8)	1	8	
	疑 [ŋ-]	次濁	ニウ-牛 (11)	1	11							
喉音	影 [ʔ-]	清	ユウ-憂 (7)	1	7							
	曉 [h-]	次清	ヒウ-休 (38)	1	38				シウ-守 ②(7)首 ②(11)收 ②(5)			
半舌音	于 [y-]	次濁				ユウ-右 ①(3)友 (7)有 (155)鮪 (1)	4	166	ユウ-右 ②(3)又 (5)	1	5	
	羊 [j-]	次濁	ユウ-油 ①(3)由 (11)游 (2)遊 (4)猶 ①(2)蚰 (1)汶 (1)	7	24				ユウ-油 ②(3)柚 ①(1)猶 ②(2)	1	1	
半齒音	来 [l-]	次濁	リウ-流 (10)留 ①(12)榴 (1)	3	23	リウ-柳 (2)琉 (1)	2	3	リウ-留 ②(12)			
半齒音	日 [ɳz-]	次濁	ジウ-柔 (2)	1	2							
計				43	190		25	316		18	76	

注：・「テ○ウ-丟 (4)」は、『広韻』に未収。『康熙字典』に「[篇海]丁羞切 揚子方言 一去不還也俗作丟非」との説明があり、本研究では端母流撰の読みで扱う。
 ・「ユウ-汶 (1)」は、既に第三章第四節で述べたように、平声点が付され、「ユウ」音注は「ㄩ ㄨ」の「夷周切 説文行水也徐錯白支入水所杖也又姓」と一致している。つまり、「ユウ」は「汶」を注するものではなく、「ㄩ ㄨ」という字の発音である。
 ・「ユウ-鮪 (1)」は、『広韻』に止撰の「榮美切」で、音注と対応できず、『集韻』に流撰の「云九切」もあり、一致する。
 ・「スヤウ-羞 7(1)」は、「シユウ」による誤記。
 ・「スエ ウ-搜 7(1)」は、「○」の記入漏れ。
 ・「覆-へ○ウ 2(1)」は軽唇音非組の部分で検討したように、「敷救切」と対応し、もう一種類の「ホ」音注は「芳福切」と一致している。
 ・「フウ-復 3(1)」は流撰去声「扶富切」、もう一種類の音注「ホ」は通撰入声「房六切」と対応している。
 ・「就」は從母の部分で検討したように、「ヅエウ」は「ヅユン」による誤記である。
 ・「羞-スユウ 7(6)」（「小曲」2例）スヤウ 7(1)は「息流切」で、原例は下記のようにになっている。
 「スヤウ」:「二字話」③羞慚^{スヤウ} 「スユウ」:「二字話」①怕羞^{スユウ} ②害羞^{スユウ} ④羞耻^{スユウ} ⑤羞辱^{スユウ}
 「スヤウ」は示す主母音は[a]となり、読みと一致しない。「スヤウ」は誤記と考えられる。

第二節 本章のまとめ

第一節で整理している各摂について、本節で韻類面の音韻的特徴をまとめる。

2.1 韻類面の対応関係のまとめ

まず、韻類の各摂について、第一節で整理した音注と方言との対応関係を以下のように整理する。

(1) 通摂

陽声韻の場合、一等と三等の唇音、歯頭音、牙音(見・溪)母の字は「-オン」、それ以外の三等の字は「-ヨン」となるのが一般的である。「-オン」「-ヨン」は南京音と呉方言との双方に対応している。

入声韻の場合、一等と三等の唇音、歯頭音、半舌音来母の字は「オ段」、それ以外の三等の字は「-ヨ」となっている。「-オ」「-ヨ」は陽声韻と同じ主母音[o]をもつ蘇州・杭州音と一致している。

(2) 江摂

陽声韻の場合、重唇音の字は「-アン」、それ以外「-ヤン」となるのが一般的である。「-アン」は両方言に対応し、「-ヤン」は杭州音から説明できる。

入声韻の場合、重唇音、溪・影母の字は「オ段」、それ以外は「-ヨ」となるのが一般であり、「オ段」「-ヨ」は両方言から説明できる。また、「覺角」2字に対する「-ヤ」も存在し、杭州音から説明できる。

(3) 宕摂

陽声韻の場合、開口一等の字は「-アン」、三等の字は「-ヤン」となるのが一般的で、両方言から説明できる。合口三等の軽唇音の一部の字にする「ハ^oン・バン」は杭州音から説明でき、それ以外の合口の一・三等の字は「-ハン」「ワン」となり、両方言と対応している。

入声韻の場合、一等の字は開口・合口を問わず、「オ段」となるのが一般的で、南京音と呉方言との双方に対応する。三等の字は軽唇音が「オ段」、それ以外「-ヤ」となるのが一般的で、杭州音と一致している。「ジヨ-若」1例は

例外である。

(4) 臻 撮

陽声韻の場合、開口一等の字は「-エン」、三等の字は「-イン」であり、いずれも両方言に対応している。三等の「襯-ツワン」は例外である。

合口一等の字は、明母以外の重唇音の字が「-エン」、明母(「モ(モ°)ン」)、舌頭音、齒頭音、喉音、半舌音の字が「-ワン」、牙音が「クン」であり、音注は杭州音に最も対応している。

合口三等の字は、軽唇音の場合、非・敷母が「フン」、奉・微母が「ウエン」となり、清・濁の対立を区別し、呉方言の特徴と反映している。舌頭音、正齒音、牙音、喉音の于・羊母の字は「-ユン」で、齒頭音心母、喉音曉母、半舌音來母の字は「-ワン」となり、介音[y]と[u]との区別を示し、杭州音と対応している。「鶻-ウワン」は例外で、両方言から説明できない。

入声韻の場合、合口一等の字は「オ段」となるのが一般的であり、杭州音と最も一致している。「突-テ」は例外で、声母の面では濁点の記入漏れの可能性が高く、韻母の面では蘇州音から説明できる。

開口三等の字は、質(櫛)韻の場合、齒頭音と齒上音の字が「-エ」、それ以外は「イ段」となっている。両音注は杭州音の特徴に近い。術韻の場合、「-エ」が多く見られ、正齒音の例が「-ユ」であり、物韻の場合、術韻の場合と同じ、「-エ」が多く見られる一方、軽唇音の「-ヲ」(「オ段」)もあり、音注は主母音[a]を有する呉方言の特徴に近い。「不-プ」は南京音と対応する例である。

(5) 深 撮

陽声韻の場合、「-イン」の音注となるは一般的であり、南京音と杭州音との双方に対応する。齒上音の「參-スエン」は呉方言に対応する。

入声韻の場合、齒頭音は「-エ」、それ以外「イ段」である。「-エ」「イ段」の二種類の音注は杭州音から説明できる。「ヒエ-吸」は南部呉方言から説明できる。

(6) 山 撮

陽声韻の場合、開口の字に対して、一等は「-アン」、二等は幫母、舌上音、

齒上音の字が「-アン」、並母(「辨-ベン」、牙・喉音の字が「-エン」、三・四等は「-エン」となり、杭州音と対応している。

合口の字一・二等の場合、重唇音の字が「ハン」「ハ[°]ン」「マン」「マアン」となり、それ以外の場合は「-ワン」「(ウ段・オ段)+ハン」の音注となっている。

合口字三・四等の場合、軽唇音が「ハン」「ワン」、牙疑母、喉音の字が「エ^ユン」となり、それ以外「-エン」である。音注は杭州音に対応している。喉音の「宛-ワン」が説明できない。

入声韻の場合、開口一・二等は「ア段」となり、呉方言から説明できる。三・四等は舌上音、牙音の字が「イ段」の音注となり、それ以外が「-エ」「エ段」であり、呉方言の特徴に近い。

合口一等の「ホ[°]-鉢」と舌頭音(「ト」)の字が「オ段」、重唇音(「鉢」以外)の字が「ハ[°]・ハ」、一・二等の「クハ」「ワ」「ウヲ」となる牙・喉音の例はともに杭州音の特徴と対応する。

合口三・四等の字は、軽唇音が「ハ」「ワ」、娘母が「ナ」で、それ以外が「-エ」の音注となり、杭州音に最も一致している。

(7)咸摂

陽声韻の場合、開口二等牙・喉音、半舌音が「-エン」、それ以外の一・二等の字は「-アン」、開口三・四等が「-エン」、南京音と杭州音との双方に対応する。合口三等(軽唇音)は「ハン」「ワン」となり、杭州音の特徴を反映している。

入声韻の場合、開口一等の字は「ア段」となり、二等は齒上音の字も「ア段」、牙・喉音の字が「-ヤ」である。音注は全体的に杭州音に近い。三等の開口の字が「-エ」となり、合口の字(軽唇音)が「ハ」「ワ」である。四等は舌頭音が「エ段」、それ以外は「-ヤ」となっている。三・四等の字に対する音注は杭州音に近い。

(8)梗摂

陽声韻の場合、開口二等は重唇音が「モン」、喉音が「-イン」、それ以外は「-エン」となり、両方言から説明できる。開口三・四等は「-イン」で統一され、

主母音 [i] を有する両方言とも一致している。

合口二等の喉音字は「ホン」で、合口三等は喉音(曉・于母)の字と四等の喉音(匣母)の字が「-ヨン」、それ以外の三等(牙音溪母、喉音羊母、半舌音來母)の字が「-イン」である。音注のいずれ、両方言と対応する。

入声韻の場合、開口二等の明母が「モ・モ[°]」、明母以外の重唇音が「へ[°]・べ」となり、舌上音・齒上音・牙音が「-エ」、喉音が「オ段」の音注である。音注は南京音と蘇州音から説明できる。

開口三・四等は重唇音(明母を除き)、舌上音、正齒音、牙音(疑母を除き)、喉音は「イ段」の音注となり、それ以外は「-エ」の音注である。音注は全体的に杭州音に近い。

(9) 曾 撮

陽声韻の場合、開口一等の重唇音の「-オン」以外、「-エン」となり、主母音 [ə] をもつ両方言から説明できる。三等が「-イン」で統一され、両方言からも説明できる。

入声韻の場合、開口一等は明母が「モ[°]・モ」で、それ以外「-エ」(「エ段」)となり、両方言から説明できる。合口一等は「-ヲ」となり、蘇州音と杭州音に対応している。開口三等は齒頭音、齒上音の字が「-エ」、それ以外の場合「イ段」となり、音注は杭州音から説明できる。

(10) 止 撮

開口の子は、重唇音、舌頭音、舌上音娘母、牙・喉音、半舌音の場合、「-イ」の音注となり、それ以外の場合、「-ウ」(「ウゝ」を含む)の音注である。音注は最も杭州音に最も近い。

合口三等の字は、羊母以外の喉音が「オ段+イ」、舌上・齒頭・正齒音の一部と半齒音が「-ユイ」、それ以外の場合主に「ウ段+イ」の音注となっている。音注は南京音と杭州音から説明できる。

(11) 遇 撮

一等の子は、明母以外の唇音、牙・喉音は「ウ段+ウ」「-ウゝ」音注となり、それ以外の場合「オ段+ウ」「-ヲゝ」となり、三等の子は、軽唇音が「ウ段+ウ」

(「-ウゝ」を含む)、齒上音が「オ段+ウ」(「-ヲゝ」を含む)となり、それ以外、「-ユイ」音注となっている。音注は全体的に杭州音に近い。

(12)蟹摂

開口一等は、重唇音が「オ段+イ」で、それ以外「ア段+イ」となり、二等は重唇音、舌上音、齒上音の字が「ア段+イ」、牙・喉音の字が「-ヤイ」である。音注は南京音と杭州音との双方に対応する。

開口三・四等は、齒頭音は心母以外が「-ユイ」、心母が「-エゝ」となり、両方言と対応しない。泥母以外の舌頭音の字は「テイ・デイ」で、それ以外の場合が「イ段+イ」であり、両方言から説明できる。

合口一等は、牙音の見・溪・疑母の字に音注の「クハイ」「ワイ」があり、それ以外の場合、「ウ段+イ」「オ段+イ」となり、音注は杭州音と対応している。

合口二等は、唇音が「パイ」「マイ」、唇音以外が「ワイ」「クハイ」と「ハアゝ」「ワアゝ」の音注であり、南京音と杭州音との双方から説明できる。

合口三・四等は「ウ段+イ」「オ段+イ」となり、南京音と杭州音から説明できる。

(13)果摂

開口一等は舌頭音が「オ段+ウ」「-アゝ」との二種類の音注となり、それ以外、齒頭音が「-ヲゝ」で、牙・喉音、半舌音の場合が「オ段+ウ」である。音注は南京音と吳方言との双方から説明できる。

合口一等は心母が「-ヲゝ」で、それ以外、「オ段+ウ」となっている。音注は南京音と杭州音との双方から説明できる。

このように、果摂の字に対する音注は一つの方言から説明できず、全体的に杭州音との対応が多い。

(14)仮摂

開口二等は、牙音、喉音匣母が「イ段+ヤア」「-ヤアゝ」で、それ以外は「ア段+アゝ」となり、南京音と杭州音との双方に対応している。開口三等は「-エゝ」で統一され、杭州音と一致している。

合口二等は「クハア」「ワアゝ」「ハアゝ」で、南京音と杭州音から説明できる。

(15) 効摂

一等の字は「ア段 + ○ + ウ」に統一されている。二等の字は重唇音の字、舌上音の「棹 鑊 鬧」、齒上音の「爪」の場合が直音の「ア段 + ○ + ウ」、舌上音の知組の「嘲」、齒上音 莊組の「稍稍 掣、炒 鈔」と「拗」以外の牙・喉音の場合は三・四等の字と同じ、拗音の「-ヤ○ウ」となっている。

説明できない「稍稍 掣 拗」3 字以外、効摂の音注は呉方言の特徴を反映している。「炒 鈔 - チヤ○ウ」は南京音の要素の混入例である。

(16) 流摂

一等の字は「エ段 + ○ + ウ」で統一されている。三等の字は、唇音、一部の軽唇音、舌頭音、齒上音が一等の字と同じ、「エ段 + ○ + ウ」であり、もう一部の軽唇音が「ウ段 + ウ」「ウ、」となり、齒頭音、曉母以外の喉音が「-ユイ」で、これらの場合以外、「イ段 + ウ」となっている。

「-ユイ」の例は両方言から説明できず、それ以外の場合は南京音と杭州音との双方に対応する。

このように、韻母面において、音注に見られる音韻的特徴について、声母面の特徴を考慮せず、南京音と呉方言との双方から説明できない僅かの一部の音注現象を除き、一部の場合は南京音と杭州音との双方と対応でき、それ以外の場合は杭州音と一致しているという結果である。ここで、声母面の清濁の対立を有する特徴を併せて、南京音とも対応する部分が説明できなくなる。このように、韻母面では、全体的に杭州音の特徴を反映している。

2.2 未解決の問題点との関連

韻母面では、先行研究に見られる問題について、本研究の考察を通して、以下のようにまとめることができる。

(1) 止撮開口の歯音について

声母面で検討したように、知・精・莊・章四組の非止撮の字に対する音注は呉方言の特徴と対応する。知・莊両組の字に対する音注に二等韻と三等韻の書き分けが見られる。

止撮の字は非止撮と異なり、声母を問わず、「ツ・ヅ」「ス・ズ」音注に統一されているのは、杭州音の特徴を反映している。開口の字に対して、「-ウ」となることは止撮に[tʂ]組の発音が存在せず、[ts]組と合流したことを反映している。また、対応する杭州音では舌尖前母音 [ɿ] という韻母であるため、「-ウ」と記されていた。

先行研究では謝氏は音注の現象を挙げているが、なぜ知・莊母両組の書き分け及び止撮の音注に書き分けが見られない理由について説明していない。本研究では分析した上、理由を与えた。

また、止撮開口の字が「-ウ」で統一された理由について、先行研究において、高松(1985a)は呉方言では精組と知照組に違いがないからで、[ɿ]・[ʊ]の対立の有無によって「ツウ・ヅウ」「スウ・ズウ」と「チイ・ヂイ」との区別が現れるとしている。対応する杭州音に[ʊ]がないため、理由の説明は問題がないが、高松氏は現代呉語を比較対照としているため、根本的原因は[ʊ]の有無の問題のではなく、反映された原音の声母に章組と精組との対立(つまり[tʂ]組の有無)である。『唐話纂要』に反映された原音に[ts]組と[tʂ]組の区別があるが、止撮の字にその区別がなくなり、[ts]組しかない。によって、止撮の声母が「ツ」と記され、舌尖前母音 [ɿ] に対して、聴覚面では音注が「ツウ・ヅウ」「スウ・ズウ」となる。

高松(1985a)は「-ウ」を『唐話纂要』の呉方言の混入要素として捉えられているが、本研究の考察をとして、同書の基礎音系は杭州音に最も近いため、こうした現象は混入要素でなく、明らかに呉方言の特徴の現れの一つである。また、述べてきたように、「-イ」は北部呉方言から説明できる。

(2) 覺・藥両韻について

江撮覺韻と宕撮藥韻の字に対する音注について、先行研究において、高松(1985a)は同書の「-ヤ」の音注は吳方言の混入要素として捉えている。

本章の1.2と1.3で検討したように、藥韻所属の「ジヨ-若」1例のみ説明できない以外、覺韻の字が「-ヨ」、藥韻の字が「-ヤ」となるのが一般的であり、はっきり区別している。こうした現象は混入要素でなく、上述した止撮開口の齒音の音注と同じ、吳方言(杭州音)の特徴の現れの一つでもある。

(3) 蟹撮四等韻の二種類表記について

先行研究において、中村(2015b)と謝(2016)は、齒音の蟹撮四等の字に対して、「-エ」の音注となる心母の「細-スエ、」 「西-スエ、」を挙げている。中村氏はこうした現象を長崎に住む唐人の官話音にある杭州音の混入要素であると説明している。

蟹撮の場合、前述したように、こうした例は齒頭音心母のみに現れ、蟹撮四等全体的な現象でないことを明らかにした。音注の特徴は南京音と杭州音から説明できず、南部吳方言との対応が存在している。つまり、吳方言の特徴であることは間違いないのである。既に明らかにしたように、同書の音注は最も杭州音に近いとため、こうした音注現象は中村(2015)による杭州音の混入要素でないことが分かった。

第六章

「小曲」音注の音韻的特徴

第四章と第五章で文体の異なる巻五の「小曲」に対する音注は他の部分と比べて、顕著な違いが見られるため、別途検討することが必要であると述べていた。本章では、そうした「小曲」の部分の音注に対する検討を通して、それに反映された音韻面の特徴を解明したい。

第一節 「小曲」について

1.1「小曲」の内容

『唐話纂要』の巻五には意味によって分類された語句の他、「小曲」が 10 曲収められている。同書では、ほぼ全項目にわたって中国語に対応した日本語の訳が付されているが、「小曲」の部分のみ全く訳がついていない。「小曲」について、『中国曲学大辞典』(1997:5-7)に、下記の説明がある。

小曲是曲的一种门类,一般指明清时代南北曲以外的各种民间歌曲。小曲的“小”,与结构规模上的大小无关,是指它的曲调形式较为简单而已。小曲在民间的俗称很多,如俗曲、俚曲、市井小令、时调、清曲等。(p.5)

与其他韵文相比,小曲最为流动多变。明清两代的小曲贴近民众生活,而中国幅员辽阔地形地貌多样,人口众多,历史悠久,在历史的进程过程中,形成了具有鲜明地域色彩的音乐和其他艺术样式。小曲的流变,正是各地民俗、各地音乐以及各地区民众不同的审美观念熏染的结果。(p.6)

即ち、「小曲」は、中国の「曲」に属する俗曲などとも呼ばれる大衆的な歌曲である。他の韻文に比べ「小曲」は移動性と多変性をもち、顕著な地域色を有する。

表 6-1 「小曲」の内容の統計

類別	項目数	漢字使用数
青山	13	52
崔鶯	13	70
張君	14	74
桃花	16	59
一愛	11	62
一更	12	52
二更	11	52
三更	14	60
四更	11	50
五更	22	94
合計	137	625

『唐話纂要』の「小曲」は「青山・崔鶯・張君・桃花・一愛・一更・二更・三更・四更・五更」の 10 曲であり、これらのタイトルは各曲の最初の二文字を取ったものである。字種別では計 285 字種、延べ 625 字の漢字が使われている。表 6-1 は添付資料 1 の「(3)小曲」の内容の集計表である。

具体的内容について、下記のようにになっている。

「青山」

青山在。綠水在。我那情人的不在。風常來。雨常來。我那音信的不來。春去。愁不去。花開。悶不得開。珠泪兒滴。汪洋了冤家。泪滿得東洋海。

「崔鶯」

崔鶯鶯。訪紅娘。我有問上一個詳細。街坊上。許多人。講我的是非。是何人。造下了我有這本的西廂戲。艸橋驚夢何曾有。月下佳期在那裡。何人叫做張生了紅娘。那個跳在我花園裏。

「張君」

張君瑞。訪故友。遊學得散悶。往蒲東。訪杜曲。白馬將軍偶遊到。普救寺武則天娘娘的建造。大雄寶殿。高六丈。鍾鼓樓臺台高又高。久聞得那寶刹潔淨。有有一位高僧老師臺。借居西廂。閑遊戲耍。

「桃花」

桃花紅。李花白。春光得明媚。玉蘭花。紫荊花。杏奪得春占。牡丹花。芍藥花。香同的蘭蕙。西府。飛紅雨。滿架的。綻薔薇。蓼粟的那花開了。花開。萱艸兒含金嘴。

「一愛」

一愛你。二愛你聰明的伶俐。三愛你。四愛你人物的嫵致。五愛你。六愛你一團的和氣。七愛你的年紀少。八愛你的做夫妻。九愛你的温存。哥哥的十。十兒愛着你。

「一更」

一更裡天。一更裡天。月照紗窗。人也未眠。被襖兒。寒凍得渾身上腫。我的肝肝。我的心肝。何處貪花。撇下了我。撇下了我。你在花街上闖。

「二更」

二更裡多。二更裡多。思想冤家。睡也睡不着。睡不着只在牙床上坐。我的心肝。我的肝肝。何處貪花。別下了奴。別下了奴。你在別人家坐。

「三更」

三更裡憂。三更裡憂。思想冤家。無盡休。冷眼兒。去叫奴難禁受。我的肉肉。我的親肉。你又腴腆。奴又害羞。羞殺了人。我的心肝上肉。悶殺了人。我的心肝上肉。

「四更」

四更裡催。四更裡催。月照天邊。孤鴈兒飛。鴈南兒教奴雙垂泪。狠心的賊。負心的賊。你有差池。教奴靠著誰。靠著誰。你在別人家睡。

「五更」

五更裡罷。五更裡罷。大胆喬才。不見來家。不來家你就喇天話。等他來家。絲帶兒捆。汗巾兒繫。棒槌兒槌。還將華鞋兒壓。打著問他。問著打他。先有了我。後有了他。這般樣打。你就怕不怕。敲罷了鼓。撞罷了鍾。忽聽門前。叫小名。喚小名。奴就慢答應。

「崔鶯」「張君」は對唱の形であり、周知のように、「西廂記」の内容である。それ以外、『唐音和解』(1716年・岡島冠山)、『崎陽熙子先生華學圈套』(江戸中期(1651～1745)・編著者不詳)、『和唐珍解』(唐来参和く天明五年1785刊)・康熙五十年(1711)跋)の三つの資料から確認できる。

まず、長澤(1973)による解題の『唐音和解』二卷(『唐話辞書類集』(第八集)所収)下冊「唐音和解音曲笛譜」に「笛譜」7曲と「樂調」2曲が収録され、その内容は下記のようになっている。

笛譜の曲詞:「相思曲」「劈破玉」「百花香」「清平樂」
「太平樂」「十三省」「醉胡蝶」

樂調の曲詞:「秋風辞」「陽關三重曲」

曲詞の後に各曲の「笛譜」(譜面)が付いている「相思曲」「劈破玉」「百花香」「醉胡蝶」の曲詞は以下の通りとなっている。

「相思曲」青山在。緑水在。情人不曾在。風常來。雨常來。書信不曾來。春去愁不去。花開悶不得開。珠淚落的浣了。浣了冤家。涕滿個東洋海。

「劈破玉」一愛你二愛你。聰明伶俐。三愛你四愛你。人物嫵致。五愛你六愛你。一團和氣。七愛你的年紀少。八愛你做夫妻。九愛你温存。闖了哥々。十々兒愛着你。

「百花香」桃花紅。李花白。春光明媚。牡丹花。芍藥花。勻奪春占。玉蘭花。紫金花。香同蘭麝。西府飛紅雨。滿架綻菖薇。蓼栗花。開開了花開。萱艸含金嘴。

「醉胡蝶」一更裡天。一更裡天。月照紗窗人未眠。被襖兒。寒凍得我。渾身上戰。我的肝々。我的心肝。何處探花。弊下了俺。弊下了俺。你在花街上闖。(同曲第二調)二更裡憂。二更裡憂。你有個儂。奴有害羞。羞殺了人。我的心肝上肉。我的肉々我的親肉。何處探花。弊下了奴。弊下了奴。你在別人家坐。(pp.141-168)

『唐話纂要』の「小曲」と比較してみると、言葉の修辞に多少の相違が存在しているが、内容はほぼ同じであり、その中、「醉胡蝶」の「第二調」の曲詞は、文頭が「二更」となっているが、実際は「三更」と「二更」の内容を混ぜたもので、前半は「三更」の一部、後半は「二更」の一部から成り立っている。このように、確認した結果として、同書の「小曲」との関係は以下となる。

「相思曲」=「青山」
「劈破玉」=「一愛」

「百花香」=「桃花」
「醉胡蝶」=「一更」「二更・三更」

また、長澤(1973)の解題による『唐話辞書類集』(第十八集)にある『崎陽熙子先生華學圈套』第八末回の曲詞「小曲玲瓏」に、「一更」～「五更」の存在を確認することができ、具体的な内容は以下のようになっている。

「○小曲玲瓏」一更裡天々月照紗窗人那未眠被窩兒寒那凍得我渾身上戰我的肝肝我的心肝何處貪花撇下了俺撇下了俺那你在花街上闖

「○二更」二更裡¹⁴⁵多々思想冤家睡又睡不着睡不着你在牙牀上坐我的哥哥我的親哥何處貪花撇下了奴撇下了奴你在別人家坐

「○三更」三更裡¹⁴⁶憂々思想冤家無尽了休冷眼兒去也教奴難禁受我的肉々我的親肉你又腩腆奴又害羞羞殺了人那我的心肝上肉悶殺了人那我的心肝上肉

「○四更」四更裡¹⁴⁷催々月照天邊孤鴈兒飛鴈南兒去也教奴双垂淚很心的賊負心的賊你有差池教奴靠着誰靠着誰也在別人家睡

「五更」五更裡¹⁴⁸發。々大胆喬才不肯來家不肯來家你拉天話等他來家等他回家絲帶兒捆汗巾兒扎板搥兒搥也。還將花鞋兒壓打着問他問着打他先有子^{ママ}¹⁴⁹我後有了他這般樣打你有還不怕敲罷了鼓撞罷了鍾忽聽得門前叫小名叫小名奴只得忙答應々 (pp.15-24)

その日本語訳は同書の「第十酉回」に「譯文示蒙 訳小曲玉玲瓏文」として収められ、訳文の前に、以下のような説明が付されている。

夫レ中華ノ謡モノニハ歌行詠頌ノ四品アリ是ノ外秋風天馬賦清夜吟塞下曲皆唱テ琴ニ彈シ瑟ニ調ベ洞簫ニ吹横笛ニ和ス小謡ヲ小曲と云此玉玲瓏ハ舊キ小曲之間漢尋常白壁青樓ニ去テ色ニ貪リ酒ニ泥ミ肯テ家ニ回ラザルヲ渾家埋怨メ謡ヘリト作リタル婉曲ナリ聲音鄭謡琴ニ彈シ笛ニ吹き甚タ是趣キアリ(pp.57-58)

ここから、『唐話纂要』の「小曲」に属する「一更」から「五更」までの内容が『崎

¹⁴⁵原字が[ネ由]で、音注が「リイ」である。

¹⁴⁶同上。

¹⁴⁷同上。

¹⁴⁸同上。

¹⁴⁹「子」の音注は「リヤアウ」であるため、「了」による誤記と考えられる。

陽熙『子先生華學圈套』に所記された「小曲玲瓏」とは殆ど同じであることが分かった。また、訳文のタイトル「譯文示蒙 訳小曲玉玲瓏」から、これらの内容は「小曲」の出所は「玉玲瓏」¹⁵⁰という曲となることが推測できる。なお、『崎陽熙『子先生華學圈套』の編著者と編著年は不詳であるため、これらの「小曲」の内容の詳細な出所を判断するのは難しいと考えられる。

上記から、10曲の「小曲」は、「崔鶯」と「張君」を除き、多くは笛譜の曲詞であり、それぞれの曲名は以下のようになっていることが明らかになった。

「青山」⇒「相思曲」
「桃花」⇒「百花香」
「一愛」⇒「劈破玉」
「一更」～「五更」⇒「醉胡蝶」(『唐音和解』)
「玉玲瓏」(『崎陽熙『子先生華學圈套』)

『唐音和解』には「一更」および「二更」と「三更」の内容を混ぜた部分しか載っていないが、「四更」・「五更」も笛譜の曲詞であると考えられる。「一更」～「五更」の曲名について、『唐音和解』と『崎陽熙『子先生華學圈套』とで異なっているが、本研究による調査では、「醉胡蝶」と「玉玲瓏」のどちらが正しいかが判明するに至らない。

上記の他、明人の李蹈天と通詞の和田藤内などとの会話による『和唐珍解』にも、「唐の唄」¹⁵¹として「一更」の内容が見られる。

一更裡天。一更裡天。月照紗窗。人也未眠。被襖兒。寒凍得渾身上腫。我的肝肝。我的心肝。何處貪花。撇下了我。撇下了我。你在花街上闖。
(唐来参和(1785)『和唐珍解』)

浅井(1933:6-9)は『松の葉』所収「唐人踊」の内容を『唐音和解』及び『唐話纂要』にある「一更」の「一更裡天。月照紗窗。」の内容と対比し、「「いきにて」の『唐人踊』の歌詞が「一更裡天」から轉化してもの(p.8)」と指摘し、『唐音和解』、『唐話纂要』と「唐人踊」との一派の関連について、以下のように述べて

¹⁵⁰ 本研究による調査の限り、劉争義[編](1990)による『戲考大全』に「玉玲瓏」という曲目があるが、内容は『唐話纂要』の「小曲」の内容と全く一致しないため、同じ曲ではないと考えられる。

¹⁵¹ 「唐人唄」、つまり「唐人歌」である。「唐人歌」について、藤田(1931)は、『松の落葉』所収「唐人踊」に対して、以下のように註を付けている。

唐人踊、此類の最も古きものは、狂言茶盃拜の唐人歌なるべし。(二)いきにて、一更裡天(いいきんりいてん)紗窗(あさあつあん)(唐音和解、醉胡蝶)による。(p.106)

いる。

思ふに正徳、享保兩時代は支那俗文學の研究極めて盛で、或は無名氏の「唐音和解」出で、或は冠山の「唐話纂要」其他の諸著世に現れ、支那俗謡を前書には八篇を収録し、後書には十篇を収録し、何れも此に唐音を振付し、前書にはその奏法として自己の創案に係る笛符を併記し世の好事者連に供してゐる。(p.9)

「唐人唄」と呼ばれる「一更」などは一体いつ頃から日本に入ったのか、現段階ではまだ判明できないが、江戸時代にこうした俗謡が広く流行っていたと考えられる。

このように、こうした「唐人唄」の詳細な出典を明確にすることができていないため、同書の「小曲」の音韻的特徴を伝来のルートを通して確認することが不可能である。しかし、他の部分の同じ中国語の発音は仮名で記されているため、その仮名音注を通してある程度知ることができる。なお、本研究では音韻的特徴という視点から、反映された原音を探し求めるために少しでも手掛かりを提供してみたい。

1.2 先行研究と問題の所在

「小曲」の音注に関する先行研究として、長澤(1972)と森(1991)がある。

長澤(1972)は「小曲」を含む前五巻の音注について、「江南音」として説明している。既に検討したように、氏のいう「江南音」は、「南京官話音」と推測できる。「小曲」についてのその具体的な指摘が下記の通りである。

…巻五は類書の如き内容分類の語彙を列し、末に時調(流行歌)に江南音を旁注して収め、最後に又、織物に關する語彙に發音譯語を加へてある。

ここでは、「小曲」の音注を他の部分と同じ「江南音」であるとしている。

一方、森(1991)は「小曲」の部分の音注の基礎方言が他の部分と違うことを主張し、次のように述べている。

…しかし実際には、この『唐話纂要』の巻五所収の「小曲」の付音は、②の中州音(歌曲の音に用いられるもの)の特徴とほぼ符合するのである(ただし、この「小曲」の付音には「愁」を「ヅエ〇ウ」とするなど、杭州音が一部混入しており、純粋な中州音^まとはいえない)。…(p.14)

ここで、「小曲」の基礎方言は第一章第四節で述べた無相文雄が『三音正譌』(1752年)に挙げた官話の中の「不立入声不立濁声唯平上去唯清音者」という特徴をもつ中州音¹⁵²であるとしている。このように、森(1991)は「小曲」が官話系方言の音韻特徴を有することを明らかに指摘している。しかし、どのように分析したのかについての説明はしていない。入声がないのは中州音の特徴だが、「小曲」の音注には入声明らかに存在している。これらのことから、「小曲」の音注に対する再検討が必要である。以下では、「小曲」の音注に対し詳細に調査した上、分析を経てその音韻的特徴を明らかにする。

分析に当たっては、同じ漢字に着目して、他の部分の音注との間に違いが

¹⁵² 『三音正譌』原文は「中州韻」である。文雄(1752)によると、具体的な記述は「其中原所用之音有二類。官話之與俗話也。俗話者平常言語音也。官話者讀書音此之用。其官話亦有二。一立四聲唯更全濁爲清音者是。一不立入聲不立濁聲唯平上去唯清音者。謂之中州韻用爲歌曲音。二種通稱中原雅音支那人以爲正音。其俗話者杭州音也。亦曰浙江音。」となる。「中州韻」について、神山・劉(2014)に「古代中國由於歷代建都於中州之地，使中州業已成爲中國政治、經濟、文化之中心。這裏的語言—中州之韻，自然以漢民族共同語的規範模式出現。…不過，戲曲中所遵守的中州韻，還是密切結合於流傳民間的“基礎方言”，“口傳心授”沿襲至今的。(pp.3-4)」と指摘があり、即ち、「中州韻」は広意的に「中国語の共通音」で、戯曲の「中州韻」は民間的な「基礎方言」即ち「地方方言」と考えられる。文雄による華音の分類からみると、森(1990)の「中州音」と「中州韻」は同じ広意的な「中国語の共通音」を指し、つまり官話音であることが分かる。

あるか否かによって、「小曲」の音注を整理し、大きく四つに分類する。[他の部分と全く異なるもの]を[I類]、[他の部分と部分的に一致するもの]を[II類]、[他の部分と同じもの]を[III類]、「小曲」にのみ存在する字]を[IV類]とする。なお、表の「延べ数」は当該漢字出現回数の延べ数、「小曲用例数」は当該漢字が「小曲」での出現回数、音注の直後の数字は対応する音注の回数、括弧付きの数字は音注の「延べ数(小曲用例数)」を示す。

第二節 「小曲」の仮名音注の実態と音韻的特徴

「小曲」に対して独特の音注がされた漢字は全濁・次濁声母に所属することが目立つが、「小曲」の全体の特徴を把握するには、以下では、「小曲」独特の表記から手をつけ、声母面と韻母面から、「小曲」の音注の音韻特徴を検討する。表 6-2 のように、他の内容の表記と異なるかどうかによって、「小曲」の内容を整理してきた。これらの字は計 36 字種、延べ 56 字で、主に濁音声母と次濁声母の字である。また、音注の違いは主に声母と韻母との両面に見られる。以下では、声母面と韻母面から、「小曲」の音注の音韻特徴を検討する。

表 6-2 「小曲」に見られる他の部分と異なる音注例

漢字	延べ数	他の部分の音注		小曲音注	音注区別の所在
橋	3	ギヤ〇ウ 2		キヤ〇ウ 1	声母
受	13	ジウ 12		シウ 1	
臺	6	ダイ 4		タイ 2	
床	4	ヂヤン 3		チヤン 1	
撞	3	ヂヤン 2		チヤン 1	
丈	10	ヂヤン 9		チヤン 1	
瑞	2	ヅイ 1		ツイ 1	
坐	25	ヅヲ 23		ツヲ 2	
存	2	ヅヲン 1		ツヲン 1	
詳	2	ヅヤン 1		ツヤン 1	
蓄	2	ヅヤン 1		ツヤン 1	
團	3	トハン 2		トハン 1	
才	7	ヅアイ 4	ツアイ 1 濁点記入漏れ	サ°イ 1	
在	46	ヅアイ 33	ツアイ 3 濁点省略 サイ 1 誤記	サ°イ 9	
造	8	ヅア〇ウ 6		サ°〇ウ 2	
綻	3	ヅアン 2		サ°ン 1	
棒	4	バン 2	ハン 1 濁点記入漏れ	ハ°ン 1	
被	4	ボイ 2 ビイ 1	文白異読によるもの	ヒ°イ 1	
蒲	3	ブウ 2		フ°ウ 1	
白	23	ベ 20	ヘ 1 濁点省略	ヘ° 2	
別	16	ベ 12		ヘ° 2	
睡	7	ジュイ 2	シユイ 1 濁点省略	スイ 4	
誰	9	ジュイ 6	シユイ 1 濁点省略	スイ 2	
池	3	ヅウ 1	ツウ 1 濁点省略	チイ 1	
芍	2	シヤ 1		シヨ 1	韻母
寒	6	ハアン 5		ハン 1	音注法の違い
汗	3	ハアン 2		ハン 1	
含	5	アン 4		ハン 1	
還	18	ワン 17		ハン 1	声母
杏	3	イン 2		ヒン 1	
牙	3	ヤア 2		イヤア 1	音注法の違い
玉	8	ヨ 7		イユイ 1	韻母
雄	5	ヨン 4		ヒヨン 1	声母
藥	13	ヤ 12		ヨ 1	韻母
六	6	ロ 4		リウ 2	
喇	2	ラ 1		ヲ 1	誤記

2.1 声母面の違い

2.1.1 清濁の区別

2.1.1.1 匣・奉母以外の全濁声母の場合

まず、匣母以外の全濁声母の字の場合、「睡誰池芍」4字を含め、計50字種、延べ694字の使用例の中、「小曲」の用例数は90字であり、表6-3の通りである。その中、IV類「寺垂奪」3字はそれぞれ1例のみある。

表6-3から分かるように、I類～IV類のこれらの全濁声母の字について、「小曲」の音注は、「愁罷」2字以外、非濁音表記となっているのに対して、他の部分の音注は圧倒的に濁音音注である。つまり、清濁の区別ははっきりされている。

『唐話纂要』では匣母以外の全濁声母の字は圧倒的に濁音仮名で注され、清濁の対立を維持する呉方言の特徴を色濃く反映している。従って、「小曲」での非濁音音注は濁音声母が無声化していた官話系方言の特徴と対応している。即ち、「小曲」に対する清音音注は官話系方言の特徴を反映している。

特に、I類の字の内、「在才造綻棒被蒲白別」は他の部分では濁音音注が圧倒的が多いが、「小曲」部分の音注に右肩点が付けられているのが一目を引いている。右肩点「°」の使用について、並母の字「棒被蒲」のそれぞれの1例、「白」の2例、「別」の4例に対する右肩点は全て巻五の「小曲」に集中して使われていることが確認された。また、從母の「才」「在」「造」3字と澄母の「綻」に対する右肩点の使用例の「才-サ°イ」1例、「在-サ°イ」9例、「造-サ°ウ」2例、「綻-サ°ン」1例も全て「小曲」のものである。第四章から分かるように、濁音声母の字に対して、圧倒的に濁音音注となるが、数の少ない清音音注の場合は、濁点が省略されたもの以外、濁点の記入漏れの可能性があるものも存在している。一方、同書のハ行の「°」は中国語の無声の両唇破裂音[p-][p'-]、「サ」に用いられている「°」は無声破擦音[ts-][ts'-]に対応している。こうして、「小曲」のに対する右肩点の使用は、濁音声母に対する清音音注にある濁点の省略或いは記入漏れの可能性が排除でき、即ち、「小曲」にある濁音声母の字に対する清音音注は確実に清音の読みと対応し、明らかに官話系方言の特徴を反映する証拠となっている。

また、森(1991)がとりあげている全濁の崇母字「愁」以外、濁音仮名で表記する「罷」も存在している。このように、「愁罷」2字は、例外として呉方言の特徴の混入例である。

表 6-3 「小曲」における(匣・奉母以外)濁音声母の字

分類	漢字	延べ数	他の部分の音注		小曲用例数	小曲の音注	南京音	呉方言
I	在	46	ツアイ 33	ツアイ 3 濁点省略 サイ 1 誤記	9	サ°イ	[ts-]	[dz-]
	才	7	ツアイ 4	ツアイ 1 濁点記入漏れ	1	サ°イ	[ts' -]	[dz-]
	造	8	ツア○ウ 6		2	サ°○ウ	[ts-]	[dz-]
	綻	3	ツアン 2		1	サ°ン	[tʂ-]	[dz-]
	棒	4	バン 2	ハン 1 濁点記入漏れ	1	ハ°ン	[p-]	[b-]
	被	4	ボイ 2 ビイ 1	文白異読によるもの	1	ヒ°イ	[p-]	[b-]
	蒲	3	ブウ 2		1	フ°ウ	[p' -]	[b-]
	白	23	ベ 20	ヘ 1 濁点省略	2	ヘ°	[p-]	[b-]
	別	16	ベ 12		4	ヘ°	[p-]	[b-]
	橋	3	ギヤ○ウ 2		1	キヤ○ウ	[k' -]	[g-]
	受	13	ジウ 12		1	シウ	[ʂ-]	[ʒ-]
	臺	6	ダイ 4		2	タイ	[t' -]	[d-]
	床	4	ヂヤン 3		1	チヤン	[tʂ' -]	[dʒ-]
	撞	3	ヂヤン 2		1	チヤン	[tʂ' -]	[dʒ-]
	丈	10	ヂヤン 9		1	チヤン	[tʂ-]	[dʒ-]
	瑞	2	ツイ 1		1	ツイ	[tʂ-]	[dʒ-]
	坐	25	ツヲ 23		2	ツヲ	[ts-]	[dz-]
	存	2	ツワン 1		1	ツワン	[ts' -]	[dz-]
	詳	2	ツヤン 1		1	ツヤン	[ts' -]	[dz-]
	蓄	2	ツヤン 1		1	ツヤン	[ts' -]	[dz-]
團	3	トハン 2		1	トハン	[t' -]	[d-]	
II	期	4	ギイ 2	キイ 1 濁点省略	1	キイ	[k' -]	[d-]
	十	24	ジ 1	シ 21 二種類音注が呉方言と対応	2	シ	[ʂ-]	[ʒ-]
	上	60	ジヤン 51	シヤン 2 濁点省略	7	シヤン	[s-]	[ʒ-]
	是	62	ズウ 56	スウ 4 濁点省略	2	スウ	[ʂ-]	[z-]
	大	115	ダア 102	タア 11 濁点省略	2	タア	[t-]	[d-]
	桃	4	ダ○ウ 2	タ○ウ 1 濁点省略	1	タ○ウ	[t' -]	[d-]
	常	16	ヂヤン 10	ツヤン 1 誤記 チヤン 3 濁点省略と記入漏れ	2	チヤン	[tʂ' -]	[dʒ-]
	情	21	ツイン 16	ツイン 4 濁点省略	1	ツイン	[ts' -]	[dz-]
	盡	12	ツイン 8	ツイン 3 濁点省略	1	ツイン	[ts-]	[dz-]
	就	16	ツユウ 10	ツユウ 2 濁点省略 ツエウ 1 誤記	3	ツユウ	[ts-]	[dz-]
	賊	11	ツエ 8	ツエ 1 濁点記入漏れ	2	ツエ	[ts-]	[dz-]
	前	25	ツエン 20	ツエン 3 濁点省略 ツユン 1 誤記	1	ツエン	[ts' -]	[dz-]
	曾	24	ツエン 21	ツエン 2 異なる読み	1	ツエン	[tʂ' -]	[dz-]
	愁	6	ツエ○ウ 4	ツエ○ウ 1 濁点記入漏れ	1	ツエ○ウ	[tʂ' -]	[dz-]
	杜	5	ドウ 3	トウ 1 濁点省略	1	トウ	[t-]	[d-]
	同	20	ドン 18	トン 1 濁点省略	1	トン	[t' -]	[d-]
	嫖	4	ピヤ○ウ 2	ヒ°ヤ○ウ 1 異なる読み	1	ヒ°ヤ○ウ	[p' -]	[b-]
	著	10	ヂヤ 2	チヤ 4 濁点省略と記入漏れ	4	チヤ	[tʂ-]	[dʒ-]
	着	24	ヂヤ 17	チヤ 4 濁点省略	3	チヤ 2 チョ 1	[tʂ-]	[dʒ-]
	III	淨	3	ツイン 2	ツイン 2 濁点記入漏れ	1	ツイン	[ts-]
罷		10	バア 6		4	バア	[p-]	[b-]
IV	寺	1	/		1	スウ	[s-]	[z-]
	垂	1	/		1	ツイ	[tʂ' -]	[dʒ-]
	奪	1	/		1	ト	[t-]	[d-]

匣・奉母以外の濁音声母の字について、「小曲」の音注を他の部分と比較した結果として、他の部分では濁音音注となる濁音声母の字は、「小曲」では非濁音の音注で記され、官話系方言の特徴を反映している。一方、森(1991)が取りあげた「愁-ツエ○ウ」以外、「小曲」で濁音の音注となり、呉方言

の音韻特徴を反映している表記例は「罷-バア\」などを指す可能性が大きい。

2.1.1.2 匣・奉母に対する音注の場合

匣母字について、表 6-4 の通りである。計 18 字種、延べ 283 字の使用例の中、「小曲」の用例数は 30 例で、IV類の字は「蕙」1 例のみである。

表 6-4 「小曲」における匣母の字

分類	漢字	延べ数	他の部分の音注	「小曲」用例数	「小曲」の音注	南京音	呉方言
I	寒	6	ハアン 5	1	ハン	[x-]	[ɦ-]
	汗	3	ハアン 2	1	ハン		
	含	5	アン 4	1	ハン		
	還	18	ワン 17	1	ハン		
	杏	3	イン 2	1	ヒン		
II	下	79	ヒヤア 72 ヒア\ 1	6	ヒヤア		
	害	8	ハイ 5 ハアイ 2	1	ハイ		
	話	25	ハア\ 20 ワア\ 4	1	ハア\		
III	學	13	ヒヨ 12	1	ヒヨ		
	繫	2	ヒイ 1	1	ヒイ		
	鞋	4	ヒヤイ 3	1	ヒヤイ		
	閑	13	ヒエン 12	1	ヒエン		
	後	32	へ○ウ 31	1	へ○ウ		
	何	41	ホウ 36	5	ホウ		
	和	14	ホウ 13	1	ホウ		
	紅	12	ホン 8	4	ホン		
	渾	4	ウワン	1	ウワン		
IV	蕙	1	/	1	ホイ		

注：・「寒汗」2 字に対する「ハアン」と「ハン」との二種類の音注は声母上の違いがなく、同じ発音を示す異なる音注法と考えられる。「害」に対する「ハイ」と「ハアイ」との二種類の音注も同様。

・「下」に対する「ヒヤア」と「ヒア\」との二種類は、同じ長呼型音注で、「ヒヤア」は介音 [i] を強調するものである。

・「話」に対する「ハア\」と「ワア\」との二種類の音注について、既に匣母で検討したように、「ハア\」は南京音と対応するもので、「ワア\」は蘇州音を反映するものである。

「渾-ウワン」以外の全ての字について、「小曲」の字に用いられる音注はハ行に統一されている。一方、他の部分では多くの場合もハ行だが、「含還杏」の 3 字は、アヤワ行の音注となっている。

『唐話纂要』では匣母の字に対する音注は主にアヤワ行とハ行との二種類に分けられる。アヤワ行の場合、匣母の字の多くは [ɦ-] が保留され、一部は脱落してゼロ声母になるという呉方言の音韻特徴を反映している。こうした変化を、日本語で表記する時、いずれの場合もアヤワ行の音注となる。これに対して、ハ行は全濁声母 [ɦ-] が無声化して [x-] に合流する官話系方言の特徴を反映している。こうして、表 6-2 の匣母の字は、「小曲」でも他の部分でも、殆ど官話系方言の特徴の現れであるが、「含還杏」3 字の場合、他の部分でのアヤワ行の音注は呉方言の特徴である。

「渾-ウワン」は、原例が下記の通りである。

他の部分の例：「二字話」^{ウワンチャン}渾章 フウドウモノ
「四字話」^{ウワンシンマアハモ}渾身麻木 惣身カシヒレル
「親族」^{ウワンキヤア}渾家 ナイギ
「小曲」の例：「一更」^{ハントンテウワンシンシヤンチヨン}寒凍得渾身上腫

『広韻』に匣母臻撮一等合口の「戸昆切 渾濁益部耆」(平声)、「胡本切 渾元」(上声)とある。「渾」の発音が唇音の性質に近い、合口の母音[u]の発音が強調され、「ウ」の音注となる。これは呉方言の濁音の読みが保存されているという特徴と対応する。

また、奉母の字について、使用例は「負-ウゝ」1字のみで、延べ6例の中、「小曲」に1例ある。

表 6-5 「小曲」における奉母の字

分類	漢字	延べ数	他の部分の音注	「小曲」用例数	「小曲」の音注	南京音	蘇州・杭州音
Ⅲ	負	6	ウゝ5	1	ウゝ	[həŋ]	[vu]

既に検討したように、同書の奉母所属字に対しては、音注に「夫-フウ」のようなハ行と「犯-ワン」のようなワ・ウ仮名との二種類のケースがある。全濁声母の無声化により奉母が非母と[f-]に合流していた官話系方言の特徴と対応しているのはハ行の音注である。一方、呉方言の蘇州・杭州音では全濁声母[v-]が保存され、音声的に[u]に近いいため、ワ・ウで表記されている。このように、「負-ウゝ」は呉方言の特徴と言わざるを得ない。

このように、匣母の字について、「小曲」のハ行の音注は官話系方言の特徴と対応している。これに対して、他の部分の「含還杏」3字のアヤワ行の音注は呉方言の特徴を反映している。一方、「渾-ウワン」は例外として、呉方言特徴の現れのものである。奉母「負-ウゝ」も呉方言の音韻特徴の現れである。

2.1.1.3 次濁声母に対する音注の場合

「小曲」における次濁声母の表記例は表 6-6 の通りである。計 64 字種、延べ 1,693 字の中、「小曲」に属するのは 194 字である。

表 6-6 「小曲」における次濁声母の字

分類	声母	漢字	延べ数	他の部分の音注	「小曲」用例数	「小曲」の音注
I	疑	牙	3	ヤアヽ(2)	1	イヤア
		玉	8	ヨ(7)	1	イユイ
	于	雄	5	ヨン(4)	1	ヒヨン
	羊	藥	13	ヤ(12)	1	ヨ
	来	六	6	ロ(4)	2	リウ
喇		2	ラ(1)	1	ラ	
II	疑	我	118	ゴウ(88)コウ(13)	17	ゴウ 15 コウ 2
	日	人	180	ジン(161)	10	ジン
		二	14	ルヽ(5)ルウ(6)	3	ルウ
	明	兒	120	ルヽ(5)ルウ(104)	11	ルウ
		馬	38	マアヽ(36)	1	マアヽ
		夢	4	モン(2)モ°ン(1)	1	モン
		門	20	モン(1)モ°ン(18)	1	モ°ン
III	疑	偶	3	ゲ○ウ	1	ゲ○ウ
		五	11	ウヽ	3	ウヽ
		眼	13	エン	1	エン
		鷹	3	エン	2	エン
		月	9	エ	3	エ
	日	肉	12	ジヨ	5	ジヨ
	于	位	3	ライ	1	ライ
		雨	8	イユイ	2	イユイ
		園	2	エユン	1	エユン
		又	5	ユウ	3	ユウ
		友	7	ユウ	1	ユウ
		有	155	ユウ	8	ユウ
	羊	也	40	エヽ	2	エヽ
		洋	3	ヤン	2	ヤン
		様	20	ヤン	1	ヤン
		遊	4	ユウ	3	ユウ
	来	綠	2	ロ	1	ロ
		李	6	ライ	1	ライ
		裏	3	ライ	1	ライ
		裡	40	ライ	11	ライ
		俐	3	ライ	2	ライ
		涙	6	ルイ	3	ルイ
		來	131	ライ	6	ライ
		蘭	6	ラン	2	ラン
		狼	3	ラン	1	レン
		老	28	ラ○ウ	1	ラ○ウ
		了	165	リヤ○ウ	14	リヤ○ウ
		冷	9	レン	1	レン
		樓	3	レ○ウ	1	レ○ウ
明	慢	9	マン	1	マン	
	滿	6	マアン	2	マアン	
	名	18	ミン	2	ミン	
	明	27	ミン	2	ミン	
	牡	3	メ○ウ	1	メ○ウ	
	悶	8	モ°ン	3	モ°ン	
微	未	35	ウイ	1	ウイ	
	薇	3	ウイ	1	ウイ	
	武	10	ウヽ	1	ウヽ	
	無	72	ウヽ	1	ウヽ	
	物	10	ウエ	1	ウエ	
	聞	12	ウエン	1	ウエン	
	問	23	ウエン	3	ウエン	
泥	奴	9	ノウ	7	ノウ	
	年	27	ネン	1	ネン	
	難	37	ナン	1	ナン	
	那	27	ナアヽ	6	ナアヽ	
娘	你	106	ニイ	17	ニイ	
	娘	14	ニヤン	4	ニヤン	
IV	明	媚	1	メイ	1	メイ
		膺	1	メン	1	メン
		眠	1	メン	1	メン

羊母字は 5 字種、計 80 字、「小曲」の用例数は 9 字である。I 類の「菓」以外の字に対する音注に相違が見られないため、声母上の検討はしない。「菓」に対する音注は声母でなく、韻母にあるため、後文で分析する。疑母の「玉」と来母の「六」も同様である。于母の字は 7 字種、計 185 字、「小曲」の用例数は 17 字で、I 類の「雄」以外、全てアヤワ行の音注となり、区別が見られない。于・羊母の字に対して、全てアヤワ行で表記されているため、ここでは方言の特徴と対応がはっきり見られない。

しかし、「雄」字に対する音注は他の部分と全く異なる。使用例は、下記の通りである。

「ヒヨン」:「小曲・張君」大雄寶殿 「ヨン」:「四字話」未分雌雄

官話系方言で于母の「雄-ヒヨン」は例外として、曉母の字と同じ、母音 [i][y] の前で声母が口蓋化して [ç-] と発音するが、当時はこの変化はまだ起きていないため、曉母 [h-] と同じハ行の音注となっている。こうして、「雄」のハ行の音注は明らかに官話系方言の特徴と対応している。

「ヲ-喇 2(1)」は、原例が「小曲・五更」の「不來家你就喇天話」と「器用」の「喇叭^{ラハ} ラハ」である。『明清吳語詞典』に「喇天」について、「拉天」の解釈に「又作“喇天”。自夸曰卖弄,亦曰喇天(p.362)」とあり、「自慢話をする」という意味である。同書では「拉」等の来母字に対して、音注がラ行仮名となっているため、「ヲ」は「ラ」の誤記である。

なお、疑母の「偶我」と日母の「人肉」との 4 字について、補充として説明する必要がある。中に、日母字は 4 字種、計 326 字、「小曲」の用例数は 29 字であり、既に日母の部分で検討したように、ザ行の音注は南京音と吳方言との双方から説明できる。

疑母の字は 8 字種、計 168 字、「小曲」の用例数は 29 字である。上記の表から分かるように、疑母字の音注は主にガ行とアヤワ行となっている。『唐話纂要』の他の部分では、ガ行とアヤワ行の音注だけでなく、「ニイ-疑(10)義(6)藝(5)」「ネン-研(1)硯(4)」等のように、齊齒呼と撮口呼の前では口蓋化を起こして、疑母 [ŋ-] が [ŋ̥-] となる吳方言の特徴と対応する疑母字のナ行音注も

存在しているが、「小曲」には見られない。疑母ガ行音注は疑母が濁音特徴を維持するという呉方言の特徴を反映している。既に疑母の部分で検討したように、他の部分に用いられているアヤワ行の音注は南京音から説明できるが、疑母に対する三種類音注から杭州音に一致すると考えられる。このように、「小曲」にある疑母の字に対するアヤワ行の音注は疑母が脱落してゼロ声母に合流した官話の特徴を反映するものと説明できる。

また、呉方言の中に疑母が脱落してゼロ声母となっている字は少ないが、存在し、アヤワ行の音注と一致する。これに対して、アヤワ行の音注は主に疑母が脱落してゼロ声母に合流するという官話の特徴と対応する。

「我」の場合、蘇州音は[ŋəu]、杭州音は[ŋou]と発音する。ガ行音注は呉方言の特徴と一致でき、「コウ」は「ゴウ」の濁点の省略によるものと考えられる。「官話」とされている『唐語使用』『唐譯便覧』等の岡島冠山の教科書には、「我」の音注について、「ゴウ」も一般的である。なぜ、『唐話纂要』と『唐語使用』等の官話学習書と同じ「ゴウ」音注となるのか、これについて、当時の南京音では「我」も[ŋ-]と発音するからである¹⁵³。『同文備攷』では[go]なるのが証拠の一つとなる。

「偶」は計 3 例で、いずれも濁音の「ゲ○ウ」である。疑母の部分で検討したように、蘇州音は[ŋ-]、南京音と杭州音はゼロ声母となり、例外として、音注は蘇州音から説明でき、つまり、呉方言の特徴を反映している。

このように、次濁声母の羊母の「雄」に対する音注は明らかに官話系方言の特徴と対応している。また、呉方言の特徴を有する疑母字「偶」等が混入している使用例も存在している。なお、疑母の「我」、日母の「人」「肉」の音注は両方言から説明できる。

¹⁵³ 葉(2001)は清代後期の南京音を紹介する際、『増訂合声簡字譜』(1905)〈勞乃宣 1843-1921〉という南京話ピンイン簡字教科書を取りあげた。中に、「我」字について、音注が[o]と記したが、実際の南京音の白話音では[ŋ-]となる(p.285)。

2.1.2 その他の場合

2.1.2.1 反り舌音に対する音注の場合

表 6-7-1 にある「睡誰池」3 字の場合は、既に声母部分で触れたことがあり、いずれも止撮所属で、「睡誰」が禅母、「池」が澄母の字である。この 3 字について、まず、前述したように、「小曲」でも非濁音の音注であるため、その音注の違いはまず清濁の区別にある。また、清濁の違いだけでなく、声母が反り舌音であるかどうかの問題とも関わっている。

表 6-7-1 「睡誰池」3 字の音注状況

分類	漢字	延べ数	他の部分の音注		「小曲」	「小曲」	南京音	蘇州音
					用例数	の音注		
I	睡	7	ジュイ 2	シユイ 1 濁点省略	4	スイ	[s-]	[z-]
	誰	9	ジュイ 6	シユイ 1 濁点省略	2	スイ	[s-]	[z-]
	池	3	ヅウ 1	ツウ 1 濁点省略	1	チイ	[tʂ'-]	[z-]

表 6-7-2 「睡」「誰」2 字の用例

音注	「睡」		「誰」	
	用例数	用例	用例数	用例
シユイ	1	四字話：待要睡覚	1	五字話：誰能親眼見
ジュイ	2	三字話：打瞌睡 六字話：自家屋里去睡	6	二字話：阿誰 四字話：誰人出首 五字話：誰是主人公 六字話：誰是被告人麼 長短話：誰不老成 誰無大福
スイ	4	小曲：(二更)睡也睡不着 睡不着 睡也睡不着 (四更)你在別人家睡	2	小曲：(四更)靠著誰 教奴靠著誰

「睡誰」2 字とも禅母の止撮三等合口の字で、表 6-7-2 のように、使用例と対応する音注が 3 種類見られ、どれも「小曲」の音注が「スイ」となり、意味に他の用例との相違がない。既に検討したように、南京音が[ʂuəi]、杭州音が[dzuei]となり、『同文備攷』では「誰」が[zuei][dzuei]、「睡」が[zuei][zuei]、『磨光韻鏡』では「ジュイ」となっている。「ジュイ」は呉方言から説明できる。これに対して、「スイ」は南京音からしか説明できない。同書では[-uəi]を示す場合、「ウ段＋イ」の音注であり、[ʂuəi]を注するには、声母が「ス」しなかい。

澄母止撮の「池」字は、原例が「小曲」の「你有差池(チイ)」と「四字話」の「堅守城池(ツウ 濁点の記入漏れ)」「并無差池(ヅウ)」となり、「差池」という用例から分かるように、異なる音注に意味の違いが見られない。南京音は[tʂ'ɿ]、杭州音は[dzɿ]、『同文備攷』は[dʒi]となっている。「ヅウ」は呉方言と対応するが、「小曲」の「チイ」は明らかに南京音の特徴を反映するものである。

2.1.2.2 全清と次清声母の場合

上記のように、「小曲」における全濁声母と次濁声母の字を検討してきた。また、「小曲」を全面的に把握するため、全清と次清声母の字の場合についても見てみる。

音注上で全清と次清との違いが反映できないため、表 6-8 には全清・次清を区別せず示す。これらの字は計 145 字種、延べ 2,735 字で、「小曲」に属するのは 302 字である。

表 6-8 「小曲」における全清と次清声母の字

分類	漢字	用例数	音注		小曲数	小曲表記
I	天	49	テン 44		5	テ 1 テン 4
	久	10	キウ 8 クウ 1		1	キウ
II	救	11	キウ 9 クウ 1		1	キウ
	軍	7	キユン 4 クン 2		1	キユン
	致	6	ツウ 4 チイ 1		1	チイ
	更	18	ケン 4 ケン 4		10	ケン
	得	88	テ 79 テ° 1	「°」は[a]を提示するもの	8	テ
	生	91	ス°エン 61 スエン 29		1	ス°エン
	不	400	フ° 385	フ 5「°」省略か記入漏れ ダア\1 誤記	9	フ°
	本	13	ヘ°エン 11	ヘエン 1「°」省略	1	ヘ°エン
	打	42	タア\38	タア 1「\」記入漏れ	3	タア\
	做	43	ツヲ\40	ツヲ 1「\」記入漏れ	2	ツヲ\
	借	10	ツエ\8	ツエ 1「\」記入漏れ	1	ツエ\
	差	9	ツア\5	チャア 1 南京音と対応 ツウ 1 サ°イ 1 異なる読みと 対応するもの	1	ツア\
	紗	5	サア\3 スア\1	同じ発音を記する異なる音 注法	1	スア\
	艸	29	サ°ウ 25	サ°ウ 1「°」省略 ツア°ウ 1 同じ発音を記する 異なる音注法	2	サ°ウ
	海	20	ハアイ 11 ハイ 8	同じ発音を記する異なる音 注法	1	ハアイ
	III	去	59	キユイ 55	ツエ°ウ 1 誤記	3
照		8	チヤ°ウ 5	チヤウ 1「°」記入漏れ	2	チヤ°ウ
紫		9	ツウ 7	ツウ 1 誤記	1	ツウ
彗		83	トウ 79	ト 1 誤記	3	トウ
耍		15	シヤア 12	シヤウ 2 誤記	1	シヤア
羞		7	スユウ 4	スヤウ 1 誤記	2	スユウ
四		17	スウ 13	ス 1 誤記	3	スウ
一		109	イ 109(108)	1 字 未 注	6	イ
居		7	キユイ 7(6)		1	キユイ
山		12	シヤン 12(11)		1	シヤン
愛		23	アイ		10	アイ
温		4	ウワン		1	ウワン
冤		8	ユン		3	ユン
憂		7	ユウ		2	ユウ
往		14	ワン		1	ワン
音		10	イン		1	イン
應		12	イン		1	イン
鶯		3	イン		2	イン
開		28	カイ		4	カイ
高		13	カ°ウ		4	カ°ウ
靠		5	カ°ウ		2	カ°ウ
紀		3	キイ		1	キイ
氣		19	キイ		1	キイ
講	10	キヤン		1	キヤン	
佳	2	キヤア		1	キヤア	

架	8	キヤア	1	キヤア
家	80	キヤア	8	キヤア
街	8	キヤイ	2	キヤイ
叫	9	キヤ〇ウ	3	キヤ〇ウ
教	21	キヤ〇ウ	2	キヤ〇ウ
敵	3	キヤ〇ウ	1	キヤ〇ウ
曲	5	キヨ	1	キヨ
巾	5	キン	1	キン
驚	5	キン	1	キン
荆	5	キン	1	キン
禁	6	キン	1	キン
金	26	キン	1	キン
九	3	キウ	1	キウ
君	6	キユン	1	キユン
孤	4	クウ	1	クウ
故	15	クウ	1	クウ
鼓	9	クウ	2	クウ
捆	5	クン	1	クン
光	9	クハン	1	クハン
見	46	ケン	1	ケン
個	43	コウ	2	コウ
哥	3	コウ	2	コウ
殺	14	サ	2	サ
三	26	サン	3	サン
散	5	サン	1	サン
少	24	シヤ〇ウ	1	シヤ〇ウ
雙	6	シヤン	1	シヤン
身	30	シン	1	シン
思	13	スウ	2	スウ
絲	11	スウ	1	スウ
師	5	スウ	1	スウ
小	35	スヤ〇ウ	2	スヤ〇ウ
想	14	スヤン	2	スヤン
廂	6	スヤン	2	スヤン
信	20	スイン	1	スイン
心	57	スイン	6	スイン
水	35	スイ	1	スイ
西	18	スエハ	3	スエハ
細	13	スエハ	1	スエハ
先	28	スエン	1	スエン
僧	3	スエン	1	スエン
粟	3	ソ	1	ソ
答	7	タ	1	タ
他	61	タアハ	4	タアハ
帶	7	タイ	1	タイ
丹	4	タン	1	タン
貪	6	タン	2	タン
到	13	タ〇ウ	1	タ〇ウ
只	23	チ	1	チ
七	11	チ	1	チ
這	31	チエハ	2	チエハ
窗	3	チヤン	1	チヤン
闌	2	チヤン	1	チヤン
張	12	チヤン	2	チヤン
處	26	チュイ	2	チュイ
珠	2	チュイ	1	チュイ
春	12	チュン	3	チュン
腫	3	チヨン	1	チヨン
鍾	7	チヨン	2	チヨン
青	9	ツイン	1	ツイン
親	23	ツイン	1	ツイン
將	19	ツヤン	2	ツヤン
妻	8	ツユイ	1	ツユイ
聰	3	ツラン	1	ツラン
嘴	7	ツイ	1	ツイ
則	24	ツエ	1	ツエ
滴	2	テ	1	テ
的	91	テ	25	テ
等	18	テン	1	テン
聽	11	テイ	1	テイ

	東	22	トン	1	トン
	八	10	ハ°	1	ハ°
	花	46	ハアハ	14	ハアハ
	怕	11	ハ°アハ	2	ハ°アハ
	喚	3	ハン	1	ハン
	寶	5	ハ°○ウ	2	ハ°○ウ
	香	13	ヒヤン	1	ヒヤン
	萱	2	ヒエン	1	ヒエン
	休	38	ヒウ	1	ヒウ
	戲	8	ヒイ	2	ヒイ
	許	11	ヒユイ	1	ヒユイ
	非	17	フィ	1	フィ
	飛	8	フィ	2	フィ
	府	10	フウ	1	フウ
	風	26	フワン	1	フワン
	邊	3	ヘ°ン	1	ヘ°ン
IV	夔	1	イン	1	イン
	壓	1	ヤ	1	ヤ
	汪	1	ワン	1	ワン
	肝	8	カン	8	カン
	潔	1	キ	1	キ
	建	2	ケン	2	ケン
	刹	1	サ°	1	サ°
	占	1	チェン	1	チェン
	催	2	ツイ	2	ツイ
	崔	1	ツイ	1	ツイ
	腆	1	テン	1	テン
	凍	1	トン	1	トン
	訪	3	ハン	3	ハン
	襖	1	ハ○ウ	1	ハ○ウ
	撤	2	ビ°イ	2	ビ°イ
	普	1	フウ	1	フウ
忽	1	ホ	1	ホ	

その中、表 6-8 のように、「天」を I 類に入れたが、「小曲」に所属するのは計 5 例、1 例のみが「テ」となり、「テン」との違いは韻母にあるため、詳細は 2.2 で検討する。

II類の字は計 16 字種、延べ 802 字の中、「小曲」に属するのは 44 字である。これらの字について、既に検討したため、簡単に主に以下のような三つのパターンをまとめられる。

(1)音韻上に区別がある漢字「久救軍致差」

「久」「救」2 字は、流摂の部分で検討したように、「クウ」は、南京音と吳方言のいずれにも対応できず、例が初出でないため、誤記の可能性が高い。

「軍」は、臻摂の部分で検討したように、「クン」となるのは一等の牙音字に対する「クン」による影響或いは誤記の可能性が高い。

「致」は、「チイ」の例は「四字話」の「十分嫵^{シフンビ°ヤ○ウチイ}致 イカフウツクシヒ」と「小曲」の「四愛你人物的^{ビ°ヤ○ウチイ}嫵致」である。知母の部分で検討したように、他の部分の「チイ」の音注は北部吳方言の要素として説明でき、知組の声母の分化を反映する現象である。これに対して、「小曲」の「チイ」は官話系方言の特徴の現

れと考えられる。

「差」に対する「ツアゝ」「チャア」は、声調点の部分で検討したように、両音注は初母仮撰の「初牙切」と対応するもので、「ツアゝ」が呉方言の[ts‘a]から説明で、「チャア」が南京音の[tɕ‘ɛ]と対応する。このように、「小曲」にある「差-ツアゝ」1例は呉方言要素の混入例となる。

(2)「°」「ゝ」に使用混乱或いは記入漏れがある漢字「更得生」

「更」は声調点「○」の部分で検討したように、平声点が省略された3例を含める「小曲」の表記例は全て「古行切」と対応している。また、一部の例に付されている右肩点「°」は主母音[a]を提示するもので、声母の違いを示さない。「得生」の右肩点も同様である。

(3)音注法に違いがある漢字「紗艸海」

「紗」に対する「サアゝ」「スアゝ」、「艸」に対する「ツア○ウ」「サ°○ウ」、「海」に対する「ハアイ」「ハイ」について、それぞれの二種類の音注は同じ発音を示すものとなり、つまり、音注法の違いによるものと考えられる。

Ⅲ類の字は計111字種、延べ1,855字の中、「小曲」の用例は224字であり、音注の声母上と韻母上とのいずれにも相違が見られないため、これらの字について検討しない。中に、「要四紫差去彡照」7字は、他の部分では二種類の音注を有するが、既に分析したように誤記或いは記入漏れ等の問題であるため、Ⅲ類に分類して集計した。

Ⅳ類所属の漢字は、計17字種、計29字である。中に問題のある字は「撇襖」2字である。

「ヒ°イ-撇(2)」は原例が「小曲」の「^{ヒ°イヒヤアリヤ○ウゴウ}撇下了我」(2回)である。『広韻』に未収、異体字の「擊」が収録され、山撰入声の「普蔑切 小擊又略也引也亦作撇」とある。また、『集韻』に「匹齋切 標也」との蟹撰去声の読みもある。南京音は[p‘ieʔ]、蘇州音は[p‘iəʔ]、杭州音は[p‘iiʔ]となり、「ヒ°イ」はいずれからも説明できない。同書では既に述べたように、他の部分では入声韻の字は短音節型の音注となるのが一般的であるため、「ヒ°イ」は山撰入声でなく、[i]韻尾をもつ蟹撰の読みを示している。意味の上では、滂母蟹撰の読みとも一致す

る。同書の蘇州・杭州音で同じ発音をもつ山攝と梗攝入声の字に対して、「イ段」の音注が多く用いられている。例えば、同じ重唇音の山攝入声の「鼈蔑蟻-ピ」が「イ段」の音注となっている。このように、「小曲」の陰性韻の特徴を示すには、「-イ」を添った「ピイ」は蟹攝の読みに近い形にしたものと考えられる。また、同書には「蔽-ヒ°イ」表記が存在するため、「ヒ°イ」は「蔽」声符の類推による可能性も考えられる。

「襖-ハ○ウ」は影母の「烏皓切」で同書の影母の字に対して、アヤワ行で表記するのは一般的である。南京音でも蘇州音でもゼロ声母となっているため、「ハ○ウ」は両方言から説明できない。

このように、声母上では、「襖-ハ○ウ」は両方言から説明できず、「愁罷渾負偶差」に対する音注は呉方言の特徴を反映する混入例である。「撇-ヒ°イ」は蟹攝の読みを示すもので、声符の類推による可能性も排除できない。それ以外の場合、「小曲」の注音表記に官話の特徴がはっきり見られる。

2.2 韻母面の違い

表 6-9 のように、「芍着玉薬六天」との 6 字について、その音注の区別は韻母にある。

「天-テン 49(48)テ 49(1)」は、声調点の部分で検討したように、「天」は透母山攝の「他前切」読みしかなく、両方言でも同じ陰平調である。短音節型の「テ」は平声の読みと一致できず、説明できない。

表 6-9 韻母の面で音注に違いが見られる字

漢字	延べ数	他の部分の音注	「小曲」用例数	「小曲」の音注	南京音	蘇州音	杭州音
芍	2	シヤ 1	1	シヨ	[-ɔʔ]	[-aʔ]	-
着	24	ヂヤ 17 チヤ 4 濁点省略	3	チヤ 2 チヨ 1	[-ɔʔ]	[-aʔ]	[ɛʔ]
薬	13	ヤ 12	1	ヨ 1	[-ioʔ]	[-iaʔ]	[-iɪ]
玉	8	ヨ 7	1	イユイ 1	[-yʔ]	[-ioʔ]	[yɪʔ] [-ioʔ]
六	6	ロ 4	2	リウ 2	[-uʔ]	[-oʔ]	[-ɔʔ]
天	49	テン 44	1	テ 1 テン 4	[-eː]	[-iɿ]	[-ie]
							『同』 [-ien]

入声所属の「芍着玉薬六」5 字について、「芍薬着」が宕攝所属字で、「玉六」が通攝所属字である。声母と韻母部分では既に触れたことがある。

「芍薬着」3 字に対する音注の違いは韻母にある。「芍」と「薬」2 字の所在の原例は「花草」所属の「芍薬」と「小曲・桃花」所属の「芍薬花」となる。また、羊母字「薬」の使用例は、下記のようにになっている。

「ヨ」「小曲・桃花」芍薬花
 「ヤ」「三字話」合些薬 下了薬 「四字話」小宗药材 薬杀病人
 「長短話」你有丸薬 今日丸薬也失帶了 便是開生薬舖的
 休説英雄 而無復雄飛 真個當世英雄
 「器用」薬研 药材 火薬 「菜蔬」山薬 「花草」芍薬

音注の区別の用例は同じ語句であるため、意味の相違が見られない。

「着-チヤ 24(2)チヨ 24(1)」について、他の部分の例は、声調点の部分で検討したように、音注と対応するのは澄母宕攝の「直略切 附也」となる。入声点付きの「着人來」は入声全清の「張略切」、「ヂヤ 24(17)」は全濁の「直略切 附也」と対応し、「ヂヤ」は吳方言と一致している。「チヤ 24(4)」は南京音から説明できる一方、濁点の記入漏れの可能性もある。また、「小曲」の 3 例は下記の通りである。

「チャ」:睡不着 睡也睡不着 「チヨ」:十兒愛着你

「詞綴-チャ」と「助詞-チヨ」との使い方となっている。いずれも清音音注は入声全清の「張略切 衣服着身」の意味と対応できず、「直略切 附也」の近代派生義である。

この宕攝入声の3字に対する音注の「シヤ」と「シヨ」の違いは発音の主母音にある。表6-9に示しているように、主母音は南京音が[-ɔ]、蘇州音が[-a]で、『磨光韻鏡』では「-ヤ」となり、3字に対する「小曲」の「シヨ」「ヨ」「チヨ」は吳方言と対応できず、南京音の読みから説明できる。つまり、「小曲」にあるこれらの字に対する音注は南京音の特徴を反映している。これに対して、同書では、中古音宕攝三等字の主母音[-a]を示すには、音注がア段仮名で表記するのは一般的であり、「シヤ」「チャ/ヂヤ」「ヤ」は明らかに吳方言の読みと一致している。これは、音韻上の変化において、「-ヨ」の音注は入声の覺藥韻の場合、官話では[io]と合流した変化を反映しているのに対して、「-ヤ」の音注は、合流の変化がなく、覺韻が[-o]、藥韻が[-iv/v]との吳方言の特徴を反映している。

通攝入声の「玉六」2字について、「玉-イユイ 8(1)ヨ 8(7)」は「魚欲切 白虎通白玉象君子之徳燥不軽濕不重是以君子寶之禮記曰執玉不趨又烈火燒之不熱者眞玉也」である。原例は下記の通りである。

「イユイ」:イユイランハア、「小曲」玉蘭花
「ヨ」:ベヨデ○ウイユイユイニイ「常言」白玉投於淤泥 キンヨチエ、金玉者 コウセンキンヨフツユイ「長短話」果然金玉夫妻
ヨチヤ○ウ「虫介」玉珧(2回) ヨツハン「花草」玉簪 ヨヘ。玉栢

「イユイ」の例は「小曲」所属であり、「玉」は蘇州音が[ŋoʔ]、南京音が[yʔ]と発音する。「イユイ」と「ヨ」との違いは韻尾だけでなく、韻母にもある。

「六-リウ 6(2)ロ 6(4)」は「力竹切 數也」であり、表記例が下記の通りである。

「リウ」:リウ「小曲」六愛你一團的和氣 高六丈
「ロ」:ロ「四字話」雜七六八 「六字話」打双六耍子否
ロ「常言」三十六計 「數目」六七八九十

「リウ」となるのは全て「小曲」の例である。「六」は蘇州音が[lɔʔ]、南京音の白

話音が[luʔ]と発音する。「リウ」と「ロ」の違いは韻母にある。

「玉六」に対して、他の部分の「ヨ」「ロ」の音注は南京音と蘇州音との両方言では入声韻尾 [p-][t-][k-] の対立が消失して、声門閉鎖音 [-ʔ] に合流していたという音韻変化を反映している。

その中、「六」に対する「ロ」は南京官話の読みと対応できず、蘇州音から説明できる。これに対して、「玉」に対する「ヨ」は蘇州音から説明することができず、南京官話の読みと一致し、「ヨ」は[y]を示す一つの音注法と考えられる。

一方、入声韻尾の完全消失は北方官話系方言の特徴である。北方官話方言では、「六」に[-u](文)と[-iou](白)との文白異読があり、非入声音注の「リウ」は北方官話の白話音と対応する。つまり、「六」に対する「リウ」¹⁵⁴音注は北方官話の白話音の特徴を反映するものである。「玉」に対する非入声音注の「イユイ」は入声を保存している蘇州音と南京音でなく、更らに入声消滅の北方官話系方言の特徴の現れの一つと考えられる。

このように、「芍着玉薬六」5字に対する音注の違いは韻母の面にあり、「芍着薬」に対する音注は南京官話、「玉六」に対する音注は北方官話の音韻特徴を反映している。

¹⁵⁴北方官話方言では、「六」に[-u](文)と[-iou](白)との文白異読(王 1980:P204)があり、「リウ」は白話音と対応する。文語音か口語音かの視点から見れば、平山(1960)が指摘している「玉六」のような次濁声母の以は文語的な語根と文語的語根は全て去声になった。声調の変化に相異が見られず、そして、同書「小曲」に用例がこの2例しかないため、全体的に文語・口語から説明するのが難しいと思われる。

第三節 本研究と先行研究との違い

上述したように、他の部分に対する音注との比較を通して、「小曲」は他の部分との区別を有することが分かった。これらの区別のある音注は官話系音韻的特徴を顕著的に反映している。

文雄による唐音の分類を参考した森(1991)は、有坂(1938)による『唐話纂要』の「杭州音説」を修正し、「小曲」は歌曲の「中州音」とであると主張しているとともに、

表 1 の「杭音」の唐音は岡嶋冠山の『唐話纂要』(「小曲」を除く)の唐音であり、前述のように「杭州音」とされている。(p.18)

どのように、他の部分について、有坂(1938)の「杭州音説」を支持し、即ち、「吳方言」としている。つまり、森(1991)が指摘した「小曲」に混入された「杭州音」は吳方言である。

本章では、比較した結果として、「小曲」の注音表記に官話の特徴がはっきり見られていることと、吳方言要素の使用例が混入していることは、森(1991)と一致している。その上、本章で声母と韻母の両面の視点からより詳細に「小曲」と他の部分との違いを明らかにした。

しかしながら、森(1991)の指摘には問題点がある。森氏は「小曲」の音韻を定義する時、「小曲」が歌曲の「中州音」とであると主張している。「小曲」について、所謂「中州音」の音韻特徴は「不立入声、不立濁声、唯平上去、唯清音者」である。本章で検討したように、「小曲」では僅かな吳方言の特徴が混入している濁音音注の用例以外、濁音声母の字に対して、清音音注が顕著であり、「不立濁声」「唯清音者」と一致する。しかし、森(1991)が指摘している入声の不存在という点は本章の考察結果とは一致しない。

2.2 で検討した「芍着薬」以外、既に入声字の部分で分析したように、同書では、例外が存在しているが、入声韻の字は短音節の音注となるのが一般的である。『唐話纂要』の当時、南京音と吳方言とのいずれにも、かつての入声韻尾は内破音[-p][-t][-k]の対立が消失し、声門閉鎖音[-ʔ]へ合流していた。入声字に対する短音節型音注はこの変化を反映している。

表 6-10 「小曲」における入声字の音注状況

分類	漢字	延べ数	他の部分の音注	小曲数	小曲音注
I 類	的	91	テ 66	25	テ
	粟	3	ソ 2	1	ソ
	一	109	イ 102	6	イ
	學	13	ヒヨ 12	1	ヒヨ
	曲	5	キヨ 4	1	キヨ
	月	9	エ 6	3	エ
	七	11	チ 10	1	チ
	滴	2	テ 1	1	テ
	答	7	タ 6	1	タ
	肉	12	ジヨ 7	5	ジヨ
	八	10	ハ° 9	1	ハ°
	物	10	ウエ 9	1	ウエ
	則	24	ツエ 23	1	ツエ
II 類	殺	14	サ 12	2	サ
	縁	2	ロ 1	1	ロ
	十	24	シ 21 ジ 1	2	シ
	着	24	ヂヤ 17 チヤ 4	3	チヤ 2 チヨ 1
	著	10	チヤ 4 ヂヤ 2	4	チヤ
	得	88	テ 79 テ° 1	8	テ
III 類	不	400	フ 5 フ° 385 ダア\1	9	フ°
	賊	11	ツエ 8 ツエ 1	2	ツエ
	玉	8	ヨ 7	1	イユイ
	白	23	ベ 20 ヘ 1	2	ヘ°
	六	6	ロ 4	2	リウ
	喇	2	ラ 1	1	ラ
	芍	2	シヤ 1	1	シヨ
IV 類	別	16	ベ 12	4	ヘ°
	藥	13	ヤ 12	1	ヨ
	忽	1	/	1	ホ
	刹	1	/	1	サ°
	壓	1	/	1	ヤ
計	奪	1	/	1	ト
	潔	1	/	1	キ
計		954		96	

「小曲」の入声字の音注状況を表 6-10 にまとめている。計 96 字種で、延べ 954 字ある。「六-リウ」2 例、「玉-イユイ」1 例、「ピイ-撇」2 例以外、「小曲」でも短音節型音注となっている。こうして、「小曲」でも他の部分でも入声字に対する短音節型音注は、「サア\、紗」「イ\、衣」「キイ-機」「ウ\、乎」「クウ-古」「エ\、野」「テイ-低」「ツヲ\、初」「トウ-土」等のような無韻尾の陰声韻の字に対する長呼型音注と明らかに区別している。

従って、『唐話纂要』の「小曲」と他の部分には、入声は確かに存在し、そして、入声の短促性が明らかに示されている。このように、「小曲」に入声の存在という点は、「中州音」の「不立入声」「唯平上去」と一致できなくなる。従って、「小曲」は民間歌曲であるが、森(1991)による「中州音」説、つまり「歌曲」に用いられている「中州音」ではないことは明らかになった。

なお、文雄によるもう一種類の官話は「一立四聲唯更全濁爲清音者是」という特徴である。本章で音注を南京音と蘇州音と対照した結果として、「小曲」

には、入声の存在と濁音声母の字に対する清音音注との二つの特徴を有することは、それと一致している。つまり、文雄の分類に従って、「小曲」の発音は、入声を保留しているもう一種類の官話読書音となる。

以上、『唐話纂要』の巻五「小曲」と他の部分との違いの考察を通じて、主に以下のことが明らかになった。

(一)声母面

①匣・奉母以外の全濁声母の場合、「小曲」では清音音注となり、官話系方言特徴を明らかに反映している。

②匣母字の場合、「渾」以外、「小曲」では全て官話系方言の特徴を反映するハ行の音注であり、「含還杏」3字に対して、他の部分では呉方言の特徴を反映するアヤワ行の音注である。

③次濁声母の場合、于母所属の「雄」の音注も官話系方言特徴の現れである。

(二)韻母面

「芍着玉薬六」5字の音注は呉方言の読みと一致できず、「芍着薬」は南京官話音、「玉六」は北方官話音と対応する。「撇-ヒ°イ」は蟹摂の読みを示すもので、声符の類推による可能性も排除できない。「天」の場合は不明。

呉方言の特徴が混入している使用例は、森(1991)が言及した「愁」以外、濁音音注の「罷」、匣母字「渾」、次濁疑母字「偶」、奉母字「負」と初母の「差」も存在している。

「小曲」の語音について、本章では詳細な分析をした結果として、官話的な音韻特徴を有することを明らかにした。これは先行研究の森(1991)と一致する。なお、「襖-ハ〇ウ」は南京音と呉方言から説明できず、例外である。

しかし、同書では入声が明確に存在しているため、本章の趣旨は森(1991)と違って、「小曲」の発音は「不立入声不立濁声唯平上去唯清音者」の「中州音」ではなく、文雄によるもう一種の「立四聲唯更全濁爲清音者是」という特徴を有する官話読書音と考えられる。

第七章

総まとめ

本研究では、第一章で『唐話纂要』の歴史背景及び資料の基礎情報を概述した。第二章で『唐話纂要』と関わる先行研究を整理し、問題点を明らかにした。第三章、第四章、第五章では表記上の特徴・声母面・韻類面の音韻的特徴、第六章で「小曲」の音韻的特徴を総合的に考察した。本章では上記の考察によって明らかにされた音韻面の特徴を通して、先行研究の未解決の問題点との対比及び『唐話纂要』の基礎音系についてのまとめを行う。

第一節 表記面の特徴

1.1 右肩点「°」

右肩点の使用について、先行研究によって、ハ行、「サ」、「没」等母音[-ə-]をもつ字という三種類の状況があることが明らかにされた。しかし、中国語音との対応においては、ハ行の場合は[p-]に対応する見方と[p-][p'-]の双方に対応する見方、「サ」の場合も[ts-]に対応する見方と[ts'-]に対応する見方と、ともに二種類の説があり、見方が分かれている。[-ə-]を示す場合、「没-モ°」「根-ケ°」「客-ケ°」以外の状況は不明となっている。また、この三種類以外の例があるかどうか分からない。

本研究での考察の結果は以下のようにまとめることができる。

(1)ハ行に対する右肩点は、幫・滂母の字に用いられるのが一般的で、両唇破裂子音の[p-][p'-]の双方に対応する説の方が正しいことを確認できた。但し、曉母の「黒-ペ」の右肩点は母音を示すもので、上述の用法には該当しない。

(2)「サ」に対する右肩点は、精・清母、莊・初母の字に用いられるのが一般的で、無声の破擦子音[ts-]と[ts'-]の内の一方に対応するのではなく、「ツア」と同様、無気の[ts-]と有気の[ts'-]の双方に対応することが明らかになった。

(3)母音[-ə-]をもつ字に対する右肩点は、先行研究では「没-モ°」「根-ケ°」「客-ケ°」などが稀なケースとされているが、計 21 字種、延べ 224 例の使用が確認されている。中には「門-モン」のように、20 例の中、19 例に使用が認められる例から、高い使用頻度を有するものが少なくない。「黒」に対する右肩点はこの分類に入る。

(4)上記以外に、「悦」「地」「面」「虫」4 字に対する右肩点の使用例も存在する。それに、それぞれに右肩点の使用理由が考えられ、無視すべきではない。

1.2 中間点「○」

中間点について、先行研究によって、母音を連続して発音しないことを注意するための「割り点」であることが明らかにされた。

使用環境についても、效摂の場合が「ア段+ウ」、流摂の場合が「エ段+ウ」

になることが先行研究によって明らかにされているが、本研究では考察を通して、奥村(1992)による「イウ連母音の割ル注記」、即ち「イ段+ウ」の場合、使用が見られないことを明らかにした。このことは中間点の使用は效撰の全ての等に見られるのに対し、流撰の場合、状況がやや違い、三等の一部に使用が認められないということの意味する。

1.3 延音点「ㄨ」

「ㄨ」は従来普通の踊り点として見られていたが、本研究では、「ㄨ」が主として母音仮名「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」の後に用いられていることから、先行母音を延ばす延音点と見なすことが可能であることを明らかにした。

延音点について、先行研究で分かるように、日本語の書記体系で繰り返しを示し、唐話資料では先行母音をのばす延音点として使われている。しかし、『唐話纂要』における延音点の具体的な使用環境について、先行研究に言及がない。

本研究の考察結果として、「ㄨ」の使用実態について、母音仮名「ア」「イ」「ウ」「エ」「ヲ」の後に用いられている以外、「ㄨ」は「ル」の後にも用いられていることも明らかにした。「ル」以外の場合、先行研究と同じ、先行の母音仮名の延音点の使用法と一致する。「ルㄨ」の場合、「ㄨ」は「ル」の繰り返しでなく、直前母音の繰り返しとなり、「ルウ」と同じものである。

「ㄨ」の用いられるのは、僅かの蟹撰の例を除き、無韻尾の陰声韻の字である。なお、これらの無韻尾の陰声韻の字に対する音注は、杭州音とよく対応し、呉方言の特徴を反映している。蟹撰の例は南部呉方言から説明できる。

用法上、「ㄨ」は直前仮名を延ばす延音点であり、直前の仮名はア、イ、ウ、エ、ヲであることから、長音を表すための工夫であると見てとれる。「ㄨ」は分布上で顕著な特徴を有するのは、用いられた仮名音注が新しい長音表記、即ち長呼型音注だからである。イ段での「ㄨ」は、限られている部分的な使い方であり、日本漢字音に従来存在しているのは「ウ段+ウ」「エ段+イ」「オ段+ウ」この三種類の長音表記に対して、「ア段+ア」「イ段+イ」の表記と「ㄨ」が付く表記の全ては長呼型である。

1.4 声調面の特徴

(1) 声調点と四声点

① 声調点

声調点「○」について、これまでの研究に言及のない内容である。『唐話纂要』では、声調を示す「○」は特定の漢字の四隅に用いられ、集計結果として、「行降参長省分作足悪覺差着擔重從禁更教上中爲好遠錯種衣探只麼天汶面一」の計 33 字種、98 例である。

「○」が付けられているのは多音字が圧倒的に多く、「天」「面」「一」を除き、全て複数の読みの意味を読み間違えないように注意するのが意図である。

「分-ウエン」「降-ヤン」などは前述したように明らかに吳方言の特徴を反映する例が存在しているため、全体として吳方言の特徴に一致している。

② 四声点

『唐話纂要』の「卷六」に用いられる「平上去入」の四声点が同書初版の五巻本と六巻本に見られない。本研究で参考するものの一つ、『唐話辞書類集』所収再版影印六巻本の「二字話」の一部の字に、四声点の使用が確認できた。しかし、刊行当初のものではなく、刊行後に付けられた可能性があり、冠山によるものであるかどうかについて、判断できない。

(2) 入声韻の字の音注

先行研究において、入声韻の字は「無表記」であることが既に明らかにされている。本研究の考察を通して、『唐話纂要』では「無音注」以外、例外の場合も存在することが確認できた。「ツ」で終わる「イツ-鷓」「ワツ-襪」2 例以外、「六-リウ」「玉-イユイ」などのような長呼形表記となるものも存在している。

なお、沼本(1997)が指摘したように、無韻尾の陰声韻と入声韻に発音の長・短の対立が存在していた。入声韻の字に対する短音型音注は無韻尾の陰声韻の字に対する長呼型音注と区別している。書き分けの原因について、当時の南京音でも蘇州音でも入声韻尾の内破音[-p][-t][-k]の対立が消失して、声門閉鎖音[-ʔ]に合流していたからである。

第二節 音韻面の特徴

2.1『唐話纂要』の基礎音系

2.1.1「小曲」以外の場合

本研究では、南京音、蘇州音、杭州音との対照を通して、官話音の特徴である「小曲」以外、音注に反映された音韻的特徴は杭州音であることを確認できた。有坂(1983)は「杭州音」としているが、「小曲」が官話音の特徴であることについて言及していない。それに、同書の基礎音系について、長澤(1972)と趙(2009)による「南京音」、楊(2007)による「南方官話音」ではないことが判明された。

一方、高松氏による混合音説にも問題があり、呉方言の特徴を反映するのは混入の要素でなく、同書の杭州音の特徴の現れであることを明らかにした。考察の結果として、一部の南京音の特徴を反映するものの存在が確認され、下記の通りである。

①清音音注となり、南京音からしか説明できない例：

並母：ハ°行の「排鉞帛勃佩婆棚」

従母：「サ°」の「皂槽」

②知・莊組の分化と一致できず、南京音と対応する例：

初母效摂所属の「鈔炒-チャ〇ウ」

初母仮摂所属の「差-チャア」

書母止摂所属の「試-シイ」〈高松(1985a)に言及のあるもの〉

③その他

非母臻摂所属の「不-プ」

なぜ杭州音の特徴となる同書にこうした官話要素が混入されたのかについて、本研究では当時唐通事に学習された唐話が方言から南京官話に変化したという変容に原因があると考えられる。

2.1.2「小曲」の場合

先行研究において、「小曲」と他の部分とを同様に扱っているのは一般的である。「小曲」に関して、言及したのは長澤(1972)と森(1991)である。長澤(1972)は他の部分と同じ「江南音」としているが、森(1991)は「小曲」が杭州音でなく、文雄による「中州音」であることを指摘し、中に杭州音の要素が混入しているとしている。

本研究では、「小曲」の音注に対する考察を通して、「小曲」は他の部分に反映された杭州音の特徴と異なり、官話的特徴が顕著であることが確認できた。声母面と韻母面の特徴は以下の通りである。

- 声母面：①匣・奉母以外の全濁声母に対する清音音注
②「渾」以外、匣母字に対するハ行音注
③次濁声母の子母所属の「雄-ヒヨン」
韻母面：南京官話：「菓-ヨ」「芍-シヨ」「着-チヨ」
北方官話：「玉-イユイ」「六-リウ」

また、森(1991)に挙げられた杭州音の混入例「愁-ツエ〇ウ」以外、濁音音注の「罷-バアゝ」、匣母の「渾-ウワン」、次濁疑母の「偶-ゲ〇ウ」、奉母の「負-ウゝ」と初母の「差-ツアゝ」の存在も確認できた。

このように、『唐話纂要』の前五巻の基礎音系について、「小曲」以外は杭州音の特徴となり、「小曲」は濁音声母が無声化し、四声を保有する文雄によるもう一種類の官話読書音である。

2.2 声類面と韻類面の問題点の解決

ここでは、先行研究に見られる声母面と韻母面の問題点について、その分析の結果をまとめる。

2.2.1 声類面

(1) 奉・匣母以外の濁音声母に対する音注

奉・匣母以外の濁音声母に対して、濁音音注となるのが一般的であることが確認できた。

並母はバ行、定母はダ行、澄母は止摂が「ヅ」「ヂ」_(少)、非止摂が「ヂ」「ヅ」_(少)、従母は「ヅ」、邪母は止摂「ヅ」「ズ」・非止摂「ヅ」、崇母は止摂「ズ」・非止摂「ヅ」「ヂ」_(少)、船母は止摂「ズ」・非止摂「ジ」「ゼ」_(少)「ヂ」、禪母は止摂「ズ」「ジ」_(少)・非止摂「ジ」「ヂ」、群母はガ行の音注となり、いずれの場合も濁音を維持する呉方言の特徴を反映している。

一方、岡島(1992)と謝(2011,2016)は濁音声母が圧倒的に濁音音注となっていない現象について言及しているが、詳細な状況は明らかにされていない。本研究では、先行研究で明らかにされていない清音音注の例も確認され、一部分の類推、誤記によるもの、両方言に対応するもの及び多音字を注するもの以外、濁点の省略或は濁点の記入漏れとして説明を与えた。

(2) 清音声母に対する濁音音注

清音声母の字に対して、濁音音注と記されている例の存在も確認できた。先行研究において、岡島(1992:99)はこうした現象についての言及があり、詳細な考察をしていない。本研究では、類推か誤記によるもの以外、呉方言から説明できる2例が確認でき、透母の「デ-鰈(1)」と見母の「グイ-愧(7)」である。

(3) 疑母に対する音注

疑母の字に対して、アヤワ、ガ行とナ行との三種類の音注が確認できた。本研究では先行研究と異なる研究方法を採用して、疑母が子音を失い、ゼロ声母に合流した南京音と対応できず、呉方言から説明できることも確認できた上、音注は杭州音に最も近いことを明らかにした。

(4)知・精・莊・章四組に対する音注

本研究では、知・精・莊・章四組の場合、止摂と非止摂の字に対する音注の異なり、非止摂の音注に書き分けの存在を確認した。

先行研究において、謝(2016)はこうした音注の現象について挙げているが、①非止摂の音注の書き分け、②止摂と非止摂の音注の違い及び止摂開口の字に「ツウ・ヅウ」「スウ・ズウ」に統一すること、③濁音の船・禪母に対する摩擦・破擦音の二種類の音注の存在との三つの現象の理由について説明していない。

①非止摂の場合－知・莊組の分化

非止摂の場合、下記のように、知組の場合は二等江・效摂と三等、莊組の場合は二等の莊母江摂、初母江・效摂、崇母蟹摂、生母江・蟹・假・山摂の字は「チ・ヂ」「シ・ジ」「セ・ゼ」「ザ」の音注となり、それ以外の「ツ(サ°)・ヅ」「サスソ」の音注となる知・莊・精組の字と区別している。

知組 二等江・效摂と三等： 知・徹母「チ」 澄母「ヂ」
莊組 二等 莊母江摂・初母江・效摂： 莊・初母「チ」
崇母蟹摂： 崇母「ヂ」「ザ」
生母江・蟹・假・山摂 生母「シ」「チ」
三等宕摂： 莊母「チ」 崇母「ヂ」 生母「シ」
精組 精・清母「ツ」 從・邪母「ヅ」 心母「サスソ」
章組 章・昌母「チ」 船母「ジ・ゼ」「ヂ」書母「シ・セ」「チ」 禪母「ジ」「ヂ」

この書き分けの現象は、知・莊組の「チ・ヂ」「シ・ジ」「セ・ゼ」「ザ」の音注の字が章母、「ツ(サ°)・ヅ」「サスソ」の音注となる字が精母と合流した吳方言の特徴を反映している。例外として、「鈔炒-チヤ〇ウ」は南京音と対応する。

③莊組二等の二種類の音注

先行研究において、高松(1985b)は同書で「シヤ-」となる生母の「灑-シヤイ」「山-シヤン」を挙げ、「シヤ-」「[f-]」は浙江音の特徴を反映すると指摘している。生母の例なのかそれとも莊組全体的な現象なのかについて指摘していない。

本研究での考察を通して、莊・初母が「サ°-」、崇母が「ザ-」となっているの

に対して、生母のみが「シヤ-」である。つまり、この現象は生母のみに現れる。また、冠山による官話学習書の例「山-サン」「サア、-要」と比較して、こうした「シヤ-」の音注は呉方言の特徴の現れであることを証明した。

③濁音の声母に対する音注

濁音声母に対する摩擦・破擦の二種類の音注の存在について、先行研究において、高松氏は蘇州音の特徴と対応せず、南部呉方言に視野を広げるべきだと指摘しているが、反映された基礎方言について明らかにされていない。また、音注の現象の原因も説明していない。

本研究では、音注を蘇州音、杭州音、及び当時北部呉方言の特徴を反映する『同文備攷』との比較を通して、音注に見られる摩擦・破擦の二種類の音注現象が声調と関わり、崇母平声の場合、分化がなく破擦音であり、船・禪母仄声の場合、分化せず摩擦音であるのに対して、崇母仄声、船・禪母平声の場合では分化が発生して摩擦・破擦の二種類の音注となり、音注は杭州音と『同文備攷』に一致することを究明した。

2.2.2 韻類面

(1) 知・精・莊・章四組に対する音注－止摂の場合

止摂の場合、開口字が「ツウ・ヅウ」「スウ・ズウ」、合口字が「ツイ・ヅイ」「スイ・ズイ」「チュイ」(吹 1 字)「ジユイ」(誰 睡 2 字)となり、杭州音と対応している。開口の「知致-チイ」「遲-ヂイ」は北部呉方言に対応する。

止摂の字に対する音注に非止摂のような書き分けがなく、「ツ・ヅ」「ス・ズ」で統一された理由について、当時の杭州音は非止摂の字に[ts]組と[tʂ]組の区別があるが、止摂の字にその区別がなくなり、[ts]組しなないからである。

また、止摂の開口の字が「-ウ」で統一された理由について、[ɿ]・[ʊ]の対立の有無にあるという説明は問題がないが、高松氏による対照する方言は現代呉方言のため、中古音の精組と章組との対立(即ち杭州音では[tʂ]組の存在)を意識していない。よって、根本的な原因は[ɿ]の有無でなく、止摂の字に[tʂ]組の発音がないことによる。対応する発音は杭州音となるため、止摂の声母が「ツ」と記され、舌尖前母音[ɿ]に対して、聴覚面では音注が「ツウ・ヅウ」「スウ・ズウ」となり、高松氏の説明が適用できる。

(2) 覺・藥両韻について

この両韻の音注について、高松(1985a)は同書の「-ヤ」の音注は呉方言の混入要素として捉えている。本研究では、覺韻の字が「-ヨ」、藥韻の字が「-ヤ」となり、はっきり区別している。杭州音の特徴となる同書では、こうした現象は混入要素でなく、杭州音の特徴の現れの一つである。

2.3 今後の課題

上述したように、先行研究に見られる多くの問題点は本研究の考察を通して明らかになったが、以下のような問題点はまだ残り、今後の課題となる。

①奉・匣母に対する音注

本研究で確認できた奉・匣両母の音注現象について、奉母はハ行(10字種)とワ行(16字種)、匣母はハ行(61字種)とアヤワ行(55字種)、それぞれ二種類の音注となっている。また、奉母の「伏服父奉飯鳳」6字、匣母の「画話豪禍」4字はともに二種類の音注をもっている。

こうした二種類の音注及び一つの漢字に対する二種類の音注の現象について、先行研究の見方は統一せず、それぞれに問題点もある。

奉母のワ行、匣母のアヤワ行の音注は呉方言と対応でき、数も優位に立っているため、呉方言の特徴に近いと言えるが、南京音の特徴と見えるハ行の音注について、同書では濁音声母に対する濁音音注は明らかに呉方言の特徴の現れであるため、大量の存在は南京音の混入として説明するのが説得力は低く、今後の課題となる。

②日母に対する音注

日母止摂の開口字に対する「ルウ」「ルゝ」について、先行研究の高松(1985a)と中村(2015b)は、それぞれ異なる視点から説明しているが、見方が統一できない。韻母面では日本語の音注法の視点から、日本語で写す時、南京音「e^r」、蘇州音の文語音「əɪ」、杭州音「ɦər」の[r][l]で終わることができなく、母音を添えた後「ル」となると説明できるが、声母面ではゼロ声母となる両方言と対応しないため、適切な説明が得られない。また、延音点の使い方として、「ルゝ」は例外となっている。このように、日母止摂の開口字に対する音注の説明も今後の課題である。

③蟹摂四等韻の二種類表記について

蟹摂四等の歯頭音に対する音注の中、心母の字が「スエゝ」、それ以外の場合が「ツユイ」となり、書き分けられている。中村(2015b)と謝(2016)は、心母の「スエゝ」の例を挙げ、中村氏はこうした現象を長崎に住む唐人の官話音に

ある杭州音の混入要素であると説明している。本研究で、こうした例は齒頭音心母のみに現れ、蟹摂四等全体的な現象でないことを明らかにした。南部吳方言との対応が存在しているが、南京音と杭州音から説明できない。即ち、こうした音注現象は中村(2015)による杭州音の混入要素でないことが分かった。

しかし、なぜ、同じ齒頭音の字に対して、「ツユイ」と「スエ、」の二種類の音注に書き分けるか、その原因について、南京音と杭州音のいずれからも説明できず、今後の課題にしなければならない。

④「小曲」の音系問題

本研究では、「小曲」の音注について、杭州音である他の部分と異なり、官話の特徴であることを確認できた。残念ながら、「小曲」の内容について、笛譜の曲詞であるということまでしか確認できなかった。また、「小曲」の南京官話音に、なぜ北方官話を反映するものも存在しているのか、説明できなかった。これを解決するには、「小曲」の内容の來源を明確にすることが不可欠である。ゆえに、『唐音和解』などの資料に記されている音注と比較することは今後の課題ともなる。

⑤冠山による他の唐話学習書との比較

本研究で同書の音韻面の特徴を詳細に検討したが、上述したような問題点はまだ存在している。また、当時学習された唐話の変容を検討するには、音韻面の変遷も明らかにしなければならない。このように、こうした問題を解明するには、同じ冠山による他の官話学習書および杭州音による『唐音和解』などとの比較も必要となる。

なお、巻六についての再考察についても、今後の課題である。

資 料(五十音順)

- 雨森芳洲 著 関西大学東西学術研究所「日中文化交流の歴史」研究班
編(1979)『関西大学東西学術研究所資料集刊 11-1『縞紵風雅
集』(雨森芳洲全書一)』関西大学出版・広報部
- 荒井秀夫 発行(1988)『近世文芸者伝記叢書』(全9巻)ゆまに書房
- 新井白石(1719)『東音譜』大田南畝 輯(1791)『難船紀聞 東音譜』(早稲
田大学図書館所蔵本・早稲田大学蔵書目録古典籍総合データベース)
- 頼川君平(1897)『訳司統譜』国立国会図書館所蔵本(<108-107>国立国会
図書館デジタルコレクション)
- 遠藤光暁(1989)「杭州方言の音韻体系」『均社論叢』No.16 均社(25-57頁)
- 王 三慶[他]主編(2003)『日本漢文小説叢刊』第一輯第四冊『太平記演
義』台湾学生書局
- 岡島冠山(江戸享保)『唐話纂要』(五巻)国立国会図書館蔵初刊本『唐話
纂要』(六巻)国立国語研究所所収再版本(国立国語研究所蔵
書目録データベース)『唐話辞書類集』(第六集)所収重刊本『中
国語教本類集成 補集 江戸時代唐話篇』1 所収重刊本
- 小川環樹(1981)「中国の字書」貝塚茂樹・小川環樹 編『日本語の世界 3
中国の漢字』中央公論社(231-286頁)
- 国書刊行会 編(1914)「和唐珍解」(康熙五十年跋)『洒落本 徳川文藝類
聚 第五』(322-336頁)
- 篠崎東海(1722)『朝野雜記』巻四(国立国会図書館所蔵本<214-133>)
- 周 祖謨(1960)『広韻校本』中華書局(2011年影印本)
- 田辺茂啓[他] 編(1928)『長崎志 正編』長崎文庫刊行会(国立国会図書
館デジタルコレクション)
- 張 玉書 等(清)『康熙字典』中国書籍出版社(1997年現代検索[潘本善
編]影印本)
- 丁 度 等(宋)『集韻』(中華書局 1989年影印宋刻本)
- 東京大学史料編纂所 編(1984)『唐通事会所日録 覆刻版(大日本近世
史料)』東京大学出版会

- 中井新六 編(1877)「九連環」『月琴樂譜 元』群仙堂(国立国会図書館
NDL デジタルコレクション<特 41-761>)
- 長澤規矩也 解題(1973)「唐音和解」『唐話辞書類集』(第八集)汲古書院
- 長澤規矩也 解題(1973)「崎陽熙子先生」『唐話辞書類集』(第十八集)
汲古書院
- 長澤規矩也 解題(1973)「中華十五省」『唐話辞書類集』(第十九集)汲古
書院
- 南山道人 纂述(1800)『日本諸家人物誌 2 卷』(高橋平助[ほか]出版,寛政
12(1800)<281-I256s>)(国会図書館デジタルコレクション)
- 西川如見(1708)『増補華夷通商考』(五卷)(早稲田大学図書館所蔵本・早
稲田大学蔵書目録古典籍総合データベース)
- 無相文雄(1752)『三音正譌』(上下卷)(早稲田大学図書館所蔵本・早稲田
大学蔵書目録古典籍総合データベース)
- 林 春勝・林信篤 編 浦廉 一 解説(1958)『華夷変態』(上)東洋文庫
- 林 春勝・林信篤 編 浦廉 一 解説(1958)『華夷変態』(中)東洋文庫
- 林 春勝・林信篤 編 浦廉 一 解説(1959)『華夷変態』(下)東洋文庫
- 林 復斎 編(1913)『通航一覽 第四』国書刊行会<343-4 は>(国立国会図
書館デジタルコレクション)
- 陸費達・歐陽溥存[他](1915)『中華大字典』中華書局 1980 年縮刷本
(1935 年版による)
- 劉 争義 編(1990)『戲考大全』(『戲考』(1915-1925年刊の影印)上海書店
- 盧驥 著[他](1819)原念斎[校]和泉屋庄次郎等[出版]『先民伝 2 卷』
<281.93-R59s>(国会図書館デジタルコレクション)
- 六角恒廣 編・解題(1991)『中国語教本類集成』(全 10 卷)「復刻版」不二
出版
- 六角恒廣 解題(1998)『中国語教本類集成 補集 江戸時代唐話篇』(全 5
卷)不二出版
- 和歌山県教育会 編(1937)『南紀先賢列伝 第 1 編』和歌山県教育会(国
立国会図書館デジタルコレクション)

参考文献(五十音順)

- 青木正兒(1927)「岡島冠山と支那白話文学」『支那藝論叢』弘文堂書房
(450-469頁)『青木正兒全集(第二卷)』1970年春秋社再録(275-
286頁)
- 秋谷裕幸(2001)『吳語江山広豊方言研究』(愛媛大学総合政策研究叢書
1)青葉図書
- 浅井忠天(1933)『唐音唄と看看踊』(東亜研究講座 第54輯)東亜研究会
- 愛宕 八郎康隆(1983)「長崎県の方言」『講座方言学 9 九州地方の方言』
国書刊行会(113-141頁)
- 荒野泰典(1993)「通航一覽」青木和夫 [他] 編(1993)『日本史大事典』
(第4巻)平凡社(1601頁)
- 有坂秀世(1936)「国語の『ス』の母音と支那語の『四』の母音」(『音声学協会
会報』第40号)(11-12頁)『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』
1994年三省堂再録(82-84頁)
- 有坂秀世(1937)「唐音に反映したチ・ツの音価」『日本音声聲學會會報』昭
和12年6月第47号『国語音韻史の研究増補新版』1957年三
省堂再録(563-570頁)
- 有坂秀世(1938)「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」東京大学国語
国文学会『国語と国文学』昭和13年10月『国語音韻史の研究
増補新版』1957年三省堂再録(221-243頁)
- 石崎又造(1940)『近世日本に於ける支那俗語文學史』弘文堂書房(『近世
日本に於ける支那俗語文學史』清水弘文堂書房1967年版)
- 市川信愛・戴 一峰(1994)『近代旅日華僑与東亜沿海地区交易圏—長崎
華商“泰益号”文書研究』厦門大学出版社
- 李 敦柱 著・藤井茂利 訳(2004)『漢字音韻学の理解』風間書房
- 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門 監修(2001)『日本人名大辞典』
講談社
- 袁 家驊 等(2001)『漢語方言概要(第二版)』語文出版社
- 王 建喜(2001)「从現代中原官話“有”字的讀音談流攝一些字的韻母与

- 遇撰效撰的關係」張渭毅[編]『漢声：漢語音韻學的繼承與創新』
中国文史出版社(507-514 頁)
- 王 松木(2011)『「西儒耳目資」所反映的明末官話音系』(中国語言文字
研究輯刊 初編 第二十冊)花木蘭文化出版社
- 王 新華(2007)『避諱研究』齊魯書社
- 王 福堂(2014)「杭州方言の語音特点、歴史和帰属」『吳語研究—第七屆
國際吳方言學術研討會論文集』上海教育出版社(106-114 頁)
- 汪 平(2011)『蘇州方言研究』中華書局
- 汪 平 著 鮑明炜・顧黔[編](2011)『蘇州方言研究』中華書局
- 王 力(1980)『漢語史稿(修訂本)』中華書局(中華書局 2004 年重排本)
- 大島吉郎(2017)「『唐話纂要』の「常言」に関する幾つかの問題について」大
東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化専攻『中国言
語文化学研究』第 6 号(49-68 頁)
- 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編(1988)『黄檗文化人名辞典』(25-26 頁
「上野玄貞」50-51 頁「岡嶋明敬」)思文閣出版
- 大西博子(1999)『蕭山方言研究』(中国語学研究『開篇』単刊 No.11)好文
出版
- 岡島昭浩(1987)「近世唐音の重層性」九州大学国語国文学会『語文研究』
第 63 号(36-50 頁)
- 岡島昭浩(1992)「近世唐音の清濁」『訓点語と訓点資料』(春日和男博士喜
寿記念特輯号)第八十八輯 訓点語学会(95-104 頁)
- 岡島昭浩(2014)「岡島冠山」佐藤武義・前田富祺『日本語大事典』(上)朝
倉書店(229 頁)
- 岡田袈裟男(1991)『江戸の翻訳空間—蘭語・唐話語彙の表出機構』(笠間
叢書 244)笠間書院
- 岡田袈裟男(1999)「『唐話纂要』二字話部の語彙構造—ピンイン順索引・唐
音別単漢字音表—」『立正大学文学部研究紀要』15 号(77-
115 頁)
- 岡田袈裟男(2003)「唐話の受容と江戸の言語文化」『国語学』第 54 卷 3 号
(44-54 頁)

- 岡田袈裟男(2006)『江戸異言語接触－蘭語・唐話と近代日本語』笠間書院
- 奥村佳代子(1996)「岡島冠山『唐話纂要』考」『関西大学中国文学会紀要』第 17 号(99-113 頁)
- 奥村佳代子(1997)「『唐話纂要』編纂の意図－語彙にみられる特徴より－」『中国語学』第 244 号(104-113 頁)
- 奥村佳代子(2000)「近世唐話学における多様性-「唐話」形成の一つの手がかりとして-」『或問』第 1 号(69-89 頁)
- 奥村佳代子(2001)「『唐話纂要』の言葉-岡島冠山の伝えた「唐話」その 1-」『或問』第 2 号(31-46 頁)
- 奥村佳代子(2001)「近世日本における中国語受容の一端－岡島冠山によって紹介された「唐話」」『中国語学』第 248 号(290-306 頁)
- 奥村佳代子(2003a)「唐通事資料に見られる唐話の変化」『中国語研究』第 45 号(127-139 頁)
- 奥村佳代子(2003b)「唐話資料の二面性－内の唐話と外の唐話－」近代東西言語文化接触研究会『或問』第 6 号(95-107 頁)
- 奥村佳代子(2007)『江戸時代の唐話に関する基礎研究』関西大学出版部
- 奥村佳代子(2010)「江戸時代の唐話資料における文体の変容－岡島冠山の唐話テキストを中心に」沈国威・内田慶市『近代東アジアにおける文体の変遷－形式と内実の相克を超えて』白帝社(121-146 頁)
- 奥村佳代子 解題(2011)『(関西大学東西学術研究所資料集刊 30 関西大学図書館 長澤文庫所蔵)唐話課本五編』関西大学出版部
- 奥村佳代子(2017)「『唐話纂要』の「三字話」」関西大学東西学術研究所『関西大学東西学術研究所紀要』第 50 輯(3-18 頁)
- 奥村佳代子(2018)「唐話の伝播と変化：岡島冠山の果たした役割」『東アジア文化交渉研究』第 11 号(65-78 頁)
- 奥村三雄(1972)「天和三年黄檗版観音経－近世初期の表記・音韻資料として－」『近代語研究』第三集 武蔵野書院(177-186 頁)
- 奥村三雄(1989)『九州方言の史的研究』桜楓社

- 奥村三雄(1992)「近世唐音の性格」『訓点語と訓点資料』(春日和男博士喜寿記念特輯号)第八十八輯 訓点語学会(67-81頁)
- 何 曉麗(2007)「唐話資料における句読法—冠山の唐話辞書を中心に—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』21(1)(1-15頁)
- 瀧沼誠二(1984)『儒学と国学:「正統」と「異端」との生成史的考察』桜楓社
- 神山志郎・劉 育民(2014)『中國劇曲音韻考』学林出版社
- 亀井 孝(1962)「『才段の(長音の)開合の混乱』をめぐるとの報告」『国語国文』第31巻6号(1-28頁)
- 漢語大字典編輯委員会編纂『漢語大字典』第二版(九卷本)四川辞書出版社
- 喜多田久仁彦(2016)「唐通事の中国語について」『京都外国語大学・京都外国語短期大学 研究論叢』第LXXXVII号京都外国語大学国際言語平和研究所(9-20頁)
- 木津祐子(2000a)「唐通事の心得—ことばの伝承」『興膳教授退官記念中国文学論集』汲古書院(653-672頁)
- 木津祐子(2000b)「『唐通事心得』訳注稿」『京都大学文学部研究紀要』第39号(1-50頁)
- 木津祐子(2016)「崎陽の学」と荻生徂徠—異言語理解の方法を巡って—」『日本中國學會報』第六十八集(136-151頁)
- 許 海華(2012a)「幕末における長崎唐通事の体制」『東アジア文化交渉研究』第5巻 関西大学出版部(267-279頁)
- 許 海華(2012b)『幕末明治期における長崎唐通事の史的研究』関西大学大学院文学研究科 総合人文学専攻(博士論文)
- 金 尼閣 撰述(1626)[(明)韓雲銓訂][(明)王徵校梓](1933 跋)『西儒耳目資』文奎堂
- 工藤 浩 等(1993)『日本語要説』ひつじ書房
- 江蘇省地方志編纂委員会(1998)『江蘇省志・方言志』南京大学出版社
- 小松英雄(1970)「不濁点」『国語学』第80集
- 小松英雄(1980)「長音」国語学会[編]『国語学大辞典』東京堂出版(602-603頁)

- 近藤春雄(1978a)「岡島冠山」唐話纂要』『中国学芸大辞典』大修館書店
(59-60 頁)(611 頁)
- 佐藤 昭(2002)『中国語語音史—中古音から現代音まで』白帝社
- 謝 育新(2011)「略論日本近代唐音之声母」張渭毅[編]『漢声:漢語音韻
学的繼承與創新』(下)中国文史出版社(531-542 頁)
- 謝 育新(2016)『日本近世唐音:與十八世紀杭州話和南京官話对比研究』
(日本語言・文化・伝播叢書:第 2 輯)中国伝媒大学出版社
- 蔣 紹愚(2017)『近代漢語研究概要』北京大学出版社
- 蔣 垂東(2011)「日本唐話資料里的“福州音”与“南京音”—兼論江戸中期
日本学者对中国語言的認識—」『清代民國漢語研究』学古房
(293-304 頁)
- 蔣 冰冰(2003)『吳語宣州片方言音韻研究』華東師範大学出版社
- 処衢市档案局(館)処衢市档案学会 編(2014)『処衢話』浙江文芸出版社
- 徐 立芳(1986)「蘇州方言的文白異讀」『徐州師範学院学報』(哲社版第 2
期)(114-118 頁)
- 沈 克成(2001)『温州方言韻略』寧波出版社
- 杉本つとむ 編(1973)『異体字研究資料集成』(全十卷)雄山閣出版
- 齊 森華・陳多・葉 長海[編](1997)『中国曲学大辞典』浙江教育出版社
- 石 汝杰・宮田一郎(2005)『明清吳語詞典』上海辞書出版社
- 錢 乃荣(1992)『杭州方言志』(中国語学研究『開篇』单刊 No.5)好文出版
- 曹 曉燕(2015)『無錫方言接触研究』蘇州大学区出版社
- 曾 曉渝(1991)「試論《西儒耳目資》的語音基礎及明代官話的標準音」
『西南師大学報』1991(1)(66-74 頁)
- 曾 曉渝(2014)「《西儒耳目資》音系基礎非南京方言補証」『語言科学』第
13 卷第 4 期(總第 71 期)(423-429 頁)
- 臧 克和[主編](2016)『日藏唐代漢字抄本字形表』(全三冊)華東師範大
大学出版社
- 曹 志耘(1996)『嚴州方言研究』(中国語学研究『開篇』单刊 No.7)好文出
版
- 曹 志耘・秋谷裕幸・太田 齋・趙 日新(2000)『吳語処衢方言研究』(中国

- 語学研究『開篇』単刊 No.12)好文出版
- 台湾大学中国文学系・中国研究院資訊科学研究所(2011)「漢字古今音
資料庫」<http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/ccr/>
- 高島俊男(1991)「第一部 江戸時代」『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』
大修館書店(16-202 頁)
- 高野辰之(1942)「唐人歌」『松の葉』(第三卷 十三)『日本歌謡集成』(第六
卷)東京堂出版(305-394 頁)
- 高松政雄(1970)「ウ段拗音」『国語国文』第 39 卷第 7 号 京都大学文学部
国語学国文学研究室(14-33 頁)
- 高松政雄(1974)「略韻」雜考」『岐阜大学国語国文学』第 17 号 岐阜大
学教育学部国文研究室(92-110 頁)
- 高松政雄(1982)『日本漢字音の研究』風間書房
- 高松政雄(1984)「近世的唐音－破擦音を主として－」『岐阜大学教育学部
研究報告人文科学』第 32 卷(172-185 頁)
- 高松政雄(1985a)「近代唐音弁－南京音と浙江音－」『岐阜大学国語国文
学』第 17 号岐阜大学教育学部国文研究室(92-110 頁)
- 高松政雄(1985b)「近世的唐音の音体系－江南浙北音としての－」『国語国
文』第 54 卷第 6 号京都大学文学部国語学国文学研究室(20-39
頁)
- 高松政雄(1986a)「近世的唐音の音体系－その二、韻母の面よりの考察－」
『国語国文』第 55 卷第 6 号京都大学文学部国語学国文学研究
室(9-19 頁)
- 高松政雄(1986b)『日本漢字音概論』風間書房
- 高松政雄(1997)『日本漢字音論究』風間書房
- 中華書局編輯部[編](1980)『中華大字典』(1935 年による縮印本)中華書
局出版
- 中国社会科学院語言研究所[編輯](1981)『方言調査字表』商務印書館出
版(2012 版)
- 趙 元任(1928)『現代吳語的研究』清華學校研究院(商務印書館 2011 年
中華現代學術名著叢書版)

- 趙 元任(1929)「南京音系」『科学』第 13 卷第 8 期『趙元任語言学論文集』
2002 年商務印書館再録(273-297 頁)
- 張 照旭(2014)「唐船貿易における唐船の出航地と唐船乗組員の出身地に
ついて——明治初期中国語教育の背景——」『岡山大学大学院
社会文化科学研究科紀要』第 38 号(77-94 頁)
- 張 昇余(1997)「從日文唐音看清明時期的南京官話與江南方言音」『外
語教学』西安外國語学院學報 第 18 卷 1997 年第 4 期(總第
72 期)(71-77 頁)
- 張 昇余(1998)『日本唐音與明清官話研究』世界圖書出版
- 張 昇余(2007)『日本語音研究—近世唐音』外語教学與研究出版社
- 張 西平(2009)「導論：簡論世界漢語教育史的研究對象與方法」魯宝元・
吳麗君『日本漢語教育史研究—江戸時代唐話五種』外語教学
與研究出版社(1-7 頁)
- 趙 苗(2009a)「江戸時代の唐学者—岡島冠山」魯宝元・吳麗君『日本漢
語教育史研究—江戸時代唐話五種』外語教学與研究出版社(80-
90 頁)
- 趙 苗(2009b)「關於『唐話纂要』」魯宝元・吳麗君『日本漢語教育史研究
—江戸時代唐話五種』外語教学與研究出版社(99-107 頁)
- 趙 苗(2009c)「『唐話纂要』二字話的収字和編排」魯宝元・吳麗君『日本
漢語教育史研究—江戸時代唐話五種』外語教学與研究出版社
(108-115 頁)
- 陳 垣 撰(1997)『史諱举例』上海書店出版社
- 築島 裕(1980)「長音符」国語学会[編]『国語学大辞典』東京堂出版(603
頁)
- 鄭張尚芳(2007)「吳語中官話層次分析方言史價值」『歷史曾次与方言研
究』上海教育出版社(219-226 頁)
- 丁 鋒(2001)『《同文備攷》音系』中国書店
- 藤堂明保(1967)「上古漢語の音韻」『中国文化叢書 1 言語』大修館書店
(33-89 頁)
- 唐来参和(1785)『和唐珍解』耕書堂蔦屋重三郎(国立国会図書館蔵書

NDL デジタルコレクション<208-22>

- 鳥居久靖(1969)「唐話纂要」『中国語学新辞典』光生館(286-287頁)
- 長澤規矩也(1973)「(唐話纂要六巻 解題)『唐話辞書類集(第六集)』汲古書院
- 中田祝夫(1980)「躍り字」『国語学大辞典』東京堂出版(90頁)
- 中田喜勝(1978)「日本に於ける華音の声母『ツ』・『キ』について」『長崎大学教養部紀要. 人文科学.』1978,18(218-229頁)
- 中村 質(1983)「華夷変態」(国史大辞典編集委員会 編(1983)『国史大辞典』(第3巻)吉川弘文館(96頁)
- 中村 質(1986)「外国金銀の輸入と別段商法: 享和三(1803)年の唐船貿易をめぐって(箭内健次先生喜寿記念号)」『駒澤史学』34(3-34頁)
- 中村 質(1988)『近世長崎貿易史の研究』吉川弘文館
- 中村 質(1989)「唐人屋敷」(国史大辞典編集委員会 編(1989)『国史大辞典』(第10巻)吉川弘文館(126-127頁)
- 中村雅之(2011)「北京語文語音の起源」『KOTONOHA』第98号 古代文字資料館(1-4頁)
- 中村雅之(2012)「明清官話の周辺」『KOTONOHA』第117号 古代文字資料館(16-17頁)
- 中村雅之(2015a)「唐話纂要の仮名音注について」『KOTONOHA』第156号 古代文字資料館(28-29頁)
- 中村雅之(2015b)「唐話使用の南京官話音」『KOTONOHA』第157号 古代文字資料館(31-32頁)
- 沼本克明(1990)「半濁音符史上に於ける唐音資料の位置」『国語学』162集、(1-12頁)「半濁音符の展開」『日本漢字音の歴史的研究—體系と表記をめぐって—』1997年汲古書院再録(1009-1027頁)
- 沼本克明(1992)「字音直読資料の長音表記の変遷—音節構造との関係」『訓点語と訓点資料』(春日和男博士喜寿記念特輯号)第八十八輯 訓点語学会(105-114頁)
- 沼本克明(1986)『日本漢字音の歴史(国語学叢書10)』汲古書院
- 沼本克明(1997)『日本漢字音の歴史的研究—體系と表記をめぐって—』汲

古書院

- 沼本克明(2013)「半濁音の源流(半濁点はどのようにして出来たか)」『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る』汲古書院(203-265頁)
- 橋本進吉(1966)『國語音韻史』(橋本進吉博士著作集第六冊 講義集一) 岩波書店
- 橋本萬太郎(1977)「音韻の体系と構造」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店(3-29頁)
- 長谷川一夫(1984)「来航船舶一覧」日蘭学会編『洋学史事典』付表 雄松堂出版(51-59頁)
- 樋口 靖[訳](1983)詹伯慧 著『現代漢語方言』光生館
- 飛田良文・佐藤武義(2002)『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』明治書院
- 肥爪周二(2005)「唐音系字音」『朝倉日本語講座 文字・書記』第2巻(全10巻)朝倉書店(200-212頁)
- 林 陸朗(1986)「長崎唐通事の職制と役株」(林陸朗先生還暦記念会編)『近世国家の支配構造』雄山閣出版(3-44頁)
- 林 陸朗(2010)『長崎唐通事—大通事林道栄とその周辺—(増訂版)』長崎文献社
- 平山久雄(1960)「中古入聲と北京語聲調の對應通則」『日本中国学会報』第十二集(139-156頁)
- 平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」『中国文化叢書 1 言語』大修館書店(112-166頁)
- 平山久雄(1990)「中古漢語的清入声与北京話声調的対応規律」『北京大学学報(哲学社会科学版)』Vol127(5)(74-81頁)『平山久雄語言学論文集』2005年商務印書館再録(142-159頁)
- 馮 法強(2017)『近代江淮官話音韻研究及其明代音系構擬』科学出版社
- 藤田徳太郎 校注(1931)「唐人踊」『松の落葉』(岩波文庫 30-243-2)岩波書店(106頁)
- 古屋昭弘(1982)「『度曲須知』に見る明末の呉方言」東京都立大学人文学部中国文学研究室『人文学報』(65-82頁)

- 古屋昭弘(2006)「官話」と「南京」についてのメモー「近代官話音系国際学術研究会」に参加して一『開篇』VOL.25 好文出版(119-123 頁)
- 北京大学中国語言文学系語言学教研室(2008)『漢語方音字匯(第二版)』語文出版社
- 鮑士杰(1998)『杭州方言詞典』江蘇教育出版社
- 前田富祺(1980)「開合」国語学会[編]『国語学大辞典』東京堂出版(129-130 頁)
- 前田富祺(2007)「唐話纂要」飛田良文 編『日本語学研究事典』明治書院(884-885 頁)
- 松浦章(2002)『清代海外貿易史の研究』朋友書店
- 松浦章(2007)『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版
- 松村明(1977)「新井白石と外国語・外来語の片仮名表記」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院『近代日本語論考』1999 年東京堂再録(1-52 頁)
- 松村恒(2011)「Analecta Serica」『大妻比較文学』第 12 号(94-118 頁)
- 松本功(1958)「唐通事の研究一特に訳司統譜・唐通事会所日録を中心として」法政大学史学会『法政史学』(10) (111-118 頁)
- 馬淵和夫(1971)『国語音韻論』笠間書院
- 馬淵和夫(1993)『五十音図の話』大修館書店
- 峰岸明(1980)「重点」国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版(484-485 頁)
- 武藤長平(1915)「東京通事魏龍山遺寫本『譯詞長短話』に就きて」『藝文』大正四年十月『西南文運史論』1926 年岡書院再録(425-430 頁)
- 武藤長平(1917)「鎮西の支那語學研究」『東亜經濟研究』第二卷第一、二号『西南文運史論』1926 年岡書院再録(42-63 頁)
- 森田武(1992)「音韻の変遷(3)」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店(253-280 頁)
- 森博達(1991)「近世唐音と『東音譜』」『国語学』166 集(13-21 頁)
- 諸橋轍次等(1982)『広漢和辞典』大修館書店
- 諸橋轍次(1989-90)『大漢和辞典(修訂第二版)』大修館書店

- 山本武夫(1990)「林復齋」(国史大辞典編集委員会 編(1990)『国史大辞典』(第 11 卷)吉川弘文館(686-687 頁))
- 山本紀綱(1983)『長崎唐人屋敷』謙光社
- 山脇悌二郎(1960)『近世日中貿易史の研究』吉川弘文館
- 山脇悌二郎(1964)『長崎の唐人貿易』吉川弘文館
- 山脇悌二郎(1993)「唐人屋敷」青木和夫[他] 編(1993)『日本史大事典』(第 5 卷)平凡社(77-78 頁)
- 熊 正輝(1990)「官話区方言文 ts tʂ 的類型」中国社会科学院語言研究所『方言』1990 年第 1 期(1-10 頁)
- 湯沢質幸(1950)「江戸初期韻学における唐音」『國語國文』第五十一卷第十一号(五七九号)(19-37 頁)
- 湯沢質幸(1972)「国会図書館蔵本『韻略』の唐音」『訓点語と訓点資料』第四十六輯 訓点語学会(53-76 頁)
- 湯沢質幸(1987)『唐音の研究』勉誠社
- 湯沢質幸(2014)『近世儒学韻学と唐音－訓読の中の唐音直読の軌跡－』勉誠出版
- 楊 春宇(2007)『社会語言学視点下的清代漢語与其他言語的对音研究：以日本近世唐音資料・滿語資料・羅馬字資料為中心』遼寧師範大学出版社
- 葉 祥苓(1980)「蘇州方言中 [ts tsʰ s z] 和 [tʂ tʂʰ ʂ z] 的分合」中国社会科学院語言研究所『方言』1980 年第 3 期(204-208 頁)
- 葉 祥苓(1988a)「蘇州方言中の文白異読」[復旦大学中国語言文学研究所吳語研究室編]『吳語論叢』上海教育出版(18-26 頁)
- 葉 祥苓(1988b)『蘇州方言志』江蘇教育出版社
- 葉 祥苓(1993)『蘇州方言詞典』江蘇教育出版社
- 葉 宝奎(2001)『明清官話音系』厦門大学出版社
- 横山宏章(2011)『長崎 唐人屋敷の謎』集英社文庫
- 李 榮 等(2002)『現代漢語方言大詞典』江蘇教育出版社
- 李 新魁(2006)『韻鏡校証』中華書局
- 劉 丹青(1995)『南京方言詞典』蘇州教育出版社

- 林 慶勳(2012)「唐話對應音觀察之一—岡嶋冠山標注匣母字的變化」『漢学研究』第30卷第3期(167-195頁)漢學中心出版品全文資料庫
http://ccsdb.ncl.edu.tw/ccs/image/01_030_003_01_06.pdf
- 林 慶勳(2013)「《唐詩選唐音》標示輕唇音聲母探討—唐話對應音觀察之三」『政大中文學報』第20期 政治大學中國文學系編審委員會(39-74頁)
- 林 齋倩(2016)『蘇州郊区方言研究』蘇州大学出版社
- 林 武實(1988)「岡嶋冠山著『唐話纂要』の音系」尾崎雄二郎・平田昌司『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所(173-205頁)
- 六角恒廣(1981)「唐通事と唐話教育」『早稲田商学』第292号文化特集 早稲田商学同攻会(455-477頁)
- 六角恒廣(1984)『近代日本の中国語教育』不二出版
- 六角恒廣(1988)「附論 長崎唐通事と唐話」『中国語教育史の研究』東方書店(376-415頁)
- 六角恒廣(1991)「唐話纂要五卷 解題」『中国語教本類集成 補集「復刻版」第1集』不二出版(3-6頁)
- 六角恒廣(1998)「唐通事」「官話とは」『中国語学習余聞』同学社(111-118頁)(215-308頁)
- 六角恒廣(1999)『漢語師家—中国語教育の先人たち』東方書店
- 魯 宝元(2009)「唐話五種教本在日本漢語教学史上的地位和作用」魯宝元・吳麗君『日本漢語教育史研究 江戸時代唐話五種』外語教学與研究出版社(28-58頁)
- 魯 宝元・吳麗君(2009)『日本漢語教育史研究 江戸時代唐話五種』外語教学與研究出版社
- 若木太一(2013a)『長崎・東西文化交渉史の舞台—「明・清時代の長崎」「支配の構図と文化の諸相」』勉誠出版
- 若木太一(2013b)『長崎・東西文化交渉史の舞台—「ホ°ルトガル時代」「オランダ時代」』勉誠出版
- 藁科勝之(2014)「唐話纂要」「唐話辞書」『日本語大事典』(下)朝倉書店(1482-1483頁)(1483-1484頁)

添付資料 1:『唐話纂要』「常言」「長短話」「小曲」項目数の集計表

(1)常言

組数	唐話内容	項目数 (語句数)	漢字数
1	平常不作虧心事。半夜敲門不喫驚。	2	14
2	欲要生富貴。須下死工夫。	2	10
3	把官路當人情。	1	6
4	借花供佛。	1	4
5	家醜不可外揚。	1	6
6	貓頭上于魚。	1	5
7	隻有錦上添花。那得雪中送炭。	2	12
8	蝦蟆在天井裡。想天鵝肉喫。	2	11
9	水中撈月。	1	4
10	比上不足。比下有餘。	2	8
11	三人出外。小的兒苦。	2	8
12	行路防跌。喫飯防噎。	2	8
13	寧可信其有。不可信其無。	2	10
14	好事不如無。	1	5
15	好事不出門。惡事傳千里。	2	10
16	走三家。不如坐一家。	2	8
17	過則勿憚改。	1	5
18	好漢惜好漢。猩猩惜猩猩。	2	10
19	物悲其類。	1	4
20	兔死狐悲。	1	4
21	一不做。二不休。	2	6
22	單絲難線。孤掌不鳴。	2	8
23	如漆似膠。	1	4
24	如魚似水。	1	4
25	虎不食伏肉。	1	5
26	虎不生狗。	1	4
27	不怕官隻怕管。	1	6
28	官無三日禁。	1	5
29	官不容針。私通車馬。	2	8
30	有錢可以通神。	1	6
31	公人見錢。如蒼蠅見血。	2	9
32	遠親親不如近隣。	1	6
33	送君千里。終須一別。	2	8
34	一日拜師。終身為父。	2	8
35	殺人須要見血。	1	6
36	見讐人。分外眼明。	2	7
37	家貧不是貧。路貧愁殺人。	2	10
38	人不可貌相。海水不可斗量。	2	11
39	二虎相鬪。必傷其一。	2	8
40	寡不可敵衆。	1	5
41	養將千日。用將一朝。	2	8
42	良將擇主而仕。良鳥擇樹而棲。	2	12
43	三十六計。走爲上計。	2	8
44	作善降之百祥。作不善降之百殃。	2	13
45	男大須婚。女大須嫁。	2	8
46	有緣千里易相逢。無緣對面難相見。	2	14
47	賊走閉門	1	4
48	花無百日紅。人無千日好。	2	10
49	以酒勸人。原無惡意。	2	8
50	一日不見。莫作舊時看。	2	9
51	好事大家知	1	5
52	富者冤之叢	1	5
53	大丈夫一言。駟馬難追。	2	9
54	積善之家。必有餘慶。	2	8
55	積不善之家。必有餘殃。	2	9
56	畫虎畫皮難畫骨。知人知面不知心。	2	14
57	人非義不交。物非義不取。	2	10

58	謀事在身。成事在天。	2	8
59	大富在天。小富在勤。	2	8
60	人間私語。天聞若雷。暗室虧心。神目如電。	4	16
61	種瓜得瓜。種豆得豆。	2	8
62	人可欺天不可欺。	1	7
63	人可瞞天不可瞞。	1	7
64	萬事不由人計較。都是命安排。	2	12
65	臨？財無苟得。臨？難無苟免。	2	10
66	駕馬自受鞭策。愚人終受毀唾。	2	12
67	恩義廣施。人生何處不相逢。讐冤莫結。路逢險處難迴避。	4	22
68	養子方知父母恩。立身方知人辛苦。	2	14
69	善事雖貪。惡事莫樂。	2	8
70	善以自益。惡以自損。	2	8
71	與人方便。就是自家方便。	2	10
72	見善如渴。聞惡如聾。	2	8
73	画餅不充饑。	1	5
74	若要有前程。莫作沒前程。	2	10
75	於我善者。我亦善之。於我惡者。我亦惡之。	4	16
76	仁慈者壽。凶暴者亡。	2	8
77	爲子孫。作富貴計者。十敗其九。爲人行善方便者。其後受惠。	5	23
78	禍福無門。惟人自招。	2	8
79	行善之人。如春園之艸。不見其長。日有所增。 行惡之人。如磨刀之石。不見其損。日有所亏。	8	34
80	不教而善。非聖而何。教而後善。非賢而何。教而不善。非愚而何。	6	24
81	寡言則醒謗。寡慾則保身。	2	10
82	貪心害己。利口傷身。	2	8
83	慾多傷身。財多累身。	2	8
84	酒中不語真君子。財上分明大丈夫。	2	14
85	成人不自在。自在不成人。	2	10
86	自見者不明。自是者不彰。	2	10
87	含血噴人。先污自口。	2	8
88	良農不為水旱不耕。良賈不為折閱不市。	2	16
89	一行有失。百行俱傾。	2	8
90	借人典籍。皆須愛護。凡有決壞。就即補治。	4	16
91	知足可樂。多貪則憂。	2	8
92	若要做快活。必須大事化小事。小事化沒事。	3	17
93	柔弱護身之本。剛強惹禍之由。	2	12
94	各人自掃門前雪。休管他人屋上霜。	2	14
95	推賢舉能。面無慙色。	2	8
96	長短家家有。炎涼處處同。	2	10
97	至樂莫如讀書。至要莫如教子。	2	12
98	不登山。不知天之高也。不臨谿。不知地之厚也。	4	18
99	飽煖思淫慾。饑寒起盜心。	2	10
100	長思貧難危困。自然不驕。每思疾病熬煎。並無愁悶。	4	20
101	好食色貨利者氣必吝。好功名事業者氣必驕。	2	18
102	賢人多財損其志。愚人多財益其愚。	2	14
103	人貧智短。福至心靈。	2	8
104	平生不作皺眉事。天下應無切齒人。	2	14
105	有福莫享盡。福盡身貧窮。有勢莫使盡。勢盡冤相逢。	4	20
106	凡事無難學。隻怕無心學。	2	10
107	黃金千兩未爲貴。得人一語勝千金。	2	14
108	小船不堪重載。深徑不宜獨行。	2	12
109	利可共而不可獨。謀可獨而不可衆。獨利則敗。衆謀則泄。	4	22
110	在家不會迎賓客。出外方知少主人。	2	14
111	貧居鬧市。無人識。富在深山。有遠親。	4	14
112	壘塞無底坑。難塞鼻下橫。	2	10
113	天不生無祿之人。地不生無根之艸。	2	14
114	成家之兒。惜糞如金。敗家之子。用金如糞。	4	16
115	趕人不要趕上。捉賊不如趕賊。	2	12
116	豪家未必長富貴。貧家未必常寂寞。	2	14
117	遠非道之財。戒過度之酒。	2	10
118	心行慈善。何須努力看經。意欲損人。空讀如來一藏。	4	20
119	居必擇隣。交必擇友。	2	8
120	骨肉貧者莫疎。他人富者莫厚。	2	12
121	身披一縷。常思織女之勞。日食三餐。每念農夫之苦。	4	20

122	水至清則無魚。人至察則無徒。	2	12
123	家貧顯孝子。世亂識忠臣。	2	10
124	輕諾者信必寡。面譽者背必非。	2	12
125	春雨如膏。行人惡其泥濘。秋月揚輝。盜者憎其照鑑。	4	20
126	凡大丈夫。重名節於泰山。輕死生於鴻毛。	3	16
127	不恨自家麻繩短。隻怨他家古井深。	2	14
128	經目之事。猶恐未真。背後之言。豈足深信。	4	16
129	天有不測之風。人有不測之禍。	2	12
130	方今之人。惡死凶。而樂不仁。是猶惡醉而強酒。	4	18
131	酒不醉人。人自醉。色不迷人。人自迷。	4	14
132	國之將興。實在諫臣。家之將榮。必有諍子。	4	16
133	遠水難救近火。遠親不如近隣。	2	12
134	白玉投於淤泥。不能污濕其色。君子行於濁地。不能染亂其心。	4	24
135	清貧常樂。濁富多憂。	2	8
136	無故而得千金。不有大福。必有大禍。	3	14
137	德微而位尊。智小而謀大。無禍者鮮矣。	3	15
138	金玉者。飢不可食。寒不可衣。自古以穀帛爲貴也。	4	19
139	貧窮患難。親戚相救。婚姻死喪。隣保相助。	4	16
140	癡人畏婦。賢女敬夫。	2	8
141	婚娶而論財。夷虜之道也。	2	10
142	兄弟爲手足。夫婦如衣服。衣服破時更得新。手足斷時難再續。	4	24
計		318	1,569

(2)長短話

組數	唐話	項目數 (語句數)	漢字 數
1	今天下太平。四海無事。上憫下勞。下沐上恩。歡聲四起。朝野具樂。而重值堯舜之時也。恭喜恭喜。	8	37
2	如論。目今光景。可謂清平世界也。五穀豐熟。四姓安樂。而家饒戶富。比往年有所不同。且從此以後。巖穴之士。滄浪之客。亦必得其遭際。而披雲見天。揚眉吐氣者多矣。大丈夫在世。幸值此時。寧不勉哉。	16	77
3	方今天下。學問大作。庶幾聖人之道行矣。日後興頭預先可知焉。	4	25
4	我也曉得。如今人。或大或小。皆要讀書。因在街上。多會看來。揣書在懷裡。走來走去的。這都是先生屋裡去請教的哩。還有一種。那豪富人家子弟們。便請處官在家裡見教。所以近日來。那寒酸秀才們也掙得衣服受用眼見得。與舊日大差懸絕。而況日後興頭。自然不比說了。	17	106
5	如今天下武夫。皆能勤謹。若伏事主公有餘力。則不管怎的。便在空中地裡跳出來。或走馬射弓。或刺鎗使棒。直恁演習武藝。而打熬氣力。比前年大不相同了。	10	60
6	說的是。而今的武夫。真是武家人。前年的武夫。便是兒女輩。豈可一例相論。近來有少武夫。弓馬熟閑。兵法精通者。更兼打拳使腳等事。亦都點撥其端正。而能半拳打死人。一手摸活人。其實非同小可了。但前年的武夫。偏愛吹彈歌舞等。沒要緊的事體。而竟忘了自家本等的正事。今後這般之徒。必當抱頭鼠竄的躲避了。我落得滿腔快活起來哩。	21	135
7	先生大名。如雷轟耳。正想渴之際。何幸今日。天假良緣。而初接高風意出望外了。從今以後。願承雅教。請勿有棄。	9	43
8	足下名聞四方。諸生所共欽仰。今我僥幸爲識荆。大慰平生想渴。今後必當通相切磋。但我襪線之材。恐不足爲對耳。	7	45
9	別來許久不見。耿耿思念。不知興居平安麼。	3	17
10	這一向爲俗事所絆。竟無暇迎送。故此久不問起居。多多欠情了。不知令郎令愛。一向都好麼。	6	36
11	長兄你這幾日。有什麼緊要事。整日出門。我會屢屢到貴府問候。無一次在家相見。你興頭。直恁匆忙。可羨可羨。	8	43
12	小弟這兩日。爲沒要緊事奔走。沒半刻在家安坐。前幾次空勞先生費步。再過兩天。必有些閑空。敢特設村酒奉拔。少叙閑話便了。	8	50
13	近來有幾首所詠詩。必要請教老先生。明日如有貴閑。肯來舍下頑耍麼。	4	28
14	你們面添五分春色。呢呢喃喃。說什麼話。若有臊皮。分些我受用也好。	5	27
15	今日我每寂寞無聊。所以約會三五知心。灌得大醉。因此或唱或談。隨便消遣。那能有一些臊皮。雖然如此。且請用寡酒。與我們添些高興。同爲一般快活則個。	10	61

16	目下各處花開。甚是好看。先生若有空夫。須要同去看看。決不可推事辭却。	5	29
17	我也聽見說。而今花開得正盛。兄長肯帶我去時。我也情愿奉陪。若在那裡。飛盃花間。求興醉中。胡乱做詩耍子。却不是一場？大消遣了。	9	52
18	我聽說。爾近來學業大進。而詩也做得好。文也做得妙。爾尚青年。怎恁地大奇。異日必有發跡。欽羨欽羨。	8	40
19	豈敢。好說。我雖爲學爭奈生性愚鹵。至今未有所曉。中心隻是不快。安如長兄所言。真個慚愧了。	7	37
20	你今日有什麼事故麼。若没事的時節。我要留你一日。喫酒頑耍。未知你意下如何。	5	32
21	我今日可有的有件事。不敢從命了。請免請免。	3	18
22	前日所約的事。怎沒有回音。不知光景好不好。	3	18
23	所約事。我十分用心。因此光景也好。再容兩日。必然有好音。請等一等。	6	27
24	這兩日。你怎生久不來。我委實記掛你。我也一向有病。而竟不出門。所以不曾問候。欠情欠情。	7	36
25	小弟近來。俗事紛然。竟無半點閑空。故此不來奉望。爲歉歹了。先生有貴恙。亦不曾聽見。幸希早愈。恭喜恭喜。	9	42
26	明日我家。請三五知心宴飲。你若没事。必須過來。替我做半東。勸客人。多喫兩盃酒。則個。	8	34
27	明日晚生。恰好無事。自然要來作半東。把平生本事使出來。勸倒那些客人便了。老爹且請放心。	6	37
28	後日乃我生日。因要設酒拔客。長兄是和我竹馬之友。除要過來用一盃寡酒。去歲長兄因有貴恙而不來。我于心不樂。今年決不可託事辭却。	7	55
29	小弟也會曉得。後日是先生貴降之日。舊年不意有賤恙。而不來赴慶筵。大爲惋惜。今年縱有天大事體。亦不敢違命。隻要先到貴厨。与主人照管些厨事便了。	9	61
30	我的長子既已大了。因要討一個好媳婦。與他完聚。這一向各處求覓。近聞你家斜對面某人的女兒。賢惠且絕色。人人稱揚不已。你有所知。願聞詳細。	9	58
31	我家斜對面。便是開生藥舖的李翁家了。他平生補路修橋。拯貧濟困專行善事。因此綽號喚做李老佛。家道豪富。兒女衆多。那絕色的。就是他家的大姊。今年青春二八。華容婀娜。里鄉無儔。嫩體透迤。遠近少疋。輝輝面子荏苒。畏彈穿。細細腰支參差疑勒斷。雖則楊妃西施。亦不肯多讓。可謂近世美人也。令郎若要娶他。果然金玉夫妻。更兼門當戶對。真個好一頭親事了。必須趕(趕)早央媒人去相議。請勿有遲疑。	26	158
32	先生才高氣清。守本分處世。不求好名。而好名遍聞。不招徒弟。而徒弟日加。或退若邇。畢來相從。非才德兼全。安能如此哉。可敬可敬。	11	51
33	多謝過譽。小可原來無德無才。隻是一介寒士。況今流落在此間。混混與世相濁。囂囂對人非喙。無錢而衣食有病以掙扎。處身極是勞苦。常自嗟命運之迤邐。嘆作爲之齟齬。而心迷意亂。幾乎守不牢本分。豈如足下之言哉。惶愧惶愧。	14	90
34	你令尊久不來我家。不知有什麼事故麼。你替我多多致意他。	3	24
35	家父每日有事。而竟不出門。因此失候。先生若有經我那首。則順便到寒舍。見家父也好。	6	34
36	我要托你一件。你專門的事情。你若肯受托。我便說出來。不然。不敢輕易開口。你如應允出力。与我成就了這件事。則我特請你一席喜酒便了。	8	55
37	長兄你何其太疑。不是我和你同鄉同年。骨肉一般。縱有極艱極難的事體。也要同心協力。胡乱相謀。而況我專門事體。休說你請我喜酒。我鈔你兩席勞酒。也要出力。必須趕早見教。	11	70
38	夜來酒喫得太多。因爲今朝覺得有些不耐煩。你有丸藥。把我喫些個。	4	27
39	你隻管喫得大醉。所以第二日。宿酒不醒。而恁地不耐煩。今日丸藥也失帶了。少停使人送來便了。	6	38
40	明日約兩三朋友。同去游舩。你倘有貴暇。一發同走耍子若何。我想好似在家抱膝而坐哩。	5	35
41	明日晚生。偏生有椿緊要事情。恐不能奉陪。明日萬一有雨。而寬日。則必當奉陪。	6	31
42	今冬與往年更冷。而風也大。雖然如此。倒少有火災。軍民皆歡悅。安當渡日。豈不衆人的大造化。	7	37
43	老爹說的是。今冬不知怎的。十分大冷。尚幸希沒有火着。果然天下人的福了。想必向後。什麼東西價錢。都賤下來哩。	8	45

44	前日我主公別庄。被風吹倒了周圍籬笆。那一日這場風。好不利害。聽說海面上的船隻。或者打壞的。或者漂流的。也有之。果然天有不測之風。人有不測之禍。不可不預隄防。	11	67
45	正是。前日那場暴風。大猛了我家的屋板。都吹散了。我也聽人說道。海面上。打翻了十來隻商船。真正可憐見。走船的人。原來重利輕命之徒。而未必免此般災禍。雖則是個。不意遇了暴風。送掉了性命者。委實沒造化。古人云。人生七十古來稀。縱有金銀財貨。也是一個夢。不如多喫三盃酒。落得快活。正是富貴在天。死生有命。什麼事體。只可聽命。不可勉強便了。	26	139
46	先生你是真個當世英雄。又不肯足奉人。又不肯打關節。只守天命不違時勢。而自能安樂以過日。未曾有一些子煩惱。若不是正真大丈夫。焉能如此哉。可敬可敬。	9	63
47	賢弟休要過譽。我豈如你言。只因力不能及。所以沒奈何。而未敢妄動。尚自碌碌而無爲。休說英雄連農包也做不來。我自無嘴臉見人。意欲到京師去。隱在東山之下。以終天年。眼見我的朋友相知。各各爭先立身。以遂素志者極多。唯獨我命蹇時拙。准准二十來年。流落在江湖上。一事未成。而年先老了。誠惶愧無地耳。	20	123
48	前日我托你的那件事。不知做得做不得。你原曉事人。此般輕易事體。因該早早明白。怎捱到如今。響也不響。莫非竟不妥貼麼。何妨也分明告訴。教我省得虛思空想就是了。	10	67
49	前日我既已受托。便十分用心。差不多妥貼了。我雖愚鹵。此般輕易事體。難道竟不妥貼不成。我實替你出力。保管兩三日內。必有好音奉告。且請放心。大丈夫一言。駟馬難追哩。	12	68
50	連日大雨路上稀爛。極難奔走。因爲這兩日。不敢來問安。未審興居無恙否。	5	29
51	正是這幾日。一連下了大雨。真個厭殺人了。你高年的人。穿木屐則自然難走。我這裡。若有事故。使人叫你。不然不必特來問我。且喜你我一般無事。今日須在這裡喫兩盃要要便了。	11	70
52	而今的後生家。果然個個老成。決不似我們後生時節爲人。我曾看見。目下這些後生。年紀纔十七八。便能問答官府。像個中老的人一般。不是我們十七八歲時。正做頑皮。而竟不怕爹娘打罵。或者與人撲交。或者與人相惱。十分撒潑。因此直恁的做世廢料。東也不是。西也不是。而無復雄飛。慚愧無地了。如今的後生。既如此老成。前程必有大福。可羨可羨。	23	137
53	先生緣何這般說。小弟的論頭。與先生相反。我看今日的後生家。大半爲人狡猾所以能問答官府。而老人家一般。先生後生時節。天下人。比如今。還是安樂。故人人無事。各各放心。那二十來歲的人。尚自與小孩兒。做一般頑皮。真個放蕩不過。雖則如此。倒得秉性撲實。更不似方今後生。直這般巧言令色。而問答於官府。若把今之後生。認爲老成。而謂前程有大福。則天下人。誰不老成。誰無大福。先生原來有見識的。怎見不到這個田地哉。	29	169
54	前日從街上走過。不意撞着你的阿兄。遂邀他到一個去處去。喫了半日酒。講了一會話。因開說。你會患了時病。而臥了幾日。至今未嘗全愈。故此今日特來問你。未知還是怎麼樣。	11	69
55	弟謝老爹下顧。晚生雖有小疾。亦不足爲憂。況且昨今是更覺耐煩些。想必兩三日內便好了。那時即當躬行拜謝。	6	44
56	這一向。我有事體匆忙。竟不能到貴府充詩會。委實于心大爲不然。也只是無可奈何了。	5	34
57	賢弟你既有事匆忙。則倒是恭喜。何其爲不然哉。豈不聞。語曰。行有餘力。則以學文。若果行無餘力。何消定要學文。你雖千日不來充會。我難道怪你不成。你休要隻管計較便了。	12	68
計		542	3,208

(3)小曲

①青山	項目番号	唐話	漢字数
	1	青山在	3
	2	綠水在	3
	3	我那情人的不在	7
	4	風常來	3
	5	雨常來	3
	6	我那音信的不來	7
	7	春去	2
	8	愁不去	3
	9	花開	2
	10	悶不得開	4
	11	珠泪兒滴	4
	12	汪洋了冤家	5
	13	泪滿得東洋海	6
計			52

②崔鶯鶯	項目番号	唐話	漢字数
	1	崔鶯鶯	3
	2	訪紅娘	3
	3	我有問上一個詳細	8
	4	街坊上	3
	5	許多人	3
	6	講我的是非	5
	7	是何人	3
	8	造下了我有這本的西廂戲	11
	9	艸橋驚夢何曾有	7
	10	月下佳期在那裡	7
	11	何人叫做張生了紅娘	9
	12	那個跳在我花園裏	8
計			70

③張君	項目番号	唐話	漢字数
	1	張君瑞	3
	2	訪故友	3
	3	遊學得散悶	5
	4	往蒲東	3
	5	訪杜曲	3
	6	白馬將軍偶遊到	7
	7	普救寺武則天娘娘的建造	11
	8	大雄寶殿	4
	9	高六丈	3
	10	鍾鼓樓臺台高又高	7
	11	久開得那寶刹潔淨	8
	12	有有一位高僧老師臺	9
	13	借居西廂	4
	14	閑遊戲耍	4
計			74

④桃花	項目番号	唐話	漢字数
	1	桃花紅	3
	2	李花白	3
	3	春光得明媚	5
	4	玉蘭花	3
	5	紫荊花	3
	6	杏奪得春占	5
	7	牡丹花	3
	8	芍藥花	3
	9	香同的蘭蕙	5
	10	西府	2
	11	飛紅雨	3
	12	滿架的	3
	13	綻薔薇	3
	14	蓼粟的那花開了	7
	15	花開	2
	16	萱艸兒含金嘴	6
計			59

⑤一愛	項目番号	唐話	漢字数
	1	一愛你	3
	2	二愛你聰明的伶俐	8
	3	三愛你	3
	4	四愛你人物的嫵致	8
	5	五愛你	3
	6	六愛你一團的和氣	8
	7	七愛你的年紀少	7
	8	八愛你的做夫妻	7
	9	九愛你的温存	6
	10	哥哥的十	4
	11	十兒愛着你	5
計			62

⑥ 一更	項目 番号	唐話	漢字數
	1	一更裡天	4
	2	一更裡天	4
	3	月照紗窗	4
	4	人也未眠	4
	5	被襖兒	3
	6	寒凍得渾身上腫	7
	7	我的肝肝	4
	8	我的心肝	4
	9	何處貪花	4
	10	撇下了我	4
	11	撇下了我	4
	12	你在花街上闖	6
計			52

⑨ 四更	項目 番号	唐話	漢字數
	1	四更裡催	4
	2	四更裡催	4
	3	月照天邊	4
	4	孤鷹兒飛	4
	5	鷹南兒教奴雙垂泪	8
	6	狼心的賊	4
	7	負心的賊	4
	8	你有差池	4
	9	教奴靠著誰	5
	10	靠著誰	3
11	你在別人家睡	6	
計			50

⑦ 二更	項目 番号	唐話	漢字數
	1	二更裡多	4
	2	二更裡多	4
	3	思想冤家	4
	4	睡也睡不着	5
	5	睡不着只在牙床上坐	9
	6	我的心肝	4
	7	我的肝肝	4
	8	何處貪花	4
	9	別下了奴	4
	10	別下了奴	4
11	你在別人家坐	6	
計			52

⑩ 五更	項目 番号	唐話	漢字數
	1	五更裡罷	4
	2	五更裡罷	4
	3	大胆喬才	4
	4	不見來家	4
	5	不來家你就喇天話	8
	6	等他來家	4
	7	絲帶兒捆	4
	8	汗巾兒繫	4
	9	棒槌兒槌	4
	10	還將華鞋兒壓	6
	11	打著問他	4
	12	問著打他	4
	13	先有了我	4
	14	後有了他	4
	15	這般樣打	4
	16	你就怕不怕	5
	17	敲罷了鼓	4
	18	撞罷了鍾	4
	19	忽聽門前	4
	20	叫小名	3
	21	喚小名	3
22	奴就慢答應	5	
計			94

⑧ 三更	項目 番号	唐話	漢字數
	1	三更裡憂	4
	2	三更裡憂	4
	3	思想冤家	4
	4	無盡休	3
	5	冷眼兒	3
	6	去叫奴難禁受	6
	7	我的肉肉	4
	8	我的親肉	4
	9	你又月面腆	4
	10	奴又害羞	4
	11	羞殺了人	4
	12	我的心肝上肉	6
	13	悶殺了人	4
14	我的心肝上肉	6	
計			60

添付資料 2:『唐話纂要』の字体整理

本節では、『唐話纂要』における漢字使用面の特徴について検討する。同書では、異体字、旧体字、辞書に未収録の字、和字体の字などの漢字の使用状況が見られ、これらの漢字について、下記のように、分類して整理する。整理した上で、漢字の字種数を集計し、結果として、計 2,536 字種である。

なお、同書の字体の扱い方については、本研究では基本的に『康熙字典』で正体とされるものに従う。

(一)書き方に違いがある漢字

『唐話纂要』で使われている字体が『康熙字典』にある漢字の字体と多少違いがある漢字を整理してみる。その中には、部分的なものの書き方が同様である漢字について、以下のようにまとめてみた。

例えば、①の場合、『康熙字典』で、「馬」は部首として使われる時、同書の書き方と異なり、本研究では、基本的に『康熙字典』の書き方を基準とし、統一するが、個別の場合は同書で個別に処理する。以下の例も同じ状況で、統一方針として整理した。

1)「馬」

驕-驕 騎-騎 驟-驟 駭-駭 驍-驍 驅-驅 駮¹⁵⁵-駮 駟-駟 駙-駙 駝-駝

2)「廿」

霸-霸 勅-勅 謹-謹 勳-勳 難-難 癱-癱 廣-廣 勤-勤 鞍-鞍 槿-槿
莖-莖

3)「辶」

遶-遶 選-選 追-追 逃-逃 逆-逆 遭遭-遭 過-過 遮-遮 隨-隨 這-
這 逐-逐 通-通 違-違 避-避 迎-迎 送-送 進-進 遣-遣 迭-迭 道-道
遂-遂 退-退 通¹⁵⁶-通 遲-遲 透-透 隨-隨 達-達 適-適 遠-遠 逢-逢
迷-迷 透-透 迤-迤 遍-遍 遐-遐 邇-邇 地-地 邇-邇 運-運 遇-遇
鎚-鎚 槌-槌 蓮-蓮 蓬-蓬 篷-篷 造-造 遊-遊 還-還

4)「足」

跡-跡 露-露 踏-踏 踢-踢 跌-跌 跳-跳 躑-躑 躑-躑

5)「刀」

照-照 招-招 蟹-蟹 解-解 薺-薺 苔-苔

¹⁵⁵ 駮:『康熙字典』に「[正字通]俗駮字」とある。

¹⁵⁶ 通:『康熙字典』に「[正字通]俗通字」とある。

6)「日」と「目」

昭-晤 晚-晚 暗-暗 晒-晒 晴-晴 曉-曉 晌-晌 時-時
睦-睦 眼-眼 瞞-瞞 眠-眠

7)「虍」

戲-戲 噓-噓 據-據 虧-虧 覷-覷 號-號 處-處 虎-虎 虜-虜 虛-虛
爐-爐 驢-驢 鷓-鷓 櫺-櫺 蘆-蘆

8)「攴」

變-變 雙-雙 隻-隻 獲-獲 護-護

9)「堯」

曉-曉 饒-饒 燒-燒 澆-澆 驍-驍 堯-堯 僥-僥 撓-撓 鏡-鏡

10)「糸」

緞-緞 囉-囉 終-終 納-納 約-約 濕-濕 綿-綿 絆-絆 縛-縛 纏-纏
緣-緣 絃-絃 細-細 練-練 緩-緩 統-統 結-結 纜-纜 經-經 織-織
縷-縷 續-續 絕-絕 紛-紛 綽-綽 縱-縱 紀-紀 繼-繼 紡-紡 績-績
紙-紙 繩-繩 絹-絹 纓-纓 羅-羅 線-線 羅-羅 網-網 絞-絞
錠-錠 絡-絡 練-練 絲-絲 蘿-蘿 綉-綉 繚-繚 綵-綵 紅-紅
綻-綻 緞-緞 縐-縐 綾-綾 綢-綢 呢-糸尼 綵-綵 紗-紗 絨-絨

11)「戸」

振-振 扃-扃 淚-淚

12)「虫」

螟-螟 蛉-蛉 蝦-蝦 蟻-蟻 蛛-蛛 蛭-蛭 蛇-蛇 蟋-蟋 蟀-蟀
螢-螢 蠟-蠟 螺-螺 蜂-蜂 蜓-蜓 蜘蛛-蜘蛛 螳-螳 蚣-蚣
蛄-蛄 蚯-蚯 蟻-蟻 蜈-蜈 蝮-蝮 蛾-蛾 蜻-蜻 蜥-蜥 蝥-蝥
蛙-蛙 蝶-蝶 蚓-蚓 蜴-蜴 蠅-蠅 蝻-蝻 蚱-蚱 蛄-蛄
蠅-蠅 蛆-蛆 濟-濟 螻-螻 蜈-蜈 蟻-虫春 螻-虫黍 蟬-蟬 蚱-蚱
蟻-蟻 蠖-蠖 蛔-蛔 蛭-蛭 蚰-蚰 蝗-蝗 蝶-蝶 蛸-蛸 蝶-蝶
蟀-虫羊 蟻-蟻 螞-螞 蝻-蝻 蚰-虫台 蠟-蠟 蠅-蠅 蝗-蝗 蛄-蛄
蝙-蝙 蝠-蝠 螭-螭 蛟-蛟 蛤-蛤 蚌-虫干 蚶-蚶 蠟-蠟

13)「マ」

疑-疑 癡-癡 礙-礙 痛-痛 勇-勇 柔-柔 桶-桶

14)「臣」

緊-緊 堅-堅 臨-臨 藍-藍 賢-賢 鑑-鑑 攬-攬

15)「爭」

爭-爭 靜-靜 淨-淨 睜-睜 掙-掙 諍-諍

16)「瓜」

爬-爬 孤-孤

17)「曷」

歇-歇 曷-曷 揭-揭 渴-渴 葛-葛 褐-褐

18)「骨」

猾-猾 滑-滑 骨-骨

19)「包」

包-包 跑-跑 抱-抱 胞-胞 袍-袍 枹-枹 鈔-鈔 鮑-鮑

20)「母」

悔-悔 每-每 悔-悔 毒-毒 悔-悔 母-母 海-海 嗔-口毒 梅-梅

21)「艹」

苟-苟 若-若 搭-搭 莊-莊 萬-萬 荏-荏 蕘-蕘 荼-荼 蓋-蓋

薪-薪 葳-葳 薊-薊 芹-芹 葱-葱 薺-薺 蒿-蒿 藜-藜 芎-芎

菁-菁 蘿-蘿 蕩-蕩 菹-菹 苜-苜 薺-薺 芽-芽 薤-薤 蓼-蓼

菱-菱 葛-葛 薇-薇 萍-萍 藤-藤 菊-菊 菰-菰 葵-葵 芡-芡

艾-艾 藻-藻 蘇-蘇 薛-薛 苕-苕 萱-萱 葦-葦 蘆-蘆 蘭-蘭

蕭-蕭 茗-茗 薏-薏 莖-莖 苡-苡 蓬-蓬 芥-芥 陳-陳 蒼-蒼 茵-茵

菰-菰 荷-荷

22)「奇」

寄-寄 騎-騎 倚-倚 奇-奇 椅-椅

23)「幸」

幸-幸 畢-畢 垂-垂

24)「易」

盪-盪 陽-陽 傷-傷 踢-踢 蕩-蕩 暢-暢 賜-賜 揚-揚 場-場

楊-楊 蜴-蜴 鯉-鯉

25)「鳥」

鳴-鳴 鳳-鳳 鵝-鵝 鶻-鶻 鸚-鸚 鴨-鴨 鵠-鵠 雁-雁 鷺-鷺

鷓-鷓 鴛-鴛 鴛-鴛 鷗-鷗 鸛-鸛 鷓-鷓 鷓-鷓 鷓-鷓 鷓-鷓

鴿-鴿 鴉-鴉 鶻-春鳥 雛-雛 鴉-鴉 鴉-鴉 鷓-鷓 鷓-鷓 鷓-鷓

鴉-鴉

26)「单/單」

憚-憚 單-單 彈-彈 戰-戰 殫-殫 蟬-蟬

27)「罩」

鐔-鐔 簞-簞 檀-檀

28)「将」

將-將 獎-獎 漿-漿 醬-醬 漿-漿

29)「東」

攔-攔 蘭-蘭 欄-欄

30)「甘」

柑-柑 甘-甘

31)「几」

假-假 懸-懸 投-投 沒-沒 般-般 搬-搬 殺-殺 毀-毀 穀-穀
暇-暇 設-設 繫-繫 殼-殼

32)「曾」

會-會 曾-曾 層-層 增-增 憎-憎

33)「令」

領-領 冷-冷 伶-伶 貪-貪 零-零 蛉-蛉 令-令 鈴-鈴 鴿-鴿

34)「青」

靜-靜 猜-猜 蜻-蜻 鯖-鯖 菁-菁 鶻-鶻

35)「羽」

寥-寥 翌-翌 摺-摺 習-習 塌-塌 膠-膠 翰-翰 羽-羽 翦-翦
蓼-蓼

36)「發」

發-發 撥-撥 廢-廢 潑-潑

37)「盡」

盡-盡 燼-燼 蓋-蓋

38)「匕」

疑-疑 癡-癡 礙-礙 穎-穎

39)「大」

突-突 振-振

40)「夾」

挾-挾 漆-漆 華-華 搥-搥 挾-挾 喪-喪 傘-傘 樺-樺 夾-夾
檣-檣 莢-莢 牆-牆 蓄-蓄

41)「齒」

惱-惱 腦-腦

42)「寧」

噀-噀 寧-寧

43)「示」

初-初 裡-裡 被-被 祿-祿 襟-襟

44)「愈」

喻-喻 偷-偷 覲-覲 愈-愈 諭-諭¹⁵⁷

45)「僉」

險-險 臉-臉 劍-劍 葦-葦

46)「兼」

謙-謙 賺-賺 兼-兼 歉-歉 鏞-鏞 簾-簾

47)「夕」

¹⁵⁷ 『康熙字典』の字体は入力できない。

夕-夕 及-歹 夢-夢

48)「品」

嘔-嘔 品-品 區-區 驅-驅 摳-摳

49)「恩」

聰-聰 總-總

50)「票」

票-票 標-標 蝶-蝶

51)「滿」

滿-滿 瞞-瞞

52)「真」

真-真 值-值 置-置 慎-慎 顛-顛 噴-噴 直-直 鎮-鎮

53)「徑」

經-經 徑-徑 輕-輕 莖-莖

54)「辰」

晨-晨 辰-辰 農-農

55)「倉」

鎗-鎗 醋-西倉 船-船 搶-搶

56)「突」

撥-撥 深-深

57)

衆-衆 聚-聚

58)「娄」

樓-樓 嘍-嘍 縷-縷 簍-簍 螻-螻 樓-樓

59)「召」

詭-詭 陷-陷

60)「印」

迎-迎 仰-仰 聊-聊 柳-柳

61)「月」

寐-寐 莊-莊 壯-壯 狀-狀

62)「尧」

淺-淺 錢-錢 殘-殘

63)「既」

慨-慨 槩-槩 既-既

64)「臾」

腴-腴 臾-臾

65)「彘」

讒-讒 纒-纒

66)「凡」

凡-帆 帆-帆

67)「勞」

撈-撈 勞-勞

68)「謠」の声符

謠-謠 搖-搖 鷄-鷄

69)「高」

禍-禍 窩-窩 鍋-鍋 蒿-蒿 過-過

70)「缶」

罐-罐 缸-缸

71)「𠵼」

噴-噴 鎖-鎖

72)「冊」

冊-冊 珊-珊 柵-柵

73)「卑」

牌-牌 稗-稗

74)「齒」

齟-齟 齟-齟 齒-齒 齧-齧

75)「瓜」

狐-狐 辦-辦 瓜-瓜

76)「旨」

脂-脂 指-指 旨-旨

77)「肉」

腐-腐 肉-肉

78)「薑」

薑-薑 韁-韁

79)「束」

策-策 棘-棘 刺-刺 束-束

80)「垂」

唾-唾 睡-睡 錘-錘

81)「庶」

遮-遮 庶-庶 鷓-鷓

82)「丸」

染-染 丸-丸

(二)以上の漢字以外、同じ部分のない漢字は、以下のように、整理する。

表 2-1

原字	漢字	原字	漢字	原字	漢字	原字	漢字	原字	漢字	原字	漢字
爽	爽	喜	喜	筵	筵	感	感	缺	缺	厚	厚
弄	弄	擾	擾	裏	裏	隔	隔	往	往	懷	懷
冗	冗	忙	忙	醒	醒 <small>西屋</small>	酖	酖 <small>西足</small>	啤	啤	唐	唐
割	割	派	派	鹵	鹵	宜	宜	兜	兜	羞	羞
恐	恐	奈	奈	怨	怨	塗	塗	允	允	沈	沈
憐	憐	帶	帶	遭	遭	懊	懊	箕	箕	甚	甚
剩	剩	寫	寫	插	插	嘴	嘴	誇	誇	仇	仇
嚏	嚏	收	收	舊	舊	尋	尋	磳	磳	鼎	鼎
朦	朦	亮	亮	憂	憂	慌	慌	周	周	攛	攛
占	占	際	際	臊	臊	爲	爲	樣	樣	點	點
審	審	健	健	養	養	懶	懶	惰	惰	久	久
濟	濟	壞	壞	救	救	藏	藏	陶	陶	關	關
廂	廂	采	采	規	規	揪	揪	塊	塊	胆	胆
恭	恭	纏	纏	賚	賚	畜	畜	窮	窮	段	段
厭	厭	違	違	幫	幫	從	從	服	服	拔	拔
典	典	贖	贖	兒	兒	權	權	暫	暫	圓	圓
惡	惡	笨	笨	雲	雲	很	很	讓	讓	躲	躲
匆	匆	切	切	陰	陰	所	所	最	最	嗽	(嗽)
敲	敲	敢	敢	藝	藝	善	善	洪	洪	換	換
鬱	鬱	豈	豈	覲	覲	覲	覲	腹	腹	巖	巖
鄉	鄉	佔	佔	實	實	潛	潛	洒	洒	爾	爾
伴	伴	舞	舞	慣	慣	備	備	獾	獾	寇	寇
耽	耽	攪	攪	期	期	築	築	寨	寨	壘	壘
密	密	隄	隄	荒	荒	圍	圍	滅	滅	梟	梟
拳	拳	族	族	臭	臭	庚	庚	凜	凜	抽	抽
襪	襪	堪	堪	然	然	妬	妬	佞	佞	害	害
數	數	剛	剛	圖	圖	兇	兇	滄	滄	叉	叉
顏	顏	寵	寵	乘	乘	贏	贏	碁	碁	兔	兔
須	須	叢	叢	冤	冤	壽	壽	惟	惟	俱	俱

閱	閱	谿	谿	慙	慙	舉	舉	危	危	淫	淫
賓	賓	坑	坑	努	努	食	食	猶	猶	國	國
榮	榮	微	微	德	德	君	君	鮮	鮮	飢	飢
寒	寒	歡	歡	此	此	輩	輩	弓	弓	棄	棄
轟	轟	耿	耿	叙	叙	詠	詠	添	添	雖	雖
異	異	娜	娜	儔	儔	參	參	本	本	婀	婀
椿	椿	舩	舩	妄	妄	碌	碌	管	管	歲	歲
臥	臥	嘗	嘗	姪	姪	壺	壺	瓶	瓶	甕	甕
寶	寶	槩	槩	鑿	鑿	鋤	鋤	搗	搗	艸	艸
帽	帽	燈	燈	搔	搔	簫	簫	爪	爪	鉞	鉞
袒	袒	櫃	櫃	函	函	咒	咒	画	画	抵	抵
髮	髮	脚	脚	臼	臼	簪	簪	几	几	銼	銼
席	席	枕	枕	械	械	具	具	掣	掣	擦	擦
轡	轡	扭	扭	鑰	鑰	籠	革龍	櫓	櫓	筭	筭
犯	犯	塚	塚	毡	毛肖	毡	毛息	屨	屨	蹶	蹶
挖	挖	龔	龔	炭	炭	磚	磚	獺	獺	犀	犀
孫	孫	鼈	鼈	蚌	蚌	蚌	蚌	虻	虻	損	損
蟀	蟀	蚩	蚩	蚤	蚤	蚤	蚤	贏	贏	蝨	蝨
蜜	蜜	蠱	蠱	蠱	蠱	蚤	蚤	蜥	蜥	蜥	蜥
蚤	蚤	蝻	蝻	蠱	蠱	蛻	蛻	蟹	蟹	蚌	虫芊
蛤	虫台	鑿	鑿	鳧	鳧	燕	燕	尫	尫	嗑	口毒
鼠	鼠	竄	竄	狃	犴屯	戛	戛	粃	粃	饅	饅
稻	稻	稷	稷	糝	糝	黍	黍	筋	筋	薺	薺
灰	灰	榛	榛	蔗	蔗	柘	柘	櫻	櫻	榭	榭
復	復	杞	杞	柅	柅	梅	梅	角	角	憑	憑
樺	樺	樟	樟	樹	樹	建	建	棣	棣	麗	麗
膝	膝	豨	豨	鳩	氏鳥	樑	樑	椗	椗	檀	檀
禡	禡	脚	脚	撲	撲	攀	木攀	槭	木感	絨	絨
鉤	鉤	條	條	釐	釐	潔	潔	僧	僧	緇	糸尼
團	團	狼	狼	壓	壓	祀	糸巴	檀	檀	羸	羸
脰	脰	斷	斷	騙	騙	瑪	瑪	璫	璫	鯨	魚帝
婀	婀	騰	騰	滲	滲	耿	耿	蛻	蛻	糞	糞
紆	紆	軒	軒	醮	西倉	蜻	蜻	螻	螻	鳴	氏鳥

撼	木感	稀	豨	梨	梨	梅	梅	鐵	鐵	鵬	鵬
磔	磔	欄	↑關	麪	麪						

(三)多字体による合併処理の漢字

用例に意味の違いが見られないため、異体字を合併する。

表 2-2

多字体の漢字	採用漢字	多字体の漢字	採用漢字	多字体の漢字	採用漢字
走 趕	趕	鷓 鷓	鷓	實 實	實
辭 辭	辭	你 爾	你	鐵 鉄	鐵
學 学	學	覺 覺	覺	虫 虫 蟲	虫
兩 兩	兩	叫 叫	叫	蜥 蜥	蜥
聽 聽	聽	翼 翼	翼	隣 鄰	隣
恩 恩	恩	麥 麦	麥	裡 裡	裡
多 多	多	麪 麵	麪	紙 紙	紙
勸 勸	勸	面 面	面	鈎 鈎	鈎
亂 亂	亂	蚪 蚪	蚪		

(四)書き間違いの場合

表 2-3

原字	原例	対応する意味	解釈
撥	你等休要撒撥	汝等イタツラヲスルナ	ハ°-撥 5(4)([撥]と混乱)、「撥」と見なす。
盆 盒	香盆ヒヤンホ	コウバコ	「盒」と見なす
柴	柴荆 シナイ		「紫」の誤字
商	商議	商議	「商」の誤字